

遊戯王GX レイヴンズ— 鳥使い共

トランス・D

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フライングデューエル―それはツツコミの中で進化したデューエル。

そこに命をかける伝説の鳥使い共を、人々はレイヴンズと呼んだ。

「いや、呼ばれたことねーから!!なによレイヴンズって!!?」

「あ、最終章始まりました」

※本編の内容とはあまり関係ありません。

目次

e of darkness 2

オマケ等

EX 0 えつ、うちら設定あったの?!

148

EX 6羽 一人ぐらい紛れててもおか

しくはない (前) 174

EX 7羽 一人ぐらい紛れててもおか

しくはない (後) 180

EX 1羽 独り言をつぶやくときはま
ず自分の死角を確認しよう 5

EX 8羽 鳥使いの夏休み放浪記①

EX 2羽 皆さんは真似しないで下さ

223

い。 (更新) 40

一章 鳥使いの遊城十代●●り奮闘記G

EX 3羽 腹黒人魚使いのノース物語

X

(前) 65

1羽 アンタの効果名と攻撃名が気に

EX 4羽 腹黒人魚使いのノース物語

なってしまうが。 231

?! (後) 107

2羽 あの兄妹のカードは人気のわり

EX 5羽 the JOIN side

に扱いが不憫すぎる

257

3羽 たまに在るわよね、本気でチー

トドロローの持ち主。

303

4羽 このコは《RUM》が無いからつ

て出ないとは言つてない

351

5羽 アレはどう見ても人が住まなく

なつて数年の荒み方じゃない

404

6羽 その場の空気を壊す奴は大体堅

物か天然よね。

441

7羽 急に出てきて、恋敵と書いてラ

イバルと読ませるのは無理難題

490

8羽 厨二のセンスとヤ●キーのセン

スは表裏一体

539

9羽 Q. 私の周りの人たちは自重し

てくれませんか どうすればいいですか？

10羽 あれ？もしかしてこの二人

似たもの同士かも

11羽 私の経験上だが、真紅眼派は

変人かシスコン・青眼派は変人かブラコ

ンである

12羽 真のヒロインとは、ヒーロー

が助けてくれるまで微動だにしないモノ

である

13羽 魔王とかには形態変化がざら

だが、意外と最初の方が小回りが利いて

690

厄介だったりする

727

14羽 本当にヒステリックなのは使

19羽 the JOIN side
of darkness

955

用者の方だ。と誰かが言った(制裁済み

20羽 友人のそのまた友人と二人きりになったりすると結構気まづい

752

15羽 言葉に困ったら拳で語れって

988

言うけど・・・女子は真似しないでくだ

X羽 if—うちらがArcVにいた

さい

ら？

1013

16羽 人は彼を・・・●●王と呼ん

2章 私の知らないセブンスターズ編

だ。※修正版

21羽 仮面つけてても、正体バレバ

824

17羽 伝説・・・伝説の定義ってな

レっているわよね。

1018

にかしら。

22羽 私的に漆黒って響き好き、思

874

18羽 《相棒》って響きなんかカッコ

わず口にしたくなる。

1064

いい、憧れる。

23羽 最近、インチキ効果が増えず

916

ぎてツツコミづらい ————— 1092

24羽 結局の所使い馴染んだモノが一番つてことです。 ————— 1131

25羽 つーか風呂呂広すぎ、毎月の光熱費いくらよ ※修正版 ————— 1173

26羽 賑やかになってきたな……：簡便してください ————— 1204

間羽 精霊は喋ればいいってもんじゃない ————— 1248

27羽 人は、他人視点では限りなくどうでもいい事に必死になるもんだつたりする ————— 1269

28羽 元親しい人よりも対戦相手を

応援したくなる謎心理。 ————— 1289

29羽 あんだけ人気あれば、同じくらい怨まれもするわよね ————— 1322

30羽 やっぱ堕ちればいいってもんじゃない。 ————— 1341

31羽 男性の2人に1人が年下好き、言ってしまうばロリ○ンらしい。 ————— 1373

32羽 うちのメインメンバーを客観的にみた場合の印象 ————— 1402

33羽—A 祭りとは、ある意味黒歴史量産工場である ————— 1441

33羽—B 時には空気をぶち壊す事

も必要

1464

3 3 羽—C スラム○ンクは無駄に名

曲が多い

1496

3 3 羽—D 口で否定しててもアンタ

達が仲良いのはよくわかった

1535

3 3 —E 後悔は先に立たずである。

1572

3 3 羽—F 奴の辞書に自重とゆう文

字など無い。

1623

3 4 羽 どんな理由であれ、一人の時

は油断するなかれ

1654

3 5 羽 デュエリストたるもの一度は

やってみたいアレ

1694

3 6 羽 やって見たはいいけど正直恥

ずかしい、穴があったら入りたいレベル

1719

3 7 羽 答えはデュエルの中で見つけ

るしかない。

1759

3 8 羽—前編 愛のカタチは人それぞれ

れ

1775

3 8 羽—後編 今更だけどテンプレ無

視にも程があるうちの作風

1798

3 9 羽—やっぱ大体あいつのせい

1846

4 0 羽—前編 新マスタールール？そ

んなものはうちの管轄外だ。

1855

Next 11羽 「あ、帰っていいです

か？」

2210

last 1羽 光と闇の決戦（棒読み）

2361

Next 12羽 「黙れイメチエンだ」

last 2 光と闇の決戦（決着）

2235

2393

Next 13羽 「おい…なんで3枚

last 3 鳥使いさんのソリテイア

あるんだ」

2250

教室

2429

Next 14羽 「知らん、そんなこと

last 4 続・鳥使いさんのソリ

は俺の管轄外だ」

2265

テイア教室

2457

Next 15羽 「「そうだ」

last 5 鳥使い共 vs 黒幕（仮）

Next 16羽 「それ欲しい、下さい」

2493

last 6 新・鳥使いさんのソリ

NEXT 幕間

2342

テイア教室

2504

終章 鳥使い共の日々

オマケ等

EX0 えっ、うちら設定あつたの?!

○枕田ジュンコ(前世・松田隼子)

15年間普通にジュンコとして生きてきた所にいきなり前世の記憶をぶち込まれる前世でのデツキ使用頻度は「BF」▽「RR」Ⅱ「ハーピー」▽「そのうち登場かも」現在は普段「ハーピー」で対十代などに「BF」とかEXメインなものも使っている攻防バランスをとれた戦術を取る(自称)

純粹たる鳥好き、趣味はバードウォッチングと純粹に熱いデュエル

おつきの精霊は《疾風のゲイル》と《驟雨のライキリ》。どちらもかなりのお気に入りライキリへえっ?

性格は原作のジュンコにかなり近い? ツツコミとツン○レ要素が追加
お嬢様要素が大幅減少

十代が大好きで他のことはあまり気にせず突き進む、大体あとから後悔する

・DM風? デュエリストレベル(MAX☆12)

デツキ構築 ☆☆

ドローカ ☆☆☆ (BF使用時MAX)

プレイング ☆☆

総合 ☆☆☆☆☆☆☆

○浜口ももえ (前・樋口桃華)

15年間ももえとして生きて来た所にさりげなく前世の記憶がぶち込まれる

デッキは「ロックバーン」を除き大体が水属性メイン

防御がザル、殺られる前に殺る。

おつきの精霊、《深海のディーヴァ》と《S・H・Dark Knight》はよほど
な事がない限りデッキに入っている、片方だけな場合もあるが・・・ちゃんと普段は
《七皇の剣》抜いてる

どのデッキがメインかと言われると困るようだ、強さでいえば多分【海皇水精燐】だ
ろうが・・・

魚や人魚が好き、水族館は心の癒し。

性格は原作のももえに腹黒さ(?)を増量した感じと思ってもらえれば

口調は今更直せないもよう

ひねくれたイケメン男子が好き、今は万丈目がかなり好み

・DM風? デュエリストレベル

デツキ構築 ☆(妨害少ない)

ドロールカ ☆☆☆(七皇の剣に限ってはMAX)

プレイング ☆☆☆

総合 ☆☆☆☆☆☆☆

○天上院吹雪 (前・ブツキー、師匠「渾名」)

17年間JOYONとしてハッスルしていた所に前世の記憶がログインしました

デツキは99%【真紅眼】、実は七つ所の騒ぎじゃない(真紅眼は3枚使いまわし)

他のカードもあるっちゃある

真紅眼の力不足はよくわかってるので言わないであげてください

前世は無口系の元ヤン、どうしてこうなったし

だが奴は・・・弾けた。ってことで

真紅眼への信頼なら社長やミザちゃんレベル

上記二人のデュエルの師匠でもあった

桃華と付き合っていたことがある

おつきの精霊は《真紅眼の黒竜》?なんかしやべるぞコイツ

・DM風デュエリストレベル

デツキ構築 ☆(自重しない)

ドロー力 ☆(初手真紅眼率90%)

プレイング ☆(ry)

総合 ☆☆☆

EX1羽 独り言をつぶやくときはまず自分の死角を 認しましよ

※今回は本編の時系列をガン無視しています、予めご了承下さい。

—2月14日—

「つ、作ってしまった……」

そう、今日は2月14日……お菓子メーカーの策略による某カカオ粉末を甘苦く仕上げた黒茶の固形体……ようはチョコレートであるが私、枕田ジュンコも製作してしまったのだ。しかもベッタベタにハート形である。流石に恥ずかしくて文字とかは無理だった……つてか手作りとか初めてやったんだけど！しかもガチで本命用1個だけなんだけど流石にやばくね？貴方がす、好きですつて……モロばれじゃね?!

「いやいや、そこは十代様のことですから……いつも通り気づかれないのではないでしようか」

「そ、そうよね〜いつも通りドロ〜パンとか交換する感覚で……っっていつからいたんじゃー!!」

「当然!」「っ、作ってしまった……」からですわ!!」

「当然!じゃないわよなんでドヤ顔してんのよ!! もうアンタは私の死角に立つな!!!」

「そんな!わたくし達の密かな楽しみの一つなのに、ですわよね? 師匠」

「うーん、このジュンコ君の反応を見るのが楽しみだとゆうのにそんなに嫌がるとは……」

「アンタもいたんかーい!!どっから沸きやがった馬鹿師匠めが!つか本編のネタバレ微妙にしてね?」

「モロばれ仮面でしたので全く問題ないかと……」

「しかも《師匠》としか呼ばれていないっ、誰とはいっていないぞ!」

「メタ発言だらけだし!この話から読んだ人はどうすんのよ!!っーか!ここ!女子寮!!」

「普通に先生にも挨拶しながら入って来たけど? だよね、ももえ君」

「ですわね、師匠」

「シンクロ次元評議会のじいちゃん達か！アンタ達ほんつと仲いいわね!!」

くそつ、ボケ側が強力過ぎて全く捌き切れない・・・私に救いはないのか！

「まあまあ、そんなにかつかしないで・・・折角の可愛い顔が台無しだよ?」

「まあ、師匠つたら・・・あちら側前に頭のネジを全て置いてきたようですわね? わたくしとお付き合いましたところは、そんな台詞意地でも吐かないバカタブツでしたの
に・・・」

「ハッハッハッ! そんなにほめても何も出ないよ?」

「もう・・・帰っていい?」

《師匠には、このカカオ100%チョコレートを差し上げますわ! (ニッコリ)》

《流石はもも! 僕の好みを的確に覚えている!!》

《悪意なのか善意なのか全く読めない!!》

よ、ようし。元バカカップル二人の織り成すリアル《混沌空間》カオス・ゾーンからなんとか抜け出せた……十代ならレッド寮いけば会えるわよね。この森突っ切れば近道つと、馴れたもんよ。

『あいや待たれい！ジユンコ殿!!』

「?!も、モンスターが、じつたいかした!!（初期王様風棒読）

じゃなくて《ライキリ》アンタ！なに邪魔してんのよ！早く行かないと明日香に先越されちゃうかもでしょ!!」

『ジユンコ殿の邪魔をしているのは百も承知！だがかし！このライキリ、主に嫌われてでもこの道阻まねばなりません!!』

「なんなのよいったい……言いたいことがあるなら30文字以内で簡潔に述べなさい

！」

『では失礼ながら……先刻拵えた血夜虚霊糖なるものを本日意中の男児に渡して想いのt』

「はい30文字く。てかチョコレートが当て文字過ぎて似非侍つつかヤンキーになつてるわよ」

『待つてくたされえええ!!』

「ようは私が十代にチョコ渡すのを阻止したいわけ？」

『左様で、我とて主の想いは尊重あるししたいのですが……あの遊城十代ときたらジュンコ殿の気持ちには微塵も気づかない驚級鈍感だわ寝てばかりだわ空気は読めないわ頭もお世辞にも良くは無し……』

「あーもううっさい！十代馬鹿にすんなこの似非侍!!邪魔すんなら力づくで……」

『了解承った、では先に進みたければ我を決闘で倒してから参られよ!』

「あんですとく?主に喧嘩売るわけね上等じゃない!!ボッコボコにして暫く再起不能にしてやるわ!!」

『……いぎつ!』

『『デュエル(決闘)!!』』

「速攻で片づける！私のタアーン!!《テラフォーミング》！《霞の谷の神風》加えて発動！そんなでもって《ハーピイ・チャネラー》召喚！」

『ヤツホ〜』

「効果発動！手札の《ハーピイ・ハーピスト》を切り、《ハーピイ・ダンサー》を特殊召喚！」

『いえいつ』

「《ダンサー》効果で自分を手札に戻して再び召喚！この時《霞の谷の神風》効果発動！デッキから《ジエネクス・プラスト》登場！特殊召喚時に《A・ジエネクス・バードマン》を手札へ！」

『ブーン』

「そして《A・ジエネクス・バードマン》！《ジエネクス・プラスト》を戻して特殊召喚！」

『ブーン』

『じ、ジュンコ殿？少しは抑えてくれても……』

「黙ってる。レベル4《ハーピイ・ダンサー》にレベル3《A・ジエネクス・バードマン》をチューニング!!その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚！」

レベル7《クリアウイングシンクロ・ドラゴン》!!」

『グオオオオオオ!!』

『えつと・・・』

「自身の効果でレベル7となった《チャネラー》と《クリアウイング》でオーバーレイ!

《幻獣機ドラゴサック》!!」

『ジャツキーン!!』

「《ドラゴサック》効果で幻獣機トークン2体精製!そして《死者蘇生》!帰ってきて、《ク

リアウイング・シンクロ・ドラゴン》!!」

『グルルル』

《ハーピィ・チャネラー》

効果モンスター

星4／風属性／鳥獣族／攻1400／守1300

手札から「ハーピィ」と名のついたカード1枚を捨てて発動できる。

デッキから「ハーピィ・チャネラー」以外の

「ハーピィ」と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する。

「ハーピィ・チャネラー」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

また、自分フィールド上にドラゴン族モンスターが存在する場合、このカードのレベルは7になる。

このカードのカード名は、フィールド上・墓地に存在する限り

「ハーピィ・レディ」として扱う。

《ハーピィ・ハーピスト》

効果モンスター

星4／風属性／鳥獣族／攻1700／守 600

「ハーピィ・ハーピスト」の(2)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードのカード名は、

フィールド・墓地に存在する限り「ハーピィ・レディ」として扱う。

(2)：このカードが召喚に成功した時、

このカード以外の自分フィールドの鳥獣族モンスター1体と

相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを持ち主の手札に戻す。

(3)：このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。

デッキから攻撃力1500以下の鳥獣族・レベル4モンスター1体を手札に加える。

《ハーピー・ダンサー》

効果モンスター

星4／風属性／鳥獣族／攻1200／守1000

自分のメインフェイズ時、

自分フィールド上の風属性モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを持ち主の手札に戻し、

その後、風属性モンスター1体を召喚できる。

「ハーピー・ダンサー」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードのカード名は、

フィールド上・墓地に存在する限り「ハーピー・レディ」として扱う。

《霞の谷の神風》

フィールド魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスターが手札に戻った場合、

自分のデッキからレベル4以下の風属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《ジエネクス・ブラスト》

効果モンスター

星4／風属性／魔法使い族／攻1600／守1300

このカードが特殊召喚に成功した時、

デッキから「ジエネクス」と名のついた

闇属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

《A・ジエネクス・バードマン》

チューナー・効果モンスター

星3／闇属性／機械族／攻1400／守400

(1)：自分フィールドの表側表示モンスター1体を持ち主の手札に戻して発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果を発動するために風属性モンスターを手札に戻した場合、

このカードの攻撃力は500アップする。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

《幻獣機ドラゴサック》

エクシーズ・効果モンスター

ランク7／風属性／機械族／攻2600／守2200

レベル7モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

自分フィールド上に「幻獣機トークン」（機械族・風・星3・攻／守0）2体を特殊召喚する。

自分フィールド上にトークンが存在する限り、

このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

また、1ターンに1度、自分フィールド上の

「幻獣機」と名のついたモンスター1体をリリースして発動できる。

フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星7／風属性／ドラゴン族／攻2500／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：1ターンに1度、このカード以外のフィールドの

レベル5以上のモンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(2)：1ターンに1度、フィールドのレベル5以上の

モンスター1体のみを対象とするモンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3)：このカードの効果でモンスターを破壊した場合、

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

このカードの効果で破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

『さ、流石ジュンコ殿。一切容赦がござらぬな・・・』

「カードを2枚伏せてエンドフェイズ、《ハーピスト》の効果で2枚目の《チャネラー》を加えるわ。ターンエンド！さあ、どっからでもかかってらっしゃい！けど「BF」にはこの布陣、少々厳しいんじゃないかしら」

ジュンコ H2

フィールド現状

《霞の谷の神風》

《幻獣機ドラゴサック》(攻)

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》(攻)

《幻獣機トークン》×2

《セットカード》×2

『……では、私のターン!』

今更ながら普通にデュエルディスクしてんだけどコイツ。しかもA r c V版かよ、寄せよそれ使い易そう! やっぱ自身がA r c V出身だからなのかな……

『我は手札から《帝王の烈旋》を発動ツ! 相手のモンスターを召喚の際の生け贄に出来る!!』

ん? ブラック……フェザー……?

《帝王の烈旋》

速攻魔法

「帝王の烈旋」は1ターンに1枚しか発動できず、

このカードを発動するターン、

自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

(1) : このターン、アドバンス召喚のために自分のモンスターをリリースする場合に1度だけ、

自分フィールドのモンスター1体の代わりに相手フィールドのモンスター1体をリ

リースできる。

『ジュンコ殿の《クリアウイング》を生け贄に！《風帝ライザー》殿を召喚致す!!』
「待てーい！あんた【BF】ちゃうんかい！」

てか折角の《クリアウイング》あつさり除去られたー・・・

『グオオオオウ・・・』

『実は、ジュンコ殿の恋路を邪魔するなど他の「BF」の仲間には猛反対されて・・・協力拒否で【BF】デツキが使えぬのです』

「あら、やっぱ私の気持ちを汲んでくれてんのねきつと」

『ですので、ジュンコ殿の手持ちデツキの中から我に協力してくれる方々のデツキを拝借した次第で』

「え、それも私のデツキ?!もしかして【格好いい鳥獣族上級集めてみました】か!そういうら十代反対派なの?!」

『うちはあんなちゃらんぼらんは認めません!!』

シャベッタアアアア！ 《ライザー》 シャベッタアアアア！

《風帝ライザー》

効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守1000

(1)：このカードがアドバンス召喚に成功した場合、
フィールドのカード1枚を対象として発動する。

そのカードを持ち主のデッキの一番上に戻す。

『《ライザー》殿の効果！ 《ドラゴサック》をデッキに戻させて頂く！』

『吹っ飛べエエエ！』

『!!』

「くっ、バウンスなら仕方ない……異発動《激流葬》！あんたも道連れよ《ライザー》
!!」

『ひどいっ！ジュンコさんの為にやってるのに!!』

どっ、どっちだコイツ?! (性別) 口調でも見た目でも判断出来ないっ。

《激流葬》

通常罠

(1)：モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。
フィールドのモンスターを全て破壊する。

『仕方あるまい《ライザー》殿を対象に《スワローズ・ネスト》!!生け贄にしてデツキから
《トラファスファイア》殿、参られよ!』

『あんな鈍感、止めときな!!』

《スワローズ・ネスト》

速攻魔法

(1)：自分フィールドの表側表示の鳥獣族モンスター1体をリリースして発動できる。

リリースしたモンスターと同じレベルの鳥獣族モンスター1体をデツキから特殊召喚する。

《トラファスファイア》

効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守2000

このカードをアドバンス召喚する場合、

リリースするモンスターは鳥獣族でなければならない。

このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り

罨カードの効果を受けない。

「反対派案外多っ?!逆順処理で《幻獣機トークン》が破壊され・・・」

『《ライザー》殿の効果で《ドラゴサック》がデッキに戻る・・・さてこれで場はがら空きですな、《トラファ》殿には罨は通用しない!直接攻撃!!』

『愛ゆえの拳!!』

「痛っ?!色んな意味で!」

ジュンコ LP4000↓1600

『札を1枚伏せて私の番は終了でござります』

ライキリ H2

フィールド現状

《トラファスファイア》(攻)

《セットカード》

「いい加減邪魔！エンドフェイズに《ヒステリック・パーティー》!!手札の《ジエネクス・ブラスト》を捨て、墓地の「ハーピー」を可能な限り特殊召喚する!!帰って来て!《チャネラー》!《ダンサー》!《ハーピスト》!」

『たっだいま』

『ふっふふ〜ん』

『乙女の恋路を邪魔するとは……』

《ヒステリック・パーティー》

永続罫

(1)：手札を1枚捨ててこのカードを発動できる。

自分の墓地から「ハーピー・レディ」を可能な限り特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時に

このカードの効果で特殊召喚したモンスターは全て破壊される。

『ライキリつち、これ……詰んでね?』

『い、いやその……』

「そして私のターン！《ダンサー》効果発動！また戻して自分召喚！《神風》でデッキから《ハーピイレディ》！皆攻撃力300アップ！おまけに《ハーピイクイーン》召喚！！」

『女の敵は成敗!!』

『邪魔すんじゃないわよアンタ達!!』

《ハーピイ・レディ》

効果モンスター

星4／風属性／鳥獣族／攻1300／守1400

このカードのカード名は「ハーピイ・レディ」として扱う。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

風属性モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

《ハーピイ・クイーン》

効果モンスター

星4／風属性／鳥獣族／攻1900／守1200

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「ハーピイの狩場」1枚を手札に加える。

また、このカードのカード名は、フィールド上・墓地に存在する限り

「ハーピー・レディ」として扱う。

「わかってるじゃない流石はハーピー、女子の味方ね！よっしゃあ行くわよ！《ダンス》と《ハーピスト》でオーバーレイ!!電光集いて、眼前の露を払い捨てん!!ランク4! 《電光千鳥》!!」

『ウスラトンカチウスラトンカチウスラトンカチウスラトンカチ』

格好良く出てきたのに鳴き声ひどっ?!

《電光千鳥》

エクシーズ・効果モンスター

ランク4 / 風属性 / 雷族 / 攻1900 / 守1600

風属性レベル4モンスター×2

このカードがエクシーズ召喚に成功した時、

相手フィールド上にセットされたカード1枚を選択して持ち主のデッキの一番下に戻す。

また、1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して持ち主のデッキの一番上に戻す。

「《電光千鳥》の特殊召喚時！セツトカードをぶっ飛ばす！」

『ビリビリッ』

『ああ〜《ミラーフォース》が……』

「わ、私そんなの入れてたっけ、てか教える必要ないわよ？……まあいつか。もういちよ！ORUを一つ使つて《トラファスファイ》もデッキトップにさよならよ！へア
ンタ達暫く出番無しの刑〜!!」

『《ライキリ》つちてめええええ……』

『《トラファ》殿オ?!』

「さつて、覚悟は出来たかしら？《ライキリ》つち〜」

『は、ははは……お手柔らかにお願い致す』

『だが断る（ニツコリ）。皆で一斉攻撃！へ地獄のハーレム、電光仕立て〜!!』

『ホンギヤアアアアアアアアア!!』

《電光千鳥》（攻1900↓2200）

《チャネラー》（攻1400↓1700）

《ハーピイレディ》（攻1300↓1600）

《クイーン》（攻1900↓2200）

ライキリ LP4000↓1800↓100↓1500↓3700

「主たる私に逆らった罰よ罰！暫くそこで丸焼けチキンして下さい？」

ライキリへチーン

『私達は、アンタの味方だからね』

「ありがと〜！さて、急がなきゃね」

《む、無念・・・》

《やだ、案外美味しそうかも》

「なんやかんやでレッド寮前到着だぜ私イ!! さてと十代はっど……」

「あれ? ジュンコじゃないか! おゝい!!」

「ツ! 十代!! ぐ、ぐ、ぜんねえ?」

「ってレッド寮自分から来てる時点で偶然なわけないだろが! 私は阿呆か!

よ、よーし一旦深呼吸よ、いつも通りいつも通り……」

「探してたんだぜ? メールしても返事ないから女子寮まで行こうとした所だ!」

「何?! 十代からメールが来ていただけと、私としたことが……おのれ《ライキリ》!!」

「あ、あら、そうだったの? 奇遇ねえ、私も貴方にちょっと用があった所よ」

「そうなのか? やっぱ俺達って波長が合うっーか……他人とは思えないよな!!」

「グハツ?!」

「お、おい! 大丈夫かよジュンコ……」

新手の口説き落としかこの野郎……私の胸キュンポイントを平気でワンキルしてくるわね早くコロセバ？

「なんでもないわよ馬鹿ツ……わっ、私に用事ってなによ？」

「そうだ、コイツを渡そうと思つてよ！」

十代が小洒落た小さな箱を渡してきた。ん？これって……

「何コレ？」

「何つて、今日は2月14日、バレンタインデーって奴だろ？親しい人にチョコレートあげる日だったと思つただけど……」

「なん、だと……」

同じ切り札を先行で先出しされた気分である。

「毎年母さんから貰つてたの思い出してさ！毎回貰つてばかりじゃ悪いし今年は自分で作ってみただ!!」

「てっ手作りだとう?!」

「おう！明日香に手伝つてもらつてな！アイツつて料理巧いんだなくあれ？菓子作りは

ちよつと違うか、最初は結構失敗したけど最後は上手くいったからさ！食べてみてくれよ！！」

あ、あのブルー天上院明日香の女王の奴、先を越す所かお菓子作り教室デートまで済ましてやがっただと……

「じゃ、じゃあ頂きます……」

開封したら《ゲイル》の顔形のチョコが出てきおった、あら可愛い。食べるのが勿体ないわ記念に写メつとこ……じゃねーわ！クオリティ高けーなビックリよ！！

「ん？どうした？」

さ、さーて、肝心のお味は？

「……」

「ど、どうだ？」

「……の、」

「お?」

脱兎 「十代のバカアアアアアアアアアアアア!!」

「ええええええええええ?!なんでそうなるんだよ!!あれっ、これは……」

《クルック》

夕刻・某崖下

「ハア……」

最近は逆チョコも流行つてるとか言うけどさー……私のより美味しいとかひどくない?あとから渡そうとした私の立場が無いっての。

「貴方のより不味いチョコです、受け取って(はーと)」

なんて出来るかバーカ、バーカ!!

『ク〜ルルウ・・・』

「ん〜? ありがとゲイル、私なら大丈夫よ。」

さーてあのチョコはどうしよっか、自分で食べて処分しちやおうか・・・つてあれ? どこにもないや、走ってる最中に落としちやったのかな? ま〜いつか、どうせあげる価値のないチョコなんて・・・」

「へ〜このチョコ要らないのか、だったら俺貰つていい?」

「のうわつとお?! じじじじじじ十代! 何故ここに!?!」

私、死角に立たれる習性でもあんの?

「何故つて・・・急に怒って走り出されたら誰だつて気になるだろ。もしかして、俺のチョコ不味かったのか?」

「ち、違うわよ! そうじゃなくて・・・」

「じゃーなんなんだよ。俺はお前の怒つてるとこ見たくて渡したんじゃねーぞ」

「ツツ!・・・」

なんか十代・・・怒ってる?

「折角、喜んでくれると思つたのにさ・・・」

「う、うれしかったわよ! だけど・・・だけどね?」

「だけど？」

「・・・悔しかったの」

「へ？」

「悔しかったのよ！私もアンタにチョコあげようとしてたのに、私のより美味しい上に可愛いチョコを先に渡してくるから！こつちから渡せなくなっちゃったのよ！文句ある?!」

『クル〜・・・』

「プツ、ハハハハ!!な〜んだ心配して損したぜ」

「んなつ?!」

笑うところじゃなくなかない?!

「じゃ〜これは元々俺の奴なんだな、いっただきま〜す♪」

「あー!!?」

食べられたら私の立場が・・・

「うん、旨い!〜ごちそうさま♪」

「ほえ？」

「ぜんぜん不味くなんかないじゃん。俺の・・・つつーか明日香にも貰ったけど、それ

より旨かったぜ？」

「う、嘘よ！」

「嘘じゃねーって、なんってゆゑか……適度な苦味の中の甘さがなんかジュンコつぽ
いって感じ？」

「なんなのよ、私っぽいって……」

「要するに、俺好みの甘さってことだな♪」

「……バゝカツ」

『クルルウ♪』

とりあえず、うまくいったのかな？

「暗くなってきたし帰ろうぜ、女子寮まで送るよ」

「うん……じ、十代！」

「ん、どうした？」

「私さ……なくんでもない、行きましょっ」

「?おう、そうだな」

……今はまだこの心地良い関係が続けたい。けど、そのうちきつと！

・おまけ ももえ編

「チツ、他の女子からは何個か貰ったが……肝心の天上院君からはチョコがもらえてない！なぜだ！」

『アニキイ〜ン、そんなにかっかかしちや嫌よ〜』

「うるさいぞ雑魚めがっ!!」

「フフツ、貴方様の求めるものは此処にありましてよ!!」

「お、お前はっ?!」

『ももえの姉御〜!』

まずい・・・、非常に苦手な奴にエンカウントしてしまった。

「そんなに嫌わなくても・・・シヨックですわ〜」

「ええい! ナチュラルに心を読むな!」

「あと黄色おジャマイエローいたらご唇さん? 《姉御》とか馬鹿っぽい呼び方はジュンコさん辺りにでもし

といてくださいまし、とゆうかしやべらないでください不快ですわ」

『よ、容赦が一切ないわ〜ん・・・』

「・・・《ダークナイト》さーん?」

『〈ダークソウル・ローバー〉!!!!』

『イヤアアアアアアアアア』

「ふうっ、これで静かになりましたわね」

「それで？この俺様になんの用だ浜口ももえ」

「まあっ連れない方。キツスを交わした男女の仲なのにフルネーム呼びだなんて……」

「貴様が一方的にしてきたんだろうがっ!!」

「まあまあ、ところでこれはなんだと思います？」

「？ただのチョココレートの箱に見えるが」

「惜しい、正解は明日香様の手作りチョコレート入りですわっ」

「んなっ?!」

「昨日明日香様がチョコ作りをしている際厨房で1個くすねておきましたの……」

「そ、そいつをこっちにY O K O S E !!」

「では、わたくしにデュエルで勝てれば差し上げましょう。安心してください、ジュンコ

さんみたいな真似はしませんので……」

「この俺様にデュエルを挑むだど?!いいだろう、あの頃とは違うと思いい知らせるわ

！浜口ももえ!!」

「フフフ、それでは……」

「デュエル!!」

《おいでませっ！大海の覇者・海皇龍ポセイドラ!!!》

「終わりだ！《アームド・ドラゴンLv7》の攻撃！〈アームド・バニツシャー〉
!!!!」

「キヤアアアアアアアア！」

ももえ LP1600↓0

「どうだ！思い知ったか!!」

「参りました・・・流石は万丈目サンダー様ですわね。では約束のコレを」

「フン！最初から素直に渡しておけば良いものを!・・・ム、もうひとつ箱があるが？」

「それは、わたくしからの分ですわ。本命ですのでちゃんと食べてくださいまし」

「はあ?! 貴様からなど・・・」

「隙アリッ！」

ももへチユツ

「あー!!! 貴様ア! また性懲りもなく!!!」

「ウフフツ、これ以上は本気で怒らせそうなので失礼致しますわねつ、では御機嫌よう」

「全く・・・嵐のような奴だな。・・・折角だし頂いておくか」

「クフフフツ、実は両方共わたくしの手作りなんですが・・・ばれたらどうしましよ
うつつつ」

『アンタって子は・・・』

『イラっと来るぜ・・・』

お
し
ま
い

EX2羽 皆さんは真似しないで下さい。(更新)

おまけ次元

吹「そんなわけでデツキレシピ公開第二弾いきまゝす」

ジユ「またかよ！需要ねーだろ二次創作の紙束デツキレシピなんて!!」

モ「自分で言うのはどうなんですかジユンコさん!？」

「まあまあ、なんとなくのイメージ掴みと駄作者が次にどんなカード使おうかなってゆう模索の為でもあるから」

「それただのメモ帳ではないですか・・・」

「せっかくなんで、今回はデュエルしたセブンスターズ編鍵の守護者の味方陣営全員行くよー!」

「まじかよ、じゃあまず十代から。カイバーマン戦の時のね。レギュレーションはTF1を参考にしてます」

十代【E・HERO】44枚

モンスターカード17

E・HERO

通常

スパークマン

クレイマン

バーストレディ

フェザーマン

効果

エッジマン

ネクロダークマン

エアーマン

ザ・ヒート

ワイルドマン

レディ・オブ・ファイア

ブレイズマン

シャドーミスト

バブルマン×2

ネクロガードナー

カードガンナー

ハネクリボー(d)

魔法カード22

E・エマーゼンシーコール

増援

死者蘇生

大嵐

ハリケーン

融合×2

融合回収

テラフォーミング

ミラクルフュージョン

平行世界融合

強欲な壺

貪欲な壺

ホープ・オブ・ファイブス

フュージョン・ゲート

魔天楼ースカイスクレイパー

バブル・イリユージョン

クリボーを呼ぶ笛(d)

皆既日食の書

破天荒な風

サイクロン

瞬間融合

罨5カード

チェーン・マテリアル

死なばもろとも

ヒーローシグナル

聖なるバリアーミラー・フォース

神の宣告

EX

みんなのヒーロー

「あの時は若干ゲートよりだったかな？モンスターの種類も多目だね」

「相も変わらずよく回りますわね、流石主人公……」

「いや、ぱつと見1番回らないのは万丈目君じゃね？」

「ならお次は万丈目様のデツキ。カミューラ戦のです、どうぞ！」

万丈目〔ユニオンドラゴン〕 50枚

モンスター25

通常

V1タイガー・ジェット

X1ヘッド・キャノン

Y1ドラゴン・ヘッド

おじやまいエロー(d)

効果・上級

光と闇の竜(d)

巨神竜フェルグランド

ダーク・ストーム・ドラゴン

ドラグニティーアームズレヴァティン

ダーク・アームド・ドラゴン

下級

フォトン・スラッシュャー

Aーアサルト・コア

Bーバスター・ドレイク

Cークラッシュ・ワイバーン

Zーメタル・キヤタピラー

暗黒竜コラプサーペント×2

輝白竜ワイバースター

エクリプス・ワイバーン

霊廟の守護者

強化支援メカ・ヘビーアーマー

トルクチューンモーター

ヴァイロン・キューブ

召喚僧サモン・プリースト

増殖するG

エフェクト・ヴェーラー

魔法カード18

ユニオン格納庫

混乱空間

テラフォーミング

強欲な壺

貪欲な壺

手札抹殺

フォトン・サンクチュアリ

予想GUY

馬の骨の対価

竜の霊廟

禁じられた聖杯

禁じられた聖槍

サイクロン

ツイン・ツイスター

大嵐

死者蘇生

復活の福音

黙する死者

ライトニング・チューン

ナチュラルチューン

罨7

スクランブルユニオン

ブレイクスルー・スキル

あまのじやくの呪い

和睦の使者

スターライトロード

リビングデッドの呼び声

攻撃の無力化

EX

ABCドラゴン・バスター

スターダスト・ドラゴン

ライトエンド・ドラゴン

ダークエンド・ドラゴン
他

「なんじゃあこりゃあ・・・」

「こ、これでもやりたい事大分削って最適化したんですわよ?!」

「確かにLv系ないからさっぱりしてるね?でも僕はちよつと回せる自信無いか
な・・・」

「一応、漫画版の除去魔法・畏は使わず、ドラゴンの力で勝つ。をリスペクトしておりま
すわ。機械の竜いますけど」

「これに今度はおじやまサポートが加わるわけね」

「「・・・」」

「よ、よろし。お次は明日香だ!!」

明日香 【機械天使+】 60

モンスターカード26

通常

ブレード・スケーター×2

儀式

サイバー・エンジェル―美朱濡―

茶吉尼

弁天

韋駄天

那沙帝弥×2

古聖戴サウラヴィス

効果

大天使クリスティア

サイバー・プリマ

マンジュゴツド

エトワール・サイバー

サイバー・チュチュボン

サイバー・チュチュ

サイバー・プチ・エンジェル：×3 (d)

デブリ・ドラゴン

沼地の魔神王

融合呪印生物―地

朱光の宣告者×2

緑光の宣告者×2

紫光の宣告者

魔法カード26

強欲な壺

貪欲な壺

マジック・プランター

テラフォーミング

祝福の協会―リチュアール・チャーチ×3

機械天使の儀式×2

機械天使の絶対儀式×2

儀式の準備×3

融合

予想GUY

死者蘇生

シャツフル・リボーン

思い出のブランコ

大嵐

ハリケーン

サイクロン

アームズ・ホール

契約の履行

月鏡の盾

リチュアル・ウエポン

罨8

ドゥーブル・パッセ

ホーリーライフ・バリアー

ブレイクスルー・スキル

スキル・プリズナー

融合準備

アストラル・バリア

スピリット・バリア

大革命返し

EX

サイバー・ブレイダー

ブラック・ローズ・ドラゴン

他割合

「待てやこらあ!60枚かよ?!」

「ピン刺し融合がじわじわきますわね・・・」

「フツ。最近溢れる想いが止まらなないと相談されてね?だったら定石なんか無視すればいいじゃないかと、アドバイスしたらこうなった。」

「犯人お前かー!!こんなんでもよく勝てたな30羽!」

「儀式魔神は趣味じゃなかったそうで抜けたらしい、絶対儀式でサイバーガール達が死に札になりづらくなったおかげもあるね」

「一般のデュエリストの方々は絶対に真似しないで下さ・・・」

「そんなに言うなら次はジュンコ君!きみのデッキを公開したまえ!!」

「え、私はよくない?BF前やったばっかだしRRは個人で差が出来にくいし」

「つべこべ言うなら・・・モモえもん?」

「は、盗っておいたのでこれ公開します」

「あ、こちらあ返せえ!!」

「※ちなみに、僕らはTF1の制限と現在の制限を二重にかけています。あと他人のデッキを勝手に盗っては行けません、真似しちや駄目だぞ?」

「十代様と同じくカイバーマン戦時のデッキですわね、ではどうぞ」

枕田ジュンコ【BF+】40

モンスター24

上級

ダーク・シムルグ

BF1

隴影のゴウフウ

霧雨のクナイ

下級

残夜のクリス

蒼炎のシユラ

黒槍のブラスト

精鋭のゼピュロス

坂巻のトルネード

弔風のデス

東雲のコチ

月影のカルート

疾風のゲイル(d)

極北のブリザード

上弦のピナーカ

二の太刀のエテジア

白夜のグラディウス

砂塵のハルマツタン

突風のオロシ

大杯のヴァーユ

召喚僧サモンプリースト

S Rーベイゴマックス×2

三つ目のダイス

D・D・クロウ

ドロール&ロックバード

魔法カード9

黒い旋風×3

強欲で貪欲な壺

闇の誘惑

手札抹殺

スワローズ・ネスト

ツイン・ツイスター

皆既日食の書

罨6カード

ゴッドバード・アタック

ダメージ・ダイエット

強制脱出装置

魔封じの芳香

神の通告

神の宣告

EX

ライキリ謹慎中

「ジュンコ君どうしたあ?! デツキが40枚におさまっているぞ!!」

「節々にガチの波動を感じます・・・あの生粋のファンデツカー・ジュンコさんはどこへ?!」

「つさいわねえ・・・カミューラに負けたのが悔しかったのよ文句ある?! 隙あらばリベンジしてやろうかと調整してたのよ!!」

「でもBF達が1枚ずつな辺り流石ジュンコ君だね! 胸キユンポイント10点あげよう」

「いらん! じゃあ次ももえ!」

「あっ?! いつの間に!!」

ももえ 【海皇水精燐ガエル】 41

モンスター31

上級

水霊神ムーラングレイス

水精燐ーメガロアビス×2

デインクアビス×2

下級

アビスパイク

アビスリンデ×2

オーケアビス

海皇子ネプトアビス×3

龍騎隊×2

重装兵×2

狙撃兵

鬼ガエル×3

魔知ガエル×2

粹カエル

E・HEROバブルマン

水の精霊アクエリア

サイレント・アングラー

ゼンマイシヤーク

深海のデーヴァ (d)

増殖するG×3

魔法カード9

RUMー七皇の剣(d)

ワン・フォー・ワン

死者蘇生

サルベージ

貪欲な壺

ツイン・ツイスター

アビスケイルークラーケン

アビスケイルーミズチ

闇の護封剣

罨1

虚無空間

EX

全て壊すんだ

「これはひどい」

「おめーが1番ガチガチじゃねーかなんだこれ?!」

「どこぞの泥棒猫ならぬ、泥棒竜が万丈目様盗ろうとしやがりましたのでつい……」
 「間羽の時の奴かこれ、結局あつたことになったの?! 私聞いてないんだけど」
 「まあアンケートの結果、【可】になったからね。作者もちよつと予想GUYだつたらしい」

「つまりあの口〇ヤローは常に万丈目様と一緒にとゆう事に、ああ……無性に腹が立つたので師匠のやりますか」

「どこからでもかかってきたまえ！三沢君戦ので良いかな？」

J O I N 【キングス・シンクロ（大嘘）】 60

モンスター26

通常

真紅眼の黒竜（d）

上級

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター

レッドアイズ・ダークネスメタル ドラゴン

真紅眼の黒炎竜×2

真紅眼の凶雷皇ーエビルデーモン

真紅眼の凶星竜ーメテオドラゴン

The suppression PLUTO (d)

ダーク・クリエーター

儀式

古聖戴サウラヴィス

下級

真紅眼の飛竜

真紅眼の遡刻竜

伝説の黒石×3

レッド・スプリンター

レッド・ガードナー

トラップ・イーター

レッド・リゾネーター×3

ダーク・リゾネーター

クリエイト・リゾネーター

シンクロン・リゾネーター

チェーン・リゾネーター

ミラー・リゾネーター

グローアアップ・バルブ

黒鋼竜

幽鬼うさぎ(d)

魔法カード26

テラフォーミング

光の聖堂

化合電界

紅玉の宝札

手札抹殺

七聖の宝刀

闇の誘惑

貪欲な壺

レッドアイズ・インサイト×3

真紅眼融合

コール・リゾネーター×3

死者蘇生

復活の福音

思い出のブランコ

黒炎弾

クリムゾン・ヘルセキユア

銀龍の轟哮

ツイン・ツイスター

エネミー・コントローラー

緊急テレポート

D・D・R

闇の護封剣

罨8

バスター・モード

スカーレット・コクーン

王魂調和

レッドアイズ・スピリッツ

レッドアイズ・バーン

真紅眼の凱旋

デモンズ・チェーン

スクリーンオブ・レッド

王者の看破

EX

流星竜ーメテオ・ブラック・ドラゴン

真紅眼の鋼炎竜

蒼眼の銀龍

レッド・デーモンズ・ファミリー

「そしてアンタも60枚かーい！つかカードの割合がほぼほぼ明日香と一緒、流石兄妹?!」

「ほんと、何故これで勝てるんですかね・・・」

「いやあく40枚ってかなり少ないよね？リゾネーターシンクロ軸のはずが、プルトが寂しそうな顔でこっち見るからつい」

「そんな理由でデツキ盛るんかいっ」

「だってそれが愛だろう?・・・さて、今回はこんなものかな?」

「あれっ?三沢君は?」

「彼は(敵陣営で出てたので)無いです。」

「ひどっ?!」

「なんだかんだで可哀想ポジション安定なんですわね」

「そんなわけで、以上。作中デツキ紹介でした」

「こんな茶番でお茶を濁してごめんね?作者急かして次回もちゃんと書かせます」
「それではまた次回に」

「あ、通り名・渾名募集はまだやってるんで気が向いたら協力してね!」

EX3羽 腹黒人魚使いのノース物語 (前)

これは……12羽にて某浜口ももえがへちよつと駆け落ちしてきますわ♪とメルを出した後のお話である。

とある海上く……

「ああ、母なる海……眼前に広がる……どこまでも続く、蒼の世界……」
「……」

「そこに浮かぶ小さな方舟には、俗世から逃れてきた二人の男女、ああつ！なんて素晴らしいシチュエーションなのでしょ!!」

「つていい加減現実を見据えろ!!なぜ船が沈みかかっている状況で呑気にポエムなぞ綴っているのだ!？」

「まあ、いいではないですか少しくらい……」

沈みかかったクルーザーの先端で二人の男女が佇んでいた。

『はくい、皆のトラウマ《深海のディーヴァ》でくす。突然で読者の皆には意味★不明だ
と思うから軽く現状説明するわね』

101 『俺達はもう、分かり合っている．．．』

『いや、鮫語やめい。うちとモモ以外わかんないから．．．とりま、レッツ回想♪』
『イラツと来るぜ!』

数十日前! 12羽にて二人が社長会長の魔の手から逃れた翌日の事である!!

なお第3者（精霊）視点の為、地の文（?）は省略となっている! 予めご了承頂きた
い!!

「さらばだ、デュエルアカデミア．．．」

101 『何て言わすと思ったか! お前はまだまだだ!!』

「ツ! 誰だ?!」

（だ、誰も居ない?）

「なんだ、気のせいか．．．」

背★後 「まあ、何か居たのですか?」

(・・・・・・・・・・)

「ホンギヤアアアアアアアア?!」

「ホンギヤアアアアアア、なんて凄いい声出しますわね万丈目様……ちよつとかわい、じゃなくて意外ですわ」

「な、な、な、なななななつ、何故貴様がここに?!KCに例のカードの件で呼び出されたと聞いているぞ!!(そして安心していた)」

「ええ、地力で脱出を(吹雪リリース)。わたくしがいなくて安心してたなんてひどいですわ!せめて寂しがつてくれないと……」

「毎回毎回背後から登場する奴が居なくなれば清々する、つとゆうかナチュラルに心を読むな貴様あ!」

「万丈目様は感情がストレートでわかわいい……ではなくわかりやすいので」

「きつさまあ、いちいち人をコケにせねば会話が出来ぬようだな……」

「失敬な!こんな扱いをするのは万丈目様かジユンコさんくらいですわ!」

「ええいもういいデュエルだ!貴様の性根を叩き治してやる!!」

「あらあら……三沢様のカードを奪った上にしらばつられて負けた方が退学だ!とかいいだして返り討ちに合った方が随分自信あり気ですわね♪」

「なぜそこまで詳しく知って……」

「それはもう！万丈目様の行動は逐一《皆様》に報告させてます……じゃなくて明日香様に聴きましたわ」

「今聞き捨てならん発言が……どこだ?!俺を見張ってる奴はどこにいる!!」

「いずれ分かります、いずれね……折角なので、負けた方は1ヶ月勝った方の犬になる!なんてのはどうでしょう?当然、一般流通のカードのみで相手しますわ」

「い、犬だとお?!上等だ貴様あ!俺が本来の力を出せば貴様らごとき敵ではないことを思い知らせてやる!!」

「フフフツそのいきですわ」

「デュエル!!」

「俺のツターン!《地獄戦士召喚》!!カードを3枚伏せてターンエンド!!」

「フフフフ、俺のセットカードは《リビングデットの呼び声》に《地獄の暴走召喚》、更にもしもの時用《ミラーフォース》!攻撃してきたが最後……《地獄戦士》を大量展開し、次の俺様のターンに《団結の力》を装備して一気にケリをつけてやるわ!」

「では、わたくしのターン!手札の水属性モンスターを捨て《鬼ガエル》特殊召喚!そして《伝説の都アトランティス》!!《鬼ガエル》を生け贄に《海神竜―ダイダロス》(攻2600)!!効果発動《アトランティス》を破壊し、全てのカードを破壊致します!!」

「↑絶句2」

「駄目押し of 《水の精霊アクエリア》（攻1600）！2体でダイレクトアタック!!」
 「うわああああああ?!」

万丈目 LP4000?0

WIN ももえ

『そんなわけで、負け犬となった万丈目君はももえに逆らえず……こんな所まで一緒にハメになりましたとさ♪』

『簡略で……笑顔を……』

解説ごくろうさまですわ

「大体船が沈みかかっているのだから……お犬様がやれ「この船で出るぞ」だの、やれ「進行方向はまかせろ」だの突っ走ったからではありませんか」

「うぐつ……」

「それに沈みかかった船で男女二人きりだと、某豪華客船の二人みたいで素敵でしょう？」

「命が危ないってのに、貴様の余裕はどこからくるんだ……」

最悪ダークナイトさん背中に乗せてもらえばいいですから、まだ精霊見えないっぽいしややこしくなりそうなんでギリギリまでやりませんがね？

『ねー、そろそろ船沈むよー！』

「あつ、限界のようですね？ではお犬様、来世でまた会いましょう！」

「貴様とは輪廻転生何度甦っても再会したくな．．．わあああああああ?！」

「キヤアアアアアア（棒読み）」

『アンタってコは．．．』

《魔法カード浮★上！》

「う、うーん．．．」

「生きているのか俺は．．．なんだか．．．暖か．．．」

「んー」

目を開けたら・・・浜口の顔がすぐそこまで迫って来ていた。

「うおつとお?!」

「ムツ、あと少しでしたのに・・・」

「貴様あ!人の寝込みに何をやらかそうとしたのだ!!」

「まあ、目が覚める気配がないので?雪姫のごとくキスでもしたら起きてくれるのではと・・・」

「そこは嘘でも人工呼吸と言わんか!!」

危ない危ない、寝込みを襲われる所だった。

「フオツフオツフオツ、中々面白い二人じやの」

「?!誰だ貴様は!」

座っていた
ガスマスクのような者にフード、そして・・・昆布かあれは。なかなか怪しい奴が

「この方は潜水艦でわたくし達を拾ってくださった・・・妖怪海坊主様ですわ」

「ウム、宜しくな」

海坊主でいいのか・・・

「お前達デユエルをするのだろう？残念ながらお主のデツキは海水につかりすぎて駄目になってしまった」

「んなっ?!俺のデツキ!!」

俺のカードをばら蒔きやがったと思ったたら突然カードを投げ付けてきた

「そのカードは儂からのプレゼントじゃ」

「なんだあ?・・・おじやまいエロー、攻撃力0?!いるかこんなもん!!」

「まあ!カードが全部駄目になったのですから贅沢言わないのお犬!」

「騙されるかあ!犬期間の1ヶ月は昨日で終わりだ!!（時計を確認しながら）」

「残念、覚えてましたの・・・」

「フフツ、ここで会えたのも何かの縁じゃ。お主、強くなりたいのだろうか? いい場所に連れて行ってやる」

「いい場所?」

《いい場所って？》

《ああ!!》

「ここが……デュエルアカデミアノース校」

昆布お化けに連れられてやってきたのは、氷の大地に聳えるデュエルアカデミアノース校であった。

「まあ、立派な門ですわね〜」

「しかし開かないな、おい！誰かいないのか!!」

「その門は、40枚のカードが無ければ開かない」

門の旁から声がすると思ったら眼鏡で青髭のジジイが座りこんで俯いていた、なんだ今度は……

「チツ、俺達はここに来るまでにデツキを無くしたんだ」

「40枚のカードが無ければ開かない、だがこの辺りの至る所にカードが隠されている、それを集めれば……俺は39枚集めた所で気力を使い果たしてしまった」

「フン、要するに脱落者か。ならじじい、言い値でそのカードを売れ」

「い、嫌だ！これは俺が生きた証だ!!」

面倒な……

「まあいい、自分の事は自分でなんとかするさ……行くぞ浜口」

「頑張つて下さいませ」

「んっ？貴様もカードを浸水で駄目にしたのではないのか？」

テストカードも全て駄目になったろうに、いい気味だ。

「パツパツパツパツパツ、耐水性デツキケケスス（ダミ声）」

「はあ?!」

「3000kgの象に踏まれても壊れない！深海2500mまでの浸水も完→全←防御！
耐水・耐圧式の強靱★無敵★最強デッキケース青眼モデル！ですわ！（KC製）」

なんか絵柄違いの青眼が彫つてあるデッキケースをくり出してきた・・・

「衝撃4500kg！深海3800mまで対応の究極龍ジュラルミンケース版も同時発売
予定です！（小波）」

「……………」

「きつさまあ！そんなもんがあるなら最初から出さんか!!俺のカードは無駄死にはないか!!」

「何も言われませんでしたし・・・海に出るなら下準備が足りない方が悪いですわよ?」

「クソツ！もういいさつさと集めてやる！貴様は中で待っている!!」

「わたくしからは施しを受けたくない、と。あ、ならこのリュックを。1週間分の食事と水、簡易ですが寝泊まりセットが入っております」

「……………用意がよすぎるぞ?!

「チツ、貰っておいてやる・・・またな!!」

「(こっちは受け取るんですのね) お気をつけて」

?

「さてと・・・謎の芝居はもう結構ですわ校長様」

「ホホホ、ばれておったか」

いやばれますよね普通は、声全く同じだし・・・

「君の留学届けは受理しているよ浜口ももえ君、早速中に入るかね？」

「いえ、ちよつとヤボ用がありますのでその後・・・」

「ヤボ用とな、こんな氷の大地しかない所に・・・彼氏の応援かね」

「ウフフフ、彼氏だなんて・・・では校長様、後程また会いましょう」

?

「た〜のも〜」

「おや、浜口君。用事とやらはもう済んだのかね？」

「ええ、滞りなく」

フフフフツ、dark knightさんに乗せてもらってありとあらゆる場所に
万丈目様に合いそうなカードをファンサービスしてきてやりましたわ。カードを大切
にしろとか批判されそうですがこつちに来てからのカードは正直多少の浸水などは
びくともしませんからね・・・取り損ねがあったらちゃんと回収しますよ？（精霊が）

『姑息な手を・・・』

『それアンタじゃなくて102じゃね？』

こうでもしないとプライドの塊の彼はなにも受け取ってくれませんから・・・十代
様にリベンジするならジュンコさんの姑息な強化に匹敵する位は協力しませんと！

「??さつきからなにをブツブツ言っておるのじゃ?」

「い、いえ!今日はまだ万丈目様は戻りそうにないですし、三紋芝居はやめにして校内を案内してくださいな!」

「ハツハツハツ!容赦ないね浜口君、私は少し傷ついたよ。ではうちの荒くれ共が迷惑をかけるかもしれんが・・・頑張りたまえ!!」

たしか・・・50人抜きデュエルを行うんでしたっけ、少々卑怯ですが流石に面倒なので・・・いつもの水精燐に海皇混ぜた方と影霊衣、リチュアでも使い回しますか
(ガチ思考)

《ネプトリリースメガロアビスオラア!!ヴァルキュルス!グングニール!トリシューラ
!ギガスギガスグスタフ・・・じゃなくてガストクラーク!!》
《「ギヤアアアアアアア?!」》

よ、ようやく集まった・・・俺の新しいデッキ!!

「おお！戻ってきおったか！」

校門前迄いったら例のドロップアウトジジイがまだ居座つてやがった、コイツ……食事等はどうしているのだろうか

「良かった……儂はずつと後悔しておったのじや、若い君にカードを譲るべきだったと……無事に帰って来てくれて良かった……」

「フン、当然だ！北海のシヤチと戦い……白熊と戦い！氷山の断崖絶壁を登りつめ、ついに完成させた！俺様のnewデツキだ!!」

まあ……一部誇張が入っているがな

「おおつ、では中に入られるので?！」

「俺はまだいい、ジジイ……貴様が先に行け。1枚カードを恵んでやる」

「な、なんと?!貴方は優しい人だ!!」

フン、潜水艦でよこされた《おじやまいエロー》でいいだろう……

「あ、あれ？カードが抜けんな・・・」

『アニキ、オイラを手離さないでくれよ』

「うおっ、びっくりしたあ?!人前で姿を見せるな雑魚カード!!むしろ貴様ごときが人様の役に立てるんだ、感謝するがいい!!」

『そっくんな』

チツ、仕方がない!こんな雑魚を渡して器が狭いと思われるのも釈だ!他にあまりシナジの無いカードを・・・

「そらっ!これをやるから早く行け!俺様は疲れたから寝る!!」

「おおっ、ありがたや・・・あ、貴方のお名前は?」

「俺は万丈目準・・・万丈目さんだ!」

『ドヤア・・・決めてるね〜アニキ』

うざい・・・激しくうざいぞこいつ

「ありがとう万丈目さん!貴方は優しい人だ!な、中でお待ちしとりますぞ!!」

「いいから早く行け!!」

ジジイが門の中に去って行く……クツ、一枚足りなくなっちゃったぜ。まだいるとは思わなかったからな、妙な意地をはるのではなかった……ム、なんだこれは？封筒がおちているな。万丈目様へ?! 浜口の奴かなんだ!!

、万丈目様へ、お体は大丈夫でしょうか？わたくしは男共しかいないむさいノース校で逆ハーレム……ゲフンゲフン、退屈な想いしております。本題ですが、この手紙に4枚のカードを同梱しております。非常に不本意だとは思われますがもしもの為に役立てて下さいませ

貴方のももえより、

「だあれえが貴方のももえだあ!! つといかんいかん、カードが入っているのだったな。流石にあと一枚の為にまた氷山地帯に戻るのも癪だ、不本意だが受け取っておくか……」

『素直じゃないわねくん』

「黙れ雑魚。40枚を越えた今、貴様など不要の産物なのだぞ」

捨ててもしつこく帰ってきそうではあるが、さてどんなカードを……

《ギャラクシー・サーペント》

《ラブラドライ・ドラゴン》

《ライトエンド・ドラゴン》

《ダークエンド・ドラゴン》

うおおい！シンクロモンスターとチューナーモンスターではないか！一般人に使用は禁止ではないのか!? ……まあ良い、背に腹は代えられん。なにか問題が出れば全て奴のせいにしてやる

《THE仮眠!》

「確かジジイはデュエルディスクをこう……」

開いたか、よし行くぞ！万丈目さんの復活劇場だ!!

「ノース校、まるで西武の劇場だな．．．」

「ギャアアアア?!」

「この声は!ジジイ!!」

「おお、万丈目さん．．．」

「ジジイ、何があつたんだ．．．」

件のジジイが吹っ飛んできやがった、どうなってる?!

「ヒヤーツハツハツハツハ!また新しい獲物が来たぜえ．．．」

「ようこそ新入生、ノース校へ!!」

声のする方を見るとえらく個性的な髪形をした連中が立ち並び、やたらごついオールバックがふんぞり返っていた。

おい、リーゼントとオールバックはギリギリわかるとして．．．何故モヒカンがいるのだモヒカンが?!しかも校内のはずなのに一部の奴はバイクらしきものにも乗つてやがる．．．何処ぞの世紀末だ

「歓迎するぜえ、俺様がここの生徒会長の江戸川だ．．．人はキングコングと呼ぶ」

ん？キングコング？悪口じゃないかそれ……

「優しい俺様達がここのルールを教えてやろう、新入生には歓迎として50人抜きデュエルを受けてもらうー！この学園には明確なランク付けが存在しランクが低い者から戦っていき、負けた時点で順位が決定する」

なるほど、単純な実力主義か……わかりやすくして良い。

「そのジジイは50位の俺っちに負けたあ！よってモヒカン決定だあああああ!!」

「もつとも、それだけの髪がないようだがな?!ヒヤーツハツハツハツハ!!」

「「ぎやははははは!!」」

なんて品のない連中だ……もしかしてモヒカンは低ランクの奴等なのか？流石に嫌だな、絶対に回避せねば

「フン。ジジイ、貴様の髪の毛の敵は俺がとつてやる……50人全員を下してな!!」

「生意気を!!お前の後頭部も寂しくしてやろうかあ?」

「お前、ではない！俺様の名は……一！十！百！千……万丈目さんだ!!」

そういうえば、なにかを忘れているような……

「デュエル!!」

万丈目 LP4000

モヒカン50位 LP4000

「俺のタア〜ン!!モンスターとカードをセットして終了だあ!!」

威勢の割には大人しいな……ランキング最下位の雑魚など俺様の新デツキで瞬殺してくれる!!

「俺のターン!《手札抹殺》を発動!!互いに手札を全て捨て、同数ドローする!俺は5枚ドロー!!」

「俺たちは4枚ドローだあ!」

「行くぞ!まずは《ギヤラクシー・サイクロン》!セットカードを破壊する!!」

「チイツ！俺っちの《ヘイト・バスター》が……」

覚えてがないカードだな……なんだったか

「姿を見せろ！《アサルト・ワイバーン》!!」

『ギシャアアア!!』

《アサルト・ワイバーン》星4／光／ドラゴン／攻1800／守1000／

「さあ奴のモンスターを切り刻め！<アサルト・スラッシャー>!!」

『ウギギギツ』

《アサルト・ワイバーン》がセットモンスターの小型の悪魔を真つ二つにした、悪魔族のデッキか？

「俺っちのモンスターは《ヘル・セキュリテイ》！破壊されたら効果によりレベル1悪魔族モンスターを特殊召喚するぜ！2体目の《ヘル・セキュリテイ》だ!!」

「リクルーターか……だが残念だったな、《アサルト・ワイバーン》の効果発動！戦

闘でモンスターを破壊した時、自身を贄に手札墓地からドラゴンを呼び出せる!! 墓地より現れる! 《エレキテル・ドラゴン》!!」

『ゴオオオオツ!!』

《エレキテル・ドラゴン》星6／光／ドラゴン／攻2500／

「追撃だ! 《ヘル・セキュリティ》(守100)を攻撃!!」

『ギヒヤアツ?!』

「バトル終了、カードを1枚伏せてターンエンドだ」

万丈目 H3

《エレキテル・ドラゴン》(攻)

セットカード

速攻で蹴散らすつもりがリクルーターで手間取ったな、まあいい次のターンで……

「俺っちのターン! 《ディスク・ライダー》をしょおかああああん!!」

《ヒヤーツハツハツハツハ!!》

モンスターまで世紀末か、勘弁してくれ……。しばらく北?の拳は読みたくないな
「逝くぜ新入りイ!レベル4の《ディスク・ライダー》にレベル1の《ヘル・セキュリティ》
をチュウウウニングウ!!」

「はあ?!」

「俺達は、権力なんざに縛られねえ!シンクロ召喚!《ヘル・ツイン・コップ》!!」

『イヤツハアアア!!』

《ヘル・ツイン・コップ》星5/闇/悪魔/攻2200

「馬鹿な!シンクロ召喚だと?!それはまだ……。」

「どうやらこの召喚を知っているようだなあ!」

「ククク、驚いたか新入り。この学園は《あのお方》の監督の元、現在目下開発中に当たる2つの召喚方法の使用を、特別にKC社から許可されているのだよ!!」

そんな馬鹿な話があつてあたまるか!本校ですら出回っていないとゆうのに……。む、
《あの御方》?

「しかもランクが10上がるごとにあの御方から直々に新カードが支給される!」

「俺達は躍起になって上のランクを目指すことで、デュエルスフィックスを高め合っているのさー!」

「もつともお？学校外部で使用・および情報を洩らした場合は・・・あの方からキツイお仕置きがあるのだから!」

「俺はお仕置きを受けたくて、一度脱走したがあー!」

ようは新システムを餌に、生徒の意欲を高めているとゆうわけか・・・

『最後に突っ込まない兄貴も素敵だわ〜ん』

「だが折角のシンクロモンスターも攻撃力2200程度、《エレキテル・ドラゴン》の敵ではない!」

「甘めえよお!《一族の結束》を発動オ!墓地に存在する種族が同一であるとき、ワールドのその種族のモンスターの攻撃力は800アップだあ!!」

《ヘル・ツイン・コップ》(攻2200?3000)

「攻撃力3000!」

「バアトオルだあ!《エレキテル・ドラゴン》を引き殺して逮捕しろ《ヘル・ツイン・コップ》ウウ!!」

『ギヒャアツ御用だ御用だあ!!』

『ギシヤアアアアツ!』

「クツ、おのれえ……」

万丈目 LP4000?3500

「まあだだあ!このモンスターは相手を引き殺した場合、スピードアップしてもう一度相手にブツ込むことが出来るのさあ!!」

《ヘル・ツイン・コップ》(攻3000?3800)

「ツ!まづい!」

「こいつが通れば俺たちの勝ちだあ!ヒャーッハッハッハッハア!!」

「させん!リバース罠《ピンポイント・ガード》!!墓地のレベル4以下のモンスター《ミングエイ・ドラゴン》を特殊召喚する!!」

『ギギツ』

《ミングエイ・ドラゴン》星2/守備100

「チイツ、ならばそいつをk i i r!!」

「《ピンポイント・ガード》で甦ったモンスターはこのターン、破壊されない!!」

《ミンゲイ・ドラゴン》がバイクにひかれていたが、やがて弾き飛ばして《ヘル・ツイン・コップ》はズッコけた。

「クソツ……（もう手札にモンスターしか居ねえな）ターンエンドだあ！」

モヒ50 H3 LP4000

《ヘル・ツイン・コップ》（攻）

《一族の結束》

「クククツ、どいつのおかげかは知らんが初戦から少しは骨のある相手だな、と言っても魚の小骨程度だが……面白い！あの馬鹿（十代）にリベンジする為にも修行の相手は強い方がよい！俺のターン!!」

「（だが俺つちのモンスターは攻撃力は3000、突破には手間取るはずだ。次のターンで……）」

「墓地の《ギャラクシー・サイクロン》効果！除外して表側の魔法・罫カードを破壊！」

「ほ、墓地から魔法だとお?!」

「これで目障りな《一族の結束》は破壊！そして《ミンゲイ・ドラゴン》を生け贄に、《タ

イラント・ドラゴン』を召喚する!!」

『ウツガアアアアア!!』

《タイラント・ドラゴン》 星8／火／ドラゴン／攻2900／守2100／

「レベル8モンスターを1体の生け贄で召喚したただとお?！」

「《ミンゲイ・ドラゴン》はドラゴン族を召喚する場合に1体で2体分になれる!そして墓地の《エレキテル・ドラゴン》と《ラブラドライ・ドラゴン》を除外し、手札より《ライトパルサー・ドラゴン》を特殊召喚!!」

『コオオオツ……』

《ライトパルサー・ドラゴン》 星6／光／ドラゴン／攻2500

「この辺りのカードは随分と険しい場所に落ちていた……なかなか値が張りそうなカードだが、落とした奴は随分気前が良いな。」

「《団結の力》を《タイラント・ドラゴン》に装備!フィールドのモンスターが2体のため攻撃力1600アップ!バトルだ!《ヘル・ツイン・コップ》を攻撃!<タイラント・バースト>!!」

『ギヒヤアアアアア!』

「続けて《ライトパルサー》のダイレクトアタックだ!!」

「ウツギアアアアアア!？」

モヒ50位 LP4000?1700?0

WIN 万丈目

「フン、手こづらせおつて……」

「やるじゃねえかあ！次は僕ちんだあ!!」

またモヒカンだと！やはりあの髪型は下位生徒の罰ゲームなのか?!

《切り込みロック∞!!》

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ようやく50人……片付いたか……」

思ったより苦戦したな、やはり知らないカードを相手にするのは手間取る。やたら

《ヘル・ツイン・コップ》と《スクラップ・デス・デーモン》を出してくるモヒカンが多かったが……

「やるじゃあねえか新入生！もはや世紀末と化したこの新生ノース校、デス→50人抜きデュエルを生き残るとはな!!」

自覚はあつたのだな世紀末……そしてデスを強調するな、うざい。

「だがここまでだ、このキングコング江戸川が貴様を下す！」

「やれるものならやってみろ！猿山の大将には興味はないが……俺には勝たねばならん奴がごまんというからな！その為の礎となるがいい!!」

「フン！減らず口を！」

「デュエル!!」

万丈目 LP4000

江戸川 LP4000 「俺のターン！モンスターとカードを2枚セットしてターンエ

ンド！」

「なんだ、大将の割には消極的だな」

「貴様のデッキはこれまでのデュエルで把握している、高レベルドラゴンがいつ飛んでくるかもわからんからな。迂闊な展開はせんさ」

チイ、面倒だな・・・奴の言う通り、俺の現在のデッキはドラゴン族が八割を占めている。たまたまには出来すぎなくらい俺の行く所行く所、ドラゴンのカードが多かったのだ。

「だが伏せカード2枚でこの俺を止めれると思うな！俺のターン！《アレキサンドライドラゴン》を召喚！」

『ギイツー！』

《アレキサンドライドラゴン》星4／光／ドラゴン／攻2000

「そして魔法カード《スタンピング・クラッシュ》！！ドラゴンがいる時相手の魔法・罠カードを破壊！更に500ポイントのダメージを与える！まん中の伏せカードを破壊だ！」
「チツ、なら対象となった罠カード《悪魔の嘆き》を発動。デッキから悪魔族の《デビルゾア》を墓地に送る」

罠版の《おろかな埋葬》か、罠カードではあるが便利そうだ。

「その後相手墓地のカードをデッキに戻せるが……残念ながら今は無いな」
「なら500ダメージを喰らえ！」

「グッ、」

江戸川 LP4000?3500

あとは突いて奴の伏せを使わせる！

「バトルだ！《アレキサンドライドラゴン》でセットモンスターを攻撃!!」

「フン、残念だったな……セットモンスターは《魔神アーク・マキナ》！守備力2100だ！」

『ギギギ……』

《アーク・マキナ》星4／闇／悪魔／守2100／

『ギイツ?!』

「チイツ……」

万丈目 LP4000?3900

まさか高守備力のモンスターだったとは……序盤のモヒカン共の《ヘル・セキユリテイ》に毒されていたな

「そしてこの瞬間！《アーク・マキナ》の特殊能力が発動する！」

「何イ!？」

「こいつが相手に戦闘ダメージを与えた時、手札・墓地の通常モンスターを特殊召喚出来るのだ！来い、《デビルゾア》!!」

『グウオオオオ……』

《デビルゾア》星7／闇／悪魔／攻2600／

「ヒヤツハー！出たぜえ！」

「江戸川さんのエースモンスターだあ!!」

「クソツ、下手に殴るべきではなかったな……カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目 H2 LP3900

《アレキサンドラゴン》(攻)

セツトカード

セツトカード

「俺のターンだ！畏発動《メタル化―魔法反射装甲》!!こいつを《デビルゾア》に装備する！」

《メタル化》ならダメーシ計算時に発動した方が良さそうなものだが……

「そして《メタル化》を装備した《デビルゾア》を生け贄に、《メタルデビルゾア》をデッキから特殊召喚出来る!!」

『ゴガアアアアアアッ!』

「更に《終末の騎士》を召喚！デッキから《ヘルウエイ・パトロール》を墓地に送る！こいつを墓地から除外する事で、手札の攻撃力2000以下の悪魔を特殊召喚！来やがれ《デイスク・ライダー》!!」

『フンッ!』

『イヤッハアア!』

《終末の騎士》星4／闇／戦士／攻1400／

《デイスク・ライダー》星4風／悪魔／攻1700／

「《ディスク・ライダー》効果！墓地の罫カード《メタル化》を除外し、攻撃力を500アップ！バトルだ！《アレキサンドラゴン》を攻撃!!」

全て食らったら終わりだ、使うしかあるまい！

「ダメーじ計算前に速攻魔法《援軍》を発動！攻撃力を500アップさせる！そいつは返り討ちだ!!」

《アレキサンドライドラゴン》（攻2000?2500）

『ギギイツ!』

『アツヒャアアアアツ?!』

江戸川 LP3500?3200

「ムウ、先にやられた数多の同胞の為にと攻撃したが失敗だったな……ならば《メタルデビルゾア》！奴を八つ裂きにするのだ!!」

『ゴオウ!!』

『ギヒィ……』

「おのれっ!」

万丈目 LP3700?3200

「続けて《アーク・マキナ》の攻撃！」

「そうか、先に《メタルデビルゾア》を出したのは墓地から《デビルゾア》をまた呼び出すつもりだからだな！」

「そうはいかん！ 《リビングデッドの呼び声》を発動！ 《アレキサンドライドラゴン》を墓地より復活させる!!」

『ギギギ……』

「ならばバトルは終了しメインフェイズ2に以降！ 《アーク・マキナ》と《終末の騎士》でオーバーレイ！」

「……エクシーズ召喚ツ!!」

「来いよ《No. 66》！ 《覇鍵甲虫 マスター・キービートル》!!」

『ウギギギッ!』

《マスター・キービートル》★4 / 闇 / 昆虫 / 攻 2500

兜虫か・・・悪魔と《切り込み隊長》が多かったから少し新鮮だな。

「効果発動！オーバーレイユニットOR Uとやらを1つ消費し、《メタルデビルゾア》を対象とする！この効果で選択したカードは《マスター・キービートル》がいる限り効果で破壊されなくなる！俺はこれでターンエンドだ！」

江戸川 H2 LP3200

《メタルデビルゾア》(攻)

《マスター・キービートル》(攻)

セットカード

効果でも破壊出来ない攻撃力3000か・・・

「俺のターンだ！・・・《マジック・プランター》を発動！《リビングゲッド》を墓地へ送り2枚ドロロー！アレキサンドドラゴン》は破壊される・・・」

「へえ、そこまでしてドロローすんのかよ。相当追い詰められてんな？」

「だが希望は繋がった！コイツは相手フィールドのモンスター数が2体以上多い時特殊

召喚出来る！《魔導ギガサイバー》!!」

『ヌウン……』

《魔導ギガサイバー》星6／闇／戦士／攻2200

「続いてチューナーモンスター《ギヤラクシー・サーペント》召喚！」

『ギヤウツ!』

《ギヤラクシー・サーペント》星2／光／ドラゴン／攻1000

「チューナーだと……まさか！」

「少々本意ではあるが……レベル6の《魔導ギガサイバー》にレベル2の《ギヤラクシー・サーペント》をチューニング！深き闇より現れよ！《ダークエンド ドラゴン》
!!」

『ゴアアアア……』

《ダークエンド・ドラゴン》星8／闇／ドラゴン／攻2600／守2100

「シンクロ召喚だ?!? 貴様はまだ《あの方》に接触してはいないはずだ！（その前に叩き潰してやろうと思ったのに）」

「《あの方》だかなんだか知らんが、俺は使えるものは使うまでだ！《ダークエンド》のモンスター効果！攻守を500下げ、相手モンスター1体を墓地に埋葬してくれる！対象は《メタルデビルゾア》だ！＜ダーク・イヴァポレイション＞!!」

『ヴガアアア・・・』

「俺の最強モンスター《メタルデビルゾア》が・・・だが攻撃力が下がったことで《マスター・キービートル》は突破出来ない！」

「悪いがこのターンで終幕だ！《龍の鏡》を発動！墓地の《ギャラクシー・サーペント》と《アレキサンドドラゴン》を融合し、《始祖龍　ワイアーム》を融合召喚!!」

『ギャゴオオオツ!!』

《始祖龍　ワイアーム》星9／闇／ドラゴン／攻2700／

「バトル！《ダークエンド》でその兜虫を攻撃！＜ダーク・フォッグ＞!!」

「なんだと?!自爆特攻か！」

「馬鹿か、速攻魔法《禁じられた聖杯》！《ダークエンド》の効果を無効にし攻撃力を400上げる!!」

《ダークエンド》（攻2100?2600?3000）

「攻撃力3000だと！うおおっ?!」

江戸川　LP3200?2700

「トドメだ！《ワイアーム》でダイレクトアタック!!」

「バカナアアアアアアツ!!」

江戸川 LP2700?0

Win 万丈目

「キングゴング江戸川が……」

「俺達のリーダーが……負けた？」

「フオッフオッフオッフ、どうやらワシの見込み通りだったようじゃな」

「貴様は……妖怪海坊主!?何故ここに！」

「そしてその正体は……ワシじゃあ！」

わかめ装備を解除したら、中からじじいが出てきやがった！

「じじい！貴様だったのか！」

「そしてワシはこの校長でもある。万丈目、全てはぬしを強くする為の作戦だったのじゃよ」

潜水艦で拾われた辺りから仕組まれていたのか、胸糞悪い話だが……

「何故俺にそこまで?」

「君にはノース校の代表となり、今度行われる本校との親善試合で闘ってもらいたい。こちらの代表は1年生だと伝えてあるから向こうも1年生を出してくるじやろう……」

「1年……ならば十代が!!」

「フッフ、さあきたまえ万丈目。君が代表に相応しいか、現ノース校最強のデュエリストが判断してくれるだろう!!」

「何! キングを倒したのにまだ上が……」

その時、聞き覚えのある声の高笑いが辺りに響き渡った。

「オッホッホッホッホッ! 忘れてまして?! 貴方の一番のファンの名を!!」

「きつ、貴様は!!」

後編へ
く
続
く。

EX4羽 腹黒人魚使いのノース物語?! (後)

前編のあらすじ

世紀末ノース学園

「貴様つ、浜ぐ……ち……」

そこには数人のモヒカンが担ぐ御輿(?)に乗った……まあなんとゆうか案の定、浜口ももえの姿があつた。

「モモ様だあ!」

「モモ様が興しでお越しになられたぞお!!」

「てめえらあ!頭が高いぞ配置につけえ!!」

そして一般生徒(?) 共は脇にそれて土?座しだす始末である……なんだこれは!?

「「もーも様!もーも様!もーも様!」」

「モモ様!申し訳ありません、俺達が不甲斐ないばかりに・・・」

「全くその通りですわキングゴングさん、あれだけ皆様をしばきあげ・・・もといデツキを強化したつもりでしたのに、51人突破されるまで僅か3時間程とは・・・だからしない!」

「ウギャアアアア?!」

鞭?!鞭出してきたぞアイツ!どこの女王様だ!!てかどっから出した!!

「お、俺達にも・・・」

「俺達にもお仕置きをして下さい!!」

「喧しいですわ!」

「アングヤアアアア!!」

うわっ、鞭で打たれて嬉しそうな表情をしてやがる・・・マゾって奴か?とても理解出来ん。

「つて大概にしろ貴様あ！この1週間何をやらかしていたのだ！この学園の惨状は貴様の仕業か!!」

「何をつて、うーん……面倒なんで回想入りますね？」

「うおいつ！」

？

回想！以下ももえがノース校にぶつ込みをかけた日の事である!!

「バトル！《深海に潜む鮫》でダイレクトアタック!!」

『キシヤーツ!!』

「グハアツ?!そ、そんな雑魚で殴られてもライフは余裕……」

「速攻魔法《融合解除》！《深海に潜む鮫》の融合を解除して特殊召喚！《神魚》！《舌魚》!!ダイレクトアタック!!」

「ウツギヤアアアアアアアア?!」

江戸川 LP4000?2100?0

Win ももえ

「ば、馬鹿な！キング江戸川がこうもアッサリと……しかも《舌魚》で！」

「き、期待以上の実力だね浜口君。わずか二時間足らずで50人抜きを達成すると
は……」

「温い……」

「んっ？」

「温すぎますわ貴方達のデュエルは!!」

「うおっ?!な、なんだね急に!!」

「いくら大半モブだからって弱すぎるでしょう!デュエルを馬鹿にしているのですか
!!」

『ちよっ、モモ落ちつきなさいよ……』

「これが落ちついていられますかっ!!」

最初の方は時代ガン無視のデッキ使ってたからしょうがないとしても……別に無
双したいわけではなく後半だんだん自分で悲しくなってきたので、前編(EX3羽)で使っ

た【ダイダロス】にシフトして、それでも切り込みロツクとか瞬殺だったので四天王（笑）戦は梶木さんリスペクトの【要塞クジラ（？）】！それでも勝てちゃったので最後の最後でなんとなく作ったシリーズの【神魚】！やっといいい勝負になりましたわ!!まさか全勝するとは思いません!!

『じゃあ手を抜いてあげればいいのに……』

「嫌です、デュエルの中での手抜きはわたくしのポリシーに反します」

「は、はあ……」

このままでは万丈目様がここで50人抜きした所で大した成長にならない……仕方ありません、手段を選んじやられないんだ！（某赤髪七歳時感）

「ちよつとアナタ！コナン君でしたっけ……こつち来て下さい!!」

「え？えつと確かに江戸川だが……」

「はやくきなさい？」

「は、はいい?!」

?

「ふむふむ《デビルゾア》は欠かせない、と……でしたらこれとこれと……これも使ってみて下さいな、30分時間あげますのであとは自分で考えて組みあわせてくださいまし」

「は、はい!!」

あくもう、わたくし悪魔族とか専門外ですが、あんまり持ってない……

「あ、あの〜」

「よければ俺達も……」

コナ? 君にデツキ指導をしていたらいつのまにやら列が出来ていました、まだデツキが良くなったとは限らないのに……

「はあく……もう! こうなったらやけですわ! 全員見て差し上げます、かかってらっしゃいな!!」

「「「「おとおお〜!!」」」」

あ、そうだ。折角なので社長に送る面倒なデュエルデータ捕りも彼等にまかせましょ

うか、閉鎖的な学園ですから大丈夫でしょう！

『適當すぎだろ……』

《回想終わり！》

「とかやっていたらいつの間やらこんな感じに……」

「そ、そうか……カードあまり持って居なかったのではないのか？」

「社長にあれこれ理由をつけて送って頂きました。お代は師匠で」

「……世紀末は？」

「折角見た目いかつい方々が多いので、より万丈目様を精神的に追い詰められたら面白いな」と

面白いて、なんだか不憫になってきたぞ……

「てんめえ！何モモ様にタメ口聞いてやがんだあ!!」

「モモ様は閉鎖的なこのノースに新しい風を送りこんでくださった!」

「向上心の無い意識をも改革し！俺達をモヒカンにしてください!!」

「モモ様は、俺達の救世主だああ!!」

四天王○とか呼ばれてた奴等がやたら騒ぐ、慕われ過ぎだろ浜口……そしてその奴、貴様はモヒカンではない

「落ち着けてめえらあ!こつちのお方はモモ様にしご……強化を受けた俺達を全員倒してきたんだぞ!もしかしたら、あの最凶最悪のモモ様に勝てるかもしれん!」

「江戸川さん?最凶最悪とはどうゆう意味でしょうか(ニッコリ)」

「え、えと……」

「フン、茶番はもういい。ようは貴様とデュエルして勝てば、晴れて俺が代表となり十代の奴にリベンジ出来るわけだろう?さっさと始めようじゃないか」

「あらあら気が早い、わたくしも早く万丈目様と感じ合いたいのは山々ですが……デュエルの前にこれらをどうぞ」

唐突にカードパックを数個投げつけられた。おい、そのアホみたいな御輿を降りろ、下のモヒ共がそろそろつらそうだぞ……

「なんだこれは?」

「最初に皆様がいけませんでしたか?ランクが10上がる事にカードを支給しているの

ですよ。その方に相性良さそうな5枚とシンクロかエクシーズの希望した方の5枚、万丈目は現状一位なので調整用6パックとシンクロ・エクシーズ各3パックでどうでしょう」

「いらん！そして説明が長い!!この辺り読者読み飛ばすぞきつと！貴様から施しは受けんと……」

「まあまあ、KC社があなたのデュエルデータ51戦を元に支給したものですので、わたしは関与しておりませんから……それとも、そのデッキで勝てるつもりでしょうか?」

「うぐっ」

「そうじゃ万丈目。君の元々のデッキも預かっておった、濡れて駄目になったとゆうのは嘘でな。これらも合わせて浜口君に勝てる最高のデッキをつくり出すといい」

確かに……自力で集めたカードに少し愛着が湧いてしまったが、このままでは浜口相手はきついだろう。奴はとりあえずワンショットキルを仕掛けてくるしな(偏見)

「いいだろう……だが覚悟しろ！俺にデッキを編集させる猶予を与えたことを、その身で後悔させてやる！」

「フフフツ、そうでなくては……では本番は明日とゆうことにして、皆様!夕食の準備が出来てますわ、参りますわよ!食堂へ!!」

「「「おおおおく!!!」」」

そのままぞろぞろと回れ右して歩き出した、あちらが食堂か……腹も減ったしついで行くか。

「イヤツハアア!モモ様の夕飯だあ!!」

「これが楽しみで生きてるようなモンだぜえ!!」

「あめーよ!俺なんてこの為に朝から何も食ってないからな!!」

人気だなアイツの飯。確かに船の中で食ったが普通にうまかった……って奴が作ってるのか50人、いや教師その他合わせて推定6〜70人前を?!

「モモ様、今夜はなんでしよう」

「シチューですわ(人数多いから)」

《クツ、相変わらず無駄に旨い……》

・翌日！

「ではこれより！キング（推定）万丈目と、モモ様のデュエルを始める!!」

「「ワアアアアアアア!!」「」

「モくモ様！モくモ様！」

「今日も派手にお願います!!」

「ああ、俺もモモ様に吹っ飛ばされたい……」

「万丈目さん頑張れ〜！」

「期待してますよー!!」

「どうでもいいが、お前はクイーン○とは呼ばれないのだな」

「女生徒一人なのに女王なんてなんかおかしいでしょう?」

立ち振舞いが充分女王様だったのが……

とゆうか校長のジジイまでモモ様と呼んだぞ?!

「(フッフッフ、楽しみですわ) 全力で参ります、その方がよいのでしょうか?」

「当たり前だ! この後におよんで出し惜しみなぞ許さんぞ!!」

「それを聞いて安心致しました……デユエル開始の宣言をしなさい! コ?ンンン!!」

「江戸川です! で、デユエル開始イイイイ!!」

「デユエル!!」

ももえ LP4000

万丈目 LP4000

「先行はわたくしから! 《深海のディーヴァ》さん召喚!」

『は〜い』

《深海のディーヴァ》星2/水/攻200 インチキチューナー

「うおっ?!なんか喋ったぞこいつ!!」

『オイラと同じカードの精霊ねくん、ももえの姉御も精霊が見えるらしいわくん』

「チツ、煩い黄色・・・」

「?!」

今のが素か?あれが素なのか!?

「あ、いえなんでもありませんわ。オホホホ・・・ディーヴァさん効果発動!デツキから海竜レベル3以下を特殊召喚《海皇子 ネプトアビス》!!」

『やあモモ、僕の出番は久しぶりだね』

《ネプトアビス》 星1/水/海皇/攻800/鬼畜

「ネプトさんの効果を起動、デツキから《海皇の龍騎隊》を墓地に落とすことで《海皇の重装兵》を手札に加えますわ」

「フン、雑魚かと思えばサーチャーか。なかなか面倒な・・・」

「そして今!墓地へ送られた《龍騎隊》の効果発動!水属性モンスターの効果で墓地へ送られた時、海龍族モンスターを手札に加えます!《水霊神 ムーラングレイス》を手札

へー!」

「はあ?!なんでモンスターを召喚したのに手札が増えるのだ貴様あ!!」

「そんな事言われましても・・・」

『ねえ?』

『うん』

おかしい、そういえばコイツが扱っていたデッキはどこか可笑しいモンスターが多々居た気がするぞ・・・

「まあここから長いのでツツコミは自重してくださいな?レベル2のディーヴァさんにレベル1の《ネプトアビス》をチューニング、《たつのこ》をシンクロ召喚!」

『クワツ』

《たつのこ》星3/水/幻龍/攻1700/チューナー

「効果発動、手札のモンスターを素材にシンクロ召喚!手札のレベル2《重装兵》に《たつのこ》をチューニング、《アクセル・シンクロン》!」

『タアツ!』

《アクセル・シンクロン》星5/闇/機械/攻500/チューナー

「《アクセル》の効果、デッキから《ジャンク・シンクロン》を落としレベルを3上げますわ」

《アクセル・シンクロン》レベル5?8

「そしてこのモンスターは墓地に水属性モンスターが5体の時特殊召喚出来ます! 《氷霊神 ムーラングレイス》を特殊召喚!!」

『ヒュウウウウ・・・』

《氷霊神 ムーラングレイス》星8/水/海竜/攻2800

「こつとも簡単にレベル8のモンスターを・・・」

「《ムーラングレイス》の効果! 召喚成功時に相手の手札をランダムに2枚捨てる!!」

『いやくん、イケズ!!』

「はあ?! さつきから無茶苦茶な効果ばかりではないか!!」

だが捨てられたカードは《おじやまいエロー》と《復活の福音》、後者はともかく前者を当てられたのは不幸中の幸いか・・・

「レベル8となった《アクセル・シンクロン》と《ムーラングレイス》でオーバーレイ!

起動せよ、大海にそびえし我らが居城！《魔海城 アイガイオン!!》

『ドン★!!』

《アイガイオン》★8 / 水 / 機械族 / 攻? / 守備3000

「なんだこれは?! 《ディーヴァ》1枚から2枚ハンデスに加えランク8のエクシーズ召喚だと?! インチキ効果ばかりではないか!!」

人のツツコミも無視で淡々と進めおつてからに……しかも魚や人魚まるで関係なさそうな城が出てきおつたぞ?!

「カードを1枚伏せてターンエンドしますわ」

ももえ H4

《アイガイオン》(守)

セツトカード

最初は驚いたが守備力3000が1体に伏せが1枚か、手札は削られたが超えられな

い壁ではないな……

「(……まさかこのデーヴアさんムーラングレイスの流れが決まるなんて、あつち(前世)じゃやろうと思つた時に限って大体ヴェーラーかうさぎ飛んで来たんですよね……アビスマンダーさんも入ってはいるからランク8出せないことは無かつたのですが、正直あまり出さないから《アイガイオン》以外用意してなかつた……)」

「俺のターン！まずは《ナイトショット》を発動！伏せカードをチェインさせずに破壊する！」

「残念つ、《サイクロン》でしたく」

むっ、確か枕田が防御がぎるだとは言っていたがまさか伏せ除去で伏せ除去当てるハメになるとは……

「まあいい、俺はフィールド魔法《ユニオン格納庫》を発動！」

「?!」

「このカード発動時の効果処理として、デッキから光属性機械族の《A―アサルトコア》を手札に加える!そして《フォトン・スラッシャー》を特殊召喚!」

『フンッ』

《フォトン・スラッシャー》星4/光/戦士/攻2100

「そして《A―アサルトコア》を召喚する!!」

『ギャゴォ!』

《A アサルト・コア》星4/光/機械/攻1900

「この瞬間《ユニオン格納庫》の効果発動!デッキより召喚・特殊召喚された光属性機械族モンスターに装備可能なユニオンモンスターデッキから装備する!《B―バスター・ドレイク》を合体!そして俺は《フォトン・スラッシャー》と《A―アサルト・コア》2体の光属性モンスターでオーバーレイ!姿を見せよ《武神帝―ツクヨミ》!!」

『ハッ!!』

《武神帝―ツクヨミ》★4/光/獣戦士/攻1800

「ぶっ、武神ですか・・・」

「そしてこの瞬間！装備対象不在で墓地へ送られた《バーバスター・ドレイク》の効果発動！デッキから《Cークラッシュ・ワイバーン》を手札に加える！」

「（もしやつ、この流れは……）《アイガイオン》のモンスター効果発動！オーバーレイユニットORUを1つ使い、相手のEXデッキのカードをランダムに除外！除外モンスターと同じ数値の攻撃力を得ますわ!!」

EXデッキのカードを除外だ?!こちらの狙いに気づかれたか……だが確率は所詮14分の1だ、よほどのことがない限りは大丈夫だろう。

「では……そのカードを除外して下さいまし」

ソリッドビションでランダムに配置された裏側のカードを浜口が指さす、指定されたカードは……

《F・G・D》星12／闇／ドラゴン／攻5000／守5000

「……………」

《アイガイオン》攻??5000」

「おいこら、引きが良すぎないか……」

「あらあら……」

こちらの展開に全く支障はなくなったが、代わりに攻撃力5000の化け物になってしまった。

「さつすがモモ様あー！」

「神に愛されてるぜ!!」

「お、オホホホ……当然ですわ。わたくしは勘が鋭いのですよ? (エクシーズモンスターかアレ狙いでしたのに、ついているやらないのやら……)」

「まあしょうがない、勝負は時の運でもある。カードを1枚伏せ《ツクヨミ》の効果発動、全ての手札を捨てて2枚ドロ―!そしてえ!このモンスターはフィールドおよび墓地から特定のモンスターを除外することで特殊召喚出来る!合体しろ!《アサルト・コア》《バスター・ドレイク》《クラッシュ・ワイバーン》!!」

SE (へガシャン!ウイーン!ガッシャン★)

「融合★合体《ABC―ドラゴン・バスター》!!」

『『ジャキーン!!』』』

《ABC—ドラゴン・バスター》星8／光／ドラゴンっぽい機械／攻3000／

おいこら作者、地の分考えるの面倒になったからってSEで誤魔化すな。

「うっ、凄いの出てきましたわね・・・（何渡してるんですかKC社アアアア！普通に強くないですかあの動き!!）」

「すげえ！モモ様が手札1枚から大型モンスターを展開したのに対し、こっちも実質2枚からあんな格好イイモンスターを繰り出してきたぞ!!」

「すげーぜ万丈目!」

☒万丈目さん☒だ! 《ドラゴン・バスター》のモンスター効果! 手札を1枚捨て、貴様の《アイガイオン》を除外してくれる!!」

「でしたら《アイガイオン》の効果を起動! 万丈目様の除外されているファイブ・ゴッド・ドラゴン《F・G・D》をEXデッキに戻すことで、戻したモンスターと同種のモンスターである《ABC ドラゴン・バスター》を破壊しますわ!!」

「なんだと?! クソツ!!」

《ドラゴン・バスター》には分離能力があるが、それは相手ターン中のみ。やってくれないか……

「だが《アイガイオン》も破壊される事には代わりない！消え去れデカブツ!!」

『ドオオオン……』

双方が放った攻撃で結果相打ち、フィールドは静かになってしまった。

「バトル！《ツクヨミ》でダイレクトアタックだ!!」

「きやつ……」

ももえ LP4000?2200

「カードを1枚セットしてターンエンド」

万丈目 H0

《武神帝ツクヨミ》(攻)

セットカード

セットカード

「もも様に先制するなんてすげーぜ」

「だが手札は0、フィールドにはモンスター1体に伏せが2枚だけ……あれで耐えき

れるのか？」

フン、奴の攻めが危険な事は百も承知だ。

「こちらのターンですわね、ドローしてつと……」

「モモ様の初攻撃ターンだぜえ！」

「俺達は大体1回目の襲撃で詰んでたんだよな……」

「ああ、思い出しただけで身震いするぜ……」

やっぱりワンショットの嵐だったのか、中等部時代のロックバーン戦術はどこへ行ったのやら……まああれはあれで相手したくないが

「まずは《サルベージ》、攻撃力1500以下のディーヴァさんとネプトさんを回収します。そして再登場《深海のディーヴァ》を召喚！」

『ハッ、まさか過労死させる流れ!?!』

「安心しろ……リバースオープン永続罫《デモンズチェーン》！また無茶苦茶されたらたまらん、効果は封じさせてもらう!!」

『うひゃっ?! やっぱ狙われ易いよねわたしの効果……』

これでの前のターンの二の舞は防いだが……

「まあ! 女性に対して鎖で拘束とは……万丈目様にそんな趣味が?!」

「誤解を招くような発言は控えろ!!」

「なにを照れることが……わたくしはそんな貴方でも受け入れて差し上げますわよ?」

「はあ……もういいから、早くターンを進めろ」

人前でこいつと会話するだけで疲れる……

「はい、手札の《水精鱗マーメイ》—メガロアビス》の効果を発動! 水属性モンスターを2体捨てて特殊召喚!」

『ウグアアアアツ!!』

《メガロアビス》星7 / 水 / 海竜 / 攻2400

「出たあ!」

「殺意の塊、メガロさんだあ!!」

たしかに殺意は尋常じゃないな。船の中で暇潰しに何度かデュエルしたがアイツで大体やられたのは苦しい出だ……

「メガロさんが場に出たので《アビスケイル―ケートス》を手札に加え、水属性モンスターの効果で墓地へ行つたネプトさんの効果！墓地より「海皇」モンスターを特殊召喚！浮上せよ大海統べし覇龍！《海皇龍 ポセイドラ》!!」

《ウガアアアアツ!!》

《ポセイドラ》星7／水／海竜／攻2800

「こつちもあつさり最上級モンスターを2体も繰り出してくるとは……つてさせんわ！リバースオープン《スクランブル・ユニオン》！除外されている3体の光属性・機械族・ユニオンモンスターを再発進！《アサルト・コア》！《バスター・ドレイク》！《クラッシュ・ワイバーン》!!」

『『ジャツキーンツ』』

《アサルト・コア》守200

《バスター・ドレイク》星4／光／機械／守1800

《クラッシュ・ワイバーン》星4／光／機械／守2000

「むむつ、そうゆう罨でしたか……」

「さらにこの瞬間! 《ユニオン格納庫》の効果により、デッキから《強化支援 メカ・ハビーアーマー》を《アサルト・コア》に装備する! このカードを装備されたモンスターは相手の効果対象にならない!」

「すげえ! 相手ターンにモンスターを3体展開しやがったぜ!!」

「けどなんでこのタイミングで発動したんだ?」

「《ケートス》は一度だけ罨カードを無効に出来る装備魔法、効果を覚えられていましたか……) だったらこうです! 《メガロアビス》の効果! 仲間1体を贖にして2回の攻撃が出来る! ディーヴァさんごめんなさい」

『鎖締めよりマシよ……』

「バトル! 《メガロアビス》で《クラッシュ・ワイバーン》! その後《バスター・ドレイク》を攻撃!!」

『シャシャシャシャッ!』

『『ギャゴオオオ……』』

うわっ、機械をバリバリやってやがるあの鮫。しかも嫌な順番で攻撃してきおつて……

「破壊された《バスター・ドレイク》の効果！ デッキからユニオンモンスターである《W—ウイング・カタパルト》を手札に！」

「《ポセイドラ》で《ツクヨミ》（攻1800）を攻撃！ くタイダルウェブ>>!!」

「どっかで聞いたぞそれ！ ぐおおっ!？」

万丈目 LP4000?3000

「あの猛攻を耐えきった！」

「さすがじゃ万丈目！ ワシの目に狂いは無かった……」

「だったらこう致しましょう……レベル7の《メガロアビス》と《ポセイドラ》でオーバレー！ 深き海に眠りし水精の王、悠久の時を越え今目覚めん！ エクシーズ召喚！ ランク7 《水精鱗—ガイオアビス》!!」

『又オオオオン!!』

《ガイオアビス》★7/水/水/攻2800

「今度はランク7のエクシーズモンスターか!」

「フフフ、今度は「水精鱗」の最強モンスターですわ《アビスケイルーケートス》を装備してターンエンド!」

ももえ H2 LP2200

《ガイオアビス》+《アビスケイルーケートス》(攻3600)

相変わらずのノーガードか、なめくさりおって……船ではEXデッキのモンスターは出し渋られたから効果は全くわからんが、ただかモンスター1体で俺を倒した気になっっている顔は気に食わん!

「俺のターン!よし!《マジック・プランター》発動!用済みの《デモンズチェーン》を破棄して2枚ドロ!!墓地の《スクランブル・ユニオン》の効果発動!このカードを除外して《バスター・ドレイク》を手札に戻す!」

「(墓地発動はケートスの範囲外……なんかいつもマジプラ引いてませんかねこの方)」

《ユニオン格納庫》の効果で素材を揃えたいが・・・生憎《ドラゴン・バスター》などのカードはデッキに1枚ずつしかない、《カタパルト》もユニオンする側だ。ならば戦術を変えるのみ！

「《バスター・ドレイク》を再び召喚し、魔法発動《ライトニング・チューン》！」

「らっ、《ライトニング・チューン》?!」

「このカードは！フィールドのレベル4光属性モンスター1体を、チューナーにするこ
とが出来るのだ！《アサルト・コア》をチューナーにし、《バスター・ドレイク》とチュ
ーニング!!眩き光もて、あの腹黒女の横暴に終幕をもたらせ！シンクロ召喚！光臨せよ
《ライトエンド・ドラゴン》!!」

『ギャオオオオオツ!!』

《ライトエンド・ドラゴン》 星8 / 光 / ドラゴン / 攻2600

「ちよつと！誰が腹黒ですか失礼な!!こんなに正直に生きてるのに!!! (あのユニオン3
種でビートしてるだけで結構強いんじゃないか・・・)」

「貴様以外の誰がいるのだ・・・呼吸をするように人にちよつかいをかける輩が被害者
面するな！墓地へ送られた《アサルト・コア》の効果で《ヘビーアーマー》を、《バスター・

ドレイク』の効果により《Zーメタル・キャタピラー》を手札に加えておく」

「折角のシンクロモンスター召喚で張り切っている所悪いのですが……《ガイオアビス》はORUを持つ限りレベル5以上のモンスターは攻撃できませんわよ?」

「なんツ?! ……チツ 《手札抹殺》を発動、2枚捨て2枚ドロ」

「あらお揃い、2枚ドロ! (教えるタイミグ悪かったですかね……)」

「フツ、フィールドにレベル8以上のシンクロモンスターがいる時こいつは特殊召喚が出来る! 来い、《シンクロン・リゾネーター》!!」

『リゾツ!!』

《シンクロン・リゾネーター》星1/光/攻100/チューナー

「こつ、今度はリゾネーターですか?!」

「更に墓地の《カーボネドン》の効果を除外して発動ツ! デッキより《エビルナイトドラゴン》特殊召喚だ!!」

『キュイイイイイツ!!』

《エビルナイトドラゴン》星7/闇/ドラゴン/守2400

「えく、いつの間に墓地へ……(ドラゴンデッキじゃ無くなった? そいつは錯覚でしたわ)」

「フツ、先の《ドラゴン・バスター》の効果でな。レベル7のエビルナイトに《シンクロン・リゾネーター》をチューニンググツ！闇をもて、あの馬鹿の恐慌に終焉を！シンクロ召喚！《ダークエンド・ドラゴン》!!」

『グヲオオオ……』

《ダークエンド・ドラゴン》 星8／闇／ドラゴン／攻2600

「すつげえええ!!ターンの最初は手札1枚だったのに」

「あんなシンクロモンスターを2体も出して来やがった!なんてえ野郎……いや、なんて御方だ!!」

「当然だ!何故なら俺は……; 万丈目さん、だからな!!攻守を500下げ《ダークエンド》の能力を喰らえ!<ダーク・イヴァポレイション>!!」

「ここまで盛り返すとは意外でしたが……ざくんねんつ、《ガイオアビス》の効果発動!ORUを1つ消費し、攻撃力が自分よりモンスターの効果を一度無効にする!<サイレント・ロアー>!!」

『ウゴゴ……』

「んなつ?!そちらが本命の効果か!!」

「このままでは攻撃力の差で押しきられる……ならばっ！」

「俺はっ! 《ライトエンド》と《ダークエンド》でオーバーレイツ!!」

「はいっ?!」

「エクシーズ召喚! 龍神よ来たれ 《聖刻神龍 エネアード》!!」

《聖刻神龍 エネアード》★8 / 光 / ドラゴン / 攻3000

「《エネアード》の能力! 手札のモンスター 《聖刻神龍 シユウドラゴン》を生け贄にし、相手のカードを破壊する! 当然《ガイオアビス》を破壊だ! くサクリファイイス・バニツシユ >!!」

『ヌガアアアアアツ!!』

「がっ、ガイオさんが!」

「そして《シユウドラゴン》の強制効果、デッキから《ギャラクシー・サーペント》でも呼んでおくか」

「この瞬間! 手札の《ドラゴンアイス》の特殊能力が発動致します! 相手がモンスターを特殊召喚した際、手札1枚を破棄して特殊召喚出来る! 自身を手札コストにおいでませ

！」

『コオオオ・・・』

《ドラゴンアイス》星5／水／ドラゴン／守2200

クソツ、そんなモンスターを手札に忍ばせていたのか！

「バトルだ！《エネアード》で《ドラゴンアイス》を攻撃!!」

「破壊されます・・・助かりましたわ《ドラゴンアイス》さん」

「ターン終了だ・・・」

万丈目 H0 LP3000

《エネアード》(攻)

《ギャラクシー・サーペント》(守0)

「ではわたくしのターン、《バブルマン》召喚！」

『トオツ!!』

《バブルマン》星4／水／戦士／攻800／引ける

「召喚時に場にカードがないため2枚ドロ―！（原作効果便利過ぎですねえ）フフツ、続けて《サイレント・アングラー》を特殊召喚しオーバーレイ！おいでませ《No. 101 S・H・Ark Knight》！」

『ズーン……』

《S・H・Ark knight》★4／水／水／攻2100

「《Ark knight》の効果を発動します！ORUを2つ使い、相手攻撃表示モンスターを直接ORUに変換！《エターナル・ソウル・アサイラム》!!」

『ギョオオオオ……』

「《エネアード》がこうも簡単に……」

《復活の福音》が墓地にあつたが、吸収されてはまるで意味がないではないか！

「更にRUMランクアップマジック《リミテッド・バリアンズ・フォース》発動！ランク4《Ark knight》を素材にオーバーレイッ！今こそ真のお姿を覧あれ！《S・H・Dark knight》!!」

「Knight!!」

『イラツとくるぜ・・・』

《S・H・Dark Knight》★5／水／水／攻2800

「はっ?なんか言つたぞこいつ・・・」

「申し訳ありません、ダークナイトさんは言語が難解ですので・・・あまり気にしない方向で」

『イラツとくるぜ』

「お、おう・・・(言語?言語ってなんだったか)」

「とりあえず効果いきます、《ギャラクシー・サーペント》をORUに変換!《ダーク・ソウル・ローバー》!!」

フィールドがあっさりがら空きにされてしまった、こっちの騎士みたいな方は守備でも吸えるわけか・・・

「ではダークナイトさんでダイレクトアタック!《デモンズランス》!!」

「ぐおおっ?!」

万丈目 LP3000?200

「おいしい、《クリスタル・ゼロ・ランサー》入れるEXの枠あれば勝ちでしたのに）ター
ン終了ですわ」

ももえ H1 LP2200

《S・H・Dark Knight》(攻)

「万丈目さんも善戦はしたが、残りライフ200か」

「ここまで、か。奴ならモモ様に勝てる見込みがあると思つたのじゃが……」

「フフフツ、どうですか？わたくしのエースの御力は。ダークナイトさんを突破出切れ
ば万丈目様の勝ちですよ？」

『なんて言うと思つたか！』

アイツも手札1枚、伏せカードも無しとなればそうだろう。だがこちらもは手札0、
しかもあのモンスターは枕田戦を観た限り、自己蘇生とライフ回復能力があつたハズ
だ……

「いいだろう、ほえ面かせてやるわ！俺のツターン!!」

「(流石に手札1枚で突破はきついでしようし、これで勝てたら本気で……)」

「まだチャンスはあるか……《貪欲な壺》発動！《ドラゴン・バスター》《ライトエンド》《ダークエンド》《エネアード》《ヘビーアーマー》をデッキに戻して2枚ドロ―！」

「またドロ―カードですか……それで、良いカードは引きましたか？」

「フツ、墓地の《アサルトル・コア》《バスター・ドレイク》《クラッシュ・ワイバーン》を除外し再発進！《ABC―ドラゴン・バスター》（攻3000）!!」

『『ジャッキイイン……』』』

「（これはしようがないですね、だけど1体だけなら……）」

「《フォトン・サンクチュアリ》を発動！攻2000・守0の光属性トークン2体を守備表示で特殊召喚！」

「折角の高攻撃力トークンも、守備表示じゃなあ」

「……浜口、貴様には感謝してなくもない」

「えっ？」

「1週間じつじつくりカードを探せたおかげで、《こいつ》に出会うことが出来たからな！」

「（ま、まさか……）」

「俺と一緒に……闘ってくれ! 2体のトークンを生け贄に《光と闇の竜》を召

ライトアンドダークネス・ドラゴン

喚!!」

『グルルル……』

《光と闇の竜》星8／光（闇）／ドラゴン／攻2800

「(本当に出て来た?! いや確かに万丈目様といえば《光と闇の竜》かな〜って師匠からカード頂いて、高めの氷山に仕込んでおきましたけれども……ここで引きますか?!)」

『グゴオオオオオツ!!』

「あ、あら〜……なにか怒っておられます?」

「フツ、山頂はもの凄く寒かったそうだ……貴様にたっぷりお礼がしたいとき! バトルだ! まずは《バスター・ドレイク》で《Dark knight》を攻撃! <ABC
ーグレート・デストラクション>!!」

『ぐわあああああつ!!』

ももえ LP2200?2000

「うっ、ダークナイトさんの効果……破壊された時復活し、攻撃力分のライフを……」

「この瞬間! 《光と闇の竜》の効果発動! 攻守を500下げ、あらゆる効果を無効にする!! 《Dark knight》には退場願おうか!!」

『ギャオオオオツ!!』

『俺はこれほどまでに誰かを憎（ry）』

《光と闇の竜》（攻2800?2300）

「終幕だ! 《光と闇》のダイレクトアタック! <シャイニング・プレス>!!」

「きゃあああああつ?!」

ももえ LP2000?0

WIN 万丈目

「そこまで! 勝者万丈目!!」

「「うおおおおおつ?!」」

「ま、まさかあの凶悪・無敗・最凶のモモ様が敗北するなんて・・・」

「信じられないぜえ」

「流石は万丈目さんだ!」

「万丈目サンダー?」

「それだ! 万丈目サンダー!!」

「「サンダー! サンダー! 万丈目サンダー!!」」

ふんっ、昨日とは態度がまるで逆だな世紀末集団めが……まあいい、これedyouやく雪辱を晴らせ……

「ふ、ふふふふふつ、ウフフフフフ」

「ど、どうした浜口……」

ヤバイ、負けたショックで可笑しくなったのか？

「これです……これなんですよわたくしが求めていたデュエルとは!!」

「お、おう?!」

「一方的なワンキルや制圧でなく!互いが互いのギリギリを引き出し合う……血沸き肉躍る闘い!こうゆうデュエルが出来る方を求めていたのです!!やはり万丈目様はわたくしが睨んでいた通りの御方でしたわ!!」

「ま、まて落ち着け近い……」

ものすごい勢い迫ってきおった、なんだこいつは戦闘狂みたいな発言を始めて……

「さあもつと！もつとお互いを感じ合いましょう！さささ、早く構えて!!」

「なんなのだ貴様は！代表は俺で決まりだろうが?!」

「そんな些細な事はどうでもいいのです！わたくしとデュエルを・・・もつとデュエルしろおおおお!!」

「うわああああ?!勘弁してくれええええ!!」

結局、このあと滅茶苦茶にがむしやらにデュエルするハメになり・・・結果俺と浜口の勝率が五分五分になったのをみかねた一之瀬の爺（校長）が本校にタツグデュエルの案を出すことにしたそうなの。

EX5羽 the JOIN side of darkness 2

このお話は、本編の19羽と言い張ったアレの続きである。なお内容についての苦情その他もろもろは駄作者かジュンコ君に申すように！

「いきなり誰に向かって話しているの?！」

「フツ、失礼?みどり女史・・・貴女の美しさに僕の中の何かが現状を説明しろ、と叫ぶんですよ」

「はぁ・・・」

つてわけで前回(?) マックを持ち帰ってここでは書けないようなあんな事やらそんな事やらを試そうと目論んでいる時に、僕の事を目ざとく発見しやがってくれたのがこの響みどり女史。

一応本校の講師らしいのだが現在アメリカ・デュエルアカデミアに出張・・・? まあなんやかんやで居座っている

『細かい所面倒だからって曖昧にハシヨリ過ぎだヨ!』

前回から間が空いたから説明しよう!こいつはゆつきー、《幽鬼うさぎ》の精霊だ。デツキから抜いても抜いても入ってくる性別不詳である、本人(兎)いわく男の娘らしい

『流石はブッキー!わかるようでわからん!!』

こっちはレン《真紅眼の黒竜》の精霊、呼び名は縮めただけだが本人は気に入っている模様。普段は《ロード・オブ・ザ・レッド》みたいな格好をしている、口調でギリギリわかるが女子だ!・・・クツ、男だとおもっていた(前世時代)

「.....」

「どうされたみどり女史、そんなに虚空を見つめて」

「あ、いや・・・なんでもないわ」

『黒髪・・・闇・・・ククククツ』

こらブルト、女性の髪をそんな風に見つめるなんて失礼だろう?

こっちはブルト《The suppresion PLUTO》のお憑きである。

癒し杵、異論は認めない。

「それで？闇のデュエルとやらをして、彼女……レジー・マッケンジーが意識不明になったので介抱しようとした所に」

「丁度みどり女史が現れたんですよ、いや、丁度良かった良かった！女性教諭であるあなたの元なら心配無い！全く持ってないっつっ!!」

「もの凄く嘘臭いわね……ヤリ手で有名な天上院吹雪君？」

「はっはっはっ、ナンノコトヤラ……」

正直、こんな美人の先生の部屋を知れただけで十分なアド……いやなんでもないよ？

現在みどり女史の部屋にお邪魔してマック、レジー・マッケンジーを介抱しつつお話中である。

「それで……そろそろ本題に入りましょうか響みどり女史」

「あら、彼氏なら居ないわよ？」

「本当かい！年下の王子様はどうですか?! って違う!!」

『何?! ブッキーなら本題とはナンパ関連では無いのか?!』

ハモるなそこ！クツ、このお方なかなかやりますね・・・

「いえ、疑っているわけでは無いのですが・・・あまりにも現れるタイミングが良すぎたものですから」

『やだ、真面目なブツキーレアい・・・』

「・・・」

「・・・」

『クククツ・・・』

「ふう、隠していてもしょうがないわね。ちよつと長話しても宜しいかしら？」

「安心してください、美しい方の長話なら24時間耐久でも可です」

『どこまで本気なんだろうこいつ・・・』

「フフツ、全くね？じゃあちよつとだけ私の事情を知って貰いましょうか」

そんなわけでみどり女史の過去語り、妹がいる僕にとつては涙無しでは語れない事情だったけど・・・全部書いてたら一羽丸々使いかねないから話を聴いた上でおおまかに説明するよ！

『やっぱり手ぬきかい……』

3年程前、弟さんである響紅葉史がデュエルワールドチャンピオンシップの直後に意識不明で発見されたらしい。(世界王者の弟さんとか凄いよね)その時、彼の相棒的ポジションのカードだった《E HERO ジ・アース》も無くなつてしまったとか……みどり女史は弟さんの意識不明の原因を探るべく、本校ではなく事件のあったアメリカアカデミアに無理言つて講師として就任し独自に捜査を進めていたそうさ。

『フンフン』

その調査結果、目撃証言からなんと……マックが怪しいと睨んでいたそうさ、現に彼女が夜歩きした日は人が行方不明になる事件が何件も続いたとか。

『まじかつー!』

しかし自分が睨んでいる状況では全く尻尾を見せる気配がなかったとかで諦めかけていた所、僕達のデュエルに遭遇した……とゆうことだそうさ。

『なるほど……ククツ』

「なるほど、つまりマックは漸く掴んだ手掛かり……てなわけですね」

「そうゆうこと、だから目が覚めたら拷問なりして」

『このおねーちゃん目がマジだよ』

「おっと、焦る気持ちはわかりますが暴力はいけませんよ暴力は」

そんな会話をしていたらマックが突然目を覚ました。辺りをキョロキョロしている動作がちよつと可愛い

『さいですか……』

「ココは……ドコ？」

「こんばんわ、レジー。ここは私の部屋よ」

「?! Mrs. ヒビキ！」

「事情は天上院君から聞いているわ、良かったら話をさせてくれない？」

もつとガンガン攻めると思ってたら流石に大人の対応だね

「テンジヨウイン？フブキング？私が彼と何を?!」

「おやおや、何を言っているんだいマック！さつきまであんなに激しくお互いを感じ合っていたじゃないか!!」

『誤解を招く言い方は止めなさい』

『何故ポーズをとるんだヨ……』

「ゴホンツ、……ここにいる天上院吹雪君と闇のデュエルをしていたじゃない、その

「事よ」

「闇の．．．デュエル．．．？ナンデスカそれ．．．」

「しらばつくないで！」

「ヒツ?!」

様子がおかしい、明らかに挙動不審だし彼女が纏っていた刺々しい雰囲気も納まつている、これはもしかや．．．

「待ったみどり女史！彼女はもしかや、闇のデュエルに関する記憶が無いのかもしれない」
「????」

「やっぱり．．．闇のデュエルの実行犯は彼女でも、黒幕は他にいるといった所かな」
『なんで当たるんだよ、今完全に勘で言ったろ』

『まあブツキーだし』

「そんなつ、折角つかんだ手掛かりなのに．．．」

この時、インターホンから音が鳴り来客のお知らせをした。誰だこんな時間に女史の部屋に押し掛けるなんて非常識な．．．おや、彼はもしかや

『ブツキーが常識について語る?』

「ああ、いいのよ天上院君……私が出るから……」

「いやみどり女史、僕が出よう。手掛かりが向こうからやって来たかもしれない」

「えっ? なんの事?」

《外へ行くよっ》

「ハローフブキング、まさかMrs. ミドリの部屋を訪ねたらユーがいるなんてネ……
驚いたヨ」

「……はあ」

『ブツキー顔、顔!』

『男相手だからって露骨に顔歪め過ぎだヨ!』

そんなわけで手掛かり……マックと同じイヤリングをしたデイビット・ラヴが向こうからホイホイやって来ました。いやこうもわかりやすいと逆に笑えないね

「(男の台詞なんて聞きたくないから言うけど) マックを連れ戻しにきた感じでいいのかな?」

「ほう……話が早いじゃないか! 正確にはプラネットの回収が主だがナ!」

「任せろって言われたけど大丈夫かしら……」 ↑ I N 物影

「フブキング……」

「渡せと言われて渡す馬鹿はいないだろう? さつさと始めようか」

「……クククツ、いいだろう体感するがいいサ! 闇のデュエルをナ!」

「デュエル!!」

吹雪 LP4000

デイビット LP4000

マックの時と同じく辺りが息苦しい闇に包まれる、まあ夜は元から暗いしあまり気にならないだけとねっ!

『余裕だねえ、アンタ……』

「(さて手札は……) おいおい、これじゃあミーの勝ちじゃないカ!!」

「(あの自信……キーカードが揃っているようね)」

「僕のターン……じゃ、終らせよつか」

「へっ?」

「魔法カード《真紅眼融合》を発動! デツキのモンスターを素材に召喚モンスターを

「真紅眼の黒竜」扱いで融合を行う!!」

「(デツキ融合ですって!?)」

「デツキの《真紅眼の黒竜》と《真紅眼の凶星竜—メテオ・ドラゴン》を融合! 我が友に宿れ、破滅の流星! 新たな驚異となりて万象を灰塵と化せ!! 融合召喚! 《流星竜—メテオ・ブラック・ドラゴン》!!」

『ギャゴオオオオオツ!!』

《流星竜—メテオ・ブラック・ドラゴン》星8/闇/ドラゴン/攻3500/

「いきなり攻撃力3500……ってぎやあああああああつ?!」

「デビビット LP4000?2600

「熱い……熱いぞお……いつ、一体ナニガ……」

「《流星竜》のモンスター効果、デツキから「レッドアイズ」モンスターを墓地に送って

その元々の数値の半分のダメージを与える攻撃力2800の《レッドアイズ・ブラック・メタルドラゴン》を墓地に送ったのさ更に手札から《黒炎弾》を発動！《真紅眼の黒竜》の元々の攻撃力分のダメージを与える」

「(そうか、融合体は《真紅眼の黒竜》として扱うと言っていた・・・)」

「ま、待ってくれ・・・慈悲を・・・」

「悪いけど、僕は男には容赦ないんだ。闇の炎に抱かれて消えろっ!!」

「ウギャアアアアアアアアアッ?!」

デイベット LP2600?—900

WIN 吹雪

「うくん、1度言ってみたかったんだよねこれっ!」

『リ?ン様かっての!』

デイベットへチン・・・

「(しゆ、瞬殺だー?!)」

「ふう、これで彼も闇のデュエルに関する記憶が消えてるならマックに問い詰めても無駄とゆうことこの証明になるね」

『記憶どころか命の灯が消えてそうなんだケド・・・』

『いや、やり過ぎちやつたかな?』

「天上院君・・・!」

「みどり女史、彼もマックと同じイヤリングから闇の症気が出ていました。同じ人物から渡されたモノでしょう・・・。黒幕はソイツかもしれない」

「え、ええ・・・そうなの」

「しかしどうやってその黒幕を特定するかですね・・・マック、何か思いたある節はない?」

「え、エツト・・・」

「彼女に聞いても無駄なのでしょう?もう遅いしレジーは家に送り届けましょう、Mr. マッケンジーも心配してらっしゃるでしょうし」

ウーン、仕方ないね今夜は大人しく・・・

「い、嫌！あんなバケモノの元に戻りたくナイ!!」

「・・・バケモノ？」

「Mr. マツケンジューのこと？貴女のお父さんよね」

「い、いや・・・何故だかワカラナイけど嫌!!アイツに会いたくナイ!!」

「これはもしや・・・黒幕がはつきりしたかもね

「そいつは困ったなく君を父親の元へ連れ戻すのが僕らの仕事なのに・・・」

「かまへんかまへん、無理矢理連れ帰ってやろうや」

突然、怪しい二人組が夜の闇から現れた・・・今日はこんな人物ばかりみるね

「だ、誰っ?!」

「おやおやく？アカデミアの講師ともあろう人が僕らをご存じない？このプロデュエリストのインセクター羽賀と!」

「ダイナソー竜崎をなあ!」

「知らない(キツパリ)」

「て、天上院君……」

なんか明らかにモブっぽい男二人がドヤって自己紹介してきたのだけど……プロデュエリストって言われても全く知らないよ？下位リーグの方かな？

「き、貴様あ！この元日本チャンプと準チャンプたる僕らを知らないだとお?!」

「(インセクター)羽賀、ダイナソー竜崎、元全日本チャンプと準優勝だけど現在は落ち目のプロデュエリスト。でも最近また勝ち星を取り戻してきたとか……」

「いや男に全く興味ないんで。なんですかご用件は、そこにくたばっている男のお仲間って事でいいんですか?」

「ちよつと違うけどねえ……その米ガキがしくじったらその女と一緒に回収してほしいって依頼を受けたのさあ!」

「プラネットシリーズと」

「あくはいはいわかりました」

「せめて最後まで喋らせえや!どんだけ男に興味ないねん!」

また男の相手か……せめて刺客が女子だったらモチベーションも上がるのにねえ

「天上院君！相手はプロ二人よ、私も一緒に・・・」

「ヒョヒョヒョヒョ！だったらアンタの相手は僕がしてあげるよ美人のお姉さん!!」

「大丈夫ですか？そつちの眼鏡は小狡い感じがプンプンしますが・・・まあこつちも似たようなものか」

「ムツキー！たかが学生風情がなめた口を訊きやがってー!!」

「世間の厳しさを教えてやるわ！羽賀、いくで！」

あ、彼らもあのイヤリングしてるじゃないか・・・依頼されたとか言ってたけどすっかり操り人形なんじゃないのかい？

「デュエル!!」

「デュエル!!」

竜崎 LP4000

吹雪 LP4000

また闇の症気でてきたよ、もうすっかり慣れてしまった緊迫感をまるで感じない。

「先行はワイヤ！ワイのターン！（良かった、これでさっきの先行ワンキルはないな・・・）まずは《天使の施し》！3枚引いて2枚捨てるで、よっしや《予想GUY》と《死者蘇生》発動！デッキと墓地から《二頭を持つキングレックス》を2体特殊召喚！！」

『グウオオツ!!』

『グウオオツ!!』

《二頭を持つキングレックス》星4／地／恐竜／攻1600／

《天使の施し》で墓地に送ったのか、貴重な《死者蘇生》を使ってまでモンスターを2体並べた・・・まさか！

「いくでえ！ワイは2体の恐竜族モンスターでオーバーレイ！蘇れ太古の覇者！ランク4 《エヴォルカイザー・ラギア》!!」

『ウガアアアツ!!』

《エヴォルカイザー・ラギア》★4／火／ドラゴン／攻2400／

「やっぱりラギアか・・・厄介な奴が出てきたね」

「まだや！《レスキュー・ラビット》を召喚し効果発動！デッキから《大くしやみのカバザウルス》を2体特殊召喚！」

『つぶえつくしよい!!』

《大きくしやみのカバザウルス》星4／水／恐竜／攻1700／

そのくしやみはハリケーンにも匹敵する……

「こいつらでもオーバレイ！ さあこい太古の帝王！ 《エヴォルカイザー・ドルカ》!!」

『ギャオオオツ!!』

《エヴォルカイザー・ドルカ》★4／火／恐竜／攻2300／

「カードを1枚伏せてターンエンドや！ どっからでもかかってこんかい!!」

竜崎 H2

《ラギア》(攻) オーバレイユニット ORU2

《ドルカ》(攻) ORU2

セットカード

うわっ俗に言う「兎ラギア」みたいなデツキが懐かしいなあ。やることは単調だけどシンプルに強いよね、《神の宣告》と《天罰》内蔵が並んだら厳しいモノがある……まあ勝つけど

「僕のターン！ 手札から魔法カード《闇の護封剣》を発動！ 相手モンスターを全て裏側守備に封印する!!」

「なんやて?!クソツ《ラギア》の効果発動!えくとORU?を2つ使って、魔法・罨・モンスター召喚特殊召喚を無効にするで!」

「当然そうするよね、じゃあ次はこれだ!《レッドアイズ・インサイト》を発動、デッキからレッドアイズモンスター《真紅眼の黒竜》を墓地に送り《真紅眼融合》を手札に加える!」

「なんやそれえ!発動コストがコストしてないやないか!?(けど出てくんのがさっきの奴やったらドルカの能力で、違っても伏せの《次元幽閉》でアボンやな)」

「……こんなわかりやすく顔に出る人刺客にするって、人手足りないのかな黒幕さん。伏せ除去ないからゴリ押ししかないけど」

「では《真紅眼融合》を発動!デッキの《真紅眼の黒竜》と《デーモンの召喚》を融合する!我が友に宿れ迅雷の魔王、以下省略《悪魔竜―ブラック・デーモンズ・ドラゴン》!!」

『久々の闇堕ちでい!あ、元から属性闇だわ』

『どうでもいいけど口上省略ありナノ?!』

《悪魔竜―ブラック・デーモンズ・ドラゴン》星9/闇/ドラゴン/攻3200/

「うげっ、攻撃力3200がポンっと出てきおった……(さく攻撃してみいや!!)」

「では遠慮なくバトル！《ブラック・デーモンズ》で《エヴォルカイザー・ドルカ》（攻2300）を攻撃！くメテオ・フレア・オリジン>!!」

「ばあか、かかりおつたな罠発動！次元幽・・・ありっ？」

『はい焼きまーす』

「うぎやああああっ?!」

「バトル終了時に効果発動！《真紅眼の黒竜》をデッキに戻してその攻撃力分の《黒炎弾》をかますことが出来る!!」

『最後おかしいヨ?!』

「ぎやひいいいっ?!」

竜崎 LP4000?3100?700

「2枚伏せてターンエンド」

吹雪 H2

《悪魔竜ーブラック・デーモンズ》（攻）

セットカード

セットカード

「熱い・・・絶滅する・・・なんでや、なんで罠が発動せいへんねん・・・デイス

クの故障かて……」

「面倒だけど説明すると《ブラック・デーモンズ》が攻撃する時、バトル終了時まであらゆる効果は発動出来ないよ」

『男に……説明した……(驚愕)』

「んなアホ強いモンスターホイホイ出しておって最近の奴は……もう許さへん!!ワイのターンー!」

「そんなこと言われてもなあ……」

「きつたー!ワイの最強モンスターみしたるわ!まずは《黙する死者》でカバザウルスを蘇生!そんで《帝王の烈旋》を発動!オマエの《ブラック・デーモンズ》を生け贄に上級モンスターを呼び出すことが出来る!」

『ひっど?!』

「《カバザウルス》《ブラック・デーモンズ》を生け贄に、さあ来い冷たき暴君!《The tyrant NEPTUNE》!!」

『ゲアーヒヤッヒヤヒヤヒヤッ!!』

「こいつは……プラネットか!!」

「その通り!こいつはモンスター1体の生け贄で召喚出来、召喚したモンスターのス

テータスと効果、名称を獲るんやでえ!!」

《The tyrant NEPTUNE》星10／水／爬虫類／攻0?4900

恐竜じゃなくて爬虫類じゃないかこいつ、見た目は恐竜寄りだけどさあ……

『ねー、ダイナソー名乗つといてどうなのそれ』

「つてあれ?なんでフィールドに《真紅眼》おんねん!」

「ああ、《帝王の烈旋》の発動に対して永続罫《リターンオブレッドアイス真紅眼の鎧旋》を発動していた。フィー

ルドにレッドアイスモンスターがいたから墓地の通常モンスターを特殊召喚出来るの

さ」

「チツ、まあええ《真紅眼》ごときじゃ《Neptune》の相手にならへん……バ

トルや!<Sickle of ruin>!!」

『ギャハハハハハッ!!』

『痛ったあ?!』

「うはははははっ!レッドアイス真つ二つ!!どくやあくワイのプラネットの切れ味は

!!レッドアイス程度のモンスターを未だにエースにしとる奴の気が知れんなあ!!」

「……はっ？」

「ワイはこれでターンエンドや、ちやっちやとかかってこんかい！」

「……ドロ、《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンドを召喚し効果を起動、これを贄に《真紅眼の黒竜》を

特殊召喚！」

『あゝ、痛かったあゝ』

「性懲りも無くまたソイツかいな！馬鹿の1つ覚えやな!!」

「……やっぱり攻撃反応か《ギヤラクシー・サイクロン》!!その伏せを破壊する!!」

「《次元幽閉》が……」

「もくもくいいよね？バトルだ！《真紅眼の黒竜》で《Neptune》を攻撃!!<ダー

ク・メガフレア>!!」

「アホかあ！ただか攻撃力2400で4900の」

「畏発動！《メタル化・魔法反射装甲》!!攻撃力を300アップし、その後アンタのモン

スターの攻撃力の半分の数値を装備モンスターに加算する!!」

『おっ、久々の感覚……』

《真紅眼の黒竜》攻2400?5150

「こっ、攻撃力5150やてえ?!てかなんでメタル化なんて入れて……ぎゃああああつ

!!

竜崎 LP700?450

「THE tyrant Neptune」・・・撃破！続いて《真紅眼リターンオブ・レッドアイズの

効果により2体目の《真紅眼》を呼び出しダイレクトアタック!!」

「ほんぎやあああああつ?!」

竜崎 LP450?0

WIN 吹雪

「ふう、また君に聴くに堪えない罵詈雑言を射浴びさせてしまったね・・・すまない、レン」

『いいって・・・割と昔からこんな感じだったから・・・慣れてる。派手にぶっ飛ばしてやったしな!』

竜崎 へちゅん・・・

全く、無理しちやって・・・僕の回りの女性(?)は強がりばかりだね。

さて女性といえどもどり女史は、と

「ヒョヒョヒョヒョ!! さあ行けえ〜! 《The tripping MERCURY》
!! お姉さんに2連続攻撃だあ〜!!」

うわっ、向こうもちやつかりプラネットだ。しかもmercuryで、インセク
ターって昆虫使いじゃないの? 全く関係なくないか?! 水族だったよねアレ

『(※うちのブッキーは原作知識は皆無ですがカード知識だけは前世より引き継いでる
ヨ! ややこしいネ!)』

「フン、罨オーブン! 《リビングデッドの呼び声》! おいでっ 《墮天使スベルビア》! 更
に効果により《墮天使エデ・アラエ》!!」

「ヒョヒョ? た、ターンエンド・・・」

「ドロー! スタンバイフェイズに《闇次元の解放》!! 《闇の誘惑》で除外した《墮天使ア
スモディウス》を帰還!! 《死者蘇生》! 墓地の《墮天使ゼラート》を復活!!」

墮 天 使 降 臨

いやあ〜ご冥福でも祈るべきかな? ……男だしいいか

指パチツ「全墮天使で、アタック!」

「ヒョエエエエエツ?!」

羽賀 LP4000?0

WIN みどり

「いやあく、美しい勝利ですねみどり女史」

「あら天上院君、そつちも片付いたのね」

「話が途中になつてしまいました、恐らく黒幕がわかりましたね」

「ええ．．．今度はこちらから出向いてあげましょ」

?

とある一室．．．薄暗い部屋にガラス張りで壁に埋め込まれた、穴の空いた石版が展示された怪しい部屋。そこにて壮年の男一人と金・銀髪の妙齢の女性二人が、密談していた．．．

「フン。所詮プロといっても落ち目の弱小、プラネットを使っても大した戦力にはならんか・・・次は君たちに行ってもらう、プラネットを全て回収してきてほしい」

「そりゃあんな二人じゃ勝てるもんも勝てないでしょう、そこそ知名度はあつたらしいけど。デビットも口だけで実践経験は少なそうだったしね」

「ああ、レジーを倒す程の相手だ。やはり私達の出番だろうな」

「フフフ、楽しみなね。姉さん」

「そうだな・・・」

「フツ、期待しているよ」

続く

EX6羽 一人ぐらい紛れててもおかしくはない（前）

はじめまして……と言っておこうか。俺の名前は神楽坂、ライイエロー所属の神楽坂だ。

下の名前？すまない、とある事情で言えない事になっている……代わりに神楽坂日野ちやまでも、神楽坂 マニでも、神楽坂 真ゲスでも、好きに呼んで貰って構わない。

ライイエローの中堅、筆記は高成績だが実技はパツとしない……そんな俺だったが、実は人には言いにくい秘密がある。

それは……俺は奴等の正体を知っている。奴等とはそう、学園最強のツツコミ、学園最凶のストーカー、学園最狂の馬鹿。この三人の事だ。

奴等がこの世界純正の存在ではなく、不純物だと知っている。

何故知っているかって？俺も同類だからさ……俺も如何せん、転生者とゆうジャンルに入ってしまうらしい。最も記憶が戻ったのは割と最近、俺がかの武藤遊戯のデッキを盗み（なにやってんだよ俺！）、遊代十代にデュエルで敗北した時である。

つたく。デュエルは好きだったが現物はシンクロ以降やってないんだよな、まさかそ

れが中心の世界に送られるとは驚きだ、晴天の霹靂だ。いや、なんか違うな……
まあそんなこんなで俺も記憶が戻った翌日にカードが郵送されてきたんだ……が
！俺はさつきも言った通りシンクロが登場した辺り、以降のカードを所持していない。
カードもほぼ売っていたのだ。

つまり神イ(笑)！から送られてきたカードは前世のタンスの奥底に眠っていた、思
い出のメインデッキと……前世の彼女に隠れてやってたデュエルリン○スのカード
のみ、転生後に集めたカードの方がはるかに多いくらいだ！

だが俺自身の、俺個人の、大切なデッキを思い出させてくれたことだけは感謝する。
さて……話は変わるが今は実技のお時間だ。

このデュエルアカデミアの実技、一見和気あいあいとやってる……わけがなかつ
た！想像よりシビアである。そのルールを説明しよう。

- ①実技にて1日3回のデュエルを行う。
- ②デュエルの相手は、同ランクの者からランダムに選出される。
- ③会場に持ち込めるカードはメインデッキ40〜60枚。サイドデッキ0〜15枚。
融合デッキ0〜15枚のみとする。
- ④3連勝した場合ランクがひとつ上がり、3連敗した場合、ランクがひとつ下がる。
- ⑤最後に愛が勝つ。

と、まあ・・・大雑把に説明するとこんな感じだ。

⑤のせいでルール改定をほめのかした奴がバレバレだろうが一応捕捉すると・・・やった事がない人には意味☆不明で申し訳ないが、単的に言つてデュエル○ンクスのランク戦である。

ブロンズランクがレッド、シルバーランクがイエロー、ゴールドランクがブルーランクになっただけである。

寮ごとにさらに5つのランクに分れ3連勝で1ランク上がり、3連敗で1ランク下がる。仮にイエローランク5で3連勝するとブルーランク1になるわけだな。

この場合、ブルーランクを維持したまま月に1度の月末試験を迎え、筆記実技共に問題ないならば正式にイエローからブルーに昇格となる。逆もまた然りだ。

③のデッキ持ち込み制限だが・・・違反すると強制で1ランクダウン、違反が酷いといきなりレッド送りだ。その日ひとつのデッキを信頼して勝ち抜けとゆうわけだな。

サイドデッキの持ち込みが可能ではあるが、当たる相手は完全ランダムなので特定のメタを取り込むのは難しい。あと1試合20分迄と決まっついて、デュエルが長引くと、次の試合用にサイドチェンジをしてる時間がない場合もある。

長くなったが、こんな結構厳しいルールで負けたらレッド送りもありえるので、この

実技授業はもはや授業ではなく戦争、文字通り決闘の場となっている。

なお某氏曰く、「まあ、一戦だけでランクが切り替わるノース校と比べたら大分良心的ですわ」だそうだ。

そんな殺伐とした戦場だが、俺は自分自身のデッキを取り戻してから連戦連勝! : : :
ともいかなかった、しかし努力の末にブルーのランクまでなんとかたどり着いた。今日はブルーランクに上がってからの初日であり、ここからは未知の領域である。

いかん、ちよつと緊張してきた

「どうした、神楽坂」

「あ、ああ み、み、み 溝口か」

「三沢だ! 他の奴は三だけは残してくれるぞ?!」

「悪い悪い、何故かお前を呼ぼうとすると記憶に霧がかかってな?」

こいつは三菱。「三沢だ!」

俺を唯一偏見なしに見てくれた、まあ 友達だ、多分。失礼かもしれないから口には出さない。

「まあいいさ、俺も何故かお前の下の名前が思い出せない……それと同じ現象なのだろう」

「お、おう……」

三俣はとうにブルーランクのトップクラスにおり、筆記も学園で1、2を争う秀才なのだがイエローにずっと居座っている。彼曰く、「遊城十代に勝つまではブルーにはいかない」そうだ。

「緊張しているようだったからな、今からその調子では激戦区たるブルーランクは勝ち残れないぞ？」

「うぐつ……そう見えるか」

激戦区ブルーランク。実はブルーランクとは名ばかりで、半数程のブルー生徒（主に男子）はイエローランクまで落ちている。奴らの寮が変わらないのは、イエロー側の昇格者が少なくて部屋が中々開かないからだそうだ。つまり今、このランクで猛威を奮っているのは……

「電光掲示板に出たぞ、今日の第一試合の組み合わせだ……なるほど、初戦から運が無かったかもな」

『ブルーランク1神楽坂

vsブルーランク4枕田ジュンコ』

十代や万丈目などの面々
一部の変わり者達と……強かな女子達だ。

……続くのか？

EX7羽 一人ぐらい紛れててもおかしくはない（後）

「ふーん、アンタが私の対戦相手？多分初対面よね、ヨロシク〜」

「ああ、神楽坂だ。ヨロシク……」

突然だが、俺は枕田ジュンコが苦手だ。

理由は……まあいい、今は関係の無い事だ。

『ではー。本日の第一戦目を始めるノ〜ネ〜』

クロノス教諭から開始のアナウンスが入る、毎度ながら気の抜ける声だ。

「デュエルツ!!」

神楽坂 LP4000

ジュンコ LP4000

「先行は俺か、俺のターン！」

「……どうでもいいけどそのマフラー暑くないの？もう春つーか初夏よ？」

「本当に関係ないな!?!せめてデュエル開始前に突っ込んでくれ!!」

「ツ?!」

し、しまった。つい……

「……つ、続けるぞ？魔法カード《天使の施し》^{マジック}を使う、3枚ドロして、2枚を捨てるぜ。それからモンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンドだ」

神楽坂 H3 LP4000

セットモンスター

セットカード

セットカード

「……あたしのターン！手札の《ハーピー・クイーン》を捨て、効果発動！デッキから《ハーピーの狩場》を手札に加え、発動！このフィールド下で鳥獣族モンスターは攻

「撃力が2000上昇する！」

「ここまででは俺でも知っている……問題はここからだ。」

「通常召喚！ 《ハーピー・チャネラー》!!」

『やんっ』

《ハーピー・チャネラー》

☆4 ATK1400

「チャネラーは《ハーピー・レディ》としても扱う。よって狩場の効果により、あたしから見て右側セットされたカードを破壊する！」

チャネラーとやらが伏せカード目掛けて襲いかかるが、残念。そっちはハズレだ！

「対象となったりバースカードを発動！ 《砂塵の大竜巻》だ!! ずっと狩人の狩場にいるなんて安心できないんでな、ハーピーの狩場は破壊させてもらう」

「むう、やるじゃん……」

良かった、最低限の消費で狩場を処理できたな。

発動にチェーンしても良かったが・・・2枚目以降の可能性を考えると、召喚権は使わせて起きたかったからな。

「けど砂塵2枚って事はないでしょ、永続魔法《ヒステリック・サイン》を発動し、《万華鏡―華麗なる分身》を手札に加え発動！デッキから《ハーपीィ・レディー》を特殊召喚!!その永続効果で風属性モンスター達は攻守300アップよ!!」

『ハアッ!!』

《ハーピーィ・レディー》

☆4 ATK1300?1600

《ハーピーィ・チャネラー》

☆4 ATK1400?1700

「まだまだあ！手札1枚を捨てて、チャネラーの効果発動！デッキからハーピーィモンスターを特殊召喚できるっ、さあ来て！《ハーピーィ・ダンサー》!!」

『アハハハッ!』

《ハーピーィ・ダンサー》

☆4 ATK1400?1700

「うぐつ……」

駄目だ、やはり解らないカードがでてきた。

俺の知識ではハーピー・クイーンまでは把握しているがそれ以降に出たものはまるで解らん！

割とこつちの世界でシンクロ・エクシーズモンスター以外のものは一般普及されているらしいが……いかなせん某wOk iなどないから、持ってないカードの知識は実物に関わるしかないのだ。

「永続魔法《エスフリット・パワースポット靈魂の拠所》を発動し、ダンサーの特殊能力を発動！このコを手札に戻

して、《ソニック・バード》召喚！

「ツツ！ソニック・バードだと!？」

『……(ドヤア)』

《ソニック・バード》

☆4 ATK1400?1700

「このコは知っているわよね？ 召喚成功時、デツキから儀式魔法1枚を手札に加える！ あたしが加えるのは《エスプリット・コリン魂の降神》!! 更に靈魂の扱所の効果発動、風属性モンスターが手札に戻った時、デツキからスピリットか儀式魔法をもってくる、《エスプリット・ロード靈魂鳥神—彦孔雀》を手札に招くわ」

一気に儀式魔法と儀式モンスターが揃っただど!?!とゆうより「ハーピー」に儀式つてなんだよ、わっつけわかんねえよ!

「うーん（彦孔雀呼べば勝ちかな?・・・けどセotto一枚気になるわね、ミラフォ激流は制限だけど警戒するに越したことないからなあ。仮にもブルーランクまで上がってきた猛者なんだから油断大敵よね）」

「なんだ、儀式召喚しないのか?」

「フン、お楽しみは後にとつといてあげる。バトル!ハーピー・レディーでセottoモンスターを攻撃!スクラッチ・クラッシュユ!!」

「セottoモンスターは・・・《シャイン・エンジェル》だ!」

《シャイン・エンジェル》

☆4 DEF1100

シャイン・エンジェルはハーピー・レディに首根っこ捕まれて地面に叩きつけられた。天使なのに酷い最後である、しかし……

「シャイン・エンジェルの特殊能力！戦闘で破壊された時、光属性の攻撃力1500以下……2体目のシャイン・エンジェルをデッキから呼び出す！」

《シャイン・エンジェル》

ATK1400

「天使デツキ？なんか意外……まあいいわ。残しておいても不快だし、お望み通り攻撃してあげる！ハーピー・チャネラーで攻撃！」

「クツ……」

今度のエンジェルは爪で引つ搔かれた、超痛そうだ……

神楽坂LP4000?3700

「ならば3体目を特殊召喚！」

「

邪魔、ソニック・バードで攻撃！」

神楽坂LP3700?3400

「へへっ、リクルーターとわかっていながら攻撃を繰り返すとはな……」

「後々面倒になるより、今根こそぎ潰してきたかっただけよ。コーリング・ノヴァでも出てきたらうんざりすっけどね」

「安心しろよ、リクルーターはもう出ない……最後のシャイン・エンジエルの効果によりデッキから特殊召喚！行け、こいつが俺のエース……《神竜―エクセリオン》
!!」

『ギャオオオオッ!』

《神竜―エクセリオン》

☆5 ATK1500

「し、神竜エクセリオン!!? ……全然知らない」

「だああっ!!」

驚いておいて知らないのかよ!?思わず昭和のコントの如くずっこけてしまった。

全く、「相変わらず」面白い奴だな……

「ま、エースって言い張るくらいだしね。お手並み拝見お手並み拝見……カードを1枚伏せてエンドフェイズ、さつき手札から捨てた《ハーピー・ハーピスト》の効果発動よ。デッキから攻撃力1500以下の鳥獣族モンスター……ハーピー・チャネラーの2枚目にしとこつと、このコを手札に加えてターンエンドよ」

ジュンコ H4 LP4000

《ハーピー・チャネラー》(攻)

《ハーピー・レディー》(攻)

《ソニック・バード》(攻)

《ヒステリック・サイン》(8)

《靈魂の坩所》(8)

セットカード

「やっと1ターン目終了か……つたく、女つてのは電話が長ければ着替えも買い物も長い。その上ターンまで長いとはな」

「だどーこらー、なんで初対面のヤローにそこまで言われなきゃならんのだよ」

げ、いかん。思ったことが口に出てたか・・・上手くかわさなければ。

「なあに、単なる独り言だよ。別にアンタに言ったつもりはないね」

「ふーん・・・ぶっ潰す」

怖っ、目つき悪っ、怖っ!?

「お、俺のターン！エクセリオンを生贄に…… 神竜ーエクセリオンを召喚!!」

『ギャオオツ!!』

「上級モンスターを生贄にわざわざ同じモンスターを召喚？ちよつと意味不明なんだけど」

「すぐにわかるさ……この時エクセリオンの効果発動！墓地のエクセリオンの数だけ、3つの効果から好きな永続効果を選択する！俺が選ぶのは……？モンスターを破壊した時、相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える、？相手モンスターを破壊した

時、もう一度だけ続けて攻撃できる。この2つだ!!」

「効果だけで見たら強力ね、しかも施しでちやつかり1枚捨ててたわけだ……けど攻撃力はたかだか1500、私のハーपी達のが攻撃力は上よ?」

「勿論承知の上さ。装備魔法《月鏡の盾》をエクセリオンに装着!この盾の効果により、エクセリオンの攻撃力は相手モンスターの攻撃力を常に100上回る!!」

この装備魔法、効果強いから入れてみたんだが……なんで頭につけるんだ?ちよつと見栄えが悪すぎる気がするぞ。

「行くぜ、バトルフェイズだ!神竜—エクセリオンでハーピー・チャネラーを攻撃!エクセリオン・バースト!!」

「そのまんまね……魔法強化なんざ読めてんのよつ! 罨^{トランプ}発動、《ゴッドバード・アタック》!!ソニックを生贄に、アンタのエースと《ヒステリック・サイン》を破壊するわ!!」

「その言葉、そつくりそのまま返すぜ。その程度の妨害は計算の内だ!リバース罨、ト

ラップ・スタンを発動!!このターン中、罨の効果は全て無効だ!!」
「んなっ?!」

「バトル続行!ハーピー・チャネラーを粉碎し、その攻撃力分のダメージを喰らえっ!!」

《神竜—エクセリオン》 ATK1500?1800

「きゃああああっ?!」

ジュンコLP4000?2200

「くう、「元々の攻撃力」とかじゃなくてフィールド上記なのね。」

「そうゆう事だ!続けてハーピー・レディーを攻撃!エクセリオン・バースト・セカンド
!!」

《神竜—エクセリオン》 ATK1500?1700

「いやああああああっ!」

ジュンコLP2200?500

よし、一気にライフを追い詰めた。月鏡の盾でなく、他の強化魔法ならばワンシヨットも狙えたが・・・今手札に無いものは仕方ない、次のターンでフィニッシュを狙うぜ!

「カードを1枚セット!ターンエンドだ」

神楽坂 H1 LP3400

《神竜―エクセリオン》(攻)

《月鏡の盾》

セットカード

「やっつってくれんじやない!!もー容赦しないからっ!」

「なんだなんだ?手を抜いてくれていたのか、見かけによらず優しいお嬢さんだな」

「ムッキー!なんなのよその、さつきから余裕しやくしやくな感じ!!絶対ボコる、超泣かす!あたしのターン!!」

1周回って可愛く見えてくるこの女。全く、煽り耐性が低い点はあの頃と変わらん

「まずは《ハーピイ・ダンサー》を召喚！」

『ふふっ』

「ダンサーの効果で、また自身を戻して手札の《ハーピイ・チャネラー》を召喚！更に風属性モンスターが手札に戻ったこの瞬間、《靈魂の抛処》の効果により《靈魂鳥神―姫孔雀》をゲットだぜ!!」

『たっだいま〜』

《ハーピイ・チャネラー》

ATK1400

「手札1枚をコストにデッキから、《ハーピイズペット竜》を守備で特殊召喚!!」

『ガオオオオッ!』

《ハーピイズペット竜》ドラゴン

☆7 DEF2500?2800

「チャネラーの永続効果、フィールドにドラゴン族が存在する場合、そのモンスターと同じレベルになるわ」

「
《ハーピー・チャネラー》 ☆4? ☆7

レベル制限無しかよ……いくら守備表示限定だからって強くないか？

「魔法カード《七星の宝刀》！レベル7のチャネラーを除外し……2枚ドロツツ!! さあ、派手にぶつとばすわよ！儀式魔法《靈魂の降神》を発動！手札の《靈魂鳥—彦孔雀》を生贄に、現世に舞い降りろ！《靈魂鳥神—姫孔雀》ツツ!!」

『たああつ!!』

《靈魂鳥神—姫孔雀》 ☆8 ATK 2500? 3000

「靈魂の抛処の永続効果、スピリットモンスターの攻撃力は500アップするわ」

「そいつスピリットかよ!?! レベル8、攻撃力3000……だが月鏡の盾を装備したエ

クセリオンには勝てないな！」

「装備してればの話っしょ？ 姫孔雀のモンスター効果！ 相手の魔法・罠カードを3枚選択し、デッキに戻す！」

「マ、マジか!?!」

姫孔雀が扇をひと振り、盾と伏せカードのミラーフォースまで吹き飛ばされてしまった。まったく誰だよミラフォは仕事しねえって言った奴、お蔭で仕事しないのがこのカードの仕事みたいになってんぞ!?!

「その後、デッキからレベル4以下のスピリットを条件無視で特殊召喚！ おいで、

《エスプリット・バード霊魂鳥—巫鶴》!!」

『ピエエツ!』

《ソウルバード靈魂鳥—巫鶴》☆4 ATK1500?2000

「バトル！ 姫孔雀でエクセリオンを攻撃！ 引き裂け、〈疾風扇〉!!」

「なんか犬〇叉とかで見た気がする感じっ!?! 墓地の《ネクロガードナー》を除外し、攻撃

を一度無効にする!」

「名前繋りかつ! だったら巫鶴で攻撃!!」

「ぐおおおおつ?!」

神楽坂LP3400?2900

「ビーよっ! 少しは参った? メイン2、魔法カード《儀式の下準備》を発動、デッキから2枚目の《靈魂の降神》と、そこに記された墓地の《靈魂鳥神―彦孔雀》を手札へ加えるわ」

なんだあの壊れ儀式サポート、マンジユゴッドもビックリの効果じゃないか……儀式はアド損アド損言われてたからむしろ喜ばしい事なんだろうが

「そしてカードを1枚伏せて、エンドフェイズに姫孔雀の効果発動よ。このモンスターを手札に戻し、《靈魂鳥トークン》を2体特殊召喚。《靈魂の抛処》の効果で2枚目の巫鶴を手札に加えてターンエンドよ」

ジュンコ H5 LP500

《ハーピイズペット竜》(守)

《靈魂鳥―巫鶴》(攻)

《靈魂鳥トークン》(守1500)×2

《ヒステリックサイン》(∞)

《靈魂の拠点》(∞)

セットカード

危ない危ない、ネクロガードナーがいなければ即死だった……あれだけ暴れとい
て手札5枚かよ、全部判明してる札とはいえおかしいだろ!?

長期戦はアド差が開いてきつい、残り500をなんとか削りとらなくては……

「俺のターンだ、ドローツー!よし、魔法カード《強欲な壺》だ、2枚ドロのあとこのカー
ドを破壊する!」

「テキスト古っ!?!」

伏せカードをなんとかできるカードは引けないか……しょうがない、ここは強気

に攻める！

「相手モンスター数が2体以上こちらより多い場合、《魔導ギガサイバー》は特殊召喚で
きるっ！」

『ダアツ!!』

《魔導ギガサイバー》

☆6 ATK2200

「うっ、地味に強いのが……」

「バトルだ！ギガサイバーで巫鶴を攻撃！こいつでフィニッシュだぜ!!」

「あくもう！勿体無いなあ……もつと派手に展開してこいつての!!畏発動、《緊急儀式術》!!墓地の儀式魔法を除外し、その効果の儀式召喚を行う!!」

「あ、相手ターンに儀式召喚ってことかよ!!」

「っーかすっかり儀式中心のデッキだな……ハーピイどこ行ったんだおい。」

「そゆこと、フィールドの靈魂鳥トークン2体を儀式の贄に捧げ……儀式召喚！降り来たれ、《靈魂鳥神―彦孔雀》!!」

『はああっ!!』

《靈魂鳥神―彦孔雀》

☆8 ATK3000?3500

「ははっ、織姫と彦星かよ……んで？今度はモンスターをバウンスってか」

「あら、察しがいいわねアンタ……彦孔雀の効果発動！相手モンスターを3体選択して手札に戻す！ギガサイバーしかないのが残念でしょーがないわ」

そんな事いいながらギガサイバーが風に吹かれて手札に帰ってきた。やれやれ、破壊されたわけじゃないからよしとしようか。

「ついでに儀式召喚時、手札のレベル4スピリットをなんやかんやで特殊召喚！2体目の巫鶴!!」

『クエツ!』

《靈魂鳥―巫鶴》

ATK1500

「この時、一体目の巫鶴の効果発動よ!スピリットが召喚、特殊召喚された時1枚ドロ―する!」

「だからなんで儀式召喚して手札増えんだよ?!・・・つたく、メイン2にギガサイバーを再び特殊召喚。モンスターをセットして・・・魔法カード《太陽の書》を発動、モンスター一体を攻撃表示に変更する。姿を見せな、《メタモルポット》!!」

『ギビヒツ』

《メタモルポット》

☆2 ATK700

「うっげ!」

「さあ、互いに手札を全て捨てて5枚ドロ―しようか!もつとも、俺は捨てるカードがないけどな?」

「にやろう、せっかく整えた手札が全てパーじゃない・・・」

「あちらは5枚捨てて5枚ドロ、こちらはただの5枚ドロ。いやあ、これはニヤけてしまいますねえ……」

「よっしゃ、カードを4枚セット！俺はこれでターンエンドだ！」

神楽坂 H1 LP2900

《魔導ギガサイバー》(攻)

《メタモルポット》(攻)

セットカード×4

「……アンタのエンドフェイズに彦孔雀が手札に戻る、そして《靈魂鳥トークン》がまた2体出現するわ」

《靈魂鳥トークン》×2

☆4 ATK1500

「……ん？靈魂の依処の効果は使わないのか」

「チツ、目ざといわねえ……打止めよ打止め！儀式魔法2枚に姫孔雀と彦孔雀の1枚ずつだっつーの！言わせんなポケッ！」

「ほ、ポケって……」

あくまでもメインはハーピイなわけか、正直脅威だっただけに有り難い。流石メタポ、制限から脱却できないだけはあるな。

「ほんつとさつきから面倒……あたしは十代以外に負けらんないのよ！あたしのター
ン!!魔法カード《置換融合》発動!通常モンスター扱いの、靈魂鳥トークン2体を融合
し……来なさい原点!《始祖竜ワイアーム》!!」

『ウガアアアツ!!』

《始祖竜ワイアーム》

☆9 ATK2700

「今度は融合、しかもドラゴンて……ハーピイってなんだったか?」

「アンタの常識なんざ知ったこっちゃないわ。フィールド魔法、《暴走魔法陣》発動!あ
るモンスターを手札に加え召喚!来い、《召喚師 アレイスター》!!」

《召喚師 アレイスター》

☆4 ATK1000

「召喚師……?」

「アレイスターの特殊能力! デツキから《召喚魔術》を引っ張ってきて、発動! フィールドのアレイスターと巫鶴を除外融合! 雷まといし魔導騎! 《召喚獣ライディーン》!!」

『ハアアアッ!!』

《召喚獣ライディーン》

☆5 ATK2200

「どこのファイナ○ファンタジーだよ! つーかお前のデツキ無茶苦茶過ぎだろよく回るな!」

「うっさいわねー、あたしのデツキなんざまともな方よ? 周り観てみなさい周り」

「悪いがそんな余裕はねーよ。アンタ相手に集中したいんでね」

「ふーん……?」

周囲から時折、

「融合召喚! おじやま☆キング!!」

「舌魚3体でダイレクトアタック!!」

とかおかしいのが聴こえてくるが気にしたら負けだと思ってる。舌魚……舌魚ってどんなんだっけ？

「除外されてる召喚魔術の効果、こいつをデッキに戻してアレイスターを手札に戻す。うーん……バトルよ！ワイアームでメタモルポットを攻撃！」

「させねえよ！速効魔法《月の書》を発動だ！メタポを今度は裏側守備に変更してやるぜ！！そして、ワイアームとやらの攻撃は止まらない！！」

「うっげ!？」

《メタモルポット》

DEF600

「メタポは消しとばされるが……リバー効果発動！互いに手札を全て捨て、5枚ドロー!!」

「クツ、何かあるとは思ってたけども……」

これでまたアドバンテージを稼げる、悪いね……お前とのアホみたいなカード性

能差を埋めるには、制限カードにでも頼らないと駄目だな。

「ならライディーン、ギガサイバーを攻撃よ！」

「おっとそうはいかねえ、罠カード《聖なるバリアーミラーフォース》発動!!」

姫孔雀にぶつ飛ばされたのをまた引き当てたぜ、メタポへの攻撃を通せば警戒心が薄まると思ったが正解だった！

「ニヤツロウ・・・ライディーンの効果発動！場のモンスター1体を裏側守備にする！ワイアームにモンスター効果効かないから・・・対象はライディーン自身よ！」

月の書内蔵モンスターかよ、せっかくのチャンスなのに逃がしてしまった・・・まあいい、ワイアームを仕留めただけでよしとするか。

「・・・アンタ本当にやるわね、あたしの攻撃が軽率だったってのもあるけど・・・」
「なんだ、降参か？」

「ジョーダン・・・こんな楽しいデュエル、誰が自分からやめるもんですか！メインフェ

イズ2!墓地のアレイスターとソニック・バードをゲームから除外!来いよ闇墮ち、あたしに従え!《ダーク・シムルグ》!!」

『キュオオオオオツ!!』

《ダーク・シムルグ》

☆7 ATK2700

「あんだだけデツキ掘ったのにまだ戦力尽きねーのかよ……上等じゃねーか!」
「あら、アンタ実は結構ノリいいタイプ? いいじゃない……ここまで来たらとことん楽しみましょう! 墓地の置換融合を除外し効果発動、ワイアームをエクス……融合デツキに戻して1枚ドロップ!ふうん、カードを3枚セットしターンエンド!!」

ジュンコ H2 LP500

《暴走魔法陣》(F)

《ハーピイズペット竜》(守)

セットモンスター

《ダーク・シムルグ》(攻)

《ヒステリック・サイン》(8)

《靈魂の拠所》(8)

セツトカード×3

楽しいデュエル、ねえ。いい顔してるじゃねーか……俺が素直に話していたら、もつとお前の隣にいられたのかな。

「俺のターン、ドローツ！」

「スタンバイフェイズにリバースオープン！永続罫《魔封じの芳香》!!」

「ぎげんなー！リバース魔法発動、《サイクロン》だ！勿論対象は芳香だぜ!!」

「うへっ、エンドサイクできたのにわざわざ温存してたわけ!？」

「ダーク・シムルグとか見たら真っ先に思い浮かぶだろうが！とっついて正解だったぜ……」

「メインフェイズ！《死者転生》を使い、手札を一枚切ってエクセリオンを手札に加える。そしてギガサイバーを生贄に……頼むぜ相棒！神竜！エクセリオンツ!!」

『ギャオオオオツ!』

「今度は攻撃力10000アップと、直火焼き効果の2つを選択! 攻撃が通れば俺の勝ちだ!!」

《神竜―エクセリオン》

ATK15000?25000

「だったら攻撃してきなさいよ、通れば勝ちなんでしょ?」

見え透いた挑発だ、誘ってんのが馬鹿でもわかる……だが!

「焦んなよ。墓地の光属性シャインエンジェルと闇属性ギガサイバーの魂を生贄に……

来い、《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》!!」

『……』

《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》

☆8 ATK3000

「か、開闢ウウウ?! なんでそんなもん持ってるのよ!!」

へっ、1枚だけ奇跡的に持ってたのが幸いしたぜ。

確かにこつちでもアホみたいにレアなカードだけど、青眼みたいに3枚だけしか存在しないわけじゃねーからな、問題ねーだろ。

「さあ？別に遊戯デツキから盗んだわけじゃねーから安心しろ。モンスター効果発動！
ダーク・シムルグをゲームから除外する！」

「そつちを使うか、目敏いわね……」

これでセット封じはなんとかなった、あとは戦力を削るのみ！

「さあバトルだ！エクセリオンでハーピイズペット竜を攻撃する!!」

「甘い！永続罫《銀幕のミラー・ウォール》発動!!攻撃モンスター全ての攻撃力を、半分にする!!」

《神竜―エクセリオン》

ATK2500?1250

「そしてペット竜の守備力は2300!このバトルはあたしの勝ちね」

「チィ……」

神楽坂LP2900?1750

銀幕とは渋いカードを使う、大嵐かハリケーンでもきてくれれば解決したのだ
が…… とりあえず警戒して開闢は攻撃せずに正解だったな。

「カードを2枚セット、ターンエンドだ!」

神楽坂 HI LP1750

《神竜―エクセリオン》(攻)

《カオス・ソルジャー ―開闢の使者―》(攻)

セットカード

セットカード

「エンドフェイズに永続罫オープン! 《ヒステリック・パーティ》!! 手札1枚をコストに、
ハーピイ達を可能な限り特殊召喚!!」

「げ、出たっ!」

「出たってなんじやい出たって！．．．戻つといで、ハーピー達!!」

《ハーピー・レディー》

ATK1300?1600

《ハーピー・ダンサー》

☆4 ATK1400?1700

《ハーピー・クイーン》

☆4 ATK1900?2200

「ハーピー・レディーの効果で風属性全体を強化!場のハーピー・レディーの数に対応して、ペット竜も強化されるわ!」

《ハーピーズペット竜》

DEF2300?3500

まじかよ．．．サイクロンの当たり、もしかしてこつちだつたんじやねーの?

「そしてあたしのターン!ライフは払えないから銀幕は破壊されるつと．．．お返しよ、《サイクロン》発動!あたしから見て右側のカードを破壊!」

「なめんな。対象のカードをチェーン発動!畏カード《威嚇する咆哮》!!」

『ギャオオオオツ!!』

ベヒモスはいないので代わりにエクセリオンが咆哮します、ちよつと可愛いなこれ。

「攻撃宣言を封じるフリーチェーン罠・・・困ったわね、開闢倒せないときつついわ」
「だったら大人しくエンドしてくれねーかなー・・・」

なんて言ってみちゃったりするんだが・・・

「そーねえ・・・イ・ヤ」

「ですよねーっ!」

「ダンサー効果!ダンサーを戻して風召喚!おいで、《ハーピイ・ハーピスト》!!」

《ハーピイ・ハーピスト》

☆4 ATK1700?2000

「ハーピストの効果発動!クイーンを手札に戻してアンタのエクセリオンを手札に戻す

！手札から装備魔法《ビックバン・シュート》を開闢に装備！さらに墓地の《ギャラクシー・サイクロン》を除外してビックバン・シュートを破壊!!」

「そしてビックバン・シュートを装備していた開闢は除外される・・・」

攻撃封じたのにモンスター全除去してきやがった。この女マジで鬼畜である・・・

「そゆこと、残念だったわね。まあエクセリオンは手札だからいいじゃんいいじゃん？」

よかねーよ、上級モンスターバウンスとかすげー辛いだろが・・・

「ハーピイズペット竜を守備に、ライディーンを反転してターンエンド」

ジュンコ H0 LP500

《暴走魔法陣》(F)

《ハーピイズペット竜》(守3500)

《召喚獣ライディーン》(攻2200?2500)

《ハーピイレディ》(攻)

《ハーピイ・ハーピスト》(攻)

《ハーピイ・クイーン》(攻)

《ヒステリック・サイン》(∞)

《靈魂の拠所》(∞)

《ヒステリック・パーティ》(∞)

「行くぜ！俺のターン、ドローツ！」

あの数に攻められたらひとたまりもない……このターンで決着をつける！

「リバースカード！永続罫《リビンググアットの呼び声》!!墓地より蘇れ、シャインエンジェル！そしてシャインエンジェルを生贄に、三度いでよ！神竜―エクセリオンツツ!!効果は直火焼きと1000アップを選択！」

『ギャオオオオツ!!』

《神竜―エクセリオン》

ATK1500?2500

「あつさり出てきたわね．．．．．そっちを除外してあげた方が良かったかしら」

「それは凹むから勘弁してくれ、開闢も相当きついが．．．《マジック・プランター》発動！リビングゲデットを破棄して2枚ドロップ!!．．．行くぜ、バトルだ！エクセリオンでハーピイレディーを攻撃する！」

「させない！攻撃宣言時、ライディーンの効果発動！エクセリオンを裏側守備に変更するわー！」

「相手ターンも使えるのかよ?! だったら手札から、《禁じられた聖杯》を発動！ライディーンの効果を無効にするぜ!!」

「．．．．アンタの引きが強いのはよくわかった。墓地から畏発動！《仁王立ち》!! 攻撃をハーピイズペット竜に限定させる!!」

「んなにい!! 墓地から畏だとお!! いつ落としたりがったそんなもん！」

「驚きすぎよ!?! オメーが散々メタポすつから勝手に落ちたんだろーがいつ!!．．．．．ペット竜の守備力は3500！エクセリオンの攻撃力じゃ届かないわ!!」

ハーピイレディーの目前に、主人を守るとい wanna ばかりにペット竜が立ちはだかる．．．

「伏せが無いからって油断したぜ。全く、最後まで気を抜かずについてよかった?」

「え?」

「ダメージ計算時!手札より速効魔法《蛮勇鱗粉》を発動!エクセリオンの攻撃力を1000アップさせる!!」

「なんだ焦ったー、オネストでも飛んでくるのかと……残念、3500じゃ倒せないわよ」

「あんないいいカード持ってねーよ……けど!チェーンして墓地から罨発動!《スキル・サクセサー》!!こいつを除外して、エクセリオンの攻撃力を更に800上昇させるぜ!!」

《神竜―エクセリオン》

ATK2500?3300?4300

「うっそだあ!?!つてかアンタも墓地から罨発動してんじゃん!!」

警戒されないようにあえてメタポの効果で落とすとしたのさ。これで俺の勝ちだ!!

「いつけえ!エクセリオン!!ハーピイズペット竜を打ち破れエ!!」

『ギャオオオオッ!!』

『グガアアアアツ?!』

「モンスター効果発動！破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらうぜ
!!」

「き、きやあああああつ?!」

ジュンコ LP500?0

WIN 神楽坂

《ギャオツ》

「イヨツシャアアアアツ!!勝ったぜえええ!!」

あー勝てるとは思わなかった、マジで。頑張ればなんとかなるもんだな意外と……
「うう……あたしが負けるなんて……ちよつとアンタア!!」

「は、はい!」

やべ超怒ってる、超怒ってるよコイツ・・・前から怒ると手がつけれないんだよなあ、先輩になだめ方のアドバイスをよくしてもらったつけ・・・

「名前、教えなさいよ・・・」

「えっ？神楽坂だつて」

「ナ・マ・エ！名字じゃなくて下の名前よ！さつさと名乗れコラ、そのマフラー締めるわよ?!」

「ちよつ、言う前から締めてつから締めてつから・・・ギブギブ！言うから、言うからはなしてくれえ!!」

「・・・よろしい」

締めるわよ!?!じゃなくて締めてるわよ!!に訂正すべき。バイオレンスにも程がある・・・

「わ、笑うなよ?——だ」

「・・・プツ、アツハツハツハ!!」

だ、大爆笑されたー……

「笑うなつつつたのに……」

「ごめんごめん！あたしの昔の知り合いも同じ名前でき、それ含めて面白くつてついで……大丈夫、カツコいいよ？アッハッハッハ！」

「なんか試合に勝って、勝負に負けた気分だけ……もう次のデュエル行くぜ？」

「そーね、初から一敗しちゃったから次で挽回しないと。十代はランク5だから負けてらんないわ!!……じゃーまたね、あたしに勝つたんだからランク落ちなんかすんじゃないわよ?——君。アハハハ!!」

人の名前で笑いこけながら、彼女は手を振り去ってゆく。最後まで失礼な女だぜ……

「ああ、またな……隼子」

「……えっ？」

もえで間違いない。

こいつは枕田ジュンコ以上に苦手なんだよ……

「ま、マッチングはランダムなんだから仕方ないだろう？無茶言うなよ」

「騙らつしやい！そんなの仮病でも使つて棄権すれば良いでしょうが!!オメーが関わると準ちゃん不幸になるんだよ昔っからあ!!」

クロノス先生！対戦相手から某元全米チャンプ張りの罵声を浴びています！ジャツジキルは可能でしょーか逃げ出したいっ!!

「お、俺をあいつに紹介したのは先輩だろ!?そもそも先輩とアンタがくつついたから……」

「問答無用!ジュンコさんに不幸をもたらす輩は、このわたくしが成敗してくれますわ!!」

「ディスク構えるつて事はちゃんとデュエルはするんだな……」

「それが今のわたくしのいる世界の法則!文句があるならデュエルで語る!みせてあげましょう、本日のわたくしのデッキ……アブソリュート・タン【絶対舌魚】の力を!!」

「さっきの舌魚使いアンタかい?!!」

『それデーハ、始めるノーネ!!』

「デュエル!!」

俺の学園生活は・・・今日も平和です。

終。

EX8羽 鳥使いの夏休み放浪記①

○月×日

パラドツなんかさんの襲撃により、屋上から（フ）ライディングデュエル・アクセスレーションしたあたし達は、無事地面に着陸しスピードの世界に入り込むことができた。

なんで無事だったかってーと、チドリとライキリを踏み台にした。

『解せぬ』

あつ、こら。勝手に書き込むなあんた達！

・・・なお、ももえのシャーク号は、シャークさんの化身（ダークナイトさん）に運搬されて平気そうだった、バイクに乗った意味？モモに聞いて下さい。

パラドなんかさんは着陸時、なんとまあ恰好つけていた割には豪快に転倒・・・あれ、あたしらの不戦勝じゃね？とか思った矢先、流石は未来産サイボークだけあって即座に起き上がり再疾走。多少バチバチショート音を鳴らしながら露骨に不機嫌なオーラを纏って

「貴様達、絶対に許さん!!」

などと言いなながらこちらに向かってきたのだった。悪ノリしたあんたが悪くね？

んでまあデュエルの方はとゆうと・・・慣れないライディングに加え、原作効果のインチキsinモンスターズの筋力はやばかったんだけど、モモのいつもの（七皇の剣）とダーク・リベリオン先生でなんとかした。

エクシーズ知らなかったみたいだしね、仕方ないよね。

あ、まだスピードスベルなんかないので普通に魔法使ってみました。漫画版5Ds.ノリね。

○月△日

なんやかんやでパラさん始め、馬鹿に恨みを持つ連中から狙われることになったあたしらは・・・周りの人間に迷惑をかけないために旅立ちを決意。なるべく一カ所に止まらぬよう、夏休み自転車日本1周ならぬDホイール日本1周をすることになった。

社長にうやむやに事情を説明したところ、うちの夏休みの課題がDホイの実戦テストに書き換えられました。ちなみにこの日記は、そのレポートの下書きもかねてたり、かねてなかったり。

あとパラドックスが青眼の1枚を、この時代の社長から奪ったらしく・・・

「次襲撃されたら絶対にとり戻して来い、小娘共オオオオ!!」

と、お叱りをうけてしまった。sin world初手で壊したから敗北してもピンピンしてたのよね、あの人。

つーか、青眼を磨くために机の上に出したままWC行ってたら盗まれたって・・・
シニール過ぎます社長!

○月?日

とりまKC社の空き部屋で一泊したうちら二人は、北へ迎え出発した。北へ向かった理由は、別に大したことなく

「暑い!北へ向かえば涼しくなるはずですわ・・・精神的に!!」
「精神論かよっ!!」

○月◎日

夕暮れ時、人も車もあまり通らない山道をライディングしながら

「今日泊まるところ探そっか〜」

「予約無しに今から泊めてくれる都合のいい宿がありますかねえ、ダークナイトさんにグ〇らせませすわ」

『イラつとくるぜ』

などと、緩い会話を繰り返していると・・・出ました出ましたパラさん再降臨。

「ダークネスの福音め・・・あの時の雪辱を晴らしてくれるっ!!」

初手ご立腹でした。

いや、派手にコケたのは自業自得だし? 2対1を承諾したのはあんたじゃね? 的なツツコミをしていると・・・なんと後ろから、Dホイっばいセロハンテープが颯爽登場。皆大好き(ブルーノ)さんか!?!と違って二人してガタツとしたの・・・だけど残念、乗っていたのは女性? でした。

しかもよくみたらセロハンテープ色違うし、あんなん未来組にいたっけかな?

「……（無言の指クイ）」

無口！喋る気もないってか!?! どうやらあたしの相手はこの謎のDホイーラー（♀）がしてくるようだったのその喧嘩買うことに。

パラさんとタイマンのももえも心配だったけど、売られた喧嘩は買います、女子だもの。

『えっ?』

だから勝手に書き込むな馬鹿コンビ、しかもボールペンだし消えないし!

そんなこんなでアクセラレーション開始したのだが……この無口っ娘が強い強い、先行《サンダーシーホース》で《エレキリン》2枚サーチしてきてね、ヤダ可愛い。とか油断したら初手《ライオウ》召喚ガン伏せエンド。

畏耐性あるクリス+カルトで殴りかかろうとしたら安定の《オネスト》返り討ち。

エレキリンだけなら大丈夫とか思ってた、ライフ3000払って《雷仙神》のおまけ付き……本気で駄目かと思いました。

けどサンダーやらライトニングやら言われて黙って負けてられますかっての! ってわけで、ノートウングライキリチドリソハヤソハヤオニマルオラア! でゴリ押ししました。

「ダークネスの福音……天上院吹雪の残滓め……」

だからその呼び方やめーや未来組、あたしが悪役みたいになってるし……
なんとか勝ったあたしが、モモの元へ駆けつけるとあら鬼畜。調度《s i n t o u l r e e》
《s i n t o u l r e e》をトリシューラで除外してフィニッシュをかましてやりました。

しかも、案の定本人と合体していらしたので氷漬け。

いいのかなー、歴代主人公が三人がかりだったボスキャラこんな扱いで……まあ
「私のデツキはまだ未完成だ」とかなんとか言ってたし、超融合映画の時より弱体化して
るってわけで……いいわよね？

とりませっかく動きを止めたので、馬鹿コンビにデュエルディスク部分だけうまく発
掘させて、青眼は回収しておきました。

他のカードは……いつの時代のカイザー先輩やらヨハンやらからとったのか判ら
ないし、返す手段も無くね？と、悩んだあげく放置。

さっさとその場を去りました。

○月○日

「社長の青眼取り返しましたー」

ってメールで送ったら10分で飛んできた、怖い。

けどご褒美に旅費をたんまり貰いました。流石社長、太っ腹あ！

ついでにデュエルをすることになったけど、モモと二人がかりでボッコボコにされました。強すぎい！パラさんより絶対強いわこの方!!

馬鹿がいなくなって、ストレスの捌け口が無くなったから色々貯まっていたらしいです……

○月×日

今日は襲撃者もいないようなので、モモと特訓デュエルを行っていました。

だがその最中に原因不明のトラブル発生。

ブラック・バードさんがエンストしやがりました立ち往生。先日のデュエルが派手過ぎたん!?

うちらはメ蟹ツクじゃないし、機械いじりは専門外の為さあ困った。

前世でバイク持ってたけど、修理とか業者だったしなあ……そんなわけで、KC社にヘルプの連絡したらその場所だと半日はかかると言われて更に困った困った。

リアカー呼ぶ？頑張って麓まで押す？そんな相談をしていると

「ねえソレ、私が……診ようか？」

どこから来たのか……水色アホ毛の女の子が、突然話しかけてきた。

一章 鳥使いの遊城十代●●り奮闘記GX

1羽 アンタの効果名と攻撃名が気になってしょうがない。

私の名前は枕田ジュンコ。・・・いや、枕田ジュンコのはずだった。

デュエルアカデミア中等部を卒業して夏休みのある日、私の元へ奇妙な荷物が届いた、段ボール3箱くらいで。

宛名は・・・夏実佐馬?! 誰これ全く記憶にないわよ!! と、思いつつ開封してみると、大量のDデュエルモンスターズMのカードと1枚の手紙が入っていた。

《やあ、僕神様だけど元氣してる? あの時仲間違って殺しちゃってごめんね☆お詫びに君の大好きな遊城 十代がいる、遊戯王GXの世界に転生させたから許してね! その世界で1番魂の質が近かった枕田ジュンコに魂移したから(爆) P.S. おまけで生前君がもつてたカードも郵送しといたから、第2の人生をエンジョイしてね(笑)》

(笑)、じゃねーよ!! なんだこのふざけた文体は! 夏実佐馬ってカミサマかよ?! しかしこ

んな手紙がきつかけで、前世のことを思い出してしまったのだ。

しかも死ぬ寸前の記憶が彼氏と喧嘩別れして、涙ながら歩いていたら交通事故とゆうありがちすぎる展開だった。しかも喧嘩の原因が「決闘を辞めて欲しい。」そう、生前も私は決闘者だったのだ。好きなカードだけ集めるエンジョイ勢だったけど。んだよチクシヨ、カード集めてての何が悪いんだよ、お前が本棚に隠してるR-18のコレクションのがよっぽどひどいだろうが!!

てか前世の名前松田 隼子だったんだけど?!ほとんど誤差だね、そりゃ枕田ジュンコになつても可笑しくない・・・か?てか男だったら前田隼人君だったんじゃないかな?はいそこ、不審者・腹パンとか言わない。妹いないから、瑠璃!とか叫ばないから。

だが悪いことばかりではない、あの前世で好きだった遊城 十代に生で会えるのだ・・・いやむしろ、最終回までヒロインがヒロインしてなかったから私がすぐ変わるまであるか?!明日香さん差し置いてヒロイン枠狙うか!!?

よっし、やってやらあー!今世では決闘大好き人間を彼氏にしてやる!!
と、ここまで前世の記憶()が戻って数分で考えたことである。

とりあえず十代と遭遇する前にデッキ弄ろう、今までハーピーばつかったから少し別の子達使つてもいい・・・よね?

あつ、前世のマイカード全部ってS シンクロ ・ X エクシーズ ・ P ペンデュラム カードあんじゃん、大丈夫なの

これ・・・ま、いつか。

へスワローズ・ネスト？そんなカード・・・私は36枚持つてるよ。〳

耐えた、耐えた、耐えたぞお!!記憶が戻って早2ヶ月!ようやつと私、枕田ジュンコが十代と本編で初めて絡めるチャンス・・・丸藤 翔の覗き疑惑の日である!

本当は入試でクロノス先生にガツチャかました後すぐに絡みたかったけども!だが、いきなりエンカウントして「ファンです!」とか言っちゃって、どこその月刊少女漫画のアシスタントみたいな結果になることは目に見えている。まあ、こつそり見には行きましたがね?「あく生十代いいわあく」とか遠くから眺めていましたが。なおハネクリボーは見えませんでした、残念。カミサマもそこまでサービスはしてくれなかったようです。

だが、そんな事はどーでもいい!今!現在!私の前に十代君が立っていることが重要

です!!女子寮裏の湖の上でだけどな!

※原作 遊戯王GX3話参照

「ボルティック・サンダー!!」

「キャアアア?!」

今、明日香さんと十代の決闘が終わった・・・この時が潜在一隅のチャンスよ私!ここ逃したらたしか・・・SAL辺りまで絡みないわよ!彼と絡めるなら風呂覗かれようが丸藤翔がどーなろうが知ったこっちゃないわ!?

「ガツチャ!楽しい決闘だったぜ!!」

「負けたわ・・・」

「そんな、明日香様」

「ぐつ、グーゼンよグーゼン!じゃなきやオシリスレッドなんかは明日香さんが負けるはずないわ!」

とりあえず言いたかないけど場に合わせる、前世の記憶が戻る前以前までの私なら言うことだ。

「辞めてジュンコ、ももえ。負けは負けよ・・・」

「明日香さくん……」

……ここだあ!!

「このままじゃ納得行かないわ！遊城十代！アタシともデュエルしなさい!!」

「え、なんでだよ？明日香に勝ったんだからいいだろ？翔は許してくれよ！」

クソツ、生十代に動揺して思考が混乱しているわ。おおおお落ち着け私。このまま生
K●●NヴォイスをPDAで保存して、部屋帰ってベッドにダイブしてセルフ耳レ●プ
したいか思っちゃだめだ、

この日の為に脳内シミュレーションを1日 30回はしたはずよ……冷静だ、冷静クール
に行くんだ。クール

「しよ、正直丸藤翔のことは、も、もうどうでもいいわ！ただ誇りたかきや……」

「たかきや？」

「……ジュンコ？」

……ッ！ 嘸んだのよ！ 言わせんな恥ずかしい！！

「……誇り高きブルー女子の実力を、この一戦だけでわかったつもりでいられるのは我慢ならないわ！ アンタの鼻っ柱へし折ってやる！！」

「ムッ、そこまで言うなら相手になってやるぜ！！」

チクシヨー！ 予定より3倍嫌な女になってるよお……言い過ぎたかしら？ とりあえずデュエルに持ち込めたからよしとしましょうか、嫌われてないよね？ 大丈夫よね？！

「私に勝てたなら、見直してあげるわ！」

「デュエルツ！！」

「先行はアタシよ！ アタシのターン、ドロー！」

待たせちゃったわね皆。久しぶり(?)に貴方達の出番よ！

「私は《B》ブラックフェザー F―銀盾のミストラル》を召喚、守備表示！」

《B》ブラックフェザー F―銀盾のミストラル》攻1000/守1800

「ぶ、BF?! ジュンコ! 何よそのモンスター! 貴女〔ハーピー〕じゃないの?」
 「ジュンコさん? もしや・・・」

そう、前世の私の一番の愛用デッキ・・・かつて世界を制したBFである。え? ガチデッキ持ち込むなって? フフフツ、残念だったわね・・・私くらいの特リマニアになると、全種類愛でたいからって理由でモンスターはハイランダー状態よ! デッキ枚数増やしてもBFは種類多くて入りきらないからサイドデッキまで全部BF尽くしよ! 嘗めんじゃないわよ! (??)

まあデッキにモンスター増やし過ぎたせいかな手札フルモン状態でやばかったりするのだけど。

「フフ、明日香さん。私がいつまでも貴女の後ろにいて満足してても? 女王

の友人なら背中を護れるくらい強くあろうとしますよ、その為なら一つのデツキに拘ってばかりはいられません」

「ジュンコ・・・！」

やべえ明日香さん信じちゃってるよ・・・よくもまあ口から出任せいうなあ私、正直このデツキ構成じゃ新規前世からの持込カード入れたハーピイのが強いくらいよ・・・昼間の実技でブルー男子ワンキルしちゃったしね、ごめん！名も知らぬ男子！

しっかしミストラル可愛いな、ハーピイもエロ可愛いかったけど私はやっぱりBFの方が好きだわ。

「私はターンエンドよ」

ジュンコ H5 LP4000

フィールド現状

ブ
ラ
ク
ク
フ
エ
ザ

《B F ー銀盾のミストラル》(守)

「おお、なんか見たことないモンスターだぜ、燃えてきた！」

その反応が見たかった！デッキ替えてみたかいたあったかも！

「俺のターン、ドロ―！手札から《融合》を発動！手札のスパークマンとクレイマンを融合し、《E・HERO サンダー・ジャイアント》を召喚するぜ!!」

、※原作版《E・HERO サンダー・ジャイアント》

融合・効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1500

「E・HERO スパークマン」＋「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時発動する。

元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター1体を選択して破壊する。

出た！十代さんの初手融合だ！サーチ無しで素材揃ってるとかどうなってるのよ。

いいぞもつとやれ！

「サンダー・ジャイアントが融合召喚に成功したとき自身の攻撃力以下のモンスターを破壊する！銀盾のミストラルを破壊だ！へヴェイパー・スパーク！！」

原作とOCG版じゃたしか効果違うのよねアイツ、こっちのが使いやすそう。

『ピーツ！』

ごめんねミストラル。

「行くぜ！サンダー・ジャイアントでプレイヤーへダイレクトアタック！！へボルティック・サンダー！！」

ぜひお願いします！じゃなくて残念でした、ね。

「キヤアアア?!・・・なんてね」

「えっ、どうしてライフが減ってないんだ?!」

「ミストラルが破壊されたターン中、私への戦闘ダメージは0になるのよ、残念だったわね?」

、《BF―銀盾のミストラル》

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 1000 / 守 1800

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、

このターン自分が受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする。、

「くっ、ハネクリボーみたいな効果か・・・だったらカードを2枚セットしてターンエンドだ!!」

十代 H1 LP4000

フィールド現状

《E・HERO サンダー・ジャイアント》（攻）

セットカード

セットカード

ふうく掴みはおつけー、こっから巻き返すわよ！

「私のターン!!おつ、【闇の誘惑】!デッキから2枚ドロして手札の闇属性《BF―天狗風のヒレン》を除外」

、 《闇の誘惑》

通常魔法

(1)：自分はデッキから2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する。

手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。、

やたっ!結構いい手札になったかも?やってやりますか!

「永続魔法・《黒い旋風》!BFモンスターの召喚時にその攻撃力以下のBFを手札に加えることが出来る。さあおいでっ、《BF―暁のシロッコ》!」

「いきなりレベル5モンスターを召喚した?!」

反応がいちいち新鮮で可愛いわね初期十代・・・そしてシロッコもカッコ可愛い。

、《黒い旋風》

永続魔法

(1)：自分フィールドに「BF」モンスターが召喚された時にこの効果を発動できる。

そのモンスターより低い攻撃力を持つ「BF」モンスター1体をデッキから手札に加える。

、《BF—暁のシロッコ》

効果モンスター

星5／闇属性／鳥獣族／攻2000／守 900

(1)：相手フィールドにモンスターが存在し、

自分フィールドにモンスターが存在しない場合、

このカードはリリースなしで通常召喚できる。

(2)：1ターンに1度、自分メインフェイズ1に

自分フィールドの「BF」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、そのモンスター以外の
 フィールドの「BF」モンスターの攻撃力の合計分アップする。

この効果を発動するターン、対象のモンスターしか攻撃できない、

「この子は相手フィールドにのみモンスターがいる場合、生け贄無しで召喚出来るわ。
 そして《黒い旋風》の効果でデッキより攻撃力2000以下、1100の《BF》そよ
 風のブリーズ》を手札に加え効果により自身を特殊召喚っ！この子は効果で手札に加
 わった時に特殊召喚出来るわ！まだまだあ！出ておいでっ！《BF》残夜のクリス》！
 《BF》黒槍のプラスト》！《BF》疾風のゲイル》！この子達は場に自身以外のBFが
 いる場合特殊召喚出来るのよ！」

「な、なんか滅茶苦茶展開してきたっス!？」

「いつ、1ターンに5体もモンスターを繰り出すなんて！」

「……」

、《BF》そよ風かぜのブリーズ》

チューナー（効果モンスター）

星3／闇属性／鳥獣族／攻1100／守 300

このカードがカードの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、

このカードを手札から特殊召喚できる。

このカードをシンクロ素材とする場合、

「BF」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

、《BF―残夜のクリス》

効果モンスター

星4／闇属性／鳥獣族／攻1900／守 300

「BF―残夜のクリス」の(1)の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：自分フィールドに「BF―残夜のクリス」以外の「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2)：このカードは1ターンに1度だけ、

魔法・罫カードの効果では破壊されない。

、《BF―黒槍のブラスト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

(1) : 自分フィールドに「BF―黒槍のプラスト」以外の

「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2) : このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、

その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

、《BF―疾風のゲイル》

チューナー・効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 400

(1) : 自分フィールドに「BF―疾風のゲイル」以外の

「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2) : 1ターンに1度、相手フィールドの

表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

キヤー！皆可愛い！！特にゲイルはやばい！ソリッドビジョン最高だわ！全員モフモフして回りたい！！って調子こいて展開し過ぎたわ・・・
ペンデュラム P 召喚かっつての、激流葬とか無くてよかつたあゝ。

「すっげー展開力!?でも、全員《サンダー・ジャイアント》より攻撃力は下だぜ!?!」
 「フフン、慌てんぼうさんね。」

「え?」

このまま効果発動オラア！でもいいけど、伏せ2枚もあんのよね・・・回りにあんま人いないし、使っちゃつてもいいかな、いいよね?!1度恥ずかし気も無く全力で、あれ叫んでみたかったのよ。前世で決闘の師匠（元ヤン）も「どんなデツキを使つても構わんが、決闘中は全力で相手と向かい合え」とか言つてたしね！行くわよ、全力で!!

「ゴホンツ!・・・レベル4の《残夜のクリス》にレベル3、へチューナー〜モンスター
 《そよ風のブリーズ》をチューニング!!」

「ちよつ、ジユンコさん?!」

「な、なんだ?!」

「漆黒の翼翻し、雷鳴と共に走れ! 電光の斬撃! シンクロ召喚! 降り注げ、アサルト《A B F》驟雨のライキリ》!!!」

かの名刀を携えたイケメン鳥人が姿を現した!! なんとゆーか、かつ・・・

「カッツケー?!」

「かっつっつこいいー……!!!」

「へっ?」

「ヤバイヤバイヤバイ! ライキリさん今のもう1回やってもう1回! 刀抜いて火花シャアアアって散らすとこ! 格好良すぎでしょ! ムービー撮るからもちかい!! ……ハッ?!」

「えーつと・・・」

「……ゴホン！しつ、失礼？私も初めて呼ぶからつい、ね？生ソリツドヴィジョンで視たら想像以上に良かったものだから。」

……十代が駄目だったら、ライキリの嫁になろう。

「確かにすつげえ格好いいな!!なあなあ、今のどうやったんだ?!」

あんたがッ、格好いいわ……いや、可愛いかな？

「フッフ、秘密よ秘密……女の子は秘密を着飾って生きるモノなんだから。私に勝てたら教えてあげてもいいわ……」

喋る切っ掛け作って全力で語りたいけど、某早乙女さんのように最初っから好意全開だと逆に引かれそうだからね……私はじわじわ向こうから興味持ってくれるように攻めるわよ。

「ジュンコ、貴女そんなキャラだっけ？」

「今、多分頭の中真っ白ですわね・・・」

「クーツ！だったら絶対勝ってやるぜ!!」

「フン、勝てるかしら？ 《驟雨のライキリ》効果発動!! 1ターンに1度、場に存在する他のBFの数だけフィールドのカードを破壊する!!」

「な、なんだって?!」

「ライキリ以外にBFは・・・3体!」

、 《A BF—驟雨のライキリ》

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／鳥獣族／攻2600／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：「BF」モンスターを素材としてS召喚したこのカードはチューナーとして扱う。

(2)：1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドの「BF」モンスターの数まで、

相手フィールドのカードを対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「そういえば効果名なんだろう？クロウ様何度も出してる割に言っていないわよね。適当に・・・」

「えーと・・・へ立 花 道 雪！！」

「なんで戦国武将?!しかもマイナー!!」

名刀《雷切》の所持者だったと伝えられています↑調べた。

「くっ、速攻魔法【融合解除】！《サンダー・ジャイアント》を《スパークマン》と《クレイマン》に分離！守備表示だ！」

、《融合解除》

速攻魔法

フィールド上の融合モンスター体を選択してエクストラデッキに戻す。

さらに、エクストラデッキに戻したそのモンスターの融合召喚に使用した

融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、

その一組を特殊召喚できる、

、《E・HERO スパークマン》

通常モンスター

星4／光属性／戦士族／攻1600／守1400

様々な武器を使いこなす、光の戦士のE・HERO。

聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ、

、《E・HERO クレイマン》

通常モンスター

星4／地属性／戦士族／攻 800／守2000

粘土でできた頑丈な体を持つE・HERO。

体をはって、仲間のE・HEROを守り抜く、

なるほど、さつきあれで1ショットを狙ってたわけね。

「巧くかわしたわね……だけど守備表示なんて意味ないわよ！《暁のシロツコ》効果発動！場のBF皆可愛い……じゃなくて！場のBF全ての攻撃力を対象の1体に集約し、

他のBFの攻撃権を破棄する！皆の力を《黒槍のブラスト》に、《ブラック・チャージ》
！！」

《BF―黒槍のブラスト》 攻撃力1700+1300+2000+2600=7600

「こつ、攻撃力7600だつてえ?!」

「そして《黒槍のブラスト》は守備モンスターと戦闘を行ったとき貫通ダメージを与えるわ・・・バトルよ！《黒槍のブラスト》で《スパークマン》を攻撃！《デス・スパイラル》!!」

vs 《E・HERO スパークマン》 守備力1400

「うわああああああ!!」

十代LP4000↓0

WIN ジュンコ

「。。。。。」

や・・・やっぱーい！やり過ぎた?!今の手札で出来る全力出し切ってみただけ不味かった?!ワンシヨットは駄目だったかな、印象最悪かなあ?!

「めっ、」

め?

「めっちゃくちや強いなお前！明日香もつえーとかおもってたけども、あそこからワンキルかよ！俺感動しちやったよ!!なあなあ！名前なんつったつけ?!」

こっ、これは・・・「計画通り」(ゲス顔)

「なっ、何よお・・・対戦相手の名前くらい覚えておきなさい！松田・・・じゃなくて、枕田ジュンコよ!!」

「ジュンコか、よろしくな！また決闘してくれよ！俺もっとお前の(デッキの)こと知

りたいぜ!!」

くつ、わかっちゃいるけど口説かれてるみたいに脳内変換されてしまう!! 耐えるのよ
ジュンコ、冷静を保つのよ!

「しよ、しよくがないわねえ?!・・・そこまで言うならまた相手してあげなくな
もないわよ?!」

「ジュンコ、顔がにやけてない?」

「アニキ、女の子に強引過ぎつスよ・・・」

「なるほど・・・そうゆうことだったのでね、隼子さん♪」

こうして、私と十代のファースト・コンタクト計画はなんとか成功したのであった。

256 1羽 アンタの効果名と攻撃名が気になってしょうがない。

つ
づ
・
・
く
・
・
?

2羽 あの兄妹のカードは人気のわりに扱いが不憫すぎる

—十代ファースト・コンタクト計画(○)翌日—

「おーッス、ジユンコ〜！話ってなんだ〜？」

放課後ー夕陽がよく見えるこの場所……私は十代を人気の無い屋上に呼び出していた。昨日ちやっかりPDAの番号はゲツツしといたのだ！

「あ……あのね？遊城クン」

「なんだよ、他人行儀だなく。決闘したらもう友達だろ？十代でいいって！」

「!!じゃ、じゃあ！十代！」

「お、おう?!」

(なんだか嬉しそうだな……)

「そ、その……ッ。じ、実は私!!」

「うん？」

言え！言うのよジュンコ！昨日帰った後、あんなに練習したじゃない！！（脳内で）
女は度胸よ！！

「……夏休みに、パック買ったら珍しいHERO出たんだけど欲しい？」

「おっ、まじかよ？見せてくれ！」

「……………」

「「なんじゃそりゃーい!!!」」

「キヤアア?!な、何してるのよアンタ達！」

なんか明日香さんとももえ、丸藤翔までいるし?! え、見てたわけ? 物陰からずつと見てたわけ?!

「ジュンコさくん、そこは貴方のことがくモニヨモニヨ、じゃないんですか?!」

「なんかガツカリツス……」

「そうねえ……このシチュエーションで、顔赤くしてモジモジしてたら普通そう思うわよねえ」

「なんでそうなるのよ! てかなんで居るの?!」

「え、今日の授業中ジュンコさんずーっと上の空でしたし……」

「昼休みになんかニヤニヤしたり、悩んだりしながらPDAと向かい合ってた……」

「放課後全速力で居なくなつたので、容易に想像出来ましたわ」

「そこでたまたま出会った僕が、兄貴が「チョット昨日のジュンコに屋上呼ばれたから行ってくるぜ!!」って言ってた話を二人にしたんスよ」

「期待して来てみたら……残念ですわ〜」

「何残念がつてんのよ! ち、違うからねえ?! 私はたまたま見たことないHERO当たっ

たこと思い出してね?! どうせ私使わないし! コイツくらいしか使い手知らないから譲ってあげてもいいかなって、ね?」

「「フーン……」」

3人共、ジト目だと……?! お、おのれ丸藤翔! 余計なことをしておってえ……っかなんで意気投合してんのよっ!

「それよりさ! その珍しいHEROってのを見せてくれよ!」

「う、うん」

純粹で助かるとゆうか、残念とゆうか……。

「はいコレ」

【E・HERO エアーマン】

【E・HERO キャプテン・ゴールド】

【E・HERO シヤドーミスト】

【E・HERO ブレイズマン】

【E・HERO ノヴァマスター】

「おお、どれも見たこと無いHEROばっかだぜ！」

キヤアアアアアアアアッ!!顔が、顔が近いわ十代さん!!なんで横から覗くのよありがとうございます!!心臓バクバク鳴ってんだけどばれてないかなこの距離?!いやもういっそばれろ!!

・・・見たこと無くて当然だ、前世の私が持ってたカードカミサマからの輸送品なのだから。HERO作らな
いけど鑑賞用に師匠からパクつとして良かったあ。

おつといけないいけない、作戦に移らなければ・・・。

「ど、どう?貴方が欲しいなら譲ってあげてもいいわよ?」

「おおっ!マジかよ?!」

「た、だ、し、私に決闘で勝ったらね?」1回勝つ度に1枚。何かと交換したげるわ」

うくん、ちよつと露骨過ぎたかなあ？見方変えたら嫌な女よねえ私……。

小声「あれって、ただ兄貴と決闘したいだけなんじゃないっすか？」

小声「モノで釣るとは、ジユンコさん……案外セコいですわね」

小声「やめて二人とも、ジユンコなりに精一杯の作戦なんでしょう。あの娘が素直に好意剥き出せるわけないわ、端からみたらバレバレな所が可愛いじゃない。しかし、ジユンコが十代をねえ……」

聴こえてるんですよー！だから人気の無い場所に呼んだとゆうのにつ！てか明日香さん、現時点じゃ十代への興味薄い？わざわざ呼びつけてデュエルしたくせに……ハッ！まさか正嫁の余裕か！（錯乱）

「えっ？お前と決闘も出来て、さらに勝ったら特典付きだつて！？よっしゃー！早速やろうぜ！！」

「待つて待つて！……もふたつ条件よ」

「ん？何だよ。」

「挑戦は1日3回までにしてちょうだい、私が持たないわ（理性的な意味で）。あとデュ

エルする場所は人目のつかない場所でおねがい」

「構わないけど・・・どうしてだ？」

「昨日使ったコ達はあまり人前で使いたくないのよ。・・・珍しいカードらしくてね？この学園、残念ながらレアカードと知るや狙って来る奴いるのよ。【ハーピイ】でなら何処でも相手したげるけど、アンタはBブラックフラグFエザ達とも戦いたいんでしよう？」

「そうだな、ハーピイも気になるけど・・・昨日のアイツら凄かったもんな。特にゲイルって奴、スッゲーお前になついていたもんな？」

ゲイルが？なついていた？ホワアイ？

「へっ？なんの話よ」

「えっ?!・・・わ、わりい何でもないぜ！ともかくさ、ここにいる皆は昨日見たから問題ないだろ？決闘しようぜ!!」

「う、うん」

なーんかはぐらかされたわねえ・・・。

「デュエル!!」

「微笑ましいわねえ。」

「ですわねえ。」

「兄貴、羨ましいっす。」

《バブルマンが原作効果だど?! インチキ効果も大概にしろ!!》

「さーて、今日はどの子達使おうかしら?」

翌日の放課後、私はまた十代を呼び出してデュエルの約束をしていた。

すっかりシンクロ使って二勝一敗かあ・・・流石主人公とゆうかなんとゆうか。

悔しいけど、記憶が戻る前以前までの私じや全然敵わなかったわねきつと、ドロロー力が違い過ぎるわ。

HEROのストックはまだまだあるけど、あんま負け続けて愛想尽かされたくもないし、十代に俺ツエー某にもなつてほしくはない。あくまでカードは口実だ。

目安は1日1敗まで、勝率7／8割ね！気を引き締めていくわよ！

「ようジュンコー！今日も楽しもうぜー！」

うーんこの、清々しいまでのデュエル馬鹿。笑顔が眩しいっ！

そーだ、今日は森の奥で回りに誰もいないからxyzのデッキでも使おうかな？使わなくても戦えるっちゃ戦えるけど。

「あ、居ましたよ万丈目さん！枕田です！」

．．．．．あ？

「やあ、探したよ枕田ジュンコ。まさかこんな森の中に居るとはねえ．．．」

「おつ、万丈目じゃないか！どうしてここに？」

「チツ、ドロップアウトも一緒か」

うつわあく万丈目君だあく、私とももえには明日香さんの友人って理由で微妙に紳士ぶる初期万丈目君だあく。

「まあいい、今回は貴様には用はない。用があるのは君だ、枕田ジュンコ君」

クンづけに違和感しかねえ。正直苦手だわ万丈目君。

サンダー化してくれたほうがよっぽど面白格好いっての。

「何よ、私アンタ達になんかした記憶ないけど？」

「とぼけるな！俺に一昨日ワンターンキルなんかかましてくれやがって！」

「あ、あんた誰だっけ？」

「慕谷だ！中等部からの同級生だろ、覚えろよ！」

あゝこいつ万丈目君の取り巻きだったつけ？興味無さすぎて名前とか知らなかったわ。

「で？ワンキルかましたくらいで何よ。万丈目君に仕返しでもしてもらう気？ちっちゃい男ね」

「そんなつもりはない、ただもう一人の友人、取巻も、君に昨日の実技で瞬殺されたらしくてね。．．．失礼だが中等部までは、そこまで強くなかったと思っていた。そこでイカサマでもしてるんじゃないかと」

「ふくん、そんでイカサマ防止の見張り？アンタって意外と友達思いだったのね。取巻ってのはこないの？」

「昨日から部屋に閉じ籠って震えている．．．「ハーパイ怖い、ハーパイ怖い」と連呼しながらな」

メンタル弱つ?!ただ狩場張つて後ろ割つてハーピー並べてオラア!ただけじゃない。
い。

「ともかくだ!取巻の仇も俺が討つ!今度はイカサマなんかさせねえ!」

あー面倒くさつ、イカサマなんかしないってのに。そんなことしたら師匠(元Y)に
頭グリグリされるつての、女子にも容赦ないんだからあの人。

「しよーがないわねえ、受けてあげるわ。万丈目君、イカサマ防止に横から見てもいい
わよ?後ろは止めてね手札見えるから」

「了解だ。手札を教えて、こちらがイカサマをすと思われるのも癪だしな」

「おおく、そういうや結局【ハーピー】はまだ戦つてるところ見たことないな！楽しみだぜ！」

ふっ、十代に応援されるだけで負ける気がしないわ……。またサクつと終わらせてやる！

「デュエル!!」

「後攻ワンキルが嫌なんでしょう？先行はもらうわよ、私のターン!!」

「チツ、いいだろう」

さつてと……。あ、あるえ？デッキ間違えた?!【ハーピー】じゃないしこれ!!
ヤバイって！十代に使おうと思つたデッキそのままだコレ!!

「ん？どうした、顔色が悪いが」

「なっ、なんでもありませんことよ?!ホホホホ・・・」

れれれ冷静になれ私、万一に備えあらゆるグッズは微調整済みよ。普通にやってもなんとかなるわ・・・多分。

「私は《ブリザード・ファルコン》を召喚!」

「何イ、【ハーピー】グッズじゃないだど?!なめやがって!」

「おっ、また新しいグッズかよ。ジユンコ!」

「アンタに使う予定だったんだけど間違えたの・・・、お楽しみ奪ってごめんね?」

今回は某鮫妹様イメージの、水属性鳥獣中心デッキである。なぜ《ブリザード》でカテゴリー化しなかったコ●マイ!!かわいから使うけどな!

「へっ、落ちこぼれのレッドと随分仲が良いようだな!ブルーの恥さらしめ!!」

・・・ああん?!

「ちよーつと聞き捨てならないわねえ、アンタ・・・凍らすよ?」

「ヒツ?!」

「私ごときにワンキルされるアンタより、十代のほうが・・・よつつつっぽど!十万倍

は!!強いっての!!!」

「ま、枕田はあんなキャラだったか?以前から気が強い女とは思っていたが・・・」

「さ、さあ〜友達になったの最近だしな俺は、おつかね〜・・・」

(俺も初見ワンショットキルだったことは黙っておこう)

こいつは潰す、慈悲はない。

「魔法発動、《愚かな埋葬》!デツキから《大皇帝ペンギン》を墓地へ置き、《死者蘇生》!おいでっ!《大皇帝ペンギン》!!」

《おろかな埋葬》

通常魔法

(1):デツキからモンスター1体を墓地へ送る

《大皇帝ペンギン》

効果モンスター

星5／水属性／水族／攻1800／守1500

このカードをリリースして発動する。

自分のデッキから「大皇帝ペンギン」以外の

「ペンギン」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する。

「なんだ？様子と違って随分かわいいのが出てきたな。」

「フフフフ、今は黙して死を待て不届き者。《大皇帝ペンギン》は自身を生け贄に、デッキからペンギン2体を呼べる！行くわよ、《ガード・ペンギン》！《ペンギン・ナイトメア》！」

《ガード・ペンギン》

効果モンスター

星4／水属性／鳥獣族／攻

0／守1200

カードの効果によって自分がダメージを受けた時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、

受けたダメージの数値分だけ自分のライフポイントを回復する。

《ペンギン・ナイトメア》

効果モンスター

星4 / 水属性 / 水族 / 攻 900 / 守 1800

このカードがリバースした時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。

「ば、ばつかじゃねーの？先行ターン目で大量展開してどうするんだよ！」

「……《ブリザード・ファルコン》効果発動！自身の攻撃力が高い場合、相手に1500ポイントのダメージを与える！現在、《ペンギン・ナイトメア》の効果で全水属性の攻撃力は200上昇している！《ブリザード・ガスト》!!」

《ブリザード・ファルコン》

効果モンスター

星4／水属性／鳥獣族／攻1500／守1500

このカードの攻撃力が元々の攻撃力よりも高い場合に発動できる。

相手ライフに1500ポイントダメージを与える。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できず、

「ブリザード・ファルコン」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「なっ?!ぐああああ!!」

慕谷 LP4000↓2500

「さ、寒そく……」

「効果ダメージで来たか、先行ではなかなか有効的な手だな」

「カードを2枚セットしてターンエンド・・・。」

ジュンコ H1 LP4000

フィールド現状

《ブリザード・ファルコン》攻

《ガード・ペンギン》守

《ペンギン・ナイトメア》守

セットカード

セットカード

「お、俺のターン！」

「スタンバイフェイズに罠オープン《ダイヤモンド・ダスト》!!」

《ダイヤモンド・ダスト》

通常罠

フィールド上の水属性モンスターを全て破壊する。

その後、この効果で破壊され墓地へ送られた

水属性モンスターの数×500ポイントダメージを相手ライフに与える。

「はあ?!」

アンタに自由はない。

「全フィールドの水属性モンスターを全て破壊し、その数×500ダメージ!!凍てつけえ!!」

「ギャアアアア!!」

取巻 LP2500↓1000

「む、むちやくちやな戦術だ。」

「ぎ……残念だったな！俺の手札には《巨大化》と《ゴブリン・エリート部隊》！これ
でから空きのお前は……」

「……しゃべるな馬鹿、【激流蘇生】」

《激流蘇生》

通常罫

自分フィールド上の水属性モンスターが

戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。

その時に破壊され、フィールド上から自分の墓地へ送られたモンスターを全て特殊召喚し、

特殊召喚したモンスターの数×500ポイントダメージを相手ライフに与える。

「激流蘇生」は1ターンに1枚しか発動できない。

「……へ？」

「破壊された全水属性モンスターを復活、その数×500ポイントのダメージを与える」

「う、嘘だろおおお?!」

慕谷 LP1000↓0

「今度十代をコケにしてみなさい……これ以上に残酷な負けを体験させてやる!!」

慕谷へチーン……

「わ、ワンターンキル……だよな？」

「遊城十代、貴様も厄介な女に好かれたものだな……」

あつ、また私やり過ぎちゃった感じ？

……ま、いつか。十代を馬鹿にした罰よ罰！

「クククツ、奴から話を聞いた時は半信半疑だったが、こいつは予想以上の決闘だ……
！」

「えつ、万丈目君？」

「この俺様が、わざわざ不正の監視程度のために腰をあげるはずがなからう。ある奴に頼まれてな、枕田ジュンコ。貴様にデュエルを申し込む!!」

えー?! やつと邪魔者片付けて、十代とのイチヤイチャタイム（願望）に入れると思つたのに!!

「……お断りしても?」

「ジユンコ! 決闘者なら挑まれた決闘は受けなきゃ駄目だろ!!」

くつ、流石は決闘馬鹿類決闘馬鹿科の頂点! 断ったら十代の好感度がダウンしてしまう……これでは逃げ場が無い、卑怯な!!

「しよーつがないわねえ! 受けますよ、受けて立とうじゃない!!」

「フツ、いい返事だ。俺様はそこでくたばっている奴のようにはいかんぞ!!」

あんな^{地獄}デツキで中等部の頂点ですもんね、ある意味最強なのは知ってんのよ!

「デュエル!!」

「先行はもうぞぞ! モンスターとカード2枚をセットして終了だ!」

万丈目 H3 LP4000

あら意外、堅実な初手ね……。勢いでデッキそのままなのよね、どう攻めようかな。中等部時代に何度か勝負した結果、1回も勝てたことないよのねえ……。あつち前世じゃ地獄デッキ(爆笑)とか言ってたけど、流石メインキャラは違ったわ。

「よし、まずは《予想GUY》! デッキから下級通常モンスター、《グレート・ホワイ ト》を特殊召喚! そして《オーロラ・ウイング》を召喚!」

「あれ、ジユンコが……。鮫?」

《予想GUY》

通常魔法

(1) : 自分フィールドにモンスターが存在しない場合に発動できる。

デッキからレベル4以下の通常モンスター1体を特殊召喚する。

《グレート・ホワイト》

通常モンスター

星4 / 水属性 / 魚族 / 攻1600 / 守800

巨大な白いサメ。

大きな口で噛みつかれたら逃れられない

某神代兄妹繋がりがりってことで……。決してタキ議長ではない、イイネ？

「この子の展開手段よ！《霊水鳥シレーヌ・オルカ》！場に鳥獣と魚族がいる場合、特殊召喚できるわ！そして召喚時に場のモンスターのレベルを全部4にする！」

《霊水鳥シレーヌ・オルカ》

効果モンスター

星5 / 水属性 / 鳥獣族 / 攻2200 / 守1000

自分フィールド上に魚族及び鳥獣族モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚に成功した時、

3から5までの任意のレベルを宣言して発動できる。

自分フィールド上の全てのモンスターのレベルは宣言したレベルになる。

この効果を発動したターン、水属性以外の自分のモンスターは効果を発動できない。

「やたつ、地味に召喚条件難しくて出せると嬉しいのよねこのコ！xyz出来ないのが残念だわ。」

「フム、先程とはうってかわって堅実なビートダウンか」

「もう一丁、《伝説の都・アトランティス》！水属性モンスターは攻守2000アップよ！バトル！《グレート・ホワイト》でセットモンスターを攻撃！」

「せっかく展開してくれた所残念だが、セットモンスターは《魂を削る死霊》。戦闘では破壊されない」

《伝説の都 アトランティス》

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターは攻撃力・守備力は200ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは1つ下がる。

《魂を削けずる死霊》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 300 / 守 200

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードがカードの効果の対象になった時、このカードを破壊する。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

うげっ、これまた意外?!

手札の《ゴッドバード・アタック》かますしかないわね……。

「カードを1枚セットしてターンエンド。」
「エンドフェイズに《サイクロン》！セットカードを破壊する。」

《サイクロン》

速攻魔法

(1)：フィールドの魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。
そのカードを破壊する。

ぐぬぬぬ、いちいち使い所がやらしいわね!!

ジュンコ H1 LP4000

フィールド現状

《グレート・ホワイト・タキ》(攻)

《オーロラ・ウイング》(攻)

《シレーヌ・オルカ》(攻)

《伝説の都・アトランティス》

「最初はさぐりあいって感じだな、頑張れよー！ジュンコー！！」

「は、はい……」

（なんで急に敬語……？）

十代の応援（以下略）

「フン、あの決闘馬鹿は気づきもしないんだな」

おっしやる通りです。てかやっぱ私って、周りから見るとバレバレなわけ?!

「俺のターン。クククツ来たか、まずはフィールド魔法《カオス・ゾーン》！そして、現れろ！《トーチ・ゴーレム》!!」

《トーチ・ゴーレム》

効果モンスター

星8 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻3000 / 守300

このカードは通常召喚できない。

このカードを手札から出す場合、自分フィールド上に「トーチトークン」
(悪魔族・闇・星1・攻/守0)を2体攻撃表示で特殊召喚し、
相手フィールド上にこのカードを特殊召喚しなければならない。
このカードを特殊召喚する場合、このターン通常召喚はできない。

《混沌空間》

フィールド魔法

モンスターがゲームから除外される度に、

1体につき1つこのカードにカオスカウンターを置く。

1ターンに1度、自分フィールド上のカオスカウンターを4つ以上取り除く事で、
取り除いた数と同じレベルを持つ、

ゲームから除外されているモンスター1体を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。

フィールド上のこのカードが相手の効果によって墓地へ送られた時、

このカードに乗っていたカオスカウンターの数以下のレベルを持つ

光属性または闇属性のモンスター1体をデッキから手札に加える事ができる

え、ちよ、まっ！トーチ？トーチナンデ?!こんな時期からあったの?!あ、某ヤンデレ様が使っていたのは覚えてるわ・・・、でもなしてトーチ?!

てか、カオス・ゾーンってなんだっけ。

「おお?!なんだこいつ!!」

「教えてやろうドロップアウト、この《トーチ・ゴーレム》は自分フィールドに《トーチ・トークン》を2体精製し、相手の場に特殊召喚されるのだ!!」

「あ、あら〜わざわざ攻撃力3000をプレゼントしてくれるなんて！さっすがは万丈目君、紳士の極みねえ〜」

「目が泳いでいるぞ?枕田ジュンコ。どうやらこいつの恐怖は知っているようだな・・・バトル!《トーチトークン》で《トーチ・ゴーレム》を攻撃!!」

《トーチ・ゴーレム》攻3000vs《トーチトークン》功0

あ、あれ〜これ見たことあるパターンだ〜。

「グツ、」

万丈目 LP4000↓1000

「何やってんだよ万丈目！自分でライフを削るなんて。」

「万丈目さんだ！これでコンボは完成した、速攻魔法・《ヘル・テンペスト》!!」

ぎゃー!!嘘でしょお?!ライフ8000ならともかく、4000のこの世界で<トーチ・テンペスト>コンボなんて狙ってするう?!いやヘルって書いてあるけどもね!!

《ヘル・テンペスト》

速攻魔法

3000ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができる。

お互いのデツキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する。

「3000以上のダメージを受けた時発動、互いの墓地・デツキのモンスターを全て除外する!!俺様は17体!」

「わ、私は15体」

「合計32体を除外する!!この時、《混沌空間》に32個カウンターがたまる!!」

《混沌空間》カオス・カウンター 0↓32

「で、デツキのモンスター全て除外だってえ?!すっげーぜ万丈目!!」

「万丈目さんだ!」

ヤバイヤバイヤバイ!場のこのコ達しかモンスター居ないんですけど!あとライフ1000しか無いのが希望か?

「さらにリバース罨《洗脳解除》!《トーチ・ゴーレム》は返してもらおう!攻撃続行、《シレーヌ・オルカ》を粉碎!!」

《トーチ・ゴーレム》vs《シレーヌ・オルカ》攻2200

「きやああ?!」

ジュンコ LP4000↓3400

よ、容赦ねえ！オルカが細切れだ！

「メインフェイズ2、《混沌空間》のカウンターを8個取り除き、☆^{レベル}8の《闇の侯爵ベリアル》を特殊召喚!!」

《混沌空間》カウンター 32↓24

なんか強そうなの来たし、あんなの万丈目君のデッキにいたあ?!

「さらに《神秘の中華なべ》で《トーチ・ゴレム》を生け贄に、ライフを3000回復する！ターン終了だ。」

《洗脳解除》

永続罫

このカードがフィールド上に存在する限り、

自分と相手のフィールド上に存在する

全てのモンスターのコントロールは、

元々の持ち主に戻る。

《闇の侯爵ベリアル》

効果モンスター

星8／闇属性／悪魔族／攻2800／守2400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

相手は「闇の侯爵ベリアル」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

モンスターを攻撃対象に選択できず、魔法・罠カードの効果の対象にする事もできない。

《神秘の中華なべ》

速攻魔法

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。

生け贄に捧げたモンスターの攻撃力が守備力を選択し、

その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

万丈目さん H O L P 4 0 0 0

フィールド現状

《トーチトークン》(攻)

《闇の侯爵ベリアル》(攻)

《混沌空間》

セットカード

(クククツ、 奴には枕田をとことん追い詰めて欲しいと言われたが……充分だろう、この俺に手間をかけさせた報酬は高いぞ！)

ベリアルって、他のモンスターに攻撃出来なくなんだっけ？トークン殴れないじゃない！……先に回復したのは《ブリザード・ファルコン》のようなバーン対策かな。あーもう！どうやって勝つのよ!!

「わ、私のターン……」

「ジユンコ！諦めんなよ！！決闘は諦めたら終了だぜ！！」

あ、安西先生！つじやなくて十代！！・・・誰に負けようがすぐ開き治つてやるけども、十代の前でみつとも無い所を見せられるかあ！！

「ドロー！！」

こ、このカードは！あれを使うしかない！！たとえ卑怯者の烙印を押されても、十代の前じゃ負けないわ！！

「ごめんね、万丈目君」

「ぬ？、急にどうした」

「貴方に怨みは・・・無いってことも無いんだけど」

「なんだ！言いたいことがあるならばつきり言わんか！」

十代との決闘を邪魔されたりとかされたりとかされたりとかされたりとか。

「貴方の不運……それは十代の前で、私に挑んだことよ！手札から《異次元からの埋葬》除外されてる、《ゲイザー・シャーク》2枚目の《シレーヌ・オルカ》《BF―精鋭のゼピュロス》を墓地に戻す！」

《異次元からの埋葬》

速攻魔法

(1)：除外されている自分及び相手のモンスターのの中から合計3体まで対象として発動できる。

そのモンスターを墓地に戻す。

《ゲイザー・シャーク》

効果モンスター

星5／水属性／魚族／攻1000／守1900

墓地のこのカードをゲームから除外し、

「ゲイザー・シャーク」以外の自分の墓地の

水属性・レベル5モンスター2体を選択して発動できる。

選択したモンスター2体の効果を無効にして特殊召喚し、

その2体のみを素材として水属性のエクシーズモンスター1体をエクシーズ召喚する。

「ゲイザー・シャーク」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「フン、墓地にモンスターを戻したか。だがベリアルに勝てる奴が呼べるのかな？」

「簡単よ！墓地の《ゲイザー・シャーク》の効果発動！自身を除外することで、墓地の水属性星5モンスター2体を特殊召喚し、それらを素材にエクシーズ召喚を行う!!」

「えっ、エクシーズ召喚?!」

「なんだ?!シンクロ以外にもなんかあるのか!!」

「私は、2体の《零水鳥・シレーヌ・オルカ》を特殊召喚し、オーバーレイ!!2体の鳥獣族モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚!!今その殻を突き破れ!★5《零鳥姫リオート・ハルピユイア》!!」

《零鳥姫リオート・ハルピユイア》

エクシーズ・効果モンスター

ランク5／水属性／鳥獣族／攻2500／守2100

鳥獣族レベル5モンスター×2

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力を0にする。

ふつくしい……、出番が少ないから余計綺麗に見えるわね。

「なっ、なんなんだこいつは?!どこから湧いて来やがった!」

「悪いけど説明してあげる程、私の心中は穏やかではないわ!《リオート・ハルピユイア》

効果発動! O R Uを1つ使い、相手モンスター1体の攻撃力を0にする! 《アーム・

フリージング》!!」

「ベリアルの攻撃力が、0だとお!!」

「これで貴方のフィールドはがら空き同然……バトルよ! 《オーロラ・ウイング》! 《グ

レート・ホワイト》! 《リオート・ハルピユイア》! 一斉攻撃!!」

「馬鹿なああああ!!」

万丈目 LP4000↓0

「すっげー!!!あんな隠し玉があつたなんて!」

．．．．つい勢いでやつちやつたんだ（白目）

「ぐう．．．お、おのれ。」

まずい!色々追求されたらめんどうだわ!!起き上がる前にとんずらよ!

「逃げるわよ十代!歩くような速さで!!」

「えっ?お、おう。．．．急がないのか?」

私は十代の手を引いて、全速力でその場から立ち去った。

「くそつ、何がどうなってやがったんだ！」

「…………お疲れ様でした、万丈目さん。」

「おお、貴様か。約束通り枕田とデュエルしたぞ、報酬を…………」

へちゅツ

「なああああああああああ？…………き、貴様あ!! いったいなんのつもりだ!!」
(キス? キスされたのか?!!…………頬にだが)

「ですから報酬です、あとはこのカードも差し上げますわ。」

「お、おう…………。」

(フフフフフ、《驟雨のライキリ》だけでなく《リオート・ハルピユイア》まで。もう間
違いありませんね……隼子^{しゅんこ}さん。

さて、わたくしはどう致しましょうか。)

つづく……のか？

3羽 たまにゐるわよね、本気でチートドロの持ち主。

どーも、枕田 ジュンコです。デュエルアカデミア高等部に入って・・・とゆうか十代とコンタクトしてから一月近く経ちました。

あれからほぼ毎日のようにデュエルの相手をしてもらっています、相変わらず私の気持ちにはミジンコほども気付いていないようですが、私は十代とデュエル出来るだけで幸せです。よくデュエル中、一人で気持ちりが脳内オーバートップクリアマインドして現世に戻れなくなりそうになりますがか元氣です。

余談ですが最近ブルー男子1年が、私を見るたびにビクツとしてます。万丈目君の取り巻き二人から変な噂でも広まってんのかな？まあいいけど。万丈目君本人はたまに怨みが籠った目線をぶつけてきたと思ったら、急に顔を赤くして目を反らしたりします。明日香さんがよく近くにゐるからそのせいだと思っけど・・・エクシーズ召喚の話は広まってないようだ、言ったら自分が負けたことも広まるからってのもあると思う、彼プライドの高さなら間違いなく学園最強だしね。勢いで出しちゃったけど結果オーライね！（楽観）

さて、今日は十代からメールが届きました。いや、最近よくメールしてるし全部保存

した上でバックアップとってるけど……大体内容が端的に言うとおい、デュエルしろよ」なのよね。……なんだか野球誘う中島君のノリになってきてるわ。このままじゃ友人ポジションJくらいで終わってしまう！どうすればいい、答えてみるルドガー!!

つていけないいけない、また脱線しかけたわ。ともかく今日のメール内容が珍しく違ってますね？

「ジュンゴ、急に悪いが助けて欲しい。出来たら俺の部屋に来てくれ。」

だったのよ！なにになに?!助けてくれつて!!まさか

「お前の事を考えると、変な気持ちになって夜も眠れないんだ。」

「……よかつたら、今夜は一緒に居てくれないか？」

的な展開だったりして!!キヤー!!!

待つてて十代!イマ、アイニイキマス。

「ああ……明日は月に1度の試験!成績優秀者はラーイエローに昇格出来るチャンス!まさに《死者蘇生》!神様、どうかこの丸藤翔をこのオシリスレッドとゆう墓場から救いだしてください!!」

．．．ナニコレ？

「あ、ジュンコ！来てくれたのか！」

「う、うん。これはどうゆう状況なの？」

何故頭に《死者蘇生》を張り付けてオシリスの天空竜に向かって祈っているのだ…：
まるで意味がわからんぞ！

「いや、明日は月1試験じゃん？そのプレッシャーからか翔がおかしくなっちゃまって…．．．なんとかならないか？」

あーうん、予想はしてたわよ？レッドって3人部屋だし過度な期待はしてなかったけど…．．．これをどないせいと。

「つーか祈る前に勉強したら？その方がよっぽど成績伸びるでしょ」

「ああ！ジュンコさん！待ってたっス！」

「はあ？なんでアンタが私を待ってんのよ」

十代が待つててくれんなら、たとえば火の中水の中、あの空の彼方までだつて飛んでいくけど。

「どうか！この不承丸藤翔に、勉強をつけてください!!」

「断る」

「早っ?!」

なにが悲しくて丸藤翔の試験勉強などみなくてはならんのだ。十代になら付きつきりて教えたげるけど、1晩中でも、1年中でも、いつそ卒業するまで。

「まあそう言わずに……こちらを見てから考えてくださいッス」

ああん？私に賄賂など．．．こ、これはあ？!

「グハア!!」

「じ、ジュンコ?!どうしたんだ鼻血なんか噴き出して!!」

「ななななななななんでもないわ十代!．．．しばらくこつち来ないでお願い3分間だけMATE!!」

「お、おう．．．(急にどうしちゃったんだ?)」

小声「どうつスカ?こんなことも在ろうかと極秘に撮り溜めた兄貴の極秘プロマイドが1枚．．．」

お、おのれえ．．．本人が目の前に居る所でなんてもんを見せやがる!!しかも体育終了後の汗ばんだ半●状態の休憩中とかいったい誰得よ!ハツ、私か?!

小声「もし引き受けてくれたら10枚セットで差上げるツスよ?．．．なお、もつと過激なものもあつたりして」

.....。

「よし、ノート出しなさい」

「なにその急激な掌返し?! お前らこの30秒でなにがあつたんだよ!!」

「悪いけどアニキにはとても伝えられないツス」

「ごめんね十代、これも貴方の為よ・・・ついでに貴方の勉強もみるから許してね」

「全ツ然わかんねえ・・・まあ、折角だから便乗しとくわ」

そーいえばもうひとり同居者いたわよね? 名前は確か・・・

「そこの狸寝入りしてる前田君、アンタも試験は受けんでしょ? ついでにみてあげるわ」

「俺、君に名乗った覚えはないんだがなあ・・・」

あ、やべッ、前世の名前隼子前繋がり前で覚えたとか言えないし・・・

「十代が前に教えてくれたのよ、出不精のルームメイトがいるって。細かいことはいいからノート持ってこつち来なさい！一年先輩だろうが私のが成績マシよ、多分！」

「は、はいなんだな〜。」

「あれ、そんなこと言っただけ？まあいいや隼人、変に逆らうなよ？ジユンコは怒るとマジおかつかねえから・・・」

私そんな印象なの?!くそつ、絶対に許さねえドン 千!!

サウザンド

「フウン・・・じゃあ、折角なので徹底的にやりましょうか。どうせ1年の最初の筆記試験なんざ基本的なことばかりだろうけどね・・・アンタは普段寝てばっかなんだからこの際叩き治してあげるわ!!」

「ウイ?!」

「アニキのせいツスよ〜。」

(生前)元女子大生なめんじやないわよ!高1の基本教科なんざ楽勝だったの!!って月1試験はデュエル学だけか。まあ〜師匠が鬼だったから細かい所以外は大々平気なはず、うん。アカデミア中等部でも成績そこそこ良かったし・・・

「じゃー最初はスペルスピード関連から！はい丸藤、サイクロンのスペルスピードは?!」
「え、えくと……スペルスピードって?」

駄目だコイツ……早くなんとかしないと。

!!
へカウンター罠にはカウンター罠しかチェーン出来ないっつてんだろ！いい加減にしろ

翌★日

「うーん、だから無効系の効果は無効にしたい効果の直後にチェーンできないと発動出来な……ん?」

なんか、隣から変な気配がする〜

「むにやむにや、もう食べられないぜ・・・ぐへへへ」

・・・・・・・・・・。

「フオオオオオオオツ
!?!?!」

なして?!なして十代が私の隣で寝ているの?!うわ顔近ツ!!えつ、あれ?ここ十代達の部屋?私勉強教えてたら寝ちやった系女子か?!もしかして十代に寝顔ガン見されちやったわけ?・

「ジュンコ〜」

「はい?!」

「デュ→エルだあ〜うえへっへっへっへ」

なんだ寝言か、夢の中でも私とデュエルしてるわけ？・・・どうしようめっちゃ嬉しい。

あく、十代の寝顔めっちゃ可愛いなあこのまま寝込み襲つて既成事実でも作つてしまおうか・・・つていけないいけない、今日は試験だったわね。えくと・・・やべつ、遅刻じゃない！

「起きなさい十代！遅刻よ遅刻!!」

「ハッ、ライキリ?!」

なんでライキリ?!

へ・・・ちやつかり寝顔は写メつておきました。〜

そんなわけで途中でトメさん救出したりしながら筆記に途中参加。予想通り基本ばつかでチョロかったわ。

まあそれよりも……

「まゝるゝふゝじゝ……」

「な、なんっスかジュンコさん……」

小声 「どうして起こさなかったのよ！しかも十代と同じベットで、朝までぐっすりだったし!!」

小声 「いやだって……余りに幸せそうな顔で寝てるから、先に寝落ちしてたアニキにもたれかかってスヤア……つと。」

フアツ?!

「むしろ邪魔したほうが怒ると思って、隼人君と二人でアニキのベットに押し込んだんっスよ。」

……。

「よし、購買でなんか奢るわ」

「・・・流石はジュンコさんツス」

「おくい二人ともく、新しいパックつての見にいこうぜく！」

「ガッテン！」

へトメさんにもらったパック内容

《ハーピイレディ1》

《ハーピイレディ2》

《ハーピイレディ3》

《ハーピイレディS B》

《ハーピイレディ三姉妹》・・・どないやねん。>

そんなわけで実技試験のお時間です。クロノス先生のなんやかんやのせいで十代と万丈目君が戦う奴よね、覚えているわ。当然応援に駆け付けましたよ、自分の試験？

もーちよいあとだから大丈夫大丈夫。

「万丈目！お前が相手なのか！」

「万丈目さんだ！以前の決着、ここですつけてやる!!」

フッフ、最初に戦った時の十代と思うなかれ万丈目君よ。あれからほぼ毎日私とデュエルして、私のHEROカードを10枚程霞め取っていった十代のデッキは大幅に強化されちゃっているわ……

※2羽参照

だ、大丈夫よ？M・HEROは渡してねーし？某TFSPみたくマスクチエンジオラア！するだけの十代なんて見たくないじゃない？あ、いや私とタッグで学園最強と語られる十代……いいな。つてあかん！やっぱ十代は融合してこそよ！

「あ、いましたわ。ジュンコさん！」

「ん？どつたのももえ」

「席にデッキケース忘れてましたよ？これから実技試験だというのに……」

「ゲツ、マジ？ありがとももえ！ごめんね、皆々」

危ない危ない、今日持ち歩いてたのが「ハーピー」でよかったわ、いやよくはないんだけど……他のデッキ中身見られたら色々まずいしね。

「私達の番がもう少し先で助かりましたわ。私も折角ですので、ジュンコさんのいとしの十代様達の試合を観戦していきますか」

「いとしのおつて……やめてよももえ！周りに他の生徒がいる前で……」

「なにを今更……むしろ一年生でジュンコさんの気持ちに気付いてないのは、十代様本人だけですわよ？」

「へ？」

「あんないつも一緒にいて、好意丸出しなのに気づかないほうが可笑しいですわ」

「「うんうん」」

えー!!!一年全員にバレてる?!なんか周りの奴等全員うなずいてきたんですけど、なに

これ恐い!! 恥ずかしいから十代とのデュエルは人目つかない所でやっていたのに何故 DA!!

「そ、それよりももえは気になる人とかいないの?」

強引に話題を逸らすスタイル。ももえはメン食いだからなあ、固定で気になる人はいないかな?

「わたくしですか? わたくしは勿論・・・万丈目様ですわっ」

・・・あれっ?

「デュエル!!」

「ほらっ、始まりますわよ。」

「う、うん」

へく、なんか意外。ももえが万丈目君をねく。確かにイケメンつちやイケメンだけど・・・原作じゃそんな描写無かったわよね？あれつ、もしかして私達の思い人対決かこれ。

「俺のターン！《E・HEROエアーマン》を召喚!!」

「エアーマンだと?!」

《E・HERO エアーマン》

効果モンスター

星4／風属性／戦士族／攻1800／守 300

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このカード以外の自分フィールドの

「HERO」モンスターの数まで、

フィールドの魔法・罫カードを選んで破壊する。

●デッキから「HERO」モンスター1体を手札に加える。

フッフ、下級HERO最強(?)の三沢く……じやなくてエアーマンにおどろいているようなね。だがこの程度で驚いていたら心臓がもたないわよ？

「召喚に成功した時、デッキから《E・HERO キャプテン・ゴールド》を手札に加え、さらにこれを捨て効果発動！《魔天楼―スカイスクレイパー》を手札に加える！そして発動！」

「いきなり《スカイスクレイパー》か！」

「いいわよ十代ー!!」

「むう……」

《E・HERO キャプテン・ゴールド》

効果モンスター

星4／光属性／戦士族／攻2100／守 800

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「摩天楼 ―スカイスクレイパー―」1枚を手札に加える。

また、フィールド上に「摩天楼 ―スカイスクレイパー―」が存在しない場合、

このカードを破壊する。

※原作《摩天楼 ―スカイスクレイパー―》

フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが戦闘を行う時、攻撃力が相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、

「E・HERO」モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする

原作効果《スカイスクレイパー》は相手から攻撃される場合でも効果が適用される……つまり攻撃力2800以下は手も足も出ないって寸法よ！《サイクロン》で終わりだけど、先行の手札消費1枚って考えれば充分な布陣だわ。

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

十代 H5 LP4000

フィールド現状

《摩天楼―スカイスクレイパー》

《E・HERO エアーマン》(攻)

セツトカード

「なるほどなあ……それらが〈奴〉の言っていたHEROか。だがその程度の布陣、この万丈目準の前では塵芥当然だということを教えてやる！俺のターン!!」

奴？なんの話だろ。

「行くぞー！《レスキュー・ラビット》を召喚し効果発動！デツキから《V タイガー・ジエツト》2体を特殊召喚!!」

「はあ?!」

「ジュンコさん、どうかいたしましたか？」

「え、いや……なんでもないわ。」

な、なんで万丈目君が鬼畜可愛い兎もってんのよ！あれって確かゼアル辺りで出たカードよね？

《レスキューラビット》

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻 300 / 守 100

「レスキューラビット」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードはデッキから特殊召喚できない。

(1) : フィールドのこのカードを除外して発動できる。

デッキからレベル4以下の同名の通常モンスター2体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。

《Vヴァイタイガー・ジェット》

通常モンスター

星4 / 光属性 / 機械族 / 攻1600 / 守1800

空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り返す。

「《天使の施し》を使い、3枚ドロし2枚捨てる。そして《アイアンコール》！墓地のレベル4以下の機械族、《Wーウィング・カタパルト》を特殊召喚する！そしてこいつら

を融合合体!!」

後から施し使ったのはラビットの対象を引かない為かしら・・・

わー、ロボットアニメ好きが観たら凄く喜びそうな生合体シーンであらう。

「現れる! 《VW—タイガー・カタパルト》!!」

「うおおくすつげーぜ万丈目!!」

《アイアンコール》

通常魔法

(1) : 自分フィールドに機械族モンスターが存在する場合、

自分の墓地のレベル4以下の機械族モンスター1体を対象として発動できる。

その機械族モンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに破壊される。

《VW—タイガー・カタパルト》

融合・効果モンスター

星6／光属性／機械族／攻2000／守2100

「Vータイガー・ジェット」＋「Wーウィング・カタパルト」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。

手札を1枚捨てることで、相手フィールド上モンスター1体の表示形式を変更する。

（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

「万丈目さんだ！まだまだこの程度じゃ終らんぞ！」フュージョン・タグ《融合識別》を発動！融合デッキの

《XYZードラゴン・キャノン》を公開し……場の《Vータイガー・ジェット》を

《XYZードラゴン・キャノン》扱いとし、融合素材に出来る！！行くぞ！究極融合

合体！！

《融合識別フュージョン・タグ》

通常魔法

（1）：自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

エクストラデッキの融合モンスター1体を相手に見せる。

このターン、対象のモンスターを融合素材とする場合、

その見せたモンスターと同名カードとして融合素材にできる。

「嘘でしょお?」

《Vータイガー・ジェット》が《XYZードラゴン・キャノン》に変身したとおもったら、そのまま分裂して合体始めやがった!どんな仕組みよ!!

「完成!」《^{ツイトゥ}XYZードラゴン・カタパルトキャノン》!!!」

《VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン》

融合・効果モンスター

星8／光属性／機械族／攻3000／守2800

「VWータイガー・カタパルト」＋「XYZードラゴン・キャノン」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。

1ターンに1度、相手フィールド上のカード1枚をゲームから除外する。

このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができ

る。

(この時、リバース効果は発動しない。)

「超カッケー!! 凄すぎだぜ万丈目!!!」

「まさか……あんな重い召喚条件のモンスターを僅か1ターンで出すとは!」

「凄いッス……。」

「流石は万丈目さんだぜー!!」

「素敵ですわー!!」

いや凄っ?! 現実で出してる人始めて見たわ!! 1ターンで? しかも手札消費3枚? まじで!!

「フフフハハハハ!! じゆうだ〜い……とくと味わうがいい!」
《V^{ツイ}W^トX^ツY^スZ^イ》の効果

「そんな!」

地味に見えて結構強い効果よね．．．毎ターンガイウス飛んでくるって考えれば。

「食らうがいい！〈VWXYZ〉—アルティメット・デストラクション！！」
 「ぐわあああああ！！」

十代LP4000↓1000

「十代！！」

「ククク、カードを3枚伏せターンエンドだ。」

万丈目 H0 LP4000

フィールド現状

《VWXYZ》—ドラゴン・カタパルトキャノン》（攻）

セット

セット

セット

「へへっ、流石だな万丈目．．．」

「万丈目さんだ！惨めに敗北する前に、今ならサレンダーを許してやるが？」

「冗談！こんなすっぱーモンスター、どうやって倒そうか考えるだけでワクワクするぜ！！」

ああ・・・あの真つ直ぐな目、純粋にデュエルを楽しむ心、やっぱ十代素敵だわ。

「行くぜ！俺のターン！！見せてやる、俺の大切な友人からもらった新しい仲間を！」

「なあに?！」

「《ヒーロー・アライブ》！ライフを半分支払い、デッキから《E・HERO ブレイズマン》を特殊召喚！」

『ハアツ!!』

十代LP1000↓500

来た！融合デッキ感涙のHERO!!

《ヒーローアライブ》

通常魔法

(1)：自分フィールドに表側表示モンスターが存在しない場合、

LPを半分払って発動できる。

デッキからレベル4以下の「E・HERO」モンスター1体を特殊召喚する。

《E・HERO ブレイズマン》

効果モンスター

星4／炎属性／戦士族／攻1200／守1800

「E・HERO ブレイズマン」の(1)(2)の効果は1ターンに1度、

いずれか1つしか使用できない。

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「融合」1枚を手札に加える。

(2)：自分メインフェイズに発動できる。

デッキから「E・HERO ブレイズマン」以外の

「E・HERO」モンスター1体を墓地へ送る。

このカードはターン終了時まで、

この効果で墓地へ送ったモンスターと同じ属性・攻撃力・守備力になる。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は融合モンスターしか特殊召喚できない。

「特殊召喚成功時、デッキから《融合》を手札に加えて発動！《ブレイズマン》と手札の

《E・HERO シャドーミスト》を融合し、来い！紅炎操りし英雄、《E・HERO ノヴァマスター》!!」

『フンツ!!』

「の、ノヴァマスターだと!!」

《E・HERO シャドー・ミスト》

効果モンスター

星4/闇属性/戦士族/攻1000/守1500

「E・HERO シャドー・ミスト」の(1)(2)の効果は

1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「チェンジ」速攻魔法カード1枚を手札に加える。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「E・HERO シャドー・ミスト」以外の

「HERO」モンスター1体を手札に加える。

《E・HERO ノヴァマスター》

融合・効果モンスター

星8／炎属性／戦士族／攻2600／守2100

「E・HERO」モンスター＋炎属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1)：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合に発動する。

自分はデッキから1枚ドローする。

うーん、やっぱ十代には赤が似合うわよねー。ノヴァマスターくらいなら皆許してくれるっしょ……え、駄目？そこをなんとか。

「《シャドーミスト》の効果で《フェザーマン》を加え、バトルだ！いつけえ《ノヴァマスター》!!《VWXYZドラゴン・カタパルトキャノン》に攻撃!!へクリムゾン・ノヴァ
!!」

「くっ、だが甘い！リバース発動《サイクロン》！貴様の《スカイスクレーパー》さえ破壊してしまえば……」

「「出たあ！」」

「万丈目様のやらしい《サイクロン》ですわ！」

やらしい《サイクロン》って何?!確かにいつも打つタイミングやらしいけど!!

「手札から速攻魔法《決闘融合―バトル・フュージョン》!!俺の《ノヴァマスター》に
《VWXYZ》^{ヴイ トゥ スイ}の攻撃力を加算するぜ!!」

《決闘融合―バトル・フュージョン》

速攻魔法

「決闘融合―バトル・フュージョン」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分フィールドの融合モンスターが

相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動できる。

その自分のモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで、

戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする。

「攻撃力5600だと?!」

《ノヴァマスター》 ATK2600 ↓ 5600 vs 《VWXYZードラゴン・カタパルト
キャノン》 ATK3000

「うわああああ!!」

万丈目LP4000 ↓ 1400

「《ノヴァマスター》の効果で1枚ドロ〜! . . . カードを1枚セットしてターンエンドだ。」

「まだまだあ! 《王宮のお触れ》! チェーンし《リビングデッドの呼び声》!! 復活しろ、
《VWXYZ》!」

《王宮のお触れ》

永続罫

(1) : このカードが魔法&罫ゾーンに存在する限り、

このカード以外のフィールドの全ての罫カードの効果は無効化される。

《リビングデッドの呼声》

永続罫

(1)：自分の墓地のモンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。

そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。

そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。

あーんまた帰ってきちゃった、伏せ2枚もあるけど罫使えないし大丈夫かな。

十代 H2 LP500

フィールド現状

《E・HEROノヴァマスター》(攻)

セット

セット

「ドロ-！ 《WXYZ》効果だ！消え失せろ 《ノヴァマスター》!!」

『グウ……』

「くつ、済まない《ノヴァマスター》……」

「場ががら空きに！」

「決まりですかね？」

「終わりだあ!! 《VWXYZ》!へアルティメット・デストラクション」

「十代!!!」

「……ジュンコ?安心しろよ、まだ負けてないぜ!!《クリボーを呼ぶ笛》!デツキから《ハネクリボー》を特殊召喚!!」

『クリクリッ』

《クリボーを呼ぶ笛》

速攻魔法

自分のデツキから「クリボー」または「ハネクリボー」1体を選択し、

手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《ハネクリボー》

効果モンスター

星1／光属性／天使族／攻 300／守 200

(1)：フィールドのこのカードが破壊され墓地へ送られた場合に発動する。
ターン終了時まで、自分が受ける戦闘ダメージは全て0になる。

かつ……

「「可愛いー!!!」」

あーん、すつごくもふもふしたいあの毛並み!

……あれっ、この状況見たことあるよーな。

「ちっ、雑魚の壁でワンターンだけ持ちこたえたか……。貴様など、攻撃するに値しない雑魚だが!その効果は面倒だ!消えろ、へアルティメット・デストラクション!!」

「ハッ、いけませんわ！万丈目様!!」

ん？ももえどつたの。

「その攻撃を待つてたぜ！リバースカード、《進化する翼》!!手札2枚と《ハネクリボー》を墓地に送り、《ハネクリボーLv10》を特殊召喚！」

『クリクリー!!』

「《ハネクリボー》が進化しただど!!」

やっぱり！見覚えあると思つたらハネクリボー進化初お披露目のシチュエーションだったのね!!

《進化する翼》

速攻魔法

自分フィールド上に存在する「ハネクリボー」1体と手札2枚を墓地に送る。

「ハネクリボー Lv10」1体を手札またはデッキから特殊召喚する。

《ハネクリボー Lv10》

効果モンスター

星10 / 光属性 / 天使族 / 攻 300 / 守 200

このカードは通常召喚できない。

このカードは「進化する翼」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを生け贄に捧げる事で、

相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊し、

破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手ライフに与える。

この効果は相手バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。

「《ハネクリボー Lv10》効果発動！自身を犠牲に相手攻撃モンスターを全て破壊し、

破壊したモンスターの元々の攻撃力分ダメージを与える!!」

『クリー!!!』

「ばかなああああああ!!」

万丈目 L P 1 4 0 0 ↓ 0

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ!!」

「くっ、この俺が!!」

「キヤー！やったあ！十代の勝ちよ!!」

「むむむむむ」

ももえが不機嫌になっちゃったけど、好意持つてる人が負けたんだからしょうがないわよね……。

決闘後、校長が十代昇格だーとか言ってるけどどうせ断るわ、やっぱ赤が1番よ十代は!!

「ジュンコ〜!!」

「な、なによ十代。」

「お前の応援、しっかり届いたぜ！ありがとな！」

んなつ?!そんな真っ直ぐにお礼言われると……

「べっ、べっつにい〜?普段私が鍛えてあげてのに負けるとかありえないし?勝って当然よ当然!」

ちつくしよー！何故に素直になれないのか私は!!

「へへっ、そうだな！お前のデュエルまだだっけ？応援するからな!!」

「は、はいっ……」

（だからなんで敬語？）

「……あれで好意隠してるつもりってのが面白いツスよねジュンコさん」



「それではオベリススクブルー女子、枕田ジュンコ！浜口ももえ！両者前へ、ナノーネ！」

やっぱももえとか……、中等部の時から実力近いって理由でよく組むのよね。《テ
スウオンバット》によるロックバーンは厄介だけど、今回はゴドバ3枚の上に忍者とサ
モプリで闇要素加えた「シムルグアロマハーピー」よ！（ゲス顔）

それに十代が応援してくれてんだから負けないわ!!

「……ジュンコさん」

「うん？なによももえ」

「万丈目の敵……とらせてもらいますわ」

「ほえっ?!」

なんで私が敵になってんの？十代にカードちよつと渡ったけど、私が直接倒したわけじゃ……

「参ります!」

「う、うん」

「デュエル!!」

よっし、デュエルデスク決闘盤は私を先行に選んだ! HANZO引いてたら勝ちまであるわ!!

「私のターン! つてあつれえ?!」

「どうかいたしましたか?」

「え、いや〜……」

また「ハーピー」じゃねーし！これ皆大好きあのデツキじゃないの!!え？昨日十代の部屋行くときは確かに「ハーピー」だけデツキケースに入れて……くっそう、やるしかないわ！

「私は！」
レイド・ラプターズ 《R》 R — トリビュート・レイニアス》を召喚！」

「れ、
レイド・ラプターズ R R?!また見たことないカードだぜ!!」

「ジュンコ……また別のデツキなの？」

はい、皆大好き反逆のR
レイド・ラプターズ R デス。

私の所持デツキの中では多分ガツチガチやでえ……だ、大丈夫よね。このデツキもこんなこともあろうかとランクアップマジック《R U M》全抜きして戦闘補助積みまくったし！上級いな
いけどなんとかなるわ！

「《トリビュート》の効果でデツキから《R R — ミミクリー・レイニアス》を墓地に送り

さらに効果発動! 《ミミクリー》を除外しデッキから《RR―ネスト》を手札に!そして《RR―フアジーレイニアス》!このコは場に「R^{レイド・ラプターズ} R」がいると特殊召喚出来るわ!さらに永続魔法《RR―ネスト》!場に「RR」が2体いるので、デッキから《RR―インペイル・レイニアス》をサーチ!カードを1枚伏せてターンエンド!!」

《RR―トリビュート・レイニアス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1800 / 守 400

「RR―トリビュート・レイニアス」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが召喚・特殊召喚に成功したターンの自分メインフェイズに発動できる。

デッキから「RR」カード1枚を墓地へ送る。

(2) : このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したターンの自分メインフェイズ2に発動できる。

デッキから「RUM」速攻魔法カード1枚を手札に加える。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は「RR」モンスターしか特殊召喚できない

い。

《RRーミミクリー・レイニアス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1100 / 守1900

「RRーミミクリー・レイニアス」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。
(1) : このカードが召喚・特殊召喚に成功したターンの自分メインフェイズに1度だけ発動できる。

自分フィールドの全ての「RR」モンスターのレベルを1つ上げる。

(2) : このカードが墓地へ送られたターンの自分メインフェイズに、墓地のこのカードを除外して発動できる。

デッキから「RRーミミクリー・レイニアス」以外の「RR」カード1枚を手札に加える。

《RRーファジー・レイニアス》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 500 / 守1500

「RR—ファジー・レイニアス」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使
用できず、

このカードの効果を発動するターン、自分は「RR」モンスターしか特殊召喚できな
い。

(1)：自分フィールドに「RR—ファジー・レイニアス」以外の

「RR」モンスターが存在する場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「RR—ファジー・レイニアス」1体を手札に加える。

《RR—ネスト》

永続魔法

「RR—ネスト」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドに「RR」モンスターが2体以上存在する場合にこの効果を発動
できる。

自分のデッキ・墓地の「RR」モンスター1体を選んで手札に加える。

ジュンコ H4 LP4000

フィールド現状

《トリビュート・レイニアス》(攻)

《ファジー・レイニアス》(守)

《RR―ネスト》

セット

「どうやら「ガジェット」のように、後続を呼び確実にアドバンテージを稼いで行くデツキのようだな・・・厄介そうだ。」

今の説明口調誰だ・・・もしや三沢君か？大体合っているようで合っていないわね。

「なんですか、その腑抜けた布陣は・・・」

ふえ?!ももえなんで怒ってるのよ!!

「いつも師匠が言っていましたよね?」どんなデツキでも相手と全力で向かい合え」って

！」

「え、師匠って……」

「まだ解らないんですか隼子さん！だったら思い出させてあげます！私のターン!!」

い、今私のこと隼子って言った?!しかも師匠って……

「私のドローカードは！
《R U M—七皇の剣》!!」

「はあああああ!?!アンタ、もしかして!」

「おいでませ! 《N o. 101》!
《S . H . A r k n i g h t》!!そしてこれ

を素材にオーバーレイ!!」

「なんだなんだ!?!」

「一体何が起きてるゝ?!」

「現れなさい、《C N o. 101》!満たされぬ魂の守護者よ!今、暗黒の騎士となりて
光を砕け!!カオス・エクシーズ・チェンジ!!
《S . H . D a r k k n i g h t》!!」

「初手七皇ザ・セブンス・ワンの剣?! 嘘でしょ……」

《RUM―七皇の剣》

通常魔法

自分のドロ-フェイズ時に通常のドロ-をしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる。

「CNo.」以外の「No. 101」～「No. 107」の

いずれかをカード名に含むモンスター1体を、

自分のエクストラデッキ・墓地から特殊召喚し、

そのモンスターと同じ「No.」の数字を持つ「CNo.」と名のついたモンスターをその特殊召喚したモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「RUM―七皇の剣」の効果はデュエル中に1度しか適用できない。

「手札より《ドラゴン目覚めの旋律》!! 手札の《ゲイザー・シャーク》を捨て、デッキから2枚の《ディサイブの影霊衣ネクロス》を手札へ! そして《マンジュゴッド》を召喚! 《高等儀式術》をサーチし、発動!! デッキからレベル5の《ジェノサイド・キングサーモン》

2体を生贄に《デイサイシブの影霊衣》降臨!!」

「今度は儀式召喚だ?!」

「さらに《簡易融合》! ライフを1000払い、融合・・・いえ、EXデッキから《レア・フィッシュ》を特殊召喚!そしてマンジユゴッドとオーバーレイ!!ランク4!《No.103 神葬零嬢ラグナ・ゼロ》!!そして墓地の《ゲイザー・シャーク》効果!《ジェノサイドキングサーモン》2体でオーバーレイ!!

いでよ、《No.94》!氷の心をまといし霊界の巫女、澄明なる魂を現せ!《極氷姫クリスタル・ゼロ》!そしてこれを素材にオーバーレイ!!^{アーマード}A エクシーズチェンジ!!
《F Aークリスタル・ゼロ・ランサー》!!」

ももえ H2 LP3000

フィールド現状

《S^{サイレント}・H^{オナズ}・Dark^{ダーク} knight^{ナイト}》(攻2800)

《《デイサイシブの影霊衣》(攻3300)

《No.103 神葬零嬢ラグナ・ゼロ》(攻2400)

《F^{フルアーマード} Aークリスタル・ゼロ・ランサー》(攻2200↓3700)

「なんなんだよ……これは?!」

私と同じ師匠……私の前世の名前を知っている、そして独特な水属性のデツキ！
間違いない!!

「桃華あああああ!?!」

つづ……かざるを得ない!!

4羽 このコは《RUM》が無いからって出ないとは言つてない

「桃華ああああああ?!」

「あらあら、やっと気づいてくれましたの?」

やっと気づいたって、え?まじで桃華・・・桃華なの!?何故ここに?まさか自力で元の世界から脱出を?!

レイド・ラフターズ

「R R 使っているからって不審者じみた思考をしないで下さいまし・・・」

「心を読むなあ!!」

・・・Arc-Vネタが通じるってことは、マジで桃華だ。

〈樋口桃華〉、前世での私の親友にして同じ師匠(○)に決闘を教わった仲間でもある。

私が鳥獣に拘っているのと同様、彼女は水属性・・・水・魚・海竜族等がメイン、得に人魚っぽいのが好きだ。

以前使った水鳥獣デッキをどちらが作るかで本気で喧嘩した。

※2羽参照

・・・余談だが、師匠の元カノだ。

ああ、名前そっくりじゃん！（？）浜口ももえに！・・・って予想出来るかあ！！

「あの娘達どうしちゃったの？」

「ジュンコー、しっかりしろー！！ピンチ過ぎておかしくなっちゃったのか？！」

「この状況なら納得ツスけどね、見たことも無い上級クラスのモンスターが1ターンで4体も・・・」

「しかし彼女は別の要因で驚いているように見えるが・・・まるで其処にいるはずのない人物に遭遇したかのような」

三沢君・・・謎の監察眼止めてくんない、当たってるのすごくね？

「辺りが賑や蟹なつて来ましたわね・・・言いたいことは沢山あるでしょうがまず、デューエルに決着を付けましょうか」

大体アンタのせいだからね？エクシーズ召喚連発したせいだからね！あとでどう

やって弁明すんのよ！

「《ネクロスデイサイシブの影霊衣》効果発動ですわ！セットカードを破壊して除外いたします！！」

「クツ、リバーオープン《RRーレディネス》！！私のRR達は破壊させないわ！」

《デイサイシブの影霊衣》

儀式・効果モンスター

星10／水属性／ドラゴン族／攻3300／守2300

「影霊衣」儀式魔法カードにより降臨。

レベル10以外のモンスターののみを使用した儀式召喚でしか特殊召喚できない。

「デイサイシブの影霊衣」の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードを手札から捨て、

自分フィールドの「影霊衣」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで1000アップする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(2)：相手フィールドにセットされたカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊し、除外する。

《RRーレディネス》

通常罠

(1)：このターン、自分フィールドの「RR」モンスターは戦闘では破壊されない。

(2)：自分の墓地に「RR」モンスターが存在する場合に墓地のこのカードを除外して発動できる。

このターン、自分が受ける全てのダメージは0になる。

「まあ………《ディサイシブの影霊衣》召喚時に使っていれば除外されずに済んだものを………」

ザ・セブンス・ワン
七皇の剣その他もろもろに驚いて忘れていたのよ！1ターン目から飛ばし過ぎだったーの!!

「大方忘れてただけでしょうがね、相変わらずですわ〜」

「だから思考を読むなあ！」

「ももえのモンスターには驚いたけど、結局いつもの二人だわ」
「そうなんスか?!」

「しかしレディネスでは戦闘ダメージは軽減出来ません、くやしいでしょうねえ……
バトル、《ディサイシブの影霊衣》で《トリビュート・レイニアス》を攻撃です！」

《ドラゴン目覚めの戦慄》で手札にもう1体いんのよね……使わざるを得ないわ。

「手札から《RRーブースター・ストリクス》効果発動！」

「まあ！」

《RRーブースター・ストリクス》

星4／闇属性／鳥獣族／攻 1000／守1700

(1)：自分の「RR」モンスターが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、

このカードを手札から除外して発動できる。

その攻撃モンスターを破壊する。

『ピーツ!!』

『グルアアアア!!』

《ブースター・ストリクス》が《デイサイシブ》に特攻して爆散した……なんかゴメン、激しくゴメン。

「RRへ攻撃を仕掛けたモンスターを破壊するわ、ありがとね《ブースター》」

「けれど私のモンスターはまだまだ残ってしましてよ! 《ラグナ・ゼロ》! 《dark knight》! 《クリスタル・ゼロ・ランサー》! 《トリビュート》に総攻撃!!」

vs 《トリビュート》(攻1800)

『ピュウウウウウ……』

「アタタタタタ?!」

ジュンコ LP4000↓3400↓2400↓500

《トリビュート》フルボッコ、ありがとう助かったわ。

「耐えられてしまいましたわ……《dark knight》の効果発動、《ファジー
レインアス》をO^{オーバーレイ・ユニット}R Uに変換致します、《ダーク・ソウル・ローバー》……ターン
終了ですわ」

《CNo. 101 S・H・Dark Knight

エクシーズ・効果モンスター

ランク5／水属性／水族／攻2800／守1500

レベル5モンスター×3

1ターンに1度、相手フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を選択して発動
できる。

選択したモンスターをこのカードの下に重ねてエクシーズ素材とする。

また、エクシーズ素材を持っているこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地に「No. 101 S・H・Ark Knight」が存在する場合、

このカードを墓地から特殊召喚できる。

その後、自分はこのカードの元々の攻撃力分のライフを回復する。
この効果で特殊召喚したこのカードはこのターン攻撃できない。

《dark knight》ORU↓2

ももえ H2 LP3000

ファイルド現状

《S・H・Dark knight》
サイレント オナース ター (攻2800)

《No.103 神葬零嬢ラグナ・ゼロ》(攻2400)

《F Aークリスタル・ゼロ・ランサー》(攻3700)
フルアーマード

《No.103 神葬零嬢ラグナ・ゼロ》

ランク4／水属性／天使族／攻2400／守1200

レベル4モンスター×2

《F Aークリスタル・ゼロ・ランサー》

ランク6／水属性／戦士族／攻2200／守1600

水属性レベル6モンスター×3

このカードは自分フィールド上の水属性・ランク5のエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

このカードの攻撃力は、このカードのエクシーズ素材の数×500ポイントアップする。

フィールド上のこのカードが破壊される場合、

代わりにこのカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事ができる。

また、1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。相手フィールド上の全てのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

「あ、相変わらず防御はザルのようね！伏せ無しなんて余裕じゃない!」

「余裕かましてエクシーズしなかった方がなにを・・・《フォース・ストリクス》最低2体は展開出来たはずですよ?」

「ぐう・・・」

エクシーズ無しで闘おうとした結果がこれだよ。まさか相手が使つて来るとは思わ

ないでしょう普通……

「あ、アンタだって調子乗って《クリスタル・ゼロ》の効果使わなかったじゃない！重ねるだけ召喚する前に使ってたら勝ってたくせに！」

「あれは《ディサイシブの影霊衣》第2の効果と合わせて決めるつもりだったからですわ、《ブースター・ストリクス》なんてすっかり忘れていましたもの……それに《ゴツドバード・アタック》等だった場合に備えて破壊耐性は残しておくべきですわ」

まあ予想外だから対応されにくいんだもんね……

「な、なんか二人でプレイングについて語ってるけど全然ついていけないわ……」

「僕もっス……」

「ジュンコも何度か、あのエクシーズっての使ってたことあるし……アイツならいくらでも逆転してくるぜ！」

「そうなのか?! 実に興味深いな……」（合流した）

じゆうだーい!! あれだけ皆にはバラすなって言ったのに……いや、信頼の証と

ポジティブに受けとるべきか、でも後が恐いなあ〜。

「アンタがその気なら、私も容赦しないわ！私のターン！」
「今更ですか、手遅れな気もしますが……」

うっさい！十代の前でみつともない負け方なんざしてたまるか!!

「さあ、行くわよ！《RRーバニシング・レイニアス》！」
「！手札から《増殖するG》を捨て、効果発動しますわ♪」

え、ちよま……

「G？なんかの略かな。」
「ジュンコ、今物凄く嫌そうな顔したわね……」

ええー、折角ソリッドビジョンでデュエルしてんのにそれ使うー？

「わたくしのデッキは、ジュンコさんの「RR」のようにアドバンテージ源がございませ
んから♪」

まーた心（ry

黙ってても負けだし、最小限の動きでもも（愛称）の戦力削るか・・・

「《RR―ネスト》の効果でうーん・・・2枚目《パニシング》を加えて《パニシング・
レイニアス》の効果で・・・止めとこ」

「あら、残念ですわ」

よし、目を瞑っておこう。

「《トリビュート》と《パニシング》でオーバーレイ！2体の鳥獣族モンスターでエクシー
ズ召喚、舞い降りよ氷鳥の華！ランク4！《零鳥獣シルフィーネ》!!」

なお、前は見ないようにとりだした。

《零鳥獣シルフィーネ》

ランク4 / 水属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守2200

鳥獣族レベル4モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシース素材を1つ取り除いて発動できる。相手フィールド上に表側表示で存在する全てのカードの効果を無効にし、

このカードの攻撃力はこのカード以外の

フィールド上に表側表示で存在するカードの数×300ポイントアップする。

このカードの効果は次の自分のスタンバイフェイズ時まで適用される。

『ハアツ!』

「お! アイツなら知ってるぜ!!」

「え、それよりもえの手元に……」

「なんかゴソゴソ蠢く影が……」

「キヤアアアアア!!ゴ●ブリーイイイイ!!!」

誰かが気づいてしまったようだ・・・やっべえ観戦客阿鼻叫喚だよ。

《増殖するG》

星2 / 地属性 / 昆虫族 / 攻 500 / 守 200

「増殖するG」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できず、

相手ターンでも発動できる。

(1)：このカードを手札から墓地へ送って発動できる。

このターン、以下の効果を適用する。

●相手がモンスターの特殊召喚に成功する度に、

自分はデッキから1枚ドローしなければならない。

「相手が特殊召喚する度に1枚ドローいたします♪」

「アンタ、よくそんなカード平気で使うわね」

私にや無理だ、カードイラストだけで勘弁だった。ソリッドビジョンで使う処かデッキに入れる選択肢すら浮かばないわ……

「確かに本物だったら絶対御免ですけど……立体映像と判っていたら案外平気ですよ？にしても《シルフィーネ》ですか、厄介な」

「アンタのGがいちばん厄介だわ……そろそろ目え開けてもいいかしら？悲鳴も治まってきたし。」

「……よし、《シルフィーネ》の効果発動よ！ORUを1つ使い、相手フィールド上の表側のカード効果を全て無効にする！へパーフェクト・フリーズ！！」

『テヤアアアア！』

《クリスタル・ゼロ》《ラグナ・ゼロ》《dark knight》が凍りついて動かなくなる、なんか違和感パネエ。

《FAークリスタル・ゼロ・ランサー》(攻) 3700↓2200

「まあ！見た目や効果的にはこちらが使うべきモンスターですわ！《クリスタル》や《ラグナ》に効いてるのが納得出来ません！」

「気持ちは判るけど効果処理上仕方ないでしょ……その後《シルフィーネ》以外の表側カード×300、攻撃力上昇!!」

《シルフィーネ》(攻) 2000↓3200

「こちらも容易く攻撃力3000を超えるなんて……」

さて、誰を攻撃するか……《dark knight》は論外として、新しくランクアップ・マジック
《RUM》を引かれて《ラグナ・インフィニティ》にされたら即死よね。《クリスタル・ゼロ》は次ターンは脅威では無いし……決めたっ！

「バトルよ！《シルフィーネ》で《ラグナ・ゼロ》を攻撃！へアイス・レイ!!」

『ハアツ!!!』

『フン!!!』

V S 《ラグナ・ゼロ》(攻) 2400

なんか璃緒ちゃん対決になったわね……

「キャツ……やりましたわね！」

ももえ LP3000↓2200

「フン、800程度なによ。こっちは《トリビュート》が3500分もダメージ受けてんだからね！」

さて、《インペイル》の効果主体でビートダウンするつもりだったけど、今は他にもつと欲しいカードがあるわね……

「《闇の誘惑》！2枚引いて……《インペイル》を除外！カードを2枚伏せてターン終了よ！」

ジュンコ H2 LP500

ワールド現状

《零鳥獣シルフィーネ》(攻3200)

《RRーネスト》

セット

セット

「セットが2枚ですか、わたくしのターン！あ、来てくれましたね！お待ちしてましたわ
」

ん？

「参りますわよ！《深海のディーヴァ》さん♪」

『ー・ー・ー・ー！！』

《深海のディーヴァ》

チューナー

星2／水属性／海竜族／攻 2000／守 400

このカードが召喚に成功した時、

デツキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚できる。

うっわ、ある意味最強クラスのチューナー、ディーヴァ様じゃないっすか……

「……あら？」

「何よ？」

「覗き事件の時も思ったのですが……やはり見えていませんか？」

え？なんの話してんのこの子。

「まあ可愛そうに、けど構いませんわ！《深海のディーヴァ》効果発動！デツキから《ヴィジョン・リチュア》を特殊召喚致します！」

『……………！』

「相変わらず下級海皇は苦手なのね……私は助かるけどさ」

「デッキの都合もありますかね、参ります！レベル2の《ヴィジョン・リチュア》にレベル2のチューナー、《深海のディーヴァ》をチューニング!!」

うおおおい?!シンクロもすんのかい!!まじであとから説明大変そう・・・

「七色に輝く拒絶の光、天空よりおいでませ！レベル4！アーク・デクエアラ《虹光の宣告者》！」

《虹光の宣告者》

シンクロ・効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻 600 / 守 1000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

お互いの手札・デッキから墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かず除外される。

(2)：モンスターの効果・魔法・罫カードが発動した時、

このカードをリリースして発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから儀式モンスター1体または儀式魔法カード1枚を手札に加える。

うつへく、面倒なのきたわ。周りが

「シンクロ召喚?!」

「まるで意味が分からんぞ!」

とか騒いでるけども面白いや、後の事は後の私にまかせよう。

「さらに墓地の《ヴィジョン・リチュア》を除外し《水の精霊アクエリア》を特殊召喚して《虹光の宣告者》とオーバレイ!エクシーズ召喚ランク4!炎海にて生まれ変わらし《ラヴァルバル・チェイン》!」

《ラヴァルバル・チェイン》

ランク4/炎属性/海竜族/攻1800/守1000

レベル4モンスター×2

(1):1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、

以下の効果から1つを選択して発動できる。

●デッキからカード1枚を選んで墓地へ送る。

●デッキからモンスター1体を選んでデッキの一番上に置く。

「今度は火属性じゃない……」

「海竜族ですから問題ありませんわ、《ラヴアルバル・チエイン》効果！ ORUを一つ消費しデッキから《ゲイザー・シャーク》を一枚墓地へお送りしますわ！」

どつかで「《シルフィーン》に比べたら地味だな」とか聞こえたけど、そんなわけあるか馬鹿……。《おろかな埋葬》がただ強カードか知らないタイプね。

「更に更にい、ORUとして墓地へ送られた《虹光の宣告者》も効果発動！ 儀式魔法である《高等儀式術》を手札に加えますわっ」

「ッ！こちらが本命か！」

はい三沢君正解。4枚目の《マンジュゴット》として《ディーヴァ》を入れるタイプね、いや逆か？

「流石に《ディーヴァ》さんは一枚しか入れてませんわよ？ 残念ですが」

うん、もう突っ込まない。

「それはそれで寂しいですわね、再び《高等儀式術》！デッキから……」

「あんな化物ポンポン出すなっの！カウンター罠《ラプターズ・ガスト》!! 《高等儀式術》は無効よ無効！」

《ラプターズ・ガスト》

カウンター罠

自分フィールドに「RR」カードが存在し、魔法・罠カードが発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

「あらあら、アテが外れてしまいましたわ……仕方ありません、バトル! 《dark knight》で《シルフィーネ》を攻撃いたします! 《デモンズ・ランス》!!」

テ●ルズかつ、

「クツ、向かえ討て《シルフィーネ》！〈アイス・レイ〉!!」

『リオオオオオ!』

『あり得ないから。』

v s 《dark knight》(攻) 2800

ももえ LP2200↓1800

今なんか・・・きつと気のせいね。

「なんで自爆特攻なんスカね?」

「ジユンコも嫌そうだったわね、モンスター効果は無効になってるハズだし」

あ、はい。フィールド上のはね?

「この時《dark knight》効果発動！辺獄より再び姿を現さん、ヘリターン・フロム・リンボ！！」

『…………』

ももえ LP1800↓4600

「墓地発動の効果か!!」

「蘇生効果、しかもライフまで回復した?!」

「…………《dark knight》の素材になってた《ファジー・レイニアス》効果、デッキより2枚目を回収するわ。アンタ、効果説明したげなさいよ」

「ジュンコさんが判つていれば良いじゃありませんか……外野まで声張るの面倒ですし、効果長いし」

ジュンコ呼びなんだ、じゃなくて変なトコ面倒くさがるのは相変わらずね。ってかう

ちら、前世そのまんまじゃね？性格違和感無かったもん今まで、あっちもそう思っ
て……

「はい。」

……デュエルを続行しろ！イ？ノオオ!!

「では遠慮なく、再びへダーク・ソウル・ローバー!! 《シルフィーネ》は頂きですわ!」

『リオオオオオ!!』

『シツコイ!!』

またなんかやってね?!

「ところがぎつちよん、タダじゃやられないわよ!罫カード《ゴッドバードアタック》!!
破壊対象は《dark knight》と《クリスタル・ゼロ・ランサー》!!」

《ゴッドバードアタック》

自分フィールドの鳥獣族モンスター1体をリリースし、

フィールドのカード2枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

『皆で反省会よ!!』

『オレたちハモウ、ワカリアツテイル・・・』

《シルフィーネ》がオーラのなものを纏って《dark knight》と《クリスタル・ゼロ・ランサー》を巻き込んで爆発した、海馬社長・・・爆発演出好きね。

しっかしきつきから聞こえるのなんだろ、幻聴かな？きつとももえのせいで疲れてんのね。

「今度は復活しないな？」

「1ターンに1度か、あのORUとゆうものの有無が関係ありそうだな」

だからその観察眼何。

「ほんとほみえるのですかね？ターンエンドですわ」

ももえ H1 LP4600

フィールド現状

《ラヴアルバル・チェイン》(攻) 1800

「なにがやねん、ドロー！」

あ、《RUM》の代わりにぶちこんだ1枚きた。

「一気に攻めるわよ！《一族の結束》発動!!皆鳥獣、皆好き!そして《バニシング》と《ファジー》展開!《RRーネスト》で《インペイル》加えて《バニシング》効果で特殊召喚
!」

《バニシング・レイニアス》(攻1300↓2100)

《ファジー・レイニアス》(攻500↓1300)

《一族の結束》

永続魔法

自分の墓地の全てのモンスター元々の種族が同じ場合、

自分フィールドのその種族のモンスターの攻撃力は800アップする。

《RR—インペイル・レイニアス》

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守1000

「RR—インペイル・レイニアス」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功したターンの自分メインフェイズに1度だけ、フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを表側守備表示にする。

(2)：このカードが攻撃したターンの自分メインフェイズ2に、

自分の墓地の「RR」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

「《一族の結束》ですか……好きですね、ジュンコさん以前「B ブラック・フェザー F」にも入れてましたわよね？」

「ほつとけ、バトルよ！《インペイル・レイニアス》で《ラヴァルバル・チェイン》を攻撃！」

『クルルルウ！』

《インペイル・レイニアス》（功1700↓2500）vs《ラヴァルバル・チェイン》（攻1800）

「痛っ、」

「追撃よ！《バニシング》&《ファジー・レイニアス》でダイレクトアタック!!」

『『ピユウウウ!!』』

「キヤアアア?!酷いですわっ！」

ももえ LP4600↓3900↓1800↓500

アンタが言うか。

「ライフが並んだ！」

「メインフェイズ2！《インペイル・レイニアス》効果！攻撃したメイン2に墓地より《トリビュート・レイニアス》を復活！特殊召喚時《RR―レディネス》墓地へ！」

「まだ展開する気か！」

「今度は腑抜けてない布陣を見せてあげる！《バニシング》と《ファジー》、《トリビュート》と《インペイル》で、オーバーレイ！冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！飛来せよ！ランツク4！2体の《RR―フォース・ストリクス》！！」

『『ピュイイイイ』』

《RR―フォース・ストリクス》

ランク4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 100 / 守 2000

レベル4モンスター×2

(1) : このカードの攻撃力・守備力は、

このカード以外の自分フィールドの鳥獣族モンスターの数×500アップする。

(2) : 1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

デッキから鳥獣族・闇属性・レベル4モンスター1体を手札に加える。

「2体の《フォース・ストリクス》効果！ORUを1つ使い、デッキからレベル4闇鳥獣族《バニシング・レイニアス》と《シンキング・レイニアス》を手札に！ついでにORUから墓地に行った《ファジー》も手札へ！そして《シンキング・レイニアス》を特殊召喚！エクシーズが場にいる時特殊召喚出来るわ！さらに《ペイン・レイニアス》を特殊召喚！「RR」1体、《シンキング》を指定しその攻撃力分のダメージを受けて特殊召喚出来る！」

『チョン、チョン』

イテツ、かわいいから許す！

ジュンコ LP500↓400

《RR—シンギング・レイニアス》

星4／闇属性／鳥獣族／攻 100／守 100

「RR—シンギング・レイニアス」の(1)の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：自分フィールドにXモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

《RR—ペイン・レイニアス》

星1／闇属性／鳥獣族／攻 100／守 100

「RR—ペイン・レイニアス」の効果は1ターンに1度しか使用できず、

このカードをX召喚の素材とする場合、鳥獣族モンスターのX召喚にしか使用できない。

(1)：このカードが手札に存在する場合、

自分フィールドの「RR」モンスター1体を対象として発動できる。

自分はそのモンスターの攻撃力か守備力の内、

低い方の数値分のダメージを受け、このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは、対象のモンスターのレベルと同じになる。

「腐ってた手札はそれでしたか……しかしエクシーズしないつもりだったくせによく《シンキング》と《ペイン・レイニアス》を採用しますわね？ 大方、仲間外れは可哀想！ とかでしようけど」

「わかってんなら突っ込むなあ！ 《ペイン》は召喚時に指定した「RR」と同じレベルになる！ 《シンキング》と《ペイン》でオーバーレイ！ 3体目エ！ 《RR―フォース・ストリクス》!! 効果で《トリビュート》加えてターンエンド！」

ジュンコ H3 (ファジーバニシングトリビュート) LP400

フィールド現状

《フォース・ストリクス》(守2000↓3000)×3

《一族の結束》

《RR―ネスト》

「ワンターンスリイストリクスウ．．．」

やめろ

「なんとゆう展開力だ．．．」

「あれだけやって3枚手札が残っているだ?!」

「これが、ジユンコの本気?」

「スツゲー!! かつこいいぜジユンコー!!」

．．．ブイツ。

「流石はジユンコさん、面白くなって来ましたわ! わたくしのターン! 必殺! 《強欲なバブルマン》 召喚! 成功時2枚ドロ! 続きまして《貪欲な壺》!!

《ラグナ・ゼロ》

《クリスタル・ゼロ》

《FA—クリスタル・ゼロ・ランサー》

《ラヴアルバル・チエイン》

《水の精霊アクエリア》

以上をデッキに戻しましてシャッフル!! あ、カット致しますか?」

《貪欲な壺》

通常魔法

自分の墓地のモンスター5体を対象として発動できる。

そのモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、自分はデッキから2枚ドローする。

「いいから早くしなさいよ……」

「では積み込みバリの2ドロー!」

十代みたいなドローラッシュユだこれー。

「フッフ、バブルマン（原作）でデッキの回転力がグンと上がりましたわ。水属性がいるので《サイレント・アングラー》を特殊召喚! 《バブルマン》と……」

「待った！特殊召喚成功時墓地の《RRーレディネス》第2の効果！除外してこのターン受けるダメージを0にする!!」

《E・HERO バブルマン》

星4／水属性／戦士族／攻 800／守1200

強欲。

《サイレント・アングラー》

星4／水属性／魚族／攻 800／守1400

自分フィールド上に水属性モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このターン自分は手札からモンスターを特殊召喚できない。

「墓地で使える劣化《和睦の使者》か、便利だな」

「でも、なんで今使ったのかしら？」

んなもんかすり傷1つで敗北まであるからに決まってるでしょ……もも（愛称）のEXデッキに絶対《深淵に潜む者》はいるだろうしね、まだ墓地に《ゲイザー・シャー

ク》いるし警戒するに越したことはないわ!

「随分察しが良くなりましたわね?・・・仕方ありません、2体の水属性モンスターでオーバーレイ!エクシーズ召喚!目覚めなさって《No. 37 希望織竜 スパイダー・シャーク》!」

《八雲オ・・・》

《No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク》

ランク4 / 水属性 / 海竜族 / 攻2600 / 守2100

水属性レベル4モンスター×2

「No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1):自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、

このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで1000ダウンする。

(2)：このカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた時、

このカード以外の自分の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

「そつちに切り替えたかー」

「はいっ、《ゲイザー・シャーク》再び発動！墓地の2体の《ジエノサイドキングサーモン》を呼び出しオーバーレイ！おいでませ《No. 73》！カオスに落ちたる聖なる滴、その力示して混沌を浄化せん！エクシーズ召喚！《激瀧神アビス・スプラッシュ》!!」

《・・・》

《No. 73 激瀧神アビス・スプラッシュ》

ランク5／水属性／戦士族／攻2400／守1400

水属性レベル5モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

このカードの攻撃力は、相手のエンドフェイズ時まで倍になる。

このターンこのカードが相手ライフに与える戦闘ダメージは半分になる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

今度はそつち?!あのコの考えは読みづらいわー、

「もひとつ! 《死者蘇生》! またまた再臨 《S・H・dark knight》!!」

《殺られたら殺り返す!それが孤高なる鯨の流儀だ!!》

「どんな引きしてんのよアンタはー!」

「シャークさんエース揃いぶみですわ♪ 《dark knight》! 《ダーク・ソウル・ローバー》!! 《フオース・ストリクス》1体ゲットだぜ!」

ふざけるな凌牙!

これ実は、並べたかっただけじゃね?!

遠い目「……バトル! 《スパイダー・シャーク》と《アビス・スプラッシュ》で
 残党狩り!」
 ピエッ……

凶星か。

あ、こちら! 蜘蛛鮫さん、激瀧神が倒した奴まで食べるの止めなさい! 希望って名前が
 泣くわよこんなグロイシーン、てか私が涙目だわ! ガイドラ貫通怖くてレディネスサー
 チにしないでごめんまじごめん……

「そして意味はないけど《dark knight》で攻撃!」

『?!』

《dark knight》さんも困惑してんじやないっすかあ、こっち来た。
 『イラツとくるぜ……』

(ゴツツ!)

槍で叩かれた……

「……なに、嫌がらせ？」

「軽いうさ張らしですわ、いい加減沈めよ沈めえ！ どうしてわたくしに気持ちよくワンキルさせないんだ！……とか考えていませんわ。1枚セットしてターンエンドです」

ももえ HI LP500

ワールド現状

《スパイダー・シャーク》(攻2600)

《アビス・スプラッシュ》(攻2400)

《dark knight》(攻2800)

セットカード

「こちとら、絶体絶命の崖っぷちからが本領発揮よ！ 私のターン!!」

けどそろそろ観衆の目が辛く感じてきた、胃が痛いし、決着つけるわよ！

「ジュンコ〜！ここまで耐えたんだ！絶対勝てよ!!」

あ、治ったわ！我ながら単純ね。

「あつたり前よ！目にもものいわせげるから覚悟はいい?!」

「その粹だぜ!!流石はジュンコ!!」

「ラブラブツスね〜・・・」

「くっ、羨ましい・・・」

「そうね、ちよつとまぶしいわ」

「十代様は素直に声援送ってくれていいですわね〜・・・」

チラッと客席を見て、万丈目君はそんなタイプじゃないっしょ。

「うっさい、ひねくれ男子好きのくせに。《貪欲な壺》返し！」

《RRーフォース・ストリクス》3体！

《RRーバニシング・レイニアス》

《RRーファジー・レイニアス》をデッキに戻して2枚ドロー！」

「ジュンコさんも大概な引きですわよ?!」

来た！あとはあの伏せ次第！

「《サイクロン》！アンタの伏せを破壊するわ!!」

「ムツ・・・仕方ありませんわね、チェーン発動！《RUMークイック・カオス》!! 《アビス・スプラッシュ》でオーバーレイ・ネットワークを再構築！カオス・エクシーズ・チェンジ!! 渦巻く混沌の水流を突き破り、今、かの地へ浮上せよ！《CNO. 73 激瀧瀑神アビス・スープラ》!!」

『主イ!!』

《CN0. 73 激瀧瀑神アビス・スープラ》

ランク6 / 水属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2000

レベル6 モンスター×3

(1) : 自分フィールドのモンスターが相手モンスターと戦闘を行う

そのダメージ計算時に1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

その自分のモンスターの攻撃力は、

そのダメージ計算時のみ戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする。

(2) : このカードが「N0. 73 激瀧瀑神アビス・スプラッシュ」を

X素材としている場合、以下の効果を得る。

●このカードは効果では破壊されない。

「どうですジュンコさん、鳥獣縛りの残りのエクシーズモンスターでこの方々を突破出来まして? 《シルフィーネ》を戻さなかったのは失敗でしたわね♪」

「な〜に勝ち誇ってるの? アンタ大事なコを忘れてるよ〜ね、おいで 《バニシング》! 《ファジー》! そして《RRーネスト》で《ミミクリー》を手札に加えて特殊召喚ツ! 特

殊召喚時に効果発動！フィールドの「RR」達のレベルを1つ上昇させるわ！

「まさか！《リオート・ハルピユイア》か!？」

多分万丈目君だろう、あの時はサーセン。

「あらお忘れですの？ファジーを特殊召喚ターンの召喚制限を、それに《リオート・ハルピユイア》じゃ《アビス・スープラ》の効果で結局相討ちになるだけですわ」

「え、《リオート・ハルピユイア》？忘れちゃったようだから・・・思い出させてあげるわ！3体の鳥獣族レベル5モンスターでオーバーレイ！獰猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し 寄せ来る敵を打ち破れ！エクシース召喚！ランック5!! 《RRーブレイズ・ファルコン》!!」

『ピュエエエエ!!』

「・・・あらっ?!」

「攻撃力たったの10000?」

「あれでどう勝つのかしら・・・」

クククククク、《RUM》が入ってないからって《ブレイズ・ファルコン》が出ないと誰が言った?世間の評価は低いけど、こんな時もあるから外せないのよねこのコ

「ちよつと・・・ズルくありません?」

「問答無用! (十代の前では) 勝てば官軍、容赦無し!! 《ブレイズ・ファルコン》は相手プレイヤーにダイレクトアタック出来る! ももえにダイレクトアタック!! 行けっ! 《ブレイズ・ファルコン》! 赤熱の怒りをたぎらし、反逆の槍を突き立てろ! 「迅雷のラプターズ・ブレイク」!!」

《RRーブレイズ・ファルコン》

ランク5 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1000 ↓ (1800) / 守2000

鳥獣族レベル5 モンスター×3

(1) : X素材を持っているこのカードは直接攻撃できる。

(2)：このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊する。

(3)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、

破壊したモンスターの数×500ダメージを相手に与える。

「えー！ダイレクトアタック効果?!」

「流石ジュンコ！あざといぜ!!」

私そんな位置すけ?!

「キヤアアアアアア!!」

ももえ LP500↓0

「し、勝者、シニョーラ枕田ナノーネ……」

あ、モンスター破壊効果でも勝てたわね、《フォース・ストリクス》のお返しに蜘蛛鮫さんフカヒレにすればよかったかも。

「ウウウツ、折角展開したのにそれをガン無視してくるなんて……」

「勝てぬなら 無視してしまえ ホトトギス」

「A. 鳥種が違います……ですわ」

いいノリだ。

「ジュンコウ!!」

え、十代いつ降りてきたん？てかこつち向かって……

十代へガシツツ

……。

「／キヤアアアアアアアアア?！」

中略、十代に抱きしめられました。

「ちよちよちよちよちよちよ十代さん?! ななななな、なにしてるのよ公衆の面前でツツツツツ!」

「あらま〜」

「あ、わりい．．．つい? いや〜凄かったぜ! 俺もう感動しちやつて居ても立ってもいられなくてさ! あんな状況から逆転するなんて、超カッコ良かったぜ!!」

私の理性が爆発しそうで居ても立っても居られないんですが?!

「と、と〜ぜんよく．．．私を誰だと思ってるの?!」

「そうだな! さっすがはジュンコ! 俺の親友だぜ!!」

「ブツ〜?!」

親友宣言?! 嬉しいんだけど残念が勝るわ．．．

もも（愛称）、何吹き出してんのよ！

「そういえば、ももえだっけ？お前もあのシンクロとかエクシーズ持ってたんだな！・・・
ジユンコは人前で使いたくないとか言ってたけど大丈夫なのか？」

そ、そうよ！すっかり忘れてた、大勢に見られちゃって・・・どうごまかすのよ!?

「ああ、そのことでしたら・・・クロノス先生、マイクお借りしますわ」

「え、はい、私マイク持ってたのーネ」

《あく、あく・・・皆様!!只今のデュエル、お楽しみ頂けましたでしょうか?!》

「も、ももええ?!」

《みたこともないモンスター、召喚方法に皆様さぞ驚かれたことかと思えます、それもそのハズ！只今使われたシンクロ・エクシーズ召喚は、現在インダストリアル・イリユー

ジョン社が目下開発中の新召喚システムだからですわ!!》

ナ、ナンダッテー?!

「おおくそうだったのか!!」

《本来、有志達によるテストプレイでしか使用出来ないのですが・・・皆様に早く紹介したいという想いから、今回実技試験の場を借りてアカデミア生徒限定で、オープンテストをさせて頂きましたわ♪》

いや、聞いてネーシ?!

《今回はジュンコさんとのすれ違いから、ほぼエクシーズ召喚限定になってしまいました。が・・・近いうちに再び場を借りて、シンクロ召喚もより詳しく紹介したいと思いますわ!ご静聴ありがとうございました!ほらっ、ジュンコさんも!!》

ももがマイクを差し出してくる、無言の威圧が恐い。

《あ、はい?!ご、ご静聴ありがとうございます。》

《あ!最後に注意事項を、普段のデュエルでは混乱を避ける為使用を控えております、質疑応答も面倒なのでご遠慮させてもらってます、あらかじめご了承くださいましっ》

《え?!じゃあ今の紹介なんだたのよ!!意味あったのコレー?!》

……とりあえずその場はももえに合わせたあと、その後全力で部屋に逃げ帰った。

おい……続くのこれ?

5羽 アレはどう見ても人が住まなくなって数年の荒み方じゃない

VSももえ 同日、夜―

「ハアアアアア?! 「嘘」 おおおおお?!」

私の部屋にももえを呼び出して色々状況整理中。

なんでもシンクロ・エクシーズのテストデュエルとは全くの出鱈目だったらしい。

「そんな耳元で乾いた叫びしないでくださいまし……」

「初代のOPかつ!じゃあなにか? オープンテストなんか嘘っぱちで? ただ世界に向かつて全力で初手七皇^{セブンスワイン}の剣したわけ?!」

「だからそう言っているじゃないですか隼……やっぱ面倒なんでジュンコさん、そんな新しい召喚のテストかなんかなんてー学生ごときにやらせるはずがないでしょう、コ●マイの悪夢をお忘れですか？」

「アニメ代わる度にプレイヤーに新召喚を使うことを強いるんだつ、てか?! 大嵐禁止羽帚帰還でカオスに陥ったあれか!! 私ほ地味に嬉しかったがな! (ヒステリックサインのサーチ対象的な理由) てかこつちの世界にコン●イねーから!」

「なんか主旨が微妙にずれていますか……大体ジュンコさんが悪いのですよ? 覗き事件の日、十代様の気を引く為かただ口上叫びたかっただけか知りませんが、クロノス教諭の前で《驟雨のライキリ》出すから……シンクロせずとも勝てたでしょうに」

「だからなんで私の思考読まれてんのよ! しかも両方正解よコノヤロー!! てかクロノス先生あの場にいなかったじゃない!!」

「お忘れですか? あの偽ラブレターの犯人はクロノス教諭ですわ、あの気持ち悪い口紅を見たでしょうに……潜水着を来て湖に潜ってこちらの様子を伺っていましたわよ? ねえ《ディーヴァ》さん」

『……』

え、《深海のディーヴァ》居んの？会話出来るの？マジデ？

「やっぱり見えないのですか、折角GXの世界に来たのになんか可愛そうですわ」

「ズルくね?!私も境遇同じなのにアンタだけ見えてるってズルくね?!」

「やはりカードとの信頼の差でしょうか、悔しいでしょうねえ……もうひとり居ますわよ?十代様でいうネオス枠の方も」

ネオス枠……ああ!過労死担当ね!

「でもいいなあ、私もハネクリボー見たい」

「話がまたずれましたが、あのデュエルを見たクロノス先生がジュンコさんをストーリーキングし始めたので……あれはテストプレイです!（ドヤ顔）と言って誤魔化したのですわ」

何その解決案……

私的にデメリットしか感じないんですけど

「ジュンコさんすぐにボロ出しそうでしたし……そう言っとけば社長や会長様にバレルまで時間稼げるかな」と、校長にアポとられたら終了ですが」

「相変わらず肝心な所がガツバガバね……人のデツキすり替えたのもアンタでしょ」

ちゃんと返して貰いました、皆は真似しちやだめよ？

「教諭に見られたのはBブラックフェザー Fだったのでそれを使わせようと、シンクロvsエクシーズ的な構図にしたかったので私はあのデツキを……闇鳥獣だからって同じ黒のケースに入れるから間違えたのですわ!!」

「逆切れかよ！てか中身確信しりゃOKだったじゃない!!」

「そこは決闘者としての最低限のプライドがですね……とりあえず折角同じ境遇同士、今後の対策でも練りましょうか、主に社長&会長対策を」

「アンタが巻き込んだ感半端ないんだけど……とりあえず蒼き眼シリーズ賄賂の準備しときますか」

へえ、なんで万丈目君推しかって？あのコ金●一シリーズ好きなのよ

あれからしばらく立ちました、他の生徒から「シンクロ、エクシーズについて教えろっ！」って目線が強いですが、ももえが全力で質問拒否を貫いたのでなんとか平和です。たまに「じゃあエクシーズ使ってデュエルしろ!!」とか言い出す奴がいましたが、「十代に一勝も出来ないならまず話にならん」と冷たくあしらっております。

そんな失言から十代に挑戦者が増えて最近二人の時間○がとりづらいですチク

ショー、万丈目君つとけば良かったな。

さて今夜も遅いし、戸締りを念には念を入れて上で更に念を入れて行い、眠ろうとしたら十代からメールが届きました。

「ジュンコ！肝試し行こうぜ!!」

お、おう……これってあれかな？ 魔寮の奴かな、返信返信つと。

「何時何処に行くのか書きなさいよ、馬鹿なの？」

うん、長文書くとボロが出そうだからこれでいいわね。

PDA へブブブツ

あ、返信早っ?!

「なんか使わなくなつた寮があるらしいんだけどそこに昨日行こうって計画してて、やっぱ女子がいた方が肝試しっぽいかなと思ってさ！一緒に行こうぜ!!」

何?!肝試しデートのお誘いだと思って良いのか?!マツハで行くぜ!!

《ピ》

「おいジュンコー!こつちこつちー!!ってあれ?ももえも一緒か」

「う、うん・・・別にいいわよね?」

「宜しくですわ〜」

寮を抜け出す寸前、たまたま見つかって理由を話したらついてきちゃいました。

「まあ!廃寮とかミステリー臭がプンプンしますわ!ぜひわたくしも!!」ってな感じで、このコ軽いミステリマニアだからね仕方ないね。

「ジュンコさんなら絶対来ると思ったけど・・・」

「物好きな二人なんだなあ・・・」

「なんならあと一人お誘いすれば男女ペアで組めましたのに、惜しかったですわ〜」

「むしろアンタが来て奇数になったんでしょ……丸藤に女装させれば解決したわよ」

「絶対嫌っスよ?!」

「まあまあ、ともかく出発しよーぜ！」

《クリクリッ?》

「ってわけで、やって来ました廃寮前。」

「ももえめつちや目エキラキラしてんだけど殺人事件とかねーから、確か行方不明者が
出てるんだっけ?」

「おー、いい感じにポロポロだぜ」

「この学校、出来て精々10年くらいじゃなかったっけ?なんでこんなポロっちい建物

があんのよ……」

「ジュンコさん、案外細かいっスね……」

「貴女達！そこで何してるの!!」

この声は!?

「はい！肝試しです!!って明日香さん?!」

「肝試し?!ふざけないで!!ここの噂は本当よ!」

「まあ！ますます楽しみですわ!」

火に油注ぐなもも！（愛称）

明日香さんすげー怒ってるじゃん!!

「なんで本当だって言えんだよ?」

「行方不明者の中には、私の兄もいるの……」

「あ、」

小声（やつべーよ、すっかり忘れてたよ！吹雪様のアレじゃんここ！）

小声（中等部の頃一時期物凄く参っていましたがものね・・・友人たるわたくし達
が面白がるなんてとんだ不謹慎でしたわ）

「ジュンコにももえまで、ここがどうゆう場所かわかってるの?！」

「すいませんでしたー（わ）！」

ここは謝って撤退よ！肝試しデートとか言ってる場合じゃないわ！

小声（はい！大人しく明日香様と帰ってUNOでもしましょう!!）

もう考え読んでの突っ込まないからね！てかなんでUNOだ！

「え、ええ・・・わかればいいのよ？」

「じゃあね十代！あたしら帰るから、あんた達も程々にしときなさいよ!!」

「失礼しますわ〜」

「お、おう……」

明日香さんの背中押しつつ全力で撤退した。十代が寂しげな顔してたけど今回は仕方ないわ、友達を傷つけたくはないもんね。

《クルウ〜》

「意外だったわ、ジュンコなら意地でも十代と一緒に行くと思ったのに」

「私そんな印象?!」

「ジュンコさんは、十代様の為なら他はどうなってもいい!とゆうイメージですから」

「あのねえ……」

「フフフツ」

「およっ。」

「どうかなさいましたか？明日香様」

笑うとこ無かった気がするんだけどなー。

「いや、最近二人とちよつと距離を感じていたから……急に見たこともないカード使
い出すし、よく二人でコソコソ相談しているし」

「そ、それは……」

「でも安心したわ。二人とも何も変わってない、いつも通りの私の友人達……」

「明日香さん(様)……」

やつべー少しジーンときたわ、まじでごめんなさい明日香さん。さつきまで肝試し
デート○とか浮かかれててごめんなさい。

「そ、そうですね！明日香様もシンクロやエクシーズのお試しに参加してみませんかこと

?!」

ちよつ?!もも ○ 何言い出すのよ!!

「わたくし達だけじゃ使用種族に偏りが出ますし……(ただの好み)、明日香様も気に入りそうなカード有りましたらぜひ!」

「そんな勝手に決めて大丈夫なの?」

「ジュンコさんが十代様に「雷鳴と共に走れ!電光の斬撃!!」って叫んだ時点で通常のデュエルで使わないルールは崩壊してますし……明日香様なら信頼出来ますし無問題ですわ!!」

「さりげに私のせいにしやがった?!……でも、私も明日香さんなら信頼出来るしOKよ」

「そもそも貴女達が何故そんな状況になったかが非常に気になるのだけど……」

「ご、ごめんなさい」

「それだけはどうしても勘弁して下さいまし」

まさか「前世から神様（苦笑）が送って来た」なんて言えるわけないしね……

「わ、わかったわ。人には言いたくないこともあるわよね」

「そ、その分精一杯明日香様がお気に召しそうなカードをチョイスしてみせますわ!! 何がいいでしょうジュンコさん?!」

「えっ、私に振るの?! そ、そーねえ……新しく別のテーマ使ってみるか今のデッキに組み合わせるかでも随分変わるんじゃない? 明日香さんには明日香さんのこだわりがあるだろうし」

「ジュンコさんは鳥頭、わたくしは魚口みたいな感じですね、どうでしょう明日香様」
さりげに悪口ぶっこんだ!」

「そうね……どんなカードを使っても《サイバー・ブリーダー》や「サイバー・エンジェル」は使いたいわ。私実は貴女達に出逢う前、小学生の頃は自分で手に入る範囲で強いカードばかり使っていたのだけれど……」

「「だけど?」」

「兄さんがね、「もつとお気に入りのカードを見つけて、それを大切にするデツキのほろがきつとデュエルが楽しくなる」って。それから見つけた、私の大切なカード達だから……っってどうして泣いてるの二人共、泣く要素あった?!」

「ごめんなさい、ただ鳥可愛いっただけで鳥獣使いでごめんなさい。
流星はメインキャラ、なんか深いわ……」

「なんだかとしてつもなく申し訳ない気分になってきました……」

「よっしーじゃあ戦術補助的な感じでカードチョイスね!!まず儀式の安定性強化か下準備が使えないのはちょっと残念……」

「し、下準備?!急にどうしたのジュンコ」

「そうですわね……単純な手だとりリリース要員を「儀式魔人」か「聖刻」にしてアド減を抑えるとか」

「えと……」

「でも《サイバー・ブレード》の融合素材も考えるとやっぱアンタみたく《高等儀式》からの墓地利用じゃない？ 《量産工場》で回収したりバナラチューナー混ぜて蘇生系使えばシンクロ・エクシーズも選択肢増えるわよ。サブウエポンで《龍の鏡》からの《ワイアーム》ってのもいいわね！」

「あの……」

「まあ！ それだとデツキがバナラだらけで事故率が上がりますわよ？ わたくしのデツキは《ジェノサイドキングサーモン》引かないためにあえてデツキ枚数増やしてますし……」

「ちよつと……！」

「『聖刻』もバナラ積むから事故率どっこいどっこいじゃない？ あー、《トフェニ》リリースー

スランク6《ベアトリーチェ》立てて墓地に儀式魔人溜めるとかアリね……」

「ねえってば!」

「《サイバー・ブレード》の融合素材片方が星4バニラですから融合関連控えめで《予想GUY》と《融合呪印生物―地》にまかせるつてのもありではないかと、状況次第でバニラチューナーにスイッチで……」

「その構成なら『ブンボーク』儀式出張セットで《予想GUY》シンクロ星4《虹光の宣告者》スランク4チェイン魔人落としからの……」

「いい加減にしてー!!!」

「あ、」

「ついOCG視点デッキ改良案を語り出してしまう系女子、ちよつと熱中しすぎました。」

「使用者本人を置いてけぼりで何盛り上ってるのよ！私にもわかるように説明してよ！！」

「そうだなあ．．．．．実に興味深い話だあ．．．．．」

「「?!」」

「こ、この匂いは．．．．．」

何．．．．．急に意識が遠く．．．．．あ、明日香．．．．．さん．．．．．

「．．．．．ユンコさん！」

あ、あるえ．．．．．？

「ジユンコさん！起きて下さいまし!!」

「あつ、もも！大丈夫だったの？」

「わたくしは平気でしたが明日香様が……」

連れ去られちゃったのか……

「あのアイテム使ったらブチ切れそうな声は間違いなくバルバト……じゃなくてタイタンですね、明日香様を誘拐し、十代様を誘き出す為でしょう。迂闊でしたわ、すっかり忘れていました……」

「この状況下でさりげにボケを混ぜるんじゃないわよテ●ルズ好きめ……しかし許せないわ！明日香様を誘拐しただけでなく十代まで罠に嵌めようだなんて……廃寮に行くわよもも！スリップストリームで私について来い!!」

「負けじとボケ返さないで下さいまし?!」

《ちつきしよう！私が誘拐されてたら完全に十代のヒロインポジ乗っ取ってたのに!!》

《不謹慎にも程がありますわ!!》

「ぜえ、ぜえ、見つけたわ!バルバ●ス!!」

「はあ、はあ・・・それ、ジユンコさんが言うんですの?!」

「ぬ、貴様達は先程の・・・」

「ジユンコ!ももえ!」

「二人ともなんで此処に?!」

廃寮の奥地までかつとビングしてきたわ私イ!!

奪われた仲間は・・・明日香さんは必ず奪い返す!!

「大方お友達を助けにきたのだろうが無駄だあ・・・一度始まった闇のゲエエムは他者が介入することは出来ぬ・・・」

クソツ、無駄にいい声響かせやがつて。十代が相手してるのね、現状は……

十代 H4 LP2000

無し

タイタン H3 4000

フィールド現状

《万魔殿―悪魔の巣窟》

《ジェノサイドキング・デーモン》（攻撃力2000）

「お互い割とスツキリしたフィールドですわね……《ミラーフォース》でも決まつて《アスルーク・デーモン》で《ジェノサイドキング・デーモン》を復活されてダイレクトアタックでもされたのでしようか？」

「ももえさんはエスパーっスか?!」

「謎の観察眼なんだなあ」

十代の手札は4か……《悪夢の蜃気楼》コンボでも決まったあとかしらね、ライフ2000つてのが気になるけど。

「十代！何チンタラやってんのよ！！私以外に負けたら承知しないわよ！！」

「ジユ、ジユンコ・・・」

「愛の無茶振りですわね〜」

アンタは黙ってなさい。

「へへっ、そうだな。いつもお前とやってるデュエルと比べたら、こんな状況屁でもないぜ！俺のターン！！」

！
そう、たかだか攻撃力2000のモンスター棒立ちで、十代の猛攻を防げる筈がない

「いくぜタイタン！《バブルマン》召喚！召喚時2枚ドロー！《融合》発動！手札の《フェザーマン》と《バブルマン》で融合召喚！《E・HERO Great TORNADO》！！召喚時相手モンスター全ての攻守を半分にする！《タウンバースト》！！」

「何い?! 全体に影響する効果では《ジェノサイドキング・デーモン》の効果は……」

《E・HERO バブルマン》

星4 / 水属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 1200

強★欲

《E・HERO Great TORNADO》

融合・効果モンスター

星8 / 風属性 / 戦士族 / 攻 2800 / 守 2200

「E・HERO」モンスター＋風属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1) : このカードが融合召喚に成功した場合に発動する。

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。

《ジェノサイドキングデーモン》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 2000 / 守 1500

自分フィールド上に「デーモン」という名のついた

モンスターカードが存在しなければこのカードは召喚・反転召喚できない。

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に800ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、

その処理を行う時にサイコロを1回振る。

2・5が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

このカードが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

「まだまだあ！《融合回収》！《闇の量産工場》！墓地の《スパークマン》《フェザーマン》《バブルマン》《融合》を回収!!そして《融合》！《E・HEROテンペスター》!!」「バ、バアカナア！攻撃力2800が2体だとお?!」

《融合回収》

通常魔法

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、

融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

《闇の量産工場》

通常魔法

(1)：自分の墓地の通常モンスター2体を対象として発動できる。
そのモンスターを手札に加える。

《E・HERO テンペスター》

融合・効果モンスター

星8／風属性／戦士族／攻2800／守2800

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO スパークマン」
＋「E・HERO バブルマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカード以外の自分フィールド上のカード1枚を墓地に送り、
自分フィールド上のモンスター1体を選択する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
選択したモンスターは戦闘によっては破壊されない。(ダメージ計算は適用する)

「いつけえ!!」《Great TORNADO》で《ジェノサイドキング・デーモン》に
 攻撃!〈スパーセル〉!!」

vs 《ジェノサイドキング・デーモン》(攻2000↓1000)

「ぐうおおおお!!」

「終わりだタイタン!! 《テンペスター》のダイレクトアタック! 〈カオス・テンペスト〉
 !!」

「アアリエエン!!」

タイタンLP4000↓2200↓0

「やったわね十代!」

「おう! お前の激励のお蔭だぜジュンコ!!」

「なんか《Great TORNADO》とか見えたんですが・・・」

気のせいよ。

決して渡すHEROカード尽きてきて、影●HEROなど渡していないわ。

「お、おのれえ。む？な、なんだ！足下が光つ．．．」

「なんじゃあこりやああああ?!」

足元光つたと思つたら辺りからなぞの黒い霧（？）が、どうゆうことだつてばよ!!

「ジュンコさん！十代様が！」

「十代!?なんか危ない!!」

「ジュンコ!?こつちに来ちゃ．．．」

暗転．．．?辺りの景色が黒1色に変わった、まるで意味がわからんぞ!!

「ジュンコ!大丈夫か?!」

「アンタこそ!5体満足!」

「お、おう．．．」

「ぬああああ!たあすけてくれえええ!!」

なんじゃあこりやあ（2回目）・・・黒いちっこいスライム的ななにかがタイタンの口の中へ入っていくではないか！

「キモツ?!とにかくキモツ!!」

「や、やべえぞこつちに来た!」

『クリクリ〜!』

「な?!相棒!」

「ハネクリボー!?!十代のデツキから出てきたわ!!」

『クリクリッ!』

「こいつら、ハネクリボーが怖いのか!」

「いいなあ〜可愛い。私にもそうゆうポジションのコ欲しいわ〜」

「案外余裕だなジュンコ?!てかお前も、肩に・・・」

「ん?」

『クルルウ・・・』

「うおう?!」

し、疾風のゲイルさんではありませんか!!なにこれ!肩にチョコン、と乗ってんだけど、可愛いっ?!

『クウ〜・・・』

あー、なんか頬擦りしてきたんですけど、ヤバイ幸せだわ・・・このままゲイルをベツトに連れ込んで眠りにつきたい。

『姫!喜んでいる場合ではありませんぞ!!』

あん?姫って誰だよ、今ゲイルのモフモフを堪能している所・・・

「ブウルワアアアアア!!」

「ジュンコ、前前!」

「ハッ、違う世界に行きかけてたわ!」

なーんか雄叫びまでバ●バトスになってきてるう?!

「遊城じゆくダイイイイ．．．闇のゲエエムを始めようか、本当の闇のゲームをなあ．．．．」

「くつ、さつきとは明らかに様子が違うぜ!!」

「待って十代、ここは私がやるわ。あんな露骨におかしい奴、まともに相手してらんない．．．．私の【BF】達が蹴散らしてあげるわ!!」

「わ、わかつたぜジュンコ．．．油断するなよ?」

「当然よ!私を誰だと思ってるの!!」

「いいだろう小娘エ、貴様を闇への生け贄にしてやる。今の私は紳士的だあ、楽に死なせてやるう．．．．」

「アンタみたいな紳士がいてたまるか!せめて頭に変態をつけなさい!!」

「デュエルウ!!」

さつきのデュエルを見る限り「チエスデーモン」だったわね．．．．精々怖いのは
《墮落》と不確定な対象効果耐性程度!一氣に決めてやるわ!!

「私のターン！《黒い旋風》を発動！そして《BF―精鋭のゼピュロス》を召喚し、ゼピュロスの攻撃力1600以下の《BF―そよ風のブリーズ》を手札に加えて特殊召喚！」

『ハアッ！』

『フユ〜ルルル』

前から思ってたけどブリーズ・・・BFなのに羽黒くない、かわいいからいつか。

《黒い旋風》

永続魔法

(1)：自分フィールドに「BF」モンスターが召喚された時にこの効果を発動できる。
そのモンスターより低い攻撃力を持つ「BF」モンスター1体をデッキから手札に加える。

《BF―精鋭のゼピュロス》

効果モンスター

星4／闇属性／鳥獣族／攻1600／守1000

「BF―精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

(1)：このカードが墓地に存在する場合、

自分フィールドの表側表示のカード1枚を持ち主の手札に戻して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚し、自分は400ダメージを受ける。

《BF―そよ風かぜのブリーズ》

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1100 / 守 300

このカードがカードの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、

このカードを手札から特殊召喚できる。

このカードをシンクロ素材とする場合、

「BF」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

遠慮は無しよ！明らかに正気じゃないし大丈夫でしょ!!

「レベル4の《精鋭のゼピュロス》にレベル3《そよ風のブリーズ》をチューニング！」

「おおっ！いきなりシンクロ召喚か!!」

「黒き旋風よ！天空へかけ上がる翼となれ！シンクロ召喚！《BF—アーマードウイング》!!」

『ハアアアア、フン!!』

「出たあ！戦闘に対してほぼ無敵の奴だ!!」

《BF—アーマード・ウイング》

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／鳥獣族／攻2500／守1500

「BF」チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードは戦闘では破壊されず、

このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

(2)：このカードがモンスターを攻撃したダメージステップ終了時に発動できる。

そのモンスターに楔カウンターを1つ置く(最大1つまで)。

(3)：相手フィールドの楔カウンターを全て取り除いて発動できる。

楔カウンターが置かれていた全てのモンスターの攻撃力・守備力をターン終了時まで0にする。

フフツ、十代は何度も相手してるから流石にわかってきてるわね……このコならどんな脳筋相手でも怖くないわ!!

「さらにカードを2枚セット!ターン終了よ!!」

更に伏せの1枚は《墮落》対策の《サイクロン》!さあ、どっからでもかかってらっしゃいよ!!

※注・黒い空間の外

「ハッ!!」

「ど、どうかしたんスかもええさん」

「今ジュンコさんが露骨にフラグを建てた気がしまして……」

「な、仲が良いと色々判るもんなんだなあ……?」

「私タアーン、ドロー!! 見せてやろう……本当の〈闇〉の力をなあ……」

「闇闇うっさいわねー、そんなこと言ったら「BF」達だつて闇属性だつての。ねーゲイル?」

『クルウ……?』

あ、くそつ。首傾げんな反則だろ!可愛さ半端ねえ……

「よく吠える小娘だ、しかしその表情が恐怖に変わるのを想像すると……たあまらんなあ!」

うげつ、まじもんの変質者だ!誰よこんな島にいられた奴……

「私は《魔界発現世行きデスガイド》を召喚ん!!効果によりデツキから《魔サイの戦士》を呼び出す……」

あつ、あれ?ガイドつて……

《魔界発現世行デスガイド》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守600

(1) : このカードが召喚に成功した時に発動できる。

手札・デッキから悪魔族・レベル3モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効化され、S素材にできない。

「そしてこの2体でえ．．．オーバアアアルエエイ！エクシーズ召喚んんらんク

3!! 死と生の狭間を旅する探求者、《彼岸の旅人ダンテ》!!」

「うえええええええ！ダンテエエエエエ!」

え！
続くの
コレ！
!?

6羽 その場の空気を壊す奴は大体堅物か天然よね。

前回のあらすじ！

明日香さんを誘拐しやがったバルバト……じゃなくてタイタンを追って廃寮の奥までやってきた私ともも。

そこで奴は十代とデュエルをしていたのだけど見事に十代の勝利！！

けどなんか急に辺りが変になってタイタンも様子がおかしくなった！

こんな危なっかしい奴と十代をデュエルなんかさせられないわ、私が相手よ！

そんなわけで先行ドヤ顔シンクロで私のフィールドはこんな感じだったのだけ
ど……ど……

ジュンコ H3 LP4000

ブラックフェザー

《B F | アーマード・ウイング》（攻撃力2500）

《黒い旋風》

セット（サイクロン）

セット

相手は「チェスデーモン」だと思ってたら予想GUYなもんが飛んできた！どうなる

私！以下本編！！

「ランク3ニンニン！《彼岸の旅人ダンテ》！！」

「うええええ?!」

ダンテって……BFが本当にかわいく見えるガツチガチガンテツモンスターじゃない！どーなってんのよ！

「ジュンコ！あのモンスター知ってるのか？」

「あーうん……端的に言えば《カードガンナー》？」

《彼岸の旅人 ダンテ》

エクシーズ・効果モンスター

ランク3 / 光属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守2500

レベル3モンスター×2

(1) : 1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、

自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動できる。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

この効果を発動するために墓地へ送ったカードの数×500アップする。

(2)：このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

(3)：このカードが墓地へ送られた場合、

このカード以外の自分の墓地の「彼岸」カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

いや一端冷静になれ私、ガイド魔サイダンテ出張はよくあることよ・・・？

「デツキが「彼岸」だって決まったわけじゃないわ、さっきまで「チェスデーモン」だったわけだし。」

「ダンテのモンスター効果を発動ウ！オーバーレイユニットORUを1つ使いイ、デツキトツプから3枚ま

でカードを墓地に送りその数×500ポイント、攻撃力上昇オ!!墓地へ行ったのはあ・・・この3枚だ!」

《トリック・デーモン》

《彼岸の悪鬼ファーフアレル》

《ヘル・エンプレス・デーモン》

落ち強っ！まさかの混合デース!! っただけ「デーモン」好きなのよ！純彼岸のが絶対強いとか言っちゃ駄目?! いや、結局やべーけど！

「そして墓地へ送られたカード達の効果を発動オ！《トリック・デーモン》で《デーモンの騎兵》を手札に加え、《ファーファレル》で貴様の《アーマード・ウイング》をエンドフェイズまで除外、ORUの《魔サイの戦士》で《戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン》を墓地へえ!!」

「なんか墓地で色々発動してっけど?!」

「ア、アンタもたまにやるじゃない? それの秀でた物と考えましょう・・・?」

《トリック・デーモン》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守 0

このカードがカードの効果によって墓地へ送られた場合、

または戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、

デッキから「トリック・デーモン」以外の

「デーモン」と名のついたカード1枚を手札に加える事ができる。

「トリック・デーモン」の効果は1ターンの1度しか使用できない。

《彼岸の悪鬼 ファーフアレル》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1000 / 守1900

「彼岸の悪鬼 ファーフアレル」の(1)(3)の効果は1ターンの1度、いずれか1つしか使用できない。

(1) : 自分フィールドに魔法・罫カードが存在しない場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2) : 自分フィールドに「彼岸」モンスター以外の

モンスターが存在する場合にこのカードは破壊される。

(3) : このカードが墓地へ送られた場合、

フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターをエンドフェイズまで除外する。

《魔サイの戦士》

効果モンスター

星3／地属性／悪魔族／攻1400／守 900

「魔サイの戦士」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

「魔サイの戦士」以外の自分フィールドの悪魔族モンスターは戦闘・効果では破壊されない。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「魔サイの戦士」以外の悪魔族モンスター1体を墓地へ送る。

ひっさびさに見ただんてやベー……

でもあくまで「デーモン」主体か、《ファーフアレル》は意地でもどかしたいモンスターがいたのねきつと。

「そして《二重召喚》!! 《デーモンの騎兵》を召喚するう！」

そ、そこまでして出したいのかデーモン。

《二重召喚》

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

《デーモンの騎兵》

効果モンスター

星4／闇属性／悪魔族／攻1900／守 0

フィールド上のこのカードが

カードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、

自分の墓地から「デーモンの騎兵」以外の

「デーモン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。

「バトル！ 《騎兵》でダイレクトアタックウ!!」

「キヤアアアアア!？」

ジュンコ LP4000↓2100

な、何?! 凄く痛い・・・これが闇のゲーム？

「ジュンコ? どうしたんだよ尻餅なんかついて! しっかりしろ!!」

「フウハハハハハ、今更闇のゲームの恐ろしさが判つたようだなあ・・・このデュエルにおいてダメージは現実のものとなり、敗者は闇の生け贄となる」

「な、なんだって?! これは本物の闇のゲームだって言うのか!!」

「しかし今の一撃で腰を抜かすとは興ざめだな、消えろオ! 《ダンテ》でダイレクトアタック!!」

「て、手札の《BF―熱風のギブリ》効果発動・・・ダイレクトアタックをうける時自身を特殊召喚出来る」

『フー!!』

《BF―熱風のギブリ》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守1600

(1) : 相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2) : 1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

このカードの元々の攻撃力・守備力をターン終了時まで入れ替える。

「小賢しい、そのまま攻撃だ！」

《BF―熱風のギブリ》(守1600) vs 《ダンテ》(攻撃力10000↓2500)
『フウウウウウ……』

ありがとうね、《ギブリ》……

「フウム、雑魚の壁で凌いだか……メインフェイズ2、手札の《彼岸の悪鬼スカラマ

リオン』を墓地に捨て《ダンテ》を素材にオーバーレイ、《永遠の淑女ベアトリーチェ》をエクシーズ召喚。更に《デーモンの将星》を特殊召喚、《騎兵》を破壊しその効果により墓地の《ヘル・エンプレス・デーモン》を復活させる。カードを1枚伏せエンドフェイズ、《スカラマリオン》の効果によりデッキから《デスガイド》を手札に加えターン終了……」

『ヌウン……』

『フフフフ』

『ホホホホホホッ！』

《彼岸の悪鬼 スカラマリオン》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 800 / 守 2000

「彼岸の悪鬼 スカラマリオン」の(1)(3)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1) : 自分フィールドに魔法・罫カードが存在しない場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2) : 自分フィールドに「彼岸」モンスター以外の

モンスターが存在する場合にこのカードは破壊される。

(3)：このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。

デッキから「彼岸の悪鬼 スカラマリオン」以外の

悪魔族・闇属性・レベル3モンスター1体を手札に加える。

《永遠の淑女 ベアトリーチエ》

エクシーズ・効果モンスター

ランク6／光属性／天使族／攻2500／守2800

レベル6モンスター×2

このカードは手札の「彼岸」モンスター1体を墓地へ送り、

自分フィールドの「ダンテ」モンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

この方法で特殊召喚したターン、このカードの(1)の効果は発動できない。

(1)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

デッキからカード1枚を選んで墓地へ送る。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(2)：このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

エクストラデッキから「彼岸」モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。

《デーモンの将星》

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2500 / 守1200

自分フィールド上に「デーモン」と名のついたカードが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このターンこのカードは攻撃できず、

この方法による「デーモンの将星」の特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

この方法で特殊召喚に成功した時、

自分フィールド上の「デーモン」と名のついたカード1枚を選択して破壊する。

また、このカードがアドバンス召喚に成功した時、

自分の墓地からレベル6の「デーモン」と名のついた

モンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

《ヘル・エンプレス・デーモン》

効果モンスター

星8 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2900 / 守2100

このカード以外のフィールド上で表側表示で存在する

悪魔族・闇属性モンスター1体が破壊される場合、

代わりに自分の墓地に存在する悪魔族・闇属性モンスター1体を

ゲームから除外することができる。

また、フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

「ヘル・エンプレス・デーモン」以外の

自分の墓地に存在する悪魔族・闇属性・レベル6以上のモンスター1体を

選択して特殊召喚することができる。

「え、エンドフェイズに《サイクロン》！セットは破壊する！そして《ファーフアレル》で除外されてた《アーマード・ウィング》は帰ってくる……」

「ム、《デーモンの雄叫び》が破壊されたか……まあ良いだろう」

タイタン H2 LP4000

フィールド現状

《ベアトリーチェ》(守2800)

《デーモンの将星》(攻2500)

《ヘル・エンプレス・デーモン》(攻2900)

へへっ、出張《スカラマリオン》が手札来てるんじゃない、ざまあみなさい……今立ち上がって、そんなモンスター達全滅させてっ……あ、あるえ？おかしいな、腰に力が入らないや……

「どうしたあ、私を蹴散らすのではなかったのかあ？恐怖で立つことすら出来ぬのかあ！！」

どうしよう、怖い……すっごく怖い。私ってこんな臆病だったっけ？手が震えてる、こんなみつともない所……

「ジュンコ、だらしないぞ？……立てないなら俺が支えてやる」
「ほえ？」

突然……十代が私の腕をとり、立てない私を引つ張り上げた。

「じゅ、十代さんツ?!」

「勝とうぜジュンコ!びびってるお前なんからしくないぞ!!」

『クルルウ〜』

『クリッ』

「いつも強気で、口喧しくて……でも実はすつげえ優しい、いつものジュンコが俺は好きだー!」

「え、えと……」

「俺も一緒に戦う!崩れそうなお前を支えてる!だから負けんな、ジュンコ!!」

あー、もう……格好イイんだから。怖いなんてどっか行っちゃったわよ

「あつつつたりまえよ!私を誰だと思ってるの?あんな悪魔なんか宇宙の果までぶっ飛ばしてあげるんだから……隣でちゃんと観てなさい!」

「おう!それでこそジュンコだぜ!!」

「わったしのタアーン！」

肩から十代の体温が伝わってくる……もう、何も怖くない!!

「派手に行くわよ!!」《BF―隠れ蓑のスチーム》!」
『プッシュュー!』

う、うん。蒸気ね?

《BF―隠れ蓑のスチーム》

チューナー・効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 800 / 守 1200

「BF―隠れ蓑のスチーム」の(2)の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

(1) : 表側表示のこのカードがフィールドから離れた場合に発動する。

自分フィールドに「スチーム・トークン」(水族・風・星1・攻 / 守 100) 1体の特
殊召喚する。

(2) : このカードが墓地に存在する場合、

自分フィールドのモンスター体をリリースして発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードをS素材とする場合、

他のS素材モンスターは全て「BF」モンスターでなければならない。

「召喚時《黒い旋風》で《BF―突風のオロシ》を手札に加えるわ、そして！《黒い旋風》を手札に戻し墓地の《精銳のゼピュロス》を特殊召喚！」

『シャアアッ！』

「痛ッ、……この効果を使った時400のダメージを受けるわ」

ジュンコ LP2100↓1700

「お、おい？」

「大丈夫、もうへっちゃらだから……おいでっ！《BF―疾風のゲイル》!!」
『クゥルルウッ』

《BF―疾風のゲイル》

チューナー・効果モンスター

星3／闇属性／鳥獣族／攻1300／守400

(1)：自分フィールドに「BF―疾風のゲイル」以外の

「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2)：1ターンに1度、相手フィールドの

表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

「覚悟はいい?!レベル4の《精鋭のゼピュロス》にレベル3チューナーモンスター《隠れ簑のスチーム》をチューニング!!」

「またシンクロ召喚とやあらかあ、このデーモン達に抗えるのかな?」

「お安い御用よ!漆黒の翼翻し、雷鳴と共に走れ!電光の斬撃!!シンクロ召喚!降り注

げ、《A B F―驟雨のライキリ》!!」
アサルトブラックフエザ

「キッター!ジユニコのエースモンスター!!」

《A BF―驟雨のライキリ》

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／鳥獣族／攻2600／守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

- (1)：「BF」モンスターを素材としてS召喚したこのカードはチューナーとして扱う。
(2)：1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドの「BF」モンスターの数まで、

相手フィールドのカードを対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

あれ?なんか《ライキリ》こっち来たんだけど・・・・・・・・え?刀抜いて、えっ?十代に突き付けて、え?え?

「な、なんだあ?」

『貴様ア・・・・いつまで我らが姫にその薄汚い手で触れているのだ、無礼にも程があるう・・・・・・・・さつさと離さぬか!』

「は、はいいい?!」

「え、ちよ・・・・・・・・《ライキリ》・・・・・・・・さん?」

『ハッ、《ライキリ》にござりまする』

えー！なんかめっちゃ喋ってはるううう！？しかも姫ってなんだよおい！！あつ、もしかしてさっきの声……

『このライキリ、漸く姫と言の葉を交わしましたこと……感激で言葉も出ません』

「いや……どっちよ！喋れるの？喋れないの？出てきて早々キャラぶれつぶれじゃない！大体十代にイキナリ刀突き付けといて無礼はどっちだっつーの！！っーか姫って私かよ?!キャラじゃないわ！寒気が走るわ！突っ込み所が多すぎるわ!!」

『し、しかし主君と定めた方ならば、それ相応の呼び方を……』

「主君って、アンタ格好イイしちよっとうれしいけど姫は辞めなさい姫は！普通にジュンコでいいわよ!!」

『か……格好、いい？お、お褒めの言葉、有り難き幸せつ!!』

「随分変わった奴だな……」

『くくりイ、』

あーもう、ゲイルは普通に可愛いのにこっちはなんなの?! 堅物? 天然? つーかさつきまでの空気返せよおい!!

『遊城十代!! 我を侮辱するとは、姫……じゃなくてジュンコ殿の想い人なれど許さんぞーむしろ貴様など認めんぞ!!!』

「へ? 想い人って?」

「わーっ?!? わーっ!!!」

『なにをほざくか……』

「あ、あれよお! その人を大切に思ってるってゆゑか?」

なに余計なこと言ってくれてんのかよ《ライキリ》アンタあゝ!

「ん? そうなのか? じゃあジュンコは俺の想い人だな! 俺もジュンコのこと大切に思っ

「てるぜ!!」

ぶっは?!?!?

『なにをほざく! ジュンコ殿をお慕い……ゲフンゲフン。大切に思う気持ちならこの《ライキリ》、世界中の誰にも負けはせぬわ!!』

「なんだとお?!俺だつてえ!」

『我の方が!』

あーイケメン達が私を取り合つて喧嘩をツ……

やめて! 私のために……争わないで!!

「……じゃねーだろお!! いい加減にしなさいよ話が進まないわ!」

『しかしジュンコ殿!』

「うるさい堅物! まずは目の前のアイツら片付けてから! 《ゲイル》と《アーマード・ウィング》があきれかえつてるじゃない、黙って仕事しろ馬鹿!!」

『ば、馬鹿!?!』

『クルウ、』

『ハア、』

「《隠れ蓑のスティーム》をシンクロ素材にしたのでレベル1の《スティームトークン》を精製！更にそのトークンを生け贄に、《スティーム》の第2効果！自身を特殊召喚！」

『プツシュ、・・・』

「ほら、《ライキリ》仕事よ！他の「BF」の数だけ、フィールドのカードを破壊する！！今フィールドにいるのは3体！タイタンのモンスターを全て破壊よ！へさつさと働け堅物！！」

『ぎ、御意！！〈天翔黒雷刃〉！！』

『『ギヤアアアアアアア！！』』

「ぐつ、《ヘル・エンプレス・デーモン》は他の悪魔族へ破壊耐性を与えられるが・・・」
「それは自身が対象に含まれていない場合の話！ざまあみなさい！！てか《ライキリ》、その技名何よ・・・」

『以前も殿と共に遊ばれていたRPGの業々が中々に良かったので、雰囲気を実似て

みたのでござりますが……」

それってテ●ルズじゃねーか!? アンタも好きなんかい! てか毎回言ってるこのツツ
コミ! あーももが居なくて良かったあ、ボケが多すぎとおっつかないわ。

※注・外

「ツ!! 確実に存在する……テイル●次元も!」

「ま、また何か感じとったんスカね……」

「不思議な子なんだなあ……」

《アビスはひねくれ男子好き必見ですわよ!》

《他所でやんなさい!!》

「やるではないか子娘エ……だがしかあし！破壊された《ヘル・エンプレス》と《ベアトリーチエ》の効果ア！墓地の《戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン》とEXデツキの《彼岸の巡礼者ダンテ》を特殊召喚!!そして忘れてかけたが《ベアトリーチエ》の効果でデツキの《トリック・デーモン》を墓地に送っていたので《伏魔殿―デーモンパレス悪魔の迷宮》をサーチし、《ダンテ》が墓地へ送られたので《ファーファレル》を回収させてもらおうぞ……」

『フム……』

『フハハハハア!!』

「《ライキリ》イイ！アンタがボケるから効果処理がガツバガバじゃないのよ！どーすんのこれ！」

『わ、我のせいなのですかジュンコ殿！』

※駄作者のせいです

《戦慄の凶皇―ジエネシス・デーモン》

効果モンスター

星8／闇属性／悪魔族／攻3000／守2000

このカードはリリスなしで召喚できる。

この方法で召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になり、エンドフェイズ時に破壊される。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分は悪魔族以外のモンスターを特殊召喚できない。

また、1ターンに1度、自分の手札・墓地の

「デーモン」と名のついたカード1枚をゲームから除外して発動できる。

フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

《彼岸の巡礼者 ダンテ》

融合・効果モンスター

星9／光属性／天使族／攻2800／守2500

カード名が異なる「彼岸」モンスター×3

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1) : このカードは相手の効果の対象にならない。

(2) : 1ターンに1度、手札の「彼岸」カード1枚を墓地へ送って発動できる。
自分はデッキから1枚ドローする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(3) : フィールドのこのカードが相手の効果で墓地へ送られた場合、

または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

相手の手札をランダムに1枚選んで墓地へ送る。

「《彼岸の探求者ダンテ》は効果対象にとることが出来ぬう、貴様のモンスターでは突破不能だ！」

「フン、ただか攻撃力2800と3000がいるだけじゃない！私には《ゲイル》も《ライキリ》も……皆がついてんのよ？そいつらもすぐぶっ飛ばしてあげるわ!!」

『じゅ、ジュンコ殿オ……』

『く〜ルルウ』

「すっかり元通りだなジュンコ！もう支えてなくて大丈夫か、《ライキリ》の目線が怖い

し……し」

「えと、ま、待つて！このデュエル中は……このままじゃ駄目？」

「お……おう？判った（そ、そんな顔されたら断れないんだが……）」

正直十代と離れたら心が折れる気がするわ……実際に命掛けて怖いのね。

『グヌヌヌヌヌヌ』

『クルウ……（ジト目）』

「よっし！《リビングデッドの呼び声》！《ゼピュロス》を復活!!」

『し、シャア……』

こ、心無しか疲れてるように見えるわ……

「ごめん！もつかい頼むわね！レベル4の《ゼピュロス》にレベル3のチューナー《ス

チーム』をチューニング!!漆黒の翼濡らし、そば降る雨に響け!雷鳴の一撃!」

「おおっ!なんか新しい奴か?!」

・・・十代戦では出す前に決着ついちゃうのよね、勝敗関係無く。実はソリッドビジョン初なんて楽しみだったり?

「突き抜ける!!」《A BF―涙雨のチドリ》!!」



《A BF―涙雨のチドリ》

シンクロ・効果モンスター

星7/闇属性/鳥獣族/攻2600/守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

- (1) : 「BF」モンスターを素材としてS召喚したこのカードはチューナーとして扱う。
- (2) : このカードの攻撃力は自分の墓地の「BF」モンスターの数×300アップする。
- (3) : このカードが破壊され墓地へ送られた時、

「A B F―涙雨のチドリ」以外の自分の墓地の鳥獣族Sモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

おつ、やつぱ格好いいわね!! 《ライキリ》とはひと味違った色合いがまた・・・

『あ・・・』

「「あ?」」

『兄者アアアアアアアア!!』

ふあつ?! 兄者ああ?!

『ど、どうしたのだ《チドリ》よ?!』

『どうしたもこうしたもない! やつつつと、初めて! 〈こちら側〉に来て姫さんに召喚してもらえたんだぜえええ?! いつも兄者ばかり召喚されるから・・・お、俺てつきり忘

れられているのかと……』

こいつら兄弟かよ！揃って面倒そうな感じね?!

「ま、また個性的なのが来たな……」

『ええい、男児たるもの容易く涙を見せるな《チドリ》よ！といつてもおぬしには無理難題か……姫は主の事を忘れたわけではないわ！ただいつも、その府抜け面の遊城十代が主の出番が来る前に決着がつくような決闘ばかりをするから……』

「俺のせいなの?!

「……《巡礼者ダンテ》効果発動ウ！《ファーファレル》を捨てー枚ドロー！そして《ファーファレル》の効果で《涙雨のチドリ》をエンドフェイズまで除外する!!」

『あ、兄者アアア！助けておくれええええ!!』

『チイドリイイイ!!』

う、うん。そんな効果あったわね《巡礼者ダンテ》……なんかごめん、けど茶番フェイズ長すぎだから丁度いつか★

「これで静かになったなあ……早くデュエルを続けるが良い」

「あ、はい。えーと、《スチーム》がシンクロ素材なったんでスチームトークン精製つと。」

『ジユニコ殿オ……《チドリ》が、我が弟があ……』

うっせー……。

「なんかもう……疲れちゃったな」

「へ？」

『は？』

「どうしたあ！負けを認め」

「あーもう！ちよつと黙ってて！今決着つけるから!!」

（あ、やばい。すげー怒ってる時のジュンコだ、黙つとこ）

『・・・!!』↑察した

「来て、《BF―突風のオロシ》」

『ピュルルル』

《BF―突風のオロシ》

チューナー・効果モンスター

星1 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 400 / 守 600

「BF―突風のオロシ」の(1)の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：自分フィールドに「BF―突風のオロシ」以外の「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2)：このカードがS素材として墓地へ送られた場合、

フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターが表示形式を変更する。

「ゲイル効果、《ジエネシス・デーモン》の攻守を半分にする。へーフネス・ゲイル」

『クウルルルルルル！』

『ブルアアアアア！』

《ジエネシス・デーモン》（攻撃力3000↓1500）

「ぬう、だがしk」

「黙れと言った、2度は無い。レベル1のスチームトークンにレベル3チユーナ―《疾風のゲイル》をチユ―ニング、にぎりつぶせ《アームズ・エイド》」

「手?!」

「?!」

《アームズ・エイド》

シンクロ・効果モンスター

星4／光属性／機械族／攻1800／守1200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

また、装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「レベル7《アーマード・ウィング》にレベル1チューナー《突風のオロシ》をチューニング。漆黒の風纏い、末世より飛翔せよ。《玄翼竜　．．．ブラック・フェザー》!!」

『．．．．．』

《げんよくりゆう玄翼竜　ブラック・フェザー》

シンクロ・効果モンスター

星8／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守1600

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、戦闘またはカードの効果によって

自分がダメージを受けた時に発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚まで墓地へ送る。

この効果で墓地へ送ったカードの中にモンスターカードがあった場合、

このカードの攻撃力は400ポイントアップする。

『こ、これは玄翼竜殿！．．．我に《アームズ・エイド》を装備し《ジエネシス・デーモン》を、《ダンテ》は玄翼竜殿がお相手致す作戦ですな！！これで．．．』

「《アームズエイド》効果、《玄翼竜 ブラック・フェザー》に装備し、攻撃力を1000あげる！」

『あ、あれっ？』

『フウツシュー．．．』

《ブラック・フェザー》（攻撃力2800↓3800）

「竜にあの手装備って、違和感パねえな．．．」

ギロツ「なにか、言ったかしら？」

「な、なんでもありません……」

『なんでもござりませぬ……』

「バトル、《驟雨のライキリ》で《巡礼者ダンテ》を攻撃」

「えっ？」

『あ、あの〜ジュンコ殿？我の方が攻撃力が……』

「こ　う　げ　き」

『……はい、』

「ふっ、ハハハハハ!! 血迷ったか小娘エ!! 態々攻撃力の低いモンスターで攻撃してくるとはな!!」

涙雨『チドリイイ……我も今そちらに参るぞオオオ……』

除外へ『兄者アアア……俺は千の風●なつてのメロデーで
『……』

《驟雨のライキリ》（攻撃力2600） vs 《巡礼者ダンテ》（攻撃力2800）

『フン!!』

へちゅドーン!!

ジュンコLP1700↓1500

やっと静かになったわね。

「ジュンコさん？なんのおつもりで・・・」

「あら十代、このターンで決めるって言ったじゃない？」

「ぬぁにい?!」

「この瞬間！《玄翼竜 ブラック・フェザー》効果発動!!ダメージが発生した時、デッキ上から5枚のカードを墓地に送りその中にモンスターがいれば400ポイント攻撃力を上昇させるわ！」

(この為に自爆特攻? よ、容赦ねー・・・)

「墓地へ行ったのは、この5枚よ!!」

《蒼天のジェット》

《二の太刀のエテジア》

《極北のブリザード》

《天狗風のヒレン》

《上弦のピナーカ》

「ごっつ、5枚全てモンスターだとおおおお?!」

あらやだ・・・私の気持ちにデッキが答えてくれたのかしら、過剰に落ちすぎじゃね?

「これで《玄翼竜 ブラック・フェザー》の攻撃力は更に400上昇するわ!!」

《玄翼竜 ブラック・フェザー》(攻撃力3800↓4200)

「攻撃力4200ウウウウ?!」

「終わりよオツサン! さつさとこの薄気味悪い場所から出なさい! 《玄翼竜》の攻撃!」
《ブラック・レイジ・エントリー》!!」

vs 《ジエネシス・デーモン》(攻撃力1500)

「ブアカナアアアアアアアア」

タイタン LP4000↓1300

「まだまだあ! 《アームズエイド》は破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える!」

「ふがあああああ!?!」

タイタンLP1300↓1700

「うっわあ……結果ワンショットキルだよ、てかライキリの犠牲意味あったか？」
『クツリイ〜……』

ふう……スツキリしたっ・

「やったわ十代！私の勝ちよ!!」

そしてどさくさ紛れに抱き着く！キヤー!!十代の腕の中あったかい！

……自然な流れだ、問題無い。

「おう、そうだな？（後半おっかなかったけど、まいつか）」

『げ……解せぬ』

『クルル。』

「あああああああ？助けけてくれえええ!!」

うげっ、先の闇スライム軍団がタイタンをのみ込んでんじゃん！

「やべえぞジュンコ！早く脱出しないと！」

「え〜・・・もうしばらくこのままじゃ駄目？」

「ッ！・・・余裕すぎだろ?!」

『クリクリッ』

あ、なんかハネちゃんが指指す辺りに光の穴が・・・

「ハネクリボー！そこに入れてってことか？」

『クリ〜！』

「流石はハネクリボー！ゲイルは兎も角、うちの似非侍2匹とは違うわ!!」

『それは我らのことですかジュンコ殿オ！』

『姫さんおつかね〜』

「うっさい姫とか呼ぶな！口動かす暇あつたらあのスライム蹴散らしてオツサン助けて来い！まだ聞きたいことあんのよ！ほらっ、《死者蘇生》!!《チドリ》は勝手にかえって来い！」

『ぎ、御意!!』

《光の中に隠れるのよ!!》

《なんか違う!》

・闇の空間 ○外。

「ふう……出れたわね」

「そうだな〜一時はどうなることかと……ん？」

「バトルですわっ!! 《海皇龍ポセイドラ》! 《水精鱗マーメイル—メガロアビス》! 《リードアビス》!
! お二人にダイレクトアタック!! 《アクエリアス・スファイア》!!!」

「ほんぎやあああああ?!」

「待っておくれなんだなああああ!」

翔&隼人LP8000↓0

「……ふう。あらお二人供、仲良く凱旋とは妬けますわね?」

「い、いや、アンタなにしてんのよ……」

「明日香様も目覚めませんし、余りに退屈だったのでお二人の腕試しをと思って……」

翔&隼人へチーン

「お、お、翔、隼人、大丈夫か?」

「人魚コワイ人魚コワイ人魚コワイ人魚コワイ人魚コワイ人魚コワイ人魚コワイ」
「お、俺……海辺に暫く近づきたくないんだなあ」

完ツ全にトラウマ植え付けてるじゃない……

「エクストラデツキのエの字すら出していませんのに……あら、その気絶してるバル
●トスは？」
「あーうん、ちよつと気になることがあつてね？」

《イラツと来るぜ……》

《出番が無くて？》

なんやかんやで廃寮外。

「う、うーん……」

「バトルですわ！ 攻撃力6500と化した《深海レイジ・オブ・ディープシーの怒り》で《フレイム・ウイングマン》を攻撃！ 〈猛りの滄我〉!!」

「ほんつと●イルズネタ好きね〜アンタ」

「ちつくしよおおお！ 負けたああああ！」

十代 LP4000↓0

「海コワイ海」

「え、何！ これどんな状況なの?!」

あ、明日香さん起きたわね、こんだけ喧しくしてたら当然っちゃ当然か

「お目覚めですなね明日香様ッ！」

「ゲホゲホッ。よ、よお明日香！ お前を拐った悪い奴は俺達がぶっ飛ばしたぜ！」

「今貴方がぶっ飛ばされてるように見えたのだけど……」
「うぐっ……そ、それより！中でこんなもの拾ったぜ!!」

「こ、これは私の《サイバー・ブレイダー》と……兄さん！兄さんのサイン入りプロマイド!!」

わー、久々に視ただけど吹雪様イツケメンよねえ。性格がかつとピングし過ぎだ
ど……てかサイン入りプロマイドに激しくツツコミたい。

小声 「気持ちは解りますが空気をよんで抑えましょう……」

普段空気を一番ぶち壊すアンタが言うか。

「悪いな……少しでも兄ちゃんの手掛かり探そう思っただけど、それしか見つから
なかつたぜ」

「じゃあ貴方、わざわざ……?!」

へコツケコツコ

「やべー！翔、隼人！皆が起き出す前に戻ろうぜ！！いつまで震えてんだよ！」

「は、はい（なんだな）！」

「またなお前達！ジユンコも機嫌治してくれよ?!」

「もう！何も怒ってないわよお!!」

十代達は焦って寮に帰って行ってしまった・・・

「さて、わたくし達も帰りましょうかっ」

「そーねえ・・・あれ、明日香さん、ブーツとしちやってどうしたんですか？」

「ジユンコ、私・・・」

うん？

「貴女の気持ち、ちよつとわかつちやったかも・・・」

「ほえ?!」

「十代って・・・いい奴よねッ」

頬赤らめて……何を言い出しちやの明日香さん?!

「あらあら〜」

「フフフ、そうねえ〜早く帰りましょ〜」

ま、まさか……明日香さんまで?!

(期待不安の未来が動き出しそうな気分で、わたくし達は帰路につきました)

アンタがメんのかーい!? あ、続くかも!!

7羽 急に出てきて、恋敵と書いてライバルと読ませるのは無理難題

ここは—何処だったか・・・

そもそも僕は誰だったか・・・

解らない、何も見えない、何も聴こえ無い

誰か、誰か教えてくれ！僕はなんだ！僕は何故此処にいる！！

『は？アンタ何言ってるんだい、闇に溶け込み過ぎて脳みそまで溶けちゃったのかい？』

き、君は?!

『なんだよ、アタシのことも覚えていないのか？へこつちへに来る前から、うちらはずつ

と一緒だったのに……』

ずつと……供にいた？

『思い出させてあげるよ、アタシの名は……』
↑—————↓

《……えつ、→の奴何?!》

〈廃寮伝説闇ゲ事件〉ファイル1。(ももえ談)

翌日・ジュンコ自室

「折角ジュンコさんが精霊見えるようになったので、わたくしの方も紹介しますわね♪」
「う、うん。」

なんかノリノリねももえ……あれかな、ペット見せ会うノリなのかな？

「ほら、同じ境遇の方他にいませんし……十代様は口の軽さ半端無さそうですから」
ひ、否定は出来ぬ……

「ではまず、《深海のディーヴァ》さん」
『ヤッホ〜』

あら、明るそうな性格っぽい？てか普通そう……

「普段はカードの中か裏の湖でマツタリしていますわ」

『宜しくね〜』

「よ、宜しく〜」

「因みに得意な持ち歌は中●み●きさんの曲が多いですわ、中島ディーヴァと呼んでも可ですわよ?」

『地●の星とかね?』

「歌……姫? いや間違っちゃいないが!!」

あーうん、どこかもえっぽい……

「じゃーこつちも……おいで《ゲイル》」

『クルルウ〜』

「まあ、普通にかわいらしいですわ。何か面白くない」

「何を期待してんの?!」

『クルウ……』

『うちらよりアンタ達のがよっぽど個性的よ』

「あと堅物兼過労死担当《ライキリ》」

『御呼びですかジュンコ殿!』

話題出ただけで呼んではないんだけど……

『兄者ア！出番かい!!』

《チドリ》出てきた、面倒くせつ?!

「まあまあ！実にジュンコさんのお供らし……じゃなくて素敵な方々じゃないですか
!!」

いやそれ絶対褒めてないよね？馬鹿にしてるよね？

『もも殿！……前から我の事見えてましたよな?』

「あ、バレました？黙ってたほうがあとからおもしろいかな」と

「言いなさいよ！知ってたなら言いなさいよ!!」

「見えないままで変に希望持たすのも悪いですし……しかし《チドリ》さんは初めて

見ましたわ」

『俺ア、あくまで兄者とのコンビだからな！基本ジュンコさんについてるのは兄者だ』

ふーん……そんなもんなんだ、

「つまりアンタは私の事はどうでもいいと」

『え、いや……そうゆうわけでは……（焦）』

「ジュンコさん、あまり苛めては可哀想ですわよ？」

『orz』

「まあ面倒くさそうなのは否定しませんが、とりあえずわたくしの過労死担当様を呼びますか、《dark knight》さーん？」

『……イラツとくるぜ』

うおう?! 《S・H・dark knight》出てきた! サイズ前より小さいけど……やっぱしゃべってたのは気のせいじゃなかったのか!。

『こ、これは強そうな御方ですな』

『あ、兄者! ビビったら負けだぜえ!!』

何に対抗してんだアンタ達は。

「部屋がせまくなるので人間程度のサイズになってもらってます。《dark knight》さんは一応高位の精霊らしいのですがひとつ弱点が……」

『「弱点?」』

『彼、鮫語しか喋れないのよ』

『イラツとくるぜ』

「鮫語ってなんだよ?! あれか、シャークさん迷言集のことか?!」

「まあ！流石はジュンコさん、正解ですわ!!」

『そんな鮫のような奴が異世界にはいるってのか……』

当たり前かよ！会話難易度高すぎるわ!!

『な、なかなか粋な方ですな……』

『なんて言うと思ったか！お前はまだまだだ!!』

「め、面倒くせえ……てか精霊付きの条件とかあんの？」

『十代君のハネクリボーは知らないけど、うちらの場合はデッキの中で一番持ち主を大切に思ってるモンスターかな？私、下級代表』

『俺達はもう、解り合っている……』

『あ、EX代表だつてさ』

「わかるんかい、凄いな。ももえは大体のデッキにアンタ達入ってるからね……てかモンスター側からの好感度なんだ、ふうん」

「じゃあジュンコさんは下級代表が《ゲイル》ちゃん、E X代表が《ハラキリ》……あ、間違えましたわ、《ライキリ》さんなのですね？」

『もも殿、絶対わざとであろう』

『その気になれば主のデツキのモンスター全員出てこれるんだぜ？ただ持ち主に負担でかいからデュエル中以外は自重してるのさあ』

「じゃーあんたもしろ」

『兄者アアア！ジュンコさん俺に冷た過ぎねえ?!』

《クルルウ？》

「まあ全員引つ込めて静かになった所で本題よ、闇堕ちタイタンのデッキについて」「本人に確認した所、「知らぬう……そんなカード達は見たことが無いわあ」でしたよね？」

いちいち真似しなくていいから。

なおエクシーズ等の口止め料として例のデッキ内の「デーモン」とついたカードを適当に渡しておいた、その前に明日香さんをさらった罪として腹パンした後、ももえさんの鬼畜ハンデスフルコースを喰らわせた上で4000超え《チドリ》でワンキルしたけど（真顔）。

「わたくしにも中身を見せて下さいまし……」

「それ大部中身抜けてっけどね、どっから飛んで来たんだか」

「わたくし達生前、ガチカテゴリーとか無関心でしたしねえ、「彼岸」などまず持っていないませんわ」

おい「海皇」使い。大体初手ディーヴァ引く奴が使えば最強クラスでしょ……

「大体初手《ゲイル》のBF使いがなにを……ややつ、これは！このデツキの持ち主が分かりましたわ！」

「え、なんかあつた？」

「ええ、間違いなく《あの馬鹿》のデツキですわ!!」

『そんな鮫のような奴が異世界には居るってのか……』

「うおい！急に出てきてボケないでよ《dark knight》さん?!《あの馬鹿》つてまさか……」

PDAへ♪まだ〜?え?無いイ〜♪

「あ、メールだ。翔クンから?……ナツナンダッテ?!」

《因みに着信音は、十代本人に歌ってもらった特注音源よ!》

《頑張り過ぎですわ?!》

※注・十代視点

どうして、こんな事になっちゃったんだ……

「逃げずによく来たわね、明日香さん！」

「当たり前よ……十代とタッグを組むべきなのはわたしたちのもの!!」

「いいえ、私です！十代と一番デュエルこなしてお互いのデッキを理解しているのは私
だもの!!」

「融合関連が微塵も無いデッキでよく言えるわね？大体十代は、わ・た・しを助ける
為に退学の危機に陥ったのよ、わたしが責任を持つべきだよ！」

「それならついでのように退学されかけた、可哀想な丸藤翔と組めばいいじゃない！」

「翔君とはももえが組んでくれるのでしょうか？問題ないわ。それよりシナジー皆無のデツキと組まされようとした十代の方が心配なのよ！」

「誰がシナジー皆無か！明日香さんだつて儀式関連が足引っ張つて噛み合わなくなったりするんじゃない?!」

「ぬぬぬぬぬぬ！」

「むううううう！」

火花散ってる、めっちゃ火花散ってる?!

ジュへバツ！

明へザザッ！

「デュエル!!」

「青春ですわね〜」

「ぼ、僕は悪くないツス」

『どうしてこんなことになったか？読者の方々には意味★不明であろうから、この《ライキリ》が簡潔に説明致そう』

立ち入り禁止の廃寮に入ったので十代と翔退学by 査問委員会(?)

←

チャンス代わりに制裁タッグデュエルを行う！byクロノス

←

兄貴の相棒なんて僕無理だよジュンコさん代わって！by翔

←

ちよいと待ちな、私のせいだから私が十代と組むぜby明日香

←

そうはいかねえ、十代と組むのは私だ！byジュンコ殿

←

じゃあデュエルで決めましょう♪(何故なら面白そうだから)byももえ

『そんなわけで今現在に至ります、なおクロノス教諭はももえ殿が笑顔で黙らせておったそうな……』

「《ライキリ》 イイイ！ 何サボってんの！ ちゃつちやと召喚される準備しときなさい、過労死させるわよ!!」

『ぎ、御意!!』

《ライキリ》の扱いは、もうあれで安定なんだな……最初はあんなにカツコイイ！ つて目を輝かせていたのに。

「先行は私からよ！ 私のターン！」

明日香が先行か。「本気B
F
使
うのジュンコに勝たなきや意味が無い」つてももえに頭下げてこの三日間、二人で特訓してたらしいけど……あ、翔も捲き込まれてたわ三人だ。

「私は《ブンボーグ003》を召喚！ 効果で同《001》を特殊召喚!!」
「げ、そつちを組み込んできたかー……」

《ブンボーグ003》

星3／地属性／機械族／攻 500／守 500

(1)：このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デッキから「ブンボーグ003」以外の「ブンボーグ」モンスター1体を特殊召喚する。

(2)：1ターンに1度、自分フィールドの「ブンボーグ」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで、

自分フィールドの「ブンボーグ」カードの数×500アップする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

《ブンボーグ001》

チューナー

星1／地属性／機械族／攻 500／守 500

(1)：このカードの攻撃力・守備力は、

自分フィールドの機械族モンスターの数×500アップする。

(2)：このカードが墓地に存在し、

フィールドに機械族モンスターが2体以上同時に特殊召喚された場合に発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

「《003》に《001》をチューニング！天より来たれ、拒絶の七光！シンクロ召喚！
レベル4 《虹光の宣告者》!!」

《虹光の宣告者》
アーケ・デクエアラ

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻 600 / 守1000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1) : このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

お互いの手札・デッキから墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かず除外される。

(2) : モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、

このカードをリリースして発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3) : このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから儀式モンスター1体または儀式魔法カード1枚を手札に加える。

お、ももえがジュンコと戦ってた時に呼んだ奴だな

「ターン終了よ」

明日香 H5 LP4000

フィールド現状

《虹光の宣告者》(守備 1000)

「あれ、伏せ無し?なんか意外……」

(わたくし好みに色々混ぜ過ぎて妨害系統薄くなったんですよー、本末転倒だったか
もしれませんわ)

「まいつか、わつたしのターン!
ブラックフェザー
 《B F | 蒼炎のシユラ》!!」

《ツシヤラア!!》

あいつか、この状況なら最適かもな?

《B F | 蒼炎のシユラ》

星4／闇属性／鳥獣族／攻1800／守1200

(1)：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に発動できる。

デッキから攻撃力1500以下の「BF」モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「ジュンコさん！モンスター皆1枚ずつのくせにどんだけ都合の良いドローしてるのですかー！」

「るっさいわ初手七皇セブンスワンの剣が言うな！愛ゆえの手札よ!!バトル！《虹光の宣告者》を破壊よ!!」

《ダラア!!》

vs 《虹光の宣告者》(守1000)

「破壊され墓地に送られたので儀式魔法《高等儀式術》を手札に！」

「じゃーこつちも！《シユラ》の効果発動！おいで、《BF大旆のヴァーユ》!!」

《シユーツ》

《BF大旆のヴァーユ》

星1／闇属性／鳥獣族／攻 800／守 0

(1)：このカードはモンスターゾーンに存在する限り、S素材にできない。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、

チューナー以外の自分の墓地の「BF」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターとこのカードを墓地から除外し、

その2体のレベルの合計と同じレベルを持つ

「BF」Sモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「そのままダイレクトアタック!」「無言の運搬」!!

「痛っ!・・・どうゆう、こと?」

「詳しくは5dsを参照ですわ!」

「なんの話ツすか?!」

明日香 LP4000↓3200

「そんでもってレベル4《シユラ》にレベル1の《ヴァーユ》をチューニング!羽ばたけ、

黒翼の騎士！《BF―煌☆星のグラム》！！

『フンツ☆!!』

《BF―煌星のグラム》

星5／闇属性／鳥獣族／攻2200／守1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードはシンクロ召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

手札からチューナー以外のレベル4以下の「BF」と名のついたモンスター1体の特

殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「因みに《ヴァーユ》のフィールドではシンクロ素材に出来ない誓約は、《シユラ》に無効にされますわ♪ルール効果では無いのでご注意ください」

「だ、誰に向かって言ってるんスか・・・」

アイツ相変わらず面白いなー、ももえ自由過ぎる。

「出だしは上々！2枚セットしてターンエンドよっ！」

ジュンコ H3 LP4000

フィールド現状

《煌星のグラム》（攻撃力2200）

《セットカード》×2

「あれは！《ゴッドバードアタック》のような破壊系のカード！」

「こるあもお！勝手に伏せを読むなあ!!」

まあジュンコは《ゴッドバードアタック》大好きだからな。入ってないデッキ見たことない……

「私のターン！《ナイトショット》!!左の伏せを破壊するわ」

「うっ、《ゴッドバードアタック》が……」

《ナイト・ショット》

通常魔法

(1)：相手フィールドにセットされた魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。
 セットされたそのカードを破壊する。

このカードの発動に対して相手は対象のカードを発動できない。

ああ……皆の予想通り。

「これで障害は消えたわ！《マンジュ・ゴッド》召喚！《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》を加え《高等儀式術》！合計レベル8になるようレベル2《ギャラクシー・サーペント》レベル1《ガードオブ・フレムベル》レベル1《ダンシング・エルフ》レベル4《ブレードスケーター》を墓地に送って儀式召喚！《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》『セイヤア!!!』

《マンジュ・ゴッド》

星4／光属性／天使族／攻1400／守1000

(1)：このカードが召喚・反転召喚に成功した時に発動できる。

デッキから儀式モンスター1体または

儀式魔法カード1枚を手札に加える。

《高等儀式術》

儀式魔法

手札の儀式モンスター1体を選び、

そのカードとレベルの合計が同じになるように

デッキから通常モンスターを墓地へ送る。

その後、選んだ儀式モンスター1体を特殊召喚する。

《サイバー・エンジェル茶吉尼》

儀式モンスター

星8／光属性／天使族／攻2700／守2400

「機械天使の儀式」により降臨。

このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体を相手を選択して破壊する。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「バニラ4種てよく事故らないわね?! てか《ダンシング・エルフ》なんて初めて見たんだけど……」

「わたくしがしたのはカードの説明だけ、チョイスは明日香様ですわよ?」

「《茶吉尼》効果! 特殊召喚時相手は自軍モンスターを1体選び破壊する! さあ、選びなさい?」

明日香すっげえいい顔してるんだが。

「だが断る。《エフェクト・ヴェーラー》効果発動! 《茶吉尼》の効果は無効よ!」
「クツ、」

ドヤ顔返し……やっぱ仲いいんだな二人とも

《エフェクト・ヴェーラー》

チューナー

星1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻

0 / 守

0

(1)：相手メインフェイズにこのカードを手札から墓地へ送り、相手フィールドの効果モンスター一体を対象として発動できる。その相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

「ジユンコさん汚いですわ!」

「るっさい!勝つ為なら汚くもあろう、悪にもなろう!他人からなんと言われようと構わん!(十代以外)」

私は今!勝利のみをリスペクトしている!!」

「本人が闇堕ちする前に聞かれたらどうするのですか!」

……誰の話だろ?

「むむ、だったらこれはどう?《トライワイトゾーン》!墓地のレベル2以外の通常モンスター《ギヤラクシー・サーペント》《ガードオブ・フレムベル》《ダンシングエルフ》復活!!」

『シャッ』

『プウ』

『フフン?』

「すっげえ!大量展開だ!!」

「流石は明日香様!あの構築で、さも当然のようにデッキが回りますわ!!」

それって手札事故満載のデッキってことか?!

《トライワイトゾーン》

通常魔法

自分の墓地に存在するレベル2以下の通常モンスター3体を選択して発動する。
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

《ギャラクシーサーペント》

チューナー・通常モンスター

星2/光属性/ドラゴン族/攻1000/守0

《ガード・オブ・フレムベル》

チューナー(通常モンスター)

星1／炎属性／ドラゴン族／攻 100／守2000

《ダンシング・エルフ》

通常モンスター

星1／風属性／天使族／攻 300／守 200

「行くわよジュンコオ！レベル4 《マンジュゴッド》レベル1 《ダンシング・エルフ》にレベル2チューナー 《ギャラクシー・サーペント》をチューニング!!」
 「シンクロ召喚か……！何が来るかしら」

「その雄々しくも美しき翼翻し！愛の為に敵を撃て！シンクロ召喚！レベル7 《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》!!」

『ギアオオオオオ！』

《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》

星7／風属性／ドラゴン族／攻2500／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：1ターンに1度、このカード以外のフィールドの

レベル5以上のモンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(2)：1ターンに1度、フィールドのレベル5以上の

モンスター1体のみを対象とするモンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3)：このカードの効果でモンスターを破壊した場合、

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

このカードの効果で破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

滅茶苦茶カッコいいドラゴン出てきた?!

「はあ?何渡しとんじやももえ!!てか明日香さん口上!」

「《虹光の宣告者》以外のシンクロはランダムに渡したのですが・・・きつと美しい繋がりますわね!」

そ、そんなつえーのかあのドラゴン!

「残念だけど、彼の出番はあまりないわ……何故なら、私はまだまだ先へ進む！レベル7《クリアウイング・シンクロ・ドラゴン》にレベル1チューナー《ガードオブ・フレムベル》をチューニング!!」

「ま さ か?!」

「神性なる光蓄えし翼煌めかせ、その輝きで愛を勝ち取れ!!シンクロ召喚！いでよ！《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》!!!」

『ギイアオオオオ!!』

「何……だと……?」

「ふつくしい……」

《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》

星8／風属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

チューナー＋チューナー以外のSモンスター1体以上

(1)：iターンの1度、このカード以外のモンスターの効果が発動した時に発動できる。その発動を無効にし破壊する。

この効果でモンスターを破壊した場合、

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

この効果で破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

(2)：このカードがレベル5以上の相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に発動する。

このカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、

戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする。

「つてふざけるなあああ！本気で強すぎるでしょが!!てか明日香さんまじでどつたの!!
ももえが洗脳でもした?！」

「まあ、失礼ですわね」

「私は正気よジュンコ・・・正気で十代のペアを勝ち取るわ!!」

そ、そこまでして俺とタッグデュエルをしてなんのメリットが？

「そうはいかないわ！十代のお相手は私よ！」

「その粋やよし、流石は我が恋敵枕田ライバルジユニコ！どこここまでよ！《クリスタル・ウィング》はレベル5以上のモンスターとバトルする場合、その攻撃力を自身に加える!!」

「ほ、ほんとに滅茶苦茶強いツス……」

「ジユニコが驚くわけだぜ……」

「頼むわよ！《クリスタルウィング》!!《煌星のグラム》を攻撃い！へ列風のオ、クリスタロス・エツジ<!!>」

「キヤアアアア!!……なくんて言うと思って?!」

「?!」

「《ゴッドボードアタック》を破壊してすっかり油断したようね、私が何故《エフエクト・ヴェーラー》してまで《グラム》を守ったか考え無かったのかしら!!」

おお、ジュンコがやり手っぼい!!

「答えはこれよ、罨カード《ブラック・ソニック》!!BFに攻撃してきた時、相手モンスターを全て除外するわ!!」

「な、なんですって?!」

「これでそつちの場は全★滅 よ!」

「そうはいかないわ! 《禁じられた聖槍》!対象は《クリスタルウイング》!」

「げげっ!」

《ブラック・ソニック》

通常罨

自分フィールドのモンスターが「BF」モンスター3体の場合、

このカードの発動は手札からできる。

(1):相手モンスターが自分フィールドの「BF」モンスターに攻撃宣言した時に発動できる。

相手フィールドの表側攻撃表示モンスターを全て除外する。

《禁じられた聖槍》

速攻魔法

(1)：フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターはターン終了時まで、攻撃力が800ダウンし、

このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

『ハイヤアア・・・』

「《茶吉尼》は残念だけど・・・バトルは続行！食らいなさい!!」

《グラム》(攻2200) vs 《クリスタルウィング》(攻3000↓2200↓4400)

『グルウウウ!!』

『ガハア?!』

「くうううう?!」

ジュンコ LP4000↓1800

「ジュンコ!」

「やっつけてくれるじゃない……だが、私は耐えた！」

「けど《クリスタルウイング》はモンスター効果の発動を無効にして破壊する。その少ない手札で突破出来るのかしら、1枚伏せてターンエンド！」

明日香 H2 LP4000

フィールド現状

《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》（攻撃力3000）

《セットカード》

そんな効果まであんのかよ、ジユンコ大丈夫かな……

「私のターン……ッ!!よし、墓地の《ヴァーユ》効果発動! 《グラム》と自身を除外しチューニング! 漆黒の力、大いなる翼に宿りて神風を巻き起こせ!

シンクロ召喚! 吹き荒べ、《BF—アームズ・ウイング》!!」

『フツシュー』

《BFブラックフェザー—アームズ・ウィング》

星6／闇属性／鳥獣族／攻2300／守1000

「BF」チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードが守備表示モンスターを攻撃するダメージステップの間、

このカードの攻撃力は500アップする。

(2)：このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、

その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

「厳密にはシンクロ召喚扱いではないので注意ですわ」

「う、うっす……」

「けどレベル6な上、攻撃力は2300! 《クリスタル・ウィング》には遠く及ばない!」

「フツフーン。私と「BF」達の絆をなめてもらっちゃ困るわ、さあおいで! 《BF—竜巻のハリケーン》!!」

『フウルルル!!』

《BF—竜巻のハリケーン》

チューナー

星1／闇属性／鳥獣族／攻 0／守 0

(1)：1ターンに1度、フィールドのSモンスター1体を対象として発動できる。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

対象のモンスターの攻撃力と同じになる。

「《竜巻のハリケーン》効果！シンクロモンスター1体の攻撃力をコピーする、対象はもちろん《クリスタル・ウイング》!!」

「レベラーなら攻撃力上昇も使えない、か。だったら《クリスタル・ウイング》第2効果！《竜巻のハリケーン》の効果を無効にして破壊するわ！《ダイクロイツク・ミラーージュ》!!」

『フウルツ?!』

『グルウウウウ・・・』

なんか打ち出した風っぽいものを光に打ち消されてポンツ?!よくわからんけどとりあえず《ハリケーン》どんまい。

「ごめんね《ハリケーン》。だがこれで、私を縛る鎖はなくなった!」

「ジュンコさんもテンションハイでおかしくなってきましたわね・・・」

「おいで! 《BF―疾風ゲイル》&《黒槍のブラスト》!!」

『クールルウ』

『イツヤフオオオオ!!』

「こ、これが「BF」流―インチキ展開ジツ!!」

「ももえに何吹き込まれたのよ。まいつか、レベル4《ブラスト》にレベル3チューナー

《ゲイル》をチューニング!! 漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れ! 電光の斬撃!! シンクロ召喚

! 出番よ堅物! 《A BF―驟雨のライキリ》!!」

『我、参上承つる!!』

「来たぜジュンコのエース!」

《A BF―驟雨のライキリ》

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／鳥獣族／攻2600／守2000

いつもの。

「い つ も の ですわね、他の展開もしないと飽きられますわよ?」

「誰によ!十代はそんなこと言わないしい!ええい《ライキリ》効果!自分以外の「BF」の数だけ相手のカードを破壊する!対象は《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》!!〈天翔黒雷刃〉!!」

『じ、ジュンコ殿?!ノリノリですな!!』

『グオオオオオ!』

《ライキリ》の雷刃が《クリスタルウイング》を切り裂いた……なんやかんやで一番出番多いよな《ライキリ》。あれかな?信頼の裏返しなのかあの態度は

ボソ「十代様?あれが流行り(?)のツンデレ、ですわよ?」

?!

「もらったあ！《アームズ・ウィング》でダイレクトアタック！〈ブラック・チャージ〉
！！」

『シュー！！』

「キヤア！．．．．．やったわね！！」

明日香 LP4000↓1700

「いっけえ 《ライキリ》！敵軍大将を討ち取るのよ！！」

『ぎ、御意！』

「そっちは通さないわ！リバースカード 《くず鉄のかかし》！」

「ゆ、ゆうせえええ?!」

誰。

《くず鉄のかかし》

通常罠

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地へ送らず、そのままセットする。

「打ち損じたでござるな・・・ターン終了よ」

ジュンコ H0 LP1800

フィールド現状

《アームズ・ウィング》(攻2300)

《驟雨のライキリ》(攻2600)

「わたしのターン！・・・フツ、この勝負もらったわ!! 《思い出のブランコ》! 墓地の《ブレードスケーター》を特殊召喚! そして《融合呪印生物―地》を召喚! 効果発動! 他の融合素材モンスターと場で融合する! 行くわよ、《サイバー・ブリーダー》!!」

『ハアッ!!』

「実際は融合召喚扱いではないのでやっぱり注意ですわ♪」
 「ももえさん解説多いツスね・・・」

《思い出のブランコ》

通常魔法

(1)：自分の墓地の通常モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される。

《ブレード・スケーター》

通常モンスター

星4／地属性／戦士族／攻1400／守1500

《融合呪印生物―地》

効果モンスター

星3／地属性／岩石族／攻1000／守1600

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。

その際、他の融合素材モンスターは正規のもでなければならぬ。

フィールド上のこのカードを含む融合素材モンスターを生け贄に捧げる事で、地属性の融合モンスター1体を特殊召喚する。

《サイバー・ブレイダー》

星7/地属性/戦士族/攻2100/守 800

「エトワール・サイバー」+「ブレード・スケーター」

このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

相手のコントロールするモンスターが1体の場合、

このカードは戦闘によっては破壊されない。

相手のコントロールするモンスターが2体の場合、

このカードの攻撃力は倍になる。

相手のコントロールするモンスターが3体の場合、

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。

「うっげ、この状況って……」

「そう、貴女ならよくわかっているわね？ 相手フィールドにモンスターが2体の場合、《サイバー・ブレイダー》の攻撃力は2倍になる！ へパ・ド・トロワ！！」

《サイバー・ブレイダー》(攻 2100 ↓ 4200)

「そ、そんなあゝ」

「バトルよ！ 《サイバー・ブレイダー》！ 《アームズ・ウイング》を攻撃！！ へグリッサー・ド・スラツシユ！！！！」

vs 《アームズ・ウイング》(攻2300)

『フシャー！！』

「イヤアアアアア！！」

ジュンコ L P 1 8 0 0 ↓ 1 1 0 0

「やったわ！私の勝ちね!!」

「うう、こんなハズじゃあ・・・」

『じゅ、ジユンコ殿オ・・・おいたわしや（いやしかし、我には有利か?）』

「まあまあ、いいデュエルだったぜ?ガツチャだ!」

「じゅうだしい・・・」

うっ、その顔は止めて欲しいんだが・・・

「これでタツグパートナーはわたしね、十代!」

明日香超笑顔。

ううくん、これは断ったらヤバそうだよなあ、ジユンコにも明日香にも角が立たない方法は無いものか・・・そうだ!

「あのさ?..やっぱ悪いんだけど俺は翔と組むよ、」

「なっなんですとお?!」

ハモった、仲良すぎだろこいつら

「元々俺と翔が組むハズだったんだし、翔も特訓してきたんだろ? きっと大丈夫さ!!」

「あ、アニキイ……」

「まあ、こんな女子二人に迫られて友情ルートに走るなんて……!」

友情ルートってなんだよ?!

「クツ……」

「むう……」

あゝやっぱり失敗だったか? 二人とも怒って……

「どうやら今回は引き分けのようね、ジユンコ!!」

「そうね、だが次こそは決着をつけるわ明日香、さん!!」

へっ? デュエルに勝ったのは明日香……

「ずっと気になっていたのだけど、さん付けはやめない? わたしだけのけものな感じがするのよね……」

「そ、そう? じゃあ明日香! 次こそ白黒つけましょう!!」

「ええ!!」

ジュ&明日へガシイッ

なんか、堅い握手交わしてる……ま、この場は収まったからいつか?

「まあまあ、殴り合いの末に深まる友情ですわね!! ではわたくしも参戦致しますか……
明日香様! デュエルですわ!!」

「いいわよ! 特訓の成果、貴女にも感じさせてあげるわもえ!!」

「じゃー私は……翔クン!!十代の足引つ張ったら承知しないんだから!!私が直々に
ごいてあげる、構えなさい!!」

「えー?!」「BF」とツスカあ?!」

「デュエル!!」

「デュエル!!」

「ずつ、ずりいぞお前ら!俺にもデュエルさせろお!!」

「おいでませ!無慈悲なる白銀の神槍!《氷結界の龍グングニール》!!」

「負けないわよ!孤高の薔薇よ、ここに開花せよ!《月華竜ブラック・ローズ》!!」

「ちよっ、鬼畜過ぎですわ?!」

「あーもうヤケつす!《HSR・チャンバラライダー》!!」

「あんたもシンクロかい!!ぶっ飛ばせえ!《BF―星影のノートウング》!!」

こうして平和(?)な午後は過ぎていった。

この時は誰も思いもしなかった、まさか、制裁タッグデュエルがあんなことになって
しまうなんて……

つづく、らしいぜ？

8羽 厨二のセンスとヤ●キーのセンスは表裏一体

港にてく……

「ヘターナル・エヴオリュション・バーストオ〜!!」

『グアアアア!!』

《サイバーエンド・ドラゴン》(攻8000) vs 《E・HEROマッドボールマン》(守3000)

十代 LP4000↓0

「十代!!!」

「参ったぜ……けど、楽しいデュエルだった、ガツチャだ!」

「ああ、俺もだ」

3年首席にして、学園N01の実力を持つ「カイザー」丸藤亮。十代は彼にデュエルを挑んで……敗れた

《クルウ》

「ジュンコ、ゴメンな? ……手も足も出なかった、完敗だぜ」

「な〜んで私に謝るワケ?」

「だっていつも言ってるんだろ「私以外に負けたら承知しない」って……」

あく本気にしてくれちゃったんだ……

「相手は学園最強よ? 私より強い相手にそこまで無茶言わないって」

「あら、ジュンコなら「十代の敵よ! 次は私が相手だ!!」くらいやると思ってたわ」

「そうですわ! 面白くない」

「右に同じッス」

「んだなあ」

「私をなんだと思ってるのよ!・・・十代本人が強くなつて、私にリベンジ達成する姿を魅せてくれんなら許してあげるわ」

「やっぱ怒ってるのかよ?!・・・わかつたぜ!それまで俺のこと、ちゃんと見ててくれよな♪」

え、ちよ・・・

「う、うん」

「わたしも!十代のことみてるからね!!」

「お、おう・・・」

「あらあら」

「ももえさん楽しそうツスね・・・」

「ある意味一番面白い子なんだなあ」

《カイザー様、こっち見てうずうずしてませんか？》
《うちらともやりたかったのか……》

★自室

「カイザー……丸藤先輩は違ったわね」

「そうですねえ、《あの馬鹿》に当てはまる条件としては割と最適でしたのに」
「他にいたっけ？ 《あの馬鹿》に当てはまりそうな人」

私達は、以前廃寮でデュエルした闇落ちタイタンのデツキから《あの馬鹿》……もとい師匠も、うちらみたくこの世界にちゃっかり転生してんじやね？とゆるわけで当てはまりそうな人をちらちら探していた。

「最初は万丈目様かとおもって近づいたんですが違いましたし、三沢様は論外。キャラが違い過ぎます……まず《あの馬鹿》は元々歳上なんですよねー」

「メインキャラはやっぱないんじゃない？ 案外学園の外だったり」

「でしたら●ルバトスが師匠のデツキをどこからかつさったのかわかりませんわ」
「や、闇の空間的な所に落ちてたとか・・・そもそも誰かに憑依？ つつーかうちらみたくなり変わっちゃってるとは限らないんじゃない？」

「本人が学内を闊歩していたらそれこそ人目でわかりますわ！ ク●ーズのモブにいそくな方でしたもの」

「あんた結局師匠のこと好きなの？ 嫌いなもの？ 馬鹿にしてるの？」

なお前世で死ぬ間際まで一緒にいたらしい、水族館で。 やっぱ仲いいだろアンタ達・・・別れる前と後でやってること変わらねーんだもの。

「しばらく様子を見ますか・・・わたくし達に気付いて出てくるやもしれませんし」

「そーね、深く考えないで十代達の制裁タッグに向けて二人をしごきましょう」

《さて、 出番だな》

《おっしや、やったるか!!》

《隼人君父の急襲》とか爆笑イベントもありましたが割合で、なんやかんやで制裁タッグデュエルの日がやってまいりました。

相手誰だったっけ、ももえもくん？

小言「思考読まれてる前提でナレーションしないてくださいまし・・・たしか、迷宮兄弟とかいったネタキャラコンビですわ。流浪の番人って何を守っているんでしよう?」

あー、DMの王国編に地味に出たあのコンビね。翔クンも強くなったし大丈夫そう・・・とりあえず激励飛ばしとくか。

「じゅくだーい!!もし負けて退学になったら、交換したHERO全部返してもらおうから

ね〜!!」

「ジユンコさん声デカイですわ・・・」

「げっ、折角新しい仲間にも馴れてきたのに困る！それに・・・あつたり前だ〜!!退学になつてお前と会えないなんて絶対嫌だからな——!!」

「アニキ、天然も大概に・・・」

「ツ!!!・・・も、も〜何大声で言つてんのよ馬鹿!!!」

「ハタから見たらただのラブラブカップルですわ。明日香様、この仲に介入するのはかなりの難易度ですわよ?」

「フフフ、壁は高い方が燃えるのよわたしは・・・」

《シニヨール&シニヨール!!ご機嫌麗しゆう、ナノーネ!これよりい!制裁タツグデユエルを、開催するノーネ!!》

「「「わあああああああ!!」」」

なんでこんなに客多いねん、レッドが酷い目に逢う所が観たいの？

「十代様は注目株ですからそれもあるかと……」

「それで？クロノス先生、肝心の対戦相手は貴方が？」

「おつ、先生が相手なのか？」

「マジツつすか？」

《ノンノンノン、今回のデュエルは校則を破った二人への制裁、および他の生徒が彼等の真似でもして校則を破ったりしないようにイ〜見せしめである必要もあるノーネ》

「うんうん」

《そこで今回！それ相応の実力者である、かのデュエルキングとも戦った……伝説のデュエリストをお呼びしたノーネ!!それではご登場下サイ、「迷宮兄弟」!!!》

「おお！あのデュエリストキングダムで、遊戯さんと城之内さんを苦しめたってゆう！」

なんか周りやたら盛り上がってけど、キングと戦っただけで伝説なら世界は伝説で溢れてないかしら……

へドツカーン

「ギヤアアアアアアアア?!」

迷宮兄弟 LP8000↓0

《ひよ?》

「はっ?」

「「ええええええ?!」」

な、なんか入り口から迷宮兄弟ぶっ飛んできた?!

「フ、実に温いな……伝説の決闘者だとぬかすからどれ程のものかと試してみたら……」

「な、何者ナノーネ?!」

だ、誰か出てくる!

「我が名はダークネス……闇よりの使者」

「だ、ダークネス?!」

「ぶっふう?!」

「ジュンコ、ももえ?!ど、どうしたの?!」

ダークネスって・・・セブンスターズ編のアレだろ!あの悪趣味な仮面と真っ黒な服装、私でも覚えてるわ!!ってか中身あの人だったわよね?どーなってんのこれ!!

「この程度の実力者達では、制裁にもならないだろう・・・代わりに私が相手をしてやる」

「い、いきなり出てきてナニ言ってるーノ?!」

「そいつらは暫く使い物にならないか?」

迷宮兄弟へチーン・・・

「おつもしれえ!!伝説のデュエリスト二人を圧倒する奴が相手なんて、超ワクワクするぜ!!」

「あ、アニキ、止めときましようよ……」

「本人達も納得しているようだ、構わんだろう？」

「し、シカ、シ、タツグパートナーが……」

「二人で充分だ。少なくともそこでくたばっている奴等二人分よりはマシだろうからな」

「よっしゃあ！ やってやるぜ!!」

「え、え、え！ なるようになれっス！」

「フッフ、精々たのしませてくれ」

いいのコレ?! なんなのこの展開!!

「デュエルの前に……お前達の運命を決める七つのデツキがある、それぞれ人の罪の名を冠した

【傲慢】【強欲】【嫉妬】【憤怒】【貪食】【色欲】【怠惰】をモチーフとしたデツキだ、好きなものを選ぶがいい……」

やつべえ……ダークネス厨ニ全快だよ、あれの仮面の下があの人と考えると笑いが……笑いがこみ上げて来る……!!

「ジュンコさん耐えて……耐えて下さいまし!!」
「??」

「七つもデツキがあんのかよ! うくん、どれが一番強そうかな」

「よ、弱そうなのにしてようよアニキ、【怠惰】とか……」

「よっし! じゃあ【憤怒】だ!!」

「ええく?! なんか強そうじゃないっすかあ!」

「強そうのが燃えるだろ!!」

「フ、いいだろう! 【憤怒】のデツキで相手をしよう!!」

《そ、それでーハ? デュエル開始!!》

「「デュエル!!」」

「さて、2対1のハンデというわけではないが……先行は私が貰いたい、先の二人と

のデュエルでは後攻ワンターンで決着がついてしまつてな？」

「げ、マジツスカ」

「ライフ2倍をワンターンキルつて、どんだけ凄げえんだよ！燃えてきたぜ!!」

「ライフも通常通り4000、後攻から二人がかりで攻撃してきても構わん。どうだ？」

「OKだ!」

「ま、まあ・・・それなら」

随分余裕ねく、しこたま私達と特訓した十代と翔クンを馬鹿にしてもらつちや困るわよ? あ、でもシンクロは使えないしな・・・

「では私のターン!魔法カード《名推理》を発動!!」

めっ、《名推理》い?!

《名推理》

通常魔法

相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言する。

通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキからカードをめくる。

出たモンスターが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地へ送る。
違う場合、出たモンスターを特殊召喚し、それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。

「発動時、相手はレベルをひとつ宣言する……丸藤翔！貴様に答えてもらおうか!!」

「ぼ、僕ツスか?!」

「デッキから通常召喚が可能なモンスターが出るまでカードをめくり、宣言したレベル以外のモンスターだった場合特殊召喚するという効果だ……私の運と貴様の観察眼が今後の展開につながるというわけだな」

「翔！任せたぜ!!」

「う、うくん……一番デッキに入り易いのはレベル4ツスよね、僕が宣言するのはレベル4だ!」

「いいだろう!では効果処理に入る!!1枚目……《レアメタル・ドラゴン》

「やった!レベル4ツス!!」

「2枚目!《輝白竜ワイバースター》!」

「ちよ、ちよつと?!今レベル4のモンスターが……」

「先に分かりやすく説明したはずだが? 「通常召喚が可能なモンスターが出る迄」と、生憎今のところ特殊召喚しか出来ないモンスターのみなのでな、続けるぞ? もつともそんなモンスターは極小数しか投入されていないが」

「んなつ?!」

「まじかよ!!」

狙いが読めない……《レアメタル・ドラゴン》《輝白竜ワイバースター》、カオスドラゴンとか?

「てつきり、また《あの馬鹿》のカードが紛れこんだ「インフェルノイド」かと思いましたが……」

「フム、レベル1の通常召喚可能なモンスター、《伝説の黒石》を特殊召喚する!!」

あるえっ?!

「もしかして……!!」

※落ちたカード

《レアメタル・ドラゴン》

《輝白竜ワイバースター》

《スキル・プリズナー》

《黒竜の聖騎士》

《左腕の代償》

《復活の福音》

《暗黒竜クラブサーペント》

《スキル・サクセサー》

《黒竜降臨》

《sin真紅眼の黒竜》

《モンスターゲート》

《名推理》

《復活の福音》

《仁王立ち》

《輝白竜ワイバースター》

《真紅眼の闇竜》

《死者転生》

《暗黒竜クラブサーペント》

「伝説の……黒石？」

「このカードを生け贄にすることで……伝説の一端を拝ませてやろう、現れよ！ 《真紅眼の黒竜》!!!」

『グオオオオオオ!!』

「れっ、レッドアイズ?!」

「まじかよ！本物始めてみたぜ!!」

あいつ……まさか！

「ほぼ間違いありませんわ、あのふぎけたデッキは……もう少し様子を伺いましょう。また闇落ちで拾ったのかもしれないし」

《伝説の黒石》
ブラック・オブ・レジェンド

星1／闇属性／ドラゴン族／攻 0／守 0

「伝説の黒石」の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1)：このカードをリリースして発動できる。

デッキからレベル7以下の「レッドアイズ」モンスター1体を特殊召喚する。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、

自分の墓地のレベル7以下の「レッドアイズ」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを手札に加える。

レッドアイズ・ブラックドラゴン
《真紅眼の黒竜》

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

「聴こえる……」

「へ？」

「今後はなんツスカ！」

「墓地に眠りしドラゴン達の……悲しみ、怒り、嘆き……もう一度この地上を、灼熱の焔で焼き付くしたいと焦がれている!!」

アンタが自分で墓地に送ったんでしょーが!!!

「その願いを叶える究極のドラゴンを、今此処に呼び出そう！《真紅眼の黒竜》を生け贄に……」
レッドアイズ・ダークネスドラゴン
 《真紅眼の闇竜》を特殊召喚!!」

『ギヤアオオオオオ!!』

「レッドアイズが……」

「進化したあ?！」

《真紅眼の闇竜》

星9／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「真紅眼の黒竜」1体を

リリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するドラゴン族

モンスター1体につき300ポイントアップする。

「《真紅眼の闇竜》の攻撃力は、墓地に眠るドラゴン族の数×300ポイント上昇する、現在墓地には10体のドラゴン!よって、攻撃力が3000アップする!!」

《真紅眼の闇竜》（攻撃力2400↓5400）

「び、5400?!」

「すっ、すっげー!!」

「カードを1枚伏せてエンドフェイズ、《超再生能力》！生け贄にしたドラゴンは2体、よって2枚ドロー!!さあお前達のターンだ！我が《真紅眼の闇竜》を攻略してみせるがいー!!」

《超再生能力》

(1)：このカードを発動したターンのエンドフェイズに、

このターン自分の手札から捨てられたドラゴン族モンスター、

及びこのターン自分の手札・フィールドからリリースされたドラゴン族モンスターの数だけ、

自分はデッキからドローする。

ダークネス(?) H4

フィールド現状

《真紅眼の闇竜》（攻5400）

《セットカード》

「ぼ、僕のターン、ドロー……モンスターとカードをセットしてターンエンド……」

「し、翔?！」

「どうした? 攻めてこないのか」

「ううっ、」

あんにやろ、かんっぜんに吞まれてるわね……デュエルはビビったら負けでしょうに。

「ジュンコさんそんな……喧嘩じゃないんですから」

「でも相手は攻撃力5400の化物、無理もないわ」

「俺のターン！」

「十代!! たかたが攻撃力5400单体よ! サクつとブツ飛ばして勝ちなさい!!」

「出たあ！」

「ジュンコさんの愛の無茶振りですわ!!」

「ほう……言ってくれるではないか」

「任せろジュンコウ!!おまえの前で、もうだらしない負け試合見せられつかよ!!頼んだぜ《E・HEROエアーマン》!!」

『ハアツ!!』

「ム?」

「召喚時にデツキから《シャドーミスト》を加えて《融合》を発動!!場の《エアーマン》と《シャドーミスト》で融合召喚!巻き起こせ!《E・HERO Great TOR NADO》!!更に《シャドーミスト》効果で《バブルマン》も手札へ!」

「よっしやっ!やったれ!!」

「ほほう……」

「《TOR NADO》効果!融合召喚時、相手モンスターの攻守をすべき半分にする!へタウン・バースト!!」

『ハアツ!!』

『グオオオオオオ……』

《真紅眼の闇竜》(攻5400↓2700)

「バトルだ!《闇ダークネストドラゴン竜》に攻撃!!へスーパースェル!!」

『トウワア!!』

vs 《Great TORNADO》(攻2800)

ダークネス(?) LP4000↓3900

『痛った?!・・・何してんじやこるあ!!』

へ?

「くら!・・・!!」

『ツ!グルウ・・・』

「あれ?気のせいか、ってなんで破壊されてないんだ?」

「墓地の《復活の福音》の効果だ、除外することでドラゴンの破壊を免れる効果を持つ」

《復活の福音》

通常魔法

(1)：自分の墓地のレベル7・8のドラゴン族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2)：自分フィールドのドラゴン族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

「げっ、倒したと思ったのに……しょうがない2枚セットしてターンエンドだぜ」

「貴様のエンドフェイズにトラップ発動《王宮のお触れ》！これで貴様達は罠カードが封じられた」

「うっげ?!」

「マズイッス……」

十代&翔 H3・H4 LP8000

フィールド現状

《greattornado》(攻)

《セットモンスター》(翔)

《セットカード》(翔)

《セットカード》(十代)

《セットカード》(十代)

これは……相手が《あの馬鹿》なら非常にヤバイ!

「フフ、良い罫を封じたかな? 私のターン! 墓地の《黒竜降臨》効果発動、このカードを除外し《レッドアイズ・トランスマイグレーション》を手札に加え、これを発動! 墓地の《真紅眼の闇竜》を儀式的贄に《ロード・オブ・ザ・レッド》を降臨させる!!」

「ロード・オブ・ザ……」

「レッド?」

あ、あつれー、ダークネスさん炎に包まれていくんですけど……ま、まさか!!

「《レッドアイズ・トランスマイグレーション》……即ち、私と真紅眼が一体となることだ!!」

「ブツハア?!」

「ふ、二人ともさつきからどうしたの? 様子がおかしいわ!!」

で、出たあく城之内君の影霊衣こと《ロード・オブ・ザ・レッド》だ! まじで本人と一体化すんの? ソリッドビジョン働きの過ぎでしょ!!

《黒竜降臨》

儀式魔法

「黒竜の聖騎士」の降臨に必要。

(1)：自分の手札・フィールドから、

レベルの合計が4以上になるようにモンスターをリリースし、

手札から「黒竜の聖騎士」を儀式召喚する。

(2)：自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外して発動できる。

デッキから「レッドアイズ」魔法・罫カード1枚を手札に加える。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

《レッドアイズ・トランスマイグレーション》

儀式魔法

「ロード・オブ・ザ・レッド」の降臨に必要。

(1)：自分の手札・フィールドから

レベルの合計が8以上になるようにモンスターをリリース、

またはリリースの代わりに自分の墓地の「レッドアイズ」モンスターを除外し、

手札から「ロード・オブ・ザ・レッド」を儀式召喚する。

《ロード・オブ・ザ・レッド》

星8／炎属性／ドラゴン族／攻2400／守2100

「レッドアイズ・トランスマイグレーション」により降臨。

(1)：1ターンに1度、自分または相手が

「ロード・オブ・ザ・レッド」以外の魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊する。

(2)：1ターンに1度、自分または相手が

「ロード・オブ・ザ・レッド」以外の魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、フィールドの魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「フウン！これで私は《ロード・オブ・ザ・レッド》となった！」

「まじかよくモンスターとデュエリストがひとつとなるなんて・・・!!」

「けど派手に出てきた割には攻撃力2400、アニキのHEROには勝てないツスよ？」

「なんだ、もつと高い攻撃力が好みか？良いだろう・・・手札よりこのカードを発動さ

せる、《ヘルモスの爪》!!」

ちよつ、待たんかい！自重する気一切ないなあの人!!あればたらどう説明すんのよ!!

「もう様子見るまでもないですわね。ある意味妥当かもしれません、使用デッキそのままではまりますから・・・性格違い過ぎて予想外でしたわ」

《ヘルモスの爪》

通常魔法

このカードのカード名はルール上「伝説の竜 ヘルモス」としても扱う。

「ヘルモスの爪」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：「ヘルモスの爪」の効果でのみ特殊召喚できる融合モンスターカードに記された種族のモンスター1体を

自分の手札・フィールドから墓地へ送る

(そのカードがフィールドにセットされている場合、めくって確認する)。

その後、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の《真紅眼の黒竜》と《ヘルモス》が融合し、《真紅眼の黒竜剣》として生まれ変わる!!そしてこれを《闇竜》に装備!!……と言いたい所だが」

「な、なんツスカ……」

「この瞬間!」ロード・オブ・ザ・レッド《私》の効果発動!効果が発動した時、魔法・罠か、モンスターを破壊する!!」

「カード破壊効果だって?!」

《私》のって、いちいち腹筋に効くわあの人……

「激しく同意ですわ……」

「遊城十代がセットしたカードを破壊する!」

「うっ、《攻撃の無力化》が……」

「フン、罠だったか。改めて《黒竜剣》を装備する、このカードは装備モンスターの攻撃力をまず 1000上げる」

『なんか自分に自分装備するって違和感すごいんだけど……』

「……おい」

『あつ・・・ぎ、ギヤアオオオオオ』

「ももえもくん・・・」

「バツチリ聞こえましたわ・・・」

「あのさあ、アンタの《真紅眼》って・・・」

「そして更に！フィールド・墓地のドラゴン族の数×500ポイント、攻撃力が上昇するのだ！」

「ぼ、墓地のドラゴン族はまた数が戻って10体!!」

「そしてフィールドには2体・・・」

《真紅眼の闇竜》(攻2700↓3700?9700)

「攻撃力、9700だつてえ?!」

流した。

「流しましたわね」

《真紅眼の黒竜剣》

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

このカードは「ヘルモスの爪」の効果で

自分の手札・フィールドのドラゴン族モンスターを墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合、

このカード以外のフィールドのモンスター1体を対象として発動する。

このカードを攻撃力1000アップの装備カード扱いとしてそのモンスターに装備する。

(2)：このカードの効果でこのカードを装備したモンスターの攻撃力・守備力は、

お互いのフィールド・墓地のドラゴン族モンスターの数×500アップする。

「更に《鬼神竜の遺跡》を発動し、再び《私》の効果で今度はセットモンスターを破壊！」

「ま、まだ効果使えんのかよ！」

「うっ、《S^{スレイドロイド}R 三つ目のダイス》が……」

「フツ、この効果は1ターン中にモンスターおよび魔法・罫に対し1度ずつ使用出来るのだ。バトル！《真紅眼の闇竜》よ！お前を傷つけた《Great TORNADO》の、

骨まで焼き尽くせ! 《ダークネス・ギガ・フレイム》!!」

《グワオオオオオ!!》

vs 《Great TORNADO》(攻2800)

「う、うわああああ?!」

十代&翔 LP8000↓1100

「じゅ、十代!!」

「翔君!」

「フハハハ!これが闇のデュエルでは無くて残念だよ、今の一撃で最低でも意識は吹き飛んでいたはずだからな!」

ノツリノリだよあの野郎。あとで恥ずかしくならないのかな……意識は仮面に乗っ取られてるとか?

「アニキイ、あんな化物相手に勝つなんて無理だよ……」

「こ、今後ばかりは、マジでヤバイかもな……」

「これで終わりだ！ 《私》で貴様達にダイレクトアタック!!」
 「もう駄目だく!!」

「こるあく翔クン!!自分のモンスターの効果も忘れたのか馬鹿ヤロく!!」

「あつ!ば、墓地の《SR 三つ目のダイス》効果!このカードを除外して戦闘を一度無効にする!!」

ダークネス(?)の拳を《三つ目のダイス》が飛び込んで防いだ!笑う状況じゃないわよ私!絵面が物凄くシユールだったからって、本人達は真面目よ!!

《SR 三つ目のダイス》

チューナー・効果モンスター

星3／風属性／機械族／攻 3000／守1500

(1)：相手ターンに墓地のこのカードを除外して発動できる。
 このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「フン。我が拳を防いだか、やるではないか・・・」

「翔!助かったぜ!!」

「へへっ、ジユンコさんとカードをくれたももえさんのおかげツスね」

最初っから気付いてりゃ化物《闇竜》の攻撃も防げたってのにもう……

「まあ攻撃力約1万とか正直焦りますわよね、迷宮兄弟ワンキルも納得ですわ〜」

「しかし、この布陣を貴様達が突破出来るかな? 《私》のカード破壊効果は相手ターンでも使用が可能。更に《鬼神竜の遺跡》はレベル7か8のドラゴン族が場に存在する場合、墓地以外より特殊召喚されたモンスターの効果のエンドフェイズまで無効とする……即ち、貴様達の得意とする融合モンスターも威力半減とゆうわけだな」

「そ、そんなあ〜」

《鬼神竜の遺跡》

永続魔法

(1) : 自分フィールドにレベル7・8のドラゴン族モンスターが存在し、墓地以外からモンスターが特殊召喚された場合に発動する。

そのモンスターの効果はターン終了時まで無効化される。

(2) : 1ターンに1度、このカード以外の

自分フィールドの表側表示のカード1枚を墓地へ送って発動できる。

自分フィールドに「巨竜トークン」(ドラゴン族・光・レベル1・攻/守0) 1体の特

殊召喚する。

(3)：このカードが墓地に存在する場合、

自分の手札・フィールドのレベル7・8のドラゴン族モンスター1体を墓地へ送って発動できる。

このカードを手札に加える。

一見、馬鹿のように見えて実は案外戦略として成立させてしまいがらロマンを追い求めることを忘れない馬鹿……

「それが《あの馬鹿》……いえ、《師匠》のプレイングスタイルですわ」

「し、師匠?!あの男、貴女達の師匠なの?!」

「あ、やばっ」

「どうゆうことよ!なんで貴女達の師匠が闇のデュエリストとか言って十代達を退学の危機に追いこんでるの!!そもそもアイツ誰よ!!」

「し、師匠は行方不明になっているものだど……」

「正直私達も頭がついてっていません!どうしてこうなった、わかるように説明して隼人君!」

「と、唐突に話振られても困るんだなあ」↑地味にいた

「私はターンエンドだ、精々足掻いてみせろ！」

ダークネス(?) H1 LP3900

フィールド現状

《真紅眼の闇竜》+《真紅眼の黒竜剣》(攻 9700)

《ロード・オブ・ザ・レッド》(攻2400)

《王宮のお触れ》

《巨神竜の遺跡》

「僕……の……」

「アンタ達！圧倒的な攻撃力に騙されちゃ駄目よ!!」

「ジュンコ!」

「そうですね！フィールドが少々えげつない布陣だからといって相手の手札はわずか一枚！」

「突破したらアンタ達の勝ちと言っても過言ではないわ！意地でもアイツらを倒しなさい!!」

「そんな無茶な……」

「無茶じゃない（ありませんわ）!!」

無敵な布陣なんか存在しない、どこかに必ず隙はある! ってゆーか隙だらけなんだから気づけ馬鹿共!!

「そうだぜ翔……ジュンコ達との特訓を思い出せ! ライフが残ってる限り諦めんなよ!!」

「アニキ……うん、わかった! 僕のターン!」

流れ変わったかな?

「これは……よし! 自分フィールドにモンスターが存在しない場合、《SR ベイゴ マックス》を特殊召喚出来る!」
『ブーン』

「だが墓地以外の特殊召喚モンスターは《巨神竜》の遺跡により無効となる!!」

「構うもんか! 更に《SR タケトンボグ》を特殊召喚! このカードは風属性モンスターがいる場合特殊召喚出来る!!」

『ジャキン!』

「む……?」

「そしてこの2体を生け贄に! 《アーマロイドガードンゴ》を召喚!! 召喚時に効果発動! 「ロイド」モンスターを生け贄に含んだ場合、魔法・罠を全て除外する!!」

《SRベイゴマックス》

星3 / 風属性 / 機械族 / 攻1200 / 守 600

「SRベイゴマックス」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1): 自分フィールドにモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2): このカードが召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。

デッキから「SRベイゴマックス」以外の

「スピードロイド」モンスター1体を手札に加える。

《SRタケトンボーグ》

効果モンスター

星3 / 風属性 / 機械族 / 攻 600 / 守1200

自分は「SRタケトンボーグ」を1ターンに1度しか特殊召喚できない。

(1)：自分フィールドに風属性モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2)：このカードをリリースして発動できる。

デッキから「スピードロイド」チューナー1体を特殊召喚する。

この効果の発動後、ターン終了時まで

自分は風属性モンスターしか特殊召喚できない。

《アーマロイドガイデングー》

星8／地属性／機械族／攻2700／守2000

このカードが「ロイド」と名のついたモンスター1体を含む生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在する全ての魔法・罫カードをゲームから除外する。

あれは、私が十代プロマイド○と交換したカード！確か漫画版翔クンのカードだっけ？

※3羽 参照

「なんだと?!だが」ロイド・オブ・ザ・レット 私私 《の効果でそのモンスターも破壊させてもらおう!!へ灼熱のバーンストライク!!」

アンタも●イルズネタかよ！

『オオオオオン!!』

「《アーマロイド》! …… だけどこれで、《闇竜》の攻撃力は戻り、特殊召喚時の成約は消え去った! あとは頼んだよアニキ!」

《真紅眼の闇竜》(攻9700↓2700)

「おう! 俺のターン!! 来たつ、《融合回収》! 墓地の《シャドーミスト》と《融合》を回収! そして《バブルマン》召喚! 2枚ドロ! 《アンタ》の効果は使うのか?」

「… 構わん、続けるがいい」

「よっしゃ! 《融合》発動、《バブルマン》と《シャドーミスト》で融合召喚! 現れろ! 極寒のHERO! 《E・HEROアブソルトZero》!!」

『トワア!!』

「《アブソルトZero》だ!!」

《E・HERO アブソルトZero》

星8 / 水属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO アブソルトZero」以外の

水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「ジュン子さくらん?」

「な、なんだいももえもくらん」

小声 「アブZero様はマズイでしょう色々と!何渡してるんですか!」

「い、いやくうちらインチキカードシンクロ・エクシーズ使つて相手するから十代にも少しはインチキカード

あつてもいいかなつて……」

「もし普通に相手が迷宮兄弟だったら理不尽な殺戮ショーになりかねませんでしたわよ

?!」

相手変わっちゃったんで結果オーライっわけで……

「再び《シャドーミスト》の効果で《エッジマン》を手札に加え《融合》を発動！フィールドの《アブソルトZero》と融合！《E・HEROガイア》!!」
『フンスツ』

《E・HERO ガイア》

融合・効果モンスター

星6 / 地属性 / 戦士族 / 攻2200 / 守2600

「E・HERO」モンスター+地属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1)：このカードが融合召喚に成功した場合、

相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動する。

ターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力を半分にし、

このカードの攻撃力はその数値分アップする。

「融合召喚時に《ガイア》の効果！《真紅眼の闇竜》の攻撃力を半分奪う！」

「甘いな！墓地の《スキル・プリズナー》を除外し発動、我が《真紅眼》はこのターン、モンスターの効果対象にならなくなった！」

「だったら！フィールドを離れた《アブソルトZero》効果！相手モンスターを全て

破壊する！凍りつけえ！へインブレンス・エンド〜!!」

「だがその効果発動にチェーンする形で《私》の効果も発動！《ガイア》を破壊する！へ灼熱のバーン・ストライク〜!!」

着実にテイ●ズ次元に侵略されている・・・

「クツ、だがこれでアンタのモンスターは全滅・・・」

「残念だが再び《復活の福音》の効果だ、ドラゴンの破壊を回避する。この効果は全体に及ぶ効果であっても1枚で賄うことができる!!」

墓地発動入れ過ぎよあのデツキ・・・

「くそつ、またそれか！けどまだだ！《ヒーローアライブ》！ライフを半分払いデツキから《ワイルドマン》を特殊召喚！そして《ミラクル・フュージョン》!!墓地の《エツジマン》と《ワイルドマン》を除外融合！《E・HERO ワイルド・ジャギーマン》!!」

「ッー！」

《E・HERO ワイルドジャーマン》

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2600/守2300

「E・HERO ワイルドマン」+「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をすることができる。

「そして《H―ヒートハート》！攻撃力を500アップさせる！《ワイルドジャーマン》は相手モンスター全てに攻撃出来る！ヘインフイニティエッジ・スライサー〜！！」

『・・・アタシを!!』

「墓地の《仁王立ち》を発動！これを除外し、自分モンスターを1体指定する。このター
ン、相手は指定したモンスターしか攻撃出来ない！《私ロード・オブ・ザ・レッド自身》を指定する！」

『!!』

「ぐおおおおお!!」

《ワイルドジャーマン》（攻2600?3100）vs《ロード・オブ・ザ・レッド》（攻2400）

ダークネス(?) LP3900↓3200

「自分のモンスターを……」

「庇った……」

『グワアアアアアアアア!!』

「案ずるな《真紅眼》……早くターンを進めろ」

「ターン……エンドだ」

十代&翔 H0・2 LP550

フィールド現状

《ワイルドジャギーマン》(攻3100?2600)

「私のターン……最後の攻防は実に楽しめたぞ? 《思い出のブランコ》を発動! 墓地より《真紅眼の黒竜》を特殊召喚!!」

「そんな……」

「いけると、思ったんだけどな……済まねえ……」

「《真紅眼の闇竜》！《ワイルド・ジャギーマン》を攻撃！！
〈ダークネス・ギガ・フレイム〉！！」

『ヌアアアツ?!』

「クウツ、」

十代&翔LP550?450

やめて……

「終わりだ！《真紅眼の黒竜》！〈ダーク・メガフレア〉！！」

「やめてええええええ!!」

十代&翔 LP450↓0

・
・
・
・
・
続
く。

9羽 Q. 私の周りの人たちは自重してくれませんか どうすればいいですか？

前回までのあらすじ

ダークネス(?) 乱入。

「十代……十代!!」

「あ、ジュンコさん!」

「客席からダイブするなんて、危ないわよ!!」

構うもんですか!十代が……十代があいつのせいだ!!

「ジュンコ……ほんとにわりい、また負けちまったよ。あんなに特訓したのにな……」

「ううん、十代は悪くないわ!悪いのはアイツよ!突然現れて全部引っ掻き回して!!」

「フッフッフツ、だったらどうすると?」

「私とデュエルしなさい!十代をこんな目に合わせた罪……あがなつてもらおうわ!!」
「フフ、いいだろう。私もその二人より、制裁を加えるべきはお前達だとおもっていたからな!枕田ジュンコ!浜口ももえ!!」

「わたくしもですか、いいでしょう……!」

「えと、そんな勝手二話進められテーマ……」

《私達》を知ってる。もう間違いないわね、コイツの正体は!

「その前に、いい加減その悪趣味な仮面取つたら?ダークネス!いいえ……《師匠》!
「フツハハハハ!!やはり君達にはわかってしまうか!!」

『いや、わからせたのアンタじゃん?』

「何だ、ジュンコの知り合いなのか?」

「師匠って……」

「そう、ダークネスとは世を忍ぶ仮の姿……その正体は!!トオ!!」

なの?!

「に、兄さあああん?!」

「ふっ、吹雪!!」

「ちよっ、明日香様! ジュンコさんに注意しといて自分も飛び降りてますわ!」

「とか言いつつもえさんもやってるんだなあ・・・」

「え、明日香の兄ちゃん?! 行方不明なんじゃ・・・」

「どくなってんスか?!」

こつちが聞きたいわ!

「やあ明日香! 元気だったかい? 俺・・・じゃなくて僕が恋しいからってミニスカートのまま客席からダイブするなんて、随分お転婆になったね?」

「兄さん・・・!!」

「亮も変わりなさそうだなによりだ。いや、今はカイザーと呼ぶべきかな?」

「本当に・・・吹雪なのか?」

「ハツハツハツ何を言っているんだいこの私……じゃなくて僕、天上院吹雪以外の誰に見えると?」

師匠に見えます。

「つてコラア!私を差し置いて感動の再開してんじゃないわよ!デュエルしろバツキヤロー!!」

「そうですね!人をわざわざ呼びつけておいてこれですの?!」

「ふ、二人とも……つてそうよ兄さん!兄さんのせいで十代達が退学に……」

「そうだ!翔も……」

「フフン、相変わらずだね?しゅん、もも。家族親友の再開を邪魔立てするとは……」

やはり君達には制裁が必要のようだ!あ、クロノス先生マイク貸して下さい」

「え?どつ、どうぞなのーネ」

《あゝ、あゝ、デュエルアカデミアの皆様方!久しぶりの人は久しぶり!はじめましての方ははじめまして!みんなのプリンス、吹雪です!!》

「「「キャアアアアアアアアアアア！」」」

「吹雪サマー！」

「会いたかったー！」

「なーにが、「みんなのプリンス」ですか．．．」

モモ、殺意出てる！抑えて！！

《しかし僕が居なくなつてから、親友の亮は学園の帝王、妹は女王と呼ばれるようになり．．．僕が王子のままではいられなくなつてしまいました、これは由々しき事態だ！！》

いや知らんがな！

《だから僕は、あえて自分から名乗らせて貰おう！僕は今日からプリンスではなくてキング．．．そう、フブキングとね！！》

それ漫画版!

「フブキンググって……」

「なんなんスかこの流れ……」

「吹雪の悪いくせが……」

「お〜! なんかカツコイイぜ!」

《だが名乗るだけなら誰でも出来る、だから僕はここに力を示そう! この学園に、平和だったデュエル環境を乱した枕田ジュンコ・浜口ももえ兩名に制裁を下す!!》

「ハアアアア?! いつ私達が学園のデュエル環境を乱したつてんのよ!」
「ちよつとエクシーズで暴れただけですわ!!」

あ、乱してたわ……

《皆に問おう! 今回のチャレンジャー二人を何ターンで倒すべきか!!》

「に、兄さん。ジュンコ達に勝つつもり……?」

「決まっている! そんな卑怯者共……1ターンキルですら生温い!!」

い、今の声は万丈目君かな? 《リオートハルピユイア》のことすげー根に持つてるよごめんなさい。

《君は万丈目君だったね? 駄目だよ。キングのデュエルはエンターテイメントでなければならぬ!》

それ別のキングだから! 色んな人に怒られるから自重しろよ!!

《ターン1! 先行はこの僕だ、キングとは常に先に行くもの!!》

「ライディングじゃないのに先行宣言とか馬鹿ですわね……ああ、馬鹿でした」

《ターン2、および3! 相手にも十分な見せ場を与える! だがそれを全て、僕は受けとめる!》

「なんですと〜!!」

「なんですと〜!!」

《そしてターン4！相手の全力を上回る、圧倒的な力を持つて勝利する！！よって、このデュエルは4ターンで決着だ！！》

言ってくれたなこのやろう．．．やれるもんならやってみなさいよ馬鹿師匠が！
いちいちハジケ過ぎなのよ！！

「おお、ジュンコから本気怒りモードの気配がするぜ．．．」

「十代、アンタを散々な目に合わせたアイツを．．．私がぶっ飛ばしてあげるわ！！」
「わたくしも堪忍袋の限界ですわ、本気で参ります！！」

「ほ、程々に．．．頼む」

「いい殺気だよ君達．．．そういえばシンクロ召喚のオープンテストだっけ？なんなら僕相手にやるといい」

「上等よ！！私にブラックフェザー「B F」を使わせたこと、後悔させたいわ！！」

「じゃあそちらは【傲慢】とかでお相手してもらいますか！何がフブキングですか、そのおめでたい頭を冷やして差し上げますわ！！どーせ七つとも全部アレ真紅眼なんでしょう？！」

「二人とも．．．そんななに兄さん嫌いだったの？」

「二人とも超怖いツス、てゆうか僕らの退学の件は?!」

「安心したまえ! 査問委員会は買収済みだ、君達を退学にはさせないさ……次の週末の予定を生け贄にしたがね!」

口説いたのか! あのきつつそうな姉ちゃん口説き落としたのか凄いな!!

「さらっと爆弾発言されたけど今はどうでもいいですわ!!」

「「デュエル!!」」

「僕のターン、ドロー!」

うわつ、マジで先行とりやがった! ランダム選出なのに……

「ご都合主義にも程がありますわ!!」

「フフ、手札から《紅玉の宝札》! レベル7 レッドアイズブラックドラゴン《真紅眼の黒竜》を墓地に送り2枚ドロー

! 更にデツキからもう1枚、《真紅眼の黒竜》を墓地へ!! 《天使の施し》! 3枚捨て2枚

ドロー!!」

《紅玉の宝札》

「紅玉の宝札」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)・手札からレベル7の「レッドアイズ」モンスター1体を墓地へ送って発動できる。自分はデッキから2枚ドローする。

その後、デッキからレベル7の「レッドアイズ」モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

《天使の施し》

(禁止カード)

インチキ効果も大概にしろ

「ちよつ、それ禁止……」

「ジュンコさんっ」

「え? 《天使の施し》って禁止カードだっけ?」

「そんなハズは……」

やつべー、向こう前世のリミット^禁トレギュレーション^止で考えてたわ……

「行くよっ! 《未来融合―フューチャーフュージョン》!! 融合指定は当然、《F・G・D》

!」

「うっげえ?!」

「もしかして……」

「融合素材として《アークブレイブドラゴン》《嵐征竜テンペスト》更に《エクリップス・ワイバーン》3体!!」

「ぎっけんなああああああ(ですわ)!!」

「二人の反応が尋常じゃないツス!!」

「こ、こんなにかの二人が焦るなんて……」

《未来融合ーフューチャー・フュージョン》

永続魔法（禁止カード）

自分のエクストラデッキの融合モンスター1体をお互いに確認し、

決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

《エクリップス・ワイバーン》

星4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻1600 / 守1000

(1) : このカードが墓地へ送られた場合に発動する。

デッキから光属性または闇属性のドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体を除外する。

(2) : 墓地のこのカードが除外された場合に発動できる。

このカードの(1)の効果で除外されているモンスターを手札に加える。

「安心したまえ、(禁止は) 3枚しか入れていないからね・・・君達がシンクロ召喚するのならこの程度は許してもらわねば。《エクリップス・ワイバーン》の強制効果によりデッキから2枚の《冥王竜ヴァンダルギオン》と《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》を除外する！」

TF規準の禁止解除かよ！うちらも3枚なんか入れればいいのか?!

「タイダル仕込んで宜しいでしょうか・・・」

「《思い出のブランコ》を発動、《真紅眼の黒竜》を墓地より復活！《融合呪印生物―闇》を召喚！起動効果により《真紅眼》と融合！《ブラック・デーモンズ・ドラゴン》!!」

『グオオオオオウ!!』

《ブラック・デーモンズ・ドラゴン》

星9 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3200 / 守2500

「デーモンの召喚」 + 「真紅眼の黒竜」

「《竜の鏡》を発動! 《真紅眼》と《融合呪印生物―闇》を墓地融合! 《メテオ・ブラック・ドラゴン》!!」

『ガアアアアア!!』

《龍の鏡》

自分のフィールド上または墓地から、

融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

《メテオ・ブラック・ドラゴン》

星8 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻3500 / 守2000

「真紅眼の黒竜」＋「メテオ・ドラゴン」

「墓地の《嵐征竜テンペスト》を《エクリプス・ワイバーン》2枚を除外して特殊召喚！この時2枚の《冥王竜ヴァンダルギオン》が手札に加わる！《トレードイン》！レベル8モンスターを捨てて2枚ドロー！カードを2枚伏せてエンドフェイズ！速攻魔法《超再生能力》を起動！このターンに捨てた、または生け贄にしたドラゴン族は3枚、よつて3枚ドロー！！さあ、君達のターンだ！」

吹雪 H4

フィールド現状

《メテオブラック・ドラゴン》(攻)

《ブラック・デーモンズ・ドラゴン》(攻)

《嵐征竜―テンペスト》(攻)

《未来融合―フューチャーフュージョン》

《セットカード》×2

《嵐征竜―テンペスト》

効果モンスター（禁止カード）

星7／風属性／ドラゴン族／攻2400／守2200

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族

または風属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと風属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、

デッキからドラゴン族モンスター1体を手札に加える。

このカードが除外された場合、

デッキからドラゴン族・風属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「嵐征竜―テンペスト」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「こ、これが先行1ターン目にやることかよ?!」

「凄い、兄さん……」

「流星は吹雪といったところか」

じ、自重しなすぎだろ馬鹿師匠が……ちやつかりまた《超再生能力》引いてる

し。

小声「しかもあのデツキは師匠が私達に始めて出会った時に使っていた【真紅眼パーミツション】ですわね、つまりあの伏せは……ジュンコさん、わたくしが血路を開きます。あとはお願いいたしますわ！」

「む、了解！」

「行きますわよ！《dark knight》さん!!」

《俺たちはもう、分かり合っている……!》

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

え、なにやってんのこのコ……なんか右手光ってね？紫色に光ってね?!

「^{パリアンズ}乙女・^{カオス}混沌・^{ドロ}引き!!」

あんたは七皇か！てカルビに無理しかねえしこの状況がもはや混沌だわ!!

「な、なんだあれは?!」

「まるで意味がわからないツス!!」

「わたくしが引いたカードは《R U M―七皇の剣》!!これでもいつでも《S・H・
サイレント
オナーズ
 dark knight》を呼び出すことが出来る!!」

「あつ、あれは1枚で強力な《dark knight》を呼び出していたカード!いきなり引き当てるなんて!!」

「まあ落ちつきまえモモ、スタンバイフェイズに墓地の《アークブレイブドラゴン》の効果!墓地に送られた次のスタンバイフェイズにレベル7か8のドラゴン族を蘇生する!蘇れ、《真紅眼の黒竜》!!」

『あく融合2回とか疲れたく……』

「……メインフェイズに移行!《七皇の剣》を発動!!」

「フツ、カウンター罠《王者の看破》!レベル7通常モンスターである《真紅眼》がいるため神の宣告となる!」

《どこまでも俺の、俺達の夢を打ち砕く気かああああ!》

「わかるようでわからない説明やめて?!」

「そしてカウンター罠の発動により手札の《冥王竜ヴァンダルギオン》が覚醒する!魔法の発動を無効にしたので相手に1500のダメージを与える!!」

《又オオオオ……》

「ムムツ」

「キヤツ、こんにやろー!!」

ジユニコ&ももえ LP8000↓6500

《王者の看破》

カウンター罠

自分フィールド上にレベル7以上の通常モンスターが存在する場合に発動できる。

魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

《冥王竜ヴァンダルギオン》

効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2500

相手がコントロールするカードの発動をカウンター罠で無効にした場合、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、

無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。

●魔法：相手ライフに1500ポイントダメージを与える。

●罠：相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

●効果モンスター：自分の墓地からモンスター1体を選択して

自分フィールド上に特殊召喚する。

「クツ、でも《真紅眼》をわざわざ蘇生させた時点で《看破》はバレてますわ！何回貴方の馬鹿デツキに付き合ったと思ってるんですか！」

「ちよつ、ももえ落ち着いて……」

「って伏せ削るためにわざわざバリアンズ・カオス・ドロローやったの?!

「《深海のディーヴァ》さん、お願いします！」

《任せてつ、モモの元カレらしいけど容赦しないわよ?》

「ん?なあ明日香く、元カレってなんだ?」

「えっ、なによ急に……昔の彼氏ってことだけど」

「彼氏ってなんだ?」

「えーつと、男女のお付き合いをしている仲で……」

「男女のお付き合いつてなんだ?」

「そ、それは……」

「十代ストツプ!色々問題が発生しそうだから黙って!!」

行方不明になってたはずなのに元カレとか師匠とか色々不味いわよね……

「ジュンコさん今それ所じゃありませんわ！《ディーヴァ》さん効果で《海皇の狙撃兵》を特殊召喚！」

《了解、おいでっ》

《シューッ》

「更に手札から《簡易融合》！ライフを1000払い《レア・フィッシュ》を融合召喚扱いで特殊召喚！」

ジュンコ&ももえ LP6500↓5500

《の〜ん……》

「合計レベルは……ってアンタまさか！」

「レベル4《レア・フィッシュ》とレベル3《海皇の狙撃兵》にレベル2の《ディーヴァ》さんをチューニング!!氷霧に惑え!凍牙に果てよ!冷気に抱かれて刹那に沈め!シンクロ召喚!三界を閉ざせ!《氷結界の龍トリシューラ》!!」

『……』

う、うわあく私知くらないつと

『『グガアアアアアアアア!!』』

「ヒイイイイ?! なんなんツスカ!!」

「寒い・・・心無しか寒いわつ、十代暖めて！（抱きッ）」

「お、おう？」

「こらア明日香！どさくさに紛れて何してんの!!」

「凄い迫力だな・・・」

「《トリシューラ》のモンスター効果！相手の墓地・手札・フィールドのカードを1枚ずつ除外します！〈Final Embrace〉!!」

「ぶ、ぶっ壊れ効果なのーネ・・・」

《氷結界の籠 トリシューラ》

星9／水属性／ドラゴン族／攻2700／守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上

(1)：このカードがS召喚に成功した時に発動できる。

相手の手札・フィールド・墓地のカードを
それぞれ1枚まで選んで除外できる。

「おつとそうはいかない、カウンター罠《天罰》!!手札を1枚捨て《トリシューラ》の効果
果を無効にして破壊するよ!」

『『アアアア……』』

《天罰》

カウンター罠

手札を1枚捨てて発動する。

効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「《トリシューラ》!……むかつきますわ!わたくしの展開をことごとく拒否りやがって!
《水精燐—メガロアビス》を手札より特殊召喚!!このモンスターは手札の水属性モ
ンスターを2枚捨て特殊召喚出来ます!更に《アビスケイル—ケートス》をサーチ!今
墓地へ送った《フィッシュボーグ—ランチャー》効果!フィールドのモンスターが全て
水なので特殊召喚!この2体をチューニング……しないでブン殴ります!!《メガロ

アビス』第2の効果！自分フィールドのモンスターを墓地に送ってこのターン2回攻撃出来る！《ランチャー》を墓地へ！《ケートス》を《メガロアビス》に装備して攻撃力3200！大層大切にされている《真紅眼》と《テンペスト》に攻撃イ！！」

vs 《真紅眼の黒竜》（攻2400）

vs 《テンペスト》（攻2400）

「クツ、すまない《真紅眼》・《テンペスト》・・・」

『グルウ・・・』

吹雪 LP4000↓2400

「ざまあみなさいな！ターン終了ですわ!!」

《水精鱗マーメイルーメガロアビス》

星7／水属性／海竜族／攻2400／守1900

自分のメインフェイズ時、

手札からこのカード以外の水属性モンスター2体を墓地へ捨てて発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、

デッキから「アビス」と名のついた魔法・罫カード1枚を手札に加える事ができる。

また、このカード以外の自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する水属性モンスター1体をリリースする事で、

このターンこのカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

《アビスケイルーケートス》

装備魔法

「水精鱗」と名のついたモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

このカードがフィールド上に存在する限り、

相手フィールド上で発動した罠カードの効果は無効にする。

その後、このカードを墓地へ送る。

《フィッシュボーグーランチャー》

チューナー

星1／水属性／魚族／攻 2000／守 1000

「フィッシュボーグーランチャー」以外の自分の墓地のモンスターが全て水属性の場合、

自分のメインフェイズ時に発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、

ゲームから除外される。

このカードをシンクロ素材とする場合、

水属性モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「フィッシュボーグーランチャー」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

「こんなに冷静さを欠いたももえ始めてみたわ・・・」

あ、あえてなにも言うまい。

「もう小賢しいセットカードはありません！ジュンコさんお願いします！」

「任せてっ、私のターン！わたしは・・・」

「蘇れ！《真紅眼の黒竜》」

『グワアアアアアアア！』

「ちよっ、何よいきなり！」

「先のターン《天罰》で捨てた《アークブレイブドラゴン》の効果だ、また《真紅眼》を蘇生させてもらったよ」

「また《アークブレイブ》かよ！てか他にも蘇生対象はいるのにどんだけ《真紅眼》好きなのさ・・・」

「今更ですわジュンコさん。師匠は某社長の青眼・某七皇の時空竜好きに匹敵・・・い

え、それ以上の《真紅眼》狂いなのですから」

「フツ、愚問だね……君達はデュエルの際に自分の魂を犠牲にするのかい？」

「どこの絶対王者よ……ぶつちやけそこがつき入る隙よね！安心と信頼の《黒い旋風》

！《BF—上弦のピナーカ》を召喚して《白夜のグラディウス》をサーチして特殊召喚
！」

『クルツ』

『フーツ』

《BF—上弦のピナーカ》

チューナー・効果モンスター

星3／闇属性／鳥獣族／攻1200／守1000

「BF—上弦のピナーカ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードをS素材とする場合、「BF」モンスターのS召喚にしか使用できない。

(1)：このカードがフィールドから墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。
る。

デッキから「BF—上弦のピナーカ」以外の「BF」モンスター1体を手札に加える。

《BF—白夜のグラディウス》

効果モンスター

星3／闇属性／鳥獣族／攻 800／守1500

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが、

「BF―白夜のグラディウス」以外の

「BF」と名のついたモンスター1体のみの場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

「レベル3の《白夜のグラディウス》にレベル3のチューナーモンスター《上弦のピナカ》をチューニング！来たれ！神話の名刀を振るいし猛禽の勇士！シンクロ召喚！《B

F―星影のノートウング》!!」

『フツシユウウウ・・・』

《BF―星影のノートウング》

星6／闇属性／鳥獣族／攻2400／守1600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「BF―星影のノートウング」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動する。

相手に800ダメージを与える。

その後、相手の表側表示モンスター1体を選び、

その攻撃力・守備力を800ダウンする。

(2)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

自分は通常召喚に加えて1度だけ、

自分メインフェイズに「BF」モンスター1体を召喚できる。

「このコが召喚に成功した際に相手ライフとモンスターに800ダメージを与える！対象は《ブラック・デーモンズ》よ！〈ホーミング・ソード〉!!」

「痛たたつ、君も大概な引きだよねえ」

《ブラック・デーモンズ・ドラゴン》(攻3200↓2400)

吹雪 LP2400↓1600

「アンタに言われたらオシマイよ！おいで、《突風のオロシ》!!」

『ピュルルル』

「レベル6《星影のノートウング》にレベル1チューナー《突風のオロシ》をチューニング
グウ！翔来せよ、猛禽操りし漆黒の鷹匠！《BF T―漆黒のホーク・ジョー》!!」

《BF T―漆黒のホーク・ジョー》

シンクロ・効果モンスター

星7／闇属性／戦士族／攻2600／守2000

「BF」チューナー＋チューナー以外の「BF」モンスター1体以上

「BF T―漆黒のホーク・ジヨ」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の墓地のレベル5以上の鳥獣族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2)：このカードが相手の効果の対象になった時、

または相手モンスターの攻撃対象になった時、

このカード以外の自分フィールドの「BF」モンスター1体を対象として発動できる。

その対象を正しい対象となるそのモンスターに移し替える。

おつ、渋いイメージだったけどソリッドビジョンだと中々のイケメンに・・・

『あら〜ジュンコさん、へこつち〜じゃ始めてネ?』

「つておネエかよ! まともな奴いないのか☆7BFは! 《アーマード・ウイング》だけか!!」

『ちよつと〜ヒドクない? 似非侍コンビと一緒にしないでチョ〜ダイ』

「ジュンコさん真面目にやってくてくださいいな!」

「普段のアンタに聞かせたいわその言葉！ええい、《突風のオロシ》の効果で《メテオ・ブラック・ドラゴン》を守備に変更！《ホーク・ジュー》の効果により墓地から《ノートウング》復活！」

『帰つといで！』

『フウ……』

「《ノートウング》が場にいる時もつかい通常召喚できる！頼むわよ《極北のブリザード》!!効果により墓地の「BF」を特殊召喚出来るわ!!」

『コン、コン』

「「きゃ〜可愛い〜！」」

ブリザードのディスクコンコンに客席から歓声が上がったが激しく同意である。持ちかえってモフリまわしたい……

《BF―極北のブリザード》

チューナー・効果モンスター

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守0

このカードは特殊召喚できない。

(1)：このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地のレベル4以下の「BF」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

「じゃなくて墓地から《上弦のピナーカ》を復活！《黒い旋風》にターナー制限はないからもつかいサーチ使って《砂塵のハルマツタン》を手札に加わるわ！更に《黒槍のブラスト》を特殊召喚!!」

『イヤツホウウウ!!』

「まだ続くのか・・・何度目の特殊召喚だ」

「亮は初見だったわね？今回ちよつと多いけどジュンコとももえなら割りと普通よ？
ねえ十代」

「俺も始めは5体召喚されて超焦ったもんなく」

「アニキと明日香さんの感覚が麻痺してきてるツス」

「派手にぶつ飛ばすわよ!!《黒槍のブラスト》に《上弦のピナーカ》をチューニング!!漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れ！電光の斬撃!!シンクロ召喚！降り注げ！《A BF―驟雨のライキリ》!!」

『我、参上!』

『噂したら来ちやったわ・・・』

『来たぜジユンコのエース!!』

『ジユンコさんもなんやかんやで人のこと言えませんわ・・・』

「《砂塵のハルマツタン》を特殊召喚し《ライキリ》効果発動!!他の「BF」の数だけカードを破壊する!対象は《真紅眼》以外よ《天翔黒雷刃》!!」

『セイヤアアア!!』

「《ライキリ》以外の「BF」は4体、流星はジユンコさん!インチキ効果も大概にしやがれですわ!!」

「誉めてんのか貶してんのかどっちよアンタは!!つかおめーが言うな!」

「ならばその効果に対し手札の《幽鬼うさぎ》効果発動!効果を発動した《ライキリ》を破壊する!」

『わくわく、出番だね♪』

『チツ、赤い目ってだけで入ってるくせに・・・』

『な、なんとお!ぐふお?!』

《BF—砂塵のハルマツタン》

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 800 / 守 800

「BF—砂塵のハルマツタン」の(1)の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1) : 自分フィールドに「BF—砂塵のハルマツタン」以外の「BF」モンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

(2) : このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

このカード以外の自分フィールドの「BF」モンスター1体を対象として発動できる。

このカードのレベルをそのモンスターのレベル分だけ上げる。

《幽鬼うさぎ》

星3 / 光属性 / サイキック族 / 攻 0 / 守 1800

「幽鬼うさぎ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : フィールドのモンスターの効果が発動した時、

またはフィールドの既に表側表示で存在している魔法・罫カードの効果が発動した時、

自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送って発動できる。

フィールドのそのカードを破壊する。

「ら、《ライキリ》！でもアンタのフィールドも……」

「残念だが墓地の《復活の福音》の効果発動、破壊されるのは《未来融合》のみだよ」

「またそれかよ！いつの間に……」

「《天使の施し》でちやつかり捨ててたのでしよう、《超再生能力》のドロローが3枚だったから気になってはいましたが……」

「まだよ！《砂塵のハルマッタン》のレベルを《ノートウング》のレベル分だけ上昇させて《極北のブリザード》にチューニング!!シンクロ召喚！大いなる守護者！《神樹の守護獣―牙王》!!」

『ぐお〜』

可愛いつ?!見た目ごっついのに泣き声可愛いつ?!

《神樹の守護獣―牙王》(攻3100)

「バトルよ！《牙王》で《ヴァンダルギオン》を《ホーク・ジョー》は《ブラック・デーモンズ》、《ノートウング》は守備の《メテオ・ブラック》に攻撃！《ブラック・フェスティバル・牙王を添えて》!!」

《牙王》vs《ヴァンダルギオン》(攻2800)

《ホーク・ジョー》vs《ブラック・デーモンズ》(攻2400)

《ノートウング》vs《メテオ・ブラック》(守2000)

『『ガアアアアア!!』』

「うッ、皆・・・すまないね」

吹雪 LP1600↓1300↓1100

「あの強力なモンスター達がほぼ全滅・・・」

「これがシンクロ召喚・・・下級モンスターが簡単に上級レベルのモンスターに化けるとは」

「こんなものが世に出回ったら、今更のデュエル環境が壊れてしまうノーネ・・・」

「ヤベエ、ヤベエよ・・・」

「あんなのインチキじゃん！」

「卑怯者ー!!」

「吹雪様負けちゃ嫌ー!!」

あ、あれっ・・・もしかしてあんまり高評でない？私達。

「これが現実だよ君達、その召喚方法シンクロ・エクシースは激薬だ。今更君達もこちらで過ゴしていたのだから解らないことはないだろう？・・・大半の人は、簡単に変化を受け入れられる程柔軟ではない。僕らがそうであつたようにね」

滅茶苦茶受け入れて一番楽しそうにしているのはアンタではないでしょうか・・・

「しかし君達が使つたことにより、遅かれ早かれ世間に広まつていくだろう・・・仕方のないことだ。人は変化を恐れもするが、また同じくらい力の誘惑には弱いからね。1度使つて利便性に気づけば、離れることも出来ないだろう」

「周りくどいですわね。結局は何が言いたいのですか？」

「簡潔に言おう、僕はただ忘れて欲しくないだけなんだ皆に！どれだけ新しい力を得ても！どれだけ環境が変わつても！君達がデュエルをするきっかけ、目的、支えてくれた1枚のカードの存在を!!」

何言い出してんだこの馬鹿は・・・

「兄さん……」

「おー！なんかわかるぜ！」

「信頼するカードへの……リスペクトか」

なんか雰囲気で共感うけてるけどそもそも日本語間違ってる？気のせい？

「師匠特有の意味不明理論ですわ、ほおっておきましょう……」

「そ、そうね……一枚伏せてターン終了」

ジユンコ&ももえ H0・0 LP5500

フィールド現状

《ノートウング》(攻)

《ホーク・ジョー》(攻)

《牙王》(攻)

《黒い旋風》

《セットカード》

ももえ

《メガロアビス》(攻)

＋《アビスケイラーケースト》

セツトカードは《聖なるバリアーミラーフオース》。クロウ様リスペクトで1枚刺してたけどまさかこんなことになるとは……ももえは私を気づかって《ケースト》にしたんだろうけどその結果がこれだよ。

「つてジュンコさん！師匠相手に何《真紅眼》残してるんですか!!」

「あーしまっ……」

「熱くなるとミスを侵すのは相変わらさだね、僕のターン！さあ、宣言通りラストターンだ!!」

「「「ワアアアアアアア!!」」」

「やれるもんならやってみなさいよ！うちのフィールドには上級クラスが4体！対するアンタはお大事な《真紅眼》だけじゃない!!」

（あ、これは負けましたわね……）

「彼女がフィールドにいる、それだけで充分さ！」

「ムッ」

「しかしこれ程まで追い詰められるとはね、君達も強くなったものだ……」

「し、しししょー？」

「なんなんですか一体……」

「《テンペスト》！ 忌まわれし竜よ、再び力を！ 《エクリプス》と《ヴァンダルギオン》を除外して特殊召喚！！ 《エクリプス》の強制効果により《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》を手札に加える！！ そして《テンペスト》を除外して特殊召喚する！！ 《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》！！」

『ギヤアオオオオオ！！』

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》

星10／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守2400

(1)：このカードは自分フィールドの表側表示のドラゴン族モンスター1体を除外し、手札から特殊召喚できる。

(2)：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外の

ドラゴン族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

「レッツレダム」

「……あ？」

「ヒイイ?!」

「お、お前の兄ちゃん怖いんだな? 明日香」

「滅多に怒る人じゃないんだけど……」

小声「じ、ジユンコさん!! 師匠の前でその略称は禁句ですわ!!」

「あ、ヤバッ」

「以前一度だけ……あるプロデュエリストに『真紅眼』なんて実戦では使えない、鑑賞用のカードだね」と言われた時は本気で怒っていたな、彼の心が折れるまでワンターニルを繰り返していた。やめさせるのが大変だったな……」

「私それ知らないんだけど……」

「『ダークネスメタル・ドラゴン』よ! 墓地の仲間を呼び起こせ! 帰還せよ

ブラック・オブ・レジェンド
『伝説の黒石』!!」

「ま、また施して捨てていたのでしょ……」

「そして《巨竜の羽ばたき》!! 《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》を手札に戻し、魔法・罠を全て破壊する!!」

《ケースト》と、

「《ミラーフォース》が……」

「そして《伝説の黒石》を生け贄に……生誕せよ迅雷の魔王よ! 《レッドアイズ・ライトニングロード真紅眼の凶雷皇—

エビル・デーモン》!!」

『ガーハツハツハツハツハツ!!』

「で、デーモンだあ?!」

《真紅眼の凶雷皇—エビル・デーモン》

デュアル

星6／闇属性／悪魔族／攻2500／守1200

●1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

このカードの攻撃力より低い守備力を持つ、

相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する。

「《エビル・デーモン》はデュアルモンスター……召喚権を行使することで本来の力を取り戻す! 再度召喚し効果発動! 彼の攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て

破壊する!! 〈紅・魔降雷〉!!

『やだ!全滅じゃない!!』

『グエー?!』

『うがつ!!』

「み、皆ア．．．．」

紅い雷で皆、消し飛んでしまった．．．

「済まないね? 《真紅眼》をゲームから除外し、再び《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》を特殊召喚!! 効果により墓地の《メテオ・ブラック・ドラゴン》を復活させる!!」

『ギヤアオオオオオオ．．．．』

『進化だコラー!』

「やっぱり、敵わないですね．．．」

「全員で総攻撃だ!!」

ジュンコ&ももえ LP5500↓3000↓200↓3300

WIN 吹雪

「ま、負けた・・・」

「フツ・・・キングは一人！この僕だ!!」

「「「ワアアアアアア!!」」」

「吹雪様ー!!」

「フブキングー!」

「「「キング！キング！キング！キング！キング！」」」

ジャックコールか！うちらすっかりダシにされてんじやない！

「くつ、煮るなり焼くなり好きにすればいいですわっ」

そ、そういうえば制裁デュエルつつつてたわね、うちらにもなんかあんの?!

「そうだな、君達への制裁は・・・今夜、僕の部屋へ二人とも来てもらう!!」

「へっ?」

「「「ええええええええええええ?!」」」

『あ、続くかもつてよ』

10羽 あれ？もしかしてこの二人似たもの同士かも

前回までのあらすじ

師匠降臨、夜のお誘い。

「やあ、よく来たね君達……」

「し、失礼します」

「フン、お邪魔しますわ」

モモったらデュエル後終始この調子である、お陰で明日香達から質問攻めに合わずに済んだのだが……

「そう警戒しないでくれよモモ、何も捕って食おうってわけじゃない」

「そんなことわかっていましてよ、師匠の性欲はそっくり決闘欲に刷り変わってる程ですからね?」

「え?そつちの意味の食べるだったん?!」

「いやあく照れるなあ」

照れるとこじゃねーし。

「しっかし行方不明前はあの特待生寮にいたのよね?よく部屋もらえたな……」

「そこは学園の負い目に漬け込んでだね……」

「実は腹黒いのは昔のまんまかつ!?あ、そーいやししよーの『デーモン』あずかってたんだわ、返す」

「おお、よく僕のだってわかったね?流石は我が弟子達よ!」

《レッドアイズ・フュージョン真紅眼融合》とか《リターン・オブ・レッドアイズ真紅眼の鎧旋》とか入ってればそりや気づくだろ……

「そんなアホな構築の『デーモン』なんか師匠だけですわ」

※入れている方いたらごめんなさい

「何?! デーモンと真紅眼はズツ友ではないのか!」

『アタシはただの戦友って感じだけどな〜』

「……誰?」

なんか黒長髪紅眼の《ロード・オブ・ザ・レッド》っぽい格好したねーちゃんがいるんだけど……しかもデカイ、どこがとは言わんが明日香並みにデカイ。とゆうか若干本人に似てる気もする……

『何だよ、ブツキーの弟子なら一発でわかんだろ?』

「やっぱり君達も見えるのか、彼女は《真紅眼》レッドアイズの精霊だよ」

『ど〜も〜』

「うへえ?! そのデカイねーちゃんが《真紅眼》?! なして人の姿やねん!!」

「師匠にそんな趣味があつたなんて……」

「そんな趣味ってどんな趣味だい?!」

『ブツキーと普通に会話したいなー、って《霊廟の守護者》のジジイに頼んだら人型にし

てもらえたのよ』

「軽いな!ジジイも動機も軽いな!」

「ハツハツハツこんな見た目だから嫌うに嫌えなくてね?」

苦手なのか?実は苦手なのか?!そーいやあつちの頃は「《青眼》がメスなんだから《真紅眼》は絶対オスだな」とかいつてたっけ……

「……話が脱線しまくっていましたが、そろそろ本題へ。わざわざ誤解を招いてまで呼び出した理由を聞きましょうか」

「そうそう、君達なくんでシンクロとか使っちゃうかな?!平和な環境をエンジョイしたかったの!」

「あれ?ししよーってシンクロエクシーズ否定派だっけ」

「確かに俺ツエーがしたいタイプではありませんでしたが」

「別に否定はしないが……折角のデュエルアカデミアだよ?!低速な味わいのあるデュエルを期待してたのに君達が全部ぶっ壊してくれたんじゃないか!!」

「文句ならジュンコさんに言ってくださいまし、最初にクロノス教諭の前でシンクロかましたのはジュンコさんですので」

「フウン、なるほどなあ」

「ちよつとー、私だけのせいにする気?!その後大勢の前でエクシーズするハメになったのはアンタのせいでしょうが!!」

「Oh!それはとても興味深い話デース!!」

「どの道バレてしまつてからでは遅いんだよ?!もし海馬瀬戸辺りに目をつけられでもしたらどう説明するつもりだったんだい!」

『そうそう、少しは後先考えなよ』

「一応対策は二人で考えてましてね……つつーかー番自重してなかったのは誰だコラー!まずアンタ行方不明だったでしょうが!どっから湧いてきた!!」

「それはだね……」

「海馬ボーイ、呼ばれていますよ?」

「フウン……」

「……」

「「ええええええええ?!」」

「フフフフフ、アーツハツハツハツハツハツ!!」

《なんじゃあこの急展開は!!》

《僕も聞いていないんだがね．．．》

《生社長、素敵ですわ!!》

前略．．．人拐いに合い海馬コーポレーションに拉致られました

「フウン、なるほどなあ（2回目）、夏期休暇の間にその夏実左馬なる人物からカードが送られて来たと……」

「その中に、極秘開発中のシンクロモンスター・及び現状システム案だけの存在たるエクシーズモンスターが入っていたなんて……とても不思議な話デース」

「そ、そんなんですよ……」

「わたくし達もわけがわからなくて……」

「……（ジト目）」

『対策って……コレ?』

うっさいわねでつかい《真紅眼》!前世うんぬんとか信じてもらえるわけないし……とりあえず謎の人物からもらったしか案が浮かばなかったのよ!!あながち間違っはいいないし!

「それに貴様、天上院吹雪といったか。デュエルアカデミアの行方不明者リストに顔があつたが……どうやって戻ってきた」

「愚問ですね海馬社長殿、妹を寂しがらせてはいけないとゆう想いから……即ち、愛の力さ!!」

「ブツ!!」

『キヤーツ!流石はブツキー!!』

「ワアオ!愛で解決するなんて素晴らしいデース!!」

「貴様ア!真面目に答えんか!!」

「大真面目さ!!妹の明日香の為なら・・・例え火の中水の中土の中森の中、どんな闇の中からだろうが帰ってきてやりますとも!!」

拜啓、前世の友人・知人の皆様方へ・・・ししよーが転生したらシスコンにカオスエクシーズチェンジしました。あの無骨漢だったししよーはどこへ・・・

小声「一人ツ子だったらいいので妹出来て愛に目覚めたんですかね・・・ギャツプが尋常でないですわ」

「では逆に聞きましょうか!例えば貴方が弟さんの手の届かない所へ幽閉でもされたとする、弟さんは貴方のことを捜し続けている!さあどうします!?!」

「そんなものは決まっている!!例え地獄の底からだろうがペガサス城の牢獄の中だろうが意地でも這い出て来て凱旋してやるわ!!」

「さりげなく私にダメージを与えてくるのは流石デース、海馬ボーイ・・・」

「つまりは！そうゆうことです」

「フウン、中々骨のある奴のようだな・・・」

「か、会話が成立しましたわ」

「モウワケガワカラナイヨ・・・」

《クルツク》

「しかし貴様らのせいで極秘なハズの新召喚の情報が漏れてしまった、責任はとつてもらう！」

「そうデスね、いつそ開発チームに拉致して協力してもらいまショウ！」

会長さん拉致とか言い出しやがった?!あ、すでにされてたわ・・・

「ならばジュンコさん(君)を生け贄に捧げるっ」

「ふざけるなあ!私だけに責任押し付ける気か!!」

「だってジュンコさんが真っ先に使ってしまったし……」

「僕は(まだ)使っていないしね?」

「嫌よ!学園(つーか十代)から離れたくないわ!!」

「二途な想い……甘酸っぱいねえ。よし解った!ここはデュエルで勝ったら見逃してもらおう!」

「いまの会話でどうしてその結論にいたったのですか?!

唐突にデュエル脳的解決策出してきた?!

「いいだろう!貴様らごとき凡夫がこの俺に刃向かったこと……後悔させてくれるわあ!!!」

いいのかよ?!社長も大概デュエル脳だな!あと男はししよーだけです!

「会長さん、よろしいんですの?」

「ワタシとしては未開発のエクシードモンスターのサンプルは是非欲しいのですが……強制はしたくないのでOKデース」

「コツチもコツチで軽いなっ?！」

「ならばデュエルフィールドへ全速前進DA!!」

《DM第1話のあそこですね》

く 選手選出中く

「それで、誰がいくんですか？」

「当然ジュンコさん（君）」

「なんでよ！いい加減読者に「なんだまた

ブラックフェザー
「B F」

かよ」と言われるわよ?！」

「そんなこと言ったら僕は3話連続で《真紅眼》祭りだよ?もつと飽きられるじゃないか……」

「お二人とも、別のデツキという発想はないのでしょうか……」

「じゃーモモがいきなさいよ!」

「正直……面倒ですわ」

「うおい!!」

「身内漫才もいい加減にしろ小娘共!!誰が相手でも構わん、この俺が粉★砕してくれるわあ!!」

「海馬ボーイ絶好調デース」

「ボケ4人に対してツツコミが1人な空間に疲れたわ私……」

「わたくし今回はボケていませんわ!」

今回は、つて……普段は自覚あんのかいっ!

「しよがないなあジュンコ君は(ダミ声)……デュエル脳的解決策出したのは僕だし僕が行ってくるか、読者から苦情がきたら君達のせいだからねっ!」

「アンタの発言と行動が一番苦情の原因になりそうですか?!」

「メタ発言も大概にしやがれですわ!!」

「ほう、貴様が相手か……確か《真紅眼》の使い手だったな？ 凡骨と同じ貧★弱モンスターをエースにしている時点でたかがしれているわ!」

「あつヤベツ」

師匠へブチッ

「そうゆう貴方こそ、世界に3枚（爆笑）とかゆうレアカード使っておいて結局武藤遊戯には勝てなかったんですよね？ 所詮《青眼》ブルーアイズはパワーだけの単細胞とゆうわけですか……いや、使い手が悪いだけかもしれないねえ？ そう考えると《青眼》も可愛そうだ」

社長へブチブチッ★

「貴様ア！この俺だけならず、我が最強の僕たる青眼まで愚弄するか!!ただでは帰さんぞ!!!」

「先に煽ってきたのはそちらでしょう! 僕の真紅眼をコケにしておいて……許さないよ!!」

「なんか不穏な空気に……」

「頭に血が昇りきっているようですわね……正直どっちもどっちですわ」

「なんだか面白くなって来ました、双方頑張ってください」

「デュエル開始の宣言をしろ! 磯野オオオオオ!!」

あ、磯野さんいたの?!

「で、デュエル開始イイイイイ!!」

「デュエル!!!」

「俺のターツン! 《青き眼の乙女》召喚! フィールド魔法《光の霊堂》を発動し、《乙女》を対象に効果を発動!! デッキから、我が《青眼の白竜》を墓地へ送り対象の攻守を800アツプするが、それに誘発され《乙女》の効果により……現れよ、フルフェイス ホワイトドラゴン《青眼の白龍》

!!!」

『グワアアアオオオオ』

ふつつーに新規の奴使ってきたあ?!

次★回★予★告

「シン→クロ←召喚！見るがいい!!これが我が青眼の新たなる進化のカタチ！《青眼の
スピリット・ドラゴン
精霊龍》」

「ば、ばかな！シンクロ召喚だつて?!」

「フハハハハハ！全国のデュエリスト達の前に！まず！この俺が！自ら試さずにどう
するとゆうのだ!!!」

「海馬ボーイが楽しそうだなによりデース♪」

つてうおい!今回文字数少ないな!!これで終わりかよ手抜きか!
続きます!

11羽 私の経験上だが、真紅眼派は変人かシスコン・青眼派は変人かブラコンである

前回までのあらすじい！

拉致被害に合いました。

「フフフフアハハハハハハハ、ハーハツハツハツハツハア!! 平伏せ凡夫!! これが新たな力!」
ブルーアイズ・スピリットドラゴン
 《青眼の精霊龍》ダー!!」

《青眼の精霊龍》

シンクロ・効果モンスター

星9 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守3000

チューナー＋チューナー以外の「ブルーアイズ」モンスター1体以上

(1) : このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

お互いに2体以上のモンスターを同時に特殊召喚できない。

(2) : 1ターンの1度、墓地のカードの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にする。

(3) : S召喚したこのカードをリリースして発動できる。

エクストラデッキから「青眼の精霊龍」以外の

ドラゴン族・光属性のSモンスター1体を守備表示で特殊召喚する。

そのモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される。

この効果は相手ターンでも発動できる。

いや次回予告の所から始まってんじゃねーか！あのやろう（駄作者）文字数ケチりやがったな！！

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

社長 H 3

フィールド現状

《光の霊堂》

《青眼の精霊龍》(守)

セツトカード

「まさかそちらがシンクロしてくるなんてね……遠慮は一切要らないようだ！伝説に挑ませてもらう、僕のターン！」

「師匠も乗ってきましたわ！これはカオスな予感が……」

「（真正面から勝負したらギリ貧だ、だったら……）僕は手札から、レッドアイズ・フュージョン《真紅眼融合》を発動！我が友に宿れ迅雷の魔王よ！真の驚異となりて他をねじ伏せろ！！融合召喚！

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》！！」

『悪魔堕ちつてカッケーよな！え？そんなことない？』

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》（攻3200）

《真紅眼融合》

通常魔法

「真紅眼融合」は1ターンに1枚しか発動できず、

このカードを発動するターン、

自分はこのカードの効果以外ではモンスターを召喚・特殊召喚できない。

（1）：自分の手札・デッキ・フィールドから、

融合モンスターカードによって決められている融合素材モンスターを墓地へ送り、

「レッドアイズ」モンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を

エクストラデッキから融合召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターのカード名は「真紅眼の黒竜」として扱う。

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》

融合・効果モンスター

星9/闇属性/ドラゴン族/攻3200/守2500

レベル6「デーモン」通常モンスター+「レッドアイズ」通常モンスター

自分は「悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン」を1ターンに1度しか特殊召喚できない。

(1)：このカードが戦闘を行う場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。

(2)：融合召喚したこのカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、

自分の墓地の「レッドアイズ」通常モンスター1体を対象として発動できる。

墓地のそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

その後、そのモンスターをデッキに戻す。

「初手からそれかよー」

「Oh! 《真紅眼》の別の融合体とは」

「考えてることとやっつてることが違いますかね師匠……」

「《黒鋼竜》を装備してバトルフェイズ!」

「甘いわあ! 罨カード 《破壊輪》!! その悪魔堕ちを粉★碎」

「させない! 速効魔法 《禁じられた聖槍》! 彼女は破壊させないよ!!」

《悪魔竜》(攻3200↓3800↓2400)

「バトル続行! 《青眼の精霊龍》に攻撃へメテオ・フレア・オリジン!!」

「無駄な攻撃になんの意味がある!」

吹雪 LP4000↓3400

「フツ、意味は多アリさ! バトル終了後、墓地の《真紅眼》をデッキに戻しその攻撃力分のダメージを与える、つまり黒炎弾する!!」
2400ダメージ

「ぐおおおおお?! 貴様ア!」

海馬 LP4000↓1600

「メインフェイズ2! 《紅玉の宝札》! 《真紅眼の黒炎竜》を墓地へ送り2枚ドロ―しデッキからも《真紅眼の黒竜》を墓地へ!」
レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン

あいついつつも《超再生能力》か《紅玉の宝札》引いてるわね?

「通常運転ですわ、気にしたら負けです」

「ムムツ、《竜の渓谷》を発動！《カーボネドン》を捨て、デッキから《霊廟の守護者》を墓地へ！カードを1枚セットしてターンエンド！」

吹雪 H0

フィールド現状

《悪魔竜ーブラック・デーモンズ・ドラゴン》（攻）

+ 《黒鋼竜》

《竜の渓谷》

セットカード

《黒鋼竜》

効果モンスター

星1／闇属性／ドラゴン族／攻 600／守 600

（1）：自分メインフェイズに自分フィールドの

「レッドアイズ」モンスター1体を対象として発動できる。

自分の手札・フィールドからこのモンスターを

攻撃力600アップの装備カード扱いとしてその自分のモンスターに装備する。

(2)：このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「レッドアイズ」カード1枚を手札に加える。

《破壊輪》

通常罠

「破壊輪」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：相手ターンに、相手LPの数値以下の攻撃力を持つ

相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

その表側表示モンスターを破壊し、

自分はそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

その後、自分が受けたダメージと同じ数値分のダメージを相手に与える。

《禁じられた聖槍》

速攻魔法

(1)：フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターはターン終了時まで、攻撃力が800ダウンし、

このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

《竜の渓谷》

ワールド魔法

(1) : 1ターンの1度、自分メインフェイズに手札を1枚捨て、以下の効果から1つを選択して発動できる。

● デッキからレベル4以下の

「ドラグニティ」モンスター1体を手札に加える。

● デッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

さりげなく《光の霊堂》を破壊して自分の下準備もしたわね……(マスタールール2でやってます)

「けど真っ先に《真紅眼融合》したのが気になりますわね、《精霊龍》の墓地封じの影響でしょうか」

「《真紅眼》のニューカード！わくわくシマース!!」

「エンドフェイズに《青眼の精霊龍》効果発動！自信を贅に……EXデッキから《蒼眼の銀龍》を特殊召喚する!!」

『クオオオオオ!!』

《蒼眼の銀龍》

シンクロ・効果モンスター

星9 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守3000

チューナー+チューナー以外の通常モンスター1体以上

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合に発動する。

自分フィールドのドラゴン族モンスターは次のターンの終了時まで、

効果の対象にならず、効果では破壊されない。

(2) : 自分スタンバイフェイズ毎に自分の墓地の通常モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

「そして俺のタツーン！ 《蒼眼の銀龍》の効果により……蘇れ、《青眼の白龍》！！」

『グワアアアアア!!』

「クツ、だがまだ攻撃力はこちらが上だ！」

「まだだ！ 《ドラゴン目覚めの戦慄》!! ホワイト・オブ・レジエント 《伝説の白石》を捨て オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン 《青眼の亜白龍》

を2枚手札へ加えるっ！更に《白石》の効果により最後の《青眼》も手札へ加わる!!」

「亜白龍……」

「《亜白龍》は手札の《青眼》を相手に見せつけることにより、特殊召喚出来る!!」

『オオオオオオオオ・・・』

《ドラゴン・目覚めの旋律》

通常魔法

手札を1枚捨てて発動できる。

デッキから攻撃力が3000以上で守備力が2500以下のドラゴン族モンスターを2体まで手札に加える。

《伝説の白石》

チューナー

星1／光属性／ドラゴン族／攻 3000／守 2500

このカードが墓地へ送られた時、デッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

《青眼の亜白龍》

特殊召喚・効果モンスター

星8／光属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

このカードは通常召喚できない。

手札の「青眼の白龍」1体を相手に見せた場合に特殊召喚できる。

この方法による「青眼の亜白龍」の特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り「青眼の白龍」として扱う。

(2)：1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊する。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

めつちやドヤ顔で公開してたわね《青眼》。それはさておき、こっちはこっちで綺麗かも……《亜白龍》。

「《亜白龍》の効果発動！このターン攻撃を放棄する代わりに、貴様の《悪魔竜》を破壊する！《バニツシユ・バーストオ》！」

『うへえ?!』

「ただではやられないよ！永続罫リターン・オフ・レッドアイズ《真紅眼の鎧旋》!!フィールドに《レッドアイズ》モンスターがいる時、墓地の通常モンスターを復活出来る！」

「馬鹿め、レッドアイズモンスターなどどこにいるのだ!!」

「《真紅眼融合》で呼び出したモンスターは《真紅眼の黒竜》として扱うのさ！出番だよ《真紅眼の黒炎竜》！」

『ガアアアアアア!!』

「地味に初登場ですわね《黒炎竜》」

《真紅眼の黒炎竜》

デュアル・効果モンスター

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

- (1) : このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。
 (2) : フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できず。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に発動できる。

このカードの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

「真紅眼の黒炎竜」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

「なるほどなあ、だが《悪魔竜》が破壊されることに代わりはない! 消えろ!!」

『覚えてろコンニャロー!』

「彼女に装備されていた《黒鋼竜》の効果により、《レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜》が手札へ加わる!」

「《蒼眼の銀龍》を攻撃表示に変え、バトル！《黒炎竜》を攻撃！へグロリアス・バースト！！」

vs 《真紅眼の黒炎竜》（守2000）

「このツ、だけど《霊廟の守護者》はドラゴンが破壊された時特殊召喚できる！更に破壊されたのが通常モンスターだったので墓地の《真紅眼の黒竜》を回収もできる！！」

《霊廟の守護者》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻 0 / 守2100

「霊廟の守護者」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、

このカードは2体分のリリースにできる。

(2)：このカードが手札・墓地に存在し、

「霊廟の守護者」以外のフィールドの表側表示のドラゴン族モンスターが効果で墓地へ送られた場合、

または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

さらに墓地へ送られたモンスターが通常モンスターだった場合、自分の墓地のドラゴン族通常モンスター1体を選んで手札に加える事ができる。

「ならば《青眼》でその雑魚を粉砕する！へ滅びのバースト・ストリーム！！」

《青眼の白龍》（攻3000）vs《霊廟の守護者》（守2100）

「生へバースト・ストリーム！！ちよつと感動ですわ！！」

「まだだ！《銀龍の轟咆》！！墓地より2体目の《青眼》を特殊召喚する！へバースト・ストリーム！！第2ダア！！」

「グウウウウツ！！」

吹雪 LP3400↓400

「クククツ、ターン終了だ」

海馬 H3(1) LP1600

フィールド現状

《蒼眼の銀龍》（攻）

《青眼の亜白龍》（攻）

《青眼の白龍》(攻)

《青眼の白龍》(攻)

「流石は海馬ボーイ、4体の青眼とは壯観デース！」

「ふつくしい……ですわー！」

「アンタどつちの味方よ……私らの身柄がかかってんじやなかったっけ？」

生 《青眼》 大量に見れたんだから気持ちわかるけどねー、迫力凄エ。

さて我らが真紅眼馬鹿はどう立ち向かうのか……

「フフフフ、アツハツハツハツハツハツハッハッハッ！」

あ、あんれえ？ 笑い出したよあんにやろう

「オヤ？ 吹雪ボーイの様子が……」

「気でも触れましたかね？」

「フウン、あまりに絶望的な戦→力差の前におかしくなったか」

「絶望的？ 冗談！ 僕は今楽しいんですよ！ こうゆうデュエルがしたかったんだ!!」

「す、すいませくん、ししよー馬鹿なんで……」

「あとゲームなどになるとマゾ化しますわ、敵が強ければ強いほど燃えてくるのか……」

「Oh……チャレンジャー気質なのでですね、まるで旧き日の城之内ボーイデース」

そ、そうかな？ 所処似てたかもしれない……

「いくよ、僕のターン！ 2枚目の《紅玉の宝札》！ 回収した《真紅眼》を墓地に送り2枚ドローしてもひとつデッキから《黒炎竜》を墓地へ！ そして《金華猫》召喚！」

『ナア……』

「墓地のレベル1《黒鋼竜》を特殊召喚し、この2体を墓地に送って融合召喚！ 野獣の眼光し獰猛なる竜！ 《ビーストアイズ・ブラック・ドラゴン》!!」

『グオアアアアアア！』

※違います。気持ちわかるけども素材的に！

《金華猫》

スピリット・効果モンスター

星1／闇属性／獣族／攻 400／守 200

このカードは特殊召喚できない。

(1) : このカードが召喚・リバースした時、

自分の墓地のレベル1モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは除外される。

(2) : このカードが召喚・リバースしたターンのエンドフェイズに発動する。

このカードを持ち主の手札に戻す。

《ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》↑こつちが正解

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2000

ドラゴン族・闇属性モンスター+獣族モンスター

このカードは融合召喚及び以下の方法でのみ特殊召喚できる。

●自分フィールドの上記カードをリリースした場合に

エクストラデッキから特殊召喚できる(「融合」は必要としない)。

(1) : このカードが戦闘でモンスターを破壊した場合に発動する。

このカードの融合素材とした獣族モンスター1体の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

「ほう？攻撃力3000か、だが1体だけではもの足らんな」

「目的はこつちき！再び《黒鋼竜》の効果で《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》を手札に加える!!そして《ビーストアイズ》を除外して特殊召喚するよ!!」

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》

効果モンスター

星10／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守2400

(1)：このカードは自分フィールドの表側表示のドラゴン族モンスター1体を除外し、手札から特殊召喚できる。

(2)：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

『ブツキー、今アタシどうなってるの！悪魔化したままでいいのか!』

「しばらく、寝てなさい?《ダークネスメタル》の効果により墓地から《悪魔竜ブラック・デーモンズ》を……」

「させん!手札より《エフェクト・ヴェーラー》を捨て、効果を無効にする!!」

「げっ、意外なもん入れてら」

「《光の霊堂》があるくらいですからなんとなく予想はつきましたわ、社長様に対しては私^{転生者}たちの優位とか忘れた方が良さそうですわね」

「先の効果は不覚にも強力だったのでな、また出されては面倒だ」

「ムムム（金華猫にうたなかつたのは《ピーストアイズ》が予想外だったからか・・・）
《カーボネドン》の効果！墓地より除外しデッキから《真紅眼の黒竜》を特殊召喚する!!」

《カーボネドン》

効果モンスター

星3 / 地属性 / 恐竜族 / 攻 800 / 守 600

「カーボネドン」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが炎属性モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に発動する。

このカードの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ1000アップする。

(2)：自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外して発動できる。

手札・デッキからレベル7以下のドラゴン族の通常モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。

『じゃ、こつち入りまーす』

あの《真紅眼》どうゆう原理になってんだろ・・・前は2回融合したわくとか、自分に自分装備してるとか・・・わけがわからないよ

「世の中には、気にしたら負けって言葉もありましてよジュンコさん」

「そして《真紅眼の鎧旋》により《真紅眼の黒炎竜》を復活！《真紅眼の黒竜》とで・・・オーバーレイ!!」

おつ、使うんだ？

「我が友に宿れ！鋼の意志と情熱の炎！エクシーズ召喚！レッドアイズ・フレアマタルドラゴン《真紅眼の鋼炎竜》!!」

『一丁やったらー!!』

《真紅眼の鋼炎竜》

エクシーズ・効果モンスター

ランク7／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守2400

レベル7モンスター×2

(1)：X素材を持ったこのカードは効果では破壊されない。

(2)：X素材を持ったこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、

相手が魔法・罨・モンスターの効果を発動する度に相手に500ダメージを与える。
 (3)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、

自分の墓地の「レッドアイズ」通常モンスター1体を対象として発動できる。
 そのモンスターを特殊召喚する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「ワーオ！ 《真紅眼》のエクシーズモンスターとは!!ビューティフル!!美しいデース!!」

「ほほう? 思っていた以上に楽しめそうだ」

『えっ、あたし?! いやあく参るねえ〜』

いや、照れんなよ。

「《鋼炎竜》の効果発動! オーバーレイ・ユニット O U Rを1つ消費し、墓地の《真紅眼の黒竜》を復活! さ

らに《真紅眼の黒竜》を生け贄に、《真紅眼の闇竜》を特殊召喚!!」

『戻つといて!』

『グオオオオオオ!!』

「《闇竜》の攻撃力は、墓地のドラゴン族×300上昇する! 現在5体、よって攻撃力

は……」

《真紅眼の闇竜》(攻2400↓3900)

「攻撃力3900!!神と大差ない攻撃力だど?!」

「おっしやー!やっちゃえししよー!!」

「いくよ!《真紅眼の闇竜》で《青眼の亜白龍》を攻撃する!《ダークネス・ギガ・フレ
イム》!!」

「向かえ撃てエ!《滅びのバーン・スパニッシュ》!」

いや無茶言うなよ?!ただでやられるのが嫌なんです社長さん……

vs 《亜白龍》(攻3000)

海馬 LP1600↓700

「《ダークネスメタルドラゴン》で《蒼眼の銀龍》を攻撃!《ダークネスメタル・フレア》!!」

vs 《蒼眼の銀龍》(攻2500)

海馬 LP700↓400

「おのれエエ……この屈辱、忘れません!」

て、鉄壁だー?!お互いLP500ねーぞなんだコレ!

「師匠も社長も掠り傷すら許されない状況ですわね、ですが……」

「カードを1枚伏せてターンエンド……《真紅眼の鋼炎竜》は、ORUを持つ限り相手のカード効果の発動に対して500ダメージを与える。貴方はもうカードの発動が出来ない!」

『一回焼ければうちの勝ちだな!』

吹雪 LP400 HO

フィールド現状

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》(攻)

《真紅眼の鋼炎竜》(守・ORU)

《真紅眼の闇竜》(攻)

《竜の渓谷》

《真紅眼の鎧旋》

セットカード

「フウン。やるではないか凡夫!少しは見所があるとは思っていたが……まさか

《真紅眼》凡骨のエアスでこの俺をここまで追いつめるとはな!」

「《真紅眼》でとは少々引つ掛かる言い方ですが……買い被りすぎですよ社長殿。僕

はただ彼女が戦いやすい場を提供しているだけです」

「いや、アンタが真紅眼大好きなだけでしょうが（ですわ）」

「即答、ハモリ?!」

「愛されてマスね、吹雪ボーイ」

「だが、我が青眼には遠く及ばんことをここに証明してやるわ!!俺のターン!!カード効果が発動出来ぬのならこのままバトルだ!!《青眼》よ!目障りな《ダークネスメタルドラゴン》を葬れ!《バースト・ストリーム》!!」

「向かえ撃て!《ダークネスメタル・フレア》!」

いやだから無茶言うなよあんたら、攻撃力負けてつからね?!

「やつぱり、似た者同士かもしれないわね・・・」

vs 《ダークネスメタル・ドラゴン》(攻2800)

吹雪 LP400↓200

「まだまだっ!」

「続いて《鋼炎竜》へ《バースト・ストリーム》第2ダア!!」

「攻撃時に《鋼炎竜》の効果だ!最後のORUを消費して、《真紅眼の黒炎竜》を蘇生させる!!」

「構わん!そのまま攻撃だ!!」

『守備でやられるのは悔しいんだけど!』

v s 《鋼炎竜》(守2400)

「すまないね……ドラゴンが破壊されたのでまた《霊廟の守護者》を復活させるよ」「しぶとい奴め。確かに、スタイルは違うが凡骨の影がちらつくな?……これで《鋼炎竜》の制約は消え去った、何を使おうが自由となったわけだ。バトル終了!手札の《青眼の白龍》を見せ、《青眼の亜白龍》を再び特殊召喚!《闇竜》を葬り去れ!《バニツシュ・バースト》!!」

「《闇竜》までも……!」

「貴様は油断ならん。徹底的にやらせてもらう!《命削りの宝札》!手札が5枚になる様にドロウする!!」

うっわあ原作版だよ、ぶっ壊れえ……ですな?議長

「はい、全く持つてその通りです。つて読まれてる前提で葛藤するのやめてくださいと……」

「ンン、ユー達なんの話デスカ?」

「往くぞ!融合を発動!!フィールドと手札の3体の《青眼の白龍》を《融合》!!見るがい、そして!おののくがいい!これが史上最強にして華麗なる殺戮兵器の姿だ!!」

フルーアイズ・アルティメットドラゴン
 《青眼の究極竜》!!!」

『『ギヤオオオオオオオオ!!』』』

「これが……『青眼の究極竜』!!」

《青眼の究極竜》

融合モンスター

星12／光属性／ドラゴン族／攻4500／守3800

「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

ふつくしい……って一瞬本気で思ってしまったわ、まじド迫力ね生《究極竜》。こつ
 そり写メって十代への土産話に使おう……

パシヤツ、パシヤツ、パシヤツ、パシヤツ「ジユンコさん不謹慎ですわよ! 師匠がピ
 ンチだとゆうのに!!」

「おい……アンタの手に持つてるそれはなんだ。めっちゃパシヤパシヤ聞こえるんだ
 が」

コヤツ……連写してやがる

「本当に仲の良いガールズデース! 貴女達のデュエルもぜひ観たいデスネ」

マズイ！普段通りにしてるだけでターゲットにされるわ

「師匠負けないでよ！負けたらしばらく学園に帰してくれそうにないわよ、マジで!!」

「何イ！明日香と再会のハグもしていないのにそれは困る!!」

「動機が不純ですわ?!」

「何だと・・・貴様ア！最愛の妹と数年越しの再会を果たしたとゆうのに、ハグすら出来ていないとは何事だ！恥を知れえ!!」

「まさかの社長から駄目出し?!」

「そ、それは・・・正体明かしたのがデュエル直前つてのもあったし人前だったしその二人に急かされたし・・・」

「愚か者がア!!そんな小事は全て投げ捨てても駆けつけだきしめろ！それが真のきよ

うだ いだ！貴様の妹への愛はその程度だともゆうのか?!」

「エクセレント！流石は海馬ボーイ!!モクバボーイが聞いたら飛んで喜びそうデース!!」

「そ、そんな！僕は・・・明日香を愛せてはいなかったとでも?!ぐああああああああ!!」

『ブツキー駄目よ、騙されないで！これは貴方を惑わす罠カード《マインドクラッシュ》

よ!!』

「なんなの……この茶番」

「わたくし達、小事らしいですわ……しかしあの馬鹿には効果抜群だったようですね？ あんな表情初めて見ました」

てかモクバクン結構成長してるわよね？ 聞いたら顔真つ赤にして固まりそう……。

ISONO 「海外出張中で良かった、モクバ様……」

「もう良い！ 久方ぶりに少しは骨のあるデュエリストかと思つたが……貴様には欠片の可能性も残さん！ チューナーモンスターホワイト・オフ・エンシエント《太古の白石》を召喚!! 《亜白龍》とでチューニング!! 再びその美しき輝きで、我が戦いのロードを照せ！ シンクロ召喚！ 《青眼の精霊龍》!!」

『グオオオオオ!!』

「ま、また《精霊龍》！」

「しかも……《太古の白石》が墓地に！」

「フハハハァン。カードを2枚伏せエンドフェイス、《太古の白石》が墓地に送られたのでデッキより《ブルーアイズ》モンスターである……《白き霊龍》を特殊召喚させてもらうぞ」

「《白き靈龍》・・・不味い！」

「特殊召喚時の効果だ！《真紅眼の鎧旋》を除外する！《スピリチュアル・バニツシユ》！」

「チェーン発動！フィールドには《真紅眼の黒炎竜》が残っている！《真紅眼の黒竜》を特殊召喚!!」

『ま、まだまだあ・・・』

海馬 H0 LP400

フィールド現状

《青眼の究極竜》(攻)

《青眼の精霊龍》(守)

《白き靈龍》(守)

セットカード×2

《太古の白石》

チューナー・効果モンスター

星1／光属性／ドラゴン族／攻 600／守 500

「太古の白石」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。

デッキから「ブルーアイズ」モンスター1体を特殊召喚する。

(2)：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の

「ブルーアイズ」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

《白き霊龍》

効果モンスター

星8／光属性／ドラゴン族／攻2500／守2000

このカードはルール上「ブルーアイズ」カードとしても扱う。

(1)：このカードは手札・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

相手フィールドの魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

(3)：相手フィールドにモンスターが存在する場合、

このカードをリリースして発動できる。

手札から「青眼の白龍」1体を特殊召喚する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「僕のライフはまだ……残っている。だけど……」

「自分の愛が偽りだと気づいた今、もはや戦う気力もあるまい。サレンダーを認めてやっても良いぞ?」

「クソつ、所詮僕の愛では誰も救えないのか!」

『そんなことはないブツキー! 少なくともアタシはアンタの愛に救われた! 微妙だの青眼の劣化だの竜崎からの貰い妻だの言われ続けてポロポロなアタシを、アンタだけは見捨てなかつた!』

「《真紅眼》……」

『例えアンタの妹……ううん世界中がアンタの敵になつたとしても、アタシだけはブツキーの味方だよ?』

「そうか……そうだったな、ずっと君は隣に居てくれた! 最初は君の想いが重いだなんてくだらないこと考えてたけど、こんな惨めな僕をずっと支え続けてくれたんだね……ありがとう、《真紅眼》」

「……ももえもくん?」

「わたくしツツコミを諦めることにしましたわ、ジユンコさん頑張ってください」

「無理よ！なんか精霊と二人だけの世界作ってるもの!!てか会長さんとか社長さんも止めてよ！ハタから見たらソリッドビジョンに話しかけてる怪しい馬鹿じゃねーかあれ!!」

「ビューティフル！エクセレント！ワンダフォー!!モンスターとデュエリストの深い、深い絆！私とても感動シマシタ!!」

「うっそお?!会長さん精霊見えるんだ?じゃなくて、発言に問題だらけだろあの二人(?!!!)」

「フフフフ、アーハツハツハツハツハハア！面白い!!みせてみる、貴様とその《真紅眼》との絆とやらをなあ!!だがそれらを全て、この俺が……俺と《青眼》が粉★砕してくれるわあ!!」

『当然です、セト様!!』↑乙女IN墓地

「本日2度目の粉★砕！頂きました?!てか今しやべったのどいつよ！セト様つつたよな今!」

『何を今更……』

『アイツ鈍感だな?大丈夫かよ』

「ジункコ君のことは後回しだ、一人で勝手に盛り上つてくれるから放っておこうか？」
『は〜い』

『そういつたポジショニングなのですか、把握しました』

「あの小娘などどうでもいい！早くターンを進めろ!!」

「OK！僕の・・・ターン!!」

なんか納得いかない・・・私が悪いの？私のツツコミが問題だったの?!

「よし・・・まだチャンスはある！《七星の宝刀》！《黒炎竜》を除外して2枚ドロ
ー！」

《七星の宝刀》

通常魔法

「七星の宝刀」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：手札または自分フィールドの表側表示モンスターの中から、
レベル7モンスター1体を除外して発動できる。

自分はデッキから2枚ドロする。

「ファンタステイック！ まだまだ一波乱ありそうデース!!」

それエ．．．ハートランドの人も．．．。

「ジュンコさん、かつてないボケ祭で限界が近いですわね．．．」

「来たか！ 《儀式の下準備》を発動！ 《レッドアイズ・トランスマイグレーション》と、そこに記された《ロード・オブ・ザ・レッド》を手札に加える！」

《儀式の下準備》

通常魔法

「儀式の下準備」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：デッキから儀式魔法カード1枚を選び、

さらにその儀式魔法カードにカード名が記された

儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選ぶ。

そのカード2枚を手札に加える。

「その儀式魔法は．．．《儀式の下準備》にチェインする形で《青眼の精霊龍》の効果
を再び使う！ 現れよ《蒼眼の銀龍》!!」

『クオオウウウ』

「これで俺の《青眼》達は鉄壁の耐性を得るのだっ！」

「やはりわかつてしまうか……そう、僕は今！《レッドアイズ》と一つとなる！《レッドアイズ・トランスマイグレーション》を発動！墓地の《真紅眼の黒竜》とフィールドの《靈廟の守護者》を儀式的贄として……儀式召喚！！《ロード・オブ・ザ・レッド》！！」

「また自分でコスプレしおってからにー?!」

「あれって仕様なのですか？ペガサス会長」

「そんなつもりはなかったのデスが……城之内ボーイが格好よく使いこなしてくれて以来、あのスタイルが基本のようデース！」

大体城之内さんのせいだった……

「フウン、まさか自分でモンスターと一体化してくるとは見上げた根性だ。しかし！ソイツ……《お前》の効果はかなり厄介だが、《蒼眼の銀龍》の効果により我が青眼達には傷一つつけられん。攻撃力だけで見ると見たかだか2400の雑魚モンスター、あと一枚の手札でどうするつもりだ？」

「僕の最後の手札は……《ヘルモスの爪》!! フィールドの《真紅眼の黒竜》と融合する!!」

「馬鹿な?! 伝説の竜のカード! 貴様が何故それを……」

「あのカードはドーマの一件以来、完全に消滅したはずデース!」

『アタシがヘルモスに無茶言ったのさ……信頼するマスターに力を貸して欲しいってね!!』

え、そういうもんなの? 夏実^神佐馬^機運輸でなくて?

小声 「そういえば……原作に関わりそうなカード抜けていた気はしますわね、N
Oとかは普通に入っていたのですが」

小声 「そいや私も《ブラックフェザー・ドラゴン》は見た記憶ないわね、使いたかったのに……」

「ホウホウ……?」

「《ヘルモスの爪》に対しロード・オブ・ザ・レッド 僕 《》の効果が起動する! 左側のセットカードを破壊する! 《灼熱のバーン・ストライク》!!」

「グウ、《防御輪》が破壊されたか……」

「そしてヘルモスの効果により《真紅眼の黒竜剣》を特殊召喚し《僕自身》に装備する！この剣はまず攻撃力を1000アップ！そしてお互いのフィールド、墓地のドラゴン族の数×500ポイント追加で攻撃力を上昇させる！」

「何イ！俺のフィールド・墓地にはドラゴン族が10体!!」

「僕のフィールド・墓地にも10体！よって……」

？

《ロード・オブ・ザ・レッド》(攻2400↓3400↓13400)

「攻撃力13400だ?!」

「凄……凄……凄……《真紅眼》コスプレして《真紅眼の黒竜剣》装備したあのスタイルには誰もつつこまないのか……何も知らない奴が見たら大爆笑だぞどうなつてんの。」

「ジュンコさん無茶ですわ、これ以上ツツコミを続けたら貴女の身がもちません！」

「いくぞ！《真紅眼》!!《青眼の究極竜》に攻撃する!!」

『おうともさー!』

『ハアアアアアア!!』

なんか剣構えて叫び出したあ?!

「『気高き紅蓮の炎よ!!』」

「火の鳥?!鳥のようにみえますわ!!」

「『焼き尽くせ!へ鳳凰天翔?へ!!!』」

やっぱり●ルズネタに走るんかい!今回自重してたと思つたのに!!

「ふうん・・・貴様の《真紅眼》と供に歩む覚悟だけは認めてやろう」

「社長にまで馬鹿が感染した?!」

「元から師匠と同類の匂いを出してましたわ!」

「ハツハー、毒舌ですねももえガールは」

「だが最後に勝つのは・・・この俺だ!罨発動《無謀な欲張り》!デツキから2枚ドロ―する!!」

「ドロ―カードですって!?!」

ま、まさかねー……

「ククク、引いたぞ……。《オネスト》をなア!!このカードを手札より捨て、貴様の攻撃力を《究極竜》に加算してやるわっ!!」

「そんな……。馬鹿な!!」

《オネスト》

効果モンスター

星4／光属性／天使族／攻1100／守1900

(1)：自分メインフェイズに発動できる。

フィールドの表側表示のこのカードを手札に戻す。

(2)：自分の光属性モンスターが

戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、

このカードを手札から墓地へ送って発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、

戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする。

現ジャックさんきたあ!?!・・・つて精霊宿つてるわけではないか、つーか師匠つてあの辺りの記憶どーなってるんだろ? 地味に気になる。

《青眼の究極竜》(攻4500↓17900)

「攻撃力17900!! スプレンドイツト!!」

「貴様ごと返り討ちにしてくれる! 碎け散れ!! <アルティメット・バースト>!!」

「グワアアアアアアアアアアアアアア?!!」

『ウワアアアアアアアアアアアアアア?!!』

吹雪 LP200↓4300

WIN 海馬

「強靱! 無敵! 最強オ!!」

「し、ししよー・・・だいじよぶ?」

吹雪へチーン・・・

真紅眼へチーン・・・

「駄目ですわ意識が無い。自分ごと派手に突っ込んでいったから無理もないですが」

「粉碎★玉砕★大喝采!!フッフッフ、ハハハハハハハ!!アハッハッハッハッハ
ハア!!!」

「見事でした海馬ボーイ、これで彼等を正式に拉致監禁・・・じゃなくて雇うことができ
きマースね!」

し、しまった、逃げれる空気でないわ!

小声「師匠がぶっ飛んでたせいで忘れてましたわ、しかも拉致監禁って聞こえました
し・・・」

「ま、負けたのはししょー一人だし!? 私達は帰っても・・・イイデスヨネ?」

「フウン、あの様子ではしばらく使いものにならん。代わりに小娘共に所持している
カードの情報提供、まずはデュエルで我々に丸裸になるまでデータを採らせてもらおう
か!ペガサス!ここは好きに使え!!」

「サンキューです海馬ボーイ!カモン!マイブラザー月行&夜行!!彼女達をデュエルで
拘束しなサーイ!!」

「了解ですペガサス様!!」

なんか風魔忍者兄弟っぽいノリで出てきた?! Rの人達だ!

「いやああああ?! ししよーの馬鹿ああああ!!」

「こーなったらヤケですわ! デュエルで相手の意識を刈り取れば逃げ出せるハズです!!」

「どんな物騒なデュエル脳?!」

「フフ、威勢のいいお嬢さんだ」

「我らペガサス様の懐刀! 例え君達が未知のカードを使おうとも、そうやすやすとはやられはしない!!」

「モモお! 余計なこと言つて火イ付けるなあ!! あーもう帰りたい……十代助けてえく!!」

「ハツハツハー、逃がしませ〜ン!」

「「デュエル!!」」

・ ・ ・ ・ 結局、1週間以上かえしてもらえませんでした。

つづくと

12羽 真のヒロインとは、ヒーローが助けてくれるまで微動だにしないモノである

前回までのあらすじい……

粉碎★玉砕★大喝采。

「あゝ……いぎがえる……」

「ヨミガエルう……まちガエルう……引きガエルう……《マスドライバー》……」

「ふ、二人とも重傷ね？」

突然ですが……デュエルアカデミア女子寮のお風呂内部よりお送りします。師匠がへアルティメット・バーストオ!!!で散ってから約10日、私ともえもんは権力者達に拘束されデータをとるって名目でただひたすらにデュエルに明け暮れる結果となったのだあゝ。ようやく闇次元の解放されて学園に帰ってきたら夜。心身共に疲れはてた私達はとりあえず疲れを癒すために夕飯がつついて風呂にダイビング祭りして、

今此処にいたりまする。

「だつてく……あの入容赦ないんだよ……容赦なくボケまくるんだよ……」
「ツツコミがジュンコさんだけでしたものね……まさか会長様の側近お二方まで天然かましてくるとは予想外でしたわ」

しかも双子コントだぜ……社長がその場を去つてもツツコミ切れなかつたわ。ししょー復活したあと一度過労で倒れたくらいだからね？私。

「デュエルで疲れたんじゃないの?!なにをしに行つたのよ貴女達!!」

「フフフフ、今度拉致られる時は明日香も道連れよ。ももえすらボケを遠慮する混沌を体験させてあげるわ……」

「うっかりシンク口渡した友人がいるって紹介しましたからね……翔君と明日香様、ジュンコさんの三段構えでいきましよう」

「おまつ……ちやつかりあつちに回る気だな、この裏切り者オ！」

「待つてくれきりゅー！俺は裏切つてなんかいない！」

「と、とりあえず大変そうだったのは理解したわ。ところで兄さんは？何故か一所に連

れていかれたのでしょうか？」

「え、えっとー」

「会長様達にすっかり気に入られてしましまして、アメリカまで連行されていきましましたわ」

「嘘っ?! 兄さん何やらかしたのよ!!」

実はこれは嘘である、連日のデュエル祭りに限界を向かえた私達を見かねた師匠が「僕が残るから二人は解放してやって欲しい」と言い出したのだ。どうにか聞き入れられたので私達は解放してもらえましたが、しししょー……あんたのことは忘れないわ。まあ「弟子の不始末を正すのも師匠の役目だ。折角だし、こちらの環境を出来る限りぶっ壊さないように口出ししなくってやるさ」とか親指立てながらぬかしたので大丈夫だろう。

「まあ、どうせ留年は確定だからちよつとくらいいいなくても平気とかいってましたし」「会長に携帯買ってもらって「毎日明日香にラブコールするよっ!」とか言ってたから、あがったら確認してみたら? メールは1日10回までにしとけつといたけど」

「10回もくるのね……それより、二人は兄さんのこと《師匠》とか言って随分親し

げに話してたようだけど。いつの間にそんな仲になつていたの？」

げっ、ついに聞かれてしまった！どうするモモ!!

「……中等部1年の頃、デュエルに全然勝てなかつたわたくし達をこつそり指導してくれたのが吹雪様なのですわ。「僕はすぐ卒業だから妹を頼むよ」と。お陰様で随分とデュエルに強くなれましたの、師匠と呼ぶのはその頃のなごりですわ」

流石はモモ！私に出来ない嘘を平然とかましてみせる、そこに痺れる憧れるう!!

「兄さんにそんな甲斐性があつたなんて。でもあの頃二人とも……言い方悪いけどそんなにデュエル強かつたイメージじゃなかつただけど」

「そ、それは」

「そんなことよりい！うちらが居ない間、なんか変わったことなかつた?！」

「え?!う、うーん……今日万丈目君が、三沢君と寮の入れ換えデュエルをして敗北したくらいかしら」

ザッバア「なっなんだってー?!」

「なんですって?!」

「ど、どうしたのよ二人共!!」

「どうしたもこうしたもないわ!」

「のんびり湯治してる場合じゃありませんわ!!では明日香様、おやすみなさいまし!!」
「また明日ねっ!!」

ポツン「え、えー．．．」

《さらばだ、デュエルアカデミア．．．》

《何て言うと思ったか!お前はまだまだだ!!》

《?!》

翌日、万丈目君を探しにいくと言って授業を脱出した十代と翔君をつけていった私達から。

「十代！授業さぼって何をしているの？」

「げっ、明日香！と・・・ジュンコ!!」

「ジュンコさん、帰って来てたんスね？」

「何よ？私が帰って来てちやわる・・・」

「うおっ!!ジュンコオっ!!」

へ？

十代へギョッ

「この感触！ほっそりしてんだけどどこかやんわりしてて・・・なんかくせになるこの感触！本物のジュンコだ!!」

「そうそうパツと見スラツとしてんだけど芯はがっしりしてるこの十代の・・・ってあほおほおほお!!再会早々何すんよアンタは!!」

十代、は、ハグを使った！

ジュンコは、混乱、している!!

「わ、悪い悪い。久々にジュンコの顔見たらジつとしてらんなくてさく！すっげー心配したんだぜ?!」

「ぐぬぬぬぬぬぬぬ」

「明日香さん、怖いッス」

「心配されるようなことは一切なかったのっ！いい加減離しなさいよッス……」

「えー、久々のこの感触をもっと楽しみたいのに……」

「私をなんだと思ってるのよ！そんなくせになるほど触らした記憶はないわ!!」

「ばーろー私の理性が吹っ飛ぶわ！人の見てない所でお願いします!!じゃなくて！

「ジュンコさん顔がにやけてるッスよ……」

「ウオッホン!!……じゅくだい？今ここにいる目的はなんだったかしら？」

怖っ?!明日香怖!!だがこのポジションは譲らん!

パツ「おつと、そうだったそうだった。万丈目を探しに行くんだったな、再会がうれしくてすっかり忘れてたぜ」

チツ「そうそう、ちやつちやつといくわよ!その為にわざわざ授業脱け出して来たんだから」

「そうツスね、あれ?そういえばももえさんはドコに?ジュンコさんがいるなら一緒に思ったのに」

「そういえば……あのコも朝から見えないわねえ、ジュンコと昨日張り切ってたけど何か知ってる?」

「え、全然……」

PDAへ♪そく之舟エを漕いで逝けエ〜♪

「あ、メールだ。この着信音はモモからね」

「なんで着信音ソラ●ネ?!」

えー、なにになに?

「ちよつと駆け落ちしてきますわ。ジュンコさんはジュンコさんで頑張ってくださいまし

(^o^)/byももえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ももえ、何だつて？」

「何やつとんじゃおのれはー!!!」

「うおつ?!びつくりした〜!」

アホか!「ちよつと駆け落ちしてきます!」じゃねーよ自由過ぎだろ!!これ万丈目君に無理矢理ついてったパターンでしょーがいい迷惑だろ!!

「フウ・・・・・・・・ちよつと体調悪いから休むってさ」

「いや、明らかに体調不良に対するツツコミじゃなかったよな」

「世の中にはね、気にしない方がいいこともあるのよ?」

「よーするに探るなってことツスね・・・・・・・・」

「まーいいわ、ほつといて万丈目君探しましょう?」

そうそう、それでいいのだ。そうしてくれないと私の計画が・・・・・・・・

《計画って？》

《ああ！》

「万丈目く〜ん!!」

「お〜い万丈目〜隠れていで出てこいよー!!」

「万丈君! デュエルに負けたくらいで雲隠れなんて情けないわよ!!」

「よ、容赦ね〜・・・」

その時! 近く茂みから物音が!!

「万丈目か?!」

「いや、野生動物かよ万丈目君・・・」

「ウキキー!!」

「さ、猿ウ?!」

「サルね」

「さっさと禁止になれ! 腐れエンタメ猿ウ!!」
EMモンキーボード

「ジュンコ、何言ってるんだ?」

野生?のSALが現れた! 色んな機器装備してる時点で野生には見えんか・・・お察しの通り、今日はSAL回の日である。ぶっちゃけ原作知識(笑)とかもうかなり曖昧だけど・・・私、枕田ジュンコが公式で十代に助けられるという一大イベントのため鮮明に覚えていたのだ!! この時の為に昨日から準備しといたのよ、さあサル! どっからでもかかってらっしゃい!!

「ウキキー!!」

「キャア?! 何すんのよ! (棒)」

「じ、ジュンコオ!?!」

「あの猿、ジュンコさんを持ち上げたっス! 凄い力だ!!」

「ツツコむ所はそこじゃないわ翔君! 待ちなさいサル! ジュンコは危ないから誘拐する

なら翔君にしときなさいよ!!」

「ウキキ?!」

「それどーゆー意味よ明日香ア!十代助けて〜!!」

「ジュンコ、ジュンコオオオオ!!」

クククククク、自然な流れで誘拐されることに成功したわね?流石は私。あとは捕らわれのヒロイン感を演出するだけよ!

「ジュンコ……」

「十代!ぼさつとしてないで追いかけるわよ!」

「そうっすよアニキ!早くしないとサルがえらい目に逢わされるよ!動物虐待だよ!!」

「そうだな……あのサル、折角再会出来たジュンコを俺の前から連れ去るなんて……」

「じ、十代?」

「ただじゃ済まさねえ……!!」

《ぶっ壊しても！ぶっ壊しても!!》

しつかしこのサル、翔君も言ってたけど力凄いわねー。私の体重よんじゆ・・・ゲ
フンゲフン、そこそこ軽いとはいえ持ち上げたままこんな軽快に動き回れるなんて。

『ジュンコ殿余裕ですな・・・』

「あ、ライキリじゃん。なんか久しぶり？大丈夫よ、十代がすぐ助けにくるから」

「ウキキ？」

『つまり我には手を出すなよと・・・』

「わかってんなら宜しい、てか物理的に干渉とか出来るの？アンタら」

猿手へムニツ

「つてギアアアアアアアア?!どこ触ってんだこのエロ猿ウウウウウ!!」

「ウツギヤアア?!」

猿LP4000↓0

Win ジュンコ

『か、かかと落とし……』

《さ、猿撃破!?!》

「全く、アンタって奴はレデイの扱いが全くなつてないわねえ……誘拐するならするで、もつと丁寧な扱いなさいよ!」

正座「ウキイ……」

「ウキイ、じゃない!反省してんのかエロ猿!!」

「ウギギ?!」

『さ、猿に説教しておられる……』

「あーもううちがあかないわね!ちよつとライキリー?通訳しなさいよ通訳!何言つてんだかさつぱりだわ」

『いやジュンコ殿、流石に我も猿の言語はちよつと……』

「はあ?猿、犬、鳥はズつ友でしょーが。動物は精霊と心通じやすいとか言つてた氣イするしくなんとかなるわよ」

『そんな桃?郎規準で考えられても……まあ挑戦はしてみます』

「わかりやーいいのよ、頑張つてね♪じゃーアンタ、なんで私を誘拐したの?他にも女子

は二人いたのに」

『(し、翔殿が女子にカウントされている……!~)』

「ウキイ、ウキキイー!ウキツ!!」

『えーなになに?小さいのは自分の好みじゃなかった。金髪は自分より大きすぎて扱える自信がなかった。人質として貴女が一番丁度良かった』

「丁度良さで選ばれたわけ?猿の好みとかどうでもいいけどムカつくわね……つてか普通に通訳出来てんじゃん」

『なんとかファイリングとボディーランケージで……』

「ふーん、やるじゃん。人質を取ってまで逃げ出したかったわけね?何かから」

『そうですウキイ……』

まあ、動物実験を仕掛ける研究所からってのは知ってるけども。細かいことは忘れた、私の管轄外だ。

「なら私はアンタに協力してあげる」

『ちよつ、ジュンコ殿?!』

「ウッキキキキ?!」
ほっほんとうですか

「アンタはデュエルが出来るのよね? 私のピンチを演出し! あとから来る私の友人と、このカード達をデッキに入れてデュエルしなさい!」

なっなんですとお
「キツキイ!?!」

フフフフフ、頑張ってもらおうわよお猿さん? 私がヒロインとして輝く為に……。

《ひ、ヒロインはそんな腹黒い笑いはしないかと思われまする……》

なんやかんやで崖つぷち (GX本編13話参照)

「追い詰めたぞサル! ジュンコを離せ!」

「そうだ! 早くしないと痛い目に遭うぞ!!」

「あれ? あの猿の頭にタン瘤があるような」

「ごちやごちや言っで早く助けてよ〜!!」

すでに痛い目逢わせてたりして……

「あつ、あのサルデュエルディスクしてる！」

● 博士登場

L A S

のくんだり

●

「なら、俺とデュエルしろ!!俺が勝ったらジュンコは返してもらおう!!」

「負けたら?」

「……好きにしろ、その研究員にも手は出させない」

「ウキ」

あれっ、十代がちよつと怖いような……怒ってる?って逃げ出さないように崖っ

ぶちの細木に座らせるのやめてくださいリアル怖いです。

「いくぞサル！懺悔の用意は出来ているか!!」

「『デュエル!!』」

「先行はもらったあ！ドロー!!」

「アニキ、なんか余裕ないツスね？」

「むう……」

「《バブルマン》召喚！2枚ドロー!! 《沼地の魔神王》を捨て、融合を手札に加えて発動!! 手札の《シャドーミスト》と融合!! 来い！蒼ざめし永久氷結の使徒！《E・HERO

アブソルートZero》!!」

『せやあッ!!』

《E・HERO アブソルートZero》

融合・効果モンスター

星8／水属性／戦士族／攻2500／守2000

「HERO」と名のついたモンスター＋水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する

「E・HERO アブソルートZero」以外の

水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

要するに鬼畜である。

い、いきなりZeroですか十代さん。動物相手に容赦ないわね……。それだけ私を助けたらいいことではOK? 思い込みかなあ。

「《シャドーミスト》の効果で《エアーマン》を加え、カードを2枚伏せてターンエンドだ!!」

十代 H4

フィールド現状

《アブソルートZero》(攻)

セットカード×2

『私ノターン、ドローー!!』

「シヤベツタアア?!」

博士エへ「フハハハハハ! デュエルに関する原語はインプットしてあるのだよ!!」

もつと力を注ぐべきポイントは他にあつたのでは……いや、あえて何も言うまい。今の私はヒーローの助けを待つ、捕らわれのヒロインなのだから! (願望)

『私ハ、《天使の施し》ヲ発動。3枚ドロシー2枚捨テル。永続魔法《一族の結束》ヲ発動、ソシテ《魔獣の懐柔》ヲ発動!!』

「ム? あんなカードらを、デツキに組み込んだ覚えはないが……」

「《魔獣の懐柔》……知ってる? 翔君」

「いえ、さっぱりっス」

『相手フィールドノミモンスターガ存在スル場合、デツキカラ獣族・レベル2以下のモンスターヲ3体特殊召喚デキル!! 《おとぼけオポッサム》《スレイブ・エイブ》《ダーク砂バク》ヲ召喚!!』

「な、なんじゃそりゃー?! 強くないッスかそれ!!」

《魔獣の懐柔》

通常魔法

(1)：自分フィールドにモンスターが存在しない場合に発動できる。

カード名が異なるレベル2以下の獣族の

効果モンスター3体をデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、

エンドフェイズに破壊される。

このカードの発動後、ターン終了時まで

自分は獣族以外のモンスターを特殊召喚できない。

ごめん、私類人猿系モンスターあんまり持ってなかったのよ・・・改造がシンプルでごめん。頑張れ猿！十代を追い詰めるくらいの気合いを見せて見なさい!!

『《おとぼけオポッサム》ト《ダーク砂バク》ヲ生ケ贄ニシテ、《エンシエント・クリムゾン・エイプ》召喚!!《一族の結束》ノ効果ニヨリ、攻撃力が800ポイントアップスル!!』

『ウツホアアアアアアアアア!!』

《エンシエント・クリムゾン・エイプ》

効果モンスター

星7 / 光属性 / 獣族 / 攻2600 ↓ (3400) / 守1800

自分フィールド上に存在するモンスターが

破壊され墓地へ送られた時、自分は1000ライフポイント回復する。

「攻撃力3400?! 最上級モンスターをこんな簡単に!」

「素晴らしい! まさか我がSALにこんな実力が隠されていたとは!!」

『バトルフェイズ! 《エンシエント・クリムゾン・エイプ》デ・・・』

「面倒だ、リバースオープン! 《亜空間物質転送装置》! 《アブソルートZero》をゲムから除外する!!」

『ピピッ! 自ラカラムンスターを除外? 理解不能、理解不能』

意外ね、こりやまたなっつかしいコンボを・・・モモがよくやってきたっけ。

《亜空間物質転送装置》

通常罨

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

「この瞬間《アブソルトZero》の効果が発動！フィールドを離れたことで相手モンスター全てを破壊する!!ヘインブレンス・エンド<!!」

『?!』

「出たあ！《Zero》のインチキ効果ツス!!」

「あれ本当に鬼畜よね、条件緩すぎないかしら」

猿！氷塊に死す!!ってそう簡単な話じゃないのよねえこれが・・・

崖下スタンバイ『ジュンコ殿？あまり楽しそうだと演技だとばれますぞ』

『獣族モンスターが破壊サレタ時、ライフヲ10000ハライ墓地ヨリ《森ノ番人グリーン・バブーン》特殊召喚!!』

『オーオ、オー!!』

SAL LP4000↓3000

《森の番人グリーン・バブーン》

効果モンスター

星7／地属性／獣族／攻2600↓(3400)／守1800

(1)：このカードが手札・墓地に存在し、

自分フィールドの表側表示の獣族モンスターが効果で破壊され墓地へ送られた時、

1000LPを払って発動できる。

このカードを特殊召喚する。

「ツ！《天使の施し》で捨てていたモンスターか！」

『バトル続行、相手プレイヤーにダイレクトアタック』

「グアツ……!!」

十代 LP4000↓600

「あ、アニキ……猿なんかには負けないよね？」

「十代！しっかりなさい!!」

『リバースカードヲ2枚セット、ターンエンド』

「……エンドフェイズに、《アソルルートZero》は戻ってくる」

SAL H1 LP3000

フィールド現状

《グリーン・バブーン》(攻)

《一族の結束》

セットカード×2

「もう、終わりか？」

『??』

「だったら終わらせる！俺のターン！リバースカードオープン！《リビングデッドの呼び声》！《シャドーミスト》を特殊召喚！そして《エアーマン》召喚！！」

『ハアツ!!』

「召喚に成功した時、第2の効果を発動。フィールドの《エアーマン》以外のHERO数だけ、貴様のセットカード2枚を破壊する!!へエア・ブレイド<!!」

『ピピツ！《バーサーキング》・《次元幽閉》ガ破壊サレル!!』

「《サルベージ》！《沼地の魔神王》と《バブルマン》を回収!!再び《魔神王》で《融合》

をサーチする！《シャドーミスト》と《バブルマン》で《融合》!! 暗黒の淵よりいでよ
 《E・HERO エスクリダオ》!!」

『墮チヨ・・・』

《E・HERO エスクリダオ》

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HERO」と名のついたモンスター+闇属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する

「E・HERO」と名のついたモンスターの数×100ポイントアップする

「ただだあ! 《シャドーミスト》で《ネクロダークマン》をサーチ! 《融合回収》!! 《バブルマン》と《融合》回収! 《融合》! 《エアーマン》《ネクロダークマン》融合!! 風神
 招来! 《E・HERO Great TORNADO》! 召喚時に相手モンスターすべ
 ての攻守を半分に! 《タウン・バースト》!!」

『セイヤアアア!!』

《グリーン・バブーン》(攻3400↓1700)

「《エスクリダオ》は墓地の《E・HERO》の数×100ポイント攻撃力がアップする
〈ダーク・コンセイトレイション〉!」

《エスクリダオ》(攻2500↓2900)

『上級融合モンスター3体!危険!危険!』

「アニキ・・・凄いつス!!」

「リバースカードも無し、モンスターの総攻撃力も圧倒的・・・決まったかしら」

「むう、捕獲の為だ仕方ないな」

「覚悟は出来たか・・・バトル!!《アブソルutzer》で《グリーン・バブーン》
を攻撃!Freezing^瞬 at^水 moment^結!!」

vs 《グリーン・バブーン》(攻1700)

『ウボオオオオオ・・・』

『!!?』

SAL LP3000↓2200

結局瞬殺かー、味気ないけど仕方ないわね。ライフは追い詰めたしよしとしましよ、御愁傷様！

『手札カラ《森の狩人イエロー・バブーン》効果発動！墓地ノ《ダーク砂バク》《スレイブ・エイプ》ヲ除外シ《イエロー・バブーン》特殊召喚!!』

『ウツホウツホオ!』

「なんだと?!」

まじで?!思ってたより粘るわね……

《森の狩人イエロー・バブーン》

効果モンスター

星7／地属性／獣族／攻2600↓(3400)／守1800

自分フィールド上に存在する獣族モンスターが

戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分の墓地に存在する獣族モンスター2体をゲームから除外する事で、

このカードを手札から特殊召喚する。

『サラニ除外サレタ《ダーク砂バク》効果！墓地カラ《森の聖獣カラントーサ》ヲ特殊召喚！！』

『キュキュキュツ！！』

あえて言わせてもらおうわ！可愛い、まじ可愛い。

『コノモンスターガ獣族ノ効果デ特殊召喚サレタ時、相手カードヲ破壊スル！《エスクリダオ》ヲ破壊！！』

「んなつ?!あのサル、見た目と違って渋いコンボを！」

《ダーク砂バク》

効果モンスター

星2 / 地属性 / 獣族 / 攻1100 / 守 300

このカードがゲームから除外された時、

自分の墓地に存在するレベル4以下の

獣族モンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

《森もりの聖獣 カラントーサ》

効果モンスター

星2 / 地属性 / 獣族 / 攻 2000 / 守 1400

このカードが獣族モンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、フィールド上のカード1枚を選択して破壊できる。

「いい加減……目障りだ!! さっさとジュンコを返してもらおう! 速攻魔法《瞬間融合》!! 破壊対象の《エスクリダオ》と《アブソルートZero》を融合!! 2体目の《アブソルートZero》!! そして《Zero》がフィールドを離れたことで、再びお前のモンスターを全て凍結させる!!」

あ、あれ……《アブソルートZero》2枚も渡したっけ?

『ピピッ?! シカシ、再ビ《グリーン・バブーン》ノ効果! ライフ10000ハラツテ復活!!』

『グギヤアオオオオ!』

SAL LP2200↓1200

《グリーン・バブーン》(攻3400)

「速攻魔法《融合解除》!! 《Zero》を融合デッキに戻す!! 何度でも出てくるなら、何

度でも破壊してやる！凍り付けヘインブレンス・エンド！！」

『ウ、キ……』

「万策尽きたようだな……終わりだ！《Great TORNADO》のダイレクトアタック！〈スーパーセル〉！！」

『キイイイイイイイ？！』

SAL LP1200↓0

WIN 十代

「俺の勝ちだ。約束通りジュンコを返しな」

「ウキイ……」

「早くしろ！！」

猿つたら怯えちやってるわ、無理もないかも……あんなに怒ってる十代初めて見たわ。

「もういい、自分でやる。……ほらジュンコ、手エ伸ばしな？」

「う、うん……」

「手が震えてるな。そんなに怖かったのかよ、もう大丈夫だぜ？」

いやその、貴方が怖かったんですけど・・・なんて言えないわよね。

「では約束通り、SALは我々が連れて帰るぞ」

「好きにしろよ。そんな奴さつきと俺の前から消してくれ」

「ち、ちよつと待つてよ！」

「？」

また連れ戻すなんて可哀想、なんて言えないし・・・

「ウキイ」

「ウキツ」

「ウキツキー」

「こいつらは?!」

「仲間がいたんスか？」

「皆の所へ帰ってたかっただけなのね」

お仲間達登場！これで十代も事情を察して・・・

「・・・知ったことかよ」

「えっ？」

「人の大事な仲間を連れ去ってにおいて、自分は仲間の元へ帰りたかったただけだった？都合が良すぎるんじゃないか？」

「そ、そんな言い方ないんじゃない?!」

「真っ直ぐに仲間の元に向かえば良かったんだ！ジュンコを危険な目に合わせる必要はなかった!!」

「それは、そうだけど・・・」

「なんで猿なんかの肩持つんだ。情でも移ったのか?・・・あんな目にあつたのによ」

「アンタこそ・・・なんでそんなに怒ってるのよ。今日の十代おかしいわ」

「俺は！お前が心配で!!」

「ツ！だからって・・・」

「ちよ、ちよつと二人共?!」

「喧嘩は止めるッス！」

「なにやら揉めているようだが・・・何、このSALに寂しい思いはさせんさ。お仲間も全員ひとつとらえてやれ！研究材料は多いに越したことはないからなあ!!」

「はっ！」

黒服達が銃口を猿達に向ける、十代は我関せずの態度だ。

「やっ、やめなさいよ！」

「フアラオ〜？」

「ナアー!!」

「ぐわっ?!なんだこの猫!!」

「フアラオ?!」

「だ、大徳寺先生！」

猫パンチ強っ?!助かった、てか先生地味に初登場ね。

その後、なんやかんやで先生が博士達を説得（脅し）して、SALは無事野生解放されることになったのだけど……

「元気でねー！」

「もう捕まるんじゃないツスよー!!」

「……フン」

「ムウ……」

「な、なんだか険悪なムードですニヤ？」

「別に？」

皆が猿を笑顔で見送る中、私と十代だけこんな感じである。はあ、どうしてこうなっちゃったんだろ。ただ助けてもらえるだけで良かったハズなのにな……

「どーでもいいさあんな奴達、さっさと万丈目捜そうぜ」

「好きにしたら？私、もう帰るわ。明日香あと宜しくね」

「え？ええ……」

「ちよつと待つてほしいニヤ枕田さん」

「なんですか？」

大徳寺先生、私とほぼ接点なくせに何よ……

「天上院君……明日香さんのお兄さんと話をしたんですよね？私のコトを何か言つてなかつたかニヤ？」

「別に？ししよー……吹雪様は、ただ私とももえに説教しただけですよ。自分が一番自重してないくせにね」

「自重？そうですかニヤ、なら良いんですが」

……？話が見えないわね

「じゃあ帰ります。どうせ見つからないだろうけど、精々頑張つて探せばいいわ」

「ッ!?!……」

「なんだよ、その言い方！」

「ジユンコ? どうして見つからないって言い切れるのよ!」
「……フン!」

皆の言葉を見無視して、私はそのまま帰路についた。
思えばこの辺りからだろう、私達が……

『続きまするっ!』

13羽 魔王とかには形態変化がざらだが、意外と最初の方が小回りが利いて厄介だったりする

「はあく……」

またまた溜め息スタートで申し訳ない、枕田ジュンコでございまする。

あれから、十代とは気まづいままズルズルと時間だけが過ぎて行き、冬休みもなんやかんやで終了し現在1月・2学期初期といった所です。

「ほんつと、どうしてこんな風になっちゃったんだろう……」

クリスマスとか正月とか、十代と一緒に過ごしたかったなあ……明日香はちゃっかり、冬休み学校に残って十代達と過ごしていたようだ。実家に帰っていた私に、やれクリパしてるだの、やれ初日の出一緒に見てるやら、自慢するかのように毎日メールが届いていた。大方私を煽ったら十代と仲直りするもんだと思っっているらしい、正直余計なお世話である。

『ジュンコ殿、ここの所授業が終わればこの岬の灯台に来てますな』

「いや、文句はない。人と関わらず海でも眺めていたい気分なのよ、文句あるわけ？」

『いや、文句はござらんが……』

ライキリによる姑息な現在地説明。こんな寒空の下、わざわざ風よけのない港の灯台まで来る物好きなんかめったにいないでしょ。夜に丸藤亮と明日香が密会していた記憶があるけど、あれは行方不明の師匠を見つける為の情報交換だったはずだ。続けてるとしても夜が更ける前に帰れば問題ないわ。

『クルウ……』

「んく？どつたのゲイル」

「フム……最近明日香以外の先客がいると聞いたが君だったか、枕田ジュンコ君」

「え、丸藤先輩？何故ここに」

振り返ってみれば学園最強と名高いカイザーこと、丸藤亮先輩が独特のオーラを放ちながらそこにいた。まだ夕飯前なんだけど……夜にしか来てないと思っていたから

油断したわね。

「この場所は俺のお気に入りでな、用が無くともついつい足を運んでしまうのさ」

「あれま、完全にお邪魔ですな私。帰りますか……」

《予想GUY》です。どっか他の場所探さなきやね、屋上は十代来そうだし……浜辺かな？冬に遊びに来る馬鹿はいないでしょう、多分。

「丁度いい、少し待ってくれるか？実は君を探していたりしたんだ」

「え？明日香でなく？」

師匠もとい吹雪様ならともかく、丸藤先輩とはほぼ接点ないはずだけどなんの用だろ。

「吹雪が、君からメールの返信が無いと心配しててな？暇があれば様子を視てきて欲しいと頼まれたのだが……」

PDAを全然確認しないようになってたわ、あの馬鹿ししょーは余計なお節介を……

「別に？心配されるようなことは一切ないんですがね」

うへえ、嫌な女だなあ私……まあ他人と今関わる気出ないし、ちよつとくらいいいわよね。

「ならメールの返信くらいしてやれ。それに悩みの無い人間が、用も無いのにこんな場所ですごすの？」

「アンタがそれ言うの……？」

つい本音が、今さっき用が無くとも来てしまおうって言うてたわよね？

「フツ、確かにそうだな。では俺と、デュエルをしてくれるか？」

「はい？」

唐突なデュエルの申込みである、さっきまでの会話どこいった。

「デュエルをすれば、その人間の心の在り方がわかる。悩みが無いと言い張るならデュエルでそれを証明してみろ」

『なんかクールな素振りで言ってること無茶苦茶でござらぬかコヤツ……』
『クルウ』

そういえば、実は十代に次ぐデュエル馬鹿だったわねこの先輩……デュエル万能論かよコイツも、どっかの海老かつ。

「アンタとのデュエルつて半年待ちとか聞いたような？ まいつか、丁度むしゃくしゃしてたし……私ごときでよければ相手なりませんよ」

「随分謙遜気味に言うのだな？ ブルー女子では最強との噂もある君と、実は前から戦ってみたかった」

「いやそれ明日香でしょ、元環境トップ B F 使つといて負けちゃったへっぽこですよ私は。最強なんて柄じゃないし、取り巻き A 程度の認識でお願いします」

すげー悔しかったりしたんだけどねあのデュエル……お陰様で B ブラックフェザー F の調整ばか

りしてる気がするわ。

「なら俺にもBFとやらを使ってみてくれ。遠慮はいらん、全力できたまえ」

どうしてそんな文脈に?! 面白いえば、前に十代に勝てる奴にはEXデツキ使おうみたいなこと言ってたわね……我ながら、偉そうでムカツク失言。

「わかりました、学園最強の胸を借りるつもりで……派手にぶつとばすわよ!!」

黒いデツキケースからカードをとりだし、ディスクにセットする。なんだか実践に使うの久々ね? 授業じゃ「ハーピー」メインだし……皆、頼むわよ!!

『クルル〜』

『御意につ!』

やべつ、即返事が来るのは予想外でした。

「デュエル!!」

「先行は譲ろう、好きにかかってきたまえ」

いや、アンタが後攻有利だけじゃないでしょーか・・・まいつか。

「じゃあ遠慮無く・・・今の私は虫の居所が悪いんで、どうなっても知りませんよ？」
「フ、それは楽しみだ」

余裕かましてくれるわね、目にもものみせてあげるわっ！ちよつと前まで雲の上の存在だったけど、今なら私だって！

「私のターン!!」

って結構偉そうな発言しといて何だけど手札が微妙?!邪道だけどアレ出すか。

「おいで、《BF―疾風のゲイル》!!」

『クルウウ?!』

いやごめんって、手札にモンスター2体しかないのよ珍しく。

「続いて《BF―砂塵のハルマッタン》!!」

『クア?!』

「《砂塵のハルマッタン》は他のBFを選択し、対象のレベルを自身に加えるわ。《疾風のゲイル》を対象にしましてつと。レベル2からゲイルのレベル3を足して5へ上昇!!」

「フム、例の召喚の為の調整というわけか」

「そゆことですわね、レベル5になった《砂塵のハルマッタン》にレベル3、チューナーモンスター《疾風のゲイル》をチューニング」

．．．．ゴメンね二人共^{二匹}。なんて、十代にもこう素直になれたらいいのになあ。

『クルウ．．．』

「魔神束ねし蠅王よ．．．ムシズの走る世界に陰りを！」

『ちよつ、ジユンコ殿それは!!』

「シンクロ召喚!!暴食の魔王、《魔王龍 ベエルゼ》!!」

『キヤーハツハツハツハツハツハツハツ!!』

《魔王龍 ベエルゼ》(攻3000)

「こ、このモンスターは?・・・意外だな、君が吹雪とのデュエルで使っていたのと違い」

「不気味でしょうか?・・・BFだからってBFを必ずシンクロするわけじゃないんですよ」

ソリッドビジョンで視たら、また1段と禍々しいわね?まるで今の私の心の有り様みたい・・・って何考えてんだろ自分、気持ちわるー。

「カードを1枚伏せてエンド、どうぞ先輩。魔王を倒す勇者にでもなってくださいな」

ジユンコ H3

「……いいだろう、挑ませてもらう！俺のターン」

案外ノリいいのね、学園最強様はどんな手で来るのかしら。

「手札より《パワーボンド》発動！手札のより2体の《サイバー・ドラゴン》を融合！！」
「げっ、いきなりソレ?!」

「《サイバーツイン・ドラゴン》を召喚！《パワーボンド》ボンドの効果により、攻撃力は倍となる!!」

『『キシャアアアア……』』

《サイバー・ツイン・ドラゴン》(攻2800↓5600)

「ありやま……これは不味いわね」

「バトルだ！《魔王龍 ベエルゼ》(攻3000)を打ち砕け!!
へエボリューション・ツインバースト!!」

「キャッ！」

ジュンコ LP4000↓1400

「何も無いのか、ならば《サイバーツイン》の効果！2度目の攻撃で……」

「あら、せっかちなのね先輩。フィールドをよくみたら？」

『シャハハハハハ!!』

「ツ?!破壊されていないだ!!」

「《魔王龍 ベエルゼ》は、戦闘・効果では決して破壊されないモンスター……魔王の名は伊達ではないわよ?」

「しかし、君自身は無敵ではない!この攻撃で……」

「更に!自身が受けた戦闘ダメージを自らの力に加えるわ!よって攻撃力は5600にアップ!!」

《ベエルゼ》(攻3000↓5600)

「《サイバー・ツイン》に並んだだと?!……バトル終了、《一時休戦》を発動しお互いードロード」

「あら、有り難く頂戴しますね」

《サイバー・ジラフ》じゃなかったか……伏せてあった《月の書》で効果封じて《パワーボンド》の効果ダメージ、次ターンで《ベエルゼ》と追加召喚したモンスターで止め!まで考えてたのにダメージ受け損だったかしら。あれ?《一時休戦》って何時の

カードだっけ？

「不服そうだな……リバースカードを1枚伏せてターンエンドだ、《パワーボンド》の代償は《一時休戦》で無効となる」

亮 H2

「別に、お陰様で攻撃力5600の強力モンスターになりましたしね。私のターン！」

ム、《闇の誘惑》かあ。今モンスター居ないからリスクが高いわね、どうせ《一時休戦》でダメージ与えられないし……

「《ベエルゼ》よ！《サイバーツイン》を喰い殺せ！！ベエルゼ・カーニバル《魔王の謝肉祭》！！」

「させん！攻撃宣言時にリバースオープン《ブレイクスルー・スキル》！《ベエルゼ》の効果は無効にする！魔王をただのモンスターに引き釣り落としてやろう！！」

ツ！《ブレイクスルー》?!やっぱコイツ……

「そいつにチェーン！私もリバースオープン！速効魔法《月の書》！！先輩の《サイバー・

ツイン》を裏側守備に変更するわ！そのまま喰い殺せ《ベエルゼ》!!」

『ギャハハハハハハッ』

『グオオオオオオ・・・』

《魔王龍ベエルゼ》(攻5600↓3000)

《サイバー・ツイン・ドラゴン》(守2100)

流石は魔王様、機械だろうとお構い無しにバリバリやってらっしやるわくあく気持ちいい！癖になるかもっ

「むむっ」

「フンツ、ざまあないわね？カードを2枚セットしてターンエンドよ」

ジュンコ H3 LP 1400

「俺のターン・・・」

《ブレイクスルー・スキル》があるから《ベエルゼ》の耐性は無いようなもんだけど・・・攻撃力3000をどう超えてくるかしら？

「天使の施し！3枚ドロー、2枚捨てる！墓地から《サイバー・ドラゴン・コア》効果！これを除外しデッキから《プロト・サイバー・ドラゴン》を特殊召喚する！そして特殊

召喚時、《地獄の暴走召喚》を発動！デツキ・手札・墓地より可能な限り《サイバー・ドラゴン》を……そう、《プロト・サイバー》はフィールド上では《サイバー・ドラゴン》として扱う!!現れる、墓地より2体の《サイバー・ドラゴン》!《サイバー・ドラゴン・ドライ》!そしてデツキから最後の《サイバー・ドラゴン》!!」

『『『キシャアアアアアアアア!!』』』』

「うっわ、5体とかマジですか」
「更に手札より《融合》!《プロト》《ドライ》そして《サイバー・ドラゴン》で融合!!」

『『『ギヤオオウウウウ!!』』』』

《サイバー・エンド・ドラゴン》(攻4000)

……キン●ギドラかな?泣き声。威圧感凄いけど社長の生《究極竜》見た後だから案外平気なもんね。それより問題は残ってる2体で

「そしてフィールドの2体の《サイバー・ドラゴン》で、オーバーレイ!!」

やっぱり、か……

「エクシードズ召喚！機光超新星！《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》!!」

『グオオオオオ……』

《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》（攻2100）（OUR2）

「これは、不味いわね」

「あまり驚いているようには見えないがな？」

「大方、し……吹雪様が、先輩に押し付けてきたんでしょ？お節介焼きのあの人らしいわ」

「フツ、君の言う通りだ。冬休みに突然我が家に押しかけてきてな？これらのカードを押し付けて何度かデュエルした後去っていった……嵐のような奴だ、相変わらずで安心もしたかな」

うわ……用意に想像出来るわその状況。ただじゃ悪いつて言つてそんな先輩と、今まで心配かけたお詫びだよ！つって押し付ける師匠までは読めた。どこいつても自由だなあの人

「よくわかったな？随分と吹雪を理解している。くやしいが俺より詳しいのかもな」
「・・・声に出てました？」

「ああ」

「・・・うう」

「フツ、かわいらしい反応をするじゃないか。吹雪が気に入るわけだ」

「かつ、かわいっ?!」

「アンタそんなこと言う人なんですか!？」

「《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》の効果! オーバーレイ・ユニット O R U . . . で良いのか、を1つ消費

!墓地より《サイバー・ドラゴン》を1体復活させる!」

「華麗にスルー?!」

「バトル、《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》で《ベエルゼ》(攻3000)を攻撃する!!」

「・・・まだよ」

「?、もう一方の効果を発動!フィールドの《サイバー・ドラゴン》を除外し攻撃力を2100ポイントアップさせる!!それにチェーンし、墓地の《ブレイクスルー・スキル》を除外し《ベエルゼ》の効果を再び無効にする!!」

「だったらこうです！リバースカードオープン！カウンター罠《闇の幻影》！！《ブレイクスルー・スキル》は無効にさせて戴きますよ？」

《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》（攻2100↓4200）

「クウツ・・・」

ジュンゴ LP1400↓200

「これで・・・《ベエルゼ》の攻撃力は《サイバー・エンド》を上回った！」

「やるなっ！だったらこうするまでだ！メインフェイズ2に移行」

「待った！バトルフェイズ終了時にリバースオープン！永続罠《テイメンション・ゲート》！！《ベエルゼ》を除外します！」

「ほう？続けるぞ！《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》1体でオーバーレイ！我がサイバー・ドラゴン、極限への進化の渴望！！エボリューション・エクシーズ・チェンジ！！《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》！！」

『ギャオオオオオ・・・』

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》（攻2100↓2500）（OUR2）

で、出やがったわね？鬼畜効果の集合体！！ベエルゼ逃がしといてよかったわ・・・
「《インフィニティ》の攻撃力はORUの数1につき200上昇、現在2つの為250

0ポイントとなる……俺はこれでターンエンドだ」

亮 H1 LP4000

「ドロー！これか、魔法発動《地砕き》!!守備力の最も高い《サイバー・エンド》を……」
「させん！《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》効果！ORUを1つ使用し、あらゆる効果を1度無効にする！《サイバネティック・ダウン》!!」

ですよね、あとはこのカード次第！

「魔法カード《闇の誘惑》発動、2枚ドロー！ゴメン、《漆黒のエルフィン》を除外するわ」

「フム、目当てのカードは引けたのか？」

「ええ、速攻魔法《サイクロン》！《ディメンション・ゲート》を破壊!!これで、《ディメンション・ゲート》で除外した《ベエルゼ》がフィールドに復帰する!!」

『キャハハハハハハッ』

「戻ったかつ！だが現状では《サイバー・エンド》には」

「・・・丸藤先輩、RPGとかつてやったりします？」

「む？生憎だが、俺はゲームには疎くてな」

「じゃあ小説。ううん、物語ならなんでもいいや。大体ラスボスには、上の形態があるものですよね？」

「ッ！まさか?!」

「モンスターを通常召喚《BF―蒼天のジェット》！更に《BF―突風のオロシ》を特殊召喚！このコはBFがいる時、特殊召喚できます!!」

『!!』
『!!』

皆、今日はこんな役割ばつかでごめんね？今度埋め合わせするから。

「十代達にも出したこと無い、とっておきよ！レベル8の《魔王龍 ベエルゼ》とレベル1《蒼天のジェット》にレベル1のチューナー、《突風のオロシ》をチューニング!!」

『ジュンコ殿。それで貴女の気が晴れるのなら・・・』

・・・ありがとう。

「世界にはびこる億万の不と闇よ、一つになりて天を穢せ！世界の全てを汝が掌中へ！

シンクロ召喚!!」

『……』

「神に仇なす暴食の蠅王、《魔王超龍 ベエルゼウス》!!」

『フツヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハアツ!!』

「攻撃力……4000!」

「バトルよ! 《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》(攻2300)を攻撃!無限なんて幻想を塵に還せ! 《ベエルゼウス・ジェネサイダー蠅王殲滅覇軍》!!」

『ギヤハハハハハハツ!!』

『グオオオオオ……』

「ガハツ?!」

亮 LP4000↓2300

「アハハハツ! 《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》・撃沈」

「クウツ、しかし君の残りライフは僅か200だ!次のターンで……」

「そう簡単にいくかしら?メイμφエイズ2! 《ベエルゼウス》の効果発動!!相手モンスター1体の攻撃力を0にし、その変化した数値分のライフを私が得る!! 《ベエルゼウス・サブマシン蠅王覇権》

!!」

『ギャハハハッギャハハハッギャハハハハハッ』

『『キシャアア・・・』』

「ッ?! 《サイバー・エンド》!!」

《サイバー・エンド・ドラゴン》(攻4000↓0)

ジュンコ LP200↓4200

「フフフッ、これで並のコンバットトリックじゃ挽回出来ませんね? 《リミッター解除》
だって無駄ですよ!」

「何故、攻撃前にその効果を使わなかった。それだけで君の勝利だったろうに・・・まさか、手を抜いているのか?」

んなわけあるかい、アンタ相手に手エ抜ける程自惚れていません。

「今の効果を使用したターン中、相手に与える戦闘ダメージは半分になる。《インフィニティ》を処理しつつ、《サイバー・エンド》の無力化も狙った結果よ」

《サイバー・エンド》放置でもアリだったかも。まあ、ライフゲイン狙ったってことで。

「私はこれでターンエンドですよ。当然《ベエルゼ》と同じく破壊されないモンスター《魔王超龍 ベエルゼウス》。カイザーと呼ばれる方はこれをどう倒すのかしら？」

ジュンコ H O L P 4 2 0 0

「……それが君の本気か？」

「引つかかる言い方ね、当たり前じゃないですか。こんな滅多に出さない化け物まで呼んだのに」

「……これ以上どうしろと？」

「いやすまない、君がとても……退屈そうにデュエルするのが気になってな」
「は？」

「先程言ったが、デュエルをすれば相手のコトがわかる。君のデュエルは、そうだな……物事がうまくいかないことへの八つ当たり。ただ力を振り回しているだけだ」

「……うっさい」

「凶星か、やはり君は」

「うっさいうっさいうっさいうっさい！」

「とても苦しんでいるのだな」

「うっさいわねえ！先輩だからっていきなり出てきて急にデュエルしろだなんて言ってる今度は説教?!何様のつもりよ!!あーそうよ?普段使わないパワーカードでごり押ししてましたよ!!それが何か?!シンクロ使って来いつつたのそっちだし別にいいじゃない!現に手札メチャメチャに事故つてたのに学園最強のカイザー様をここまで追い詰めてんのか?!魔王様々よ!!あー楽しつ、あの《サイバー・エンド・ドラゴン》が木偶の棒常態!新しい切り札も《ベエルゼウス》の餌!これが愉しくなければなんなの?答えてみなさいよ!!」

『あの……ジュンコ……殿』

何よライキリ、呼んでもないのに出てきてんじや

『涙が……』

えっ、あれっ?なんで?今のところ泣く要素あった?ここは高笑いでもして相手を小馬鹿にする場面じゃないの?最低な女でいるべき時じゃないの?!意味わかんない!

「なんでよお……」

「辛い所を、突いてしまったようだな？すまない、今終わらせる。俺のターン!!」

「あ……う……」

「君の憂いを祓う為に、俺も今は下らないポリシーを……捨てよう。魔法カード《オーバードロード・フュージョン》!!墓地とフィールドの《サイバー・ドラゴン》を含む機械族全てを生け贄に、《キメラテック・オーバードラゴン》を召喚する!!」

『『『『『グワアアアアオオオオオオ!!』』』』』

「《キメラテック・オーバードラゴン》の攻撃力は、生け贄にした機械族の数1体につき800ポイント!今生け贄にしたのは8体!よって……6400!!」

「攻撃力、6400」

「バトルだ!《魔王超龍 ベエルゼウス》(攻4000)を、彼女の不の象徴を完膚無きまでに叩き伏せろ!!へエポリューション・レザルト・バーストオ!八連打ア!!!」

『ギヤアアアアアアアアア!!』

『キヤアアアアアアアア!!』

ジュンコ LP4200↓1800↓600↓3000↓5400↓7800
00↓10200↓12600↓15000

『じゅっ、ジユンコ殿オオオ?!』

痛い、痛いよ。じゅうだい……

「つい、やり過ぎてしまったな。熱くなると加減出来ないのは俺の悪いくせか……」

気づけば視界が、夕暮れの空へ向いていた。低く、優しい声がする……

「しばらく休め、目が覚めたら色々聞かせて貰うでしょう」

私はその優しい声の言うままに……そのまま、目を閉ざした。

14羽 本当にヒステリックなのは使用者の方だ。と誰かが言った（制裁済み）

前回のあらすじ

ヘル化しかけるジュンコ

8 連 打ア！

ライフ—15000

変な感覚がする・・・何かにもたれかかっている、私のカラダを預けている、力がまるで出ない、完全に無防備だ。・・・けど、不思議と心地良い。私を預けているものが、ガツシリしていてとても温かい。

「・・・つとーその・中の・子は誰・・・！」

聞き覚えの無い声がある、学園の生徒にしては少し幼いような・・・？

「そう・・・カ・・・！・・・でア・・・が・・・ンコを背・・・つて・・・だよ!!」

今度の声は聞き覚えがある。懐かしくて、愛しくて、でも今は関わりを避けたい・・・そんな声だ。

「いや、その、これはだな・・・」

私を支えていたものから声が出た、耳元に近いハッキリ聴こえる。さつきまで聞いていた気がする、優しい声だ。

・・・ん？どうゆうこった!?

「先程彼女とデュエルをしたのだが・・・その、なんだ、思ってた以上に手強くてな？決着時に張りきりすぎて派手に吹っ飛ばしてしまった結果・・・彼女の意識が飛んでしまつてな。目が覚めるのを待っていたら明日香から呼び出されて、この寒空の下放置するわけにもいかんと思つてだな・・・」

な、なんか激しく言い訳くさい台詞が!!

「そのまま背負つて来ちゃったわけね？亮つたら・・・」

「しかもなによ！ソイツ亮様の上着着てるじゃない、羨ましい！でもタンクトップの亮様もイイ!!」

「女子の制服はただでさえ寒そうだからな・・・風邪をひかれては俺の目覚めが悪くなる」

「だったらジュンコには俺の上着着せるから、カイザーは早くそれ着てる!!」

「十代?!わたしもノースリーブで寒いんだけどこつちに貸してくれないかしら?!」

「明日香はずつと平気そうにしてただろうが?!」

「なんスか?この状況・・・」

「・・・いや、こつちが聞きたいわー?!」

「うおつ?!ジュンコさん起きたんだなあ」

え?どうなってるの? 現在地どこ?! レッド寮崖下? 私丸藤先輩におぶられてんの?! んで嫉妬の眼差しを向ける・・・あれは、蒼髪短髪ロリ娘こと早乙女レイ! もう転校してきてたのか早くね?! ってか十代達に顔会わせづらいのに強制連行された・・・。

「ちよつと貴女! 亮様のなんなのよ!! つかいい加減そこ降りなさいよ!!」

「そうだけカイザー！さっさと降ろせよ!!」

「むっ、彼女が軽いからあまり気にしていなかった・・・今降ろす」

「女の口に体重の話題はNGだつての?!・・・まあ、軽かったならいいわ」

「で！貴女は亮様の・・・」

「本人の話を聞いてなかったのアンタは！私は丸藤先輩とは今さっきまでデュエルして派手にぶっ飛ばされた程度の関係ですが?!」

「そうだけレイ、ジュンコに限ってカイザーとなんかあるわけないぞ」

「何よ、その言い方・・・」

「はあく、十代貴方ねえ・・・」

「デリカシーつてのが十代には無いんだな」

むっか・・・なんだが謝ろうとか思ってた私が馬鹿みたいじゃない、そうだ！

「・・・でも丸藤先輩、今日のデュエルはとても勉強になりました。私の未熟な点がよくわかりましたし・・・また、よかつたらお相手して頂けますか？」

「?!あ、ああ・・・先のデュエルが君の本気とは思えないからな、また相手になつてく

れたら助かる」

「やったあ！うれしいです!!あ、寒いんでまだこれ着ていいですか?」

「ち、ちよつとお?! 亮様から離れてよ!あとそれ脱ぎなよ!!」

「ふざけんなよカイザー!女のコ気絶させといて……ってかジュンコ、どうしちまつたんだ?!」

「ジュンコ、頭でも打つたのかしら?」

「何ツスカ、この綺麗なジュンコさんは……」

フンツ。これならレイちゃんを嫉妬に狂わして、十代への鞍替えを阻止出来る……
かもしれないわ!

いや、安易過ぎる考えなのは解つてんだけどね?ちよつと十代にもイライラしちゃつてるから、実際八つ当たりが8割かな。丸藤先輩なら変に本気にしないだろうし大丈夫でしょう、多分。ごめんなさい、さっきのデュエルも含めてごめんなさい先輩。と、脳内では謝っておこ。

「もう怒った!貴女、ボクとデュエルしなさい!! 亮様にふさわしい相手はこのボクだよ!!」

「ふうん？いいわよ、相手になったげるわ。先輩、私のデュエル見ててくださいねっ！」
「わかった、期待してよう」

タンクトップで腕組んで格好つける先輩……なんかシユールで面白いわね。てか寒くねーのか凄いな、南の島とはいえ冬なのに……

「けっ、なんだよアイツ……」

「ムキー！絶対負けないから!! 亮様っ！ワタシも見ててね!!」

「亮も大変ね……」

流石にこの子まで、吹雪ングの仕業でございます。とか言って強化されてないだろうし……デツキはこつちでいいわね、緑のケースと。

「デュエル!!」

「いくよ！ボクのターンッ！《恋する乙女》を召喚っ!!」
『フフフッ』

で、出たわね！コメントに困るモンスター（？）代表の《恋する乙女》！！

「カードを3枚伏せてターンエンド！」

レイ H2

「俺は結構苦戦したけど・・・アイツはどう対処するんだろな」

フン、そんなの簡単よ。

「私のターン！フィールド魔法発動、《ハーピイの狩場》！！」

「ほう、「ハーピイ」か。色々なデッキを持つのだな彼女も」

「ジユンコさんは鳥獣族の色んなデッキを持つてるんすよ、1年の間じゃ、鳥使いでちよつと有名ツス」

あ、よかったー。アカデミアの人間ってアホな通り名付けたがる気がするから（偏見）鳥使いじゃ普通ね、普通。面白味に欠けるけど。

「一部ではツツコミバート、ツンデレ鳥、じれったいから早くくつつけですわ、などとも言われてるんすけど」

「ろくなのがないわね?! てか最後はももえの奴だけだろ! はあ……まずはこのコで様子見かな? おいでっ! 《ハーピー・レディー》!」

『ハアツ!!』

「うっ、攻撃力1600……」

「いいえ? 『ハーピーの狩場』によって鳥獣族の攻撃力は200上昇するわ! 更に『ハーピー』モンスター召喚時、セットカードを1枚破壊出来る! 対象はアンタの真ん中の伏せよ!!」

「破壊対象のリバースカードオープン! 《強欲な瓶》、1枚ドロウするよ!!」

「チツ、ブラフか……まあいいわ。《ヒステリック・サイン》を発動、発動時デツキから《万華鏡―華麗なる分身―》を手札に加え発動! デツキから《ハーピー・レディー2》!」

『セイヤツ』

「再び狩場の効果! 特殊召喚時にも対応してるわ、右側の伏せを破壊!」

「むむう、《天罰》が……」

地味に怖っ。

「更にもう1枚! 《万華鏡―華麗なる分身―》! 特殊召喚、《ハーピー・レディ3》!!
『フツフーン』

え? 《ハーピー・レディ1》3体のがいい? そう考えた君、デコピンだ。ロマンが足りないわよロマンが! 折角だから1〜3まで並べたくなるじゃない? えっ、私だけ?!

「ととつ、狩場の効果で最後の伏せも破壊するわ!」

「だったらこつちも発動! 《突進》! 《恋する乙女》の攻撃力をエンド時まで7000アツプ!!」

「と、突進だあ?! また渋いカードを・・・まあいいわ、《ハーピー・レディ1》《ハーピー・レディ2》《ハーピー・レディ3》(攻1800)でその小娘(攻400? 1100)を攻撃! 《スクラッチ・ネイル》! 3 連 殺!」

『うっとおしいんだよ小娘エ!!』

『かわいいコぶってんじやないわよ!!』

『アンタなんぎ同性からしたらうざいだけさあ!!』

レイ LP4000↓1900

「痛たっ……随分ヒステリーな集団だね《ハーピー》って」

そりゃ、サポートカードにヒステリックって名前つくくらいだしね……おおすげー、髪引っ張ってる髪引っ張ってる、集団リンチだこれ。

実はこの反応が観たくて「ハーピー」使ったり。

「お、女ってコエー……」

「十代、またなにか見えてるのかあ？」

『ううっ、酷いわハーピーさん達！私は、ただお友達になりたかっただけなのに』
『『エツ?!』』

「《恋する乙女》とバトルしたモンスターに、乙女カウンターを乗せるよっ」

今ので乗ったんか?! 女性モンスターにもちゃんと効くんだ……

「うーん、カードを1枚伏せてターンエンド」

ジュンコ H1 LP4000

《ハーピイの狩場》

《ハーピイ・レディ1》（攻）

《ハーピイ・レディ2》（攻）

《ハーピイ・レディ3》（攻）

《ヒステリック・サイン》

セットカード

「デュエルはこれから！ボクのターン！装備魔法《キューピッド・キス》を《恋する乙女》に装備して、バトルだよ！《ハーピイ・レディ1》に攻撃い！」

『ぼー……』

「あ、あれっ？」

「ぎゅんねんだったわねえ？《ハーピイ・レディ3》と戦闘したモンスターは、あなたのターンで数えて2ターン攻撃出来ないのよ」

『ククク、ざまあないわね小娘エ』

『お姉様ツ……』

「えー?!なんだよオその地味々な効果!!」

「アニキ、しつてた?」

「いや、全然?」

「……わたしも始めて知ったわ、付き合い長いのに」

そりや普段効果狙う機会ないからね、倒せない守備モンスター殴るとか、今回みたく戦闘で破壊されないモンスターくらいにしか発動しないから。

「むう〜!モンスター1体とカードを2枚セットしてターンエンド!」

レイ H0 LP1900

《恋する乙女》(攻) + 《キューピッド・キス》

セットモンスター

セットカード

セットカード

こいつ、思ってた以上にガン伏せ戦術だな。《恋する乙女》中心のデツキならしやうがないか、サポートいっぱいしないと効果活かせないしねー。

「ふっふーん、成す術も無いつて感じね？ 私のターン！ お願いね《ハーピー・ハーピスト》！」

『参ります！』

「召喚時に効果があるけどそれにチェーンして狩場の効果よ！ 私から見て左のを破壊！」

「いい加減勘弁して！ 破壊対象をチェーン発動《ご隠居の猛毒薬》！ ライフを1200回復するよ！」

レイ LP1900↓3100

ディアンケトより回復量が多い猛毒さんじゃないですか。調べたらこの世界じゃ制限だったわねそいや、直接バーンする魔法カードは規制されるみたい。ししよー大好きな《黒炎弾》とかも制限食らってるし……ライフ4000ぽっちじゃしやーないか。

※この小説独自の制限です

「まあいいや《ハーピスト》召喚時効果！《恋する乙女》と《ハーピィ・レディ3》を選
択し、手札に戻す！」

『お帰り願います』

『嫌〜！』

「もう、さつきからやらしい効果ばっかり！」

「激しく同意するツス」

「どうゆう意味だコラア！バトルフェイズ、《ハーピィ・レディ2》でセットモンスター
を攻撃！《スクラッチ・ネイル》！このコが破壊したりバースモンスター効果は無効に
なるわよ！」

「げっ?!しようがない、罨カード《和睦の使者》！それでもってセットモンスターは《メ
タモルポット》！リバース効果で互いに手札を全て捨て、5枚ドロ〜！」

「うっ《ハーピィ・レディ3》が……くっそー！なんか悔しいから《ハーピスト》で
も《メタモルポット》に攻撃!!!」

『えい！』

『キヒヒッ?!』

「ただの八つ当たりね・・・」

「悪い？ターンエンドよ」

ジュンコ H5 LP4000

《ハーピー・レディ1》(攻)

《ハーピー・レディ2》(攻)

《ハーピー・ハーピスト》(攻)

《ヒステリック・サイン》

セットカード

「いつも速攻が売りのジュンコにしては攻めあぐねているな？」

「そうかあ？まだ2ターン目だぞジュンコさん」

「ジュンコともええなら、2ターンあれば基本仕留めてくるわよ？その前に決着をつけるのがわたし達的対抗策だもの」

「俺達殴り合いが基本だもんな、レイみたいなのデッキタイプは珍しいく感じるぜ」

「ももえも以前はロックバーン戦術使ってたんだけど・・・最近じゃ「じれったいですわ、派手にいきましよう！」って使用頻度下がったのよね」

ライフ4000ぽっちじゃ早期決着にならざるを得ないと思うんだけど、私達がおかしいとかそんなことはないはず。

「なに？デュエルアカデミアつてワンキルでも流行ってるの？まあいいや、ボクのターン！」

何！アンタの大好きな亮様もワンキル某ではないのか？！
攻撃力8000とか飛んで来るわよ平気で！

「お互いに手札は潤沢だ、ここでいかに動いて主導権を握れるかが重要だな」
《強欲な壺》！2枚ドロ！魔法カード《死者蘇生》！帰って来て《恋する乙女》!!もひとつ！《アームズ・ホール》！デッキトップを墓地に送り、墓地の《キューピッド・キス》を手札に加えて再び《恋する乙女》に装備！」

うげっ、フィールドから退かさないう方がよかつたかも？《ハーピィ・レディ2》の効
果続いてたし……

「永続魔法《王家の神殿》！ボクはセットしたターンに罠カードを発動出来るよ！」

あれ？禁止カードじゃなかったっけこの頃。いや、禁止になる前か？！

「カードを3枚セット！そして《大金星!?!》発動！」

「はっ？《大金星!?!》なによそれ」

「まあまあ、まずボクはレベル7を宣言。コイン持つてる？」

「えっ、こんな時の為の「D」デュエルアカデミア「A」コインでいい？」

「オツケー行くよ、コイントス！」

「・・・私は表」

「ラッキー、ボクも表だよ！よって《恋する乙女》は宣言したレベル7になる!!」
『!!』

えっ？ギャンブルわざわざ成功してそんだけ?!

「なんの意味があんだろ・・・」

「よくわからないわね」

「すぐ教えてあげるよ！つて言いたい所だけどライフがちよつとね．．．《治療の神
ダイアネット》を発動してライフを1000回復！」

レイ LP3100↓4100

おぼはんの後光．．．謎の威厳があるカードよね。

「あとはこれ次第！罨カード《ギャンブル》発動！」

「またギャンブルカードオ?!」

「ボクつて結構運にも自信があるんだよねー、表を宣言してコイントス！そらつ、表だよ
ー！」

「マジで?!」

「よつて手札が5枚になるまでドロー！」

「あのカード強いな、5枚もドローかよ！俺も入れようかな？」

「あれはドローとは別の運が必要だから止めときなさい．．．」

「よしよしよーし！流れこつち来てる！見ててね亮様！まず《デーモンの斧》を《恋する

乙女》に装備！そんでもって伏せてた魔法カード、必殺！《拡散する波動》発動!!」

「かつ、《拡散する波動》だあ?!」

「ライフを1000払って発動！レベル7以上の魔法使い族モンスターはこのターン、相手モンスター全てに攻撃する!!」

レイ LP4100↓3100

「その為に《大金星?!》で《恋する乙女》のレベルを上げたのか!」

「つてか魔法使いだったんスカあのカード?!」

いや、うん・・・戦士には見えないけどさ、魔法使いって見た目でもないわよね？
悪魔の斧持つてるから余計に変に見える。

「いっくよー! 《恋する乙女》(攻1400)でまずは《ハーピー・レディー》(攻1800)に攻撃!! 《乙女の波動・裂波斬》!!」

「せめて杖でやれえ! 斧を掲げるな斧を! シュールにも程があるわ!!」

「ジュンコさんがいつもの調子に! (ツツコミ的な意味で)」

『ハーピーお姉様~!!』

いつの間にやらお姉様が変わってる?!

『何すんのよ小娘!!』

『きちゃんっ』

「きやつ」

レイ LP3100↓2700

『酷いわお姉様！わたくしはただお姉様と・・・』

『姉さん！そんな小娘にほだされてはだめヨ!!』

『なんだか面白い光景ですわね、頑張ってください』

『き、き、キエエエ?!』

なあにこれえ・・・

『今回だけ・・・』

『えっ?』

『今回だけ力を貸してやるってんのよ小娘!!』

『あ、ありがとうございますお姉様!』

っ、ツンデ●?!

「なんかあいつ、ジュンコに似てないか?」

「アニキ?何言ってるの?」

『姉さん!うちらを裏切るっていうの?!』

『あらあら、ジュンコさんを裏切るんですか?』

『うっさいわよアンタ達!こっちですつと一緒になつてきたのに・・・最近授業以外は

ブラックフェザー

B Fばかりの浮気性を、ちょっと懲らしめてやるだけさ!!」

『?!』

そ、そんな風に思われてたんかい……何気に本編じゃ初使用だしね【ハーピー】、以後気をつけます。

「複数デツキ持つてると、そんな風に思われたりするのカー……」

「続いて《ハーピー・レディ2》（攻1500）にも攻撃イ！」

「そちらのお姉様も〜」

「うっさいわあ！」

『ああん!』

「いたっ……」

レイ LP2700↓2600

『酷いじゃない《2》!こんなか弱い乙女を掴まえて暴力なんて!!』

『いいんですお姉様、わたしがいけないの……』

「そんな斧ぶんまわす、か弱い乙女がいるかあ!!」

「ついにツツコミが精霊サイドにまで……」

「ん？十代、ジュンコさんも精霊見えるのかあ？」

『《2》！こつちに来なさい、一緒に浮気性のジュンコを懲らしめるわよ!!』

『クツ・・・今回だけだからねっ!』

「よし、あと1体! 《ハーピィ・ハーピスト》(攻1900)に攻撃だよ!!」

『貴女もこちらに〜』

アホな光景に気取られてたけど、全員奪われんのは流石にきつつい!・・・って伏せカードあんじゃん!ごめん忘れてた。

「そつ、そうはいかないわよ?! 罨発動! 《マジカルシルクハット》! 《ハーピィ・ハーピスト》と、デッキから《ヒステリック・サイン》《ブレイクスルー・スキル》を選択し、裏側守備でフィールドにセット!」

「隠れた?! でも《拡散する波動》は全体攻撃を強要するカード! 全てのシルクハットに攻撃出来る!! いっけえ!!」

シルハット全部真つ二つ・・・ごめんね《ハーピスト》

「構わないわ、一度裏側になったことで乙女カウンターは消えているし、奪われるくらいなら戦闘破壊された方がマシよ！」

「ムムウ、残念。《サイクロン》で《ハーピイの狩場》を破壊！カードを3枚セットしてターンエンド！」

レイ H0 LP2600

《恋する乙女》+《キューピッド・キス》+《デーモンの斧》

《ハーピイ・レディ》（攻）

《ハーピイ・レディ2》（攻）

《メタモルポット》（守）

セットカード

セットカード

セットカード

「アンタのエンドフェイズ、《マジカルシルクハット》でセットしてた《ヒステリック・サイイン》の効果を発動するわ。《ハーピイ・チャネラー》《ハーピイ・ダンサー》《ハーピイ・クイーン》の3種を手札へ!!更に戦闘破壊された《ハーピイ・ハーピスト》の効果で《ハ

ンター・アウル」も手札に加えるわ!!」

「合計4枚サーチ?!ズルすぎるよその効果!」

「なんとでも言え!私とてコメディ世界を救わねばならん」

「意味不明なんだなあ……」

「……2羽ほど話がシリアスになりかけてんのよ!読者が困惑するから今回で挽回せねば。」

「つてわけで私のターン!」

「手札10枚か、初手で《強欲な壺》を使用した時よりはるかに多いな……」

「ま、まあサーチで内容わかってるから多少はね?」

「《ハーピー・クイーン》捨てて狩場加えて再発動!、そして《ハーピー・チャネラー》!!」

『ヤツホ』

「喰らえエエ狩場の効果を!真ん中破壊よ!!」

「破壊対象は《和睦の使者》!このターンの戦闘ダメージは0だよ!!」

「ほんつとしぶといわねえ!!」

「ジュンコく、本性出かけてるぞく……」

「うっさいわ鈍感決闘馬鹿乃助！喧嘩してる相手煽るとかい度胸じゃないの!？」

「うへえ?!俺と喧嘩中って認識されてたのか!」

「なるほどな、原因は十代だったか……」

「はたから視たら一発でわかるんだけどね?亮もその手の話には鈍感だから……」

「こーなつたら戦線強化よ!《チャネラー》効果、手札捨ててデッキから《ハーピィズペツ

ト 竜ドラゴン》特殊召喚!」

「ラツキー、特殊召喚効果にチェーン!永続罫《召喚制限—猛突するモンスター》発動!」

「なんですとお?!」

『グウオオオ?!』

「何あのカード、知ってる?隼人君」

「いんやあ、見ないカードだなあ」

「特殊召喚モンスターに攻撃を強要するカードだ、通常のデッキではあまり使われないが……」

「《恋する乙女》に攻撃をさせて、乙女カウンターを乗せるには有効なカードね」

「なるほどなく、でもレイのフィールドにはジュンコから奪った《ハーピィ・レディ》達がいるじゃん?」

フラグ立てんな外野あ！残りのセットカードがなんか予想出来てしまうじゃない！

「くっそうバトルフェイズ、《ハーピースペット竜》で《ハーピースペット竜》に攻撃！
〈セイント・ファイアー・ギガ〉!!」

『ジュンコひどつ?!』

「させないよ！永続罨発動！《ディフェンス・メイデン》!!攻撃対象を《恋する乙女》に
変更！」

『お姉様あ!』

『乙女!』

「これで《ペット竜》にも乙女カウンターを乗せるって寸法か!」

「墓地から罨発動、《ブレイクスルー・スキル》!これを除外することで《恋する乙女》の
効果を無効にするわ!」

「ぼ、墓地からトラップウ?!」

「また出たよ初見殺し・・・」

「ジュンコさん、やっぱ鬼ツス」

『あああああつ!』

『乙女!!』

『乙女、アンタ……』

『お姉さま、無事でよかつ……』

『乙女エエエエ!!』

『乙女!しつかりなさい!』

なんか三文芝居見てる気分……

『ジュンコオ!よくもやったわね!しかもアタシらのペットで攻撃しやがって!』

『乙女の敵はアタシ達が撃つ!!』

「いや、《和睦の使者》で破壊はされないだろ……ジュンコも大変だな」

『あっ』

『てへっ』

「ツツコミドローも……えーと、3枚セットターン終了よ」

ジュンコ H5 LP4000

《ハーピイの狩場》

《ハーピイズペット竜》(攻2900)

《ハーピイ・チャネラー》(攻)

《ヒステリック・サイン》

セットカード

セットカード

セットカード

「大型モンスター奪えると思ったのに……ボクのターン、よっしゃ！《マジック・プリンター》！《召喚制限―猛突するモンスター》を墓地にやって2枚ドロ―！いっくよ―！装備魔法《団結の力》！《ハーピイ・レディー》の攻撃力をフィールドのモンスター1体につき800ポイント攻撃力上昇!!更に《ハッピー・マリッジ》!!攻撃力を倍にする!!」

『お姉さま達と!』

『乙女との愛で!』

『敵を撃つ!』

《ハーピイ・レディー》(攻1800↓4200↓8400)

どうゆう・・・ことだ？

「攻撃力8400だあ?!」

「すっげーぜレイ！」

「あのデツキにここまで爆発力があるなんて・・・」

「バトルだよ! 《ハーピースペット竜》(攻2900)に攻撃!! へ純愛の、スクラッチ・ネイル<!!」

女同士なんですがそれは?!

「攻撃力の差は5500! 決まるか?!」

「うん、私の勝ち。 畏発動《ゴツドバードアタック》、《ハーピースャネラー》生け贄で《恋する乙女》と《ハーピース・レディー》破壊ね」

「えっ?」

『ジュンコの鬼畜ウウウウウ』

『姉者アアアアア?!』

「え、えーと、モンスター全て守備にしてエンド……」

レイH0

《ハーピー・レディ2》(守)

《メタモルポット》(守)

《ディフェンス・メイデン》

「あらら〜そんだけでいいのかなあ？ 私のターン!!リバースカードオープン！永続罠《ヒステリック・パーティ》!!手札1枚捨ててつと、墓地から《ハーピー・レディ》を可能な限り特殊召喚！おいで《ハーピスト》・《クイーン》・《ダンサー》・《チャネラー》!!」

『ふう……』

『あらあらあ？裏切り者がいるわねえ』

『出番ゲットオ!』

『復活〜』

「ちよつと……タンマって無しですかね、お姉様?」

2 『そ〜よジュンコ?大人気ないわよ?』

「駄〜目、全軍一斉攻撃イイイ!!」

『キヤアアアアア?!』

「いやああああああ．．．」

レイ LP2600↓0

WIN ジュンコ

「ううつ、あそこでゴドバとか無慈悲すぎる．．．」

「ま、まあ、ジュンコは絶対アレは抜かないからな？」

「流石に、リアリスト過ぎるな」

「あそこは正面から受けて立つ所ツス」

「酷い決着だったんだなあ」

「もうちよつと遊び心を持つてもよかったんじゃない？」

「総バツシングか！ただ一枚の罨カードでこの扱いかかひどくない?！」

「でもいいデュエルだったぜ二人とも！ガツチャだ!!」

「フ、フン！人の事散々コケにしといて今更都合いいこと言わないでよ!!」

あー私の馬鹿っ！今のは自然に仲直り出来る流れだったのに!!

「むっ、お前だつてカイザーに変な態度とつてたくせに」

「先輩にどんな態度とつたつて私の勝手じゃない！なんで十代にとやかく言われなきやいけないのよー！」

「なんだと〜」

「何よ〜」

「……ねえ亮様、この二人つてさ」

「ん、どうした？レイ」

「付き合つてるの？」

「「……………」」

「なっ、何を言い出しやがりまくつてますんですかこのコは!!!なして私がこないなド鈍感王天然大決闘馬鹿と付き合つてるようにみえはるん?!」

「ん？付き合うつてなんだ？ジュンコとくつつけばいいのか？」

「十代！私ならいつでもくつつくわよ!!」

「・・・って感じの関係ツス」

「なるほど、三角的な感じなんだね」

「今のでわかったのか？俺はさっぱりなんだが」

「こつちも天然さんだなあ」

「フーン？面白いかも」

《ジュンコに弄ばれた・・・》（2）

《よしよし》（ハーピスト）

その後、なんやかんやでレイちゃん先輩が告白して、やっぱり恋人はデュエルとか言い出して小5がばれて帰るはめに。

翌日、早乙女両親がフェリーで強襲のハルベルトして現在見送りフェイズ。私もデュエルした仲だし一応ね？

「私、来年卒業したらまたデュエルアカデミア受験し直して必ず帰ってくるから!!」

「おいおい、大変だなカイザーも」

「来年なら、俺は卒業だ」

おお、貴重な十代の恋愛関係からかいフェイズだ……

「待っててね〜十代様〜!!」

「えっ、俺エエエエエ?!」

「な」

「ん」

「で」

「す」

「とー!?!」

「明日香さんとジュンコさんがコンボツツコミを……」

「きつと、十代のデュエルに惚れたんだなあ」

くそつ、あの程度の作戦では駄目だったか！これでは来年以降、また恋敵が増えてしまおうわ！3年までになんとかせねば！そもそも今の微妙な空気をどうにかせねば！

「フツ、後は任せたぞ」

「船が見えなくなるまで、ちゃーんと手を振ってあげるんすよ？」

「それじゃあ、俺達は先帰るんだなあ」

「ちよつ、お前から置いていくなー?!」

「じゅくだしい？」

「これってどうゆう事かなあ？」

「ふ、二人共なんか怖いぞ？」

「お二人さくくん、早くしないとボクがもらっっちゃうからねく!!」

「余計なお世話だコラア！」

「あのコ・・・やるわね」

まあおかげさまで、皆との距離を少し取り戻せた気がするから……よしとしますか？

懲りずに続くかな？

15羽 言葉に困ったら拳で語れって言うけど・・・女子は真似しないでください

前回のあらすじ

未来のライバル^{恋敵}出現。

突然ですが、ブルー女子寮担当の鮎川先生の部屋に呼び出されました・・・明日香と一緒に。

「・・・」

「・・・」

チラツ「・・・」

チラツ「・・・」

(気、気まずい・・・)

冬休み明けてから明日香ともあんまり喋ってなかったからなあゝゝゝ。むしろ他の人ともあんまり喋ってないが、メールも散々無視してきちゃったし、いぎ二人になるとなに喋っていいかわからないわ！原作通りに色々起こってた？とか聞けないし、そもそもあんまり覚えてないし！あゝ、じれつたい!!

(冬休み中、あれだけ煽つたのに全く返事なかつたし。今学期入つてからは十代だけでなくわたしまで避けられるしゝゝゝ嫌われちゃった気もするのよね、何話せばいいかさっぱりわからないわ)

「はあゝゝゝゝ」

ガチャ「天城院さん枕田さん、お待たせ。急に呼び出しちゃつてごめんなさいね」

「はつ、はい?!」

「?、どうかした?」

「い、いえゝ、何も?」

「そ、そう?最近貴女達、一緒に居る所見てないから心配でゝゝゝ冬休み前は浜口さん込みでハーピー・レディ三姉妹かつ!つてくらい行動を供にしたから」

「ご、ご心配なく!」

「たまたまですよ先生、たまたま」

「そうなの?ならいいけどゝゝゝ」

え、もしかして呼び出した要件ってそれ？　こうゆうの先生が介入したらかえって面倒じゃないかな。

「先生、ご要件はそれだけですか？」

ナイス明日香！

「いいえ、ただ気になってただけよ。本題は・・・もうすぐ、デュエルアカデミアノース校との親善試合があるのは知ってるわね？」

「あ、はい」

「去年は亮・・・3年の丸藤亮先輩が代表になって勝利したんですよ、今年も彼が代表で決まりって噂が」

あーこの辺りは覚えてつかも。1年から代表選ぶことになって十代がなんやかんやで代表になる奴よね。

「実は・・・貴女達二人に代表の話がきてるのよ」

「はあ?!明日香はまだ解るとして、なんで私まで!」

「なんでわたしはまだわかるの・・・?　そもそも、学園で一番実力のある人物なら丸藤亮が適任ですよね」

「それがねー、向こうの校長が今年の代表は1年せいかと言いついてね？それならこつちの自慢の金の卵達もみせてやろう！ってなつて……」

達……？

「そんなわけで1年の中でも優秀な生徒である貴女達に話がきたのよ。他にも候補はいるから最後はデュエルで決めることになりそうだけどね、どう？受けてくれるかしら」

「残念ですが……」

「お断りします！」

「ジユンコ?!」

えー？小説主人公が代表になる流れじゃないのかつて？嫌よ面倒くさい……

「えっ、枕田さんは心地よく引き受けてくれるって伝達があつたのに……」

「ど、ドコからそないな伝達が……」

海馬社長
「オーナーよ、メール来てない?!」

「ブツ?!し、少々お待ちを」

最近メールのチェックすらしなくなってたのよね、うつわすげー貯まってる社長社長つと。何故私のメアド知ってるのかとかは突っ込まない、社長だからだ。あ、丸藤先輩からも来てる意外ね、あとで見よ・・・これかな？

☒鳥娘、代表の一人になれ。何を使っても構わん☒

「・・・あつ、やらせて頂きます」

「本当?!女子が代表になったことはないから期待しているわ、頑張つてね!」

短い文面が逆に怖い・・・これは代表ならないと何されつか分かんない奴だ、拉致られた時にあの人の理不尽は体で覚えた、がんばろ。

何使つてもいいってことは禁止カー・・・使わんわ!でもBFは使つていいってことかな?

《クルック》

そんなこんなで代表決定戦当日。社長の真意はわかりそうで不明だがとりあえず頑張ってみることに、候補は私含めて4人でトーナメントだからって言うてたけどあとは誰かしら……とか考えながら会場に行ってみると。

「えーつと、明日香さん何をしておいですか」

……なんか、私より先に参加拒否しようとした明日香が対戦相手だったとゆう謎。

「あら、わたしも一緒に鮎川先生に呼ばれてたじゃない」

「いやいやいやいや、参加したくなさそーな顔してたわよね?！」

「フツ、いいでしょう。説明してあげるわ!」

「お、おう……」

「最近ジュンコが十代だけでなくわたしまで避けてるから、先日兄にメールで相談してみたのよ」

明日香の兄って単語だけで嫌な予感しかない・・・

「そしたら『仲直りには夕日の浜辺で殴り会うのが一番』と言われたから・・・先日日、貴女を呼び出してずっと待ってたのよ!」

おい、あの兄貴姉の言うこと間に受けるなよ。さりげにまたテイル●ネタだし・・・あの元馬鹿カップルは油断したらぶっ込んでくるわね!。

「ん? 誰を待ってたって?」

「だから貴女よジュンコ! 日が暮れるまで待ってたのに待ちぼうけだったわよ!!」

「えー・・・」

「先日鮎川先生に呼び出された時、メールすら見てなかったことは把握しているわ。だったら! 逃げ場のないこの場を借りて、デュエルで殴り合うしかないじゃない!!」

「そ、そんな理由で参加シタノ・・・ってかデュエルで殴り合うってなんだよ」

やっぱりアンタ達兄妹よ・・・変な所が似てるもの。

「そんな理由とはなによ。貴女のことわたしずっと心配にしていたんだからね・・・もう、

逃がさないわよ?」

目、目が怖い……理由が少々ずれてるけど本気のようにですたい、こりやー殴り合
うしかないのか。

「よくわかんないけど……わかつたわ、全力でデュエルすれば問題無いんでしょ?」

「わかればいいのよ! さあ! コテンパンにして十代の前に引きずってあげるわ!!」

「止めて! 本気で何喋っていいかわからないからやめて!」

「それはジユンコの自業自得!」

「え、えくと……そろそろ始めていいノ〜ネ?」

「あ、居たんですかクロノス先生」

「明日香の勢いにおされて全く気づかなかつたわ……もしや! これがメデイチ家に代々
伝わる背景術?！」

「そんなモノはないパスタ! そもそもプライベートな問題をこうゆう公の場で解決しよ
うとしないでほしいノ!!」

「ジュンコ止めて！貴女までボケ出したらツツコミ要員が客席の翔君だけになるわ！遠距離過ぎて捌ききれない!!」

「さりげなく今日はボケます宣言すんなあ！前回おとなしいと思つたらこれだよ!!しかも目の前のツツコミ要員は完璧にスルーと来た?！」

「出たんだな！」

「ジュンコさんの鳥ツツコミミス！平常運転でなにより!!」

客席からなんか謎のコメント飛んできたし、鳥ツツコミってなんだよノリツツコミの親戚か！そーいや観客いっぱいいるのね忘れてた。

「流石は翔君・・・この程度の距離なんか物ともしないわね、さあジュンコ！安心して殴り合いましょう!!バツクが夕日じゃないのが残念だけど!!」

「なにその翔君に対する謎の信頼感！ってか夕日に拘んな！変なところ真面目ね!!」

「も、もう好きにやってくださいーノ・・・」

「デュエル!!」

「先制はもらったわ!わたしのターン!!」

「いや先制で、間違っちゃねーけど」

さてと、明日香とは最近デュエルしてないけどデッキに大きな変化はあるのかな?

「《予想GUY》発動!デッキから通常モンスター、《ブレード・スケーター》特殊召喚!」
『ハッ!』

いつもの《ブレード・スケーター》か、大きな変化はなさそうね。

「更にチューナーモンスター《復讐の女戦士ローズ》を召喚!」

「えっ、明日香?!」

あのおの公衆の面前なんですけど!!

「いくわよ!レベル4の《ブレード・スケーター》にレベル4チューナー《復讐の女戦士

ローズ』をチューニング!!」

「マンマミーア?!」

「女は度胸!男は愛嬌!シンクロ召喚!不屈の闘志《ギガンテック・ファイター》(攻2800)!!」

『フンヌウウウ!!』

や、やっちゃったー?!口上がおかしいけど今はそこじゃない!!

「どうしたのジユンコ、わたしがシンクロ使うなんて今更でしょう?」

「違う!そうじゃない!なんで周りに秘密にしてたか忘れたの?!」

「え・・・?」

「明日香さんがシンクロ召喚だつて?!」

「枕田達の奴、俺達にはシンクロとか使おうともしないくせに・・・明日香さんにはちやつかり渡してるのかよ!」

「いくら親しいからって、それってズルくないかな・・・」

「ぎっけんなー！俺達にも使わせろー!!」

「確かに、ちよつとズルいーノ」

「「ブウウウウウ!!」「」」

アツチャー、こうゆう反応が予想出来たから使用を控えて貰ったのに……台無しね。

「……クロノス先生、マイク貸してくださいます?」

「ニヨ?ど、どうぞナノーネ」

マイク使つて……何語る気だろ

「えー、ゴホン！皆何勘違いしてるのか知らないけど、これ等のカードはI2社に拉致られた兄さんから送られたカードよ?二人に協力してやれって言われてね。ジュンコ達と親しいゆえの依怙鼻根では一切ないわ!文句なら兄さんに言っ頂戴!!」

「「……」」

ええ、まさかの居ない人に責任押しつけるスタイルだよ。そんなんで強欲なアカデミア生徒達が納得するはずが・・・

「吹雪様のせいなら仕方ないよねー」

「ああ、フブキングのせいなら仕方あるまい」

「あの人なら俺達は何言ってもしよーがないかー」

「ちよつと悔しいけどな」

「納得すんのかい！あの馬鹿凄いな!？」

「つーか最近、師匠のせいで色々ゴリ押ししすぎだろ！いいのコレ?！」

「フフツ、皆解ってくれたようで嬉しいわ。デュエルを続けてもよさそうね」

「そう言つてマイクを先生に投げ返す明日香さんなのであつた・・・先生の扱い地味ひどくね？」

「《ギガンテック・ファイター》の攻撃力は墓地の戦士族×100ポイントアップする、よって今は攻撃力3000!カードを1枚伏せてターンエンド!!さあジユンコ、かかってらっしゃい!!」

明日香 H3 LP4000

《ギガンテック・ファイター》

セットカード

「う、うん。私のターン!」

まあこれでこつちも堂々とシンクロ出来るからいつかー……

「シンクロ使わせたこと、後悔しないでよね!まずはブラックフェザー《B F ー東雲のコチ》召喚!お次に《白夜のグラディウス》特殊召喚!」

『ピャー!』

『グルッ』

そ、そんな鳴き声だったっけ？

「合計レベルは7！来るツスよ!!」

「リバーズカードオープン！罠カード《無力の証明》!!」

「はあ?!」

「自分フィールドにレベル7以上のモンスターが存在する時発動、レベル5以下のモンスターを全て破壊するわ!!」

『『ピャー?!』』

うっわ・・・こりやきついわ、モンスター今の2体だけだったんですけど。

「シンクロモンスターを出す前は軒並低レベルモンスターが並ぶ場合が多い、自分フィールドも巻き込む《激流葬》より堪えるんじゃない?」

「・・・やってくれんじゃないの、それだけで勝った気になられても困るけどね?カードを4枚伏せてターン終了よ」

ジュンコ H0

セツトカード×4

「あら強気じゃない、わたしが《大嵐》とか引いたらどうする気かしら?」

「そんなときは運が悪かったと割り切るだけですよー、妥協策で勝てる相手じゃないしね
明日香は」

「フフ、ジュンコらしくなってきたわね?わたしのターン!魔法カード《大嵐》!!」
「まじで?!」

本当に手札にあるんかい!止めてくださいしんでしみます強がり言ってますいませ
んでした。

「うわー、格好つけといてこれは悲しいッスね・・・」

「ジュンコさんって、あんまり運は無いのかなあ」

「伏せカードは全て破壊してもらおうよ!」

「うう、仕方ないか・・・って馬鹿かつ!流星に止めるわよ!《神の宣告》!!」

ジュンコLP4000↓2000

「あら残念、まあ2000ダメージ与えたと切り替えるわ」

「このまま伏せ警戒であまり展開しないでください」

「・・・バトル! 《ギガンテック・ファイター》でダイレクトアタック! 「ギガンテック・クラッシュャー」!!」

『フツハーン!!』

「どこのオベリスクよ?! 毘発動ッ! 《ピンポイント・ガード》! 《東雲のコチ》を守備で特殊召喚するわ。この効果で呼んだモンスターはこのターン、戦闘および効果では破壊されないわよ!!」

『ピュー・・・』

「ならバトルを中止・・・」

「更に! リバースもういつちよ発動! 《ブラック・リターン》!! 「BF」モンスターが特殊召喚された時、相手モンスター1体を手札に送り返すわよ!!」

「そんな! シンクロモンスターは手札に持てないから・・・」

「そう、EXデッキにお帰り頂くわ。さよなら《ギガンテック・ファイター》」

『ウオオオオオン』

「そして豪華得点として、手札にぶっ飛ばしたモンスター^の攻撃力分、つまり30000ラ
イフ回復!!」

ジュンコLP2000↓5000

ふう、攻撃してきてくれてよかったよかった。

「そのカードがあつたから迷わず《神の宣告》^が撃てたつてわけね……流石はジュン
コ、我が恋ライバル^{恋敵}!」

「ちよつと明日香……そんなオープンに宣言したら、誰が好きかって皆に広まるわ
よっ。」

「何を今更、ジュンコだつて学園中に知れ渡っているじゃない」

「いや、私は広めた覚えねーからね? 不可抗力ですから、そのせいでバレるんだけど」

「フツ、謙遜しちゃつて……貴女を見てて思ったのよ。この想い、誰かに知られたら
恥ずかしい。なんて考える時点でわたしはジュンコに劣っていた! もつと貴女^のよう
に、気持ちを全面的に押し出すべきだと悟つたのよ!!」

「出してないから！ちよつと一旦落ちっこ？冷静になる？」

「あら、久々に貴女とまともに会話したから熱くなっちゃったわね。わたしとしたことが・・・メインフェイズ2、《ソニック・バード》召喚！効果で儀式魔法《高等儀式術》を手札に！」

『・・・(ドヤツ)』

あ、儀式デツキ無いから召喚したことなかったけど・・・可愛い。

『・・・(ドヤア)』

「えく、いいなく私も儀式デツキ組もうかなく・・・確か見た目鳥っぽいけど天使族だからって組むの辞めたのがあったっけ、ちよつと真剣に考えようかなく」

「・・・ジュンコ、声に出てるわよ。そうゆうのは脳内でやって頂戴？」

「ツ！・・・ウン」

「《黙する死者》を発動。《ブレード・スケーター》を守備で出し、《ソニック・バード》とオーバレイ!!」

うつ、ランク4か……

「その魅惑で俗物を破滅に追いやらん！エクシーズ召喚！ランク4 《フレシアの蟲惑魔》
(守2500)!!」

『フフフツアハハツ』

「何あれ、可愛い〜」

「でも、蟲惑魔つて言うくらいだぞお？綺麗な花には刺があるものなんだな。ほら、ジュンコさんの嫌そうな顔……」

「あ、本当だ……」

うっげ、超絶面倒くさいのが……

「ひどい顔してるわよジュンコ、十代が見たらなんて言うかしら……ターンエンド」

明日香 H2 LP4000

《フレシアの蟲惑魔》(守 ORU2)

「ほっとけ、殴り合うって言ってるわりに今日は妨害多めじゃない?」

「貴女に好き勝手させたら初見の十代みたく瞬殺でしょう? 5体召喚からの圧殺したことを忘れないわよ」

ボソツ 「そうナノーネ、あれはひどかったーノデス」

「・・・ごもつともで、私のターン! リバースオープン 《強化蘇生》! 帰ってきて、《白夜のグラディウス》!」

『フンスツ』

コチィ・・・なんであんた特殊召喚だとシンクロ素材に出来ない?

『ビャーイ・・・』

「《強化蘇生》でレベル4となった《白夜のグラディウス》と《東雲のコチ》でオーバーレイ!」

「エクシーズでくるのね、意外だね」

「狩られる側の気持ちを刻みこめ! エクシーズ召喚! 撃ち抜け! 《鳥銃士カステル》(攻2000)!!」

『ちよツ・・・?!』

あ、うん。彼は察したらしい

「《フレシアの蟲惑魔》効果発動！ O R Uを1つ使いデツキから「落とし穴」または

オーバーレイユニット

「ホール」罠カードを墓地に送ることで、この効果は墓地に送った罠と同じ効果になる！

「ダイレクト・ホール」!!」

「デツキから直接罠だつて?!」

「しかもモンスター効果として扱うか！」

「わたしが墓地に送るのは「奈落の落とし穴」！ 《カステル》にはご退場ねがうわ!!」

奈落の人『ヴァアアアアアア』

『ギアアアアアアア!!』

「フフ、酷い主人ね」

奈落の人に引きずり込まれたく……

ご、ごめん《カステル》まじごめん。今度はちゃんと活躍させるから許して頂戴、あの効果使わせないと話が先に進まないのよ。

「魔法カード《マジック・プランター》！無意味にフィールドに残ってた《強化蘇生》を墓地に送って2枚ドロウ!!きたきたきたあ！《黒い旋風》！そして《BF1極北のブリ

ザード》オ！」

「クツ、もう引き当てたの?」

「まずは攻撃力1200以下、《砂塵のハルマツタン》を手札に加える！そして《ブリザード》可愛い・・・じゃない！効果発動！墓地から《白夜のグラディウス》を復活させるわよ!!」

『コンツコンツ』

『シユウツ』

「「「可愛い!!」」」

「今、使用者本人も混じってなかった?」

「ゴホン!・・・気のせいよ。《砂塵のハルマツタン》も特殊召喚!」

『ツシヤア!』

「どつかで見た組み合わせとか細かいことは気にせずいくわよ!効果で《グラディウス》のレベルを《ハルマツタン》に加算、レベル5となった《砂塵のハルマツタン》にレベル2の《極北のブリザード》をチューニングツ!」

「合計は7!やつぱりアイツね?」

「漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れ!電光の斬撃!!!シンクロ召喚!」

「この口上は!」

「翔、覚えちゃったのかあ」

「降り注げ!」
アサルトブラックフェザー
 A B F—驟雨のライキリ》(攻2600)!!」

『なんだか久々に推参!!』

「メタ発言すんな！効果発動！他の「BF」はグラディウス1体、《フレッシュアの蟲惑魔》を叩つ斬れ!!」「天翔黒雷刃」!!」

『セイヤアアアア!!』

『キヤアアアアア?!』

「尽かさず、ダイレクトアタック！電光の斬撃！」「ライトニング・ブレイドオ」!!」

『っ、ついに攻撃名が……!!』

適当でごめん、やっぱエースだし格好つけたかったのよ。

明日香 LP4000↓1400

「くうツ!……やっぱり《ライキリ》が出ると表情が変わるわね。そうでなくっちゃ」「仮にもうちのエースですから、私はターンエンドよ」

『じゅ、ジュンコ殿オ・・・』

あーはいはい、今人前であんたと絡み辛いから黙った黙った。

ジュンコ H0 LP5000

《驟雨のライキリ》(攻)

《白夜のグラディウス》(守)

《黒い旋風》

「燃えて来たわ！わたしのターンッ！《高等儀式術》展開！デッキからレベル4の《エンジェル・トランペッター》とレベル2の《ギャラクシー・サーペント》を墓地に送って儀式召喚！《サイバー・エンジェル―韋駄天―》!!」

『ハアッ!!』

「《韋駄天》の特殊召喚成功時、墓地から魔法カードを回収出来るわ！《思い出のブランコ》を回収！」

出たッ、地味に魔法カード回収って強力よね。《魔法石の採掘》とかも発動条件きつつ

いし……

「《思い出のブランコ》を発動！通常モンスター・チューナー《エンジェル・トランペット》を墓地より復活させる！そして、《韋駄天》にチューニング！！シンクロ召喚！《神樹の守護獣―牙王》（攻3100）！！」

『グウルルルル……』

「私が出したのと違って普通ね……」

「なんの話？まあいいわ、バトルよ！《驟雨のライキリ》（攻2600）に攻撃！」

『ギヤアアア……無念』

ジュンコ LP5000→4500

「カードを伏せてターンエンド」

明日香 H0 LP1400

《神樹の守護獣―牙王》（攻）

「《ライキリ》、アンタのことは忘れないわ……私のターン！」

『故人みたく扱わないでください……嫌、間違つてはないのであろうが』

「さて、《ライキリ》の効果は効かないけど《牙王》を突破出来るかしら」

「ム、なんの話ナアノ？」

「《神樹の守護獣―牙王》は所持者のメインフェイズ2以外、カード効果の対象にならない・・・《ゲイル》も《ライキリ》も効かないのは厄介ね」

「おまけに手札はドロー一枚だけ、お手並み拝見ね」

「舐めんじやないわよ、私のターン！ようっし！《BF―そよ風のブリーズ》（攻1100）！召喚時《黒い旋風》の効果で《突風のオロシ》（攻400）を加え、自信の効果で特殊召喚！」

『フュールルツ』

『ピュルツ』

ブリーズ通常召喚とか初めてやった・・・

「レベル3の《白夜のグラディウス》にレベル3《そよ風のブリーズ》をチューニング！

漆黒の力、大いなる翼に宿りて神風を巻き起こせ！シンクロ召喚！吹き荒べ《BF―アームズ・ウイング》!!」

『フツシャー！』

相手が《牙王》以外だったら《ノートウング》で残り少ないライフにプレッシャー与えたかったけど、ここは温存がベストよね

「《アームズ・ウイング》に《突風のオロシ》をチューニング、漆黒の翼濡らし、そば降る雨に響け！雷鳴の一撃！シンクロ召喚突き抜けるっ！《A BF―涙雨のチドリ》!!」
『えっ、俺なん！ジョーの旦那じゃなく!?!』

あ、やっぱ男扱いでいいのかあいつ……

「《チドリ》の攻撃力は墓地の「BF」モンスター1体につき300ポイントアップ！現在墓地には8体！よって攻撃力は5000よ!!」

「マンマミーア！攻撃力5000ンンン!?!」

「バトルよ！《神樹の守護獣―牙王》（攻3100）に攻撃！雷鳴の一撃！「ライトニング・スラッシュ」!!」

『いよっしやー活躍のチャンスだー!!』

「残念だったわねジュンコ、リバースカードオープン!! 《聖なるバリアーミラーフォー
ス》!!」

『うぎやあああああ!また俺ってば出落ち要員!?!』

「フフフツ、これで貴女のフィールドは空。手札も尽きた、わたしの勝ちかしらね」

「まだ終わんないわ! 《チドリ》のもう1つの効果、このカードが破壊されて墓地へ送られた時に墓地の鳥獣族シンクロモンスターを蘇らせる! 《ライキリ》を特殊召喚!!」

『我、再び!』

「そんな効果があつたなんて・・・」

「けど残念ながら、《牙王》にはかなわないわ。このままターンエンド・・・」

ジュンコ HO LP4500

《驟雨のライキリ》(攻)

「わたしのターン! ドロー!・・・魔法発動! 《竜の鏡》!! 墓地の《エンジェル・トラ
ンペッター》と《ギャラクシー・サーペント》を除外融合! 始まりの力、今ここに! 融
合召喚! 《始祖竜ワイアーム》(攻2700)!!」

『グオオオオオウ!!』

「まじで今日の明日香なんなん?! やらしいのばっか!!」

「褒め言葉と受け取っておくわ! バトルよ! 《神樹の守護獣―牙王》(攻3100)で《驟雨のライキリ》(攻2600)に攻撃!」

『グオオオオオウ』

『ギヤアアアアアア悪魔再びイイイイ!!』

「続いて《ワイアーム》でダイレクトアタック! 「ジェネシス・ストリーム」!!」

「きゃあああああ?!」

ジュンコ LP4500↓4000↓1300

「痛ったあく・・・」

《ブラック・リターン》がなければ即死だった・・・《強制脱出装置》? おいやめろ
リアリスト

「ターンエンド、《ワイアーム》の効果は把握してるかしら」

「効果モンスターの効果をうけず、効果モンスターとの戦闘では破壊されない。対モン

スターではほぼ無敵・・・」

「そんな！倒せっこないじゃないか！」

「通常モンスターか魔法・罫で対処するしかないんだな。でもジュンコさんは効果モンスター主体・・・手札も無い、絶対絶命なんだなあ！」

が、外部でフラグを立てられた気がする・・・

「そう簡単にいくかつての！私の、タアーン!!」

このコは・・・よっしゃ！

「このデュエル、もらったわ！」

「・・・大した自信ね？何を引いたのかしら」

「今見せたげるわよ！自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このコは特殊召喚出来る!!頼むわよ！《BF―朧影のゴウフウ》!!」

『フツ』

「レベル5で攻撃力0?」

「あんなんでもこつからどう勝つんだよ」

「そうなの、ただの弱小モンスターナノーネ」

「……つて言われてるけど?」

「はいはい……低攻撃力はとりあえず馬鹿にする風潮はさつさと改めるべきよね、うちの学園。《ゴウフウ》の効果発動!特殊召喚成功時、《臙影トークン》(攻/守0)を2体特殊召喚する!ただしそれらはシンクロ素材に出来ない」

『ポントツ』

『ポントツ』

「あら、折角モンスターを展開出来たのに……シンクロ出来ないんじゃないやね」

「もう1つの効果!フィールドのこのコとチューナー以外のモンスターを除外し、その合計レベルのシンクロ「BF」をシンクロ召喚扱いで、墓地から特殊召喚する!」

「なんですつて?!」

「レベル1の《臙影トークン》2体に、レベル5の《臙影のゴウフウ》をチューニング!漆黒の翼濡らし、そぼ降る雨に再び響け!雷鳴の一撃!!ファントムシンクロ!!今度こそ

突き抜けろっ！《A B F―涙雨のチドリ》!!!

『俺ってば再び推参!!』

墓地《『エースは我のはず・・・解せぬ』

「そんな、また攻撃力5000・・・」

「EXデッキの上限は15枚、同じエース級モンスターを何枚も用意することは出来ない・・・だから1枚のエースを使い回せる戦術を用意してるわけよ！」

「実際ただファンデッカーの習性でピン刺しなだけだったり・・・クロウ様リスペクトでちよつと言いたかっただけです。」

「終わりよ明日香！《涙雨のチドリ》で《牙王》（攻3100）を攻撃!!さっきの雪辱を晴らして来なさい!!雷鳴の一撃、「ライトニング・スラッシュ」!!!」

『よっしやああああ！活躍のチャンスだああああ!!』

墓々《『解せぬ』

『グワアアアアアアア?!』

明日香 LP1400↓0

「・・・フッフ」

WIN ジュンコ

「「「ワアアアアアアア!!」」」

〔し、勝者！枕田ジュンコなのーネ!!〕

『や、やったぜえ兄者ア！初めて攻撃が通った!!あれ？ジュンコの姫さんどつした？』

墓△『解せぬ』

「明日香・・・負けたくせに随分とスツキリした顔してない？」

「当然よ。わたしの目的は貴女の対話、代表になることじゃない。それに・・・」

「それに？」

「すっかり失念しているようだから言っちゃうけど・・・決勝の相手、誰だかわかってる？」

「えっ、まだ決まって無いんじゃない・・・」

「そうナノーネ、シニョール三沢かドロップアウトボーイのどちらかデスーノ」

「・・・アーツ?!」

「気づいたかしら、勝っても負けても十代の前に引きずり出される運命なのよ!・・・」

「頑張って仲直りしてきてねっ!」

「シ、シマツター。社長のメールが怖すぎてすっかり忘れてたー?!今更どんな顔して会えばいいのよ!!!」

「いやだから、まだ決まってな・・・」

「言葉が見つからないなら、デュエルで語ればいいじゃない。今のわたし達みたいだね」
「御菓子を食べればいいじゃない、みたく言うな・・・しゃーない、頑張ってみるわ。仲直りさせて後悔しないでよね!」

「その粹よジュンゴ!しおらしい貴女達なんかみたくないんだから、さっさと解決してらっしゃい!!」

『なんだかしれつと仲直りしてんなあゝ・・・人間ってこんなもんなのか?』

b 〓『解せぬ』

そんなこんなで、明日香と仲直りしつつ十代の前に引っ張り出される結果となったのであった。

「だから決勝の相手はまだ決まっていないーノデス！・・・あ、続くーネ」

16羽 人は彼を・・・●●王と呼んだ。 ※修正版

前回のあらすじっ！

カステル へ『解せぬ』

ライキリ へ『解せぬ』

私と明日香のデュエルの後、次の十代対み、三沢君の試合を観戦してるわけなんです
が……

「永続罨！《魔封じの芳香》！！」

「チェーン 《サイクロン》！！」

「おっ、《王宮の弾圧》！！」

「《エアーマン》 効果発動！！魔法・罨カードをぶっ壊す！！」

「ヴァニティ・テビル《虚無魔人》 召喚！！」

「《ネクロダークマン》 効果で 《エッジマン》 召喚！！「エッジ・ハンマー」！！」

「カウンター罨！ 《封魔の呪印》！！」

「そんな温い手は通用しない! 《神の宣告》!!」

「《ワイルド・ジャギーマン》《エスクリダオ》《フレイムウイングマン》でダイレクトアタックウ!!」

「うわああああああ?!」

三沢 LP4000↓0

WIN 十代

「し、勝者……遊代十代なのーネ」

「つしゃあ! 待ってろよジュンコオ!!」

……なあにこれえ

あと私の名前を叫ぶな、恥ずかしい。

「ジュンコさんのせいッスよ? アニキとデュエルしてあげないから……」

「そうそう。ここしばらくデュエルしててもなんか浮かない顔だし……冬休みにはサイコ・シヨツカーに殺されかけるし物真似君には押されまくってたし筋肉ムキムキのマッチョマンにはドロウ力で敵わなかったしテニス部の奴にはギリギリまで追い詰め

られていたわ」

お、おう……多分原作○通り進んでいたんですね、てかギリギリまで追い詰められんのはいつも通りじゃないでしょうか……三沢君は南無としか言えない

「ジュンコと久々にデュエル出来るからって張り切ってるのね。フフツ、かわいい人……」

「そんなわけで、さっさと仲直りして来てくださいっス。アニキを這いつくばらせるなりジュンコさんが平謝りするなり手段はなんでもいいんで」

「どんなわけよ……」

仲直りはしたいんだけど……謝る気は毛頭無いのよね。

《クルウ!》

《え、前回出番が無かったって?!》

「シニョール&シニョーラ！これよくり、ノース校親善試合・代表決定戦、決勝戦を開始する〜ノデス!!」

「「「わああああああ!!」」」

「まず入場致しますノ〜ハ、オベリスクブルー女子1年・期待の三連星の一人！インチk・・・じゃなくて、鳥使いのシニョーラジュンコ〜!!」

「今なんて言おうとしたのよクロノス先生！インチキか？インチキ効果なのか?！」

「インチキ効果も大概にしろー!!」

「シンクロ寄越せー!!」

「レッドなんかぶっ飛ばせー!!」

「実は結構ファンだー!!」

「さっさとくつつけー!!」

「いい加減素直になりなさい!!」

「って客に言われたあ! 私へのヤジ(?) めちゃくちゃね?! 内容がバラバラ過ぎてツツコミづらいわ!

「ハツハツハツ、意外と彼女も人気物ですな」

「そうですニヤ々・・・恋バナのネタ的な意味で」

「続いて、ドロップアウトくボクイ・・・」

露骨にテンション下げるな、ここまでわかりやすく依怙最良する教師もきつとレア。

「負けんな十代ー!!」

「レッドの希望ー!!」

「インチキヤローをぶっ飛ばせー!!」

「ハネクリボー出してー!!」

「アニキー!ここで逃がしたら一生仲直り出来ないツスよ!!」

「十代カツコイイー!!」

「俺もいるぞー!」

最後が翔君と明日香なのはわかった。

「この時を・・・待ちわびたぜジュンコ!もう逃がさねえぞ!!」

ナニコノヒトコワイ。

「誰が逃げてたつてのよ、変なこと言うわね?」

「逃げてたじゃないかよ!俺が声かけても全部スルーするし、メールも返信無いし!授業終わったら速効居なくなるしで!!」

「ふ、二人共私的な喧嘩はあとに・・・」

「つさいわねえ動物虐待!!アンタみたいなヒトデナシと一緒にいたくなかっただけよ!!ちつとも反省していないようね?」

『ジュンコ殿も猿殿にかかと落としをかましておられたが、あれは動物虐待ではないのであろうか・・・』

ギロツ「黙れライキリ、主旨がずれる」

『ぎ、御意・・・』

「どこに反省する要素があるんだよ！俺の前からジュンコを連れ去った奴なんて、許すわけないだろ!!」

「~~~~ツ!!」

『ジュンコ殿々、嬉しそうですぞ~~~~』

「わ、わたしはねえ！アンタにあんなデュエルして欲しくてHEROカード交換したわけじゃないのよ！あんな風に使うなら返して頂戴!!」

「あんな風ってなんだよ！ワンキルならジュンコだってしよっちゆうしてんじゃねーか！それと何が違うんだよ!!」

「私は、ただアンタに・・・」

笑って、楽しんでデュエルしていて欲しいだけなのにな・・・

「え？聴こえねーよ！」

「もういいわ。このデュエル、私が勝ったらアンタに交換したげたカード、全部返しても

らおっかな」

「なんだよそれ……じゃあ、俺が勝つたら？」

「じゃくアンタの言う事なんでも聞いたげるわよ（適当）。これでフェアでいい？まあ、勝つのは私だけどね〜」

「言ってくれんじゃねーか……いいぜ、乗ってやるよ！あとで後悔すんなよ!!」
「フンツ、上等よ！初対面の時みたく瞬殺したげるわ!!」

「いやく若いつていいですねえ」

「え、えくと……話終わつた〜ノ？それでは、デュエル開始ナノ〜ネ!!」

「デュエル!!」

「私のターン！……モンスターをセットしてターンエンド」

「ニヨ？」

「え〜、あれだけ〜？」

「珍しいこともあるわね、リバースカードも無しなんて……」

「瞬殺を唄ってあれはどうなんだ？」

「あ、アニキに散々メタ張つたのに、全部踏み抜かれてボツコボコにされた三沢君。居たんだ？」

「うっ、いつ居たんだ……」

「翔、前より明るくなつたな……」

「亮、これは明るいとは違うと思うわよ？とところで三沢君」

「な、なんだいつ！天上院君」

「あれだけ対策しといて、あんな負け方して……あれはどうかしら？」

「江ッ」

「だよね、ねえねえ三沢君。今どんな気持ち？」

「どんな気持ち？」

「す、凄く……辛いです」

「二人供、十代が好きだからっていじめも大概にしとくんだなあ」

な、なんか茶番フェイズで時間とられた気が……

「なんだよそれだけか？だったらこっちから行くぜ！ドロー！《融合》発動!!手札の

《シャドーミスト》と《バーストレディ》を素材に融合召喚！焼き払えッ 《E・HERO
 ノヴァマスター》!!そして、墓地に送られた《シャドーミスト》効果で《エアーマ
 ン》を手札に加えるぜ!!」

『ハアツ!!』

《ノヴァマスター》か・・・十代に似合うと思って一番最初に渡したのがアレだっけ。
 「お前がくれたカード、すっげえ大切にしてる・・・今更手放すなんて冗談じゃねえ！
 お前が離れて行って、このカード達すら無くしたら俺は・・・」

「な、何よお」

「とにかく！絶対負けねえ！《エアーマン》を召喚！効果発動！《ネクロダークマン》を
 デッキから手札に加える！フュージョン・リカバリー《融合回収》発動！《バーストレディ》《融合》を手札に
 戻し、《ネクロダークマン》と融合！深淵より来たれ！《E・HERO エスクリダオ》
 !!」

『シツ』

『墮トス・・・』

「ざつすがアニキー！」

「いきなり融合モンスターが2体、全て通ればワンターンキル成立だ!!」

「・・・三沢君のせいで通らない気がしたわ」

「そつスね・・・」

「何故だあ?!」

「バトルだ! 《ノヴァマスター》(攻2600)でセットモンスターを攻撃! 「クリムゾ

ン・ノヴァ」!!」

『ピーツ?!』

「セットモンスターは《B ブラックフェザー F—銀盾のミストラル》(守1800)よ」

「よっしゃ! モンスターを戦闘破壊した時《ノヴァマスター》の効果発動! 1枚ドロースる! そして《エスクリダオ》(攻2700)と《エアーマン》(攻1800)でダイレクトアタックだ!!」

「マンマ・ミーア!! ワンターンキル成立ナノ〜ネ!!」

「おやおや、もう終わりですかニヤ〜?」

「はあ、アンタねえ・・・《銀盾のミストラル》効果適用中よ?」

「あっ?!」

『ピ〜』

「痛ッ、あんがと《ミストラル》。このコが破壊されたターンの最初の戦闘ダメージは0になる、倒せなくて残念でした」

ジュンコ LP4000?2200

あー《エスクリダオ》先に攻撃で良かったあゝ・・・

初対面の時もこのコでワンキル防いだんだっけ、懐かしいな。

「グッ、あん時とおんなじじゃねーか。すっかり忘れてたぜ・・・カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

十代 H1

《ノヴァマスター》☆8（攻）

《エアーマン》☆4（攻）

《エスクリダオ》☆8（攻）

セットカード

セットカード

「ほらく、やつぱり通らなかつた」

「大体予想は出来てたわ、十代は熱くなって忘れていたようだけど・・・」

「クツ、俺は君達ほど彼女と親しくないから知らなかつただけで・・・」

「言い訳は見苦しい（わ）よっ」

「・・・はい」

「ドンマイ、なんだなあ」

「じゃーこのまま、あの時みたいに終わらせてあげるわ！私のターン!!」

うつわ、なにこの手札・・・最近不調気味だった裏返しかな？

「手札より永続魔法《黒い旋風》を3枚発動!!」

「せつ、旋風3枚?!」

「これはひどいわね・・・十代大丈夫かしら」

「フフフフフ、こうなると凄いわよ？ 《暁のシロツコ》 召喚！ この時3枚の《黒い旋風》 効果発動！ 攻撃力2000以下の《BF―残夜のクリス》（1900）・《黒槍のブラスト》（1700）・《疾風のゲイル》（1300）を手札に加え！ 各自の効果で特殊召喚！ 更に《突風のオロシ》（400）も特殊召喚！！ 皆、出てらっしゃい！！」

《シャツ》

《フンスツ》

《グエーツ》

《クールルツ》

《フユウツ》

「ペペロンチーノオ！！ あつという間にフィールドが埋まったノーネ?! 展開が速すぎる！ ノデス!!」

「まじかよ……本当にあの時みたいな展開だな」

「フツフーン、じゃあ覚悟はいいわね？ 《疾風のゲイル》 効果発動！ 《エスクリダオ》の攻守を半分にする！ 「ハーフネス・ゲイル」！」

『クルルツ』

『アアアア・・・』

《エスクリダオ》(攻2700↓1350)

「派手にいくわよ！レベル4《残夜のクリス》にレベル3チューナー《疾風のゲイル》を
 チューニング！漆黒の翼翻し、雷鳴と共に走れツ！電光の斬撃イ！シンクロ召喚！降り
 注げ、《A アサルト ブラックフェザー B F—驟雨のライキリ》!!」

『我、参★上ツ!!』

「来たわね、ジュンコのエースいつもの!!」

「展開からの《ライキリ》効果ワンキルはもはやテンプレツスね、何度それで負けた
 か・・・」

「フツ、是非好調の彼女ともデュエルしたいものだ。俺とやった時は酷かったからな」

『覚悟しろ、遊城十代！主の為に・・・貴様を切る!!』

「うわっ、なんか今日の《ライキリ》いつも以上に殺気立ってるな・・・」

「その粹よ《ライキリ》！早速効果発動ツ、自身以外の「BF」の数だけカードを破壊す

る、現在3体！対象は伏せ2枚と《ノヴァマスター》よ「ライトニング・エッジ」！！
『セイヤアツ!!』

「その効果を一番食らって来たのは誰だと思ってるんだ！リバーオープン！速効魔法※
《エフェクト・シャット》！その効果発動を無効にして《ライキリ》を破壊するぜ!!」

「そんなっ！」

『なっ?!おのれええええ!!』

「やった！第一刃は防いだっス!!」

「1文字違わないか？」

ああ、《ライキリ》が爆発四散。

それ天罰の上位互換じゃないの？強くな……

「けどッ《ライキリ》を倒したからって調子に乗ってもらっちゃ困るわ、私のモンスターはまだ残ってる！レベル5の《暁のシロツコ》にレベル1のチューナー、《突風のオロシ》をチューニング！黒き勇士よ、神話の名刀を振るいて道を開け！シンクロ召喚！切り臥せろ、《BF―星影のノートウング》!!（攻2400）」

『フツシューウ〜』

「出た！神話の名刀を、まるでヨーヨーかのようにぞんざいに扱うノートウングさんだ！！」

「不思議と戻ってくる・・・流石は名刀よね」

「聞こえてんのかなよ客席イ！私も突っ込みたいけど我慢してたのに！って《ノートウング》効果発動！特殊召喚時に相手ライフとモンスター1体に800ポイントのダメージを与える！対象は《エスクリダオ》！「ホーミング・ソード」！！」

『ヴォツ・・・』

「痛てっ、やったな！」

《エスクリダオ》（攻1350↓550）

十代 LP4000↓3200

「2700もあつた攻撃力が、たったの550・・・《はにわ》以下だと！」

「まだまだっ！《ノートウング》が存在する場合、BFモンスターの召喚権が1回与えられる、《極北のブリザード》を召喚！《黒い旋風》にターン1制限とかはない！よって攻撃力1200以下の《ブリーズ》（1100）《ハルマツタン》（800）《ゴウフウ》（0）

を手札に加え、《ブリザード》の可愛い釣り上げつ。《ゲイル》復活からの自身の効果で
 《ブリーズ》特殊召喚！

《コンツ、コンツ》

《クルルツ》

《フユ》

「「やっぱり可愛い〜!!」」

「《ブリーズ》ってコモいいわね〜」

「・・・これは凄いい、彼女はまだ展開を止めない気だ」

「レベル4の《プラスト》とレベル3チューナー《ブリーズ》をチューニング！漆黒の鷹
 匠、黒翼の猛禽をここに束ねん！シンクロ召喚！翔来せよ、《Bブラックフェザー・ティマーF T漆黒のホー
 ク・ジョー》!!（攻2600）」

『呼ばれて翔び出てっ!』

筋肉ムキムキ、マツチヨマンの変態オネエよ!!

『ヒドイッ!』

「《砂塵のハルマツタン》を特殊召喚! 《ブリザード》のレベルを自身に加算し4とするわ! そのままレベル3の《ゲイル》とチューニング!!」

「いい加減にしろー!!」

「ターンが長すぎるぞー!!」

「早く進めろー!!」

「いいぞもつとやれー!」

「知らん! 漆黒の翼濡らし、そぼ降る雨に響け! 雷鳴の一撃!! シンクロ召喚4発目! 突き抜けろつ、《A B F》涙雨のチドリ》(攻2600)!!」

『うおおおー! まさかの連続出勤だぜっ 兄者ア!!』

『うっさい』

「ここで《ホーク・ジョー》の効果発動! レベル5以上の「B F」を1体蘇生! 蘇れ 《驟雨のライキリ》!!」

『世話焼かすわね〜』

『かたじけない．．．．』

「うげっ、もう帰ってきた．．．．」

「フィールドを離れたから別の個体扱いでもつかい効果発動出来るわ!《ライキリ》以外の「BF」は4体!アンタのフィールドのカードは全て叩つ切る!!」「ライトニングエツジ!!」

『覚悟オオ!!』

「クツ、リバースオープン!《クリボーを呼ぶ笛》!!《ハネクリボー》をデツキから特殊召喚!!」

『クリクリツ!』

「二可愛いく!!」

「ムツ、このターンでの決着は無理か．．．でも他は全滅よ!」

『『グアアアッ!』』

『アアアアア．．．．』

「くそつ、皆・・・!!」

「そして、レベル6の《ノートウング》にレベル2の《ブリザード》をチューニング! 漆黒の風を纏い、末世より飛翔せよ! シンクロ召喚! 黒き魂、《玄翼竜》ブラック・フェザー!! (攻2800)」

『グウオオ・・・』

「・・・ほう? アイツでは無いのか」

「っしやあ! ちよつとやりすぎたけど眼福だから良し!

「すげえ、ジュンコのエースが揃いぶみだな・・・けどまだデュエルは始まったばかりなのに飛ばし過ぎじゃねーか?」

「このターンでぶつ飛ばすつもりだったのに、あんたが《ハネクリボー》呼んじやうからでしょ! バトルよ! 《ライキリ》であのコ(守200)を攻撃! 電光の斬撃、「ライトニングブレイド」!!」

『クリ〜?!』

『・・・御免っ!』

罪悪感ばねえ！

「続いて皆で一斉攻撃イ!!」

『『エツ?!』』

『ヴォ?!』

「あ、いや・・・《ハネクリボー》の効果がだな」

「知ってる、ただの八つ当たりよ」

『了解だぜ姫さん!』

『かつしこまりい!』

『ヴォオオオオオ!!』

「ちよっ?!」

『よくもうちらの主人を泣かしたわね、ひとでなしっ!』

『おらおらあ! 這いつくばって懺悔しなあ!!』

ゲシゲシゲシゲシへ・・・(無言の羽刀)』

「痛い痛い痛いっ?! ダメージは無いけど精神的に痛い!!」

『混ざりたかった・・・』

「いい加減にしろお！俺がなにをしたってんだよ!!大体、ジユンコが泣いてるとこなんざ見たことねーぞ?!」

「アニキまた独り言〜?」

「精霊の声って奴かしらね」

『泣いてたぞ姫さん、アンタじゃなくてカイザーって奴の前でだけどな』

「なっ、カイザーが泣かしたのか?!」

「亮、ジユンコとなんかあったの?」

「悪いが、プライバシーは守るさ・・・」

「こるあ《チドリ》イ！余計なこと教えてんじやないわよ!!あの日のことは私的に無かったことにしてんだから!!」

『あく違う違う、原因はアンタだアンタ。あの時は・・・』

「……はい皆、そいつの口塞いで」

『はいはーい、そこまでよアンタ』

『それ以上しゃべったら命が幾つあっても足らんぞおぬし』

『あつ、兄者あ！旦那あ！はーなくせーよく！！』

『……グオツ』

二人に引き摺られる《チドリ》であった……あとでしばこう、そうしよう。

「……なんだったんだ？アイツ」

「忘れろ、いいわね。ターンエンド」

ジュンコ H1

《ブラック・フェザー》☆8 (攻)

《ホーク・ジョー》☆7 (攻)

《ライキリ》☆7 (攻)

《チドリ》☆7 (羽交い締め)

《黒い旋風》×3

「しかし今のターンで本来決着をつけれたな、あくまで結果論だが」

「確かに、弱体化した《エスクリダオ》に《チドリ》が攻撃してれば終了だったわね」

「めちやくちややつて墓地にBF10体、攻撃力が今5600ツスもんね・・・」

「ま、まあ伏せ2枚もあつたから戦略としては間違つてなかつた・・・か?」

「・・・」

「なぜ俺にだけそんな目をする?!」

「難儀だなあ」

実際仕留め切れなかつたのは痛いわね。手札使い切っちゃつたし、旋風あるけどデツキのモンスター半分は使つたし・・・十代も手札ほぼ無いけどどうなるかしら。

「いくぜ!俺のターン!!・・・来たつこいつで反撃だ!まずは《戦士の生還》!墓地から《シャドーミスト》を回収し、《スペシャルハリケーン》を発動!!」

「す、スペシャル?何よそのカード」

「こいつは、手札を1枚捨てることで特殊召喚されたモンスターを全て破壊するカードだ!!」

「モンスター除去なん?!魔法・罾バウンスとかでなく!」

「そうか!シンクロモンスターは融合モンスターと同じように特殊召喚で呼び出される!」

「これでジュンコさんのシンクロモンスターは全滅ツス!!」

なんて無慈悲な……《ライトニングボルテックス》とか《ブラックホール》のが良くな?とか言いたいけど、この場合結果は一緒よコノヤロー!……あれ、禁止だったっけ?ブラホ。

『何独り言をブツブツ……ギヤアアアア!!』

『おのれ、許さんぞ遊城十代イイイ!!』

『鬼畜ウウウ!!』

『ヴアアアアアア!!』

「よ、よっし!ジュンコのモンスターは全滅!更に《シャドームisst》の効果で……」
「明日香と私のデュエルを観てなかったのかアンタは!《チドリ》が破壊された時、墓地から鳥獣族シンクロモンスター1体を復活させる!いつもの過労死、《ライキリ》復活

！」

『まだ三度目、軽いものよ！』

「そーういやそーうだったな・・・俺は《バブルマン》を手札に加えるぜ！そして手札がこいつだけの時特殊召喚出来る！頼んだぜ《バブルマン》！！」

『へッ！』

「わかりずらいわ！」

「ん？場にカードが無いから2枚ドロー！よっしゃあ！《強欲な壺》！更に2枚ドロー！！」

「アニキお得意のドローラッシュユだ！」

「これは逆転もあるわね！」

「《Eーエマーゼンシーコール》！デッキから《ブレイズマン》を加えて通常召喚！」

『ゼヤア！！』

「《ブレイズマン》の効果で《融合》を手札に加えて《バブルマン》と《融合》！！来い！無慈悲たる白銀の戦士、《E・HERO アブソルートZero》（守2000）！！」

『ハアアア!!』

来たわね最狂のHERO・・・ある意味コイツを渡したのが間違いだったのかも
しんない、

「カードを1枚セットしてターンエンドだ!」

十代 H1 LP3200

《アブソルートZero》☆8 (守)

セットカード

「あれっ、攻撃せずに守備でターンエンド? 攻撃力は負けてても《アブソルートZero》の効果で破壊出来るのにな・・・」

「いや、これで正解だろう。今、彼女の手札には明日香戦で使った《朧影のゴウフウ》がある」

「そうね。今自爆特攻して《ライキリ》を撃破したら二人の場はがら空き、《ゴウフウ》の効果発動条件を充たすし、次ターンの対抗策がなくなるわ」

「ん？でも《ライキリ》に《Zero》と相討ち破壊させてから《ゴウフウ》出せば一緒じゃないかな」

「その為の伏せカードじゃない？」

「私のターン！うげつ、これか・・・仕方ないわね《強欲で貪欲な壺》発動！」

「なんだその壺カード?! 凄い名前だな」

「効果も凄いわよ? デッキトップから裏側で10枚除外してから・・・2枚ドロ!!」

「え?!」

「強欲で、」

「貪欲で、」

「「よくないか?!」」

うっせーわー外野ア! 私だって《貪欲な壺》引きたかったし、《強欲な壺》はあつちで前禁止だったカード入れるのに抵抗あっただけよ! 普段「ハーピー」とかにはちやつかり入ってますけどね?

「ムム、《ライキリ》（攻2600）で《アブソルートZero》（守2000）に特攻！
「ライトニングブレイド」!!」

『迷いなく 逝けと申すわ 鬼主人』

「2枚引いてだめだったのか……」

「させるか！リバースオープン《融合解除》!!《Zero》を融合、デツキに戻して素材モ
ンスターの《ブレイズマン》と《バブルマン》を特殊召喚!!」

『「ハアツ！」』

「む、解除だったのね」

「《ブレイズマン》が特殊召喚されたから再び《融合》を加えて、《アブソルートZero》
の効果発動！お前のモンスターを全て破壊するぜ!!」

『ギャー?!一方的にやられた……』

鬼主人とか言うからよ、自業自得ってことで。

「だったらメインフェイズ 2、《朧影のゴウフウ》を特殊召喚！フィールドに《朧影トクン》2体精製！」

『ポントッ』

「前回使ったし効果長いから以下省略！レベル1の《朧影トクン》2体にレベル5のチューナー、《ゴウフウ》をチューニング！漆黒の鷹匠、なんやかんやでもつかい出て来い！ファントムシンクロ！墓地より再翔来、《BF T—漆黒のホーク・ジョー》!!」

『アタシも過労死させる気なのね・・・』

「文句いわないっ、効果で墓地の《涙雨のチドリ》を過労死同盟に加える、じゃなくて特殊召喚！」

『いやむしろ、出番が少なかったから嬉しいぜ!!』

「うざい・・・アンタは元々有能なの知ってたから、ただ出すまでも無く《ライキリ》でケリついてただけだから」

『そ、そんなに俺を買ってくれてたとはっ・・・感激だぜ姫さん!!』

「ええい、いちいち泣くな鬱陶しい！ターンエンドよ！」

ジュンコ H2 LP2200

《漆黒のホーク・ジョー》(攻2600)

《涙雨のチドリ》（攻6200）

《黒い旋風》×3

「へへつ、決めるのは無理だったなジュンコ」

「まーね。でも《チドリ》は墓地に「BF」12体もいるから、攻撃力6200の脳筋よ？どう対処するか楽しみにしてるわ」

あ、ことうゆう台詞って大体負けフラグじゃね？気のせいかな。

「・・・プツ、アハハハハッ！」

「ちよつ、なによ急に・・・勝ち目が無くて可笑しくなった？」

「気でも触れたーノ？あの攻撃力相手じゃ無理も無いデースが」

「違う違う、俺がデュエルで諦めるわけないだろ？愉しくってつい、な？」

「はい？」

「やっぱお前とのデュエルは最高だ！初めて会ったあの日から・・・毎日毎日挑み続けて、それこそ飽きるくらいデュエルしたハズなのに、毎回ワクワクしっぱなしなんだ！」
「・・・」

「あの日・・・お前がももえ達と居なくなってから、いつもなんか物足りなかったんだ。授業受けてても、誰かとデュエルしてても・・・お前が帰ってきた時気づいたんだ。ジュンコが居ないからだ、お前が居なくて寂しかったんだ！」

「え、えと・・・その・・・」

「だからあの時、お前が誘拐されて・・・折角会えたのに、また居なくなっちゃまうんじゃないかって！・・・悪かったよ。俺、冷静じゃなかったな」

「誘拐されたって、学園内でそんな事件が？」

「・・・十代君が解決してくれたから、問題無しですニャー」

「もうお前が居ないと駄目なんだよ！俺が俺でいられなくなるんだ！もう耐えられないんだ!!ジュンコ・・・戻って来てくれないか、俺たちの所に」

「~~~~~ツ!?!」

「アニキってば公衆の面前で凄いいこと言うな〜。明日香さん、いいんスカ？」
「フフツ、いいのよ。二人が仲直りしてくればそれで〜。それにオチは予想出来るわ」
「？」

『ジュンコの姫さーん？。〜。駄目だ、反応が無い』

「・・・てば」

「ん？」

「言うこと聞かせたかったら、勝てばいいじゃない！この馬鹿ツ!!!」

「うわっ、なんで謝ったのに怒ってるんだ!?てか顔真つ赤だぞ、大丈夫か?!」

「うっ、うっさーい!!こっち見んなボケー!アホー!鈍感天然タラシー!!さっさとター
ン進めなさいよー!!」

「な、なんだかめちやくちや言われてるな〜。よっしや!勝ったら仲直りな!絶対負
けねえ!俺のターン!!」

まっ、負け無いし?旋風3枚あるし《チドリ》はバ火力だから問題ないし〜

「もうジュンコは駄目ね、思考が完全にやられてるわ」

「まさか言葉で相手を無力化するとは、これが主役の力かつ・・・」
「僕には、三沢君がもう駄目に見えるツス」

「へへっ、やっとジユンコらしくなったな。俺のターン！まずは《天使の施し》！3枚ドローして2枚捨てる、《貪欲な壺》！《エスクリダオ》《ノヴァマスター》《エアーマン》《シャドーミスト》《ハネクリボー》をデッキに戻してシャッフル、2枚ドロロー！来たぜ《大嵐》！お前の《黒い旋風》を伏せカードごと破壊してやる！」
「ひっど?!インチキドロローも大概にしてよ！」

「割りとジユンコさんの引きも大概ツスよね」
「そうね、《黒い旋風》3枚とか酷すぎるわ」

「《ブレイズマン》第2効果！《ワイルドマン》を墓地へ送り、属性と攻撃力を同じにする！《融合》を発動！《シャドーミスト》と場の地属性になった《ブレイズマン》を融合！《E・HERO ガイア》!!」
『ヌオンツッ!』

「《ガイア》の効果発動だ！エンドフェイズまで《チドリ》の攻撃力の半分を頂くぜ！」ガ

「イア・フォース」!!」

『なっ、なんだとお?!』

さらつと《シャドーミスト》引き直してらっしやる。てか効果は《フォース》だけど……ウオーグ●イモンかっつての?!

「……《シャドーミスト》が墓地に置かれたから《エツジマン》を手札に加えて召喚、バトルだ! 《E・HEROガイア》(攻5300)! 《涙雨のチドリ》(攻3100)を攻撃!! 「コンチネンタル・ハンマー」!!これが通れば俺の勝ちだ!!」

「ライフピツタリポーナスかっ!手札から《月影のカルート》の効果発動!このコを墓地に送って、《チドリ》の攻撃力を1400上昇させるわ!」

『クワアーツ!』

『でも足りねえっ?!(攻4500)すまねえジュンコさん!』

ジュンコ LP2200→1300

「痛たた、なんのこれしき! 《チドリ》の効果で《ライキリ》を復活!!」

『ククク……本当の過労死はこれからよ』

「顔色やべえけど《ライキリ》、けど勝負は勝負つたよな!手札から速攻魔法・《瞬間融

合《発動！《バブルマン》と《ガイア》を素材に《アブソルートZero》再臨！《ライキリ》に特攻だ！」Freezing at moment「瞬間氷結」！！」

「よっしやあ！向かえ撃ちなさい《ライキリ》！！「ライトニングブレイド」！！」

『よっしやあ?!ヤケクソは止めてください?!』

十代 LP32000↓3100

「済まねえ《Zero》、けどこれでジュンコのモンスターは全滅だ！「白銀の抱擁」！！」

『あーもう何度目よ似非侍！』

『遊城十代、絶許・・・』

抱擁なら私にしてくんないかなー・・・なんちつて。っていけない、集中よ集中！！

「?、今度こそ終わりだ！《エッジマン》でダイレクトアタックだ！「エッジハンマー」！！」

「忘れたの?私はしぶといのよ!《熱風のギブリ》の効果発動!ダイレクトアタックを受ける時、手札から特殊召喚できるわ!」

『フー!!』

「だったらそのまま《エッジマン》(攻2600)！《ギブリ》(守1600)を攻撃だ！」

『フガツ?!』

「キヤアアアアア?!」

ジュンコ LP1300↓300

「痛ったろ……《ギブリ》ありがとね」

「《エッジマン》の効果でジュンコに貫通ダメージを与えたが……ギリギリ耐えられたか、1枚伏せてターンエンドだ」

十代 H0 LP3200

《E・HEROガイア》☆6 (攻)

《エッジマン》☆7 (攻)

セットカード

「私に《エッジマン》で貫通ダメージとか……い、一体ナニ真面目な顔で語ってんの

よ変態！信っじらんない!!」

エッジ「へッ?!」

「なんでそこ怒るんだよ! ってか変態?!」

「ッ!・・・ご、ごめん、今の無し。わ、私のターン!!」

「??????」

「ジュンコの妄想はさておき、残りのカードでこの盤面を返せるものがあるかしら? モンスター大半《黒い旋風》でサーチした上にさつき10枚も除外してたわよね」

「このまま一方的に十代の勝ちだな!」

「.....(ジト目)」

「何故だあ?!」

「フ、フン! 私が主力を出し切った、なんて思ったら大間違いよ! 《逆巻きのトルネード》

(攻1000)を召喚!!」

『クルツシャー!!』

「お、そいつ初めて見るな……」

「ちよつと使いづらいからね、《トルネード》の効果発動!相手フィールドに特殊召喚モンスターがいる場合、墓地から「BF」チューナーを特殊召喚!おいで、《突風のオロシ》!

『クアツ!』

「いっくわよお……レベル4の《逆巻きのトルネード》にレベル1の《突風のオロシ》をチューニング!!黒き烈風よ!絆を紡ぐ追い風となれ!シンクロ召喚!飛び立て、《A

BF—五月雨さみだれのソハヤ》!!」

「おおつ、まだ見たことない「BF」シンクロモンスターだ!」

『……』

あれつ、喋らないんだ?いや、喋ったが可笑しいんだけどね?《ライキリ》達が喧しいから感覚麻痺してんな……

「《ソハヤ》召喚時の効果!墓地から「A BF」1体を特殊召喚出来るわ、何度でも働

けー! 《驟雨のライキリ》!!」

『残業手当は出るのですかジユンコ殿?!』

「そんな奴が居たのかよ?! やつぱりジユンコとのデュエルは最高だな! すつげえワクワクするぜ!!」

「こつち見んな馬鹿ア!」

「なしてつ?!」

「なんでもよ! やつちやえ 《ライキリ》! 《エツジマン》を破壊よ!」

『承知、でやああああ!!』

『げ、解せん・・・』

「《エツジマン》が・・・けどまだ《ガイア》が残ってるぜ? どうすんだよ」

「あら余裕ね・・・だったら私のとっておき、受けてみなさい!! 「A B F」は皆、「B F」を素材にした時チューナーとして扱う! レベル7の《驟雨のライキリ》にレベル5チューナー、《五月雨のソハヤ》をチューニング!!」

「合計レベルは・・・12?!」

「漆黒の翼よ！雷の力宿して鮮烈に轟け！！シンクロ召喚！切り裂け、《A B F—神立のオニマル》！！」

『…………』

「おお?!なんだか凄そうなのが来たな！」

きつたー！無駄にゴツ格好いいオニマルさんだー！！

『ブアツハツハツハツハツハツハツハツハ！！』

へっ?!

「な、なんだあ?!」

『ジュンコオ……………ようやく儂を呼び出してくれおった！、待ちわびたぞ、この時を!!』

『ど、ども……………』

『なんだ、浮かない返事だな……………さあ！今こそ我が力を振るい、共に目指そうではないか！頂の景色を!!ブワハツハツハツハツハツハツハ！！』

えく・・・なにこの鳥（人）、なんで私に憑く奴は皆格好だけで中身が残念なのばっか？

「そんじやま・・・その男倒したら学年じゃトップ扱いにはなると思うんで、やっちゃって？」

『良からう!! 覚悟しろこわっぱ! 我が雷纏いし刃にて、汝の身を塵と化してやろう、ガハハハハハハ!!』

「め、面倒くせえ・・・」

「ジュンコ、お前も変な奴に好かれて大変だな・・・」

「アンタが言う? まあいいわ、バトルよ! 《神立のオニマル》(攻3000)で《E・HEROガイア》(攻2500)を攻撃! 「サンダーボルト・フラップ」!!」

「その攻撃を待ってたぜ! リバースカードオープン! 《聖なるバリアーミラーフオーズ》!!」

「あちやく、《チドリ》の方がマシだったスね、兄貴の勝ち」

「私の時みたいに破壊されても後続が出来るしね」

「馬鹿ね、《オニマル》は効果じゃ破壊されないのよ! 更にシンクロモンスターのみを素

材にしている場合、ダメージステップの間攻撃力を3000加算する!!」
「まじかよ!それじゃ攻撃力6000?!」

『残念だったなあ!我が剣を受けて、散るがいいこわっぱがあああ!!』

決まったあ!私の勝ちね!・・・あれ、勝つていいんだっけ?

「あ、じゃあ《ネクロ・ガードナー》で」

「・・・・・・・・えっ?」

『・・・・・・・・おっ?』

「除外して効果発動!その攻撃を無効にする!」

やたら偉そうな《オニマル》の攻撃が、《ネクロガードナー》にあっさり弾かれました・・・・・・・・《天使の施し》で落ちとったんかいっ!

「ねえ、《オニマル》ウ・・・・・・・・今どんな気持ち?」

『いや、なんか調子乗って済まんかった・・・』

「あ、うん。私も反省するから・・・」

『うむ。次回があれば、頼むぞ?』

「うん、ターンエンド・・・」

ジュンコ HI LP300

《神立のオニマル》☆12 (攻)

「チャンス到来!俺のターン!来たぜ、速攻魔法《決闘融合―バトルフュージョン》だあ!!バトルの間、《オニマル》の攻撃力を《ガイア》に加算して!攻撃力5200だ!いつ
けえ!「コンチネンタル・ハンマー」!!」

『・・・む、無念。』

「それ、私の台詞、デス・・・」

ジュンコ LP300↓0

WIN 十代

〔し、勝者〜遊城十代なの〜ネ!!〕

「「「わああああああああ!!」」」」

「やったー!アニキー!!」

「流石よ十代ー!!」

「ほ、ほら!勝ったじゃないか!」

「必死だなあ・・・」

「最後は少し拍子抜けしたが、実に良いデュエルだった」

「はあく・・・」

あそこで無理して《オニマル》出す意味無かったなあ、てか《チドリ》で良かった。決める気満々だったから《ネクロガードナー》とか全く眼中に無かったわよ・・・

「ジュンコ〜!」

「な、何よお・・・」

「えつとさ、俺の勝ちだから・・・なんでも言うこと聞いてくれるんだよな?」

げっ?!調子乗って変な約束したのすっかり忘れてたっ!!い、一体ナニをヤラセヨウとイウノデシヨウカ?!

「約束は約束だからね・・・なんかあるの?言ってみなさいよ」

「なんでも、いいんだよな・・・」

「う、うん・・・？」

怖い怖い怖い！なんかいつもより目が真剣で怖い?!もく、言うなら早く言つてよね！
なんか心臓がバクバクしてきたんだけど?!

「もう・・・俺の前から勝手に消えないでくれ、いつも側に居てくれ!」

「は・・・はひ?それがお願い?」

「駄目か?さつきも言つたけど、お前が居ないと駄目なんだよ・・・さつぱり調子がでないんだ」

さつきはデュエル中だから流してたけど・・・これ告白じゃね?!さらつと告られてないですか私!だつてずつと側に居てくれなんて男女間じゃそれしかないわよね?えつ、ちよつ、OKしたら付き合う流れだったりするの?てか負けたから拒否権無し?!
・・・ひやああああ!!どうすんのよこれ、いや十代のことはぶつちやけ大好きだしむしろこつちからお願ひしたいけど、いざ付き合えつて真正面から言われたらなんて返したら・・・あくもう!

「よ、ヨロシク、オネガイシマス・・・？」

「「わあああああ!!」」

なんで歓声があがるかなっ?!交渉の面前でなんてことさせんのかなこの馬鹿は〜!!恥ずかし死にしそうなんだけど・・・

「おおくアニキが決めたツスね」

「・・・フフ」

「やったあ!もう離さないぜジュンコ!!」

「わ〜?!こんな所で抱き着くなああああ!!見られてる、学園中の人に見られてるうううう」

さつき抱擁とか言ってたせい?!場所選んでよ場所!

「いいじゃねえか!俺達、ずつつつと友達だぜ!!」

「ほえ?!」

「ありっ?!」

皆様へ「「「ええええ、なんじやあそりやああああああああ?!」」」

「ねっ?」

「ああ・・・なるほど」

「あれっ?なんで会場中皆でずっこけてんだ???

「・・・代の、」

「ん?どうした」

「十代の・・・馬鹿アアアアアアアアアア!!!」

SE へバツシーン!

「痛つつつたあ!なんでえ?!」

こうして代表決定戦は渾身のピンタにより、ジュンコさんの勝利（物理）で決着がついたのであります。by翔

あ、懲りずに続くかもツス

17羽 伝説・・・伝説の定義ってなにかしら。

前回のあらすじ。

ジユンコさん勝利（物理）

「しっかし、アンタのデツキは相変わらずね。なんでこれで回るん？ほほハイランダーじゃん、《バブルマン》？《バブルマン》のぶちぶつ壊れ（原作）効果でなんとかしてんの？」

「《バブルマン》の扱いひつでえな・・・HEROは出来るだけ皆入れたいしなく。つてジユンココそモンスター種類ずつじやねーか、人のこと言えんの?!」

「BFも種類多いから・・・仲間はずれをなるべく出したくなかっただけよ、《黒い旋風》でサーチのバリエーション増えて楽しいし？」

「旋風も結構ヤバイカードだよな・・・維持出来たら実質毎ターンサーチだし」

「いや、こんな所で二人して何似たようなこと言ってるんか・・・」

「えっ?!」

はいどうも皆様、枕田ジュンコ（黒）です。

前回十代を打ち倒して（物理）から数日、現在二人で初めての共同作g、じゃなくしてお互いのメインデッキを広げて調整しあっております・・・十代の部屋で。

「デッキの調整はいいけど。なんで僕達の部屋でやるのさー!」

「いいじゃない、なんか最近十代と二人でいるとやたら回りがニヤニヤしてくるか、爆発しろってうっさいのよ。集中出来やしないわ!」

「そうだよな。爆発って相当な暴言だよな、ひっでえ奴等だぜ・・・でもニヤニヤしてるのはなんでなんだ? 虐め?」

「アニキは知らなくていいの。それならジュンコさんの部屋でやれば? 僕達に被害も無いし、集中出来るでしょ!」

「バ、バツキヤロー翔君テメー! 私の部屋で十代と二人つきりにしてなにやらせる気よ!!」

「むしろ望む所なくせに・・・」

「十代に限ってそれは無いから安心なさい? わたしが冬休みにどれだけ仕掛けても駄目

だっんだから・・・そもそも女子寮に男子は立ち入り禁止。あ、わたしの《サイバー
ブレイダー》はどう？爆発力は凄いわよ」

「俺の《デスコアラ》も、 \times の地雷になるんだなあ」

「お、俺の《ウオー・・・》」

「ってやかましいわー!!地雷は面白いかもだけど、基本うちらに噛み合わないカード勸
めんじやないわよ!あとこんな狭い部屋に6人つておかしいでしょ!十代以外出てつ
てよ!!」

「6人?5人じゃないの?」

「俺もい r

「いいから、十代以外出てけー!!」

「僕達の部屋なのにつ?!

「とんだ暴君なんだなあ!」

はい、なんでこんなことになったつとね・・・

『以下回想。前回、デュエル決着後のことである』

張り手へバツション!!

「このKY!鈍感!人の心もて遊んでそんな楽しいわけ?!もくもく十代なんて知らない!!私帰る!!」

十代へチーン……

「デュエルはドロップアウトボーイの勝利デス〜が、なんか締まらない〜ノ……」

あ?クロノス先生いたん?そいや、これ学園代表決めるデュエルだったっけ。

「フンだ。代表でもなんでも勝手にやって、派手にやられて大舞台上で恥でもかけばいいわ!バくく〜カ!!」

帰ろ帰ろ!帰ってお風呂入って《チドリ》シバいて寝よ!!

『さりげにひでえ?!』

「ちよつと待つてくださいい枕田君、このまま帰って貰っては困ります……代表同士仲良くしてもらわなければ」

「代表同士?何言い出すんでしょーかハ……校長先生。代表は十代でしょ」

「・・・実は今回の親善試合、向こうの校長が代表を1年生にするだけでなく、男女ペアのタッグデュエルにしよう」と提案してきたのです」

「「ナツ、ナンダッテー」」

「全く聞いて無いんですけど・・・じゃあこの試合の意味は?!」

「男女の代表同士で本気のデュエルをしてもらうことで、てっとり早く絆を作って貰おうかと・・・あなた方には不要だったかもしれないが」

えく・・・出たよデュエル万能理論、まあある意味でつとり早いかもしれないけど、
さ?

じゃあ最初の明日香との試合が実質決勝だったわけか

「クツ、十代と一緒に代表になれるなら意地でも勝ちたかったわ!!」

「ど、どんまいなんだなあ」

「すると私も出るの? つかなんで男女ペアよ!」

「それが向こうの青ひぐ、ツでなく校長が、最近1人だけ入ってきた女生徒を大層気に入ったらしく自慢したくなったようで・・・だったらこちらも対抗してやろうと」

「そんなアホな理由でルール変えるなあ！ っつか私じゃ駄目じゃね？ おおっぴらにシンクロぶちかましちやヤバイわよね、あちらさん困惑ですよね?!」

「ブラックフェザー B F 以外という発想は……」

「その点は問題ありません。あちらの代表生徒は二人して、シンクロ・エクシーズを使いこなすらしいノデス！」

「まじで!?!」

って代表二人・男女・EXデッキ使いこなす……あつ（察し）

「ってことはジュンコとタツグで代表として全力でデュエル出来るんだな！ うおおお燃えてきたぜえええ!! 頑張ろうな、ジュンコ!!」

「うわっ、復活した！ はあ……しよーがないか」

『そんなことがありましたとき、個人的には非常に解せぬが……』

「ん？ ライキリなに一人でブツブツ言ってるんだあれ」

「更年期障害よ、あんまり見ないの。あ、このカード試す？」

「ふくん、精霊にもそうゆうのあるんだな……ってなんだこれ?! すごい強そうじゃん

!!

「(ドヤア・・・)」

『げ・・・解せぬ』

《クルツク》

数日後！

ノースブルー（北の海）から潜水艦で死の外科医率いる海賊団が・・・って違うわ！まず潜水艦でくる所にツツコませなさいよ！

「鮫島校長、今日は宜しくお願いします」

「ええ、こちらこそ」

あ、会話進んだ。ノースの生徒って柄悪そうなの多いわね、デュエルと喧嘩を
ごつちやにしてそう。

「なあなあ、オッサン！挨拶はその辺りにしといて俺の、俺達の対戦相手は?!」

「オ、オツサン……」

「こ、これ十代君!」

「ハツハツハツ、元気があつて宜しい。君が十代君だね、ウチの代表が君と戦うことを楽しみにしていたよ」

「んで、その代表は?!」

「俺だ!!」

ヤン〇ー。もといノースの生徒達が割れ、その奥に仁王立ちしていたのは……!!
ま、

「万丈目?!何故ここに!」

ジュンコ背後へ「まさか、自力で脱出を?!」

「ウツヒヤア?!こるあ!モモオ!!再登場早々何すんのよ!!」

「あら、驚いてくれませんか?久々の再会だとゆうのに……」

「背後から出てきた所に充分ビックリしたわよ!!」

はい、やっぱり居ましたももえもん。皆大体予想はついてたわよね?

「こら浜口！折角の俺様の再登場シーンに、一々ボケを挟むな!!」

「まあ、浜口などと他人行儀な・・・二人っきりの時のように優しく「ももえ」と呼んで下さいまし♪」

「誤解を招くような言い回しは止めろお!!」

「ええっ?!もしかして代表の男女ペアって万丈目とももえなのか!!」

「万丈目さんだ!」

いやあ、知ってた。とはいえ仲良くなったなあ二人共、わざわざ他校にまでストーク、ついてったんだもんなあ。あの積極性は見習うべきか？

「おいコラー1年、さつきからサンダーさんとモモ様に対してなんて口聞いてやがる」

「良い江戸川、コイツにそんなことを言っても無駄だ」

なんか筋肉モリモリの方が凄んできたけど、サンダーさんも1年だからね? 「さんだ!」からもじって産まれた渾名だからサンダーさんって変な感じね、にしても・・・

「……モモ様？」

「モモ様。」

「そう！この方こそ我らノースの暗黒に迷い混んだ一筋の光明!!」

「ノース校No. 2にして唯一無二の最強女性デュエリスト!!」

「人魚使いのモモ様だ!!」

「んもう、嫌ですわ皆様方……」

か、懐柔しとるー?!あの荒々しい連中を手懐けてやがるわこの娘!!一体どんな手を使
いやがったのでしょうか?!

「それはもう……実力で」

「だから思考を読むなコラア!このツツコミ久々だなおい!!」

「ジユンコさんもスツカリいつもの調子だ!?!」

その時!天空より爆音が響き、1つの飛行物体が近づいてきたのであった!!

「急にナレーションの口調変えないでくださいまし?!ただのヘリコプターですわ!」

「あ、あれは・・・万丈目グループの!!」

丸ん中に万つて・・・すげー判りやすっ?!

「久しぶりだな、準!!」

「元気でやっていたか!!」

「・・・兄さん!・・・兄さん?!」

いやへりの音で聴こえないわよ!あの兄貴二人の声すげーなハッキリ通るわ?!

ババババババババババ

《へり到着》

「兄さん達、どうしてここに?」

「決まっているだろう、お前の晴れ舞台を観る為だ!」

「あとお前の将来の伴侶も気になってな!!」

「は、伴侶お?!一体なんの話だ!!」

「ご無沙汰しておりますわ、御兄様方・・・いえ、実際に顔合わせは初ですから初めま

してのが宜しいでしょうか」

えっ、この娘なに言ってるの……

「貴様、何を言っている！」

「おお、君が！」

「ももつちか！いつも弟が世話になっているね!!」

「も、ももつちい?!」

「ちよつと、ツツコミ被らないでくださいますか？人が話をしている最中ですので……」

「突っ込むに決まっているだろう！何故兄者達が貴様のことを知っている?!」

「しかも「ももつち」ってなによ！友達かつ?!」

「なんだ、ももつちから聞いていないのか？」

「私達とはメル友だ、準の近況報告をしたり私達の愚痴に付き合ってもらったりと話題に事は欠かない」

「メル友だど?!貴様、俺に黙って何をしているんだ！とゆうよりどこから兄者達の私用メールアドレスを入手した!？」

「(遠い目)」

万丈目君に言いたい事全部言われたっ?!

大方寝てる間に君のPDAとかなんかから盗み見たんでしようけど・・・

「コラ、準!」

「女性に対して、なんて物言いだ!!」

「いいのですわ御兄様方・・・準様がわたくしに対してそっけないのはいつもの事ですもの。それでも、わたくしはっ・・・」

「みなまで言うでない、ももっち!」

「私達は君の事を応援しているよ、準の「ギザ?ザハートの子?」り歌」のような心を救ってやっておくれ・・・」

「御兄様方・・・ツ!」

「いい加減にしろお! 兄者達も、コイツの悪ノりに付き合うのは止めてくれえ!!」

アイツ・・・まず本人より家族に気に入られやがった、恐ろしい子!

《あつTVの放送枠買ったから、この試合今から生中継な》
《フアツ?!》

そんなこんなで舞台袖。

「あ、十代お帰り。髪の毛のセット終わった？」

TVに映ると聞いた途端に身だしなみが気になるなんて……可愛いなチクシヨウ

!

「ああ……なあジュンコ、万丈目の奴凄いと思わないか？」

「ん?どつたの急に」

「今のアイツは実際尊敬するぜ、一人(?)で余所の学校乗り込んで、テツペン取って……
とても真似出来そうにない」

えくと、万丈目君の独り言聞いちゃったんだつきたしか・・・勝つ事を強いられるエリート君の気持ちなんてわからないけど

「・・・そうね、彼は実際凄いわよ昔から。でもだからって、負けてやる要素はどこにもないわ」

「ジュンコ?」

「私達は私達らしく、いつも通り全力でぶつかってやりましょ?その方が彼もリベンジしがいがあるってもんでしょ!」

「・・・おう!そうだな!」派手にぶっ飛ばすわよ」だ!!」

「ちよ、わたしの物真似すんなあツツ!!」

スタツフゝへ「選手の方、お願いしまゝす!」

「お呼びだ。ほらっ、行こうぜジュンコ!世間に俺達のデュエルを見せてやろう!!」

「・・・ええ!!」

side north

「ようやくこの時が来たな・・・一対一でないのが少々残念だが」

「まとめて借りを返すには好都合でしょう?」

「フン、なんなら貴様も向こうの陣営に行つて一対三でも構わんどぞ? それこそまとめてリベンジ出来る」

「まあ! 学園を去る時にワンキルしたのを、まだ根に持っています?!!」

「当たり前だろうなんだあれは!! 普通、負けて傷心してる奴に追い討ちをかけるか?! 本当に貴様は俺に好意を持っているのか、悪意しか感じなかつたぞ!!」

「ほら、とことん突き落とされた方がより反動で伸びるか? . . .」

「どんな理屈だ! フン、まあいい。残念ながらおかげでより高みへ近づけた . . . その事だけは感謝してやらんでもない」

「もう、素直じゃありませんのね。わたくしのまわりはこんな方ばかりですわ」

スタッフB へ「そろそろ入場です、準備お願いしますー!」

「行くぞ、俺の足を引っ張るなよ?」

「フフツ、了解ですわ。相棒様」

《 》

《レディースエロン、ジェントルメロン!!皆様、大変長らくお待たせしました!》
・・・ん?なんか聞き覚えのある声があるぞ?

《ただいまよりいゝデュエルアカデミア本校・ノース校の、友好親善試合を開催いたします!!》

「「「ワアアアアアアアア!!」」」

《解説には前年度の本校代表、カイザーこと丸藤亮と!ノース前年度代表江戸川コ?ン君!》

《どうして俺が・・・》

《だれがコナ?君だ!!俺みたいなゴツい小学生探偵がいるか!!》

《実はこの私、フブキングこと天上院吹雪がお送りします!!》

「「「キヤアアアア!ブッキー!!」」」

「・・・」

「って師匠かい（ですの）!？」

《おっと、駄目だよ君達。まだ選手紹介してないのに勝手に出てきちゃ、生放送だよ?これ》

「駄目だよじゃないわよ!なんでアンタがここにいんのよ、てかなんで実況してんの?!」

「今回はわたくしと準様の再登場がメインのハズですわ!師匠が出てきたら色々台無しでしょう!!」

いや突っ込むトコそこお?!会長んトコに拉致られたハズの点を問うべきじゃないのコレ!!

《いや、社長がこの前の学園代表決定戦を録画で見たらしくてね?」この教師が実況では絵面が悪いな、学園のイメージダウンだ。よし、貴様行つて来い」なんて言い出すから急遽帰還したんだよ》

「マンマ・ミーア!わたくしそんな理由で実況降ろされたくノ!？」

先生・・・ドンマイ、社長のお気に召さなかったのね。

《解説は僕の独断だけどね！まあ亮は学園外でも有名だし、？ナン君は一部で慕われているからいいかなって》

《単に独りで実況が嫌だったのでは・・・》

《せめて名字をつけてくれ！》

《あとね、この生放送のあとにシンクロ・エクシーズ召喚について世間に伝えるから・・・君たち派手に暴れ回っていいよ！！その解説役もかねて呼ばれたからね！！》
「重要なことをさらつと言うなあ！！てかあのお偉いさん方も発表の仕方が雑いな！余所の会社を買った放送枠でしょこれ、便乗ひでえな！！ってか学生に色々丸投げし過ぎだろあいつら！！」

「ジュンコさん、もうカメラ回ってますわよ！ツツコミが全国に轟いています！！」

「こんなトコ映すなあツ！！」

《はいっ、そんなわけで選手紹介です！まず本校女子代表！御覧の通りツツコミが激しい鳥使い、枕田ジュンコ選手く！！》

「誰のせいでツツコンでると思ってたんだコラー！」

「インチキ効果の全国デビューだー！」

「いつも通りでいいぞー！」

「しつかりしなさい!!」

「十代に恥かかせないでよー!!」

「もう、嫌・・・カエリタイ」

《男子代表! そのドローは奇跡を呼ぶ! 赤は学園最下層のオシリスレッド? いいや、情熱の炎だ! 遊城十代選手!!》

「いつけー! アニキー!!」

「キヤー! 十代ー!!」

「しつかりやるんだぞおー！」

「頼むぞー!!」

「レッドの希望ー!!」

「むう・・・」

「あれ、十代なんか不機嫌？」

「いや・・・前から思ってたんだが、あの人と喋っているとき楽しそうだよなお前」
「ん？誰とよ」

「・・・吹雪さん。それがちよつと引つかかったただけだ」

え、これって嫉妬?!もしかして師匠に嫉妬してくれちゃったの十代!!

「あ、あの人はただの・・・」

《《続いてノース校女子代表!・防御なんかしらない、殺られる前に殺る!・猛攻腹黒人魚
使い、浜口ももえ選手!!》》

「なんですかそのいい草は!!」

「「モモ様ー!!」」

「ああ、今日も素敵だ・・・」

「ワンキルしてください!」

「罵って下さい!」

「踏んで下さい！」

声援的に正解じゃね？師匠の紹介。この娘向こうで何やってたのよ……

《《続いて男子代表……》》

「いらん！この俺の名は俺が述べる！！」

《《おや……》》

「お前達！この俺を覚えているか！！」

「[[[……]]」

「この俺が消えて、清々した奴！退学を、自業自得だとほざいた奴！！」

退学については本気で自分から居なくなつたような……まああえて言うまい。

「知らぬなら言つて聴かせるぜ、地獄から不死鳥の如く蘇つた、この俺の名は！！」

「さあ、皆様も一緒に！」

「一一一！」

「[[百！！]]」

《《千!!》》

「万丈目さんだ!!」

「二「うおおおお!サンダー!サンダー!万丈目、サンダー!!!」二」

「素敵ですわー!!」

「うわあ、凄い人気だな・・・」

そうねえ、まさにノースの代表って感じ。ってかさっきの掛け声にさらりと師匠混じってなかった?!

「行くぞ、遊城十代!枕田ジュンコ!貴様等を倒し、この俺の強さの証明としてやる!!」

「お供しますわ、どこまでも!」

「いいぜえ、燃えてきた!派手にぶっ飛ばそうぜジュンコ!」

「だから真似すんな!行くわよ万丈目君!」

「万丈目さんだ!」

「二「サンダー!!!」二」

「「デュエル!!!」」

《つと盛り上ってきた所悪いんだけど、新召喚の紹介の為、最初は女性陣からのむよ!》

「「だあっ?!」」

「なによそれ!完全に万丈目君からのターンって流れだったじゃない!」

「フン、構わんだろう。真の主役は遅れてやってくるものだ」

「おおく、なんか格好いいぜ万丈目!」

《じゃあ僕の独断でジュンコ君から!あと社長からの伝言で、初ターンでシンクロもエクシーズもしなかったら君たちクビだつてさ!ついでにルールはTFルールだ!》
「ざらりと何言い出すのよ!あとルール説明手抜きすぎ!普段余裕だけど事故が怖いわね.....私のターン!」

.....まじで?前回の反動かな、こいつは不味い。

「私は《BF―蒼天のジェット》を召喚!!」
『シユツ!!』

「続いてチューナーモンスター、《突風のオロシ》!!」
『シヤアツ!!』

「レベル1の《蒼天のジェット》に同じくレベル1の《突風のオロシ》をチューニング!!」
「おつ、レベル2なんていたか?」

「漆黒の翼羽ばたかせ、秘めたる刃で風を切れ!シンクロ召喚!飛来せよ!

《A アサルト B ブラックフェザー F―雨隠れのサヨ》!」

『サヨツ!!』

なき声そのまんまかいっ?!

《A BF―雨隠のサヨ》☆2/闇属性/鳥獣族/攻 800/守 100

え、効果?まあ落ち着きなさいよ.....

「カードを3枚伏せる!そして永続魔法《強欲の欠片》を発動!ターンエンドよ!!」

ジュンコ H0

《雨隠れのサヨ》(守)

《強欲なカケラ》

セツトカード×3

《え〜TVの前の皆様の為に説明するとね、まずチューナーと標されたモンスターとそれ以外のモンスターをフィールドに揃え、そのレベルの合計のレベルを持つ新たな白枠のモンスターを今までの融合デッキから繰り出すのがシンクロ召喚です。》

《今のはレベル1のモンスター2体が素材だったからレベル2の《雨隠れのサヨ》が呼ばれたわけだな》

《そうだね亮、それにしてもジユンコ君！》

「な、なによ〜・・・」

《折角のシンクロ全国初★公★開にレベル2の《サヨ》1体つてのはどうなんだい！普段の嫌になるくらいの開力はどうした!!》

「うっさいわー！手札にあのこらしか居なかつたんだからしようがないでしょ！うちの《サヨ》になんか文句あるわけ?!可愛いじゃない!!」

《文句は無いけど派手さに欠けるよ!》

前はシンクロ・エクシーズには乗り気じゃなかったくせに無茶苦茶言いやがるわねあのやろ〜、仕事だからかな？

「つまり事故ってことですね、わたくしのターン！手札より《水精鱗―ディニクアビス》の効果を起動！手札の水属性モンスターを切り、特殊召喚致します！」

『グワアアアオ!!』

「特殊召喚時の効果でレベル4以下「水精鱗」の《アビスタージ》を手札に加えます。更に今捨てた《水精鱗―アビスヒルデ》の効果！手札から《サルファアビス》を特殊召喚!!」
『ホオオオ・・・』

《レベル7モンスターがこうも簡単に並ぶとは・・・》

《見たか！これがモモ様の「水精鱗」の力よ!!》

「えっ、手札から《サルファアビス》？アンタも軽く事故ってない？」

「これ手札事故なのか?！」

小声「ちよつとジュンコさん、会場の皆様は上級モンスターラッシュで騙されてるのですから黙っててくださいな・・・」

「(い)めん?」

「フン、早くターンを続ける」

「畏まりました、レベル7の《ディニクアビス》と《サルファビス》でオーバーレイ！深き海に眠りし水精の王、悠久の時を越え今日覚めん！エクシーズ召喚！ランク7《水精鱗―ガイオアビス》!!」

『又ウオオオオオオン!!』

《水精鱗―ガイオアビス》★7／水属性／水族／攻2800／1600

うつわ出た・・・モモが可愛くないって理由であまり出さない「水精鱗」の切り札。

《来たあ！モモ様のエースが1体!!》

《今行ったらエクシーズ召喚は、先ほどのシンクロ召喚とは若干異なり同じレベルのモンスターを複数揃えて従来の融合デッキから呼び出される特殊召喚モンスターだ、今のはレベル7が2体だからランク7エクシーズだね。チューナーが必要ない分どんなデッキでも自然に投入しやすいのも特長かな》

《そういうやあんま気にしてなかったが、ランクってレベルとなんか違うのか?》

《まあレベルの変わりの数値だけ・・・エクシーズモンスターはレベルを持たない、つまり《グラビティバインド》などの効果を一切受けないんだ。あと儀式・シンク

口召喚の素材にも出来ないね」

《吹雪、お前が解説だな実際・・・》

面倒そうだな、師匠、私デュエルする側でまだよかったかも・・・

「軽く同意ですわ、カードを2枚伏せてターン終了です」

ももえ H2

《水精鱗—ガイオアビス》(攻) ORU2

セットカード×2

《浜口は攻撃しなかったな、伏せ警戒か?》

《そうだね、展開時に発動しなかったことは攻撃反応系罫の可能性が高いと見て止めたんじゃないかな?》

「いちいち凶星ついてきますわね・・・ノルマのエクシーズ召喚はしたから良いでしょうに」

「へへっ、じゃあこの隙にこっちから攻めるぜ!俺のターン!」

「スタンバイフェイズに《強欲なカケラ》に強欲カウンターが1つ乗るわ」

「《増援》を発動!デッキから《エアーマン》を加えて召喚!召喚時の効果を・・・」

「《ガイオアビス》の効果を発動！ORUを1つ使い、このモンスターのより攻撃力が低いモンスターの効果を無効に致します！」

『グアアツ……』

「げっ、まじかよ……」

《因みにオーバーレイ・ユニットとゆうのはエクシーズモンスターの回りをクルクル回ってる光球のことだね、エクシーズ召喚の素材にしたモンスターがあればあたるよ》
《効果の使用時などに消費するんだよな！》

「止められたか……だったらこうだ！手札の《沼地の魔神王》を捨て、デッキから《融合》をサーチし発動！手札の《スパークマン》とフィールドの《エアーマン》を融合！
渦巻く旋風！《E・HERO Great TORNADO》!!」

『ハアアアツ!!』

《E・HERO Great TORNADO》星8／風属性／戦士族／攻2800／守2200

「フン、お得意の融合召喚か」

「おうっ！《TORNADO》の効果を発動！相手モンスターの攻守を半分にする、お返

しだー! 「タウンバースト」!!」

『ウググ・・・』

《《ガイオアビス》》(攻2800?1400)

「あらあら・・・」

「バトルだ! 《《TORNADO》》(攻2800)で《《ガイオアビス》》に攻撃!! 「スーパーセル」!!」

『・・・』

「あ、あれっ?」

「失礼、ORUを持つてる《《ガイオアビス》》がフィールドにいる限りレベル5以上のモンスターは攻撃出来ませんわ」

「えーなんだよそれ! 下級のモンスター効果は封じて上級モンスターは攻撃させてもくれないのかよー!!」

「レベル7を2体も使ってるから妥当っちゃ妥当な効果よね」

「むう、1枚伏せてエンドだ」

ジュンコ&十代 H0・H2

《A B F 雨隠のサヨ》(守)

《E・HERO Great TORNADO》(攻)

《強欲な欠片》強欲カウンスター

セットカード×2 (ジユ)

セットカード (十)

「そして、恐怖の俺のターンが始まる!」

「サポートしますわ、リバースオープン《トラップスタン》!このターン、《トラップスタン》以外のフィールドの罠の効果を無効にします!」

うわっ、やらしいタイミングで使うわね。フリーチェーンのないつつの……

「フン、余計な真似を……まずはこうだ!来い、雑魚!!」

『いやくん馬鹿くん』

《おじやまいエロー》星2 / 光属性 / 獣族 / 攻0 / 守1000

「はっ?」

「えっ?」

《おろつと万丈目君!いきなり攻撃力0のモンスターを呼び出したぞ!》

「えくと、万丈目？」

「万丈目さんだ！」

「そのやりとり飽きたわ・・・で、それ呼んでから？」

「何、この雑魚はあとから用事がある。次はこいつだ！《儀式の下準備》!! デッキから《スカルライダーの復活》およびこれに標されたモンスター、《スカルライダー》を手札に加えることが出来る!!」

「えっ、儀式? しかも《スカルライダー》!?!」

「ククク、何を驚く? 儀式召喚など貴様達が扱うモノに比べれば珍しくもないだろう。」
いや、儀式をイメージになかっただけです。

ってかよりもよって《スカルライダー》かよ! もつと使い易いのいるでしょ!

「《スカルライダーの復活》を発動! 手札から星6の《聖刻龍―トフェニドラゴン》を生け贄に儀式召喚! 蘇れ伝説の爆走王! 《スカアアアアルライダー》!!」

『ヒヤツハアアアア!!』

《スカルライダー》星6 / 闇属性 / アンデッド族 / 攻1900 / 守1800

「おおおお！なんかカッケー!!」

《あつ、あのカードは！ノース校の初代総長が愛してやまなかったとされる、伝説の《スカルライダー》じゃないか!!》

《流石はサンダーさん！俺達にはとても扱いきれなかったあのカードを使ってくれ
るだなんて!!》

《伝説なのか・・・》

なんでノースの初代総長の伝説知ってんだよアンタが！つてか総長つてなによ？ツ
キーじゃんそれ！やっぱあいつら？ンキーの集団?!

つてか後輩達にも使えない認定されてんじゃん《スカルライダー》！なんか可哀想ツ。

「ククク、確かに《おじやマイエロー》も《スカルライダー》もハタから見たら全く使え
ないカードだろう・・・だが！この俺様は違う!!コイツらを使つて貴様達を圧倒して
やろう!!」

『キャ、アニキカッコいい』

「ん？《おじやマイエロー》喋つてね？」

「ターンを続ける！生け贄にした《トフェニドラゴン》の効果を発動！こいつが生け贄にされた時、デッキ・手札・墓地から通常・ドラゴン族モンスターを攻守を0にして特殊召喚する！来いっ 《ラブラドライドラゴン》!!」

『グルウ・・・』

《ラブラドライドラゴン》 星6 / 闇属性

「げっ、そいつは!!」

「どうやら知っているようだな、今見せてやろう！俺の新たな力を！逝け！雑魚!!」

『がってん招致だよアニキィ』

「レベル2の光属性《おじやまいエロー》にレベル6のチューナーモンスター《ラブラドライドラゴン》をチューニング!!その眩き光にて、邪悪をもたらすものに終焉を！シンクロ召喚！光臨せよ《ライトエンドドラゴン》!!」

『グオオオオオ!』

《ライトエンド・ドラゴン》 星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守2100

シンクロ使ってくることは予想してたけども・・・おじやまほぼ使ってねーしい?!

シンクロ素材と化しただけじゃないですか！

「まっ、万丈目がシンクロ召喚だってえ?!」

「さんだ！この程度で驚くな十代！おい!!」

「はい♪わたくしのリバースカードオープン《死者蘇生》！《聖刻龍―トフェニドラゴン》を復活!!」

「そして俺様は魔法カード《二重召喚》を使う、増えた召喚権で《トフェニドラゴン》を生け贄とし《アームドラゴンLv5》を召喚!!」

「ギャオオオオオ!!」

《アームド・ドラゴンLv5》星5／風属性／ドラゴン族／攻2400／守1700

「あ、あれは！ノース校に伝わる秘宝のカード!!」

「フフフフ、言ったでしょう鮫島校長。私は本気なのだ!」

《おうつとここであ！伝説とも言われる貴重なLvアップモンスター、《アームド・ドラゴン》を繰り出してきたあ!!》

伝説って？まあこつち来てから（?）は視たことなかったけど・・・凄く無理矢理

出して来たわね。

「まだまだだあ！再び《トフェニドラゴン》の効果！デッキより通常ドラゴン族・《ギヤラクシー・サーペント》を特殊召喚!!」

『ギャオツ』

「ククク、レベル6の闇属性・伝説の爆走王《スカルライダー》に！レベル2の《ギヤラクシー・サーペント》をチューニング!!その深き闇にて、抗うものに終焉を！シンクロ召喚！出現せよ《ダークエンド・ドラゴン》!!」

『ヒヤツハアアア・・・』

《ダークエンド・ドラゴン》 星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2600 / 守2100

うおい?!素材なった伝説の爆走王乗り移ってませんか《ダークエンド》さん!

《なんとサンダー連続シンクロー!わずか1ターンで上級ドラゴンを3体も召喚した!!ジュンコ君も見習いなさい!!》

「私の場あ見て察しろやあ!つてかよく回るわね万丈目君のデッキ!!」

「凄つげえ、カッケエゼサンダー!!」

「なんだか、明日香さんの戦術と若干似てるね？儀式十バニラシンクロ」

機械天使OCG化おめでとう「ももえの影響かしらね、でも流星にあそこまでごちゃ混ぜじゃないわよ私」

「存外余裕だな！ならばこうだ《貪欲な壺》！《おじやまいエロー》《ラブラドライ》《ギヤラクシー・サーペント》《トフェニドラゴン》浜口の《アビスヒルデ》をデツキに戻しシャツフル！2枚ドロー!!」

事故要員なり得る通常モンスターを戻しちゃうんだ……相当引きの強さに自信あるのね。

「《アームドラゴンLv5》の効果！手札からモンスターを捨て、その攻撃力以下の相手モンスター1体を破壊する!!」

「なんだって?!それじゃあアニキの《TORNADO》が……」

「大丈夫なんだなあ、攻撃力2800以上のモンスターなんてそういないから対象はきつと《サヨ》の方なんだな」

「俺が捨てるのは《闇よりいでし絶望》！攻撃力は2800だ!!くたばれ《Great TORNADO》!!」「デストロイド・パイル」!!」

「隼人君の嘘吐きー!!」

「速攻魔法・《融合解除》！融合素材の《エアーマン》と《スパークマン》に分離!!」

『『ハアッ!』』

「《エアーマン》の特殊召喚時、効果発動！デツキから《シャドーミスト》を手札に加えるぜー!」

「・・・フン、間一髪かわしたか。ならば《ダークエンド・ドラゴン》の効果発動！自身の攻守を500下げ相手モンスター1体を墓地に送る！対象は《スパークマン》だ！

「ダーク・イヴァポレイション」!!」

『グハアッ!!』

《ダークエンド》（攻2600?2100）

「続けて《ガイオアビス》の効果発動！ORUを使い《雨隠れのサヨ》のモンスター効果

を無効にする！」

『?!』

「えっ《サヨ》?!・・・わざわざこんな低ステータス相手に効果を使ってくれるだなんてね」

「クククツ、強がりはやせ。主な貴様の「BF」の能力は浜口から聞いている、そいつは2度も戦闘では破壊されない厄介なモンスターだからな・・・」

モモの奴余計な真似を・・・

「お待ちかねのバトルだ！《ダークエンド・ドラゴン》で《サヨ》（守100）を攻撃！

「ダーク・フォツグ」!!」

『グヒイツ!』

《サヨ》の扱いがやつぱひでえ?!

「続いて《アームド・ドラゴンLv5》で《エアーマン》（守300）を粉碎！「アームド・バスター」!!」

『グホアツ!?!』

何故ラリアット!こんなだったっけ?!

「これで場はがら空きだ！《ガイオアビス》（攻1400）と《ライトエンド・ドラゴン》で十代にダイレクトアタック!!」「メールシュトロム」!」「シャイニングサプリメイション!!」

「うわあああああああ?!」

ジュンコ&十代 LP8000?4000

「十代!大丈夫?!」

「ああ・・・なんとかな」

「じゆうだしい・・・《融合解除》で効果をかわしたのは失敗だったかもしれないぞ、これで《アームド・ドラゴン》は更なる進化を遂げる!!」

「なっ、なんだってえ?!」

「《Lv5》が戦闘で相手モンスターを破壊したエンドフェイズに、このカードを墓地に送ることで手札・デッキから《アームド・ドラゴンLv7》を特殊召喚出来るっ!来い《アームド・ドラゴンLv7》!!」

『ギャオオオオオ!!!』

《アームド・ドラゴンLv7》星7／風属性／ドラゴン族／攻2800／守1000

「「「ワアアアアアア!!サンダー!サンダー!万丈目、サンダー!!!」」」

「ハハハハハハッ!見るがいいつ、これがアームド・ドラゴン究極の姿だ!この力で今度こそ、貴様達を倒す!!!」

「最ツ高ですわ!万丈目様!!」

《圧倒的なフィールド!ライフの差は2倍!!このままノース代表ペアが圧勝するか、はたまた本校ペアが逆転劇を見せてくれるのか!!・・・文字数の都合で1羽じゃ終わらないから次回に続くよっ!》

「「そんな理由かい(ですの)!!」」

18羽 《相棒》 って響きなんかカッコいい、憧れる。

・前回のあらすじ！

ノース校の代表ペアは、なんと万丈目君とももえ君だった！事故気味なジュンコ君の布陣、そのカバーの為に決死の攻撃をする十代君だが、まんまとかわされてしまう！そこに新たな力を得た万丈目サンダーの容赦無き攻撃が襲いかかった!!最強の夫婦対決の行方やいかに?!!

《 って感じだったかな? 》

「何が夫婦対決よ(だ)！誤解を招くような言い方はヤメロオ!!」

《 万丈目君とジュンコ君、君達意外と息が合うね。タイミングピッタリだよ? 》

「アンタが変な事言うからでしょーが(だろーが)!!」

「はあ・・・続けるぞ。エンドフェイズに《超再生能力》を発動、このターン《聖刻龍トフェニドラゴン》を2回生け贄にしたので2枚ドロ―だ、ターンエンド」

ももえ&万丈目 H2 / 2 LP8000

《ライトエンド・ドラゴン》(攻2600)

《アームド・ドラゴンLv7》(攻2800)

《ダークエンド・ドラゴン》(攻2100)

《水精燐—ガイオアビス》(攻1400) ORUO

最上級ドラゴンが3体・・・対する私達はモンスター0、伏せカードはバレバレな攻撃反応型。厄介な《ガイオアビス》がもう効果を使えないとはいえ、ちよつと厳しいわね。

《さて、要約2順目だ！前のターンの失敗を取りもどせるか?!》

「だから失敗とか言うな！うちの《サヨ》どんだけデイスってるのよ!!あとでデユエロコラー！私のターン!!」

「ターンを進めるかツツコミをするかどちらかに絞らないか?!」

「つさい！スタンバイフェイズに《強欲なカケラ》にカウンターが乗るわ、これを墓地に送って2枚ドロー！」

《また悠長なカードだなあ、《強欲な壺》でいいじゃねーか。途中で割られたらどうすんだ?》

元の世界
あつちで禁止だったカードは意地でも使わない、インチキBを使う私なりの流儀よ！

「じゃあ来たあ！さあおいで！ブラックフェザー《B F—蒼炎のシユラ》!!そして私の相棒《疾風のゲ

イル》を特殊召喚!!」

『シャンナロー!!』

『クルルッ!』

「まあつ、ここで《シユラ》と《ゲイル》ですか……」

「《ガイオアビス》の効果を《エアーマン》に使ったのは失敗だったわね、《ゲイル》の効果を発動!《ダークエンド・ドラゴン》の攻撃力を半分にしてあげるわ「ハーフネス・ゲイル」!」

『くゝるるゝ』

『ヒヤツハア……』

《ダークエンド・ドラゴン》(攻2100?1050)

「あとはこのカード次第!《強欲で貪欲な壺》発動!コストでデッキから裏側で10枚除外して、2枚ドロー!!」

《おつとお!》ここでデッキを大幅に削ってまで手札を稼いできた!強欲な上に貪欲

とは、彼女の欲は満たされることはあるのか!!」

「いちいちうっさいわあ!ここで相手を全滅させとかないと返して負けるでしょーが!」

えつと除外されたカードは・・・うげつ、旋風2枚にヴァーユ・ハルマツタン・グラディウスまでも逝った?!貴重なサーチ・リクルート対象が・・・ま、まあこればかりはしょうがない。

(→作者実話)

「よし、反撃開始よ!《シユラ》(攻1800)で《ガイオアビス》を攻撃!」

『シヤラア!』

『うゝお?!』

せ、正拳突きしおった・・・

「ツチイ・・・」

「《シユラ》のモンスター効果!戦闘でモンスターを破壊したのでデッキから攻撃力1500以下の・・・《上弦のピナーカ》を特殊召喚!」

『ピャッ!』

「続いて《ゲイル》(攻1300)で《ダークエンド》を攻撃! 「ゲイルスラスト」!!」

『クルルツ!』

『ノアアツ?!』

「おのれえ……」

万丈目&ももえ LP8000?7600?7450

「メインフェイズ2! レベル4 《蒼炎のシユラ》にレベル3チューナー、《上弦のピナーカ》をチューニングツ!」

「合計レベルは……7か!」

「よし、やっちまえジュンコー!!」

「まっかせなさい! 漆黒の翼翻し、雷鳴と共に走れつ電光の斬撃! シンクロ召喚! 降り
注げ、アサルト フラックフェザー 《A B F—驟雨のライキリ》!!」

『1羽遅れで参上!!』

《驟雨のライキリ》 星7 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2600 / 守1800

《来たか、彼女のエースモンスター!》

《漸く本領発揮ってトコかな? 全く・・・》

「まだ言ってるしあんにやろ・・・まあいいわ、魔法カード《アゲイスト・ウインド》で《突風のオロシ》回収、攻撃力分ダメージを受けるわ。

ジュンコ&十代 LP4000?3200

「んで再び特殊召喚! 《ライキリ》の効果発動! 自身以外の「BF」の数だけ相手のカードを叩つ切る!! 現在は《ゲイル》と《オロシ》の2体! 対象は《ライトエンド・ドラゴン》と《アームド・ドラゴンLv7》!!」

『参る! 「ライトニングエッジ」!!』

あ、? イルズっぽい技名は止めたのね・・・

『『ギャオオオオオ?!』』

「フツフーン、こつちのがよっぽどへサンダーよね」

《ジュンコ選手、あのフィールドを壊滅させたー!! 流石は強欲で貪欲なインチキ効果

だ!!」

「色々混ぜんなあ!」

「《ライトエンド》! 《アームド・ドラゴン》!! …… 貴様あ、やってくれるではないか!」

『むっ、我のことか』

「当たり前だろう! 他に誰がいるんだ! 鳥人ジョーみたいな格好しておって!!」

『ち、鳥人ジョー?!』

『クルルウ(ため息)』

「やっぱ見えてるみたいね…」

「万丈目く、やっぱお前も精霊見えるんだな」

「ちよっ、公衆の面前でそうゆうの止めない?」

「激しく同意ですわ… 全国に痛いコ4人組とか思われたくありませんし」

実はCVがもえ『アニキく、やっぱり皆見えてるんだよお。オイラの兄弟のこと知ってる人いるかも!』

「ええい! 大人しく墓地に引っ込め攻撃力0!!」

「… 続けてよっつと、カード1枚伏せてエンドフェイズに《上弦のピナーカ》の効果

で《残夜のクリス》を手札に加えて終了よ」

ジュンコ&十代 LP3200 H1/3

《驟雨のライキリ》(攻)

《疾風のゲイル》(攻)

《突風のオロシ》(守)

セットカード×3

「わたくしの番ですわね、ドローしてつと……」

モモの奴、万丈目君のサポート用にデッキだいたいじってるっぽいなく唐突に変なカードだしてこなきやいいけど。

「うくん、仕方ありませんね。お願いします 《深海のディーヴァ》さん！」

『ヤツホク、ジュンコ久しぶり〜』

「なんか自然に会話してるな……ももえも精霊持ちだったのか」

「はあく、だから嫌でしたのに。まあ今更ですかね？効果発動、デッキから……」

「はい久しぶり、リバースカードオープン！毘カード《ブレイクスルー・スキル》!!

《ディーヴァ》の効果は無効にするわ！」

『ありやま……久しぶりなのにあんまりじゃない?』

「アンタの効果通したらなんか無茶苦茶されるでしょーが! 暫く黙ってて頂戴!」

「手札より速攻魔法発動! 《マスクチェンジ・セカンド》!!」

「ちよつ、ももえアンタア?!」

「どうしたんだジュンコ、あのカードなんかやばいのか?」

「フフフフ、手札1枚を捨ててフィールドの《深海のディーヴァ》さんを墓地に送り……EXデッキから効果で墓地に送ったモンスターと同じ属性の「M・HERO」を特殊召喚致します!!

「まっ、「M・HERO」だあ?!」

「《ディーヴァ》さんを変身!! 邪魔ものは溶かして進む! 《M・HERO アシッド》!!」

『ちよつとモモ! この格好窮屈!!』

《M・HERO アシッド》(inディーヴァさん) 星8 / 水属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2100 /

「なんだあこいつは?!」

《おくとお! ももえ選手、相手の罠を回避する為に新たなHEROを呼び出したぞー!!》

「すっげー?!融合無しでの融合召喚みたいなものか!」

「手札1枚捨ててるんで消費は変わりませんけどね?《ブレイクスルー・スキル》は対象不在になり《深海のディーヴァ》墓地に行きましたが、あくまで召喚時の効果!効果は適用されますわ!おいでませつ、《ニードル・ギルマン》!」

『ギヒツ』

あ、あれっ?海皇じゃないし……

「更に《アシッド》の強制効果!相手の魔法・罫カードを全て破壊致します!」
「アシッド
レイン」!!」

「クツソウ、《ミラーフォース》と《ブラックソニック》があ……」

「あら怖い怖い……まさかの両方共攻撃反応でしたか」

「む、無茶苦茶な効果だな。《大嵐》より強くないか?」

「まだまだですわ!この効果の後、相手モンスター全ての攻撃力も300ポイントダウンします!」

『ぎやあああああ?!ちよつと溶けて刀零れしたあ!!』

『グルウく……』

『グヘツ』

《ライキリ》(攻26000?23000)

《ゲイル》(攻13000?10000)

《オロシ》(攻 8000?5000)

「バトルです! 《アシッド》(inディーヴァ)で 《ライキリ》を、《ギルマン》(攻17000)で 《ゲイル》を攻撃! 「アシッドバレット」! 「串焼きの下準備」!」

「二つ目の技名なによ?! キャアツ」

ジュンコ&十代 LP32000?29000?22000

「ハハハハハハッ! 枕田あ、貴様の相棒達も大したことはないな? 実質浜口の 《ディーヴァ》 1体に壊滅させられたようなものではないか! よくやったぞ浜口!!」

《む、無念……》

「お褒めに預かり光栄ですわ♪わたくしはこれにてターンエンドです」

ももえ&万丈目 H0/2 LP7450

《M・HERO アシッド》(攻)

《ニードル・ギルマン》(攻)

「しっかしとんでもないHEROもいたもんだな、《アブソルートZero》に匹敵するぜ……ジュンコはあれ知ってたのか？」

「あくうん、持つては無いんだけどね。変に期待させたく無かったのよ」

あくあ、十代にはあまり知って欲しくなかったなあ……私のエゴだけどさ。

《シャドーミスト》のテキスト？大丈夫ばれてないばれてない、《チェンジ》速攻魔法つてなんだ？とか言ってたし。

「未知のHEROかあ、燃えてきた！俺のターンドロー！《E・HERO シャドーミスト》を召喚！」

『フフフッ』

《シャドーミスト》星4/闇属性/戦士族/攻1100/守1500

噂したらきたっ?! まあサーチしてたもんね。

「フン、単体で何が出来る?」

「融合等の素材にしてなんぼのモンスターですものね、召喚したつてことは《融合》は無
いのでしょうか」

「単体? 何言つてんだ、まだジュンコのモンスターが1体いるんだよ!!」

「何?!」

「へっへっ、ちよつと言つてみたかったんだよな。ゴホン!... レベル4の《シャ
ドーミスト》に、レベル1のチューナーモンスター《突風のオロシ》をチューニング!!
黒き烈風よ! 絆を紡ぐ追い風となれ! シンクロ召喚! 飛び立て《A B F 五月雨のソ
ハヤ》!!」

『...?!?!
?!?!』

《五月雨のソハヤ》星5 / 闇属性 / 攻1500 / 守2100

《おおつとこれはどうゆうことだ?!! 融合使いだと思われた十代選手が、突如シンク

口召喚を繰り出してきたー!!」

「《シャドーミスト》が墓地に送られたので《プレイズマン》を手札に加えるぜ!」

「ジユンコさんの仕様ですね。十代様には「融合以外似合わないから使つて欲しくない!」とか言つてませんでしたっけ……」

「タツグの場合は例外よ、例 外!メインデッキはあんまいじつてないし…….
でもしないと私達の場合互いにシナジー皆無だもの」

まあ、まさか出るとは微塵も思つて無かつたわけで…….《ソハヤ》も困惑してるっ
ぼいわ、ごめんね?

「そういうこと、《五月雨のソハヤ》効果発動!召喚時に墓地の「A BF」を特殊召喚
出来るぜ、もう一回頼む!《雨隠れのサヨ》!!」

『サヨツ?!』

「またそのコですか……. 似非侍さんのがマシだったのでは?」

「へっへっくん、俺の融合デッキにはもう1枚「BF」がいるんだよ!レベル2の《雨隠れ
のサヨ》にレベル5チューナーとなつてる《五月雨のソハヤ》をチューニングだつ!!」

「なんだと?!」

「えくとたしか、漆黒の……翼濡らし、そば降る雨に響け！雷鳴の一撃！シンクロ召喚！！突き抜ける《A B F―涙雨のチドリ》！！」

『おーっ?!まじで出してくれるとはなあ!!』

《A B F―涙雨のチドリ》星7／闇属性／鳥獣族／攻2600／守1800

「さつきも思ってたけど、よく口上空で言えるわね……」

「ちよつと練習したんだぜ、ジュンコの試合の録画観てな。」

「何それ恥ずい」

「《チドリ》の攻撃力は墓地の「B F」の数×300！今、俺達の墓地には8体！」

「攻撃力……5000だとお?!」

「いっくぜえ〜《チドリ》で《アシッド》を攻撃！雷鳴の一撃！「ライトニングスラッシュ」

!!」

『チエストオ!!!』

『キャアアア!?!』

「《ディーヴァ》さん！」

ももえ&万丈目 LP7450?6050

「カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

ジュンコ&十代 H1/2 LP3050

《涙雨のチドリ》(攻5000)

セットカード

《ターンが代わり状況がまた一新!ライフは俄然ノース代表が上回っているものの、攻撃力5000の登場は大きい!!》

《ぼつきやろう!あの二人が、ただの脳筋相手に苦戦するはずがねえ!!》

アンタが去年負けたカイザーさんも失礼だけど脳筋じゃね?

「クツクツクツクツク、そこなくてはな!一方的な勝利などなんの面白味もないわあ!!俺のつ、ターン!!」

「スタンバイフェイズに、墓地から《黄泉ガエル》の効果発動!自陣に魔法・罠が無い場合蘇る、ですわ!」

『ゲロオツ』

《黄泉ガエル》水属性/星1/水族/攻100/守100/

「うへっ、《マスクチェンジ・セカンド》で捨ててたの?! ちゃっかりしてんわね〜……」
「フン、折角のアシストだが必要無いかもしれん。面白いカードを引いたからな……」
「面白いカード?」

「な、なによ一体……」

「魔法カード《魔導契約の扉》! 十代! 貴様にはこの魔法カードをくれてやろう、好きに使うがいい!」

「お、カードくれんのか?!」

とか言いながら十代に向かつてのカード手裏剣である、投げる方も投げる方だけよくキヤツチ出来るわねえ。

「これにより、俺はデツキからレベル7か8の閻属性モンスターを手札に加えることができるのだ!」

「ちよつと〜! ちゃんと公開しなさいよ!!」

「フン、すぐに見せてやろう! 俺の墓地には伝説の爆走王《スカルライダー》《闇よりいでし絶望》《ダークエンド・ドラゴン》がいる。この意味が貴様達にはわかるか?!」

「は? ラインナップばらばらすぎてさっぱりわかんねえ……ジユンコは?」

「ま、まさか……墓地に閻属性3体?!」

「その通り! 蹂躪せよ漆黒の鎧龍! 《ダーク・アームド・ドラゴン》!!!」

『ギャオオオオオ!!』

《ダーク・アームド・ドラゴン》星7／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守1000

「こつ、これは?! あんなカードわたしはしりませんぞ!」

「フフフフ、何度でも言いますぞ鯨島さん。私は本気だとね!!」

「黒い《アームド・ドラゴン》だつてえ?!」

「フハハハハハハ! 表があれば裏もまたそこに存在する、これが裏の切り札《ダーク・アームド・ドラゴン》だ!!」

うつわまじすか、ボチャミサンタイ様きたわ・・・コラももえ、ドヤ顔すんなドヤ顔を。

「コイツの効果は残酷だぞ? 墓地の闇属性モンスターを除外し、フィールドのカード1枚を抹殺する! 2枚《闇よりいでし絶望》と《スカルライダー》を除外し、貴様達のフィールドを壊滅させてやる! 《ダーク・ジエノサイド・カッター》!!」

『ヒヤッハアアア!!』

総長の亡霊（＋他） 飛んできたあ?!

「クツ、リバースカードオーブン! 《クリボーを呼ぶ笛》! 頼むぜ相棒! 《ハネクリボー》を特殊召喚!!」

『クリクリッ』

『あ、俺は放置ね? ギャアアアア!!』

「《チドリ》がミンチドリになった事により効果発動、墓地から《ライキリ》を復活させるわ!!」

《ハネクリボー》 星1 / 光属性 / 天使族 / 攻300 / 守200

「貴様らの相棒達か・・・《ライキリ》は兎も角、《ハネクリボー》など《進化する翼》無しではなんの脅威でもないわ! あの時の屈辱を返してやる!!」

「俺の相棒を馬鹿にすんなよ万丈目!」

「そうよ! 似非侍の《ライキリ》と違ってかわいいじゃない!!」

《君達、論点がずれてるよ!!》

『そして相変わらずの私の扱いである・・・めげぬし』

「……だが少し羨ましくもあつた、そんな存在を身近に持つお前達を……見えてしまふと尚更な」

「万丈目様……」

「ん？なんかいつたか？」

「声小さくて聴こえなかつたわ」

「フツ、だか俺にもそんな存在が出来た……」

『オイラのこゝ』

「違うわっ！……見るがいい、我が《相棒》の姿を!! 浜口の2体のモンスターを生け贄に捧げる!!」

そいやまだ召喚権残つてたつけ、え？相棒？

「俺と供に戦つてくれ……光と闇の狭間より、降臨せよ! 《光と闇の竜》!!」
『グルルル……グワアアアアアア!!』

《光と闇の竜》 星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2400

《ふ、ふつくしい……》

《吹雪どうした?!》

《サンダーさん、あんなカードまで……》

「こいつが俺の相棒、地獄の底で出会った我が最強のモンスター……《光と闇の竜》だ!!」

「すっげえ……チョ……カッコイイー!!」

「う、ウン」

ま、まさか《光と闇の竜》まで出してくるなんて。ん?地獄の底で出会った?あのコ

まさか……

「きゃ〜!最高ですわ万丈目様!!」

あ、こっさりブイサインしてるし……仕込んだわね。

「サンダーと呼べ!」

「二「万丈目サンダー!!!」」

「バトルだ!《光と闇の竜》よ!十代のハネクリボー《相棒》に、力の違いをみせてやれ!」

「インデイクネイト」

「このタイミングでボケるな浜口！」
「ダーク・パプティズム!!」

『ガアアアアア!!』

『クツ、クリクリ〜?!』

「あつ、《相棒》！けど《ハネクリボー》の効果が発動、このターンの戦闘ダメージを……
「甘いな、《光と闇の竜》効果発動！攻守を500下げ、あらゆる効果の発動を無効にする!!」

『グルウ……!!』

『クリイ……』

「まつ、まじかよ?!」

結構無茶苦茶な効果よね、弱点がないわけじゃないけどこの場合は……

「《ダーク・アームド・ドラゴン》よ《ライキリ》そいつもミンチにしてやれ！《ブラツク・アームド・バニツシャー》!!」

『ギャアアアアア!』

「《ライキリ》!……せめてミンチドリと合わせて兄弟丼にするからねっ」

『解せぬう……』

ジュンコ&十代 LP2200?2000

「ジュンコさん、お腹すきましたの・・・?」

「存外余裕だな、気に食わん!俺はこれでターンエンドだ。トドメは貴様にまかせる」

「畏まりですわ♪」

ももえ&万丈目 LP6050 H0・0

《《ダーク・アームド・ドラゴン》(攻)

《《光と闇の竜》(攻2800?2300)

「いいぞー準!!ももっち!!」

「サンダー!サンダー!万丈目サンダー!!」

「モモ様~!!」

《《ノース代表圧倒!!初巡のシンクロモンスター達とはまた一味違った、大型ドラゴン達の応酬だ!どうする本校側!!》

《《あの効果が問題だな、後最低3回は効果を無効にされるわけだが・・・》

「かゝつ、すまねえジュンコ。お前のモンスターまでひどい目に・・・」

「気にしないの、除外されたわけじゃないから大丈夫よ。私のターン、ドロー!!」

《これで3巡目だな、手札2枚であのドラゴン達を突破出来んのかねえ》

「よし……こうなりや正面突破よ! 《弔風のデス》 召喚!」

『グアーツ!』

「デス? フツ、物騒な名前だな。それほど強力そうではないが」

わざわざ相手のモンスターにケチつけないでよ……それとも煽ってミスを誘ってんのかしら。

「悪いけどこのコが《光と闇の竜》攻略の糸口よ、召喚時に効果発動! レベルを1つ上げるか下げることができる!」

「……!」 ライトアンドダークネス 《光と闇》の効果を……発動!」

《光と闇の竜》(攻2300?1800)

《えっ、なんであんな効果無効にするんだ?》

《おそろく……強制効果、どんな効果が発動しても無効にしてしまうのだろう》

「そう、アンタの相棒は確かに凄いけど……無差別なのよ! 《残夜のクリスマス》を特殊

召喚!」

《キシヤツ》

「レベル4の《クリス》にレベル4《デス》をチューニング！漆黒の風を纏い、末世より飛翔せよ！シンクロ召喚！黒き魂《玄翼竜》 ブラック・フェザー！！」

《グウオオオオオ．．．》

《玄翼竜 ブラック・フェザー》星8／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守備1600

《出ましたっ！名前の割りには効果も「BF」に關係無いもはや鳥ですらなくドラゴン！！僕は結構好きけどねっ》

「アンタはダークとかブラックとかデーモンとか．．．ぶっちゃけドラゴンだったら大体好きだけじゃん！いちいち突っ込むんじゃないわよ厨二病患者が！」

《そうさー！だから万丈目君のフィールド込みでかなり僕の目の保養になっている！！》

《あの罵倒(?)くらってダメージ無いどころか開き直るだど．．．》

「．．．もくほつとこ、バトルよ！《光と闇の竜》(攻1800)に攻撃！「ブラック・レイジ・エントリー」！！」

『ガアアアアア!!』

『ギャオオオオ．．．』

ももえ&万丈目 LP6050?5050

「《光と闇》!!おっのつれえ・・・最後の効果を発動!自分フィールドのカードを全て破壊し、墓地のモンスターを復活させる・・・《光と闇》の魂を受け継ぎ甦れ!《ライトエンド・ドラゴン》!!」

『グオオオオ!!』

「・・・エンドフェイズに《弔風のデス》を素材にシンクロを行ったので1000ダメージを受けるわ」

ジュンコ&十代 H0・2 LP 2000?1000

《玄翼竜 ブラック・フェザー》(攻)

「わたくしのターンッ・・・スタンバイフェイズで《黄泉ガエル》復活。バトルです!《ライトエンド》で《ブラック・フェザー》を攻撃!「シャイニングサプリメンション」!!」

「うっ、向かえ討て!「ブラック・レイジ・エントリー」!!」

「無駄ですわ!《ライトエンド》の攻撃宣言時、攻守を500下げることによって戦闘するモンスターを1500下げさせて頂きます!「ライト・イクスパンション」!!」

《ライトエンド》(攻2600?2100)

《ブラック・フェザー》(攻2800?1300)

『グオオオオッ』

「キヤアアアアッ!？」

ジュンコ&十代 LP1000?200

「カードを伏せてターンエンドですわ」

ももえ&万丈目 H0・0 LP5050

《ライトエンド・ドラゴン》(攻)

《黄泉ガエル》(守)

セットカード

「申し訳ありません、絶好のチャンスでしたのに・・・」

「構わん。俺自身で奴等にトドメを刺せるのだ、むしろ感謝しなくてはな？フハハハハハ」

「だったら万丈目にターンを回す前にきめてやるぜ！俺のターン！」

「フン、やれるものならやってみるがいい！ライフ5000オーバーを削り切れるものならなー！」

「おう！まずはさつきサーチといた《ブレイズマン》を……」

「スタンバイフェイズに罠発動！」

「えっ？」

「《マインド・クラッシュ》!!宣言するカードは《E・HERO ブレイズマン》!!さあ、手札を公開してくださいな（ニッコリ）」

《こ、これは鬼畜！サーチを多様する「HERO」相手にピーピングハンデスだあ!!》

《流石はモモ様！普段は防御とか考えなくせに、人の嫌がるポイントはしつかり抑えているぜ!!》

《それは褒めているのか?!》

「クツ……」

十代手札

《E・HERO ブレイズマン》

《E・HERO エッジマン》

《ミラクル・フュージョン》

《龍の鏡》
ドラゴンズ・ミラー

「あ、あらっ? とりあえず《ブレイズマン》を捨ててくださいな」

およ、《龍の鏡》・・・? あっ、万丈目君が《魔導契約の扉》で渡した奴ね! チャンスかも!!

「万丈目様! なんであんなカード渡したんですか!!」

「ム、《龍の鏡》のことか? 《ダーク・アームド・ドラゴン》の方がファイブ・ゴッド・ドラゴン《F・G・D》より有効だと思っつてな、どうせ十代の馬鹿には使えないのだから・・・」

「十代! それ使っつて!!」

「は? だっつてこのカードっつてドラゴン族融合モンスターを・・・そうか! 《龍の鏡》発動!!」

「なんだとお?! 貴様がドラゴン族の融合モンスターなど持つているハズが、大体素材となるモンスターが居ないだろう!」

「墓地の《ブレイズマン》と・・・ジュンコの《玄翼竜 ブラック・フェザー》を融合!! 赤き戦士の力と、黒き翼の力をひとつに! 融合召喚! 《波動竜騎士 ドラゴエキイテス》!!」

『グオオオオオ・・・ハアツ!!』

《波動竜騎士 ドラゴエキイテス》星10 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻3200 / 守2000

「ば、馬鹿な！何故貴様の融合デツキにドラゴン族が!!」

「へっへっくん、融合素材がドラゴン族シンクロと戦士族なんだよ、ジュンコがたまに出すからワンチャンあるかもって譲ってくれたのさ！な、ジュンコ!!」

「十代と……私の……の融合……イイ……」

「あ、あれっ？なんか様子が……」

「しばらく放っておいて結構ですわ」

「だ　　が！《ライトエンド》は戦闘するモンスターの攻撃力を1500下げるのを忘れたか！3200程度ならっ……」

「慌てんなよ、さっき手札公開したろ？《ミラクルフュージョン》発動！墓地の《スパークマン》と……ちよつと物足りない気分になるけど《沼地の魔神王》で融合！来い！《E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン》!!!」

『ハアッ!!』

《E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン》星8／光属性／戦士族／攻25

00／守2100

「このモンスターは、墓地の「E・HERO」の数×300アップする！現在3体だから3400だ!!」

「攻撃力3400と・・・3200・・・」

「そして《ドラゴエクイテス》の効果発動！万丈目の《ダークエンド・ドラゴン》を除外して、同じ効果を得る、攻守を500下げて《黄泉ガエル》を墓地に送るぜ！「ダーク・フォッグ」!!」

《ドラゴエクイテス》(攻3200?2700)

「グツ、相手墓地のモンスター効果をも奪えるだと・・・《ダークエンド》を温存しておいた事が裏目に出たか」

「バトルだ！行つけえ！《シャイニング・フレア・ウイングマン》!!《ライトエンド・ドラゴン》を攻撃！「シャイニング・シユート」!!」

「まだだあ！《ライトエンド》の効果を再び発動！攻守を500下げ・・・」

「アツ、墓地より罠カード発動よ！《ブレイクスルー・スキル》!!《ライトエンド》の効果は無効にするわ！」

《墓地から罠?!》

「墓地から罠だとお?!」

「ぼ、ぼ、墓地から罨カードなんて卑怯ですわ！」

「驚き過ぎだろアンタら！てかモモは知ってんでしょこれえ!!」

「てへっ、すっかり忘れてましたわ♪」

「おいおい……まあこれでバトルは変化無く実行だ！」

『ハアアアアア……トアアア!!』

『ギャオオオオ……』

『《ライトエンド》!!』

「《シャイニング・フレア・ウイングマン》は《フレイムウイングマン》の能力を受け継いでいる、戦闘で破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けてもらうぜ!!」

「うわああああ?!」

ももえ&万丈目 LP6050?5250?2650

「そんな……ライフが……」

「トドメだあ! 《ドラゴエキテス》のダイレクトアタック! 「スパイラルジャベリン」

!!」

「ちく……しょう……」

ももえ&万丈目 LP2650?0

WIN ジュンコ&十代

ノースの皆さん 「「「「あああああゝ!!」「」」」

《決着ゝゝゝ!!勝者は本校代表ペア、遊城十代君と枕田ジュンコ君だー!!!》

「「「わああああああ!!」「」」」「いよっしやあつ!やったぜジュンコオ!!」

「いちいちハグすんなあツ!全国流れてんのよこれ!!」

《はいはい君達ゝ、イチヤつくのは寮に帰ってからにしてねゝ》

「イチヤついてないしむしろ襲われてるわっ!あと帰ってもそんなことしないしっ」

「えゝ」

「万丈目様……申し訳ありません、わたくしの力が至らぬばかりに」

「みなまで言うな!……俺のミスだ、あの場は《ダーク・アームド・ドラゴン》だけでも……いや、《光と闇の竜》だけでも良かった。お前は何も失敗していない……変に意地を張った、俺のミスだ!!」

「万丈目……」

十代、シリアスな顔するなら離してからにしてくんない?私のライフも0にしたいの

?

「お前は強かったぜ、今回勝てたのは俺達の運が良かっただけさ」

「心にも無い事を……!」

「本当にそう思ってる!……でも今度はさ、本当に本気の万丈目サンダーとデュエルしてえな」

「万丈目様が、本気では無かったと?」

「だって万丈目さ、目の前にいるのになんか……別の何かと戦っている様に感じたんだ」

「……」

なんでコイツは……そうゆう事には敏感かなあ?!私の気持ちとかには全ツ然アレなくせに!!てかこの状態で話進めんな色々台無しでしょ!!あゝ……もうダメ。

「十代様、お気持ちはわかりましたが……そろそろ離してあげたらどうです?」

「えっ?!ジュンコ!!どうしたんだ顔真っ赤だぞ!!熱でもあんのか?!なんか目も虚ろだし……しっかりしろ、ジュンコー!!」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「明日香さん怖いッス。あと、テンプレエ……」

殺到と現れる音へババツバツ

「準！自分が何をしたのかわかっているのか!!」

「万丈目グループの恥晒しめ！」

「違いますわお兄様方！わたくしが無力だったのです、わたくしが弱いから……」

「……」

「ええい、嫌い！役立たずは黙っている!!」

カチン 「役立たず、だと……」

ハツ 「役立たず、ですって……」

「おっ、復活した」

え、人が意識飛んでる間に万丈目兄 s 降りてきてんじゃん。とりあえず言いたい事

は……

「ふぎぎk」

「ふぎけるな!!」

．．．．．ありや？

「コイツが役立たずだと?!見当違いにも程がある!!」

「じ．．．．．準?」

「たしかにコイツは空気読めなくて勝手にどこまでもついて来て、人の心を抉るわ風呂覗くわ不法進入するわ俺の嫌いな人參をこっそり皿に増量するわでろくでもない女だ!!」

「．．．．．」

いや、何やってきたのよモモえもくん．．．

「だが．．．だがっ、孤独に追いやられた俺をつ、支えてくれたのも．．．このろくでなしなんだ!コイツを悪く言っつていいのは俺だけだ!!」

「準様．．．．．!」

「準．．．．．」

「今回の勝負は!．．．俺が弱かったから負けたんだ。コイツを悪く言うのは筋違いだ!」

「わたくしは……」

「黙ってる!!……帰ってくれ、兄さん達」

「お前ツ……!」

「帰ってくれ!!」

「そうだー帰れー!!」

「負けたけど、感動したぞー!」

「サンダー!サンダー!」

「モモ様ー!素敵でしたー!!」

《最高のタツグだったぜ!!お二人供!!》

「「帰れー!」」

《かつえくれっ!かつえくれっ!さっさとかつえくれっ!》

《吹雪、悪乗りはやめておけ……》

長作「いくぞ、正司」

「しかし兄者！」

「……かつて準が、あのように他人を庇うことがあつただろうか」

お兄さん達行っちゃった。な、なんか解決したっぽいけどとりあずさあ……

「勝つたの私達よね？ すつかり埋もれてないかな」

「まあ、たまにはヒール敵役もいいんじゃないか？

「いいなお前達！ 1度や2度の敗戦で俺はもうへこたれんぞ!!」

「[[[[おー!!!]]]]」

「敗北は誰にでもある！ しかあし！ 人はそこから立ち上がることで進化するのだ!!」

「[[[[おおおお!!!]]]]」

「俺はこの敗戦をバネに、限りなく進化を続ける！ 何故なら俺は！」

《一!!》

《十!!ほら、 亮も》

《ひゃ、百!!!?》

「千!!!」

「万丈目さん、だからだ!!!」

「サンダー!サンダー!万丈目、サンダアアアアアアア!!!」

うーん、この会場を乗っ取る人気っぷり。こちら完全に茅の外ですね・・・
かくしてノース校との学園対抗試合は、万丈目君がちよつと男らしさ(?)を見せて
幕を閉じましたとき。

続いてみせるっ!

19羽 the JOIN side of dark
ness

前回のあらすじ

主人公、サンダーでいいんじゃないかな？

ジユへいいわけあるかあ！

そんなこんなで対抗試合が終った、この僕も面倒な司会進行なんて仕事も終了！ジユンコ君も最近様子が変とか聞いてたけどすっかり元の調子のようだし……さくて、久しぶりに愛しの明日香の元に緊急レポートするとしますか?!

「吹雪……」

「なんだい亮！僕はこれからアスリンの元へ全速★前進しなければならない！」

「携帯、鳴っているぞ?」

「へパパーパパーパンパン！パパーパパーパンパン！（DMのBGMのアレ）

「なにつ、この着信音は！」

「ピッ！」

〔From:ISONOさん〕

御疲れ様です。

以下、瀬戸様の仰った事をそのまま文にしました。

「ふうん、急な司会進行ご苦労だった・・・」

なんて言うと思ったか!!シンクロ召喚はある程度出来ていたが、エクシーズの方はさっぱりではないか、この凡夫があ!!やはり小娘共では埒が明かん!我々が直々に新たな召喚方を全世界へ知らしめるぞ、TV枠はもう明けたから至急アメリカI2社まで来い!!以上だ!!」

PS:頑張って下さい」

・・・無茶振りキタ、つい半日前にアメリカからアカデミア帰って来たばかりですよ社長殿。至急って何時間かかると思ってるんだい!まあ仕方ないか、明日香の次くら

いに可愛い（なんて本人達に言ったら絶対に怒るが）弟子二人を自由の身にしてもらおう
為だ。師匠の僕が頑張らないとね……

「フツ、どうやらお楽しみはこれまでのようだね……僕は行く！後は頼んだよ亮、明日香に宜しく！アデュー!!」

「おいこら吹雪！頼まれても困るぞ！吹雪ー!!」

《あつ、あの馬鹿どこいった!!》

《か、風のように去りぬ……》

中略、I2社？収録会場着

「遅い……遅いぞ凡夫ウ!! 貴様一体この俺をどれだけ待たせる気だ！予定より3分1
2秒の遅れD Aー!!」

「急にアカデミア飛ばした上にいきなり呼び戻しておいてエライいいようですね社長！
ある意味安心したよ!!」

「ハツハツハツ、タイムイズマネーですよ？吹雪ボーイ」

「もう・・・ジュンコ君も連れてこれば良かった、ここで僕まで普段通りでは場が混沌としてしまう！」

ISONO「自覚はあるのですね吹雪殿・・・」

ボケとツツコミは表裏一体、ある程度空気を壊すには空気を読む以上に技術がいると
きがあるのさ！

真紅眼さんですよ『誰に言ってるんだいブッキー?!』

「大体、わざわざ僕と社長でデュエルしてまで宣伝する必要あるんですか？I2社の誰かと誰かで良かったのでは・・・」

「それがデスネー・・・」

「フウン、それでは俺が面白く無い！」

あつ、この人僕でうさ晴らししたいだけだ。あのデュエル（10・11羽参照）で妙

に気に入られちゃったのか、週1くらいでわざわざデュエルしに来るんだよね……嫁
ジェットでアメリカくんだけりまで。

『なんでも「凡骨をいたぶっているようで実に気分がいい」らしいな……』

「ククククククッでは早速始めるぞ！準備しろ凡夫ウウウ!!」

？

アメリカ青眼社長の嫁ドームより……

「レディースエーンジェントルメーン！世界中のデュエリストのみなサーン！」

つてわけで収録が始まりました、改めて新召喚の説明とかしてるだけなんでこの辺り
省くね。

「……まだまだ調整に時間がかかりそうなので、一般の発売は今年の8月末からにな
りマース!!」

よくするにアカデミア来年度あたりだね。それまで一般人には使うな小娘共オ！b
y社長

「先日のデュエルアカデミア対抗試合で一部をご覧に入れましたが、今日は本格的にデュエルの中で紹介していきマース!!カモン！」

はいはい今いきますよ……

「前振りが長いわペガサス!!貴様の演技がかつた喋りを全て聞いていたら、日が暮れるわあ!!」

「瀬人様ー!!そんな所で憤慨なさらしないで下さい!!」

「小難しい事はいい、ようは世界中の諸君にこの俺直々に新たなシス→テム←を紹介しようというのだ!有り難く思うがいい、フフフフワハハハアーツハツハツハツハツハ!!」

ちよつ……なんでこんなテンション高いんだろうね社長、デュエル中他一部を除

きわりかしクールな人じゃなかったっけ？ 磯野さん大変だなー……

「さあ来るがいい、この俺自ら選んだ名誉実験鼠よ!!」

「お呼びとあらば……トウツ!!」

入り口に滅茶苦茶炊かれたスモークを突き破って突撃する僕、なお名誉実験鼠は社長がつけた社内役職である。仮社員証にもそう書いてあるのが恐ろしい……。

「着地っ、君達の瞳に……何が見える?」

英語「空?」

(ry)「天?」

「~~~~~JOIN!!」

「「「キヤー! ブツキ~~~~!!」」」

真紅(ry)『キヤー! ブツキー素敵ー!!』

えっ、何故アカデミア内でも無いアメリカの会場で歓声があがるかつて?

一応I2社に拉致られている間、アメリカアカデミアにも一応籍を置いたのさ! 空き

時間に少しだけ通っていたんだよ……その時出来たファンだね!

『うん、この癖はどこいつても直らないんだよな。もう諦めたよ』

「理解のある相棒でなによりだ!」

「貴様、この俺の前で小娘共相手にふざける余裕があるとは……」

「ファンサービスは大事ですよ社長、てか社長殿も出てきただけでキヤーキヤー言われているじゃないか!」

「フウン、御託はいい。始めるぞ!!デュエル開始の宣言をしろ!いそ、ではなくペガサス!!」

「ハツハー、海馬ボーイが楽しそうなのでデュエル開始シマース!」

『いいんだそれで?!』

「デュエル!!」

《シン→クロ←召喚! ブルーアイズ・スピリットドラゴンの精霊龍!!》

《エクシーズ召喚! レッドアイズ・フレアタルドラゴンの鋼炎竜×3!!》

《貴様ア!!》

《あ、ちよ、それ融合・・・ギャー!!!》

デュエル後々夜の帰り道。

「はあ・・・」

『お、御疲れ様々ブツキー』

「いやあ流石に酷くない？僕なりにエクシーズを理解してもらおう為に頑張ったのに、先行精霊龍をかわしつつ・・・」

『そだよな！ワンターンスリイ鋼炎竜とか、前世以来だったな!!』

「その結果、社長憤慨からの『《ネオブルーアイズ・アルティメットドラゴン真青眼の究極竜》・ハイパーアルティメット・バー

ストオ！3★連★弾!!』だもんねえ、亮以外で素材同名3体のサーチ無し手札融合とか始めて見たよ、展開特化デッキで妨害札無かったし・・・」

『ボクは?!ボクが手札居たんだから効果使えば良かったノニ!』

「連続攻撃入った時点で究極竜2枚目が墓地いつてるからね、ぶつちやけ使う意味が無
い」

『我……出番……無い……』

「ごめんごめん、今日はエクシーズメインだったからね、プルシ（渾名）もデツキに入れるから……」

『てかゆつきー（幽鬼うさぎ渾名）初手率高すぎ、そこは本来アタシの居場所だよ!』

『レンさん（真紅眼渾名）初手とかただの事故ジャン! だからブツキーはいつまでたつても《紅玉の宝札》がデツキからぬけないんだい!』

『ンダト、この性別不詳が! むしろデツキの回りがよくなるだろ!!』

『ナンダヨ、この需要無し巨乳バニラ!! 梓庄迫してるのがわかんないノカ?!』

『誘惑……トレードイン……コスト……出番……』

ゴゴゴゴゴゴ「いい加減にしてくれないか君達……二人でシンクロして牙王にするよ? それともプルシの生け贄にしようかな?」

『『ゴ、ゴメンナサイ』』

「ヘエ、回りに人なんて誰もいないのに独り事?」

その時、吹雪は動いた……謎の女性に対し一瞬の間を詰めた上で、こう言い放つたのだ。

「やあ、美しいお嬢さん。こんな夜更けに一人で何処に向かおうってゆうんだい？」

『まうた始まつたよ』

『この病氣、なんとかならないカナー』

『吹雪……早い……』

「ハイ、ブツキー。ワタシよワタシ」

月明かりが射し視界が若干クリアになる、そこに居たのは……

「マック！マックじゃないか！何故ここに？僕のことを待つてくれたのかい!!」

そこにはアメリカ・デュエルアカデミアで知り合つたマック、レジー・マッケンジーの姿があつた……

あえて言おう、美人だ。そして好みだ。

「フフフ、ある意味で正解よブツキー」

『アタシ、なんかコイツ苦手え……』

『同感デス』

「ああ、傷心の僕を慰める為にわざわざこんな遅くまで待つていてくれたんだねっ！今

僕は猛烈に、感動している!!・・・けどいいのかい?君は確か彼氏が居たような」

「ワタシに彼氏?どうして?」

「僕の留学初日にいきなりデュエルを挑んで来た男がいてね?確か彼が君とお揃いのイヤリングをしていた記憶がある」

『あく居たな、いきなり「youが噂のフブキングかい?」とか喧嘩売ってきて、初ターンに「おいおい、これじゃMeの勝ちじゃないか」って呟いた結果後攻でワンキルされた奴・・・』

『アイツの驚いた顔爽快だったネ』

「ああ、デイビット?ワタシは彼とはなんでもないわ。たまたま同じイヤリングを知人から贈られただけなのヨ」

「そうなのかい!だったら遠慮無く、どうだい?これからディナーでも、夜景の素敵なおレストランを知っていてね」

『前会長さんに奢ってもらった処ダネ!』

『大丈夫かよく(サイフ的な意味で)』

「素敵なお誘いネ、アナタのファン達が知ったら凄い事になりそう・・・けど残念、アナタを待つて居たのは別の目的なのヨ」

「別の目的?なんだいそれは、僕に出来る事なら力を貸すよ!」

「ソウ？ だったら．．．今アナタがデッキに入れていたカード、それをワタシに頂戴」
「．．．!!」

彼女の雰囲気が変わった．．．?!

「そのカードはある目的の為に必要なモノ、アナタがどうしてそれを持っているかは知らないケド．．．《PLUTO》のカードを此方に渡しなさい！」

「フツ．．．だが断る。」

「．．．アラ、力を貸してくれるのでは無かったノ？」

「悪いけど、プルシは僕の大事な癒し、じゃなくて《PLUTO》は大事なカードでね！
下さいと言われてハイそうですかと言うわけにはいかないのさ!!」

『吹雪．．．イイ．．．居心地』

全く可愛い事を言ってくれる。精霊二人が喧しい中、プルシは僕の心の癒しだからね．．．いくらマツクの頼みでも渡すわけにはいかないな、様子もなんかおかしいしね？

「ソウ、だったら．．．強硬手段ヨ!!」

彼女がそう叫ぶと．．．辺りが夜の闇をも塗り潰す程に暗くなり、空気が重苦しく

感じるようになった。

「なっ、これは?!」

『闇……感じる……ヤミ……』

「これでアナタはワタシから逃げられない……始めましょう?」
「プラネット」を賭けたデュエルを!!」

『ブツキー!これって……』

『なんかヤバイ空気だヨオオオ……』

『ヤミ……闇……クククッ』

プルトテンションあがりすぎだよ?!

「仕方ない、か。いいよマツク、その勝負受けよう!その代わりっ!」

「……?」

「僕が勝つたら今夜は付き合ってもらおう!アンティ嫌いな僕にそれを強要するんだ、それくらいのリターンがないとね!!」

『チヨツ、ブツキーなに言ってるんだヨ〜?!』

『殴りたい、この笑顔……ジュンコかモモエ呼びたい』

『ツツコミ……不足……』

「フフツ、この状況で余裕なのネ……それとも単なる強がりかしら、それかただのおバカさん？ いいわよ、もしワタシに勝てたならいくらでも付き合っアゲルわ！ 勝てたなら、ネ！」

「ふっふーん、言質はとつたよ？」

『変なスイッチ入りました』

「「デュエル!!」」

さて……君達当然のように初手にいるね、張り合うのは止めてほしいな。

「僕のターン！ 手札より《紅玉の宝札》（いつもの）を発動！ 《真紅眼の黒竜》を墓地に送り2枚ドロ―し、更にデッキから《真紅眼の黒炎竜》レッドアイズ・ブラックフレアドラゴンを墓地に送る!!」

『（ドヤア……）』

『ムウ〜』

「飛ばしていくよ！ 魔法カード《儀式の下準備》！ 《召集の聖刻印》!! 《黒竜降臨》ナイト・オブ・ブラックドラゴン《黒竜の聖騎士》《聖刻竜アセットドラゴン》を手札に加え、《黒竜降臨》発動！ 《アセット》を贄に儀式召喚！ 《黒竜の聖騎士》!!」

『ハアアッ!!』

《黒竜の聖騎士》星4／闇属性／ドラゴン族／攻1900／守1200

「《アセト》の効果！生け贄にされた事で、通常モンスターの《真紅眼の黒竜》を攻守を0にして特殊召喚！」

『今日のアタシは、脱力系だあ……』

「そして《黒竜》を生け贄に……レッドアイズ・ダークネスドラゴン《真紅眼の闇竜》を特殊召喚!!」

『ツシア！みなぎってきたあ!!』

《真紅眼の闇竜》星9／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

「《闇竜》……!!」

「《黒竜の聖騎士》効果発動！このモンスターを更に生け贄にし……さあおいで！《レッドアイズ・ダークネスメタル・ドラゴン》!!」

『グギアオオオッ!!』

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》星10／闇属性／ドラゴン族／攻2800
／守備2400

「・・・」

「《ダークネスメタル》の力により、墓地より蘇れ！《真紅眼の黒炎竜》!!」

『グウオオオオウ!!』

《真紅眼の黒竜》星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

「このモンスターはデュアルモンスターだ、一応再度召喚をしておくよ。カードを1枚伏せてエンドフェイズに《超再生能力》を発動、《アセットドラゴン》《真紅眼の黒竜》《黒竜の聖騎士》を生け贄にしたから3枚ドロウさせてもらう、ターンエンド」

吹雪 H4

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》(攻)

《真紅眼の闇竜》(攻2400?3300)

《真紅眼の黒炎竜》(攻)〈デュアル〉

セットカード

『うくん、流星はブッキー。いつも通り過ぎて安心』

『でもちよつと飛ばしすぎだよ！相手のコ引いてない?』

「いきなりスゴイ展開ネ・・・でも、海馬瀬人に使ってたモンスターは出さないのでかしら」

「あれらは研究中のカードだ、一般人相手に使ったりしないよ」

「この状況で、ワタシを一般人扱いするの？まあいいワ！ワタシのターン、ドロー！」

マツクとはデュエルをしたことがなかったけど（そもそもあんまり学校通えて無）かなりの実力だとは聞いている、はてさてどんなデッキか……

「まずは《手札抹殺》！互いに手札を全て破棄し同数ドロー!!」

いきなり手札交換か僕にとっても美味しいね……

ただしゆつきー、テメーは駄目だ。

『ひどいヨ……結局出番無しじゃないかあ』

レジー 捨て札

《ハネワタ》

《天空騎士パーシアス》

《VENUS》

《マッシュマロン》

《勝利の導き手フレイア》

吹雪 捨て札

《霊廟の守護者》

《幽鬼うさぎ》

《カーボネドン》

《死者蘇生》

「そして《ヘカテリス》のモンスター効果！これを捨てるコトで《神の居城―ヴァルハラ》を手札に加える！イクわよ……《神の居城―ヴァルハラ》を発動！ワンターンに1度、手札の天使族を展開出来る！光臨せよ《アテナ》！」

『ハアツ』

《アテナ》 星7／光／天使／攻2600／守800

「女神様がおいでなさったか、君に似合う美しいモンスターだねえ」

「フツまだまだ余裕なようネ、なら次はこれヨ！《神秘の代行者アース》を召喚！」

『フツツ……』

《神秘の代行者アース》 星2／光／天使／攻1000／守備600

「召喚時に効果発動！《創造の代行者ヴィーナス》を手札に加える！」

おかしい……確かあれはチューナーモンスターだったはずだ、何故彼女が所持している？

「フフフ、このモンスター達が珍しいようネ。ワタシの父親が誰だったか忘れたノ？」
「ツ！」

Mr. マッケンジー……アメリカ・デュエルアカデミアの校長だ、彼の伝で彼女に渡ったのか？だがしかし……

『(ヤッベ……もしかしてアタシのせいかも)』

『レン……顔色……悪い……』

「続けるわヨ！《アテナ》の効果を発動！《アース》を墓地に送り、墓地のモンスターを復活させる！大量展開のお返しヨ！舞い降りろ《The splendid VENUS》!!」

《The splendid VENUS》星8／光／天使／攻2800／守2400

『《VENUS》……金星……』

「これが『プラネットシリーズ』、貴方の《PIUTO》同様世界に1枚ずつしか存在しないカードヨ……知らなかった？」

プルト、君そんな貴重なカードだったのかい？

『興味……無い……』

『（……ブツキーは本人の希望で原作知識○全部消し飛ばしてんだよなあ、たまに面倒くさいけど愉しそうだなおい）』

「続けるわよ！《アテナ》の効果で天使の特殊召喚成功時、600ポイントのダメージを与える！」

「グウツ！この痛みはっ?!」

吹雪 LP4000?3400

「フッフ、これは闇のデュエル。プレイヤーのダメージが現実に変わる悪魔のゲームヨ！続いて墓地の《アース》を除外し特殊召喚！《マスター・ヒュペリオン》!!」

『オオオオオ……』

《マスター・ヒュペリオン》 星8 / 光 / 天使 / 攻2700 / 守2100

天使版ダムド! やっぱりいたのかい!

「耐えきれるかしら? 再びアテナの効果により600ポイントのダメージ!!」
「うわあッ!!」

吹雪 LP3400? 2800

「そしてこれで、墓地には《ヘカテリス》天使族が4体! 降臨せよ《大天使 クリスティア》!! 更に《アテナ》の効果で追加ダメージヨ!」

『フンッ』

《大天使クリスティア》 星8 / 光 / 天使 / 攻2800 / 守2400

「クッ・・・」

吹雪 LP 2800? 2200

《クリスティア》・・・最初の《手札抹殺》は墓地調整を狙ってのものか、引きもかな

り強いんだねえ参っちゃうよ。

「《マスター・ヒュペリオン》の効果！墓地の《ヘカテリス》を除外し《真紅眼の闇竜》を破壊するワ！」「裁きの恒星」!!」

『チツクシヨー！覚えてろい!!』

「レン！そんな・・・」

「レン？・・・アナタ《真紅眼》に名前なんて付けてるのネ、可愛い所あるじゃない。《VENUS》の効果により天使以外のモンスターは攻撃力が500下がる！バトルよ！《クリスティア》で《レッドアイズ・ダークネスメタル》（2800?2300）を攻撃!!」

「クツ・・・」

「続けて《VENUS》で《真紅眼の黒炎竜》を攻撃「ホーリーフェザー・シャワー」!!」「・・・今だ！《VENUS》の攻撃時にリバースカード《禁じられた聖杯》を発動！《クリスティア》の攻撃力を400上げ、効果を無効にする！」

《クリスティア》（攻2800?3200）

「ッ！一体なにを?!」

『グウオオオオウ……』

「ぐわああああ!!」

吹雪 LP2200?1700?1100

「この……瞬間!手札の《真紅眼の迦刻竜》!および墓地の《靈廟の守護者》の効

果を発動!!これらのモンスターを特殊召喚し、破壊された《黒炎竜》を元の表示形式で特殊召喚する!!」

『ブツキー面倒だからって説明ハシヨリ過ぎ!皆ハ真似しないでネ!』

《真紅眼の迦刻竜》星4/闇/ドラゴン/攻1700/守1600

《靈廟の守護者》星4/闇/ドラゴン/攻0/守2100

「成る程……《クリスティア》の特殊召喚封じを無効にし、壁モンスターを出す作戦つてわけ。だったら《マスター・ヒュペリオン》で《黒炎竜》を攻撃!《靈廟の守護者》は《アテナ》で攻撃ヨ!」

『『ギャオオオ……』』

吹雪 LP1100?700

「残念、耐えられちゃたわネ．．．でも次で終わりヨ！ターンエンド!!」

レジー H1 LP4000

《マスター・ヒュペリオン》(攻)

《クリステイア》(攻)

《VENUS》(攻)

《アテナ》(攻)

彼女のフィールドには4体の上級天使．．．天使？そういえば！

「．．．くそつ、そういえばそうだった!!」

『ブツキー．．．？どうしたんだそんな顔して!』

「いや．．．明日香のモンスターに生け贄にされたら天使族サーチする子いたなって思
い出してね、確か《弁天》」

『『ハッ?』』

「ああ．．．僕とした事が失念していたっ！シンクロ体渡す前に優秀な天使族をプレゼ
ントしてあげたほうがよっぽど明日香の為になっただろうにっ．．．」

帰ったら会長に話して代行者とかクリスティアとかわけてもらおう、ジユンコ君に負けて相当くやしがつてたからね、兄として少しは助力せねば!!

「アナタ・・・ふざけてるの？自分の状況わかってる?!」

『も、もつと言つてあげてくれ。つて聴こえないかあたしらの声』

「・・・ふざけてなんかいないさ、君があまりに見てて痛々しいからね、少しはリラックスしてくれるかな〜と」

「はあ?!バカにしているのフブキ!ワタシのどこが痛々しいのヨ!」

「だってそうだろう?自ら闇のゲームを謳つて起きながら、君はとても辛そうな顔でデュエルをしている。「こんな所居たくない、こんな事やりたくない」そんな心が見えるようだ」

「・・・ツツ!!」

「凶星、のようだね?何が君を追いつめてるのか知るよしもないけど、安心してくれてい・・・僕が君を救つてあげよう」

「・・・バカだとは思っていたけど筋金入りのバカか、ワタシを救う?ワタシは救いなんて求めてない、ワタシは自分の意思で闘っているのヨ!!」

「はあく、君も強情だねえ．．．僕が気に入ったコは似たような事ばかり言う。だったらず、君の「闇」を祓ってあげよう！僕のターン!!」

小声『これで負けたらちよく格好悪いよネ』

小声『だ、大丈夫大丈夫。馬鹿言つた後は大抵なんとかすつから．．．』

よし．．．君達生け贄決定。

「まずはこれだ！速攻魔法《皆既日食の書》を発動！全てのモンスターを裏側守備表示に変更する！これで《クリスティア》の特殊召喚封じも無くなった!!」

「そんなつ?!」

『《皆既日食》とか《聖杯》とか、さつき社長戦で引けなかった《精霊龍》対策がばつちり機能してんな〜』

「はい《復活の福音》。レ〜ン、さぼってないで戦おうね〜」

『うおう?!びつくりしたあ!!』

《真紅眼の黒竜》星7／闇ドラゴン／攻2400／守2000

「続いて速攻魔法《緊急レポート》！サイキック族の《幽鬼うさぎ》をデッキから特殊

召喚!!」

『えっ、ボクもオ?!』

《幽鬼うさぎ》星3／光／サイキック／攻0／守1800

「そして《幽鬼うさぎ》と《遡刻竜》を生け贄に……現れよ! 《The suppression PLUTO》!!」

『ええええ!!?そんな〜!!』

《The suppression PLUTO》星8／闇／悪魔／攻2600／守2100／

『出番……来た……クククツ……』

「《PLUTO》……まさか《クリスティア》がいた状況から繰り出してくるなんて」「人相手に出すのは初めてだねプルッ?さて、活躍してもらおうよ! 《PLUTO》の効果発動!カード名を1つ宣言し、それが相手の手札にあれば相手のカード1枚のコントロールを奪う!僕が宣言するのは《創造の代行者ヴィーナス》!!」

「クツ、こつちの《ヴィーナス》はワタシに不幸をもたらした訳……」

憎たらしそうに彼女は手札を公開する。自分のカードなのにそんな事言うなんてね

?

「ビンゴ！君のモンスターを頂戴する、頂くのは……《アテナ》だ!!」

「《VEUNS》でも《クリスティア》でもなく《アテナ》?! 一体何を考えて……」

「墓地の《カーボネドン》を除外し効果を発動！デツキからチューナーモンスター、《ガードオブフレムベル》を特殊召喚!!」

『ギギッ』

「《アテナ》を反転召喚し……レベル7《アテナ》にレベル1《ガードオブフレムベル》をチューニング!! 王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！誇り高き魂《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!!」

『グツヴオオオオ!!』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》星8/闇/ドラゴン/攻3000/守2000

『おっ、会長から預かった例のシンクロモンスターだな！宜しくう!!』

『グルルルル……』

「シンクロ召喚?! デツキに取り入れていたのネ……アナタ、さつき一般人には使わな

いとか言つて無かつた？」

「ちよつと僕のポリシーに反するけど……君もチューナー入つてたし一般人扱いは嫌そうだったじゃないか。それにこれ以上辛そうな女性の顔を視たくないんでね？このターンで決めさせて貰うよ！」

『悪魔で……紳士……クククツ……』

『プルッ怖いし面白くないヨ……』

「バトルだ！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で裏側守備モンスターを攻撃！「アプソリュート・パワーフォース」!!」

「《クリスティア》が！けどまだ《ヒュペリオン》がいるワ！」

「この時《レッド・デーモンズ》の効果を発動！守備モンスターを攻撃後、相手守備表示モンスターを全て破壊する！「デモン・メテオ」!!」

『ギャアアアアアッ』

「バカな……全滅……」

「肩の荷を卸してあげよう、《真紅眼の黒竜》と《PLUTO》でダイレクトアタックだ!!」

「イヤアアアアア!!」

レジー LP4000?0

WIN 吹雪

「ふう……キングは一人!この僕だ!!」

『いやいや、観衆いねーからここ……(なんで原作知識飛んでんのにくだらない事は覚えてんのかな)』

『勝った……ヨカッタ……』

『結局ボクだけ扱い酷かったヨオ』

術者が倒れて闇のゲームっぽい重苦しい霧が引いたか。おっといけないいけない、マツクの様子を確認しないと……

ペシペシ「お〜いマツク?大丈夫かーい?起きないと襲つちやうよー?……駄目だ、意識がない(月並み)」

『冗談でもそうゆう事言うの止めようヨ』

「ばか、ゆつきーばか。美人が気絶していたらお約束だろう？」

『知らないヨ!』

仕方ない、放置しとくのもアレだしお持ち帰り・・・じやくてホテルで一旦保護しますか」

『人が居たら激しく誤解されそうな発言を連発すんな、アンタの事だから大丈夫だろうけどさ』

僕はマツクをお姫様だっこしてその場を離れようとした、その時・・・

「貴方! 一体そこで何をしているの?!」

黒髪長髪の、なんだか見覚えがある日本人女性が懐中電灯でこちらを照らしていた・・・やれやれ、これはしばらく厄介事に巻き込まれそうだなあ。明日香達の元に帰れるのは何時になるやら・・・

20羽 友人のそのまた友人と二人きりになったりすると結構気まづい

前回のあらすじ、

おい、主役私。

？

とある日曜日く……

「はあ？ 錬金術の授業の課外研修？」

電話『そうそう、前に大徳寺先生が言ってたろ？ 今日これからなんだ！ ジュンコも行くぞぜ!!』

あゝ……なんか変な遺跡行って異世界飛ばされてみんなが人質にされて十代が闇のデュエルやらされるんだっけ？ (うる覚え)

「うくんゴメン、折角だけど遠慮しとくわ」

『ええ、なんでだよ！対抗試合以降ちよつとノリ悪くないか?!最近デュエル頻度も減つたし……』

そ、そうかしら？ほぼ毎日デュエルしてる気はするけど……対抗試合の時に人前で昇天（苦笑）しちゃったから無意識に遠慮しちゃってるのかな。

まあぶつちやけ命の危険があるのに無理してまで同行したくはない、私軽い狭所恐怖症なのよね……生き埋めとかまじで勘弁トラウマになる。十代なら負けないって信じてはいるけど……

「今日は用事があつてねえ、皆で楽しんできて！じゃっ!!」

『あつ、おいジュンコ?!』

ツー、ツー、ツー、

「ふふふふふふふふふふ」

RAIKIRI』ど、どうされたジュンコ殿……』

「十代の誘いを断った罪悪感で潰れそう、死にたい」

『それなら行けば良いのに．．．』

「生き埋めは嫌っ!!」

《クルック》

森探索中なう、

『ジュンコ殿?どこへ向かわれるので．．．』

「フツ、ライキリイ．．．私は今日気付いてしまった事があるわ」

『な、なんでござろう』

「私、十代達か明日香達以外に．．．友達居ない」

『へっ?!』

「十代と喧嘩中は選択ボツチだったからいいけど．．．こう冷静に我に返ってみると私他に親しい人居ないじゃん!寂しい人じゃん?!高等部入ってから十代と絡んでばっかで他に意識があまり向いてなかったわ．．．今日何してよう、折角の休日なのにやる

事がないわ!」

『は、はあ……』

『クルルウ（ため息）』

「とゆーわけで今日は久々にデュエリストジュンコをお休みして……バードウォッチャー・ジュンコに戻ろうかなって、火山の中腹にでもつぼるっかな〜♪」

『ジュンコ殿は本来アウトドア派でしたな、しかし大丈夫でござろうか? 十代一行達と鉢合わせになったりしたら気まづいのでは……』

「フツフーン、学園パンフに然り気無く遺跡の大まかな位置乗ってたのよ。反対方向から行くから平気平気……」

そんなやりとりをしていると前方から黒い影が……ま、まさか不審者?! まだ昼間なのにつ!

『わざわざ森に行く不審者は居ないと思われるが……』

『クルクル（うんうん）』

「はあ．．．．はあ．．．．やつと蒔いたか．．．．むつ、貴様は．．．．」
「あつ、アンタは．．．．」

「万丈目君?!」

「枕田ジュンコ!!」

なくんだあ、不審者じゃなくて．．．．交流戦後に結局本校に戻る事になったけど数ヶ月学校離れてたせいで出席日数不足になりブルーじゃ進級出来ないからつてチームレッド寮の仲間入りを果たした万丈目サンダーじゃないの。

『めちやくちや説明口調ですな．．．．』

「何故貴様がここに!?!まさか．．．．浜口の回し者か!!」

「回し者つて何よ．．．．アンタ達何してた訳?」

当然ももえもセットで帰還済み、しかし奴はちやつかり留学届けを出していたので単位余裕だとか。

「ホツ．．．なんだ違うのか、浜口の奴が大徳寺教諭の課外研修に行こうとしつこくてな．．．レッド寮に入ってしまったものの奴等と馴れ合う気はさらさら無いので逃げてきたわけだ」

「フーン、万丈．．．面倒だからサンダーでいいや、呼びやすい。大変ね、でも出席十一されるなら行けばよかつたんじゃない？明日香も行くって十代言ってたし．．．」
「むっ、言われてみれば．．．ん？むしろ何故貴様が参加してないのだ。その口振りは大方十代の奴に誘われてはいるんだろう」

生き埋めにされたたくない。とは言えないわよね．．．さて、どう返したもんかしら。あからさまに暇してる現場にエンカウトされちゃったし．．．

「わ、私は割りと静かな場所を好むのよ？大勢で遺跡探索なんて．．．性に合わないかなって」

うわくめつちや苦しい言い訳。まあサンダーとは親しいわけでもなし、適当にあしらって．．．

「フム、そうなのか意外だな？ 浜口の話では十代の奴に同行出来るなら這つてでも行き
そんな印象だったか」

「あんにやる私が居ない所で何吹き込んでんじやあ! てつ、てててか別に十代と同行な
んかしたくないし?なんでアイツとセットにされなきやならん訳よ!」

「……側から見たら貴様は十代への好意丸出しだ、無駄な言い訳は見苦しいぞ?」

あつ、やつぱバレバレな訳ですか? ……私つてそんなにわかりやすいのね (血涙)

「むしろ天上院君までそうなつていたのはショックだったかな……なんだあの肉食系
女子(?)は、彼女のイメージが随分変わったぞ?そしてあれをガンスルー出来る十代
もなんなんだ……」

「……肉食系とは違くない?あの変貌っぷりはあせるけど対十代だけだし、むしろ兄
貴を見たら何となく納得出来るわよ……」

「天上院吹雪さんか、カイザーとはまた違うベクトルの学園最強だなあれは……」

サンダーも大概なカオス要員だと思っただけど……まあ黙つとこ。

「今、失礼な事を考えなかつたか？」

「べ、べつつにく？」

「フン、まあいい。ここで会ったが万丈目だ、以前の雪辱をここで晴らさせてもらおうか？・・・首に双眼鏡と片手に島の地図を装備してるあたり、どのみち暇なのだろう」
「暇具合で計られたらアンタに言われたかないわ・・・いいわよ？高等部最初のデュエルは私がちよつと暴走しちゃったしね、対等な条件で闘りたいとは思ってたのよ!!」

本音へあの時はするしてごめんなさいでした。

あれっ？言い出したらうちの存在がもうズルか?!キリがないか・・・

「フン！浜口の言う通り最低限のスポーツマンシップは持ち合わせているようだな！安心しろ、俺はもうあの時とは違う！シンクロだろうがなんだろうが構わん、返り討ちにしてくれる!!」

そう言いながらディスクを構えるサンダー、こようゆう場面は結構格好イイのよね？こようゆう場面は。

「デュエツ……」

「つて貴様あ！デュエルディスクはどうしたあ!!」

あつ、バードウオツチャー・ジュンコする気満々だったからディスク置いて来たわ……
デツキは太ももホルダーにちゃんと入れてるのね。

「お、置いて来ちゃった……てへっ?」

ちよつと頭小突いてみたりいゝ?

「……似合わんから止めた方がいい、何かを失うぞ」

「は、はい……」

私モソウオモイマシタ、モウシマセン。

「しかし参ったな、わざわざ寮に戻るには面倒な場所だ……む、あれは?」

「どつたの?・・・んん?こんな所に人?(自分達は棚上げ)」

▲墓守長戦ダイジエスト

「皆を返せえ!アライブブレイズエア―ネクロバレー破壊からの融合融合回収融合ミラクルフュージョン!!」

それっばい効果音へドドドドドドドド

《ノヴァマスター》(攻)

《エスクリダオ》(攻)

《Great TORNADO》(攻)

「出た!兄貴の鬼畜融合ラツシュっす!!」

「キヤー!十代素敵ー!!」

長ア「なんだ・・・これは・・・」



前方より走ってきたのはジャージ姿の・・・

「三沢(君)?!」

「き、君達?!こんな所で何をしている!」

「それはこっちの台詞だ！ 休日の昼間に一人で何をしている！」

サンダー、地味にブーメラン発言よ……

「俺は日課のデュエルトレーニングを……しかし珍しい組合せだな？」

「たまたま暇人同士がエンカウントしちゃってね、そうだ三沢君……デュエルディスク持っていない？ サンダーとデュエろうとしたんだけど置いて来ててね」

「何?! デュエリストならディスクは常時装備ではないのか！ ディスクならリュックの中に……クツ」

「何? どうかしたの?」

なんか感窮まつてる?!

てかランニングにディスクを携帯するって……. どんだけデュエリストなの三沢君、リュック走るのに邪魔じゃない?

「徐々に……. まともに存在を認知された気がする…….」

「泣く程か…….」

「そんな扱い悪かったのね三沢君．．．．．そいやまともに喋ったの初めてかも」

「ああすまない、ディスクだったな．．．．折角だ、見物していても良いか？」

「フン、貴様も俺のリベンジの対象なのだがな．．．．まあいいだろう、好きに観ていくがいい！無観客試合とゆうのも盛り上らんからな!!」

「そ、そこまで意識して貰えてたのか?！」

「どんだけ自分卑下してんのよ．．．．むつ、他人のディスクってちよつと違和感あるわね」

イエローディスク装備、私汗臭くないかな？匂いついたらごめんね三沢君。

「準備はいいか．．．．始めるぞ！」

「オツケーよ！どつからでもかかってらっしやいな!!」

「デュエル!!」

ジュンコ LP4000

万丈目 LP4000

「先行は私！ドロー！」

ふむふむ……悪くはないかな？

「まずは《ブリザード・ファルコン》召喚！」

『ヒュウ〜！』

《ブリザード・ファルコン》星4／攻1500

「何！「BF」ではないのか?！」

「あの時の水鳥獣デツキか（2羽参照）、決着をつけ直すには丁度いい」

丁度調整し直してたのよね〜、
ブラックフェザー
 レイド・ラプターズ
 「B」「F」「R」「R」「R」「R」「ハーピー」と違ってカテゴリサ

ポート無いから扱いが難しい……逆にいじりがいはあるのだけど。

「フィールド魔法「ウォーターワールド」発動、水属性のモンスター攻撃力500アップ
 !……守備は400ダウン」

辺りが蒼い海に包まれる、背景《海》と何が違うんだろう……イルカ跳んでるあたりかしら。

「これで発動条件は充たしたわ! 《ブリザード・ファルコン》の効果! 自身の攻撃力が上がっている場合、1ターンの一度1500ポイントのダメージを与える! 《ブリザード・ガスト》!!」

「1500もの効果ダメージ?! 発動条件はあるものの強力な効果だ!」

「フン! 手札の《エフェクト・ヴェーラー》を捨て効果発動、そいつの効果を無効にさせてもらう!」

げっ、やっぱそうゆうのも持ってんだ?! そんなにバーン嫌ですか……

「俺は忘れておらんぞ? そいつの効果を利用し慕谷をほぼ無抵抗のうちに瞬殺したことをな!」

慕谷……ああ、サンダーの取り巻きだった奴ね! 折角手札に《激流蘇生》と《ダイヤモンドダスト》揃ってるのに……残念。

「カードを3枚セットし……《バブルマン》を特殊召喚! 手札がこのカードのみの場

合特殊召喚出来るわ！」

『ハアッ!』

《バブルマン》星4／攻800?1300

「枕田君がHEROだ?!」

「旦那のカードか、確かに優秀な効果持ちだなそいつは。浜口も使っていた……」

「ちゃっかり十代に交換してもらいました……って誰が私の旦那よ! いいぞもつと
言え! (錯乱)」

「そんでもって《ブリザード・ファルコン》とでオーバーレイ! エクシーズ召喚! 《N^{ナンバーズ}0.104 神葬零嬢ラグナ・ゼロ》!!」

『あり得ないからっ!』

《ラグナ・ゼロ》★4／水／天使／攻2400?2900／守1200

「ターン終了よ」

ジュンコ H0

《ウォーターワールド》

《ラグナ・ゼロ》(攻)オーバーレイユニット O R U 2

セットカード

セットカード

セットカード

うくん、理緒ちゃん(?) 素敵。やっぱこのデッキなら《ラグナ・ゼロ》よね〜：
鳥獣じゃないけどさ。

「あれも浜口君が使っていたモンスターだな(3・4羽参照)、効果は使われなかったが……」

「チツ、《ライトエンド》・《ダークエンド》への牽制か……俺のターン！」

あ、やっぱ効果知ってたんだ？おのれモモエモン……てかよくそんな前の事覚えてるわね三沢君。

「《トレードイン》発動、《ドラグニティーアームズレヴァテイン》を捨て2枚ドロ〜：

まずはこれだ！速攻魔法《ツイントイスター》！手札を1枚捨て、貴様の両端のセットカードを破壊する！！」

うっげ?!なんちゅういいカードを……全伏せで良かったかも。

「《サイクロン》2枚分か、手札コスト次第ではそれ以上の働きになる……欲しいな」
「《激流蘇生》と《ダイヤモンドダスト》が破壊されるわ……」

「ククツ、案の定揃っていたか。さあ次だ！《復活の福音》発動!!墓地よりレベル8のドラゴン族を復活させる……《巨神竜フェルグラント》!!」

『ギユオオオオオ!!』

《巨神竜フェルグラント》 星8／光／ドラゴン／攻2800／守備2400

《レヴァティン》じゃなくて巨神竜かい！ツイツイでちやつかり捨ててやがったわね?!ってか強いなサンダーのデッキ！モモエモンファンサービスし過ぎじゃね?!あつ、私
が言えた事じゃないのか……

「いい顔だ……こいつの恐ろしさを教えてやろう！墓地からの特殊召喚成功時、フィールド・墓地のカードを1枚選び除外！モンスターならそのレベル・ランク×100ポイント攻撃力を上げる!!消え去れ《ラグナ・ゼロ》!!」

「除去に加え自身の強化能力！なんて強力なモンスターだ！……《光と闇の竜》ライトアンドダークネス・ドラゴンより強くないか？」

あつ……

「おい三沢あ……今なんと言った？」

「あ、いや、他意はないんだが……」

「きつさまあ……俺の崇高で至高の美しさを誇る相棒、《光と闇の竜》を馬鹿にしたのか?! いい度胸だ数分待っている……俺と相棒の力で貴様もすぐに叩き潰してやる!!」

さ、サンダーも偏屈ドラゴン使いの仲間入りを果たしました……自分のエース馬鹿に(?)されたらそりゃ嫌よね、でも《光ライトアンドダークネスと闇》に愛着持ちすぎだろ漫画版かて……

「三沢君、今のはアンタが悪いわよ……ととつ、リバースカードオープン! 《R U M
—クイック・カオス》!」

「何イ?!」

「《ラグナ・ゼロ》を対象に……オーバーレイ！現れなさい！《CNo. 103》！時をも凍らす無限の力、今ここによみがえれ！！《神葬零嬢ラグナ・インフィニティ》！！」
『参りますっ！！』

《ラグナ・インフィニティ》★5／水／天使／攻2800？3300／守2400

「相手ターン中にモンスターを進化させた！あの魔法も確か浜口君が使用していたな……（助かった、か？）」

「クソツ、除去対象不在で攻撃力の上昇は無い……モンスターをセットしカードを1枚セット！エンドフェイズに《超再生能力》を起動しカードを2枚ドロ……ター
ンエンドだ」

万丈目 H2

《巨神竜フェルグラント》（攻）

セットモンスター

セットカード

何？師匠といい万丈目君といい……ドラゴン使いは初手に《超再生能力》持って

るのが基本なん？ ほぼ皆勤賞じゃねーかどんだけドラゴンに好かれてんのよ！

「私のターン！……よっし永続魔法《強者の苦痛》！相手のモンスターはそのレベル×100ポイント、攻撃力が下がるわ」

《巨神竜フェルグラント》 星8 / 攻2800？ 2000

「高レベルが仇となったか……」

「そして《ラグナ・インフィニティ》の効果発動！ORUを1つ使い、相手モンスターの攻撃力が変化している場合にそのモンスターを除外！変化してた数値分のダメージを相手に与える！凍りつけっへダイガンス・トウ・パーガトリイ！！」

「破壊ではなく……除外か！」

《フェルグラント》を巨大な氷塊に代えたと思っただけで尽かさず鎌で叩き切った……やだ、《ラグナ・インフィニティ》さん……カツコイイ。

「ぐおおッ?!」

万丈目 LP4000? 3200

「続けてバトル！《ラグナ・インフィニティ》でセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは……《マシンナーズ・ピースキーパー》！」

「ふえっ?!」

「破壊された時に効果発動、ユニオンモンスター《Wーウイングカタパルト》を手札に加える！」

ゆっ、ユニオンモンスターだあ?! まだデッキに入ってたんかい! てかデッキの中身
 どれなってるのよ一度視たいわ!!

「た、ターンエンド」

「俺のターン! 《手札抹殺》! 全ての手札を捨て同数ドロ! 最も俺だけだがな……
 フツ、《サイクロン》!! 《強者の苦痛》を破壊! これで厄介な《ラグナ・インフィニティ》
 の効果は狙いづらくなったわけだ」

うぐっ……ごもつともで

「行くぞお! 《リビングデットの呼び声》! 蘇れ《ドラグニティーアームズレヴアティン》
 !!」

『ギャオオオオ!!』

《ドラグニティーアームズレヴアティン》星8／風／ドラゴン／攻2600／守210

0

「残念ながら墓地にドラゴン族は居ない為効果は使えん……が！《マジックプランター》！《リビングゲットの呼び声》を墓地に送り2枚ドロ―！」

『……』

「な、何故《リビングゲット》が無くなったのに《レヴァティン》は破壊されない?！」

「墓地の《復活の福音》を除外した、この破壊代用効果はチェーンブロックを作らん破壊にも対応可能だ……来い！《レスキューラビット》！」

『ギョキュツ！』

《レスキューラビット》星4／獣／可愛い

かわい　い　……って和んでる場合じゃないこの流れは！

「フツ、どうやら察したようだな……《レスキュー・ラビット》の効果！デツキよりレベル4以下の同名通常モンスター《V―タイガージェット》2体を特殊召喚！」

『ブウォウ！』

「続けて《アイアンコール》！墓地の《W―ウィングカタパルト》復活！」

『ジャキンッ！』

「あ、あのく……そろそろいいんじゃないでしょうか？」

「ククク……そう遠慮するな枕田、貴様にはたつぷり借りがあるからな、《W―ウィング・カタパルト》と《Vタイガー・ジェット》を合★体！《VW―タイガー・カタパルト》!!」

『ギシャアー!!』

《VW―タイガー・カタパルト》星6／光／機械／攻2000／守2100

「まだだあ！《融合識別》^{フュージョン、タグ}！残った《V―タイガー・ジェット》を融合デツキの《XYZ

―ドラゴンヘッド・キャノン》を公開し、同名扱いとする！このままこの2体を究極★

融合★合体!!《VWXYZ―ドラゴン・カタパルト・キャノオオオン》!!」

『ブツピガアアツン!』

《VWXYZ―ドラゴン・カタパルト・キャノン》星10／光／機械族／攻3000／守2800

おい、効果音。

じゃなくて十代戦と同じ流れで来たあああああ！なんでこれで回るの？本気でサン

ダーのデツキどうなってるのよ〜!!

「終幕だ! 《VWXYZ》の効果! 《ラグナ・インフィニティ》を除外する!!」

『アアアアア?!!』

「悲鳴が色つぽ．．．言ってる場合じゃないし?!」

「バトル! 《アームズレヴアティン》と《VWXYZ》でのダブルダイレクトアタック!!」

「きやああああっ?!」

ジュンコ LP4000?—1600

WIN 万丈目．．．さんだ!

ジュンコへチ〜ン．．．

「つ、強い．．．十代と五分か、それ以上の実力を持つと言われる枕田君をこうも圧倒するとは．．．」

「フン、これが本来の実力差．．．と言いたいが奴の「BF」に勝ったわけではないからな、うぬぼれはせんさ。さて三沢大地．．．次は貴様の番だ! 俺の相棒をコケにした罪は重いぞ!!」

「くっ……（やっぱ忘れてなかったか）。いいだろう！相手になる！」

「デュエル!!」

その後……私が横で見てる中、三沢君は案の定《光と闇の竜》に何度も吹っ飛ばされました……。

続くかな？

X羽 if—うちらがArcVにいたら？

小ネタ

もしもジュンコとももえがアカデミアの対ランサーズ精鋭部隊だったら。

ArcV 106話より

「派遣部隊の野呂からの報告で……エクシース次元にペンデュラム召喚を扱う者達、ランサーズが現れたと報告があった。……プロジェクトを円滑に勧める為にも彼らを排除してきてほしい、行ってくれるね？」

「え〜私ノ口嫌〜い、頭の形がなんか嫌」

「キャ〜！エド様と同じ部隊で闘えるなんて光栄ですわ〜!!」

「……はあ〜」

107話より

「私達を……知らない？」

「わたくし達《面喰いの魔女・ジュンコ&ももえ》を知らないなんて……レジスタンスの生き残りとしても、大したことないようですわね!!」

「不名誉な渾名広めんなあ!そして面喰いはアンタだけよ!!」

?

「融合召喚!生命絶えし世界より、復讐の狼煙を上げよ《異星の最終戦士》!!」

「なんだあこいつ?!」

「オーホツホツホ!このモンスターが存在する限り、互いに召喚特殊召喚は行えませんわ!!」

「コルアーモモー!!そんなもん出したら私もなんも出来ないだろーが!!」
?

「《月の書》で《異星の最終戦士》を裏側守備に変更致します」

「ツ?!さっきの仲違いは演技だったのか!」

「(本気だったとか言い出しづらい……)融合召喚!焼き尽くせえええ!!《重爆撃禽ボム・フェネクス》!!」

『ピエエエエッ!!』

108話より

「《面喰いの魔女》だと?！」

「知っているのか、黒崎?!」

「噂は耳にしている……」

茄子『スピード校の、俺達以外のイケメンを全滅に追いやった張本人達だ!!』

「そのデュエルは残忍かつ凶悪……顔が気に入らない奴はゴミのように瞬殺し、気に入った奴は顔が苦痛に歪むまでいたぶってからカードに代えたとゆう……」

「そんな……そんなの権現坂には圧倒的に不利じゃないか!!」

「ゆう……や……?」

おまけ ブツキーin106話

「アカデミアのある目的の為に……」

「目的?」

「大変です！この子を保護しようとしたらアカデミアの追手が!!」
「なんですって?!」

？

「そ、そんな俺達遊勝塾の精鋭女子5人が・・・」

「たった一人の男に・・・」

「貴方達！無事だった?!」

「あ・・・明日香さん、奴が・・・」

「あつ、あれは！」

「[[[キヤー！ブツキー!!]]]」

「へっ?!」

「兄さん！貴方だったのね！」

「アスリン！ようやく見つけたよ・・・さあ、帰ろうアカデミアへ!!」

「明日香さんのお兄さん・・・?このチャラチャラした人が?!」

「兄さん！わたしはアカデミアのやり方についてはいけないわ!!あんなくだらない計画

!!

「そんな……プロフェッサーの崇高なる目的、4つの次元の美男美女をカードにして集め……そして来るべき次元統一の暁にはそのコ達をアイドルとして送り出し、世界を愛で満たすくアーク・アイドル・プロジェクトに反対するってゆうのかい!!」

「はあ?!」

「そんな計画わたしは信じないわ!大体プロフェッサーはJC専のロリコンじゃない!そうじゃなかったらわたしも第一陣に選ばれていたはずよ!!」

「確かに!プロフェッサーはロリコンだ……だが世界には君が、金髪巨乳とゆう属性も必要なんだ、アスリン!!」

「もう嫌!ついていけないわ!!」

「なんなの……この人(達)」

2章 私の知らないセブンスターズ編

21羽 仮面つけてても、正体バレバレっているわよね。

前回のあらすじ

ぼっち×3

昼休み開始のチャイム、それは新たな闘いの始まりを告げる狼煙でもある!!

「フフフフツ。ジユンコ、我が宿命のライバルよ……決着をつける時が来たようね
!」

「望む所よ明日香……今日こそケリをつけてあげるわっ!!」

「デュエル!!!」

「わたしのターン!わたしは《海老天おにぎり》を召喚!おかずに《唐揚げ》をセットしてターンエンド!」

「初っぱなから《海老天》に《唐揚げ》?!とんでもない布陣ツス!!」

「揚げ物の2連コンボですわ!ジュンコさんっ!」

「大丈夫よモモ、この程度じゃ私の心は折れないわ!私のターンツ!まずは《シヤケ(おにぎり)》召喚!」

「シヤケ?たしかに定番だけど、食べ盛りの男子は高カロリーを欲するものよ……」

「甘いわね明日香!私はここに《キムチ焼きそば》をセットするわ!!」

「きつ……《キムチ焼きそば》?!この段々暑くなつて来た所にあえて辛い《キムチ》を出すつてゆうの!?!」

「見た目が派手な明日香さんに対してジュンコさんは田舎のかあちゃんみたいなの組み合わせ……こんなの無理なんだなあ!」

「ではアニキ……判定をどうぞっ」

「えっ、どつちかしか駄目なのか?……じゃあジュンコで」

「ヨツシヤアー!!」

「ガハアツ?!」

「一本目はジュンコさんの勝利ー!」

「くっ、シヤケが好きなのは知っていたけど、キムチにまでやられるなんて……」

「フツフーン、アイディアの勝利ね!」

キムチ好きはTFのドローパンで覚えてただけなんだけどね？

「いや・・・なんだこれは!! 昼休みに入った途端にどつ〇の料理ショー気味たことを始めているのだ貴様等は!」

「「「「えっ?」」」」

「ちよつとうるさいわよ万丈目君! 今わたし達は真面目な話をしているの!!」

「一般人は下がってた方がいいぜえ、この教室は戦場と化すんだから!!」

「どうゆう・・・ことだ?」

「へ? 嫁力対決ツスよ? 何を今更」

「今日のお題は【お昼ごはん】なんだなあ」

「↑絶句

『説明しよう! 【嫁力対決】とは・・・異性の男性の好み、体調、メンタルを把握し! ありとあらゆる状況で気になる彼にいかにか満足してもらうかを競う・・・恋する乙女達の命掛けの、文字通り決闘なのだっ!!』

『兄者、言つてて恥ずかしくないか?』

説明御苦勞様。

「おおうまいっ! 塩加減とか最高だぜこのシヤケ(おにぎり)!!」

「と、と〜ぜんよ! 誰が作ったと思つてんの?! キムチも手間暇かけた自家製なんだから
しつかり味わいなさい!!」

「(キムチ自家製つて、いつからスタンバつてたんだろう……)」

「さて、じゃあ負けた方のメニューは僕らが頂きま〜す……万丈目君、物欲しそうな
顔はやめるツス」

「サンダーには、サンダーの愛妻弁当があるんだなあ」

「いつ誰がそんな顔をした!」

「あら、唐揚げのが良かったですか? 今日はハンバークですが」

「いや、頂こう。俺の言いたいことはそうではなくてだな? つて騙されるかあ! 人参の
香りがほのかにするぞ、また混ぜこんだな!!」

「そんなつ、小学生並みの偏食持ちの準様の為になんかわがわがわからないように振じ込みま
したのにつ!」

「下の名前で呼ぶなっ！あと小学生並みの偏食は余計なお世話だ!!くそっ……うまい」
「(文句言いながら、結局食べてる……)」

はいどうも、枕田ジュンコです。前回の話からちよつと経ちちまして……とあるお昼休みの風景をお送りします。

「お茶」

「はいっ」

「汚れた、」

「ハンカチです」

「暑い、」

「団扇く(ダミ声)」

「なんか……」

「ももえさん……」

「ん、どうかされまして?」

「(万丈目君の、お母さんみたい……)」

艶からなんでも出して……モモエモン化が絶賛進行ね。

「ジュンコ次よ! 《ミックスジュース》!!」

「なんの! 《おろ〇、お茶》!!」

「まだ続くのかこの茶番劇は……」

「は〜い君達一旦ストップ。十代君、私と一緒に校長室まで来てくださいニヤ」

「何?! 私達から審査員を没収するだど!!」

「先生の鬼! それでも教師なの?!」

「そんな事言われてもニヤ……」

「校長室だつて……アニキ、今度は何やらかしたのさ」

「さつぱりわかんねえ」

「ハ〜ハツハツハ! 十代、短い付き合いだったなあ! 達者でやれよ?」

「万丈目様、お口に食べカスが、あと退学と決まった訳では」

「あと万丈目君も一緒に来てくださいニヤ」

「だああ?!」

ずっこけた、十代とサンダーと一緒に呼ばれるイベントなんかあったっけ?

「あと天上院さんと・・・誰だったかニヤ。まあいいか、枕田さんと浜口さんも来てくださいニヤ」

「うおい！なんか曖昧な感じで呼ばれたケド!？」

「どなたか可愛そうな方がいますわね・・・」

ポツーン《お、俺だったりしたのか・・・？》

・ I N T H E 校長室

「三幻魔のカード？」

「そう、それは古よりこの島に封印されてきた伝説のカード・・・」

「へっ？この学園そんな昔からあんの？」

ああ・・・三幻魔のあれか、すっかり忘れてたわ。

校長室にはクロノス・ニャン徳寺先生、生徒はカイザーこと丸藤先輩とさつき呼ばれた合計8人が招集されました、ん？誰かいなくね？

「それらが世に放たれば世界は混沌に充ち、やがて破滅に至ると言われている……
それほど強力な力を秘めたカードなのです」

「いや、じゃあカード化すんなよ」

「……」

「ジュンコさんっ！」

「あ、ゴメン。つい本音が」

前世で本編観てた時から思ってたのよね、制御出来ないもんをわざわざ作る会長さんがわからないわ。神のカードしかり邪神しかり……。あ、邪神はRか。核兵器作ってもて余すようなもんじゃない？カードのが石盤状態より制御しやすいのかしら。

「ご、ごもつともな意見で……。ともかくそれらの封印を解こうとする挑戦者達が現れたのです」

「何者ですか、そいつらは」

「くプロジェクトXく挑戦者達……」

「風の中のすく〇るく〇の中の銀河く……ってモモあんたあ！空気読みなさいよ!!」
「ジュンコさんに先を越されたのでつい……」

「あたしやボケたんじゃやないっての！折角うちのシリーズにしてはリアスに入ろうとしてんのに冒頭からこれじゃ雰囲気ぶち壊しだろーがいい加減にしなさい!!」

「ノリツツコミに走った貴女も大概よ?!」

「(ジュンコ……歌上手いな)」

「はあ……校長、この馬鹿共は放っておいて続けてくれ、話が進まない」

おいそのサンダー、私と一緒にしないで下さい。

「は、はい。七星王、セブンスターズと名乗る七人のデュエリスト集団です、彼らから三幻魔のカードを封印する、この七精門の鍵を守って頂きたい」

小さなケースを取り出し鍵らしいものをうちらにみせる校長、実物はかなり小さいわね。

「どの様にして？わたし達は一介の学生ですが……」

「それは勿論、デュエルです。鍵の譲渡はデュエルによってのみ行われる、これも古より伝わるこの島の約束事……他の手段で鍵を奪つても封印を解くことは出来ません」

何その約束事。

大昔はディアハする七人の守護神官でも配置してたのか……

「あなた方はこの島でも屈指のデュエリスト、是非とも鍵を守りぬいて頂きたい」

「屈……指？他の人はわかるけど私は駄目でしょ、シンクロ無かったらただのパンピーですよ」

「わたくしも同意見です、明日香様達の足元にも及びませんわ。ジュンコさんとわたくしは辞退で……」

「嘘つけ貴様達、実技でここにいるメンバー以外に負けてるの見た事が無いぞ。特に浜口は面倒を回避しようつてのがばればれだ」

「そうだけジュンコ、お前の【ハーピー】で何人隼人化させたと思つてんだよ！お前の実技相手した男子は隼人だらけだけぞ?!」

隼人化って何、引きこもりって事?!

「隼人君が可愛そうだから止めなさい十代、けど貴女達二人の実力が劣っているとは思えないわ。何故そんなに嫌がるのかしら」

え、敵に捕らわれてヒロインポジしたいから?・・・駄目か。

「てかちよちよつと瞬殺されたくらいで心折れる奴多すぎよ!私だって丸藤先輩にイツペンポロ雑巾にされてるわ!」

「何イ!最近デュエル頻度下がったと思っただらカイザーとやってたのかよ!この前の大徳寺先生主催の課外研修断ったのもそれだな?!

「・・・(それは俺だな)」

その日は万丈目君です、まあたまたまだけどさ?

「俺としてもあのデュエルは不満が残ったな、また相手をしてもらえると嬉しい」

「あ、はい。暇な時あれば」

「カイザーめ……」

「ハツ、ジュンコが浮気（違）している今がチャンス?!」

「もう嫌だ、この空間……」

「万丈目様、お水ですわ」

「ふう……仕方ありません、枕田君ならそういい出すだろうとアメリカの天上院吹雪君から言われましてね、これを渡すようにと」

「師匠が? なんだろ……」

「嫌な予感がしますわ……」

校長が差し出してきた封筒を開ける……バリツとな何?! このカードは!!

「ぶ、《ブラックフェザー・ドラゴン》……」

「まあ! 何故これが!!」

「ペガサス会長が最初にデザインしたシンクロモンスター郡の1枚だそうです、この闘いに協力してくれるなら君に預けると……」

えっ、じゃあこれモノホンの世界に1枚○の《ブラックフェザー・ドラゴン》? 5
' d sでクロウが手に入れる前の奴?! まじですか!!!

「フツ……セブンススターズだかセブンイ? ブンだか知らないけど、私達が蹴散らして
あげるわっ! そうよねモモエツ!!」

「え……」

「掌返し過ぎだろ、何貰ったんだよ……」

《わ、私のエースたる立場がピンチ……?》

《落ち着けよ兄者》

夜の帰り道……

「しっかし会長の大盤振る舞いには驚いたわね、シグナー竜をうちに預けるなん

て……」

「師匠がなんか適当な事言ったのでしようが……自分はちやっかり《レッド・デーモンズ・ドラゴン》貰ってるようすわね」

あんにやろは闇ドラ大好きだからね……特にレモンは真紅眼に近いもん感じるとか言って「真紅眼リゾネーター」みたいなデッキも組んでたっけ。

「カード側が持ち主選ぶ。とか言われて呼ばれた皆で各シグナー竜に触れてみたけど……2枚余ったわね。あんたも不都合だったし」

「わたくしの心のシグナー竜は《グングニール》です、そもそも2体共わたくしのスタイルに合いませんから……」

「ソウネ、基本ゴリ押し」

「なんでカタコトなんですかつ！」

「フフフフ、こんな夜更けに女性だけで出歩くとは不用心だな……」

「だ、誰っ?!」

「「とう!!」」

「うおっ、まぶしっ?!」

怪しい気配を感じた・・・けど手遅れだった。眩い光に包まれ、気づいた時には・・・

「うっひやあっ?!なんじゃこりやあ!!」

「火山の火口の上?!意味★不明な光の床が浮いていますわ?!」

「佐用!この場所が!」

「貴様達の墓場となるデュエルフィールド!!」

な、なんだか聞き覚えのある息ピッタリの二人の声が・・・

「我ら!セブンスターズ第1の刺客!!」

「闇のタッグデュエリスト!!」

「ラビリンズ・ブラザーズ!!」

「つてあんたらかーい!!なにか「ラビリンズ・ブラザーズ」よ!声と仕草でばればれだからその般若(?)の仮面外せ迷宮兄弟!こっちが恥ずかしいわ!!」

「なんだか拍子抜けですわ・・・帰ってもよろしいでしょうか?」

そこには以前、十代達の制裁タッグデュエルの相手として学園に招かれたはいいが師匠にエンカウントしてワンキルされて出番を奪われた・・・迷宮兄弟がいた（8羽参照）。なんか黒っぽいけど、変な仮面つけてつけど。ダークネスが居ないから代役かしら。

「フフフ、我らの正体を一瞬にして暴くとは・・・」

「だがお主達はこの場から逃げられはしない！あれを見るがいい!!」

仮面を外しながら「宮」が指指した先には・・・岩の狭い足場の上で光の球に包まれた・・・十代?!しかもジャージ（寝巻き）姿！寝てるし。しかもその隣には明日香?!なんで半裸やねん！ちゃんと服着ろ服ウ！

「フフフフ、こ奴らとは親しい仲にあると聞いている・・・」

「二人を抑える時・・・夜這い中の小娘がいたものでな、ついでに人質にしておいた」「明日香アンター！何アホやらかしてる時にアホ共に捕まってんのよー?!」

「じ、ジュンコ！ももえ?!ち、違うの！今日は寝相が悪くていつの間にかこんな所ま

で……」

「ただ寝相悪けりや女子寮からレッド寮……ってちつがーう！下見ろ下！ついでに服装直せ！」

「下……？キヤアアア!!何よコレ溶岩?!十代!十代起きて大変よ!!」
「ん〜?なんだよ明日香、また夜中に忍びこんできたのか?」

十代慣れてる、アイツ……常習犯だわ!

「それはそれとして……下よ下！」

「下あ?……なんだこりやあ!!しかも暑っ!滅茶苦茶暑っ!!」

「ククク、奴らを守るバリアーは刻一刻と消滅して行く……」

「助けたければ我らを倒すことだな！」

ぐう、まさか私が十代を助ける側になるとは……

「……あなた方馬鹿ですの?」

「何?!」

「七精門の鍵はデュエルによってのみ所有権を譲渡出来る……十代さんと明日香様も鍵の守護者ですわよ？うっかり殺してしまつては鍵は一生手に入りませんわ」

「あゝ……確かに」

「そつ、そういえば！」

「そんな事をあの方がおつしやつていたような!!」

駄目だあ、コイツラ……

「なつ、ならば貴様達がデュエルをしなければこやつらを倒すのみ！」

「いやまして弟よ……男の方はともかく夜這いの女は例の《捕獲対象》。デュエルを仕掛けるのは奴を誘きだしてからでも良いだろう……」

《捕獲対象》、《奴》？……なんのこつちや。

「なんだかよくわからないけど……とりあえず助けてジュンコ！ももえ！暑くて更に脱ぎそうだわ!!」

「アンタのせいで緊張感消し飛んでるんじゃないやあ！十代以外の目もあるからちやんと服着なさいちやんとー！いや、十代の前でもちやんと着なさい！」

「お前達逃げてもいいぞ〜？俺もデュエルしたい!!」

あのデュエル馬鹿も緊張感ないわね・・・

「十代様に任せてもいいのでは・・・」

「・・・いや、なんかムカついたからぶつ飛ばす。モモエエ・・・チーム・ランクアツパーズで行くわよ!!準備なさい!!」

「はあく、仕方ありませんわね」

私は黒、ももえは青のデッキケースからデッキを取り出しセットする。

「そこなくてはな！」

「我らが兄弟の力、思い知るがいい!!」

「私に対して十代を人質（？）に取った事を後悔なさい!!」

「面倒なので速やかに片づけて差し上げますわっ」

「「デュエル!!」」

ジュンコ&ももえ LP8000

迷宮兄弟 LP8000

「先行はわたしだ！わたしのターン！」

まずは《迷》か・・・どつが兄かどつちが弟か覚えてないけど、とりあずく私>多
くてややこし過ぎ。あつちは平仮名表記にしちやる・・・

「行くぞ、《レスキュー・ラビット》を召喚！」

『キュキュツ』

《レスキュー・ラビット》星4/獣/かわいい、異論は認めない

「でたな鬼畜兔・・・えつ、兔？」

「効果を起動する！こ奴を除外する事でデッキより《岩石の巨兵》を2体特殊召喚!!」

『『ファンヌーツ!』』

《岩石の巨兵》レベル3／岩石／堅い

「この2体を用い……オーバーレイ！エクシース召喚！魔眼操りし守護者！《ゴルゴニック・ガーディアン》!!」

《ギュフフフフ……》

《ゴルゴニック・ガーディアン》★3／闇／岩石／攻1600／守1200

「うっげえ！エクシース召喚?!しかも《ゴルゴニック・ガーディアン》」

「なんであの方達がエクシースを、まさか闇のカードとか言い出すのでは……」

「ほう、よくわかったな娘！」

「我らセブンスターズは、闇の中に埋もれた闇のカードを扱い、更なる力を得る事に成功したのだ！以前ダークネスにやられた時とは違うぞ!!」

「冗談半分に言ったのに当たりましたわ……」

闇の中に埋もれたカード？……それってまた師匠の忘れ物じゃね？タイタンの時みた。

小声「あの馬鹿のカードプール広いですからね、使うのはだいたい真紅眼のくせに」
「わたしはカードを2枚伏せてターンエンド……さあ！主らのターンぞ!!」

迷 H3

《ゴルゴニック・ガーディアン》(攻)

セットカード

セットカード

伏せ2かあちよつと面倒な布陣ね、とりあらず効果をかわしつつ展開つと。

「私のターンッ！まずはこのコ！《RRーバニシング・レイニアス》!!このコの効果で……」

「ならばこの瞬間！《ゴルゴニック・ガーディアン》の効果を発動！相手モンスター1体を石化させる!!」

ああっ 《バニシング》が石に！って説明はしよんなよ、効果無効で攻撃力が0になんだっけ？

「じゃあ《ファジー・レイニアス》特殊召喚！場に「RR」いるから特殊召喚出来るわ、

永続魔法《RRーネスト》！デツキから《ペイン・レイニアス》を加えて、この2体でオーバーレイ！《RRーフォース・ストリクス》!!」

『ピュイイイ!!』

《フォース・ストリクス》★4／鳥獣／攻1000／守2000

「むっ、攻撃力1000のモンスターエクシーズか（伏せてあった《奈落の落とし穴》が意味を為さんな……）」

「（あの反応、落とし穴系ですかね……奈落とか）」

「効果発動！O U Rを1つ使って闇・鳥獣・星4モンスターの《シンキング・レイニアス》を手札へ！ついでに取り除いた素材の《ファジー》も手札に加えるわ、《シンキング・レイニアス》特殊召喚！モンスターエクシーズがいる時に特殊召喚出来る！《ペイン・レイニアス》特殊召喚！《シンキング》の攻撃力分ダメージを受ける、」

『コン、コンッ』

ジュンコ LP8000⇒7900

「痛てっ……《ペイン》のレベルが4になる。この2体でオーバーレイ！2体目エ！

《フォース・ストリクス》!!」

『ピュイイイ!!』

「再び効果発動! 《バニシング・レイニアス》をサーチ!」

「長い……長すぎるぞ娘エ! いつまで一人でやっているのだ!」

「うっさいわねー、相手の場を荒らしてるわけでもなし良くない? 女の子の準備は時間がかかんのよ、アンタらモテないでしょ……カードを2枚伏せてターンエンド」

ジュンコ H2

《フォース・ストリクス》(守) ORU1

《フォース・ストリクス》(守) ORU1

《RRーネスト》

セットカード

セットカード

「出た! ジュンコの 《ストリクス》 大行進だ!!」

「[RR] は攻め手が薄い代わりに物量凄いのよね……個人的には [BF] のが相手しやすいわ」

「勝手な言いがかりをつけつつあれだけやっておいて攻めてこぬとは……まあ良い、わたしのターン!」

タッグの3ターン目は実質物量が倍を相手にすんだから守り固めただけだったの、もえに回る前に負けたりしたら当分ねちっこく言われるからね。

「私は装備魔法（デフアレント デイメシジョン リバイバル）《D・D・R》を発動させる！手札を捨て、弟の《レスキュー・ラビット》を特殊召喚!!」

『ギユキュウ……』

「そしてこ奴を除外し《王室前のガーディアン》を2体特殊召喚する!!」

『『ガシヤンツ』』

《王室前のガーディアン》星4／地／岩石／攻1650／守1600

い、いたなくそんなのも……何？あいつらのデッキ【ガーディアン】？装備魔法関係ない系の、三魔神はどうした三魔神は……

「こ奴等2体でオーバーレイ！現れよ《ズババジエネラル》!!」

『ズババツ!』

《ズババジエネラル》★4／地／戦士／攻2000／守1000

「またなんか珍しいのきた、なんだったつけ効果」

「ハッ、まさか!？」

「《ズババジェネラル》の恐ろしさを知らない! ORUを1つ使用、手札の戦士族モンスターを装備しそのステータスを自身に加える! 我は《ゲート・ガーディアン》を装備する!!」

「はあ?! 《ゲート・ガーディアン》ってたしか攻撃力……」

『ズババアツ!!』(攻2000⇒5750)

「攻撃力5750?! まじかよすっげー!!」

おい人質、わくわくすんな余裕ね。

「まだまだだよ! 《リビングデッドの呼び声》!! 弟の墓地から《雷魔神―サンガ》を特殊召喚!!」

『サンガア……』

《サンガ》星7／光／雷／攻2600／守2100

あ、やっぱいるんかい。

「流石は兄者。チューナーモンスター《トラスト・ガーディアン》を召喚！」
『てやっ』

《トラスト・ガーディアン》星3／天使族

「レベル7の《サンガ》にレベル3の《トラスト・ガーディアン》をチューニング!!大いなる番人! 《神樹の守護獣―牙王》!!」

『ウガアアアア!!』

《牙王》星10／地／獣／攻3100／守1800

「《牙王》まで?!やだ、ジュンコ大丈夫かしら……」

「フッフ、我らの実力を軽んじておったな娘」

「我ら、腐っても伝説のデュエリストに名を連ねる者! ダークネスに破れ名を地に落として」

「あの二人と戦った事実までは、揺るぎはしない!!」

うん。

喚する!!勇猛果敢なるハヤブサよ。怒りの炎を巻き上げ、大地をも焼き尽くす閃光となれ!ランクアップ・エクシースズチエンジ!飛翔しろ!ランク8、《RR―サテライト・キャノン・ファルコン》!!」

『キユオオオオオ!!』

《サテライト・キャノン・ファルコン》★8／闇／鳥獣／攻3000／守2000

「おおおつ?!なんか超カッケー!!」

「あんなモンスター、私達には出した事ない……」

「ばつ、馬鹿めかかったな!罨発動《奈落の……》」

「《サテライト・キャノン・ファルコン》の効果発動!エクシースズ召喚成功時、「RR」を素材にしている場合、相手の魔法・罨を全て破壊する!そしてこの発動に対して相手はカードを発動出来ない!!消えろお!!」

「わたしの《奈落の落とし穴》が……」

「だが残念だったな。いかに強力なモンスターを呼ぼうとこちらには《ゴルゴニック・ガーディアン》がいる!!やれ!奴を石化させるのだ!!」

「んなもんわかってんのよ、只でやられますかっつての!チェーンしてこつちも《サテライ

ト・キャノン・ファルコン」の効果！ORUを1つ使って、対象モンスターの攻撃力を墓地の「RR」1体につき800下げる！対象は《ズババジエネラル》よ!!」

『ギヒヤヒヤヒヤ』

『キュオオオオオッ!!』

《ズババジエネラル》（攻5750⇒950）

『ズバア・・・』

「攻撃力が4800も下がるとは・・・」

「RRが6体墓地いるからね。モモ！これで簡単に倒せるっしょ?!」

「はい！流石はジュンコさんですわ！」

「ぐっ・・・ならばそのまま破壊してしまえ《ゴルゴニツク・ガーディアン》!!」

『キュオオオ・・・』

《サテライト・キャノン》！いつ、キヤアアアアア?!」

「ジュンコオ?!」

ジュンコ LP7900⇒6300

いてて、折角だから攻撃演出を生で観たかったわ……宇宙行く奴。

「言い忘れていたが、これは闇のデュエル……ダメージが実際の痛みとなつて肉体を襲う」

「ライフが尽きる前に、か弱いお嬢様達の体を持つものかな？カードを1枚伏せてターンを終了する」

迷宮兄弟 H2/3

《ゴルゴニック・ガーディアン》(攻)

《ズババジェネラル》(攻) ORU1+ 《ゲート・ガーディアン》

《牙王》(攻)

《リビングデットの呼び声》

セットカード

「闇のデュエル……ジュンコ危険だ！負けたら本当に命を落としかねない!!」
「そうよジュンコ！ももえ！無茶は止めて！わたし達が代わりに……」

「フン、なあにこんなもん雀につつかれた程度よ……」

実際結構痛いけど、タイタンといっぺんやったからね闇のデュエル。あん時程怖か無いわよ

「流石はジュンコさん、強がりとツツコミは1級品ですわね」

「今ツツコミは関係ないでしょが!!」

「フフツ、大丈夫そうですわね……頑張ってくれた分わたくしも本気で参ります、
《D
ark knight》さん!!」

『全て壊すんだ』

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!』

「ちよつと待てーい?!」

「あつ、あの無駄なかけ声は!!」

「右手が……紫に光っているだ?!」

「兄者あ!あれはあの娘がダークネス……天上院吹雪とのデュエルで使っていた!」

『『バリアンス乙女・カオス混沌・ドロ引き!!』』

で、でたー!!モモの無駄スキルの一つ、『バリアンス乙女・カオス混沌・ドロ引き』だー!?!やっぱルビに無駄しかねえ!!

「わたくしの引いたカードは、『ザ・セブンス・ワンRUM―七皇の剣』!!このカードをドロしたメインフェイズ!召喚条件を無視して、『オーバーハンドレット・ナンバーズ』をエクストラデッキから特殊召喚致します!!」

「な、なんだとお?!」

そいや師匠には『看破』喰らったから、こいつらカードの詳細までは知らないのね。

『《No. 101》!!
サイレント《S・H・Ark Knight》!!更にこれを素材にオーバーレイ!!おいでませ、『CNo. 101』!満たされぬ魂の守護者、暗黒の騎士となって光を砕け!カオス・エクシーズ・チェンジ!
《S・H・Dark Knight》!』
『イラツと……来たぜ!』

《Dark knight》★5 / 水 / 水 / 攻2800 / 守1500

「来たぜえ！ももえのエース!？」

「あんな芸当出来るならなんで毎回やらないのかしら・・・」

「もつともよね明日香サン

「無茶言わないでくださいまし、これやるには場にモンスターが存在せず、女子力が10000P以上ある時に半分支払って発動出来るんですわよ？月に1回程度が限度ですわ。出せるのも《Dark knight》さん限定ですし・・・」

「女子力半分消費って何！数値化出来るの？女子力ってポイント制とか備蓄出来るん?!」

「参りますよ！《Dark knight》さんの効果発動！相手モンスターを無慈悲に吸収する！対象は《ゴルゴニツク・ガーディアン》！《ダークソウル・ローバー》!!」

スルーかよ！

『ギギヤアアアアア?!』

「てか《ズババジエネラル》弱体化させる意味薄かったわね……骨折り損?」

「まあまあ、おかげでわたくしもやる気出てきましたし……召喚! 《セイバー・シャーク》! 特殊召喚! 《サイレント・アングラー》!!」

『ギシャーツ!』

『ポーン』

「《セイバー・シャーク》の効果! 水属性モンスターのレベルを1つ変動出来ますわ! 自身と《サイレント・アングラー》をレベル5に変動して、オーバーレイ!! 来たれ《No.

92 極氷姫 クリスタル・ゼロ》! 更に彼女を素材にオーバーレイ! 《F^{フルアーマード} A》エクシズ・チェンジ! 《クリスタル・ゼロ・ランツサー》!!」

『セイツヤア!!』

《クリスタル・ゼロ・ランサー》★6 / 水 / 戦士 / 攻2200 / 守1600

「彼女の攻撃力はORU1につき500上昇します、現在3つの為攻撃力は……3700!!」

「攻撃力3700?!」

「ただか下級モンスター2体から、我らが《ゲート・ガーディアン》に迫る攻撃力を叩き出しただと!!」

すみませんね、エクシース召喚って割とそんなばつかよ？ EXデツキの枠は余計に喰ったりするのだけど。

「バトル！ 《ゼロ・ランサー》さんで 《牙王》（攻3100）を攻撃！ へフリーズ・ランサー！！」

「今回はそのまんまね？ いいけどさ」

「甘い！ 《トラスト・ガーディアン》を素材したモンスターは、1ターンに一度、戦闘では破壊されぬのだ！ ダメージ計算後、攻・守を400下げる事になるがな」

『ぎやおーん……』

「ぐおっ……」

《牙王》（攻3100⇒2700）

「むっ、そういえばそんな効果を……だったら《Dark knight》さんで《ズババジエネラル》（攻950）を攻撃！ へデモンズ・ランス！！」

『○馬アアアア！！』

彼は海老さんではない。

『ずっぱばーっ?!』

「ぐっはあ!!」

「兄者アアアア!」

迷宮兄弟 LP8000 ⇒ 7400 ⇒ 5550

「おのれ娘え……」

「ジュンコさんが受けた痛みのお返しですわ!カードを1枚伏せてターンエンド!!」

ジュンコ&ももえ LP6300 H2/2

《Dark knight》(攻) ORU2

《クリスタル・ゼロ・ランサー》(攻) ORU3

セットカード(ジュ)

《RR―ネスト》

セットカード(も)

「(わたくしのセットカードは《激流葬》、場の2体は破壊耐性があるようなものです

し……使うタイミング次第で勝利がグッと近づきますわね」

「わたしのターン！、《マジック・プランター》を発動！《リビンググテッド》を墓地に送り2枚ドローククク……見せてやろうぞ、我が切り札を!!」

「（切り札つ、さつそく《激流葬》出番ですかね）」

「墓地に《ゲート・ガーディアン》が存在する時のみこのカードは発動する！《ダーク・エレメント》!!デッキより《闇の守護神―ダーク・ガーディアン》を特殊召喚出来るのだ!!」

『ウガアアアアツ!!』

《ダーク・ガーディアン》星10/闇/戦士/攻3800/守3500

迷宮兄弟 LP5550⇒2775

「攻撃力3800!なんかヤバそうなのが出てきたぞ?！」

うわ《ゲート・ガーディアン》正規召喚せんでいいんかい……案外特化したら強いんじゃないのあれ。

「まだわたくしが動く時ではない……しかし《巨大化》などで強化されてはたまりませんわね、デツキ構築が読めない以上ここは！」

「罨発動《激流葬》！全てのモンスターを……破壊します！」

「ええっ！このタイミングで?!」

「あれさえ破壊してしまえば、あの方達の戦力はガタ落ちのハズですわ！」

「むっ、確かにそやつの言う通り！」

「しかし甘いな！私のリバーズカード、オープン！永続罨《ディメンション・ガーディアン》!!これを《ダーク・ガーディアン》を対象に発動する!!」

「んなっ?!」

「これの対象となったモンスターは、戦闘・効果では破壊されなくなるのだっ!!」

「くっ……わたくしの《クリスタル・ゼロ・ランサー》はORUを取り除くことで破壊を免れ、《Dark knight》さんは墓地に《Arc knight》がいるから破壊された時特殊召喚されて、2800ライフを回復出来ますわ……」

『ウウウ……』

『お前は、まだまだだ……』

《クリスタル・ゼロ・ランサー》(攻3700⇒3200) ORU3⇒2

ジュンコ&ももえ LP6300⇒9100

「あの効果があるから《激流葬》を打てたんだな……」

「けどももえにしては軽率じゃない？ 手札はまだ4枚もある……結果、倒せたのは《牙王だけよ》」

「このコもしかして……焦ってない？」

「助かったぞ弟よ」

「いや何、当然の事をしたまで。しかしライフが半分になってしまったな兄者」

「なあに、ライフを払う効果は利用するものだ。まずは《アームズ・ホール》デッキトツプを落とし、デッキから装備魔法《巨大化》を手札に加え発動！お主らの方がライフが上の為、《ダーク・ガーディアン》の攻撃力は倍化する!!」

『ウツガアアアアア!!』

《ダーク・ガーディアン》(攻3800⇒7600)

「入っていた……!」

「攻撃力7600、たっかいわね……」

「だがまだトドメは刺せぬな、そこでだ。《洗脳―ブレイン・コントロール》!ライフ800を払い娘の《Dark knight》を此方のコントロール下に置く!」

迷宮兄弟 LP2775⇒1975

『どこまでも、俺達の夢を打ち砕く気かああああ!!』

「《Dark knight》さん?!」

「こやつの効果で《クリスタル・ゼロ・ランサー》をORUにする!」

「そんな事されたら場はがら空きに!」

「攻撃力7600の攻撃をモロに受けちまう!!」

「わたくしが・・・わたくしが軽率だったから・・・」

そんな事はないわ、今のは《激流葬》を打つても打たないでも一緒だった。

「あんま好き勝手にしちゃないわよ・・・オツサン共!リバースカードオープン!《RUM》レヴオリューション・フォース!!このカードは相手のORUの無いモンスターエクシーズを素材に、ランクの1つ高い「RR」をエクシーズ召喚する!!」

「何!また《RUM》!!」

「我らのフィールドのモンスターを素材に出来るだ?!」

「《Dark knight》はモモの大事なモンスター、奪われたら必ず奪い返す!《D

ark knight《1体でオーバーレイ!!》

「ジユンコさん、わたくしの為に……」

「誇り高きハヤブサよ。英雄の血潮に染まる翼翻し 革命の道を突き進め! ランクアップ・エクシーズ・チェンジ! 現れる! ランク6! 《RRーレヴオリュション・ファルコン》!」

『キュエエエエッ!』

《レヴオリュション・ファルコン》★6／闇／鳥獣／攻2000／守3000

「また新しい「RR」だ!」

「フン、どんなモンスターかと思えば……」

「ただか攻撃力2000の雑魚、とるに足らんわ! バトル! 《ダーク・ガーディアン》で《レヴオリュション・ファルコン》を攻撃!!」

「やべえっ!? 攻撃力の差は5000以上もあんど!」

「馬鹿ねっ! 《レヴオリュション・ファルコン》の効果発動! 特殊召喚されたモンスターとバトルするダメージステップ開始時、その攻守を0にするわ!!」

「攻撃力を0にするだとお?! 兄者あ!!」

「ククク……残念だったな、手札より速効魔法《禁じられた聖杯》! その効果は無効にしてくれる!!」

「うっ?!」

《レヴオリューション・ファルコン》(攻2000⇒2400)

『ギユアアアアア・・・ツ』

「ジュンコさん離れて!キヤアアアアッ?!」

ジュンコ&ももえ LP9100⇒3900

「ツツ!モモ!モモツ・・・大丈夫?!」

今の衝撃で、かなり吹き飛ばされたツ、駆け寄って彼女の姿を見ると・・・ポロポロだ、擦り傷だらけで至る所から血も出てる。もしかしたら骨も折れてるかもしれない
「全くジュンコさんったら・・・助けてくれるなら最後までしつかりしてくださいまし・・・」

ももえの声に力が無い、いや当然かもしれない。5200のダメージ。タッグデュエルではなかったら即死級。ましてやこれは闇のデュエル・・・肉体への痛みは現実なんだから。

「ごめん．．．ごめんねモモ、私がちやんと守備で出しとけば．．．ううん、そもそも七精門の鍵なんて預かってなかったら．．．!!」

私のせいだ、私がモモを、親友を巻き込んだ、私がツ．．．!!

「そんな顔．．．しないでくださいな、わたくしが勝手に巻き込まれたのですからね？ ジュンコさんが気にすることじゃ．．．でも、思ってたより痛かったの．．．ちよつと休ませ．．．」

「モモ?．．．モモオ!!」

「そんなんっ! ももえしっかりしてよ!!」

「ももえ! くっそ! 俺達にはなにも出来ないのか!!」

「フツ、まずは一人．．．と言った所か」

「安心しろ娘、貴様もすぐに其奴と同じ所に送ってやる。カードを一枚伏せてターンエ
ンド」

迷宮兄弟

H0/2

LP1975

《ダーク・ガーディアン》(攻) + 《巨大化》 + 《テイメンション・ガーディアン》
セツトカード

「・・・何勝手な事言ってるのよアンタら・・・」

大丈夫、ちゃんと息はある・・・ただ肉体が休みを欲しただけ。

「女の口をこんな目に合わせて・・・そんなに楽しいの？それがアンタ達の求めてた力なの？」

待っててねモモ、すぐに終わらせて保健室連れてくから・・・あつ、こんな時間に空いてるかな？駄目だったら鮎川先生叩き起こさなきゃ。

「これは戦争也、我らセブンススターズと貴様達鍵の守護者とのな！」
「戦場に立つ以上、女子供といえど容赦はせぬ！」

涙を拭きなよジュンコ、皆を救えるのは・・・私だけなんだから！

「もういいわかった、それがアンタらのやり方なら……私も容赦はしない!!アンタらは私が殲滅してやる!!私の……ターンツ!!」

………続く。

2 2 羽 私的に漆黒って響き好き、思わず口にしたくなる。

前回のあらすじ

相手フィールド

迷宮兄弟 H0 / 2 LP1975

《ダーク・ガーディアン》(攻) + 《巨大化》 + 《テイメンション・ガーディアン》

セットカード

「私の……タアーン!!」

うっ、これか……なら思いつきり!

「おいで!」
《R》^{レイドラブターズ}R バニシング・レイニアス!! その効果により特殊召喚《ファジー・レ

イニアス》!!」

『ピュウウウツ!』

「フン、先に見た光景よな。ワンパターンな娘だ」

「しかし《ファジー・レイニアス》は自身の効果で特殊召喚出来るのではなかったか？ 効果の無駄使いだな」

「なんとでも言え! 《RR―ネスト》の効果で《RR―ラスト・ストリクス》を手札に加えるわ! そして《バニシング》《ファジー》の2体でオーバーレイ!」

「レベル4が2体、ランク4モンスターであの化物を対処出来るのかしら・・・」

大丈夫、相手をこのまま止められるランク4のモンスターエクシーズは私のEXには二種類・・・伏せカードがあるから対処される可能性もある。相手が予測しない事・・・戦闘による正面突破!

「漆黒の闇より・・・愚鈍なる力に抗う反逆の牙! 今降臨せよ!! 《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》!!」

『ギャオオオオオ!!』

《ダーク・リベリオン》★4／闇／ドラゴン／攻2500／守2000

「カッケーけど、ちょっと怖いドラゴン出て来たな・・・」

「ジユニコが鳥獣族以外で攻めるなんて、なりふり構っていられないって事かしら……」
「フツ、しかし攻撃力2500程度恐れるにあらず！」

「我らが《ダーク・ガーディアン》の攻撃力は、7600也!!」

案の定有頂天だ、あの馬鹿高い攻撃力を越えられるなんて露ほども考えていないだろう。

「少し黙ってなさいよ……《ダーク・リベリオン》の効果発動！ O R Uを2つ使
い、相手モンスターの体の攻撃力を半分にし、その数値分自身の攻撃力に加える！<ト
リーズン・デイスチャー>!!

「なんだと?!」

「《フォース》と同等の効果とな！」

《ダーク・リベリオン》から発せられた電流が走り、《ダーク・ガーディアン》の力を奪
う……モモの敵よ、今すぐ蹴散らしてやるツ!!

《ダーク・ガーディアン》(攻7600?3800)

《ダーク・リベリオン》(攻2500?6300)

「攻撃力が……我らが《ダーク・ガーディアン》を上回ったとお?!」
「スッゲー! やつちまえジュンコ!!」

「……バトルよ! 《ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴン》で《ダーク・ガーディアン》を攻撃!! 反逆のお……<ライトニング・デイスオベイ>!!」

「攻撃力の差は2500! 迷宮兄弟のライフは1975! この攻撃が通ればジュンコの勝ちだわ!!」

「まさか我らが《ダーク・ガーディアン》相手に正面突破を仕掛けるとは……」

「だが甘い! 罨発動《ドレイン・シールド》!!」

「んなっ?!」

「貴様の《ダーク・リベリオン》の攻撃力分、ライフを回復させてもらうぞ」

迷宮兄弟 LP1975?8275

AGOの突撃がバリアに防がれてしまった。

そんな……攻撃力を過信してモンスターを除去から防ぐ物かとツ! 《テイメンション・ガーディアン》で充分ってことか……完全に油断した、《カステル》が最適策だったわ

「フハハハハ、例を言うぞ娘」

「これで我らのライフは初期値を上回った。さらに貴様の《ダーク・リベリオン》が攻撃力を変動してくれおったおかげで《巨大化》のデメリットが発生せず、数値が固定された！」

「クツ……」

駄目だ、切り替えるのよ。

攻撃力はこつちが上回った、勝負はここからよ！

「ももえの《クリスタル・ゼロ・ランサー》を守備に変更、カードを1枚伏せてターンエンドー！」

ジュンコ HI LP3900

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》(攻)

フルアーマード
《F A クリスタル・ゼロ・ランサー》(守)

《RRーネスト》

セットカード

「ジュンコ、焦ってるわね」

「無理もねえよ、ももえがあんな状態だ……俺達を守ってるこのバリアーみたいのだった、いつまで持つかわかんないしな。あちっ?!」

不味い、このままじゃ十代（ついでに夜這い馬鹿）も危ないわ！私の大事な人ばっか巻き込みやがって……!!

「ククク、表情に余裕が無くなってきたな娘よ」

「デュエル開始前の勢いはどうした？我らを「ぶっ飛ばす！」ではなかったか？」

「……………」

「言い返す余裕も無しか、我のターン！魔法カード《天使の施し》！3枚ドロし2枚を捨てる！フッフッフ、良いカードを引いた、速効魔法《ツインツイスター》」

！手札の《水魔神―スーガ》を捨て、貴様の伏せカードと《RR―ネスト》を破壊する!!」

「《RR―レディネス》も破壊されるっ……………」

「そして魔法カード《フォース》を発動！」

「《フォース》ですって?!」

「不味い！これじゃ今度はジュンコの《ダーク・リベリオン》が……」

「作用。攻撃力の半分を吸収し、その数値を頂く！こちらはエンドフェイズ迄だがな」

『グウオオオオオ……』

「ううっ……」

《ダーク・リベリオン》(攻6300?3150)

《ダーク・ガーディアン》(攻3800?6950)

「また攻撃力が逆転した!?!」

「バトル! 《ダーク・ガーディアン》の攻撃!!」

『ウガアアアア……!』

《ダーク・リベリオン》が一刀両断に……ッ!

「キャアアアアアッ?!」

ジュンコ LP3900?100

痛い……痛いよお……

『ジュツ、ジュンコ殿！起きてくだされジュンコ殿オ!?』

なに……ライキリ、アンタ居た?……デツキ違うからでしやばんなよ……

「ハハハハハハッ！先にくたばりおった娘同様、派手に吹き飛びおったわ!!」

「よくやったぞ弟よ!」

「じつ、ジュンコオー!!」

「だつ、駄目よ十代大人しくしてて！溶岩に落ちたらどうするのよ?!」

「HANASE 明日香！あいつらが、ジュンコがボロボロになってく所を……黙って観てるなんて出来るわけないだろ!!」

「わたしだって同じ気持ちよ！だけど……」

「煩い！やいお前らもう充分だろ！次は俺が相手だあ!!」

「フム、そうしたいのは山々だがな」

「ライフが尽きるかサレンダーでもされぬ限り鍵の譲渡は行えぬ、もうしばし待つが良
い……もつともあれだけのダメージ、立ち上がればせぬだろうがな？」

「そんな……」

「クツソオ！俺には何も出来ないってのか!!」

「フフフフ。立ち上がれぬデュエリストにターンは回つてこない、よつて次は私のター
ン！《貪欲な壺》を発動し《岩石の巨兵》2枚と《ゴルゴニック・ガーディアン》《神樹
の守護獣―牙王》《トラスト・ガーディアン》を戻し2枚ドロ―！2枚目の《アームズ・
ホール》により墓地から弟の《D・D・R》を手札に加え発動、手札の《風魔神―ヒュー
ガ》を捨て、再び《レスキュー・ラビット》を異次元より特殊召喚！効果でデツキより
2体の《岩石の巨兵》を呼び戻し、オーバーレイ！再臨せよ《ゴルゴニック・ガーディ
アン》!!」

『ゲヒヤヒヤヒヤヒヤハッ』

『ゴルゴニック・ガーディアン』★3／闇／岩石／攻1600／守1200

「効果を起動！ORUを使い《クリスタル・ゼロ・ランサー》を石化！そして第2の効果
！攻撃力が0になったモンスターを破壊する!!」

『アアアアアア……』

「ジュンコ達のモンスターが……」

「居なくなつた……」

「終幕だ！《ダーク・ガーディアン》よ！プレイヤーにダイレクトアタック!!」

「イヤアアアアアア!!」

「チクシヨオオオオ!!」

痛いけど……

「……墓地から、《RRーレイネス》の効果を……発動ツ！」

「何イ?!」

「戦闘・効果ダメージを……エンドフェイズまで0に……する……」

痛いけど……モモは……もつと痛い目に合つたのよ!!

「『ジュンコオ!!』」

『ジュンコ殿オオオオ!!』

うっさいわねえ……オチオチ寝てらんないじゃない。

あとライキリは泣くな鬱陶しい。

「貴様ツ！」

「まだ立てるか！」

「悪いけど……私は打たれ強さには案外自信があんのよ。十代程じゃないけどね」

「立った！立ったあ！」

「ジュンコが立ったわ!!」

『グオオオオオウツ！ジュンコ殿オオオオ!!』

「ク○ラか私は！……そして黙れ似非侍!!」

まあ実際……足ガクガクしてるし肌はポツロポロだし口ん中は血の味しかないし目眩がするわで超ヤバいんですけどね？やべ、肋骨も数本逝ってるかも……あく鍛えててよかったわ〜？

「ハアツ、ハアツ・・・まだ、やることあんの？さっさとターン寄越しなさいよ」
「むむう、ターンエンドよ」

迷宮兄弟 H0/0 LP8175

《ダーク・ガーディアン》(攻) + 《テイメンション・ガーディアン》 + 《巨大化》
《ゴルゴニック・ガーディアン》(攻)

「それだけの傷を負ってなお立ち上るとはその粋やよし！」

「だがもう限界であろう、大人しくサレンダーした方が身のためよ!!」

「はあ？何言ってるのアンタら・・・殲滅するって言ったでしょうが・・・ツ！私のツ
ターン!!」

「行っけー!!ジュンコー!!!」

「絶対・・・負けないでよ!?負けたら十代貰うからね!!!」

「(えっ?)」

『じゆうううんこおどおおのうおうおうおう』

『兄者、気持ちは解ったから引つ込もうな？今いい所』

「つたり前よ……誰が譲るかボケー!!チドリはさっさとその馬鹿引つ込めときなさい
!ふうー……魔法カード《強欲で貪欲な壺》!!デッキトップから10枚除外して……
2枚ドロー!!」

「なんと10枚も?!!」

「とてつもないリスクだ……最後の賭けに出たというわけか!」

「来たわ!」

「強欲で貪欲なジュンコの、インチキドローの始まりだぜ!!」

私ってどんなにがめつい奴だと……ツツコンでる気力もないわもう

「来た……ッ!魔法カード《シャッフル・リボーン》を発動!場にモンスターが居ない時、墓地からモンスターを特殊召喚!もう一度お願い!《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》!!」

『ギャオオオオオオオオオ!!』

「このカードで特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、エンドフェイズに除外されるわ」

「フム、ならば《ゴルゴニック・ガーディアン》の効果を使うまでもないようだ」

「そう？ だつたらこれよ！ 《RUM—幻影騎士団ランクアップマジック ラウンチ》!! 《ダーク・リベリオファントムナイツ

ン》と、このカードを素材にオーバーレイ!!」

「また《RUM》とな?!」

「アンタらなんかにはめになるなんてね？ 煉獄の底より……いまだ鎮まらぬ魂に捧げる叛逆の歌！ 永久に響かせ現れよ！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 力を貸して!! 《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》！」

『ギシヤアアアアアア……』

《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》★5／闇／ドラゴン／攻3000／守2500

「哭いてる、な……」

「《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》の効果発動！ 相手モンスター1体の攻

撃力を0にし、その変化させた数値を自身に加える!!<レクイエム・サルベージョン>
!!」

《ダーク・レクイエム》から放たれた黒い縄のような物が《ダーク・ガーディアン》を拘束する

「なんと恐ろしい能力よ」

「だが忘れたか! 《ゴルゴニック・ガーディアン》のモンスター効果を発動!!<石化の魔眼>!!せつかくの新モンスターも・・・」

「チェーンして《ダーク・レクイエム》の第2能力! ORUを1つ使い、相手モンスター効果を無効にし! 破壊する!!」

『ギヒャアアアツ!?!』

「馬鹿なあ?!」

「その後、墓地のモンスターエクシーズを1体特殊召喚! 充たされぬ魂の守護者よ! 再び蘇り、私達に勝利を!! 《Sサイレント・Hオナズ・D a r k K n i g h t》!!」

『俺は未だかつてこれ程までに、誰かを憎いと思ったことはない!!』

《S・H・Dark Knight》★5／水／水／攻2800

「ももえのエースも復活だあ!!」

「そして、第1の効果が適用される……!」

《Dark・ガーディアン》(攻 3800?0)

《Dark・レクイエム》(攻3000?6800)

「攻撃力6800ツ!」

「いかん!我らには防ぐ手段が……」

「まずはももえの分よ!《S・H dark knight》!!《Dark・ガーディアン》を攻撃!<デモンズ・ランス>!!」

『ベエ?タアアアア!!』

漆黒の槍が《Dark・ガーディアン》を貫くが破壊されない……吸収させたげても良かったけどごめん、そいつには借りが腐る程あんのよ!

「だ、《Dark・ガーディアン》は戦闘では破壊されな……」

「だが切れ味は受けてもらおうわ!」

「ぐはああああっ?!」

迷宮兄弟 LP8175?5375

「これで・・・終わりよ! 《ダーク・レイイェム・エクシーズ・ドラゴン》の攻撃! 皆が受けた痛みを味わええ! <鎮魂の、デイザスター・デイスオベイ>!!」

『グゴオオオオオ!!』

「お、おのれええええ!!」

迷宮兄弟 LP5375?0

Win ジュンコ&ももえ

「勝つ・・・た・・・良かつ・・・」

勝って安心したら、そのまま倒れこんでしまった。やっぱ体は限界です・・・

「やった! ジュンコが勝ったぜ!!」

「ええ・・・ええ!!」

「ククク・・・あの状況から逆転するとは見事なり・・・」

「我らの負けよ・・・素直に受け入れよう」

「迷宮兄弟・・・」

「だがこれで終わったわけではない、むしろ始まりなのだ」

「我らの実力は、セブンスターズの中でも最弱・・・より強力な闇のデュエリストが・・・
貴様達を襲うだろう・・・」

四天王ネタかて・・・つてツツコム気力もないわ

「それに主のデュエルは・・・我らよりもはるかに闇に染まっている・・・」

「精々力の振るい方に・・・気をつける・・・ことだな・・・!」

誰が闇の力やねん・・・闇属性のデッキだけでしょーが、最後にとんだ風評被害つけやがって・・・

「消えた・・・ッ!？」

「これが、闇のデュエルの敗者の末路……」

迷宮兄弟の二人は、黒い霧になって消えてしまった。皆を酷い目に合わせた以上同情の余地は無いけど……

迷宮兄弟達が消えると、また怪しげな光に包まれて私達は火口の外になげ出されていた。

「ふう……」

「ジュンコオオオオ!!」

「うわっ?!何よ二人して!」

いきなり十代と明日香にハグられました、おい待て重いつて……

「良かった……わたしがつきりもう駄目かと思つてッ!」

「なっ、なに言つてんだよ明日香あ!俺はジュンコが負けるはず無いって信じて……
信じてっ……!!」

二人供すつごい顔。

・・・心配かけちゃったわね、ごめんて。

「とーぜんよ、私を誰だと思つて・・・うん、もう無理っぽい。じゅくだしいあゝすか
ゝ・・・私ともえ宜しくうゝ・・・」

とりあえず・・・二人の腕の中で意識無くします。

「「ええゝ!？」」

《《ジュンコ殿おうおうおうおう (r y)》》

《《あれ？今回俺ら出番あんだけ？》》

「うゝん・・・」

あれからどれ程時間が経つたのだろう、私の回りが騒がしい気がする

「・だ・・覚め・・んの?」

「もう・・間に・・るわ」

うつさいなあ・・・ゆつくり寝かして頂戴よ

「・方・あり・・ん・十代様」

「ん?よく・・ん・・けど」

十代、そこにいるのかな。

あれ?心配が近づいて・・・

「ジュンコ、そんな無防備に寝てると・・・食っちゃまうぜ?」

「ぜひお願いします!!・・・ってアホー!?何言わせてんのよー!!!」

「グツハア?!」

「あ、アツパーカット・・・」

耳元であんな事囁かれてつい反射的に手が出してしまった、あれ?ここ保健室かな

「ね？眼が覚めましたでしょう？」

「痛って〜…………その代償はでかかったぜ」

「良かった…………」

やっぱり保健室だった、私は寝かされていたようだ…………十代、明日香、ももえに十代同室コンビが私を見ていた。

「つてももええ！アンタ大丈夫なの?!私より派手にやられてたじゃない!!」

「ちよつと辺獄逝きかけましたが…………無事<リターン・フロム・リンボ>致しましたわっ!」

「どこのカオスナンバーズよアンタわ!つてイタタタタ…………」

「大声出すからです、3日寝込んだ上に全治一週間ですってね?精々養生してくださいまし」

こ、この女。人に散々心配かけておいて…………

「なんでももえはピンピンしてんだ？」

「さあ……もえなら仕方なくないかしら」

「もえさんの扱って……」

「日頃の行いの結果なんだなあ……」

「それ、どうゆう意味ですかね前田様？ 詳しく伺いたいものですわ……(ニツコリ)」

「ご、ごめんさいなんだな」

「はてさて、もう寮の消灯時間が迫ってますわよ皆様。早く帰らないと校則違反です……それとも、十代様はジュンコさんと一緒に寝るから帰らないのでしょうか」

「おう！ ジュンコが独りじゃ心細いつてなら残つていくぜ！ 朝まで一緒にいてやる!!」

「待つて十代！ 怪我人相手にナニするつもりなのよ冷静になりなさい！ わたしも残るから30^ビでイキましよう、ジュンコの負担はわたしが減らすわ!!」

「モモてめー余計な煽り入れんな十代本気にしてんじやない！ あと明日香は真顔で何口走つてんのよアンタが一番冷静になれつてかもう帰つてください余計傷に響きます！

アタタタタ……」

「いちいち突つ込むからダメージ増えるんじや……」

「このまま残つてたら本当に退院遅れそうなんだなあ」

「フフフ、楽しそうだなによりです。それでは皆様ごきげんよう」

「・・・モモ！」

「はい？」

「無事で・・・良かった」

「ええ。お互いに・・・」

そのまま、ももえは保健室を出て行ってしまった。

《無茶しやがって・・・》

「・・・この辺りなら、大丈夫でしょうか・・・」

保健室から大分離れた、明日香達が寮に帰るとしてもこちらは遠回りだ、まず見つからないだろう。

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

そのまま壁にもたれて座り込む・・・困ったな、立ち上がれそうにない。こんな事なら松葉杖でも用意して隠しておくのだった、朝までここで過ごすはめになるかもしれない。

「フン、半死人がこんな所で何をしている」

暗くなった廊下の先から人の声がした。こんなみつともない姿を晒したくない人物の一人だ。

「万丈目、様・・・」

「全く、おじやまいエロ雑魚に見張らせておいた貴様が居なくなつたと聞いて驚いたぞ」

「まあ、乙女の寢床を見張ってらしたんですか？ 万丈目様のエッチ……」

「貴様も以前、精霊共に似たような事をさせていただろうが馬鹿者」

「あら、流石にばれてしまいましたか……」

「ふざけるのも大概にせんか……全治一週間処ではないだろうが貴様は！ 何故そんな体を引きづって迄枕田に会う必要があつた？ 自室養生を望んだのも貴様であろうが！」

彼はいつになく真剣な顔だ、普段通りにして質問をかわせる空気じゃない……

「……泣いて欲しくないんです」

「はっ？」

「ジュンコさんって責任感強すぎるんですよ。自分のせいだつて考え出したら深く落ち込んだり」

「……」

「そんなジュンコさんは……もう見たくありませんから」

「フン、案外友達想いな奴だったのだな」

「ですので……協力してくださいませんか？ 十代様達にもあとでメールで伝えます。どうかジュンコさんには、わたくしは元氣だと」

どうせすぐにばれちゃうんだろうけど、せめてあっちが退院出来るくらいまでは……
自分を治す事に専念してほしいから。

「ところで……これからどう帰るつもりだ？立つこともままならないくせに」

「えっ？えと……少し休んだら」

「馬鹿が、貴様は他人に頼る事を知らんのか？……背中を貸してやる、誰かに見られる前に帰るぞ」

「は、はい！」

意外な申し出だがり難くお言葉に甘える事にした、こつちも素直じゃない。

「あの……お姫さま抱っこしてくれてもいいですわよ？」

「やはり一人で帰るか？」

「じ、冗談ですわ！おほほほ……」

彼の胸の辺りに腕を回し、体を彼の背中に預ける。こんなふうに関他人に頼ったの何時

以来だろ……わたし重くない？臭くない？

「よつと……おい、胸部を故意に押し付けるな。襲われても文句はいえんぞ」
「えっ？」

普通に体預けてただけなのに……力抜け過ぎて自然とそうなっちゃったのか

「何時でもどうぞ？」

「はあ、どうして俺はこんな奴を……」

……続く

23羽 最近、インチキ効果が増えすぎてツッコミづらい

ある昼下がり、保健室にて

「ジュンコ、本当に……いいんだな？」

「……いいわよ？十代、来て……」

「じゃあ……入れるぜ？」

「うん……アツ?!」

「わ、わりい！上手くないもんだな……俺、こういうことする初めてだから……」

「大丈夫、私もよ？こういうことされるのは……十代が初めて」

「……そつか、なんだか嬉しいな」

「フフツ。優しく、してよね？」

「ああ、今度こそ……いくぜ？」

重なり合う、二人の男女の影……

「はい、アーン」

「あゝん、熱っ！むぐぐ……んゝおいしく！十代の作ったおかゆ！」
「ん、そうか！そりやよかったぜ!!」

「ラブラブつすねえ……」

「だなあ」

どうも、翼をもがれた隼……じゃなくて枕田ジュンコです。迷宮兄弟とのデュエルから数日経ったけど、相変わらず保健室のベットで養生してたりします。

現在十代に「なんかしてほしい事あるか？」と聞かれたので「お腹空いた」と伝えたら……何故かお粥を作ってきてくれました。

いや、嫌いじゃないけどね？お粥つて風邪とかで消化が弱ってる病人に振る舞うもん

じゃね？普通に購買のドローパーンとかでよかったのに……まあぶっちゃけ体起こすのも辛いから、有り難く看病イベントまで突入させていただきました！キヤーツ!!そして普通に美味しいとゆう。

「フンツッ! ジュンコは怪我人……フンツッ! ジュンコは怪我人……」

「ところで明日香さんはなんで空きベットをサンドバッグにして拳を入れてるんだあ？」

「シツッ! 目の前でイチヤつかれて嫉妬に狂いかけてる所を、ジュンコさんの状態を想って無理矢理理性を保っているんすよ……下手に触れないようにね」

「わ、わかつたんだなあ……」

「あらく、卑しい……じゃなくて愉しそうな声が聴こえたのですが……違いましたか」

「うわっ?! ももえさん!!」

「ブーツ!!」

向かいのベッドの下からももえが出てきた、なんかカメラ持って……

「アンタはどっから出てきてるんじゃないやあ！てかそのカメラ何よ!」

「駄作者が小説の人気が無さからついにR―18に走つ……。ではなくてジュンコさんがついに素直になって事案発生かと思ひまして、これは是非とも？ECしとくべきかと思つたのですが」

「いくら駄作者でもそんな方向に走らないし走らせないわ！仮にそうなくてもR？Cとかヤメレー!」

「???ジュンコはいつも感情どストレートじゃないか?」

「ももえ！わたしならいつでも準備OKよ!!」

「スタンバるな明日香あ！男子いるからここ!!」

「スタンバイフェイズ抜きでバトルフェイズに入ればいいのか?!着衣のままとか上級者ねジュンコ……」

「なんでそうなのよ！何もせずターンエンドせいや!!」

グツ、また大声出したからか傷に……。私がなかなか治らない理由ってコイツらのせいじゃね?」

「うんうん、経過は良好のようですね．．．ではわたくしは用事がありますからこれで」

そういつてさっさと出ていつてしまったももえであった。何しにきたのよあの
コ．．．

小声「メールでももえさんなんともないように振る舞うから協力してつて言われたけど．．．よくやるツスね」

小声「本当は立ちあがるのも辛いつて聞いたぞお、普段はああだけど．．．実は滅茶苦茶友達思いなんだなあ」

r y 「なあ明日香、ももえつて部屋に自分で帰れるのか？」

r 「トイレでくたばつてゐるらしいから帰りに拾つていくわ．．．」

??皆でぼそぼそ話して気持ち悪いわね．．．

《チーン》↑モモ

次の日……

「たつ、大変なんだなあ!!」

「どうしたの隼人君!丸ペンが上腕に刺さって爆発した?」

「刺さるまではまだわかるとしてなんで爆発すんのよ!」

隼人君が保健室に急に駆け込んで参りました、この展開どつかで観たような……

「駄目よ?丸ペンは人を殺傷出来る程鋭いんだから」

「丸ペンじゃなくて……で、出たんだなあ!湖に吸血鬼が!!」

「吸血鬼……校長達が話してた奴か!」

「もしやセブンスターズの新たな刺客!?十代、

いくしかあるまい!!」

「おう!セブンスターズ……今度は俺が相手だぜ!!」

どこの社長と王様だコラ、

「ま、待って二人供！……私も連れてってよ」

「?! 駄目よジュンコ、貴女怪我人なんだから……自分で立つのもしんどいのでしょうか？」

「うう、そうなんだけどさ……」

吸血鬼って事はカミューラ戦よね、クロノス先生や先輩が人形にされるの知っててほっとけるわけないじゃない

「……判った、一緒にいこうぜジュンコ。俺の背中貸すよ」

「十代……」

やださりげないケメン、惚れ直すわ

「十代、あなたねえ！」

「正直一人にするほうが心配だ、迷宮兄弟みたく人質をとる相手だったら……」

「……わかったわよ。その代わり連れてくなら責任持つて面倒みなさいよね」

「当然だぜ！ さあジュンコ乗るんだ!!」

「う、うん」

ありがと、二人供……

《きゃ〜！十代の背中あったかい!!》

十代号に揺られ湖の岸まで到着すると、ももえ以外の鍵の守護者になったメンバーと大徳寺先生にクロノス先生が集結していた。

「マンマミーア?! ドロップアウトボーイ！ 怪我人のシニョーラ枕田をどうして連れて来ちゃった〜ノ!!」

「え、えつと〜」

「私が無理言つて頼んだんです先生、十代に非はありません」

「フン、精々足を引つ張るなよ」

言い方キツイな万丈目君、普段の私が言えたことじゃないか

「そ〜いえばももえは？あの子私よりピンピンしてたし、来てるもんだと・・・」

「「ギクツ?!」」

「・・・メールは出したが返事は無い、大方寝ているのだろう。夜も遅いしな」

「・・・ふ〜ん？」

まだ10時なんだけど、あの子そんなに早寝だったかな

「ツ?!皆あれを見ろ!!」

湖の霧が晴れてきたと思ったたらその中心部には中世ヨーロッパを連想させる「いかにも」な古城が聳え立っていた。

「あれが敵のアジトか」

「怖いのにヤ〜お化けとか出そうなのニヤ〜・・・ヒイツ?!」

城の方からなんか転がってきて道が出来た?!

「ヴァージン・ロードって奴か?」

「違うと思うツス」

「皆さん何をビビっている〜ノ! 赤き道は紳士の道! わたくし〜が一番乗りなの〜ネ
!」

クロノス先生がやる気満々で突き進むので、うちらもあとから付いていくことにした。てかこの道、原理どうなってるんだろ。

・・・あれ? 最初向こうから来なかったっけ?

《クルツク》

「怖いのニヤ〜」を連呼する大徳寺先生をスルーしつつ城の中に入り、ちよつとしたRPG気分を味わいながら随分開けた所にたどり着いた。中央ホールとでも言えばいいのだろうか

「ようこそ、我が居城へ!!」

「だつ、誰だ!?!」

「我が名はカミューラ、ヴァンパイアの貴婦人にしてセブンスターズが一人」

私達の向かいの高台から、ボスキャラチックにカミューラさんが自己紹介してくださいました。あの〜貴婦人って自分で言うものだっけ?てか吸血鬼なのに貴婦「人」でいいの?

「やっぱりセブンスターズか!」

「フッフ、最初は此方から出向こうと思ってただけどわざわざ来て下さるなんて手間が省けたわ。さあ!わたしの相手は誰かしら!!?」

「俺が行くぜ! (ジュンコを背負いながら)」

「いえわたしが! (怪我したら十代に背負われない)」

「私がいくし！（怪我人出したくない）」

「……………」

「…………皆さくん、ここはわたくし々に任せて下さいなの〜ネ」

「「クロノス先生?!」」

「闇のデュエルかなんだから知らないケレド、大切な生徒が傷つくのをこれ以上黙って観ていられませくん、シニョーラカミューラ！生徒達に手を出そうとゆうのなら、まずワタシを倒してからにする〜ノデス!!」

「おお……………」

やだ先生ちよつと格好いい、でも黙っていかせたら人形にされちゃうような…………

「へえ、いい覚悟ね先生…………チェンジは有りかしら？」

「「「だあつつつ?!」」」

「し、失礼にも程がある〜ノ!!」

「だって好みじゃないんですもの……………」

ももえみみたいな事言い出したわねあの吸血鬼……

「フン、無駄に格好つけてハードルをあげるからだ。引っ込んでいろオカツパ教諭」

「お、オカツパー?!」

「そもそもアンタはアメリカから戻らない天上院吹雪さんの代理で鍵を預かっているだけだろう、最高戦力のカードをアンタの感情論で消費されては困る……ここは俺がやる」

「万丈目!」

「あら、わたくしでできればあちらの彼が良かったわ」

「御指名だよ、モテモテね先輩」

「ふん……」

「貴様ごときにカイザーが出張するなど、それこそ切り札ジョーカーの切り損だ。戦いたくばこの俺を完膚無きまでに振じ伏せるくらいするんだな」

「（この子のデッキも蝙蝠達が確認したけど、一番まとまり無く逆逆にやりづらそうなのよね……まああんな構築じゃ対策を意識するまでもないか）」

確かカミューラって蝙蝠使って皆のデッキを覗き見したりしてたんだっけ?……万

丈目君のデツキ見てもまとまり無くて対策の立てようが無さそう。

「まあ貴方もちよつと幼さは残るけど可愛いし……いいでしょう、お望み通りつぶしてあげるわ!!」

「つぶされるのはそつちだ! いくぞ、セブンスターズ!!」

「デュエル!!」

万丈目

LP4000

カムミューラ LP4000

「先行は貰う! ドロー!!」

いつの間にやらカムミューラに向かい合う位置まで移動した万丈目君はちやつかり先行までもぎ取りました。

「万丈目ー! 負けんじやないぞー!!」

「万丈目君しつかりー!」

「ファイトツスー!」

☒万丈目さん☒だ！俺は手札より《手札断殺》を発動、互いに手札を2枚捨て2枚ドロ！
 !そして《フオトン・サンクチュアリ》を発動！光属性・攻2000のトークンを2体
 精製しこれを生け贄に捧げる！現れる《光ライトと闇アンドの竜ダークネス・ドラゴン》!!」
 『グオオオオオツ!!』

《光と闇の竜》攻2800

「おおつ、いきなり万丈目の最強モンスターの登場だぜ！」

「そ、そうね」

カミューラつてことは「ヴァンパイア」、手札交換が後々響かなきやいいけど・・・
 しっかりいきなりエースを繰り出すと負けフラグに見えちゃうのよねえいかんいか
 ん、フラグを建ててるな私。

「・・・1枚カードを伏せてターンエンドだ」

万丈目 H2

「(これが情報にあつた《光と闇の竜》・・・)私のターン、《不知火の隠者かげもの》を召喚ッ

！効果発動！この人間もどきを生け贄にして、デッキよりアンデット族チューナーを1体特殊召喚する!!」

うっげ「ヴァンパイア」じゃないの?!確かにアンデットですけどもっ!

「フン、何を考えてるか知らんが・・・《光と闇》の前では墓地発動だろうが無力!自身の攻守を500下げて効果を無効とする!」

「もちろん、存じていますわ、速効魔法《禁じられた聖杯》!その厄介な能力は封じさせてもらおうわ!」

《光と闇》の効果はチェーンブロック中1度のみしか対応してない、初見でわからないわよね普通・・・

「チツ、ならばチェーンして手札の《増殖するG》を発動!貴様の特殊召喚の度に1枚ドロウさせてもらおう」

《光と闇の竜》(攻2800?3200)

「キヤアアアアアッ?!Gだああああ!!」

「ももえがよく使う奴ね、絵面が酷くなるわ……」

「ジユンコ暴れないでくれ！痛い痛い痛い!!」

「……十代、降ろせばよいのではないか？」

「安心しろ天上院君、このカードに限り画像エフェクトをオフにしてある」

よつこらしよ（↑降りた）

そんなこと出来るのかよ！ももえにもやらせといてください……あ、あのコはわざとかな

「フン、好きにしない。これで我らを縛るものは無い！効果が適用されデッキから《ユニゾンビ》を特殊召喚！」

『ゲヘヘヘッ』

《ユニゾンビ》星3 / アンデット / チューナー

「なら一枚ドロ―！」

「チューナーモンスター……やはり使ってくるのか！」

「わたしの趣味にはあわないのだけど……《ユニゾンビ》の効果発動！デッキからア

ンデット族モンスターを墓地に送ることで、レベルを1つ上昇させる！そして墓地の《馬頭鬼》を除外し《隠者》を再び特殊召喚！

『フツ』

《不知火の隠者》星4／アンデット

「ドロー……」

「レベル4《不知火の隠者》にレベル4の《ユニゾンビ》をチューニング！姿を見せよ！

レベル8《戦神いくさがみ—不知火》!!」

『セイヤツ!』

《戦神—不知火》星8／火／アンデット／攻3000

やだイケメン……じゃなくてヴァンパイア関係無っ?!シンクロヴァンパイアなんていないけどさ

「シンクロも特殊召喚だ、ドロー！攻撃力3000、貴様の聖杯のおかげで突破はされんな」

「そうかしら？シンクロ召喚成功時、墓地の《ユニゾンビ》を除外しその攻撃力分《戦神—不知火》はパワーアップするわ！」

「つまり・・・攻撃力4300?!」

「やべえ! 《光と闇》の攻撃力を上回った!!」

「バトルよ! 《戦神―不知火》で《光と闇の竜》を攻撃! 〈妖―紅蓮剣〉!!」

「ぐおおつ?! 《光と闇》がこうもあっさりと・・・!」

万丈目 LP4000?2900

《光と闇の竜》が破壊されたから自軍の全カードも破壊、墓地から何が蘇生されるか…

「《光と闇の竜》の効果により、《おじやまいエロー》を復活!!」

『い、いやくん・・・』

《おじやまいエロー》星2/守備1000

「よ、よりによっておじやまあ?!」

「あら、そんなカードしか手札にいなかったの? カードを1枚セットしてターンエン・ド。自信満々に出てきたわりはこの程度? 今からでもチェンジを認めましょうか」

カミューラ H2

《戦神―不知火》(攻4300?3000)

セツトカード

「……ターンの攻防を制した程度で図に乗るな、貴様などカイザーが出るまでも無いと言ったろう！俺のターン!!《手札抹殺》を発動！互いに手札を全て捨て、同枚ドロースる!!」

「手札交換ねえ、有り難く頂戴しておくわ」

「アンデット相手に手札交換カードはやはりハイリスクだな」

「ええ、せめてあの《戦神―不知火》くらいは倒せないと割りに合わないわ」

「抹殺で墓地に送った《エクリプス・ワイバーン》の効果によりデッキの《ダーク・アームドドラゴン》を除外する！更に《馬の骨の対価》、《おじゃまいエロー》を生け贄に2枚ドロース」

『兄貴のいけず〜!』

もう、抜けばいいのに……逆に愛着あるんかな

「来たかつ、《テラフォーミング》！《ユニオン格納庫》をデッキから手札に加え発動！

反撃開始だ、《Cークラツシユ・ワイバーン》を召喚！《ユニオン格納庫》の効果でデッキから《トルクチューン・モーター》を装備する！更に墓地の《エクリプス・ワイバーン》を除外し《暗黒竜 コラプサーペント》を特殊召喚！《エクリプス・ワイバーン》が除外されたので、効果で除外した《ダーク・アームドラゴン》を回収する」

『ギギッ！』

『ギャオッ！』

《クラツシユ・ワイバーン》星4／光／機械

《コラプサーペント》星4／闇／ドラゴン

「《トルクチューン・ギア》を装備しているモンスターはチューナーとして扱う！レベル4 《コラプサーペント》にチューナーとなった《クラツシユ・コア》をチューニング！大いなる風に導かれし翼を見よ、シンクロ召喚！響け、《スターダスト・ドラゴン》!!」

『ギャオオオオ・・・』

《スターダスト・ドラゴン》星8／風／ドラゴン／攻2500

「ふ、ふつくしい・・・」

「ジュンコどうした?！」

「でも、確かに綺麗・・・」

だつ、だつて立体演出ソリッドビジョンで初めてみたし!!

説明しよう21羽にて師匠からシグナー竜が謎配布されたわけだが……《スターダスト・ドラゴン》さんが選んだのは万丈目君だったのだ!

流石主人公ですわつてモモが言つてた。

「たかたが攻撃力2500じゃない……召喚時には何もないわよ?」

「……この瞬間墓地に送られた《クラッシュ・ワイバーン》と《コラプサーペント》の効果を活用する、《輝白竜　ワイバーンスター》を《テッキから手札に加え、手札から《B―バスター・ドレイク》を特殊召喚!墓地の《コラプサーペント》を除外し《ワイバーンスター》を特殊召喚!

『ギャオツ!!』

《バスター・ドレイク》星4/光/機械

《ワイバーンスター》星4/光/ドラゴン

「《ライトニング・チューン》を発動!光属性の《バスター・ドレイク》をチューナーに

変更する！レベル4の《ワイバーンスター》にレベル4チューナーとなった《バスター・ドレイク》をチューニング！その光にて、この世ならざる者共に終幕を与えん！シンクロ召喚《ライトエンド・ドラゴン》！！

『ギアオオオツ！！』

《ライトエンド・ドラゴン》星8／光／ドラゴン／攻2600

「おー！またシンクロモンスターだ、すっげー！！」

「そうはいかないわ！特殊召喚時に罫カード《激流葬》発動！全て洗い流してあげるっ！！」

「残念だったな《スターダスト・ドラゴン》の効果発動！自身を犠牲にあらゆる破壊効果を無力化するくヴェイクテム・サンクチュアリ>！！」

『クウオオオオ……』

スターダストが光の粒子になって消えたことで激流が収まり場が沈黙した、やっぱ綺麗よね

「おのれえ……」

「おっと、《バスター・ドレイク》と《ワイバースター》の効果により《Yードラゴン・ヘッド》と《コラプサーペント》を手札に加えさせてもらうぞ。そして！墓地に《Aーアサルト・コア》《Bーバスター・ドレイク》《クラッシュ・ワイバーン》が揃った！こいつらを除外し融合合体！《ABC ドラゴン・バスター》!!!」

『『ジャッキーン!!』』

《ABC ドラゴン・バスター》星8／光／機械／攻3000

「新たなユニオン融合体、しかも全て墓地から素材を調達出来るだ?!」

「残りの素材は断殺で捨てたのね、流石ぬかりない」

「手札を1枚捨て、《ドラゴン・バスター》の効果発動！《戦神ー不知火》を除外する！バトルだ！《ドラゴン・バスター》でダイレクトアタック!!<ABCーグレート・デストラクション>!!」

技名が雑だーっ?!

「フフツ《速効のかかし》、手札から捨てることでこのターンの戦闘ダメージを0にするわ」

「やはりその手のカードを握っていたか、顔に出ていたぞ化物……エンドフェイズに

《スターダスト・ドラゴン》はフィールドに舞い戻る！」

「何っ?! 何度でも効果を使えるというわけね……」

万丈目

H3

《《ダーク・アームドドラゴン》》

《《Yードラゴン・ヘッド》》

《《暗黒竜 コラプサーペント》》

LP2900

《《ユニオン格納庫》》

《《スターダスト・ドラゴン》》(攻)

《《ライトエンド・ドラゴン》》(攻)

《《ABCードラゴン・バスター》》(攻)

「フィールドには最上級ドラゴン(?)が3体、加えてカミューラの手札は1枚！」

「一事はどうなるかと思っただけ、このまま圧勝出来るんだな！」

「いいぞー万丈目ー!!」

「さん、だ!!」

「思ってたよりやるじゃない……わたしのターン！手札から魔法カード《影依融合》

シャドール・フュージョン

を発動ツツ!!」

またヴァンパイア関係全くないカード来たあ?! つーか万丈目程じゃないけどごちゃ混ぜねあのデツキ!!

「融合魔法だと! しかし、残り手札1枚で何と融合するつもりだ?」

「甘いよ。このカードは相手がEXデツキから呼び出したモンスターをコントロールしている場合・・・デツキのモンスターを素材に「シャドール」融合モンスターを融合召喚出来る!!」

「「はあ?!」」

「なっ、なによそのふざけた融合魔法!」

「インチキ効果も大概にするツス!!」

そう言いたくなるのも無理はない、条件付きとはいえ融合戦術の弱点の1つである手札の消費を完全にカバー出来るのだ。

私も出た当所は似たような事を叫びまくったわよそりゃー。まあネフィリム死んだから融合体が強いんだけどなんか力不足つーか・・・

「デツキの《シャドール・ビースト》と光属性《超電磁タートル》を融合！神の如き、忌まわしき力の一端を畏れよ！融合召喚《エルシャドール・ネフィリム》!!」

『愚かな……』

《エルシャドール・ネフィリム》星8／光／天使／攻2800

「ぞっけんなこらー！なんてもん出してんじやーい!!」

「うわっ?!どうしたジュンコ!!」

「フフフフ、そこのお穢さんは御存じなのかしら？このモンスターの脅威を！《ネフィリム》の特殊召喚時の効果に加え、融合素材にした《シャドール・ビースト》の効果を発動させて貰うわ。カードを1枚ドロロー！更に《シャドール・ヘッジホッグ》をデツキから墓地に、《ヘッジホッグ》の効果で《シャドール・ファルコン》を手札に！」

「融合召喚して手札が増えているだど?!なんだそのふざけた効果の集団は!!」

「ち・な・み・に、《ネフィリム》は特殊召喚モンスターと戦闘する場合に一方的に破壊することが出来るわ。バトルよ！《ABCードラゴン・バスター》を攻撃!!」

「させてたまるかあ！《ドラゴン・バスター》の効果発動！手札の《Yードラゴン・ヘツド》を捨て、《ネフィリム》を除外する！<ドラゴニック・キャノン>!!」

『アアアアア……』

あれっ、《ネフィリム》除外される為に出てきたようなものじゃない？……まさか
困じやあないでしょうね。

「あら残念。メインフェイズ2《貪欲な壺》発動！《シャドル・ビースト》《ヘッジホッグ》《ヴァンパイア・ベビー》《速攻のかかし》《不知火の隠者》をデツキに戻し2枚ドロ！……相手フィールドのみにモンスターが存在するので《聖刻竜 トフェニ・ドラゴン》特殊召喚！」
『グルッ』

「今度はドラゴンだと?! 貴様のデツキはどうなっているのだ!!」

「それは万丈目君が言えたことじゃない!」

「仲いいな、お前達……」

「言いたい事は判るけどニヤッ」

「外野は余裕ねえ、このモンスターを生け贄に《ヴァンパイア・シャドウ》を召喚!! 召喚時にデツキから《ヴァンパイア・ロード》を、《トフェニドラゴン》が生け贄にされた事

で《ラブラドライ・ドラゴン》を、特殊召喚！《馬頭鬼》を除外し墓地から《カース・オブ・ヴァンパイア》を特殊召喚する!!」

『フフフ・・・』

『ワハハハハハッ!』

『ギシャーツ!』

『ククククッ』

《ヴァンパイア・シャドウ》星5／闇／アンデット

《ヴァンパイア・ロード》星5／闇／アンデット

《ラブラドライ・ドラゴン》星6／闇／ドラゴン

《カース・オブ・ヴァンパイア》星6／闇／アンデット

「一気に4体も展開してきた?!

《手札断殺》のツケもあるわね、また《馬頭鬼》落ちてっし・・・やつと吸血鬼らしいモンスター出してきたじゃない」

「《シャドウ》と《ロード》で《ラブラドライ》と《カース・オブ・ヴァンパイア》でオーバレイ!!今こそ誇り高きヴァンパイア一族の力を見るがいい、エクシーズ召喚!ラン

ク5《エーデルリッター紅貴士ーヴァンパイア・ブラム》！ランク6《No. 24 竜血鬼 ドラギユラス》!!」

『クハハハハツ!!』

『ギユアアア!!』

《ヴァンパイア・ブラム》★5／闇／アンデット／攻2600

《竜血鬼 ドラギユラス》★6／闇／幻竜／守2800

「エクシードモンスターが2体も……」

「けど攻撃力は万丈目のモンスター達のが上!しかもこのターンのバトルフェイズは終ってる、何も怖くないぜ!!」

「そうね、そのボウヤ達の言う通り……《ヴァンパイア・ブラム》の効果オーバーレイユニットORUを使いアナタの墓地からモンスターを特殊召喚出来る、そうねえ……《ドラグニティアームズ・レヴァティン》、コイツにしましょう」

『ギユウウオオオ』

《アームズ・レヴァティン》星8／風／ドラゴン／攻2600

抹殺で落ちた奴か、《光と闇》と相性いいとはいえまた重いモンスターを……

「あら、特殊召喚時にドラゴン族を装備出来るのね《トフェニドラゴン》でも装備しておくわ。そして《ドラギユラス》の効果、ORUを1つ消費しEXデッキから呼び出されたモンスターを1体裏側守備に変更する。《スターダスト・ドラゴン》にはおねんねしてもらおうね」

「バトルも出来ないのに今更なにを……」

「お遊びはこれまででつてことよボウヤ!!」

「ひい?!」

「口、口が怖いのニャ〜!!」

「牙怖つ?!生でみるとめっちゃ怖!!妖怪口割け女でも通じると思いますがカミューラさん!!」

「化物め……!!」

「そう、人は違うモノを嫌悪し恐怖する!化物の力を教えて差し上げるわ……魔法カード《幻魔の扉》発動!!」

「幻魔の……」

「扉？」

やばい、ヤバイヤバイヤバイ?!

「万丈目君！なんでもいいから止める手段無いの?!」

「なんだ枕田！あの魔法がなんだっていうんだ……」

「このカードは、発動後相手モンスターを全て破壊する……そして相手がデュエル中に使用したモンスターを、召喚条件を無視して特殊召喚する!!」

「ふっ、ふざけるな！《死者蘇生》と《サンダーボルト》、2枚の最凶魔法の効果を合わせ持つだ?!」

「あんなの喰らったら、もう巻き返せないノーネ!!」

「……勿論、代償は大きいわよ！この禁術の使用者は幻魔に魂を預ける、デュエルに敗北した場合、その魂は幻魔のモノになる……」

「命懸けの、インチキカードってことか……」

けど発動タイミングさえ見極めれば、限りなく勝率はハネ上がる。どうせ負けたら死

に近い意味を持つ闇のデュエルにはうってつけ……

「けどわたくし、慎重深いから生け贄を誰かに代わってもらおうかしら。例えば……このコとか？」

パチンツ、カミューラが指を鳴らすと蝙蝠の大群が彼女の側に集まってきた。その蝙蝠達が多散開していくと……その場所には十字架に手足を縛られた私の親友が、浜口ももえの姿があった。

「……えっ？」

「なんでももえがここに?！」

「ツツツ!! 貴様あーどうゆうつもりだあ!!！」

「あら、わからない? 人質よ ヒ・ト・ジ・チ。ボウヤがこのコと親しい仲にあるのは \square 眼 \square みて知ってるのよお?」

「ふざけるなあ!! これは貴様と俺の勝負だろうが! 今すぐそいつを解放しろ!!」

「……ほえ?」

万丈目君の怒鳴り声に反応したのか、ももえが意識を取り戻した。

「な、なんでしようかこの状況……」

「目が覚めたか！いいから逃げろ、なんとかして逃げろ!!」

「そんな事いわれなくても……!」

「ダメ、いただきます」

「きゃあっ?!」

「ももえ!!」

☒原作☒で翔君がやられていたように、カミューラがモモの首筋に噛み付き吸血する。そこからうつすらとした魂のようなものが抜けだして……

「オホホホホッ！御馳走様。この娘の魂を生け贄に、《幻魔の扉》を発動!!」

「ち、チェーンして《ABCドラゴン・バスター》の合体を解除！《アサルト・コア》《バスター・ドレイク》《クラッシュ・ワイバーン》に分離ツ!!」

『ギャオオオオオ!』

『『ギシャアアアッ!』』

「フフフ、全モンスターを消滅させ……アナタの《光と闇の竜》をわたしのフィールドに特殊召喚する！」

『クオオオオ……』

「《光と闇》ツ……だが破壊された3体、それぞれの効果を発動！まずは《アサルトルコア》のサルベージからだ！」

「攻守を500下げ当然無効よ。便利な効果ね〜」

「だが同一チェーン上1回しか対応出来ない！《バスター・ドレイク》の効果でデツキから《X―ヘッド・キャノン》を手札に！」

「思ったよりしぶといわね〜、ターンエンドよ」

カミューラ H1 LP4000

(内《シャドル・ファルコン》)

《ヴァンパイア・ブラム》(攻) ORU1

《竜血鬼 ドラギュラス》(攻) ORU1

《光と闇の竜》(攻2800?1800)

《ドラグニティアームズ・レヴァティン》(攻)

「なんてことだ……浜口君が人質にとられた上に」

「最上級モンスター2体を奪われた」

「しかもシニョールの信賴する《光と闇の竜》……絶対絶命なノーネ！」

「ドロー（まだ、手は無くはない、しかし……）」

「万丈目様、わたくしはどうかお気になさらず……」

「モモ、アンタ何言ってるのよ！」

「だって、このまま負けたら万丈目様が……」

「だけどっ！勝っちゃったらアンタが死んじやうかもしれないでしょ!？」

幻魔への魂の生け贄、うちらだつてどうなるかわからない。カードの精霊がついてたつてなんだつて……向こうは封印されてるとはいえ三幻神に匹敵するかもつて精霊だ、うちの精霊（仲間）じゃ多分どうしようもないだろう。

「どうするのボウヤ、ガールフレンドを見捨てる？」

「《X―ヘッド・キャノン》を召喚、《ユニオン格納庫》の効果を……」

「フフ、それは当然無効よ」

「……バトルだ！《X―ヘッド・キャノン》（攻1800）で《光と闇の竜》を攻撃

!!

『グオオオオ……』

竜の哀しげな声が響く。彼の竜は、信じる主人の思惑がわかってしまったのだろうか

「相討ち、随分野暮な事するわねえ……」

「（許せ、《光と闇》）」

「元々は万丈目のモンスター、自分の全カードを破壊し蘇生する。強制効果……まさか?!」

「（俺も、一緒に逝く）」

「万丈目君……」

「《光と闇》の最後モンスター効果を発動……俺の全カードを破壊し、墓地から《おじゃマイエロー》を攻撃表示」

『あつ、兄貴イ〜?』

「（すまん……《光と闇の竜》が敵の手の内にあるなど許せなかった。）カミューラ！ 貴様は一つ勘違いをしている。俺はその女の事など、なんとも思っちゃいない」

「おいおい、そりゃひどくないかサンダー！」

「十代……違うわよ」

「違うって何がだよ？」

彼が言いたいのは、きっとそんな事じゃない。

「……人の背後に立つわ（精霊に）監視をさせるわデュエルは無駄に拘るわ、兄達にはいつの間に取り入るし休み時間はいつも付きまとつてくる上に弁当には隙あらば野菜をねじ込んでくるわ……いなくなった方がいつそ清々する」

彼が言いたいのは、きっと……

「だが、そんな奴でもいなくなったら悲しむ奴がいるのは事実だ……だから
「嫌です」

「あとは、任せた」

「嫌……」

なんとなくわかつちやうのは、私も彼みたいに素直じゃないからかな。

「わたしのターン！・・・全モンスターで、アタアツク!!」

『『ギシヤアアアアツ!!』』

万丈目 LP2900?0

「イヤアアアアアツ!!!」

鍵は、あと6つ

続く。

24羽 結局の所使い馴染んだモノが一番つてことで
す。

「なんでだよ……なんでデュエルでこんな事になるんだよ！」

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「十代、ももえ……」

「デュエルつて楽しいもんじゃねえのかよ！なんで誰かが悲しむ必要があるんだ……
絶対に許さねえ、こんなデュエルをさせる奴等、セブンスターズを！次は……俺が
相手だ!!」

「わたくしが……わたくしのせいで……わたしの勝手で……万丈目様……」

私は二人を見ていられなかった。闇のデュエルに憤慨する十代、万丈目君の敗北を自
分の責任だと思いつめるももえ……二人を放っておいたら今すぐにもカミューラ
の所に特攻しそうだ。

……冷静を欠いて勝てる相手じゃない、構成は無茶苦茶だがプレイングは上々、ア

ンデットの強力カードに加え《影依融合》なんかも使い、極めつけは《幻魔の扉》。正々堂々闘えても厳しいと思う、十代やカイザーさえもだ。こうなったら……

前回のあらすじ

黒星

「あら、貴女一人？拍子抜けねえ……それとも」

私は、今カミューラの城にいる……一人で

「お友達が誰もいないのかしらあ？淋しい娘ね、オホホホホッ！」

あのコを……

「ボッチはドッチよ？ 吸血鬼の生き残りさん」

モモを泣かせた奴をぶっ飛ばす為に！

「世界でたった一人なのは・・・アンタの方じゃないの？」

「なんですって?!」

けど、これから私がやるのは・・・まともな闘いではないから

「わざわざ幻魔の人質連れてきたらアンタの思う壺でしょ？」

「可愛くない餓鬼ねえ。良いわ、その小生意気な面を恐怖と苦痛に歪ませてあげる！」
「デュエル!!」

お願い、誰もみないでね。

《クルック》

「明日香あ！ジュンコは居ないか?!」

万丈目の敗北から数日・・・あいつが闇のデュエルで負けて、人形に魂を封印されるのを目の当たりにした俺達は未だシヨックから抜け出せないでいた。

「しっ、知らないわよわたしは!?!花瓶のお水代えてたら居なくなつてて・・・」

「クソツ！やっぱりか・・・」

あの時ももえが奴の人質になったことから、奴に挑戦する際は友人達に独りにさせないよう訴え実行していた。

「十代、落ち着くんだな！

「そうだよアニキ、ちよつとお手洗いいつてるだけかもしれないし・・・」

「そんなわけあるかっ！」

「やっぱりってどうゆうこと?!十代心当たりがあるの?」

「ああ・・・今夜は俺がカミューラの相手してやろうと考えてて、ひとつ風呂浴びて気合を入れ直してたんだけ」

「あがつたら、アニキの脱衣籠の中にこんな手紙が・・・」

☒ 闇のペンダントは借りていきます、ご免なさい。

ジュンコより☒

「闇のペンダント?なんであんなモノを・・・わたしなら十代の衣服を盗むわよ」

「さらっと犯罪地味な発言はやめて下さいッス！」

闇のペンダントとは・・・俺達が以前錬金術の課外授業で精霊界に行った時に、試練を突破した証として墓守の長から受け取った半分に割れたアイテムの事である。

あんな物黙って借りてどうするつもりなのだろうか?

「兎も角、黙って出ていった事から考えてカミューラの城に行ったのかもしれないわ」
「ジュンコさん、随分落ち込んでいたからなあ・・・」

俺達はももえが立ち上がるのも困難だと知っていた、セブンスターズ 奴等からしたら絶好の人質になると少し考えれば解ったことだ。

「二人で抱え込む必要何てないのに……俺達も同罪だ。いや、知ってて黙ってたんだから俺達が悪いと言っている」

「……過ぎた事を言っても仕方がないわ、ジュンコが一人突つ走る前に探し出しましょう。翔君、隼人君。ここお願い出来る？ももえを宜しくね」

「了解ッス！」

「蝙蝠は怖いけど頑張るんだな！」

ももえも一人にならないように保健室に移された、ジュンコが絶対に目を離さないって言っていた。今は眠っている……

「いきましょ十代、ジュンコを探しに」

「ああ、急ごうぜ！」

《クリクリッ》

「私のターンッ！ 《マジエスペクター・ラクーン》を召喚！」

『クーン……』

《マジエスペクター・ラクーン》星4／風／魔法使い／攻1200／守800

「あら、可愛いモンスターね。それに貴女のデュエルディスクちよつと可笑しくなあい？ なんとゆうか……」

「ゴテゴテしてるアンタの悪趣味な奴よりマシでしょ？ ラクーンの効果、マジエスペクターカードをデッキから手札に加えられる《マジエスペクター・ユニコーン》をサーチ」

当然よ、これはライキリの奴からかつぱらったArc-V仕様の奴なんだから。

「もいつちよ魔法カード《テラフォーミング》でフィールド魔法《天空の光彩》をもつてきて、そのまま発動！ この陰気な城を明るくしてやるわ!!」

「くっ、やつぱりかわいくない……!」

????

「カイザー！クロノス先生！」

「十代、明日香。来たか……」

一応ジュンコの部屋などを調べた後（明日香が）俺達は結果カミューラの城がある湖にやってきました。

「それで本当なの？ジュンコを見たって話」

「本当ナノくネ！」

「俺達は城に乗り込もうとしていたんだが……枕田君が空飛ぶ何かに乗って、城に向かうのが見えたんだ」

空飛ぶ何か、か……

「じゃああいつは城の中に!? 急ごう、ジュンコが危ねえ!!」

《我ら!》

《この廊下の番人!》

鳥侍兄弟!!

「永続魔法《補給部隊》を発動して……《天空の光彩》の効果発動、ラクーンを破壊してデッキから《オッドアイズ・ミラーージュ ドラゴン》を手札に招く」

《キュンツ……》

「結構容赦無いのね、自分のモンスターをそんな扱い?」

他人に言われる迄も無い、自分のモンスターを破壊する行為はソリッドビジョンがあるこちらの世界では一層罪悪感にみなわれる。

けどそれを顔に出したら負けだ、すぐ呼び戻してあげるからね。

「《補給部隊》の効果、モンスターが破壊されたから1枚ドロー。私は……」
「ジyunコオ!!」

……あ、あれっ。十代!?

「なっ、なんでアンタがここにいのよ!」

「なんでっってお前が心配だったからに決まっただろ!!」

うう、ドストレートにありきたりな主人公な台詞吐きやがる……

似非侍コンピ強引に実体化させて足止めに置いてきたのになにやってんの彼奴ら。

「アンタが来た所で何が出来るとのよ!もうデュエルは始まってんのよ解ってる?」
「そっ、そんな言い方ないだろ?!……確かに、その通りかもしれないけどさ」

ほんとは嬉しいくせに、こんな言葉しか吐けない自分がたまに嫌になる。

「もういいわ、その代わりにこのデュエルで観たモノは他言しないでね」
「それってどうゆう……」

「こうゆう事よ！私はスケール3の《E M エンタメイト オッドアイズ・ライトフェニックス》とスケール8の《オッドアイズ・ミラージユドラゴン》で、ペンデュラムスケールをセッティング!!」

「……は？」

「これでレベル4から7のモンスターが同時に召喚可能！」

「一体、何が起こっているの?!」

あくあ。十代には観られなくなかったのにな、けどこのデッキでデュエルを始めた以上もう後には引けない。

役立たずのあのコンビ、油で揚げてやろうかしら。

「揺れるペンデュラム、その導きにより……我が友たちの戒めを破れ！ペンデュラム召喚!!」

けどしようがない、どんな風に思われても……モモを泣かせた奴は絶対に許せない!!

「解き放たれよ、災厄の巨鳥達！レベル7 《霞の谷の巨神鳥》ミスグレ《ダーク・シムルグ》！そして魔を操る神秘の幻獣《マジエスペクター・ユニコーン》！EXデツキから蘇れ《マジエスペクター・ラクーン》!!」

『ギョオオオオオツ!!』

『ヒヒンツ!』

『クーンツ!』

《霞の谷の巨神鳥》星7／風／鳥獣／攻2700

《ダーク・シムルグ》星7／闇・風／鳥獣／攻2700

《マジエスペクター・ユニコーン》星6／獣／攻2000

「なによ、これ……」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

ジュンコ H O

(F) 《天空の光彩》

《霞の谷の巨神鳥》(攻)

《ダーク・シムルグ》(攻)

《マジエスペクター・ユニコーン》(攻)

《マジエスペクター・ラクーン》(守)

(PS3) 《オッドアイズ・ライトフェニックス》

(PS8) 《オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン》

「すっげえ、上級モンスターを同時にこんなに……」

「これが、ペンデュラム召喚。セッティングされた左右の振り子の振り幅(スケール)の間のレベルを持つモンスターを同時に呼び出す事が出来る」

「凄いやない、けどねえ……それだけで勝てると思ったたら大間違いよ！ワタシのターン！」

「確かにこれだけなら危ういかもね、だったらこれはどうよ？永続罫オープン《魔封じの

「芳香」！

「なあに?!」

「このカードがある限り、魔法カードはセットしてからでないと発動出来ない、そしてセットしたターンに発動する事も出来ない!」

「小賢しい延命措置ね!ならカードを・・・デュエルディスクにエラー?!どうなっている!!」

「残念ね、《ダーク・シムルグ》がフィールドにいる限り相手はカードをセット出来ない・・・つまり」

「魔法・罫を実質的に使えなくなるってわけか・・・相当エグいな」

「それだけじゃ済まないわよ?《霞の谷の巨神鳥》は霞の谷モンスターを手札に戻すことであらゆるカードの発動を1回無効に出来、《マジエスペクター・ユニコーン》はマジエスペクターモンスターを手札に戻すことで相手モンスターを手札に戻す・・・」

「ば、馬鹿な?!実質何も出来ないようなものじゃない!!」

「そうね、だから早くターンを譲って?・・・すぐに終わらせてあげるから」

魔法・罫の完封。あらゆる効果も防ぎ、モンスターも手札に戻すことで攻撃も防ぐ・・・上手くカードが揃った

「これじゃあカミューラは手も足も出ない、けどなんつーか……ジユンコらしくないよな」

「う……」

……わかってる、こんなのデュエルじゃない。一方的な封殺、2体のエースはサーチがしづらいとはいえ決まってしまえば最悪の制圧力を誇る。

「だからっ！観られたくなかったのに……」

「ジユンコ……?」

本当は使うつもりなんかなかった……けど、私は弱いから。

「こうでもしないと、勝てないじゃない!!」

《幻魔の扉》1枚にびびった結果がこれ、何もさせない戦術だ。弱い私はこうでもしなきゃ勝てない……だから私は

「さあどくするのよねーさん？なんかやれる事あるわけ？」

力をかざして、強いフリをし続ける。

「フツ、ウフフフフフ……なるほどねえ」

「なんだ、降参か？」

「降参？……冗談じゃないわ！わたしは誇り高きヴァンパイア、たかが鳥ごときにわたしは止められはしない！！手札より、モンスターを特殊召喚！！」

動くの?! 《虚無空間》みたいなカードは引けなかったけど、かのグランモールを越える最強バウンス能力を持つユニコーンがいるのにいったい何を……

「現れよ！《溶岩魔神 ラヴァ・ゴーレム》!!」

『ヴァアア……』

《ラヴァゴーレム》星8／火／悪魔／攻3000

「嘘・・・あちっ」

「あのモンスターは！」

「コイツは相手モンスターを2体生け贄に、場に特殊召喚出来る。貴女の可愛い巨鳥2体はコイツの餌にさせてもらったわ。召喚ルール効果だから邪魔出来ないものねえ？」

そんな・・・この布陣を難なく突破出来る数少ないカードを、そもそもなんでデッキに入ってるの?!

「まだよ！手札より罨カード《タイフーン》を発動！」

「手札から罨だつて?!」

「このカードは相手が表側表示の魔法・罨を2枚以上コントロールしている場合に手札から発動出来、魔法・罨カードを1枚破壊する！破壊するのは当然、《魔封じの芳香》よ！」

《魔封じの芳香》が無為に破壊された。

完封に近い形にもっていきけるはずだったのに・・・

「なんで、なんでそんなピンポイントなカードを2枚も……」

「アムナエルの奴が五月蠅くってねえ、「もしもの為に1枚は入れておけ」って。お蔭で助かつちやったわ」

アムナエル？ そいつがセブンスターズの親玉か！ あれ？ なんでだろ聞いた事あるってゆーか知ってた気がするってゆーか……

「これで魔法が使える、手札より魔法カード《手札抹殺》を発動オ！ 互いに手札を全て、つてアンタは手札0だったわねえ。私は3枚捨てて3枚ドロー！ ついでに今捨てた《シャドール・ピースト》の効果により追加で1枚ドロー！ ウフフ、来た来た……」

シャドール・フュージョン

《影 依 融 合》を発動！

「あれはデツキ融合を行えるカード！ でもジュンコのフィールドには融合モンスター、ましてやシンクロやエクシーズなんて……」

「いるじゃない、言ってたわよねえ……」EXデツキより甦れ」って出てきたその豆狸がね！ デツキの《シャドール・ヘッジホッグ》と地属性《馬頭鬼》を融合！ 禁忌に触れし力の片鱗《エルシャドール・シエキナーガ》!!」

『ギシヤアアアッ!!』

《エルシャドール・シエキナーガ》星10／地／機械／攻2600

「融合召喚で墓地に送られたヘッジホッグの能力によりデッキから《シャドール・ドラゴン》を手札に加えるわ、バトル！《シエキナーガ》よ、あの忌々しい駄馬を汚して壊しなさい！！」

ペンデュラム召喚の特性もちやつかり利用された!?こんな状況になるなんて・・・黙ってやられるくらいならっ！

「ユニコーンの能力！《マジエスペクター・ラクーン》を手札に戻し、シエキナーガも道連れに還す！」

「ならばそれに対し、シエキナーガの効果を発動オ！手札の《シャドール・ドラゴン》を墓地に送り、その効果を無効にして破壊する！」

「けどっ、マジエスペクターモンスターは効果では破壊されない！」

「でも戦闘は続行ね、消えなさい！」

ジュンコ LP4000?3400

「ううっ……」

「ジュンコ！大丈夫か?!」

なんか、《補給部隊》やられて結果的に被害悪化しちゃった……馬鹿だなあ私。
痛くなんてない、弱さを見せるな。私は大丈夫、私は大丈夫……

「この程度っ、なんともないわよ!」

「お、おう……(そんな言い方、っていつも通りだな)」

「健気ねえ、ちなみに戦闘破壊の前に《シャドル・ドラゴン》の効果で《補給部隊》は破壊しといたから、ドローはさせないわよ?そしてフィールド魔法《ヴァンパイア帝国》エンパイアを発動!我々の国へ招待してあげるわ!」

「わざわざ(;)丁寧《天空の光彩》を壊しにきたか……」

ペンデュラムとかしたからすっかり忘れていたが、マスタールール2ではフィールドは共有出来ない……《補給部隊》を狙ったのはそうゆうわけね。

「あく眩しかった、ようやく落ちつけるわ。カードを1枚伏せてターンエンド。さあ、今度は足掻く番ね！」

カミューラ H1

《ヴァンパイア帝国》

《エルシャドール・シエキナーガ》(攻)

セットカード

まだ負けてない、フィールドのペンデュラムカードは無事だしユニコーンは何度でも復活出来る……

「私のターン！」

「ラヴァ・ゴレムの恐ろしい効果を受けなさい！スタンバイフェイズ事に灼熱の体を溶かし、コントローラーに1000ダメージを与える！」

「キアアアアアツ!!」

ジュンコ LP3400?2400

なんて熱さ……こんな毎ターン食らってたらライフが無くなる前にまいつちや

うよ。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……こんなもん！セツティング済みのスケールを行使し、ペンデュラム……」

「メインフェイズ開始時にリバースカードオープン!!速攻魔法《ツインスター》!!」
「んなつ?!」

「このタイミングで?!」

「手札を1枚捨て、貴女のペンデュラムカード2枚を破壊する!!見たところ永続魔法みたいな扱いでいいのよねえ？」

「そんな……」

ユニコーンの再利用だけが希望だったのに……相手のフィールドはシエキナーガだけ、こうなったらラヴァ・ゴレムで戦線維持するしかないっ……

「……お望み通り、アンタのグロテスクなペットで攻撃してやるわよ!」

「いい心がけだわ、わたくしのペットの攻撃名はくゴレム・ボルケーノ>よ!さあ、高らかに攻撃を宣言なさい!!」

牙剥き出しにして技名を伝授するカミューラさん怖い。

うっさい！攻撃名くらい自分で決めるわ！！

「ラヴァ・ゴレムの攻撃！……枕田ファイアー>!!」

「なんでだよ?!なんで自分の名前入れるんだよ!!」

十代の貴重なツツコミ、

い、一種の伝統かなって……それどころじゃないのわかってんだけど。

「フフ……シエキナーガが破壊された時、墓地の《影依融合》を手札に加える事が出来る」

カミューラ LP4000?3600

通った……伏せも使ったし当然つちや当然よね、今捨ててたカードが気になったけど……《影依融合》がまた手札に戻る、EXデッキから出てきたラクーンがいる限

り何度も融合してくる……このカードでターンを凌げたらいいけど

「カードを1枚セットしてターンエンドよ」

ジュンコ LP2400 H0

《マジエスペクター・ラクーン》(守)

《ラヴァ・ゴレム》(攻)

セットカード

「わたしのタアーン！豆狸を処理出来なかったのは残念だったわね！手札より再び《影依融合》を発動オ！」

「ま、またあのデツキ融合カードか！」

「そんなん承知の上だつての！罨カード《次元障壁》を発動！このターン、私が宣言した種類の召喚法は行えず、その種類のモンスターがフィールドに存在していても効果は無効となるわ！「融合」を宣言!!《影依融合》は不発よ不発！」

「なあんですつてえ?!わたしにカードを無駄打ちさせるなんてえ……」

「(なんだあのカード、俺使われたら詰みそう……)」

ミドラージュはまだしもネフエリム飛んできたら対処出来る自信ないもの、これで大人しくしてくれたら・・・

「ならば《シャドウ・ヴァンパイア》を召喚ッ！効果によりデッキから《ヴァンパイア・デューク》を特殊召喚！」

『・・・』

『クククツ・・・』

《シャドウ・ヴァンパイア》星5／闇／アンデット／攻2000

《ヴァンパイア・デューク》星5／闇／アンデット／攻2000

「上級モンスターをコスト無しで召喚だど?!」

「さっき《ツインツイスター》の手札コストにした《ヴァンパイア・ソーサラー》のチカラよ、ヴァンパイア召喚の際に生け贄が必要なくなる・・・さらに特殊召喚したデュークの効果発動！相手はわたしが宣言した種類のカードをデッキから墓地に送る！罨カードを宣言!!」

手札コストは守りじゃなくて攻めの為のカードだったか・・・罨でいいならこれよ

!

「私は《ブレイクスルー・スキル》を墓地に送るわ」

「この瞬間！《ヴァンパイア帝国》のチカラにより、デツキからカードが墓地へ送られた時、相手フィールドのカードを1枚破壊する！用済みのラヴァゴーレムを破壊!!」

『ヴァアアア……』

哀しげな声を出すな、切なくなる。

「バトル！《ヴァンパイア・デューク》で《マジエスペクター・ラクーン》を攻撃！<ダーク・インパルス>!!」

「うっ、全滅……」

「やべえ！ジュンコの場合はがら空きだ!!」

「《シャドウ・ヴァンパイア》で……と言いたいのだけど、このターンはコイツで呼んだモンスターしかバトル出来ないのよね、残念……」

「よ、よかつたあ……ジュンコが負けちまうかと」

「けどただじゃあ済まさないわよ！この2体でオーバーレイ!!誇り高きヴァンパイアの騎士《^{エリテリッツター}紅貴士―ヴァンパイア・ブラム》!!」

『フフンッ』

《ヴァンパイア・ブラム》★5／闇／アンデット／攻2500

「そいつは……」

「覚えてるようねえ、モンスター効果発動！ORUを1つ喰らい、アンタの墓地の《霞の谷の巨神鳥》を特殊召喚するわ!!」

『キュオオオオオッ!!』

「わたしはこれでターンエンド、精々あがいてごらんなさい？自分のモンスターに苦しめられるがいい！」

カミューラ H0

《ヴァンパイア帝国》

《ヴァンパイア・ブラム》(攻)

《霞の谷の巨神鳥》(攻)

巨神鳥さんがちよつと黒みがかってこちらを見ている……
 ダーク・シムルグつぽい。

そんなに睨まないでよお……普段使わないからか?!今度から色んなデッキに刺す

から許して！

「余裕かませる状況じゃないんだっただわ、私のターン！……毎回タイピングいいわね
アンタ、《強欲で貪欲な壺》発動オ！デッキから10枚除外してから2枚ドロー!!」

「出たあ！ジュンコの崖つぶちドローだ!!」

「なら、その最後の希望を貴女のモンスターで砕いてあげる！《霞の谷の巨神鳥》のモンスター効果発動！「霞の谷」モンスターを手札に戻すことになるが、そのカード効果を無効にして破壊する!!」

「へっへーん、《ヴァンパイア・デューク》の効果を使われた時からこの状況は想定してたのよ！墓地から罨カード《ブレイクスルー・スキル》発動ツ！巨神鳥の効果を打ち消すわ!!」

「何イ！巨神鳥は効果処理時に手札に戻されている為、対象にとれないのではないのか!?!」

「残念、このコを手札に戻すのは効果ですよ？だから発動時にはまだフィールドに存在している、よってブレスルの無効は有効!!逆順処理で《強欲で貪欲な壺》も有効！2枚ドロー!!」

「(……何言ってたかさっぱりわかんねえ)」

この2枚か、Pカードが2枚揃ってくれば御の字だったけど……やれる事やるっきゃない!

「だが、考え用によつてはわたしのフィールドには攻撃力2700と2500の上級クラスモンスターが現存している……手札2枚ぼちちで突破出来るのかしら」

「なめんな!むしろ好都合!魔法カード《オッドアイズ・フュージョン》機動!相手フィールドにのみモンスターが2体以上いる時、EXデッキのモンスターを素材に融合召喚出来る!」

「ジューンコが融合召喚だつて?!しかもEXデッキのモンスターだけでなんて……」

あ、そういや使つた事ないっけ融合。

鳥つぼいのはいても純粋な融合モンスターは少ないのよね鳥獣族……

「貴様あ!さつきから意味★不明なカードばかり……インチキ効果も大概になさいよね!」

「なんでじゃー!《影依融合》してきたり、それをなんやかんやで突破するアンタにだけは言われたかないわー!!」

「用はどつちもどつちだぜ．．．」

「ええい、EXデッキの《EM オッドアイズ・ライトフェニックス》と《オッドアイズ・ミラージュ・ドラゴン》を融合！羽ばたける疾風の意思（光だけど）、神秘の龍に今宿らん！融合召喚ツ、雷雲渦巻け！《オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン》！！」

『グゴオオオオツ！！』

《オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン》星7／風／ドラゴン／攻2500／守3000

「おおカッケー！．．．けどまたドラゴンだな」

「フェニックス素材にしたし風属性だからいいでしょー！私だつて鳥獣族融合カッコ良く使いたいわ！！このコが駄目とは一切言わないけども．．．とりあえず効果発動！特殊召喚時に相手モンスター1体を手札にぶっ飛ばす！戻っておいで《霞の谷の巨神鳥》！！」

「チイ、厄介な．．．」

ブラムと攻撃力は互角だから倒せないけど．．．あとはこのカードとボルテックス第2の効果で守りきれば完璧ツ！大丈夫、一次はどうなるかと思っただけ．．．勝てる

!!

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!!」

ジュンコ HI LP2400

《オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン》(守)

セットカード

「フーン、随分な自信ね……守備3000とバウンスの他になにかあるのかしら?カード、ドロー!」

カミューラはねつとりとした目付きでボルテックスを見ている……せ、説明はしないからね、さつき痛い目みたばっかだし

「……墓地の《馬頭鬼》の能力を使うわ、自身を除外して墓地からアンデットモンスター1体を特殊召喚する。現れなさい《ヴァンパイア・デューク》!!」

『フハハハハ……』

「……げっ?!」

「デュークの効果を再び発動！今度は魔法カードよ!!」

「おつ、《オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン》効果！EXデツキの表側Pカードをデツキに還し、その効果を無効にして破壊するわ!!」

「あら、また封殺系？よつぽど《幻魔の扉》が怖いようねえ……けど正直、アンタにはあれ使うまでをないわね」

「んなつ?!」

「カミューラ！そりやどうゆう意味だよ?!」

「簡単よボ・ウ・ヤ。その小娘は弱い……先日人形にしたこのコの方がよつぽど強かったわ」

カミューラはどこからか万丈目君の人形をとり出し、まるで恋人にでも甘えるように撫でながら呟

「ジユンコが……弱い？そりや万丈目は強いけどよ……」

「聞いてた以上に変わったカードを所持しているようだけど、たったそれだけ……最初の布陣を崩したら簡単にボロが出たわ。お前は、ただおつきな鳥さんを従えてはいい気になってるだけの小鳥ちゃんよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お、おい！ジュンコ?!」

なにも、言えなかった。

「いつもみたいになんか言ってやってくれよ?!」

あいつの言うことは間違いじゃないもの……

「ジュンコオ!!」

その通りだ。

モモを泣かせたアイツを許せなかった？万丈目君の仇討ち？

たしかにそう思った、思ってた。けど、なんでこのデッキを使った？……慢心があつたんだ。初見なら対応出来ない、こつち来てから調整してなかったし蝙蝠にもスパイされないだろう……いきなり封殺してしまえば絶対に勝てる。

丸藤先輩とか絶対怒りそう……相手をまるで見ていない。今の私はカミューラ

の言う通り小物、背伸びして強がって相手が怯むと思つて……

「もう飽きたわ、《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》召喚！」

『クククツ……』

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》星7／闇／アンデット／攻2000

「あ……」

「察したようね？最初の《手札抹殺》でもう1枚、《ヴァンパイア・ソーサラー》を捨てていたのよ？アンタみたいな小娘にこのヴァンパイア最強モンスターを使つてあげるんだから感謝なさいな」

「……ヴァンパイア最強モンスターだつて？レベル7で攻撃力たった2000じゃないか」

「お黙りボクヤ。せめてガールフレンドの最後を静かに飾つてあげなさいな……モンスター効果発動オ！召喚時に相手モンスターを1体装備し、その攻撃力を自身に加える！！」

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》の眼が光ると、ボルテックスドラゴンが待つてました

といわんばかりにあちらへ行ってしまった……止める手段も、資格もなかった。

『グオオオオ……』

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》（攻2000?4500）

「装備っつーか、まるでプレイヤーを裏切ってあのヴァンパイアの僕になったみたいだ……」

「バトル！プレイヤーへダイレクト、アタアック!!」

伏せカード……あ、なあんだ……やっぱり負けフラグなのね、コレ

「畏カード《聖なるバリアーミラーフォース》……攻撃モンスターを、破壊する」
「やった……って、なにしてんだ？」

私は十代からパクってた奴と……師匠（馬鹿）が先日送りつけてきた闇のアイテムを合わせて完成させといたペンダントを首から外した。そして、

「十代、パス!!」

十代に投げつけてやった、完全に他人任せである。

「お、おいなんだよこれ?!半分しかなかったのに完成してんじや……つてかなんだよ急に、デュエル中だろ!!」

「ナイスキャッチ。デュエルはもう、終わったわ……」

「はあ?!」

あゝあ、カッコ悪いなあ私。十代やモモには不が悪いとか思つて突っ走つて……そもそもあいつ私より重症だったとか何よバカ。

「ごめんっ、あと任せたわ!それつけてれば多分なんとかなっから……」

ペンデュラムとか使つて、挙げ句無様に負けだもんね。

「頑張れ、ヒーロー」

人形なんのって痛いのかな？やば、今更怖くなってきた。

「《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》第2の効果を発動、装備モンスターを犠牲に破壊されても復活する。ヴァンパイアは死する事は無いのよ……そしてダメージ計算時《ヴァンパイア帝国》の元でアンデットは攻撃力が500ポイント上昇!!」

「嘘、だろ……」

ボルテクスが恨みがましくこちらを凝視しながらヴァンプ様の盾にされ、破壊された。笑顔のヴァンプがそのまま迫ってきた。あの爪、絶対痛い奴だ……

「ダイレクト、アタック!!」

ジュンコ LP2400?0

私のカラダが引き裂かれる。あ、思った程痛くないかも……

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ?!」

「フフツ、これで鍵はフ・タ・ツ。小娘は人形になつてもナツマイキそうな顔してるけど、先のツンツンボウヤと合わせてコレクシヨンしときますか・・・オーホッホッホッホッホッホ!!」

鍵は、あと5つ

<完>

《人形ジユンコ》へってこんな所で終わられてたまるかー!!?ちゃんと続くハズ・・・よね?!

・・・結局、カミューラさんを倒したのは十代だった。私と万丈目君は人形状態でそのデュエルをずうっと見ていたが、それはもう堂々としたもので・・・時々うちらを見せつけては切れそうになってたけど。

しまいにや「あんた可哀想な奴だな」とか言い出し、なんやかんやで《シャイニング・フレア・ウイングマン》で《ヴァンパイア・ジェネシス》消し飛ばしてフィニッシュ、入ったのねジェネシス・・・確かこの辺りまで原作通りだっけ?問題はここからである

「はい、十代ア〜ン」

「いや、ほんと自分で食べれるから勘弁してって・・・」

「何を言っているの？食べないと治るものも治らないじゃない……さあ！この血が滴るレアなステークを平らげなさい!!」

「顔怖?!ステークは結構好きだけど怪我人に出すモンかな?!……ジュンコ、万丈目、助けてくれよ」

「知らん」

「知らない」

「モモエモ、ン……」

「わたくし、一番重症ですの（ニッコリ）」

現在保健室である、人形にされただけとは思ったが予想以上にダメージが大きかったようで私もベットにリターン、万丈目君ももえの横にすっぽり。え?十代に飯食わせてるのは誰かって?……

「十代!愛情弁当(重箱)作ってきたわよ!!ってなんで貴女がここにいるの?!」

「明日香さん怖い。アニキ御見舞いに来たよ……うへえ?!」

「何事なんだなあ、ってギャアアアアア?!」

「「カミューラア?!何故ここに?!」」

「あら、ここは保健室よ?静かになさい」

「一番常識の外にいそうな人に常識を突っ込まれた?!」

そう、カミューラさんである……十代つたら《幻魔の扉》の扉の呪いから彼女を救ってしまったのだ、男前エ……いやヤベーダロと人形のうちらもツツコミを入れたが例の闇のペンダントが原作よりパワーアップ!してたらしくラビエルハンド(仮)を弾き反したのだ、師匠の奴一体何しやがったのか……

「ちよつとお!何十代に寄りかかってゴハン食べさせてんのよ!そこはわたしのベストプレイスツ!!」

「アラア?アナタのような小娘のゴテゴテ弁当よりワタクシの血もしたたるイイ肉のが怪我にいいわよねえ〜じゅ〜だい?」

「いや、その……」

「腕にしがみついているんじゃないわよそこお!!」

「「ハア……」」

お分かりいただけただろうか？なんかそんなときの十代がやたら美化されたらしく、カミューラさんバタ惚れである。ボウヤには興味ないんじゃないかなかったのかおい、十代も大困惑である・・・やれやれ、これからどうなってしまうのやら。

続く・・・のかこれで。

25羽 つーか風呂広すぎ、毎月の光熱費いくらよ ※ 修正版

前回のあらすじ

まさかの。

「アニキ、早く早く！広くて気持ちイイつすよ！！」

「翔、風呂の中でも眼鏡なんだなあ」

「ハア〜・・・」

カミューラとの対戦から1週間程経った。

俺達は今、学園にある施設の・・・娯楽施設のプールかと言いたい程広い、温泉に
来ている。

「う、曇った・・・濡らそ」

「ほらやっぱり・・・」

隼人曰く、元気の無い俺を上げます為らしいが……正直そんな気分ではない。今朝観た夢の事が忘れられない。俺が闇のデュエルに負け、仲間が皆消えてしまう……ジュンコが負けて、消えてしまうっ!

……そんな夢だった、最近なまじ似たようなことがあったばかりで正直きつかった。

「ギャアツ?!誰だよ!今水鉄砲してきたの!!」

「フン、風呂場で騒ぐな。馬鹿者共……」

「サンダー!何故ここに!」

「まさか、保健室が居づらくて脱出を?!」

「まあ間違っても無い……こいつらが気分転換に行こうと五月蠅くてな」

「こいつらつて……うわあ?!」

風呂場でもなんか格好つけてる万丈目後ろから、同じく療養中だと思われたジュンコとももえのコンビが現れた……バスタオル1枚で。

「うわあ、つてなにようわあっ?! つて……」

「わたくし達がここには何か問題でも?」

いや問題だらけだろ……。男湯だぜこ。

「なんで女子の二人がここ居るんすかあ! つて万丈目君も止めてよ! なんでそんな普通に受け入れてんだよ!」

「フン、安心しろ丸藤 翔。みた所でなんの問題もない。コイツらは……。こうだ!」

そう言いながら万丈目はももえのバスタオルを掴むと、勢い任せに引き剥がした!!

「うおおっ?!」

「ギャー! 万丈目君が痴漢行為をー!?!」

「

「イヤン、万丈目様ったらこんな人前で……。ダイ・タ・ン」

「アホか……。何を期待してるんだ。よく見ろ、下に水着着てるだろう」

ももえは青のビキニ……だっけ？を着ていた、それでも女子の外装を剥がすのはどうかと思うけどな。

「あ、本当だ。ジュンコさんは兎も角、ももえさんと明日香さんならやりかねないかと……」

「まあ失敬な、色仕掛けはわたくしの趣味ではありませんわ」

「……(はっ？水着も大概ではないか?)」

「そういえば明日香は？このノリなら現れかねないと思っただけど」

「明日香様なら、こういったシチュエーションの場合あまりにも危険リークタグつける事態なので退場して頂きました(ニッコリ)」

ああ……手段は怖いから聞かないけどGJだぜ。それよりさつきからジュンコがそっぽ向きっぱなしなんだが……

「よ、ようジュンコ！お前もやつぱ下に水着着てんのか？」

「は？当たり前じゃない、何を想像してんの？……変態」

うつ棘が鋭いつ、いつもより静かな分逆に怖いっ。

「だ、だよな〜・・・どんな奴着てんだ？」

「は？見たいの？普段明日香でそうゆうの慣れてるくせに・・・エッチ」

ええ〜・・・

「ご、ゴメン。視ないように向こうで泳いでるぜ」

「はっ？見たくないのっ?!・・・意気地無し」

「俺にどうしろと?!ってへぶっ?!」

突然視界が暗くなったと思ったら、ジュンコにバスタオルを投げつけられたらしい・・・

「・・・ちよつと泳いでくるわ、邪魔はしないからほつといて」

そのまま浴槽に飛び込んで行ってしまった・・・水着は赤だった。じゃなくて！

「待てよ！何をそんな怒ってんだよ！つか泳ぐの早っ!？」

「ジyunコさんは結構、運動神経高めですわよ？（あくあく、大体わたくしのせいだからなんとか元気になって欲しいと思つて誘いましたのに・・・まだ早かつたでしょうか？あれじゃ、ジyunコさんじゃなくてツンコさんですわ）」

「なんだあいつら・・・倦怠期か？」

「万丈目君大丈夫？頭打つてない？」

「氷でも貰つてくるかあ？」

「なんでだ!!」

《くゝルルツ》

「おゝい、ゴブツ・・・待つてくれよ!!」

「・・・」

「無視かよっ!つてか速ええよ!ウブブ・・・こっちは水着じゃなくてバスタオル1枚なんだぞ?!勢いで脱げるわ!!」

「えっ?!・・・フ、フン!!」

「(今一瞬振り向いた時、嬉しそうな顔してたよな・・・あ、止まった)」

彼女は泳ぎを止めた、ようやく話す気になったのか?と思いきや、その場で回転しこちらが顔をあげたタイミングで水をすげー勢いで飛ばしてきた!さながらツイスターである

「ブツハアツ?!ゲホツ、ゲホ・・・なにするんだよ!?濡れさす気か!」

「なんでついてくんのよ、ほっといてって言ったじゃない」

「ぜえ、ぜえ・・・ほっとけねーよ!なんで怒ってるのかくらい聞いたっていいだろ?」

カミューラとのデュエル以降、ジュンコは殆どだんまりだ。あの負けがかなりショックだったのか?

「別に怒ってないし・・・」

「いゝや怒ってるね!ここ最近、俺に目エ合わせてくれないし」

「怒ってない!ただ・・・きやあっ?!」

「うわっ?!なんだ、水底が光って．．．」

「うわああああ?!」

「きやああああ?!何よこれえ!!」

??????

どうも枕田ジュンコです、十代になんて言おうか悩んでいたら、水底が光って引き釣り込まれてよくわからん水色の鍾乳洞?みたいな空間に飛ばされていました。

「いててて．．．おいジュンコ、大丈夫か?」

「なんなの、もう．．．ってなんかいる?!」

『キィ?!』

『ピピィ!!』

目の前にはDデユエルモンスタースターズMのモンスターと思われるのが何体かいた。

えくと……ゴメン。名前なんだからこのコ達。

「うお?!……あ、驚かせてゴメン。お前達もしかしてカードの精霊?」

「順応早いわねアンタ……」

「あ、隼人君眼鏡ありがと……ぎやあつ! デスコアラア?!」

『ヌヌン』

「十代、ここはもしかして精霊の世界なのかあ?」

振り返ると私と十代の他にレッドコンビと凸凹夫婦、もとい万丈目君とももえまで来てた。なんか思い出してきたわよ、この展開は……

「む、服着てるな……」

「あら本当ですわ、もう少し見せつけてやろうと思ってましたのに」

『イヤ〜ン、姉さんつたら大胆』

「……(無言の手刀)」

『イタイツ！なんで!?!』

「わたくしと同じシーンに出ないでくださいます？？中の人が大変だし不愉快ですわ」

『クリクリツ?』

『クルツクル』

『え、なんの話かつて？気にしなくていゝよ』

よ
上からハネクリボー、うちのゲイル、深海のディーヴアさんである。藍神君じゃない

「なんかいつばいいいるう?!もしかしてカードの精霊つすか!!」

「翔が錯乱し始めたんだなあ・・・」

ああ、そうなるわよね普通・・・しっかしあのモフモフ空間可愛いわね、笹食ってるデスコアラがなんかシユールだけど。

『フウン、精霊に導かれしデュエリストとは貴様達のことか』

・・・ツ!!

「ジュンコさんっ!」

「わかってるわモモ!・・・この唯一無二のファイルは!!」

「えっ、急に普段のジュンコのテンションに戻ったと思ったら何だ?!てかファイルって何!!」

『俺の名は、正義の味方ツカイバーマン!!』

「!!!」

『カイバーマン様!』

『カイバーマン様だ!』

で、でたー!!?嫁愛が強すぎてついに青眼コスプレまでした社長の化身、カイバーマンだああ!!

「(ジュンコさんその調子ですわ。この最狂のファイルの前に貴女はツツコミの本能を抑えられない・・・これぞっ!自然と普段通りに戻す作戦!!)」

「何ニヤニヤしてるんだ貴様は」

『そしてあたしがっ！闇よりの使途！紅の支配者凡骨ウーマン!!』

「「「?!」」」

あつ、あれは吹雪様師匠(馬鹿)の相方！若干明日香似の人型真紅眼だ!!

「なんで貴女までいるんですかっ！カイバーマンさんだけで空間がエライ事になっていくのにつ!!」

「ももえさんがつつこんだあー?!」

「つーか凡骨ウーマンってなによ！たしかに凡骨の影霊依とかいわれる奴の服着てっけど、まず自分で言ってる悲しくないの!!?」

『いや、ブツキーに様子観てきてっ頼まれてさ』

「貴様達、あの黒い若干天上院君に似ている奴を知っているのか!？」

何度も言うが馬鹿
「吹雪様の・・・精霊」

レッドアイズ、ブラックドラゴン
「《真紅眼の黒竜》ですわ・・・」

『どくも、ブツキーの相方真紅眼です。長いから略してレンって呼ばれてます』

「あれが真紅眼!？」

「軽い……なんかイメージと違うんだな」

「そもそもなんで竜が人型になつとるんだ!？」

「吹雪さんと対戦した時、喋ってたのは気のせいじゃなかったのか？」

『フウン、ツツコミが多いぞ貴様ら……遊代十代、デュエルをすればわかりあえると常々ほざいてるそうだな』

「ッ?!」

場の混沌をスルーしデュエルディスクを構える二人、てか何時の間に装備してんだうちら。

「(もしこれが闇のデュエルだったら、皆を……アイツを犠牲にしてしまうかも……)」

『フウン、迷いが見えるぞ貴様。そんなに闇のデュエルとやらが恐ろしいか?』

「うっ……」

『恥を知れえっ!己が頂点を目指すなら、この俺をつ!乗りこえて行けっ!!』

『アンタ言ってる事無茶苦茶過ぎね?会話のドツチボールしような』

「言いたい事言われたー!?!おめーも大概だからな!!」

「(真紅眼は予想外だったけど、乗ってきましたわジュンコさんっ!)」

「(･･････なんか、闇のデュエルは関係無さそうかも)」

『ククク、勘違いするな･･････こいつが貴様と戦いたがっているのだ』

カイバーマンはデツキトップから嫁フルーアイズを自慢するかのように見せつけてきました。指の動きとかまじ本人だわ･･････

「フルーアイズ青眼の･･････白龍!!」

「現存世界に3枚の伝説のレアカード、海馬瀬人だけがもつ最強のモンスター!」

皆眼エ丸くして驚いている。そりゃ世界に3枚つて言われてりやねー

『いや、戦いたがってんのアンタじゃね? キサラちゃんそんな好戦的じゃねーだろ』

『いちいち口を挟むな貴様ア! 話が進まんだろ!!』

「･･････キサラちゃん? なんだそれは」

『良いところに気がついたね光と闇ランドンダッチの竜つちのマスター! キサラちゃんとは、青眼の化身･･････の乙女の事なのだっ!』

「ランダっち?! 貴様俺の光ライトと闇アンドダークネスの竜ドラゴンに対して失礼な……」

万丈目が怒りかけた所に《光と闇の竜》が出てきて向こう行ってしまった。知り合いかよっ?!

『おゝランダっちおっひさゝ! 元気してたゝ? あのツンツン君とはうまくやつてる?』

『グルグル……』

『そっかそっか、いい奴っぼいね? アツハツハツハツハツ!!』

「……なんか、ヤンママが旧友に久々に電話したって感じのノリッすね」

「うちの旦那こんななのよ、みないな?」

「仲良しなんだなあ……?」

「(もしやあいつも雌だったりのか?! 喋ったらあんなんなのか?!)」

『オウ……ジュンコ、アンタ封殺ドヤ顔したらボコられたって?! それで凹んでんのかあ。』

アツハツハツハツハツだっせー! まじうけるわー!!』

まっ、まさかの光と闇の竜からばらされるとは。傷口に塩どころか黒炎弾ぶちかまし

てきやがったあ……

「おいお前！ ジュンコは一生懸命やったんだ、それを悪く言うのは許さねえぞ!!」

「じ、十代……」

『フーン？ ……ねえねえカイバーマン、あたしも混ぜてよ』

『何イ、貴様は様子見だけではなかつたか？』

『折角でばつたんだしいくじゃんいくじゃん？ あの二人迷いだらけだよ？ まとめてしごいちやおうぜ？』

『貴様は散々番外偏に出てるだろうがっ！ それに測定した限り、あの小娘を足してもこの俺に適うとは到底思えんがな……』

そういうながらカイバーマンはヘルメットの右目の部分に謎のレンズを出現させてこちらを凝視してきた……なんかピピピツツって鳴ってるんですが

「……あれ、なんつすかね？」

「パツと見ス●ウターのように見えますけども……」

『ホウ、これが気になるか。これは我がカイバーマンコーポレーション(株)が開発した

デュエリスト能力値測定機・・・名づけてデユカ→ウターだ!!」

「ほぼほぼドラ●ンボールのスカウターじゃねーか?! つーかデュエリスト能力値ってなんだよステータス化できんの?」

『なんだ納得いかんか? なら貴様達二人を測定したモノをホログラムで見せてやろう』

ピ、ピ、ピ、ピ。

《遊城十代》(希望を呼ぶ最強のドロ) レベル6 / 属性・風・火・光 / 種族・人間 / 決闘力2100 / 耐久力1200

① チートドロ (永続効果)

② ポジティブ

③ 天然・鈍感

《枕田ジュンコ》(雷鳴と共に走る電光のツツコミ) レベル7 / 属性・闇 (7割)・風 / 種族・人間 / 決闘力2600 / 耐久力2000

① 毎ターン可能な限りツツコミを入れることができる (任意)

② 不運

③ ツ ● ● ●

「「……………」」

「なんじゃこのふざけた表記はー！カードのステータス風かよ！てか十代の内容はなんとなく理解出来るとして……私の方ツッコミ関連ばつかじゃねーか意味わかんないし！なによ電光のツッコミって?!つーかさりげに闇（7割）ってわたしの扱いひどくね?!!」

「いやジュンコさんの方もなんとなくわかったツス……」

『うーん、たしかに決闘者レベル・カオスマAX!!のアンタじゃ二人でもいけそうだねえ……』

スルー?!スルーなのここまで盛大に言わせといて?!

『けどさ、青眼と真紅眼のタッグとか結構胸熱じゃね？デツキはアンタに合わせるからさ、精霊界ドラゴンデュエリスト四天王の力魅せてやろくぜっ』

『フウン、そこまで言うなら良いだろう・・・足は引つ張るなよ』

『どの口が言うか、この脳★筋めっ』

ドラゴンデュエリスト四天王ってなんだよ!?あとの二人気になるんだけど!っーかあいつらタッグ?青眼と真紅眼のタッグ?てかこの流れだと・・・

「やってやるぜ、こっちもボロクソ言われて黙ってられるか!行くぜジユンコ、タッグデュエルだ!!」

「私巻き込まれたーっ?!えーい、ママよっ!」

『クルル・・・(呆れ)』

いつしか装備していたデュエルディスクを展開する、軽くていいなあ。なんか強引に巻き込まれちゃったけど・・・やるならやってやるわ!

『ふっふっくん、ブツキーの代わりに揉んでやるわ』

『我らを楽しませてみせろ、こわっぱ共!!』

「『『デュエル!!』』」

十代&ジュンコ LP8000

カイバーマン&凡骨ウーマン LP8000

《クルック》（視点が変わるよ）

「先行は俺達だ！俺から行くぜジュンコ、ドロー!!」

「伝説の青眼と真紅眼（？）相手にとって不足はない・・・最初から全力全開で行くぜ！」

「俺は魔法カード《増援》を使い《E・HERO バブルマン》を手札に加え召喚、場にカードがないので2枚ドロー!・・・速効魔法《バブルイリュージョン》発動!このターン手札から罠カードを発動出来る!!」

「手札から罠?!」

「手札から罠カードだと!」

「手札から罠カード? 先行で何発動すんのだよ」

なにこの反応、お前ら墓地から罠とかやるだろっ!

「まあ見ててくれよ! 罠カード《チェーンマテリアル》発動ツ! このターン融合を行う際、手札・デッキフィールド・墓地、あらゆる場所から融合出来る!」

「ま、まさかこれって?!」

「行くぜ! これがシンクロやエクシーズの速度に対抗するために考えた戦術、フィールド魔法《フュージョンゲート》! これで融合無しで融合召喚が出来る! 連続融合召喚!! 現れるっ俺のHERO達! 堅き守りを《E・HERO マッド・ボールマン》! 無慈悲たる白銀の戦士《アブソルトZero》! 輝き照らせ《THE シャイニング》! 燃さかる闘士《フレイム・ブラスト》! そして新たな最強HERO……《Core》!!」

『『『『ハアアアツ!!』』』』

(クレイマン+バブルマン)

|| 《マッド・ボールマン》 星6 / 水 / 戦士 / 守3000

(フェザーマン+バブルマン) 〓 《アブソルートZero》星8 / 水 / 戦士 / 攻2500
?3000

(バーストレディ+スパークマン)

〓 《THE シャイニング》星8 / 光 / 戦士 / 攻2600?5900

(ザ・ビート+レディオブファイア)

〓 《フレイルム・ブラスト》星8 / 炎 / 炎 / 攻2300

(エアーマン+ブレイズマン+シャドーミスト)

〓 《Core》星9 / 地 / 戦士 / 攻2900

「な、なんじゃこりやー?!」

「融合HEROが5体?!」

「まあまあ、張り切ってますわね十代様……」

『うつひよくやるねえ!』

『ほう、思ってたよりは楽しめそうだ』

「だが《チエーンマテリアル》の使用ターン、エンドフェイズに融合モンスターは全て破壊される……紛い者の大量召喚だ」

「その辺りはちゃんと考えてあんだぜ?! カードを3枚伏せて速効魔法《皆既日蝕の書》発

動!!全てのモンスターを裏側守備に変更する!!これで《チェインマテリアル》の効果で呼び出した、とゆう情報はリセットされた!

「嘘オ、十代がこんなコンボを使うなんて……」

「けど折角のHERO達が裏側なのもどうなんだ?」

「俺はこれでターンエンドだ」

十代 H O

《フュージョンゲート》

《HERO5体※上記参照(裏守)》

セットカード×3

どうだ!俺だって以前のままじゃない、あいつに凄い所見せてやるぜ!!

『フウン、成る程なあ……俺のターンッ!手札より、魔法カード発動!《ドラゴン目覚めの旋律》!!手札を一枚捨て、デッキよりフルーアイズ・ホワイトドラゴン《青眼の白龍》、《一青眼の亜白龍》《ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイトドラゴン》を手札に加える!!更に《調和の宝札》

ホワイトオフ・レジエント

！《伝説の白石》を捨て2枚ドロ！白石の強制効果により《青眼の白龍》を我が手に！《トレードイン》によりレベル8モンスターを捨て2枚ドロ！《天使の施し》により3枚ドロし2枚を破棄する!!フウン……」

「なんか超回ってるっす……」

「もう手札に何があるかさっぱり分からんな」

『《復活の福音》を使い墓地のレベル8ドラゴンを特殊召喚！……見るがいい、そしておののくがいい！降臨せよ《青眼の白龍》!!』

『ギヤオオオオオツ!!（ゴジ?並み感）』

『《青眼の白龍》レベル8／強韌★無敵★最強

「ひいつ!あれが青眼……」

「すごい迫力なんだな……」

来たなつ、けど伏せが3枚もあれば流石に躊躇して……

『墓地の《光の霊堂》を除外し魔法カード《滅びの爆裂疾風弾》バーストストリームを手札に加え発動オ!相

手フィールド上のモンスターを全て破壊する!!」

「うっげ?!」

「青眼専用の魔法カードだと?! (光と闇にもくれ)」

『グル、』

『喰らええ! 《滅びの爆裂疾風弾》!!』

『『『『グワアアアアアアッ!?!』』』』』

「アニキのHERO軍団が、裏側のまま」

「一瞬で全滅しちゃったんだなあ……」

「くっ、まだまだ!破壊された《アブソルトZero》《Core》《THEシャイニング》
《フレイルム・ブラスト》の順にチェーン組んでモンスター効果を発動するぜ!墓地の魔法
カード《皆既日蝕の書》と除外されていた《エアーマン》《ブレイズマン》を手札に戻し、
《THE シャイニング》を召喚条件を無視して復活!最後に《アブソルトZero》
の全体破壊を喰らえっ!」

「えっ?フレイルムブラスト(※原作版)さん強っ……」

えっ?こんだけ発動しといて反応するのそこか?

『だが先に使った福音を除外しドラゴンの破壊を防ぐ!』

「百も承知だぜ!だが《THE シャイニング》は除外されてるHEROの数×300攻撃力が上昇する、2枚戻したとはいえ現在9体!よって攻撃力5300だ!」

『ハアアアアアッ! (ウル?ラ感)』

「おおっ!帰ってきた!!」

Zeroと迷ったけどドラゴンは特殊召喚が容易だからな・・・伏せカードと合わせて攻撃力で振り伏せさせてもらうぜ!

『なかなかだと言いたいが・・・甘いわ!魔法カード《巨竜の羽ばたき》を発動!我が手に戻れ、青眼!』

『うわっ、容赦ねく・・・』

『このカードはレベル5以上のドラゴンを手札に戻すことで全ての魔法・罠カードを破壊する事が出来るのだ!!』

「なんだって?!・・・なんてな、カウンター罠オープン《大革命返し》!2枚以上のカードを破壊する効果を無効し、除外する!!」

青眼の羽ばたきを、逃げ惑う民達が体を張って止めに行く姿はなんだか感動を覚え
た……青眼は手札帰ったけどな

『チイ、馬の骨共め……ならば貴様の罠に踏み込んでやろう！俺はモンスターを通常
召喚！正義の味方ツ！《デビルフランケン》!!』

『ムッフーン』

《デビルフランケン》星2／闇／機械／攻700／

「自身召喚じゃないの?!てかそいつ結局正義の味方要素欠片もねーしそもそもなんで
入ってんじやいっ!!」

「……枕田がいると言いたい事大抵言ってくれるな」

「そだね、応援に専念しよっか」

えっ?なんだっけあれ、確か滅多に使えない効果が……

『コイツはライフ5000を糧に、融合デッキより僕を1体召喚する……降臨せよ！

フルーア・ス・アルティメットドラゴン
《青眼の究極竜》

『『ギャオオオオオツ×!!』3 (キン?ギドラ感)』』

「まじで、いきなり究極竜?!」

「まさかデビフラ使ってくる方がいらすとは……」

これが、青眼の究極竜……とんでもねえ迫力だ、まさか1ターン目から出て来るなんて

「けどアニキのシャイニングの方が攻撃力は5300!」

「あの《青眼の究極竜》だって届かないんだな!」

そ、そうだ。攻撃力で勝ってるんだから大丈夫なはず……

『その程度の攻撃力でご満悦とはな、装備魔法《巨大化》を発動オ!ライフがこちらの方が下回っているため攻撃力を倍化する!!』

「?!」

《青眼の究極竜》星12/攻4500?9000

「攻撃力9000だと!」

『アンタも飛ばすね、デビフラ大嵐サンボル巨大化あざっしたーかっての……』

『《青眼の究極竜》の攻撃イ!<アルティメット・バアアストオ!!>』

「うおおおおおつ?!とつ、罨発動《ドレインシールド》!攻撃してきたモンスターの攻撃力分ライフを回復する!」

十代 LP8000?17000

『フウン、何を必死に守っているかと思えば……下らん延命措置だったか。メインフェイズ2に入る、手札の《青眼の白龍》を公開する事でこのモンスターは特殊召喚が可能!来るがいい《青眼の亜白龍》!!』

『グワオオオオツ!!』

《青眼の亜白龍》星8/光/ドラゴン/攻3000

「青眼の亜種?!」

「てか召喚条件ゆるっ!!」

『モンスター効果により、相手モンスターを1体破壊する!!<オルタナティブ・バニッシュ>!!』

『グワアアアツ!』

攻撃力5300のシャイニングが、こんなあつさりと……

「ツ、シャイニングの効果で除外されていた《バブルマン》《シャドーミスト》を回収する！」

『好きにしろ。伏せカードを2枚出し、エンドフェイズに《超再生能力》を使う。このターン手札より捨てたドラゴン族は4体、よって4枚ドロウする！ターン終了だ』

「えつと・・・旋律と調和とトレードイン、施しは1枚霊堂だったって事で合計4枚ですわね」

「あんだだけ回して手札ほぼ初期で・・・」

カイバーマン H5

《《デビルフラアンケン》》(攻)

《《青眼の究極竜》》(攻) + 《《巨大化》》

《《青眼の亜白龍》》(攻)

セットカード×2

想定以上に被害がでかかったな、結局5体の融合HERO全滅かよ。フレイムプラスとシャイニングの回収効果が俺の手札は取り戻してるが、ジュンコの負担を考えたらcoreで復活させるのはZeroの方がよかったかも・・・大丈夫かな。

『1ターン目からの究極竜の猛攻！なんとか乗り切った十代だが、あの最強モンスター相手にジュンコは太刀打ち出来るのか？・・・もりあがった所で悪いんだけど、文字数の都合で決着は次回にもしこしDA』

「アンタがやるんかい（ですの）?!」

「てかこのツツコミデジャヴ！」

続きます。

26羽 賑やかになってきたな・・・簡便してください

前回のあらすじ

『青き眼の、賢士!』

『青き眼の、乙女!』

『デビィゝル・・・フラアンケエン・・・』

『キキキツ、闇道化師のサギィィィ!』

『そしてこの俺、リーダーたる正義の味方・・・カイバーマン!』

『『『我ら、青眼★戦隊、カイバージャァ!!』』』』

SEへチユドゥン!!

『説明しよう!青眼の戦隊カイバージャァとは・・・世界の平和を守る為!精霊界征服を企む悪の女総帥《ロード・オブ・ザ・レッド》率いる秘密結社ダーク★ボンコツと

の戦いを日々を描いた愛と感動の物語である!』

『精霊界・日曜朝7時から絶賛放映中です!』

「「「「「」」」」」

「全然前回のあらすじになつとらんわー!!チュドゥンじゃねーよチュドゥンじゃ!そもそも正義側に明らかに悪が混ざってんだろメンバーチョイスおかしいわよね社長のデツキより抜粋つてか?!つかダーク★ボンコツつて秘密結社の名前残念過ぎだろしかもアンタ総帥かよ!」

「まず精霊界にTVあるんでしようか」

「(あのネタの塊を一人でツツコミ切つただと、流石枕田だな」

「(やべえ、ちよつと観たい」

『あたしとキサラちゃんの代表作にケチつけるのかいアンタ達!』

『ちよつとシヨックです」

「ぜえ」主演で」他にもあんの」てか」デビフラ

以外」デツキに」帰れや」

『いつまでふざけている小娘え!茶番は終わりだ、早くターンを進めんかつ!』

ええ………諸悪の根源に注意されたあ………アンタノリノリでポーズ決めてましたよね？

「まさか開幕からネタをぶっこむ事でジュンコさんの体力を大幅削る作戦とは………」
「違うと思うっす。」

「んだな。」

「ええい………私のターン、ドローツ!!」

二人がしよっぱなから暴れ過ぎなんですが、私もソリティアしなきゃいけない流れ？
つかまじあれどうすんの上究極竜9000とか!とりあえず動いてみるけども。

「永続魔法《黒い旋風》を発動!そしてつ、
ブラックフェザー《BF―精鋭のゼピュロス》を召喚!」

『トアアツ!!』

《精鋭のゼピュロス》星4/攻1600

「(お、普通にBFだな。)」

「(あの変な召喚するデツキは使わないのか……もうちょっと見たかったような、安心したような)」

「召喚時に旋風の効果でデツキから……」

「リバースカアードオープン！罨カード《死のデツキ破壊ウイルス》!!」

「ぶっ!!」

『闇属性、攻撃力700のデビルフランケンをウイルスの媒体とし、貴様のフィールド・手札および3ターン以内にドロウした攻撃力1500以上のモンスターを破壊するっ!!』

フランチェン棒立ちかと思ったたらウイルス?!しかもエラツタ前とか苛めにも程があるわよ!……原作版じゃないだけマシと考えるべきか。

「無駄死にはごめんよ!速効魔法《スワローズ・ネスト》!ゼピュロスを生け贄に、デツキから同じレベルの鳥獣族を呼び出すわ……おいでっ 《東雲のコチ》!」

『ギシャッ!』

《東雲のコチ》星4/攻700

『フム、場にモンスターを残したか。さあ手札を公開しろ!』

「むう・・・」

ジュンコ手札

《黒槍のブラスト》

《マジックプランター》

《闇の誘惑》

「・・・微妙な手札だな」

ピーピングされるってなんかすごく恥ずかしい。旋風でサーチしてから誘惑したかったのよ・・・

「・・・ブラストが破壊される」

『破壊出来たのは1枚のみか、まあドロも展開も厳しいだろう』

「・・・馬鹿言ってるじゃないわよ！《精鋭のゼピュロス》のモンスター効果！《黒い旋風》を手札に戻して墓地から復活！その後・・・痛たつ。400ダメージを受けるわ」

ジュンコ LP17000?16600

『無理矢理展開したかあ、誰がくっかな?』

「レベル4のゼピュロスとデスでオーバレイ!漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙!エクシーズ召喚ツ!《ダークリベリオン・エクシーズドラゴン》!!」

『グオオオオオツ!!』

《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》★4/攻2500

「えっ、そいつ?!」

「まあまあ、BFのEXデッキには入れてませんでしたよね?」

「まあ……ちよつとね。リベリオンの効果発動ツ!O U Rを二つ消費、モンスター

1体の攻撃力を半分にしその数値を自身に加えるつくとリーズン・デイスチャージ>!!

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
《青眼の究極竜》90000?4500

《ダークリベリオン》25000?7000

「バトルよ!《一青眼の亜白龍》《ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイトドラゴン》を打ち砕け!<ライトニング・デイスオベイ>!!」

『チィ、速効魔法《収縮》を発動!貴様のドラゴンの、元々、の攻撃力を半分にする!!』

《ダークリベリオン》攻70000?5750

「それでもっ!ダークリベリオンの方が攻撃力は上よ!いつけえええ!!」

『ぬうううんっ!』

カイバーマン LP3000?250

「やったぜ！相手のライフはもう風前の灯火だ!!」

・・・けれど私には防御手段もない。攻撃力7000に対応するのは大変なハズだけど、アイツは師匠の化身みたいなもんだ油断出来ない。十代のセットカード1枚だけじゃ不安だし、誘惑打っちゃうと旋風を捨てちゃう可能性あるけど・・・

「ジュンコ、《闇の誘惑》は使うな」

「えっ?でも守りが・・・」

「大丈夫だ、俺を信じてくれ」

なんか、いつにも増して頼もしい顔してんじゃん・・・

「・・・わかったわ、私はこれでターンエンド」

ジュンコ H3 LP16600

《ダークリベリオン》(攻5750?7000)

『やくつとあたしかよ、待ちくたびれたわく暴れさせて貰うよっ！ドロー！』

「この瞬間！リバーズカードオープン!!」

『へ?』

「罠カード《死なばもろとも》発動!」

「うっそお?!十代いれてたっけ!」

『え〜つと、なんだっけかそれ』

「互いの手札が3枚以上の時発動、手札を全てデッキの下に任意の順で戻し新たに5枚ドローする!!」

「まじで?旋風なくなるのは痛いけどやったあ!え〜とドローカードは・・・《霧雨のクナイ》《ダメージダイエツト》《サモン・プリースト》《上弦のピナーカ》《ゴツドバード・アタック》よ、クナイが破壊されるわ」

「・・・普段の十代のデッキでは扱いづらいだろうに」

「なんでだあ?」

「融合戦術は基本的に手札の消費が激しいですから、相手ターンになる頃には手札が3枚もある事は少ないでしょう?」

「なるほど、考え無しに使える手札交換カードじゃないっすね」

『ほう、やるではないか小僧。しかしその罫にはリスクがある』

「ああ、互いがデッキに戻したカードの枚数9×300・・・2700のライフを俺達は失う」

「ちよつ?!手札増えんのは嬉しいけど・・・いつたあ!なにしてくれんよ馬鹿つ!!」
ジユンコLP16600?13900

ターンプレイヤーまだ私だからライフコストの衝撃がこつちきたんですが、コストでも痛いときあんのね・・・

「わ、わりい。あの手札改善出来るなら安いもんかと・・・」

「私が受けた苦痛が!決して安くはないわよ!!いい顔してるから信用したのに・・・あとで覚えてなさい、この馬鹿ツ!!」

「(なんかすつかり普段通りですわね、十代様結果オーライ?)」

『かくつ、折角やりたい放題出来ると思つたのになあ、5枚ドロつと。まあ・・・伏せが無くなつたんだし結局やるけど』

ふあつ?!

『まずは《テラフォーミング》発動！《混沌の場》カオス・フィールドをもってきてそのまま発動！発動時に《カオス・ソルジャー》を手札に迎える、けど《トレードイン》で捨てるわ」

「カオス・ソルジャーだと?!」

「また伝説のカード……あつまりコストにしてるけど」

うわ眩しつ?! 《フュージョンゲート》が破壊されて、周囲がなんとも言えない光につつまれました。

「ある意味この話自体が《混沌の場》ですわよねー、ディーバさん?」

『元も子もない事いわないの』

『うっし、手札から魔法カード《レッドアイズ・インサイト》を発動! デツキから《レットアイズ・ダークネスメタル ドラゴン》を墓地に送り、リターンオブ・レッドアイズ《真紅眼の鎧旋》を手札に加える!!』

でた、コストがコストしてないインチキサーチ魔法……BFインサイト下さい

「(……水精燐インサイト下さいませ)」

「(・・・お前はネプトいるだろ)」

『続けていくよつ！魔法カード《儀式の下準備》!!儀式魔法《レッドアイズ・トランスマ
イグレーション》と《ロード・オブ・ザ・レッド》を手札に加える!!そして発動！墓地
のレベル10、《レッドアイズ・ダークネスメタル ドラゴン》除外することで儀式の贄
とし・・・あたしの化身！《ロード・オブ・ザ・レッド》を儀式召喚!!』

『ハアアアアアッ!!』

《ロード・オブ・ザ・レッド》星8／炎／ドラゴン／攻2400

「うわ、出たな面倒な奴が・・・」

「僕ちよつとトラウマが・・・」

あんたらあのモンスターにすげーやられてたもんね（8羽参照）・・・トレードイン
とか入ってるし、レベル8中心の儀式軸かな？カイバーマンに合わせるとか言ってたし

「まだまだ！こつちも《復活の福音》を発動！対象は《青眼の亜白龍》・・・の前に
《ロード・オブ・ザ・レッド》の効果！カード効果が発動した時魔法・罫かモンスターを

破壊するよっ！当然対象は《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》だ！＜情熱のお・・・ファーストブリットオ>!!

「どっかで聞いた事あるネタ?!」

『ウガアアアアッ』

リベリオンさんが拳でぶっ飛ばされてしまいました、怨みがましい断末魔やめてくださいごめんなさい。

『そして墓地から《亜白龍》復活!!』

『ギヤオオオオツ!!』

『ちなみにモンスターがフィールドか手札から墓地いくと《混沌の場》にカオス・カウンターが乗るよ、さっきトレインしたから今2個だね』

《混沌の場》魔力カウンター0↓2

『貴様ア！我が青眼を・・・』

『（無視）バトルツ!!《ロード・オブ・ザ・レッド》《亜白龍》《究極竜》の順にダイレクタアタック!!』

「いやあああああつ」

ジュンコ L P 1 3 9 0 0 ? 4 0 0 0

「きゅ、9900ダメージ……」

「ライフが一気に普段の初期値だな。闇のデュエルとかだったら即死しそうだ……」
「ジュンコオ！大丈夫か?!」

「あんまし大丈夫じゃないです……痺れがヤバイ」

『まあ、次のターン来るまでくたばってたら？来る保証無いけど、《星間竜 パーセク》召喚つと。』

『ギシャアッ!』

《パーセク》星8/光/ドラゴン/攻800

『こいつはレベル8のモンスターがいるとき生け贄が不要！そして亜白龍とパーセクでオーバーレイ！現れるNo.38!!銀河を越え、借りパクしてきたナウい奴！エクシズ召喚! 《希望魁竜タイタニック・ギヤラクシー》!!』

『ハルトオオオオッ!!』

《タイタニック・ギヤラクシー》★8/光/ドラゴン/攻3000

なんか出たし?!なんか叫んでるしあいつ!!

「とゆうか借りパクって……」

『ああ、同じく精霊界竜使い四天王が一人《ナンバーズ・ハンター》君から1枚拝借していた。若干叫び声がおかしいのは気にしないでな?』

四天王って大体使用者本人じゃねーか!?あと一人誰よ!!ってつっこみたいけど痛みがああ……

『あたしやカードを2枚伏せてターンエンド』

真紅眼 H0 LP250

《混沌の場》(魔力カウンター2)

《青眼の究極竜》(攻) + 《巨大化》

《ロード・オブ・ザ・レッド》(攻)

《タイタニック・ギヤラクシー》(攻)

セットカード

セットカード

布陣えぐつ。

つーかあいつのデッキのどの辺りが真紅眼よ、レダメさん落として除外されただけ

じゃん？十代大丈夫かしら。

《クリクリッ》

無理して真紅眼の手札を半分にしたのはいいけど、結局ライフコスト2700に9900を加えて12400のダメージか……。これ結局俺が好き勝手回してジュンコに負担かけたただだよな……。駄目だ駄目だ！あいつを守ってやりたい、とか思っ
なんて様だ!!

「こっから挽回してやるぜ、俺のターン！ドローカードは《ホープ・オブ・フィプス》だ
！」

『運にはまだ見放されていないようだな』

『フーン?……』

「まずはアンタの厄介な破壊効果から封じさせてもらうぜ！速効魔法《皆既日蝕の書》発動!!全モンスターを裏側守備に変更してやるぜ!!」

「わっ、馬鹿ー?!」

「えっ？駄目なの？てか復活早いな、流石はジュンコだぜ!!」
「まだ立てんわ!」

『余裕だなおい、バレバレの皆既日蝕を対策してないわけないっしょ? 《タイタニック・ギヤラクシー》の能力を食らえ! <スケイルズ・ストーム>!!』

『ハアルトオオオオツ!!』

「煩っ?!」

「さっきから誰すかハルトって!!」

『うちの1001君と同じ匂いを感じる・・・』

『発言は兎も角。こいつは1ターンの1度、相手が発動した魔法を吸収・・・ORUに変更出来るのだ!』

「まじかよ?!その為にわざわざ青眼まで素材にしたのか!!」

「あつちやく、裏側にできれば福音とかも適用出来ないからチャンスだったのに・・・」

『フウン、先程から空回りだな遊城十代。所詮貴様はその程度のデュエリストか・・・
がっかりさせてくれるなよ?』

くつ、言い返せねえ………だけど!

『クリクリッ!!』

「ああ、そうだな相棒……諦めてたまつかよ!魔法カード《ホープ・オブ・フィプス》!墓地のマッドボールマン・シャイニング・フレイムブラスト・Zero・Coreの5枚をデッキに戻して2枚ドロウする!」

『(本当だったらこつち止めたかつたわ………まあしやーなし)』

「戻したのは全て融合モンスター、ほぼ強欲な壺だな………」

『ウィルスの効果だ、ドローカードを見せろ』

「へへっ、まだデュエルの神様は勝負を捨てるなつてよ!《手札抹殺》と《スペシャルハリケーン》だ!」

『『んなにいい?!』』

「反撃開始だ!《ブレイズマン》を召喚し効果により《融合》をもってきて発動!!」

『(あたしの効果使つて消耗させる手もあるが、別の手段で更なる痛手をこうむる可能性もな……)かまわないよ、効果処理に入りな!』

「場の《ブレイズマン》と《バブルマン》を融合し極寒のHERO《アブソルートZero》再臨!!そして《スペシャルハリケーン》を発動するぜ!!手札の《シャドーミスト》を

捨てて、特殊召喚されたモンスターを全て破壊する!!」

『…………』

『オオオオオ…………』

Zeroと《究極竜》達が嵐に捲き込まれて消滅した…………使ってくれないかやっぱ。

「…………《シャドーミスト》の効果だ、《ネクロダークマン》を手札に加える。」

「2回全体破壊が来るのは確定している為、福音は温存したか…………流石に強かだな」

「けど場はがら空きツス！」

「モンスターを出せれば勝てるんだなあ！」

「《手札抹殺》を使うぜ、3枚捨てて3枚ドロロー。よし！引いたのは《ミラクル・フュージョン》《破天荒な風》《クリボーを呼ぶ笛》だ！《ミラクル・フュージョン》を発動して墓地の《ブレイズマン》《エアーマン》《シャドーミスト》で3体融合！もう一回頼むぜ《E・HERO Core》!!」

『ハアアアツ!!』

「凄いわ十代、逆転のチャンスよ!!」

「《破天荒な風》を発動させ攻撃力を1000あげる…………いつけえ！《Core》でプレイヤーへダイレクトアタックだあ!!」

伏せカードは2枚、1枚はわかつている。もし出てくるなら・・・

『惜しい・・・永続罨《闇次元の解放》!!除外されてる闇属性を特殊召喚出来る、異次元より帰還しな!我が黒鋼の化身《レッドアイズ・ダークネスメタル ドラゴン》!!守備だけどね』

『・・・(中身不在)』

《ダークネスメタル》星10/攻2800/守2400

『そしてお待ちかねの《真紅眼の鎧旋》も発動!レッドアイズモンスターがいる時、墓地から、通常モンスター、を復活できんよ!さあ帰つといで《青眼の白龍》!!』

くそつやつぱり蘇生系か!あのカード通常モンスターならなんでもいいのかよ?!まさか青眼が・・・

『あ、はいっ?ぎや、ぎやおー。』

『キサラちゃん素!素が出てる唸って、豪咆して!!今龍の姿だから、可愛いのは人型時にしようか!』

『だ、だって真紅眼さんが出してくるなんて思わなくて・・・』

「「「「・・・」」」」

「え、えつとお。ダークネスメタルを攻撃！<エレクトロマグネティックインダクション>!!」

『攻撃名長いなそいつ、舌かまない?・・・使つとくか、墓地の複音除外して破壊を防ぐよー!』

「けどCoreが攻撃した後、相手モンスターを1体破壊できる!今度こそダークネスメタルには消えてもらおうぜ!!」

『くう、ここまで盛り返すとはね・・・』

「俺は、カードを1枚伏せてエンド」

十代 h0 LP4000

《E・HERO Core》(攻)

セットカード

《混沌の場》カオスカウンター2↓6 (MAX)

『フハハハハ!面白くなってきたではないか!!行くぞつ、俺のタアーン!!《青き眼の賢士》召喚!!』

『御呼びで?リーダー』

《青き眼の賢士》星1／チューナー

「やだイケメン・・・」

『こやつもキサラと同じく青眼の化身が一人よ、召喚時にデツキから光属性レベル1の《エフエクト・ヴェーラー》を加える』

「あれも青眼の化身（？）か、青眼側は真紅眼とは雰囲気が大分違うな」

『少年！どうゆう意味かな?!』

『レベル8の青眼にレベル1《蒼き眼の賢士》をチューニング!!伝説は進化する、高次元の魂へと昇華せよ!シンクロ召喚!《青眼の精霊龍》!!』

『グオオオオオオツ!!』

《青眼の精霊龍》星9／光／攻2500／守3000

「《青眼の精霊龍》、たしかTVで海馬社長が使ってた奴だよな、効果わからないうちに勝負ついでたけど・・・ってジュンコ?!顔酷いぞどうした!!」

ジュンコがしかめっ面していた、そいや海馬瀬人本人と接触あるんだよな?効果知ってんのか。

「そして《死者蘇生》を発動、墓地の亜白龍を特殊召喚!そのモンスター破壊能力により

目障りなCoreを抹殺！」

「くっ。だが破壊された時Zeroを復活させて……」

「甘いわ！《精霊龍》の効果により墓地で発動したcoreの能力を無効にする！」

げっ?! Zero復活を宛にしたのに！

『まだまだアー！俺は《混沌の場》の第二の効果を使う、魔力カウンターを3つ取り除く事で儀式魔法《高等儀式術》を我が手に加え……発動!!』

「こっちも儀式魔法?!」

『デッキの最後の青眼を儀式の贄とし……見るがいい！貴様達の常識など、到底およばぬ力の領域を!!儀式召喚《ブルーアイズ・カオスマAX ドラゴン》!!!』

『ギヤオオオオツ!!』

《ブルーアイズ・カオスマAX ドラゴン》星8/闇/攻4000

「かつ、カオスマックスウ?!」

「なんスカあのおつかないブルーアイズ！攻撃力4000?!」

「いやあああああつ！その2体はやめてっ!!」

「精霊龍、カオスマAX……うっ、頭がっ……」

「枕田だけでなく浜口にまでトラウマを植え付けるモンスターだと?どんな化物達だ………」

『社長にエライ目に合わされたからねえ……』

『消え去るがいい!遊城十代にダイレクトアタアツク!!<混沌のマキシマム・バアアアスト>!!』

「や、やべえ!?!速効魔法《クリボーを呼ぶ笛》!デッキから《ハネクリボー》を特殊召喚するぜ………」

『クリイ!!』

『構わん、そのまま粉碎する!!』

『クリイ〜!』

助かったぜ相棒……

『フウン、首の皮一枚繋がったか。まあその精霊が出てくる事は百も承知よ……伏せカードを一枚出してターンを終了する』

カイバーマン H3 LP250

《混沌の場》(カウンター3↓5)

《ブルーアイズ カオスマAX》(攻)

《青眼の精霊龍》(守)

《青眼の亜白龍》(守)

《真紅眼の鎧旋》

セットカード

「あれっ？貫通ダメージは？……ああ、原作効果ね」

「ん？なんのことだ？」

《クルック〜》

カオスマAXに精霊龍……私の手札はバレてるしこのドローでなんとかするしかないわ！

「私のターン……よっし！ドローカードは《手札抹殺》！そのまま発動するわ!!」

『ほう？中身が知られた手では勝てぬと判断し全て入れ換えにきたか、なかなか豪胆な女だな』

「まだ死デツキのウイルス感染中だから攻撃力1500以上のモンスターは破壊され

ちやうのに・・・」

「やっぱ私は守りに入るより、ガンガン攻め立てるが好きでね！4枚捨てて4枚ドロ
!!」

「へへっ。ジュンコらしくなってきたぜ」

ドロカードは・・・

スピードロイ

《SR ベイゴマックス》

《逆巻のトルネード》

《突風のオロシ》

《黒い旋風》

よっし！破壊されるカードはないわ、しかも旋風復活！

「もとより速効シンクロに特化したデッキ。メインデッキに高攻撃力モンスターは少ないと判断しての手札抹殺か、やるな・・・」

「散々好き勝手してくれたお礼よ、派手にぶっ飛ばしたげるわ!!私の場にモンスター不在の時、《SR ベイゴマックス》を特殊召喚出来る！《三ツ目のダイズ》を手札に加え
召喚!!」

「ジュンコさんがSR?!鳥と全然関係なくないっすか!?!」

「先のリベリオンといい、どういった心境の変化でしょうか」

先のセブンスターズや万丈目君とか見てたら、好きなカード活かす為の混ぜモノもいいかとね……。他にも理由はあんだけど。

「レベル3のベイゴマと同じく3の三ツ目のダイズをチューニング！来たれ！神話の名刀を振るいし猛禽の勇士！シンクロ召喚《BF―星影のノートウング》!!」

『ツシャアツツ!!』

《星影のノートウング》星6／闇／攻2400／守1600

「シンクロ召喚時に相手プレイヤーとモンスターに800ダメージを与えるわくホーミング・ソード>!!」

『そうはいかな、手札の《エフェクト・ヴェーラー》を捨てる。そのカラスの効果は無効だ!!』

ここまでは想定内、あとはあの未確定のセットカードと精霊龍の発動タイミング次第ね。

「続きまして場にBFいるので《突風のオロシ》を特殊召喚！

『この瞬間、《精霊龍》の新たな効果を発動！精霊龍を生け贄に捧げつ《蒼眼の銀龍》を
守備表示で特殊召喚する!!このモンスターが特殊されてから次のターンのエンドフェ
イズまで我がドラゴン達は対象効果耐性と破壊耐性を得るのだっ!!』

『グルアアツ!!』

《蒼眼の銀龍》星9／光／守3000

「え？強い効果だけどここのタイミングで出す意味ある？」

「ライキリ対策つかね？」

ムッ、オロシの墓地効果に対処してきたか・・・

「レベル6のノートウングにオロシをチューニング！翔来せよ、闇の猛禽操りし漆黒の
鷹匠！シンクロ召喚！《漆黒のホーク・ジョー》!!」

『侍ズより先の登場ねん!!』

《漆黒のホーク・ジョー》星7／戦士／攻2600／守2000

「喋ってるー!?!」

「しかもオネエ口調なんだな・・・」

「腰ふったりしないから某イエローよりましですわ（ソウルローバー済）」
 「あの雑魚いないと思つたら貴様の仕業か……」

「オカマのジョーは墓地のシンクロBFを蘇生する！もっかい頼むわノートウング!!」
 『明日の●ヨーみたくいわないで!』

『フシユ……』

「これで無効にされたノートウングの効果が適用出来るっ！その召喚権で《逆巻のトルネード》召喚!」

『シャシャシャッ!』

「旋風で《二の太刀のエテジア》もってきて墓地の《上弦のピナーカ》釣り上げっ！レベル4のトルネードにレベル3のピナーカをチューニング!!漆黒の翼濡らし、そば降る雨に響け雷鳴の一撃!!シンクロ召喚、突き抜けるっ!《A BF―涙雨のチドリ》!!」

『うおーっ!出番無いまま終わるかと思つてたぜ!!』

《涙雨のチドリ》星7/攻2600/守2000

「現在墓地のBFは7体×300上昇して攻撃力4700よ!!」

「出た!ジュンコの脳筋エース!」

「困ったらチドリで殴る！単細胞のジュンコさんにピッタリのモンスターですわ!!」

『扱ひひどくね?!』』

「てゆうかライキリは？いつものジュンコさんなら真っ先に出すのに」

「ここまで出番無しなんだな」

『兄者ならジュンコさんの怒りを買って謹慎中だ、ほんとおつかない姫さんだぜ』

「「ええ〜・・・」」

カミューラの城で私のデュエル中人通すなつたのに十代通したからねあの馬鹿侍・・・チドリは止めたらしいので赦す。

「盤面負けてもライフで勝ちやいいのよ！いつけえチドリ！カオスマAXを叩つ切れ!!
雷鳴の、《ライトニング・スラッシュ》!!」

『迎え撃てえ！<マキシマム・バーストオ>!!』

相変わらず？ただでやられようとはされない負けず嫌い過ぎる社長遺伝子・・・

カイバーマン LP1450↓750

「やったあ！……ってあれ？」

「ライフが回復しているぞ?!」

「その鳥の攻撃前に罠カード《ホーリーエルフの祝福》を発動していた、俺のライフは場のモンスター×300、つまり1200回復していたわけだ」

で、でたー！原作特有のく発動していた>だー?!ちゃんと宣言してください社長(?)
!

『カオスマAXを正面から突破してくるとは、流石だと言いたいが……詰めが甘かったな、これで俺は究極のドラゴンを呼び出せる!!』

「んなっ?!」

『無窮の時、その始源に秘められし白い力よ、鳴り交わす魂の響きに震う羽根を広げ、蒼の深淵より出でよ! 《ディープアイズ・ホワイト・ドラゴン》!!』

『オオオオオオッ!!』

『きたー!キサラちゃん最強形体!!』

『このモンスターの出現時、貴様には墓地のドラゴン達の怒りを受けてもらおうっ! その種類×600のダメージをな!!』

『えっと、墓地には7種類だな。4200ダメージだ』

「多っ?!墓地のダメージダイエツトを除外し効果ダメージを半分に・・・きやあああツ!!?」

ジュンコ LP3700↓1600

『中々のしぶとさだ小娘、馬の骨程度には認めてやろう。このモンスターの攻撃力は墓地のドラゴン族モンスター1体を参照出来る。ディープアイズよ、墓地の究極龍の力を得るがいいっ!!』

《ディープアイズ・ホワイトドラゴン》星10/光/ドラゴン/攻0?4500

「ここにきて攻撃力4500・・・もう駄目だー!」

うっさいなー、外野が勝手に諦めんじやないわ

「エンドフェイズにピナーカが墓地に送られたので《月影のカルート》を手札に加えておくわ、ターンエンド・・・」

ジュンコ H2 LP450

《ホーク・ジョー》(守)

《ノートウング》(守)

《チドリ》(攻)

《混沌の場》(カウンターMAX)

『あたしのターン！スタンバイフェイズ時に銀龍の能力により青眼を復活！《真紅眼の鎧旋》を墓地に送り《マジック・プランター》で2枚ドロー！さらに《強欲な壺》でもう2枚ドロー！……おつ、来たね？《龍の鏡》ドラゴンズミラー発動！墓地の《青眼の究極竜》と《カオス・ソルジャー》を融合！！究極と伝説が合わさって最強に見える！究極竜騎士マスター・オブ・ドラゴンナイト』

『『ギヤオオオオウツ』』

「またとんでもないの出てきたぞ?!」

「凄いけど、さつきから凄いの出すぎてリアクションに疲れてきたっす……」

「ならジュンコさんにまかせましょう、わたくし達の数倍いい反応してくれますから。ではどうぞ!」

「なに出してんだアンター!!そのデツキのどこに真紅眼要素あんの?!つーか何故持つてるー入ってる?!」

「流石アカデミアNo.1ツツコミスト(暫定)だな……」

『相方に合わせるつつあったじゃん?沼地刺してるから自力でも出せんだよね。攻撃力

が他のドラゴン1体につき500あがるから、よって現在・・・」

《マスターオブ・ドラゴンナイト》(攻5000?7000)

「攻撃力7000・・・さつきから2500前後のモンスターが可愛くみえんだけど

」

『亜白龍の効果発動、モンスター1体を破壊する!対象は当然《チドリ》だ!』

『ぎゃあああつ、焼き鳥になる!?!』

あんたら効果破壊の度にそれ言ってるね?

『さてバトルで総攻撃で終わり・・・と言いたいが確か《二の太刀のエテジア》はBFと戦闘してこっちのモンスターが生存したら1000ダメージだったっけかな?ファイニッシュは任せますかね・・・《混沌の場》のカウンター3つとって《黒竜降臨》加えて伏せる、白龍コンビは守備でターンエンド』

ちつ、流石師匠のスタンドだけあってよく知ってやがるわ・・・

「え?だったらチドリをドラゴンナイトで倒して向こうの勝ちだったんじゃない?」

「ジユンコさん《月影のカルト》も握ってますから、7000に攻撃されてもチドリの効果とカルトの能力で攻撃力6400まで上昇します。まだライフは残りますわ」

「結果《二の太刀のエテジア》の効果が発動して1000ダメージだ。もしあのまま攻撃されたら勝っていたわけだな」

「なるほど……」

「(じゃあなんで出したんだよ……その場のノリか?)」

『(ドローした勢いで発動して、出してから思い出したとかいえぬ……)』

真紅眼 (♀) H0 LP750

《蒼眼の銀龍》(守)

《青眼の亜白龍》(守)

《青眼の白龍》(守)

《ティープアイズ・ホワイトドラゴン》(攻)

《究極竜騎士》(攻)

セットカード

セットカード

セットカード

ターンは回ったけど十代の手札は0、あの化物集団を突破出来るかな……

《クリクリッ》

流石ジユンコ、こんな状況でも勝ち筋を残しておくとは流石だぜ。カイバーマンのターンになる前に俺が決めてやる！

「俺のターン！……魔法カード《強欲な壺》！デッキからカードを2枚ドロウする！」
「ウイルスは先のターンで打ち止めだったな、好きにするがいい」

くっ、まだ足りねえ。ジユンコには悪いが……

「まずはジョーの効果でチドリを復活させる！」

『よっ。また使ってくれたな旦那っ！』

「そして《七星の宝刀》を発動。レベル7のホーク・ジョーを除外して2枚ドロウ！」
『ボウヤのイケズ〜！』

「あら珍しい、十代様のデッキじゃレベル7はエッジマンくらいでは？」

「たまにエッジマン腐るから欲しいって言われてね。ジョー、燃え尽きたか……」

「《ヒーローマスク》を発動！デッキのフェザーマンを墓地に送り、チドリをE・HEROフェザーマンとして扱う！《フェザーショット》を発動！フェザーマンはこのターン全モンスターに攻撃出来る！そしてフィールド魔法《スカイスクレイパー》!!」

「おおっ！これなんか凄い!?!」

「これでE・HEROフェザーマンとなったチドリは全体攻撃に加えて、攻撃力が高いモンスターとバトルするとき攻撃力1000アップで5400だ！いっけえ！<ライトニング・フェザー・ブレイク>!!」

『お、おう！ぜやあああああつ!!』

『『『『『ギヤオオオオウツ』』』』』』

「やったか?!」

チドリの残撃が相手モンスター全てに襲いかかる、これが俺の全力の一撃。決着のハズだ……

『フウ……危ない危ない。』

真紅眼LP750?50

「なっ?!ライフが残ってやがる!」

「どうして?!攻撃は確かに決まったはずなのに……」

『あたしは罨カード、《攻撃の無敵化》を発動していた。これで対ディープライズの戦闘ダメージを無効にしたのさ』

『つまり受けた戦闘ダメージは、他のドラゴンが消滅し攻撃力が5000に戻った対ドラゴンナイトの数値のみとゆうわけだな。なかなかの判断だ』

「すげえ・・・」

「十代?」

「あ、いや・・・ターンエンドだ」

十代 H O

《スカイスクレイパー》

《涙雨のチドリ》(攻)

《星影のノートウング》(守)

『場にカードも無し、こちらが不利といった状況か・・・ククク、心が騒ぐ・・・』

「ああ、俺も今すつげーワクワクしてる・・・俺達の攻撃を全部凌ぐアンタ達が次になにしてくるんだって!」

『それでいい、貴様達の歩んで来たデュエル道などまだ入り口・・・世界にはまだ未知のデュエルが溢れている、見えるハズだ、果てしなく続く戦いのロードが・・・なの

に！貴様はそこで立ち止まるのか!!？」

「立ち止まるもんか！」

『そうだ！己が信じるものを貫き進め！貴様の歩む道……それが、未来となるのだ!!』
「カイバーマン……」

なんだろう、よくわかんねえけどすげー感心しちまつたぜ。

「え……今ので悩み解決しちゃうの？無茶苦茶なこと言われてね？」

『野暮いわないのジユンコ、アンタもそうだよ？昔っからすぐ一人で抱えこんでは周囲を心配させて……弱いくせに何回か負けたくらいで凹みすぎだっつーの』

「なあ?!アンタが私の何わかんのよー!!」

『フッフ、わかっちゃうんだなこれが。あたしが何時からアンタ達3人を観てたと
思ってたんだい?』

「!!」
「!!」

『おい、無駄話ならまたにしろ』

『ゴメンゴメン、あたしから見たら妹達みたいなもんだからついね』

「えっ、超気になるんだけど?!」

「貴女本当なんなんですか!わかるように説明してくださいまし!!」

なんか二人が超焦ってるな・・・そんな昔から知り合いなのか?

『フウン、茶番はここまでだ。貴様達は想像以上によくやった、だがここまでだ!最後に我が全力を見せ付けてやろう』

「こっつ、こっつから勝つつもりすかあ!」

『俺のターン、ドロロー!!魔法カード《魂の解放》を発動オ!!互いの墓地よりカードを系5枚除外する!!対象は三ツ目のダイス、ホーク・ジヨーそして・・・《青眼の白龍》3体!!』

「くそっ、三ツ目のダイスを除外して効果発動!このターンの攻撃を一度防ぐ!」

「青眼を除外ですって?」

「わざわざ自分が不利になるような・・・まさか?!」

『あたしはリバースカードオープン!《異次元からの帰還》ツ!!ライフを半分払い、除外されてるうちのモンスターを可能な限り呼び出す!当然・・・主役の彼女達をな!!』

カイバーマン LP50?25

『『ギャオオオオツ!!』』

「青眼が・・・3体！」

「まさしく、カイバーマンのデッキは海馬瀬人本人のもの・・・」

「碎け散れ！青眼でノートウングを攻撃イ！＜滅びのバーストリイム＞!!」

「除外した三つ目のダイスの効果を適用！その攻撃を無効に、」

『正確には最初の攻撃を無効にしなければならない。これで邪魔はなくなったねえ』

『速効魔法《瞬間融合》を発動!!特別に見せてやろう、真の最強ドラゴンの姿を!!生まれ変われつ、3体の青眼!!融合召喚ネオフルーアイズ・アルティメットドラゴン《真青眼の究極竜》!!!』

『『ギイヤアオオオオ・・・!!』』

《真青眼の究極竜》星12／光／ドラゴン／攻4500／守3800

「真青眼の・・・」

「究極竜・・・」

『えっ、あの・・・あれとやり合えて?無理くね?』↑攻撃力4400

「さつき究極竜騎士とか倒してただろが、とりあえず・・・」

「あなたはよくやった、眠りにつくがいい・・・ですわ」

『ちよおつ?! 姫さん方あ!!』

『終幕だ! 《真青眼の究極竜》の攻撃イイイ!! ハイパー・アルティメットバーストオ! 3・連・弾!!』

『ちなみにチドリ↓ノートウング↓本人の順だぜ?』

『ふんぎやあああああああ!!?』

「うわああああああああつ?!」

十代LP1600↓0

《クルツク》

「(チドリは兎も角) 十代! 大丈夫?!」

十代は大の字に派手にぶつ倒れていた、怪我してなきやいいけど……

「フフフ、アハハハハハッ!!」

「あらま、どうしたのでしょうか」

「派手に吹き飛んだからな、頭でも打ったか？」

「ちげーよっ!……あゝ!……こんな楽しいデュエルは久しぶりだったぜ」

「そーね、そーかもね。」

背負うものがある戦いばっかだったもんね、息苦しかったよね。

『フウン、負けてあそこまで笑えるとはな。貴様の心配は杞憂だったわけだ』

『立ち止まりかけてた奴がいたからね、おねーさんは心配性なのです』

「チイツあんなデュエルを見せ付けられて黙っていられるか!おい貴様達!俺ともデュエルしろ!!」

えっ万丈目君どったの?!

『ほう、粋がいいのがもう一人いたか・・・よかろう、胸を貸してやる!』

『光ラダと闇ンツの竜と遊ぶのも久しぶりだしな、いっちょやるか!』

「お供しますわ万丈目様!あの黒竜モドキは一度ギャフンといわせたいですし!」

「『『デュエル!!』』」

なんか始まつちやつたろ・・・

このあと、組み合わせ変えたりしながら二人の精霊ズと滅茶苦茶デュエルした。
私、なんかで悩んでた気がするんだけど・・・ま、いつか!

続く？

問羽 精霊は喋ればいいってもんじゃない

「行けえ！雑魚共!! 《おじやま・デルタ・ハリケーン》!!」

「ば、ばかなああああ?! そんな雑魚モンスターに我がドラゴン達が……」

「兄さん！俺はこいつらに教えてもらった！」

《兄弟の絆を!》

《力を合わせればなんだってできる事を!》

《そして……》

「下には下がいることを!!」

《だあつつつつ?!》

どーも枕田です、突然ですが万丈目兄 vs 万丈目サンダー（攻撃力500以下縛り）のデュエルの観客席からお送りします。

え？なんでデュエルはしよったかって？そりゃーうちの堕作者が水増し（ry）好きじゃないだけよ、文句はあいつに言っつてね。

「ジユンコさん、内心とはいえメタ発言は謹んだほうがよろしいかと……」

「それをナチュラルに読むな。つか露骨に不機嫌オーラ出してなんなのよ……」

「べ、つ、にい〜？ただ万丈目様のクウウルなデッキにい？これからあの三馬鹿があ？常駐するようになるのかあああ〜？考えたら胸糞悪くなっただけですわ」

「別に黄色が嫌いなだけでしょあんたつて子は……」

「兄弟が揃う結果、出しゃばるので嫌です。」

モモが嫌悪剥き出しとは珍しい……

あ、デュエル終わった。折角なんで読者の皆様もよかつたら御一緒に。

「――」

「十!!」

「百!」

《千エン……!》

「万丈目さんだ!!」

「!!サンダー!サンダー!万丈目、サンダー!!!」

「フハハハハッ、アーハッハッハッハッハ!」

笑い方が社長気味でんだけどサンダー、前回カイバーマンと絡んだせいで影響受けちゃったかしら……

翌★日

「と、ゆうわけで話がある」

「どういうわけよ……」

次の日、休日に軽くランニング中に万丈目君に絡まれました。

「実はおじやま三兄弟全てがデッキから抜いても抜いても入ってるようになってな。カードを捨てるのも目覚めが悪いゆえ、全くもって仕方がないので戦術に組み込もうと思ったのだが……」

《アニキつたらてれちやつてくん》

《そうだぜアニキ、結構俺達の事》

《気に入ってるくせに》

「フン!!」

《裏拳?!?!》

「いやいやいやいや、ドメステイックバイオレンス(?)してないでまずこっちのツッコミに答えましょ?てかなんで私の走るコース知ってるの?つかそうゆうのモモえもん

に相談しなさいよ、なんの為の嫁だ」

「誰が誰の嫁だっ！まあいい、実は昨日のうちに浜口に相談しようとしたら．．．
「キiiiiiiiiい！わたくしよりそんな意味★不明な生物を選ぶつてゆうのですか万丈目
様のひとでなし！！」などと言われて断られてしまった」

「お、おう．．．アンタも大変ね」

つかモモの物真似、すごく似てたとか言わない方がいいわよね．．．真顔でやるか
ら余計面白い

「そこで貴様もKCC社等から使えそうなカードを支給されていないかと考えてな？生憎
番号を知らないので以前ぼっちでさ迷っていた場所を張らせてもらった」

「ぼっちだったのはアンタもだが．．．えく獣族やローレベルのサポートかあ、無い
ことも無いけど私にメリットはなんかあんの？」

「．．．俺の部屋は十代部屋の隣だ。あとはわかるな？」

「オツケイまかせて（間0.1秒）」

「（翔の言う通り、チョロイな．．．）」

《クルック》

く女子寮前く

「またせたな！私がジュンコよ!!」

「知ってはいたが、十代がらみだと豹変し過ぎだろお前……」

「まあまあ、それはさておき私のカードはお高いわよ？滅多に使わないから1枚ずつしかないけど10枚くらい……」

ランク2とかも用意してみた、私が手元で腐らせるよりは使ってもらった方がカードもいいだろうしね？

「安心しろ、こんなこともあろうかと20枚程用意してある（撮影協力・丸藤翔）」

「どれどれ、お手並み拝見……こっこれは?!ぐふうつ?!」

ば、ばかな……前回の温泉のシーンから抜粋ですと?!あんな場所でどうやって撮影器具を持ち込んだとゆうのだ!だが……イイ!!

「……交渉成立ね、勿論十代には内密に」

「フツ、当然だ。人間性を疑われるからな、では……」

私が万丈目君にカードの入った封筒を渡そうとした・・・その時!

『ていつ!! (有言の手刀)』

「?!」

「貴様ツ、なにを・・・!!」

『あのこたちのためのさぽーとかーどだなんて・・・じゅんにはひつようない! (正直邪魔)』

「ばっ、お前は人前には出てくるなと言いつけただろう!!」

そこには白黒で左右対象な服を着た、見た感じ12〜13歳くらいのちんまい幼女がそこにいた、私に手刀をかましたのはこのコのように・・・ん?なんか羽生えてねコイツ、天使の羽と・・・悪魔の羽?コスプレかな?

「・・・えつと、サンダーさん?」

「さて、話せばわかる」

「そのちつこいコ・・・」

「言いたい事はわかる、非く常にわかる!だが!」

.....ポーンッ! (閃いた音)

「あつ、もしもしモモく?今く万丈目クンと一緒にただけどく、なんかく?小さい女の娘をつれ歩いてるってゆうから、なんか親しげ?なんかヤバ気、ヤバくない?」
「なんで昔のコ?ヤル風なんだつ!!つてアアアアアアアアアアアアアッ!!」

SE へトトトトトトトトトトト

「なああああああんでええええええすつてええええええええええつ!!?」

「早いっ!?枕田が電話してまだ5秒だぞ!!」

「モモ、口に朝食のパン屑ついてるわよ」

流星はモモえもんね、どこ?もドアでも持つてんのかつて程の速度で参上したわ

「そんな事よりい！昨日わたくしよりおじやまの方がいいとか言い出したと思ってヤケ食いしてたらあ!!なんですかそのちまつこいは幼女趣味ですかコスプレですか口リコンですかそうですねそうですね?!?!?!」

「ま、MATE!話を・・・話をさせてくれ!!」
『んにゅ?』

今★朝

準君私室にて

「うゝむ・・・」

なんだか暑くて寝苦しい、最近気温が徐々に上がってきたからな。そんな事を考えながら寝返りをうつと顔になんだか柔らかいものがぶつかつた。

「うゝむ・・・」

また眠っている間に浜口の奴が忍び込みでもしたのだろう、俺達の関係を疑われるぞ全く・・・面倒だが起きて注意せねば。

『じゆううん．．．．．(Z z z z z z)』
「うおおおおつ?!」

そう思つて目を開くと意味不明な格好の少女が横で寝ていた、思わず叫びながら後退りしてしまった。

『あ、じゆんおはよ〜(まどろみ)』

「(まどろみ)じゃないわ!人の事を馴れ馴れしく呼びおつて．．．何者だ貴様は!!」

『なにものといわれても．．．あなたのゆいつむにのあいぼうライトアンドダークネス・ドラゴン(光と闇の竜)さ
!!』

回想・終

「．．．．．」

「えええええええつ?!」

「その娘が《光と闇の竜》!?!」

「信じられない、と言いたい所だけど……」

「前回のカイバーマンとか真紅眼レッドアイズとか見たあとじゃ」

「信じるしかないわよね……」

『うむ！らいだーはいやなので（可愛くない）かわゆくくらいだ」とよぶがいいぞ！（ア
クセントはラミアと同じ）』

「お、おう……」

呼び方を自分で要求してきた……

俗称も真紅眼の奴の呼び方も嫌だったのね。

「ん？ちよつと待て！女子寮の裏ゆえに天上院君はまだわかるが、何故十代達まで此処に
にいるのだ?!とゆうか天上院君は前回出番なかったのに何故知っている!!」

「なんか、面白そうだったんで拡散してみた（ゲス顔）」

「前回の件に関してはモモえもんが動画を撮影してくれてたわ、精霊界とやらでもPD
A使えるのね」

つか今の回想、私はモモがベットに忍びこんでくるのが当たり前！みたいな感じのが

気になったんですが……

「次元を超えても大丈夫！強靱★無敵★最強の硬度を誇るPDAケース・青眼モデル（堀絵入）！3000DPで購買部にて大高評発売中ですわ！」

「色違いのブラマジモデル（2500DP）と真紅眼モデル（2400DP）もよろしくな！つて似たようなネタを番外編でやったばかりだろうがっ!!（EX3羽参照）」

『いいかげんにしてくださいみなさん（今は真面目な話をしているんだ）』

「か、可愛い……」

「天上院クウン?!そもそも何故見えてる!!」

『はっはっはー、ぼくくらいのコーいせーれいにもなるとじぶんのいしでじつたいかするなどあさめしまえなのだ（長い、嘯みそう……）』

「読みづらいわっ!どこのボンコツ駄犬よアンタは!!つかさつきから本音がだだ漏れじゃー!!」

「ここで元祖ツツコミのジュンコさんが行っただけ!!ボンコツ駄犬って誰すか!?!」

花鳥風月の月の奴参照よっ!

「ArcV観てない方には意味不明ですわジュンコさんっ！いや、見ててもちよつとわかりづらいです！」

「わたし達にも意味不明なだけど?!」

「そもそも！前回まで普通にドラゴンしてたのにどうしてそんななっちゃったのですか?!」

『へ?んとね〜(話すと長いんだけど)』

「「うんうん」」

『れんちゃん真紅眼みたい霊廟の守護者にじつちやまにたのんだらこうなったのだっ! (ドヤ顔)』

「へ、へ〜・・・そうなんだ〜・・・」

「それはなんとなく察してましたが、どうして見た目こんなんですか?! 誰の趣味よ!!」

やばい、モモの口調が崩壊してきてる・・・

『さいしよはかおすごつですみたいなかんじだったんだけど、れんちゃんが「アンタの主人の彼女的に考えて、見た目もう少し幼い方が好みなんじゃね?」っていわれて〜、きづいたらこうなってた! (推定13歳レベル)』

「またあのヤローの仕様ですか?! わたくしここまで幼くありませんわ!!」

「カオス・ゴツデスって?」

「カードあるけど見る? ほれ」

《カオス・ゴツデス―混沌の女神―》

シンクロ・効果モンスター

星8／光属性／天使族／攻2500／守1800

光属性チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター2体以上

1ターンに1度、手札から光属性モンスター1体を墓地へ送り、

自分の墓地のレベル5以上の闇属性モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはシンクロ素材にできない。

万丈目君結構カオス要素あるから使えろと思つてたまたま持つてきてたんだけど、丁度よかつたわね

「あく……美人だけどちょっとお姉様過ぎるわね」

「そつすね、確かに万丈目君の好みではないかも……」

「確かに、これで隣にいられたら威圧感半端ないな……って小さくし過ぎだろうが！
限度を知れ限度を!!」

モモつて若干顔が幼めだもんなあ……でも年相応じゃね？明日香がぶつ飛んで高
校生には見えないから幼めに見えるだけじゃね？

『そんなわけで……こんごじゆんのせわはぼくがやるから（ももえは引つ込んでろ）』
「はあ?! どうしてそうなるんですか、この幼女! ふざけるのは口調と見た目と存在だけ
にしてくださいな!!」

「全否定じゃねーか……」

『いままではぼくとじゆんをひきあわせたおんじんつてことでだまってみまもつてたけ
ど、ひとのすがたをてにいれたからにはじゆんにはぼくがいれればいいのだ!（）』

「ええい! 読みづらいから長文はやめなさい!! ポツと出の幼女風情に我儘放題の準様を
支えきれると思つてるのですか!!」

「お、おい……」

『そんなことかんがえてるじてんでかのじよしつかくだよ！おんなはすべてをゆるしてうけいれるふところのひろさがひつようなのさ！（正直そんなに我儘言つてないし）』

「お前達……」

「ぐぬぬぬぬぬ」

『にゆううううう』

睨み合つたと思いきや急に距離を取り合つて……

こ、この流れはもしや……

「あ、ディスク展開したつす」

「あの娘も手にディスク出現したわね、精霊つて凄い」

『『デュエル!!』』

ももえ LP4000

ライダ LP4000

「自然な流れでデュエル始まったー?!」

「ジユンコ、なんか楽しんでないか今回……」

『せんこうはぼくだ！ぼくのためーん！どろー!!（手札いいなこれ、貰ったわ）』

えっ、デュエル中も○有効なの？思考ばればれじゃん、駄目じゃん？

『まずは《りゅーのれいびよう》をはつどう！でつきからどらごんぞくの《だーくすとーむどらごん》をぼちにおくるよ、さらにつうじようもんすたーをぼちにおくったのでもういちまい、《どらぐにてい・あーむずれうばあていん》をぼちに……』

「カード一枚の効果処理が果てしなく長く感じるわー！お願いだからカード名だけでも真面目に言つてよね！対戦相手も観客のうちらも読者も作者も混乱すつから!!」

「ジユンコさん最近メタ発言多くないっすか？」

「大丈夫、何時も通りよ。シリアスパートじゃない限り大体こんな感じでしょ？」

「明日香さんまで若干メタイんだな……」

『そんなこといわれても……（無理難題）』

「ハア。しつかりしてくれ、仮にも俺の相棒だろう……」

『じゅんがそういうなら……よしっ！まじつくかーど（トレードイン）はつどー！れべるはち（光と闇の竜）をすて、にまいドロー!!』

(〇)の部分にカード名言させたーっ?!もう無茶苦茶だよ!.....あ、元からか。

『しょうかん! (創成の竜騎士) こーかはつどう! てふだいちまいとじしんをぼちにおくり (巨神竜 フェルグランド)、ぼちかられべる7・8どらごんふつかつ (アームズレヴァティン) !!』

『ぎやおおおつ!』

《ドラグニティーアームズレヴァティン》星8 / 風 / ドラゴン / 攻2600

「モンスターまで口調移ってんぞ?!」

『とくしゆしょうかんじにぼちのぼくをそうび (光と闇の竜) ! たーんえんどつ!!』

ライダー H3

《レヴァティン》 + 《光^白と闇^分の竜》

「初手くレヴァライダー>か、そいやサンダーのデッキにも入ってはいるっばいけど決まっただ事はないわよね」

「ああ、そうだな.....」

「ればーらいだー? なんのこっちゃ」

「観てればわかるわよ」

「フンツ。見た感じ巨神竜デツキって感じですわね……。そんなフィールドで荒ぶるわたくしをとめられると思って?! わたくしのタアアアアン!!」

「いつものももえさんからは想像出来ない声でドローしたあ?!」

「全く冷静じゃないわね、大丈夫かしら……」

「《ディーヴァ》さん召喚! 《ネプト》さん特殊召喚! 《竜騎隊》落として竜騎隊と《メガロアビス》サーチ! 竜騎隊切って《ディニクアビス》特殊召喚! 《アビスバイク》《ムーラングレイス》サーチ! 《アビスバイク》切って《鬼ガエル》! 墓地へ《粹カエル》! ネプトさん戻して《魔知ガエル》召喚! デイニクと魔知ガエルにディーヴァさんをチューニング! レベル1 《星態龍》!! グンデとネプトさん切ってメガロアビス出陣! 《アビスケイルークラーケン》サーチ! リンデとネプトさんの効果でバイクと龍騎隊復活! オーバーレイ! ランク4 《深淵に潜む者》! 墓地の魔知ガエル除外で粹ガエル復活! 鬼ガエルとオーバーレイ! 《餅カエル》!! 墓地に水属性モンスター5体! 《水霊神 ムーラングレイス》2枚ハンデス!! 最後にクラーケンをメガロアビスに装備ツ!!」

《深淵に潜む者》★4 / 水 / 海竜 / 攻1700? 2200

《水精^{マール}燐ーメガロアビス》星7 / 水 / 海竜 / 攻2400? 2900? 3300

《星態龍》星11 / 光 / ドラゴン / 攻3300 /

《餅カエル》★2 / 水 / 水 / 攻2200? 2700 /

《氷霊神 ムーラングレイス》星8 / 水 / 海竜 / 攻2800? 3300

『えっ、ちよっ、まっ・・・』

「「「「「」」」」」

「バトル！大海に沈めくアクエリアス・スファイア>!!」

『うっそおおおおっ?!』

《光と闇の竜》LP4000? 0

WIN ももえ

ライダさんへぷしゅく（戦闘不能）

「あまりにもちよろい！甘い！まさにちよろあまですわ!! オーツホツホツホツホ!!」

「観てれば……なんだって？」

「なんかゴメン、モモが本気過ぎたわ……」

「実はももえさんって……滅茶苦茶強いツスよね？」

「正直、彼女だけでセブンスターズ全滅いけるんじゃないかしら……」

「身も蓋もないんだな……」

説明しよう、本気のモモのディーヴァさん効果を通したら負けと思え。

「浜口に対抗するなら《エフエクト・ヴェーラー》と《増殖するG》は必須だ、拘りがなければ入れておけ」

「持ってねーよ……」

「入れたくねーよG……つかこれNGでしょ流石に、モモくアンタのターンからやり直し」

「えー。ひらがな表記がうざい、と気を使つての瞬殺でしたのに……」

「このままじや師匠の番外編並のひどさだろーが、それにまだ7000文字いつてないのよ？短いっつーの……」

「気にする所そこなのかよ……」

結果トラウマになり、《光と闇の竜》(幼)ことライダはモモには逆らえなくなつたと

かならなかつたとか
・
・
・
・

多分、続かない。

27羽　人は、他人視点では限りなくどうでもいい事に必死になるもんだつたりする

「俺のターン、モンスターでダイレクトアタックだ！」

「ぐわああああつ?!」

???
LP3500?0

「ば、ばかな……鍵の守護者ですらない者にこのわたしが敗れるなど……」
「俺の勝ちだ、約束だ通り俺を、俺を……」

前回のあらすじ

正義の味方ってなんだろ。

え〜前回(?)の温泉の話から経過しました。

授業に欠席の生徒がぼちぼち出始めて、ある日の朝……

「ジユンコ大変だ！」

「なによ朝っぱらから……って女子寮の前で待ち伏せかよ！彼氏か！」

むしろなれよ。あ、口に出す勇氣はありませんチキンでごめんなさい。

「内心までほんつとじれつたいですわねえ」

「ナチュラルに人の背後に立つな、そして心を読むな」

人の影から出てくるスキルでもあんのかこのコは……

「彼氏？怒ってる理由がよくわかんねえけど……とにかくこれを見てくれ！」

そう言ってPDAを押し付けてきたので仕方なく見てみる。メールか、なになに？

☒ from 第4の刺客

To 鍵の守護者の諸君へ

我々の闘いに相応しい舞台を用意した、北の森にあるコロシウムにて貴殿らを待つ。

こない場合は一般の生徒を巻き込む事になるだろう……☒

「なあにこれえ」

ロシアアムって事は・・・キン肉ウーマンの怖いタニアさん（クロノス風味）だったわけ？こんなメール出すような印象ないんだが、つかなんでPDAにメールくんのよ。複数送信残った鍵持ち全員へだしアドレス何故してんだまるで意味がわからんわ！

「これって奴等からの挑戦状だぜ！行かないと他の生徒も巻き込む気だ!!」

「あたしもう鍵ないから巻き込まれてんだけど・・・つか全員宛ならモモと明日香もきてんじゃね?」

「あ、本当ですわ。わたくし知人以外は迷惑B o x行き設定なので気づきませんでした」
「お前ら二人以外はもう先に行ってるぜ、早く行こう!!」

「他の皆はわかるとして・・・明日香、今朝まだ見てないわよ?」

「明日香ならカミューラとにらみ合いながら朝飯作ってたから先行ってもらったぜ」

「そ、そう・・・」

一応説明しよう。

残留したカミューラはセブンスターズへの人質（笑）件夜間警備員件レッド寮の調理担当として地味に馴染んでいる、結構生徒間の評判はいいらしい。怖い。

夜這いのし過ぎで部屋に入れさせてもらえなくなっ……もとい対抗馬として明日香も朝と晩はレッド寮のキッチンに入り浸っている。狭い。

レッド男子達は喜びつつも十代に対する嫉妬でおかしくなりつつあるらしい、十代への基本挨拶が「爆発しろ」のようだ……

え、私？私には行きません。カミューラに会いたくないもの。

「とにかく行ってみましょ、気になるし」

「おう！やっぱお前がいないと始まらないぜ！」

「へっ？」

めっちゃ笑顔でそう告げられ、そそくさと走り出す十代さんであった。おいこら悶え殺す気か私を、「俺はお前が居ないと駄目なんだ」ってか?!

……よし、脳内変換でやる気出てきた。多分出番ないけど。

「ふう。ジュンコさん、前世以前の二の舞にしなければ良いのですが……」

彼を追いかけようと駆け出した後ろで、モモがなんか眩いていたけどよく聞き取れなかった。

《クルック》

北の森に行くとは出来た、中世風味のコロッセオ。

最近欠席の生徒がちらほらいたのは原作通りこれの製造に駆り出されてたからか……私もバイトしたかったかも。石運びとかだからか弱い女子にはきつそうだけどね。

「か弱い女子（笑）」

「こらモモ何笑ってんのよ」

モモがあまりに失礼なので叱ってやろうと振り向いた矢先……

「マンマミ〜ア〜!!」

「この独特過ぎる声は!」

「行こう!中からだ!」

どう考えてもクロノス先生な悲鳴を聞きつけて中に突入すると他の鍵の守護者メンバーとお馴染みレッド寮の皆様に見取られてクロノス先生が倒れていた。

「クロノス先生え!死んじや嫌だよお!」

「クロノス先生!」

「クロノス教諭・・・立派でした」

「貴方の事は、忘れないんだニヤ〜・・・」

「クツ、また犠牲が出てしまった」

「アナタ達・・・別に、死んでないノ〜ネ・・・ガツクシ」

あ、なんか平気そう。ノリだけか・・・

「クロノス先生!・・・お前か!先生を殺したのは!!」

「十代まで死亡扱いなのね．．．」

コロッセオの中央には恐らくクロノス教諭（故）と対峙したのであろう．．．ノース校の制服を改造したかの服でオペラ仮面を着けたデュエリストが佇んでいた。あれ？タニアさんじゃないの？

「来たか、遊代十代．．．残念だが貴様の相手は後だ」

「あ、あれ？お前．．．」

あれっ？十代も疑問に思ったようだけどこの声って．．．

「我が名はセブンススターズ第4の刺客<アース>！さあ、天城院明日香！次は君の鍵を頂こうか!!」

「わ、わたしが狙い?!」

「なにやってんだ（の）？三沢（君）．．．」

「「へっ?」」

「いや、へっ?て．．．どう聞いても三沢じゃん、なんだよくアース>>って」

「大方三沢大地の大地からとったんでしょ、つかなんでオペラ仮面？もう少しまともな

のなかったの？センスわるく……」

「ち、違う！これしか顔を隠せるものが私物になくて……あつ」

はいバレたく、凶星つかれると駄目なタイプなのね……

「ええいつ！バレてしまった以上こんなもの不要だ!!」

「あつ、もったいねえ!!」

「欲しいの？アンタ……」

オペラ仮面はフリスビーの如く飛翔していきました、合掌。

「三沢君！なぜ君がセブンスターズに！なにかの冗談かニヤ!!?」

おお、本来説得に辺りそうなクロノス先生が気絶してつから大徳寺先生が珍しく先生らしい事始めたわ?!

「冗談でこんな事をするかつ！俺はセブンスターズになったんだ、それが揺るぎなき事

実!!」

「なんでだよ三沢あ．．．お前は、お前なら一緒に闘ってくれるもんだと思ってたのに!!」

「くっ、十代．．．そんな眼で俺を見るな!お前にはわかるまい、お前のように誰かに必要とされている奴にはなあ!!」

あっ．．．

「(察し)。ですわね」

「俺はただ認めて欲しかった。俺の実力を．．．いや、デュエルに強くなかったっていい、ただ認めて欲しかっただけなんだ。空気なんかじゃない、一人の人間として．．．」

「み、三沢?」

「だが現実はどうだ?!お前にちよつとメタを張ったデュエルをしただけで描写をカットされ、挙げくボロクソに言われ! (16羽参照) しまいにはそこで倒れてるクロノス教諭や大徳寺先生には出席しているにも関わらず欠席にされた!!こんな事が許されるのか? いや、ネタにしても限度があるだろう!!」

「メタ張ったぐらい、はまだしも．．．」

「欠席扱いはひどいわね……（ジト目）」

「ご、ごめんなさいニャ……」

「しかもここまで主調しているのにも関わらず！後ろの連中は未だキョトン顔をしている!!こんな奴いたっけ？みたいな顔をなあ!!」

いやそれは流石に……と、思つて振り返つたら万丈目君以外首を傾げてやがった。おい丸藤先輩アンタまで……その顔やめて腹筋にくるから。

「だから俺は決めたあ！無遅刻無欠席の俺を欠席にした教諭達を倒し！人を貶して馬鹿にした天上院明日香と丸藤翔を下し！この学園全ての人間に俺の存在を認めさせてやる!!俺は……俺はここに居る！俺は目立つんだー!!!」

なんなの、この人……と言いたくもなるけどちよつと同情の余地もあるかも「ジュンコさん、優しすぎです……」

ドスの効いた声「すまない、彼を許してやって欲しい」

「えっ、誰すか？」

背後より突然登場。

筋肉モリモリのマツチョウマン・タニヤさん、生きていたのか

ドスの効いた声「ワタシが本来のセブンスターズだったのだが……彼の熱意に負けて闇のデュエリストにしてしまった。」

「いや、そんなレンジでチンする感覚で闇のデュエリスト産み出さないで下さいニヤ……」

「フツ、人は誰しも居場所を求めるものだ。存在を認知されないとゆう事はそれだけ居場所が無いとも言える話を聞く限り、三沢つちがあまりに可哀想でな……今彼が言っていたのは空気ネタのほんの一部だ」

なにこの人(？)優しっ。

「カイザー亮もキング吹雪も倒し！闇の王者ダーク★キングに、俺はなる!!」

「あんな事言つてたら余計居場所なくなりそうなんですけど……」

「案ずるな、最後はこのタニアさんが孤独な彼の居場所になってやる事にしたのだ。一

生な……」

これ連れ帰る気マンマンだっ?!よかったね三沢君、嫁が出来たわよ……

「行くぞ天上院明日香!あの時の雪辱、ここで晴らしてやる!!」

「むう、全く身に覚えがないけど……わたしもデュエリスト、挑まれたデュエルは受けるわ!それに十代にいいところ魅せるチャンスよね!!」

「最後がなけりゃカツコイイのに……」

《ちよつくと待ったあ!!》

明日香の発言に我々が飽きれかけていた、その時である!デュエルを制止する機械音声と天空に「キイイイイイン」とゆう爆音が轟いた!

《そのデュエル!僕が引き受けよう!》

そして謎の黒い飛行物体がこちらに接近してきた!マイク音声でわかりにくいの間

「違う」

「ももえっ感じる!?!」

「感じます、ひしひしと!」

「あの、圧倒的なフィールは!」

「なっ、なんだあれは!!」

「鳥だ!」

「飛行機だ!!」

「否……吹雪の嫁真紅眼ジェットだ!!」

「お兄さん?! 何真顔で口走ってんすか!」

「うむ、翔や明日香は冬休みをアカデミアで過ごした故知らぬだろうが……正月に吹雪がアレに乗って我が家に遊びにきた。アレで数年ぶりに天上院家にもお邪魔したぞ」
「うちにアレで来てたの……ご近所迷惑にも程があるわよ」

一般家庭の付近に泊まる真紅眼ジェット……うん、シユール過ぎ。

「ちよ、ジェット機こっち来てないっすか?!

「うわー?!墜落するんだなああああつ!!」

「にっ、逃げろ!!」

コロッセオギリギリまでジェット機で近づいて・・・

とっ飛び下りたー?!!

「ん〜JIOIN!着地ツ!!」

リモコンへ『ピッ』

さながら劇場番社長の如くジェット機からそのままダイレクトダイブし、リモコンで機体も付近に自動着陸させたようだ。着陸手軽過ぎよ!

「待たせたね!僕がキングだ!!」

「待ってねーよ!つかあの高さから飛び下りてよく平気だな!まだ結構な高さあったわよ?!」

「はて、デュエリストならあれくらいは当然だろう?」

「デュエリストって言えばなんでも許されると思ってたんじゃないよ!!」

「いやあく相変わらず君のツツコミには愛を感じるねえ」

「ねーよ！そんなもんないわよ!!」

くそつ、この一分足らずでもものつそい疲れたわ……ししよーが出ると録な目に合わないわね

「とゆうか兄さん、乗って来たアレはなんなの?!」

「ん？嫁真紅眼ジエツトだが？」

「ちつがーう！なんであんなもん持つてんだって聞いているのうちらは!!」

「ハツハツハツなんだそんな事か……社長が「俺にデュエルでもし勝つような事があれば貴様の望みを一つ、可能な限りで叶えてやろう。天地が逆転でもせぬ限り不可能だろうがな。フハハハハハハツ!!」なんて言ったので隙を見て真紅眼融合？黒炎弾でワ
ンキルしてみた」

「……で、作って貰ったのですか」

「激しく納得してなさそうだったしお蔭で《黒炎弾》のカード禁止喰らいそうだけど、約束は約束だからね！アツハツハツハツハツ！」

「姑息な手を……」

社長の「この屈辱忘れわせんっ!!」って顔が用意に浮かぶわ。あれ初見で食らったらね……

「まあ社長の青眼ジェットとより、あらゆるスペックが微妙に落とされてるんだけどね？青眼はマツハ3出せるのにこっちは最高マツハ2。4だよ……そんな所までカードのルールに沿って設計させた社長も流石だね」

「か、海馬コーポレーションK Cの技術は世界一……」

「万丈目様、実家の力で「光と闇の竜ジェット作製してみるか……」とか考えてませんよね?」

「んなっ?!考えてないぞ?!(少しだけしか)」

「いい加減にしてくれ!いきなり出てきて空気を支配しくさって……今回は俺がメインの回のはずだ!」

やっべ、ししよーの登場で三沢君の事完全に忘れてたわ

「これが天上院吹雪、デュエルアカデミアのキング(自称)……聞いてたよりイイ男

ねっ」

「タニヤっちい?!」

「はははっ、僕の噂はセブンスターズにも轟いているようだね。当然と言えば当然か……さて、三谷君」

「三沢です」

「そうか、宮木君」

「三沢です。もはや三すらない!」

「すまない、(男の) 名前を覚えるのは苦手でね……兎も角話は聞かせてもらった。だが、明日香とデュエルをしたければまず僕を通して貰おうか! 本来クロノス先生の分の鍵は僕のだしね!」

「兄さん?! わたし新規貰ってから一向にデュエルしてないのに!!」

「安心してくれ明日香、駄作者のネタ張によれば次は君の出番だ……あのネタ張程あてにならないものはないがね」

「そうなの? ……うんしょうがないわね、今回は大人しくしてるわ」

「天上院家はメタの一族かつ!! てか天空にいたのに話どうやって聴いた?!」

「フツ、そこはジュンコ君のPDAを通話状態にしとけばチョロいものさ」

「んなアホな．．．あつ?! 本当になつてる師匠の番号で! いったいどうやつ．．．」
振り返つたら《幽鬼うさぎ》の奴がいて、『てへっ』ってウィンクして消えた。犯人コイツか．．．

「いいだろう．．．いずれ貴方も倒さねばならないと思つていたんだ!」

「フツ、話が早くて助かるよ．．．折角だ、君の望みの後押しをあげよう」

「俺の．．．望み?」

「僕達の領域に招待するよ、《JOIN領域デュエル》にねっ!!」

私達がつっこむ暇もなく、奴が指をパチンと鳴らすと地響きのような音が近づいてきた。

そして気がつけば．．．コロッセオの客席に大量の女子生徒達が現れた!!

「「「待ってましたー! 吹雪サマー!!」」」

「「「ブッキーお帰りー!!」」」

私達 「「「ふあっ?!」」」

「なん．．．だと．．．どうしてこんな事に?!」

「ふつ、到着前にアカデミア内のアドレス登録済み女子全員に僕の帰還を知らせるメールを送信しておいたのさ。着陸予定地も一緒に載せてねっ!!」

「これがしたいが為に女子呼んだんっ?!手え込み過ぎよ!しかもアンタ2年間行方不明だったのになんで元同級先以外のアドレスもしつてんのよ?!」

「まあ、兄さんだし．．．」

「師匠ですし．．．」

「吹雪だしな．．．」

「あつ、はい．．．」

「納得しちゃうんすか?!」

謎の説得力。

つか女生徒全員いるような．．．あつ、購買部のセイコさんとか鮎川先生とかしまいにや査問委員会のきつ目のねーちゃんまでいるしっ!まじで島中の女性大集合だこれーっ?!

「ふっ、ふざけるな！自分に優位な立場を作り上げて何が望みの協力だ!!」

「三沢君もつと言ってやってく」

「何を言う。目立ちたかった、否。存在を証明したかったのだろう……ならば勝ち取るがいいさ！この観客達（♀）の前で、この僕を打ち倒し！キングの称号をね!!」

「うっ、うおおおおおっ!!」

圧倒的ブツキーコールの鳴り止まぬ中、不条理と戦い続けてきた男……

「デュエル!!」

三沢^空大地は……天上^馬院^鹿吹雪へと挑む!!

続く!

28羽 元親しい人よりも対戦相手を応援したくなる謎心理。

「前回のあらすじ」

「フライディングデュエル」・・・それは、スピードの中で進化したデュエル。

嫁ジェットを用いそれを命掛けで実践しようとした馬鹿二人を、KC社員人々は、ダブルドラゴンバカW D B
と呼んだ・・・り呼ばなかったり。

「って感じで、社長と空でデュエルしてただけどなかなか難しくてね」

「ツツコミ所が多すぎるわー!! あんたらにかかればジェット機デュエルディスクすらおもちゃかつ!! つかあらすじ乗っ取ってボケンな!!」

「雲の上で衝突するドラゴンってのはいいものだよ? 動画撮ってるけど見るかい? (撮影・ISONO)」

「吹雪さん! あとで俺のPDAに送信を!!」

「観たいんですか?! 多分まともにとれていませんわ! 磯野さん本当お疲れさまです・・・」

え、えくとお……三沢君陥落ちからの師匠飛来してデュエル開始しますつて所で
すはい、我々は客席引つ込んだ。

「……始めても?」

「何時でも構わないよ挑戦者!先^{デュエル}行は君だ!!」

三沢 LP4000

吹雪 LP4000

「見せてやる……俺の新たなる力を!」

「そういえば、皆はクロノス先生戦で三沢君のデュエル視たんだけ。どんなデツキ
だったの?」

「なんだか知らないカードばかり使ってたつすよ?」

「そうね、効果が把握しきれなくてクロノス先生後手後手で……」

「気づいた時には手遅れ、とゆう感じだったな……」

「……ふくん?」

「なんか嫌な予感しますわね．．．」

「俺のターン、ドロロー！魔法カード《召喚師のスキル》を発動する、デッキからレベル5以上の通常モンスターを手札に加える事が出来る！」

「へ〜上級の通常モンスターが入ったデッキかあ」

「なんだか意外ですわね、融合デッキかなにかでしょうか．．．」

「俺は《クリフォート・ツール》をサーチ!!」

「ぶっ?!」

よりによってクリフォオ?!ペンデュラムのデッキとかまた世間にはれたら面倒なデッキ使いやがって!!

「ジュンコさん！自分棚上げは止めて下さいまし」

「やはり貴様達は知っているのか．．．」

「そして、このカードをペンデュラムゾーンにセッティング!!」

三沢君のデュエルディスクがガシヤン★と広がりそこにツールを設置し始める、わざわざ自分で改造して作ったのね P ゾーン……案の定観客(♀)達も困惑してるなあ。

「そしてツールのP効果を発動! ライフを800支払い、デッキより《クリフオート・エイリアス》を手札に加える!」

三沢 LP4000?3200

「そしてエイリアスを通常召喚! クリフオート達の大半は、生け贄無しで召喚出来るが代わりにレベルが4となり攻撃力は1800まで下がる!」

『……』

《クリフオート・エイリアス》星8?4/地/機械/攻2800?1800/守1000

「更に装備魔法《サクリフオート機殻の生贄》を装備し、攻撃力300アップ! カードを3枚セットしターンエンドだ!」

三沢 LP3200 HI

《クリフオート・エイリアス》(攻1800?2100)

十 《機殻の生贄》

セットカード×3

(P) 《クリフオート・ツール》

「あれだ。永続魔法のように扱えるモンスターの効果で途切れる事なく後続を呼び、戦線を維持する」

「そして大量のセットカードで相手を迎え打つ、クロノス教諭はこれにやられたんだ……」

はい、良く知っています。出たばかりの頃はまじで手がつけれなかった記憶しかないわ……伏せの中には恐らく、つか間違はなくアレがあるわね。

「なるほどね、絶好の滑り出しのようだ。僕のターン！」

「「「「きやあああああつ！」「」」」」

師匠がドローするだけで歓声上がる、うくんこのアウェイ感つ！三沢君を応援した

くなるわね……

「今回はいくら兄さんでも厳しいんじゃないかしら、相手は未知の存在……対して兄さんは派手にやりすぎて大方戦略が露見しているわ」

未知の存在で……あんたらがそんなんだから三沢君は弾けちやつたんだろね。

「《紅玉の宝札》！案の定手札にいる《真紅眼の黒竜》を墓地に送って2枚ドロー！
レッドアイズ・ブラックフレア ドラゴン
 《真紅眼の黒炎竜》をデッキから墓地に送る。まずは様子見と行こうかつ！《レッ
 ド・リゾネーター》を召喚！このモンスターの召喚に成功した時、手札からレベル4以
 下のモンスターを特殊召喚出来る！」

今回はリゾネーター入りの奴かあ、シンクロメインで行くわけね……どうでもい
 いけどリゾネーター系列可愛い、満チーム・サテイスフアクシオン足同盟のチューナー達の可愛さは異常。私的
 にBF達が一番だけどねっ。

「させない！ライフを1000払い、永続罫オープン《スキル・ドレイン》!!このカード

がある限り、フィールド上で発動するモンスター効果を全て無効にする!!」

三沢 LP3200?2200

「やはりあつたか《スキルドレイン》!」

「あのモンスター群は俺の《光ライトと闇ダークの竜ドラゴン》のように自らの効果で攻撃力が変化している、無効にしてしまえば攻撃力は元に戻る為に相性がいいわけだ・・・」

「でしようね、あれだけ伏せればあるでしょう一枚ぐらい。やくん、無効にしないでとかガヤが聴こえるがさて、我らが師匠はどう出るか・・・」

「ならこうしよう、手札より速効魔法発動《エネミーコントローラー》!!」

「まさかの(ですわね)」

「コマンド入力!上上下下左右AB!!このコマンドにより、《レッド・リゾネーター》を生け贄に君の《クリフォート・エイリアス》のコントロールを頂く!」

「コマンド入力は必須なんかしらないけど・・・これ通したら場ががら空きになって敗北濃厚よね」

「地味に嫌らしい手ですわね、リゾネーターもリリースエスケープでスキドレから逃れてますし……」

「ぐうっ……カウンター罠オープン《マジック・ジャマー》！手札を1枚捨てて、その魔法効果を無効にする！」

「おや残念……だが《レッド・リゾネーター》の効果が墓地へ送られた事で有効になる！おいで、《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンド!!これを生け贄にデッキから《真紅眼の飛竜》レッドアイズ・ワイバインを生誕させる、当然墓地発動は有効だ」

『ギャオツ』

「あれっ？前《真紅眼の黒竜》も呼んでたツスよね、なんでわざわざ下級の真紅眼なんだろう」

「上級モンスター呼べるからってそれが最良の手とは限らないでしょ、それに今回は、アレ、っぽいしね」

「確かに、アレ、ですわね……言いたいだけシリーズの」

「「、アレ？どれ？」」

「君の《スキルドレイン》を墓地へ送り、チューナーモンスター《トラップイーター》を特殊召喚!!」

『ギヒヒヒッ!!』

「なにい?!」

「このモンスターは相手フィールドの永続罫を墓地に送って特殊召喚出来るのさ!」

なんでそんなピンポイントなカード入れて事故らないんですかやだー、まあ……某キングイメージでたまたま入れていただけなんだろうけどね?

「刮目せよ! キングのデュエルを!! レベル4の飛竜にレベル4、チューナーモンスター
《トラップイーター》をチューニングツ!!」

「あ、テンション上がってきてキング語録漏れだしましたわね」

「あれ言いたいが為に組んでたもん」

「キング語録って何?!」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を視るがいい! シンクロ召喚! 覇者の魂
《レッド・デーモンズ・ドラゴン》ツツ!!」

『ウゴアアアア!!』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》星8/闇/ドラゴン/攻3000

やっばきたー、リゾネーター観た瞬間に訓練された方々なら察したわね？

「いやリゾネーターは安直過ぎるかど……」

「シンクロモンスター……攻撃力は3000かつ！だがそれならこちらの《クリフォー
ト・エイリアス》の攻撃力は《スキルドレイン》と《機殻の生贄》とのコンボで310
0だ！そもそも戦闘では破壊されなくなっている!!」

「そうなんだよね、厄介この上ないよそれ……使っているのかなこれ、え？多分大
丈夫？じゃあいいか!!」

「???」

多分精霊の誰かと会話中……端から視たら完全電波だ、気をつけよ。

「シンクロモンスターフィールド上に存在するので手札から《シンクロン・リゾネー
ター》を特殊召喚ッ！」

『リゾ』

「またチューナーか?!」

「ご明察。王の魂ここに昇華せん！レベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1の《シンクロン・リゾネーター》をチューニングっ!! 深淵の闇より蘇りし魔王、その憤怒を解き放て!! 《閻魔竜 レッド・デーモン・アビス》!!」

『グガアアアアッ!!』

《レッド・デーモン・アビス》星9／闇／ドラゴン／攻3200

「馬鹿なっ?! シンクロモンスターが進化しただど!!」

「浜口イ! なんだあれはズルくないか?! スターダストにもああゆうのなのか!!」

「お、落ち着いて下さいまし羨ましいんですか?!」

サンダーもほんつとドラゴン好きよね・・・アクセルシンクロオオオオ! とかどないせいちゆうねん、とりあえず／バスター辺りで満足してもらえば? それかバイクのる?

「行くよ、バトルだ! 《クリフォート・エイリアス》を攻撃くアビス・レイジング・バスター>!!」

「攻撃力は僅かに劣ったが・・・《機殻の生贄》を装備したモンスターは戦闘では破壊されない!」

「ふむ、その様子では攻撃宣言のタイミングは何もないようだね? 《レッド・デーモン・

《アビス》のモンスター効果発動！フィールドのカード1枚の効果のエンドフェイズまで無効とする！《機殻の生贄》は無かった事になってもらう！」

「なん・・・ぐわあああつ!？」

三沢 LP2200?1800

「戦闘ダメージを与えた事で第2の能力を使う事が出来る、墓地のチューナーモンスター《レッド・リゾネーター》を準備表示で特殊召喚！このモンスターの特殊召喚成功時、フィールドの最も高い攻撃力の数値分のライフ回復！」

吹雪 LP4000?7200

「ライフ7200・・・だが《機殻の生贄》が破壊された事によりクリフオートカードをデッキから手札に加えられる、《クリフオート・アセンブラ》をサーチ！」

「更に手札より《銀龍の豪胞》を発動！その導きにより、墓地の通常ドラゴン族を復活させる！我が《真紅眼の黒竜》をね!!」

『ギヤオオオオツ!!』

「そのままダイレクトアタックだ!!」

「舐めるなあ！墓地の《超電磁タートル》を除外し、バトルフェイズを修了させる!!」

『え〜！残念』

「《マジック・ジャマー》で捨てていたのか・・・アビスの攻撃時に使わなかったのは、

被害がここまで出るとは思ってたからかな？仕止め切れなくてこちらも残念だよ」

「早くターンを渡してくれ．．．その余裕な表情を直ぐに崩してやる!!」

「余裕なんかないんだけどなあ、手札もうないしむしろ崖っぷちなんだけど．．．オー
 デイエンスにそれを悟られるわけにはいかないからね！レベル7の《真紅眼の黒竜》に
 レベル2の《レッド・リゾネーター》をチューニング!!蒼き眼の好敵手の意志、我が紅
 き瞳の相棒ともに宿れ！シンクロ召喚！伝説を紡げ《蒼眼の銀龍》!!」

『クウオオオオ．．．』

《蒼眼の銀龍》星9／光／ドラゴン／攻2500／守3000

「ぶ、《青眼の白龍》?!」

『違うわ！キサラちゃんもつと可愛いわ?!』

「はあ。ツツコミに困るね．．．《蒼眼の銀龍》の特殊召喚時にフィールドに存在する
 ドラゴン族は銀龍の加護を受け、次の僕のターンまで効果対象にならず効果では破壊さ
 れない！これで僕はターンエンドだ」

吹雪 H0

《レッド・デーモン・アビス》(攻)

《蒼眼の銀龍》(守)

ソワソワ「あれはカイバーマンが実際に使っていたモンスターじゃないか、素材にブルーアイズ指定なわけじゃないのか・・・お、俺も使えたりしないのか？」

「ハア・・・今度社長か師匠に当たってみますわ。4枚以上生産してますかねえ・・・」

「えっ?! 万丈目だけずりい! 俺もあれ欲しい!!」

「俺もだ浜口君!!」

「わたしも欲しいわももえ!!」

「僕も!」

「オイラも!!」

「わたしも欲しいのニヤ」

「ワタシも・・・」

「え余計な事言うんじゃなかった・・・」

全員じゃねーか?! 万丈目君以外実戦で出せないだろ多分・・・でも青眼はどつちの世界でも1度は使いたいモンスター筆頭なのかな、やっぱり格好いいもんね?

私は前世で青眼ストラク買ってないからないけどモモは某G目当てで大量に買ったからな・・・他の原作特別カードみたく消えてなきや持つてぞ、15枚くらい。

小声「失礼な、21枚です!!」

「これがアカデミアの双璧、キング吹雪（※自称）の実力．．．いや、挫けはしない！俺は勝つんだ．．．勝たなければならぬんだ．．．俺のターン!!」

「三沢っちー！負け．．．」「そうよー！三沢君やっちゃってー!!」

「師匠なんかボロクソのミソツカスに負かしておくんまし!!」

「み、ミソツカスで．．．」

「ちよつ、君達イ!!? 僕今回味方！味方サイドだからこつち応援してくれないと!! 幾千の歓声よりも君達の罵倒が一番効くよ?!」

「兄さんは貴女達に一体何をしてきたのかしら．．．」

やー、だつてさー．．．

「ゴ、ゴホンツ！Pゾーンの《クリフオート・ツール》を機動する！ライフ800を犠牲にデッキのクリフオートをインスタールする!!」

「残念だがそうもいかない！《レッド・デーモン・アビス》のカード無効能力は相手ターンにも有効だ！《クリフオート・ツール》の効果을デリートする!!」

三沢つち LP1800?1000

「ぐっ、だが……計算通りだ！バトルフェイズに効果を使用した時からこの状況は読んでいた！」

「へえ、言うじゃないか三崎君」

「三沢です。もう覚える気すらないだろ!!レフトゾーンにスケール1の《クリフオート・アセンブラ》セッティング！見せてやる……セブンスターズ各位に与えられる、漆黒の闇に染まりしカード！発動せよ《命削りの宝札》!!」

「「ぶっは?!」」

それ闇のカードかよ?!ある意味《幻魔の扉》とか《影衣融合》よりも厄介極まりないけども!!

「このカードを発動したプレイヤーは5ターン後全ての手札を失うリスクを負うが、手札が5枚になるようドロウ出来る!!」

「リスクがリスクになってねーから！インチキ効果も大概にしやがれ!!」

「あれ程のレアカードを産み出すとは……セブンスターズ恐るべし」

「行くぞ……天上院吹雪！レフトのPゾーンにはスケール1の《クリフオート・アセ

ンブラ》そしてライトゾーンの《クリフオート・ツール》はスケール9！これにより：
レベル2から8のモンスターが同時に召喚可能！」

「いかん！クロノス教諭を下したアレがくるぞ!!」

「顕現せよ、忘れ去られし機殻達!!《クリフオート・ゲノム》！《クリフオート・アーカイブ》!!そしてEXデッキより蘇れ《クリフオート・エイリアス》!!」

《クリフオート・ゲノム》星6／攻2400？1800

《クリフオート・アーカイブ》星6／攻2400？1800

《クリフオート・エイリアス》星8／攻2800？1800

上級モンスターを同時に召喚した?!しかも倒したハズのモンスターも復活してるう
！など、観客達は初見ありきたりな反応を見せる中、うちら（転生組）3人は同時に同
じ想いを抱いていた……

「「(やべつ、社長と会長にばれたらどうしようっ!!)」」

「やつと表情が動いたな……しかしこのままセオリー通りの展開をしても銀龍の加護
を受けたドラゴン達は突破出来ない。だからここでこいつを使う！ラストリバー
ス
オーブン！毘モンスター《機殻の凍結》!!」

『ッ!!』

「このカードは発動後モンスターカードとして扱い、アポクリフオート、召喚の際に3体分の生け贄として扱える!!」

「んなつ、3体生け贄だつて?!」

「そうだ……《機殻の凍結》を3体分の生け贄として捧げ……クリフオート最強のモンスター《アポクリフオート・キラ》を機動させる!!」

『ツツ……ツツツツ!!……ツーツツ!!』

《アポクリフオート・キラ》星10/地/機械/攻3000/守2600

「なつ、なんだあの禍々しい殺気を放つモンスターは!!」

「レベル10、攻撃力3000のモンスターだつて?!」

「(アイツ、どつかでみたような……シエ、シエキナー……うつ、頭が……)」
「けど兄さんの《レッド・デーモン・アビス》の攻撃力は3200よ、大層な勢いで出した割りには状況の解決にはなっていないわね」

いや、それがね

「キラールは全てに終わりをもたらす最凶の破壊兵器！魔法・罠カードの効果は一切受け付けず、レベル及びランク10未満のモンスターが放つ効果も無効化する!!そして特別召喚モンスター全ての攻守を500ダウンさせる!!」

「はいっ?!」

「いつ、至れり尽くせりなんだなあ……」

「まさに噂に聞く、神のカードに近い能力ナノクネ」

OCG次元じゃ「何故幻神獣にこの効果持たせなかつたんだよコ?マイ!!」

「ぼつと出の奴に神耐性持たされても全然嬉しくねーから!」とか散々だったわね……

「そして機動効果を発動する、相手は手札及びフィールドからモンスターを一体選び、墓地へ送らなければならない……ならないんだ!!」

「対象を取らせない強制効果……すまない、《レッド・デーモン・アビス》を墓地へ送る」

「そうか、手札が0だからフィールドからモンスターを犠牲にするしかないんだ!」

「今の吹雪さんにはこの上なく厳しいモンスターだな、強固な耐性や無効効果も絶対ではない……」

「バトルだあ！《アポクリフオート・キラ》よ、《蒼眼の銀龍》を滅ぼせええええ!!」
『クウオオオツ!!』

「うぐつ、助かったよ……ありがとう銀龍」

「まだまだだ！ゲノム、アーカイブ、エイリアスのダイレクトアタック!!」

「うわあああああつ?!」

吹雪 LP 7200?1800

「あと1体クリフオートを展開出来ていれば勝ちだったが……命拾いしたなキング殿」
「あ、生憎……しぶとさには自信があつてね……」

息も絶え絶えに強がるあの男……つてあれ？結構平気そう？

「滅らず口をつ！フィールド魔法《機殻クリフオートレスの要塞》を発動！これによりクリフオートをもう一度召喚する権利が与えられる……3体のクリフオートを生け贄に、2体目の《アポクリフオート・キラ》を機動させるっ!!」

「2体目エ?!」

「攻撃力1800を棒立ちさせるよりかは、凶悪な耐性で圧殺してきたか……」

「クリフオート達は生け贄にされた際に様々な効果を発するが……今は効果対象自体

が存在しないからな。だがエンドフェイズに《クリフオート・アセンブラ》のP効果が発動する。このターンに生け贄にされたクリフオートの数、つまり3枚ドロロー！これでターンエンドだ!!」

三沢 L P 1 0 0 0 H 3

《機殻の要塞》

《アポクリフオート・キラール》(攻)

《アポクリフオート・キラール》(攻)

「やった！《ハネワタ》のカードを引いたぞ！これでバーン効果を連打でもされない限り……勝った!!」

「ああ……ここまでかあ」

「折角途中までは押し寄せでしたのに、残念でしたわねえ」

「ちよつと！貴女達が向こうを応援なんかするから負けちゃうんじゃない！」

「そうつすよ！これで残る鍵はあと3つ！」

「幻魔が復活しちゃうんだなあ!!」

「はっ？」

「何を言っているのですかあなた方・・・」

「「「へっ?」」」

「惜しかったってのは、三沢君の方よ?」

《クルツク》

「クツクツクツクツク、いいねえ・・・いい感じだよ・・・」

「な、何をバカみたいに笑っている! 追い詰められて可笑しくなったのか!!」
「その通りさ! やはりデュエルはこうでなくては面白くない!!」

「バカみたいではない」

「馬鹿だ!・・・ですわ」

「妹的にも否定出来なくなってきたわ・・・兄さん」

「吹雪・・・はあく(ため息)」

「追い詰められて面白いだと?! ふぎけるのも大概にしてくれ!!」

「余裕がないねえ．．．まるで追い詰められた時のくアイツだ」

ギクツ?!

ブツブツ「口は悪いくせに気は弱くてすぐ独りで空回りして落ち込んでどうも放つとけない」

「なんか小声でぶつぶつ言ってるようだけど、あの人大丈夫なのか?」

「た、多分大して意味ある事言ってるじゃないでしょ．．．」

ブツブツ「そうそう無駄に優しくいくせに妙に突っ張っちゃって周囲に誤解されていつも孤立して．．．」

「モモえもくん?!急に眩きだしてどうしちゃったのかなあ!!」

「なんとなく師匠からテレパシ的なモノを感じましてつい．．．」

「変なモン受信すんな!素直に三沢君の応援しましよ?!」

「吹雪さんの応援じゃないのな．．．」

あいつの言うくアイツ>って、アイツの事しかないわよねえ……辞めてくんないかな、とつくの昔に……<割り切った>のに。

「こつちを視ろ！デュエルを放棄する気か!!」

「……おつとすまない。大切な奴、じゃない女性の事をつい思い出してしまつてね？
今やるよ……ドロー」

「そうだそれでいい、せいぜい俺の《アポクリフオート・キラ》達に倒される壁役でも並べるんだな」

「……《真紅眼の飛竜》をデッキに戻し墓地の《伝説の黒石》を手札に加える。《闇の誘惑》で2枚ドロ、《伝説の黒石》を除外。うくん《貪欲な壺》！デッキに戻すのはチューナー三種類とレベル9のシンクロ体2種、からの2枚ドロ!!」

「手札を3枚まで稼いだか……だがあれだけで、あの神のような耐性を持つモンスター2体を突破出来るのか？」

「充分じゃないでしょうか、ねえジュンコさん？」

「ふえ?!う、うん……そうね」

「……?」

「ふむ……もういいだろう!魔法カード《死者蘇生》!蘇れ《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!!」

『グオオオオオツ!!』

『えー!あたしじゃねーのかよ?!』

「いや、だつてねえ……」

「攻撃力3000といえど!所詮レベル8!更にキラアの弱体化能力が二重に加わり攻撃力はわずか2000だ!!」

「やれやれ、せっかちでは女の子にモテないよ?《チェイン・リゾネーター》召喚!この召喚成功時にシンクロモンスターが存在する時、デッキより仲間のリゾネーターを呼び出す!《ミラー・リゾネーター》を特殊召喚!!」

『リゾツ』

『リゾツ?!』

「2体のチューナー?合計レベルは……ま、まさか!!」

「その、まさかだよ!レベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1のチェインおよび、シンクロン・リゾネーターをダブル・チューニング!!」

「だ、ダブル・チューニングウ!!?」

「うおい?!」

「いいんですかねあれ・・・」

「王者と悪魔、今ここに交わる。赤き魂に触れ、天地創造の雄たけびをあげよ!シンクロ
召喚!現れよ!《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》!」

『グウオオオオオツ!!』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》星10／闇／ドラゴン／攻3500／守
3000

「またレッド・デーモンズの進化体だ?!なんてうらやま・・・けしからん!!」

「万丈目様・・・嘆かわしや」

「攻撃力3500・・・いや、問題はそこじゃない!」

「察したようだね、このモンスターのレベルは10!よって、キラの耐性を貫いて効果を
適用出来る!!その効果は・・・全てのカードを破壊する!!」

「さっ、させるかあ!手札より《エフェクト・ヴェーラー》を捨てる!その効果を無効に
する!!」

おっ、スキドレと被って入れにくいと思ってたけど……こりや勝負はわからないかな？

「ならば手札より《古聖戴サウラヴィス》を捨てて効果発動！僕のモンスターを対象とする、あらゆる効果を無効とする!!」

「ばっ、馬鹿な！これをおかわすなんて!!」

「真の覇者の力を知れ！<アブソリユート・パワー・インフェルノ>!!」

響き渡る咆哮、紅く染まる景色、視界が晴れた時にはもう手遅れ。

「そ、そんな……俺の最強モンスターが……全滅……」

「これで終わりだね、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》でダイレクトアタック！<獄炎のクリムゾン・ヘルタイド>!!」

「ちっ、ちっくしょおおおおっ!!」

三沢 L P 1 8 0 0 ? 0

WIN 吹雪

「キングは一人！この僕だ!!」

「「「「きやああああああああつ!!」」」」

あのキング語録なんとかなんなの？腹立つわ。兎も角三沢君、貴方はよくやった眠りにつくがいい、じゃないんですから……」

「な、何故だ……何故こんなインチキ気味な強力なカードを使って勝てない……プレイミスもなかった！油断なんて微塵もしてない！なのに何故！何故勝てないんだ……」

ガツクリと項垂れる三沢君……あれ？闇ゲじやなかったのこれ、物理ダメージなさそうなんだけど。

「あの三浦って奴、インチキまでしてブツキーのライフそこそこ削った程度じゃん。

スッゲく弱いんじゃない？」

「だよね。なんか色々派手だったけど、三佐波君って子実質2ターンで負けるよね」
「えっ、そうに挑戦しといてね、三澤よっわ」

「あんだとコラ」

気づけば観客(♀)達が似たような事を言い出していた。あんたら実際にあの馬鹿者、じゃなくて化け物に対峙したわけじゃないのに好き勝手言い過ぎじゃね？2ターン持ったって……割りとスゲーのに。

「おのれ、三沢っちの覚悟を何も知らずに……」

「まあまあ、何も知らない方々ですし雑音は無視しましょう」

「三沢君……」

「三沢です！ってあれ？」

「そう、三沢君……君のデュエルは素晴らしかった、戦略も戦術も……」

※モ「だが、まるで全然！」

※ジユ「この僕を倒すには程遠いんだよねえ!!……っつか？」

「だから君達イ！どっかで聴いたフレーズで邪魔するの止めてくれないかな?!」

「素晴らしかった！で、つい……」

むしろ客席のコントを拾うアンタの聴力がすげーよ。とは面倒なんでつつこまない
でおこ……

「オホン！……君のデュエルには1つ、決定的に足りないモノがある」

「足りないモノ……」

「そう、それは……＜愛＞だ!!」

「＜愛＞……だと……」

出た、師匠の謎理論SP。前も似たような事言ってなかったっけ？

「デッキのインチキ度数で言えば僕も似たようなものさ。今回はシンクロモンスターの連打だったからね……だが僕は愛の無い、闇のカードなどで組んだデッキには絶対負けない。いや、負けてあげるつもりはない」

「愛……言い換えれば自分のカードへの信頼、俺は……カードの力しかみていな

かった?!」

あ、あの。多分セブンスターズが使ってるカードの大半つてアンタの忘れ物……
なんて言えないしなあ。

「クツ……完敗だ……所詮、俺ごときは道端の雑草。王者に……いや、そも
そも目立ちたいと思う事事態がいけなかったんだ。役不足なんだ……」

「そんな事はないさ」

「し、しかし貴方にも聴こえるだろう?!俺を否定する観客達の声が……」

「僕はこうゆう苛め気味た否定は嫌いだ。そもそも彼女達は、君の事を何一つ知らない
とゆうのに」

何かぶつくさ言いながら奴さんは懐に手をつ突つ込むと、そこから何故かマイクを取り
出して語り始めた。

《え、御来場の淑女及びその他大勢の方。今のデュエルは如何だったでしょうか？

》

「?!」

「こ、このコロッセオに音響設備などないはずだが、何故マイクの音が響くのだ?」

タニアさんびつくり、まあ大方真紅眼ジェットに搭載されてんでしょーね。飛来してくる時もマイク音声してたし．．．それを精霊達に移動させたんじゃないかしら。

《観たことも聴いた事もないくペンデュラム召喚>!さぞ驚かれたと思います．．．それもそのハズ!この摩訶不思議な召喚は当方初公開!シンクロ・エクシーズに続く次世代の召喚方法なのだからね!!》

「あ、あのく吹雪さん?」

《そして!扱いやバランス調整が難しいこのニューウェーブを、I2社から皆に伝える使命を帯びた男こそがこの!三沢大地君なのだよ!!》

「三三三ナツナンダッテー?!」

「まじかよ?!三沢すつげー!!」

「俺はお前の純心さが凄いわ．．．三沢本人が一番驚いた顔してるぞ」

「えっ、あれ嘘なの?!」

あー……なんとなく思惑が解ったわ。

《本来、皆に伝えるのはもつと先になるハズだったのだが……彼のたつての希望でデュエルアカデミアの諸君に先行公開となつたわけだ。少々デュエルが過激過ぎて短期決戦になつてすまない！皆三沢大地君に盛大な拍手を！！》

「「「わあああああああつ！！」」」

「えつとお……あ、ありがとー！！」

イケメンがちよつとフォローしただけで壮大な手のひら返しである。

こうして、ペンデュラムの創始者(?)として学園中に知れ渡ってしまった三沢君。今後の彼の、運命やいかに……

続く、のかなあこれ。

29羽 あんだけ人気あれば、同じくらい怨まれもするわよね

前回のあらすじ

エンタメデュエリスト三沢誕生（大嘘）

「明日香アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!?!なんなの兄さん!!」

突然ですが、事案です……じゃなくて、前回のデュエル終了時に明日香が吹雪様（馬鹿）の所に駆け寄ろうとしたら全力でハグされる明日香の図。

「やつと……やつと明日香に会えた……この手で届く距離に……」

な、泣いてる?!

そーいや行方不明から帰還してから、なんやかんやで直接触れあえてはなかったん

だっけ。

・・・良かったね、二人共。

「もう、兄さんったら・・・お帰りなさい」

「ただいま、明日香・・・」

ちよつと兄弟愛にウルツときそうになった、その時であった。

キング携帯へパ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜パ〜（遊戯王DM・神の怒り）

「いけない！この着信音は!!すまない明日香!!」

「えっ?」

「はいもしもし！貴方の心の清涼剤。フブキングの携帯です!!」

「どんな出かたよ！知り合いじゃなかったら恥ずかしいだろ!!」

明日香から離れた上、私のつつこみにも反応せず電話に対応する師匠。まあ相手が相手だからしょうがないわよね・・・

「わたくし達の着信音も同人物からの同じ設定にされてますからね、1発でわかりま

すわ」

「あつはい！はい？僕だ!! ああ、はい！それは彼です！ええ、彼です！いいえ彼です!! えっ？わかりました直ぐにでも!!」

読者の皆様も会話の内容と相手を想像してみてください・・・まあ無理か。

「よし！逝くぞ三沢っち!!」

「えっ？何処へですか吹雪さん！とゆうか三沢っち!？」

「当然・・・海馬コーポレーションさ！」

「ええええええっ?!」

唐突な拉致宣言である、そして愛称をつけて心の扉を強引に門を使って抉じ開けにかかった・・・!

「カモン！我が《真紅眼の黒竜》よ!!」

そう彼が宣言すると、島のどこに泊めてあったか定かではない嫁ジェットが我々の頭上まで来ているではないかっ!?

うちら「「「えええええつ?!」「」」」

「なんでよ!なんで呼んだだけで飛んでくんのよあれ音声認識?!」

「はっはっはっ、縄ハシゴを登りながら説明しよう!我が嫁^{真紅眼}ジェットは《真紅眼の黒竜》本人の精霊を憑依★合体させる事により自動操縦する事が可能なのだ!社長には秘密だよ?」

「そこは非イ科学的なんかいいいい!!てか憑依★合体て古りーよ読者の何割がわかん
のよ!!」

「しかもかなり序盤の戦術ですわ?!機械と合体ならオーバー★ソウルでしょうに!」

「そこは問題じゃないっ!」

「解った方は多分駄作者と同年代だっ!では三沢大地は頂いていく・・・残念ながらさ
らばだっ!歴戦のデュエリスト達よ!!」

「会話が全く理解出来ないが、助けてくれえええええ!!」

「どこのパラドツ？スじゃアンタはー!!」

「三沢様のご冥福をお祈りしましょう……」

そんなわけで、我々が唾然とする中。颯爽と三沢君を脇に抱え、ジェットに乗り込み飛んで行かれました、多分社長の元へ。

……余談だが、三沢君に嫉妬の声が客席から殺到した。

《クルック》

翌日の夜。

突然ですが、私ともえは明日香に話があると云われ呼び出されました……灯台部、港の灯台に。

「ごめんなさいね、突然呼び出したりしちゃって……」

「別にいいけど、わざわざこんな場所でなんの話？十代を賭けての決闘なら何時でも受けて立つわよ?」

「こんな台詞がナチュラルに出てくる異常性に、何方か突っ込む役が欲しかったですね……」

「いや、明日香からの呼び出しついたらそれかなと。そしてトップクラスに異常なアンタが言うな、と一応脳内であつこんどくわ。」

「現在573戦236勝236敗1引き分け、その件に関しては次の機会に決着をつけるわ」

「573戦で、何時の間にもそれだけやり合ってるんですか……」

「勝負の内容は多種多様だからね、アンタがいない間にも、こちらは闘い続けているのよ」

料理、洗濯、お裁縫。スポーツや勉強等、ありとあらゆる種目で勝負しています。

前世補正がある私に対して家事や勉強は明日香に分があるのが結構悔しかったり……体力系なら私が俄然勝ってるんだけどね。

「おい……デュエルしろよ。」

「話をもどそっか、用件は結局何？」

「……単刀直入に言うわ、貴女達、兄さんもだけど……何者なの？」
「はいっ?!」

質問の意味が、よく……

「聴こえなかったかしら、もう一度言うわ……貴女達は何者？」

「いやいやいやいや……急に何を言い出してるのよ明日香サン」

「そうですね、わたくし達以外の何者に見えますの？」

「もしかしてセブンスターズが変装した偽者?! みたいに考えんの? ないから、偽者じゃここまで個性再現出来ないから……主にモモは」

「失敬な! ジュンコさんのツツコミスキルも見よう見まねじゃ再現出来ませんわ!!」

「私が一番の個性つてツツコミ?! 他もーちよつとなかったんか!!」

「いい加減にして!!!」

怒られた、普段の悪ノりは通用しないようだ。

「……やっぱり、貴女達おかしいもの。中等部卒業までは変わった所なんてなかったのに……急にシンクロモンスターだの使い出すわ、やたらにツツコミをするようになるわ、二人だけで内緒話ばかりするようになるし……」

「そ、それについては前話たじゃん？」

「それだけじゃない！二人共兄さんといくらなんでも親しげ過ぎるわ！最初に兄を紹介したのは中等部の一年の時、その時は顔を見てキヤーキヤー言ってるだった。それから兄が行方不明になったのはわたし達が中等部2年……兄が中等部の間しか係られる時間はなかったハズ。けど中等部の頃って、わたし達ほとんど一緒だったわよね？」

「で、ですからその頃休日などで、明日香様に内緒で特訓を……」

「わざわざわたしに隠す必要あったの？……休日もわたし達はよく一緒にいた、そんなに兄と係われたの？貴女達と兄は……もう何年も何年も一緒に居る。そんな間柄にしかわたしは見えないわ」

「私は……私達は……」

「それにジュンコ。貴女、自分の事……「私」なんて言ってた？」

ツツ!!?

「ごめんなさい、こんな些細な変化気にする方が変よね……二人だけで強くなって、兄さんと一緒に、わたしを置いてけぼりにしちゃうんじゃないかって……」

思えばずっと悩んでいたのだろう、「私」達の変化に。

どう応えればいいのかだろう、いつそ秘密を暴露して楽になりたい……けど、何言っただんだコイツと鼻で笑われるのがオチだ。

「だけど！私達は転生とか細かい事は置いといて、明日香の友人でありたい……」
「あのね、明日香。私達……」

？

『その話、私にも聞かせてもらええる？』

「だっ、誰?!」

突如、神秘的な声私達の頭に響いたかと思うと眼前に謎の人物が出現した。

『我が名はくプラナ、セブンスターズの新たな資格……』

プラナと名乗るその怪人物は全身シルバー★なサイバースーツを身に纏い、前が見え

なさそうな仮面をつけていた。

ん？ プラナ．．． プラナア?!

『天上院吹雪を追ってこの学園まで来たが、本人はまた消え去ったようだな．．．だが噂の妹と弟子にめぐり逢えるとは丁度いい。弟子達の方は捕らえて餌にでもなつてもらうか』

なんかすごく物騒な感じの人だー?! つーかこの人多分あの人よね、他にこんな格好する奇抜な人居ないもんね?!

「あら、突然現れてなんなのアナタ。ジュンコとももえを人質に兄さんを誘き出す?．．．じゃあ、兄さんの最愛の妹たるわたしはどうするのかしら」

「明日香、自分で言つてて恥ずかしくない? 夜の灯台でテンション上がってる?」

「茶々を入れないで! どさくさで逃げたら承知しないからね二人共!!」

『最愛の妹、か．．．お前は消す!! さあ、デュエルの時間だ!!』

「いいでしょう、アナタが何故兄をつけ狙ってるか知らないけど．．．消すと言われて消される程、柔な妹じゃないのよわたしは!!」

「『デュエル!!!』」

プラナ LP4000

明日香 LP4000

『先行はもらう、ドローー!』

プラナを名乗る者、果たしてどんなデュエルをするのか……攻撃力8800P!
しか印象にないのよね。

『まずは《手札抹殺》!互いに全ての手札を捨て、互いに5ドロー……フィールド魔法《ブラック・ガーデン》を発動!!』

奴がデュエルディスク(良かった普通のだ)にカードをセットすると、灯台部防波堤が黒い棘につつまれる。フィールド魔法《次元領域》とかじゃなかった。安心安心……

「いつ、これは?!」

『ここはブラックガーデン。モンスターの命を養分に、花を咲かせる魔界の花園……もつとも、すぐに枯れてしまうのだけど』

小声もん「どこの魔女様ですかね」

ry「案外ポエミイね、案外中身は全くの無関係だったり？」

『行くぞ……《マスマテイション》を召喚、効果により《ジェット・シンクロン》を墓地に送る。手札のカードを墓地に送り《ジェット・シンクロン》を自信の効果で復活させる』

坦々とモンスターを展開していくプラナ、そのモンスター達に黒い棘が絡みつく……
爺さん縛つても誰も喜びませんよ？

『棘に絡めとられたモンスターの攻撃力は半分となり、その養分で、貴女のフィールドにブラックローズ・トークンを生み出す。』

《ローズ・トークン》×2 星2／闇／植物／攻800

「モンスターステータスを下げて、わたしの場にトークンの精製？まだよく解らないわね……」

『ブラックガードンの効果を発動！このカードと全ての植物族、ローズトークンを破壊し、破壊したトークンの攻撃力の合計1600と同じ数値のモンスターを墓地より甦らせる！現れる……』《流星方界機デューザ》!!』

『ドンツツ★』

《流星方界機デューザ》星4／光／機／攻1600

デューザツ、あいつやつぱり……あの娘なのっ?!

「何このモンスター、不思議な雰囲気……」

『始めるぞっ！デューザの出現によりデッキの《方界合神》を墓地に送る！レベル4のデューザにレベル1の《ジェット・シンクロン》をチューニング！シンクロ召喚！出現せよ彼方の力』《T^{テックジーナス}G ハイパーライブラリアン》!!』

『ハアツ!!』

《TG ハイパーライブラリアン》星5／闇／魔法使い／攻2400

「げっ、鬼畜司書?!」

「明日香様!手札に何か止める手段はありませんの!」

「あのモンスター何か不味いの?!残念ながら今は……」

『もう遅い!墓地の罠カード《方界合神》の効果が発動する、方界モンスターがこの次元から消失した際……デッキから方界モンスターを特殊召喚する!再び出現せよ、デューザ!再び方界合神を墓地へ!』

「これってもしかして……」

アーリージエネクス

『《マスマティシヤン》を手札に戻し《A・J・バードマン》を出撃!レベル4のデューザにバードマンをチューニング!シンクロ召喚!いざ出陣!レベル7《カラクリ將軍ブレイ無礼》!!』

『イヨオッ!!』

『無礼はシンクロ召喚時にカラクリモンスターをデッキからお供に呼び出す。《カラクリ守衛サイザン参参》を特殊召喚、そして再び合神が起動しデューザ再臨!《方界業カルマ》を墓地へ!ライブラリアンが存在する時、シンクロ召喚時に1枚ドロロー!墓地の《方界業》は除外する事で方界カードを手札に加える《方界胤ヴィジャム》を手札へ。レベル4の参

参^トとデューザをチューニング！シンクロ召喚！出陣せん！レベル8 《カラクリ大將軍
ブレイド
 無礼怒》!!』

『アッパレ!!』

『大將軍無礼怒も召喚時にお供がつく、2体目の参^ト！ライブリアンで更にドロー！そして《死者蘇生》を発動。墓地のデューザを復活させ再び《方界業》を墓地へ！再び除外し《方界帝 ゲイラ・ガイル》を手札に！この2体でシンクロ召喚！2体目の大將軍無礼怒!!そしてお供に《カラクリ参謀 式四八^{ニシバチ}》！1枚ドロー！レベル5のライブリアンにレベル3の式四八をチューニング!!シンクロ召喚！降り来たれ《ゼラの天使》!!』

《カラクリ將軍無礼》星7/地/機械/攻2600

《カラクリ大將軍無礼怒》星8/地/機械/攻2800×2

《ゼラの天使》星8/光/天使/攻2800

「な、なによこれ・・・ジュンコのBFやもえの水精燐より展開力上じやないの?!」
 『・・・これで終わりと思うな。將軍無礼、第2の効果発動、大將軍無礼怒を守備に変更する。この瞬間！大將軍無礼怒、2体の効果発動！モンスターの表示形式が変更された事により1枚ドロウ出来る、よって2枚ドロウ!!』

「あれだけ展開して手札がむしろ増えてんだけど・・・8枚で」

「初動が若干難しいとはいえ、一度火がつけば止まらない。そんなデッキですわね・・・」
 「我が怒りを知れ！無礼怒2体と《セラの天使》でオーバレイツ！エクシーズ召喚！激情の指導者《熱血指導王 ジャイアントレーナー》!!」

『ン熱血指導ダア!!』

《ジャイアントレーナー》★8／火／戦士／攻2800

全然似合っていないモンスター繰り出してきたあー?!けどこれ不味くない？

『ジャイアントレーナーのモンスター効果、オーバレイユニット O R Uを消費する度に1枚ドロし、それがモンスターなら800ポイントのダメージを与える。3連続発動1枚目《悪夢再び》、2枚目《アイアン・コール》、3枚目《R U M ランクアップマジック バリアンスフオース》・・・チツ、運の良い奴だ』

「なんとかダメージはなくてすんだけど・・・」

「手札が12枚、デッキの性質上回転させるカードに枠を割いてそうですがとんだアドバンテージ差ですわ・・・」

『《RUM バリアンズ・フォース》を発動！このカードは、フィールドのモンスターをカオス化させ、リンクアップさせる!!カオス・エクシーズ・チェンジ!』
カオスエクシーズ X 熱血指導神 アルティメットレナー!!』

『ンン熱血指導ダアアアア!!』

《アルティメットレナー》★9/火/戦士/攻3800

『このモンスターも先の形態と同等の能力を持つ、ORUを消費し1枚ドロー……引いたのは《エフェクト・ヴェラー》。よって800ポイントのダメージだ!!』
「ぎやあああつ!これが……闇のデュエルのダメージジツツ……」

明日香 LP4000?3200

「明日香!大丈夫?!」

「平気よこれくらい……貴女達が今まで闇のデュエルで受けた傷と比べたら、とんだカスリ傷だわ!」

『減らず口を……だが、それもすぐに絶望へ変わる。手札抹殺で墓地に送られていた《方界業》を除外し《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》を手札に加える。そして《アイアン・コール》で墓地から《カラクリ参謀式四八》を特殊召喚……レベル7の《カラ

クリ將軍無礼》にレベル3の式四八をチューニンググッツ!!」

この状態で合計レベル100って、もしかして……

『天よ、運命よ、事象の理よ！巡る天輪に乗せ此処に結実せよ！我が闇が紂し力の結晶、光と変わりて降臨せよ!!シンクロ召喚!!《天穹覇龍ドラゴアセンション》!!』

『グオオオオオオッ!!』

「うわーっ!?凄いのだしてきたー!!」

「あの……先行1ターン目ですよね?」

『《ドラゴアセンション》の攻撃力は、シンクロ召喚時の手札の数×800ポイント!そして我が手札は11枚!よって……』

《ドラゴアセンション》星10/光/ドラゴン/攻??8800/守備3000

「はっ、はっせんはっぴゃくうう?!」

デューザじゃないけどマジで出して来やがった!!

『真の闇のデューエリストの力を知れ! 手札の《方界曼陀羅》《方界胤ヴィジャム》《方界帝ゲイラ・ガイル》を公開することにより特殊召喚! 光を喰らい、世を眩ませ! 《暗黒方界神 クリムゾンノヴァ》!!』

《暗黒方界神クリムゾンノヴァ》(攻3000)

《熱血指導神アルティメットレーナー》(攻3800)

《天穹覇龍ドラゴアセンション》(攻8800)

『この力で、今度こそ必ず倒す……我が兄を葬った憎き敵。天上院吹雪、ダークネスを倒してみせる!!』

突如、ジュンコ達の前に現れた新たなセブンスターズ<プラナ>。

圧倒的な力を見せつける彼の敵に、明日香は対抗出来るのか。彼の言葉の深意とは。次回に……続かつ! (ももえダミ声)

「雰囲気台無しじゃねーか最後ツ!!」

30羽 やっぱ堕ちればいいってもんじやない。

・その頃の三沢君。

「ふうん、貴様が凡夫の言っていたペンデュラム召喚の三宅か……」

「み、三沢です」

「ワアオ！とてもスリーポイントシュートが得意そうデウス!!」？TV電話

「それは三井！」

「ククク、アメフトのキッカーでも行けそうだな……」

「それは三ツ井！ほぼ変化ないし、地味だし！……他所でもこんな感じなのか?!」

前回のあらすじ

プラナ、強襲。

「葬られた？兄さんに貴方の兄が……どうゆう事なの?!」

『言葉通りの意味だ、私の兄はお前の兄に殺されたも当然……妹のお前を消して、同じ気持ちをあの前にも味わわせてやる!!カードを4枚伏せてエンドフェイズ、クリムゾンノヴァがこの次元に出現したターンの終わりに、互いに3000ポイントのダメージをうける!<カラミティ・フレア>!!』

「3000ポイント!?きやああああああ!!」

『うぐっ……』

プラナ LP4000?1000

明日香 LP3200?200

「きつつ……明日香のターンになる前にたつた2000までライフが削られちゃった」
「ン熱血指導ウ!あと1回でも喰らってたらおしまいでしたわね……」

向こうは手札6枚と伏せ4枚、判明札はマスマ、ヴィジヤム、ゲイラ・ガイル、ヴェーラーと悪夢再び、方界曼陀羅か……伏せはブラフが多そうだけど、あの盤面を壊滅させないと間違いなく次で詰みだわ……

「わ、わたしのターン……ドローツ!」

『すでに虫の息だな、いつそサレンダーして楽になったらどうだ?』

「誰がサレンダーなんて・・・」

『そう? だつたらいい事を教えてやろう。アルティメットレナーはカード効果の対象にならない、クリムゾン・ノヴァは攻撃力3000以下のモンスター効果を受け付けはしない。易々と突破は出来ないぞ?』

「・・・神についてるだけあつて大したモンスターね。だけどなめないで! 《デブリ・ドラゴン》を召喚! このモンスターは特殊召喚時に墓地の攻撃力500以下 《沼地の魔王》を特殊召喚する!!」

『手札抹殺が仇になったか、だが我が布陣を崩せるモンスターがいるのかな?』

「レベル3の魔王王にレベル4の《デブリ・ドラゴン》をチューニング・・・冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ、開け! シンクロ召喚! 咲き乱れよ 《ブラック・ローズ ドラゴン》!!」

『キュオオオオオツ!!』

《ブラック・ローズ ドラゴン》星7/炎/ドラゴン/2400/2000

出たあ! 師匠が送りつけてきたシグナー竜が一体のブラック・ローズさんだ!!

「何故明日香様に・・・ヒロイン乳繋がりでしょうか? わたくしも欲しかったですわ」↑

ワンキル脳

「受けてみなさい! 《ブラック・ローズ ドラゴン》の効果発動! フィールドの全てのカードを破壊するくブラック・ローズ・ガイル>!!」

『全体除去だど?! クツ・・・手札の《エフェクト・ヴェーラー》を捨て、効果発動! その効果を無効とする!』

効果を聞いた途端、前のターンでドロローしていたヴェーラーを躊躇無く切ってきた。

やっぱそうなるわよねえ・・・

「しかし今のはあくまで『使わせた』感じでしたわ。伏せが4枚もあるのにヴェーラーをいきなり切るとは、相手を妨害するカードは少ないとみました」

「フツツ、そうね・・・《儀式の準備》を発動! テツキから《サイバー・エンジェル―韋駄天―》を、墓地から《機械天使の準備》を回収する。儀式魔法《機械天使の儀式》を発動! フィールドのレベル、7ブラック・ローズとレベル6の韋駄天を儀式の生け贄に捧げる! 無窮なる力を秘めし光の天使よ。今あまねく世界にその姿現し、万物を照らせ! 降臨せよ《サイバー・エンジェル―美朱濡―》!!」

『ハアアアツ!!』

《サイバー・エンジェル ―美朱濡―》星10／光／天使／攻3000

『儀式召喚だど?!シンクロ召喚は困だったか……』

「あら、わたしの兄を追ってる癖に妹のデータは少ないのね？美朱濡の効果発動！EXデッキから特殊召喚されたモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター×1000ポイントのダメージを与えるわ!!」

うわびしゆぬつよい、うちらメタじゃね？あれ通したら私とモモ大体ワンキルする性能じゃん……

『チツ……速効魔法《神秘の中華鍋》！アルティメットレーナーを生け贄に、ライフを3800回復する!!』

『ン熱血調理だあああ』

鍋の中でも喧しいトレーナーさん、されてる側だからあんた！

「解せないわね……ドラゴアセンションを破壊し1000ダメージよ。」

『うぐっ?!』

プラナ LP10000?48000?38000

「そして儀式の生け贄とした《サイバー・エンジェル―韋駄天―》の効果により、儀式モンスターである美朱濡の攻撃力が10000アップし、40000となる!」

しれつとサイバー・エンジェル達の効果が9期仕様に変わってら・・・紅蓮の悪魔の仕業にごさいます。

「いえ、どうせお馬鹿の師匠の仕業でございましょう・・・」

「何故ドラゴアセンションを生け贄にしなかったの?もっと大幅にライフを回復出来たのに」

『フツ、ドラゴアセンションが相手に破壊された時!そのシンクロ召喚の素材一組を、効果を無効にして特殊召喚出来る!<天翔輪廻>!!』

『スイサンツ!』

『フム。』

《カラクリ將軍無礼》(守)

《カラクリ参謀 参壹参》(守)

確かに「相手によって破壊される」が条件だけど、5000ものライフを逃してまで出すものかな……

「……バトル！美朱濡で《暗黒方界神 クリムゾン・ノヴァ》（攻3000）を攻撃！闇を消し去れ、＜アセンションウエーブ＞!!」

『ヴオオオオオオツ!!』

『ぎやあああああつ!!?』

プラナ LP3800?2800

暗黒方界神の断末魔、怖つ?!あれ、プラナのサイバー・スーツが消えかけて……

「もう……あのアバターのスタイル良くて気に入ってたから、わざわざ再現したのに……」

現れたのは……まだ幼さの残る少女、つーかセラちゃん。

たまたま偶然とかの可能性危惧してたけど、ガチでセラちゃんだったー?!しかも劇場番と見た目変わってねーし……この次元どうなってるのよ、天馬兄弟とかも普通にいたしマジでカオスやりたい放題だな!!?

「ちっ、小さい女の娘?!」

「ち、小さいとは失礼な!!わたし、こう見えても貴女達より年上ですからね!!」

「「ええええええっ?!」」

小声もん「幾つだと思えますかねジュンコさん……」

ry「えくと、GX1話の遊戯さんが20台前半臭がしたので藍神さん同じ歳、それ基準で仮定して……劇場番時に兄18歳、妹13〜4かな?……現在18歳、師匠達と同じ歳とみた!」

「ふんっ、わたしの年齢探ってる暇があんならさっさとターン渡して下さい」

「探ってるあのコ達じゃ……美朱濡自身の効果でモンスターを破壊したターン、2回攻撃が出来る!無礼怒を攻撃!<アセンション・ウェーブ・セカンド>!!」

「そうは問屋が降ろしません!リバーズ暴発動、《緊急同調》!バトルフェイズ中にシンクロ召喚を行う。これにチェーンして《貪欲な瓶》!ドラゴアセンション、無礼怒2体、

ジャイアントトレーナー、死者蘇生をデッキに戻し1枚ドロウする！カラクリ將軍無礼に参謀参叅参をチューニング！転生し、再びその姿を現せ！《天穹覇龍 ドラゴアセンション》!!」

『ウゴアアアアッ!!』

すげー無理やり原作効果再現って感じ、しかし転生って単語聴くと、ちよつと反応しちゃう。

「同じくですわ。」

「そしてシンクロ召喚成功時に、ラストリバーオープン！罨カード《反転世界》(リバーサル・ワールド)!!」

「り、反転世界?!なんてマイナーな……」

「そうかな？結構強いと思うのに……ドラゴアセンションの攻撃力確定前に効果を適用！元々の攻撃力を守備力の数値と入れ換え3000にする。そして手札の枚数6×800、攻撃力がアップ!!よって攻撃力……」

《ドラゴアセンション》攻??3000?7800

「7800・・・」

「そしてアナタの自慢の天使も、攻守が入れ替わる」

《サイバー・エンジェル 美朱濡》（攻4000?3000）

「くっ、これでは手も足も出ない・・・なんて言うと思った?!バトルよ!美朱濡でドラゴアセンションに攻撃ツクアセンション・ウエーブ>!!」

「ハア?!ふざけてるなら余所でやれ!そんなに死にたければお望み通りに!ドラゴアセンションの反撃<次元昇天葬>!!」

わっ、技名がほぼほぼ一緒だー?!あんたらどんだけ高次元に行きたいのよ!!
「ただの偶然かと思われませんが・・・」

互いの技の閃光がぶつかり合い、KCソリッドビジョンお得意の
《爆万能地雷発グレイモア演》が起こる。爆煙の中から出てきたのは・・・美朱濡だった。

「ば、馬鹿な!ドラゴアセンションが、一方的にやられてる?!」

「フフツ。攻撃宣言時に墓地から罫カード《ブレイクスルー・スキル》を発動していた。

このカードを除外する事で相手モンスター1体のモンスター効果を無効に出来る。アナタの自慢のモンスターは効果によって攻撃力が決定していた・・・」

「そんな、手札抹殺がここまで響くなんて・・・だけど変! 《反転世界》で元々の攻撃力は3000になっていたのに、なんで同じ攻撃力の美朱濡は無事なの!!?」

「《機械天使の儀式》も墓地で発動する効果があつてね? 光属性モンスターが破壊される時、身代りになってくれるのよ」

「ず、狡い・・・」

「狡くないわよ、これも戦略。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

明日香 LP200 H2

《サイバー・エンジェル―美朱濡―》(攻)

セットカード

「さあ、アナタのターン・・・あれっ?」

「狡い、狡い、狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い狡い!!」

お、おや? セラさんの様子が・・・

「うええええん兄さあああああん!!このお姉ちゃんがいじめるうううう!!」

「ブッフウ?!」

な、泣き出しやがりましたぞ。この合法●り?!

「ちよつと?!エースモンスターが倒されたくらいでなにも泣く事・・・」

「だあつてええええ・・・あんなに苦勞して出したのにいいい・・・」

もしかして泣き虫?!そんな事を考えていたその時である。我々のいる灯台部防波堤に向かつて、ものすごい勢いで駆けつけてくる1つの影があつた。

「てえええええええん・・・ジョイイイイイン!!」

「うわー!?!なんかきたあー!!」

あの馬鹿みたいな掛け声でお分かり頂けただろうか・・・そう、馬鹿天上院吹雪である。

「待たせたね！僕がキングだ!!」

「好きだなその台詞!?!待ってないから、誰一人まっつてねーから!!」

「お願いですから引つ込んでくださいまし！話がややこしくなります!!」

あのコあんた狙ってるらしいのになんで来ちやうかなこいつは！

「兄さん！何故ここに?!KCに行っていたのではなかったの……まさか、自力で脱出を!?!」

「エレス・コレクター!?!フツ、先程三沢君を生け贄に特殊召喚されたところでね……明日香がよくレッド寮に潜んでると聞いたから先回りして脅かしてやろうと思った矢先、女性の泣き声が聞こえたので飛んできたわけさ」

ああ、やっぱり三沢君はペンデュラム召喚に対するいざこざのスケープゴートにされたわけね。頑張れ三沢君……私、嫌いじゃなかったよ。

「気安く触るなダボがあ!!」へゴスッ

「X※E〃Ω!」↑言葉に出来ない

「そんな! 師匠のネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲に膝でダイレクトアタックするなんて・・・」

「一部の人にしか通じんネタを使うな! ちよつとグレートモスにハンマーシユート喰らってプチモスにされただけだろうが!!」

「貴女達何の話をしてるの?!」

この辺はお察してください、仮にも女子なんで説明しません。

「フツ。そこで這いつくばって、妹が消される様をじっくり眺めてるがいい! わたしのターン!!」

「♀※※≡♂?!!!」

師匠の頭を足蹴にしながらターン始めおった?! なにあのコ怖い。

「わたしは《方界胤ヴィジャム》を通常召喚ッ!」

『……ギョロツ!』

《方界胤ヴィジヤム》星1／闇／悪魔／0／0

「うわキモツ?!使用者かわいいからより際立ってキモツ!!」

「そして!フィールドのヴィジヤムを組み込む事でこのモンスターを特殊召喚!現れよ

《方界帝 ゲイラ・ガイル》!!」

『……ツツ!!』

《方界帝ゲイラ・ガイル》星2／風／天使／800／0

「……天使要素0ですわね」

「わざわざ攻撃力800のモンスターの為に1体の生け贄?消費の割りに合っていないんじゃない?」

「甘い!方界帝モンスターがフィールドに出現した時、相手に800ポイントのダメージを与える!これで終わりだ、<ハヴォック・ゲイル>!!」

「明日香(様)ー!!」

「何度も何度も効果ダメージばかり……他の手段を知らないの？リバースカードオーブン！《ホーリーライフバリアー》手札を1枚捨て、このターンの全てのダメージを0にするわ!!」

ゲイラ・ガイルから発生した、800ポイントの割りには派手なエフェクトの風を光のバリアーが打ち消した。よかった、効果ダメージ対策はしてあったのね。

「ナ、ナイスダアスカ」

「貴様は黙っているろ！」

「へブウツ?!」

「兄さん！」

「頭おもつきし踏まれたー……流石にやばい？あ、痙攣しながらも親指立ててやがる。案外平気そう。」

「Mに目覚めたんですかね……」

「仕方ない、予定変更だ……速効魔法《緊急テレポート》！レベル3以下のサイキッ

ク族モンスターをデッキより特殊召喚！来なさい、チューナーモンスター《幽鬼うさぎ》
!!」

『たあっ!!』

《幽鬼うさぎ》星3／光／チューナー／サイキック／0／1800

「レベル2のゲイラ・ガイルにレベル3の幽鬼うさぎをチューニング！起動せよ、光を消し去る破壊兵器！《A・O・J カタストル》!!」

『ヴーッ、ヒカリヲカクニン。クチクシマス』

《A・O・Jカタストル》星5／闇／機械／2200／1700

「しゃ、しゃべってはるー?!カタストルはんしゃべってはるー!!」

「関西の方に怒られますわよ?」

「バトルだ！カタストルよ、その忌まわしい天使を駆逐しろ！<ライト・イレイザー>
!!」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃、そもそも《ホーリーライフバリアー》で戦闘破壊されないのに……まさか!」

「カタストルは対光属性用の決戦兵器！闇属性以外のモンスターをダメージ計算の前に

破壊する!!」

ボソツ「別名A O J神殺しである」

「それO C G次元ですわ」

「なるほどね、だけどそうはいかないわ!美朱濡は破壊される場合、墓地の儀式モンスターをデツキに戻して破壊を免れる!!《サイバー・エンジェル―韋駄天―》をデツキに戻す!」

「何度も逃すか!手札より《禁じられた聖杯》を発動!美朱濡のモンスター効果を無効にし、攻撃力を400上げる!よってカタストルの能力は有効!消え去れえ!!」

『ヒカリケスヒカリケスヒカリケスヒカリケスヒカリケス』

『ギャアアアアアアアツ?!』

うわっ、聖杯かけながら鎌つぽいあれで滅多刺しだよ、軽くスプラッターじゃんこれ。

「そんな、わたしのエースモンスターが……」

「やっつくたばったか、カードを2枚伏せてターンエンド」

プラナ LP2800 H2

《A・O・Jカタストル》(攻)

セットカード

セットカード

「これくらいでっ……わたしのターン、ドローツ!!」

光属性・天使族、地属性戦士族が主力の明日香にカタストルはきつい。なんとか処理できればいいけど……

「《強欲な壺》を発動!カードを2枚ドロォ!……さらに《貪欲な壺》!!

《ブラック・ローズ ドラゴン》

《デブリ・ドラゴン》

《沼地の魔神王》

《サイバー・エンジェル―美朱濡―》

《サイバー・プチエンジェル》をデッキに戻して2枚ドロォ!!」

「プチなんか出たっけ？って抹殺か……」

「あの手の手札交換は墓地アド稼がれる場合が多々ありますからねえ。やはりわたくしは増Gが一番ですわ、ジユンコさんもどうです？」

「……エフェクトオフ機能つけてくれたら採用するわ」

万丈目君あれどうやったんだろ、今度聞いとこつと。

「……よしっ！《機械天使の絶対儀式》を発動！手札の《サイバー・チュチュボン》を生け贄に儀式召喚！癒しの力を秘めし光の天使よ。麗しき姿で快癒をもたらせ。降臨せよ！《サイバー・エンジェル―那沙帝弥―》^{ナーサテイヤ}！！」

『ハイヤツ!!』

《サイバー・エンジェル―那沙帝弥―》星5／光／天使／10000／10000

「なによこいつは！ミツ、ミノタウロスッ?!」

「それを言うならケンタウロスッ！ではないでしょうか……」

「ふん、わざわざ儀式召喚までしといて攻守1000？ゲイラ・ガイルの事馬鹿に出来ないね？」

「それはどうかしら？まずは儀式の贄となった《サイバー・チュチュボン》のモンスター効果！このコを生け贄に儀式召喚したターン、墓地の儀式魔法を手札に加える！《機械天使の絶対儀式》を手札に戻す。そして再び発動！《機械天使の絶対儀式》!!この儀式魔法は通常の生け贄の代わりに、墓地の天使族または戦士族をデッキに戻して儀式召喚出来る!!」

「なんだと?!」

「墓地から、レベル8の《大天使クリスティア》をデッキに戻して儀式召喚！《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》!!」

『セイヤアツ!!』

《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》星8／光／天使／2700／2400

「儀式召喚成功時に茶吉尼の効果が発動する。相手は自軍のモンスターを選んで墓地に送らなければならない!」

「くそつ、カタストルを墓地に送る・・・(この伏せカードは破壊を防ぐだけ、通すしかないっ)」

「そして那沙帝弥の効果発動。フィールドの自軍モンスターを選択して、その攻撃力の半分の数値、1350ライフ回復!」

明日香 LP2000?1550

明日香のデッキつえく。私、再戦したら勝てるかな？自信ないわよあんま

「抹殺された初手は沼地、プチエンジェル、儀式、ブレスル、クリスティア。とゆう所ですかね？」

「さっきバリアで手札1枚捨ててなかった？てか沼地の存在感……」

「さあ、バトルよ！2体のサイバー・エンジェルでダイレクトアタック!!」

「させるものか！罨カード《攻撃の無敵化》を発動！第2の効果を選択、このターンの戦闘ダメージを0にする!!」

惜つしい！曼陀羅とカラクリ蔵をブラフにしたわけじゃなかったのね、

「ついでに……ターンエンドよー！」

「いちいち目障りな天使達だ・・・染めてやる」

「?!」

「今度こそ漆黒の闇へ！染め上げてやる!!わたしのターン!!!」

なんか出てる！あのコからドス黒い何かが出てるわ!!?

「《強欲な壺》！2枚ドローツ!!魔法カード発動《ヒーロー・アライヴ》!!」

「ひっ、ヒーロー・アライヴ?!まさかHEROまで扱うとゆうの?!」

「またカオス（中身的な意味で）デッキかよ!!セブンスターズになる最低条件だったりするわけ?!」

「ライフ半分を支払い・・・デッキからレベル4以下のE・HERO、《プリズマー》を特殊召喚!」

『ヤツ!!』

《E・HEROプリズマー》星4／光／戦士／1700／0

プラナ LP2800?1400

「プリズマーは相手にEXデッキの融合モンスターを公開し、デッキからその素材モンスターを墓地に送る事で、墓地に送ったモンスターと同名カードとして扱う!《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》を墓地へ!!」

「あの化け物を融合素材にするモンスター?! いったいどんな……」

「安心しなさい、すぐに見せてやる!《悪夢再び》を発動! 守備0の闇属性、クリムゾン・ノヴァ2体を手札に戻す。そして手札より永続魔法カード《魔王の契約書》を発動!! このカードは1ターンに1度、悪魔族融合モンスターを融合召喚出来る!!」

「イ、イカン……にげろ明日香……」

「フィールドと手札の2体のクリムゾン・ノヴァを融合!……邪悪なる意識よ集え! 世界を光なき絶望へと導くために、今こそ漆黒の闇より降臨せよ!《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ・トリニティ》!!!」

『『『ヴヴヴ……ヴァアアアアッ!!』』』

0 《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ・トリニティ》星12／闇／悪魔／4500／300

「ギヤアアアアアアアツ！出たあああああああ？？」

「キモイです、超キモイですわ!!」

「なんなのよ、これ……」

おいおいおいおい……幻魔よりよっぽどやばくない?!なんか辺りめっちゃ暗いし雷バリバリ鳴ってるもの！もう彼女がラスボスでいーよこれ、倒したらハッピーエンドにしない？

「バトルだ！トリニティよ、全てを消し去れえ!!<ファイナリティ・デットエンド>!!」

「「明日香あああああ!!」」

→何度目だこれ?!そして技名がヤバイ方向に雑だー!!

「消されたりしない！那沙帝弥のモンスター効果発動！儀式モンスターが攻撃対象となつた時、攻撃を無効にする！」

「馬あ鹿めえ！邪神トリニティは相手の効果対象にもならず、破壊もされない！そんな弱小モンスターの効果など無意味だ!!」

「残念だったわね！この効果は自軍のモンスターを対象にとる効果……あなたのモン

スターを対象にとつたわけじゃないわ!!」
「なんだと?!おのれ天使共……」

邪神様のとんでもない儀式が那沙帝弥から発せられた光で防がれる。だけど守られたのはモンスターだけで……

明日香 LP1550?775

「あぐっ……今度は何?!」

「ふっ、フッフッフツ。邪神の攻めには生け贄が伴う。それは、相手の命……攻撃する度に、相手のライフを半分にする。今度こそ終わりね?」

「は、半分にするだけじゃ決着はつけないわよ……那沙帝弥の効果に回数制限はない、何度でも受けとめてあげるわ!」

「そうでもないんだよ、トリニティが存在する限り、こちらが受けた効果ダメージはアンタも受ける。そして《魔神王の契約書》のリスク、スタンバイフェイズ事に1000のダメージを与える。つまり……」

「次アイツにターンが回れば、明日香にも1000ダメージ?!」

「そんな、絶対絶命ですわ!!」

「ターンエンド、さあ……最後にどうあがいてくれるのかな?!アハハハハハッ!!」

キャラぶれつぶれじゃないですかセラ神ちゃん……邪神に意識侵食されてんのかな、凄く黒いオーラ出てるし。

「師匠も侵食されそうですよねあれ、踏まれっぱなしですし……」

「ゴフツ、可能性があるとすればこのターンで契約書かトリニティを破壊するしかない……」↑足蹴にされながら

「……つまり、その邪神を倒してしまえば問題ないわけね?」

「やれるものなら?けど、ドラゴアセンションの時のようにはいかない。トリニティを倒したければ」

「正面突破しかない、明日香……」

「明日香様……」

「アスカア……」

「わたしの、ターン!!……《ブレード・スケーター》を、召喚!」

『とおっ!』

《ブレード・スケーター》星4／地／戦士／1400／1500

「ふ、ふふふふふ．．．アハハハハハハハハッ!!なんだそれは!大そうな口を訊いたわりにはたかだか攻撃力1400の弱小モンスターではないかつ!!」

「そんな．．．」

「これじゃ打つ手がない、ここまでか」

「まだよ!墓地の魔法カード《シャツフル・リボン》の効果発動!!墓地のこのカードを除外し、フィールドの《ブレード・スケーター》をデッキに戻して一枚ドロウする!!」

「そんなのあつたんだ?!」

「恐らく抹殺で切られたカードのラスト1枚、バリアのコストはクリステイアだったのでしょう。兎も角希望は繋がりましたわ」

「まだ足掻く気? 本当諦めが悪い．．．」

「(お願い、ブレード・スケーター……わたしに力を貸して!) ドローオオ!!」

引いたカードは? ……

「……これならっ! 手札より装備魔法《月鏡の盾》を茶吉尼に装備する!!」

「月鏡の盾?!」

「そっか、それなら!」

「このカードを装備したモンスターがバトルする場合、戦闘する相手モンスターの攻撃力を常に1000上回った数値となる!!」

「そ、そんな……」

「バトルよ! 《サイバー・エンジェルー茶吉尼》で邪神トリニティを攻撃! 《ダンシン グ・エツジ》!!」

茶吉尼が勢いよく月鏡の盾を、トリニティに突きたてる。をいつ、そうやって使うん

「わたしの負け、か」

「プラナ……」

「悔しいな。あんな思いしてまで闇のデュエリストになったのに。兄さんを、取り戻したかっただけなのに……」

彼女の体が黒い粒子となっていく、やっぱり闇のデュエルの敗者の運命は変わらないんだ……

「……さよなら、天上院 明日香さん」

続く

31羽 男性の2人に1人が年下好き、言っ
てしまえば
ロリ○ンらしい。

明日香がセブンスターズを撃退した数日後、学園朝礼にて・・・

「エー。今日は皆さんに、転校生を紹介するのデス！」

「こんな時期に転校生？もう学期末までそんなにないっすよねえ」

「珍しいなあ、レイみたいに冬休み明けに来るならまだしも・・・なあジュンコ？」

「えっ！うんそくね?!」

「なんだか反応がおかしいんだな」

「それでは入ってくるゝノネ!!」

それは可憐な少女だった。はたから見ればとても高校生には見えない、まるで小学生のようだ。しかし、どこか神秘的な気品を持った・・・

「皆さん、始めまして」

見たものを困惑させる・・・

「藍神セラです。苗字には馴染みが薄いので・・・気楽に、セラって呼んで下さい」

・・・うん、セラちゃんだった。知ってた。

「「「「「うおおおおおおつ?!」「「「「「?男子生徒の皆さん

「身長いくつ本当に高校生?!」

「140はありませんがこれでも16歳です(嘘)！」

「趣味と特技は?!」

「読書とコスプレ!」
兄の着せ替え

「使用デツキは?!」

「機械と悪魔族が主のビートダウン!」

「罵って下さい」

「この○○野郎!!」

「……えっ、最後のなんですか?」

すっごい人気、男共が壇上に群がって質問責めにするの図。

「え、何あのコ可愛い。とても高校生には見えないツスね?」

「またレイみたいに、年齢誤魔化してはいった小学生じゃねーだろーな……」

「そんな小学生、何人もいたら怖いんだな」

皆が好き勝手コメントする中、私ら三人はこう考えていた。

「(言えない、むしろ私達より年上だなんて絶対言えない……)」

『あのこすごいにんき、ぼくもじつたいたかしてにゆうがくしよかな! みためのねんれいならおなじくらいだよ』 ↑光と闇の竜の精霊さん

「やめんか! 貴様がいると話がややこしくなる……どうした女子3人、顔色が悪いぞ?」

「「な、何でもないです」」

はい、なんでもこうなったかつつと……面倒だから回想行くわね。

《クルック》

前回、明日香vsプラナ終了後より。

「さようなら、天上院明日香さん……」

闇のデュエルに敗れたモノの宿命、彼女の体が闇の粒子になって消え……

「……?」

消え……

「あ、あれっ？」

き、消え．．．なかつた。

「．．．」

「．．．てへっ」

「てへっ。じゃないわ！なんで無事なのよさっきまでのシリアス感どうしてくれる!!!」

「そ、そんな事言われても．．．セラ困っちゃう」

「今更かわいこぶんなあ！それで許されると思ったら大間違いじゃー!!」

「まあ拍子抜けではあるけど、誰か犠牲が出たわけでもないしよくないかしら」

明日香心広いわね．．．一歩間違えば命が危なかつたのに、ん？ちよい待ち。

「明日香、妙にピンピンしてない？あんなバケモンの攻撃何度も受けてたわりに」

「そうですねえ。闇のデュエルであれ程のダメージを受けたら、わたくしみたいになら
イフが残ってても機能停止になる事だってありますのに」

「いわれてみると、体がちよつと痺れてるくらいね」

「うくん、もしかすると・・・プラナちゃんとやら」

「ムツ・・・なんですか」

おつ、悶えてた馬鹿が復活した。

「セブンスターズを名乗るからには、何か闇のアイテム的な物を持っているだろう？そ
れが破損して途中から普通のデュエルに切り替わったのではないかな？」

「そんなものしてたの？」

「カミューラがしてた首輪とか、金でウジャド眼入ってる奴の事かな」

「あ・・・わたしのは服でした、最初着てた銀のスーツ」

あれか、プラナのスーツ。どうゆう原理か意味☆不明だったけど闇のアイテムだった
わけね。つか簡単に壊れてたわねあれ、明日香のモンスターが光・天使だからダメージ
実体化して浄化したとか？まるで意味がわからんぞ

「確かにデュエル中に破損してましたわねえ、あの瞬間から闇のデュエルじゃなかったわけですか」

「ほ、本当ですか?! わたし完全にピエロじゃない……」

「えっ? じゃあ邪神召喚の時の周囲の荒れ模様なに?!」

「あのモンスター元々の力の影響じゃないかな? 邪神ってゆうくらいだ、凄まじいエネルギーを秘めていても不思議はないさ」

「なるほど……」

「クツ、ジュンコみたいに十代に看病してもらおう計が……ってちょっと待って兄さん。なんでそんなにセブンスターズ事情に詳しいの?!」

「当然よ、天上院明日香さん。この男は元々……セブンスターズの一員だったのだから」

「ええっ?! それは本当なの兄さん!!」

あゝばれちゃった……。話がややこしくなりそう。

「ああ！何を隠そう・・・セブンスターズのダークネスとは僕の事だ!!」

「あ、じゃあ師匠も倒さないとね。私鍵無いからもえお願ひ」

「了解ですわ。初手深淵餅ガイオミズチ虚無でも決まれば、流石の師匠といえども封殺出来るでしょう」

「ちよつと殺意に満ちあふれ過ぎじゃないかなリスペクト精神のりの字も無いよね?! 正確には元・セブンスターズだから、今は一介のJOINだから落ち着こう、ね?」

「・・・分けがわからないわ、ちゃんと説明して兄さん」

「うーん、話すと長くなるけどいいかな?」

そつからの師匠の説明は本当に長かった。

まず廃寮となった元・特待生寮に呼び出され、闇の世界()に落とされた事。そこではもう一人の僕的な意識、ダークネスに躰の所有権を奪われていた事。数ヶ月前(ウチらが前世の記憶を取り戻した辺り)に自力でダークネスの意識をうち倒し、躰を取り戻した事。その後なんやかんやで頑張つて帰ってきたらデュエルアカデミアにいたので、隙をみて登場したとの事等を話してくれた・・・

「そんな事があつたなんて・・・もしかして、プラナのお兄さんを消したつてゆうのも

！」

「……そのまさかよ、兄さんはある予言によりその人を追っていた。そして発見した時に彼の意識を支配していたのは、ダークネスの意識だったの。兄さんはダークネスとのデュエルに敗れ、魂をカードに封印された」

「まじかよししよー最低だな」

「流石下衆の極み、男には一切の躊躇無しですか」

「だから僕じゃなくて、正確にはダークネスの意志だからね?!」

「……それで兄さんを狙っていたわけね。でも、なんでまたセブンスターズに?」

「彼がセブンスターズとゆう他、手がかりがなかったし……ある時から弱体化したとはいえ、海馬瀬人・武藤遊戯とも互角に戦った兄さんを倒したぐらいなもの。何でもいい、力が欲しかった」

弱体化……OCG効果かな? バトル中の分離、合体を繰り返す! は観てて格好よかったのに何故出来なくしたオンマイ。

「けれどやつの思いで闇のデュエリストになったら、そいつはちゃっかり元の人格に戻ってるわジェット機に乗ってあっちゃこつちやを行き来するわで全然捕まらなかつ

たの！もう人質でもとっておびき出すしかないじゃない!!」

「あ、あはははははは……けどおかしいねえ。その手の封印は術者が倒れたら解除出来たりするもので、ダークネスは僕が倒したはずなんだけど」

「そうなの!？」

「つーか何故知ってる」

「アメリカで似たような現象と関わってねえ、その辺りの話は番外編でそのうちやるから待っててくれ」

「大丈夫なの兄さん、あつちは使いたいカードがOCG化する気配がまるで無いから更新止まってるって数羽前にも言ってたじゃない?」

「なあに、最悪アニメ効果だけでゴリ押すさ。本編(こっち)だってたまに原作効果で出てくるカードもあるだろう?」

「真面目な話中にメタ織り交ぜんなっ?!」

「……この人達、なんの話してるの?」

「お気になさらないで結構ですわ、関係ない人物の都合の話です」

「兎も角だ。君のお兄さんを僕が奪ってしまった事は事実だろう……意識が無いとはいえ申し訳ない事をした。この贖罪は必ずする。だから、少し待っていて欲しい」

「き、急に真面目な顔になった?！」

「ごめんね、緩急の激しい人でごめんね?」

「お兄さんを助ける手段の一つ、試してみたい事がある。だから……明日香や彼女達に、皆に手を出すのだけは辞めて欲しい、このとおりだ。」

自分のせいじゃない、とも言える事だと思つたが……彼は頭を下げ、誠心誠意彼女に頼みこんだ。

「……わかりました、少しの間ですが信じてみましょう。だけど、一つ条件があります」

「条件?……わかつた、僕に出来る事なら可能な限り聞き入れよう」

「わたしを……この学園の生徒にして下さい」

「「……えっ?」」

《くゝルルツ》

そんなわけで今に至る。師匠が社長に掛け合って、二つ返事で「ふうん、K A M A W A N!」と承諾を得たらしい……。偉い人とのコネって素敵ね。しっかし、なんでまたアカデミアに入りたがったんだろ？

おや、セラちゃんがなにやらこちらを見て、手を振り出した。

「お〜い！明日香お姉ちゃん!!」

「二あ、明日香お姉ちゃん?!」

周りの反応を他所に彼女は壇上を降り、ウチらの方にやって来たと思っただら明日香に抱きついてきた。

「ちよつと?!どうゆうつもり……」

「ふふふふつ、また逢えたねお姉ちゃん達……。これからよろしくねっ」

なんつー屈託のない笑顔、一言言わせておくれ……。かわいい。妹に欲しい。っ

て向こうが年上じゃ危ねえ（憶測）!?! 騙されるとこだったわ……

「何？明日香さん達の知り合い?!」

「ブルー女子三強の妹分だ?!」

「あの空間、凄く混ざりたい。」

「なんですかこの反響は……」

「つーかどうゆうつもりよお姉ちゃんだなんて、仮にも敵の妹&妹分達でしょ?うちら……」

あまりにあざと……もとい怪しい態度ゆえ、周りに聴かれないようにこそつと訪ねてみる。

「……あなた達はわたしの事情を知っているし、仲良くしていた方が都合がいいと思っただけですよ。そこそこ学園内じゃ有名なようだし」

「そ、そう……」

本心が読めないけど、敵意が無いならまあいいか……いいの？

「はいはい皆さ〜ん、気持ちは何となくわかります〜が、授業に入ります〜ノ!!」

《ク〜ルルツ》

そんなわけで放課後である。今日はセラちゃん先輩に興味しんしんで群がってくる奴らが多く、また彼女は私ら3人のうちの誰かを大概盾に使うので妙に疲れた……

「いや〜、日本の高校って楽しいですね〜」

「うちらは無駄に気い使わされて」

「そうね、疲れちゃったわ……まだついてくるの?」

「だって今から噂のレッド寮に行くんでしょ? あんな豪華なブルー女子寮に帰らずに、うら若き乙女達が純情の為に通う古びた安寧の地……ちゃんとチェックしておかないとー!」

「言い回しがなんだかおばさんくさいですわね……」

「何か言いましたか？も　も　え　姉　様」

「い、いえ何も……」

モモが押されてる?! ヤバイ、此奴……出来るっ！

「おいしい、ジュンコ〜！明日香〜!!」

「浜口！ちよつとこちらへ来い!!」

「あら、十代様達がお揃いで寮の前でお待ちですわ」

「ふつ、明日香あ……今日は私の名前が先だったわね。とりま一勝つと」

「くつ、明日こそは……」

「……なんの勝負？」

101 《フツ、あの頃からお前は面倒くさい奴だった》

「鍵の管理イ?!」

「そうなのよ。なんかタヌキ校長が心配で心配で夜も眠れないってゆうから、一度警備プロの方に相談しようってなったらしく・・・もう呼んじやったのよね、どうぞ入って〜」

と、学校側の事情説明をしたのはカミューラだ。大徳寺先生が先日いきなり行方不明になってそのままレッド寮長（代理）になってしまった馴染み過ぎ。そして口調砕け過ぎ。

そして入ってきたのはなんだか探偵チックな格好をした人物。

「初めまして警部のマグレです」

「ブツ?!」

つい、噴き出してしまった・・・いやあ、原作知ってても笑うだろこれ。明らかに右目怪しいじゃん、日本の警察の格好じゃないじゃんシャーロキアンじゃないその格好! しかも偽名はマグレ・・・なんでそこは名探偵コロン風チョイスなんじゃない!!

「ジュンコさん言いたい事はものすごくわかりますが一旦……一旦落ちつきましよう……ププツ」

「アンタが一番笑ってんじゃん!？」

その後、なんやかんやありまして……細かい所は原作をみてね（投げやり）
何故か万丈目君の部屋に関係者が集められた。

それっぽいBGM<テテテテツツツツ、テテツテテツテテツテテテ（以下繰り返し）

「嚴重に保管されたハズの七精門の鍵、身内しか居ないハズの目撃者！」

「だがそれが翌日……突然消え去ってしまった！」

「この謎は……必ず解いてみせる！名探偵・万丈目サンダーの名にかけて!!」

BGM終わりく☆テレレレン……

モ「万丈目サンダーの事件簿」

万「七精門の鍵、紛失事件！File 1!!」

ニツク	クリフ	ミーネ	マグレ警部	カミユーラ	大徳寺教諭	三沢大地	藍神セラ	丸藤亮	丸藤翔	天上院吹雪	天上院明日香	枕田ジュンコ	遊城十代	浜口ももえ	万丈目準
○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○
												○		○	

ゴーグ ○

ドオン☆

「「「「」」」」」」」」」」」」

「ドオン☆．．．じゃねーよドオン☆じゃ!!無理矢理某探偵もんっぼく進めんな!!つか上の○×とかの表はなんじゃー!!もしかして生存者表記か?冒頭の解説明けに毎週出てきたあれなん?!わかりづらいわ横文字の小説でやんなっ!!っーか行方不明の先生とフリーダムな師匠は兎も角、三沢君死亡扱いかよかわいそう過ぎるでしょ!!!」

「でたあ!」

「ジュンコさんのツツコミ三連コンボだ!!」

「吹雪は死亡扱いでもいいのか．．．」

「い、いつか金〇一ネタはぶっこんでくる思っていたがこれ程の威力とは．．．あと三連コンボってなんじゃい。」

「いつも彼女達はこんな感じなの？」

「最近シリアス気味だったけど、正直コレがうちのこの小説のデフォルトなんだなあ」

おいこらそのコアア、無垢（笑）な転校生に悪印象な事教えないの。

「ぜえ・・・ぜえ・・・ごめん十代。み、水・・・」

「大丈夫かジュンコ。これ序章だからな、まだまだ攻めてくるぞあいつら」

十代がコップで水を組んでい背中を支えて飲ませてくれた。こんな状況じゃなかったらときめく場面なのに・・・いや、なんでもないです。

「ついに十代が心配するレベルに?!うらやm」

「けれど決して助けはしないのね、流石だわ十代・・・」

この二人は十代の前だとやっぱこんなんだし・・・

「いやあ、あれはジュンコじゃないと無理だろ・・・」

「それどうゆうい m、ゲホゲホゲホッ」

「それは本当なのは○めちゃん！」

「ああ。わかつたぜみ○き……謎は、全て解けた!!」

進んどるー?!私が休憩している間に茶番が進行してんだけどいい加減にしろっ?!

「早速で悪いが……七精門の鍵を奪った犯人は、この中にいるっ!!」

デン☆テン

「本当に早速過ぎるしそもそもさつきからBGMとかSEとかどこで調達してるのよっ!!」

「さつきからもえがPDAからだしてるわよ……」

「犯人は……お前とお前とお前とお前とお前だあ!!」

「「「?!」」」

そう言つてサンダーが指を突きつけたのは女医のミーネ、管理人のゴーク、警備員のクリフ、隣人のチックの4人だ。つか4人犯人いたらお前だつ！つて言うのも面倒くさそうね

「なつ、なにを証拠にそんな事を言うのかね！」

「俺は皆がここにくるまでに、全ての現場を一度検証しておいた……まず、第1の現場。天上院君の部屋に落ちていたのはこれだ」

「これは……付け爪ね○じめちゃん」

モモが某探偵の孫の幼なじみ兼助手の役を演じてる事に、ついに誰も触れなくなつた。

「そうだ○ゆき、こんなものをつけている人物は学園内に数える程しかいない……あいにくと鮎川先生は事件当時アリバイがあつた、何より！貴様は天上院君が鍵を隠している現場を目撃している上に！今まさに片方の指にしか付け爪をしていない！よつて女医のミーネ、第1の犯行は貴様が犯人だつ！！」

「そ、そんなバカな……」

「なんか真面目に推理しだして逆に怖いんですけど?!」

「そして次!カイザーが鍵を預けた貸し金庫の前には、泥にまみれた無数の足跡があった。土足厳禁の館内でこんな目立つ事をしたとわけは!普段使わない靴で足型をわざと特定させ、自分はい違いますね、とシラを切る為の誘導!」

「え、えっ?」

そこまで考えてなかったって顔してつけど警備員さん。明らかにただのうっかりじゃないですか

「だがツメが甘かったな……貴様のズボンの裾には、ほんの僅かだが泥が付着しているはず」

「失礼します」

尽かさず彼のズボンの裾を確認するももえ

「あつた!あつたわはじ〇ちゃん!」

「やはりな……よって警備員のクリフ！第2の犯行の犯人は貴様だ!!」

「あ、ああ……」

「ご、ごり押し推理なんだな」

「そして次イ！十代達の部屋に空いていた穴は、となりの部屋側から開けられた痕跡が残っていた……案の定、貴様の部屋からは大量の工具が見つかったよ、隣人のチツク!!」

「ちや、ちゃんとベッドの下に隠したのに……」

「エロ本ね」

「エロ本か」

「エロ本すね」

「エロ本なんだなあ」

おい明日香と男子陣、その謎シンクロは何だ。

「更に俺の部屋の扉を強引にこじ開け、流し台をわざわざ破壊してまで鍵を盗んだ犯人……正直デカイ体が邪魔で、壊さないと鍵がとれなかったんだろう！管理人のゴーグ!!」

「うぐう……」

「……もはや当てつけだな」

「先輩、もつと言ったげて」

「そしてマグレ警部！あなたがこの犯行グループの黒幕だ」

「何イ!？」

「あなたは鍵を保管すべきとわざと警告し、その現場を部下に目撃させた！そこで彼らを怪しいと自らが指摘する事で、俺達に彼等を弁明させるミスリードを引いたんだ!!」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

「さあ、何か弁明はあるかいマグレ警部……いや、窃盗グループの親玉さんよ!!」

「キヤーツ！決まっていますわ、バッチグーですわはじめ○やん!!」

「当然だ！この俺を誰だと思ってる……そして伏せ字がずれてきてるぞ」

モモは興奮し過ぎ、あのコ某少年の事件簿大好きで全刊所持してたからな．．．あの意味夢のシチュエーションなのだろう、ほつとこ。

どうでもいいけど私のオススメは○○湖殺人事件、報われない恋が動機つてのとい○きさんの初登場つて事で好き。

「ふふふふふ．．．流石は名探偵を名乗るだけはある」

「どこがよ?！」

「一件めちやくちやな推理だが、結論から言えば全て大当たり。そう、我らは．．．とう！」

かけ声と共に彼等は変装衣装（?）を脱ぎ去り元の姿へと戻る。そして意味不明な決めポーズをとったと思えば．．．

「「「黒蠍盗掘団!!」」」

「黒蠍．．．」

「盗掘団?」

「そう！我々は数年前、三幻魔のカードを奪い取る依頼をうけ密かに！仲間をこの島に

送りこんでいたのだ！」

「『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』」

辞めろハモンなじわじわ来る・・・

「『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』」

「こ、心読まれたっ?!」

「なんか面白れえなあ、こいつら」

「『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』」

「けれど、数年前から計画してた割には肝心の仕事が雑よね」

「『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』」

「しかも吹雪が居ないから、結局鍵は全て奪えず終いだしな・・・」

「『『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』』」

「何遍やるんじやいい加減にせんかーっ?!」

「「「それが、黒蠍盗掘団!!」」」」

は、話がまるで進まない。もう私疲れちゃったよモモエモン……

「それでえ?最後の鍵の持ち主、天上院吹雪はどこにいる!!」

「それが昨日から連絡がつかなくてな」

「すぐフラッと居なくなんのよねいつも……猫かよ」

「けど彼を呼び出す手段ならあるわ……このわたしとデュエルして勝てばね!」

「なんと、デュエルとな!」

「そうなの?!」

「どんな原理よ!!」

なんでセラ神先輩にかつたら師匠が出てくんのよ明日香ならまだしも……

「フツ、良いだろう小娘。貴様を倒して最後の鍵の所有者を引き釣り出してくれるっ!」

《クルック》

そんなわけでデュエルの為にレッド寮外にやってきたわけですが……

←女子4人井戸端会議

「ちよつと、どうゆうつもりなの？あんな嘘ついて」

「アンタに勝ったってあんにやろが出て来るわけでもないのに」

「まあそうなんです、皆さんに手っ取り早く信頼してもらうには、デュエルの実力を見せつつ鍵を守る事に協力する方が得策かな、と」

「これで負けたら面倒が数個増えそうなんです……大丈夫なんですか？」

「あんなネタ集団に負けるようにみえますか？負けたら恥ずかし過ぎて自殺ものですよ……では、行ってきますね」

うーん、大丈夫だとは思うけどなんか不安。もし負けたりしたら笑って迎えてあげよう。

後半へく続く。

象 3 2羽 うちのメインメンバーを客観的にみた場合の印象

皆様はじめまして。わたし、藍神セラと申します。

といつても藍神とゆうのは昔、わたしの兄がある事情で使っていた偽名でして、日本の人の名字として違和感ないかなと思いきそのまま流用しているだけですがね。よければセラとお呼び下さい。本当の年齢?・・・秘密です(につこり)

さてはて、兄を救う唯一の手掛かりとして天上院吹雪を追い、なんだかんだでデュエルアカデミアに通う事になったわたしですが・・・唐突に謎のコント集団に奪われた七精門の鍵を取り戻すためにデュエルをする事になりました。もしかしてあのウィジャド眼の露骨に怪しい眼帯の方、セブンスターズだったりしませんかね・・・かくゆうわたしも元はそうでした、メンバー顔見せの時に似たようなのをチラっと見た気がするんですよ?あ、カミューラさんが普通に居たのは驚きました。ちゃっかり馴染んでるし。わたしはプラナの格好でしたので向こうは気付かないで当然ですけれど・・・兎も角、わたしはセブンスターズの目的に正直興味などさらさら無いので、生

徒の皆さんの信用を勝ち取るためにも、勝たせて頂きますよ？えつと……黒蠍盗掘団の方々。

「なあなあジュンコ、お前達あのコと以前から知り合いつぽかったけど……デュエル強いのか？」

そんな事を言い出したのは遊城十代君。あまり詳しい事は知りませんが、天上院明日香、枕田ジュンコ、そしてカミューラさんの思い人なんだとか……。確かにかわいい顔立ちはしてますが何故彼がそこまでモテるかは不明です。たまに虚空に話に話かけているって噂もあります。

「うーん、明日香と……。同じくらい？」

「おおつ、じゃあかなり強いんだな！今から楽しみだぜ!!」

そんな彼の問答に答えてあげてるのが枕田ジュンコさん。天上院吹雪の関係者の一人（弟子？）ってことで名前は知っていました。昨日今日観察した感じでは、一見口は凄く悪くて気も強いけど……。それ以上に周りに気を使っている印象をうけました。本

当は優しいコなのではないでしょうか。さつき虚空にツツコミを入れていました。

「わたし一応勝ったんだけど．．．正直ギリギリも良いとこだったわね」

かの天上院吹雪の妹、明日香さん。高校生にしては異常な容姿とスタイル、その性格も相まって学園のアイドルみたいな位置付けに居ると聞いていましたが．．．遊代十代君の話題では態度が一変。スイッチが違うだけでやはりかの者とは兄妹のようです。

「フン、どれ程の実力があるかはしらんが．．．見事奴等の正体を暴いたこの名探偵・万丈目サンダーを差し置いてデュエルをするからには勝利以外許さん！」

「そうですわ！せっかく名探偵で盛り上がっていたところでしたのに．．．」
「盛り上がってたのはアンタらだけだったの！」

万丈目準君と浜口ももえさん。相思相愛らしい。でも指摘されると万丈目君が烈火の如く怒るので一部では暗黙の了解になってるとか。そしてよく虚空に裏拳を入れてるとかなんとか。

ももえさんは、話した印象わたしと相容れないかもしれない、けどなにか通じるもの

があるかもしれない。

彼女はさつき虚空に指示を出してた、なんなんでしょうね？

「おい！なに余所見をしている早く始めるぞ!!」

「あ、ごめんなさい何時でもいいですよ」

「デュエ・・・」

「デュエルツツツ!!!」

「おおっ、びつくりしたあゝ」

「め、めちやくちや掛声気合い入ってるんだな」

「あの体からよくあんな声出るわね」

お頭 LP4000

セラ LP4000

「我々・・・もとい私のターン、モンスターを裏側守備でセット。カードを3枚伏せて終了する」

お頭 H6?2

「まずは様子見か……初ターンならば普通の一手だな」

相手の状況を語るのは丸藤亮さん、このデュエルアカデミア最強と呼ばれる実力者でカイザーなどとゆう大業なあだ名がつけられています。天上院吹雪……なんだか面倒になってきた、ジュンコさんみたいに馬鹿でいいかな。馬鹿の親友だとか。

「ターン頂きます、ドローツ！」

いいカードを引きました、速効で終わらせませますよ座長？さん！

「魔法カード《ハリケーン》を発動！全ての魔法・罠カードを手札に戻して下さい!!」
「フツ、そうはいかん。カウンター罠《魔宮の賄賂の賄賂》！やれ、ニック!!」

「はいお頭あ！」

後ろに待機していた団員の1人、ニックがこちらに走ってきた。な、なんなんですよ……

「お嬢さん！どうかこれで勘弁してやって下さい!!」

「は、はあ……」

そう言つて手渡してきたのは一枚のカードだ、これを受けとれつてことでしょうか……あれ、わたしのデッキのカードですねこれ。何時盗られたんだろう

「受け取つたな！このカードは相手が発動した魔法・罠を無効にし、一枚ドロウさせるのだ。よつて《ハリケーン》は無効！」

「つてただの《魔宮の賄賂》じゃねーか！いちいち無駄な描写を挟みませんなーっ!!」

「よく見たらイラストもそのままですわね……」

同じ事思つたけど気にせず先進めましょう、ワンショットキルする気でしたが慎重にやろうかな。

「手札から《ゴールド・ガジェット》を召喚しますっ！」

『ウィーンツ!!』

《ゴールド・ガジェット》☆4 / 光 / 機械 / 1700 / 800

「ガジェットモンスターね、機械族使いかしらあのコ」

カミューラさん全く気付かない模様、デュエル見せたこともないから当然ですが：

「このモンスターの召喚時、手札からレベル4機械族を展開出来ます！」

「ならば効果発動時に《増殖するG》を捨てさせて貰おう。特殊召喚する度に私は1枚カードを引く」

「ひっ」

「げっ」

「うえっ」

「あらあら……」

G……

伏せもまだまだあるし無理して勝ちに行く必要が無くなりましたね、とりあえず除去

されても影響の少ないこのコでっ！

「来て、《流星方界機デューザ》ツ!!」

『ドンツ☆』

《流星方界機デューザ》☆4／光／機械／1600／1600

「Gの効果だ、一枚ドロウさせて貰うぞ」

「構いません、デューザの特殊能力発動！デッキから方界カード《方界合神》を墓地へ送ります」

「[方界] モンスター・・・聞いたことは無いな」

「なんか変な雰囲気だけど、あれはあれでカッケー!」

「Gの効果中だし明日香にやってきたアレはないわね、ちよつと安心かも」

「バトル行きます！ガジェットでセットモンスターを攻撃、《ゴールド・ラッシュ》!!」

『ダダダダダダッ!』

「なにそのジヨ●ヨっばい動き?!」

「私のモンスターは《メタモルポット》!リバース効果発動!」

「そんなっ、メタモルポット?!」

「フフフフ。互いのプレイヤーは手札を全て捨て、5枚になるようドローするのだ!!」

「これは不意を突かれた・・・手札誘発によるドローをしてきたから完全にメタモルポットは無いものだと思ってました。」

「そして私が捨てた1枚は《シャドール・ビースト》。更に1枚ドロー!!」

「あれは「シャドール」?!あいつらも使ってくるのか!!」

「実はシャドール系列はセブンスターズ全員が所持しているのよね、なんか闇のデュエリストっぽいからって理由で。闇の力で量産出来たらしいわ」

「えっ、じゃああいつらもセブンスターズ?!セラさんが危ないツス!!」

「てか雑な理由でパワーカード量産する敵陣営ね、おい・・・」

「つーか知ってたなら教えてくれよ・・・」

「……ごめんなさい、シャドールみるまで忘れてたわ」

カミューラさんも自分の目的以外、どうでもいい感じでしたからね……そしてわたしも持つてるんですよ「シャドール」。念の為抜いておいて正解でした

「アドバンテージはそちらがとつてますがフィールドはがら空きです。デューザのダイレクトアタック、くメテオ・ブロウ>!!」

「ぐはーっ?!」

お頭 LP4000?2400

「「お頭あ!」」

「おのれ小娘!よくもお頭をつ」

通るんだ……シンクロしてたら勝ってたなあ。あ、しても大丈夫なのかな?クリムゾン・ノヴァは居ないし諦めますか

「カードを二枚セットしてターンを譲ります」

セラ H6?:4?:5?:3

《ゴールド・ガジェット》(攻)

《流星方界機デューザ》(攻)

セットカード

セットカード

「私のターンッ！ 《強欲な壺》！ デッキからカードを二枚ドロ。フフン。私は私自身、

《首領 ザルグ》を召喚!!」

「「えっ?!」」

「あいつ、まさか・・・」

「ここは折角なので、私が自らフィールドに出よう」

自分自身のカード? あの方モンスターなんですか? ちょっとよくわからないんですけど出てきたなら使いますか。

「・・・罨発動、《落とし穴》」

「はっ?」

お頭さんがフィールドの真ん中に立ったタイミングで使ってみました。さてどうなるんでしょうか

「な、なんととおおおっ!!」

「!!お頭あああっ!!」

見事にドンピシャリ、お頭は穴の底へと落ちて逝きました。

「[[[[[.....]]]]」

「.....よしっ。」

「よしっ、じゃないわこの外道！」

「対戦相手を直接罠にかけるなんて、恥を知れえ!!」

「鬼畜、鬼畜だよあの嬢ちゃん!!」

「おーに！おーに！おーに！おーに！おーに！」

「.....無垢なる笑顔はいっ?」

「「なんでもありませんっ!!」」

良かった、わかってくれた様です。

「やっぱ、あのコ怖いわ・・・」?うちの主人公

「え、これで勝ち?呆気ね〜」

「流石に無いと思うが。」

「お、おのれえ・・・これで勝ったと思うなよ・・・とお!!」

暑苦しい掛声と共に、お頭が落とし穴の中から這い上がって来やがりました。プレイヤ―破壊したら勝ちじゃないんですか残念。

「おお、帰ってきた・・・」

「でも足元フラフラっすね」

「ぐふっ・・・私は破壊された瞬間に罠カード《リビングゲットの呼び声》を発動した

のだ。穴の底は暗くて痛くて寂しかったぞ……」
 「そのまま永眠して下されば手間がはぶけたんだけどな？」

「否！お頭たるもの団員達を置いて先立つわけにはつかないのだあ!!魔法カード発動
 《黒蠍蠍団招集》!!手札の黒蠍を呼び出す、お勤めだ、であえ野郎共!!」

「『応っ!』」

「黒蠍団の紅一点《黒蠍―棘のミーネ》!!」

「黒蠍一の力持ち、《黒蠍―強力のゴーク》!!」

「お宝頂きやあととはとんずらっ!《黒蠍―逃げ足のチック》!!」

「どんなトラップでも朝飯前、《黒蠍―毘外しのクリフ》!!」

「集結っ!」

「『我ら、黒蠍盗掘団!!』」へドオオオオン……」

《首領・ザルグ》星4／闇／戦士／1400／1500

《黒蠍―棘のミーネ》星4／闇／戦士／1000／1800

《黒蠍―強力のゴーク》星5／闇／戦士／1800／1500

《黒蠍―逃げ足のチック》星3／闇／戦士／1000／1000

《黒蠍―罨外しのクリフ》星3／闇／戦士／1200／1000

後ろでスタンバイしていた団員達が、意気揚々と参上してポーズまで決めて来ました……正直うざい。

「そして罨発動《必殺！黒蠍コンビネーション》!!」

「うわぁ……」

「使ってる方初めて見ましたわ……」

「このカード効果は、我ら五人が揃っている時ダイレクトアタックが出来るのだ!!」

「嘘っ?!」

「喰らえっ！黒蠍コンビネーション!!」

「〈元気鎚〉!!」

「〈トランプナイフ〉!!」

「〈強力ハンマー〉ツ!!」

「〈棘の鞭〉!!」

「〈ダブルリボルバー〉!!」

「きやあああああつ?!・・・って、あれっ?」

セラLP4000?2000

「この効果で与える戦闘ダメージは全て400になる」

「よ・・・よわっ」

「セラちゃん先輩、素が見えてきてます」

「なあ、なんで先輩呼びなんだ?同級生だろ」

で、ですが発動条件の割にはたかだか2000のダメージだけって・・・わたしじゃなくてもそう思いますよね?

「それはどうかな?貴様のフィールドを視てみるが良い!!」

「・・・あ、あれ?ガジェットと伏せカードが無い!!」

気づけばわたしのフィールドはデューザ以外すっかり空きに、どうゆう事?

「ようやく気づいたか！我らの技を受けた者はフィールドもデツキもボロボロになるのだ！文字数がかかるので雑に説明するが、ゴークの力でガジェットをデツキの一番上へ戻し、クリフの力で罠カードを破壊、チックの力でデツキの一番上のカードを1番下に追いやり、私の力で1枚手札を捨てさせる。そしてミーネの力でデツキから2枚目の《黒蠍団招集》を手札に加える！」

「おお、必殺と名乗るだけあるぜ」

「地味スキルの連打ね、中々やらしい戦術……」

よりによってハンデスされたのは《死者蘇生》、破壊されたセットカードは《リビングデッドの呼び声》。彼等は悪運も相当なようだ。

「思っていたより被害が出ましたが……所詮あなた方は下級モンスターが集まり。次のターンで沈めてあげますよ」

「うわ、フラグくさい……」

「ふふふ、確かに我らの個々の能力は貧弱。だがその驕りが、貴様を敗北へと導くのだ！

メインフェイズ2に入り、私は墓地の罠カード《妖怪のいたずら》を発動する。除外する事でゴークのレベルを一つ下げ4にするのだ」

墓地から女性の妖怪が出てきてゴークさんと戯れる、少し嬉しそうだ。メタモルポットで墓地へ送られたカードですな

「また地味だな・・・」

「地味効果好きなんすねきつと」

「そして魔法カード《スター・チェンジャー》をクリフに装備魔法《シンクロ・ヒーロー》ニツクに発動！それぞれレベルが1上がり、ニツクは攻撃力が500アップする」

《罠外しのクリフ》星3?4

《逃げ足のチツク》星3?4 / 攻1000?1500

「さつきからなんなんですか？ちまちまちまちまと焦れたい・・・」

「(あの辺、モモと似てるなあ・・・)」

「げ、解せませんわ」

「まだ気付かないようだなお嬢ちゃん．．．これで準備は整った、行くぞ野郎共！」

「「「応っ!!」」」

「私は、レベル4となった我々

「「「黒蠍盗掘団!」」」

自身でオーバーレイ!!」

「えっ!？」

「まさか!!」

彼らが5人が光の粒子となって重なり合って行く．．．ここ、このエフェクトは!

『エクシーズ召喚!』』

『おののくが良い』』

『我らが結束の力の象徴』』

『《No. 86》!!』』

『『『『『黒蠍・チャンピオン
K — C ロンゴミアント』!!!』』』』』

(※違います。)

「ごっ、5体素材のエクシーズ召喚っ?!」

「あそこまでして普通出す?! 凄っ!!」

『フハハハハ！驚いたかオーディエンスの諸君！』

『これがワタシ達黒蠍盗掘団、結束の力の象徴!!』

『ロンゴミアントの効果は素材になったモンスターの数で効果が決定する』

『効果があまりに多い為、合体前にゴーグが後ろに看板建ててそれに書いておいた。そつちをよんでくれ』

『……』

そうやってロンゴミアントが横にずれると、本当に木の看板が建ててあつてそこに文字がびっしり書きなぐつてありました。……

「5体合体か凄そうだな、どれどれ？」

ヒロイック・チャンピオン

《H — C ロンゴミアント》

エクシーズ・効果モンスター

ランク4／闇属性／戦士族／攻1500?3000／守1500?3000

戦士族レベル4モンスター×2体以上（最大5体まで）

(1)：相手エンドフェイズ毎に発動する。

このカードのX素材を1つ取り除く。

(2)：このカードが持っているX素材の数によって、

このカードは以下の効果を得る。

- 1つ以上：このカードは戦闘では破壊されない。
- 2つ以上：このカードの攻撃力・守備力は1500アップする。
- 3つ以上：このカードはこのカード以外の効果を受けない。
- 4つ以上：相手はモンスターを召喚・特殊召喚できない。
- 5つ以上：1ターンに1度、相手フィールドのカードを全て破壊できる。

「え、強っ?!」

「結構無茶苦茶な事書いてあるツス!!」

『そんなわけでゆくぞ！嬢ちゃんのカードを全て破壊する、『』必殺！黒蠍☆デストロ

イアー!!!』』』

「技名がダサすぎるわーっ!!」

『▽※√∂?!』

「そんな、わたしのデューザが……」

しかもテキストに従うなら《方界合神》の効果も発動出来ない! どうしよう……

『『『『』』』』我らはこれで、ターンエンド! 『『『『』』』』

お頭(ザルグ) H7?8?1

《H—C ロンゴミアント》(攻) OUR 5

《リビングデッドの呼び声》

「つーかあんなモンスターいんなら、わざわざ必殺(笑)とかせずにハナからX召喚して全体除去して殴った方がよかつたんじゃない?」

「ダメージも上ですしね、何故なんでしょう、伏せ警戒とか?」

『『『『それが、黒蠍盗掘団!!』』』』』

「・・・頭が痛くなってきたわ」

3馬鹿、もとい3お姉さんの分析を定番の決め台詞で濁される。

「ターン頂きます、ドロロー・・・モンスターをセットしてターンエンド」

セラ LP2000 H2?3?2

「あれっ? ロングゴミアントの素材が4つ以上ある時は、召喚・特殊召喚はできないんじゃない」

「ああ、だがあのテキストには「通常召喚」出来ない、とは書いていない。モンスターのセットは可能なのさ」

「《スケープ・ゴート》とかの制約と一緒にね、結構知られてるテキストの穴だけど・・・たま〜に知らないコもいるから、アンタも機会があつたら教えてあげなさい」

眼鏡の子・・・確か、丸藤翔君に、間違えやすいルールを説明するイケメ・・・もとい丸藤亮さんとジュンコさん。

あの兄弟、2歳以上離れてるように見えますね・・・あの身長差、わたしと兄をみ

ているようでちょっとほっこりします。

『『『『何イ! そうなのか?!』』』』』

「つてアンタらが知らなかったんかい!!」

「使う側が知らなかったってどうなの……」

『ううむ、実は実戦で合体したのは今回が初だな……。決まれば勝ち確定だと思っただけだが、そうでもなかったか。我らが集合体・ロンゴミアントは相手エンドフェイズにOURを一つ失うが……。このままでは、デュエルを行う者がいなくなるため私が出よう』

お頭が5つのOURの中からポン☆と出てきて、元の位置に戻ってディスクを構え直しました。そうゆう仕組みなんだ……

「行くぞ、私のターナー! 《マジック・プランター》を発動、用済みとなった《リビングゲッド》の呼び声》を墓地に送り、2枚ドロ。ふむ、《戦士の生還》を使い私自身を手札に戻

し、再び召喚！そして装備魔法《団結の力》を發動し、私の攻撃力を我々の団結力によりアップする！」

《首領・ザルグ》攻1400?3000

「攻撃力、3000！」

「いかん！このままでは!!」

「バトルだ、行け野郎共!!セットモンスターを破壊し、私がダイレクトアタックを決めれば勝利だ!!」

『『『喰らえ必殺!<黒蠍・スピアーツ>!!』』』

「やっぱ技名ひつでえ!？」

ただ攻撃するだけで喧しい人達ですね、やれやれ……

「わたしのセットモンスターは《方界胤ヴィジャム》、このモンスターは戦闘では破壊されません」

《方界胤ヴィジャム》星1／闇／悪魔／0／0

『『『なんだとお!!』』』』

「くっ、仕留め切れなんだか。だが嬢ちゃんがモンスターの召喚を封じられたままなのは事実! 私はこれでターンエンドだ!!」

お頭 LP2400 HI?2?0

《ロンゴミアント》(攻) OUR4

《首領・ザルグ》(攻)

+ 《団結の力》

「かわいい顔して案外奇妙なモンスター使うのな、レイとは真逆だな」

「レイちゃんの使用カードも本人そっくりだったつすもんね」

「ここにいる皆、結構本人のイメージに近いモンスターのデッキじゃない?」

「失礼な! 万丈目様とおじゃま共がそっくりとでも言いたいのですか!!?」

「誰もそんなこと言っていないんだな?!」

「……そうだな、それだったら浜口は確実に悪魔族使いだ」

「それ……どうゆう意味でしょうか? 詳しく話し合う必要がありますね?」

「ジュンコのデッキは本当にびったりだと思っぜ! 特にハーピィとBFは、強くて格好

よくて可愛くて黒くておっかないからな!!」

「つつつつ! その・・・それ褒めてんのかけなしてんのか、どっちよ!!」

「ぐはっ!! 腹パンっ?!」

ジュンコさんのボディブローが見事に十代君にヒットしました。

あの人達、本当賑やかだなあ・・・ちよつとうらやましいかも。

「ドロー、魔法カード《おろかな副葬》。デッキから魔法カード《方界業》を墓地に送り、これを除外して2枚目の《方界胤ヴィジャム》を手札へ加えます。モンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンドです」

セラ LP2000 H2?3?1

《方界胤ヴィジャム》(守)

セットモンスター

セットカード

「このエンドフェイズにOURを取り除く。ミーネ、出てきておくれ」

4つの光球の中からひとつがロンゴミアントを離れ、ミーネさんに戻りました。何度見てもシユールな光景だなあ。

「召喚行為が大幅に制限されるのもここまでか、次のターンが勝負だな」

「そして私のターン！《天使の施し》で3枚ドロ―し2枚を捨てる。1枚はまた《シャドル・ビースト》だ、1枚ドロ―！《強欲で貪欲な壺》を発動お！デツキの上から10枚を除外し、2枚ドロ―する！ククク、《死者蘇生》を引いたぞ！ミーネ、私にまた力を貸してくれ!!」

「当然さ、お頭!!」

墓地より特殊召喚（控え席から出てきただけ）、死者蘇生の有難みがなくなりますね。

「我らが結ロンゴ束ミアン象ト相手にここまでよく耐えたなお嬢ちゃん、だがこれで終わりだ！魔法カード《黒蠍―愛の悲劇》!!」

「な、なんですかそのふざけたカード名は……」

「甘いな鬼畜娘！これこそがあたしとお頭の愛の結晶!!」

「私とミーネがフィールドにいる時、ミーネを失う代わりに相手モンスターを全て破壊

するのだ!!」

「ねえモモ? あれ使い回して下級ビートする方がコンピネーション(笑)より強いと思うの」

「ええ……ですがそれが」

「『『『黒蠍盗掘団!!』』』」

「……らしいですわ」

外野の会話にまで入ってくるとは、いい加減しつこいですね……しかしヴィジャムがなすすべ無く破壊されたのは事実。

「後は頼んだよ、お頭あああ〜」

「ミーネエ! お前の犠牲は無駄にはせん……バトルだ! ロンゴミアントのダイレクトアタックで……」

「墓地の、《方界合神》の効果発動」

「えっ?」

「方界モンスターがフィールドを離れた時に墓地のこのカードを除外し、デッキからレベル4以下の方界モンスターを条件無視で特殊召喚・・・我が前に姿を現せ《方界帝ヴァルカン・ドラグニー》！」

『・・・プシュウ。』

《方界帝ヴァルカン・ドラグニー》星4／炎／天使／0／0

「おお、もう駄目かと思つたぜ」

「ごつつ・・・と思つたらあの見た目で攻守0つすか」

「しかも天使とは・・・」

「ならばその妙な奴を破壊する、やれっ！」

『『『黒蠍―スピアーツ―!!』』』

「フフツ」

ドラグニーへガキインツツ

「むむつ、破壊されない?!」

「残念でしたね? 《方界合神》の効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、戦闘およ

び効果で破壊されません。そしてこのバトル終了後、ヴァルカン・ドラグニールの効果発動！このカードを墓地へ送り、墓地から3体の《方界胤ヴィジャム》を特殊召喚!!」

『『ギロツ!!』』

「キモい。」

「メタポで1体切ってたんですね」

「そしてデッキから《方界超帝インディオラ・デス・ボルト》を、手札に加える!!」

「なんとしづとい・・・念の為私は守備表示になる。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

お頭 LP2400 H2?3?1

《ロンゴミアント》(攻) O U R 3

《首領・ザルグ》(守)

+ 《団結の力》

「わ・た・しのターン!!いい加減に終わりにしてあげます!」

「何?!」

「わたしはフィールドの3体のヴィジャムを組み込む事で特殊召喚!!紡ぎし光よ、漆黑

の闇よ！もうなんか鬱陶しいあいつらを、次元の彼方へ消し飛ばせ！出でよ、《方界超帝インディオラ・デス・ボルト》オツ!!」

『ギギヤアアアアツ!!』

《方界超帝インディオラ・デス・ボルト》星4／光／機械／0／0

「うわーっ！怖いツスー?!」

「でも独特なモンスターばかり、ちよつとデツキ見せて欲しいんだなあ」

「それより、彼女のあの変わり様に突っ込まなくていいのか？」

「正規召喚したインディオラの攻撃力は、2400となる！そしてインディオラが出現したとき、相手に800ダメージを与える！へバニツシュ・ボルト!!」

「げふっ!!・・・戦闘では突破出来ぬと踏んで効果ダメージに切り替えたかつ？」

お頭 LP2400?1600

「そんな馬鹿な。更に《方界波動》!!あなたの攻撃力を半分にし、インディオラの攻撃力を倍にする!!」

「こつ、攻撃力4800だとお?!」

「砕け散れエ！インディオラ・デス・ボルトでロンゴミアントを攻撃！ヘライトニング・ブラスター!!」

「この攻撃が通れば、セラの勝ちね！」

あつ、明日香さんそれフラグって奴です……

「まだだあ！我らが結束の象徴を砕かせはせぬ！ダメージ計算時にリバースカードオーブン！盗んできたシリーズ《禁じられた聖典》!!」

「神様に怒られそう!?!」

「このカードの効果により、このバトルは元々の攻撃力の数値でバトルせねばならぬのだ！ロンゴミアントは1500!!」

「そんな！インディオラの元々の攻撃力は……0!!」

「反撃だ、野郎共!!」

『『へ必殺！黒蠍☆本の角アタック!!』』

『ウギヒャアアア……』

「インディオラッ！きやつ……」

セラLP2000?500

わたしの不注意で、あんなふざけた攻撃にやられるなんて……兄のように扱ってあげられなくてごめんなさい。

相変わらず断末魔が怖いってことは黙っておきます

「これで嬢ちゃんにモンスターはいなくなつた！我らの勝利だ!!」

「……何言ってるんですか、まだわたしのバトルフェイズは終了していませんよ！インディオラが破壊された時、墓地から3体のヴィジヤムを特殊召喚出きる！更に墓地の方界カードである、インディオラを回収する!!」

「んなあにいい?!たがしかし……ただか攻撃力0のモンスターを復活させた所で何になる、次のターンで決着をつけてくれるわ!!」

「言つたはず！このターンで決めてやる!!リバースカードオープン！速攻魔法《瞬間融合》!!フィールドのヴィジヤム2体を融合させます!!」

ガタッへ「融合つつつ?!?」

「十代と先輩反応しすぎ……」

!!
あの男に、天上院吹雪から預かったカードを使うのは癪ですが・・・しょうがない

「異次元の使者胤たねのたる2つの眼よ、悪魔の導きによりひとつとならん！未知なる次元の扉を開き、

新たな脅威をここに生み出せ！融合召喚！現れよ、餓えた牙持つ毒龍！《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》ツツツ!!」

『ギシャアアアアアツ!!』

《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》星8／闇／ドラゴン／2800／2000

「うひっ・・・リアクション大賞のジユンコさん、どうぞ」

「・・・えっ？ゴホンツ！ぎやあああああつ!!なんか凄いの出てきたああ?!なによあれ、怖！すっげーうねうねしてんだけど口から煙っぽいもん出てんだけど怖!!あれ毒霧か？毒龍つってたから毒霧か?!ソリッドビション気合い入れすぎだろかわい顔してなんつーもんだしやがるのあの娘は!!・・・ハッ、あーん十代く私こくわい

「」

「お、おう……?」

「ジュンコズルいわよ!十代、あのモンスター怖いわ助けてっ!!」

「あんっ!十代いいっ、わたくしの足の震えをとめてえええ!!」

「ちよっ?!お前達待てっ……」

「なんだこれは!（ももえにちやっかり抱きつかれながら）」

「ジュンコさんがチャンスと言わんばかりにボケに走ったっス……」

「ボケとゆうより……十代、頑張るんだなあ」

よくモンスター1体の召喚に対してあれ程盛り上がれるなあ……十代君一人に対して右腕に明日香さん、左腕にジュンコさん、後ろからカミューラさんが抱きついてる状況です、なにあのハー○ム状態。

でも本気で震えてるのは多分、ジュンコさんにネタを振ったももえさんってゆう……

「はあ……スターヴ・ヴェノムのモンスター効果発動!融合召喚時に相手モンスターを1体、ロンゴミアントを選択!そのモンスターの攻撃力を自身の攻撃力に加えます

!!

「無駄だあ！我らがロンゴミアントは効果を受け付けないのを忘れたかあ！」

「残念でしたね、この効果はあくまで相手モンスターを対象にとるだけ！あなた方が効果を受けなからうがなんだろうが攻撃力は上昇します!!」

「馬鹿な！では攻撃力は・・・5800だとお!!」

「フイニツシユ！スターヴ・ヴェノムでロンゴミアントを攻撃！へスターヴ・ヴェノム・インパルス!!」

『『ほんぎゃああああつ!!』』

「野郎共?!、ぐへらあつ?!!!」

お頭 LP1600?0

Win セラ

「ぐう・・・皆、すまない・・・ガクツ」

ガクツって、自分でいいましたよね今。

でもお頭さん光になって消えてしまいました・・・

「お頭！」

「「お頭あゝ!!」」

あれ、団員の皆様も光の粒子になった……デュエルに参加（物理）していたから?! なんだか罪悪感が沸いてきますね

「やはりセブンススターズ、闇のデュエルをしていたのね……」

「負けたらカードにされる……怖っ」

「けど無事でなによりね、セラちゃん先輩……大丈夫?」

「ええ……はい、大丈夫です」

「無事どころか、あんな化け物出して蹂躪してましたよね……」

「そうだな（離れん……こいつ、もしやあの類いは苦手なのか?）」

「いいデュエルだったぞ転校生……今度は非、俺とも手合わせしてくれ」

「あつ、ずりいぞカイザー! 俺もセラとデュエルしたいのに!!」

「あ、あはははは……お手柔らかに」

想像以上に苦戦しましたがみなさんの信頼は少しは勝ち取れたようです。スターヴ・ヴェノムをお守り代りにって渡された時は驚きましたが……助かりました。

兄さん……ダークネスではなく、元の人格の天上院吹雪には、それ程危険はない

かもしれません・・・あの方の予言にあつた、曰く「世に混沌」をもたらす者。その真意を、自分の目でみて、耳で聴いて、確かめていきたいと思います。

・・・続く。

33羽—A 祭りとは、ある意味黒歴史量産工場である

おつす、オラジユンコ

転校生セラちゃん先輩来日から、しばらくたつて梅雨の季節。関係なかった南の島だし。ともかくあれから彼女も結構なじんできました、今ではすっかり学園の人気者の一人です。たまに言い寄る命知らずがいますが、大概インディオラさんに消し飛ばされています。800地味バーン連打って4000ルールだと強いわ・・・まあそんな事より聞いてくれ、もうすぐデュエルアカデミア学園祭。準備期間に入ろうとゆう頃、私はレッド寮に呼び出されたわけなんだ。そこで翔君に出合い頭に土下座されてる現在、どゆこと？

「ジユンコさん・・・どうかこの不承、丸藤翔の願いを聞いて下さい!!」

「だが断る」

「・・・正月に撮ったアニキの和服の写真で・・・どうつすか」

「話を聞こうか」

《クルック》

なんやかんやで時は過ぎ、学園祭当日。レッド寮前にてく……

「はい、皆時間よー！お客さんがきたら笑顔で迎えるわよー！！」

「「「はい！！」」」

「あ、一組目の方がいらつしやいました姉様方！！」

「しゃあ！じゃあいくわよ野郎共！！」

「ジュンコさん、50%は女子ですわ！！」

「細かい事はいいつつの！せーのっ！！」

「「いらつしやいませー！！」」

「オシリスレッド・オベリスクブルー女子・共同企画！」

「デュエルモンスターズ、コスプレデュエル喫茶へようこそー！！」

「翔……」

「隼人君……」

「なんだか規模が大きくなりすぎてるんだけど、ジュンコさんに何頼んだんだあ？」

「僕はただ……ジュンコさん達仲良しメンバーに、コスプレデュエル大会ちよつと参

加して欲しいなつて頼んだだけっすよ……」

「はい、席も結構埋まってきたところで……じゃあ早速本日のメイイイインイベントオオオオ。コスプレデュエルモンスター達によるデュエル大会を初めるわよー!!」

「「「おおおおー!!」」」

「展開がくっそ早いんだな?!

「ジュンコさんジュンコさん!」

「なによモモ、せっかく盛り上がってきた所なのに」

「自分達だけで盛り上がり過ぎて、読者の方々を完全に置いてきぼりですわ!」

「そうよジュンコ!わたし達が何に扮してるとかの説明もいるでしょう!地の文兼ツッコミ担当のあなたらしくない……祭りでうかれすぎよ!?!」

「さつきからなんの話ですか?!

「だからつてメタ発言を乱発すんな余計カオスになるわ!!つーか普段読者を置いてきぼりにする原因の一端はアンタらじゃー!!」

「もうわけがわからないよ……」

セラちゃん先輩困惑勢。

ふう、確かに勢いだけで進行してたんで軽く説明しときますかね……

あの日、翔君に頼まれて私達はレッド寮伝統のコスプレデュエル大会に参加しようって話になっていたのよ、で、翌日女子寮で何やるかって話合いになった時に先輩らが「どうせ女子は人数少ないからなにもやらない、当日好き勝手してればいい」とか言ってる……ぶつちやけ祭りに対してそれはどうよ？高校の学園祭とか人生で3回しかないのに……つーか人数同じぐらいのレッド見習えやこら怠慢か！ってつい突っ込んでカフエも兼です。あれだね、ゼアルのハートランド学園祭でやってた奴みたいな感じ、オーブンカフエだけど。

「おかげで衣装作りが大変でしたわ。この学園、金持ちのお嬢様が多いから家事スキル高い方が少なくて……」

「そうねえ、皆最初は頑張ってたけど……大半わたしとももえとセラさんで作ってた気がするわ」

餌に釣られた女子軍の手のひら返しは酷く、レッド寮には元々男子しかいないため衣装なんて当然ほとんどなくて……3人の職人に頑張ってもらいました、なんでハーピイレディ3姉妹とブラック・マジシャンガールがあつたかは突っ込まない。何気セラちゃん先輩が裁縫上手い上にコスプレ衣装に精通しててびっくりした。

「いつも（兄に着せる試に）作ってましたから」

「なにそれすげー気になる。女モノかよ……」

百済木さんがいたらめっちゃ食い付きそう……ともあれ無事、ホール勢の衣装は完成しました。

男子の学校の備品シリーズと比べ、女性陣は気合い入り過ぎです。

霊使い4人衆とかホーリーエルフとか何故かディアンケトとか選り取りみどり。だがその中である意味ぶっち切っていらっしやるのが

「まあ、インパクトならわたしが一番よね！デッキのエースそのままだし」

このお方、天上院明日香サン。なんと《サイバー・ブレイダー》です……こいつ

絶対露出度で選んだらおい！案の定男性陣が直視出来てねーから！ウブな思春期男子達の前でなんつーもん着てんだ!!

「明日香様はちよつと目のやり場が……逆にわたくしは自分の衣装に使う時間なくて地味ですが」

奴の名はモモエモン。その異名は伊達ではない。なんだなんだで一番衣装作り頑張ってた今回のMVP。

そんな彼女は《水精燐―アビス・グンデ》に扮してる、まだ出回っていないカードではあるが彼女自身が多様してるので認知度はそこそこ。地味?……地味ってなんだっけ。

「そうですね、わたしも自分で着たことないので似合っているか不安です……」

もはやレギュラーのような顔で、平然と私らの中に混じってるセラ神先輩は《エフェクト・ヴェーラー》である。男説があるモンスターの一角だが、可愛いコが着ればもはやなんの問題も無い。明日香のファンクラブ並みに膨れ上がった彼女の信仰者達は、こ

の姿を見るやなんかヴェラ神様とか言つて拝み出す始末……この学園、録な奴いねーな。

「いや……似合つてるわよセラさん、なんならどう？この姿のまま今晚共に……」

「ちよつと変な扉開きかけてる?!十代ラブじゃねーのかおめーは!!」

「それはそれ、これはこれよ！可愛いコに男女の隔たり無し!!むしろこんなコにお姉ちゃんと呼ばれて何も感じない方がどうかしているわ!!」

「だから年上(?!）だから！見た目小学生でも年上だから落ち着こう!」

「大歓迎よ……むしろ燃えてくるわ!!」

「あ、あははははは（取り入る方向性、間違つたかな……）」

「ちよつと前まで命のやり取りしてた仲ですのに……」

あかん手遅れですわ……

もうこの馬鹿(妹)はほつとこう。てか地味に十代は可愛い認定だったのね……あつ、私もだ。

「お〜いジュンコ〜!!」

噂をすれば、十代がこちらに手を振りながら登場。彼は色んな衣装を組み合わせたキメラになりかけていたので、うちらが作った《E・HERO ブレイズマン》を着せている。フレイルム・ウイングマンとかノヴァマスターとかと迷ったけど、こっちのが動きやすいかなって……

「あら十代、なかなか似合ってるじゃん？」

「いい、いい感じよ十代!!」

「おう！正直コスプレしてデュエルなんてやりづらそうとか思ってたけど、お前らが作ってくれたコレは動きやすくもいいぜ!!……その、ジュンコも……あれだ、似合ってるぜ、その……凄く……」

「う、うん？」

そう、かくゆう私も当然デュエルモンスターのコスプレをしているのだ……

「すつつつげえかつこいいぜ《チドリ》のコスプレ!!刀とか甲冑とかがまた渋いぜ!!」
「……ですよね」

我がデッキのWエースが一人、《A B F―涙雨のチドリ》に。

うっさいわアンタら！久々の登場なんだから少し自重しろっつーか読者も存在ほぼ忘れてんだろ主にライキリ！

まあ……あれよね、私に色っぽさとか可愛い気とか誰も期待してないだろうし

「十代！わたしにはなんかコメントないの?!」

「お、おう……明日香もかつこいいぜ？」

「OTL」

ご覧の通り、十代にはハーピーみたいなお色気系(?)よりこっちのが受けよさそうだし……いいかなって。

「そんな事より……早くデュエル大会に移行しようぜ、座長！」

「座長て、なんかの劇団か。さつきはノリで言ったけどデュエル開始はもうちよい待ってね?(女子の) 餌がまだきてないわ」

「ジュンコさんがすっかり企画&総指揮ですから座長みたいなものですね……」

「餌って?」

「僕だ!!」

「吹雪さん?! あんただったのか! つかいつの間に背後に……」

「ちやつかりコスプレまでしてますわね……」

「フツ、『明日香のコスプレ姿が視たくないのか!!』ってメール来たら全てを投げ捨てても駆けつける……それが真の兄だ!!」

「兄さんつたら……」

「やっぱこの人、わっけわかんねえや……」

察しのいい方は気づいていたでしょうが、この《レッドアイズ・カオスマAXシスコン》……じゃなくて《ロード・オブ・ザ・レッド》に扮してる馬鹿こそ、女子寮全員に手の平を返させた餌です。

「吹雪様……来るよ?」の一言で全員やる気出すんだから単調でいいわね。てか衣装いつの間に用意したんだろ……

小声「残念だが時間がなくてね、また憑依合体だ」

「またかよ!?! 好きだな○ンキンネタ!! はあ……じゃああとよろしく、はいマイク」
「任された!」

「吹雪さんが司会進行なんすか?!」

「嫌な予感しかしないんだなあ」

《解せぬ……》

《あゝ、あゝ、マイクチエックマイクチエック……皆さま、お待ちせしました！
唯今よりオシリスレッド・オベリスクブルー（女）合同企画……デュエルモンスター
ズ・コスプレデュエル大会を開催するよっ!!!》

「あなたはどっちの寮でもありませんが……って言っちゃ駄目ですかジユンコ姐さん」
「セラちゃん先輩。突っ込まない方が都合の良いこともあるのよ……」

《司会進行は、このわたくし《ロード・オブ・ザ・キング……じゃなくてレッド
!!》

「「「「キヤアアアアアアアッ！^吹ロード様ー!!「「「？いつもの（♀）

「仕事中のコは自重しなさい！お客さんビクってしてるから!!」

《そして解説は、さつきからデュエルフィールド脇でオブジェのフリをせずと固まっていた》

《この万丈目《XYZ・ドラゴンキャノン》さんが行う!!》

「あれ万丈目君だったの?!」

「素人の仕事じゃないんだな……」

XYZドラゴン・キャノンさんじゃねーか完成度たけーなおい……

そいや、あの二人の組み合わせってなかなかないわねどんな会話すんだろ

《では今大会のルール説明に入らせて貰おうかな!あ、そのの《荒野の女戦士》のお嬢さん、レッドアイズ・ブレンド(?2400)一つ。》

《えっ、ルール説明?ただひたすらにデュエルするわけでないんですか?》

《だが、それだけでは面白くない。せっかくお客さんが沢山集まったのだから盛り上げる展開じゃないと!!》

《は、はあ……》

《てなわけで、女子モンスターズ対男子モンスターズで5vs5のチーム戦を行う！
勿論女子チームの代表は彼女達！もはや学園最強集団（色んな意味で）との呼び声高い、
明日香……じゃなくて《サイバー・ブレイダー》率いるブルー女子四天王の諸君だっ
!!》

「え、わたしを含む4人組……?」

「……うちらか?!」

「全然聞いてないんですが!!」

「ジュンコさんも聞いてないって、駄目じゃないですか……」

どうやら私、明日香、モモ、セラちゃん先輩が代表って事らしい。なんだよ女子四天王って!もく、好き勝手いってくれちゃって……まあお祭りだしいつか、デュエルするだけだし。

案の定、男子陣の方からはおつかねえだの勝てる気がしないので大半がやる前から諦めモードだ。レッドって実質デュエルの実力最下層の寮だからしょうがないかな、祭りなんだから楽しめばいいのに変な所ネガティブな連中ね

《なんだ初から諦めムードかい？だったらこうしようではないか！もし君たちが彼女達に勝ち越せたら・・・好きな女子に一つ願いを叶えてもらえるってのはどうだい！！勿論学生の領分を守る範囲でだけど》

「「「はっ?!」」」

「「「うおおおおおっ?!」」」

「やっつてやるぜ!」

「ああ!絶対勝ってみせる!!」

「遊城ー!遊城はどこだ、レッドチームの希望ー!!」

おいおいまた余計な事言い出して・・・女子をダシに使おうなんてサイトー!!
流星に女子皆引いてるじゃん!やっぱ司会下ろして・・・

《勿論これは女子チームが勝った場合にも適用される。好きな男子がレッドにいないってなら僕が君たちの願いを叶えよう》

「「「・・・・・・・・」」」

「「「キャアアアアアアアアッ!!!」」」

「

「明日香さん達頑張つてー!!」

「レッドなんて瞬殺よー!!」

「大丈夫、負ける要素がないです!!」

「なんとゆう手の平返しっ?! 餌の効果絶大だなおい! でも流石に嫌よね皆・・・」

「(勝つたら十代と〇の〇〇〇〇で〇〇〇・・・)」

「(勝つたら万丈目様に人参料理のフルコースを・・・)」

「(勝つたら天上院吹雪に〇〇な衣装を着せて〇〇の〇〇〇に・・・)」

「勝つわよ皆ー!」

「おおおおーっ!!」

「こつちのがヤバそうだったあ・・・」

《また無茶苦茶な展開にしましたね・・・そういうえば女子の5人目は?》

《僕が行く。女子の純情をかける事になるんだ・・・僕が彼女達を守らないと、だ

ろっ?》

「「「「「さっすがロード様ー!!」」」」」
吹雪

そもそもあなたが原因なんですが・・・まあ、わざわざ盛り上げるために自分を賭けに出してるようなもんだし大目にみてやらんでもないこともないか

《では早速、デュエルモンスターの登場だ！ブルー（女）チームから出場者を決めてくれ!!》

「じゃ、私が行くわ。1番手を粉微塵にすれば向こうの士気も無くなるでしょ」

「ジュンコさんの容赦ない采配、嫌いじゃありませんわ!」

《1番手はインチキ効果に定評のある、《A BF―涙雨のチドリ》選手だあ!!》
《むう。いきなりあいつか、男子陣に対抗出来る奴がいるか?》

「キヤーツ！チドリさーん!!」

あ、あれ？なんか私に黄色い声援が・・・とりあえず手でもふつとこ

「ジュンコさん、この学園祭準備期間で男前発揮してましたからね・・・」

「わたくしの的にちよつと複雑ですわ……うちのジュンコさんは元から出来るコですの
にっ」

「(……お母さん?)」

「1番手はジュンコか! よーし、だったらここは俺が……」

「駄目つすアニキ! アニキはレッド寮の最後の切札!」

「最初からエースを出した方が負けるつて、デュエルでもよく言われるんだな!!」

「ええ……俺正直デュエル出来ればいいんだけど……じゃあ誰が出るんだよ?
万丈目?」

《馬鹿者、この格好でデュエルが出来るか!》

じゃあなんでその格好をチョイスした?!

「万丈目が無理ならどうするんだ……」

「相手は遊城相手に勝率7割を越える鬼だぞ?!」

「俺達では勝てる気がしない……」

「くそう、所詮はかない夢だったのかっ」

悲観し過ぎだろレッド勢・・・ごめんね？授業で当たると基本ボツコボコでごめんね？つかしいなエクストラ無しハッピーで授業出てんのに。

「は〜い！じゃあ私がやりま〜す!!」

そんな中客席から名乗りを上げたのは一人の女子・・・あ、あれっ？あのコマさかぶっ、

「[[[[ブラックマジシャン・ガールツ?!]]]]」

「何イ?!」

「ブラックマジシャン・ガールは毎年トメさんの担当のために、今回やる女子はいないのでないのかっ?!」

「え〜あんなコいたあ?」

「わからない、でも可愛い〜・・・がっ」

((((男子の味方をするなんて、どうゆうつもりだっ!!)))

《おや君は女子チームで、もし勝っても君にはデメリットなのではないかい?》

「大丈夫ですよ、皆さん悲観的過ぎて観てられませんでしたし。何より! お祭りなんだから楽しまなくっちゃ! ね、チドリさん?」

「.....」

《いい心がけだ! 許可する!!》

《ちよ、そんな適当な感じではないんですか.....》

《そんなわけでレッドチームの一番手は、『ブラックマジシャン・ガール』だー!!》

「皆さん、応援宜しくう」

「二二」頑張れーっ! プラマジガールー!! 「三三」

「超可愛いつすー!!」

「レッドが負けたら、あのコに色々さされたい.....」

「いや! レッドが勝ったらあのコを後夜祭に誘うんだあ!!」

うわっ、やりづらあ。翔君の奴ちやつかり混ざってやがるし.....確かプラマジガールの精霊モノホンなんだっけ? よりによって私が相手すんのかよ

「ジュンコさん、演技演技.....せつかくのコスプレデュエルなんですから」

そ、そうだった。しかしチドリの演技ねえ、うちのチドリの言動そのままだと残念でしかないしなあ……

『ひっど?!』

適当にやるか適当に、祭り祭りつと。

「フツ、良かろう。女子を切る趣味は無いが拙者もこの方々に雇われた身……」

「じゅ、ジユンコ?……」

「主を守る刀となるのが、我ら武士もののふの務め。全身全霊でお相手いたそう、来るがいい!!」

「……でディスク展開つと……格好つけすぎたかな?」

「「「「キャアアアアアアアツ!!」」」」

「チドリさんカッコいいーっ!!」

「素敵ーっ!!」

「欲望まみれの男子の味方なんてやっちゃってー!!」

．．．あるえ？

「ああ、ジユンコさん素敵つつつ．．．今なら抱かれてもいいです！むしろお願いします！」

「同感よももえ、こんなに胸が疼くなんて．．．今夜、セラさん交えて4人でアクセラレーションでもしましょうか」

「いい案です明日香様。今なら高次元へ旅立てそうですわつつつ?!」

「旅立てませんかからね?!嫌ですよわたしそんな高次元!ジユンコ姐さん助けてえー!!この二人がおかしいの!!」

うおおおおい!!なんか予想GUY過ぎる反応されてるっ?!! これ演技、演技だからね

!!そしてその二人がおかしいのはデフォだ、ごめんっ!!

『．．．解せぬ。』

『いや、モテてんの姐さんだから、オレじゃねーからな?!』

「なくんか面白くねえ．．．」

「十代、どうしたんだあ？」

「フフツ、行きますよチドリさん……」

「デュエルツ!!」

チドリ(ジュンコ) LP4000

ブラックマジシャン・ガール(??) LP4000

《あつ。この学園祭編、イマイチの反応だったら早々に打ち切って次のエピソードへ強引に進むらしいから頑張ってるね二人共》

「「「「な、なんじゃそりゃー?!」」」」」

聞いてねーんだけど?!

……続こうか

33羽—B 時には空気をぶち壊す事も必要

前回のあらすじ

ジュンコさんモテ期到来（嘘）

「デュエル!!」

チドリ（ジュンコ） LP4000

ブラックマジシャン・ガール（??） LP4000

「レディ・ファーストだ、先行は譲ろう」

「おまえも本来女子だろっ?!」

「完全になりきってるんだなあ・・・」

「では遠慮なくっ、私のターン、ドロー!!」

「「「頑張れーっ！ブラックマジシャン・ガールー!!」」」

「私は手札から、《ベリー・マジシャン・ガール》を召喚！」

『キャフツ』

《ベリー・マジシャン・ガール》星1／地／魔法使い／400／400

「ちっこいマジシャン・ガール?!」

「あんなのいたのかよー!」

《おっとお、これは随分可愛いらしいモンスターを繰り出してきたぞっ?》

《攻撃力400を攻撃表示だと?怪しいにも程があるな……》

げっ、《マジシャンズ・ヴァルキリア》とかじゃなく普通にマジシャン・ガールズ使ってくるの?……そーいや精霊界のデュエルは進んでいるだのなんだのカイバーマンと馬鹿の嫁が言ってたっけ……ヤバい、レモンとアップルしか効果覚えてないわ

「召喚成功時にデツキから《チョコ・マジシャン・ガール》を手札に加えまーす。そして

フィールド魔法《魔法族の里》を発動っ!!」

《おっとこれはー?! 辺りが神秘的な森に姿を変えたー!!》

「フツフーン、この里の中では魔法使いモンスターをコントロールしていないと魔法カードを発動できません。カードを2枚セットしてターンエンドです!!」

「いいぞー! プラマジガールー!!」

「かつわいいー!!」

「どうもどうも」

ガール H 6? 3

《ベリー・マジシャン・ガール》(攻)

セットカード

セットカード

露骨に誘われてるわね、さてどうするか……

《お次はチドリ選手のターンだ!》

「参る・・・我のターンッ!」

「「きゃーっ!!」」

普段ならあんな見え見えの誘いに乗りたくはないけれど・・・生憎と今回はエンターテイイメント、派手にやり合った方が盛り上がるわよねっ! あ、シンクロは不味いのかな? よしここは・・・

「お頼み申す! 《BF―蒼炎のシユラ》を召喚!」

『っシャアっ!!』

《BF―蒼炎のシユラ》星4／闇／鳥獣／1800／600

「幼子に手を出すのは気が引けるが・・・非情にならねば守れぬモノもある。往けっ、シユラよ!! 《ベリー・マジシャン・ガール》を攻撃!!」

「「「やっぱ鬼だー!!」」」

「大丈夫だよ皆！ベリーの効果発動ツ！攻撃される時守備表示になって、デツキからマジシャン・ガールの仲間を呼ぶ事が出来る！お願い、《レモン・マジシャン・ガール》!!」
『へへんっ』

《レモン・マジシャン・ガール》星2／光／魔法使い／1800／600

《また新たな「マジシャン・ガール」モンスターだと?!》

「ブラマジガールにそっくりだ!」

「しかし、仲間を呼べども戦闘にはなんの影響もあるまい！ベリーにはご退場願えシユラヨー!」

「だつたら罨オーブン《ガガガ・シールド》!発動後ベリーに装備!これを装備したコは戦闘・効果では2回まで破壊されないよ!!」

「**「「上手いぞー!ブラマジガール!!」**」

「**「ありがとう!」**」

シユラパンチが盾に防がれてしまった。

しっかしなんかやる度に毎回これやんの？しんど……

「フム、仲間を守る罠だったか……我は伏せ札を1枚置き、ターンを終了する」

チドリ（ジュンコ） H6?4

《蒼炎のシユラ》（攻）

セットカード

《最初の攻防はブラマジガール選手の一步リードってところかな？XYZ君》

《そうですね。魔法を封じられ、モンスターも倒せず新たなモンスターを呼ばれた……チドリ選手はやや苦しい情況だ》

「ジュンコが攻めあぐねるなんて、あいつやるなあ……」

「ジュンコさんのデュエルって、最初からガンガン飛ばして蹴散らす！ってスタイルだもんなあ」

「私のターン！」

「[[[[ブローニ]]]]」

「翔君すっかりあの集団の一味ね・・・」

「《天使の施し》、3枚ドローし2枚捨てます。そして《強欲な壺》を発動！デッキからカードを2枚ドロー!!・・・また新しい仲間を紹介するよ！召喚！《アップル・マジシャン・ガール》!!」

『パチンツ☆(ウインク)』

《アップル・マジシャン・ガール》星3／炎／魔法使い／1200／800

「続けて《デュアルサモン二重召喚》を使い！《チョコ・マジシャン・ガール》を召喚!!」

『むんっ!』

《チョコ・マジシャン・ガール》星4／水／魔法使い／1600／1000

「チョコちゃんの効果発動！手札の魔法使い1枚を捨て、デッキから1枚ドロー！来た来たっ！《魔導師の力》をチョコを対象に発動し、私の魔法・罨ゾーンのカード1枚につき、攻守を500ポイントアップ!!」

《彼女の魔法・罨ゾーンのカードは4枚だね》

《すると、攻撃力3600か!》

「バトル！チョコで攻撃イ！す・る・と・き・につ」

「むっ？」

「リバースオープン！《マジシヤンズ・サークル》!!攻撃力2000以下の魔法使いモン
スターを1体デツキから特殊召喚！出てきて、皆のお姉さん！《キウイ・マジシヤン・
ガール》!!」

『ハアツ!!』

《キウイ・マジシヤン・ガール》星5／風／魔法使い／1800／1200

「B（ベリー）・L（レモン）・A（アップル）・C（チョコ）・K（キウイ）！ブラック・
マジシヤン・ガールズ、ここに参上っ!!」

「「「わあああああああつ!!」「」」

「なんだあの素敵フィールドはっ!!」

「写真だ！写真を撮れえ!!」

「あれ？一人だけフルーツじゃなくね？チョコっってお菓子じゃん」

『OTL』

あ、気にしてたんだ本人も・・・

「キウイ姉さんがいる限り、私のマジシャン・ガールズは効果の対象にならず、破壊されません！これでおしまいだよ、お侍さん！」

「・・・私はデッキから、《ドロール&ロックバード》を特殊召喚!!」

『たあっ』『ピィッ』

《ドロール&ロックバード》星1／風／魔法使い／0／0

「えっ、嘘お?!」

「シヨタ?!」

「燻し銀つぼいチドリさんのデッキから、シヨタが出てきたわ!!」

「意外だけど・・・かわいいから許す!」

《そうか、《マジシャンズ・サークル》は互いにデッキから魔法使いモンスターを、強制的に特殊召喚するカード!》

《チドリ選手のデツキにも魔法使いが眠っていたわけだね、しかし・・・》

「ちよつと驚いちやつたけど・・・《マジシャンズ・サークル》で呼び出したモンスターは強制的に攻撃表示！むしろラッキー！チョコちゃん、そのドロール君に攻撃！恨まないでね!!」

「そうはいかん、《和睦の使者》発動！このターンの戦闘では、たが互いにもう傷つけ合うことはできない」

「むむ・・・レモンを守備に変えて、効果発動！ベリーを生贄にデツキから私自身《ブラック・マジシャン・ガール》を手札に加える、ごめんねベリー・・・ターンエンドだよ」

ブラマジガール H4?1

《レモン・マジシャン・ガール》(守)

《アツプル・マジシャン・ガール》(攻)

《チョコ・マジシャン・ガール》(攻)

《キウイ・マジシャン・ガール》(攻)

さて、十分場も暖まったところで・・・反撃開始といきますか！

「わたつつつ、私のターン!!魔法使い族がいる事で魔法の制限は消え去った。《ギャラクシー・サイクロン》を発動!《魔法族の里》を破壊!!」

「うっ。押せ押せもここまで、かな・・・」

厄介な里は消え去った、あとは厄介なあのコ達を退ける!!

「魔法カード《儀式の下準備》を発動!デッキから儀式魔法を選択、そのカードとそこに記された儀式モンスターを我が手に招く!!」

「は?」

「はあ?」

「「はあああああああ?!!」」

「えっ、なんでしようこの反応」

「(ジュンコ君らしいね・・・)」

「儀式魔法《エスプリット・コレク霊魂の降神》と儀式モンスター《エスプリット・ロード霊魂鳥神—彦孔雀》を手札に。そして《エスプリット・コレク霊魂の降神》を発動！フィールドのレベル1《ドロール&ロックバード》と手札のレベル7《ダーク・シムルグ》の魂を捧げ・・・我が元へ来たれ、古の盟友！《エスプリット・コレク霊魂鳥神—彦孔雀》!!」

『破っ!!』

《エスプリット・コレク霊魂鳥神—彦孔雀》 星8／風／鳥獣／3000／2500

《こっ、これは驚いた！チドリ選手、まさかの儀式召喚だーっ!!》

《馬鹿な！アイツといえバシंक口召喚からの大量展開+圧殺ではないのか?!》

「いけめんが、いけめんを繰り出した?!」

「女性向けサービスを忘れない、チドリさん流石です!」

やっべ予想よりイケメンだった!けど妻帯者(?)だからね・・・
そしてそんなつもりじゃなかったんだけど。

「格好良い方ですねー！けど、私の仲間達を倒せるのかな？」

「先程宣告した通り、女子衆を傷モノにする趣味はない。彦孔雀の能力を発動！儀式召喚時、相手モンスターを3体 \square 選択 \square して手札に戻す！〈風華招来〉!!」

『啼ッ!!』

『『きやあああつ!!』』

彦孔雀が剣を振るうと、そこに一迅の風が起こりレモン・アップル・チョコの3体を吹き飛ばしてしまった。

・・・今、下アングルから彼女達覗こうとしてたためーら、あとでお仕置き。

「そんな！キウイ姉さんがいるのになんで効果が通るの?!」

「残念だが、彦孔雀の能力は相手を \square 選んで \square 発動するわけではない。対象をとる効果ではないのだ」

「え、え〜?!なんか屁理屈っぽい！」

《《オンマイ語は難しいね・・・》》

《《コオンマイってなんですか?!》》

「だが再び令嬢達に揃われては叶わん．．．《手札抹殺》を発動。互いに手札を全て捨て、同数ドローする。我は一枚！」

「わっ、私は4枚ドロー！」

「参る！彦孔雀でキウイ・マジシャン・ガールを攻撃！悪く思うな．．．《絶・風・刃》！！」

『斬ツツツ！！』

『ああっー！！？』

これはしょうがない、許して貰おう

「続けてシユラで直接攻撃！！」

『ラアツ！！』

「きゃあああああっ！！」

ブラマジガールLP4000?2800?1000

《チドリ選手圧倒ー！予想外の儀式召喚と手札抹殺により、勢揃いしたマジシャン・ガールズを壊滅させてしまったー！！》

「そんなあゝ」

「やっぱり鬼だあ……」

「いいぞージュンコー！じゃなくて……チドリー！！」

「てめー遊城ー！」

「レツドのくせにどっちの応援してやがんだー！！」

「この裏切り者オオオオっ！！」

「そんな事知ったこつちやねえ！俺は……世界中が敵に回ったって、ジュンコの味方だぜっ！！」

「「「「「?!」」」」」」

「あつちやあ……」

「つつつつつつ?!?!?!?!?!一枚伏せてエンドフェイズ、彦孔雀は「スピリット」モンスター、現世に永くとどまる事叶わず手札に戻るが……この時《靈魂鳥トークン》2体を残してくれる。守備表示だ、ターン終了」

チドリ（ジュンコ） H5?1

《BF―蒼炎のシユラ》（攻）

《靈魂鳥トークン》（守）×2

星4／風／鳥獸／1500／1500

セットカード

《えくと、ブレイスマン選手。告白は後夜祭でやってくれたまえ》

《ふぶ……ロードさん、あいつは多分そんな事考えていません。天然なだけです

》

「なになに……「アホかー?!?!公衆の全面で何言い出してるのよこのド天然ツツ!!明らかに勘違いされる言い方してんじやないわよ馬鹿アー!!それともなにか?誘ってんの?……誘ってんの?!私を畏にでもはめる気かチクショー!!」……らしいですわ」

「……なんですか？それ」

「今のチドリさんの「つつつつつつつ」から思考を読み取ってみました、8割方合ってると思いますわ」

「公開告白に匹敵する行為を受けても演技を続ける責任感……流石はジュンコ、我が好・敵・手!!ね」

「(……ジュンコ姐さん、早くポジション変わって……)」

「私の仲間達をこうもあつさり退けるなんて……噂以上ですね、チドリさん？」

……噂ってなんだよ噂って、精霊界でなんか広がってんのか

「私達も少々おふざけが過ぎました……本気でいくよっ！私のターン!!」

《ブラマジガール選手、追い詰められたが闘志は潰えていない！むしろ熱く燃え上がっているうー!!》

「私は手札を1枚墓地へ送り、私の前世！《幻想の見習い魔術師》を特殊召喚!!」

『フフンっ』

《幻想の見習い魔導師》星6／闇／魔法使い／2000／1700

「褐色だと?! またマニアックな!!」

「だが、いい! ちよつと気が強そうな感じもイイ!!」

ギャラリーに変なのばっかいるなあ……この学園の未来はいかに

「このモンスター召喚時、デツキからお師匠さま《ブラック・マジシャン》を手札に加えます!!」

「「ぶ、ブラック・マジシャンだとお?!」」

「ガールがいるなら同然、師たるブラック・マジシャンもいるだろうな……」

「あつ……えくと、三菱君? いたんだ」

「どこの車メーカーだつ! 三沢だ三沢! 学園祭だから特別に帰してもらったんだよ!!」

「そして《ガガガ・マジシャン》を召喚!」

『我我我ッ!!』

《ガガガ・マジシャン》 星4 / 闇 / 魔法使い / 1500 / 1000

「え、なんだあれ……」

「変な名前……」

「我我我だどつ?!お主、まさか……っ!!」

「うふふつ。その、まさかだよ!ガガガ・マジシャンはレベル1〜8の好きなレベルに変動出来る!レベルを6に変更し……レベル6の《幻想の見習い魔導師》と☒オーバーレイツ☒!!」

《つとおー!これはまさかあ!!》

「エクシーズ召喚!私、進化します!《マジマジ☆マジシャンギャル》!!」

『ウフフフフツ』

《マジマジ☆マジシャンギャル》★6 / 闇 / 魔法使い / 2400 / 2000

「「「えく?!」」」

《エクシーズ召喚だ?!あれは公式や・・・一般相手のデュエルでは、まだ使用を許可されていないはずだ!そもそも何故持つてる!?!》

「えっ、そうなんだごめんなさい!・・・でも問題無いですよね? なんとたつてチドリさんは、シンクロモンスターなんですから!!」

「ぬう・・・」

《危ういな・・・だが許可する!!》

《またそんな大雑把な・・・》

《これはエンターテイイイイメント、些細な事で失格など面白くない!遠慮なくやつちやつてくれたまえ!!》

オーバーレイ・ユニット

「はくい!では遠慮なく・・・O U Rを1つ使い、手札を1枚除外して効果発動!あなたの墓地から《ダーク・シムルグ》を特殊召喚!!」

『グイエエツ!!』

《ダーク・シムルグ》星7/闇(風)/鳥獣/2700/1000

《相手モンスターを誘惑し、操る!これは強力な効果だ!!》

《レベル7の上級ダークモンスター？あんな奴入れてたのか・・・チドリのパイ
ルドには下級のモンスタートークンしかない、形勢逆転だな》

「(伏せ使つてこないなら、一気に攻めちゃうよ?) さ・ら・にっ、《マジマジ☆マジシャ
ンギャル》でオーバーレイ!」

「何イ?!」

「このモンスターは、魔法使いランク6モンスターを素材にエクシーズ召喚出来る!遠
き日々の面影、重星の力をもって今ここに蘇れ!ランク7《幻想の黒魔導師》!!」

『はああっ!!』

《幻想の黒魔導師》★7/闇/魔法使い/2500/2000

「何イ?!美女がイケメンにオーバーレイするだど?!」

「どうゆう事だ、まるで意味がわからんぞ!!」

「俺達のマジシャン・ガールはどこへ行っちゃったんだ!!」

「私は永続魔法《黒の魔導陣》を起動します、デッキの上から3枚をめくり・・・その
中の「ブラック・マジシャン」を記すカード、《マジシャンズ・ナビゲート》を手札に加
えて残りを好きな順番で戻す!そして《幻想の黒魔導師》効果発動!OURを1つ使い、

デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚！お願い、お師匠さま！！
『たああっ！！』

《ブラック・マジシャン》 星7／闇／魔法使い／2500／2000

「ブラマジ来たあー！！」

「媚び媚びしたコだと思ったらイケメンを2体並べるなんて！」

「いいわよー！ブラマジガールー！！」

「負けないで、チドリさーん！！」

「「「「「どっちも頑張れー！！」」」」」

この学園の手の平返しは……早い。まあギスギスされるより楽しんでくれた方が嬉しいからいいけどね？

『……なんだ此処は。魔物に囲まれているではないかどうしてこうなった！』

「ち、違うんですよお師匠さま。これはこすぶれっつていつて、人間がデュエルモンスター
の格好してるだけなんです！」

『なら何故私を呼び出す！今まさに敵と対峙しているではないか！！』

「だから皆でデュエルモンスターの格好して、デュエルをするってお祭りですって……」

「師匠との会話まで再現するなんて、筋金入りっすねえ」

「ああ、ちよつと不安になるな……」

めっちゃしゃべってる、師匠とめっちゃしゃべってるよ……やっぱ本物なのね。つかギャラリーに感づかれるから流さないよ。

「……済まんが、早くしてくれぬか?」

「あつ、はい。この瞬間! 《黒の魔導陣》第2の効果発動! 《ブラック・マジシャン》が召喚・特殊召喚された時、相手フィールドのカード1枚をゲームから除外する! 対象は伏せカードだよ!!」

「そうはいかぬな! 畏カードオープン 《緊急儀式術》!! 墓地の《靈魂の降神》を除外し、同じ効果を得る! 靈魂鳥トークン2体を生贄に捧げ……《靈魂鳥神—彦孔雀》を再度、儀式召喚!!」

『杜っ!!』

《チドリ選手再び儀式召喚！その強力な効果は先程みた通り！》

「3体のモンスターを手札に戻して頂く、何度も済まぬな？」

『いかんっ！マナツ!!』

「謝ることないですよー……私のターンで良かった。墓地の罫カード《ブレイクスルー・スキル》を発動!!」

「馬鹿な!？」

「彦孔雀さんの効果は無効にさせて頂きます。こつちこそごめんね?」

《《天使の施し》であらかじめ捨てておいたのか……ブラック・マジシャン・ガール。あいつ、かなりの実力者だ!》

「だが！彦孔雀の攻撃力は3000！主のモンスター達では突破することは出来ぬ!!」

「それはどうかな？バトル！お師匠さまで蒼炎のシユラを攻撃!……する瞬間!《幻想の黒魔導師》第2の能力！通常モンスター・魔法使い族が攻撃する時、相手フィールドのカードを除外する!!〈デイメンション・ゲート〉!!」

『亞亞亞ツ!?!』

彦孔雀がなんか異次元っぽい所へ飛ばされちゃった……まじでやばいわコレ。

「バトル続行！お師匠サマで靈魂鳥トークンを攻撃！みんな、いくよ〜!!」

「二「へブラック・マジック」!!」二」

ノリノリだなチクシヨウ?!トークン1体に気合い入れすぎだから!

『はあ……なにかすまん』

……謝ることないわお師匠サマ、空気を読むのはここまでよ!!

「この瞬間!墓地から《BF1尖兵のボーラ》の効果発動!このバトルでシユラは破壊されず戦闘ダメージも0になる。そしてバトル後!シユラを攻撃した《ブラック・マジシャン》を破壊する!!」

『なんと?!グオオツ!!』

「《ブラック・マジシャン》を倒しただと?!」

「流星はジュンコさん!ここぞって時に空気を読まない!!」

「そこに痺れる憧れるう!!」

さつきまで散々読んでたろ! 《緊急儀式術》の発動タイミングとか!!

「お師匠サマ! 許さないよ! 黒魔導師でシユラを攻撃! 〈黒魔導波〉!!」
「ぐううう」

「続けてダーク・シムルグでダイレクトアタック!!」

『グエーツ!!』

「ぐわあああああつ!!」

チドリ (ジュンコ) LP4000?3300?600

「私はカードを1枚セット、ターンエンド!!」

ブラマジガール H5?1 LP1000

《幻想の黒魔導師》(攻) O U R I

《ダーク・シムルグ》(攻)

《黒の魔導陣》

セツトカード

《情況はうって変わり！今度はブラマジガール選手がチドリ選手をブラック・マジックコンボで圧倒!!》

《一矢報いて《ブラック・マジシャン》自体は倒したものの……俄然ガールの有利だ!》

「我の……タアーン!」

『ジユンコ殿、こんな状態で演技をやめないのだが……』

『姐さんの懲り症にはあっぱれだぜ……いや、エンタメ精神?』

『ふむ、あの立ち振舞いは演技だったのか。見事なものだ、どこぞの将かと……』

『『うわっ!?なんかいるう!!』』

「魔法カード《一時休戦》!互いに1枚ドロし、次の私のターンまで戦闘・効果ダメージを0にする!《ギヤラクシー・サイクロン》を除外し効果発動!表表示の《黒の魔導陣》を破壊!……ターン、エンドだ……」

《チドリ選手、成す術無しかー?!!》

「だったらこのエンドフェイズ！罨カード《マジシャンズ・ナビゲート》発動！手札からお師匠サマ《ブラック・マジシャン》を特殊召喚して、墓地からレベル7以下の魔法使い……《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚するっ!!」

『む、呼ばれたか……行ってくる。』

『なんだったんだあ?』

『さあ、暇だったのではござらんか』

『はああっ!!』?移動した。

『うふふっ』

《ブラック・マジシャン・ガール》星6／闇／魔法使い／2000?2300／1700

「「「ブラマジガールきたあー!!」」」

「あれは雄一無二、武藤遊戯のデッキだけに入っているカードのハズー!」

「案外、本物なのかもな……」

「(お兄さん、何時の間に背後に……)」

「私のターン! 《強欲で貪欲な壺》を発動つ、デッキトップを裏側で10枚除外して、2枚ドロー!! よつし、黒魔導師の効果! つて言いたいけど、お師匠サマ2枚だけなんで……黒魔導師を生贄に《獄炎のカーズ・オブ・ドラゴン》を召喚!!」

『ギャオオオオツ!!』

《獄炎のカーズ・オブ・ドラゴン》星5/闇/ドラゴン/2000/1500

ガタツ《《カーズ・オブ・ドラゴンだとお?!》》

おい、竜使いの司会二人……食いつき過ぎ。

「なんでわざわざ、エクシーズモンスターを生贄にしてまでドラゴンを?」

「それはねく……チドリさんをさらに追い詰めるためだよ! 《獄炎のカーズ・オブ・ドラゴン》の効果! 融合無しでこのモンスターを含む素材の、融合召喚が出来る!!」

「「「な、なんだってー?!」」」

「《ブラック・マジシャン・ガール》と《獄炎のカーズ・オブ・ドラゴン》を融合!! 私、ガ

「イアさんの弟子になります！《竜騎士 ブラック・マジシャン・ガール》!!」
『てやあつっ!!』

《竜騎士 ブラック・マジシャン・ガール》星7/闇/ドラゴン/2600/1700

『……おい、冗談でも止めぬか。ガイア殿に迷惑だ』

「てへへっ。でもせっかくなんで、お師匠サマも一緒にしましょうよ。手札より、おねだりしてついてきてもらった《ティマイオスの眼》発動!!」

「うわっ!使っちゃうの?!

「なんだあれ?!」

「全然聞いた事ないぞ!」

「三蔵君は?」

「無いな……。もうわざとやってるだろ」

「このカードは私か《ブラック・マジシャン》と合体して、私たちを条件とする融合モンスターを特殊召喚します!!お師匠サマも流行に☒乗っただけ☒! 《呪符 竜》!!」
アミュレット・ドラゴン

『すまない．．．腑甲斐無い弟子で本当にすまない．．．』
気にするなよ
 『ぐんぐんぐんぐん』

《呪符竜》 星8／闇／ドラゴン／2900／2500

「《呪符竜》は特殊召喚時に互いの墓地から魔法カードを任意の数除外し、その数に^{×1.00ポイント攻撃力アップ}に見あつた魔力を得る！私とあなたの墓地から10枚の魔法カードを除外!!」

「では攻撃力は．．．3900!!」

「そして竜騎士 ブラック・マジシャン・ガール 《ガイアさん風の私》、手札を1枚捨てると相手カード1枚を破壊出来る。あなたのダーク・シムルグでカードをセットすることも出来ない．．．ここまでだよチドリさん！手札1枚のあなたに私達最強師弟は突破出来ない、ターンエンド!」

(マナ?) H2?1 LP1000

《竜騎士 ブラック・マジシャン・ガール》(攻)

《呪符竜》(攻)

《ダーク・シムルグ》(攻) (俺もいるぞ！)

想像以上に強敵だった《ブラック・マジシャン・ガール》！チドリ（ジユンコ）選手
はこのまま負けてしまうのか!?それとも大逆転なるかっ！

その結果は・・・

33羽—C スラム○ンクは無駄に名曲が多い

「フフフ……アハハハハハハッ!!」

《チドリ選手、ここでキャラに合わせ高笑いを始めたー!?》

「ど、どうしたのチドリさん。ピンチ過ぎて頭可笑しくなっちゃった?」

「そんなわけ無かろう。逆だ……我は嬉しいのだ、たまたま受けた護衛の任でまさかこのような強者と撃ち合えるとは! 武士として誇りに思うぞ」

コシヨコシヨ 『姐さんの中の俺らってあんな感じだったのかよ』

コシヨコシヨ 『戦闘馬鹿みたくなってきたな……』

おい上エライキリ&チドリ……聞こえてんだよ、せつかく向こうがアホみたく会場盛り上げてく

れてんのよ? 応えないとデュエリスト失格だろーがっ!!

「(ジュンコさん後々死ぬほど恥ずかしがる! まで読みましたわ)」

「(ジュンコ君、1週間ぐらい外歩けなくなるんじゃないかな・・・照れで)」
「私の、タアアーン!!」

・・・よし来たあ!

「《BF―極北のブリザード》を召喚っ!!」

『クルルッ!!』

「来たぜ、ジュンコの十八番!!」

「ブリザードの召喚時、墓地のレベル4以下の「BF」であるシユラを守備表示で特殊召喚!!」

『コンッコンッ』

『シャアッ!!』

「「「かつわいいっ!!」」」

「私もブリザード欲しい!」

「あの毛並み・・・モフりたい・・・」

ぶ、ブリザード人気だった……確かにディスクコンコンは反則的、正直惚れる。

《チューナーと非チューナーが揃った……来るぞ!!》

「参る! レベル4の《BF—蒼炎のシユラ》にレベル2の《BF—極北のブリザード》をチューニングッ!!」

「合計レベルは6……なら、あの「BF」ですわね!」

「漆黒の力紡ぎ、勇仕に宿りて神刀を振るえ! シンクロ召喚! 《BF—星影のノートウング》ッ!!」

『キエエエツ!!』

《BF—星影のノートウング》星6 / 闇 / 鳥獣 / 2400 / 1200

「ノートウングの特殊召喚時! 相手プレイヤーとモンスター1体に800ポイントのダメージを与える、選択するのはおぬし自身! 《竜騎士ブラック・マジシャン・ガール》だ! 《ホーミング・ソード》!!」

「た、ただでやられないからね! 私が得た新たな効果! 手札を1枚捨て、ノートウングさ

んを破壊するよ!!」

『馬鹿っ!』

「えっ! 駄目なの!!?」

『グエーツ?!』

『きやあっ?!?!』

破壊されても仕事するノートウング素敵よ……ライキリも少しは見習ってくんないかなあ。

『なしてっ?!?!』

《竜騎士ブラック・マジシャン・ガール》(攻2600?1800)

(マナ) LP1000?200

「痛たたあ……私のライフも攻撃力も減っちゃったけど、あなたの切り札であるシンクロモンスターは倒したよ!」

「切り札、か……そう、ブリザードはうぬの力を使わせる為の切り札には違いない」
「へっ?」

「しかし本当の切り札はこちらだ……：私の墓地には《蒼炎のシユラ》《極北のブリザー
ド》《星影のノートウング》がある、この意味がわからるかっ!!」

ガタツ《《そ、その召喚条件は!!??》》

「(このドラゴン馬鹿×2、司会進行向いてませんわね……)」

「そう、墓地に闇属性モンスターが3体いる時に特殊召喚出来る！蹂躞せよ、全てを刻む
鎧黒竜！《ダーク・アームド・ドラゴン》!!」

『グオオオオオオツ!!』

《ダーク・アームド・ドラゴン》星7/闇/ドラゴン/2800/1000

《馬鹿な?!あれはノース校に伝わる裏秘伝!!何故奴が持っている!!》

え、そうだったの?なんかごめん、他の特別のカードみたく消えてなかったから大丈夫かと……今日はシンク口無しでも戦えるように別に切り札仕込んで来たのよね、彦孔雀然りダムルグ然り。相手がエクシーズしてきたから結局使っちゃたけどね?

「そんな……私のライフ、もう200しかないのに!」

『はあ、修行のし直しだな……』

『ぐるぐるるる（俺こんだけ?!）』

「これにて終局! 《ダーク・アームド・ドラゴン》で《竜騎士ブラック・マジシャン・ガール》を攻撃! 〈アナザー・アームド・バニッシャー〉!!」

「きゃあああああつ?!」

（マナ） LP200?0

Win チドリ（ジュンコ）

《決まった〜!! 第1試合の勝者はチドリ選手だー!!》

「「「わああああああつ!!」「「「

「チドリさん決まってるー!」

「素敵ーツ!!」

「〇いて〜!!」

「もも姉様・・・」

「願いの対象ジュンコでもいいのかしら・・・ジュンコはどうせ十代とあれやこれやするんだしそのままセラさん拉致って皆で乱入して・・・クククククツ」

「なんですかその節操のない邪な計画!?!せめて脳内でやっってください!!」

「やったぜジュンコ! 流星は俺の

「まさか最後はブラマジガールをピンポイントで狙い撃ちにして勝つとは……」
「鬼畜さに磨きがかかってるっす……」

えっ?! 今十代なんてつたの聞こえない

「ぐお〜俺たちのブラマジガールが負けたああああ」

「かわいい娘に慈悲はないのかあああ」

「貴様の血は何色だあ!!」

「むう〜、負けちゃったけど……皆! 楽しかったよ! ありがとう!!」

「う、うむ、皆の衆。応援感謝する!!」

《クルツク〜》

《いや〜一戦目からあれだけ盛り上がるなんてね〜》

《本当ですね! 私あそこまでやって逆転されるなんて思いもありませんでした! あ、

そのの《ホーリー・エルフ》さん！この《スイートミルク・アップルベリーパイ・とろけるハニー添え》5つください！》

《う、有無……あ、エルフ殿。我は冷緑茶を》

一戦目が終わり、ようやく解放される……と思った矢先に実況席に呼ばれてしまったブラマジガールとジュンコさん。ああ、そろそろ演技辛くなってきたわ……つて顔が見えないけど顔に書いてありました。

《ではブルー（女）チームは次の参加者を決めてくれ！あ、僕はこの《幽鬼うさぎ大福》1つ》

「誰が行きます？ 姉様方」

「うくん、そうねえ……」

「わたくしが参りますわ、ここでもう一本とつてしまえば師匠の存在も考えて……実質詰みですし」

「はあ（普段ボロクソに言ってるくせに、あの馬鹿と妙な信頼がありますね……）」

「じゃあ頼むわね、モモ！」

「はい！おまかせくださいまし！」

正直彼が参加しないのであれば・・・オシリスレッドに自分達に対抗出来る方がいいとは思えません。十代様は3本目からラストに回さざるを得ないでしょうし

《ブルーチームはアビスリンデ選手のように！下半身が魚じゃないとかつつこんじゃ駄目だぞ！》

そこまで再現する必要を感じなかったので下半身はグンデと同じ色、オレンジのスカートにしたんですが・・・アンタが真っ先に突っ込んでどうするんですか

「モモえもくん、頑張つてね〜」

「ばっか、今はグンデさんでしょ？」

「グンデモンじゃ語呂悪いじゃん！」

「デ○モンみたいになってるよ・・・」

一年以外の女子とは交流が薄かったのだけど、今回の学園祭で上級生ともそこそこ仲良くなれたでしょうか、まあ大半が衣装作ってあげたから・・・現金な人たちですわ

ね

「ありがとうございます、頑張りますわ」

「ヒイヒイヒイ」

「モモエ→モンだあああー!!」

「悪夢が・・・悪夢が蘇る・・・」

「おい、おまえ逝けよ!」

「ふざけんなよ!俺あの方の「クラブタートル」に沈められたんだぞ?!」

「「クラブタートル」ならまだいいだろう!僕なんか「深海に潜む鮫」だぞ!《舌魚》3体になめられたんだよ!」

「どっちもまだいいよ・・・俺なんか「カエルスライム」だぜ・・・あれ以来カエルがトラウマさ・・・」

「ど、ドンマイ・・・」

「姉様普段どんなデツキつかってんですか・・・」

自分達だけ時代の違うカードプールで戦うってあまり好きじゃなかったり。けどジュンコさんがやらかしちゃったあとですしね。せめて一般流通するまでは授業や公式な場ではと色々試してます。自分も万丈目様に色々渡してしまつのですが・・・けど自分も人間だし、好きな人を鼻負して何か問題でもありませんかね？

《嫌・・・駄目じゃね？》

《チドリ選手何か言つたかい?!》

《否、気のせいであつた・・・》

《ところでさー、さつきまで司会してたXYZさんどこいったの？》

本当だ何時の間にかいないや・・・わたくしの応援はしてくれないのでしょうか、十代様みたいになんて贅沢はいませんか

「全く、どいつもこいつも頼りにならん奴等だ・・・良からう！このおI、私があのと闘つてやろう!!」

「「「おつ、おまえは?!」」」

「私は《カオス・ソルジャー》……おまえ達に勝利をもたらす混沌の使者だ!!」

そうやってギャラリィの中から出現したのは《カオス・ソルジャー》……否、万丈目サンダー・混沌の使者でありました。

何時の間にXYZから着替えたのですか……

「「「「「おおおおおっ?!」」」」」

「万丈目え?!お前何やってるんだよ!」

「ちがーう!俺さm、私はカオス・ソルジャーだ!!」

「……演技下手ですね」

「普段の万丈目君のままでもいいんじゃないかしら……」

《一敗しただけで敗北ムードだったレッドチームの危機に現れたのは、最強の戦士の異名を持つ《カオス・ソルジャー》だー!!》

《あの衣装どっから用意したんだろ、うちら知らないんだけど・・・》
 《わー！カッコいいですねー!!》

戻りかけてるジュンコさんの言う通り、元からレッドにあつた衣装でもなくわたくし達が作ったものでもない・・・わたくしが作るか聞いたら要らんとか言っていたのは自分で用意したからですか・・・

「まさかの夫婦対決！夫婦対決よ!!」

「カオス・ソルジャーカッコいいー!!」

むう、けっこう女子にも人気・・・彼、カイザー様と馬鹿程ではないけど女性人気高かつたりするんですね・・・原作より漫画版方面に性格が偏ってるせいでしょうか？

だがあえて言う・・・ヤバイカッコいい素敵イケメンなんですかあれ地道に再現度高いし・・・ジュンコさんじゃないですけどけっこうドキツときました

「誰と誰が夫婦か！行くぞはまぐ・・・アビスグンデ！貴様を倒し、俺はこの悪寒から

解放される!!」

「もう一人称戻ってるし・・・」

「悪寒って、負けたらなにされるか察したのかなあ・・・」

「は、はいっ?!いいでっしょうお相手致しますわ!?!」

「(おお・・・モモが動揺してる・・・)」

《それでは第2戦!アビスグンデvsカオス・ソルジャー選手!!》
《レッツデュエルっ》

「デュエル!!」

アビスグンデ(ももえ) LP4000

カオス・ソルジャー(万丈目) LP4000

「先攻は貰った!俺のターン、ドロー!!」

あら、普段わたくしとやる時は後攻ワンキル対策に後攻ばかり狙うくせに……ど
ういった心境の変化でしょうか

「見せてやろう……混沌の使者の力を！フィールド魔法《混沌の場》カオス・フィールドを発動！」

「っ！あのフィールド魔法は!!」

カイバーマン戦の時に馬鹿師匠の真紅眼の馬鹿が使ってきたフィールド魔法、レッド寮周辺の景色
が青白の光に染まる。あつ、ホールの方が目が眩んで飲み物こぼしてますね

「俺はこのフィールド魔法の効果により俺自身、《カオス・ソルジャー》を手札に加える
！」

「まじで持ってるのかよ！」

「あれ伝説のレアカードの1つだろ?!」

「そして万、《マンジュゴッド》を守備表示で召喚！」

『むんっ』

《マンジュゴッド》星4／光／天使／1400／1000

「こいつの召喚時に儀式魔法《超戦士の萌芽》を手札に加える……そして発動！」
「なんですって?!」

「この儀式魔法は儀式の贄として、手札とデッキから光と闇のモンスターを1体ずつ墓地へ送る！俺は手札のレベル3《儀式魔人リリーサー》とデッキのレベル5《聖刻龍―アセトドラゴン》を墓地に送り……《カオス・ソルジャー》を儀式召喚!!」
『ハアアツ!!』

《カオス・ソルジャー》星8／地／戦士／3000／2500

《混沌の場》カオスカウンター0?1

「カオソル来たあー!!でもなんで万丈目が持ってたんだ?」

それな。カオス・ソルジャー自体は高いとはいえ市販のカード、あり得ないとはい

切れませんが・・・なんで《超戦士の萌芽》とか持つてるんですかね、わたくし微塵も記憶にないのですが・・・ジュンコさんは？（目で合図）

「手で合図知らん知らん」

「ふっ、いい顔だ。少しは驚いたか！・・・カードを1枚セットして、ターンエンドだ！！」

カオス・ソルジャー（万丈目） H 6？ 2

《混沌の場》（1）

《カオス・ソルジャー》（攻）

《マンジュゴッド》（守備）

セットカード

《カオス・ソルジャー選手、1ターン目から自分を召喚！グンデ選手はどうでるか？！》

「いいぞー万丈目ーっ！！」

「さんだ！じゃなくて・・・カオス・ソルジャーだ！！」

《演技駄目だな・・・しかし、《儀式魔人リリーサー》を使用してグンデ殿の特殊召

喚を封じている。彼女には厳しいだろう」

《特殊召喚封じされて厳しくない方が珍しいと思うな》

「わたくしのターン！」

確かに特殊召喚封じはきついですが、それだけなら対処する方法はいくらでもありま
すわ！

「まずは憂いを払う《サイクロン》!!」

「チツ、畏発動《スキル・プリズナー》!このターン中、《カオス・ソルジャー》を対象
とするモンスター効果をすべて無効とする!!」

《《スキル・プリズナー》か、このターンは特殊召喚封じから解放されぬかもな》

むむむ、確かにその通り。《皆既日食の書》とか《闇の護封剣》があれば話は変わるの
ですが生憎手札に無いですし……

「モンスターとカードをセットし……ターン終了ですわ」

アビスグンデ（ももえ） H6?3

セットモンスター

セットカード

「あのワンキル某の浜口がなにもしてこないだと?！」

「特殊召喚封じが効いてるんだ! チャンスだ万丈目!!」

「カオソルさんだ! 俺のターン、ドロロー!!」

「「サンダー!!」」

結局サンダーじゃないですか……

「お返した、《サイクロン》!! その付せカードを破壊する!!」

「お返しです、《強制脱出装置》発動! 対象は勿論《カオス・ソルジャー》ですわ!」

「フリーチェーンの万能除去か!」

「儀式モンスターを手札に戻す、きつついすね．．．」

「ふん、この程度は想定内だ。《強欲な壺》発動、2枚ドロ．．．ククツ《天使の施し》発動。3枚ドロし2枚捨てる。今捨てたカード2枚はモンスターカード、よって《混沌の場》にカウンターが乗る」

カオスカウンター（1?3）

「魔法カード《ダーク・バースト》により《宵闇の騎士》を手札に戻す。カオスカウンター3つを取り除くことで《超戦士の儀式》を手札に加え．．．発動！今度は場の《マンジュゴッド》と手札の《宵闇の騎士》を超戦士の糧とし、再び儀式召喚！再臨しろ《カオス・ソルジャー》!!」

『トアツ!!』

「おっと、儀式魔法発動時に《増殖するG》を捨てさせていただきました1枚ドロ貰いますわ」

「ヒイヒイヒイ」

「うわあああああつ?!」

「Gだあああああ!!」

「・・・心配せずともエフェクトOFFですわ」

《だ、そうだ！観客のみなさん安心して食事と観戦を続けてくれ！》

《本当ですか?! すいませくん、この《かつと海老ングおにぎり》3つ下さい!!》

《何っ?! とろける(略) 5つがもう無いだと?!》

ブラマジガールさん食べるの早いですねっ?!

「Gを含めモンスターが3体墓地へ行つたため、カオスカウンターが3つ増える・・・だがこのターンで決めてしまえば問題無い！見せてやろう・・・俺は！先ほど施して捨てた墓地の《宵闇の騎士》と《マンジュゴッド》をゲームから除外!!」

《こ、この召喚条件は?!》

「光と闇の魂を生贄に・・・現れよ！《カオス・ソルジャー—開闢の使者—!!》

『はあああつ!!』

《カオス・ソルジャー—開闢の使者—》星8／光／戦士／3000／2500

「《宵闇の騎士》が除外された事で《古聖戴サウラヴィス》を手札に加えておく」

《きたあー！存在数がアホみたいに少なくせに制限カードに指定されている伝説急のレアカード!!》

《—開闢の使者—！すつごうい!!私、マスターのデッキくらいでしか見た事ないや!!》

《・・・マスターとは?》

《あ、いや・・・なんでもないよ?アハハハハ》

あのコ、精霊って隠す気あるんですかね?どうせわたくし達にはバレバレなんですが・・・つとあぶないあぶない、効果処理つと。

「Gの効果で1枚ドロ・・・そして!」

「?!」

「相手がモンスターを特殊召喚した際に手札から《ドラゴンアイス》の効果を発動!《海皇の重装兵》を捨て、守備表示で特殊召喚!!」

『フユウウウ・・・』

《ドラゴンアイス》星5／水／ドラゴン／1800／2200

「海皇が水属性のモンスター効果で破棄された場合効果が発生！重装兵は表側のカードである開闢の使者を破壊します!!」

「墓地の《スキル・プリズナー》を除外しそのモンスター効果を無効にする!!」

《カオス・ソルジャー選手、奇襲攻撃をかわしたあー!!》

《あ、熱い攻防ですねくくく》

《だが結果としては伝説の戦士がフィールドに2体。グンデ殿が圧倒的に不利であるな》

プリズナーを使わせたまでは良かったのですが、サウラヴィスなんてものをサーチされるとはくくくく。なんなんですかあのデッキは!!（無言の目線t o ジュンコ）

「（知らん！ほんつとくにしらん!!）」

「行くぞ！《宵闇の騎士》を儀式の贄にした事により、俺自身に新たな効果が追加されている！貴様のセットモンスターをくくくく除外する！〈次元斬〉!!」

「くっくくくく」

魔知ガエルが・・・鬼ガエルをサーチして次のターンに攻勢に出るつもりでしたの
にっ！

「喰らうがいい！開闢の使者で《ドラゴンアイス》を攻撃！《開闢双破斬》!!」
『ゴアアアッ?!』

「姉様のモンスターが、スイカみたいに真っ二つに！」
やめたげてください！アイスさんは頑張ってくれたのですわ！ちよつと時○双破斬
！とか脳内で叫んでいませんから、決して!!

《あのコ結構余裕じゃん・・・》

「開闢の使者はモンスターを破壊した時、続けてもう一度攻撃出来る！へ時空突破・開闢
双破斬<!!」

《えっ？時空剣技・○空双破斬!!?》

《どこの時空剣士だーっ！二人して脳内で同じボケをかますな伏せ字がほぼ意味を
なしてないわっ!!》

《なんの話ですかあ?!》

「ジュンコさんが我慢出来なくてついに突っ込んだーっ?!」

「やっぱ謎の安心感があるんだなあ……」

!!
……このまま負けて彼の機嫌をとっておくのもまた一興……だ、け、れ、ど

「手札の《ゴーストリック・フロスト》の効果を発動!」

「んなにい?!」

!!
「攻撃してきたモンスターを裏側守備に変更し、このコを裏側守備で特殊召喚致します」

『ヒューウ!』

《ゴーストリック・フロスト》星1／闇／悪魔／800／0

「……可愛いっ!!」

「今日は目の保養が多いわ!!」

「サウラヴィスの効果が発動出来なかった……何故だっ!」
「残念ながらこのコは攻撃モンスターを問答無用で凍らせる……対象を取る効果ではないのです!」

「そんなモンスターをデッキに入れていたとは……目障りだ、片付けてやる俺自身の攻撃!へカオス・ブレード!」
『ひっほおく……』

「そんな!雪見大福が!」?明

「お腹空いたならなにか頼んでください!」?セ

「ありがとうございましたフロストさん……守りが薄すぎると思って刺してみたカードが大活躍ですわね今回……」

「想像以上にしぶといな、カードを1枚セットしターンエンドだ」

(サンダー) H3?2

《混沌の場》(1?3?0?6)

《カオス・ソルジャー》(攻)

セツトモンスター(開闢の使者)

セツトカード

《超戦士2体の猛攻を凌ぎきったグンデ選手!はたして反撃なるかつ!》

《ドローして手札2枚ですか、厳しい状況ですね・・・》

《だが特殊召喚の制限は消えた、手札にあのカードがあるならば・・・》

「わたくしのターン!」

これは・・・正直、ライフ無傷では使いたくないカードですが仕方ありませんわね、付せカードもありますし・・・

「魔法カード《ヒーローアライブ》を発動!ライフを半分払い・・・デッキからレベル4以下の「E・HERO」を特殊召喚します!」

グンデ(ももえ) LP4000?2000

「ただでは通さん!手札の《増殖するG》発動!!」

《カオス・ソルジャー選手《増殖するG》を投げ返したあ!》

《夫婦って言われるだけあって、所々採用カード似てるんですね。面白い!》

「うぐ……デッキから《E・HEROバブルマン》を特殊召喚!」

『とああっ!』

《E・HEROバブルマン》星4/水/戦士/800/1200

「ならば1枚ドロ!」

「バブルマンの特殊召喚成功時、デッキから2枚ドロ!!」

「やっぱバブルマンいいよな!デッキの回りが数段よくなるぜ!」

「(それ原作版だけだったっの、OCG効果でも強いけど)」

いいカードは引けましたがGの影響下、けれど2体の超戦士を放置しては次の彼のターンでわたくしのライフが持ちませぬね。ここは肝を据えて、あの2体を倒す所まで展開しますか!

「おいでませ！《海皇子 ネプトアビス》!!」

『どくもつ、つてあらら。結構ヤバそうだねモモ』

《海皇子 ネプトアビス》 星1 / 水 / 海龍 / 800 / 0

「そうなんですよ……是非力をお借しくださいな」

『了解だっ!』

「でおつたな鬼畜皇子め……」

案の定客席から悲鳴が、ブルーやイエローの方にはたまくに使いますからね、あくまでたまくに……本当は最初から手札にいて、前のターンに召喚したかったのですがプリズナーとリリーサー適用中でしたからねえ

「私まだモモ姉様とデュエルしてないんですが、あのモンスターそんなにギャアギャア言われる程なんですか?」

「見てればわかるわよセラさん……ポジション的にはあなたのデューザみたいなもの

かしら」

「参ります。ネプトアビスのモンスター効果発動！デツキから《海皇の龍騎隊》を墓地に贈りデツキから《海皇の龍騎隊》を手札に加えます！この時龍騎隊の効果により、さらにデツキから海龍族モンスターの《海皇の狙撃兵》を手札に招く!!」

「なんか手札増えてますけどあれーっ?!」

そんなセラさんの反応、新鮮でいいですわね……この学園の方達はもう、使う度に青ざめたりドン引いたりしてくるばかりで……

《いや……当然の反応じゃね? (茶すすりながら)》

《当然の反応だね……(コーヒースすりながら)》

《二人とも突然どうしたの?!》

「そして手札から龍騎隊を捨て、《水精燐ーディニクアビス》を特殊召喚!!」

『ガロオオオウ!!』

《水精燐—ディニクアビス》星7／水／水／1700／2400

「ディニクまでいたか・・・一枚ドロっだっ！」

「特殊召喚成功時！デツキからわたくし《水精燐—アビスグンデ》を手札に加え、龍騎隊の効果で《水精燐—メガロアビス》を手札に加えます!!」

「明日香お姉ちゃん・・・私、アドの概念が壊れそうだよ・・・」

「安心して、誰もが一度

は思う事よ・・・わたしはもう、通したら負けと諦めたわ」

「続いて手札の《海皇の重装兵》と《海皇の狙撃兵》を捨て、《水精燐—メガロアビス》を特殊召喚！」

『グガアアアアッ!!』

《水精燐—メガロアビス》星7／水／海龍／2400／1900

「1枚……ドロー!」

「この瞬間!メガロさんと海皇達の効果発動!まずはメガロさんの効果で《アビスケイルーミズチ》を手札へ!そして捨てられた狙撃兵の効果でセットされていた開闢の使者を、重装兵の効果であなた様を破壊しますわ!」

「む……手札のサウラヴィスを捨ててモンスター効果を起動する。俺を対象とする魔法・罨・モンスター効果を無効にするぞ!」

なんかカオス・ソルジャーの背後にサウラヴィスが居座って、後光差してる感じになつてますわね……

「ですが一番やつかない開闢の使者は破壊できました。メガロさん効果発動!ネプトさんを喰らつて2回攻撃の権利を得ます!さらに墓地へ送られたネプトさんの第2の能力!墓地の「海皇」モンスター、龍騎隊を復活させる!!」

『ギャツ!』

《海皇の龍騎隊》星4/水/海龍/1800/0

「レベル4のモンスターが2体……ここだつ!罨オープン《天地開闢》!!」

「なっ、なんでですかそのカード!？」

「これはデツキから「カオス・ソルジャー」または「暗黒騎士ガイア」モンスターを含む戦士族3枚を選び公開する。俺が選ぶのは《カオス・ソルジャー―宵闇の使者―》《開闢の騎士》《ネクロガードナー》。相手はこの中からランダムに1枚を選びそれを手札に加える。カオス・ソルジャーや暗黒騎士ガイアモンスターではなかった場合はすべて墓地へ送るがな……さあ、選べ!」

「選べと言われましても……どれ当てても墓地アド稼がれるのでせめて宵闇の使者は外したいですね……」

「いいなあ〜あれ!地味に欲しいなあ〜、ネクロガードナーとかダークマンをピンポイントで墓地にやれるじゃねーか!」

「(あつたかな……今度探しとこ。ってカオソル発動条件か……)」

「……真ん中で」

「フツ……貴様はまず真ん中を狙うくせがあるのを知っているか?」

「えっ?」

「貴様が選んだのは《カオソス・ソルジャー―宵闇の使者―》だ！手札に加え、残りは墓地に捨てるぞ」

《おっとカオソル選手！嫁の癖を利用してアドバンテージを稼いできたぞ!!》

《仲が良いって素敵ですぬ〜！私もあの方と・・・キヤツ》

「(マナの好きそうな人・・・王様かな)」

く、癖を見抜かれるなんて・・・ちよつと、嬉しいかもですわね。

「レベル4の龍騎隊とバブルマンでオーバーレイツ！貴方だけみつめてる、暗き深淵から今でもずつと。ランク4！《深淵に潜む者》!!」

『・・・ククク』

《深淵に潜む者》★4／水／海龍／1700?2200／1400

「そのおかしな口上はやめろ、怖いわっ!・・・特殊召喚時に1枚ドロ。そして！墓地の《ネクロガードナー》を除外し、このターンの攻撃を一度無効にする!!」

「あら。でしたら深淵さんのOオーバーレイ・ユニットURは温存しましょうかね……《アビスケイルーミズチ》をメガロさんに装備し攻撃力800アップ!さらに深淵さんのOURに水属性モンスターがいるのでわたくしの水属性モンスターは攻撃力500アップ!!」

メガロアビス(攻2400?3200?3700)

デインクアビス(攻1700?2200)

「バトルです!デインクさんで《カオス・ソルジャー》を攻撃!」

「……この攻撃は、すでに発動している《ネクロガードナー》が防ぐ」

「これで邪魔はなくなりました……メガロさんで続けて攻撃!へメガロ・ブレード
!!」

「なんだあの技名は!」

「対抗意識じゃないっすかね……」

「ぐおおおっ……おのれっ!」

カオス・ソルジャー(万丈目)LP4000?3300

「終わりですわ！メガロさんで2度目の攻撃！〈古鯨流・双破斬〉!!」

「かなり無理矢理だなっ?!戦闘ダメージを受けた時、手札から《トラゴエディア》を特殊召喚!このモンスターの攻守は手札の枚数×600ポイントとなる!俺の手札は4枚!」

《トラゴエディア》星10／闇／悪魔／??2400／??2400

『クハハハハハハハハッ!!あの小僧はどこだあ!!』

「「「えっ?」「」?精霊見える勢

『よくも封印してくれおって・・・今度こそ私の本来の力を取り戻す

「メガロさんで攻撃!!」

『ギャアアアアアアアッ?!おのれ人間共オオオオオオオッ!!』

一瞬漫画版のラスボスっぽい方いましたが、倒したし大丈夫ですわね!多分!!

「・・・なんだったんだ?いつたい」

「凄く恐いのがいたんだなあ……」

「(……うん。あとであれだけ返してもらおうかな!)? 元凶

「隙ありっ! 深淵さんのダイレクトアタック!」

「グハッ?! おのれえ……」

カオス・ソルジャー(さんだ!) LP 3300? 1100

「メインフェイズ2! メガロさんとディニクさんでオーバーレイッ! 深き海に眠りし水精の王、悠久の時を越え今日覚めん! エクシーズ召喚! ランク7 《水精鱗—ガイオアビス》!!」

『ヌオオオンツ!!』

《水精鱗—ガイオアビス》★7 / 水 / 水 / 2800? 3300 / 1600

「一枚……ドロー!」

《グンデ殿のエースの登場か、これは勝負がわからなくなってきたな》

うん。ミズチ維持か否か結構悩んだのですが……もし宵闇の使者が出せる状況

ならこちらの方がいいですからね。

「わたくしはターンを終了致しますわ」

グンデ（ももえ） H2? 1 LP2000

《水精鱗―ガイオアビス》（攻） O U R 2

《深淵に潜む者》（攻） O U R 2

《手札2枚からここまでの状況を作りあげたグンデ選手！このままカオス・ソルジャー選手は負けてしまうのか！》

《それとも？手札に大逆転のチャンスをかかえているのか？その結末は……君達が導いてねっ（ハート）》

「あ、またやるんだアレ……」

一方、サンダーの手札では……

「（手札抹殺か打ち出の小づち手札抹殺か打ち出の小づち手札抹殺か打ち出の小づち手

札抹殺か打ち出の小づち．．．」

『『わくん！ごめんよアニキ！！』』

『いやあくでばんなかったからみんなさみしくてさく（てへぺろ）』

H 5

《おじやまイエロー》

《おじやまグリーン》

《おじやまブラック》

《光と闇の竜》

《カオス・ソルジャー——宵闇の使者——》

超絶事故が発生したりしていた．．．

続！

33羽―D　口で否定しててもアンタ達が仲良いのはよ
くわかった

「俺のターン……ドローっ!!」

さて、彼の墓地のカードは確か……

闇属性に

リリーサー

トラゴエディア

光属性が

アセト

サウラヴィス

開闢の使者

開闢の騎士

その他の属性で

カオス・ソルジャー

これに加えて施して捨てたモンスターが1枚。今の所、宵闇が出せる状態ではないの

で警戒はいりませんわね。

「スタンバイフェイズに《深淵に潜む者》の効果を発動！オーバーレイユニットをひとつ使いこのターン、墓地で発動するあらゆる効果は使えなくなりますわ！そして水属性モンスターの効果で墓地へ送られた龍騎隊の効果によりデッキから《深海のディーヴァ》さんを手札に加えます！」

『待ちくたびれたわ、このまま出番無しかと思った』

彼の手札は6枚、対してわたくしの守りはガイオさんと深淵さんのみ。突破しようと思えば容易に突破可能ですがはたして……

「(ドローカードは……《融合》、だと……)」

『『おじやま究極合体！おじやま究極合体！』』

『きみたちうっさいよ(出番くれ)』

「(この状況でキングを出しても……いや、待てよう?)」

「《混沌の場》のカオス・カウンターの3つ取り除き、デッキから儀式魔法、《オッドアイズ・アドベント》を手札に加える！」

「お、《オッドアイズ・アドベント》オ?!」

なんでそんなもの入ってるんですかね!? 毎回毎回よく事故らないものですわ・・・
（※事故ってます。）

「そして《オッドアイズ・アドベント》を発動! この儀式魔法は、自分フィールドにモンスターが存在せず、相手フィールドにモンスターが2体以上居るとき、エクストラデッキの「オッドアイズ」モンスターを贄に、墓地からも儀式召喚出来る!! レベル7の《オッドアイズ・メテオバースト・ドラゴン》を生贄に・・・儀式召喚! 《古聖戴サウラヴィス》!!」

『クウオオオオオツ!!』

《古聖戴サウラヴィス》星7/光/ドラゴン/2600/2800

《わ〜! さっきもちらつと見えただけど、綺麗なドラゴンですね〜!!》

《ぶつくしい……》

「盛り上がってる所残念ですが……ガイオさんより攻撃力の低いモンスターの効果は無効に出来ます、深淵さんの効果で攻撃力は3300！深淵さんを倒そうとしてもガイオさんがオーバーレイ・ユニットを持つ限りレベル5以上のモンスターは攻撃出来ませんわ！」

「フツ、焦るなよ……俺の手札をみるがいい！」

「そういうって彼が手札を公開してきたのですが、えつとくおじやま3体に《光と闇の竜》?!とんだ事故じゃないですか……あと1枚の魔法はゆ、《融合》?!」

「ここで俺が《おじやまキング》を召喚したら、どうなると思う！」

「え、え……わたくしの場が、埋まります」

「……………」

「そうだよな、場が埋まるだけなんだよな……が、しかし！《融合》を発動!!」

「……………ええええええ?!」

「《おじやまグリーン》と《おじやまブラック》を手札融合！層も積もれば竜になる。雑魚を犠牲に始祖の力を呼び起こせ！融合召喚《始祖竜 ワイアーム》!!」

『ウガアアアアッ!!』

《始祖竜 ワイアーム》星9／闇／ドラゴン／2700／2200

「し、しまった！忘れてましたわ?!」

「こいつは通常モンスター以外に戦闘破壊されずモンスター効果も受けない！よってガイオアビスの攻撃抑制効果も無意味だ！」

「やっぱ昨今の効果モンスター祭の中じゃ強いわよねアレ」

わたくしのデッキ除去魔法・畧少ないんですがどうしましょう?!

「行けっ、バトルだ！ワイアームで《深淵に潜む者》を攻撃！〈源流のジェネシス・ストリーム〉!!」

「きゃっ！深淵さんが……」

グンデ（ももえ） LP20000?15000

「俺はこれでターンエンド！」

万丈目 H2

《混沌の場》（6?3?6）

《聖古載サウラヴィス》（守）

《始祖竜ワイアーム》（攻）

《カオス・サンダー選手、今後はドラゴンの応酬だーっ!!》

《また戦況が一変しましたね〜あんな手札でよく動くなあ……》

《カオス・サンダーで、混ぜっておるな……》

「わたくしのターンですわ！」

手札にはディーヴァさんがありますが……サウラヴィスがいる限りシンクロ・エクスーツは封じられる、ネプトさんをよんでもデッキの重装兵は0枚……こうなったら！

「はああああああつ!!」

《あつ、あの掛け声は!!》

《なんか手が紫色に光り出したんですが・・・いったい何が始まるんです?!》

「やめなさいももえ! 貴女はこの一週間、度重なる裁縫により女子力を大量に消費している! 今それを使えば女子力を失って・・・消滅するわ!!」

「・・・はっ?」

「し、しかし明日香様! この状況では・・・」

「大丈夫だよももえもくん!」

「無茶はしないで! 私達の夢(欲望)の為に犠牲になることはないから!」

「ありのままの結果を受け入れます!」

皆様・・・

「女子力の消費・・・消滅???全然わかんないよー! ジュンコ姐さーん!!」

「(実はこの格好だとツツコミしなくて楽だ、とか正直思ってたりにして。すまねえ、セラ

「ちゃんすまねえ……」

「……ふう。ドロー」

「パリアンズ・カオス・ドローへア レは使わないのか」

「ええ、だって……必用ありませんでしたから。それに……わたくしの引いたカードは！《RUM―七皇の剣》!!」

「なんだとお?！」

「……ももえもん!!!」

「全部説明したら長いんで以下略！おいでませカオス・ナンバーズ《C・N0101》!!満たされぬ魂の守護者よ、暗黒の騎士となって光を砕け!」サイレント・オナーズ S・H・dark Knight!」

『フツ、昔からお前は面倒くさいヤツ(女)だった』

《サイレント・オナーズ S・H・dark Knight!》★5／水／水／2800／1600

「ダーク、ナイトっ！．．．（サウラヴィスの能力は、チェーンの発生しない特殊召喚を無効にする。あのカードから呼ばれたのでは無効に出来ない！）」

「当然効果発動！サウラヴィスを吸収してOオーバーレイ・Rレイ・Uユニットに変換するへダーク・ソウル・ローバー！！」

「くっ、こうもあつさり対処してくるとは．．．」

けれどワイアームの突破には時間がかかる、今ディーヴァさんと呼んでもたつこのことからコールド出せるくらいですし、コールド呼んでも切る手札無いから温存ですわね．．．とゆうか、またゼロランサーあれば勝てましたわね。

「ガイオさんとダーク・ナイトさんでワイアームを攻撃！」

「チイツ！」

カオス・サンダー LP1100?900

「ターンを終了致します」

グンデ（ももえ） LP1500

《水精燐―ガイオアビス》（攻）ORU2

《S・H・Dark Knight》(攻) ORU2

「フツ、あの時そつくりのフィールドだな……」

「えっ?」

「最もそいつら2体を同時に相手にしてはいなかったが……行くぞ!俺のターン!」

《カオス・サンダー選手の手札はまさに混沌としている!何を引けば逆転出来るのかあー!?!》

もしかして……ノース校で初めてお互い本気のデュエルをした時の事を言っているのでしょうか(番外編参照)。また結構前の話を……やっぱり、ちよつと嬉しいですわね。

「ふふつ、まさか逆転のキーも同じとはな……《貪欲な壺》を発動!墓地から《聖刻龍アセトドラゴン》《古聖載サウラヴィス》《開闢の騎士》《カオス・ソルジャー——開闢の使者——》そして施して捨てていた《ギヤラクシー・サーペント》をデッキに戻しシャッフル!2枚ドロー!!」

「この状況で新たなドローカードを引き込むなんて……」

「あの頃とは違う！俺の進化をみるがいい!!《混沌の場》のカオス・カウンターを3つ取り除き、新たな《超戦士の萌芽》を手札に加え発動！手札のレベル2《おじやまいエロー》とデッキのレベル6《ラブラドライドラゴン》を儀式の糧にし、墓地のこの俺、《カオス・ソルジャー》再々臨!!」

『はあああつ！』

《カオス・ソルジャー》星8／3000／2500

《またまた自身召喚ーっ！このカオス・ソルジャーは 倒れる事を知らないのかぁー?!》

「そしてえ！俺の墓地の光と闇属性モンスターは丁度3体ずつ！このうち闇属性モンスターを全て除外する事でこのモンスターを呼び出す！《カオス・ソルジャー》宵闇の使者ー!!」

『フンツツツ!!』

《カオス・ソルジャーー宵闇の使者ー》星8／闇／戦士／3000／2500

「こっちもカッケェー!？」

「開闢の使者とは違うのか、召喚条件が若干難しいな……」

やだ超イケメン……実践で使ってる人初めてみましたわ、わたくし的に開闢よりこちらの方が好みかも。

「今日の万丈目君、やたらイイよね！」

「イケメン祭よ〜！」

「吹雪様とかに隠れがちだけど本人もイケメンってゆう……」

むう……あげないし……

「フフツ、大丈夫よモモ。誰も盗らないわ」

「また急に変な事言ってるよう……」

「こいつの効果は優秀だが、使用したターンはバトルフェイスが行えない……よつて！俺は宵闇とオーバーレイツ！」

「はいいい!？」

「2体の《カオス・ソルジャー》でエクシース召喚！混沌に宿るは神竜の魂！《神竜騎士フェルグラント》!!」

『とあああつ!!』

《神竜騎士フェルグラント》★8／光／戦士／2800／2200

「イケメン2体でイケメンを繰り出した?!」

「あの強力なカオス・ソルジャー達をわざわざ素材にするだ?!」

「しかも攻撃力下がってるし……なに考えてんすかね?」

うわ、万丈目様らしい……けどたしかエネアード持っていましたよね、なんでこっち?

「ふ、超戦士2体でランク8ドラゴンを出すのは止めたか……このコスプレデュエルとゆう環境で、観客にも伝わる選択肢を選んでくる！流星は新たな我が弟子！万丈目・カオス・サンダーよ!!エンターテ→イイイメント精神が備わってきたね!」

「(ありがたいございます、師匠!)」

なんか馬鹿と万丈目様が親指立てて通じ合ってるんですが……やっぱり犯人は奴でしたかコノヤロー！わたくしの準様になに仕込んでくれてんですか!!

「そしてえ！秘技《トライワイトゾーン》発動！墓地からレベル2以下の……来い、雑魚共!!」

『『呼んだ〜?』』』

《おじやまいエロー》星2 / 守10000

《おじやまグリーン》星2 / 守10000

《おじやまブラック》星2 / 20000

「うっ、出ましたねおじやま共……」

『いやくんももえの姐御つたら〜』

『そんな露骨な顔しないで』

『アンタと俺達の仲じゃないか〜』

「○ね。」

『『ド直球?!』』

『……イラつと来るぜ』

あゝム〇つく、緑と黒はまだいいけど黄色はマジム〇つく……なんでこんなのとわたくしが中の人同じなのか……

「フフフ、よつぽどおじやま共が嫌いに見える……だが安心しろ。《おじやまグリーン》と《おじやまブラック》を生贄に捧げ！」

『『また俺達く?!』』

「現れる！ ライトアンドダークネス・ドラゴン 《光と闇の竜》!!」

!!不味つ……

『きたいにこたえてぼくさんじよう！（どけ雑魚共）』
『ライダの姉貴、相変わらず口悪いわねん……』

「……えっ?」

「ば、馬鹿っ! そっちの姿で出てくる奴があるかっ!!」

万丈目様の代名詞(?) 《光と闇の竜》が召喚されました……少女ライダの姿で。さりげなくおじやマイエローは残すあたり流石です

『なにつ、こちらのすがたのほうがきやくうけがいいのではないのか?! (この変態共)』
「ええいつ、ツッコまれる前にさっさと竜に戻れ! そろそろ決めねば後の試合に回す文字数がきついんだ!!」

「なんの心配すか?!」

『ちえっ (嬉しいくせにツ〇デレさんめ)』

ポンツ☆とゆう音と共にドラゴンの姿に戻る《光と闇の竜》。さながら、某手強いシミュレーションのマク〇ートのようですね

《光と闇の竜》星8 / 光 / ドラゴン / 2800 / 2400

《今のは……》

《出たあ！カオス・サンダー選手の切り札！《光と闇の竜》だ!!》

「(流す気だ、勢いで誤魔化す気だ?!)」

「遊びは終わりだ……バトル！《神竜騎士フェルグラント》でガイオアビスを攻撃！

〈閃光烈刃〉!!」

「迎え打って〈ゼウス・ブレス〉!!」

神竜騎士と海神の戦いは派手な攻防の後……相討ち。何故か爆発演出が入るのはこの際もうつつこまない。

「これでレベル5以上のモンスターも攻撃出来る、やれっ《光と闇の竜》！ダーク・ナイトを亡き者にしろ!!〈シャイニング・ブレス〉!!」

『グガアアアッ?!(さっきのことおこってんの)』

「さっきからなんなんですかもうっ、お願いします〈デモンズランス〉!!」

『イラつときてるぜ……』

わたくし達のエース、再び相殺……お客方は盛り上がってますがどうするんですよ
うこの後。

「チエーン1！破壊されたライダの効果発動！フィールドの全カードを破壊し、墓地からモンスターを1体特殊召喚する！へレイズソウル！！」

「チエーン2！破壊されたダーク・ナイトさんの効果発動！墓地からこのモンスターを特殊召喚！へリターン・フロム・リンボ！！」

「……だあ！手札から《D・Dクロウ》を捨てて効果発動！貴様の墓地のダーク・ナイトをゲームから除外する！」

「そ、そんな?!」

『べ〇タアアアアアツ!!』

ダーク・ナイトさんが《D・Dクロウ》に捕まれて異次元の穴に吸い込まれてしまいました……あの鳥、力凄いですわね?!

「そして我は蘇る……光と闇の能力により、墓地から《カオス・ソルジャー》再々々臨ツ!!」

『はあああつ!!』

「俺自身の手で幕を引いてやる!ダイレクトアタック、へカオス・ブレード!!」

「ここまで魅せられては……仕方ありませんね。」

グンデ(ももえ) LP1500?0

WIN カオス・サンダー

《決まったあく!激闘の第2戦を制したのは……一!》

《えつと……十?》

《百!》

「千!!!」

「万丈目カオス・サンダー―混沌の使者だ―!!」

「わあああああつ!サンダー!サンダー!万丈目、カオス・サンダー!!!」

《もうこすぷれいらないんじゃないかな！（真顔）》

《いや、夫婦対決は激闘だったね二人共！》

《はいっ、ますます惚れ直しましたわっ》

《誰と誰が……ハア、もういい、疲れた……》

ももえと万丈目君、凄いデュエルだったわね……皆どんどん強くなってく

「あ、もうチドリ解除していいわよね？慣れない事するもんじゃないわ……」

「ジュンコお疲れっ、すげー汗だな……ほら、水とタオル」

「（やば、汗くさい？）う、うん……ありがと十代」

「……なんで礼言いながらあとずさるんだよ」

「あ、あはは。なんでもないのでよなんでも」

ジュンコも凄かった、慣れない演技もしてデッキにも新しい戦術を組み込んで……この学園祭の準備で一番疲れているのもあのコ達二人のハズなのに

《では両チーム。次の出場者を決めてくれ!!》

《そういえばブラマジガールさんは?》

《満腹になって満足したから帰るそうだ……》

「明日香お姉ちゃん、どっちが出る?」

あ、セラさん超かわいい。今の首傾げる動作なんて最高……じゃなくて!皆に負けてらんないわ!!

「私がいくわ、レッドチームもそろそろ人材不足。ここで一気に畳み掛けるわよっ!!」

《ブルー(女) チームからはマイグレートシスター……じゃなくて、《サイバー・ブリーダー》選手の登場だっ!!》

《ああ、無駄に衣装が過激ですわ……視てください、一部の男子なんて鼻血吹い

てますもの、ベタですわね〜》

《う、うむ……（お前も割と露出度高い、とは言いづらいな）》

「二「明日香さ〜ん！頑張つて〜!!」二」

「お姉ちゃんファイト〜！（やつとボケ空間から解放された!）」

「ここで明日香さんかよ……女子最強をどう迎え打つ?」

「いや、ここは俺が行こう。あの姿の明日香さんにボコボコにされたい」

「ばつきやろう!じゃあ俺が行くよ!あの脚に蹴られてひざまづきたい!!」

「……誰ひとり勝つ気が無いっすね」

「レッド寮はこの先大丈夫なんだろうか……」

やれやれ、これなら誰がきても楽勝ね。ちよつとは手応えがある相手じゃないと十代やセラさんにいいところ魅せられないわ……

「全く、情けないボウヤ達ネ!……とても任せてられない。ここは我が行こうではな

「いか！」

「い、この声は……」

「か、コミュニーラ寮長（代理）！」

「コミュニーラ寮長（代理）！」

「寮長（代理）!!」

「否！我はコミュニーラにあらず！誇り高きヴァンパイアの女帝《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》なるぞ!!」

「「「おおおく!!!」」」

コスプレがあまりコスプレをしていない、コミュニーラこと《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》が現れた！

「ちよつと！あなたはキッチンの責任者でしょ！仕事ほっぽりだしてなにやってるのよ!!とゆうか太陽が露骨に当たってるけど大丈夫なの?！」

「ウフフフ……キッチンなら鮎川に頼んで少しの間替わってもらったわ。日光に関しては心配無用よ……日焼け留めを塗つといたから30分くらいなら」

「ひ、日焼け止めでなんとかなるもんなんだ……」

「あれ？ ジュンコどこ行くんだよ」

「キッチン不安だからみてくる……」

「そんな！ ジュンコ姐さんいつちやうの?! (ツツコミ要員がつ)」

くつ、まだジュンコはカミューラに苦手意識があるようね。十代と離れたからチャンスのような、親友として淋しいような……とゆうか主人公不在で大丈夫なのこの小説?!

「アナタとは一度闘わなければならないと思っていたのよ、毎朝毎朝レッド寮に押し掛けてきて……十代の世話は私の仕事よ！」

「アンタにだけ任せてなんかいられないわよ！ 高カロリーメニューばかりで栄養バランスがまるで考えられていない……みなさい！ アンタのせいであんな生徒が太つ

てきてるのよ!？」

「明日香さん、俺は元々こうゆう体型なんだな・・・」

「育ち盛りの男子達にモリモリ食べさせて何が悪いのかしら? 太ったコは自己責任ヨ
!」

「なんか、主旨がずれてきてるな・・・」

《ヒートアップ! してきたところでレッドの出場者はヴァンプ選手でいいのかな?》

「よろしくてよ! 我は寮長(代理)として、うちのボウヤ達の願いを助けてあげる義務があるわ!! (十代の好感度アップ! くふふふつ)」

「「ヴァンプ寮長!! (代理)」」

演技が一人称替えただけ・・・まあ私は演技すらしてないから突っ込めた義理じゃないけど。

まあいいわ、以前ジュンコとももえを酷い目に合わせた敵の分もついでに含めて・・・
絶対勝つてやるんだから!!

《それでは第三戦！《サイバー・ブレード》対《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》選手！デュエル開始！！》

「デュエル！！」

サイバー・ブレード（明日香） LP 4000

ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア（カミューラ） LP 4000

「私のターン、ドロロー！」

カミューラのデッキは「ヴァンパイア」……とみせかけたアンデットの複合デッキだったはず、《幻魔の扉》なんてインチキカードを除いても、あの万丈目君とジュンコを倒した程の実力者……油断せずにいくわよ！

「まずは《テラフォーミング》を発動し、フィールド魔法《祝福の協会―リチュアーアル・チャーチ》を手札に加え発動。手札の魔法カードを捨てて、デッキから《サイバー・エンジェル―那沙帝弥―》を手札へ。《儀式の準備》を発動、デッキから《サイバー・エンジェル―弁天―》と墓地から今捨てた《機械天使の儀式》を手札に加えるわ」

《いきなり儀式サポートの応酬！先行で立てるならなどの《サイバー・エンジェル》だろうねカオス・サンダー君》

《そうですね、やはり今サーチしてた攻撃抑制効果を持つ那沙帝弥でしょうか》
《とゆうかこの大会、儀式多いですわねく．．．》

「《儀式の下準備》を発動！デッキから儀式魔法《祝祷の聖歌》とそれに記された《竜姫神サフィラ》を手札に加える。そして発動《祝祷の聖歌》!!手札の弃天を生贖に、光臨なさい《竜姫神サフィラ》!!」

『グルルルル．．．』

《竜姫神サフィラ》星6／光属性／ドラゴン族／攻2500／守2400

《違ったね．．．》

《違いましたね．．．》

「弁天が生贄にされたので効果発動、デツキから光属性・天使族の《サイバー・プチ・エンジンジェル》を手札に加え守備で召喚！」

『ぷつちい〜』

《サイバー・プチ・エンジンジェル》星2／光／天使／3000／200

「『『『かわいいい〜！』』』」

「このモンスターの召喚時にデツキから《サイバー・エンジンジェル―韋駄天―》を手札に加え《機械天使の儀式》を発動！韋駄天を生贄に儀式召喚！快癒をもたらせ《サイバー・エンジンジェル―那沙帝弥―》!!」

『はあっ!』

「韋駄天が生贄にされた事により効果発動、フィールドの儀式モンスター全ての攻守が1000上昇するわ。更に那沙帝弥の効果発動、ファイラを対象にしその攻撃力3500の半分、1750のライフを回復する。エンドフェイズにファイラの効果、このモンスターがフィールドにある時に光属性モンスターが墓地に送られた場合3つの能力か

らひとつを選んで発動出来る。2枚ドロし・・・1枚捨てるわ」

サイバー・ブレード（明日香） LP4000?5750 H6?2

《祝福の協会―リチュアル・チャーチ》

《サイバー・エンジェル―那沙帝弥―》星5/光/天使/1000?2000/1000
?2000

《竜姫神サファイラ》2500?3500/2400?3400

《流石はマイシスター!―1ターン目から強力な効果を持つ儀式モンスターが2体!!》

《マイシスター言っちゃってますし・・・けれど強固なフィールドである事は間違
いありませんね》

《あの2体は維持すればする程、ライフと手札を増強する・・・ヴァンプ選手のお
手並み拝見だな》

かなり文字数はかかったけど・・・墓地の二種の儀式魔法も破壊耐性を付与出来る、
エクストラデッキから呼んだわけでもないからあの《影衣融合》もデッキ融合は出来な

い！かなり優位にたつたはずよ！

「フウ〜ン？随分張り切って展開するわねえ．．．私のターン、ドロー！まずは《手札抹殺》を発動！互いに全て手札を捨て、同数ドロー！」

くつ、バイミリオンデクエアラ《朱光の宣告者》とバイオレットデクエアラ《紫光の宣告者》が！やらしいタイミングで打ってくるわね!!

「あらあ？その表情、相当いいカードを捨ててしまったようだけど．．．しくらない。こっちは今捨てた《シャドル・ビースト》の効果で1枚ドロー。そして墓地の《闇竜の黒騎士》と《シャドル・ビースト》をゲームから除外し、《カオス・ソーサラー》を特殊召喚!!」

『フツハツハツハツ』

《カオス・ソーサラー》星6／闇／魔法使い／2300／2000

「モンスター効果発動！那沙帝弥をゲームから除外する！〈デイメンション・マジック〉!!」

《誤解が生まれそうな技名だな．．．》

《けれど那沙帝弥を退けられたのは痛いですわね、あのモンスターは墓地にあつてこそ真価を発揮するのに》

「那沙帝弥をこうもあつさりと．．．まだ、まだよ！まだファイラがいるわっ!!」

「え？そんなモンスターどおこにいるの？」

「何言ってるのよ！私がさつき儀式召喚した《竜姫神ファイラ》、私の後ろにいるじゃない!!」

「お、お姉ちゃん。後ろ．．．」

「えっ？」

『フオツ→フオツフオツフオツ』

《多次元壊獣ラディアン》 星7 / 闇 / 悪魔 / 2800 / 2500

セラさんの声で振り返ってみると、ファイラがいたハズのフィールドに全く見たことのない悪魔が居すわっていた．．．

「馬鹿なっ?! サファイラはどこにいったのよ!!」

「オーホッホッホッホッホッホ! 残念だったわね小娘え……この《多次元壊獣ラディアン》は相手モンスター1体を生贄にする事で相手の場に出現するモンスター! サファイラちゃんはラディアン降臨の憑代になっちゃったってワケ」

「そ、そんな……」

破壊効果ならまだしも……生贄にされたのでは対応出来ない!!

「更に永続魔法《生還の宝札》を発動! そして《生者の書―禁断の呪術》により蘇れ《ゾンビ・マスター》! 《生還の宝札》により1枚ドロ! 手札を1枚捨て、マスターの効果発動! 《ヴァンパイア・ソーサラー》を特殊召喚! 1枚ドロ! 手札を1枚デツキの1番上に置く事で墓地から《ゾンビキヤリア》を特殊召喚!!」

『ギヒヒヒヒッ』

『ケツケツケツ』

『フゴオ……』

「《生還の宝札》の効果で結局1枚ドロっと……レベル4の《ヴァンパイア・ソーサラー》にレベル2の《ゾンビキヤリア》をチューニング! 神鎚の振るい手《獣神ヴァ

ルカン』!!」

『ウガアアツ!』

《獣神ヴァルカン》星6／炎属性／獣戦士族／攻2000／守1600

《ゾンビ・マスター》星4／闇／アンデット／1800／0

「何っ?!シンクロ召喚だと!!」

「流石は寮長（代理）！俺達の想像を越えて行く混在だぜ！」

「「寮長！（代理）寮長！（代理）寮長（代理）寮長（代理）!!」」

だ、大人気ね寮長（代理）

「声援感謝しとくわボウヤ達！ヴァルカンのモンスター効果発動オ！我とアナタのフィールドから1枚ずつ表表示のカードを選び、それらを手札に戻す。狙いは《生還の宝札》とラディアンよ!!」

『フォツフォツフォツ・・・』

不気味な声と供にラディアンはカミューラの手札へ帰って行った……ってことはまたモンスターを出したら生贄にされるわけなの？なんてやらしい戦術……

「レベル6《獣神ヴァルカン》とレベル6《カオス・ソーサラー》でオーバーレイ!!おいでなさい、《No. 24》!人は異形のモノを、畏れを込めて竜と仮称する……《竜血鬼ドラギユラス》!!」

『グガオオウツ!』

《No. 24 竜血鬼ドラギユラス》★6／闇属性／幻竜族／攻2400／守2800

「《馬頭鬼》を召喚し……バトルよっ!まずは馬頭鬼でそのかわいらしい天使を攻撃!」

《馬頭鬼》星4／地／アンデット／1700／800

『ぐもおおっ』

『プツチ?!』

「続けてゾンビ・マスターとドラギユラスでダイレクトアタック!!」

「きやあああああつ?!」

明日香 LP5750?1550

「少しは懲りたかしら?メインフェイズ2に入りレベル4《馬頭鬼》と《ゾンビ・マスタ》でオーバレイ!光の使者たる守護天使よ、闇に惑え!《ライトロード セイント ミネルバ》!!」

『ウフフツ』

《ライトロード セイント ミネルバ》★4/光/天使/2000/800

「全っ然っ似合わないモンスターっすね?!」

「だがわざわざ召喚するとう事は何らかのシナジーがあるのだろう」

「ORUを1つ使い効果発動、デッキの上から3枚を墓地に送る・・・(あらやだ、攻撃するまえに出してたら勝ってたわ・・・)カードを1枚セットし、ターンエンド!!」

ヴァンプ(カミュラ) H6?3 LP4000

《No. 24 竜血鬼ドラギユラス》(攻) ORU2

《ライトロード セイント ミネルバ》(攻) ORU1

セツトカード

ちよつと・・・本当にきつくはない?! ジュンコ達がやられたのもわかるかも・・・

《後攻1ターン目からいきなり追い詰められてしまったマイシスター! ああ、なんとゆう事だ・・・今すぐ乱入して助けてやりたいっ》

《馬鹿はほつときまして、果たして勝利の女神はどちらに頬笑むのか! その結末は・・・また皆様に丸投げしますわ》

《まだ懲りずにやるのかこの投票・・・すまないが協力頼むぞ》

※手札抹殺で引かされた明日香の手札

《融合呪印生物―地》

《グリーン・デクエアラ緑光の宣告者》

「遅いのよ・・・違うのよお!!」

つ

づ

く。

33—E 後悔は先に立たずである。

前回のあらすじ

ヴァンプ（カミューラ） H6?3 LP4000

《No.24 竜血鬼ドラギユラス》（攻）オーバーレイユニット ORU2

《ライトロード セイント ミネルバ》（攻） ORU1

セツトカード

明日香 LP1550

兎も角この2枚の手札じゃ手の出しようがない、なんとか戦線を立て直すカードを引き当てなくちゃ……

「私のターン、ドロー!! やった……! お返しよ《手札抹殺》を発動、私は2枚ドロー！」

「チツ、ワタシは3枚ドロー!!」

《うちの小説《手札抹殺》使い過ぎじゃありませんか？》

《多少デュエル構成にミスが出てても墓地発動で無理やり修正が利くから便利だ、とか
 いったね……》

《……二人してなんの話だ？》

よし、これで膨大なアドバンテージを生み出す制限カードの《生還の宝札》と、問答
 無用でこちらのモンスターを除去する《多次元壊獣ラディアン》は処理できた……あ
 の《No.》、万丈目君とのデュエルで見た限り《月の書》みたいな効果だったハズ、わ
 ざわざ上級モンスターを2体消費してまで出したんだもの相手ターンで使えてもおか
 しくないわ。だったら……

「2枚目の《儀式の準備》発動、デッキから《古聖戴サウラヴィス》と墓地から《機械天
 使の儀式》を回収！」

《師匠……じゃなくてロードさん、サウラヴィス撒きすぎですわ》

《いやあくあのカード気に入っちゃってね、つい薦めたくなっちゃったんだ》

《サーチが利く《エフェクト・ヴェーラー》のようなものと考えればかなり有用だし
 な。微妙に役割は違うが》

「フィールド魔法、『祝福の教会ーリチュアル・チャーチ』の第2の効果、墓地の魔法カード《手札抹殺》と《儀式の準備》をデッキに戻し、戻した魔法と同数のレベルの光属性・天使族である《朱光の宣告者》を墓地から特殊召喚！そして手札から装備魔法《D・D・R《ディファレント・テイメンション・リバイバル》》を発動！除外されてた《サイバー・エンジェルー那沙帝弥ー》を帰還させる！」

『パー……』

『はあっ!!』

《朱光の宣告者》 星2/光/天使/3000/500

「帰還用のカードも入っていたか、抜け目ないわね……」

「那沙帝弥の効果で自身を対象にし、攻撃力1000の半分……500ポイント回復するわ」

サイバー・ブレード（明日香） LP1550?2050

「レベル5の那沙帝弥にレベル2の《朱光の宣告者》をチューニング！清廉なる花園に芽吹き孤高の薔薇よ 蒼き月の雫を得てここに開花せよ！《月華竜 ブラック・ローズ》

!!
」

『クウオオオ・・・』

《月華竜 ブラック・ローズ》星7／光／ドラゴン／2400／1800

ももえに以前、「明日香様にきつとお似合いですわ」と言われて渡されたシンクロモンスター、兄さんが「セブンスターズとの戦いに」、と学園に贈ってきた《ブラック・ローズ・ドラゴン》のきつと亜種。どうして二人がそれをとか突っ込みたいし、お似合いかどうかはよくわからないけど・・・お願い、力を貸して！

「ブラック・ローズの効果発動、特殊召喚されたモンスター1体を手札に戻す！対象は竜血鬼ドラギユラスよへローズ・バレード～!!」

「エクシーズモンスターは手札に存在出来ずエクストラデッキに戻ってしまう、実質的な完全除去・・・だがタダではやらせない！ドラギユラスの効果発動オ！ORUを1つ使い、エクストラデッキから特殊召喚されたモンスター、ブラック・ローズを裏側守備に変更するワ!!」

「そうはさせないわよ！手札のサウラヴィスを捨てて効果発動！ブラック・ローズを対象とする効果を無効にする！」

《シンクロモンスターの効果により厄介なドラギユラスを突破！流石はマイシスター！！》

《もう、この人司会变えませんか？》

「そして墓地の那沙帝弥、第2の能力！このモンスターを墓地から特殊召喚し、貴女の《ライトロード・セイント・ミネルバ》のコントロールを奪う！これで貴女のフィールドはがら空きよ！！」

「小娘エエ……」

「バトル！ブラック・ローズでダイレクトアタック！ヘローズ・レクイエム！！」
「ギエエエツ！！」

ヴァンプ（寮長） LP4000?1600

「そしてミネルバのダイレクトアタック！これで終わりよ!!」

「詰めが甘いのヨ！永続罠発動《リビングデッドの呼び声》！生還せよ、《カオス・ソーサラー》!!」

『クッククック』

「クツ、攻撃力2300じゃミネルバでは届かない・・・メインフェイズ2でミネルバの効果を使わせて貰うわ、デッキの上から3枚を墓地に送り・・・那沙帝弥の効果を発動！今度の対象はブラック・ローズ、ライフを1200回復！これでターンエンドよ！」

サイバー・ブレード（明日香） H0 LP2050?3250

《祝福の教会―リチュアール・チャーチ》

《月華竜 ブラック・ローズ》（攻）

《サイバー・エンジェル―那沙帝弥―》（守）

《ライトロード・セイント・ミネルバ》（攻）

「さて、終わりにしてやろうか！我のターーン、ドロ！墓地の《ヴァンパイア・ソーサラー》をゲームから除外！ヴァンパイア召喚の生贄が不要となる・・・我が前にひ

れ伏せ、《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》召喚!!」

『ウフフフ……』

《ヴァンプ・オブ・ヴァンパイア》星7／闇／アンデット／2000／2000

「召喚時に私の力を発動、貴様の《月華竜 ブラック・ローズ》を支配下に置き、装備カードとする!!」

ヴァンプ・オブ・ヴァンパイアの目が怪しく光ったと思えばブラック・ローズが相手のフィールドに移ってしまい……乗った!?!ドラゴンに乗ってるわあのドラゴン!!

「そんな、ブラック・ローズツツ?!」

「そして装備したモンスタードラゴンズ・ミラーの攻撃力を私の力に加え、攻撃力4400!更に!手札から魔法カード《ドラゴンズ・ミラー龍の鏡》を発動オ!墓地の《ヴァンパイア・ロード》および《ゾンビ・マスター》を除外し融合素材とする!2体の不死者の魂を捧げ、冥界の主を呼び覚まさん!融合召喚!《冥界龍 ドラゴネクロ》!!」

『ウゴアアアアアツ!!』

《冥界龍 ドラゴネクロ》星8／闇属性／ドラゴン族／攻3000／守0

「ゆ、融合モンスター……攻撃力3000?!」

「《カオス・ソーサラー》の効果で再び那沙帝弥を除外しバトルフェイズ！我自身で裏切りもののミネルバを攻撃！ヘローズ・レクイエム!!」

「きゃあああつ!!」

「残念だったわね小娘エ……ドラゴネクロでダイレクトアタック！ヘソウル・克蘭チ!!」

「いやあああああつ?!」

サイバー・ブレード（明日香） LP3250?850?0

WIN ヴァンプ（寮長）

《ああつ、明日香！しんでしまうとはなさない。よろしい、今すぐ僕が仇をうって

やろう!」

《何故ドクエ風なんですか私事挟み過ぎでしょうこの司会……ちよつと女性陣には申し訳ないんですがわたくしだけでは扱いきれないんでジュンコさん呼びましよう。ジュンコさん、ジュンコさくん!?》

《サイバー・ブリーダー選手がやられたのは複雑だがこれで男性チームは2本先取、大手をかけたわけだか》

「流石は俺の!」

「俺達の寮長だ!!」

「まさか明日香さんから白星をとれるなんて……」

「惚れちまうぜ寮長(代理)!!」

「寮長!寮長!寮長!寮長!寮長!!」

「もつと、もつと誉め称えなさいボウヤ達!オーホッホッホッホ!!」

「く、悔しい。ごめんなさい皆……」

「明日香さくん」

「明日香お姉ちゃん……」

「せっかくここで格好いいところ見せつけて十代メロ〇口のセラさんうはうはで夜にアクセラレーションする計画だったのに……」

「あ、明日香さん……」

「……そうゆうのは口に出さず脳内でやってください……」

《ドン☆》

《さあ！レッドチームが大手をとった所で第4試合だ！ブルー女子チームからは謎の美少女転校生、藍神セラちゃんこと《エフェクト・ヴェーラー》選手の登場だあ！！》
「セラ様～！！」

《様付けはやめたれ馬鹿共！セラちゃん先輩が困惑してんだろーがいい加減にしろっ！！》

《やっぱジュンコさんいると締りが違いますわね……》

《それは喜ばしいコトだけど、ジュンコ！何故チドリ装備を解除しているの!? 私達の

男前チドリはどこへいったのよ!!》

「「そーよそーよー!」」

「

《チドリは実家へ帰りました、またいつか会いましょう》

「「え〜?!」」

《ついでに言うとうヴァンプ寮長（代理）も（キッチンに）帰りました、日焼け止めの効力が切れたそうです》

「「ええええ〜・・・」」

うん、やっぱジュンコ姐さんがいると安心ですね。わたしの番になっちゃった上に不安の種が全員司会席いるから手後れ感ありますけど・・・日焼け止め、塗り直せばいいだけじゃないのかなあカミューラさん。一応薬物だから使用制限でもあるのかな？

《そんなわけでレッドチーム！文字数も勿体ないので早々に次の出場者を決めてくれ!!》

《見も蓋もない事を言うな?!》

《けど彼女は見た目に反して明日香様に匹敵する程の実力者、慎重に選ばないと痛い目を見ますわよ? ウフフフ》

《そっういえばなんでももえはまだ解説席? まあいつか……》

「目の保養にイイから気にしてなかったけど司会席女子チームばかりだコレーツ?!」

「そんな事より誰が行くんだ? 俺はこの前、挨拶代りにデュエル挑んだら保健室送りにされたぞ」

「僕も授業で当たった直後気がついたらベットのの上だったよ」

「俺は彼女に言い寄った奴等を、蔑んだ目で「クズが。」って言いながら数人まとめて吹き飛ばしたのを目撃した事があるぞ……」

「セラさん、来て日が短いのに結構やかかしてるっすね……」

「綺麗な花には、刺があるんだなあ……」

い、いや……学校なんて通った事無かったんで楽しんでるんですけどが妙な男の子達がいっぱいいて困りますねこの学園。わたしのような幼児体系（血涙）にかまけ

るよりよっぽど美人さん達がごまんといらっしやるのに、想定外過ぎました……

「じゃあ最後の詰めは俺だな！いい加減デュエルしたくしょうがないんだ……セラともデュエルしてみたかったしな！」

わたしの相手は遊城君ですか……かの武藤遊戯さんと同じ波長を感じる子、時が合えばかつての私達^{プラナ}の一人にもなつてたかもしれないね。

なんて考えていた矢先……

「ちよおつつつと待ったあ!!」

「だあつ?!……なんだよいったい、今度こそ文句無しに俺の番だろ……」

「否、彼女の相手は……この《リトマスの死の剣士》が相手をしよう!!」

ああ、確か彼はタニヤさんのお婿さん。名前は……えつと……あれっ?まあいいや剣士さんで

「……誰だあれ」

「あんなやついたか？」

「くつ、ここまで出かかつてはいるんだが……」

「とりあえず言いにくいから剣士とよぼうか」

「頑張れ剣士〜!!」

「えつと」

「相手の方をよく思い出せないけど……」

「ヴェーラーちゃん頑張って〜!!」

《おかしいな、女性陣はわりと覚えているとおもったのだが……ほんの数羽前に出たよ彼》

《えっ何？彼は認知阻害の呪いでも受けてるの？》

《ここまでくるとタニヤさんみたく同情したくなりますわね……》

「(不味い、誰だったかしら……だなんていいづらいわね)」

「三沢あ！なんだよ邪魔すんなよ!!」

そ、そうだ三沢君でした！余りに認知されないのでグレてセブンスターズ入りした方

でしたね！

《セラちゃん脳内でもやめて差し上げて!?》

「くっ、十代……まともに名前を呼んでくれるのはお前と枕田君くらいだ……が、しかあし！このデュエルは俺がいかせてもらおう」

「なんだよ、いつになく真剣だな……」

「そう、何故なら俺は証明しなければならぬ……ぽつと出のくせにこんなに人気をかっさらってしまいう彼女を倒さねければ、俺の存在は今度こそ消されてしまう！認知的に」

「なに言ってるんだかさっぱりわかんねえ……とりあえず1つ貸しだぜ」

《れ、レッドチームからは《リトマスの死の剣士》選手が会場だあ!》

《誰が扮したかわからない……ブラマシガール並に謎の存在として語られる事でしょう》

《モモこら！あんた解ってて言ってるでしょ！平気なフリしてつけど三沢君辛そうだから、よく見たら涙目なってるから!!》

《ジュンコ……むしろフォローで止め刺してないかしら》

「えと、よろしくお願いします剣士さん……大丈夫ですか？」

「グスツツ……十代がいなければ枕田君に惚れそうだ……」

「やばい、この人末期だ……今度会ったら名前であげよう……えっとみ、
ミ、三……あれれっ？三澤君でしたっけ

「行くぞ！ヴェーラー君！」

「あ、はい」

「デュエ

「デュエルツツツ!!!」

ヴェーラー（セラ）

LP4000

リトマスの死の剣士（三沢）

LP4000

《やっぱセラちゃんの「デュエル」凄え?!》

「女性チームのつてことで・・・わた、ボクのターン、ドロー!」

おやつ、試しに入れてみたこのカードが来ましたか・・・どうしましょう。今すぐ使用してもある程度の効力は発揮してくれそうですが、せっかくなんでみ、み、み、三剣士さんが動いてから使ってみたいですね

「ボクはモンスターをセット、リバースカードを1枚出して終了です」

《セラちゃんのボクっ娘・・・イイわね》

《これは静かな立ちあがり、否!嵐の前の静けさかー?!》

《わたくし達と出会った頃は先行から殺意の塊でしたのに・・・8800パルス!!
みたいな》

《あれ見てたのうちらだけだろーが、変にハードル上げすぎんじゃないわよ》

「フム．．．俺のターン、ドロロー！どうゆうつもりかはわからないが、動かないならこちらからガンガン行かせてもらう！《天使の施し》を発動、3枚ドロローし2枚捨てる。よし！《電磁石の戦士 γ 》を召喚！召喚時にその力で手札から《電磁石の戦士 β 》を特殊召喚！」

『『ガシヤンツツ』』

《電磁石の戦士 γ 》 星3 / 地属性 / 岩石族 / 攻 800 / 守 2000

《電磁石の戦士 β 》 星3 / 地属性 / 岩石族 / 攻 1500 / 守 1500

《【磁石の戦士】?!クリフオじゃないんだ．．．》

「ペンデュラムは研究段階で．．．当分一般相手に使えないからと気を使ってもらつてな！ β の効力でデッキから《電磁石の戦士 α 》を手札に加える。様子見と行こう、バトルだ！ β でセットモンスターを攻撃する！」

遊戯さんもデッキに入れてたらしいですね、磁石の戦士．．．とか考えてるうちにわたしのセットモンスターがビリビリやられてました、平気なんです

「セツトモンスターは《方界胤ヴィジャム》、残念ながら戦闘では破壊されませんよ」
『ギョロツ・・・』

《方界胤ヴィジャム》星1／闇属性／悪魔族／攻

0／守

0

「ギャー?!」

「きゃあああつ!」

「キモツ?!目の動きがキモツ!!」

「使用者はあんなにかわいいのに・・・」

アンディメンション化
装備効果は必要ありませんね、まだモンスターいますし・・・可愛いと思うんですけどねえ、ヴィジャム。

「け、結構インパクトのあるモンスターを使うんだな・・・メイン2、レベル3の2体の電磁石の戦士でオーバレイ、《ゴルゴニツク・ガーディアン》をエクシーズ召喚!」
『ギへへへッ』

《《ゴルゴニツク・ガーディアン》》★3 / 閻属性 / 岩石族 / 攻1600 / 守1200

《《いやあく、こつちもキモいわ》》

《《キモいですわね》》

《《キモいわね》》

「司会席からの容赦ない罵倒っ?!」

「ついにジユンコさんまで加わったんだな……」

「迷宮さんコンビが愛用してたエクシーズモンスターですね、わたしは結構好きですよ……あ、狡い。」

「(風当たりに)ま、負けん……ゴルゴニツクの能力は2つ! 攻撃力0のモンスターを破壊する効果を適用する、砕け散れヴィジャム!!」

ああ、石化させられる迄もなくヴィジャムがバラバラに……

「そ、そんな恨めしい顔で見ないでくれ……儀式魔法《高等儀式術》を発動！デツキの《磁石の戦士α》と《磁石の戦士γ》を墓地に送り合計レベル8！儀式召喚！《リトマスの死の剣士》!!」

「はあああつ!!」

《リトマスの死の剣士》星8／闇／戦士／攻撃0／守備0

「お、三沢のエースの登場だ！結構格好いいよな!!」

「なんだ十代、奴と知りあいか？」

「彼とデュエルした事があったのが十代、いつの話だ……?」

「えっ、万丈目とカイザーまで何言ってるんだ?……ジュンコー！皆がおかしい助けてくれーっ!!」

《あたしにどうせいっちゅーねん！もう一種の呪術みたいなもんだから諦めて!!》

《ジュンコさんが投げたっ?!》

「……2枚カードを伏せてターン終了……」

リトマス (三) H 1

《《ゴルゴニック・ガーディアン》》(攻) ORU 2

《《リトマスの死の剣士》》(攻)

セットカード

セットカード

《《本人の心のライフはともかく……いきなり切り札を召喚し場を整えた剣士選手！ヴェーラー君はこれをどう対処するのか!!》》

《《攻撃力0のモンスターが切り札……何言ってるの？兄さん》》

本人だけじゃなくカード効果まで存在が薄らいで行くんですか?! デュエルにおいてある意味有利なんじゃあ……メンタルが持てば。

「ターン頂きます、ドロー……さて、試してみますか。手札より魔法カード《隣の芝刈り》を発動!!」

「……はっ?」

「剣士さん、あなたのデッキ残りデッキ枚数を教えてください。ルール上公開情報です」
「む？初期ドローに加え、天使の施しを使い1枚サーチ2枚墓地送りで……残り28枚だが」

「そうですか……。このカードは相手のデッキ枚数と同じ数になるようにデッキの上からカードを墓地に送るんですよ……。わたしのデッキは残り53枚なので、25枚のカードを墓地へ送ります!!」

「な、なんだそのメチャクチャなカードは！とゆうよりデッキ枚数多いな?!」

《デッキ分厚い……。とか思ってたら60枚デッキでしたか》

《《何っ?!60枚デッキは普通ではないのか!!》》

《おめーら兄妹は「普通」の意味を辞書で調べて100回音読して来いっ！なんで普段からあんな回んのよ!!》

墓地発動が結構多いからこうゆうカード助かるんですよ。ふふつ。落ちた落ちた、たくさん落ちた……

「墓地の《方界業》^{カルマ}を2枚除外します、これにより「方界」モンスター《流星方界機デューザ》《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》を手札に加えますね」

「あ、暗黒……」

「方界神……?」

《え、ちよまつ……》

「手札の「方界」カード《方界波動》《方界獣ブレード・ガルーディア》《流星方界機デューザ》の3種を公開、これによりこのモンスターを特殊召喚します。光を喰らい、世を眩ませ……《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》!!」

『ヴァアアアアアアア!!』

《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》星10／闇属性／悪魔族／攻3000／守0

「なんだ……こいつは……」

《《《《やっちゃまったーっ?!》》》》

「きやああああっ?! 何よあれえええっ!!」

「化け物だ・・・超おつかねえ化け物が出てきたぞおっつ!!」

「なんと禍禍しい・・・これが藍神の本当の切り札かつ!」

「怖いッスー!?! ほとぼしる程怖いッスー!!」

《《こるあー! ちゃんセラー!! お祭りの場でなんてモンスター呼び出してるん
じゃーっつっ!!》》

「えっ、お祭りだから盛り上げていこうかなって・・・」

《《別の意味で盛り上がってつから! 会場阿鼻叫喚だから大混乱だからお客さん逃げ
たしちやったりしてつから!! あたりを観なさいよ! さつきまで晴れてたのに暗くなっ
て雷雲までゴロゴロ言い出したぞーすんのコレ!!》》

《《光属性の魔法使いが暗黒神を従える図・・・シユール過ぎますわね・・・》》
「あゝ・・・えへっ☆」

みたいな ?

《えへっ☆じゃないわー！頭コツンとかしてかわい．．．って馬鹿!!》

「この状況でツツコミに専念するジュンコ．．．遅しすぎるぜ」
「アニキ感心してる場合?!」

普段は自重してるカードなんで使いたかつたんですが．．．不味かつたかな？流石兄さんの暴走が生んだカード、闇の力結構残ってるんですね。わたしは何故か平気だけ
ど

「じゃあ、危ないんでさっさと決着つけちゃいますね？魔法カード《方界波動》発動！《ゴ
ルゴニック・ガーディアン》の攻撃力を半分にし、クリムゾン・ノヴァの攻撃力を倍に
する!!」

「攻撃力6000だとお?!」

《さりと殺人宣言したね．．．》

《三沢君超逃げてーっ?!》

「俺、ジュンコにあんなに心配されたことないぜ、三沢の奴．．．」

「アニキどこ気にしてるの?！」

「この状況で嫉妬とは、貴様も余裕だな……」

「バトル！クリムゾン・ノヴァでゴルゴニツク・ガーディアンを焼殺！灰塵と化せへカラミテイ・フレア」×2!!」

「も、モンスター効果発動！ORUを1つ使い、相手モンスター効果を無効にし攻撃力を0にする！」

メデューサ神話の石化光線のなものが飛んできましたが、まあ……案の定蚊でもいた? って顔してますねノヴァさん

「は? 意にも介さないだ!!」

「クリムゾン・ノヴァの元々の攻撃力3000以下のモンスター効果は受け付けません……残念でしたね」

「ま、まだまだ！永続罠《スピリット・バリア》！モンスター同士の戦闘で発生するダメージは0になる」

「手札より速攻魔法《サイクロン》を発動！その手のバリアは御免です！」

「なんの！もう1枚の罨もオーブン！永続罨《宮廷のしきたり》だ！このカードがある限り、他の永続罨は破壊出来ない！よってサイクロンは無意味だ！さらに永続罨がある時、《リトマスの死の剣士》の攻守は3000となる！」

むむっ。このターンじゃ仕留めきれませんか、デューザも召喚しとくべきでしたかね……石化されそうなんでやめたんですが

『ギャヒイイイツ?!』

「断末魔ひとつ……クリムゾン・ノヴァは相手モンスターを破壊した際、2度目の攻撃が可能です。《リトマスの死の剣士》を攻撃！《カラミティ・フレア・セカンド》!!」「うおっ?!……残念だったな、俺自身のカードは戦闘では破壊されないのさ！」

チツ、仕留め損ないました。墓地に《ギャラクシー・サイクロン》も落ちたので次ターン待ちですね、更に追い込んでおきますか……

「永続罨を発動します、《方界曼陀羅》！あなたの《ゴルゴニック・ガーディアン》を場に戻してあげます、その代わりに方界カウンターが乗せられますがね」

「方界カウンター？いったいどうなるんだ……」

「このカウンターが乗せられたモンスターは似て非なる次元の層に移された状態……つまり〈アンディメンション〉化されます！この次元に存在してないわけですから攻撃出来ず、効果も発動出来ません」

「ぐっ、なぶり殺しにする気か……」

「違いますよ……『方界曼陀羅』で呼び出したモンスターが場にいる限り、あなたが発動したモンスター効果は無効となります！」

「何だとお?!」

「カードを1枚伏せて、ターン終了です！」

ヴェーラー（セラ） H5?2

《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》（攻6000）

《方界曼陀羅》

セットカード

《これは酷い！攻撃力6000のモンスターを繰り出した上にモンスター効果の発動すら封じられてしまった！剣士選手になすすべはあるのかーっ?!》

《えっ、波動の攻撃力倍化って永続なの？鬼ねセラ、じゃなくてヴェーラーさん……

》

「あつ、忘れてましたけど……クリムゾン・ノヴァが出現したエンドフェイズ、互いのプレイヤーは3000ダメージを受けます。全て焼き払え、ヘンシエント・ノヴァへ!!」

「「「はあああああつ?!」「」」

「ぎゃあああああつ!!」

「ボクは墓地の罠カード《ダメージジダイエツト》を除外して効果ダメージを半分にしておきますね、あちちっ」

ヴェーラー（セラ） LP40000?2500

(三) 剣士 LP40000?1000

ノヴァさんから発せられる炎が辺を包みこむ、わたしは罠の効果でちよつと熱い程度に感じましたけど……あちらからはヤバ目の悲鳴聞こえましたね。

「お、おうふ……」

《三沢君ー!?じゃなくて剣士選手ダウンしたー!!》

「みさツ、劍士君!!……ツタオルだ!!濟まない、僕が軽い気持ちで「せつかくのお祭だし君も参加しない?」とか誘ったばっかりにつつ!!」

《衣装とか用意してたと思つたらやっぱ師匠の仕業ですか……》

「い、いやつ……俺はまだ立てますっ師匠ツツ!!俺はまだ輝ける、諦めたくない!!」「ミサケン君……君つて奴はそこまで……わかつた!もう僕は止めない、あの《エフエクト・ヴェーラー》の皮を被つた魔王に一泡吹かせてやるんだ!!」

《なあにこれえ》

《弟子また増えてるし……》

司会放棄して駆け寄つてあげたと思つたら魔王つて何?人を悪者扱いして……あつそうか、これも演出なんですわね!ジユンコ姐さんみたいに演技しろつて事ですか。しかしよりによつてわたし《エフエクト・ヴェーラー》コスなのに悪役とは……しようがないなあ

「クククククツ、ようやく気づいたか愚か者共め……」

「えっ?」

「そうとも。ボクが魔王、魔王《エフェクト・ヴェーラー》だ! . . . この姿に油断しているところを一瞬で仕留めてあげようとしたのに . . . 中途半端に凌ぐから苦しむコトになるんだよ」

《せ、セラ神センパ〜イ . . . ?》

《なんか雲行きが怪しいわね》

「(不味い、彼女の変なスイッチを押してしまった! . . . でも面白そうだから乗っておこうかなっ) おのれ魔王め! 剣士よ、勝ってくれ! 君が負けたら、世界が暗黒の次元に落とされてしまう!」

「えっ?あの . . .」

《師匠も悪ノリし初めましたわね》

「ハハハハハッ! まだ勝てるつもりでいるのかい? ボクの使役する闇の化身、《暗黒方界

神クリムゾン・ノヴァ」の攻撃力は6000ポイント！更には低級モンスターの効果も受け付けない！キミ達に希望なんてないんだヨ！！」

「絶対の存在なんてモノは有り得ない！モンスターである以上攻略する手だてはあるんだ……みせてやれ剣士君ツツ！」

「あ……は、はいっ！俺のタアーン!!」

「（えーと……もうヤケだっ！）魔王よ！俺はこの命を捨ててでもお前を倒す！魔法カード《命削りの宝札》（※原作仕様）を発動ツツ!!手札が5枚になるようにドローし、5ターン後全ての手札を捨てる……」

《全然命削らない宝札きたーっ!?!》

《I2社はなにを考えて刷ったのでしようアレ》

「……きたぞおっ！魔法カード《融合》を発動！手札の《磁石の戦士 マグネット・バルキリオン》と《電磁石の戦士マグネット・ベルセリオン》を融合っ!!磁石の戦士達の究極形態をお見せしよう、《超電導戦機インペリオン・マグナム》ツツツ!!」

『ジャツキーン☆』

0 《超電導戦機インペリオン・マグナム》星10／地属性／岩石族／攻4000／守400

うっわ、とんでもドロカードから超大型融合モンスター繰り出してきた……

「いいぞお剣士君！」

「けれどせっかくの融合モンスターも攻撃力4000、モンスター効果も《方界曼陀羅》で発動すら出来ない……クリムゾン・ノヴァには遠く及ばないネ!!」

《セラさん案外ノリノリね……》

「まだだ! 《マジック・プランター》を使う、《宮廷のしきたり》を破棄して2枚ドロ!!」

《まだまだドロする剣士選手! このターンで決めると言わんばかりの勢いだっ!

》

《お、帰ってきた》

「よし！デツキトツプ1枚とこのターンの召喚権を破棄し《アームズ・ホール》を発動！
装備魔法《巨大化》を手札に加え、発動！インペリオンの攻撃力を2倍にする!!」

「馬鹿な・・・攻撃力8000だつてえ?!」

「「「行つけー！剣士ーっ!!」」」

「バトルフェイズ！インペリオン・マグナムでクリムゾン・ノヴァを攻撃！へマキシマム・
マグネットセイバー!!」

「キヤ、うわあああああつ?!」

ヴェーラー（セラ） LP2500?500

クリムゾン・ノヴァが真つ二つにされてしまいました、お蔭で魔界の一部のように
なつてたあたりの景色も戻ってきましたが・・・

「これで終わりだ魔王！俺自身のダイレクトアタックで・・・」

「終わりだヨ剣士。この瞬間墓地の罾カード《方界合神》の効果を発動！レベル4以下の「方界」モンスターを条件無視でデッキから特殊召喚！」

「なんだとお?！」

「来たれ《方界超獣 バスター・ガンダイル》!!」

『ゴゴゴゴゴ』

《方界超獣 バスター・ガンダイル》星4／光／獣／攻0／守0

「グッ、仕留め切れなかったか……ならばバスター・ガンダイルを俺自身で攻撃……」
 「残念ッ。《方界合神》の効果で呼び出したモンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されないヨ?！」

「(ここまで防がれるとは、あと一押しだとゆうのにつ……)《成り金ゴブリン》を発動、相手ライフを1000回復させ1枚ドロー……《アドバンス・ドロー》を発動！
 《リトマスの死の剣士》を生贄にカードを2枚ドロー！この2枚をセットしてターンエ
 ンドだ！」

ヴェーラー（セラ）LP500?1500

リトマス ○ H1 LP1000

《超電導戦機インペリオン・マグナム》(攻)

+ 《巨大化》

《ゴルゴニック・ガーディアン》(守) (方界カウンタ―)

《スピリット・バリア》

セットカード

セットカード

「あえてライフを回復させる事で《巨大化》のメリット効果を維持したか、やるな……」
「これであるモンスターの攻撃力は8000のままだ！ さつすが三沢だぜ！」

《剣士君、なんとか暗黒神は倒したが……魔王のフィールドはモンスターが途絶えない！》

《耐えきれるかっ、剣士っ!!》

「堪えろ剣士ー！」

「魔王様のライフはたった1500だ、次のターンがくれば勝てるっ！」

「攻撃力8000なんてのがいるんだ、俺達を勝利へ導いてくれえ！」

「二」「剣士！剣士！剣士！剣士！」

「皆……こんな俺を応援してくれるのか……」

「……ボクのターンッッ！」

感極まつてる所を悪いんだけど……そろそろ疲れたから決めますね。

「墓地の《ギヤラクシー・サイクロン》をゲームから除外！《スピリット・バリア》を破壊する!!」

「くそっ、俺の守りの要がっ!」

「リバース罠オープン、永続罠《シェイプシスター》。発動後チューナーモンスターとしてフィールドに特殊召喚される」

「チューナー、つてことは……」

「シンクロ召喚かっ?!」

「これにチェインする形で墓地の罨カード・《バージエストマ・デイノミスクス》発動！
「バージエストマ」はフィールドで罨カードが発動した時、墓地から通常モンスターとして特殊召喚できる！」

『イヒヒヒヒッ』

『・・・(ウネウネ)』

《シエイプシスター》星2/地/悪魔/0/0

《バージエストマ・デイノミスクス》星2/水/水/1200/0

《芝刈った時に仕込まれたのね(誰だあんなの渡した奴)》

《セラさんのモンスターって全体的に怖いとゆうか・・・》

《キモイ、ですわね》

このシリーズくれたのモモ姉様じゃないですか!?! まあ「わたくしの趣味じゃありませんので」って埃被ってた所を強引に頂いたのですが

「「バージエストマ」、古代生物のバージエスト動物群か・・・興味深いモンスターを使う

な」

「そんな余裕でいいのかな剣士サン！レベル2のディノミスクスにレベル2の《シエイプシスター》をチューニングッ！《古神ハストール》!!」

『真のドラゴン使

《ミザちゃんじゃねーだろオメー!!》

《古神ハストール》星4／風属性／爬虫類族／攻2300／守1000

「そして手札1枚を1枚デツキの1番上へ戻し、墓地から《ゾンビキャリア》を自身の効果で特殊召喚する！」

『ぐへへへっ』

《ゾンビキャリア》星2／闇／アンデット／400／200

「またチューナー、合計レベルは……10か!？」

「レベル4のバスター・ガンダイルとレベル4の《古神ハストール》にレベル2の《ゾンビキャリア》をチューニング……世にはびこる幾億の症気よ、我が命に従いここに

集え。汚れし世界を我がモノにせん！君臨せよ！《魔王超龍 ベエルゼウス》!!」

『ギヤーハハハハハハッ！ゲッヒヤッヒヤッヒヤッ!!』

《魔王超龍 ベエルゼウス》星10／闇属性／ドラゴン族／攻4000／守4000

あつ、これもマズイカードだー……

《魔王龍降臨ーッ?!ついに本性を現したかー!!》

《ヤベツ、マジで出すとは思わなかった……》

《ジュンコさん、もしや……(あげたな)》

「あ、あのシンクロモンスターはっ?!」

「カイザー知ってるのか?」

「むう……(※13羽参照!を話したら変な嫉妬をされそうだな……)ヤバイ。」

「見たら判るツスよ?!」

「と、と、罨発動《奈良の落とし穴》!!召喚、特殊召喚されたモンスターを破壊して除外する!!」

「ハハハハハッ！無駄だよ、ベエルゼウスはあらゆる戦闘・効果では破壊されない！そんな畏無意味サ!!」

「なんとゆう・・・だがインペリオン・マグナムの攻撃力は8000！4000のベエルゼウスでは敵わないぞ?!」

「フン、今は黙して死を待て剣士よ・・・ベエルゼウスの能力へベエルゼウス・サブラマシー〜発動!!その派手な玩具の攻撃力を0にし、変化した数値分のライフを回復する!!」

ヴェーラー（セラ） LP1500?9500

ベエルゼウスがインペリオン・マグナムのエネルギーを吸いとつていき、錆た鉄屑に変えてしまった。こうなると哀れですね・・・

「そんな馬鹿な?!（もう一枚は《旋風のバリアーエアール・フォース》、発動さえ出来れば・・・）」

「バトルフェイズ！手札より速効魔法《封魔の矢》!!バトルフェイズ中の魔法・畏の発動

《クリクリッ》

《はい！とゆうわけで剣士選手 v s 魔王様》

《剣士選手の善戦虚しく、命を落としてしまわれました》

《勝手に死んだ事にすんじやないわよアンタ達！保健室直行したただだからね?!》

《そんなわけで、剣士選手を殲滅し見事女子チームを勝利へ導いた魔王様をゲストへ招き、最終戦へ移りたいと思いますわ》

《その紹介やめてくれませんか?!わたしが悪かったですから！あとで三好さんにも謝りに行きますからやめてください!!》

《フフフツ、いいのよセラさん自分を偽らなくても・・・みなさい、貴女のファンを気取ってたコ達を・・・土下座でひれ伏してるわ》

《なんでこうなるのお?!ジュンコ姐さん助けてく・・・》

《・・・来年の学園祭は、へ魔王セラ様と四天王♡って感じな舞台劇をやるのはどうかな?》

《まさかのフォローどころか魔王キャラ押し?!》

《それイケそうですわね！わたくし達が魔王様の配下で十代様達に勇者側やつてもらって……》

《ジュンコがチドリで無口な用心棒キャラ、ももえがダークナイトで王国の裏切り者ね！》

《じゃあ師匠と明日香はコンビ枠でぶっ飛んだキャラを……ロ○ツト団みたいな》

「キミ達イ?!来年の計画で盛り上がるのはいいけどあとにしてくれないかな?!」

ついに突っ込んだか……あいつらが手を取って暴走したら手がつけられないぜ。

《チツ、いいところだったのに……》

《それでは長らくお待たせ致しました皆様!》

《コスプレデュエル大会レッドvsブルー(女)チーム、最終戦を行いたいと思います!!》

「「「「わあああああつ!!」」」」

《赤ア〜コーナアアアア、レッドチーム大将遊城十代こと《E・HERO ブレイズマン》選手〜!!》

「や〜〜つと出番だぜ!」

「二キヤー!十代頑張つてー!!!」

「頼んだぞ十代ー!」

「レッドの希望の星っ!!」

「ここまできたらなんとしても罰ゲームは回避せねばならん!勝て十代!!」

「まあ、女子を対象にされそうなの吹雪さん以外じゃ精々、アニキと万丈目君くらいツスよね」

「・・・そうでもなかったりするんだな」

《ぜえ、ぜえ、続いて青コ〜ナ〜》

《今ジュンコ姐さんと明日香お姉ちゃん向こう側いなかった?!》

《気のせいよ気のせい・・・》

《ブルー(女) チーム大将・・・ってオメー女子じゃねーだろ!!》

《今さらですわジュンコさん、レッドチームも部外者たくさん出してますし!》

《あ、うんそうね・・・天上院吹雪こと《ロード・オブ・ザ・レッド》選手!!》

「待たせたね!僕がロードだ!!」

「「きやああああああつ!ロード様!!」

」

《ずっと司会してたのにねえ・・・》

「私、女子チーム勝ったら吹雪様をデートに誘うのっ!」

「え、わたしも吹雪様がいい」

「吹雪様は皆のものよ!独り占めなんてさせないわ!!」

「・・・私は翔君にコスプレさせたい、可愛い系の奴・・・」

「あ、それいい!彼だけコスプレしてないし!」

「あたしは隼人君のお腹ぶにぶにしたい!」

「枕にしたいよね」

「・・・マジで?アニキイイ!絶対勝つてよ!!」

「女子といつても千差万別なんだな．．．（震え）」

案外人気あんだな翔の奴も。いや、そんな事今はどうでもいい．．．やつとコイツを捕まえたんだ！

「吹雪さん．．．前からアンタに聞いてみたい事があつたんだ」

「ん？なんだい十代君！恋の相談かな？」

話す度にこんな感じだなこの人．．．

「アンタとジュンコ．．．どうゆう関係なんだ？」

「へっ？前から知ってるだろうに、僕がデュエルの師匠で彼女達は弟子だよ」

「．．．とぼけんなっ!!」

単なる師匠と弟子だと．．．そんなワケねえだろ！ほんの少しの間しか観てないけど、確信がある。アイツは吹雪さんの前にいる時が．．．1番自然体なんだ。俺と一緒にいる時と違って、なにかを遠慮しているような、隠しているような素振りもなく、1

番アイツらしい顔をしてるんだ……

「フム、強いて言うなら……おさなな、グファアツツ!!?」

「?!」

吹雪さんがなにかをいいかけた時、司会陣の方から謎の物体が……か、刀ア?!?

《ちよつとジュンコ何してるの?!下手したら死ぬわよ今のは!!》

《チドリ衣装に使ってた刀、持ってきたと思つたらツツコミ用でしたか》

《今ツツコむ要素あつたんですか?!》

《いいから、始めろ馬鹿共……》

「……は、はい」

や、ヤベエ……今まで見た中で一番怒ってる……なんでだ?!

「痛たたた……鎧来てて助かった。そうだ十代君、君が勝つたら1つイイコトを教え
てあげよう」

「イイコト?」

「その上で明日香かジュンコ君、好きな方を君が自由にするといい!・・・なんなら両方でもいいよ?」

《ハアアアアアアアツ?! テメツ、馬鹿ツ! 何言い出してるんだコラー!!》

《兄さん! それはもしや公認で3〇オッケーとゆうことね?!》

《アンタもいっぺん黙れ?! 何喜んでんの景品にされてんのようチラ!!》

《あらジュンコさん、顔がにやけてますわよ?》

《あ、本当ですね。心なしか顔も赤・・・》

《うるさああああい! さっさとデュエルを始めろおおおお!!》

《今回で読者様参加スタイルもラスト! 私達の運命はあなたたちに委ねられたわ!!》

《是非とも協力してくださいませ!》

《あ、まだやるんだ・・・前回アレだったのに》

「全力でいくよ、十代君!」

「・・・来いっつ! アンタにだけは負けられないんだ!!」

「デュエル!!」

33羽—F 奴の辞書に自重とゆう文字など無い。

「全力で行くよ、十代君！」

「来いっ！アンタにだけは……負けられないんだ!!」

「デュエル!!」

ブレイズマン（十代）

LP4000

ロード・オブ・馬鹿（吹雪）

LP4000

「2対2で互角の状況だし、先行・後攻はそうだな……公平にコイントスでどうかな？ お願ひももえもくん、僕裏で!!」

「言ったもん勝ちだな……じゃあ表でいいぜ」

《仕方ないなあフブ太君は（ダミ声）》

《とかいいながらどっから出した、そのDAコイン》

文句言いながらコイントスしてくれるももえ、相変わらずなんでも持ち歩いてんな……ちえつ、裏かよ。

「よし、僕のターン！ 《紅玉の宝札》！ 《真紅眼の黒竜》を墓地へ送り2枚ドロ、その後《真紅眼の黒炎竜》をデッキから墓地へ送るよ。ふむふむ、成る程ねえ……《レッドアイズ・インサイト》を発動、2枚目の《真紅眼の黒竜》を墓地におとし、デッキより《真紅眼融合》を手札に加える!!」

「真紅眼……融合?」

「おや、君は初見だったかい? ……そういえばそうか。ならお見せしよう! 《真紅眼融合》を発動!! デッキの《真紅眼の黒炎竜》と《ライトパルサー・ドラゴン》を融合する!!」

「で、デッキのモンスターを素材に融合かよつ?!」

「その分デメリットが馬鹿みたいにきつくってネエ．．．まあいいか。我が友に宿れ、閃光の軌跡！真の驚異となりて万象を灰塵と化せ！《流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン》!!」

『グオオオオオツ!!』

《流星竜 メテオ・ブラック・ドラゴン》星8／闇／ドラゴン／3500／2000

「手札1枚からいきなり、攻撃力3500の融合モンスター?!」

「インチキ融合も大概にしろ!!」

「流石キング、汚い！」

「もちろんそれだけでは終わらない！流星竜の出現時、デッキから新たに《一真紅眼の凶雷皇》《レッドアイズ・ライトニング・ロードーエビル・デーモン》を墓地へ送る。そしてその攻撃力2500の半分、1250のダメージを君に与える！へブラック・ミィテイア〜!!」

「げっ?!うわああああ!!」

十代 LP40000?2750

いきなり結構もらっちゃった、先行から飛ばすなあの人・・・

「手札の《ブラック・メタルドラゴン黒 鋼 竜》効果発動、フィールドの真紅眼モンスター1体に装備し攻撃力600ポイントアップ・・・ああ、《真紅眼融合》で呼び出したモンスターは《真紅眼の黒竜》として扱うよ」

「攻撃力4100か、こりや倒すのに骨が折れるぜ・・・」

「驚くのはまだ早い!手札より魔法カード発動!《闇の量産工場》×2!!」
「はっ?」

「墓地の通常モンスターである真紅眼の黒竜と、黒炎竜を2枚ずつ手札に戻させてもら

うよ。更に魔法発動《手札抹殺》！互いの手札を全て捨て、同数ドロウする！僕は5枚捨て、5枚ドロウ！！」

「おつ、俺も5枚だ。5枚ドロウ！更に墓地へ送られた《E・HERO シャドームィスト》の効果でエアーマンを手札に加えるぜ！」

「おや、得をさせてしまったか……まあいいや、コレ引いちやつたからね。魔法発動《黒炎弾》！！フィールドの《真紅眼の黒竜》の攻撃力分……つまり3500ポイントのダメージを君に与える！！」

《ぎっけんなコラア！なに引き当ててんじやー！！》

《だから先行は嫌なんですわ……》

《えっ、コレで終わり?!……兄さんの鬼！外道！悪魔！！》

《3500ダメージで、さすがにズルくないですか……》

先行で合計4750の効果ダメージかよ、そりやまともにやって勝てないよな……
けど！

「墓地の《ダメージ・ダイエット》をゲームから除外！効果ダメージを半分にするぜ！」

「……ほう！」

「うっ、ぐああああっ!!」

十代 LP2750?1000

「そんなカードを君が入れているなんてね……ちよつと意外だったよ」
「へへっ、少しは驚いてくれたかよ。先輩」

あつぶねえく、九死に一生って感じだけ……ジュンコから譲って貰つたという正解だったなコレ。まさか先行1ターン目で使うハメになるとは思わなかったけど

「ふふふっ、これはいい！愉しくなってきたよ……カードを3枚伏せてエンドフェイズに《超再生能力》を発動、僕がこのターンに手札から捨てたドラゴンは5体、よつて5枚ドロー！ターン終了だ」

J I O I N H 5

《流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン》(攻)

+ 《黒鋼竜》

セツトカード

セツトカード

セツトカード

「先行で効果ダメージ・大型モンスターの召喚・次ターンへの布石……いつもの吹雪だな」

「あれだけ回るのがいつも通りなんすか」

「よく事故にならないんだなあ」

流石ジュンコとももえの師匠つてだけあるぜ……油断したら一瞬でやられる、このターンで決めてやるぐらいの勢いでやらねえと！

「俺のターン、ドロー！魔法カード《戦士の生還》を発動！墓地のシャドーミストを回収し、速攻魔法《ツインツイスター》発動！シャドーミストを捨てて、アンタの両端のセツトカード2枚を破壊してやるぜ！」

「いいカードを使うね、けどただではやられない！リバース罨オープンリターン・オフ・レッドアイズ《真紅眼の鎧旋》！フィールドに真紅眼扱いの流星竜がいる為、墓地から通常モンスター扱いの《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》を特殊召喚！」

「フリーチェーンだったか、けどそれくらいなら問題ない！その2枚には消えてもらおうぜ！！」

「鎧旋と《レッドアイズ・バーン》が破壊される……」

《うわっ、地雷仕込んでやがった危なく……》

《地雷って？》

《《レッドアイズ・バーン》はレッドアイズモンスターが破壊された時、互いにその攻撃力分のダメージを与えるのですわ》

《あのまま放置してメテオ・ブラック倒してたら3500ダメージの破壊輪……鬼ですわね》

《……クリムゾン・ノヴァする人がそれ言う？》

キ
ぜ、全部食らってたら8250ダメージかよ……殺意高すぎねーかあの人のデッ

「鎧旋が相手に破壊された時、墓地から《真紅眼の黒竜》を特殊召喚する！さあ出番だよ

!!

『グガアアアツ』

『あ、十代君じゃん。オッスオッス』

《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》星6／闇／悪魔／2500／1200

《真紅眼の黒竜》星7／闇／ドラゴン／2400／2000

《軽っ?!見た目と裏腹にやっば軽っ!!》

「おや、うちのレンとは随分打ち解けたのかな?」

「いや打ち解けたっつーか……まあいいや、忘れないうちにシャドーミストの効果でエッジマン回収しとこう」

あの精霊、吹雪さん同様軽すぎてやりづらいぜ……万丈目の《光と闇の竜》しかり、ドラゴンってあんなんばつかなのか? (偏見)

「《E・HERO エアーマン》召喚! 召喚時効果によりデツキからワイルドマンを手札に加える、そして魔法発動、《融合》! エアーマンとワイルドマンを融合! 雷雲逆巻け、

《E・HERO GreatTORNADO》!!」

『ハアアアッ!』

《E・HERO GreatTORNADO》星8／風／戦士／2800／2200

「融合召喚成功時、モンスター効果発動! 相手モンスター全てのステータスを半減させるぞ、へタウンバースト!!」

嵐風を巻き起こしてドラゴン達の動きを制限させる、これでかなり対処しやすくなるハズだ……

「やれやれ、初対面の時もそいつを食らったつけ……手札より《幽鬼うさぎ》を捨ててその能力を使う! カード効果を発動したカードを破壊する!」

「TORNADOがつ!」

あんなちっこい兔? に破壊されちゃった、なんだか悔しいぜ……効果を無効にされたわけじゃないからマシかな

《流星竜 メテオ・ブラック・ドラゴン》攻4100?2050

《真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン》攻2500?1250

《真紅眼の黒竜》攻2400?1200

『いえーい！ボク大活躍!!』

『げほっ、げほっ、けっ！でしゃばりめ……』

「なんてな……そいつは読んでたぜ！《融合回収フュージョン・リカバリー》を發動！《融合》とワイルドマンを回収する！そして再び融合！ワイルドマンと手札のエツジマンで融合！本命はこっちだ！《E・HERO ワイルドジャーマン》!!」

『ウオオオオッ!』

《E・HERO ワイルドジャーマン》星8/地/戦士/2600/2300

「更に装備魔法《最強の盾》をワイルドジャーマンに装備する！コイツを装備したモンスターの攻撃力は自身の守備力分アップするぜ！」

「つまり、攻撃力4900！」

「レッドアイズ達を攻撃表示で出したのは失敗だったな！ワイルドジャギーマンは相手
モンスター全てに攻撃できる！まずはメテオ・ブラック・ドラゴンからだ！喰らえっへい
ンフィニティ・エッジ・スライサー！！」

『グオオウ……』

「ぐっ、メテオ・ブラック……!!」

吹雪 LP4000?1250

「師匠にあれ程の深手を負わせるとは……おのれ十代！」

「ちよつと前じゃ僕と二人がかりでも勝てなかったのに……」

「どうだ！俺だつて成長してるんだ、あの頃のままだと思つたら大違いだぜ!!」

「このモンスターが破壊された時、墓地の通常モンスターを特殊召喚できるが……的
が増えるだけだね、効果は発動しないでおくよ、装備されていた《黒鋼竜》が墓地に置
かれたので《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を手札に加えさせてもらう」

《今の師匠からみたらZeroとかよりよっぽどきついチョイスでしたわね》

《いいわよ十代ー！そんな馬鹿やったれー！！》

《チーム的には勝って貰った方がいいのでは？・・・まあいつか》

「よつしや！このままエビル・デーモンと真紅眼にも攻撃だあー！」

「そこまでだ十代君！生憎黙ってやられる趣味は無いんでね・・・リバーズカードオー

ブン！《瞬間融合》！！」

「なっ、なんだとお?!」

『エツ!?聞いてねーし!』

「我が友に宿れ、迅雷の魔王よ!闇に生まれし歪みより、新たな驚異となりて生まれ変われ!融合召喚・・・飢えた牙持つ毒龍、《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》!!」

『ギシャアアアアッ!!』

《スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》星8闇／ドラゴン／2800／2000

0

《ぎゃあああつ?!出たああああそつちかああああ!!》

《ううう、やっぱあのドラゴン苦手ですわ……》

《私もちよつと無理かな……》

《わたしにくれたのと絵違いかあ、そんなのあったんですね……あれっ？ドラゴンの中じやトップクラスに可愛くないですかっ？》

《《《セラ様それ本気か?!》》》

《あとジュンコ姐さんがくれたベエルゼとか、カミューラさんが使ってたドラゴネク口とかもいいですよねえ……》

《やっぱアンタ、魔王様だわ》

《《《ウン、ウン》》》

《《《《なんでえ?!》》》

「フツ、流石は魔王様。この魅力がわかるとは素晴らしい……融合召喚時の効果発動！相手モンスターを1体選び、その攻撃力分の数値を自身の攻撃力に加える！へヴェノム・ドレイン〜!!」

『ウガアアアアッ!』

あの龍、ワイルドジャギーマンに食らいついてる……力を吸ってやがんのか!

「攻撃力7700で、勝てるチャンスだったのに……カードを2枚セット！永続魔法《悪夢の蜃気楼》を発動してターン終了だ！」

「ならばこのエンドフェイズ、《瞬間融合》のデメリットによりスターヴ・ヴェノムは破壊される……がしかし、この瞬間新たな効果が発動する！へスターヴ・リベンジャー！！」

崩壊したドラゴンの躰が毒の沼地のように替わり、ワイルドジャギーマンを飲み込んでいった……

「そんな、ワイルドジャギーマンが……」

「このモンスターが破壊された際、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する、これで君の場はがら空きだねえ……フィールドのドラゴン族モンスターが破壊されたので墓地の《霊廟の守護者》の効果発動、墓地から特殊召喚される」

『フオッフオッフオッフ』

《霊廟の守護者》星4／闇／ドラゴン／1000／2100

十代 LP1000 H0

《悪夢の蜃気楼》

セツトカード

セツトカード

《せつかくのワイルドジャギーマンがやられちゃった．．．》

《あえて相手ターンに出して妨害に用いたわけですね》

《直接妨害罫使わない辺りが師匠らしいわね》

《ですわね、あくまでドラゴン達で勝つのが心情らしいので．．．》

「流石は師匠！あの攻撃をあえて融合ドラゴンで凌ぐとは！」

「アイツのデュエルを観ているとこっちまで感化されるな、俺も参加すればよかったか．．．」

「普段クール担当（？）の二人がずれ始めてるツス．．．」

そう簡単には、勝たせてくれねえか．．．

「僕のターン、ドロー！．．．」

「《悪夢の蜃気楼》の効果発動！相手スタンバイフェイズに手札が4枚になるようにドロウする！だが自分スタンバイフェイズに手札を全て捨てる！」

「いいカードだ、ゆえに他の付せカードが見えてくる！《トレードイン》を発動！レベル8の《ダークストーム・ドラゴン》を捨てて2枚ドロウ！フム・・・《霊廟の守護者》をゲームから除外し《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》を特殊召喚！そしてその効果により、墓地から《流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン》を特殊召喚!!」

『グオオオオオオッ!!』

『ウガアアアアッ!』

0 《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》星10/闇/ドラゴン/2800/2400

「くそっ、もう帰って来やがった！」

「さらに魔法カード《儀式の下準備》発動！デッキから《レッドアイズ・トランスマイグレーション》と《ロード・オブ・ザ・レッド》を手札に加え、発動！《レッドアイズ・トランスマイグレーション》！メテオ・ブラックを生贄に捧げ、この僕《ロード・オブ・ザ・レッド》を儀式召喚・・・せつかくなので、ここは僕自身がフィールドに出よう」

《ロード・オブ・ザ・レッド》星8／炎／ドラゴン／2400／2100

「「「「「キャッツ！ブッキーカッコイーツ!!」」」」」

《なんで？あれ格好いいの？》

《フィールドの真ん中空けると思ったら自分が立つ為でしたか・・・》

《てかアイツ自分がフィールド出るのが好きだな・・・初登場時もやってなかった？

》

「流星竜が墓地に送られたので効果が発動するが、それにチェーンし僕の効果も発動！君の付せカード、左側を破壊させてもらおうよへ灼熱のバーン・ストライク!!」

とかいいながら自分で付せを殴りに来た・・・言いたいだけだろこれ。

「つてそうはいくか！リバース魔法《非常食》！それにチェーンして罫カード《和睦の使者》を発動！このターンの戦闘ダメージを全て0にする！そして非常食の効果処理、《悪夢の蜃気楼》と《和睦の使者》を墓地に送り、ライフを2000回復するぜ！」

十代 LP1000?3000

《和睦の使者か、とりあえずこのターンは安全ね》

《そう?なんか不安だわ・・・》

「メテオ・ブラックの効果処理だ、墓地より《真紅眼の黒炎竜》を蘇生。召喚権を行使しデュアル状態とする!魔法カード《復活の福音》発動!帰っておいで《真紅眼の黒竜》!!」
『ギヤオオオオッ!』

『たっだいま』

「バトルだ!黒炎竜でダイレクトアタック!《ブラック・メガフレア》!!」

「うわあああつ?!つて《和睦の使者》の効果適用中だつての!忘れたのか?」

一瞬負けたかと思つたぜ、焦つた焦つた・・・

「ふふつ、バトルフェイズ終了時に黒炎竜のデュアル効果発動!自身の元々の攻撃力分のダメージを君に与える!《デュアルズ・ブラック・フレア》!!」

「まじかよっ?!うわああああっ!!」

十代 LP30000?600

せつかく回復したライフが・・・このままじゃジリ貧だ!

「幕を引くとしよう。レベル7の《真紅眼の黒竜》と《真紅眼の黒炎竜》でオーバーレイ
! : 我が友に宿れ、熱き意思と鋼の心! エクシーズ召喚! 《真紅眼の鋼炎竜》!!」
レッドアイズ・フレアメタルドラゴン

『アタシ本気モード!!』

《真紅眼の鋼炎竜》★7 / 闇 / ドラゴン / 2800 / 2400

「来やがったな、エクシーズ召喚・・・」

「全力で行く、と宣言したからね。悪く思わないでくれたまえ・・・モンスター効果発
動! オーバーレイユニットをひとつ消費し、墓地より再び黒炎竜を復活! カードを2枚
セットしてターンエンド!!」

ししよー H1 LP1150

《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》(攻)

《ロード・オブ・ザ・レッド》(本人)

《真紅眼の鋼炎竜》(攻) ORU I

《真紅眼の黒炎竜》(守)

セットカード

セットカード

《幕を引くとかいってライフ残ってるじゃないですか、かつこつけー》

《それがそうでもないんですよねえ……》

《鋼炎竜が素材もってフィールドにいる限り、相手はカードを発動する度に500ダメージを受けるのよ》

《そんな！十代のライフはたった600、カード1枚であのモンスター達を突破しろって事?!》

「加えてカードを発動すれば吹雪自身の効果で破壊される」

「墓地にはドラゴンの破壊の代替りになる《復活の福音》も存在する……十代のバカでは師匠相手は荷が重すぎたか」

「今度こそ絶体絶命ッス……」

《けど十代のデッキには1枚だけ……》

1枚だけなんとかできるカードが眠ってる、それをなんとか引き当てるしかねえ！

「俺のターン……ドロー！」

違う、だが1回だけチャンスはある！

「魔法発動《ホープ・オブ・ファイブ》!!墓地のエアーマン、ワイルドマン、エッジマン、シャドーミスト、ワイルドジャギーマン、5体のHEROをデッキに戻しシャッフル……2枚ドロー!場にカードが無い場合もう1枚ドローだ!!」

「効果解決後、鋼炎竜の効果により500ダメージを受けてもらうへペナルティ・フレア!」

十代 LP600?100

「く……けど引いたぜ!速効魔法《皆既日食の書》発動!全モンスターを裏側守備に変更させる!これならアンタのドラゴン達は効果を使えねえだろ!」

《そっか、ダメージが発生するのはあくまで効果解決後だから》
 《先に裏側にしてしまえばダメージは受けないうて事ね！凄いわ十代!!》

「見抜いていたか、しかも土壇場で引き当てるとは流石だね……皆既日食にチェーンし鋼炎竜のモンスター効果！ORUをひとつ使い、墓地から《真紅眼の黒竜》を復活させる！」

「壁を増やしてきたか……アンタも大してライフねえからな。反撃開始だ！《ヒーローアライブ》発動！ライフを半分支払い、デッキからバブルマンを特殊召喚！召喚時場にカードがないので2枚ドロー！」

十代 LP1000?50

《E・HERO バブルマン》星4/水/戦士/800/1200

「さらに《E・HERO ブレイズマン》を召喚！その効果により、召喚時にデッキから《融合》を手札に加えて発動！来い、無慈悲なる白銀の英雄《E・HERO アブソルトZero》!!」

『ハアアッ!!』

《E・HERO アブソルトZero》星8/水/戦士/2500/2000

「出たツス！皆のトラウマ!!」

「レッドの生徒なら一度はアイツからのワンキル喰らってるんだな・・・」

「そして手札から速効魔法を発動！《マスクチェンジ》!!」

「・・・ほう！」

「アブソルートZEROを墓地に送り、同じ属性の「M・HERO」に変身させる!!障害全てを溶かしていなせ！《M・HERO アシッド》!!」

『シユワツ!!』

《酸だけにか?!》

《M・HERO アシッド》星8／水／戦士／2600／2100／

「あれは・・・浜口お得意の鬼畜HERO!!」

「(ちよつとジュンコさん！貴女十代様には融合しかして欲しくない、とか言ってますでしたっけ?!)」↑小声

「(うっさいわー！周りや敵サイドが鬼強化9期マワリに侵食されてく中、十代だけ置いてかれたらなん

か悔しいでしょーが！大丈夫、あくまで融合モンスターだしサポート1枚ずつだし諸悪の根源ダーク・ロクの存在はばかしてるから!!」↑小声

「もう言ったもん勝ちですわね?! ジュンコさんがいいならそれでいいのですが。まあABCとか繰り出す万丈目様よりは平和的・・・?」

《アナタ達、小声で何盛り上がってるの?》

「行くぜ！アシッドの効果発動！召喚時に相手魔法・罠を全て破壊する！へアシッド・バレット!!」

《随分雑に強い効果ですね?!》

《しかもZEROがフィールドから離れ・・・あつ（察し）》

「そう、アブソルートZeroが墓地に送られたのでこっちの効果も発動だ！あなたの全モンスターを氷付けにして破壊してやるぜ！へインブレンス・エンド!!」

「!!! ナツ、ナンダッテ?!」

「つまり全カードの破壊?!」

「インチキ融合も大概にしろ！」↑二回目

「ふざけるな十代！」

「やめろ！こんなデユエルじゃない!!」

なんか味方のはずのレッドからも罵詈雑言飛んで来たよ、ちよつとシヨックだ……

「ふうん……その手できたかあ」

「な、なんか反応鈍いな。アンタのカード全滅するんだぜ？」

「いやあ、そのゲスイコンボなら……どつかの青い猫型ロボットもどきの渾名を持つ娘に、散ツツツ喰らわされたからね。ピンチだけど会場の皆程のシヨックは無いってゆうか……」

「はい師匠！そのコンボを繰り返す猫型ロボットもどきには自分も覚えがあります！」

《だつ、誰ですかねそんな酷い事を繰り返すのは!?!》

「(ももえか……)」

「(姉様ですね……)」

「(おめーしかいねーだろ……)」

「さて、頑張つて生き残るかな！リバースカードオープン！速効魔法《瞬間融合》!!」
 《また》

《それ》

《です》

《かー!?》

「司会席凄く仲いいツスね・・・」

「さっきの毒竜がまたくんのか?!」

「否！出したいモンスターが多すぎてエクストラは1枚ずつでMAXだ！よつて僕は
 フィールドの僕ロード・オブ・ザ・レッド自身とレッドアイズダークネスメタルドラゴン、同じく鋼炎竜、黒

炎竜、黒竜、計5体を融合!!」

「・・・はあつ?!」

「我が盟友たちよここに集え！今ひとつと重なり、無慈悲な神に抗う魔神とならん！融

合召喚！《F・G・D》!!」
ファイブ・ゴッド・ドラゴン

『『『『ゴアアアアアアッ!!!!』』』』

《F・G・D》星12／闇／ドラゴン／5000／5000

「ふつ、ファイブゴッドだとおっ?!」

《相手ターンにあれだす馬鹿始めてみたわ……》

《わたくしも……》ドラゴンズ・ミラー《龍の鏡》なら全然理解できるんですが》

《しかもフィールドからって、兄さん……》

《アドバンテージの概念ガン無視ですね……全滅よりマシですけど》

「こっちの効果処理だ！アシッドは魔法・罫を破壊したあと相手モンスターの攻撃力を300下げる、凍てつき溶かせ!!」

アシッドの酸の雨とZeroの氷結が相手のフィールドを被うが、《F・G・D》は意にも介さんといわんばかりの表情でそこに君臨していた。

《F・G・D》攻5000?4700

「当然、墓地の《復活の福音》を除外し破壊を防ぐよ。ううむ、攻撃力がちよつとだけ下がったか……」

攻撃力4700、また倒しそびれちゃったぜ……いやまてよ？ 確かあのモンスターなら！

「手札から速効魔法《フォーム・チェンジ》を發動するぜ！ 融合HEROを融合アツキに戻して同レベルの「M・HERO」を特殊召喚！ アシッドを戻して変身！ 光を穿て《M・HERO 光牙》!!」

『でやあつ!!』

《M・HERO 光牙》星8／光／戦士／2500／1800

《また新しいHEROだわ!》

《速効魔法の特殊召喚、楽しそうですね》

「光牙の攻撃力は相手モンスターの数×500ポイントアップする、よって攻撃力は3000だ!!」

光牙にはもうひとつ効果がある、しかし向こうには手札が1枚残ってる。もしあのカードだった場合振り返ちだからな……

「光牙の効果発動、墓地のTORNADOを除外しその攻撃力2800の数値を《F・G・D》から奪い去る！」

「却下だ！手札の《古聖戴サウラヴィス》を棄てて、対象をとる効果を無効とする!!」

《あのモンスター出番多いな?!》

《実際便利だけどね、儀式モンスターだからサーチも利くし》

「あつぶねえ、なんかそんな気がしたんだよな・・・に《ミラクルフュージョン》を発動！墓地のブレイズマン、バブルマン、手札抹殺で切られたバーストレディの3体で融合！現れろ！揺ぎなき星の核より生まれしHERO《E・HERO Core》!!」

『でやああつ!!』

《E・HERO Core》星9／地／戦士／2700／2200

「守備表示か、このターンの突破はあきらめて次の準備に回ったようだね」

「光牙の効果が通ったら勝ちだったんだけどな、カードを2枚伏せてターン終了だ」

十代 LP50 H1
《M・HERO 光牙》(攻)

《E・HERO Core》(守)

セットカード

セットカード

「エンドフェイズに《瞬間融合》で呼び出したモンスターは破壊される、がしかし！さつきアシッドの効果で巻き込まれたカードは2枚目の《復活の福音》だ！よってこれを除外し《F・G・D》の存在を維持する!!」

《そんなんあつたなら使つとけよ・・・って思ったけど結果オーライなのかな》

《《F・G・D》は健在、残りライフはわずか50。こんなの無理よ!》

《けど強力な融合モンスターが2体います、まだまだわかりませんよ!》

《決着は・・・作者の気力が切れたので次回に持ち越しですわ》

「「「うおいつ?!」」」

つづく。

34羽 どんな理由であれ、一人の時は油断するなかれ

前回のあらすじ

十代 LP50 H1

《M・HERO 光牙》(攻)

《E・HERO Core》(守)

セットカード

セットカード

吹雪 LP1150 H0

《F・G・D》(攻4700)

「僕のターン、ドロ―！このまま《F・G・D》でフィニッシュ！．．．といけたら楽なんだろうが光牙もCoreも辛いねえ、汎用除去のないデッキでの能筋能力は厄介だ」

《それ自己責任》

《たまにはセオリー通りのデッキでも組みなさいな》

吹雪さんに対するこの二人の切れ切れの対応にもなんか馴れてきたな……

「そんなわけで《アドバンスドロ》発動！贅沢にもレベル12の《F・G・D》を生贅に2枚ドロー！」

「うわっ、勿体ねえ〜」

こんな贅沢な2ドロー始めてみただけ、フィールドのドラゴン5体を使ってまで融合したってのに思い切り良すぎだろ

「それほど君が強敵って事さ、だがまだ足りない仕方ない……《強欲で貪欲なジュンコ君》！あ、間違えた。壺！デッキの上より10枚のカードを除外して2枚ドロー!!」

《よし、そのケンカ買った。今度は直接手打ちにしてくれるから覚悟しろコンニャロー》

《ジュンコさん。気持ちはわかりますがCOOLに行きましようCOOLに、その刀千鳥しまつて下さいまし》

《よく見たら本物っ!? 兄さんなんで無傷なのかしら……》

あの刀、チドリ本人に借りたとか言ってたなおつかねく……ジュンコに危ないモノ持たせるなよ(2重の意味で)

「来たよ! 手札から魔法カード発動《死者蘇生》!! 蘇れ、《レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン》!!」

平然といいカード引いて来やがった、やっぱおかしいだろこの人!

「そうはいくかよ! 罨発動《転生の預言》! アンタの墓地のダークネスメタルとアンタ自身をデッキに還してやるぜ!!」

《いよっし! 一番ヤバそうなカードを妨害したわ!!》

《《転生の預言》、最近は墓地発動やらなんやらが普通に感じるから有効なカードね》
「いや、手札はあと2枚。おそろくあれは……」

「っ! 本命の為の罨!!」

「流石は我がライバルたるカイザー、正解だよ……僕の墓地には闇属性モンスターが5体以上存在する！よってこのモンスターを特殊召喚！具現せよ暗黒の創造神！《ダーク・クリエイター》!!」

『グツハハハハッ!!』

《ダーク・クリエイター》星8／闇／雷／2300／3000

「こいつがアンタの本命？珍しくドラゴンじゃないんだな」

「フツ。僕はね十代君、真紅眼彼女と闘い続ける為なら邪神にも悪魔にでも魂を売り渡す覚悟がある。君にはあるかい……覚悟って奴が」

「は、はあ……」

《なんか語りだしましたよお兄さん》

《兄さんは唐突に悟ったような事を言い出す時があるのよ……》

《なにそれ怖い》

「(あながち馬鹿に出来ない馬鹿なのよね、○○年真紅眼と闘い抜いてきた生粋の真紅眼馬鹿だもの)」

「(ジュンコさん馬鹿しか言っておりませんわ、激しく同意しますけど)」

「《ダーク・クリエイター》効果発動！墓地の闇属性モンスターを除外し、墓地から他の闇属性モンスターを再構築！蘇れ、我が魂の眷族《流星竜メテオ・ブラック》!!」

『グガアアアッ!!』

攻撃力3500、フィールドにモンスターが2体だから光牙と互角だな。だがモンスター効果でさらに攻撃力を下げられる事もできる、今のところ驚異ではないが……

「君を倒す為に全力を尽くす、出し惜しみは一切無しだ！たとえ鬼、悪魔と呼ばれようともね!!レベル8の《ダーク・クリエイター》とメテオ・ブラックでオーバーレイ!!」

「やはりエクシーズかつ!」

「宇宙を貫く雄叫びよ、遙かなる時をさかのぼり銀河の源よりよみがえれ!顕現せよ!

《No. 107 銀河眼の時空竜》!
ギャオオオオオウ!!
ギャオオオオオウ!!

『ギャオオオオオウ!!』

《No. 107 銀河眼の時空竜》★8 / 光 / ドラゴン / 3000 / 2500

「ぎつ、銀河眼?!レッドアイズ真紅眼とかレッド・デーモンズとかじゃねーのかよ!!」

「なんとでも言え!僕とて女子達を守らねばならん!!……それはさておき効果を教え

ておいてあげようかな、バトルフェイズ開始時にO R Uを取り除く事でフィールド上全モンスターの効果を無力化し、攻撃力を元々の数値に戻す。光牙の効果は通用しないってわだ」

「つまり……無効にするなら今って事だよな！ 召喚時に手札から《エフェクト・ヴェーラー》を捨てて効果発動！ そいつの能力は封じさせてもらうぜ！」

『キュオオオ……』

「ああ、なんとゆうことだ。セラ様の力で時空竜が無力にされてしまった！ こころなしか彼……彼女(?) もがっかりしているよ」

《とんだ風評被害ですな?!》

『ブツキーブツキー、タキちゃん雌だつてさ』

「おやそうだったかい、ドラゴン協会は女子が多いねえ(こつちで呼び出したの何気に初)」

『キュオウツ』

『(実はアンタのデッキのドラゴンほほほ女ノ子だよ、って事は黙つといてやろ。ライバル増えてもヤだし)』

ランク8エクシーズには驚いたがモンスター効果は封じたハズ、なのにあの余裕はなんだ……

《うつわ、初見にひどいプレイングするわね》

《本当ですわね、口がうまいといいますか姑息な手を……と言うべきですか》

「まあまあ、最後の攻撃の前に愁いを無くしたいだけだったんだ許してくれ……温存されてもあまり変わらなかつただろうしね？」

「勿体ぶんなよ、その最後の手札に何かあるんだ？」

「勿体ぶつたりしないよ。ただ、僕に本気を出させて後悔なんかしたら許さない！誇り高き時空の竜よ、その力を闇に染めよ！僕は銀河眼の時空竜1体で、オーバーレイ!!」
「はああっ?!」

「現れる、《No. 95》!! 銀河に漲る暗黒の力満ちし時、我が魂が世界を呪う！ エクシーズ召喚！ 《ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》!!!」

『ギシャアアアアッ!!』

《No. 95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》★9 / 闇 / ドラゴン / 4

000 / 0

《ぎゃああああ!!》

《いやああああ!!》

《ひいひいひい!!》

《きやああああ!超かっこいいですね!!》

《《《うっそおっ?!》》》

たしかに超おつかねえモンスターだ、観客席阿鼻叫の大混乱なんだが……吹雪さんのポジション的に大丈夫なのかなあんなの使って

「ダーク・マターの効果発動!このエクシーズ召喚成功時、デツキからドラゴン族モンスターを3体墓地へ送り、君はデツキから3体のモンスターカードを除外しなければならぬ!僕は《霊廟の守護者》、《伝説の黒石》、《ガード・オブ・フレムベル》の3体を発動コストに墓地へ!」

「ここにきてデツキ破壊?……俺はフェザーマン、エアーマンと《カード・ガンナー》を除外するぜ!」

「よし、《伝説の黒石》の効果により《真紅眼の黒竜》をデツキに戻し、このカードを手札に加える。そして必殺の魔法カード《ヘルモスの爪》を発動！」

「そつ、そのカードはっ!!」

「覚えていたようだねHERO。《伝説の黒石》とヘルモスを融合！新たな融合装備モンスターを誕生させる！魂の剣レッドアイズ・ブラックドラゴン・ソード《真紅眼の黒竜剣》を特殊召喚!!」

『我が力を、彼の勝利に捧ぐ!』

《真紅眼の黒竜剣》星7/闇/ドラゴン/2400/2000

「そして彼女はフィールドのモンスターの装備カードとなり、攻撃力を1000+墓地のドラゴンの総数×500ポイントアップさせる!ダーク・マターよ、かの力を喰らえ!!」

『ギヒヤ、グツヒヤハハハッ!!』ドラゴン×1

剣装備つって、食べてちったよ取り込んだよアイツこええ・・・持つ手が無

いからしやうがないかもしれないけどさ

「そしてORUを1つ使い効果を発動。このターン、ダークマターはモンスターに2回攻撃する権利が与えられる!!」

「これで墓地にドラゴン族モンスターは13体・・・」

「こっ、攻撃力11500の連続攻撃!?!」

「光牙の攻撃力は3000、モンスター効果で攻撃力を下げても圧倒的に足りないんだな!」

「バトルだ!ダーク・マターで《M・HERO 光牙》を攻撃!へ壊滅のダークマター・ストリーム!!」

迫り来る暗黒の光線、光牙の力じやまるでとどかねえ・・・

《ダメです、差があります!》

《ちよつと十代!!》

「・・・?」

《さっさ勝ちなさいよ、馬鹿ツ!!》

へへっ。アイツにそう言われちゃ・・・勝つしかねーよな!

「おう!そこで見てるよ!リバースカードオープン!速効魔法《次元誘爆》!!」

「次元・・・誘爆だ?!」

「光牙を融合デツキに戻して発動、互いに除外されているモンスターを2体まで特殊召喚できる!来い、《カード・ガンナー》!《E・HERO エアーマン》!!」

『ジャキンッ』

『ハアツ!!』

《カード・ガンナー》星3/地/機械/400/400

《E・HERO エアーマン》星4/風/戦士/1800/300

「(僕の表側で除外されているモンスターはエビル・デーモンのみ・・・下手に守備で出してエツジマンの的にされるのも、効果を使用してCoreを破壊してしまうことで

Zeroを蘇生されるのも悪手だな。それよりドローか、3枚の墓地送りか……
僕はその効果を使用しない」

「だったらエアーマンの効果発動だ！ 召喚時に他のHEROの数だけ魔法・罠カードを破壊する、対象は当然《真紅眼の黒竜剣》だ！ へエア・ブレイド～!!」

『そんな……ごめんブツキー……』

「おのれ……なんとゆう卑劣な！

《アンタが言うな！》

行けダークマターよ！ 《カード・ガンナー》とエアーマンを無きものにするんだ!!」

「2体とも破壊されるツ……だが《カード・ガンナー》が破壊された時、カードを1枚ドローできる！」

「ターン、エンド……」

吹雪 LP1150 H0

《No. 95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》(攻)

「あの化け物の攻撃を耐えきったか！」

「けど攻撃力はまだ4000、アニキのHEROの能力を遥かに上回ってるっス……」
「いくらなんでも限界だろう。ここまでよくやった、と誉めてやらんでもないがな」

「俺のターン、ドロオー!!」

『クルルルル……』

……来てくれたか。

「魔法カード発動! 《パラレルワールド・フュージョン平行世界融合》! このカードは除外されているHEROを融合する事ができる! フェザーマンとバーストレディを融合! 来い、マイフェイバリットヒーロー……フレイム・ウイングマン!!」

『ハアアア……タアアツ!!』

《E・HERO フレイム・ウイングマン》星6／風／戦士／2100／1600

《《フレイム・ウイングマンきたあー!!》》

《《なんですかこの二人のテンション?!》》

《十代様の象徴みたいなモンスターですから．．．》

「あれだけやってまだ融合してくるとは素晴らしい．．．だが足りないよ十代君！ダメクマターに対峙するにはあまりに力不足だ！」

「ああ．．．確かに一人じゃ勝てないかもな、けど俺には仲間達がついてる！モンスターを通常召喚！来い、《BF―疾風のゲイル》!!」

『クルルッ!』

《BF―疾風のゲイル》星3／闇／鳥獣／1300／400

「「「ええええええっ?!」」」

「なんと！それはジュンコ君の．．．」

《なんでゲイルが十代のデッキに?!》

《．．．うん、1枚プレゼントしたのよね。ちなみに彼は雄よ》

『クルクルルル．．．』

《なんでまたHEROと噛み合わないものを．．．》

《だって、あのコ見たら嫌でもあたしの事思い出してくれるかな？なくんて……つて何言わせんのよ!》

《案外乙女ですね、姐さん……》

《クツ、抜け駆けされた……私のデッキで十代にも使えそうなカードあつたかしら?!》

《融合デッキに儀式関連はどうかと思いますが……》

そんな事考えてたのかアイツ、すげーぶつきらぼうに「ん。」だけ言つて渡してきたくせに……正直トレードしてくれたHERO達見るたびに思い出すとゆうか嫌でも忘れようがないとゆうかしよっちゆうアイツの事考えてるとゆうか……

「ゲイルのモンスター効果へハーフネス・ゲイル〜! ダークマターの攻撃力を半分にするぜ!!」

『ギユアアアア……』

「これでダークマターの攻撃力は2000!」

「十代のフレイルム・ウィングマンの方が攻撃力が上になったんだなあ!」

「行くぜ吹雪さん！フレイム・ウイングマンでダークマター・ドラゴンを攻撃！へフレイム・シュートオ〜！！」

「向かえ撃て！へダークマター・ストリーム〜！！」

吹雪 LP1150?1050

「フレイム・ウイングマンのモンスター効果！バトルで破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらおうぜ！」

「僕の、負けか……」

吹雪 LP1050?0

WIN 十代

《クルック》

「よっしやあああああつ！勝ったぜえ!!」

まさか、本当に師匠に勝つちやうなんてね・・・なんだか置いていかれた気分になるわ。

「見事だったよHERO、あそこまでやって負ける」

「吹雪さん・・・ガツチャ！楽しいデュエルだったぜー」

師匠は一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに笑顔でそれに答えた。

「ああ、ガツチャだよ十代君。これで君に・・・明日香とジュンコ君を好きにする権利をあげよう!!」

アーツ?!しまった忘れてた!!普通に応援しちゃってたわ!!!

「十代！私ならいつでも準備OKよ！！場所はどこがいいかしら十代の部屋？」

「なんでノリノリなのよアンタは！あの馬鹿が勝手に言ってた事だからねこんなの無効よ無効！神の宣告よ！！」

「ジュンコ君！男の純情をかけた勝負に水を刺すとゆうのかいつ！！」

「かけてねーから！全部アンタが勝手に言ってただけでこっちはなんのチップも出してないからね！！」

「えつと……好きにするって、どうすりゃいいんだ?！」

「「「「……」」」」

はい知ってたー、十代だしこんなもんよねー。期待してない期待してない。

「……うーん、まあ大体予想通りかな？とりあえず十代君、約束のある事を教えよう。耳を失敬、ボソボソボソボソ」

「露骨すぎんだろー！」

「口に出してボソボソ言う人初めてみましたよ……」

師匠の露骨な耳打ちが終わると、十代の表情が驚きのあと意を決したような表情に変りこちらにズケズケと向かってきた。

「ジュンコ！」

「な、なによう……」

「このチーム戦、レッドの勝ちだからあれだよな。好きな女子に一つお願いできるつての、有効でいいんだよな？」

「う、うんまあ……そっちは互いに同意してやってたしね」

好きな女子つて部分強調すんのやめてくんないマジで、勘違いするから。

「「「イヤッホゥウ!!」」」

「実行委員長からのお許しが出たぞお！」

「明日香さんに写真とらせてもらおう！」

「俺はセラ様に踏まれてくるぜ！」

「馬鹿野郎！セラ様に罵られるのは俺の役目だ!!」

「セラ様は皆の魔王だ！勝手な真似は許さん!!」

「じゃあ俺は霊使いのコに！」

「ディアンケトの人に！」

「じゃあ僕はブラマジガールに．．．つていないし?！」

「これはひどいんだなあ（願望が）」

「クツ、仕方ないわね．．．私を撮りたければいくらでも撮りなさいっ!!」

「ノリノリですわね!？」

「わたし、逃げた方がいいですかね? あっそうだ! 三南さんのお見舞いかなきゃ!!」

「えく、シヨツクく吹雪様にお願ひ聞いてもらいたかったのにく」

「クツ、翔君にコスプレさせたかった．．．主にロリシヨタの」

「隼人君のおなかで跳ねたかった．．．」

「案ずるな君達! 負けた僕を許してくれるとゆうのなら．．．一人ずつ、僕のお願ひを聞いてもらおうかな!!」

「!!!吹雪様くくく!!!」

負けても揺らがないわねあの馬鹿は．．．女のコ達もつと怒ってもいいのよ?

「じゃあ!このあとアカデミアの屋上で……待っていてくれ。着替えたらすぐ行くから」
 「ほえっ?!……いいわよ、そんな事でいいなら」
 「じゃあ、約束だからな!」

えつと……わざわざ屋上に呼び出し?しかもすつごく真剣な顔で……や、ヤバイ。十代の事だから期待出来ないとかわかつちやいるけどドキドキしてきたつ……と、とりあえず鳥見え豆鳥逢えず冷静になろうクールに行こう屋上に向かおう。

「うくん、これは十代様ついに……告白フラグでしょうか?!わくわくしてきましたわっ
 !!」

「……おい」

「こうしてはいられません!早速アカデミア屋上に潜伏して野次馬の下準備を発動しなければっ!」

「おい!浜口!!聞いているのか!!」

「は、はいっ?!なんでしょう万丈目様藪から棒に」

「何、貴様にも俺様の頼みを聞いてもらおうと思つてな。レッド寮の裏の崖下で待つていろ、見せたいものがある」

「はあ……わかりましたわ」

《イラつと来るぜ》

「全く、こんな所に呼び出してなんのつもりでしょう」

彼女は考える、彼は普段からわりとわがまま放題なのでわざわざ改まつてお願いされる事などないと思つていた。故に予想がつかないのだ。

「見せたいものがある、か……ちょうど夕暮れ時ですし「この夕陽を、お前に見せたかったのさ」なくんてことはまずありませんわね、それなら十代様みたく高い所を指定するはずですしそもそも彼のキャラとかけ離れ過ぎてます。それに、正直そんな言われ

たら鳥肌が立ちそうですわ」

『本人いないからって言いたい放題ねアンタは……』

『フツ、お前は昔から面倒くさい奴だった』

「ダークナイトさんそれ言いたいだけでしょ……ああつ、ジュンコさん達の状況が気になってしょうがないですわ！デーヴアさん、ダークナイトさん、出歯亀……も
という様子を見てきてもらってよろしいでしょうか」

『アンタそういうの好きよね、私も気になるからいいんだけど』
『忘れたか！お前の一歩のファンの名前を!!』

一人意味★不明な発言ばかりをしているが気にしないで欲しい。彼はそういう精霊
なのだ……そんなわけで実質一人待ちぼうけになったももえ。しばらく暇をもて余
していると、背後に怪しい気配を感じて振り返る。

「ツツ！誰ですの?!」

「シャ〜」

「ギシャ〜……」

「シシシシシッ」

「ひいひいひいひい?!」

そこにいたのは蛇、3匹の蛇だった。種類までは彼女は知らないがそこそこ大きい、何故だからももえを狙っている。

「ちよっ．．．待って！待ってくださいまし!!わたくし蛇は、蛇だけは駄目なんですよ
くくく!!ディーヴァさん、ダークナイトさくん!!」

普段はそういった危機から助けてくれる相棒達に助けを求めるが、あいにく野次馬根性でお使いにいかせてしまったばかり。自分の軽率さに弱冠後悔しながら思わず逃げ出そうとしたが、迫り来る3匹の蛇に崖壁に追い詰められ、取り囲まれてしまう。ついには恐怖のあまりに腰を抜かしてしまった。

「もういやあ．．．なんなんですかこれ．．．わたくしが何したってゆうんですか．．．
助けて、助けてよお．．．トーヤアアア!!」

「「ギシャ〜!!!」」

もうダメだ、と覚悟して目を瞑る……しかししばらくすると蛇達の気配が消えていく……

「お、おい……大丈夫か？」

恐る恐る目を開けると待ち人來たり、万丈目準が焦った顔をして彼女を覗きこんでいた

「ううう……うわああああん!!」

「ま、待った待ったひつつくな!泣く程の事だったのか?」

「だって……だって……もう駄目かと……」

《イヤ〜ン》

これは、どうゆう事だ……藍神や吹雪さんの使用していた《スターブ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》を見た反応から、もしや蛇のような類は苦手なのかもしれんと考え、普段驚かされてばかりも癪だしたためしにおじやま達に無理を言つて蛇をけしかけさせてみたのだが……

「ううつ、グスツ……怖かつたよお……」

「ここまで駄目とは思わなかった、まさか口調が崩れるくらい泣きじやくるとは……「まあ、なんだ……すまなかつたな、変な所で待たせて……そんなに蛇は苦手だったのか？」

「はい、昔ちよつと咬まれたせいで色々あつてトラウマが……」

そうだったのか、軽いイタズラ心だったのだが……もの凄い罪悪感にみなわれる事になるうとは、いつそ正直に話してしまおうか？ いや、仕返しに何をされるかわからん。以前「わたくしのニンジンメニューは108式でありますわよ」とか言つてたしな、冗談でもたまつたもんじやない。そんな事より気になるのが……

「なあ、訊きたいのだが……「トーヤ」とは誰だ？」

「はいっ?!……だ、誰ですのトーヤさんとはどこから出てきたのでしょうかその単語」「いや、さつき「助けてトーヤ」と思いきり叫んでいたではないか。あの声で異状を察知したのだが……」

「……助けてゴージャの間違いじゃないですかね?お腹空いていたもので」

「なんだその苦しいにも程がある言い訳は?!どう聴いても人の名前だろうわざわざ隠すほどの事か?」

「いや、その……昔蛇に咬まれた話の続きで、動けなくなった所を助けてくれたのが彼だったのてつい……」

「フン、その割には随分親しげに呼ぶんだな。昔の男か何かか?」

「えと、あの、その……」

「……冗談だ、気にするな」

いかんいかん、動揺している所を見るのがあまりに珍しいからつい苛めてみたくなつてしまった、こんな感情を持つとは自分でも驚きだ……俺のせいでこうなつたとゆうのにこれ以上は流石にかわいそうか。しかし気に入らないな、こいつは俺の……何

者だ？「トーヤ」とは

「……二人の時だけだ」

「は、はい？」

「二人でいる時だけ、「準」と呼ぶ事を許してやる。か、勘違いするなよ？その男や十代すら名前で呼んでいるとゆうのに……この俺にだけ他人行儀なのが気に入らないだけだ！」

「じ、準……様？」

「そうだ、それでいい」

フン。これで俺の方がよっぽど……って何を考えてるんだ俺はああああ?!?

「ご、ゴホン！……行くぞ、実行委員長の枕田が居なくて後夜祭をまとめるものがおらんのだ、立てるか？」

「あ、いえ……腰が抜けてしまって」

……ううむ、これはどう考えても俺が悪いな。こんな奴であろうと人は何かしら

苦手なモノがあるというわけだ。

「蛇ごときに腰を抜かす奴があるか？全くしよがない奴め、ほら体寄せろ。よつこらせつと」

「きやあつ！なんなんですか今日の準様、優しすぎませんか?!」

背中におぶせただけでこの扱いである、大半罪悪感からだとは言い出しづらいが：

「ケチをつけるなら捨て置いていくぞ馬鹿め。む、相変わらず軽くて・・・うん、小さいな」

「い、今どこの感触感じて小さいっていいました?!失礼ですねこうみえてDはあるんですよDは！これはあれです！アビスグンデ自体がそんなに大きくないからち、ちよつと詰めてるだけなんですからね!!大体明日香様がぶっ飛んでおかしいだけで世間一般の女子高生からしたらDは割と大きい方ですから!!」

「俺は小さいとしか言っておらんぞ、何を必死になっているのだ全く・・・かわいい奴め」

「ふあ、ふあい?!今何ておっしやいましたか準様！ワンモア、ワンモアプリーズ!!」

「うん？聞こえんなあ。蛇3匹で腰を抜かすお嬢様の声など聞こえんな」
「じ、準様の……イジワル」

それにしても「トーヤ」か、ありふれた名前ではあるがこの学園内では聞き覚えがないな。遠哉？東也、冬夜……冬？冬、凍、氷……まさか、な。

《クルツク》

「ふふっ、ふふふふふふ……」

あたしは今、十代と待ち合わせた屋上にきている。いい感じに日も暮れてきてシチュエーション的には完璧と言っている……

『兄者あ、姐さんがニヤニヤしすぎてやばいぜ』

『ううむ、ジュンコ殿からしたら念願が敵うかもしれないとゆう所であるからな、仕方ないといえれば仕方ないかもしれぬ』

『クツクルツク』

「ふふふふふ」

『しかしあの遊城十代のことだ、期待を裏切ることに関しては期待を裏切ったことがないからな』

『いや意味★不明だからそれ、よくするにまた壮大な天然ボケをかましてくる確率が高いってわけだな?』

「いやいや流石に今回はいいでしょ期待して、わざわざこんな告白しかねえっ! って場所呼び出してんのよ? これで違ったらチドリの刀、質に出すわ」

『ジュンコ殿も1回ここに呼び出して盛大に期待はさせせてるではないですか・・・(二羽参照)』

『ってなんで俺の刀かかってんの?! つーか姐さん、そろそろ返してくれよコスプレ終わってろ!!』

「チツ、せつかく手に馴染んできたのに……ハイ」

『頼むぜ姐さん……兄者の刀ならいくらでも貸すからよ』

『おいこら、最近我より出番が多いからと調子に乗っていないか』

しようがないからチドリに刀を返そうとした、その時である。背後に異様な気配を感じたのは……

「ふふつ。こんな場所で一人、随分楽しそうだなお穰さん……」

「だっ、誰?!」

気づいて振り替えた時にはすでに遅し、謎の仮面の怪人物が指をパチン!と鳴らすと辺の景色が一変し、まるで宇宙空間のような場所に移動していた。

「ふふつ、我々はこの《エメラルド・タブレット》の力で宇宙空間に移動した。これで君は私から逃げられな……うおおおう?!」

「……チツ、外したか」

「外したか。ではないわ!普通いきなり斬りかかってきたりしますかね人の話は最後まで

で聞くものだろう!!」

「やかましいわボケー! せっかく十代と関係が進展するかも? って時に何邪魔してくれちやつてんじゃコルア!! B A ・ N ・ S I に値するわ!!」

『ああ、また返してもらえなかった・・・』

「だからつて K A T A N A は不味いでしょう K A T A N A は! 危うく両断されるところだったのニヤ〜!!」

・・・ニヤ〜?

「アンタまさか・・・」

「ご、ゴホン! 気を改めて自己紹介と行こう。私はアムナエル、セブンスターズの最後の一人だ。わけあつて枕田ジュンコ君、君を・・・つて危なあつっつ!!」

「チヨロチヨロしないですよ、手元が狂うじゃない」

首を狙ったのだけど・・・やるわねこの不審者

「だから話を聞けと言っているだろう! 自分で拉致しといてあれだがまったく動じない

な君は?!殺人で少年院行きになりたいのかね!!」

「いや、セブンスターズってゆうからここで仕留めれば万事解決かなくって……不審者に襲われて正当防衛しましたって証言するから大丈夫大丈夫」

「大丈夫ではない!それでも君はデュエリストかね?!」

「リアリストだ。」

『ジュンコ殿……』

『姐さん、逞しすぎ……』

『クルルウウ(呆れ)』

一度言ってみたかったロツ○ン流、こうゆう時に使えばいいのね。

「と、兎も角!この空間から出たければ、私とデュエルして勝利するしかないぞ!!」

「チツ、最初からそう言いなさいよ。もう鍵を持ってないあたしとデュエルしようだなんてどうゆうつもりか知らないけどさ……乙女の恋路を邪魔した罪、デュエルでボコって思い知らせてやるわ!!」

『こんな狂暴な方を、誰が乙女と思うだろうか……』

「ああん?ライキリイイ……なんか言ったかなあ?」

『な、なんでもござらぬ・・・』

『兄者、今余計な発言は不味い・・・死ぬぞ』

『クルクル』

「ククク、威勢がいいな。それもいつまで持つか・・・」

「今更ボスキャラぶつても遅いつつの、いいからかかってらっしゃい不審者ア!!」

「デュエル!!」

ジュンコ LP 4000

アムナエル LP4000

「行くぞ、私のターン!」

アムナエル・・・ああ、アムナエルね。なんか思いだしてきたわ除外デツキ使う人だっけ? 《マクロコスモス》発動してないのに景色が宇宙空間なんだけどいいのかな・・・まあいつか細かいことは。除外戦術はしんどいけど下準備がいるから張られ

る前に速攻あるのみかな。後攻ワンキルしてやろうじゃない覚悟なさい。

「私は《BF―朧影のゴウフウ》を特殊召喚!!」

『クルツシャーッ!!』

《BF―朧影のゴウフウ》星5／闇／鳥獣／0／0

「……なぬっ?!」

「フフフ……特殊召喚時の効果により、攻守0の《朧影トークン》2体を特殊召喚させて貰おう。そして!《クリフオート・ツール》と《メタルフォーゼ・シルバード》をペンデュラムゾーンへセッティング!!」

アムナエルのデュエルディスクが無理矢理変形したと思ったら……え、待つて? 大分待つてかなり待つて?!

「《クリフオート・ツール》のペンデュラム効果発動! ライフを800払い《クリフオー

ト・アセンブラ》を手札に加え、《メタルフォーゼ・シルバード》のペンデュラム効果！
 《クリフオート・ツール》を破壊し、《メタルフォーゼ・フュージョン錬装融合》をフィールドにセット！《メタル
 フォーゼ・ゴルドライバー》をペンデュラムゾーンに置き、ペンデュラム効果発動！シ
 ルバードを破壊し《メタルフォーゼ・カウンター》をフィールドにセット！《メタル
 フォーゼ・ステイエレン》をペンデュラムゾーンにセットしペンデュラム効果！《臙影
 トークン》一体を破壊し、《メタルフォーゼ・コンビネーション》をフィールドにセット
 する！！」

アムナエル LP40000?3200

「な、長い長い長い長い！何やってんのかさっぱりわかんない！」

「そしてセツティング済みのスケール1のゴルドライバーとスケール8のステイエレン
 によりレベル2から7のモンスターを同時に召喚する、ペンデュラム召喚！来るがい
 い、未知なる力を秘めし錬金の戦士達よ！エクストラデッキより《メタルフォーゼ・シ
 ルバード》！《クリフオート・ツール》！そして手札から《クリフオート・アセンブラ》
 ！！」

『ヒヤツハア!』

『・・・ピピピ』

『ピーツ』

《メタルフォーゼ・シルバード》星3／炎／サイキック／1700／100

《クリフオート・ツール》星5／地／機械／1000／2800

《クリフオート・アセンブラ》星5／地／機械／2400／1000

「レベル5、機械族である2体のクリフオートモンスターでオーバーレイ!新たな力を求めし進化の兆し、《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》!そして更にオーバーレイ!飽くなき進化への無限の挑戦、《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》!!」

『グギヤアアアツ!!』

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》★6／光／機械／2100?2700／1600 (ORU3)

「まだだ!リバースカードオープン《鍊装融合》!フィールドの《朧影トークン》とフィールドのシルバードを融合!《メタルフォーゼ・アダマンテ》!!」

『ふーはっはあ!!』

《メタルフォーゼ・アダマンテ》星5／炎／サイキック／2500／2500

なんじゃこりやあ・・・よくわからないうちにインフィニティとか出てきたんですけどどうすればいいのこれ、まだ1ターン目ですよね？

「・・・これで終わりと思うなかれ。レベル5のアダマンテにゴウフウをチューニング！」

「はいいいい?!」

「混沌の次元より沸き出でし力の源！錬金の奇跡により蘇り、この現世でその無限の渴望を暫し潤すがよい！神降せよ、究極神！《アルティマヤ・ツイオルキン》!!」

『クヲオオオオオツ!!』

《アルティマヤ・ツイオルキン》星X／闇／ドラゴン／0／0

「手札からカードを1枚セット！それにより《アルティマヤ・ツイオルキン》の効果発動が発動する！具現せよ神聖なる光の翼!!《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》!!」
『グオオオオオツ!!』

《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》星8／風／ドラゴン／3000／2500
「ど、どうしろってゆうのよ。こんなの・・・」

突如現れた最後のセブンスターズ、アムナエル。先行1ターン目から意味★不明なうちにガチモンスターによるガチガチな手段で理不尽でガチガチな状態に追い込まれたモブ気質主人公枕田ジュンコ。彼女の運命やいかに・・・

つづく。

35羽 デュエリストたるもの一度はやってみたいアレ

前回のあらすじ

アムナエルさんマジラスボス

えー、みなさんお久しぶりです、藍神セラです。今回はわたし視点でやっていくようですね、何故かは知りませんが。

あの、いきなりで申し訳ないんですが……

「一体これは、どうゆう事なんだ?!」

わたし達の眼前に広がっていたのは6つのデュエルディスクとカード達

「《サイバー・ドラゴン》と《レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜》……そんな！お兄さんと吹雪さん!？」

「こっちは《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》と《深海のディーヴァ》……明日

香さんとももえさんなんだな!!」

「ら、《光ライトアンドダークネス・ドラゴン》と闇の竜」と《ウォーター・ドラゴン》だ。嘘だろ……万丈目と三沢

までやられちまったのか?」

凄く……シリアスです。

な、なにがなんだかさっぱりわからない!と思うので説明させてもらっていいですか?
?

えーと……学園祭でわたし達女子チームが敗北して、十代君とジュンコ姐さんがついに告白イベントか!?って所まではいいと思うんですよ。

わたしはその頃み、み、み……三葉さんをボロボロにしちゃったので保健室で平謝りしていた所だったのですが、十代君が突然……ジュンコ姐さんが待ち合わせ場所(場所)に居ないと騒ぎ立てて、いろんな所を走り回っていた次第で。電話もメールも通じないしでそりやもう大騒ぎでした。

それから1週間、学校職員や様々なスタッフが探しに探したにも関わらず、姐さんの行方はわからず終い。

その間も大変でした。ももえ姉様はガチで凹んでるわ、万丈目はなにがおきたのかム〇ゴロウさんのようにそれをあやしてるわ、明日香のお姉ちゃんと天上院吹雪の馬鹿

は、姐さんを探すと云つて嫁^{レッドアイズ} ジェットトに乗り込んで彼女の名を叫びながら地球を一周しはじめのわ．．．遊城十代君はあちこち探し回つたと思つたら、授業も出ずに約束の屋上でたたづんでいるわ．．．正直ツツコミキ、じゃなくて観ていられませんでした。姐さんいないと纏まらないんだなあ、この人達．．．

それからしばらくして帰つてきた馬鹿の吹雪が．．．

「そういえば僕が闇の世界に落とされた、元ブルーの特待生の廃寮とか超怪しいよね？呼び出したの大徳寺先生だったなあ．．．」

思わずその場にいた全員で

「！！！！思い出すのがおせーよ！！！！」

そんなわけで森の再探索も兼ねながら、二人一組に別れて例の廃寮を目指してきたつてわけです。

くじ引きの結果、何故かわたしと翔君のチームだったのですが、彼があまりに色々なものにビクビクするんで．．．近くにいた十代君隼人君チームと合流したんですよ。

そんな道草を食っている間に、島の回りを急に六つの光の柱が取り囲む．．．もしかしたら鍵が奪われたのではないか？などと推測しながら廃寮の前にたどり着いたら案の定．．．御覧の有り様だったわけです。

「いったい……いったい誰がこんな事を！」

考えられるとしたら、最後のセブンススターズであるアムナエルのみ……けどあの
人、こんな一人で無双できる程強かったんですかね？そんなイメージ無いなあ……

「そいつらは……あた、私が全員始末してあげたのさ」

「だ、誰だ!？」

「廃寮の中から、誰か出てくるツス!!」

十代君の声に答えるように現れたのは……ジュンコ姐さんの愛用するモンスター、
A B Fたちの仮面を黒くしたようなモノを着け、アカデミア女子の制服も黒づくめに
した……えと、なんとゆうかどうみても……

「じ、ジュンコ!?何故ここに！行方不明だったはず……」

「ま、まさか自力で脱出を!？」

みなさんこの流れ好き過ぎじゃないですかね?! 誰かが突然現れる度に自力で〇〇
くって言ってる気がするんですが、一種の暗号かなんかですか?

「ふっ、私はジュンコでは無い……」

「返しまで通例通りですか?!」

あ、もしかして今回わたし視点なのって……ツツコミ要員!?

「嘘をつくな! 俺がジュンコをまちがえるはずがないだろう!」

「……えっ?」

「お前の声! 体型! さらに匂いに至るところまで……100%ジュンコに一致して
いる! 間違いない、お前はジュンコだ!!」

「どこで判断してんだこのド変態があ!!」

「グツハアアツツツ!!」

十代LP4000?0

「ア、アニキー!? しっかりしてー!!」

間0.5秒。見事な飛び膝蹴りがみぞおちに入りました。

《ドン☆》

「ゴッホ^咳ン^私。あらためて言うが私は枕田ジュンコでは無い。いや、正確には枕田ジュンコだった、とでも言っておこうか」

いやあの、ツツコミの勢いとか完全にジュンコ姐さんだったんですが……

「な、何……どうゆう事ツスか!?!」

「まるで意味がわからないんだなあ!」

出た、テンプレその2……こう感じるってことは、わたしも大分皆さんに毒され

てきたって事なんでしょうか

「貴様達の知っている枕田 ジュンコは……セブンスターズの最後の一人、アムナエルに、闇のデュエルに破れて散った。しかし、アムナエルはそれに秘められた心の闇に目をつけ、外法を用い手駒にする事にした……それが今の私だ」

「つ、つまり……?」

「姐さんの心の闇の化身つてところですかね。全く……」

「そんなふわふわな呼び方は気に入らないな……セブンスターズの厨二設定にあやかつてそれっぽく……セブンスターズが六人目の刺客、レイヴン。とでも名乗つておこうか」

「闇堕ちしてもジュンコさん節は健在だ!」

れ、レイヴンて……わたしもはたから観たら、こんな恥ずかしい感じだったんですかね、プラナ……あれですね、舞台に立つちやえば平気、みたいな心理?

そういうえばセブンスターズなのに人数についてなにも言いませんね皆さん、アムナエル入れたら8人目じゃないですか?

あつ、わたしの事知らないからだ……まあいいや黙つておきましょう、話ややこ

しくなるし。

「ジュンコが、死んだ．．．?」

「ふふふつ、どうした遊城十代。親友と思っていた人間が死んで悲しいか、辛いか?仲間達を消した私が憎いのか!?安心しろ、そんな負の感情もいずれ消える．．．すぐにお仲間達の所へ送ってやるわ!!」

「くつ、やるしかないのか．．．?俺はジュンコと闇のデュエルなんて．．．」

嫌ですよ、当然だ．．．あれは命を賭けたゲーム、十代君にとっては大好きな人(?)と殺し合うようなものだ。

「良かった、デュエルで解決で．．．」

「リアルファイトだったら余計に、この学園でジュンコさんにかなう奴なんていないんだなあ．．．」

「あなた方はなんの心配をしてるんですか!？」

「だって!あくまでももえさんにきいた話なだけで．．．」

「十代と喧嘩してる時の冬休み中、初詣の妨害をしてた暴走族数十人を．．．ハリセン

一本で壊滅させたらしいんだな……」

「なんで得物ハリセン!?もつと他にいい武器ありますよね!!」

「尾ヒレ付けすぎじゃコラー!!数十人じゃなくて18人よ……間違えてんじゃねえ!!」

「あんまり変わらないし?!とゆうよりよく人数正確に覚えてますね!?……あれっ?」

「……」

「あの……姐さ……」

「はっ、そうか!ツツコミはもはやジュンコさんの本能も当然!」

「まだジュンコさんの心が残っている証拠なんだなあ、十代!!」

「いやあ、残っているもなにも……」

ツツコミでそんな判断される辺り、流石姐さんと言わざるを得ないですね……

「ふ、フフフフ。よくぞ見破ったな……確かに、枕田ジュンコの心は完全に死んだわけではない。私を万が一にも倒せば、私を生み出す元凶となったアムナエルをも倒せれば……救えるやもしれんなあ?」

「そうか、なら．．．必ず勝つ！必ず助ける！！例えお前達がどれだけ強かろうが、例えジュンコの体を使つていようが．．．絶体勝つて、お前アイツを救いだす！！」

おお、先の攻撃でデュエル前に戦闘不能になりかけていたのに復活した．．．

「そ、そこなくてはなっ！．．．さあ行くぞ遊城十代！闇のデュエルの、始りだあ！！」

そういつて二人はデュエルディスクを展開する。あ、姐さんのディスクが黒っぽくなってる、細かいですね．．．

「デュエル！！」

十代

LP4000

レイヴン（!?） LP4000

「先行は私だな、ドロー！」

ちよつと痛い名前を（レイヴン）名乗るくらいだし、使用デッキは愛用の【B F】ブラック・フェザーのままでしょうか？

失踪前も使っていましたしね

「……このカードは、自分フィールドにモンスターがいない場合に特殊召喚が可能！
舞え、《L^{リリカル・ルスキニア}L—ターコイズ・ワーブラー》!!」

『うふふつ』

「へっ?」

「えっ?」

《L—ターコイズ・ワーブラー》星1／風／鳥獣／攻 1000／守 1000

「なんですか、あの姐さんらしからないにも程がある、かわいい系のモンスターは……
し、ジュンコは結構かわいいモノ好きだったろ……?」

ジャンルが違うんですよジャンルが……かわいいのベクトルが普段とは別方向じゃないですかね？

「フン、モンスター効果発動。手札または墓地より、「LL」を特殊召喚！集え、《LL—コバルト・スパロー》！」

『やんっ』

《LL—コバルト・スパロー》星1／風属性／鳥獣族／攻 0／守 100

「ほらあ、また出てきた……レイヴンってカラスの事ですよ？どうみても小鳥！雀じゃあくないですか！」

「セラさん、段々ジュンコさんに似てきたツスね」

「学園祭が終わってからの一週間で、かなり鍛えられたんだな……ツツコミが」

そこお！聴こえてるんですよ！

「どうでもいいことを気にする奴らだ。コバルト・スパローのモンスター効果、場に出た時デッキからレベル1の鳥獣族モンスター……レイド・ラプターズ《R—ラスト・ストリクス》を

手札に招く。そしてターコイズ・ワーブラーとコバルト・スパローの2体でオーバーレイ！麗しき翼を持つ者達よ、闇夜に集いて真理を紡げ！エクシーズ召喚！《Lリーリサイト・スターリング》!!」

『ふふふふっ』

《Lリーリサイト・スターリング》★1／風／鳥獣／攻 0／守 0

エクシーズ召喚で現れたのは、先程よりは大人びてはいるが、やはりかわいらしいモンスター……嫌な予感しかない。

「攻守0のモンスターを、攻撃表示でエクシーズ召喚……?」

「気をつけてください十代君！攻撃力が0のモンスターは、ろくな効果を持つモノがありません！」

「凄い説得力スね」

「セラさんのモンスター、嫌らしい効果満載だもんなあ……」

「リサイト・スターリングのモンスター効果。召喚時にモンスターを1体選択し、このカードのオーバーレイユニットの数×300ポイント攻守を上昇させる。自身を選択

して攻撃を600とする」

《Lリーリサイト・スターリング》攻0?600

「それでも600ぽっち、とてもエクシーズ召喚の時間に合うとは思えない……」

「第二の効果発動。オーバーレイユニットをひとつ消費し、デッキからレベル1の鳥獣族モンスター……《Lリーサファイア・スワロー》を招く。そしてモンスターを通常召喚! 《ミステイック・バイパー》!!」

『ピュルルル』

《ミステイック・バイパー》星1/光/魔法使い/攻0/守0

「ミステイック・バイパーの効果発動! こいつを生贄に、カードを1枚ドロしそれを公開する。それがレベル1のモンスターならば更に1枚ドロできる……ドロ! レベル1モンスター、《D・D・クロウ》! フフツ、もう1枚ドロだ! カードを1枚伏せ、ターンエンド!」

レイヴン H6 LP4000

《Lリーリサイト・スターリング》(攻600)

オーバレイユニット
ORU1

セットカード

ここまでの流れを見る限り、彼女のデッキはレベル1のモンスターが中心の鳥獣族デッキでしょうか……。一見地味ですが、ここまで回して手札の消費は0。想像以上に手強いかもしれないですね……

「俺のターン！なに企んでるかわかんねえけど……攻めなきやなにも始まらねえ！《E・HERO ブレイズマン》を召喚!!」

『とう!!』

《E・HERO ブレイズマン》星4/炎/戦士/攻1200/守1800

「ジュンコ！お前に貰ったこいつらで……。お前の心を取り戻す！召喚時に効果発動！デッキから《融合》を手札に加え、発動！手札の《E・HERO シャドーミスト》とブレイズマンで融合召喚！燃え上がれ、《E・HERO ノヴァマスター》!!」

『でやああつ!!』

《E・HERO ノヴァマスター》星8/炎/戦士/攻2600/2100

「融合素材として、墓地へ送られたシャドーミストの能力により、デツキからエアーマンを手札に加えるぜ」

十代君がくり出したのは、数多くのHERO達の中でもトップクラスに消費が少ない組み合わせで呼び出せるノヴァマスター。ジュンコさんが最初に譲ってくれたものかと思えば深いんだとか……相手の迷惑が読めない現場、様子見にはもってこいかもしれませんね。

「バトルだ！ノヴァマスターでリサイト・スターリングを攻撃！〈ブレイジング・ノヴァン！！〉」

「フン、単調な攻撃でつまらん……毘発動！《体力増強剤・スーパーZ》！！」
「ツ!?《ゴツドバード・アタック》じゃないだと!!」

姐さんといえば《ゴツドバード・アタック》！真っ先に警戒して、フィールドにカードを並べるのを躊躇したんですね……

「20000以上の戦闘ダメージを受ける時に発動！ダメージを受ける前に、ライフを4000回復する！」

レイヴン LP4000?8000

「だ、だが戦闘にはなんの関係もねえ！やっちゃまえノヴァマスター!!」

『ギャアアアアッ!?!』

「キャアアアアッ!?!」

レイヴンLP8000?6000

ノヴァマスターの放った炎が、容赦なくスターリングを焼き付くしていった……悲鳴が生々しくて怖いんですが姐さん、わざとやってませんか？

「うう、すまねえ……」

「なーんてね、リサイト・スターリングのモンスター効果！このモンスターの戦闘で受けたダメージを、相手にも与える！へりサイト・リベンジ!!」

「なんだと！うわあああああつ！」

十代 LP4000?2000

「あ、アニキー!?!」

スターリングを燃やしてた炎がそのまま十代君に……これはきつい、主に精神に。

「ぜえ、ぜえ……ノヴァマスターの効果、戦闘でモンスターを破壊したので1枚ドロ……くそつ、ジュンコの声できつつい悲鳴あげやがって……もう容赦しねえからな！」

「なんだ、手加減でもしてくれていたのか？お優しいことだ……」
「うるせえ！カードを2枚セット、ターンエンドだ！」

十代 H4 LP2000

《E・HERO ノヴァマスター》（攻）

セットカード

セツトカード

「フフフ、私のターン！モンスターを通常召喚、《金華猫》!!」

『ナクオ……』

《金華猫》星1／闇／獣／攻400／守200

「金華猫のモンスター効果！墓地からレベル1モンスターの《LLーターコイズ・ワーブラー》を特殊召喚！更にターコイズ・ワーブラーの能力により《LLーコバルト・スパロー》を特殊召喚！スパローの能力により、デッキから2枚目のターコイズ・ワーブラーを加える。そして《LLーサファイア・スワロー》のモンスター効果！「LL」モンスターがフィールドに存在する時、このカードと手札のレベル1・鳥獣族モンスターを特殊召喚！集え、サファイア・スワロー！《RRーラスト・ストリクス》！」

『ふふんっ』

『チチチ……』

《LLーサファイア・スワロー》星1／風／鳥／攻100／守0

《RRーラスト・ストリクス》星1／闇／鳥獣／攻100／守100

「そして私は、《金華猫》、コバルト・スパロー、ターコイズ・ワーブラー、サファイア・スワローの4体でオーバーレイ！麗しき翼を持つ鳥たちよ。戦場に集いて気高く輝け！エクシーズ召喚！舞い降りよ、《LLーアセンブリー・ナイチンゲール》！」

『はあああつ!!』

《LLーアセンブリー・ナイチンゲール》★1／風／鳥獣／攻0／守0

それは美しいモンスターでした、ナイチンゲールは確かサヨナキドリって意味でしたね……一瞬、某有名なナースのことかと

「エクシーズ召喚時、素材となっているサファイア・スワローがナイチンゲールに付与する効果を発動。墓地の《LLーリサイト・スターリング》をこのモンスターのオーバレイユニットとする！そしてこのモンスターの攻撃力は、オーバーレイユニットの数×200ポイントとなる！」

《LLーアセンブリー・ナイチンゲール》攻0?：1000

「五つのオーバーレイユニット・・・攻撃力10000か」

「パツと見凄そうだけど、攻撃力10000じゃなあ・・・」

だから、この学園低ステータスモンスターを侮る人が多すぎるんですって。さっきのスターリングも結構ヤバかったでしょうに・・・

「バトルだ！アセンブリー・ナイチンゲールで遊城十代、貴様にダイレクトアタック!!」
「なにい!？」

「このモンスターは、相手プレイヤーに直接攻撃ができるのだ！食らエエエ!!」
「ぐわあああああつ!!」

十代LP20000?10000

ノヴァマスターガン無視のダイレクトアタック・・・さつきから良いようにやられっぱなしじゃないですかね十代君、かならず助けるって意気込んでおいた割りにはもて遊ばれてますよ？

「・・・んのヤロウ！やりたい放題しやがって！絶体ぶった押す!!」

「ククッ、もう手後れだ……アセンブリー・ナイチンゲールは、オーバーレイユニットの数だけ攻撃ができる！これで終いだあ!!」

「ごっ、五回連続のダイレクトアタック!?!」

「そんなのライフが全快でも受けきれないんだな!」

後攻でやられたらほぼ確実にワンショットキルじゃないですか、皆さんあれにやられたのかな？

いや、強力ではあるけど安直過ぎる。あれくらい対処できない人は、やられた方々にもいないと思いますが……

「りっ、リバースカードオープン! 罠カード 《聖なるバリアーミラー・フォース》!! これにより、攻撃表示モンスターは全滅だ!」

「チッ、化石のような罠を使いおって……アセンブリー・ナイチンゲールの効果発動! オーバーレイユニットをひとつ使い、我が陣営の「LL」モンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されない存在となる! ミラーフォースごときでは止まらんぞ!!」

《LL—アセンブリー・ナイチンゲール》(攻1000?800) ORU5?4

「だ、だったら! チェーンしてカウンター罠発動! 《攻撃の無力化》! その攻撃を無効に

し、バトルそのものを終了させる!!」

そんなものまで伏せてたんですね。攻撃力1000と侮らず、最初の攻撃から使っておけばもつと被害が少なくて済んだのに……

「凄いだか。まあいい、所詮は一時凌ぎ、次で終わらせてくれる……だが折角だ。更なる絶望を与えてやろう、貴様の仲間達を葬ったモンスターを召喚してな!」

「ツツツ!?!」

「ま、まだなんかあるんスカあ!?!」

「メインフェイズ2、《RRーラスト・ストリクス》の効果を発動!このモンスター自身を生贄とし、エクストラデッキより「RR」エクシーズモンスターを準備表示で特殊召喚できる。飛翔せよ!《RRーサテライトキャノン・ファルコン》!!」

『ピエエエエエツ!!』

《RRーサテライトキャノン・ファルコン》★8/闇/鳥獣/攻3000/守2000

「あ、あれは……ジュンコが迷宮兄弟戦で使ってた、最強クラスの「RR」モンスター

!!

「嘘でしょ!?いきなりランク8のモンスターが飛んできた!」

「落ち着くのです!あの手の効果は大概デメリツトが……」

「流石は魔王様、鋭いですね……確かに、この効果で呼び出したモンスターは効果が無効の上、エンド時にエクストラデッキへと帰る……だがエクシーズ素材にはできない!手札より速攻魔法、《ランクアップマジックRUM—ファントムナイツ幻影騎士団ラウンチ》を発動!!」

「ら、ランクアップマジックウ!?!」

「私は、サテライトキャノン・ファルコンでオーバーレイ!現れよ出でよ、《No.92》

!!その偽りの骸を脱ぎ捨て、神の如し力を今一度解き放て!偽骸神龍

ハートHeart_トアーear_スt_ドHeartH_ゴDragon!!」

『グギャオオオオオウ!!』

《No.92 偽骸神龍 Heart_トear_スt_ドDragon》★9／闇／ドラゴ

ン／攻0／守0

「え、」

「ちよ．．．．．」

「なんなんだよ、こいつは．．．．．」

突如、わたし達の前に．．．十代君の前に敵として立ちはだかった、闇墮ちヒロインと化したジュンコ姐さん、もといレイヴン（○）。

まあ、強いってことは知ってはいましたが．．．なんかヤバそう。

はたして、十代君は姐さんを取り戻すことができるのか。そして、このままわたしはツッコミポジでいなければならないのか．．．その結末は、次回だそうです。

36羽 やってみたはいいけど正直恥ずかしい、穴があつたら入りたいレベル

「偽骸神龍 Heart | eartH dragon!!」

『グギャオオオウウ!!』

「なんなんだよ、こいつは……」

「フフフ。このモンスターの攻撃力は0だが、戦闘で発生するダメージは全て、相手プレイヤーが受けることになる……先程のように迂闊に攻撃はしないことだ」

「またダメージの反射、これじゃ十代は手がだせないんだな！」

「けど、もう1体のモンスターも攻撃表示のまま。その攻撃力はたった800！そちらを狙えば……」

「好きにするがいいさ、私は手札から魔法カード《強欲で貪欲な壺》を発動。デッキトップを10枚除外し、カードを2枚ドロウする!!ターン終了だ」

レイヴン H6 LP6000

《LLーアセンブリー・ナインゲール》

《No. 92 偽骸神龍 Heart|earth dragon》

「また手札が初期枚数、ライフも6000・・・あれだけ好き勝手やっているのに万全の状態を保つなんて」

ふっ、フッフッフッ！アツハツハツハツハツ！！

・・・やばい、やり過ぎたかも。

アセンブリーだけで終らせとけばいいものを調子乗って《No. 92》!!（ドヤア）とかしちやったよ必要なかったわよね?!

あーもー十代これ勝てんのかなー、デュエルは一応手加減情け一切無用のバリバリ全力投球でやってんだけど、十代に勝ってもらわないとあたしの努力が無駄に・・・

はい？お前正気じゃない？

つたりめーだこらー、誰がすき好んで闇堕ちなんかするかよあたし一応この小説の主人公ですからね?!

じゃあなんでこんな事してるかって？うーん……話すと長いんで回想はいるわね。

《クルツク》

回☆想ーこれは34羽のラスト辺りまで遡る!!

「具現せよ神聖なる光の翼!! 《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》!!」
『グオオオオオツ!!』

アムナエル

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》オーバーレイ・ユニット O R U 3

《アルティマヤ・ツオルキン》

《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》

《メタルフォーゼ・ゴルドライバー》ペンテグラム・スケール (P S 1)

《メタルフォーゼ・ステイエレン》(P S 8)

セツトカード

セツトカード

セツトカード

「ど、どうしろってゆうのよ、こんなの……」

先行クリスタルとインフィニティってなんだよ！メタルフォーゼなんか聞いてねーよ！錬金繋りだからって使用デッキ可笑しすぎだろガチすぎるんじゃない！！

「フッフ、私はこれでターンエンドだ。さあ、君は力をみせてくれたまえ！！」

ち、力をみせろいわれても、封殺されてたらなにも出来ないじゃないですかヤダー。姑息な壊獣でも入れとくんだった……えーい！もうやけどなんともなれー！！

「あたしのターン、ドッコオオオオ!!……あつ、勝ったんじゃないやね？」

「……えっ？」

クリスタル出したときに伏せたカード次第だけどね、ドーせこのままじゃ負けだ

し……出し惜しみは一切無しよ!!

「手札から、魔法カード《月の書》を発動！対象はもちろん、サイバー・ドラゴン・イン
フイニティ！」

「クツ、インフイニティのモンスター効果！ORUをひとつ使い、カード効果の効果を無
効にし破壊！」

「知ってる。けどこれであたしを阻むのはクリスタルウィングのみ！あたしの「B F」
達の全力、望み通り味わってもらおうわ!!永続魔法《黒い旋風》×2を発動よっ!!」

説明しよう！ジュンコ殿がキレ気味の場合……《黒い旋風》が大体2枚以上来るの
だ!!

「おいこらナレーション混ざんな混乱する。おいで！《BF―精鋭のゼピュロス》!!」
『トオウ!』

「……召喚時にはなーんも無いようね、だったら好き勝手やるわよ！黒い旋風の効果
でゲイルとグラディウスを手札へ！そしてフィールドにゼピュロスがいるから《BF―
黒槍のブラスト》を特殊召喚！」

『シャーツ!』

「レベル4のゼピュロスとブラストでオーバーレイツ!漆黒の闇より、愚鈍なる力へ抗いし反逆の牙!エクシーズ召喚!《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》!!」

『グガアアアアツ!!』

《ダークリベリオン・エクシーズ・ドラゴン》★4/闇/ドラゴン/2500/2000

「効果発動!ORUを2つ使い、クリスタルウィングの攻撃力を半分奪って自分の力に替える!ヘトリーズン・デイスチャーヅ!!」

「甘い!クリスタルウィングの能力を知らんようだな・・・相手モンスター効果の発動、効果を無効にし破壊!破壊したモンスターの攻撃力をクリスタルウィングは得る!!」

《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》攻3000?5500

知らないわけがない。シンクロモンスターの中ではトップクラスの能力を誇る、もはや代表的なモンスターとも呼べるドラゴンだもの・・・ごめんね、囿のような使い方して

「ふふつ、これで妨害効果は使いきったわね・・・ゼピュロスの効果発動!旋風を1枚

手札に戻して墓地より特殊召喚！400ダメージを受けるけどどうでもいい！
『フントッ』

ジュンコ LP4000?3600

「[BF]が1体だけいるんでグラディウス！そしてゲイルも特殊召喚！ゲイルの効果でインフィニティの攻撃力を半分にする！からのこの2体でチューニング！レベル6、
《BF―星影のノートウング》!!アンタとインフィニティに800ダメージ!!」
「グツ!?まさかあの2体の能力を掻い潜るとは・・・」

アマナエル LP4000?3200

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》攻2500 (ORU2)?1250?450
「戻した旋風張り直し、ノートウングの能力によりブリザード召喚！旋風効果でオロシとハルマツタンを持ってきて、ブリザードの力でゲイル復活！またインフィニティの攻撃力を半分にしたげるわ！」

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》攻450?225

「ハルマツタン特殊召喚！その効果によりゲイルのレベル分レベルを上げて5にして、ブリザードをチューニング！漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れ！電光の斬撃イ!!来なさい

エース！ 《A》BF―驟雨のライキリ《!!》
アサルト

『うおおおお！ 久しぶり過ぎる出番!!』

《A》BF―驟雨のライキリ《》星7／攻2600／五月蠅い

「オロシを特殊召喚して、ライキリの効果発動よ！ あたしのフィールドにはライキリ以外にゼピュロス、ノートウング、ブリザード、オロシの4体の「BF」がいる！ よつてアンタの目障りな2枚のペンデュラムカードとクリスタルウイング、そして最後に伏せたカードをぶった切る！ 〈驟雨電神剣〉!!」

『ついに技名まで雑にされたでござ．．．でやああああ!!』

「ばッ、ばかな!? 私のあの万全の布陣がこうもあつさりと．．．」

伏せカードは《くず鉄のかかし》だったか、タクシーと相性はいいいけど今欲しいカードじゃなかったわね残念でした。

「ガンガン行くわよ！ レベル4のゼピュロスにレベル3のゲイルを、レベル6のノートウングにレベル1のオロシをチューニング!! 漆黒の翼濡らし、そぼ振る雨に響け雷鳴

の一撃!!漆黒の翼率い、我が友たちの導となれ!!連続シンクロ召喚!降り注げ、《A B F―涙雨のチドリ》!もひとつ!《BF T―^{テイマー}漆黒のホークジョー》!!」

『待たせたな姐さん!』

『んもう、乙女の恋路を邪魔する奴は成敗よっ』

《A B F―涙雨のチドリ》星7/攻2600/脳筋

《BF T―漆黒のホークジョー》星7/攻2600/おネエ

「チドリの攻撃力は、墓地に存在する「BF」の数×300上昇する……現在8体だから攻撃力2400アップ!」

「ちよっ……攻撃力5000だとお!!」

「メタルフオーゼなんとかって罨あつた気がするけど知らんわ!バトルよ!チドリでサイバー・ドラゴン・インフィニティを攻撃イ!雷鳴の一撃、ヘライトニング・スラッシュ!!」

攻撃力の差は歴然……勝った!

「ワーツツ!?ちよつと．．．ちよつと待つのにゃー!!」

『ああん?』

「んだこら今更命乞いですかコノヤロー。ボスキャラの風上にもおけないわね」

「ち、違うのニャー!私です私!大徳寺だニャー!!」

そういつて誘拐犯が仮面を外すと確かに．．．いつのまにか行方不明になってたオシリスレッドの元寮長の大徳寺先生だった．．．思い出した、アムナエルって先生だったのよねなんて忘れてたんだろ．．．がつ!

「オロシの墓地効果でこっそり攻撃表示にしたたツオルキンにライキリで攻撃!!」

『チエストオオ!!』

「ぐわあああああつ!?!」

アムナエルLP4000?1400

タクシー撃☆破!うゝん、ライキリ今輝いてるわよゝ口にはしないけど

「こ……ここは動揺して攻撃をやめるなり私の話を聴くなりするとこじやないですか
ニヤ……」

「はっ？人の恋路(?!?)を邪魔しといて実は先生でしたら、程度で手加減してくれるとでも思ってたんですか馬鹿なの？制圧クソゲーガチデッキ使いやがって盤面崩されたらはい投了ってそれでもアンタデュエリスト？……っーかあたしアンタとほぼほぼ接点ないし、○^ゃつちまったところで良心痛まないわよ正当防衛だし」

『姐さん容赦ねー……』

「だ、だからちよつと待ってくださいニヤ、こつちにも事情とゆうものが……」

「問・答・無・用。はいチドリとどめー……」

「クツ、ならば……これを十代に見せると言ったら?!」

あたしが話に応じないとみるや懐からなにやら紙切れを取り出して……

「わー!!!ちよつ、それ……十代ブロマイドじゃん！なんでアンタが持つてんのよ!!」

※説明しよう！ジュンコ殿は遊城十代のある姿やこんな姿を隠し撮りしたブロマ

イドを大量に所持しているのだ！もちろん本人には内緒だぞ！（撮影・丸藤 翔）
『ライキリ、急にナレーション入るのやめなさいよ』

「フフフフ、こんなモノを沢山集めていけないコだ……私を始末するのは勝手だが、私が消えたらこれの一部が十代の元に届く手筈になっている……君の物とゆう証明付きでな！流石にそれは困るだろう!？」

「こつ、こつ、こつ……姑息な手を……」

そんなわけで下手に逆らえなくなったあたしは大徳寺先生の話を聴くことに。

まあ細かい事情は原作を見ろって感じですが……そこから十代の成長の為にあたしに目を着けたらしく、あたしが敵の手に落ちたとなれば十代の力がより本気で引き出せるかもしれないから、闇のデュエルで倒して洗脳して手駒にしようとしてたらしい、洗脳っておいこら……んで、写真を楯に結局逆らえなくて協力する羽目になって今に至ります、回想終わり！

いや〜大変だったねみんなの目を誤魔化すの、つか鍵の守護者全員あたしに倒させるってなんなん？いじめ？あたしとのデュエルに力使いすぎたせいらしいけど……んじやー究極神とか使うなよ馬鹿なの?!

まったく、モモと師匠^{吹雪}は精霊通信網駆使して事情を分かってもらえたからいいけど、他の三人はガチ勝負だったし……あ、三沢君？その場にいたからつい、目撃者は全員消す的なノリで。

《クリクリッ》

「俺のターン……ドロー！」

「いかに攻撃を反射する能力を持っていても、傍には攻撃力800のモンスターが棒立ちー！」

「付せカードもない、あれに攻撃を集中させれば勝機はあるツスよね……セラさん！」
「なんでわたしに聞くんですか……正直そんな事を見逃すとは思えませんね、学園最強と謳われた貴方のお兄さんや天上院吹雪すらも倒した相手なのですよ？」

「うっ、確かに……」

セラちゃん先輩、口調が段々素になつてきてる……てかその冷たい目線やめて。解つてるから、やってるこつちも滅茶苦茶恥ずかしいんだからそのまま気付かないフリしてよ……言つとくけど、アンタのプラナも似たようなもんだつたからね？

「《E・HERO エアーマン》を召喚！効果を発動しネクロダークマンを手札へ！手札より《融合回収》フュージョンリカバリーを発動！墓地のシャドーミストと融合を手札に戻す！」

「愚かな……手札より《D・D・クロウ》の効果発動！このカードを捨てる事で、シャドーミストのカードを除外する!!……これで融合も回収出来まい、残念だったな！」
「しまった、あのモンスターに気取られてすっかり忘れてたぜ……だったら手札の《融合》を発動！スパークマンとネクロダークマンを融合し、来い！ネクロイドシャーマン!!」

『イヨオツ!!』

《E・HERO ネクロイドシャーマン》星6／闇／戦士／攻1900／守1800

って最初から持つとるんかい！紛らわしいことすんなや!!って言いたい、すつごく言

いたい……

「ネクロイドシャーマンのモンスター効果！特殊召喚時に相手モンスター1体を破壊し、相手の墓地のモンスター1体を特殊召喚する！」

「ふうん、面白い効果だ。けど、アセンブリー・ナイチンゲールは破壊耐性を加えることができるが？」

「わからってらあ！破壊対象はその馬鹿デカイ龍、Heartearth dragonだ！」

『グギヤアアアッ！』

でかいから断末魔も派手ね……

「そして墓地のモンスター、サファイア・スワローを特殊召喚してもらおうぜ!!」

『むうう……』

《L　L　—サファイア・スワロー》 攻100

「やった！」

「これで反射ダメージを気にせず攻撃できるんだな！」

「ククク、一見正しいように見えるその行動……だがそれは、大いなる間違い！蘇れっ

！Heart—earth dragon!!」

『グガアアアアッ!!』

《No. 92 偽骸神龍 Heart—earth dragon》攻0? 10000

「ふ、復活しただとお!?」

「しかも攻撃力が一万!どうなってるんスカあ!!」

「ハハハハハハ!!このモンスターがORUを持ったまま破壊された場合、自らを復活し除外されている私のカード1枚につき1000ポイントの攻撃力を得るのだ。残念だったなあ?」

「《強欲で貪欲な壺》はその為に使ったのですね、どうりで発動タイミングがおかしいわけですよ……(姐さん、口調が安定してないです)」

「くっそ……だったらバトルだ！ノヴァマスターでアセンブリー・ナイチンゲールを攻撃！〈ブレイジング・ノヴァ〉!!」

「無駄な事を！アセンブリー・ナイチンゲールの効果を再び発動！ORUを消費し「L」を戦闘・効果破壊から守る！この効果は戦闘ダメージをも無効にする!!」

《LLーアセンブリー・ナイチンゲール》攻800?600(ORU3)

「まじかよ、これじゃ手が出せねえ……カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

十代 HI LPI000

《E・HERO ノヴァマスター》(攻)

《E・HERO エアーマン》(攻)

《E・HERO ネクロイドシャーマン》(攻)

セットカード

「それで終わりか？つまらんなあ……私のターン！バトルだ！ハートアースでノヴァマスターを殲滅する！魂ごと消し飛ばがいい、ハート・ブレイク・キャノン!!」

「(姐さん、ノリノリ過ぎです……)」

「と、^{トラップ}罠発動《和睦の使者》！このターンの俺とモンスターへの戦闘ダメージを0にす

る!!」

まあ、攻撃力10000を前に棒立ちなんてするからには和睦くらいあるわよね。

さてどうしようかな、まだ2体とも健在なのにこれ以上布陣築いてもねえ・・・大徳寺あのやろー教諭はできるだけ十代を追いつめて成長させて欲しいつつたな、引いちやっただしやれる事はやりますか気は乗らないけど・・・

「嘘ですよね?ノリノリですよね?!

「いきなりどうしたんっすか!?!」

「《死者転生》を発動。手札のカード1枚を捨て、墓地の《金華猫》を手札に戻し召喚。再び《R レイド・ラフターズ Rーラスト・ストリクス》を出現させる。これを生贄に再びいでよ!《R Rーサテライト・キャノン・ファルコン》!!」

『キュオオオツ!』

《RRーサテライト・キャノン・ファルコン》★8 守2000

「またあの効果で出したってことは・・・」

「《R U M—スキップ・フォース》を発動！私はサテライト・キャノン・ファルコン1体でオーバーレイ！少々勿体ないがみせてやる・・・究極至高のハヤブサよ、今こそ勝利の天空へと羽ばたけ！ランクアップ・エクシースチエンジ!!現れるオ!《RR—アルティメット・ファルコオオン》!!」

『ピュオオオオツ!!』

《RR—アルティメット・ファルコン》★10／闇／鳥獣／攻3500／守2000

「あ、アルティメット・ファルコン!?そんな奴俺は知らねえぞ!!」

「攻撃力3500!10000の隣じゃちよつと霞むけど・・・充分ヤバいツス!!」

いや、あたし的に「RR」でラストリアルティメットするの好きじゃないのよねえ。相続続かないし能筋には弱いし突破されたら建て直し辛いもの、ある程度布陣固めてからしか出したくない・・・って理由でいままで出す機会がありませんでした、ごめん!頑張って攻略してね(ハート)

ってキモいな、あたしが(ハート)はキモいな。自重しよう。

「サファイア・スワローを守備に変更。エンドフェイズに《金華猫》が手札に戻り・・・

この瞬間アルティメット・ファルコンの特殊能力が発動する！エンドフェイズごとに相手モンスターの攻撃力を1000奪うへスプレマシー・プレッシャー（適当）！！」

『『うがあああああっ?!』』

《E・HERO ノヴァマスター》攻2600?1600

《E・HERO エアーマン》攻1800?800

《E・HERO ネクロイドシャーマン》攻1900?900

「ああつ、ただでさえ攻撃力差が絶望的なのに……」

「これじゃあ融合モンスターでさえ下級モンスターと代わらないんだなあ」

「くそつ、なんて奴だ……」

「己が無力を知るがいい、虫ケラ共め！ターンエンドだ！」

レイヴン○ H5 LP6000

《LLーアセンブリー・ナイチンゲール》(攻600) ORU3

《No.92 偽骸神龍Heart|earth dragon》(攻10000)

《LLーサファイア・スワロー》(守)

《RRーアルティメット・ファルコン》(攻) ORU2

「俺のモンスターに虫ケラなんか居ない……あいつはそんな事言わねえ！……やつぱりお前は、あいつじゃない!!」

「アニキ……」

「レイヴン、お前は許さない……皆を陥れ、あいつを侮辱するような発言ばかりして……許しておくかあ！」

「……だったらどうすると？この状況でいくら吠えようが、負け犬の遠吠えにしか聞こえないぞ」

「(ぜ、絶対無理してますよね。あの仮面の下涙目なんじゃ……)」

うるせーぞちゃんセラー！顔で大体なな考えてるかわかってきたわその哀れみの表情をやめなさい!!

そーだよ涙目だよ今すぐ謝って抱きつきたいわよ(欲望)!!

しかし今さら後に引けるかあ！意地でもやりとおしてやるわ!!!

「だったら……完膚無きまでにテメーを、派手にぶっ飛ばす！俺のターン！魔法カ-

ド発動、《アドバンス・ドロウ》！レベル8のノヴァマスターを生贄に、2枚ドロウ！！更に、2枚目の《融合回収》！墓地のワイルドマンと《融合》のカードを回収する！そして……《精神操作》を発動！対象はハートアース・ドラゴンだ！

「ほう……」

「神龍だかなんだか知らないが、操っちゃまえば恐かないぜ！《融合》を発動！ネクロイドシャーマンとエアーマンを融合し……来やがれ《E・HERO GreatTOR NADO》！」

『ハアアアツ!!』

《E・HERO GreatTOR NADO》星8／風／戦士／攻2800

「トルネードの効果発動！相手モンスター全ての攻守を半分にする！へタウンバースト！！」

《Lリーアセンブリー・ナイチンゲール》攻600？300

「おかしい、アルティメット・ファルコンの攻撃力が変動してないんだな！」

「どうゆう事ツスカ！」

「フン。残念ながらアルティメット・ファルコンはあらゆる効果を受け付けない……。神のカードにも匹敵する至高の存在なのだ！倒すためならそれこそ、神に挑む腹づもりで来るがいい!!」

「神様だろうが悪魔だろうが……。フィールドに出ちまった以上はモンスターだ、倒せない通りはねえ!!魔法カード《HEROの遺産》発動！俺の墓地のHEROを融合素材とするモンスター、ノヴァマスターとネクロイドシャーマンをエクストラデッキへ戻し、3枚ドロウする!!」

えー……。3枚ドロウって割とぶっ壊れじゃね？しかも使用者が使用者だけになんが起きてもおかしくないわね。

「……。来たっ！装備魔法《最強の盾》をトルネードに装着！守備力の数値分、攻撃力を上昇させる！」

《E・HERO GreatTORNADO》攻2800?5000

「攻撃力5000、アルティメット・ファルコンを容易に倒せる数値にはなりました

が……」

「バトル！トルネードでアルティメット・ファルコンを攻撃！〈スーパーセル〉!!」

「甘い……手札の《虹クリボー》のモンスター効果発動！このカードを相手モンスターに装備し、攻撃を封じる!!」

『クリクリッ』

はじめて使ったけど……なんかくつき虫みたいについたな、あんま可愛くない。

「に、虹クリボー!?!」

「《ミスティックバイパー》の存在から匂ってはいましたが、やはりレベル1のモンスターがデッキの大半を締めているようですね」

セラちゃんの観察眼恐いわね……なるべく敵にまわさないようにしよう。

「倒せねえか……速攻魔法、《神秘の中華鍋》を発動！ハートアースドラゴンを生贖

にして、その攻撃力分ライフを回復！」

十代LP1000?11000

「ライフが1万を越えた！」

「これならアセンブリー・ナイチンゲールのダイレクトアタックを受けてもしばらくは安全なんだなあ」

いいもの引くなあ、あわよくば融合素材にでもするつもりだったのでしょーけど……まさか大量のライフに変換してくるなんてね、流星は十代！常時ディスプレイニー・ドローと呼ばれるだけはあるわ！

「っ、何にやけてやがんだ……カードを1枚セットしてターンエンド!!」

「ならばエンドフェイズに再びアルティメット・ファルコンの効果を受けるがいい！へスプレマシー・プレッシャー<!!」

《E・HERO GreatTORNADO》攻5000?4000

十代 H2 LP11000

《E・HERO GreatTORNADO》+ 《最強の盾》

セツトカード

「私のターン！ドロー！」

うつわあ・・・最高にゲスイカード引いた。あたし今日引き無駄に強くな？ヴェーラーとかは引かないけど。これ使ったら流石に勝っちゃうわよ、あの丸藤先輩を瞬殺だったもんなこれ使って・・・

「どうした！早くターンを進めろよ!!」

けど逆に考えれば、コイツを使わないとゆう事はあたしの勝手に一旦眠ってもらった皆にも、そして今対戦している十代にも失礼にあたるよね・・・しよーがない、十代の成長つて目的は達成できたか微妙なところだけど手加減なんざするべきじゃないし、勝っちゃったらアム徳寺先生はあたしが責任もって改めてぶっ飛ばすつて事にするか!!

「フフフ、ただかライフ一万ちよつとまで回復ぐらいでおめでたい連中だと思つてな……そろそろ興もさめた、終わりにしよう。手札から魔法カード発動! 《融合》!!」

「ええっ!?!」

「ジユンコが、融合……!?!」

「貴様の大好きなこのカードで、フィールドのアセンブリー・ナイチンゲール及びサファリア・スワローを融合させる! 闇夜に響く小夜鳴鳥のさえずりよ、内なる声と一つになりて更に激しく鳴くがいい。融合召喚! 舞い降りよ! 気高き孤高の夜鳴き鳥。《L L—インディペンデント・ナイチンゲール》!」

『キュウウウ!!』

0 《L L—インディペンデント・ナイチンゲール》星1／風／鳥獣／攻1000／守

「インディペンデント・ナイチンゲールのレベルは融合素材となったアセンブリー・ナイチンゲールのオーバーレイユニットの数だけ上昇し、攻撃力はレベルの数×500ポイ

ントアップする!!アセンブリー・ナイチンゲールのオーバーレイユニットの数は3つ
!」

《Lリーインディペンデント・ナイチンゲール》星1?4 攻10000?3000

「攻撃力3000の融合モンスター!」

「まだ底をみせていないとは思ってましたがこんな切札が・・・」

「けっ、けど!アニキのトルネードの攻撃力は5000!攻撃力の差は歴然ツス!!」

「短慮な・・・インディペンデント・ナイチンゲールの効果を発動!1ターンに1度、このモンスターのレベル×500ポイントのダメージを相手に与える!喰らええ!2000のダメージを!!」

「何っ、ぐわあああああっ!」

十代 LP11000?9000

効果ダメージの衝撃で、十代の体が吹っとんで倒される。その苦痛に満ちた表情を見るだけでゾクゾクすr・・・しねーよ!どんなドSだあたしは!!

「こ、こんなもん・・・なんてことないぜ！」

「あらそくお？じやあもつとイイコトしてあ・げ・る♪・・・インディペンデント・ナイチンゲールとアルティメット・ファルコンを生贄に捧げ、上級モンスターを召喚!!君臨せよ無情なる暴君!」《The tyrant NEPTUNE》!!」

『ギャオオオオオツ!!』

「ま、また化けモンかよ・・・」

「ネプチューンの効果!生贄に捧げたモンスター達の攻撃力の合計とその名証、そして奪った名のモンスター効果を得る!私が選ぶのはインディペンデント・ナイチンゲール!!」

「ん?ちよつと待ってください。あの鳥人の効果を得るって事は・・・」

「そう・・・ナイチンゲールとアルティメット・ファルコンの攻撃力の合計4500に加え、レベルの数×500ポイント攻撃力を上昇させる!このモンスターのレベルは10!よって攻撃力は・・・」

《The tyrant NEPTUNE》星10/水/爬虫類/攻0?9500/守2000

「きゅつ、9500だとお!!?」

「もうひとつの効果も忘れてもらっては困るぞ? 1ターンに1度、レベルの数×500・・・すなわち5000の効果ダメージを貴様に与える! 〈シクル・テンペスト〉!!」
「てつ、手札から《エフエクト・ヴェーラー》を捨てて効果発動! モンスター効果を無効に・・・」

「無駄だ! インディペンデント・ナイチンゲールはアルティメット・ファルコンと同じく他のカード効果を受け付けない! その能力を得たネプチューンもまた然り! 砕け散れエエエ!!」

「うつ、うわああああああっ?!」

十代 LP9000?4000

「じゅうだーい!!」

「アニキー!!」

自分で使つときながらえっげつねえ・・・どんな効果も受け付けない上に毎ターン

5000ダメージを与えるとかどう防げっちゅーねん。

丸藤先輩、先行簡易ネプチューンとかしてマジですんませんっした。まさかピン刺し同士が初手で揃うとは思わなかったわよ。あの人真正面からじゃ勝てる気しないからね仕方ないね。

ネプチューン召喚時、モンスター効果のコピー前ならヴェーラーも通用すんだけど……もつとも墓地には《死者転生》で捨てておいた、モンスター効果の対象になる事を防ぐ《スキル・プリズナー》がある。どの道無駄だったのだけど。

……十代生きてる？ダメージの衝撃で立てないとかない？大丈夫？

「くっ、まだまだあ……」

「フツ、その意気や良し……墓地の《RUM―スキップ・フォース》を除外し発動！墓地の「RR」モンスターを復活させる！蘇れ至高の隼！《RR―アルティメット・ファルコン》!!」

『ピュオオオオオッ!!』

《RR―アルティメット・ファルコン》★10 攻3500

「さあバトルだ！これ以上苦しませようその命、一太刀で刈り取ってくれる！グレードトルネードへ攻撃、破ヘシクル・オブ・ルーイン減ン！！」

攻撃力差は4500！もらったあ！！・・・あれっ？勝っちゃ駄目じゃね？

「負けてたまつかあ！リバースカードオープン《ガード・ブロック》！！この戦闘で発生するダメージを0にし1枚ドロロー！！」

トルネードの命は刈り取った、けど・・・

「チツ、ネプチューンに対しての罠ではないから適用されるか・・・ならばアルティメット・ファルコンでダイレクトアタック！ヘファイナル・グロリアス・ブライトン！！」
「ぐわあああああつ！！」

十代 LP4000?500

「首の皮1枚で生き延びたか。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

レイヴン H2 LP6000

《The Tyrant NEPTUNE》(攻9500)

《RR—アルティメット・ファルコン》(攻)

セットカード

「俺の……ターン、ドローツツ！」

「ライフは残ったけど……」

「次のターンが来たら再び5000の効果ダメージ、絶体絶命なんだなあ」

「あの最凶最悪の暴君を倒すしかないですね……はたして、その手段が彼にあるのか」

「フン。もはやネプチューンを倒す手立てなどあるまいに……大人しくサレンダーでもするがいい、楽に眠りにつけるぞ」

約：これ以上見てらんないんで今回は大人しく諦めてください。先生はあたしがしばいとくから

「誰がサレンダーなんかするか、黙ってる!!」

「ツツ!」

「俺は誓ったんだ・・・あの場所で必ず想いを伝えるって!吹雪さんも言ってた、ジュンコは素直じゃないからこそ真っ直ぐに正面から言わないと駄目なんだって!俺と想いは同じはずだから頑張れって。だから!あいつが友になってくれたあの場所で・・・なのに、次から次へと邪魔ばかりしやがってえ!!」

「あ、あの・・・想いつて・・・?」

「言っただはずだ、てめーはブツ飛ばす!!完膚なきまで正面から全力で!!魔法カード《強欲な壺》!2枚ドロロー!!バブルマン召喚!場にカードがないので2枚ドロロー!!魔法カード《ミラクルフュージョン》!!フィールドのバブルマンと墓地のエアーマンを除外融合!来いよ、無慈悲なる白銀の英雄!《E・HERO アブソルト Zero》!!」

『とおうつ!!』
 《E・HERO アブソルト Zero》星8/水/戦士/攻2500?3000/2000

「ふ、フン。最強のHEROとされるZeroを呼んだか、だがその無慈悲たる破壊効果さえも我がモンスター達には通用しないとゆうのに」

「……なに勘違いしてやがる。俺がZeroを呼んだのは効果を使うためじゃない、そいつらを真正面から殴るためだ！まずは装備魔法《巨大化》を発動！相手よりライフが下の場合、装備モンスターの攻撃力を倍にする！更に永続魔法《Get Your Game On!》発動！」

えっ？なにそれ聞いたことないんですけど……

「このカードは、相手とのライフ差が4000以上低い時のみ発動出来る！フィールドの俺のHERO達の攻撃力は倍になる!!」

「な、なんだとお!!?」

《E・HERO アブソルートZero》攻3000?11000

《Get Your Game On!》

永続魔法

※自分のライフが相手よりライフが4000以上低い場合のみ発動できる。

「自分フィールド上の「E・HERO」と名のついたモンスターと

「??????」と名のついたモンスターの攻撃力は2倍になる。

「馬鹿な……攻撃力12000だど!?!」

「今です!アルティメット・ファルコンを攻撃すれば貴方の勝ちに!!」

「させるかあ!罨カード《立ちはだかる強敵》を発動!!相手モンスターは私の最も攻撃力が高いモンスター、すなわちネプチューンを攻撃しなければならない!!」

これでネプチューンは失うとしてもライフは残る!次のターン、手札の《金華猫》とターコイズ・ワーブラーで展開して2体目のアセンブリーを召喚すれば……

「バトルだあ!アブソルートZeroでタイラントネプチューンを攻撃!」

「迎え討てネプチューン!〈シクル・オブ・ルーイン〉!!」

「……この瞬間!手札から速効魔法《九十九スラッシュ》を発動!自分のライフが相手より下の場合、その差の数値をモンスターの攻撃力に加える!!」

《E・HERO アブソルートZero》攻11000?16500

「嘘だ・・・嘘だああああ!!」

「終わりだ！無情な暴君を永久の眠りへ！〈瞬間氷結Freezing at mom
ent 〉!!」

「キャアアアアアアアツ!!?」

レイヴン LP6000?0

WIN 十代

《クルック》

「……全治、一週間です」

「えっ?」

「その間は絶対安静、保健室の外から出しません」

「ちよ……ま、M A T T E! なんであたしだけ? ……あいつはピンピンしてるのに!!」

「おう!俺は元気だぜ!!」

あたしと十代との闇のデュエル(!?) で敗北したあたしは、8000ダメージもの衝撃を闇ゲ仕様で一度に受けたためダイナミック気絶。そのまま皆が閉じ込められていたアムナエル先生のエメラルドなんとかの宇宙空間へと一時収容された。

それを目の当たりにした十代はあたしが死んだと思い怒りのままにボツロボロの状態にも関わらずアムナエル戦へと直行、まるで霸王のような闘いぶりで先生瞬殺でしたわ(ももえ談)

その後なんやかんやで保健室のベッドの上でついさつき目を覚ましたのであった。

「まあ……操られていたとはいえ俺様達を巻き込んだ代償だ、しばらくそこで反省し

てる」

「自業自得ですわ」？事情知ってる人A

「夜道を一人で出歩くなつてことだね！いい経験になつたらう」？事情を知ってる人B

「その辺は深く反省してますけどね……なんであたし以上にダメージ受けてたはずの十代は平気な顔してるわけ？納得いかない!!」

「ひつでくなく、命懸けで助けたつてのに……」

「そうよジュンコ！敵の手に落ちて闇堕ちした上で助けられるなんてなんて羨ましい……私もちよつとセブンスターズ入つてくるわ!」

「もう壊滅してるのにつ?!」

「天上院君、そんなスナック感覚でなるべきものじゃないぞ!」

「それ、三郷さんが言います……?」

「(それ、セラちゃん言う……?)」

「なら僕もともに行こう明日香！闇堕ちに関しては僕はプロフェッショナルだからね!」

「また行方不明になる気か吹雪つ!」

「アンタは洒落にならんからヤメロー！あーもー収集がつかんわ全員保健室から出てけー！！次回に続く！！」

続く。

37羽 答えはデュエルの中で見つかるしかない。

デュエルアカデミアの港の灯台……数々のコント、じゃなくて戦いがこつそり繰り広げられてきたこの場所に、今夜二人の男が集い密談をしていた。

「待たせたね、亮……」

「来たか、吹雪……」

デュエルアカデミアの双壁、丸藤亮と天上院吹雪である。

片や帝王と呼ばれ称えられ、片やフブキングと名乗り馬鹿を貫く馬鹿である。

「ちよつ、さつきからこのナレーション鬱陶しいんだけどなんなんだい？」

「知らん、そんな事は俺の管轄外だ」

えー、だってー、作者がジユンコ視点以外書きづらいつか言うしー、ブツキーと亮クン視点だと尚更きついつて言うからアタシがかってでたんですけどー。

「五月蠅いよレン！真紅眼少し黙ってて！……して、わぎわぎこんな場所に僕を呼び出すとは。用件はなんだい、亮」

何を隠そう、二人は中等部の頃からの親友同士である。ブツキーが行方不明ってたせいで留年ダブッしたから学年は別になってしまったが親友同士である。

性格が180。違い過ぎて違和感があるやもしれないけど親友同士である。

「うむ、誰にも訊かれたくない事だな。悩み……とゆうよりお前に相談がある」

「君がそんな事を言い出すとは珍しいね、なんだい？なんでも言ってくれたまえ」

「最近……ある人物の事が頭から離れないんだ」

「……ほほう」

「以前から気にはなっていた人物なのだが……最近さらに気になりだしてな。寝ても覚めてもその娘の事ばかりを考えている。あまりに気になって今日は10回しかワン

キルが出来なかつた．．．この気持ちはいつたいたいなんなのだ!」

キャー!?!それってそれって!!

「レン黙つてマジで。なるほど．．．それは恋だね!!」

「恋．．．これが恋!」

「ああ、四六時中その娘の事しか考えられないなんて恋以外に考えられない。間違いない．．．亮、君は恋に堕ちたんだよ!!」

「そうか、これが．．．この感情が恋なのか」

「だったら話は早い!君のような男に好かれて嫌な女子はそうはいないだろうし、僕がロマンチックな告白をプロデュースしてあげよう!卒業しちやったら中々会えなくなるし善は急げだ!!．．．して、相手は誰なんだい?」

「．．．．．だ」

予想外過ぎるその答えに、ブッキーはこう答えるしかなかった。

「．．．．マジで?」

「マジだ」

《解せぬ》

「これは、いったいぜんたいどうゆう事なの!？」

「そんなもん知るか!?!理由ならこつちが聞きたいわよ!!」

アムナエル事変から一週間、なんやかんやでリビングデットの呼び声されたあたしは平和な日々が帰ってくんじゃねーかなとほんのり期待していた。だがしかし、校長室に届けられたその一枚の手紙でまた混乱が訪れる。

『七星門の鍵は預かった、浜辺にて待つ。 丸藤 亮』

「なんでカイザーが鍵持ち出してんだよおおおお!!」

《クルツク》

指定された浜辺に駆けつけると、事の発端となった丸藤先輩が7つの鍵を首に下げ、いつものように腕組んで仏頂面で仁王立ちして待ち構えていた。

おつかしーなー、この役割万丈目君じゃなかったっけおつかしーなー……

「カイザー!何をふざけているんだ鍵を返してくれ!!」

「そうだカイザー、貴方程の男が何故こんな事を……」

なおこの話を聞きつけて、いつものメンバーが大体揃ってきている。

あたし、^{ももえ、明日香、セラちゃん}、^{十代、サンダー、翔君、コアラ}
女子四天王(笑)とレッド寮の皆さん、なんやかんやで三沢君もだ。

「なんだそのおまけ感溢れる扱いは!?!」

「三沢の扱いはどうでもいい！さっさと鍵を返せカイザー!!」

「断る。」

十代や仲間達も必死に呼びかけるが彼の返答はこれだけだった。

「そんなあ……まさかお兄さんも闇のデュエリストにされたんじや」

「だったら今までの傾向通り、ちよつと恥ずかしい厨二くさい仮面をつけて黒つぶくなってるハズなんだなあ……」

「そうですね、ちよつとセンスを疑うような恰好をするのが闇堕ちのセオリーですか
ら」

「「余計なお世話じゃー（です）（だ）!!」」

しよーがねーだろアムナエル先生が持ってた仮面アレでラストだったんだから！あたしだって好きでつけてたわけじゃないわ好きでつけてたのはセラちゃんぐらいよ!!

「わっ、わたしだってあの仮面はデュエリンクスのアバター用から適当に撰んだだけで好きじゃなかったし、全身シルバーのピチピチスーツなんて嫌だったんですからね?! スタイルが良かったのが気に入ってただけですからね!!」

「セラさん急にどうしたの?!ピチピチスーツって何!?!」

おお、セラちゃん先輩が地の分にまでツツコミを入れてくる程強化されてる……
そいや原作じゃ万丈目君がラブデュエル（笑）を明日香に申し込むんだったわね、丸藤先輩がそんな事するわけないとは思うけど……

「俺の目的はただひとつ。枕田ジュンコ君……俺とデュエルしろ!!」

「えっ?」

「何故だカイザー!何故ジュンコとデュエルしたがる!!」

「ふっ、十代。ならば先に言わせてもらおうぞ……負けたら鍵は返す、だが俺が勝ったら……俺とデートしてもらおう!!」

「はいいいいいいいい!!?!」

先輩がそんな事するわk、してきたー……
ど、どうゆう事だ、まるで意味がわからんぞ!!

「り、亮!頭でも打ったの!?!」

「ふっ、ふざけんなカイザー!どうしてジュンコとデートなんかしたがるんだ!!」

「答えは簡単だろう？俺が彼女を好きだからだ!!」

「「「ブーッ!!」」」

ちよつちよつちよちよつちよいまち？先輩があたしを？なんて？好きつつつたのか・・・好きつつつたのか?!

「俺は彼女と付き合いたい、恋人になりたいのだ！誰にも邪魔はさせん!!」

「そうはいくか！ジュンコと付き合いたいだなんて・・・この俺が許さないぞ!!」

「あ、あのう・・・」

「何故お前が出張るのだ十代。お前が彼女のなんだとゆうのだ？もはや付き合っているわけでもあるまい」

「おつ、俺は・・・ジュンコの親友だ！彼氏なんて認めるものか!!」

「えつとお・・・」

「そう。その有耶無耶な態度が悪いのだ十代！……俺は待ったぞ。彼女の気持ちを探し、お前達の成り行きを見守っていたつもりだ……だがどうだ！今だになんの進展もないではないか!!」

「ツツ!!?」

「ツツ!!?」じゃねーよ「ツツ!!?」じゃ……なんなのこの展開。先輩読者に空気過ぎるって言われて壊れちゃったの？

「フフフ、俺は至って正常だ。強いて言うなら枕田君、君が俺を壊したのだ!!」

「なんでよ！そしてなんでナチュラルに心読まれてんのよ!!?」

「ジユンコさん顔に出るから……」

「ジユンコさん、お兄さん壊した責任持つて下さいツス」

「あれはデュエルしないと譲らない流れなんだなあ」

えー……なんかあたしが悪い流れになってるう。逃れられない雰囲気になってるう。

「デュエルを受けたまえ、ジユンコ君!!」

「そ、その声は!？」

この展開なら奴が関わっていないわけがなかった。

そう、デュエルアカデミアが誇る最強の馬鹿・・・師匠こと天上院吹雪である。

なんか小船で来たけど、なんか赤いアロハ着てアコギ弾きながら来たけど。

「やあ」

「やあ、じゃねーよ! やっぱりアンタが元凶かポケナスー!!」

「むしろ師匠が関わってなかったらどうしてくれようかと思いましたがわ・・・」

「フツ、勘違いして貰っては困る。僕はただ、親友たる亮の気持ちを後押ししてあげただけだよ? その気持ちが恋以外の何者でもないってね!!」

「絶体余計な後押しだったろ?! つーかアンタはうちの応援してくれてたんじゃないんかい! 十代になんか吹き飛んでたし!!」

「否! 僕は恋をする者全ての味方だ!! べつ、別に面白そうだと思っちゃいないんだからねー?」

「やめろ気色悪い! つーか本音だだ漏れじゃねーかいいい加減にしろ!!」

はあはあ、現時点で疲れてきた……

「あーもうわかったわよ！デュエルすりやいいんでしょデュエルすりやー」

「流石はジュンコ君！」

「フフフ、君なら乗ってくれると信じていた」

「ジュンコ！まさかお前もカイザーの事……」

「うっさいわねー。いっつも思わせぶりな態度だけとって結局何もしてこないデュエル馬鹿より……真正面からストレートに気持ち伝えてくる真面目デュエル馬鹿のが現時点でよっぽど魅力的よ」

「ガーン……」

十代？OTL

「それに……理由はどうあれ、自分の気持ちを伝える事ですっごく大変な事だもん。無下にしたら先輩に悪いわ」

「ジュンコ……?」

あたしは結局伝えられず終いだもんね。こつち現世でも……あつち前世でも
その辺りももえは凄イと思つてゐる

「うぐつ、何故かはわからないが胸に強烈な傷みがつ?!」

「吹雪師匠が何か罪悪感的なものを感じてゐるつ!」

「どこかで泣かせた女の呪いじゃない?……兄さんだもの」

よし、そのままくたばれ……バカトーヤ。

「さてと、ちやつちやと始めましょーか?……言つとくけど、あたしとデートしたつて楽しい事なんもないですからね、先輩」

「そんな事はない!きつと楽しいハズだ……朝に森でデュエルして昼に屋上でデュエルして夜は灯台でデュエルする……」

「それデュエルしかしてなくないですか!?相手姐さんである必要が皆無ツツ」

「クソツ、なんて羨ましいシチュエーションなんだ……」

「悪くないですわね、今度やりましようか万丈目様」

「うむ……って何故俺が貴様とデートなどっ!」

「十代、私でよければいつでも相手になるわよ……」

「えー?!それでいいんですか!デュエル脳にも程がありすぎますよ皆さん!!」

「てゆうか、つい最近までのアニキとジユンコさんじゃないっすかそれ……」

あ、それあたしも思ったわー……

SE: バアーン! 「その通り! 十代、お前はデュエリスト男子として最も羨むべき位置にいて……枕田君の好意に甘えていたのだ!! そんな奴にこれ以上彼女を任せておけるかっ!!」

「なん……だと……」

あの、ちよつとそれ言い過ぎ……

「いけません！これ以上持ち上げられたら素直じゃない事に定評のあるジュンコさんを褒め殺ししてしまいますわっ！見て下さい、あんなに顔を真っ赤にして……」

「おめーは余計な事言うなやより恥ずかしいわ!!」

「フフ、そうやって恥ずかしがる姿もより愛らしい……」

「もう止めて！姐さんのライフは戦う前に0です!!」

「本気で先輩弾け過ぎだろ、中の人ギャ○漫画日和の太子だからって勘弁してください
い……」

「甘いなジュンコ君！亮がこうなるフラグは13羽辺りから立っていたのだよ……だが駄作者の奴がたまたま読んでた他所様とネタ被りそうじゃね？と思えば自重されていただけなのさ!!」

「兄さんつまり！亮は自重したまま最終羽を迎えるつもりが……三なんとか君より空気がかコメント食らったのをトリガーに今回ついに弾けたって手筈なのね!」

「イエス、マイシスター!!」

「メタ発言のオンパレードはやめろ混沌☆兄妹!!」

「俺へ定期的なダメージを与えるのもやめろお!!」

「不味いですわ・・・冒頭から数えてジュンコさんのツツコミ数は10を超えています、デュエルをする前に体力に限界が・・・ハッ、もしやこれも作戦?!」

「あたしの体力を気遣うならいちいちボケを挟んでくんないっ!!つかそのネタ前も聞いた記憶あんど!!」

「ならば始めようか枕田君・・・愛の為に!!」

「どこの世紀末ですかっ!?!」

もうやだこの人達、あたしの味方意外にもセラちゃんだけじゃね・・・まあ、折角だから入院中ひたすらデツキ調整しまくってた成果を学園最強使って試させてもらうわコンチクショー!悪く思わないでよね先輩!!

「デュエルツツ!!」

学園最強の帝王^{カイザー} LP4000

学園最強の女凶戦士^{ツツコミ} LP4000

1774 37羽 答えはデュエルの中で見つけるしかない。

つ、
続くんじやないかなー。

38羽―前編 愛のカタチは人それぞれ

前回のあらすじ

ジュンコ、情熱的な告白を受ける（現在進行形）

「はい、それでは男の純情をかけたこのデュエル……どちらが勝つと思われませんか？
解説のをもえもん」

「そうですね。親友視点から言えばジュンコさんに勝ってもらいたいのには山々なんです
が……ぶつちやけカイザー様に勝って頂いた方がおもしろく、いえ、よろしいの
ではないかと」

「私も同意見です。こんな面白いネタは滅多にないですからね、ぜひ丸藤選手には頑
張っていただきたいです。それでは、デュエル開始!!」

「他人事だからって好き勝手いいやがってー!!」

《クルック》

「デュエルツツ!!」

亮 LP4000

ジュンコ LP4000

「先行はあたしね、ドローツ!」

相手は狂っても・・・じゃなくて腐っても学園最強。半端な構えじゃ瞬殺は必死つ
! 加減は無用、まずはこのデツキの新しい力で流れを掴む!

・・・そんな思いで引いた初手6枚。なるほど、悪くない動きはできるかな。

「手札からモンスターを召喚! おいでつ 《RR—バニシング・レイニアス》! そしてその
効果によりレベル4以下の「Rレイド・リッターズ」を特殊召喚 《RR—ミミクリー・レイニアス》!」

《RR―バニシング・レイニアス》星4／闇／鳥獣／攻1100

《RR―ミミクリー・レイニアス》星4／闇／鳥獣／攻1100

「ほう、今回俺の相手をしてくれるモンスターは「RR」か。面白い、そのモンスター達にも興味があつたのだ」

「それまさか鳥よりサイバー・ドラゴンみたく機械ほいつて理由じゃないでしょうn

「ああー」

「正解かよ！……まあいいや。そしてこの2体でオーバーレイ！冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実をあばき、鋭き鉤爪で栄光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！飛来せよ！《RR―フォース・ストリクス》!!」

『キュイイツ！』

《RR―フォース・ストリクス》★4／闇／鳥獣／守2000

「当然効果発動！オーバーレイ・ユニット使つてデツキから闇属性・レベル4鳥獣族の《RR―シンキング・レイニアス》を手札に招くわ。そして自身の効果で特殊召喚！そして素材だったミミクリーを除外してついでにさらつと永続魔法《RR―ネスト》を持つ

てきて発動! 「RR」2体フィールドにいるんでデッキから《RR—トリビュート・レイニアス》を手札に迎え入れる!」

「久々にあのデッキみたけど1ターン長すぎるっス!」

「1度ハマったらかなか後続途切れないのが厄介なのよね・・・」

「まだまだ! エクシーズモンスターが場にいるのでシンキング・レイニアスを特殊召喚! さらに速攻魔法《烏合無象》を発動! シンキング・レイニアスを生贄に、エクストラデッキから鳥獣族モンスターを攻撃と効果を封じ特殊召喚! 革命の狼煙をあげよ《RR—レヴオリューション・ファルコン》!!」

『クウオーツ!!』

《RR—レヴオリューション・ファルコン》★6／闇／鳥獣／攻2000

「攻撃も効果の発動も出来ないモンスターをわざわざ特殊召喚? この流れはっ!!」

やつべえ皆に覚えられてる・・・ラスト・ストリクスか烏合無象、手段に差はあれど、レイウン黒歴史の時とやっていることはほぼ同じだ。

「手札から《R U M—幻影騎士団—ラウンチ》を発動！フィールドのレヴオリューション・ファルコン1体でオーバーレイ！慈悲深き隼よ、戦場へ赴く同胞達へ一時の安らぎを！エクシーズ召喚！《RR—アーセナル・ファルコン》!!」

『キユオオオオツ!!』

《RR—アーセナル・ファルコン》★7／闇／鳥獣／攻2500

「おおっ！また見たことない奴だ!!」

もはや鳥とゆうよりどっかの空母な隼が姿を見せる。

えっ、口上くさいって?・・・ほっとけ、他に思い付かなかったのよ。

「アーセナル・ファルコン効果発動！オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、デッキからレベル4の鳥獣族モンスターを出撃させるわ！さあ、来なさい《烈風の結界像》!!」

『ズーン・・・』

《烈風の結界像》星4／風／鳥獣／守1100

「結界像だと……」

「博識な先輩なら知ってますよねえ。結界像が場にいる限り、結界像とは違う属性のモンスターは特殊召喚を封じられる!!」

「せつ、セコい!」

「露骨に融合を封じてきたんだなあ」

「なんとも言え!あたしとして七精門の鍵を守らねばならん……カードを2枚伏せてターンエンド!」

ジュンコ H1

《RR—フォース・ストリクス》(守2500)

《RR—アーセナル・ファルコン》(攻)

《烈風の結界像》(守)

《RR—ネスト》

セットカード

セツトカード

特殊召喚を制限した上で伏せ2枚。

これだけがつちり場を硬めれば、少なくともワンターンキルだけは免れるハズ……
やはり「RR」を選んで良かった、「B F」vs「サイバー」じゃ矛と矛の戦いになっ
ちやうもんね。

しかしこの状況で、先輩は焦りもなにも見せない。
既に解決策があると読むべきか……

「俺のターン、ドロ。魔法カード発動《ハリケーン》、全ての魔法・罠を手札に戻す」

おつといきなりそれか、この世界じゃまだ《ハリケーン》と《大嵐》がバリバリ現役
だからガン伏せしても油断出来ない。だが残念、その手のカードの対策はバツチリよ
！

「カウンター罠《ラプターズ・ガスト》発動！フィールドに「RR」カードがあるとき、
魔法・罠の発動を無効にし破壊する！」

「ムツ……」

風を風で相殺して無効、これは予想GUYだったらしく流石の先輩も少しは顔をしかめた……と思いきや。

「フツ、やはりその手のカードが1枚はあつたか。これで心おき無くこれが発動できるな……魔法カード《隣の芝刈り》を発動！」

……えっ？

「君のデツキ枚数と俺のデツキ枚数の差だけ、俺のデツキからカードを墓地に送る！俺のデツキは54枚！」

「あ、あたしのデツキは……32枚」

「よって22枚のカードをデツキの上から墓地に送る!!」

え、ちよ、ま……えっ?!?なんとゆうか、えっ?!?先輩が芝刈ってきたー!どつかの馬鹿みたく60枚デツキになつてううう?!?

「フフフ、いい表情だよジュンコ君……だが、おたのしみはこれからだ！ 亮!!」？どっかの馬鹿

「ああ！俺は《サイバー・ダーク・キール》を召喚!!」

『ギギギッ!』

《サイバー・ダーク・キール》星4／闇／機械／攻800

「さ、サイバー・ダークウ?!」

「なんだあの禍禍しいモンスターは!」

なしてサイバー・ダーク!?あれ先輩イメチェンしてから使うデツキだろーがいつ!

「どうやら少しは驚いてくれたようだな」

「そ、そりゃもう……先輩カードの趣味変わった?」

「ああ、君のお陰でな……君のように闇が似合う女性に相応しくなるには、俺も此方側に行かねばならぬ!そう考えた次第だ」

「ええ〜……」

闇が似合うってなんじゃい、あたし先輩の中でどんなイメージ？

「カイザー！女子に向かって闇が似合うは失礼だろ!!」

「はたしてそうかな？俺にとつての枕田君とは、夜の闇の中でこそ輝く、月明かりのような存在……現に観るがいい、彼女の操るモンスター達を……闇属性ばかりでないかっ!!」

「そ、そういえばっ?!」

「そういえばっ?!」ってなんじゃい納得してんの？アンタも納得してんのかコラー!!

「確かにジュンコさん闇属性主体ですわね……」

「今使ってる「RR」とか、「BF」もそうよね」

「悪魔的に強いツスよね……（物理が^{ツツ}コミ）」

「それに俺は知っている。君が前日見せた心の闇一面と言い張っていた《レイヴン》。闇夜に映える漆黒の翼……あれこそ、君の本来の姿であるとなー！」

黒歴史掘り替されたーっ!? あんなんだだの演技だからね? ノリ的には学園祭だからね!!

「あれが、ジュンコの本래の姿だと……」

「フツ、十代。お前にはわかるまいよ……さあ行くぞー! サイバー・ダークは召喚時、墓地のレベル4以下のドラゴン族を装備する。そしてその数値だけ攻撃力を上昇させる! 墓地に存在する攻撃力2000! 《ヘル・ドラゴン》を装備する!!」

《サイバー・ダーク・キール》攻800? 2800

「星4モンスターの通常召喚で、攻撃力が2800だって?!」

をおおい、それ原作効果やあぁ……しかも装備シーンが地味にキツイ……

「さらにこいつがモンスターを破壊した時、300の追加ダメージを与える! バトルフェイズ! ダーク・ホーンで《烈風の結界像》を攻撃! 《ダーク・ウィップ》!!」

「嫌。畏発動《ゴットバード・アタック》!! 結界像も地味に鳥獣族よ、生贄にし先輩のダーク・ホーンとヘル・ドラゴンをまとめて破壊!!」

像が敵モンスターに特攻する様はとてもシユールであった。ともあれ第一のサイバー・ダーク攻略つと、コストにフォース・ストリクスか悩んだけど……初ターンのワンキル阻止すれば役割果たしたようなもんだからね、ありがと烈風像さん。

「……ククク、この時を待っていた」

「ほえっ?!」

「鳥獣族デツキと対峙するに当たって、最も警戒すべき《ゴットバード・アタック》……それをこども簡単に使ってくれた」

「な、何よ。もう一枚もゴドバかもしんじゃないじゃん? 警戒解くの早すぎるっつーの」

「それはない、君の保存されているデュエルは全て研究させて貰った……君は魔法・畏を戦術の中心となるようなカード、例えばその《RR―ネスト》のようなカード以外は、全て一枚ずつしか採用していない!」

「げえっ?!? どこ観察してんのよ!」

だが実際そうだった、あたしはゴドバもガストも一枚ずつしか入っていない。

限られたデツキの枠で色々やりたいっつーファンデツカー根性故の特性である、皆は真似しないよーに！

つか、保存されているデュエルって何よ。考えたら恥ずかしくなってきた……デュエルアカデミアならば多少は仕方ないけど変なの残ってないよね？

「……なお一番最近のものは学園祭のチドリジュンココスフレv sブラマジガールだ。実に凛々しいデュエルだったぞ」

「消してエエエ！よりによってそれとか……誰よあんなモノ撮影した奴は!!」

「(隼人君、黙っておこうね……)」

「(ばれたら命は無いんだなあ……)」

「ともあれ元より除去の少ない君のデツキで警戒すべきカードがひとつ無くなった上、厄介な結界像も消してくれた！メインフェイズ2でモンスターを特殊召喚!!」

「《サイバー・ドラゴン》だ！」

「《サイバー・ドラゴン》ね」

「《サイバー・ドラゴン》なんですか？」

「《サイバー・ドラゴン》だろ」

「いでよ！ 暗黒の創世主《ダーク・クリエーター》!!」

『グハハハハハ!!』

《ダーク・クリエーター》星8／闇／雷／攻2300

「……全然違うじゃねーかあああああ!!」

「あつ、あれー？」

皆が口揃えてサイバー・ドラゴン連呼するからあたしもそう思っちゃったろーがい！

「このモンスターは墓地に闇属性モンスターが5体以上存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合特殊召喚できる！」

「いいよ亮！いい感じに闇に染まってきた!!」

「やっぱり犯人は貴方ですか！」

「まだまだ！彼女に相応しき闇に染まり行く！モンスター効果発動！墓地の闇属性モンスターを1体除外し、闇属性モンスターを墓地より特殊召喚する！墓地の《ブラック・ポーンバー》を除外し蘇れ！《ダーク・ホルス・ドラゴン》!!」

『クオオオオオウツ!!』

《ダーク・ホルス・ドラゴン》星8／闇／ドラゴン／攻3000

やだ格好良い、何故かドラゴン族だけほとんど烏なホルスさんの闇墜ちヴァージョ
ンじゃないですかっ！

「君が好きそうだと思うてな、吹雪に頼んで譲ってもらったのだが・・・当たりだった
ようだ」

「べつ、別にそんなに好きじゃないし！採用モンスターでポイント稼ごうなんて思わな
いでよねー！」

「フフフ、顔を赤らめながらのその素っ気ない反応。いざやられると実にいとおしく感

じるものだな……」

「そーゆーの真顔で言うのやめてってば!!」

マジで身体まで熱くなってきた、早く黙らせないとこのバカイザー先輩……

「ウギギギギギギギ……」

「十代ー、顔が凄いぞ顔がー」

「だが残念ながらバトルは終了している、このままでは君に傷ひとつつけられ無い……よってエー俺はこの2体でオーバレイイイイ！」

「エクシーズ召喚か!」

「カイザーのデッキでランク8だと、まるで予想がつかんぞー!」

「現れよ、《No. 40》!君の持つ運命の糸、それを歪め我が掌中へ納めん!《ギミック・パペットーヘヴンズストリングス》!!」

《No. 40 ギミック・パペットーヘヴンズストリングス》★8 / 闇 / 機械 / 攻300

「な、なんだこりや!?!」

「でつかい人形!?!すげーおつかないけど!」

「このエクシーズ召喚時に墓地のあるカードの効果が発動し、俺の手札へ戻る……ヘヴンズストリングスのモンスター効果! オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、こいつ以外のモンスター全てにストリングス・カウンターを乗せる。相手ターン終了時、このカウンターが乗った全てのモンスターの命を絶ち、その数×500ダメージを与える!!」

IV オオオオオ!

なしてギミックパペット!?! なしてサイバー・ダークからギミック・パペットくり出してくんよ闇機械族しか共通点ねーだろ!!

ん? エクシーズ召喚時墓地から手札に……あつ。

「なんだ、風貌からしてどんな化け物かと思えば随分悠長なモンスターだな」

「三沢……そうゆう事は思っても口に出さない方がいい」

「そうゆうのは大体フラグですわ」

「口を開けばこの仕打!? あっ、でも名前よんでもらえたありがとう!!」

「どんだけー……」

「悠長かどうかはこれを見てから言うのだな！俺は今、自身の効果で墓地から手札に加わった《RUM—アージエントカオス・フォース》を発動オオ!! フィールドのヘヴンズ・ストリングス1体でオーバーレイ！出現せよ《CNo. 40》！君の願いを知った上で、君の心を奪う悪魔に俺はなる！《ギミック・パペット—デビルズ・ストリングス》!!」

『ギヒツ、ギヒヒヒヒツ!!』

《CNo. 40 ギミックパペット—デビルズ・ストリングス》★9／闇／機械／攻33
00

期待通りのヘヴンズ・ストリングスさん悪魔化、とりあえず言いたい事は……口上自重しろ！さつきから明日香並みにおかしいわ!!

「馬鹿なっ、バトルも終了しているのにランクアップするだど!」

「デビルズ・ストリングスの効果! ストリングス・カウンターが乗せられたモンスターを全て抹殺し、破壊と同時に1枚ドロ! 受けとれ枕田君! 俺からの熱い愛 ファンサービス !! ヘメロ
 デイ・オブ・マサカ!!」

『クオオオオオオツ?!』

「そんな重い愛 ファンサービス 受けきれるか・・・ってきやあああああつ?!」

ストリングス・カウンターってゆうか糸に絡めとられていた2体がデビルズ・ストリングスの熱が籠った演奏によりブツ壊された。特にアーセナルは派手にブツ壊された、だって空母だもの。

ジュンコ LP4000?1500

「な、何故ジュンコのライフが減ってるんだ?!」

「ハハハハハ! この効果で破壊したモンスターのうち最も攻撃力の高い数値を持つ者の攻撃力分のダメージを与えることができるのだ! 痛みを分かち合う・・・これこそが真の愛情表現!!」

「げほっ、ごほっ。どこのユベリズムよアンタ……一人よがりの愛情じゃ、どんなコ
だって落とせないわよ!!」

「グハツ?!何故か私の胸にグサツときたわ……」

「明日香お姉ちゃん自覚あつたんですね……」

「何を言う!君が教えてくれたんじゃあくはないか!闇の中で自分の醜さを曝け出し、相
手を傷つける……それが君の本来のデユエルだ!(13羽とか参照)」

「傷を扶けるのはやめろつつつてんでしょーが!!あたしが悪かったから!謝るからあの日
の事は忘れてよ……」

「あの日の事ってなんだジュンコ!お前カイザーと何してたんだ!」

「うっさいわー!話ややこしくなっから少し黙ってなさい鈍感大王!!」

「皆ア……ジュンコが冷たい……」

「日頃の行いのせいよ」

「日頃の行いのせいですわ」

「日頃の行いのせいですね」

「日頃の行いのせいッス」

「日頃の行いのせいなんだなあ」

「日頃の行いのせいだ」

「日頃」「大丈夫だ十代君。新手的照れ隠しだからあれ」

「なんでそんなに息びったり!？」

「吹雪師匠! 何故俺だけ遮るのですか?!」

三沢君エ……

「フツ、謝る必要などないさ。俺は

「あーもう! 1ターンの目から尺とりすぎなのよ! 余所様だつたら下手したら1デュエル終わっている分量だろーがこれ、読者もあたしもお腹いっぱいよ!!」

「若干メタいこといいながら姐さんが切れたーっ!？」

「もうアンタが何言つてこようが全ツ然気にしないからねっ! アーセナリー・ファルコンの効果発動! オーバーレイ・ユニットに「RR」を持ったまま破壊された時、エクス

トラデツキから「RR」をなんやかんやで特殊召喚し墓地のこのモンスターをオーバーレイ・ユニットとする！大地をも焼き尽くす閃光となれっ！《RR—サテライト・キャノン・ファルコン》！！」

『キュオオオオツ！！』

《RR—サテライト・キャノン・ファルコン》★8／闇／鳥獣／攻3000

「後続を呼ぶ効果があつたのか……いいだろう！言葉よりもデュエルで語り合うとしてようか！デビルズ・ストリングスもまた、オーバーレイ・ユニットをひとつ使う事でストリングス・カウンターを相手に乗せる。この効果を使用し、カードを1枚セットしてターンエンドだ」

亮 HI LP4000

《CNo.40 ギミックパペット—デビルズ・ストリングス》(攻)

セットカード

「デュエリストらしい、グレイトな決意だ亮！胸キュンポイント40点あげよう！！」
「なんですか胸キュンポイントって！貯まったら何があおこるんです?！」

「だが残念ながら、君達は初ターンで飛ばし過ぎだ！非常に残念だが残りは全て後半に回させてもらう!!」

「散々はっちゃけといてそれかーっ?!?」

つづくんです？

38羽―後編 今更だけどテンプレ無視にも程があるうちの作風

前編のあらすじ

「喰らえエ！俺のファンサー^愛ビスを!!」

「あらすじ仕事しろーっ?!」

《クルツク》

ジュンコ HI LP1500

《RR―サテライト・キャノン・ファルコン》(攻) オーバーレイ・ユニット1

《RR―ネスト》

亮 HI LP4000

《CNo. 40 ギミックパペットーデビルズ・ストリングス》(攻) オーバーレイ・ユ
ニットー

セットカード

「あたしのターン！」

むう、これはどう攻めようかなライフ1500って先輩相手じゃ心元無いなあ……。
一見フィールドは大したことな、おっかないデビルズ・ストリングスが1体いるだけ
だけど、墓地リソースが大量にあるものねえ、とりあえずやれることやって細かい事は
あとから考えますか。

「通常召喚！おいで、レイド・ラプターズ《R Rートリビュート・レイニアス》！モンスター効果で2体

目のミミクリーを墓地へ送る、そのまま除外して《RRーレイニエス》を持つてくるわ。
永続魔法《RRーネスト》の効果でデッキからナパーム・ドラゴニアスを招いて《闇の
誘惑》！2枚ドローしてナパーム・ドラゴニアスを除外！」

《RRートリビュート・レイニアス》星4／闇／鳥獣／攻1800

良し、これならイける・・・！！

「魔法カード《エクシーズ・リベンジ》発動！相手フィールドにエクシーズモンスターが存在する時、墓地のエクシーズモンスターを特殊召喚！その後相手エクシーズモンスターからオーバーレイ・ユニットを奪いとる！帰ってらっしゃい、《RR―フォース・ストリクス》！」

『ピュオオツ』

《RR―フォース・ストリクス》★4／闇／鳥獣／守2000

「まだまだ！フォース・ストリクスのモンスター効果でデッキからレベル4のブースター・ストリクスを招く！そして《R U M―レイド・フォース》ランクアップマジックを発動！フォース・ストリクス1体でオーバーレイ！まだ見ぬ勇猛なハヤブサよ。猛き翼に秘めし未知なる力、今ここに知らしめよ！ランクアップ・エクシーズチェンジ！《RR―エトランゼ・ファルコン》！！」

『キュアアアツ！！』

《RR―エトランゼ・ファルコン》★5／闇／鳥獣／攻2000

「すつげえまた見たこと無い奴だ！ どんだけ種類いるんだよ「RR」!!」

「き、期待してる所悪いけどそろそろ打ち止めよ……エトランゼ・ファルコンの効果！ 相手モンスターを1体爆破しその攻撃力分のダメージを相手に与える！ 吹っ飛ばせ《デビルズ・ストリングス》!!」

「そうはいかん。墓地の罨カード《スキル・プリズナー》を除外して発動！ このターン、デビルズ・ストリングスを対象とするモンスター効果を無効にする！」

なんか檻っぽいバリアーがエトランゼの攻撃を防ごうとする。ブレイズ・ファルコンの良かったかなコレ、ちょっと勿体ないけど使うか……。

「だったらその効果にチェインして、サテライト・キャノン・ファルコンの効果発動！ オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、相手モンスター1体の攻撃力を、あたしの墓地の「RR」の数×800ポイントダウンさせる！ あたしの墓地に「RR」は3体、よって攻撃力2400ポイントダウンよ!!」

『ヴヴヴヴヴッ?!』

《No. 40 ギミック・パペット―デビルズ・ストリングス》攻3300?900

バリア張る前にレーザー照射で攻撃力を下げさせてもらった、面白い声出すなよそのデカブツ機械人形。

しかし普通にアルティメット・ファルコンで殴った方が良かったかな・・・まあ自分のレディネスかわ効かないから出すの止めといたんだけど、パイセンなら3500とか余裕で越えて来そうだしね。

「クツ、攻撃力が僅か900まで下がるとは・・・」

「行くわよっ！エトランゼ・ファルコンでデビルズ・ストリングスを攻撃！」

『ヴガアアアアッ!!?』

「ぐうっ?!」

亮 LP4000?2900

爆☆殺。悪魔的断末魔をあげて機械人形はバラバラになりました。あとはがら空きの本陣へ……

「飛翔せよ！サテライト・キャノン・ファルコン!!先輩にダイレクトアタックよ!!」

「そうはいかな！リバーズ巽発動、《リビングデットの呼び声》!!再び姿を現せ、デビルズ・ストリングス!!」

『ゲハハハハハッ!!』

《CNo. 40 ギミックパペット―デビルズ・ストリングス》★9／闇／機械／攻3300

「うっげえ!？」

大気圏突破しようとしたサテライト・キャノン・ファルコンを、復活した悪魔野郎が予め乗せていたストリングス・カウンターの糸で絡めとって阻止してきやがりました。

「あら、特殊召喚されたという事は……」

「再びカウンターが乗ってるモンスターを、全て破壊する!!」

「そうはいかないわ！手札から《禁じられた聖杯》を発動！デビルズ・ストリングスの攻撃力を400アップし、効果を無効とする!」

《CNo. 40 ギミックパペット―デビルズ・ストリングス》攻3300?3700

あつぶねえく……闇の誘惑しといて良かったあく、聖杯引いてなかったら自分のターンに爆殺されるとこだったわ。

……やっぱ思考停止でアルティメット出してた方が良かったのかな、先輩の言葉責めに自分で思ってる以上に動揺してるぽい。

「ジュンコ大丈夫かよ？しっかりしてくれ〜！」

「るっさいわね！またまだ全然余裕よ余裕！……カードを1枚伏せてターンエンド！」

ジュンコ H1 LP1500

《RR―エトランゼ・ファルコン》(攻)

《RR―サテライト・キャノン・ファルコン》(攻)

《RR―ネスト》

セットカード

「待ちわびたぞ……俺のターン！」

「前編とかなり間空いてるからね、待ちわびるよね。1ターン回ってくるまでどんだけ時間かけてんだうちの駄作者……」

「噂によると連載もう1本やってるらしいわよ兄さん、遅筆のくせにネタだけは豊富なんだから」

「だから何の話ですか?!」

「出た! 天上院兄妹のメタ発言コンボですわ!!」

「毎回やらんと気がすまんのかおのれらは!!」

はぁ、疲れる。にしてもドロイーで手札2枚かぁ……。いやそれよりも大量に肥える墓地の方が怖い、オバロとか引かれたらえらい事になりそう。

「召喚! 《サイバー・ダーク・ホーン》!!」

『ギギイツ』

「またあの手のモンスターか!」

「召喚時に墓地の《ヘル・ドラゴン》を装備、その攻撃力を我が物にする」

《サイバー・ダーク・ホーン》星4／闇／機械／攻800?2800

「……あんだけ墓地にカードあつてヘル・ドラゴンしか装備しないんだ。

他にも有効そうなドラゴン沢山いるのに、師匠の事だから持つてないドラゴン族なんかいないハズだから、押し付けててもおかしくないと思っただけだ。

「いやあ、君色に染まりたいからって闇☆ドラばかり投入してねえ……」

「あたし風も使うしっ!?!っかナチュラルに心読むなっ!!」

「バトルだ!ダーク・ホーンでエトランゼ・ファルコンを攻撃する!!」

「あれっ、さつき手札に加えてたブースター・ストリクスに返り討ちにされるんじや」

「使わせに行つたんだろ、本命はあのデカブツ機械人形だ」

「……」

ジュンコLP1500?800

「破壊されてんじゃん！」

「おかしいわね、伏せカードは「RR」の戦闘破壊を防ぐ《RR―レディネス》でしょう？」

「そーだけど、あたしはこれを持ってたわけよ。エトランゼ・ファルコンの最後の能力！相手に破壊されたら墓地の「RR」を特殊召喚できるわ！蘇れ《RR―アーセナル・ファルコン》!!」

『キュオオオツ!!』

《RR―アーセナル・ファルコン》★7 守備2000

「むっ……迂闊な攻撃だったか。バトルを終了しメインフェイズ2、墓地から《ギャラクシー・サイクロン》を除外、表側魔法カードの《RR―ネスト》を破壊する。君の翼を少しもがせてもらおう」

言い方。

やっぱ墓地肥やすデッキならあるわよねー……あと墓地効果で厄介な汎用なんだ？多すぎてわかんないわ。

「やれやれ、俺の手札は《パワー・ボンド》が1枚だけ、これでは次の君の攻撃を防ぐこともままならんな．．．ターンの終了だ」

亮 H1 LP2900

《サイバー・ダーク・ホーン》(攻)

+ 《ヘル・ドラゴン》

《CNo. 40 ギミックパペット―デビルズ・ストリングス》(攻)

「カイザーの奴、自分の手札をわざわざ教えてんぞ?!」

「意味がわからないんだなあ」

つかパワボンかよ、あれ初手から絶対あつたよね?当然のように初手パワー・ボンド
なのね馬鹿^真の嫁^紅かよ．．．

「フフ．．．男はあえて手の内を晒すのも恋愛テクニクのひとつだと聞いてな」

「はい吹き込んだ犯人が特定．．．後悔すんじゃないわよ。私のターン!」

「なんと！ジュンコ君も読みが鋭くなったねえ」

「そんな事言うの貴方しか見たこと無いです・・・」

「魔法カード《貪欲な壺》！墓地のフォース・ストリクス、エトランゼ・ファルコン、レヴォリューション・ファルコン、バニシング・レイニアス、トリビュート・レイニアスをデッキに戻してつと・・・2ドロロー!!」

「出た！手札と文字数稼ぎを同時にこなす貪壺さんですわ！」

「暗黙の了解に触れないで下さい!!」

「来たあ！《RUM―スキップ・フォース》を発動!!サテライト・キャノン・ファルコン1体でオーバーレイ！至高の隼、勝利の天空へと羽ばたけつ、ランクアップ・エクシズ・チェンジ!!《RR―アルティメット・ファルコン》!!」

『ピエエエエツ!!』

《RR―アルティメット・ファルコン》★10／闇／鳥獣／3500／2000

「ふつくしい……」

「お兄さん!？」

「出たな、最強の「RR」!!」

「俺、1ターン目にあいっが出てきて処理出来なくて……ううっ」

「泣くな三沢、初見であんなの飛んできたら……対処できる奴の方が本来少ない」

「私も駄目だったわ……なんで手札2枚から出るのよ」

「僕達は何度も倒したけどネプチューンがねえ……」

「簡易融合インディペイデントネプチューン。うっ、頭が……」

「み、みなさん結構トラウマ抱えてますね」

「(とゆうかアルティメット・ファルコンは流石に自重するわ。って仰つてたジュンコさんはどこへ……まあ^黒レイヴン^歴時に勢いで使った以上引っこみつかなくなったのでしようが)」

「(ししよー、ネプチューン貸してー。って言うから気軽に渡したらゲスコンボに使うとは、おのれジュンコ君。あのカード世界に1枚設定で良かった……ああ良かったよ！使い手が最凶だけどね!)」

流星竜黒炎弾相手は死ぬ

手札2枚で瞬殺はテメーもだろ鬼畜師匠が。あたしにばかり罪なすりつけんじやないわ!!

「(一)、こいつら・・・目と目で会話してやがる。多分内容はひどい)」

「言つとくけど・・・墓地に何があるうがこのコの前では無駄な事よ!アルティメット・ファルコンの、効果はト「あいつはあらゆるカード効果を受けない上に」

「1ターンに一度、オーバーレイ・ユニットをひとつ使う事で・・・」

「カイザーはこのターン、あらゆる効果を発動できなくなる!」

「その上モンスター攻撃力も1000ダウンさせるおまけ着きだ!」

「インチキ効果も大概にしやがれですわ!」

「効果言わせてよ!皆どんだけトラウマ負ったの!?!」

「ならばその効果発動にチェーンし墓地の《ネクロガードナー》を除外しよう。これで一度は攻撃を無効にできる」

なるほどネクロガードナーね、あいつ地味々にフリーチェインで発動できるから笑える。あのテキスト見たら攻撃反応と思うでしょ普通……ってかあたしまだ発動宣言できてなくね?!

《サイバー・ダーク・ホーン》攻2800?1800

《CNo. 40 ギミックパペットーデビルズ・ストリングス》攻3300?2300

「もー適用されてるし……まあいいわ、バトルよ!アーセナル・ファルコンでダーク・ホーンを攻撃!!」

「先に除外したネクロガードナーが、その攻撃を無効にする!」

「知ってるわよ、除外してから最初の攻撃しか防げないものねえ……アルティメット・ファルコン、デビルズ・ストリングを打ち砕きなさい!へファイナル・グリアス・プライド!」

『ギヒャアアアアツツ』

「ぐううっ!?!」

亮LP2900?1700

悪魔人形、撃☆沈。

デカイからうちのアーセナル並みに爆破演出が派手だなおい・・・あとやつぱり断末魔うっさい。

「カードを1枚伏せてターンエンドつと」

ジュンコHI LP700

《RRーアーセナル・ファルコン》(攻) ORU1

《RRーアルティメット・ファルコン》(攻)

セットカード

セットカード

「俺のターン、魔法カード《強欲な壺》！2枚ドロする!!」

手札1枚でトップ強欲とか、引き強えーよ先輩！さつき貪欲したあたしが言える義理じゃないけどね・・・

「《サイバー・ドラゴン・コア》を召喚！このカードの召喚に成功した時、デッキからサイバー、またはサイバネティックと名の付くカードを手札に加える。俺が加えるのは《サイバー・ダーク・インパクト！》」

《サイバー・ドラゴン・コア》星2／光／機械／400／1500

表側のカードも入ってたのか、サーチカードだし当然つちや当然よねえ。

けど鎧黒竜だけじゃ正直脅威はないかな？手札にブースターいるし、あいつ効果破壊は防げないし。

「更にフィールドのサイバー・ドラゴン・コアを対象に、魔法カード《機械複製術》を發動！」

「……げえっ!？」

「来い、2体の《サイバー・ドラゴン》！」

『『グウオオ!!』』

《サイバー・ドラゴン》星5／光／機械／攻2100

「な、なんでサイバー・ドラゴンが出てくるんだ!？」

「フフ・・・サイバー・ドラゴン・コアはフィールド上ではサイバー・ドラゴンとして扱
う。」

「そ、そういえばお兄さんの手札には《パワー・ボンド》があつて」

「そしてフィールドにはサイバー・ドラゴンが3体・・・来るわ!!」

「俺はフィールドのサイバー・ドラゴン2体でオーバレイ!超新星、《サイバー・ドラ
ゴン・ノヴァ》!!」

《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》★5／光／機械／攻2100

「あれっ・・・」

「来てませんわよアスカラル!!」

「何よアスカラルって!？」

「未来の明日香自身なのです・・・(吹雪低音)」

「隙あらば茶番フェイズ交えるのやめてください!」

「何っ、この状況ならサイバー・エンドが飛んで来るのではないのか?！」

「サイバー・ドラゴンシリーズのエクシースモンスターだと……」

ああ、皆そういえば初見か……。あたしもう一回食らってるからなんとも思わないわ。

つーかインフィニティはあかん!この状況じゃ対処できるカードないじゃん、ごめね先輩!

「リバースカード!畏発動《激流葬》!!」

「三血も涙も無いカード来たーっ?!」

ソリッドビジョンの粹なはからいか?浜辺でデュエルしてるのをいいことに、すぐその海から激流が雪崩れこんできて全モンスターを呑み込んでいかれました……

「全てのモンスターを破壊する……。けど、アルティメット・ファルコンは飛行能力により無傷!」

「絶対違いますよね?!」

「ならばサイバー・ドラゴン・ノヴァも分解され、再構築し、新たなモンスターとして蘇る!サイバー流秘伝、《サイバー・エンド・ドラゴン》!!」

『『ギャゴオオオオ!!』』

《サイバー・エンド・ドラゴン》星10／光／機械／攻4000

「ここで、サイバー・エンドだとお?!」

「説明しよう!サイバー・ドラゴン・ノヴァが相手によって破壊された時、エクストラデッキから機械族融合モンスターを特殊召喚できるので!うかつに破壊すると痛い目を見るよ?」

「そんな、じゃあなんでジユンコは激流葬なんか・・・」

「フン。こんなの承知の上よ?オーバーレイ・ユニットを持ったアーセナル・ファルコンの沈没により、あたしもエクストラデッキから特殊召喚!勝利の天空へと羽ばたけ、2体目のアルティメット・ファルコン!!」

『『エエエエエッ!!』』

《RR—アルティメット・ファルコン》★10 ATK3500

「2体目エ!?その化け物どんだけ飼ってるんスカジュンコさん!!」

「あらあら、全種入りたい主義のジュンコさんにしては珍しい」

いや、うん．．．アルティメットへのアクセスルート多いんだもん。フォース・ストリクスとアルティメット・ファルコンは2枚なのよね。

けど今はサテライト・キャノン2枚のが良かったかなーと後悔中である。まあ墓地にブレスルとかありそうだし、これでいいよね結局の所．．．

「究極の隼が2体．．．相手にとって不足無し!魔法カード《サイバー・ダーク・インパクト!》!墓地に存在するサイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールをデッキに戻して融合! 《鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン》!!」

『ギシャアアアアツ!!』

《鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン》星8/闇/機械/攻1000

「なんて凶悪な風貌のモンスター……」

「あれがサイバー・ダークの切札か！」

「セラちゃんのモンスターのが凶悪そうなの多いけどね！」

「何故ここからわたしに被弾するんですかっ!!」

「サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力は墓地のカード1枚につき100ポイント上昇する。墓地のカードは色々あった末に30枚！」

「大量の墓地肥やしにはこんな狙いもあったのか！」

「さらに融合召喚時、墓地のドラゴン族を眠りから引き釣りだし装備する……レベル制限は無い。《ダーク・ホルス・ドラゴン》を装備イ!!」

「ちよつ、可哀想な事やめてよね先輩！ホルス嫌がつてるじゃん!!」
「優しっ?!」

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》攻1000?4000?7000

「攻撃力7000だっ?!」

「流石にやばそうなんだなあ」

拘束のホルス、あんにやろすぐ破壊しちやる・・・あれ？墓地のモンスターの数×100じゃなかったっけ・・・ああ、原作効果か。

「まだだ！墓地の《妨げられし壊獣の眠り》を除外し《壊星懷獣ジズキエル》を手札へ！そして君の2体目のアルティメット・ファルコンを生贄に、君のワールドへ特殊召喚する！俺からの気持ちだ、受け取ってくれたまえ」

『ゴガアアアアツ！』

《壊星懷獣ジズキエル》星10／光／機械／攻3300

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》攻7000？6900

「わーいありがと先輩・・・ってふざけんなあ！人の切札喰ってなにしてくれてんのよ！！」

「ノリツツコミ時が一番いきいきしてないか・・・？」

「ジュンコさんですから」

うわー、壊獣とかきつついわー・・・そいやこいつ光属性・機械族だもんね、リペ
アプラントでサーチできて相性いいわけか・・・

「スタートステップにリバースオープン！《RRーレディネス》!!このターン、RR達は
戦闘では破壊されない！」

「だがジズキエルは「RR」ではない！これで終わりだへフル・ダークネス・バースト」
!!」

演出が派手だつっのソリッドビジョン、冷静に冷静に・・・

「攻撃宣言時に墓地の《RRーレディネス》を除外！このターン、あたしへのダメージを
0にする!!」

ジズキエルは木端微塵になったけどどうでもいい、人の庭に勝手に入り込んだ壊獣な
んぞ知ったこっちゃないわ

「男勝りな性格の割にガードが硬いな、そこもいいんだが……俺はこれでターンエンドだ」

「言ってる……またアルティメット・ファルコンの効果が発動、先輩のモンスター達の攻撃力は10000下がるわ」

亮 H1 LP1700

《鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン》(攻6900?5900)

(十)《ダーク・ホルス・ドラゴン》

《サイバー・エンド・ドラゴン》(攻4000?3000)

「あたしのターン！」

む、これかあ。毎度毎都合よく手札増強なんざ引けないわね、とりあえず……

「バトルよ！アルティメット・ファルコンでサイバー・エンドを攻撃！へファイナル・グロリアス・ブライド！！」

「迎え討てえ！へエターナル・エヴォリユーション・バーストオ！！」

ド派手な閃光。流石はサイバー・エンドだけあつてけっこうねばられたが、別に攻撃力が逆転したわけでもなし、最終的には崩れ落ちた。

「すまない、サイバー・エンド……」

亮 LP1700?1200

「先輩のそのリスペクト精神、あたし嫌いじゃないわよ……カードを1枚伏せてエンドフェイズ、また先輩のモンスター達の攻撃力を下げさせてもらうわ」

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》攻6000?6100?5100

ジュンコ HI LP700

《RR―アルティメット・ファルコン》

セットカード

「俺のターン、ドロロー！魔法カード《強欲で貪欲な壺》を発動！」

「げっ、ついに先輩までデッキ削りの宝札し出した!？」

そして都合よく手札増強引いてる、これが実力差つ?!・・・違うか。

「60枚デッキならリスクは相当減りますからねえ」

「そうだな、俺もおじやま3体をデッキから除外するために使うか・・・」

「デッキの上から10枚を除外し、2枚ドロロー!・・・カードを1枚伏せ、魔法カード《手札抹殺》を発動！互いの手札を全て、捨てた枚数分ドロローする！俺は1枚捨て、1枚ドロロー！」

「あたしも1枚捨てて、1枚ドロロー！」

ブースターを使わずんじゃなくて、直接捨てに来たか・・・流星に強かぬ。

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》攻5100?5400

「バトル！サイバー・ダークでアルティメット・ファルコンを攻撃する！へフル・ダーク
ネス・バースト！！」

「ぐぬぬ、畏発動《攻撃の無敵化》！戦闘ダメージを0にするこういうを選択！！」

「ククク、だがアルティメット・ファルコンは撃破だ……俺はこれでターンエンド」

亮 H0 LP1200

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》攻4700?5500

セットカード

「あたしのターン！ドロー！」

このまま脳筋にゴリ押されて負け?……そんなの絶対嫌だからね!!

「お返しよ！魔法カード《強欲で貪欲な壺》、デッキの上から10枚^除ぶつ^外飛ばして2枚ド
ロー!!」

「強欲で貪欲なジュンコさんきた！」

「これは勝てる流れだ、やっちまえジュンコー！」

「うっさいフラグ建てんな！手札よりバニシング・レイニアス召喚！その効果により
 ファジー・レイニアス特殊召喚！この2体でオーバーレイ！漆黒の闇より、愚鈍なる先
 輩に抗いし叛逆の牙！《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》!!」

『グガアアアッ!!』

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》★4／闇／ドラゴン／攻2500

「……愚鈍とは酷いな、先輩少し傷ついたぞ」

「知るかつ！ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイ・ユニットを2つ食べて、サ
 イバー・ダークの攻撃力を半分頂戴するわ！へトリーズン・デイスチャージ!!」

《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》攻2500?5250

《鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン》攻5500?2750

「攻撃力が逆転した！」

「簡単に出すけどさらっとおかし効果よね……」

「今さつき墓地へ行ったファジー・レイニアスの効果で最後のファジーを手札に加え
て……さらにつ、墓地の《RUM―スキップ・フォース》を除外し効果発動！墓地
のRRエクシーズモンスターを復活させるわ、三度現れよ至高の隼！《RR―アルテ
ィエエエツ！！》」

『ピエエエツ！』

《RR―アルティメット・ファルコン》★10 攻3500

「やっぱり帰ってきた?！」

「あのRUMのせいで、最低2回は倒さないと駄目ってことなんですなー」

「……このまま攻めてもいいけど、まだ墓地に《超電磁タートル》的なカードがあ
れば困る。ここは無茶でも決めに行く！」

「墓地のレイド・フォースの効果！手札のファジーとこのカードを除外し、墓地のRUM
を1枚回収できる！《RUM―幻影騎士団^{ファンタムナイツ}ラウンチ》を回収し、発動！ダーク・リベリ
オン1体でオーバーレイ！煉獄の底より、いまだ鎮まらぬ魂に捧げる反逆の歌！永久に

響かせ現れよ！ランクアップ・エクシーズチェンジ！出でよ《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》！」

『グギャオオオツ!!』

《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》★5／闇／ドラゴン／攻3000

「幻影騎士ラウンチはその効果で、ダーク・レクイエムのオーバーレイ・ユニットとなるわ」

うーんふつくしい、色んなドラゴンいるけどレクイエムはトツプクラスに好き。

ブラックフェザー・ドラゴン？・・・殿堂入りかな、鳥っぽいし鳥枠でいいと思った。

「こいつは・・・っ?！」

「先輩は初見だったっけ？ダーク・レクイエムの効果発動よ！オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、相手モンスター体の攻撃力を0にし、変化した数値を自身の攻撃力に加える！ヘレクイエム・サルベージン!!」

《鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン》 攻2750?0

《ダーク・レクイエム・エクシース・ドラゴン》 攻3000?5750

「あれだけあつた攻撃力が0に……」

「だけどわざわざランクアップせずとも、攻撃が通れば決まりじやなかったか?」
「理由は観てたらわかりますわ」

「今度こそ決めてやるわ、バトルよ!」

「これが通ればジュンコの勝ちだあ!ざまみろカイザー!!」

「フツ、残念だが……バトルフェイズのスタートステップに、墓地の《超電磁タートル》を除外し効果発動!このターンのバトルフェイズを終了させる!!」

「やっぱり居たか超電磁……わざわざランクアップさせたのは間違いじやなかった!」

「ダーク・レクイエムの第2の効果!残りオーバーレイ・ユニットを使い、モンスター効

果の発動を無効にし破壊する！」

「なっ!？」

この時墓地のエクシーズモンスターを特殊召喚く……したいけど、手札かフィールドのモンスターを破壊して墓地に送らなきゃ発動しないのよね、墓地のモンスター効果じゃ無理。残念。

あの伏せはパワー・ボンドだし……

「ダーク・レクイエムの効果発動に対しチェイン発動する！墓地から罫カード《仁王立ち》！」

「えっ?」

「サイバー・ダーク・ドラゴンを対象に発動。このターン、君は対象モンスターにのみ攻撃が可能となる」

「カイザーの奴何やってんだ？モンスターはフィールドに1体しかいねーんだから意味ねーだろ」

「最後の悪あがきか?」

「お兄さんらしくない……」

仁王立ちといえば対象モンスターをフィールドから離すことで……まさかね

「……あらためて攻撃よ！ダーク・レクイエムでサイバー・ダーク・ドラゴンを攻撃！
！〈鎮魂のデイズター・デイスオベイ〉!!」

「リバースカードオープン！罠カード《テストラクト・ポジション》！サイバー・ダークを破壊し、その攻撃力分のライフを回復する……」

「攻撃力って、0じゃん?!」

「さつきからプレイングが意味不明なんだなあ」

確かにパツと見意味不明だけどこれは……

「……そして仁王立ちの効果は適用されている。君はこのターン、サイバー・ダーク「にのみ」攻撃が許されている。つまり……」

「ジュンコ君は攻撃を行う対象がない、よってバトルは成立しないのさ」

「なんだその屁理屈くさい効果処理！」

「てゆうか最後の手札パワー・ボンドじゃなかったのかよ！汚えぞカイザー!!」
「ブラフも戦術のうちだぞ十代。お前は真っ直ぐ過ぎる……」

おっしやる通りで、めちやくちや警戒してたわ……あたしはまんまと先輩の言葉に踊らせてたわけね

「因みに肝心のパワー・ボンドは、最初の芝刈りで落ちてしまつてな……あれは俺の願望でもあつたのだ」

「願望かよ！……あたしはこれでターンエンド！」

ジュンコ H0 LP200

《ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン》(攻5750)

《RRーアルティメット・ファルコン》(攻)

「ライフは僅か200と1200……カイザーは手札尽き、フィールド尽き、墓地リソースもいい加減使いきつただろう」

「対するジュンコも手札は無いけど、フィールドにはおつかねーエクシーズモンスターが2体！これは勝つたろ!!」

だ、だよな？勝ったよな？ここまでやったら勝ち確信してもいいわよな？やったあ学園最強に勝っちゃった！……アルティメット・ファルコンの性能でゴリ押しした感じが否めないけど。

「……嫌だ。」

「へっ?」

「嫌だ、俺はあ……負けたく無いイイイイ!!!」

「な、なんだあ!？」

「お兄さんが壊れた!?!さっきからそうだった気もするけど!!」

「やっと判ったんだ、俺が何を求めていたのかを……あの夜、レイヴンを名乗る者に俺の意地もプライドも無茶苦茶にされた、あのデュエルに見とれてしまった、こいつには勝てないとやる前から思ってしまった……君が俺を壊したんだ!!」

「ちよっ、濡れ衣ですけど?!因みにあれあたしじゃねーから、別人だから（とゆう設定）！」

あつかーんこれ聞きおぼえあるやつだーっ?! ころその馬鹿モト師匠二人笑いを堪えてるんね、はっ倒すわよ!

「だからこそ、今度こそ君に勝ちたい! 例え外道畜生鬼畜変態聖徳○子と呼ばれようとも……俺はああ、勝あああつ!!」

「聖○太子つてなんの話ですか?!」

「セラ君なら小○妹子やれそうだね!」

「俺のターン! 墓地の《サイバー・ドラゴン・コア》を除外し効果発動! デツキより最後の《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚する!! そして魔法カード……《オーバーロード・フュージョン》を発動オオ!!」

「これ以上ないつてくらい絶妙なタイミングで絶妙なカード引いてるうーっ?!」

「このカードは闇属性・機械族専用の融合魔法! フィールドのサイバー・ドラゴン! 及び墓地の機械族モンスター達を生け贄に……《キメラテック・オーバー・ドラゴン》を融合召喚する!!」

『『『『『ゴアアアアアッ!!』』』』』』

《キメラテック・オーバー・ドラゴン》星9／闇／機械／攻6400

「なんだこのえっげつないの!？」

「ここに来て攻撃力6400?!」

「(あ、格好いいですねあれ……)」

「キメラテック・オーバーの攻撃力は、生け贄とした機械族モンスターの数×800ポイントとなる……生け贄とした機械族は8体!そしてその数と同数モンスターに攻撃できる!!」

「つーことは……攻撃力6400の8回攻撃!？」

「んな無茶苦茶な……」

「バトルだあ!ダーク・レクイエムとアルティメット・ファルコンを殲滅しろ!ヘレヴオリューション・レザルト・バースト!ニレンダア!!」

「なんかデジャ・ビュ、つてきやああああああつ!？」

レクイエムもアルティメットも頑張つて反逆してたけど、抵抗虚しく木端微塵。エク

シーズの連中はやはり融合には勝てないみたいです……

ジュンコLP200?—450?—2950

WIN 亮

「俺の……勝ちだ!!」

「うう、あそこでオバロとか反則でしょ……」

これが運命力の差か……あそこレクイエムじゃなくてエトランゼかレヴオリューション・ファルコン出せたなあ、あつちのが良かった? 否、あの回避コンボされることは一緒かぁ……兎に角超くやしい!!

「では約束通り……」

「あーもうわかってるわよ! 女に二言は無いわ。デートでもなんでもしてやろうじゃない! 言つとくけどマジでなんも楽しくないからね!!」

「ひ、開き直ってはる……」

「ジユンコ君らしいねえ」

「むしろ1日中デュエルしてくれるってんなら望む所よ！逆にリベンジ達成できるまで逃げんじやないわよ!!」

「勝つまでやる気ですなあれは……」

あー次何で行こう。

やつぱBF?それともハーパイ?あえてRRそのままリベンジでも……

「やつぱ駄目だ!ジユンコとデートだなんて認めらんねえ!」

「じ、十代?」

「なんだ十代、俺と彼女の約束だ。部外者は引つ込んでいてもらおうか」

「いや引つ込まないぜ、これだけは!たとえ何で負けていようが関係ねえ、ジユンコだけは渡さない!どうしてももってんなら……カイザー!俺とデュエルしろ!!俺を倒して納得させてみやがれ!!」

えっ、あのその……

「いいだろう。俺もお前を倒さねばならんと思っていたところだ！」

「や、やめっ」

「やめてー、あたしのためにあらそわないでー(棒)」

「オメーがやめろモモ！思っても口に出されるときついモノがあるわ!!」

先輩と十代がデュエルの構えをとろうとしたその時……いきなり地震かと思うほどの激しい振動が起きた。

そうだ、確か原作通りならこの後で……

「むっ?!なんだ、七精門の鍵が光って……何かに引き寄せられるっ?!」

「か、カイザー!」

「お兄さん……浮いてるう!」

「馬鹿な、カイザー程の男になると空すら翔べるとゆうのか!」

「んなわけあるかストコドツコイ!あれ鍵に先輩が引っ張られてんのよ!!」

「ああつ、亮が島の奥へ!」

「腕組んだままなのがシユールですわ!」

《クルツク》

そんなわけで原作万丈目君に代わりまして、丸藤先輩のスタイリッシュ空中浮遊を追跡した所であれだ、無数のオベリスク（巨神兵ではない）が建ち並ぶ広場まで出た所です。

「ぐおおお・・・カハッ！」

「先輩が落ちたー！意識的な意味で無く物理的に!!」

「誰に説明してるんですか?!」

丸藤先輩を地面に叩きつけたか七精門の鍵どもは、オベリスク広場の中心部にポツリ

とあったどうみても怪しい台座に自らスロットインされていきまして・・・なんやか
んやで3枚のカードが出現した、どうみても3幻魔のカードです本当に（ry

「あのカード・・・もしや3幻魔!?!」

「何事ですか!」

「何の騒ぎナノーネ!」

「校長! クロノス教諭! 3幻魔のカードが復活してしまったんだ・・・」

「!!!!!! カイザーのせいだ!!」!!!!!!」

先生が来たところで先輩に全てなすりつける、指刺す所まできれいに揃いました。

「そうか・・・の俺の覚醒した溢れんばかりのジュンコ君への想いが、3幻魔を復活させ
る鍵となってしまうたのか・・・!」

「んなわけあるかーっ! 大まじめな顔で何ほざいてんのよ!!」

「丸藤君が壊れてしまった事は兎も角、早くあれを再封印しなくては! あのカードが人
の手に渡れば大変な事に・・・」

『そのカードを貴様達に渡すわけにはいかんな……』

色々な原因で動揺を隠せない校長が、3幻魔の台座に向かおうとしたその時、機械的な声が空より響き渡った。

「な、なんだ!？」

「親方あ！空からロボットが!!」

「誰ですか親方って!!」

親方は知らんけど空から降ってきたのは影山理事長カプセルである、もーこっからは原作見てる人はわかるよね？

じーちゃんの台詞ゆっくりで間延びして長いからパツと行くわよ。

「そんな所で手抜きするんですか!？」

《ならばアカデミアのカイザー。いや、愛の凶帝・丸藤亮が相手だ!》

《いやここは、愛の王者・フッキングが相手だ!》

《だったら愛の女王たる、エキゾチック・クイーン明日香が相手よ!》

《まともな奴が一人たりとも居ねえ!》

《エキゾチックの意味わかって言ってます?!》

「行けっ! エリクシーラー!! 《幻魔皇ラビエル》を攻撃! 〈究極剣・サバティエル〉!!」
「ぐわあああああつ!!? 馬鹿な、幻魔が敗れるはずが……」

影丸LP8000?0

ラビエル爆☆殺。

いやー凄かった、なんとゆうか凄かった十代が……あれよね。ししよー倒せる程

成長した十代相手に、初心者がルールかじった程度の幻魔デツキじゃむしろ勝てる訳がなかった・・・逆に3幻魔場に揃えた事を称えたいわ。

大徳寺センセの原作版インチキサバティエルのおかげもあって、終止圧倒してやがりました。強すぎい。

幻魔の力が抜けたカゲヤマツスルは元のヨボヨボのジジイに戻り、十代とハグした時に背骨を折って病院行きとなりました・・・まあ正直自業自得、因果応報な感じもしなくはない。

「終わったか・・・」

「大事な部分を、ものの3分程に短くされた気はするけど終わったね」

「文句は駄作者の奴にお願ひするわ」

「自然にメタを交えるなよ・・・」

「3幻魔のカードは、私の手で再び嚴重に保管する・・・」

あー良かった良かった、これで一期分終了だっけ？

長かったような短かったような不思議な間隔だけれど・・・そう、あたし達は油断していた。騒動はこれで終わりだと、思っていた。

「トウツ（有言の手刀）!!」

「グハツツ!!」

「悪いね、校長……僕はこの時を待っていたんだ」

皆の気が抜けきっていたその時奴が牙を向いた……3幻魔を再封印しようとした校長を、馬鹿師匠が気絶させて……えっ？

「に、兄さん!!?」

「ちよっ、こら馬鹿ー！アンタ突然何やらかしてるのよ!!」

「おふざけでもやっていい事と悪い事がありますわよ!!」

「吹雪っ！どうゆうつもりだ!!」

「安心したまえ、海馬社長の許可はとってある。説明がいちいち面倒でねえ……来いっ

！・真紅眼の黒竜（ジェット）!!」

『あいよー、待ってましたー!!』

呼び掛けひとつで来るジェット機とか反則だろっ?! 嘩然とするうちらを他所に師匠は颯爽と乗り込み……

「3 幻魔のカードは頂いて行く、さらばだ……歴戦のデュエリスト達よ!」
「どこのパラ○ックスさんだー?!」

どこぞへと飛び立ってしまった……その直後だった。PDAに師匠からのとわかる着信音で、あたしとももえにメールが入る。

『僕ら3人の、はじまりの山で待つ。冬夜^{トイヤ}より愛を込めて』

39羽—やっぱ大体あいつのせい

〇〇県〇〇市のとある山奥—こつち現世でこの場所に訪れるなんて考えてもみなかった。

この場所は—・・・わたくし達が出会った場所。

動けなくなつて一人泣いていたわたくしを、野山を駆けずり回つてヤンチャしていた
 師匠・・・冬夜トイヤと、ジュンコさんが見つつけてくれた場所。

・・・おいこら、何ナチュラルにナレーションに割り込んでんだオメーは。

あの時のジュンコさん・・・いえ、あつちの頃ですから隼子さんですわね。

ものすごくボーイツシュで・・・初見は男子だと思つた程でしたわ。

いや、うん・・・無視かよ！

そう・・・二人で虫捕りに来たとか言つてましたわね、自由か。

けどそんなお二人がとても面白可笑しく、もとい輝いてみえて・・・それから三人
 で、またある時は四人で行動するようになりました。

あーうんいたわねアイツ、けど話しそれるからその話題カットで

まあまあ、彼はジュンコさんが連れてきたんじゃないですか。居なかつたように扱
 うのは酷いですわ！それに彼はジュンコさんの・・・

あーあー、きーこーえーなーいー。

つーかいい加減にしない？うちらなんで地の文で会話してるわけ意味不明だよ？

もーこの小説ラストだつてんのに最後までこのグダグダな感じ貫くわけ？あの○^{ギン}魂ですらラストシーズンは結構真面目にやつてるよ？

仕方ないでしょう、読者アンケート（笑）の結果コメディールトになったんですから。七精門編らしく多少はシリアスっぽく締めるとかそんな事は微塵も望まれていませんわレイブン（笑）

やめろお！ここぞとばかりに黒歴史をほじくり出すのはやめろお！！

あーもー、これで師匠がシリアスモードで出迎えたらどーすんのよ、こっばずかしいにも程があるわよ……

そんな事を考えながら、わたくし達は目的の地へとたどり着いた……そこではあの馬鹿が一人立ち尽くしていた、アロハで。

あ、これナレーションだったわね。ん？アロハア!?

「待っていたよ……ジュンコ君、ももえ君。思ったより早かったじゃないか……」
「思ったより早かったじゃないか……じゃないわーっ！なんでアロハのまんま？ねえなんでアロハのまんま?!雰囲気ぶち壊しにも程があるんですけど!!」

「そんな事言ったら冒頭から地の文オンリーとかとつくの昔にぶち壊していますわ!」
 「それはアンタが割り込んできたせいだろうがいつ!」

「ふふつ、勢いでジェットに乗り込んだはいいけど着替えを忘れててね……甲縛式オー
 ○ーソウルを取得していなければ空で凍死だった。冬夜だけに」

「またそれかよ! マン○ンネタは伝わるか怪しいからやめろって何度も言ってるで
 しょーが!!」

「何つ、原作世代なら○ンキンも大体通じるのではないのか!? 同じジャ○プ出身だよ!!」
 「GXとかから入った人もいるかもだろうが! てかアンタ達、本気でいい加減にしなさい
 よね! 開幕からここまでひたすらボケ続けじゃねーか、こんなもん一人でさばききれ
 るわけないでしょーが……セラちゃん先輩連れてくればよかつたわよ!!」

「そんなつ、まだ始まったばかりですわよ?!」

「僕たちは信じてる……たとえば他の皆が全てボケに回ったとしても、ジュンコ君がい
 る限り世界は平和だとね!」

「その無駄過ぎる信頼はどっからくるわけ!? あーもーそろそろ本題に入れつつ!!」

《クルック》

「ぜえ、ぜえ……」

「毎度の如く、ジュンコさんがツッコミ疲れてから本題に入るのは定番として……いきなり三幻魔かつさらってこんな場所にわざわざ呼びつけて、どうゆうおつもりですか？」

「そーよ、もうすぐ進級試験始まんのか？ 転生者（笑）だからって余裕かませんのは最初だけ！ 細かいルールとかバニラテキストとか青眼の活躍シーンとか、勉強する所沢山あるんだから！」

「自身の嫁自慢を学校の試験にまで混ぜこんでくる社長、流石だよね……」

一度、「我がブルーアイズがかの者との闘いにおいてブラック・マジシャンを戦闘破壊した回数を答えよ。」とか試験に出た時は思わず「知るかーっ!!」と叫びながら試験用紙を破りたい衝動にかられた。

あいつやっぱ本物の馬鹿だぜ……（凡骨感）

「うん、ならば本題に入らせて貰おうか。君達突然だが……元の世界に帰れるとしたらどうする?」

「え、本当に突然ね……」

「この場所呼びつけたのと何か関係があたりで?」

「ああ。僕たちをこの世界に転生（爆笑）させた張本人曰く、『あつ、幻魔の力使えば肉体ごと異界移動くらいできそーじゃね?』とか言ってたんだよ。だから念のため聞いておこうと思つてね」

今なんか気になる単語聴こえたんですが、張本人知ってるの? 対話できるの? しかも口調的になんか知ってる奴な気がする。

「う〜ん細かい事は置いといて、わたくしは今更つて感じですよ。向こうは向こうで面倒ですし、肉体はこのままなら家族も「誰。」ってなるでしょうし記憶薄らいでますし、なによりようやく万丈目様とゴニョゴニョ……な関係にもなれましたし」

「……おい最後、あたし的にそつちのが気になるんだけど? 何、あんた達進展あったわけ。結構関係良好なわけ?!」

「それはもう、準さんつたら……夜は意外とケ・ダ・モ・ノ。でしたわ」

「うおー!!それはあれなん? AとかBとかすつ飛ばしてZまで行ってんの!? 二人でオーバーレイしちやってるわけ!!」

「あらいやらしい。ジュンコさんが気性とは裏腹に奥手過ぎるだけですわ、前世ですら実は一度も……」

「わー、わーつつつつ!!この話題ストップストップ! あたしが悪かった、変につつこんだあたしが悪うございました!!」

くっそう、人が闇堕ち(演技)してる間になんてこつたい……昔っからこのコはちやっかりしてんのよね、あたしと違って要領がいいとゆうか……あっちじゃ、そこに敗けたんだろうけど。

「ジュンコ君はどうだい? 隼子としての肉体はもうスプラッターだと思うが……君は結構心残りがあるだろう」

「ばっか、あたしも今更よ。別に気がかりなんかないし?」

「(嘘つけ、ブラコン)」

なんか目で否定された気がする。

《クルツク》

「……じゃあ、今更二人共帰る気は無いつてことで。三幻魔のエネルギー（）は僕が使っちゃつても大丈夫かな？」

「いいとも〜」

「じゃあ早速だが……闇のデュエルを始めようかっ!!」

「ふあっ!」

馬鹿はそう宣言すると懐からあの厨二仮面、ダークネスの仮面を取り出すとそれを装備!赤のアホくさいアロハシャツから一転、セブンスターズのダークネスの姿へと様変わりした。

……あの仮面ら服装も替わるんだね凄いな。

「ちよつっ……話が急過ぎてまっつったくついて行けないんですけど!」
「わかるように説明しやがれですわ!」

「説明している暇はないぞお前達……早く構えろ。それとも無抵抗なまま死にたいのか?」

キャラ変わってるうーっ!?前は仮面つけても馬鹿だったのにキャラ変わってるんですけど、あの人ダークネス堕ちしてるんですけど!!

「気づけば辺りが闇の瘴気(大喝采)に包まれていますわ、あんなに明るかったのに!こうなったら○るしかありませんわ、隼さん!」

「回り誰もいないからって前世の徒名やめい!黒咲さんになるレジスタンスになるっ……上等!前は2対1ですら敗けてきたけど、もうあの頃とは違うって事を思い知らせてやるわ、馬鹿冬夜!!」

「いいだろう……ならばルールはバトルロイヤル☆ルール!ライフは全員が前世にならって8000だ。そちら二人で統一にすると、いつぞやのように一瞬でケリがついて

しまうからな」

「んだとこらーっ（ですわ）!!」

「ククククク……さあ始めようか、我が弟子にして最愛の友たちよ！チームRAVE NS（レイヴンズ）の、ラスト・デュエルの始まりだ!!」

「なんですかその原作アニメ次回作のタイトルみたいなチーム名は！」

「地味にあたしにダメージを与えんのはやめろ本日2回目！やっぱオメー馬鹿だろ、仮面かぶつてもやっぱ馬鹿だろ!!」

「「デュエルツツツ!!」」

ダークネス吹雪^{冬夜} LP8000

ジュンコ^華 LP8000

ももえ^桃 LP8000

40羽―前編 新マスタールール? そんなものはうちの管轄外だ。

・前回のあらすじ

ガンマンライン (白目)

「デュエルツツツ!!」

ダークネス吹雪冬夜 LP8000

ジュンコ LP8000

桃華 ももえ LP8000

「先行は貰った。俺のターン、ドロ―!俺の引いたカードは、《R U M―七皇の剣》!!」

「はあっ?」

「弟子が可能な事を、師匠である俺が出来ないとも思ったか!長つたらしい説明をして文字数稼ぎと思われるでも酌だ、このままメインフェイズに入り効果発動!」

「手札から、《増殖するG》の効果発動!好き勝手はさせませんわよ!」

「モモの初手G!これは勝てる!」

「相変わらずGが好きだなモモは……出る度に悲鳴をあげて、俺に助けを求めているのが嘘のようだ」

「ちよっ……好きじゃないですし!あらぬ誤解をうけるのでやめてくださいな!!」

「それに比べ隼ときたら……嫌いだ嫌いだなどと言いながら、Gを見かけたら瞬殺だったな?隼だけに」

「き、嫌いだからのさばらせたくないだけだっつーの!黒咲さんと勘違いされっから前世ネームやめーや!」

くそっ、凄くやりづらいわ……昔話でうちの動揺を誘っても無駄だかね!

「そうですわ(便乗)!さっさと発動止めてエンドしてもらえますか?」

「フン。俺が初手七皇の剣このカードを発動するには王子力が33万必要なのだ。モモと違って気軽にやるものじゃない、G程度で臆したりせんわ!」

「……なるほど、いくら師匠といえど回復に3ヶ月はかかるレベル……このデュ

エルに対する奴の姿勢がうかがえますわね」

「王子力って何！アンタの女子力みたいなもん!？」

「そんなわけですら現世よ！永遠を超える龍の星、《CNo. 107
ネオギヤラクシーアイズ・タキオンドラゴン
 超銀河眼の時空龍》!!」

《CNo. 107 超銀河眼の時空龍》★9 ATK4500

「ならば2ドロー！」

「そして尽かさずエクシーズ・チェンジ！ダークマター・ドラゴン!!」

『ギヤゴオオオオツ!!』

《No. 95 ギヤラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》★9 ATK4000

「むう、さらに1ドロー！」

「ダークマターの効果発動！俺はデッキから黒石と黒竜、黒炎竜の3種を墓地に送る。
 さあ、お前達はデッキから3体を除外してもらおうか」

汚ない、うちら二人とも効果及ぶのかよ汚ない……さてどうしよつか

「わたくしは増殖するG2枚と浮幽さくらを除外しますわ。初手になればGは用済みです。あーデッキ圧縮出来てうれしいナー(棒)」

「容赦ねえ。あたしはドロールとダムルグ、あとはダームド先生かな。重いし」

「このコ達フィニッシャー件事故要員でもあるからね、今回はごめんなさいかな？」

「存外冷静だな。墓地の《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンドをレッドアイズをデッキに戻す事で回収する。

《手札抹殺》。5枚捨て5枚ドロローだ」

「わ、わたくしはセブンスドロロー！」

「モモのデッキ圧縮がやばい。あたしも5枚よ」

「冥王竜ヴァンダルギオンを捨て《トレードイン》、2枚ドロロー。《紅玉の宝札》により手札の黒竜を墓地に送り2枚ドロロー。《ソウルチャージ》発動。我が命を糧に蘇れ、4体のレッドアイズよ!!」

《レッドアイズ・ブラックドラゴン》
《真紅眼の黒竜》×2

☆7 ATK2400

《真紅眼の黒炎竜》×2
レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン

☆7 ATK2400

ダークネスLP8000?4000

「あら、いきなりライフ半分にしてくれんの？手加減するは止めんじやなかったっけ」
 「わ、ードロー……お優しい、お師匠様ですこと」

「フフ、愛い奴等だ。エクシーズ召喚！2体の《真紅眼の鋼炎竜》！その効果により新たにレッドアイズを2体展開しエクシーズ！3体目の鋼炎竜!!」

『『グオオオオツ!!』』』

《真紅眼の鋼炎竜》×3
レッドアイズ・フレアメタルドラゴン

★7 ATK2800

「いい加減にしてくれませんか？合計5枚ドロー！」

わ、ワンターンスリイ鋼炎竜ウ・・・まあソウルチャージとか引かれたらしようがない、ライフ4000削ってくれたと考えよう。

「3体目の鋼炎竜の効果により最後のレッドアイズを復活!「ワンドローツ(半ギレ)!」
 《馬の骨の対価》、レッドアイズを生贄に2枚ドロロー。カードを3枚伏せエンドフェイズ、手札より速攻魔法《超再生能力》発動!このターン生贄に、または手札から捨てたドラゴンは合計4体、よって4枚ドロロー!・・・超再生2枚目!追加で4ドロロー!手札制限により2枚を捨て、ターンエンド!」

ダークネス H6 LP4000

《No.95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》(ORU2)

《真紅眼の鋼炎竜》×3

(ORU1)

セットカード

セットカード

セットカード

ふう、やれやれやつと師匠劇場が終わったか……えつ、リアクションが薄いつて？ 当たり前ではないか（長官感）。親の顔より見た光景よこの程度。

冥王様見えたからまたパーミ軸か……あれ？ 超再生4枚ドロ〜つて少なくて手札抹殺なかったら大事故なんじゃね？……感覚麻痺かな。

「わたくしのターン、ドロ〜！ フッフ、見てくださいませ！ この手札、14枚ですわよ！ 4枚……これだけあれば、例えスリイ鋼炎竜下でもアンニャロをワンキルしてあげやがりますわ」

「口調。オツケー、任せたわ！」

「スタンバイフェイズに鋼炎竜1体の効果発動！ 蘇れ《真紅眼の黒竜》よ！」

《真紅眼の黒竜》

☆7 ATK2400

「おー」

「おや？」

このタイミングで素材を使い切った……?鋼炎竜のバーン効果にはオーバーレイ・ユニットが必要、火力を下げてまで蘇生したってことは……《王者の看破》ね!

「(エクシズ使うようになっただけで前回(9羽)と変わっていませんわね、もう倒してしまっても構わないでしょうか)まずは邪魔なあれを排除します、ユニットが2つの鋼炎竜を生贄に特殊召喚!《海亀壊獣ガメシエル》!!」

『ギャオオオウ!!』

《海亀壊獣ガメシエル》☆8 ATK2200

「流石水色のガ○ラ!これで地味バーンの影響も減るわね」

「リバースカードオープン、《影のデツキ破壊ウイルス》」

「……えっ?」

「真紅眼の黒竜を生贄に発動。さあ見せるんだモモ、君の手札をね」

ももえ手札

《激流葬》

《深海のディーヴァ》×

- 《海皇子ネプトアビス》×
 《水精燐—アビスリンデ》×
 《水精燐—アビスパイク》×
 《水精燐—ディニクアビス》
 《水精燐—メガロアビス》
 《鬼ガエル》×
 《E・HERO バブルマン》×
 《海皇の狙撃兵》×
 《海皇の龍騎隊》×
 《RUM—七皇の剣》
 《氷霊神—ムーラングレイス》

「内、守備力1500以下のモンスターを全て破壊する！」
 「いやあああああああ！」

じ、13枚中8枚逝ったー・・・G使っても展開してきた時点で気付くべきだったわねウイルス。いやドローは強制だからどうしようも無いっちゃ無いんだが、酷い。

モモはモンスター効果で展開するのがメインだからよりぶっ刺さってるわね、つか七皇の剣引かされてるし。

「ジュンコさん……わたくしもう駄目みたいです……ディーヴァさん落ちたし……」
「諦めんなーっ?! 8枚逝つてもまだ5枚じゃん、初期手札じゃん! アンタならやれる自分を信じれ!!」

「うう……墓地に落ちてた粹カエル効果! 鬼ガエルを除外して、粹カエルを特殊召喚!」

《粹カエル》☆2 DEF1000

「鋼炎竜の効果だ、焼かれるがいい!」

「きやあつ!!」

ももえLP8000?7500

「……手札のメガロさん効果! デイニクアビスとムーラングレイスをコストに特殊召喚! 特殊召喚時にデッキからアビス魔法・罨を……」

「リバースカード、カウンター罠《タキオン・トランス・ミグレイション》!! フィールド上にダークマターがいるため、このチェーン上で発生した全ての効果を無効にする」

あっちゃー……

「どうしろって言うんですかこの鬼! 悪魔! 天然タラシ!! 大体貴方が先行とか可笑しいんです! ドーせ無茶苦茶されるのはわかってました。ええ、わかってましたとも、案の定ですし!!」

「ふん、ターンはランダムで決めた上にちゃんとG握ってたじゃないか。文句を言われる筋合いはないなあ」

「むつきいいいいいい、ああ言えばこう言う……」

「よーしよしよし。モモ、一旦落ち着こう? もう伏せカードないし、あたしがちやくんと仇を討ってあげっから」

「ふえくん、シユンちやくん……」

あかん、モモが無茶苦茶されすぎて情緒不安定になつとる。このコ普段しつかりして代わりに一度崩れると立ち直り遅いからなあ……あたしがしつかりせねば。

「グスツ、2枚カードを伏せてターンエンドします」

ももえ H0 LP7500

《粹カエル》DEF2000

セットカード

セットカード

「ははは、切り札の七皇の剣もブラフか。惨めだなあ、モモ?」

「うっさい! 貴方なんかシユンちゃんかボコボコのケツチョンケツンにするんだからっ、今にみてやがれですわ!!」

「モモ、口調だけみたらあたしと勘違いされっから。文章だけじゃもう誰だかわかんねーから……あたしのターン!」

「ウイルススチエックだ、ドローカードを確認させてもらうぞ」

「フツフーン。あたしの引いたカードは《黒い旋風》!! 尽かさず発動!」

「流星はジュンコさんっ!」

こつからモモに激流打たせてどうせ落ちてるだろう福音消費させ、あいつのフィールドを殲滅しちやる！」

「ならばそれにチェーンしよう。リバースカード、《RUM―幻影騎士団フアントムナイトラウンチ》」

「はっ？」

「素材の無い鋼炎竜1体でオーバーレイ！2つの太陽が昇るとき、新たな世界の地平が開かれる！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！現れいだよ！ 《DDD双暁王カリ・ユガ》！」

《DDD双暁王カリ・ユガ》★8 ATK3500

「このエクシーズ召喚に成功したターン、フィールド上で発動する魔法・罠・モンスター効果は無効化される」

「ざっけんなあああああ！せつかくターン来たのに何もすんなってか!？」

「別にそうは言っていないだろう。次の俺のターンに備えてモンスターをセットするなり、カードをセットするなりしてくれ」

「誰がするかボケェツ！どうせ大嵐効果飛ばすんだろーが何もできんわバツキャロー！モンスターセットしてターンエンド!!」

「ならばエンドフェイズにカリ・ユガの効果発動!オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、全ての魔法・罫を破壊する!!」

「旋風が……」

「わたくしの激流葬まで!そんなあ、最初の勢いどこへ行ったんですか……」

殲滅である、完封である。1ターン目のうちの行動は全て封じこめられてしまった。

ジュンコ H5 LP8000

セットモンスター

「俺のターン!レッドアイズ・インサイト発動。レッドアイズ・ワイパーン真紅眼の飛竜をコストに、レッドアイズ・フュージョン真紅眼融合を手札に加え発動!《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》を融合召喚!!」

『グオオオオオッ!!』

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》☆9 ATK3200

「《強欲で貪欲な壺》!デッキから10枚を裏側で除外し2枚ドロ!そしてダークマ

ターの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、このターンモンスターへの2回攻撃を可能とする！」

「容赦ねえなおい!?!」

「バトル！ダークマターで粹カエルとセットモンスターに攻撃！」

「ぜ、ぜピュロスでしたっ！」

ブラックフェザー

《B F — 精銳のゼピュロス》 DEF1000

蛙と鳥は、ストリームだかスパイラルだかよくわからないあれに吹き飛ばされてしまいましたとき。

「ぜ、全☆滅！」

「続けて！悪魔竜ブラック・デーモンズで……」

「ちよい待ちですわっ！墓地の《光の護封靈劍》を除外して効果発動！このターン、貴方はダイレクトアタックを行うことが出来ない!!」

「何っ！」

「流石はモモ!もう駄目とか言っておきながらちゃっかり防御手段を残してるなんて!」

「フフフ・・・良かれと思ってピン刺ししといて正解でしたわ、初手にきた時はどうしてくれようかと思いましたが・・・案の定抹殺超再生からスタートだったのが幸いでした」

ああ、うん。あいついつつも抹殺で超再生引き当てるからね、真紅眼で征竜並みのアドの稼ぎ方してくるからね・・・

「あ、鋼炎竜効果で」

「あつっ!人がドヤ顔してる所へ水挿さないでくださいな!!」

ももえL P 7500?7000

「カードを4枚伏せて、ターンエンドだ!」

「伏せ過ぎイ!!」

ダークネス H3 LP4000

《No. 95 ギャラクシーアイズ・ダークマター・ドラゴン》(攻)(ORUI)

《真紅眼の鋼炎竜》(攻)(ORUI)

《DDD 双暁王 カリ・ユガ》(攻)

《海亀壊獣 ガメシエル》(守)

《悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン》(真紅眼の黒竜)(攻)

セットカード

セットカード

セットカード

セットカード

「わたくしのターン！引いたカードは《サルベージ》、魔法だし尽かさず発動！ディーヴァさんとなんか適当に《E・HERO バブルマン》回収！泡男召喚！」

《E・HERO バブルマン》☆4 ATK800

「場のカードが無いので2枚ドロー！《貪欲な壺》と《サルベージ》ですわ!!」

「サルベージダブってんじやねーか!」

「鋼炎竜の効果発動!効果が発動する度に500のダメージ。2回分だ!」

ももえLP7500?6000

「あつつ!?ま、まあアド稼げますから……《貪欲な壺》発動!墓地のメガロ、デイニク、リンデさん、重装兵と龍騎隊、この5枚を戻して2枚ドロ!!……どうです!《マスクチェンジ》と《水精燐—デイニクアビス》!影デッキのウイルス対象外ですわ、ざまあ!」

ももえLP6000?5500

えー、一応言つとくと、モモがこんな口悪くなのは対師匠ぐらいなのであらかじめ
ご了承くださいな……今更か。

「手札から、速効魔法《マスクチェンジ》発動!水属性バブルマンを変身!溶かし尽くせ
《M・HERO アシッド》!!」

『ヤアーツ!!』

《M・HERO アシッド》☆8 ATK2600

「勿論効果発動!相手の魔法・罠カードを全て破壊します!へアシッド・レイン!!」

「それは通せんな、カウンター罠《大革命反し》発動!2枚以上のカードを同時に破壊する効果を断固拒否する!!よってアシッドは爆殺!!そしてマスク使用分のダメージだ」

「うぐぐぐ・・・」

ももえLP5500?5000

伏せ3であれが通るのは奇跡よねそりや、ももも承知だろうが超くやしそう。

どうでもいいけど弾圧する民が無効対象に群がるのかい、シユール過ぎるわ。

「2枚目発動!ネプトさんと重装兵をサルベージ!メガロさん効果!この2体切って特殊召喚!」

『グオオオオ・・・』

《水精燐—メガロアビス》☆7 ATK2400

「チェーン1!ネプトさんの蘇生効果!チェーン2!重装兵の破壊効果!チェーン3!
メガロさんのアビス魔法・罨サーチ!

「チェーン4!幽鬼うさぎ効果発動兎投げる行為!」

『最終章なのに扱いが雑過ぎダア!』

説明しよう、メガロアビスに向かって幽鬼うさぎがボールの如く投げられて効果発動したのだ。

・・・動物(?) 愛護団体とか怒りそうよね、まあいいけど。

『味方が居なさすぎるヨ!』

「ちつ、姑息な兎を・・・《アビスファイア》サーチからの、重装兵の破壊対象はダークマター・ドラゴン!」

「復活の福音を除外、その破壊は免れさせてもらうぞ。これはチェーン云々の厄介事は関係ない」

「ですよね・・・ネプトさんの効果で重装兵を復活致します!」

《海皇の重装兵》 DEF1600

「じゃ、3回分な」

ももえLP5000?3500

「だから熱いなもー！女の口に火傷でも残ったらどうするんですか鬼畜！ライフ4000だったら鋼炎竜の効果だけで死んでますわよ!？」

「構わず効果発動しまくるお前が悪い、嫌なら黙ってターン替われ」

「もつと嫌！このタラコ唇が場にある時、海龍族をもつかい召喚できますわ！《深海のデীবア》さん召喚！」

『ゲホゲホッ。や、やつと出番きたし・・・モモ、とりあえず落ち着いた?』

《深海のデীবア》☆2 ATK400

「おお、久しぶりにしゃべってるのみたわ。お憑きの精霊だからって出番があるとは限

らないのよね」

『アンタのライキリに比べたら色々マシだからいいわ……。つかウイルス感染破壊つてきついのよ本気で』

「ご、ごめんなさい。ディーヴァさんの効果発動!……。通ります?」

「……。《神の通告》!!」

『ガツデム!』

ダークネスLP4000?2500

「ディーヴァさん!……。貴女の尊い犠牲は、無駄にはしませんわ……。」

「うおーい、全力で囷にしただろ今。ワンチャン通つたらラツキー程度だっただろー」

「さ、さあく?ナンノコトヤラ……。墓地の《魔知ガエル》除外で粹カエル復活、重装兵と粹カエルでオーバーレイ、《餅カエル》」

『ゲロツ!』

《餅カエル》★2 ATK2200

ももえLP3500?3000

「これでジユンコさんの妨害はさせませんわ！カードを1枚セットしてターンエンド！！」

ももえ H O L P 3 0 0 0

《餅カエル》(攻)

セットカード

よくよく考えたら、手札1枚からあんだだけ妨害受けてよくエクシーズ展開できたわね、BFじゃほぼ無理・・・これがデツキスペックの差か？く、悔しくないもんね！こつちにはこつちのいいところ沢山あるし！！

「解つたから早くしてくれないか？お前のターンだぞ」

「う、うっさいわね！あたしのターン！」

「ウイルスチエックラストターンだ、ドロークカードを見せろ」

「フッフッフッフ・・・《黒い旋風》！」

「・・・ここまで魔法だらけとは」

「ジユンコさんもダブってるじゃないですか! スタンバイフェイズに餅カエルの恐ろしい効果! オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキから魔知ガエル2号を特殊召喚いたします!」

《魔知ガエル》☆2 DEF2000

「更に、今墓地へ送られた重装兵の効果! ダークマターを今度こそ爆殺!!」

『ウギヤアアアアツ!!』

「断末魔ひつでえ! 先輩のギミパペ並みの怖さ!! つてあたしのターンだろがい!」

「チツ・・・2回分だ!」

「きやあああつ!」

ももえLP3000?2000

「鋼炎竜だけでモモが本気で負けそう!?! 《黒い旋風》発動!」

なお3枚目は最初の手札抹殺で抹殺されていたりする。残り1枚つてのを気取られないようにしないとね・・・。

「鋼炎竜効果！」

ジュンコLP8000?7500

「あちつ。さあ、行くわよ！ゴウフウからのグラディウス特殊召喚!!」

《BF—朧影のゴウフウ》☆5 ATK0

《BF—白夜のグラディウス》☆3 ATK800

「効果の発動はないか……
増殖するGの効果発動
 G!!」

「餅カエルの恐ろしい効果その2！そんなもん無効だばつきやろー!!（魔知を生贄にし
 ながら）」

「ここで使ってきたか……」

「わたくしのライフを全て使っても……ジュンコさんの展開の邪魔はさせませんわ
 !!」

『ペツ（Gを吐き捨てる音）』

ももえLP2000?1500

ごめん、あたしより先にターン回るせいで妨害だらけになってごめん・・・そしてGを丸呑みした餅カエルにドン引きしてごめん・・・ここまで御膳されたなら、きっちり決めないかね。

「そんなわけで、派手にぶっ飛ばすわよ!レベル3のグラディウスにレベル5のゴウフウをチューニング!!黒き疾風よ!秘めたる思いをその翼に現出せよ!シンクロ召喚!舞い上がれ、《ブラックフェザー・ドラゴン》!!」

『クヲオオオオ・・・』

《ブラックフェザー・ドラゴン》☆8 ATK2800

「あ、あれは!」

「なんか結構前から使うフラグを立てといて、結局今の今まで出番の無かったブラックフェザー・ドラゴンさんではありませんか!」

『フ、フオウ……』

「やめたげてよお！駄作者の構成が下手過ぎて出番作れなかっただけなんだから！このコは一切悪くないわ!!」

「俺達以外に誰も居ないからとメタ発言したい放題だな!？」

「普段メタ発言筆頭格のオメーがそれを言うか!!」

「ごもつともですわ、それは兎も角……」

「(不味い、本気で効果が思い出せない……!)」

「(不味い、本気で効果が思い出せません……!)」

「おおい!?なんだこの間ア!……まあいいわ。おいで、極北のブリザード!!」

『クルル……コン、コン』

「チェーン1!ブリザード可愛い。チェーン2!旋風効果発動!デツキからハルマツタンをゲット!そしてブリザードのつつく。によりグラディウスを守備蘇生!!」

《BF—極北のブリザード》☆2 ATK1200

「……鋼炎竜の効果発動!効果発動2回分、1000のダメージを食らええ!」

「この瞬間、ブラックフェザー・ドラゴンの永続効果!効果ダメージ発生の際にそのダメージを無くし、このカードに黒羽カウンターを1個のせる。このコの攻撃力はカウンターひとつにつき700ダウンするけどね」

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター0?2 ATK2800?1400

カウンターひとつにつき白い羽が赤く染まっていくのもいい、格好いい。

「効果ダメージへのメタ効果ですって!?!なんと珍しい」

「うおいいい!その反応絶対忘れてたろ、このコの効果絶対忘れてただろっ?!」

「……しまった!」

「今更気づいた?もう遅いわよ!墓地のゼピュロス効果、旋風を手札へ戻して特殊召喚
!」

《BF—精鋭のゼピュロス》☆4 ATK1600

「この時はゼピュロスに400ダメージを喰らわされるけど、ブラックフェザー・ドラゴンが私を守る!」

「更に鋼炎竜の効果ダメージも発生する・・・!!」

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター2?4

ATK1400?0

「まだまだあ!レベル3のグラディウスにレベル2のブリザードをチューニング!黒き烈風よ、絆を紡ぐ追い風となれ!シンクロ召喚!飛び立て、アサルト《A》ブラックフェザー B F | 五月雨のソハヤ》!!」

『・・・ハアツ』

「ちっさ!?声ちっさ!!ソハヤの効果発動!特殊召喚時に墓地からA B Fを1体復活!

お戻り、クナイ!!」

『シャアツ!』

《A B F | 霧雨のクナイ》☆5 ATK2100

「そしてまた、鋼炎竜の効果が発動するわねえ?」

「だが、黒羽カウンターを乗せる事で無効にされる・・・」

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター4?5

「そう、攻撃力は0になっても効果ダメージは無効化し続けられる!」

「凄い!これなら例えスリイ鋼炎竜が健在でも、効果が使いたい放題ですわ!!」

フツフツフツフ、ようやくブラックフェザー・ドラゴンの凄さが判ってきたよね・・・さあ、その君も是非バーン対策にこのコを採用するのよ!!

「いや、それはない」

「心読んだ上にハモってまで否定すんなーっ!」

「お前はいちいち顔に出過ぎなんだよ」

「わたくしは観ていて愉しいのでOKですわっ」

「ぐ、ぐぬぬぬ・・・今に見てなさい!ブラックフェザー・ドラゴンの効果発動!このカードに乗っている黒羽カウンターを全て取り除き、その数×700のダメージを相手

モンスター1体とプレイヤーに与える！対象はカリ・ユガよ、《ブラック・バースト》!!」

ブラックフェザー・ドラゴンの胸らへん？から放たれる黒い波動的なアレが、DDD一族のトップを襲う！これが通ればあたしらの勝ちだが……

《DDD双暁王カリ・ユガ》ATK3500?0

ダークネスLP2500?6000

「げっ！ライフが回復してやがる……」

「俺はブラックフェザー・ドラゴンの効果にチェインし、罨カード《レインボーライフ》を発動していた……受けるダメージ全てが回復に変換されたわけだ」

「でた！初期遊戯王名物がひとつ「発動していた」ですわ!!」

「ふっ、残りのこのターン中は面倒なので、黒羽カウンターが増える度に鋼炎竜の効果が起動したと思ってくれ」

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター5?0?1

くっそう、妙に大人しいと思ったら回復待ちかい。宣言しなさいよ!

しかもレインボーライフの効力はこのターン中ずっと続くから、下手に殴ると無駄にライフを増やしてしまう・・・とりあえずモンスターだけ除去して、布陣を整えておこうかな。

「クナイの効果!場のシンクロモンスターのレベルを1から8の好きな数値に変更できる、ソハヤのレベルを1に変更しておくわ。そしてハルマツタンを特殊召喚!」

《BF—砂塵のハルマツタン》 ATK800

「レベル2の砂塵のハルマツタンに、レベル5の霧雨クナイをチューニング!漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れ!電光の斬撃イ!!我がエースにして喋ると残念、《A BF—驟雨のライキリ》ツツ!!」

『むしろいつも通り過ぎて安心すら覚える扱いの酷さっ!』

《A BF—驟雨のライキリ》☆7 ATK2600

「墓地の《BF―大旗のヴァーユ》の効果！墓地の蒼天のジェットと除外して墓地シンクロ！飛び立て、《A BF―霧隠れのサヨ》！！」

《A BF―霧隠れのサヨ》☆2 ATK800

「ここでライキリの効果発動！場の自身以外のBFの数だけカードを破壊する！たまた切れ、《ライトニング・エッジ》！！」

『チエストオオ！！』

『『『グワアアアアアアアッ?!?』』』』

他のBFの数は3体、雷刃がカリ・ユガとガメシエル、悪魔竜を襲い、破壊した。

うーん、黙って働けば格好いい奴なんだけどねえ……

《ブラックフェザー・ドラゴン》 黒羽カウンター？3

「鋼炎竜以外全滅とは……」

「まだよ、まだ終わらない！レベル4ゼピュロスにレベル1チューナーとなったソハヤをチューニング！再び飛び立て、五月雨のソハヤ！！」

『……2号デス』

《A BF—五月雨のソハヤ》☆5 ATK1500

「ソハヤの効果でクナイ復活！」

『クアツ!!』

《A BF 霧雨のクナイ》☆5 ATK2100

「レベル2、雨隠れのサヨにレベル5チューナー、五月雨のソハヤをチューニング!漆黒の翼濡らし、そば振る雨に響け雷鳴の一撃!...正直ライキリより出番多くね?」《A

BF—涙雨のチドリ》!!」

『じゃあ俺がエースで良くね?』

『解せぬ』

《A BF—涙雨のチドリ》☆7 ATK2600

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター3?4

「更につ、墓地のソハヤの効果発動!このカードが墓地へ送られたターン、他のソハヤを

除外してソハヤ復活！」

《A B F 五月雨のソハヤ》☆5

「クナイの効果！ソハヤのレベルを3に変更！そしてレベル5の霧雨クナイをチューニング！・・・神聖なる光蓄えし翼煌めかせ、その輝きで「馬鹿」を撃て！《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》!!」

《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》☆8 ATK3000

《ブラックフェザー・ドラゴン》黒羽カウンター 4?5

「馬鹿な！ここにきてガちなシンクロモンスターだと!？」

「エクストラが1枠、悩んだ結果空いたのよ！行けっ、クリスタルウイング！真紅眼の鋼炎竜を攻撃！〈烈風のクリスタロス・エッジ〉!!」

「おのれ、全滅とは・・・!」

ダークネス LP6000?6200

「どうだこらー!何時までも自分の方が強いと思つたら大間違いだかんね!・・・カードを1枚セツトし、ターンエンド!!」

ジュンコ H1 LP7500

《ブラックフェザー・ドラゴン》(攻0) 黒羽カウンター5

《A B F 驟雨のライキリ》(攻)

《A B F 涙雨のチドリ》(攻2600?5000)

《クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン》(攻)

《黒い旋風》

セツトカード

「エンドフェイズに罠カード発動! 《裁きの天秤》!!」

「あんだって?!」

「俺の手札は無く、場には裁きの天秤のみ。対するお前の場にはカードが6枚・・・よつて5枚のカードをドローする!」

「ようやく追い詰めたと思いましたが・・・」

「自分の場が壊滅する事も計算の内ってわけ？ほんっと、馬鹿みたいにデッキが回るわね……」

「わりとお前達二人には言われたくはないがな。俺のターン！」

「スタンバイフェイズに餅カエルの効果！デッキから最後の魔知カエルを特殊召喚致します!!」

《魔知ガエル》DEF2000

「構わんさ、魔法カード《死者蘇生》を発動！冥界より蘇れ……《暗黒の召喚神》よ!!」

《暗黒の召喚神》☆5 ATK0

「……えっ?」

「このカードを扱うには深い、深い心の闇が必要……だが俺はダークネス！俺は闇、

そのものである!暗黒の召喚神の効果発動!

「クツ、クリスタルウィングの効果!モンスタ―効果を無効にし、破壊する!」

「知れた事、墓地の《ブレイクスルー・スキル》を除外し発動!その効果を 無効にする
!!」

「そんな……」

「我が心の闇よ、秘めた思いを今こそ解き放つがいい……出でよ三幻魔!!《神炎皇ウ
リア》!《降雷皇ハモン》!《幻魔皇ラビエル》!!」

『『グオオオオオツツ!!』』』

「ふ、ふざけんなああああああっ!!」

続くんです?

40羽―後編
あかん、馬鹿のせいでタイトルすら浮
かばない

・前回のあらすじい

※暗黒の○召喚神(笑)

「神炎皇ウリア!降雷皇ハモン!幻魔皇ラビエル!!」

『『グオオオオオツ!!』』

《神炎皇ウリア》☆10 DEF0

《降雷皇ハモン》☆10 DEF4000

《幻魔皇ラビエル》☆10 ATK4000

「三幻魔……」

「手札1枚から3体の幻魔を呼び出すですって……インチキ効果も大概ってレベルじゃありませんわよ!!」

最初の手札抹殺と過剰な超再生能力は、三幻魔を墓地に送るための手段だったってわけね……全く、なんのために校長からパクったのかと思えばガチで召喚してくるなんて、流石は師匠と書いて馬鹿ね。

「ふふ、いい反応だ……だが暗黒の召喚神で呼び出した幻魔達は、眠りから覚めたばかりで攻撃できない……しかし幻魔が場に存在しているのは事実だ。フィールド魔法《失楽園》を発動!」

出た、筋理事長が使ってきたインチキフィールド魔法。毎ターン2ドロップて頭沸いてない? 発動条件くっそ重いのはわかるんだけどさ。

「……で、空気を読まずに餅カエル……とか駄目ですかね」

「それに対し速効魔法、《エフェクト・シャット》だ。餅カエルの効果を無効にして破壊する」

失楽園食えるの？とかちよつと期待したけど駄目だったよ！仕方ないよね。

「で、ですよね〜……餅カエルの墓地効果でディーヴァさん回収します」

「では失楽園の効果、場に幻魔があるので2枚ドロ！そして魔法カード、《次元融合殺》!!場の三幻魔を融合させ、混沌の闇よりいでよ！《混沌幻魔アーミタイル》!!」

《混沌幻魔アーミタイル》☆12 ATK0

「でたわねアーミタイル……だが、あえて言わせてもらおう！」

「はい！せくの」

「キモイ」

『……!!(ガーン)』

《混沌幻魔アーミタイル》ATK0?0

「……………どうやら女子高生の「キモイ」が相当堪えたようだな、攻撃力が半分くらい落ちた……………だが、元から0なので問題あるまい」

「結構繊細だな混沌幻魔!？」

『……………ツツ!!』

なんか震えてるし……………え、泣いてんの?泣いてんのこいつ、内気かつ!!

「この程度で泣いてたらわたくしは兎も角、ジュンコさんの相手など到底勤まりませんわよ……………三下ア!!」

「いや、結構あんたのが口悪くね?……………判断は皆様にまかせるわ」

「悩む所ではあるが今はどうでもいいな。では改めて、アーミタイルの効果発動!相手モンスター1体に、10000ポイントの戦闘ダメージを与える!!これは効果による攻撃、戦闘ではない!」

「つまりは原作版ですわねわかりますっ!」

「テキストガバガバ過ぎんによアニメスタツフ!!」

「対象はブラックフェザー・ドラゴンだ。消し飛べ！へ全土滅殺・転生波！！」
『ツツツツ！！』

あーめつちや怒ってるよアーミタイルさん、虐められたと思つて逆切れ気味だよ。

「させるかつ！畏カード、《和睦の使者》を発動！このターン、ブラックフェザー・ドラゴンへの戦闘ダメージを全て0にする！！」

「和睦っ……」

このカードはモンスターの戦闘破壊も超過ダメージも0にする。黒羽カウンターの乗りすぎたこのコが狙われることなんざ計算済みだつての！！

「ま、これで勝てるだなんてカケラも思つてはいなかったがな……メイン2で一時休戦を発動、1枚ドローする。」

「そのカード、互いに1枚引くつてなってるけどあたしが引く感じ？」

「まあ……特殊ルールだし全員引いとけばいいだろ。その分ダメージ0もジュンコのターンまでか」

「なんて一方的な休戦、これじゃアーミタイルをサンドバッグにしても意味ないですね、1枚ドロっと」

「フン、1ドロよ」

あくまでこのお話の中の裁定です。皆が身内でバトロワとかやるときは、ちゃんと話し合って決めなさいよ？

「1枚ドロ……カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

ダークネス H4 LP6200

《混沌幻魔アーミタイル》(攻)

《失樂園》(F)

セットカード

「わたくしのターン、ドロー！……リンクアップマジック・ザ・セブンスワン《RUM—七皇の剣》発動！」

出た！ももえもんの七皇の剣だっ！

「つてまてい。あんたさつきそれ、セツトしてカリ・ユガさんに破壊されてなかった？」
「え、別に制限カードじゃありませんし・・・」

「まだ複数積みやめてなかったんかい！Gで引くからやめろって言うてんでしょーが
!!」

「時に引かされるからこそ！2枚目3枚目が必要になってくるんですわ!!」
「まじでっ!?!」

流石はモモ、発想が1周回つてらっしやる。

結果的に発動出来るからいいんだけどさあ・・・

「そんなわけで以下略！サイレント・オーナーズ 満たされぬ魂の守護者、暗黒の騎士となりて馬鹿を打ち碎け

! 《CNo. 101 S・H・Dark Knight》!!
『イラツと、来るぜ?』

《CNo. 101 S・H・Dark Knight》★5 ATK2800

「いや、聞かれてもなあ……」

「この土壇場(?)でエースをさっくり呼び出すとはやるな。だが、アーミタイルは失楽園の存在によりカオス・MAXな耐性を得ている。ダークナイトの効果では突破できんぞ!!」

「カオス・MAXな耐性ってなんだよ! あんたシリアス気味な雰囲気になってきて、雑になってきてんだろ、正直疲れてきたんだろ!!」

「……(遠い目)」

「こつちをみんなーい!!」

「ま、まあまあ……《深海のディーヴァ》さんを再び召喚!!」

『どもども』

「ディーヴァさんの効果でデツキから生き残った重装兵を特殊召喚! さらに墓地の粹力エルの効果、墓地の魔知ガエルを除外して……」

「させん! アーミタイルのもう一つの能力、相手のフィールドに移動することができる
!!」

「クリスタルウィングの効果! アーミタイルの効果は無効にして……」

「リバースオープン！ 永続罨《デモンズ・チェーン》発動！ クリスタルウィングを鎖閉めにして、効果を無効にする!!」

「くっ……. っただけモンスター効果対策してんだアンタは!!」

クリスタル束縛きつちい。

混沌幻魔さんは自由の身となり、モモの空いてた最後のモンスターゾーンに、バツと瞬間移動する。

これじゃディーヴァの効果が使えない…….

「そしてエンドフェイズに、アーミタイル以外の全てのカードを除外する!!」

「くっ、姑息な真似を。そういえば、失楽園の効果耐性はたしか……あつ」

「えっ?」

「レベル2の重装兵と魔知ガエルに、レベル2のディーヴァさんをチューニング！ 氷牙よ吠えろ、《氷結界の虎王 ドウローレン》!!」

『ガオオオオウ!!』

《氷結界の虎王 ドウローレン》☆6 ATK2000

「あ、可愛い。でもモモのデッキじゃセルフバウンスって微妙じゃ・・・ああ！」

「ドウローレンの効果発動！自分の場のカードを任意の枚数デッキへ戻し、攻撃力を戻した枚数×500アップさせますわ。わたくしが選ぶのは・・・混沌幻魔アーミタイル!!」

『ツツツ!!?』

「なん・・・だと・・・」

「憐れアーミタイルさん、原作効果なんざ使ったばかりに予想GUYの方法で駆除されてしまいました。」

「今度までにメンタル鍛えとくのよ・・・」

《氷結界の虎王 ドウローレン》 ATK2000?2500

「チィ、〈虚無幻影羅生門〉はちよつと言ってみたかった・・・」

「ははっ、ざまあですわ！カードを1枚伏せてターンエンド!!」

ももえ H O L P 1500

《C N o . 1 0 1 S ・ H ・ D a r k K n i g h t》(攻)

《氷結界の虎王 ドウローレン》 A T K 2 5 0 0 ? 2 0 0 0

セットカード

「……で、せっかく一時休戦中だし、そろそろ話してくれませんか？」

「む？なんの事だ」

「惚けんなっつーの。なんの為に三幻魔パクってまで、うちらをこんな〇〇県〇〇市の田舎の山奥くんだりまで呼びつけたのよ」

「わかるように説明しやがれですわ!!」

「フン、別に大した理由ではないが……まあ、君達にならないだろう」

あ、口調戻ったわね。

「僕はね……女の子との約束を果たそうとしてるんだ!!」

「……はあ」

「さ、次はお前のターンだぞ？」

「あ、はい。あたしのターン、ドロー」

うーん、休戦中なら下手に動いても手札の無駄よねえ……とりあえずクリスタルの拘束といとこっか。

「ライキリの効果発動！デモチエを叩き割っておくわ

。それからブラックフェザー・ドラゴンを守備にして、カードを1枚セット。ターンエンドよ……」

ジュンコ H1 LP7500

《ブラックフェザー・ドラゴン》(守) 黒羽カウンター5

《A》アサルト B F 驟雨のライキリ》(攻)

《A》 B F 涙雨のチドリ》(攻2600?5000)

《クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン》(攻)

《黒い旋風》

セツトカード

．．．．つてちよつと待てーや!!」

「なんだ、藪からステイックに」

「全ツ然．．．全ツツ然!全ツツ然!!説明になつてませんわ!!」

「そうゆうポケいいからさつさと説明しろ!この腐れ天然タラシハゲポケカ○ウストラト
ンカチナスビインケンドアホ節穴のドンカン鬼畜ぼんぼこ○のぼんぼこ○の．．．

※余りにみるに堪えない罵詈雑言が続くので、しばらくお待ち下さい。

《クルック》

「ぜえ、ぜえ．．．つい、ここぞと言わんばかりに色々溢れてしまったわ」

「ジユンコさん……」

「うーん、流石に少し傷ついたな。あまり細かい説明とかすると、文字数稼ぎと思われるので嫌だったからさつくり言っただけだね、さつくり」

さつくり過ぎて余計に文字数使う結果になつてんじゃねーか……

「わかつたわかつた、そんな目で睨まないでくれちゃんと説明するから……読者の皆には退屈かもだが」

「そーゆーメタい気遣いは結構ですから……」

《イラつと来るぜ》

「えーと……以前闇のデュエリスト、プラナ（笑）が君達を襲った時の事は覚えているかい？」

「あーはいはい」

「まさかの登場でしたわね。最近では魔王☆少女(!?) セラ様のイメージが強すぎて忘れていましたか」

あれはセラちゃん先輩のセンスのせいだから。バクラとかマリクとか、闇のゲーム勢寄りセンスだからあの人。

「あの時、僕は彼女の兄さんを救う手段に心当たりがある。そう言って、一旦彼女を鎮圧させたわけだ」

「そんな事言ってたわねえ」

「……で、それが今回のハッスルとどんな関係がありました?」

「つまり彼女の兄さん……仮に藍神君とも呼んでおこうか」

「合ってる」

「うん? まあその藍神君を救い出す手段を色々模索したんだよ……結果!」

「結果?」

「やはり彼? をカード化した元兇であるこの僕、ダークネスを倒すしかない! でもどうせなら君達に倒されたいかな。はい、今ここね!!」

この僕、ダークネス？なんか微妙に引つかかるけど……

「よーするにあれか？あんたをボッコボコにすれば、藍神君○も帰ってきて十代もあたしにベタ惚れで皆に笑顔を……的な？」

「ああ、大体合ってる」

「ジユンコさん願望混ざってますわ……最近ラブコメ出来てないから欲求が洩れたんですかね」

『俺もだ』

『シャー○!!』

おい、そのの101。ダークナイト

こっそり鮫語混ざるな、さっぱり解らん。そして今海老役やったのは誰だ。

「……だが、僕もただ殺られるだけは性に合わない、全つつく合わない!……よって、幻魔の余った厨エネルギ二力を我が身の糧とし……ダークネスとしての力を取り戻したこの俺を!闇のデュエリストとしてのこの俺を!倒してみるのがいい……シユン

「モモ！俺の、タアアアアン!!!」

「長つたらしい茶番フェイズから流れるようにターンが回ったあー!!!?」

「《強欲で貪欲な壺》2号！デッキトップを10枚裏側で除外して、2枚ドロツツ!!」

「あんたそれ好きだな!？」

「どうせデッキ60枚だから飛ばし放題なんでしょうが……」

「まあな。墓地の《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンドの効果により、黒竜をデッキに戻して黒石を手札に加える。《闇の誘惑》を発動！2枚のカードをドロ！当然のように黒石除外」

「ハッ！何を繰り出そうが自由の身となったクリスタルウィングで無効にして、ライキリとチドリエースコンビでぶっ飛ばしてあげるわ!!」

『キユオオオツ』

「……今日、1回も成功していませんがね」

『キユオウウ……』

クリスタルさんしよげちやっただろーが、さっきのアーミタイルコースだろーが……
今回なんなん!?

「確かに。そいつの効果は並み居るシンクロモンスター群の中でも飛び抜けて強力だが……いでよ、駄作者!!」
ラディアン

『フォツフォツフォツ』

《多次元壊獣ラディアン》☆7 ATK2800

「ぎゃーっ! 出たーっ!!」

「こいつは相手モンスター1体を誘拐する事で相手フィールドに特殊召喚できる、ヌケサク鬼畜悪魔だ!!」

「おのれえ、駄作者の分際でうちのモンスターを手にかけるなんて……」

「余計な事考えてないで、さっさと更新しやがれですわヌケサク!!」

『フォツフォツフォツ。このガチモンスターは頂いていくぞ……展開の妨げになるからね』

おめーの都合かよ!? もつともらしい事言いやがって!!

「これで障害は無くなった! 相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、《聖刻龍—トフェニドラゴン》は特殊召喚ができる!」

《聖刻龍—トフェニドラゴン》☆6 ATK2100?1000

「そして魔法カード《巨龍の羽ばたき》発動! コストとして場のトフェニドラゴンを手札に戻し、魔法・罠カードを全て破壊する!!」

「あーっ!?! てめっ、こんなにやろー!!」

せつかく引いた旋風があ．．．とりあえずこれは使つとくか。

「リバーズ罠発動! 《ダメージ・ダイエツト》!! このターンのダメージを半分にする!!」

「．．．えっ?」

「お前達仲いいな。ゴドバや激流葬を警戒してたのだが両方それとか．．．特にジュンコ、お前さつき和睦してたろ．．．」

「い、いやあ。罨の引き悪くてね……まあライフ4000が基本のこつちじや便利だし」

「ぞ、そうですね。ワンキルする側は、逆にワンキルされる対策も怠らないのですよ」

『『『「えっ？」』』』』

「何も精霊ズまで総出でキョトン顔しなくても……」

ももえの理論に疑問を残しつつも、全魔法・罨がトフェニさんの帰宅により消滅。辺りの気色も失楽園から、ただの湖の麓へと戻ったのであった。

「まあいいか。魔法カード《儀式の下準備》！儀式魔法とそれに記された儀式体例の2枚をデッキから手札に加え、

《レッドアイズ・トランスマイグレーション》発動！

「で、出たあ!？」

「そう、僕はレッドアイズとひとつになる！手札のトフェニドラゴンと墓地の飛竜を儀式の贄とし、儀式召喚！《ロード・オブ・ザ・レッド》!!」

《ロード・オブ・ザ・レッド》☆8 ATK2400

でた、城之内君のネクロス……じゃなくてロード・オブ・ザ・レッド。毎回思うが、自分でレッドアイズ纏わないと気がすまんなのかこの馬鹿。

「そして儀式の贄となったトフェニドラゴンの効果！テツキから通常モンスターを攻守を0にして特殊召喚！来い、幻魔など超越せし我が魂……レッドアイズ・ブラックドラゴン《真紅眼の黒竜》よ!!」

『呼ばれて飛び出たぜ、ブツキー!!』

《真紅眼の黒竜》☆7 ATK2400?0

「あ、さっきまで無口だったのに喋り出したわね」

『シリアス展開っぽかたつたから空気読んでたんだよっ！ライキリとかと一緒にすんなっ!!』

『拙者、なんかしたっけ!?!』

『兄者エ……』

「更にこの瞬間！手札より速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動！我が元へ集え、3体の

レッドアイズ!!」

《真紅眼の黒竜》☆7 ATK2400 ×2

「分身しやがりましたわ!?!」

「けどお得意の鋼フレアメタルドラゴン炎竜は3体使用済み、ランク7を展開しようとしても大したこたはないわ!!」

まだビックアイとかいるけど……チドリはあたしの墓地参照で攻撃力上がってるから、洗脳されても大した被害でもない。ライキリも単体じやただの2600。

ブラックフェザー・ドラゴンを奪って効果を使われたら……あ、やばい?

「確かにそうだな。ランク7はエクストラに鋼炎竜のみ、このままでは展開し損だが……」

「ビックアイいねーのかよ!あたしの不安返せよ!!」

「だがこれはどうかな!2体のレッドアイズ(分身)を生贄に……来い、《The
suppression Plutonium!!」

『ククククツ。ワレ、デバン、キタ……』

《The suppression Plutonium》☆8 ATK2600

「んなつ、そいつは……」

「Plutonium効果発動！それに対し俺自身の効果も発動！まずは膨れ上がったバ火力のチドリを破壊する！喰らえ、〈断熱拳〉!!」

『グハアツ！プレイヤーからダイレクトアタックされるなんざ想定してな……』

『「チドリイ!!」』

なんかはじ〇の一步の〇堂さんばりのスマッシュ食らってチドリ吹っ飛んだーっ!?

あ、この解説通じるかな……通じないよねごめんね。

「そしてPlutoniumの効果処理だ！ジュンコの手札を宣言する……《BF―月影のカルート》!!」

「はあっ!?なんでわかんのかな……」

「ほらどうした、正解か？不正解なのか？」

「うう……正解です」

手札のカルートを公開する。あたしこの個サーチしたわけじゃないよね、インチキ？

「まあ……手札見ながらあれだけそわそわしてたら、手札誘発の効果って思いますわよね」

「ああ。しかし俺の力で、チドリが破壊されるのにも関わらずそれを発動する気配はなかった。これでまず蒼天のジェットやヴェーラーの可能性は無い。他にも何種類か考えたが……やはりカルートが一番危険だからな」

「にやつろう……」

「そうゆうわけだ。宣言したカードが手札にあったので、Piuutoの真の力が発揮される！Piuutoよ、ブラックフェザー・ドラゴンを奪いとれ！」

『ククククツ……』

なんかブラックフェザー・ドラゴンに触手っぽいもん巻き付けて、そのまま強奪していきやがった!?洗脳とかじゃないのか悪魔族!!

「つつこんでる場合じゃありませんわジュンコさん！ブラックフェザー・ドラゴンのカウンスターは5つ、このままじゃ……」

「くっ……チドリがKOされたのは残念だけど、この瞬間に効果発動！墓地から鳥獣族シンクロ体である、五月雨のソハヤを特殊召喚!!」

《A BF―五月雨のソハヤ》☆5 DEF2000

「そんな事は百も承知。伝説の竜よ、俺に力を貸せ！《ヘルモスの爪》発動!!」

「来やがりましたわ！」

「なんで毎回儀式とセットなんじゃいヘルモス！」

「真紅眼の黒竜。俺のもつとも愛するモンスターよ……我が鎧となれ、我が刃となれ
フルレッドアイズ・グラビティーション
！完全真紅眼武装!!」

SEへジャキン、ジャジャキーン!!

SE。じゃねーよ！完全にご想像にお任せします状態じゃねーかつ!!

「けどわたくしは説明したくないのでジュンコさん、地の分でなんとかお願いいたしますわ!!」

「誰がするかあ!こつちだつて願ひ下げよ!!」

『説明しよう!完全真紅眼武装とは、ロード・オブ・ザ・レッドとなつた状態で
レッドアイズ・ドラフトドラゴン・ソッド
真紅眼の黒竜剣を装備した、全身真紅眼だらけの真紅眼馬鹿究極体の姿である!!』
「おめーがすんのかよ多次元壊獣!!ウイルスの弾にすんわよ!?!」

「もう某ドーマ編の如く、カイザー様と殴り合いでもしてくるといいですわ・・・前世
が同じ人だからきつと行けます」

「フツ、そのネタは2期でやる予定だったがボツになつた!!」

「やる気だつたんかい喧☆嘩☆王!!」

くつそ、馬鹿のターンだけあつて完全にペースをもつていかれている・・・色んな
意味で。

「わざわざ説明するまでもないだろうが《真紅眼の黒竜剣》は、装備者である俺の攻撃力
を10000+墓地およびのフィールドドラゴンの数、×500ポイントアップさせる!

現在フィールドには俺とブラックフェザー・ドラゴン。墓地には……16体のドラゴン族!!」

「ファッツツツ?!」

「つまり18×500+1000=10000!!10000!よって我が攻撃力は12400ポイントとなる!!」

《ロード・オブ・ザ・レッド》ATK2400?12400

「あ、あ、あ、アーミタイルさんより上じやねーかふざけんなあ!!」

「10000ポイントの剣……どこのスピリツ○・オブ・ソードですか!!」

「○ンキンネタはもういいって言ってるでしょ!!巫○一万か?○力一万の事言ってるのか!!」

「その余裕がいつまで続くかな!ブラックフェザー・ドラゴンのモンスター効果発動!黒羽カウンターの数5×700ポイントのダメージを、さつきから地味に五月蠅いダークナイトとももえに与える!へ洗脳・ブラック・バースト!!」

「きゃあああああつ!!」

『べ○たアアアアツ!!』

ももえ LP1500?0

「モモーツ!？」

「ジュンコ……さん……」

「そんな……あたしが、あたしがブラックフェザー・ドラゴンを奪われたせいで……ん?」

闇のゲームのダメージで、ももえは倒された、のだが……こいつ、うつ伏せで倒れながら指で地面に『馬鹿』って書いてやがる……ダイイングメッセージかつ!目の前でやられたんだから知つとるつての……こっちの心配返せや!!

「……」

「大丈夫そうだから、ほつとこう」

「そんな殺生なあ!？」

「顔あげんな。死体のフリでもしてろシリアスブレイカー……」

「フツ、確かにモモのライフは尽きたが……このゲームは、あくまでお前達二人が破れるのが敗北条件。今は肉体へのダメージ程度ですむだろうな」

「ダメージ程度って……こちとらあちこち火傷まみれなんですよ!」

「(スルー) だがジュンコ、お前のライフまで0になった瞬間……二人ともカード化だからな」

「まじでっ!？」

「当然だろう。勢いでカード化しちゃった藍神君やその他大勢を開放するためのデュエルなのだから……」

その他大勢で、他にもやっちゃってたのかよこいつ。

お、おまわりさーん!

「ジュンコさん!これはボケかましてる場合ではありませんわ……セラちゃんやその他もろもろの為に絶対勝たなくては!!」

「大体ボケとんのは馬鹿かあんだけどなっ!」

「茶番は終わりだ、

「誰のせいだよー」俺はレベル8のブラックフェザー・ドラゴンとPiercedでオーバーレイ、エクシーズ召喚！現れるNo.62！銀河眼の光子竜皇！からのアーマード・エクシーズ・チェンジ！《ギヤラクシーアイズFA・フォトン・ドラゴン》！！」

《ギヤラクシーアイズFA・フォトン・ドラゴン》★8 ATK4000

「うへえ……」

「FAの効果発動！ORUをひとつ使い、表側のカード1枚……五月雨のソハヤを破壊する！この時光子竜皇を墓地に送ったため、さらに我が攻撃力は上昇する！」

《ロード・オブ・ザ・レッド》ATK12400?12900

わざわざランク8まで作って……こいつ、あたしの場を焼け野原にする気だ！

「バトルだ！行け、ギヤラクシーアイズ！ラディアンを塵に還せ！へアーマード・フォトン・ストリーム！！」

『ぎゃあああああつ！！』

「くっ……」

ジュンコ LP7500?6900

「そして俺自身で、ライキリを攻撃する！覚悟しろ!!」

『えっ、攻撃力約一万の差を相手にしろと?』

「よっしやーライキリ！逝っけえええ!!」

『いや、逝っけえ！ってなんですかジュンコ殿。逝っけえって……』

「大丈夫！あんたはうちのエースよ！一万くらいの差なんざ気合でなんとかしなさい!!」

『エース……そう、我はジュンコ殿のエース！主を勝利に導く事が我が使命!』

「そうよ。あの馬鹿にあんたの力、みせたげなさい!!」

『承知！うおおおおっ！ブツキー殿覚悟おおおおっ!!』

「胆の座った精霊だ……来るがいい!!」

こうして、ライキリ対完全真紅眼馬鹿の最後の一騎討ちが幕を開ける……闘え、ライキリ。負けるな、ライキリ。彼女達の運命は、お前の刀にかかっている！

次回 最終羽『ライキリ、曇天に死す』

「デュエルスタンバイ！ですわ」

「最後の最後で妙なナレーション入れんなっ!!？」

最終羽 あたしらの戦いはこれからだっ！的な

前回のあらすじ。

ライキリ、曇天に死す。

『それ今回のサブタイ（仮）だったやつ、ぎゃあああああつっ?!』

「やっぱ駄目かあ！きゃあああああつ!!」

ジュンコLP5850?600

「驟雨のライキリ、撃破！」

くつ、なんか某RPGの剣士っぽくキメやがって……ってゆうか本気で痛いわ！
10500ダメージって、直撃だったら即死するわ!!まああたしらを保健室送りにする
気かコノヤロー、看病イベント発生させんぞ!!

「ジュンコさん、余裕かましてる場合じゃありませんわよ!？」

「かましてねーよっ!」

「お前の場は壊滅、ライフはわずか600、手札はカルート1枚のみ。この状況で
(ロード・オブ・ザ・レッド)

俺 の効果を掻い潜り、耐え忍ぶことができるか?俺はこれでターンエンドだ
!!」

確かに絶対絶命ですけど、向うはついに手札を使い切った……これをこうりやくすれば勝ち目はある。いや、むしろ今しかない!

「あたしのターン、ドロ―! 《闇の誘惑》発動! 2枚ドロ―!!」

この2枚……いや、まだチャンスはある!

「……カルートを除外するわ」

「それで、逆転のカードは引けたのか?」

「……おいでっ、ブラック・フェザー 《B F ―疾風のゲイル》!」

『クルツ!』

《BF―疾風のゲイル》☆3 ATK1300

追い詰められた時こそ、頼りになる相棒疾風のゲイル。

まあ精神論だけどね、効果使ったら破壊されちゃうし……

「ここでゲイルですか、確かに元は制限を喰らった程の強カードですが……」

「この状況を打破するには役者不足だな……万策尽きたか」

『クルツクルツ!!』

「なめんなこらーっ」だってさ、カードを1枚セットしてターンエンドよ」

ジュンコ H0 LP600

《BF―疾風のゲイル》(攻)

セットカード

「俺のターン、ドロー!……フン、今は必要無いカードだな。バトルだ!我が黒竜剣

にて終止符を打とう!!」

馬鹿がゲイルに向かってつっこんで来る、自分の勝利を信じて・・・けどっ!

「畏発動! 《ゴットバードアタック》!!」

「出ました! ジュンコさんの十八番!!」

本当はもつと前に引きたかったけどしやーない。

ごめんねゲイル・・・頼んだわよ!!

「ゲイルを生贄に発動、ロード・オブ・ザ・レッドとギャラクシーアイズを破壊する! へブ

ラック・スクラッチン!!」

「クツ、ぐおおおおつ!!?」

ゲイルが金色のドラゴンボールみたいはオーラのものを纏って、その身と引き換えに2体の上級モンスターを破壊する。

武装が砕けた馬鹿は、ダークネスの姿に戻った。

「この土壇場でゴットバードアタック、流石だと言うべきか……墓地の《伝説の黒石》ブラック・オブ・レジェンドの効果発動、黒竜をデッキに戻し黒石を手札へ加え、ターンエンドだ」

ダークネス H1 LP6200

あれ、さつき誘惑……って2枚目か。

すっかり残りの1枚なんだろう。あいつが手札を腐らせるなんて、珍しいこともあるわね……

「これで互いのリソースはほぼ0、こつからは完全に引きゲーですわね。ジュンコさんのデッキはほぼハイランダー、解決札が引けるかどうか……」

「大丈夫、あたしや悪運だけは強いからね！あたしのターン！」

引いたカードは……おっしや！理想的な1枚！

「魔法カード《ダーク・バースト》！墓地から闇属性で攻撃力が1500以下の……」

極北のブリザードを手札に加える!そして召喚!!その効(アースクコンコン) 果により墓地の白夜のグラ
ディウスを特殊召喚!」

『クルツ!』

《BF—極北のブリザード》☆2 ATK1200

《BF—白夜のグラディウス》☆3 ATK800

「レベル3のグラディウスにレベル2のブリザードをチューニング!黒き疾風よ、三度、
継を紡ぐ追風となれ!」アサルト ブラック・フェザー 《A B F—五月雨のソハヤ》!!」

『……サンゴウダツ』

《A B F—五月雨のソハヤ》☆ ATK1500

「三体目っ!?!完全にシンクロに特化していたのか……」

「ソハヤの効果!甦れ、驟雨のライキリ!!」

『グフツ……休ませる気が微塵も無いですな』

《A BF—驟雨のライキリ》☆7 ATK2600

先程一万の攻撃力差に破れ去ったあたしのエース、驟雨のライキリ。

そいつが包帯ぐるぐる巻きで蘇る・・・どこで巻いたそれ。

「はっ？頼りにしてる証っしょ。なんならチドリでよかったのよこの場合」

『ぐう・・・たさえミイラになつてもチドリには譲れん、ジュンコ殿のエースは拙者だ！』

「その粹よ！まあ・・・シンクロ素材にすんだけど。BFを素材としたソハヤはチューナーとして扱う！レベル7のライキリにソハヤをチューニング！」

『知ってたし・・・涙など出ぬしっ！』

「合計レベルは・・・12！」

「漆黒の翼よ！雷の力宿し、鮮烈にとどろけ！シンクロ召喚！切り裂け！《A BF—神立のオニマル》!!」

『うおおおおおっ!!出番があつたぞおおおっ!!』

《A BF—神立のオニマル》☆12 ATK3000

「普段チドリで充分ですものね、不満も溜まりますわね」

おう、それ言うな。秘密兵器って事にしといて、こいつ喧しいから。

「神立のオニマル、BFの最強モンスター、シンクロモンスターのみを素材にした時攻撃力が3000ポイントアップする・・・そうか」

「ソハヤの効果もひとつ!墓地に送られたターン、墓地の他のソハヤを除外して特殊召喚!」

《A BF—五月雨のソハヤ》ATK1500

「バトル!ソハヤであんたにダイレクトアタック!!」

「クツ・・・」

ダークネス LP6200?4700

「これで終わりよ!神立のオニマルで・・・」

「まだまだ！手札の《冥府の使者ゴーズ》の効果発動！ダイレクトアタックを受けた時、場にカードがない時特殊召喚される！我を守れ、ゴーズ！カイエン！」

『はあつつ!!』

《冥府の使者ゴーズ》☆7 DEF2500

《カイエントークン》☆7 DEF1500

冥府の使者ゴーズ、そんなカードを握っていたなんて・・・流石はあたしらの師匠なだけある。追い詰めたと思ったのに、まだ勝ちが見えない。

「まったく、そろそろやられなさいよ・・・このデュエル開始したのいつたい何か月前だと思ってるんだ！いい加減沈めよ、沈めえ!!」

「どここのファンサービスですか?!とゆうかメタい!!」

「言ったらう、俺は簡単には沈まないと！たとえ読者が飽き飽きしてきても、俺は最後まであがき続ける!!」

「だったら、真つ正面から完膚無きまで叩き潰す！いつけえオニマル！冥府の使者ゴーズを攻撃！へサンダーボルト・フラッシュ!!」

『ぐははははは！くたばりやがれえええええっ!!』

やたらテンションの高いオニマルサンが無口のゴーズを破壊する。ランク7の素材にされたら厄介だし、残すのはカイエンで正解なハズ……

「すまないな、助かったぞゴーズ……ジュンコ、お前のライフはわずか600。攻撃表示のソハヤを2100以上の攻撃力で突けばしまいだ、残念だったな!」

「残念なのはあんたの思考回路よ、あたしがこのままターン譲るわけじゃないでしょがっ!!」
『ぬぬっ、他にやれることなんざあったか?』

「神立のオニマル、効果発動!墓地のBFを1体選び、レベルを同じにする!ハルマツタ
ンと同じレベル2へ変更!」

『えっ?』

《神立のオニマル》☆12?2

「そしてA BFの共通効果、BFを素材にしているからこいつはチューナーとして扱
う!」

『えっ?』

「レベル5、五月雨のソハヤにレベル2となった神立のオニマルをチューニング!! 黒き旋風よ! 天空へ翔けあがる翼となれ!!」

『ああああつ! せっかく場に出れたとゆうのにいいいい!!』

「シンクロ召喚! 《BF—アーマード・ウイング》!!」

『・・・ツツ!!』

《BF—アーマード・ウイング》☆7 DEF2000

「元祖BFの切り札・・・まさかオニマルを犠牲にしてまで繰り出してくるとはな」

「ってゆうか、レベル変動効果とか完全に忘れてましたわ。せっかくのレベル12シンクロなのだからもつと効果盛っても良さそうだな、とか思ったらそれですか・・・」

まあ、正直出しやすさの割りに合わないっっちゃ合わないと感じる時もあるけど・・・
こーやって色んなシンクロに繋がられるから悪くはないわよ、うん。

「あたしはこれでターンエンド。さあ、バトルで無敵のこのコをどう突破するのかしら？」

「そう言う割りにはちやつかり守備、無効化対策ですわねわかります」

ジュンコ H O L P 6 0 0

《BF—アーマード・ウイング》(守)

「いいだろう。その自信、ぶち壊してくれる!俺のターン!……チューナーモンスター、
《ガード・オブ・フレムベル》召喚!」
「げげっ!」

《ガード・オブ・フレムベル》☆1 ATK100

「レベル7のカイエントークンにガード・オブ・フレムベルをチューニング!王者の咆哮、
今天地を揺るがす。唯一無二なる覇者の力をその身に刻むがいい!シンクロ召喚!
荒ぶる魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト》!!」

『グオオオオウ!!』

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト》☆8 ATK3000

「おまつ、そこは空気読んで元祖にしなさいよ元祖に！」

「空気読まずクリスタル・ウィングとか繰り出したお前に、言われる筋合いは無い！スカークライトの効果発動！特殊召喚された効果モンスターを全て破壊し、その数×500のダメージを与える！へアブソリュート・パワー・フレイム！！」

「きゃあああああっ?!」

ジュンコ LP6000?1000

「せっかくのアーマード・ウィングが丸焼きにつ！ソハヤは使わずオニマルだけのがマシでしたわ！」

「結果論じゃい！ゴーズ来るとか思わんでしようがああデッキで!!」

「遺言はそれでいいのか・・・バトル！スカークライトのダイレクトアタック、へ灼熱のクリムゾン・ヘル・バーニング！！」

「なんのつ、墓地の《光の護封霊剣》を除外し効果発動！このターンのダイレクトアタックを封じるわ!!」

地面から無数の光剣が出現し、スカーライトの炎をせき止める。
いやあくくつそ暑そうだわ絶対食らいたくない。

「そのカードはもしや・・・」

「お察しの通り。ももえと同じく最初の《手札抹殺》で落とされた最後の1枚よ。《ダメージ・ダイエツト》といいこれといい・・・どんだけよ」

「そこは照れずに、「どんだけ仲良しなのかしら、あたし達ツツ」と、言ってくれば・・・」
「喧しいわっ!黙って死体してろあんたは!!」

「ふふっ・・・ターン終了だ」

ダークネス H0 LP4700

《レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト》(攻)

「あたしの、ターン!《貪欲な壺》発動!墓地のゴウフウ、ブリザード、ゲイル、ソハヤ、クリスタルウイングをデッキに戻しシヤツフル・・・2枚ドロ!!しやあつ!《死者蘇生》発動!!かえつといで、《A BF―涙雨のチドリ》!!」

『姐さんっ！信じてましたぜっつ!!』

『解せぬ』

いや、ライキリ単体だとバナラだしね？大人しく寝てるよ包帯ぐるぐる巻き。それとも過労死したいのかオメーは。

「チドリは墓地のBFの数×300ポイント攻撃力が上がる脳筋、なんやかんやあつて現在墓地には 9体のBF！よって攻撃力は5300よ!!」

死ぬ程暇な人は最初から数えてみてね、駄作者のことだから多少く．．．ずれてる気もする。

『んな適当なあつ?!』

《A BF 涙雨のチドリ》☆7 ATK2600?5300

「さあ、アーマード・ウィングの敵よ！スカークライトにチドリで攻撃！雷鳴の一撃．．．

《ライトニング・スラッシュ》!!」

『チエストオオツ!!』

『ガツ、グガアアアツ!?!』

ダークネス LP4700?2400

流石王者の魂さんだけあって刀と拳で何度かやり合つてはいたが……まあ攻撃力の差は歴然、ルールには逆らえずチドリが勝利しました。

「クソツ、ああすればこうする奴め……すまん、守れなかった」

「どこのグレイ〇スの主人公ですか貴方は……」

「あ、やっぱ最後までネタはぶちこんでくるのね。カードを1枚セットして終了よ」

ジュンコ HO LP100

《A BF―涙雨のチドリ》(攻5300)

「俺のターン!……魔法カード《※アカシック・レコード》を発動!カードを2枚ド

ローし、それらがデュエル中に使用したものであれば除外する！2枚ドロップ!!」

「え、あんなカードあったっけ欲しい。つかデュエル中に使用したものであればって、またテキストがガバガバね」

「確か……ヘル電波様でしたっけ使ったの、原作オリカって奴ですわ」

ああ……あの人(?)も結構無茶やってたわね、つかもうこつち馴染み過ぎて原作知識(笑)とか曖昧だわあたしや。

「……フン、そろそろ俺も限界が近いな。2枚とも新たなカードではあるが、ドロール力が随分と落ちている……あれだけ無茶をすれば当然だな」

普段無茶苦茶って自覚はあんのね。

つかドロール力が落ちるってなんだよ、減るもんなの? やっぱ無茶苦茶すつと減るものなそれ。

「だがまだだ。もつと、もつと……極限まで行くぞ、ジュンコ! モンスターをセットし、魔法カード《ブラック・ホール》を発動! 場の全モンスターを破壊する!!」

『うわあああああつ!電光のごとく逃げっ……て光すら呑み込む程だから駄目かあああ
あつ!!?』

ここにきて全体除去!?!なりふりかまっていられないってか……あたしの伏せはモ
ンスターを守るカードじゃない、悪いわねチドリ。

「チドリがボツシユートした事により、墓地から鳥獣シンクロ1体を復活させる!……
出番がほしけりゃくれてやる!」《A B F―神立のオニマル》!!」

『わっはっはっはっは!まさかの再登場!!』

『解せぬう……』

《A B F―神立のオニマル》☆12 ATK3000

「セットモンスターは黒ブラック・メタル・ドラゴン 鋼 竜 その効果により、デツキから《真紅眼の闇竜》を

手札に加える!」

「レダム……. ダークネスメタルじゃない!?!」

「どうゆう事でしょうか…….」

「言つたろう。流石に俺でも限界が来ると……先の《強欲で貪欲な壺》の時点でデツキから除外してしまったのだ。嘆かわしい事にな」

「……確かに強食はデツキのキーパーツをすつ飛ばすリスクがある。だからと言つてあんにやるが肝心なカードを失うとは本当に珍しい……」

「だがダークネスメタルまでの進化には至らぬとも、この力に耐えきれるか？ 《思い出のブランコ》を発動！ 蘇れ我が魂、レッドアイズ・ブラックドラゴン《真紅眼の黒竜》!!」

『どこまでも付き合つたるよっ!!』

《真紅眼の黒竜》 ☆7 ATK2400

「……ああ。そして真紅眼の黒竜を生贄に、《真紅眼の闇竜》へと進化する!!」
『はああああつ!!』

最後の最後に表れたのは、真紅眼の正当進化形態。

正直……幻魔よりよっぽどこいつのが怖い、圧が違う。あいつのためについて意思がビシビシ伝わってくる。

「真紅眼の闇竜の攻撃力は、墓地のドラゴン族モンスターの数×300ポイントアップする。現在、俺の墓地には18体のドラゴン!よって攻撃力は……」

《真紅眼の闇竜》☆9 ATK2400?7800

「こつ、攻撃力 7800。黒竜剣程ではないですがこれはちよつと……」

「バトル!神立のオニマルを焼き払え!へダークネス・ギガ・フレイム!!」

……多分、あいつの最後の全力。そして彼女の最後の全力。

あたしは……ごめんね、トーヤ。

「リバースカード……オープン!《ファイナル・ギアス》!!」

「ええっ!?!」

「レベル7以上のモンスターが、お互いに墓地へ送られたターンに発動。互いの墓地から……全モンスターを除外する!!」

「馬鹿なっ……そんな発動条件の重いカードを何故……」

「……除外した内から魔法使いモンスターを特殊召喚できるけど、あたしはそれを使

用しない。そして墓地のドラゴン族が消滅した事により、闇竜の攻撃力はダウンする……」

『ううっ、そんな、私が……』

《真紅眼の闇竜》 ATK 7800? 2400

「迎え討て、神立のオニマル！へサンダーボルト・フラップ〜!!」

「ぐわあああああつ!!」

『うわあああああつ!!』

ダークネス LP 1800

「あたしのタアーン！これで終わりよ。オニマルであんたに、ダイレクトアタック!!」

ダークネス LP 1800? 0

WIN ジュンコ

《クルツク》

「あたしの、あたしらの勝ちだ!!」

「ジュンコさーん! 素敵でしたわーっ!!」

「ぎゃーっ!?! ひつつくな痛い痛い傷に響く!!」

モモにダイビングハグされて、ドタバタの末に地面に叩き伏せるの図。

「アハハ、元気だね君達は・・・」

「うおっ!?! 立ち上がってきやがった」

「貴方も大概、ゴキ〇リ並みの生命力ですわね・・・」

馬鹿は死んでも治らないから生命力もすぐ……あれっ、こいつなんか体透けてきてね？半透明じゃね？

「おかしいですわね、わたくしダメージ受けすぎて目でも霞んでいるんでしょうか」

「ああ、あたしも結構派手なの貰ったからそのせいか……って絶対違うよねこれ、明らかにうつつすらしてきてるよねこれ」

「いやいや何言ってるんだい君達イ。これはカードへ封印（笑）をかけたデュエルだったろ忘れたのかい？負けた僕がそうなるのは必然だろう」

「えっ、あれガチだったん!？」

「緊迫感出すだけのちよつとした演出だ。みたいな感じだと思ってましたわ!」

え、じゃああたしは、彼を……

「待った待ったジュンコ君！急にしよんぼりした顔しないでくれ調子狂うなあ……」

「だ、だつてさあ!」

「ド―せ封印されるなら、最後に君達と滅茶苦茶やりたかっただけなんだよ本当に。それにあれだ、僕くらいになれば自力で脱出くらいできるから、きつと!」

「トーヤならやりそうで恐いです」

「根拠無さすぎだろ、馬鹿・・・」

「アツハツハツハ!・・・絶対実行してみせる。僕の現世の願いは君達と明日香の幸福・・・明日香や君達を悲しませるつもりはこれつつっつぽっつも無いからね!!」

「だれが悲しむかあ!!」

「うん・・・そろそろ限界のようだ。そんなわけで、明日香達にはまた社長にこき使われてる設定にしといてくれ、PDAとか渡すからメール代返しといて!」

「無茶振りだな!」

「あともう一つ。僕がカード化した連中全員復活するハズだから・・・多分めっちゃ君達狙われるから注意してくれ!!」

「えーっ!!?」

「いやあく君達に面倒飛び火しないように、裏で色々頑張ってたんだけどさあく・・・これもセラちゃんのためだ、頑張ってくれたまえ!!」

「ふっ、ふざけんああああああっ!!」

こうして、師匠は一枚のカードへすっぽり収まった。

封印されてもウインクとかしてきたら破り捨ててやろうかと思つたが、カードの絵柄

はダークネスの仮面だったので……とりあえず、あたしが色々責任もって預かることにした。

それからは疲労困憊でぶつ倒れ。とりまKC社に救助を求めて、二人？いや、三人仲良く気絶することにした……

《イラっと来るぜ》

「ジユンコさん、今屋上とか人気の無い場所ではよげてると思うので……探し出して、励ましてあげてくれませんか？」

突然、こんな内容のメールが届いた。

差出人は勿論、浜口ももえだ。

幻魔を借りていった? 吹雪さんを追いかけていった二人は、1週間ぶりに帰ってきたと思えば……ジュンコの奴、何かあつたらしい。

「P. S ☆人気の無い場所……つまり、チャンスですわよ、チャンス!!」

……いや、励まして欲しいんじゃないのかよ。

兎も角、彼女が一人でよく黄昏るらしいリスト（ももえ作）を参考に方々を探してみ
たが、見つからない。

残る場所はここ、校舎の屋上だが……見つけた、後ろ姿で一発だぜ!
柵もないのにあんな淵に座って、危ない奴だなあ。

《クリクリ?》

「こんにやろう……何が「僕の願いは君達の幸福だ

」だよ！格好つけてんな！昔あたしが、あたし達がどんな想いをしてたか教えてやろーかコラ！……馬鹿」

「おーい、ジュンコ……誰と話してんだ？」

やばっ、師匠カードに八つ当りしてんの視られた!?

「な、なんでもないわよ！それより十代……なんでここに？」

一人になりたいからわざわざこんな場所に来たのに、ああ……屋上は割と人来やすかったわね。失敗した。

「なんでつて、うくん……帰ってきてるつて聞いて、探したんだよ。メールしても返事なかったしな」

「ふくん……で、なんか用？」

「っ、冷たいな!?!久しぶりに会ったのによ……」

そうかな、あたしやいつもこんな感じじゃなかったっけ？

「・・・やっぱ機嫌わりいな。なんかあったか？」

「別に、ただ期末試験の結果やばかっただけよ」

「ああ、病院で受けさせて貰ったんだっけ」

「なんやかんやで闇のデュエルで負傷した私達は、KC社の人に近場の病院連れ込まれ、またもや入院生活。」

「なんだかんだ社長に進級試験は公欠つてことにしてもらえ、ベットの上でテストを受けたのであった、勉強してないから赤点ギリギリだったけど。」

「なお実技まで病室だった模様、卓上デュエルとか久しぶりにやったわ。」

「つて、絶対違うよなそれ。いくら俺でも騙されねえから」

「・・・」

「そ、そうだ！隼人がI2社にカードデザイナーとして雇われることになったんだ、凄くないか!？」

「知ってる、会長さんから聞いたもの。頑張れメールしといたわ」

「え、え〜とお．．．か、カイザーの卒業デュエルの対戦相手に指名されたんだ！それで、引き分けだったんだよなあ〜惜しかったなあ〜!!」

「知ってる、病院で中継見せてくれたもの。モモと二人で見てたわ。格好よかつたわよ」
「お、おう．．．」

直接観れなかったのが凄く残念。まあ翔君の奴にバッチし録画もさせたからそれでよしかな？

一応言つとくと先輩はノーマル状態だった。

スポンサーの人とか観戦してるからか、お願いだからいつもの兄さんでいて!と、翔君が熱烈懇願したらしい。どうやらバカイザーは一定の条件下で発現するらしく、この1週間は穏便だったのかなんとか。

「やっぱ変だぜジュンコ、普段のお前なら俺に格好いいとか言わねえもん」

そうだったっけ? 思った事を素直に言っただけなんだけど、普段から似たようなもんじゃん?

「なあ、なんかあつたんだろ」

「別に……」

「そんなに話したくないなら、話さなくても良いんだけどよ……よしわかった、デュエルしようぜ!」

「なんでよ!なんでこの空気からデュエルする流れになんのよ!!」

「うおつ、地味に本日一発目……」

「普通に言葉探したり空気読んで去るなりなんなりあんでしょーが!あんたは馬鹿か?馬鹿なのか!」

「おうつ、俺は馬鹿だ!俺はジュンコの気持ちなんざちつともわからねえ……けど、デュエルを通してぶつかり合えば、きつと悩みも吹っ飛ぶ!なんとかなる!!」

「曖昧すぎよ!!」

はあく。この単純熱烈天然決闘馬鹿は……けど、十代なりに心配してくれたってコトなのかな。それはそれで……う、嬉しいかも。

「いいわよ、相手になったげる。けど、今のあたしは虫の居どころが悪いから……派

手に吹っ飛ばされないように、せいぜいがんばりなさい！」

「やっぱ不機嫌なんじゃねーか!? ……俺はいつでも全力全開だ！お前に勝って……あ、これは駄目なんだっけか」

「ん？なんのこつちやよ」

「な、なんでもない！……ちえ、生殺しも大概だぜ」

「??？」

「（あくあ、カイザーとお前とのデート権かけて勝負してた！なんて、絶対言えないよなあ。結局引き分けたし、次回に持ち越したし……けどあくまでデート権だけだし……デュエルが終わったら……思い切って言っちゃおうか！）」

なんかボソツと言っていてど……まいつか。とりまディスクスタンプってつと、アクフア仕様小型だと便利ねえ。

「見つけたぞ、お前が枕田ジュンコか」

十代との久しぶりのデート、もといデュエルをおっぱじめようとしたその時だった。

なんかその辺の空間から、なんかアレなバイク的なアレに乗って、アレな仮面つけた、いかにも不審者って感じのアレな人が突然現れた。

・・・あれ、Dホイールって奴? なして? うちGXよ?

「な、なんだお前は! どっから出てきやがった!!」

「フン、遊城十代か。我が名は・・・パラドックス、時の番人」

「パラドックス・・・時の番人?」

えーっ、なんか某イリアステルな方来ちやったーっ!? 滅四星? の1角飛んで来ちやっ
たんですけど・・・どうなってんのよこれ!!

「この時代」のお前には用は無い、私の狙いはお前だ・・・枕田ジュンコ! ダークネ
スの福音!!」

「何よダークネスの福音って、厨二か! まるで意味がわからんわ!!」

「以前あの男・・・ダークネスには不覚をとったが、私が開放されたということは、も
うあやつはいないのだろう・・・」

「????」

私が解放て……あーっ！馬鹿が言つてた、めっちゃ狙われるってこれ?! あんにやろイリアステルにも襲われてたんかい、どんだけよ!!

「あとは貴様達、ダークネスの福音さえ抹殺すれば、未来は救われる……恨みは無いが消えてもらうぞ」

「何言つてんだかさっぱりわかんねえが……ジュンコと俺の仲を邪魔しようつてんだ、そっちこそぶっ飛ぶ覚悟はできてんだろうな!!」

「いやいや、不味いでしょこれ。本編終了前に十代とパラさん戦わせちゃ駄目つしよこれ。狙いはあたし達のようにだし、かくなる上は……」

「いるんでしょ……ももえもくん！」

「はいっ、呼ばれたので飛び出ましたわっ！」

「なっ?! 浜口ももえだと……今、どこから出現した!!」

「おお、相変わらず神出鬼没な奴だぜ」

異空間から出現するイリアステルもビックリの神出鬼没、アカデミアの秘密兵器もも

えもん。やはり出歯亀する気満々だったか・・・十代がやたら気を使ってくるからおかしいと思ったのよ。うん・・・わかってたんだからねっ!

「まあ!わたくしはただただ善意で、ジユンコさんを励ませるのは十代様だけだろうな
〜って」

「はいはい・・・とりま、あたしらがやるべき事はわかるわね!」

「はい!テツテテテ〜、Dホイール〜(ダミ声)」

流石はモモ!これさえ使えばこの場所から遠ざかりながらパラさんを迎撃も可能
!〜って・・・

「待たんかーい!まずどっから出した!とかそれ以前に、なんでDホイあるんじゃーっ
!!」

「馬鹿が社長にあと2回勝った末の報酬らしいですわ!わたくし達にジェット機はアレ
だから「デュエルできるバイクとかどうかな?」って。ちゃんとブラック・バードと
○ヤーク号そっくりにできてますわね・・・KCの技術力は世界一イイ」

「シャー○号はまずDホイじゃなくね!?鮫さんの原チャ感覚じゃなかった大丈夫?!」

「すっげー！これ乗りながらデュエルできるのか!!？」

「この時代にDホイールが存在しているだと……やはり貴様達は生かしてはおけん!!」

「ほらーっ、あんたが余計なもん出したから余計な反応が生れてんじゃん！パラさんすげー怒ってんじゃん！大体ここ屋上だろーがバイクでどーやって逃亡すんのよっ!!」

「そんなもの……フライングデュエル・アクセラレーションするに決まっていますわ！大丈夫、ジュンコさんならできます!!」

「転☆倒☆王になるわっ！っーかそもそも死ぬわっ!!」

「茶番はもうよいか

……このまま塵にしてくれてもよいのだぞ」

やべっ、いつものやりとり通常運転してたらパラさんがイライラMAX！十代を巻き込むわけには……

「こーなつたらヤケよ……十代！あたしらちよっくら、ダイビング・デュエルの旅に出るからー！」

「えっ? おつ、おう……」

「また新学期に逢いましょう十代様……多分!!」

「雑だなおい!」

そんなわけでもちやっかりバイクに乗り込みメット装備までを済ませます。

大丈夫、前世じゃ師匠とバリバリ単車で走ってたし……勝手は一緒よ一緒!

あれっ、モモはあたしらどっちかの後ろに座ってだけな気がすっ? ま、いつか!!

「逝くわよモモオ! 地の果てまでも!!」

「屋上な上に辺りは海だらけですけどね! まあなんとかなります!!」

「まじか!? こっから飛ぶのかお前達、ツツコミどころが多すぎてついていけねえぞ!!」

「それがあたしらの生き様よ、そしてあんたが言うな……さあ、ついて来なさいパ
ラドックスとやら!」

「正々堂々、(フ) ライディング・デュエルでお相手してあげますわ!!」

「いいだろう……(フ) ライディングでこの私に挑んだことを、後悔しながら逝くが
いい!!」

「あんたもそれでいいのか？ かつ飛ぶ気満々なのかよ!?」

細けえこたあもういいわ。もうライディングにワクワクしちやってんのよあたしや

!

「さあ、派手にぶっ飛ぶわよ！」

「お供しますわ、どこまでも！」

「否、貴様達の命運はここで尽きるのだ!!」

「[[ライディング・デュエル！ アクセラレーション!!]]」

「三人、同時に、（屋上から）飛んだーっ!?」

終
わ
り。
。

第3章 不死鳥君の切望

Next 0羽 プロローグじゃない、プロだ。

「見つけたドン！あんたが噂の「魔王」様ザウルス？」

「えっ？」

それは、突然の邂逅だった。

彼女……見た目だけは中学生の藍神セラ（半分偽名）は新学期最初のこの日、なにかんやで気に入ってしまった友人達、遊城十代らレッド寮の面々に久しぶりの挨拶向かおうと女子寮を出立した。

一応、天上院明日香にも声をかけようと思いはしたが、どうせ十代君の近くに潜んでいるでしょう。

そう考えやめといた。

それはともあれオシリスレッド寮に向かう道中で突然みたこともない、語尾が意味不明の筋肉マンに絡まれたのだ。

黄色い制服を着ているからイエローの新入生だろうか？

「ひ、人違いじゃないでしょうか．．．．．なんですか「魔王」って」

「いいや、あんたに間違いはないドン。この前の学園祭の動画でやたらピックアップされてた人ザウルス！「魔王セラ様」．．．．いや、藍神セラ先輩！」

「ええ．．．あの学園祭デユエル、動画上がってるんですか、肖像権侵害で訴えても良いですか？」

とゆうか姐ジさんンライディング冒険中（十代談）で居ないから、もしかしてツツコミ私一人で回すんですか？

そんな台詞を吐きそうになったが、相手は新入生で理解できないだろうしやめておいた。

とゆうか自分も兄であるディ藍イー神ヴァを、無理矢理色んなコ〇プレさせたものを無断で加工、合成し、百済木とゆう男と編集を重ね某動画サイトに投稿、それによる広告収入で生計を立てているので肖像権については何も言えなかつたりする。

「兎に角、カイザーやキング不在の今、魔王であるあんたを倒せば俺が一躍この学園のトップになれるドン！さあ、デユエルを受けるザウルス!!」

「ハツ、入学初日に我らが「魔王」セラ様に楯突こうなどは」

「随分思い上がった一年だな……」

「餓鬼が凶に乗るなよ？ 貴様の相手など我らがセラ様親衛隊で充分だ！」

草むらからなんだか見おぼえのある、レッドやイエローの生徒達が現れセラを庇う。まあ問題はそんな事ではなく

「あの、貴方達何時からいたんですか？ 私一人でレッド寮に向かったはずなんですけどなあ……」

彼女はその合法(?)ロリの容姿と「魔王」と揶揄されるモンスターセンスとのギャップからか、あの明日香並に学園内でのファンが多いのだが……何故かこんなばかりである。

「ハン、剣山をなめない方がいいぜ先輩方よお！」

「ブルーに入れなかった腹いせドン！」といいながら、送迎の船上で行ったデュエルは

20人抜きー！」

「入学初日にして我ら一年の筆頭格となった、叩き上げよお!!」

ザウルス君の後ろからも、なんだか取り巻きつぽいのが多数出現。

どうやら彼は剣山と言う名前らしい・・・それよりこの学園の生徒達はなぜ、草むらだったり木の上からだったり突然現れるのか、新入生もこんなばかりでこの先大丈夫なのだろうか。

そんな事を考える魔王様であつた。

「だから誰が魔王様ですかっ!とゆうかさっからナレーションやつてるの誰ですか鬱陶しい!!」

《ド☆ン》

「バトルドン! 《究極伝導恐獣》アルティメットコンダクターティランで、《流星方界機デューザ》を攻撃イイ!!」

「きゃあああああつ!!」

セラLP2000?100

「セラ様アアアア!」

「馬鹿なつ、セラ様がここまで追い詰められるだど・・・」

「かの伝説の、開闢の使者より緩い召喚条件で攻撃力3500・・・インチキ効果も大概にしろ!!」

結局その場を納めるのが面倒になったセラ様はなんだかんだで剣山君とデュエルを行ったが、想像以上の実力に圧倒されていた。

「ギリギリ仕止め切れなかったザウルス・・・俺はこれで、ターンエンドン!」
ターン5

剣山 H1 LP3200

《ドラゴニック D》ダイヤグラム (F)ファイルド

《エヴォルカイザー・ドルカ》(攻)オーバーレイユニット ORU1

《究極伝導恐獣》(攻)
アルティメットコンダクターティラノ

セラ H3 LP100

「みたか先輩共お！これが剣山の實力よ!!」

「最新の超強力エクシーズモンスター・エヴォルカイザーシリーズに加え、あのプロデュ
エリスト・ダイナソー竜崎すらもつてない、恐竜族最強レアカード《究極伝導恐獣》の
所持者!!」

「それに比べ何が魔王だよ、そっちは気味悪いモンスター方界の地味なバーン効果が1発
通っただけじゃねーか!」

力の差は圧倒的、はたから見ればそうであろう・・・だがインチキ効果祭りと化し
た恐竜に対し、意味☆不明なデッキ構築でここまで対抗するセラちゃんもまた、確かな
実力者であるのだが・・・

「そうゆう言い方は辞めるザウルス!!自分で戦っているわけでもないのに・・・」
「「スツスンマセン!!」」

「(けど、「魔王」って崇められるくらいだからどんな化け物気味た強さかと期待してたのに……少し拍子抜けドン)」

「御託は……これくらいでよろしいですか?」

「えっ?」

「魔王」だとかセラ様とか……イチイチイチ面倒だから、この際派手にやられてこの不本意な称号を返上しようかと思いましたが……私なら兎も角、兄さんから預かった大切な方界モンスターまで侮辱するなんて……気が変わりました。私の、ターン!!」

「ちよっ……俺が言った訳じゃないドン!」

「魔法カード《悪夢再び》!墓地の守備0の闇属性モンスター、《方界胤ヴィジャム》と《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》を手札に戻す!!そして手札のヴィジャム、《方界波動》、《方界帝ヴァルカン・ドラグニー》を公開し特殊召喚!光を喰らい、世を眩ませ!!《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》!!」

『ヴォオオオオツ!!』

《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》☆10 ATK3000

「学園祭で使ってた……こっつ、こいつはおっかないドン！」

「けっ、けど攻撃力3000じゃねーか！剣山の究極伝導恐獣には届かないぜ！」

暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ、異質な方界モンスターの中でも更に異質な、神を冠する最上級の悪魔である。

闇のデュエルでもないのに相手プレイヤーに与えるダメージがヤバいので、兄には

藍神君

「なるべく使わない方向で」

と念を押されているのだが……頭に血が昇って忘れてるようだ。

「なら届かせるだけ、魔法カード《方界波動》。クリムゾン・ノヴァの攻撃力を倍にして、貴方自慢の究極伝導恐獣の攻撃力を半分にする」

《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ》 ATK3000?6000

《究極伝導恐獣》 ATK3500?1750

「あ、あの……」

「さあクリムゾン・ノヴァ、あの恐竜さん達を絶滅させてあげなさい！究極伝導恐獣に攻撃!!」

「ぐわあああああつ!!」

剣山LP3200?—1050

まるで隕石のような火力で最強の恐竜すら蒸発、あーこれは絶滅しますわ……

「「ケツ、ケンザンツツ!!」」

「まだです！クリムゾン・ノヴァは相手モンスターを破壊した時、もう一度モンスターに攻撃でき、自分の攻撃力以下のモンスター効果を受け付けけない！エヴォルカイザー・ドルカを攻撃!!」

「ぎゃあああああつ!!」

剣山LP—1050?—4650

WIN セラ様

「追討ちかけて2回キルしたーっ!？」

「な、なんだよあの先輩……見た目可愛いのに反しておっかなさ過ぎるだろ！」

「にっ……逃げろーっ!!」

剣山君の取り巻き?達は、セラ様のあまりのおっかなさに、白目を剥いて泡吹かして
る剣山君を置いて逃げ帰ってしまった。まったく、白状なコ達だねえ。

「はあく……また○^ヤっちやいました。あ、貴方達」

「ハッ、ハイ!？」

「悪いのですが、この一年生……剣山君?を保健室までお願いできますか?私の力じゃ
運べそうもないので……」

「セツ、セラ様の仰せのままにいい!？」

スオーカー、もとい親衛隊(笑)の生徒達に非力な女性を語って、ついでに厄介払い

までを済ます。流石魔王様あざとい。

「あざとくないですし！人聞きの悪いナレーションやめてもらえませんか!?まったくもう……さ、気を改めてレッド寮まで行きますか」

ようやく一人に戻り、彼女は本来の目的に戻ろうとした……その時だった。

「見つけたぞ……お前が「転生者」か!!」

「……えっ?」

「「転生者」ならば僕が相手だ!!」

「てっ、テンセー車?ちよつと言っている意味がよく……大体貴方誰なんですか?また新入生ですか?」

「フン、惚けるなよ。「転生者」ならば僕の事を知らないはずはないだろう……この僕、「エド・フェニックス」をな!!」

つ、
続
い
て
し
ま
っ
た
ー
っ
!!

Next 1羽 「この世界では」 僕が先輩だ

「この僕「エド・フェニックス」をな!!」

「あの・・・知りません」

「ふん、あくまでシラを切る気か。だが君は彼女の持つ「GX原作キャラリスト2008↑」には記されて居ない、そうだろう? 「ダーク・エンジェル」!!」

『間違いナイワマスター、セラなんて名前はこのリストには乗ってない・・・つまり、彼女こそが俗に言う「オリ主」。転生者に違いナイ!!』

「????」

彼女は困惑していた、突然現れた新入生? (そもそも制服じゃない、小洒落たスーツ姿だ。)らしき少年によく解らない因縁をつけられたのだ。なんだかダーク・エンジェルとか厨二臭い発言もしている・・・彼女の本能が、関わったら不味いと警報を鳴らした。

「なにをおかしな顔をしている。転生者ならばカードの精霊を視る事くらい朝飯前では

ないのか?」

『ソーク!アタシ達の他に誰もいないんだカラ……堂々とレッツ、リアクション!!』
「……はあ?」

当然、ノーリアクションである。このダーク・エンジェル(笑)が必死に目の前で手を振ったり逆さになったりしてもノーリアクションである。

「(おい駄天使!なんだか全力で見えてないようなりアクションだぞ!!)」

『アアアン、もつと言ってエエ……ジャナイ。大体転生者ならみえるモノだとオモウのだケドオ、まあいいワ、兎に角デュエルに持ちこんじゃええのヨ!貴方のモンスター……とゆうより私達を召喚したら嫌でも反応するデショ!!』

「そうか?ならば……改めてお前!僕とデュエル……って居ないしっつ!!」

《ダーク・エンジェル
駄天使 ☆降臨》

「ハアツ、ハアツ……待てっ!」

「うわっ、追つて来たんですか? 新車の勧誘ですかストーカーですか?」

「まだ惚けるか……兎も角デュエルだ! お前の化けの皮を剥いでやる!!」

「なんなの、この人……はあ、デュエルすればいいんですね。」

本音は正直関わりたくない、けどこれ以上の面倒も面倒だし面倒なので仕方ない。さっさと片付けてレッドに向かうことにしたセラだった。

「わかればいい。では行くぞ、デュエツ……」

『待つてマスター。ここはさつきより人の気配が近いワ、私達（D・HEROの使用）を使うのはやめた方がインじゃナイ?』

「何っ? さつきと言つてる事が違うではないか。そんな読者の期待を裏切るような真似をしてもいいのか?」

『まだメインのデッキを世間に知られては困るんデシヨ? お楽しみはとつておきまシヨ』

「フン、まあいいだろう……」

ディスクに入っていたデッキを大切そうに抜き取ると、懐からもう一つ新たなデッキケースを出して中身を入れ替えた。

「また独り言言ってる……もしかして、十代君達のお仲間なんですかね」

「お仲間？よくわからないが……待たせたな、始めるぞ！」

「あ、はい。」

「デュエル!!」

エド LP4000

セラ LP4000

「先行は私のようですね、ドロート……」

デュエルディスクのランダム裁定により、先行は魔王様^{セラ}。決して相手より先に5枚ドロートしたり、最初のカーブを曲がったり、言ったもん勝ちだったりするわけではないの

であしからず。

「うーん、モンスタートリバースカードを1枚ずつセットして……ターンエンドですね」

ターン1

セラ H4 LP4000

セットモンスター

セットカード

まずは様子見、教科書通りのT字布陣だ。

相手の出方が解らない以上、無難な回答ではあるが……

「僕のターン、ドロー！……フツ、ならばこちらから攻めさせてもらう！カモン！

グレイブアルビスト
《剣闘獣ラニスタ》!!」

『グエエーッ！』

《剣闘獣ラニスタ》☆4 ATK1800

彼が繰り出したのはラニスタ、剣闘獣達のトレーニングを担うイン○トラクター役である。

つまり剣闘獣達は、彼に足もってもらって腹筋したりするわけである。想像してごらん……ちよつと和むぞ。

「おい、さつきからこのナレーションなんかならないのか。モンスター召喚の度に小ネタを挟まれたらデュエルが進まないんだが」

「すいません、多分ナレーター担当「奴」^{馬鹿}なんで気にしたらキリないです……もう気にしないでガンガンやりましょう、ガンガン」

「あ、ああ」

なんだいなんだい、文才皆無の駄作者の替りにわざわざ現在の状況をわかりやすく「バトルだ！ラニスタでセットモンスターにアタック！ヘストイック・フェザー！！」

「武器もつてるのに使わないですね……私のセットモンスターは《方界胤ヴィジャム》……このモンスターは戦闘では破壊されません!!」

《方界胤ヴィジヤム》☆1 DEFO

「少し不気味な種のようなモンスター……なるほど、そいつが「方界」モンスターの核に当たるのかな？」

モンスターの姿形を視ただけでその特性を把握する。鋭い観察眼はプロならではと
いったところか。が……

「……不気味？こんなに可愛いのに??」

「えっ?」

彼女の趣味嗜好までは読めないようだ。あーうん、可愛いと言われれば可愛いのか
な……

『な、なんだか不思議な趣味してる娘ネ。デッキの中身がとても気になるワ……』
「まあいいです。ヴィジヤムの更なる効果！ダメージ計算終了後、このコに触れたモ

ンスター1体をアンディメンション化させる」

「なんだ？ラニスタの体が、まるで石化でもしたかのように……」

「ウフフフ。その鳥さんには、こことは少し違う次元に行ってもらいました。目の前にいるようでいて、触れることは出来ない……もうそのコは攻撃も、効果の発動も許されません！」

「なんだと！」

これは誤算だった。剣闘獣の共通効果の発動はバトルフェイズ終了後、これではラニスタはずっと石像のままになってしまう……くやしいでしょうねえ。

「相手をアンディメンション化させた後、ヴィジヤムは魔法・罨ゾーンに移動します」

「厄介なモンスターだ……だが甘い！僕はバトルを終了し、メインフェイズ2に以降
！手札から《スレイブ・タイガー》を特殊召喚!!」

『ガオオツ！』

《スレイブ・タイガー》☆3 ATK600

「このモンスターは、場に剣闘獣が居る時特殊召喚できる！」

「このタイミングでモンスターを特殊召喚？レベルも違うし、いまいち意図がわかりませんが」

「・・・？まあ黙って視ている」

剣闘獣は有名なモンスター群だと思ったのだが・・・違ったか？それとも剣闘獣程のテーマが、過去の遺物と扱われる程の時代から来たのか・・・と、エドは推測を重ねる。

「スレイブ・タイガーのエフェクト発動！このモンスターを生贄とし、剣闘獣ラニスタをデッキに戻す事で、デッキから剣闘獣モンスターを特殊召喚！カモン、《剣闘獣ベストロウリイ》!!」

『シャーツ!!』

《剣闘獣ベストロウリイ》☆4 ATK1500

「スレイブ・タイガーのエフェクトで呼ばれた剣闘獣は、剣闘獣の効果により特殊召喚された扱いとする！よってモンスターエフェクト発動！君のリバース・カード1枚を破壊する！《ウイング・ブレード》!!」

「きやつ!!? 《砂塵の大竜巻》が・・・」

皆のトラウマ? 元制限、とゆうかこの世界じゃ制限のままのベストロウリイによりセットカードが破壊される。

「砂塵の大竜巻? たしかそれは先日出たばかりの強力な魔法・罨除去カードだな・・・こいつは助かった。このデッキは性質上、大量のリバース・カードを扱うのでね! カードを3枚セットし、ターンエンドだ!!」

「さ、3伏せですか!？」

ターン2

エド H1 LP4000

《剣闘獣ベストロウリイ》(攻)

セットカード

セットカード

セットカード

剣闘立たしてガン伏せエンド、うゝん精神を削って行く削って行くう！

「そろそろ、一人称でやりますか……？」

「……そうだな」

《ドン☆》

「私のターン、ドロー！」

とゆうわけでターンプレイヤーの視点でお送り致しますね、あー鬱陶しかった……。

さて、相手の場には攻撃力1500の「剣闘獣」グラファイアルビースト「モンスター、単体ではたいしたことはないですが問題は3枚のリバース・カード。」

今、私の手札には《大嵐》や《ハリケーン》のような解決札はない、《サイクロン》2枚分砂塵の大竜巻が発動できれば楽だったんですが……黙っているのも性に合いませんし、罠に踏み込んで行きますか。

「魔法・罠ゾーンのヴィジヤムは、私のメインフェイズにモンスターとして再び帰還する事ができます。よってヴィジヤムを特殊召喚!!」

《方界嵐ヴィジヤム》☆1 ATK0

「そしてこの瞬間!手札から速効魔法《地獄の暴走召喚》を発動します!……さあ、この効果は通りますか?」

「……良いだろう、僕に発動するカードはない」

「ならば私はデッキに眠る、残る2体のヴィジヤムを特殊召喚!!」

《方界嵐ヴィジヤム》☆1 ATK0 ×2

「ベストロウリイはこう見えて制限カードだ、暴走召喚は出来ない」

「……通った、あのモンスター制限カードなんです。魔法・罫の破壊以外に他にも何かあるとみるべきか……」

「これでレベル1のモンスターが3体……来るかつ！」

同じレベル揃えると皆言いますよねそれ。なんなんですか1種の決まりですか？

「私は3体の方界胤ヴィジャムを……墓地に送り特殊召喚！次元とk、じゃなくて私の元へ、《方界超獣バスター・ガンダイル》!!」

『ゴオオオオ……』

《方界超獣バスター・ガンダイル》☆4 ATK0?3000

「エクシーズ召喚ではない!?なんだこれは……攻撃力3000!?!」

「方界獣」モンスターはヴィジヤムを組み込む事で特殊召喚され、自身に組み込んだヴィジヤムの数×1000の攻撃力を得ます。そしてバスター・ガンダイルは、三回の攻撃が可能!!」

「攻撃力3000の三回攻撃だ?!」

この破格の火力なら、リバース・カードも使わざるを得ないでしょう・・・ゴリゴリ行きますよ!

「更に私は《流星方界機デューザ》を召喚!」

『ド☆ン』

《流星方界器デューザ》☆4 ATK1600

あの海馬瀬人とも共に戦った経験のある、私の相棒的ポジョン、デューザ。だいたい召喚時「ドン☆」しか言わない・・・言葉ですらないですね。

「デューザの効果で《方界合神》を墓地へ送ります……バトル行きますよ！バスター・ガンダイルでベストロウリイを攻撃します！碎け散れエエエ!!」

「君、結構激しいな……リバス・カードをオープン、《和睦の使者》を発動。このターン、僕のモンスターはバトルダメージから守られる」

「む……存外クールですね」

私のモンスターが、畏等で破壊された時の為に色々下準備したのに……モンスターを守っただけですか。

「ならバトルは終了ですね、メインフェイズ2に入ります」

「バトル終了後、剣闘獣達の共通効果が起動する。ベストロウリイをデッキへ戻し……新たな剣闘獣、レティアリイを特殊召喚！」

『ギシャアッ!』

《剣闘獣レティアリイ》☆3 ATK1200

「レティアリーのモンスター・エフェクト！君の墓地セメタリーから方界合神とやらをゲームから除外させてもらう！」

「むう……」

せつかくデューザの効果を使って墓地に送ったのに、これで方界モンスターのリクルートができませんね、困ったなあ……

「フフ、わざわざ自分から墓地に送ったんだ。そんな怪しいカードを見逃す手はないだろう？」

「……やりますね、カードを1枚セットします。ターンどうぞ？」

ターン3

セラ H2 LP4000

《方界超帝バスター・ガンダイル》(攻)

《流星方界器デューザ》(攻)

セットカード

《クルツク》

「方界」モンスター、まだ全貌は見えないが厄介そうだ……油断はしない、姑息な「転生者」に見せつけてやろう、「この世界」の先輩の力を……プロのタクティクスを!

『キヤー! マスター素敵ーッ』

罵声の腹パン
「喧しい!!」ゴフツ!?!』

「えっ? 私なんか言いましたっけ?」

『※Ω⇄θ・・・ドン☆』

今の茶番劇を目の当たりにしてもスルーだと……いや、本当に見えないのかもしれない。もしやまだ記憶が戻っておらず、精霊うんぬんはさっぱりなのかもしれない。横のデューザとゆうモンスターは凄く活発だが……もしやこの世界の事情などさっぱりわからず、無自覚に様々なカードを広めてしまったのかもしれない。

もしそうだと仮定して、僕のとるべき対応は……

「ああ、蚊がいたのでついな。僕のターン、ドロ―！ 《E・HERO プリズマー》を召喚！」

『トオツ！』

《E・HERO プリズマー》☆4 ATK1700

「おや、貴方もプリズマーを使うんですか」

うん？こいつは知ってるのか。大方、遊城十代の奴が使っていたのだろう……

「……だったら話は早い！プリズマーのモンスターエフェクト発動！ヘリフレクトチェンジ！！」

ちよつと謎のポーズを数度とったあと、プリズマーはベストロウリイに姿を変える。細かい詳細は大体の読者が解るであろうからカットだ。

『げほっ、げほっ、いやソコで怠慢しないでヨ!』

「これでプリズマーは墓地へ送ったベストロウリイの名を得て、融合素材となる!そしてベストロウリイとレティアリイを融合!カモン! 《剣闘獣ガイザレス》!!」

『シャッツツ!!』

《剣闘獣ガイザレス》☆6 ATK2400

「《融合》無しの融合召喚!?なんですかそれ、狡くないですか!!」

「問答無用だ!ガイザレスのモンスターエフェクト、場に出た時フィールドのカード2枚を破壊!対象はリバース・カードとバスター・ガンダイル!へツイン・ブレイク・フェザー!」

「きやつ、《光の護封霊剣》とガンダイルが……けどただではやられません!バスター・ガンダイルの効果により、組み込まれていたヴィジヤム3体を特殊召喚し、更に新たな「方界」モンスターを手札に加えます!!」

戦闘したモンスターを無力化する奴が3体、全て相手にするのは骨が折れるな……

「残念だがお断りだ、カウンター罠《剣闘獣の戦車》チャリオッツを発動！場に「剣闘獣」モンスターが居る時、モンスターエフェクトを無効とし破壊する!!」

ガンダイルが分裂しようとしたところに突如、ガイザレスが戦車でライディングしてきてヴィジャム達を引き飛ばしていった、絵面がシユール過ぎるだろ……

「がっ、ガンダイルー!」

「……」

おい、ソリッドビジョンがはっちゃけ過ぎではないか？少なくともこの学園の外では普通だったはずだが

『この学園は魔力が外部より満ちてイル、よって精霊達も普段よりハッスルしていると考えられるワ……』

「そ、そうか……バトルだ！ガイザレスでデューザに攻撃する!!」

「なんの……私のモンスターが墓地へ送られたターン、デューザは墓地のモンスターの種類×200ポイント攻撃力をあげます!!」

『ツツドン☆』

《流星方界器デューザ》☆4 ATK1600?2000

「だがガイザレスには届かない!」

セラ LP4000?3600

「くっ……黙ってやられる趣味は無いですよ」

「へえ、なかなか僕好みの答えだ……メインフェイズ2に以降。ガイザレスのモンスターエフェクト!バトルしたこのカードを「融合デッキ」に戻して、デッキから新たな「剣闘獣」を2体特殊召喚する!カモン!《剣闘獣エクイテ》!《剣闘獣アウグストル》

!!
」

《剣闘獣エクイテ》☆4 ATK1600

《剣闘獣アウグストル》☆8 ATK2600

「エクイテはセメタリーの「剣闘獣」カードをサルベージ、アウグストルは手札の「剣闘獣」モンスターを特殊召喚するエフェクトを持つ。そしてまた、最後の手札1枚もアウグストル!」

『ピエエエエツ!!』

《剣闘獣アウグストル》☆8 ATK2600

「そしてエクイテの効果処理で戦車をサルベージ!これをセットしターンエンドだ」

ターン4

エド HO LP4000

《剣闘獣エクイテ》(攻)

《剣闘獣アウグストル》(攻)

《剣闘獣アウグストル》(攻)

セットカード

セットカード

「ううっ、とんだ不審者かと思えば・・・強い！」

とんだ言い掛りで勝負を仕掛けてきた野生○のプロ、エド・フェニックス。

彼の操るグラディアル・バード達に、はたしてセラちゃんはどう立ち向かうのか、そしてこんな感じで2期が進んで行って大丈夫なのか・・・後半へ、続く!?

Next 2羽 「あの人」のカードで負けるものか

セラ君は追い詰められていた。相手の場には最上級モンスターの《剣闘獣アウグストル》が2体に加え、エクイテのエフエ→クトにより回収された専用ノーコスト《天罰》の《剣闘獣の戦車》チャリオット。

対する彼女の場はガイザレスのせいもあって焼野原、はたしてたった2枚の手札で巻き返せるか……そんな感じで後半、はっじまつるよー!

「前半のあらすじくらい真面目に出来ないんですか!？」

《ドン☆》

「ターン頂きます。私のターン、ドロー!!」

……よし!

もう一枚のリバース・カードにもよるけど、これなら戦車を掻い潜って展開できるかも！

「私の場にはモンスターが存在しません。なので魔法カード《シャッフル・リボーン》を発動します！墓地のモンスターを効果を無効に特殊召喚！もう一度お願い、《流星方界器デューザ》!!」

『CCCCC!』

《流星方界器デューザ》☆4 ATK1600

「そしてチューナーモンスター《黒薔薇の魔女》を召喚!!」

『フフフツ』

《黒薔薇の魔女》☆4 ATK1700

「チューナーモンスター、シンクロ召喚とやらか・・・だが見透しが甘い！罠オープン！《ゴッドバードアタック》!!」

「ツツ!?!」

「エクイテを生贄として発動、君の召喚した2体を破壊させてもらおう！」

アウグストルは見ればわかりますが、エクイテの方も鳥獣族モンスターだったんですね。さっきのラニスタやバストロウリイ、ガイザレスもそれっぽい雰囲気でしたし、なんかここまで鳥だらけだと姐さんを思い出しますね……

「破壊効果で助かりました、手札より速攻魔法《我が身を盾に》を発動します！ライフを1500ポイント支払い、フィールドのモンスターを破壊する効果を無効化する!!」

セラ LP3600?2100

「つまりモンスターを狙ったゴッドバードアタックは無効となる。くつ、エクイテは無駄死にか……」

「これで憂いは払いました、レベル4のデューザにレベル4の黒薔薇の魔女をチューニング！暗黒の次元より来たれ、暴食の蠅王！シンクロ召喚《魔王龍ベエルゼ》!!」

『ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ!!』

《魔王龍ベエルゼ》☆8 ATK3000

学園祭の準備期間のころ、ジュンコさんが「セラちゃんパイセン絶対気に入るって」とかなんか言つて突然渡してきた凶悪シンクロモンスター、ベエルゼ。

折角だし、ヴィジュアルが素敵なので採用してますが闇チューナー限定なので出しづらいですね……

「魔王龍……ハツ、大層な名前のモンスターだな」

「そうですね、けど「魔王」を冠するだけの力はありませんよ！バトル行きます、アウグストルを食いちぎれ！へべエルゼ・カーニバル！！」

『ガリガリツムシャバキバキボキッ』

※グロ描写の為しばらくお待ちください

「アウグストル！ぐううつ……」

エド LP4000?3600

「やっとダメージが入りました、私はこれでターンを譲ります……あれっ？顔色悪いですが大丈夫ですか？」

ターン5

セラ H0 LP2100

《魔王龍ベエルゼ》(攻)

《くゝルルツ》

「ううつ、大丈夫ですか？だと……」

あんなモノみせられて、気分が悪くならないわけないだろうが！自分のモンスターが

目の前でバリバリやられてるんだぞ？

アウグストルBもすっかり怯えてしまつて……まるで蛇に睨まれた蛙のようになつてしまつた。

『(ガタガタガタガタ)』↑アウグストルB

「僕のターン、ドロー！魔法カード《天使の施し》！まずは3枚ドローする！」

このカードは……ああ、やはり「貴女」は僕を見守つていてくれるんだね……と、ゆうわけで墓地に送ろう。

『大切なカード……なのヨネ？』

「そして2枚を捨てる。残りの手札のカード、《命削りの宝札》を発動！手札が3枚になるようにドローする！」

よし、悪く無いカードを引いた。いくら攻撃力3000といえど所詮はただのモンスター、突破する手段などいくらでもある！

「バトルだ！アウグストルでベエルゼにアタック！へガステイー・ネイル！！」

「えっ?」

「そして計算前に速攻魔法《収縮》を発動！ターン終了まで、ベエルゼの攻撃力を元々の半分とする！」

「ええっ?!」

《魔王龍ベエルゼ》 ATK 3000? 1500

「命削りの宝札のデメリットでダメージは通らないが、戦闘破壊できれば充分だ!!」

「……」

小さく縮んですっかり威圧感の無くなった魔王龍を、その鋭い爪で引き裂いて……

『相手の敵じゃー!!ギヤツギヤツ……ツツ?!』

『あゝ痛い痛い、悔しいでしょうねえヒヤゝヒヤヒヤヒヤヒヤ』

ひ、引き裂いて……

『……ダメみたいネ』

どつ、どうなっているんだこれは！間にカードの発動も無し、バトルは成立したハズだ！……ディスクの故障か!?

「あ、あの……ベエルゼは戦闘・効果では破壊されないんですが」

「何イ!? 戦闘だけでなく効果でも破壊されないだと……インチキ効果も大概にしたらどうだ!!」

「そ、そんな事言われてもなあ……」

クツ、想定外だ。これではカードを無駄に消費しただけじゃないか!……観客がいない野良試合で良かった。とんた恥じをかくとこだ。

「カードを2枚セット！手札が無いいためエンドフェイズに命削りの宝札のデメリットは発生しない！」

「《収縮》の効果も切れてベエルゼの攻撃力も戻りますね」

《魔王龍ベエルゼ》 ATK1500?3000

ターン6

エド HO LP3600

《剣闘獣アウグストル》(攻)

セットカード

セットカード

セットカード

《DON☆》

「ターンもらいますね、ドローツ！」

あの人、ベエルゼの効果知らないんだ・・・シンクロやエクシーズが一般に一回つたのは、ついこの間の夏休みの間。

ただでさえ種類が膨大なデュエルモンスターズに、新たな要素が一気に入り込んできたのだから、把握しきれないのは当たり前なのでしょうが・・・なんだか悪い事しましたね。

「私は《強欲な壺》を発動します。2枚ドロ！・・・うん、《ナイトシヨット》発動！ 貴方がセツトしてた《剣闘獣の戦車》を破壊します！これでモンスター効果が使えま
すね!!」

「クツ・・・」

これで安心してモンスター効果が使える。もう1枚の伏せも気になりますがそれはそれとして、攻めますよ！

「私は魔法カード《おろかな副葬》を発動します。デッキから魔法カード《方界業》カルマを墓地へ。そしてこのカードを除外し効果発動、方界モンスターのデュエザを手札へ加え、
召喚！」

『ポドポド☆』

《流星方界器デューザ》☆4 ATK1600

「2体目か・・・よほど好きなようだな」

「まあ、唯一の私のモンスターですから（?）。効果発動、今度も墓地へ送るのは《方界合神》です。続けざまにバトル行きます! ベエルゼでアウグストルを攻撃、へべエルゼ・カーニバル<!!」

『ガリツムシャハポキツベキベキツ』

※魔王龍が食事中です。今しばらくお待ちください。

エドLP3600?3200

「アウグストル! 貴様、よくも・・・」

「そしてデューザのダイレクトアタック! ヘコメット・ブロウ<!!」

『?Ω!!』

「ぐわああああっ!!」

エドLP3200?1600

これでライフは僅かですが私の優勢、相手モンスターも全滅。合神も墓地に送ったししばらく大丈夫でしょう……

「私のターンは終了です」

ターン7

セラ H0 LP2100

《魔王龍ベエルゼ》(攻)

《流星方界器デューザ》(攻)

《クルルル、》

「いい気になるなよ……僕のターン、ドロー！ 《逆境の宝札》を発動！ 君のフィール

ドにのみ特殊召喚されたモンスターが存在するので2枚ドロー!!」

こいつは……先程遊城十代とのデュエル用に買った余りの8パックに封入されていたカード、D・HERO天 使には『ゼラートとかじゃないノ?』などわけの判らんことを言われたりしたが……「あの人」の形見のカードと相性が良いから採用したんだっ
たな。

『(形見が……)はあっちじゃないかしら』

「行くぞ!自分フィールドにモンスターが存在しない時、魔法カード《炎王の急襲》は発動できる!」

「えっ……「炎王」?」

「このカードエフェクトにより、炎属性の獣・獣戦士そして鳥獣モンスターのいずれか1体を効果を無効とし特殊召喚する!」

遠い世界のもう会えない貴女へ、僕は必ず守ってみせる……貴女が好きだった「この世界」を!

「カモン！ 《炎王神獣ガルドニクス》!!」

『キユオオオオツ!!』

《炎王神獣ガルドニクス》☆8 ATK2700

「綺麗・・・」

「バトル！ ガルドニクスでデューザを攻撃！ 焼き付くせ、へエンシエント・ノヴァ〜!!」
「きゃあああつ!!」

セラ LP2100?1200

「ぼ、墓地の罨カード方界合神を除外し効果発動！ 方界モンスター・・・《方界超帝インディオラ・デスボルト》を特殊召喚します!!」

『ツツ!!』

《方界超帝インディオラ・デスボルト》☆4 DEF0

方界超帝……先のバスター・ガンダイルのような存在だろうか？だが攻守0ならば単なる壁として呼んだとみるべきか

「カードを1枚セット、エンドフェイズに炎王の急襲のカードエフェクトによりガルドニクスは破壊される。僕はこれでターンエンドだ」

ターン8

エド H0 LP1600

セットカード

セットカード

セットカード

《丹☆》

「私のターン！ドロー頂きます！」

場にはリバース・カードのみ、あれを攻略すれば私の勝ちですね！

「スタンバイフェイズに墓地からガルドニクスのモンスターエフェクト発動！」

『キュオオオオオツ!!』

《炎王神獣ガルドニクス》☆8 ATK2700

「ふ、復活した!？」

炎王の急襲の効果で破壊されて灰と化してたガルドニクスさんが、不死鳥よろしく蘇ってきました。なるほど、見た目そのままの効果をお持ちなんですネ。

「効果で破壊されたガルドニクスは、次のスタンバイフェイズにセメタリーから復活する。そしてこの時、フィールドの全モンスターを破壊する！ヘフェニクス・プロミネンス!!」

「狙いはそれで良かったか、なんかその技名どこかで聴いたなあ……けど残念ながら、ベエルゼは効果破壊もされませんよ!」

「そうはいかな! リバースカード《禁じられた聖杯》を発動! ベエルゼの効果を無効とする!!」

『ギイエエエエツ?!』

「五月蠅さつ!?!」

業火に焼かれながらもケロつとしているベエルゼさん。と、思ったら聖水かけられたら凄まじい断末魔をあげて焼け始めました。油じゃないんだから……ベエルゼが駄目ならこつちです!

「一緒に破壊された、インディオラ・デスボルトの効果! 相手によって処理された瞬間、墓地から「方界」モンスター3体を特殊召喚し、デッキか墓地から方界モンスターを手札に招くことができます!」

「そんなボード&ハンドアドバンテージの塊なエフェクト、通すと思ったか! カウンター罠《神の通告》を発動! ライフを1500払い、それを無効とする!!」

エド LP1600?100

「そんな……」

神の通告、最近出たばかりの凶悪カウンター罠ですね……ライフ4000ではコストが結構重い気はしますが、宣告では止められないチェーンに乗る特殊召喚も止めたりするので厄介です。

残りライフ100、あれをなんとか削れたらな……

「今の攻防はまだスタンバイフェイズ、メインフェイズお薬はここからですよ！姉さん直伝《強欲で貪欲な壺》！デッキトップから10枚除外し、なんだかんだで2枚ドロ！！」
「このタイミングで手札補充か……それで？いったい何を引いてみせたんだい？」

このカードは……フツ、除外した10枚には奇跡的にパーツ入ってないし、万丈目君が何故かくくださったあのコを試す時がきましたね！

「《儀式の下準備》を発動！デッキから儀式魔法とそれに対応するモンスター……《イリユージョンの儀式》と《サクリファイス》を手札に加えます！」

「儀式……サクリファイスだど!?!」

「《イリユージョンの儀式》発動！手札のレベル4、《超電磁タートル》を儀式の贄へ捧げ……お願いします！幻想モンスター《サクリファイス》!!」

『……(ギョロツ)』

《サクリファイス》☆1 ATK0

頂きものその2、サクリファイス。万丈目君が突然「お前を気に入ったらしいから、引き取れ」と押し付けられたんですが……強いですよねこのコ、良かったんですかね本当に。

「サクリファイスの効果！相手モンスター1体を吸収し、装備します！〈ダーク・ホール〉!!」

不死鳥といえども吸収されてはどうにもならないはず……このデュエル、もらい

ました！

「そうはいくか！ラストリバーズ・オープン！速攻魔法《炎王円環》！フィールドのガルドニクスを破壊する!!」

『キュオオオオオ・・・』

せつかく呼んだ上級モンスターを破壊!?確かに吸収できなければサクリファイスのステータスは0のまま、敗北を免れますが・・・

「そしてセメタリーから、新たに炎属性モンスターを特殊召喚する！頼んだよ・・・《ネフティスの鳳凰神》!!」

『クオオオオツ!!』

《ネフティスの鳳凰神》☆8 ATK2400

鳳凰、また綺麗なモンスターを扱いますね・・・あれ、なんだか嬉しそうな顔しますねあの方、ネフティスがエースなんでしょうか

「むう、対象不在のためサクリファイスの効果は不発ですね……ターンエンドです」

ターン9

セラ H0 LP1200

《サクリファイス》(攻)

《クルツクウ》

やっと出せたね、ネフティス。「あの人」の形見のカード……ああ、僕のターンを迎えたくない。このまま「貴女」に見守っていて欲しい……

「あ、あの……貴方のターンなんですが」

「……もう少し待っていてくれ。今ゴニヨゴニヨ成分を補充しているところだ」

「え、ええなんなの、この人……」

『(……もつと言ってあげてクダサイ)』

……ふう。遠い世界からみていてくれ、貴女が愛した「この世界」を乱す不屈き

者を、この僕が征してくれよう！

「僕のターン、ドロロー！スタンバイフェイズに再び、セメタリーからガルドニクスが復活する!!」

『キュオオオオオツ!!』

《炎王神獣ガルドニクス》☆8 ATK2700

「そしてフィールドの全モンスターを焼き尽くす。君のサクリファイスも、僕のネフテイスすらー!」

「あ、だからターン迎えるの渋ってたんですね・・・」

ガルドニクス
不死鳥の炎がサクリファイスをネフテイスを不死鳥ごと焼き尽くす。とても心が痛むが仕方ない・・・くつ、非力な僕を許してくれ。

「犠牲は大きかったが、これでサクリファイスは倒した・・・行けっガルドニクス! プレイヤーへダイレクトアタック!!」

「犠牲って自分で破壊してるじゃないですか! 墓地の超電磁タートルの特殊効果発動、

このモンスターを除外してバトルフェイズを終了させます!」

フン、儀式の贄にされていたことは忘れちゃいないさ。これであちらの手札・フィールド、さらにはセメタリーで発動するようなカードはほぼ0。シャッフル・リボーンのドロローは発動コストもあるしな……あとはこのカードで詰みだ。チエツク

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ!」

ターン10

エド H0 LP100

《炎王神獣ガルドニクス》(攻)

セットカード

「ターン頂きます、ドロロー!」

「この瞬間にカウンター罠《強烈なはたき落とし》発動!!今デッキから手札に加えたカードを捨ててもらおうか!」

「はいっ!？」

強烈なはたき落とし。可能性をもたらす手札を無慈悲にも消し去るカード、これに私に対抗手段は……

「これで真正銘可能性は0、次のターンにはネフティスも蘇る……僕の勝ちだ!!」
「フフフ……感謝しますよ、貴方の伏せカードがそのカード以外なら負けていました」
「なんだと……」

「私が今引いたカードは……これです!墓地の《方界業カルマこれを除外し「方界」モンスター体を手札に加える!!」

「馬鹿な!?!ドローカードがセメタリーで効果を発動するカードだとお!!」

正直助かりました。このカードはヴィジャムを墓地に送るより、サーチ効果のが扱いやすいですからね……兄さんは平然とメインの効果を使いこなす辺り実力の差を感じざるを得ない。

「いざ再び私の元へ!3体目の、流星方界器デューザ!!」

『ドドドン☆』

《流星方界器デューザ》☆4 ATK1600

「またそいつか・・・お気に入りにも程があるだろ」

「貴方がそれ言います？デューザの効果で最後の方界業を墓地へ送ります。この効果には1ターンに1回なんて面倒な誓約はありません！方界業を除外し《方界帝ゲイラ・ガイル》を私の手札に招き、デューザを墓地へ送り特殊召喚！ゲイラ・ガイル!!」

《方界帝ゲイラ・ガイル》☆2 ATK0?800

「このモンスターは、手札からの特殊召喚に成功した時攻撃力が800になり・・・相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与えます!!」

「えっ?」

「これで終わりです！ヘフェア・ウィンド!!」

「馬鹿なああああっ!!」

エドLP100?0

WIN セラ

・・・ふうつ、なんとか勝てましたね。

本気で危なかったです・・・あれ、相手の方OTLみたいな体勢から動かないんですが大丈夫でしょうか。よほどシヨックだったのかなあ・・・

「そんな・・・この僕が、いくら「あ^Dの^Hデ^Eツ^Rキ^O」ではないといえど、ネフティスを・・・無様に敗北した・・・さんに顔向けが・・・」

「あ、あのく・・・」

「お前、名前は？」

「へっ?せ、セラ。藍神セラですけど・・・」

半分偽名ですけどね、まあそれはいいとして。

『いかにもって名前ネン。藍神なんて名字珍し過ぎるでシヨ』

「セラ……覚えたぞ……藍神セラ！今回は大人しく引いてやるが次こそは
いかない……それまでせいぜい首を洗ってまっついろ、「転生者」藍神セラ!!……
行くぞ、『駄ダルク・エンジェル天使』」

「だ、だからその「電性社」ってなんのこっちゃですか!?!少しは人の話も聴いてくだ
さ……行っちゃった」

一方的にデュエルを申し込んできて、負けたと思つたら早々に捨て台詞吐いて行っ
ちやいましたよあの子。

結局最後まで人の話聞かないし、よくわからない単語を繰り返してきてたし……いつ
そさっきの恐竜君みたいに、クリムゾン・ノヴァで一旦気絶させて拘束でもするべきで
したかね？

はあ、新学期初日から幸先不安です……

《ドーン》

「おつ、セラじゃねーか久しぶりだな!!」

「あら、セラちゃんお久しぶりね」

「セラさんどうもツス」

「フン、藍神か。久しいな・・・」

なんやかんやで謎の襲撃者や自称私のガーディアン（ドン引き）達を振りきりレット寮まで到達。

食堂に集まっていた彼らと終業式以来の再会をはたしたのでした・・・無駄に疲れた。

「明日香さん（呼び方変えた）が縄で縛られてるのは兎も角、みなさんなにをみているのですか？」

「それを「兎も角」で済ましちゃうんだ・・・」

「お前も大分学園に染まってきたな」

「ああ、これが放置プレイの感覚……クセになりそうね」

モウダメダー。どうせ姐さん不在だからって好き勝手やろうとして、十代君に振り返り討ちにあつたんでしょうね……

「（無視）ああ、さつき新入生とデュエルしたんだけどすつごく強くてよ！しかもそれが売れのこりの8パックで組んだデッキらしくて……本来の自分のデッキならどんなだけつえーんだって考えたらワクワクして収まらなくなつてさ！んでそいつが現役のプロデュエリストらしいから、皆からデュエルマガジン借りて過去の対戦記事からどんなデッキ使うのかわかるって想像してたわけよ!!」

「早口でいっぺんに喋らないでください?! 要点まとめてお願いしますー!」

え、えくとお……つまりはさつき私に来る前に、十代君と戦つた新入生が学生でありながら現役のプロで? その彼の記事を読んで楽しんでると……

私も少し気になったのでその記事を見せてもらおうと……そこにはなんと、今さつきまで顔を付き合わせていた人物の顔がでかかと。

「
・
・
・
若き天才「不死鳥使い、エド・フェニックス」

続きます？

Next 3羽 口は災いの元なり

僕は後悔していた。

あの時、どうしてあんな事をしてしまったのだろうかと……

「翔く」

「なんスカアニキ、えらく悄気た顔して」

それは新学期初日の夜、十代のアニキがちよつとばかり部屋から出ていつてから数分後の事だった。

「さつき電話でさ、ジュンコにエドとデュエルしたつて話をしたらさ……」なんでサインもらつてないんじゃーっ！あたしエドのファンなのに……馬鹿馬鹿っ！十代の馬鹿っ！！」つて、ひたすら馬鹿連呼で怒られた……」

「そ、それはドンマイツス」

「お前もか十代……」

「万丈目君?! 部屋入る時くらいノックしてよ!!」

「さつき浜口に電話で似たような話をしたら……怒りはしなかったが明らかにシヨン
ボリされた……」

「そうか、お前もか、万丈目エ……」

「十代……」

「はあく……」

なにこのリア充共の共感、いいから爆発しろよツス。

そんな事を考えながら、僕はある人物に近況報告もかねて、たった一文だけのメールを送りました。

それが、災厄の始まりだったとも知らずに……

《ド☆ン》

皆様こんにちは、セラです。

早いもので新学期が始まってから1ヶ月が経過しました。混沌の根源（天上院吹雪）が居ないにも関わらず、相も変わらずトラブルがいつぱいでした。

いきなり変な言い掛りをつけられてデュエルを挑まれ、敗北したら電波な捨て台詞を吐いていくプロデュエリスト少年を始めとして・・・万丈目君がブルー寮への復帰をかけ元中等部のトップとデュエルし、おジャマシリーズ5体展開からの《団結の力》フィニッシュをぶちかましたり。

プロ少年の前に私に挑んできた恐竜君が、十代君に喧嘩をふっかけるも返り討ちに会い舎弟化したり。

丸藤翔君がブルーのインセクトプリンス先輩（○）を攻撃力4000の、なんか凄そうな融合モンスターでフルボッコにして、ラーイエローに昇格したりなんかもありました

ね。

あとみ、み、み……あつ六沢君！六沢君が……ごめんなさい、忘れました。「ついに三の方が変化してきただとう！」

そんなこんなで退屈しない学園生活を送っています。

さて、本日は生徒一同が一堂に会して、ある番組を観ることになりました。

なんでテレビ番組ごときに集会を、とお思いでしょうが……

『アメリカ海馬ランド・青眼ドームよりお送りします。本日はプロリーグの待ちに待った注目カード……エド・フェニックスvsカイザー亮!!』↑TVMC

「「「ワアアアアアアッ!!」」」

はい。

そんなわけで今日はプロリーグの注目の対戦。ちよつと前に壊れてから卒業したばかりの丸藤亮さん対エド・フェニックス君つてことで、みなさんhighになります。ります。

「なあなあ、どつちが勝つと思う?！」

「当然、お兄さんツス！」

「そうだな、カイザーはデビューしてから10戦無敗、エドよりランクが上のプロ相手にも勝利している」

「だが対するエドも30戦無敗。しかも今回は今まで温存していた本当のデッキを披露するとゆう……」

「あ、七沢君。いたんだ」

「いつのまに背後に紛れてたザウルス!？」

「最初からいた！」

「対象の背後に音もなく紛れて込む……どうやら貴方も「こちら側」の人間だったよ
うね」

「うわっ!? 机の下から出てくるなよ明日香!!」

「君と一緒にしないでくれ!!」

私からしたら、カイザーさんもフェニックス君もどっこいどっこいなんですよ
ねえ……

『司会はこの私メリツサと、解説に前回エド・フェニックスに破れたプロデュエリスト、Mr. タイタンをゲストに招いてお送りします』

『よろしくう、頼むううう．．．』

「ブーッ!?!」

「あいつ、何やってんだ．．．?」

随分個性的なしやべりの仮面な方が紹介されたと思いきや翔君が吹き出した。反応からして十代君とも知りあいのようなですね．．．

『いや〜先日の対戦は熱かったですね〜、怒濤のデーモンラッシュでエド・フェニックスをあと一步の所まで追い詰めて．．．』

『否あ、旗から観れば最初は私が有利だったのかあもしれんがあ．．．あ奴は終う始こちらの攻撃を綺麗にいなし続けてきた、完敗だああ．．．』

あ、見た目に反して紳士っぽい。セラ的にはポイント高いです。

『そ、そうなんですか？・・・それでは入場してもらいましょう！プロリーグ30戦無敗！若き天才デュエリスト・・・』

『エドオオオオオオ、フェニイイイックス!!』

「タイタンが呼ぶのかよ!？」

なんか解説の方のせいで、一気にプロレスっぽくなりましたね・・・

そんなことはお構いなしと言わんばかりに、女性ファンの歓声に手を振りながら

済ました顔で入場するフェニイイイックス君。

彼が電波な事を知ったら彼女達はどんな顔をなさるんでしょうね・・・

『ちよつ、Mr. タイタン。私の仕事を取らないで下さい・・・た、対するは！この夏にプロデビューして以来10戦無敗！学生時代の通り名に偽り無し！カイザー亮選手だー!!』

．．．あれっ？

「カイザー、出てこないな．．．」

「お兄さん．．．？」

『ど、どうした事でしょう!?!カイザーこと丸藤亮、リングコールがかかったにも関わらず、姿を現しません!!』

どうやらカイザーさん不在のご様子。どうしちやったんでしよう、あの真面目系(!?)デュエル馬鹿が逃げ出すなんて事は絶対にならないと思うのですが．．．

『すまない司会者あ、あ奴に昨日頼まれてなあ．．．照明OFF!!』

「か、会場の電気が．．．」

「消えたドン！」

『またあー!? 私こんなの聞いてなーい!!』

紳士仮面さんの合図で会場の電気が落ちたらしく、TVモニターには闇しか映らなくなったその時だった・・・会場に聞覚えのある声で、聞き慣れない高笑い響いたのは。

『フフフフ、ハハハハハハハハハハッ!!』

『ライトアアアッ!!』

(SE) パツ、パツ、パツ

『こ、今度は何?』

『エドオフエニックスに対するわあ・・・愛を求め「彼女と同じ色」、つうまりい、闇に染まりし皇帝・・・ヘルカイザアアアアアアア、亮オオオオオ!!』

『フハハハハハハハハハハ!!』

そこには何故かブルーの制服を着ていたカイザーさんではなく、漆黒の衣を身に纏い、雷鳴と共に走れ電光の……じゃなくて。幻魔事変の時に、姐さんとデュエルした時の姿のカイザーさんが……事情を大体知ってるアカデミアメンバーは、思わず口を揃えて言いました。

「「「またなっちまったーっ!!?」」」」

続くウ……

Next 4羽 それでもデュエリストか

前回のあらすじい……

黒幕翔君説。

「フハハハハハハハツツ!!」

「どうゆう……ことだ」

エドックス（岩征龍ではない）は混乱していた……いや、彼の変貌ぶりを見て混乱しないものがあるだろうか。

あの生真面目で相手を尊重する男が、高笑いをしながらこちらを見ている……いや、目は笑っていない、なんだあの目は。

まるで、長年追い続けた敵を前にするような目だ。

『あく、「父さんの敵」話してる時のマスターと大体同じ目ですワ』

駄天使の話は無視する。『^{かっこ}』が実況達と同じだから普通にしゃべられると混乱する、黙ってる。

それに僕は仮に敵を前にしても・・・高笑いもしないし黒装束も纏わないしわざわざ若○ボイスに入場コールを頼まない。

「ククク・・・貴様と戦える日を待ちわびていたぞ、エド・フェニックスウ・・・」
「そ、それは幸栄だな、カイザー亮。僕も貴方とは戦ってみたいと思っていた・・・だが、その服装や口調はどうしたんだ？」

「黙れ、イメチェンだ」

「どんなイメチェンだ!？」

「そんな事はどうでもいい、俺はこの日まで自分を押さえるのに疲れたんだ・・・デュエルだ!俺とデュエルしろおおおおおつ!!」

「ええ・・・」

どうやら話を通じる状態ではないらしい

「まるで意味がわからんが、こうなったらデュエルで語るしかないようだね」

「そうだ、それでいい……貴様のせいで味わった怒り……悲しみ……痛み……恐怖！その他もろもろ含め全てをぶつけてやる……デュエル開始の宣言をしろ！○ルバトオオオオス!!」

『デュエル開始イイイイイイイ!!』↑○本ボイス

「あんたがやるのかいつ!？」

『司会の私とか会場の反応とかガン無視してデュエルに入ったー!?』

「デュエルツツ!!」

亮 LP4000

エド LP4000

「ふーっ、出鼻を挫いて悪いが先行は僕だ！ドロ……魔法カード《融合》^{マジック}を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！カモン！《E・HERO フェニックスガイ》!!」

『ハアアツ！（野太い声）』

《E・HERO フェニックスガイ》☆6 ATK2100

『おおつと〜！エド・フェニックスの本来デッキとはもしや！先日病の床から復活したばかりの元世界チャンピオン、響紅葉と同じ「E・HERO」デッキだーっ!!』
「フン、響紅葉など僕には関係ない・・・カードを2枚セットしターンエンド！」

エド HI LP4000

《E・HERO フェニックスガイ》☆6 ATK2100

セットカード

セットカード

この時アカデミアでは、十代君が見たことないHEROに目を輝かせてたりHEROの融合パターンうんぬんにミサなんとか君がうんちくを垂れてたりするが、まあ些細な事だね！

「フフフフ・・・ハハハハハハハハハハッ!!」

「な、なんだい？その反応は」

「貴様もHEROか……貴様もHEROか！俺の障害なる男は皆HEROを使う……面白い、貴様のHEROがどれ程の者かつ！この俺につ！感じさせてみるおーっ!!!」

「あ、はい……」

同じHERO使いの十代君が亮の恋敵とは知るよしもなく、更に火に油を注いだ結果となったのだが……それはさておき

「お、れ、の、タアアアアアン!!まずは《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚!!」
『ギャオオウ!!』

《サイバー・ドラゴン》☆5 ATK2100

「続けて!」
ギャラクシー・ソルジャー
《銀河戦士》を《サイバー・ドラゴン・コア》をコストに守備特殊召喚。その後雑に同名モンスターを手札に加える!」

《銀河戦士》☆5 DEF0

亮の説明が雑なのでこの僕、ナレーターBが説明しよう！このモンスターは手札の光属性一体をコストに守備表示で特殊召喚でき、デッキから「ギャラクシー」と名のついた「俺はあ！銀河戦士とサイバー・ドラゴンでオーバレイユイツ！現れる超☆新☆星！」《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》!!」

《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》★5 ATK2100

まだ説明の最中なのにつ!?亮ったらせつかちさんだねえ・・・。

『おつとここでー！丸藤亮、過去の試合にはみせたことの無いエクシーズモンスターを繰りだ

「サイバー・ドラゴン・ノヴァのモンスター効果発動！オーバレイユユニットを一つ喰らい、墓地のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する!!」

《サイバー・ドラゴン》☆5 ATK2100

『て、展開が速いわよ！ちゃんと司会させなさいよーっ!!』

『いいぞおへエエルカイザア、もつとだあ・・・もつと己を曝け出せええ!!』

もはや実況が煽るレベル、タイタン氏を実況にチョイスした運営は何を考えていたのやら……ま、いつか。

「ただだあ！サイバー・ドラゴン・ノヴァ一体でオーバーレイ！超新星よ、我が無限の渴望を充たす為の糧となれ！サイバネティク・エクシーズ・チェンジ！……貴様を否定する《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》!!」

『ギシャアアアアッ!』

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》★6 ATK 2100

「馬鹿な、自力で進化するモンスター・エクシーズだと!？」

「ククク……このモンスターはサイバー・ドラゴン・ノヴァを素材に、直接エクシーズ召喚が可能なのだ……そしてこのモンスターの攻撃力はオーバーレイユニットひとつにつき200ポイントアップする」

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》 ATK 2100? 2500

攻撃力2500、これだけなら対した驚異ではないが……以前の《魔王龍ベエルゼ》みたいな例もある、攻撃力だけで判断するのは危険だろう。

とかなんかエド君は考えていた、大体察しの通りだがね！

「サイバー・ドラゴン・インフィニティの効果を発動！相手モンスター1体を、自身のオーバーレイユニットとして吸収する！その伊達男は頂いて行くぞ!!」

『破壊でも除外でもない除去能力!』

『これでエドのフィールドはがら空きになり、ヘルカアイザアのモンスター達の総攻撃力は4000オーバー……早くも決着かあ?』

「そうはいくか！リバースオープン！永続罠トラップ《デモンズ・チェーン》を発動！その凶悪なモンスターエフェクトを無効にさせて貰おう」

「甘いわ！インフィニティの更なる能力、1ターンに一度あらゆる魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊できる！当然デモンズ・チェーンを無効!!」

「それはどうかな？セカンドリバース、オープン！速攻魔法《禁じられた聖杯》！インフィニティのモンスターエフェクトをエンドフェイズまで無効にし、攻撃力を400あ

げる！結果攻撃力2500になるけどね」

『な、なんと二重の構え！エド・フェニックス、モンスター効果に対し徹底して対策を立てていたーっ!!』

シンクロ・エクシーズにより、強力なモンスター効果が台頭してきた昨今……彼らはそれに屈しないようなデッキ構築をしているようだ。

うーん、自分も素直に使えば良いのに……気持ちにはわかるんだけどね。

「やるな、どうやら一筋縄ではいかないようだ……ならその少ない手札に圧力をかけてやろう、《幽鬼うさぎ》を召喚！」

『えっ？ボク召喚されちゃうの!?手札に握つとくもんじゃないの!?』

《幽鬼うさぎ》☆3 ATK0

精霊持ち!?!……いや、彼女(?)の声が聞こえている様子はない。

当然である、なにを隠そうこのぼく……もとい、彼の友から借りうけた姑息うさぎなのだから。

そんな事は知るよしも無いエド君は当然困惑した、こいつ……もしやあのセラとかゆう少女(!?)の仲間か?と。

「レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のうさぎをチューニング。駆け巡れ、電腦の使徒。《PSYフレームロードΩ》^{サイ}!」
《PSYフレームロードΩ》^{オメガ}!」

《PSYフレームロードΩ》☆8 ATK2800

『エクシーズの次はシンクロ召喚!?カイザー……いや、ヘルカイザー亮!これまでの試合で見せなかった戦術を惜しみなく披露しています!!』

ちなみに新章突入にあたり、OCG次元よろしく新マスタールールに変更しようかとか駄作者が悩んでたけど……しばらくマスタールール2のままで行くそうだよ、よろしくね!

「バトルだ!PSYフレームロードΩでフェニックスガイを攻撃!」

「ふん……フェニックスガイは戦闘では破壊されない、大した被害はないね」

エド LP4000?3300

「大した自信だ。だがいつまで持つかな？俺はカードを1枚セットしてターンを終了する」

「エンドフェイズに禁じられた聖杯のエフェクトが終了する」

亮 H2 LP4000

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》(攻2500?2300) オーバーレイユニット ORU1

《PSYフレームロードΩ》(攻)

セットカード

「全く、残念だな……カイザー亮。貴方はかなりの腕前な融合の使い手と伺っていた、割りと今日の試合を楽しみにしていたんだが……」

「ククク……いつまでも同じ戦術だけでは前には進めん、彼女やあいつに追い付くには変わらねばならぬと悟っただけだ……」

いや、うん……最初に漆黒の翼翻しやがったの、ジュンコ君だしね？さらにそれを煽ったのはモモエモンだからね？……僕は悪くねえ！

「よくわからないが、またナレーションが鬱陶しいので僕の視点で行くぞ！僕のターン、ドロー!!」

え、NEXT1羽に引き続きまたリストラかい？しようがないなあ・・・間に1ゲイル挟んで視点変更とするかな。

《クルック》↑1ゲイル。

「よし、まずは《強欲な壺》を発動。カードを2枚ドロー！続いて《融合回収》フュージョンリカバリを発動、フェニックスガイの融合に使用したフェザーマンと融合をセメタリーより回収する!!」

「ならばこのタイミングでPSYフレイムロードΩのモンスター効果発動！このカード自身と相手の手札1枚をランダムに選び、次の俺のスタンバイフェイズまで除外する！俺から見て右端のカードだ！」

「ッ!? ハンデスエフェクトか！融合が除外された・・・」

『これはピンポイント！カイザー、いや、ヘルカイザー亮！融合回収からのラッシュを未然に防ぎましたーっ!!』

4分の1を見事打ち抜いてくるとはな。PSYフレームロードΩ、放つておいては厄介だ。早々に処理しなければ……

「僕はエアーマンを召喚」

《E・HERO エアーマン》☆4 ATK1800

「モンスターエフェクト発動する。エアーマン以外の「HERO」モンスターの数だけフィールドの魔法・罠カードを破壊。狙うのは貴方のリバースカードだ！」

「チツ、ヴァニティスペース《虚無空間》が破壊されたか……融合よりそれを除外したかった所だな」

ヴ、虚無空間……最近出たはいいが永続罠による特殊召喚封じが鬼畜すぎて早々に規制されたカードだったな……もし先行をとられていたら、サイバー・ドラゴン・

インフィニティに破壊を無効にされ、さらには融合召喚すらさせてもらえなかったのか……なんて殺意に満ちたデツキだ

「バトル！フェニックスガイでサイバー・ドラゴン・インフィニティを攻撃!!」

「クツ、攻撃力は互角だが……」

「お察しの通り、フェニックスガイは戦闘では破壊されない！虚構の無限を打ち砕け！
〈フェニックス・シュート〉!!」

自慢の効果を誇るシンクロ・エクシーズモンスター達を能力で劣る融合モンスター達で打ち破る……これが最高に気分がいい。

「続けてエアーマンでダイレクトアタックだ！」

「ぐおおおおおっ!?!」

亮LP4000?2200

「メインフェイズ2に以降し、カードを1枚セット。僕はこれでターンエンドだ」

エドH1 LP3300

《E・HERO フェニックスガイ》(攻)

《E・HERO エアーマン》

セツトカード

「そうこなくて、俺のタアア→ン!!このスタンバイフェイズに、除外されていたΩと貴様の融合が帰還する!《強欲な壺》による2ドロツツ!・・・生憎、光属性は引けなかったが、手札の《サイバー・ダーク・クロウ》および《サイバー・ダーク・カノン》の効果を発動お!!」

なんだ?サイバー・ダークにあんなモンスターがいたのか!?

「ククク・・・カノンの効果によりデッキの「サイバー・ダーク」モンスター、クロウの効果により「サイバー・ダーク」魔法カードをそれぞれ手札に加える・・・俺は《サイバー・ダーク・キール》と《サイバー・ダーク・インフェルノ》を手札に加え、フィー

ルド魔法《サイバー・ダーク・インフェルノ》を発動!!」

『おーつとおー! ヘルカイザー亮が発動したフィールドにより、会場が暗色の炎に包まれたーっ!!』

『ふうん、実に私ごおのおみのフィールドだあ……』

「随分と派手な演出のフィールド魔法だ、それで? 次は何を魅せてくれるんだい」

「そうあせるな……《サイバー・ダーク・キール》を召喚!! 召喚時に墓地のドラゴン族であるサイバー・ダーク・クローを装備!」

『ギシャーツ!』

《サイバー・ダーク・キール》☆4 ATK800?2400

黒蛇のようなモンスターが出現し、ドラゴン族を自らに接続して力を増す。「サイバー・ダーク」の基本戦術だな。

『レベル4のモンスターで攻撃力2400!? こいつは強力ですね!』

「バトル！サイバー・ダーク・キールでエアーマンを攻撃、そしてこの攻撃宣言時に装備されたクロウの効果を発動。エクストラデッキからモンスターを墓地に送ることができるとして……」

「クツ……」

エドLP3300?2700

「更にモンスターを破壊した際、キールは300ポイントの追加ダメージを与える!!」

エドLP2700?2400

「小癪な真似を……」

「続けてPSYフレイムロードΩでフェニックスガイを攻撃!!」

「おっと！そいつにまた飛ばれては面倒なんでね……畏発動《次元幽閉》！攻撃してきたモンスター体を除外する！」

これでハンデスの脅威からは逃れられる……そんなに異次元が好きなら、2度と帰ってくるな!

「フン、まあいい。こいつは十分に仕事をした……リバースカードを1枚セットしターンエンドだ」

亮 HI LP2200

《サイバー・ダーク・インフェルノ》(F)

《サイバー・ダーク・キール》

+ 《サイバー・ダーク・カノン》

セットカード

『このターンの攻防でライフはほぼ互角!これは勝敗が全く読めません!!』

『互角だなんてこの実況の目は節穴ネン、勝つのはマスターに決まってるのニイ』

いや、喋るなど言っただろうが駄天使。今一瞬解説がオネエになったのかと錯覚した

ぞ？

「僕のターン、ドロロー！《天使の施し》発動、3枚ドロローし……2枚を捨てる。そして魔法カード《融合》を発動！フィールドのフェニックスガイと手札の《ネフティスの鳳凰神》で融合！不死鳥の炎を纏いて昇華せよ！カモン！ノヴァマスター！！」
『トアアアッ！！』

《E・HERO ノヴァマスター》☆8 ATK 2600

ノヴァマスター……以前偶然入手したものだが、炎属性全般を融合素材にできるのは便利だ。このように「あの人」の片見が手札にきても、腐る機会が減るからな。

『腐らせるくらいなら諦めてデッキからぬけb……
被弾・無言の裏拳
フベラッツ?!』

絶対抜かん、抜くくらいならお前を破る。

『流石に酷っ?!』

「ノヴァマスター……彼女」に貫つたと、いつも誇らしげに繰り出していたな……」
 「?」なんの話かは知らないが……《ミラクル・フュージョン》発動! 墓地のフェニックスガイと天使の施しで捨てたスパークマンを除外融合! カモン! シャイニング・フェニックスガイ!」

『ハアアアツ!!』

「シャイニングフェニックスガイの攻撃力は、セメタリーの「E・HERO」の数×300ポイントアップする!」

《E・HERO シャイニング・フェニックスガイ》☆8 ATK2500?3400

「バトルフェイズ! シャイニング・フェニックスガイでサイバー・ダーク・キールにアタック! 《シャイニング・フェニックス》!!」

「サイバー・ダーク」モンスターは、装備されたドラゴン族を身代りに破壊を免れる!」

ドラゴンを露骨に盾として、「サイバー・ダーク」本体は隠れる。見ていてあまり気分がいいものではないが……

「だがダメージは受けてもらおう！」

「ぐおおおおっ!？」

亮LP2200?1200

「装備されたサイバー・ダーク・クロウが破壊された場合、墓地のサイバー・ダークモンスターであるカノンを手札に加える！」

「だが君のライフもこれで尽きる！ノヴァマスターでサイバー・ダーク・キールを攻撃だ！」

先程リバーズカードを発動する気配は無かった……勝ったか!？」

「そうはいかん、畏カード《※パワー・ウォール》を発動。デッキの上から16枚のカードを捨て、戦闘ダメージ1600を打ち消す」

「そういうながら彼はデッキからカードを引き抜いて、自分の前にばら蒔いた。それら

がバリアになったかのように攻撃のエフェクトは消滅した……

『な、なんとヘルカイザー。自分のカードをゴミグズのように盾とし敗北を免れました！しかしこれはあまりにも……』

「き、貴様……カードをなんだと思っているんだ！それでもデュエリストか!!」

「ククク……強いて言うなれば、今の俺はリベンジャー、復讐者だ。貴様に奪われたものを取り戻す為なら、手段など問わん！」

「僕が、奪った……? いったいなんの話だ!!」

「今の貴様に言っても無意味な事だ……ほうら、ノヴァマスターが戦闘でモンスターを破壊しただろう?」

「……ノヴァマスターのエフェクトでカードを1枚ドローする。これをセットしてターンエンドだ」

エド HO LP2500

《E・HERO ノヴァマスター》(攻)

《E・HERO シャイニング・フェニックスガイ》(攻3400)

セツトカード

「俺のターン！サイバー・ダーク・カノン捨て、デッキからサイバー・ダーク・エッジを手札に加える。こちらも《天使の施し》だ、カードを3枚ドロシー、2枚を捨てる。そして魔法カード……《サイバー・ダーク・インパクト！》」

「ツツ!？」

「俺の墓地にあるサイバー・ダーク・エッジ、キール、そしてホーンをデッキに戻し……」

《※鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン》を融合召喚する!!」

『ギャオオオオオツ!!』

《鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン》☆8 ATK1000

『凄まじい覇気だあ……あれが「サイバー・ダーク」の切り札だろう』

『しかし攻撃力はたったの1000、いったいどんな効果が隠されているのでしょうか!』

「サイバー・ダーク・ドラゴンも融合召喚時、墓地のドラゴン族を装備し、その攻撃力を加算する……レベル制限は無い。《F・G・D》を眠りから引きずり出す！更に墓地のカード1枚につき攻撃力が100ポイントアップする！よって……」

《鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン》 ATK1000?6000?8600

「攻撃力……8600だと!?!」

「これで終わりだ！全世界に無様な姿を晒すがいい!!へフル・ダークネス・バーストオオオ!!」

ノヴァマスターに向かい凄まじい衝撃波が迫ってくる……だが、そんな単調な攻撃が通るか！

「リバースカード、オープン！」

「無駄だ！サイバー・ダーク・インフェルノの影響下でカードを装備している「サイバー・ダーク」は、効果の対象にならず、効果では破壊されない!!」

「このカードは君のモンスターを対象とするものじゃない。罨カード《ガード・ブロック》！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

すまないな、ノヴァマスター……しかし危なかつた、仮にまた《次元幽閉》のよ
うなカードだったならあのバ火力をモロに食らって、吹き飛んでいただろう。

「姑息な延命カードを……まあいい、簡単に終わってしまったのは俺の気が晴れん。カ
ードを2枚セツトし、ターンを終了する」

亮 H0 LP1200

《サイバー・ダーク・インフェルノ》(F)

《鎧黒竜サイバー・ダーク・ドラゴン》(攻8700)

セツトカード

セツトカード

『あ、圧倒的！超耐性を持つ攻撃力9000弱のモンスターを前に、エド・フェニックス
防戦一方です！これはもはや成す術無しかーっ!』

「僕のターン……魔法カード《アドバンス・ドロウ》。シャイニング・フェニックス

ガイを生贄に、2枚ドロウする。更に《HEROの遺産》を発動。墓地のノヴァマスターとシャイニング・フェニックスガイを融合デッキに戻し、3枚ドロウ」

「なんだ。折角の壁要員を自ら処理してしまつて良いのかあ？」

「……やれやれ、彼相手に使う予定は無かつたのだがな……だが、ここまでコケにされて黙つてやられる気も毛頭ない！」

「僕は……フィールド魔法《幽獄の時計塔》を発動！」

「な、なんだ!？」

かの「ビックベン」を思わせるかのような時計塔が、その町が、サイバー・ダーク・インフェルノの世界を鎮火して現れる。

「モンスターを通常召喚……カモン！
デステニヒーロー D … HERO デビルガイ!!
 『ハアーツ!』

《D—HERO デビルガイ》☆ 3 ATK600

「D—HERO」・・・？」

「待たせたね、ヘルカイザー亮・・・本当の「HERO」の力をお見せしよう!!」

続く。

Next 5羽 それは断じて認めない

前回のあらすじ

姑息な新規を……

『カモン! 《D—HERO デビルガイ》!!』↑TV音声

《D—HERO デビルガイ》☆3 ATK600

「D・HERO」……?」

それは唐突でした。

十代君がエド君の繰り出すHEROにワクワクしたり嫉妬したり

「フェニックスガイとか……絶対あれジュンコ好きな奴じゃん、ズリーや!!」
「名前にフェニックスついてるだけじゃないですか……」

翔君がカイザーさんの言動にハラハラしたりして

「お兄さん……ついに世間に本性が露見して……」

「いや、大体お前のせいじゃないか？」

案の定ガムテープで拘束されている明日香さんは……さておき。

「ムガーツ！ムガーツ!!」

「これをさておきで済ますザウルス？」

「だって放置すると何されっかわかんねーし」

彼が新たに呼び出したHEROに、誰もが驚いたようだ。

あのカード知識ナンバーワン○の

「三沢、あのHEROは知ってるのか？」

「グウツ、本名で呼ばれたのは何羽ぶりだ……だがすまない、全然知らんぞ」

「チツ、使えんな三好」

「ダメじゃん三谷君」

「三菱先輩……」

「ムガガガ。」

「なんだこの総バツシングは!?なんで口にガムテープの奴までわざわざ間違えて呼ぶんだっ!!」

あ、はい。三城さんも知らないようです。

「全くもって未知のHEROってわけかよ!くうく、いったいどんな能力を秘めてやがるんだ?」

『待たせたね、ヘルカイザー亮……本当の「HERO」の力をお見せしよう!!デビルガイ!サイバー・ダーク・ドラゴンにアタック!ヘステニー・ロード~!!』

「馬鹿な!たかだか攻撃力600のモンスターで攻撃力8600のサイバー・ダークに攻撃を仕掛けるだっ!!」

「追い詰められてヤケになったドン?」

わざわざ新しい戦術始めようって時にそれはないでしょ……

『厳密に言えばこれは攻撃じゃない、効果の発動だ。消えろ……サイバー・ダーク・ドラゴン』

彼の合図でデビルガイが衝掌のような攻撃をすると、サイバー・ダーク・ドラゴンはあら不思議、消えてしまいました。

『ツツ!? 貴様、いったい何をした!!』

『これがデビルガイのエフェクトへステニー・ロード! 相手モンスター1体を2ターン先の未来へ飛ばすのさ……代わりにこのターンのバトルフェイズは行えないがね』

「つまりはバトルを放棄する代わりに、相手モンスター1体を処理できるわけだな」

「うーん、肝心のモンスターを除去してもバトル出来ないんじゃないツツスか?」

その辺は評価分かれそうですね、攻撃力600だから守るのも大変ですし……

『続けて魔法カード《デステニー・ドロー》を発動。手札の「D・HERO」を捨て2枚のカードをドロー！そして今セメタリーへ送ったディアボリックガイのエフエクト発動。このモンスターをゲームから除外し、同名モンスターをデッキから特殊召喚する！カモン、ディアボリックガイ!!』

『グハハハッ!』

《D・HEROディアボリックガイ》☆6 DEF800

「おおつ、また新しい奴だ!」

「レベル6で攻守800・・・」「D―HERO」は能力がトリッキーな分、全体的にステータスは低めなのかもな」

『カードを2枚セットし、ターンエンドだ』

エド H1 LP2500

《幽獄の時計塔》(F)

《D・HEROデビルガイ》(攻)

《D・HEROディアボリックガイ》(守)

セットカード

セットカード

「本当の力だの言つといて……あんなステータスの低いモンスターを並べても、お兄さんの前じゃ壁にもならないツス！」

『俺のタアーツン！』

『このスタンバイフェイズ、《幽獄の時計塔》の針がひとつ進む！』

12時を指していた時計塔の針が3時まで進みました、演出凝ってますね……フィールド魔法《次元領域》とか作ってくれないかな。

『魔法カード《※逆境の宝札》！貴様のフィールドにのみ特殊召喚されたモンスターがいる為2枚ドロロー!!……墓地の《サイバー・ドラゴン・コア》を除外し特殊能力発動、

デッキから《サイバー・ドラゴン》1体を特殊召喚する！」

《サイバー・ドラゴン》☆5 ATK2100

『そして魔法カード《パワーボンド》発動オオ！』

「来たっ！カイザーの必殺カード!!」

「これは勝負あったか!？」

『場と手札のサイバー・ドラゴン、計2体を融合させ、融合召喚!・・・全てを蹂躪し
駆逐せよ!《キメラテック・ランページ・ドラゴン》!!』

『『ギシャアーツ!!』』

《キメラテック・ランページ・ドラゴン》☆5 ATK2100?4200

『へえ、僕の知らない機械竜だ・・・まだそんな隠し弾があったなんてね』

『ククク・・・その余裕がいつまで持つかな?パワーボンドで呼び出した機械族・融合

モンスターは攻撃力が倍となる。さらにキメラテック・ランページの効果！融合素材の数まで相手の魔法・罠カードを破壊する！この時計塔も気にはなるが……対象はその2枚のリバースカードだ!!』

『大方《次元幽閉》などを警戒したようだが……残念だったな！リバース罠ダブル・オーブン！1枚目、《エターナル・ドレッド》！時計塔の針を2つ進める。2枚目、《D—フュージョン》発動!!』

『何イ!?!罠の融合カードだと!?!』

なんかカイザーさん驚いてますけど、そんな珍しいものですっけ融合罠。

『僕はフィールドのデビルガイ、ディアボリックガイを素材とし融合召喚を行う!……暗黒へと向かう「この世界」の未来へ君臨せよ!カモン! 《D—HERO デイストピアアガイ》!!』

『トアアアッ!!』

《D—HERO デイストピアガイ》☆8 DEF2400

「おおっ！カイザーのターン融合してきたすっげー!!カッケー！俺も欲しーっ!!」

十代君、感想がまるで子ども……こうゆう純粹なところがいいんでしょかね、姐さんは。

『エド・フェニックス、ここで更なる融合召喚を決めて来たー！しかしこのモンスターは……』

『ううむ。どおこおかあで……いや、どおおうみても……』

『……ペ○シm』違う！○プシマンなどではない!』

……あ、はい。皆さんが何を言いたいかは察しました。

『貴様っ！俺がペプ○マンと言い終わる前にペプシ○ンと言ったとゆう事は内心ペプシマ○と認めている証拠だろうが!!』

『ええいつ、伏せ字を徐々にずらすな意味がほぼなくなっているじゃあないか!!そして断じて飲料メーカーのイメージキャラクターなどではない!これ以上の冒読は

SE:ブザー……

《放送上で問題が発生したため、申し訳ありませんがしばらくお待ち下さい》

「……………」

「……………」

せーのっ、

「「「「なんじゃそりやーっ!?!」「」」」

《クルック〜》

5分後。

『僕はデイストピアガイのエフェクト発動！このモンスターの特召喚時にセメタリーのレベル4以下の「D—HERO」デビルガイ1体を指定、その攻撃力分の効果ダメージを与える！へスクイズ・パーム♡!!』

『ぐおっ!?!小賢しい手を・・・』

亮LP1200?600

『フフ、攻撃力1200以上の「D—HERO」が手札に無かったのが残念だよ』

「な、なんか何事もなかったかのように再開したツスね」

「案に「忘れろ」って事だろうな・・・」

「つーか何をもめてたんだ？あのHEROも普通にカツコイーじゃんか」

あ、はい。ぜひエド君本人に言って上げてください。きっと喜ぶので・・・

『だが守備力わずか2400程度では我が進撃は止められはせん！ランページの第二の

特殊能力、デツキから光属性・機械族の《超電磁タートル》、《Bーバスター・ドレイク》を墓地へ送る。そしてこのターン、2度の攻撃を可能とする!!』

『こ、攻撃力4200の2回攻撃ですつてえ?!』

司会の人ほノリノリで驚いてくれますが・・・

「まあ、カイザーなら普通だな」

「ああ、普通だ」

「普通ツスね」

「普通丼?」

普段が異常なんで、むしろ大人しく見える不思議。

1発通れば勝ちのバ火力なんですけどねあれでも・・・

『バトルだあ!キメラテック・ランページでデットリーガイを攻撃!殲滅しろ、へエボリレーション・レザルト・アナイアレイション!サンレンダア!!』

もの凄い勢いで放たれるエネルギー3発、巻き起こる爆風、あのスカしたフェニックス君も吹き飛んで……ない!?

『ふうー……悪いがDーフュージョンで呼び出した融合モンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されない!』

『馬鹿な!』

『おーつとおー! エド・フェニックス、モンスター共に無傷! ヘルカイザー亮、またもフィニッシュならず!!』

『ぬうん、まだまだ勝負はつかないようだなあああ……』

『しぶとい……リバースカード《一時休戦》発動オ! 互いに1枚ドロロー! 貴様のエンドフェイズまで、互い受けるダメージは0となる、これでパワーボンドのダメージは発生しない』

『1枚はブラフだったか……しかし、あんな一方的な攻撃を仕掛けてきておいて休戦かい? 流石はヘルカイザー、無茶をおっしやる……ドロロー!』

《D—HERO ダイヤモンドガイ》☆4 ATK1400

「〇ヨ〇ヨ立ちだな」

「〇ヨ〇ヨ立ちツスね」

「なんですかそれ!？」

『ダイヤモンドガイ、エフェクト発動! デッキトップを確認してそれが通常魔法ならセメタリーへ、違ったならば……まあそれはないか。へハードネス・アイ♡!!』
『は?』

なんか説明端折りしまね、当たるのが必然みたいな言い方で……

『《シヨートサーキット漏電》か、悪くはないな。次のターンのメインフェイズ、このカードエフェクトの発動が確定した!』

「漏電!?! あれって「電池メン」専用の魔法カードじゃ……」

「いや、彼は「効果の発動」が確定すると言っていた。電池メン3体はあくまで「発動条

件」それを無視できるわけか」

「えーと……つまり次のターン、カイザーのモンスターは全滅?!」

「フン、なるほどな。しかも「発動が確定」しているならばあの魔法効果をカウンターし無効にすることもできないわけか。地味に見えて想像以上に厄介だな」

その地味な効果の説明に何文字かけてるんですかデュエル詳しくない人向けですか……なんて事は言いづらいですね。ごめんなさい。

『……セメタリーのディアボリックガイのエフェクトを再び発動! 3体目のディアボリックガイをデツキから特殊召喚する!』

『ドアアツ!』

《D—HERO ディアボリックガイ》☆8 DEF800

『ここで魔法カード《置換融合》を発動! フィールドのダイヤモンドガイ、ディアボリックガイを素材とし融合召喚を行う! カモン! 死の闇を纏いし英雄、《D—HERO デットローガイ》!!』

『ツツ!!』

《D—HERO デットリーガイ》☆6 DEF2600

『僕はここで、デットリーガイのエフェクト発動！手札1枚を捨てることで、僕のフィールドの「D—HERO」達はエンドフェイズまでセメタリーの「D—HERO」の数×200ポイント、攻撃力が上昇する！』

《D—HEROデットリーガイ》ATK2000?2600

《D—HEROデイストピアガイ》ATK2800?3600

『ほう、攻撃力3600・・・だが我がランページ・ドラゴンにはまだまだ及ばんな』
 『まあ慌てるな。今捨てたシャドーミストのエフェクト発動、デッキから《D—HERO
 デイヴァインガイ》を手札に加える。そしてデイストピアガイのエフェクト発動！自身の攻撃力が変化している時、攻撃力を元々の数値に戻し、相手カード1枚を破壊する！対象は当然ランページ・ドラゴンだ！ヘノーブルジャステイス〜!!』

ペプ○ガイさんの掌に黒い球体が発生し、大きな大きなランページ・ドラゴンが徐々
にに吸い込まれています

「なんて吸引力だ……一家に1台欲しいな」

「掃除機扱い!?!」

『そうはいくか!墓地の罨カード《スキル・プリズナー》を発動!こいつをゲームから除
外し、対象をとるモンスター効果を無効とする!!』

「わざわざばら蒔いたカードを拾って発動するんですか!?!」

「じゃあ最初から捨てなきやいいような……」

カイザーさん、その場から消えたと思っただら落ちてるカードを高速回収し効果発動。
さながらアクション・デュエルとも呼びましようか……

『凌がれたか、まあいい。デットリーガイ、デイストピアガイ双方のカードエフェクトは
相手ターンにも発動できるからな……カードを1枚セット、ターンエンドだ』

エド H1 LP2500

《幽獄の時計塔》(9時)

《D—HEROデイストピアガイ》(守)

《D—HEROデットリーガイ》(守)

セットカード

『エド・フェニックス、「D—HERO」を召喚してから流れを掴みつばなしです!』

『あれが本当のああ奴の実力、プロのトッピーグですら仮面を被り続けてきたとはあ……』

「D—HERO」が彼の本気なのはわかりましたが……じゃあ《ネフティスの鳳凰神》はなんなんでしょう? 十代君の《ハネクリボー》のようなポジションでしょうか、可愛いい系じゃないけど。

『ぐっ……俺のタアアアン!』

『このスタンバイフェイズ、時計塔の針が更に進み12時を示す!』

時計の針が12時を刺すと、ゴーン、ゴーンと何かの訪れを表すかのように鐘を鳴らし始めました。結局、あのフィールドの効果ってなんなんでしょうね。

『こんな虚仮脅しなど俺には通用せん……。そいつらのコンボで1体を破壊するだけならば、更に攻め手を増やすまでの事！魔法発動、《死者蘇生》！蘇れ……。《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》!!』

《サイバー・ドラゴン・ノヴァ》★5 ATK2100

『ここで素材も持たないエクシーズモンスター……。そうゆう事か。デットリーガイ、エフェクト発動！手札のデイヴァインガイを捨て攻撃力上昇!!』

《D—HERO デットリーガイ》ATK2000?2800

《D—HERO デイストピアガイ》ATK2800?3600

『そしてデイストピアガイのエフェクト発動！変化した攻撃力を戻し、サイバー・ドラゴ

ン・ノヴァを破壊する！《ノーブルジャステイス》!!』

またでた暗黒掃除機、ノヴァさん吸い込まれて木端微塵・・・と、思いきや。

『そう、貴様はインフィニティへの恐怖によりそうせざるを得まい・・・サイバー・ドラゴン・ノヴァの最後の能力！相手によつて破壊された事で、EXデッキから機械族の融合モンスターを特殊召喚できる！現れる、サイバー・エンドオオ!!』

『『ギヤオオオオツ!!』』

《サイバー・エンド・ドラゴン》☆10 ATK4000

『おーつとこのタイミングで現れました！カイザー亮の象徴、サイバー・エンド・ドラゴンです！ヒール転向しても、かのエースは健在だったー!!』

『しかもエド・フェニックスウは虎の子の破壊能力を発動させてしまったああく、また形勢が逆転したようだなあ』

「さっすがカイザー！ やっぱりすげーぜ!!」

「アニキ、さっきからすげーかカッケーしか言っていないドン……」

「シンプルで素直なのが、アニキのいいトコでもあるツスから……」

「フガッ」

「単に馬鹿なだけだろ……」

『ランページ・ドラゴンの効果、デッキから《A―アサルト・コア》と《C―クラッシュ・ワイバーン》を墓地へ送り、攻撃権を2度追加する!』

「んなっ!? カイザーの奴まさか……」

『そしてえ! 墓地のアサルト・コア、バスター・ドレイク、クラッシュ・ワイバーンをゲムから除外し融・合・合・体! 来い、《ABC―ドラゴン・バスター》!!』

SE: ジャキンジャキンジャキン! テツテレッ

《ABC―ドラゴン・バスター》☆8 ATK3000

いや、最後の音……もういいです疲れてきました。姐さん、早く帰ってきて……

「やはりそいつか！おのれカイザー、俺様の十八番を奪うとは……」

「うーん、万丈目の十八番つてもうオジャマとドラゴンじゃね？」

「ああ。最近の実技を見る限りでも、ユニオンモンスターは精々生贄要員だったな」

「むしろ万丈目先輩、機械族なんか入ってたザウルス？」

「ぐっ……」

「凶星みたいですね……」

『墓地のモンスターを魔法も罫も無しに融合召喚するだど……ふざけるな！』

『ククク、こいつの融合召喚には魔法は必要ない、フィールドと墓地にパーツが揃えば容易に呼び出せるのだ。ドラゴン・バスターの能力！手札1枚を捨て、相手のカード1枚を除外する！対象は……そのリバーブスカードだ!!』

「まだ次元幽閉引きずってますね、キャラの割に慎重とゆうかなんとゆうか」

「まあ結局インフィニティは出てないし、ここでミラフォオとか踏んだら大惨事ツスから」

『そうはいくか！カウンター罠《神の通告》!!ライフ1500をコストに、モンスターエフェクトを無効にし破壊する!!』

エドLP2500?1000

うわ、出たっ……あの人モンスター効果対策し過ぎでしょう、シンクロやエクシズを目の敵にしてる感じしてるから仕方ないのかな。

「あの罠カードすつごく高かったような？」

「まあ……プロで自力で稼いでる分、一介の学生とは資金力が違うよな」

『チイ、だが憂いは払った!くたばれエド・フェニックス!サイバー・エンド!キメラテック・ランページ!総攻撃ダア!!』

あーもう、三つ首と二首の機械竜の派手な連続攻撃による爆炎で画面が真っ黒。

リバースカードもなかったし、彼は流石に終わりでしょうね、ご愁傷様です……っ

てあれ？

エドLP1000?1000

『なん．．．．全くの無傷だとお!?!』

『え、エド・フェニックスまたもや無傷！モンスターは全滅しましたが無傷です!!いったいどうゆうことだーっ!?!』

『フフフフ．．．アハハハハッ!!《幽獄の時計塔》の針が1周し、12時を刺している場合．．．僕へのあらゆる戦闘ダメージは0となる!!』

「んな無茶苦茶なっ!」

「けど本来、発動まで基本は4ターンかかる効果．．．最近のインフレ気味たフィールド魔法からしたらまともな方だろ」

さつきも見たんですがこのパターン、攻撃されて無傷! ()

あー、万丈目さんの《ユニオン格納庫》よりはマシですねー．．．全戦闘ダメージ0って凄いですけど。

『クツ、だが貴様のフィールドが壊滅したのは事実だ！次のターンで決着をつけてやる……ターンエンド！』

亮 H0 LP600

《キメラテック・ランページ・ドラゴン》(攻4200)

《サイバー・エンド・ドラゴン》(攻)

セットカード

『僕のターン、ドロツツ!!このスタンバイフェイズに、デビルガイのエフェクトにより除外されていた、サイバー・ダーク・ドラゴンが君のフィールドに戻る』

《サイバー・ダーク・ドラゴン》☆8

「そういえば、いたな……」

「すっかり忘れてたっスね」

ファイブ・ゴッド・ドラゴン

「《F・G・D》が外れて、すっかり並みの上級モンスターザウルス」

『そしておまちなか。先のターン、ダイヤモンドガイの能力により確定した《漏電》のエフェクト発動！君の自慢の、全モンスターを破壊する！！』

『『『『『ギャアアアアアアアアッ?!?!?!?!?!』』』』』』

これは酷い、首六本分だから断末魔の叫びも6倍ですね……

「まさか……お兄さん負けちゃうの!?!」

「落ち着け翔、カイザーの墓地には超電磁タートルがいる。このターンは少なくとも大丈夫なはずだ」

『僕は手札から……《サイクロン》を発動！フィールドの魔法・罠カードを破壊する！破壊するのは……《幽獄の時計塔》!!』
『なんだと！血迷ったか!!』

えっ、無敵な壁壊すんですか？

時計塔を特大の嵐が襲う、街並みを破壊していく……町一個潰すサイクロンって現実にきたら洒落にならないですよえ。

『血迷ってなどいないさ……幽獄の時計塔の針が回り12時の状態で破壊された時、そこに幽閉されていた戦士が解放される！カモン！《D—HEROドレッドガイ》!!』

『ヴォオオオツ!!』

《D—HEROドレッドガイ》☆8 ATK?

ひ、HERO? 幽閉されていた、とか明らかに悪役側じゃないですかー。

『な、なんとフィールド魔法を破壊したかと思いきやいきなり最上級モンスターを召喚だーっ!!』

『ドレッドガイの、エフェクト発動! 墓地の「D—HERO」2体を特殊召喚! へドレッツド・ウォール<!!』

《D—HEROデイストピアガイ》☆ 8 ATK2800

《D—HEROデットリーガイ》☆6 ATK2000

「せっかく苦勞して倒した融合HEROが……」

「サイクロン1枚であっさり帰ってきた！すっげ〜……」

『そしてドレッドガイの攻撃力はフィールドの全「D—HERO」の攻撃力の合計の数値となるー』

《D—HEROドレッドガイ》ATK??5800

『そんな手段でモンスターを展開してくるとは……だが俺の墓地には超電磁タートルがいる。まだ終わらせはせんぞー！』

『なんだ忘れたのか？デイストピアガイ、エフェクト発動！特殊召喚された時、墓地のデヴァインガイ1体を指定、その攻撃力1600のダメージを君に与える！ヘスクイズ・パーム！！』

『狙いははそちらであつたかあ！』

『嫌だ、俺はあ．．．負けたくないイイイ！カウンター罠《フュージョン・ガード》発動オオ！EXデッキから融合モンスターをランダムに墓地へ！効果ダメージを無効とするう!!』

あんなカード伏せてたんですか!?最初のデイストピアガイ融合時に使っていても良かったような気はしますが．．．凌ぎましたね。

『まさか効果ダメージを防ぐカードとは．．．ドレッドガイ！プレイヤーへダイレクトアタック！《プレデター・オブ・ドレッドノート》!!』

「技名凄い気取ってる割に．．．張り手！」

「セラちゃん先輩、それ言っちゃダメな奴ザウルス！」

『超電磁タートルの効果発動オ！こいつを除外し、バトルフェイズを終了させる!!』

『．．．メインフェイズ2に墓地のデイヴァインガイのエフェクト発動。僕の手札が0の時、墓地のこのカードと他の「D—HERO」を除外して2枚ドローができる。デイ

ヴァインガイとデビルガイを除外し2枚ドロロー……ターンエンドだ』

エド H2 LP1000

《D—HERODレッドガイ》(攻5800)

《D—HEROデイストピアガイ》(攻)

《D—HEROデットリーガイ》(攻)

『なんとゆうしぶとさだ……ヘルカイザー亮、君に敬意を払おう。君は間違いなく、これまで僕が戦った中で1番の強者だ』

『何をもう勝った気にいる……俺は負けん、貴様に奪われた彼女の心を奪い返すために……俺はあああ、勝あああつ！俺のタアアアン!!』

姐さんこれ見てたら今頃顔真っ赤でしょーねー。全世界放送でなにやってるんだろこの方、名前出してない分マシですけど。

『このスタンバイフェイズ！フュージョン・ガードで捨てられた《捕食植物キメラフレシ

ア》の効果発動オ！デツキから「融合」または「フュージョン」魔法カードを手札に加える・・・俺が加えるのは《サイバネティック・フュージョン・サポート》!!」

『んなつ、そんなカードが捨てられただと・・・なんて悪運の強い』

『速効魔法《サイバネティック・フュージョン・サポート》！ライフ半分をコストに、機械族融合モンスター素材を墓地から賄える！そして魔法カード・・・《パワー・ボンド》発動!!』

「2枚目っ！この土壇場で!!」

『俺は墓地のサイバー・ダーク・ドラゴン、ダーク・クロウ、カノン、さりげに落ちてたエツジとキールを融合！これが、闇を求めた俺のあがきだああ！《鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン》ツツ!!』

『グギヤオオオオツ!!』

《鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン》☆10 ATK2000

『サイバー・ダークネス・・・だと・・・』

「お兄さんが更に深い闇へ染まって行っちゃってるーっ!!?」

「もう後戻りできないそうですね・・・ご愁傷様です」

『パワーボンドの効果により当然攻撃力を倍化、更に墓地の《F・G・D》を装備してその攻撃力を得る!』

《鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン》 ATK2000?4000?9000

『攻撃力9000!これまたとんでもない化け物の登場だーっ!!』

『否、しかし・・・』

『バトルだあ!サイバー・ダークネス・ドラゴンでデットリーガイを攻撃!へネオ・ダークネス・バーストオオオ!!』

『忘れたか!デットリーガイのエフェクト、手札の1枚を捨て「D―HERO」全体の攻撃力増加!そしてデリストピアガイのエフェクト!変化した数値を戻し、フィールドのカード、サイバー・ダークネス・ドラゴンを破壊!これで僕の勝ちだ!!』

《D—HERO デイストピアガイ》(攻2800?3200?2800)

《D—HERO デットリーガイ》(攻2000?2400)

『ハハハハッ！ タイミングを見謝ったな！ サイバー・ダークネスの特殊能力！ 相手が発動したあらゆる効果を、俺の場の装備カードを墓地へ送ることで無効にする！ 消えろ、デイストピアガイ!!』

『ば、馬鹿な!!』

《鎧獄竜—サイバー・ダークネス・ドラゴン》 ATK9000?4000

《D—HERO ドレットガイ》(攻5800?2800)

『これで、終わりだああああ!!』

『チィ、仕方がない。まさかこのカードを使うことになるとは……手札の《D—HERO ダイナマイトガイ》のエフェクト発動! 「D—HERO」のバトルで発生するダメージを0にし……その後、互いに1000ポイントのダメージを受ける!!』

『……えっ?』

え、それってあの・・・

SE：ちゅどーん

『ぐわあああああつ!!?』

エド LP10000?0

亮 LP6000?0

「・・・」

「・・・」

はい、せーのっ

「「「ま、まさかの爆発オチだーっ!!?」」」

《クルツク》

「漆黒の闇より、愚鈍なる馬鹿コンビを援護したげて反逆の牙！雷鳴と共に走れ！ついでにそば振る雨に響いてさっさと働け、電光の馬鹿コンビ!!」

『ぎゃお。』

『『ついにまとめられたっ!?!』』

「「「ギヤアアアアアアアアッ!!」」」

???	???	???
L	L	L
P	P	P
2	2	2
0	0	0
0	0	0
0	?	?
?	0	0

「デュエルアカデミアへ」

続くかもしれない

Next 6羽 「あの人」に似てるんだ

前回のあらすじ

爆発オチ

「アーユーレディ?」

パッチを開け、眼前に広がる夜空に想いをよせる。

ああ、冷たい風が心地よい……

「うん!」

ボートに乗り、僕は飛び立つ。誰も僕の路を妨げる事ない、孤独な空へ。

「イイイヤツホオオウ!!」

ほんの僅かな時間だけだが、自分が鳥にでもなったかのような自由な気分がたまらない。

ああ、「あの人」とも共有したい。この感覚を……ん？

『ジュンコ殿オ！上から人が!!』

「んなアホな事言つてないでキリキリ飛びなさい！ライキリだけに」

『兄者エ……』

「あら、あれって……エド様では？」

……あ、ありのまま、今見たコトを話すぜ！へりから飛び降りてイヤツホオオウしていたら、空中で2体の鳥人みたいなのに乗った女子2名とすれ違った！

な、何を言ってるんだかさっぱりわからねーと思うが……

『マスター、なにその口調……』

《クルック》

○デュエルアカデミア構内、灯台部の灯台にて・・・

「来ましたね・・・エド・フェニックス」

「へえ、逃げずに来てくれたようだね・・・藍神セラ!!」

丸藤・・・ヘルカイザー亮とのプロでの試合の後、遊城十代に宣戦布告した僕は再びデュエルアカデミアに降り立った。

だが僕の目的は、遊城十代を下すことだけじゃない。

以前苦汁を吞まされた、この「転生者」藍神セラを今度こそ仕止めるためでもある。

「驚きましたよ・・・普通に貴方からメールが来た時は」

「ああ・・・ヘルカイザーに駄目元で聞いてみたら「なんだ貴様、ロリオンだったのか」とかなんとか言われつつ、普通に教えてくれたぞ」

「あんのバカイザー・・・ッッ！」

その時に

「ククク……この事実を彼女に伝えれば大幅なイメージダウンを与えて俺のファンにすることが……」

みたいなことを呟っていた。

「呼び出すには港の灯台がオススメだ。夜間ならまず人は寄り付かん」
なんか勘違いしてるな……まあ、いいだろう。

「今度こそ、貴様を倒すぞ「転生者」！」

「だからその呼び方……まあいいです。私が勝つたら、もう私に関わらないで下さいね」

「デュエツ「あーっ！エド様いたーっ!!!」

「えっ？」

互いにディスクを構え、いよいよベンジ開始……って時に現れたのは先程の、鳥

人っぼいのに乗って飛行していた女子二人組!?

片方は黒髪で、物腰なんかがお穢さまと言った具合だ。もう一人は茶髪で、その、なんとゆうか……

「姉さん!?!」

「……ほえっ?」

「帰って来たんですね姉さん!私……私ずっと待つてたんですからっつ!!」

「ち、ちよっ……セラちゃんパイセンどったの落ち着いて?キャラが崩壊してるわよクールになるう、一旦クールに」

「だって……だって!姉さん居なくて大変だったんですよお……ツツコミの意味で」

「ツツコミかよっ!?!」

「あの腹黒クールなセラちゃんがここまで憔悴してるなんて……アカデミアは今年度も絶好調なようですわねっ」

「もう嫌な予感しかしないけどあたしっ!?!」

「腹黒クールってなんですか!？」

あの藍神セラが茶髪の方に抱きついた……?それほど彼女達は仲が良いのか……
おい駄天使、あの二人の情報は?

『(あんなのいたかしら……あ、リストにあつたワ。黒髪の方が浜口ももえ、茶髪の方が枕田ジュンコ。ヒロインの天上院明日香の友人、とゆうか取り巻きで……まあ、言つてしまえばモブね)』

ふむ、「転生者」とは無関係か?

にしてもモブか、それにしてもあまりにも……

「まあ積もる話はあとにしましよセラちゃん。それより……エド・フェニックス!」

「は、はいっ!？」

「サイン下さい!!」

「……えっ?ああ、構わないが……」

「ジュンコさんへ」でお願いします!

「わたくしの方は「モモさんへ」でっ!!」

急に現れたと思いきや、色紙を繰り出してサインの要求か。単なるミーハーな女子か？いや、単なるミーハーが鳥人に乗って空飛ばないだろ……

「はいっ、これで良いかな？」

「キヤーツ！ありがとうございまーすっ!!」

「宝物にしますわ〜」

「姉さん達……」

藍神セラも呆れているな。興も冷めたし、彼女との決着は遊城十代のあとにでも……ん？なんだ、遠くの方から走るような音が……

「ジュ〜ン〜コオオオ!!会いたかったぜええええっ!!」

「んなっ!?!」

ゆ、遊城十代!?!何故あいつがここに!!

「行きなり何すんじゃダボがーっ!!」

「ぐわあああああつ!!?」

SE：ザツバーン

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

あの遊城十代が茶髪の女性に飛びかかって抱きつこうとした、かと思えば彼女はどこからかH A R I S E Nを取り出して！ぶん殴り！遊城十代を海の方へと吹っ飛ばした!!な、何を言ってるんだかさっぱりわからねーと思うが……

『(マスター、そのネタ2回目ヨ)』

「ブハアツ、久しぶりなのにヒデーよジュンコオ〜……」

「ヒデーよじゃないわよ！いい、いきなり飛び付いてきてなんのつもりよアンタは馬鹿なの!?!つーか帰るって連絡してなかったのになんでここにいんのよ!!」

「んなもんっ！ジュンコの匂いを感じたからに決まって……」

「変態かああああつ!!」

「グヘーツ!?!」

「こ、今度はH A R I S E Nを投げつけて追い打ちをかけたぞ!? なんなんだこいつらの関係は!!」

「あーっ! アニキが海にオチテルザウルス(白亜紀)!!」

「大方枕田に吹っ飛ばされたんだろう、いつもの事だ」

「アニキ、デリカシー無いから・・・」

次から次へと・・・駄天使い!

『(えーと、黒い制服が万丈目準。遊城十代の最初のライバル。メガネシヨタが丸藤翔、筋肉マンがティラノ剣山。この二人は遊城十代の弟分ネ)』

「あら万丈目様、お久しぶりです。レッド寮の皆様お揃いで来たんですか?」

「ああ、「ジュンコの心配だ!」とか言って急にあの馬鹿が走り出してな・・・」

「あの十代のアニキをこうもアツサリ倒すとは・・・これが噂に名高い「電光の斬撃」、

枕田ジュンコ先輩ザウルス?!」

「・・・ちよいまち、それあたしの事なん? そのアホみたいな通り名あたしの事なんか筋肉!!」

「ヒイイイ!?俺がつけたわけじゃ無いドン(290円)！」

・・・もう、なんだかどうでも良くなって来たな。

『(あらん、後ろの黒髪コンビ・・・今こっそりキスしてたワ。いいわネ、付き合ってるのかしら)』

「はあ、疲れる・・・それはそうと、エド様にもう一つだけお願いがありました〜」
「なんだい？僕にできる事なら話を聞くよ(営業スマイル)」

『(よくやるわねマスター・・・)』

すまん、フアンの前だと癖になってな・・・

「ジュンコオ！なんだよその媚びるような態度お前らしくない!!そんなにエドの事好きなのかよ!!」

「じゃかあしいわあ！アンタは少し黙ってなさいボケーツ!!」

「ぎやあああああつ!!」

「アニキーツツ!!?今引きアゲルザウルス(ジユラ紀)!!」

「ハリセン2本目っ!?どっから出したんですか姉さん!!」
「てかなんでハリセンがあんな勢いよく飛ぶの……」

し、沈んだ……あいつ、僕とデュエルする前にくたばるんじゃないか?

「ご、ゴホン!じゃあ、あたしと……その……デュエルしろよ」

「何っ!？」

「あたしが勝ったら、十代から手を退いてくれないかしら……お願い」

ふむ、全く脈絡もなしにデュエルの申込みか。

しかもあれだけ雑に扱った遊城十代を庇うような発言……さっぱりわからんな。

『(マスターは、もてる割には女心に疎いものねえ)』

何イ?!

「僕にまるでメリツトの無い話だな。じゃあ僕が勝ったら君はどうするんだい?」

「えっ!?そこまで考えて無かった……あ、あたしにできる事なら……なんでも」

「ふーん……ま、いいだろう。そこまで言うなら相手になろう」

「本当っ?!話がわかる人で良かったあ〜」

やれやれ、「転生者」を仕止めに来たのにとんだ茶番だな。まあいい、この女性には少し興味がある。あの二人を片付ける前の準備運動と行くか。

「なんだ、枕田の奴がエドとやるのか?」

「そうなんですよ、ジュンコさんったら「十代を助ける」って聞かなくて・・・」

「助ける?」よくわかんないツスね・・・」

「ゼエ、ゼエ、むしろアニキを仕止めてたドン・・・」

「あ、おかえりなさい。もう寒くなってきたのにご苦労様です」

「ゲホゲホツツ、この感覚、いつものジュンコだけ・・・けど俺より先にエドとやろうだなんてズリーぞジュンコ!!」

「フンだ、あんたはそこで大人しく見てなさい。行くわよ・・・エド・フェニックス!」

「フフツ、いいだろう。プロのタクティクス、その身を持って体感させてあげよう・・・」

姉さん!」

「デュエル!!」

Next 7羽 「久しぶりね」

前回のあらすじ

エド君とカイザーさんの試合の後、世界中継でケンカを売られた十代君でしたが楽しんでました。

そんな事よりその翌日、そのエド君から私のPDAにメールが届き、夜に灯台に呼び出されました。私の個人的情報…

あの時の雪辱を晴らさんと言わんばかりにデュエルを申し込んできたその時！現れたのは我らがジユニコ姉さんとモモエモン。

十代君を3回ぶつ飛ばすなどのアクシデントはありましたが、エドのに何故かサインをねだった後にデュエルをふっかける姉さん。果たして、どうなる事やら…

「セラちゃん真面目か！」

「まとも！？あらすじされると違和感を感じますね…」

《ドン☆》

「ね、姉さんって何よ」

「ジュンコさんエドのお姉さんだったんすか？」

「いやいや、まず国籍が違うドン」

「そもそも弟がいるなんて話一度も…あれっ？」

「ち、違う！ちよつと貴女が知りあいに似てただけだすまない!!」

クソツ、見た目や言動といいツツコミといい、あまりにも似てるからつい口に出してしまつた…冷静になれ。

あの人が…姉さんが「この世界」にいるはずが、いるはずがないんだ。

「そつ、そそそそうよねーあーびつくりした。気を取り直して、始めましょっか」

「あ、ああ」

『(なんか向こうの反応も可笑しくないカシラ?なんか汗凄しいし、黒髪のコも目を真ん丸にしてるシ…)』

「「デュエルツツ!!」」

エド LP4000

ジュンコ LP4000

「変なことを言った詫びだ。レディーファースト、先行は譲るよ」

「あらそう?あたし別に後攻でも構わないんだけど」

「そうだな…《ハーピィの狩場》が腐るからって、いつも姉さんは後攻だったっけ」

「そうそう!その対策であんたは制限の《サイクロン》の代わりに砂塵を3積みなんかしてきて…」

「ああ、でも砂塵3枚もあると腐るんだよね。結局ネフティスで吹き飛ばすし、罨のスペースも減るし…」

「んっ?」

「なくんか、話が噛み合っていないッスか?」

「ジ、ジユンコさーん! 貴女のデッキに「ハーピイ」なんか無いでしょう? 何惚けてるんですかっつ!!」

「は? 浜口、お前何を言っている」

「えっ? 普段授業のとく「あーそうだったごめんゴメーン! ちょっと寝ぼけてたわー!!」

ま、待て、なんでそんな事を知ってる?! たまたまか、偶然似たエピソードがあっただけか??

「あ、あたしのターン、ドロー! 魔法カード《闇の誘惑》、カードを2枚ドローし手札の《ダーク・シムルグ》を除外する。もう1枚、《手札抹殺》! あたしは5枚捨てて、5枚ドロー!!」

「では有り難く、僕も5枚捨て、5枚ドロー」

ほら、彼女は闇属性デッキだ。ハーピイなんか関係無い、冷静に、冷静に…

「来たっ！さあ、派手にぶっ飛ばして行くわよ！永続魔法《黒い旋風》を発動！」

「旋風きたーっ！」

「あれが何ドン？」

「見てれば解る」

「まずは《BF―そよ風のブリーズ》を召喚っ！」

『フウツ!!』

《BF―そよ風のブリーズ》☆3 ATK1100

ブラック・フェザー、黒い翼…鳥獣族か。いやいや、共通点が多いだけだ。デッキはまるで違うじゃないか…

『(どうでもいいケド、あのモンスターは黒くないわネ)』

「ここで旋風の効果！ピナーカの攻撃力1200以下の攻撃力を持つ「BF」モンスター、白夜のグラディウスを手札に加える！そしてこのコは場に「BF」が1体だけな

ら特殊召喚できる！おいで、グラディウス!!」

『ポウツ』

《BF―白夜のグラディウス》☆3 ATK800

「黒い旋風、あれがあると「BF」の回転力が大幅に増すわけだ。ガジェットもビックリな具合にな」

「ほーん、ナルホドドン」

「レベル3のグラディウスに同じくレベル3、ピナーカをチューニング！漆黒の勇士、英剣を担い気高く飛び立てっ！」

「これは…シンクロ召喚か！」

「シンクロ召喚！我らが「BF」切り込み隊長！《BF―星影のノートウング》!!」

『クアーツ!!』

《BF―星影のノートウング》☆6 ATK2400

下級モンスターは随分可愛らしいかと思えば、目つきの悪い鳥人がでてきたな。さっき空で、彼女達が乗っていた奴らの仲間か。つまり彼女は…精霊を操る力を持つのか!?

「おっと、綺麗な眉間に皺が寄ってるわよ? 考え事ならデュエルのあとにしてちよーだ。ノートウングの効果、相手プレイヤーに800ダメージ!へホーミング・ソード!!」
「うわっ!?!」

エドLP40000?32000

「剣投げるザウルス!?!」

「なんかさっきの、ジュンコさんのハリセン投げ思い出したツス」

「やめろよ翔、あれ見た目よりいてえんだぞ」

「あ、おでこ赤いですね十代君」

「まだまだ!ノートウングがいる時、あたしは「BF」モンスターをもう一度召喚できる!おいでっ、極北のブリザード!!」

『クルクル、』

《BF―極北のブリザード》☆2 ATK1300

「ブリザードの効果！墓地の「BF」1体を守備で特殊召喚！戻っといで、グラディウス
!!」

『コンッコン』

『ポウ』

《BF―白夜のグラディウス》☆3 DEF1500

「か、可愛いなそのモーション。モンスター腕に停めてディスクコンコンって」

「でっしょー！このコつたら、毎回毎回召喚の度にコレやるのが可愛くって可愛くって
…」

「なんか、仲良くねえ？」

「初対面ツスよね？」

「そのはずですが…」

「って、人の気を逸らそうだったってそうはいかないからね！レベル6の星影のノートウングにレベル2のチューナーモンスター、極北のブリザードをチューニング！

！天と地の間…煉獄より、その姿を現せ！シンクロ召喚！満足の化身《煉獄龍オーガドラグーン》!!」

『グオオオオツ!!』

《煉獄龍オーガドラグーン》☆8 ATK3000

「また物騒そうなモンスターきたーっ！」

「満足って？」

「ええ！」

「わからんザウルス!!」

煉獄龍……藍神の奴が使っていた魔王龍のようなモンスターか？ならば相応の効果は覚悟しなければな。

「カードを2枚セットし、ターンエンドよ!!」

ジュンコ H0 LP4000

《煉獄龍オーガドラグーン》(攻)

《BF―白夜のグラディウス》(守)

《黒い旋風》(∞)

セットカード

セットカード

「僕のターン、ドロー!魔法カード《天使の施し》、3枚ドローし、2枚を捨てる。フッフ、けっこうな守りを固めたようだが、運命は僕に味方しているようだ。魔法発動!《大嵐》!!このカードエフェクトにより、魔法・罠カードを全て破壊する!!」

「うわ!いきなりかよ!?!」

「このデュエルはあっさり決着が着きそうだな。さつさと終わらせて…」

「オーガドラグーンの効果発動！1ターンに1度、手札が0枚の時発動できる。魔法・罠の発動を無効にして、ぶっ壊す!!」

「何っ!?!」

「大嵐引いたぐらいで余裕かましてんじやないわよ? プロ様がそんなんでいいのかしら」

ぐっ、確かに油断していた。しかし効果を使わせたと考えれば今の1手は悪くないだろう、彼女の罠に踏み込んで行く必要があるが…

「僕はダイヤモンドガイを召喚!」

SE: バアアーツツン

《D—HERO ダイヤモンドガイ》☆4 ATK1400

「なんでジョ○ヨ立ちやねん! どのクレイジーな奴よ!!」

「グレートですぜ、こいつわあ…」

「オメーも便乗すんな!!」

「おお、これが姐御のツツコミ。俺達とは格が違うザウルス…」

「誰が姐御じゃーっ!?!」

ダイヤモンドガイー体でこれだと…デユエルが終るまでにどれだけかかるんだ
(文字数的な意味で)

「ダイヤモンドガイ、エフェクト発動! デッキトップを確認し…」

「当然、通常魔法?」

「言わせるよ! なんて君達知ってるんだい!?! …《終わりの始まり》の発動が確定した!」

「サラツと凄いの当てて来ましたね…」

これはラッキーだ、このカードはデュエル序盤で引き当てても腐るだけだからな。しかしここからどうするか、伏せの1枚は驚くほど露骨だ。わざとそう思わせるプレイン

グとゆう点も捨てがたいが警戒して損はないだろう、ならば……

「魔法カード《融合》！手札のバブルマン、フィールドのダイヤモンドガイを融合させる。カモン！《E・HERO アブソルトzero》!!」

『ハアアツ!!』

《E・HERO アブソルトzero》☆8 ATK2500

「おつ、エドもzero持つてんのか！地味に融合素材が「E・HERO」指定じゃなくて「HERO」＋水属性なんだよな」

「へえ〜」

「だからあの組合せで出るドン？」

「そして速攻魔法《融合解除》。zeroの融合を解除し、ダイヤモンドガイとバトルマーンに分離させる」

《D—HEROダイヤモンドガイ》☆4 ATK1400

《E・HEROバブルマン》☆4 DEF1200

「自分から融合を解除してくるだろ!？」

「あら嫌らしい、今のジユンコさんには1番きつい手ですわね」

「フツ、解っているようだな。アブソルートzeroのモンスターエフェクト発動!このカードがフィールドを離れた時、相手モンスターを全滅させる!凍りつけヘインブレンスエンド!!」

「効果名のセンスがどつかの女と同じだぞ!？」

「だっ、誰のコトデスカネー…」

「うう、またダイヤモンドガイに変なのめくられたら嫌だもんな…リバース罠カード《ゴッドバードアタック》!グラディウスを生贄に、ダイヤモンドガイとバブルマンを破壊するわ!!」

よし、読み通りゴッドバードアタックだったか。これで僕もモンスターを失ったが厄

介なシンクロモンスターも突破できた、わざとりバースカードを伏せてから zero の特攻、もしくはそのままグラディウスを攻撃でも良かったが…

「オーガ・ドラグーンは破壊されちゃうけど…罠カード《シャドー・インパルス》を発動！シンクロモンスターが破壊された時、破壊されたのと同じレベル・種族・属性のコを特殊召喚できるわ。漆黒の風纏い、末世より飛翔せよ！《玄翼竜ブラック・フェザー》!!」

『キュオオオッ!』

《玄翼竜ブラック・フェザー》☆8 ATK2800

「なんだと!?また新たなシンクロモンスターが!!」

「フフン、プロ様でもちよーっと予想外だったよーね?さ、こっからどうするわけ?」

挑発的だな、まあその手には乗らんさ。

「では、先程貴女から頂いたプレゼントを有効活用しようかな。メインフェイズ2に入りカードを1枚セット。そしてセメタリーからデイヴァインガイのエフェクト発動!

手札0の時、自身と他の「D—HERO」を除外して2枚ドローができる！」

「あちやあ、抹殺はやっぱ不味かったわね」

「今更遅いさ、ダंकガイとデイヴァインガイを除外し、2枚ドロー!!ふむ・・・更にセメタリーのディアボリックガイ、エフェクト発動！自身を除外し、同名モンスターをデッキより特殊召喚する、カモン！ディアボリックガイ!!」

『ダアーツ!』

《D—HERO ディアボリックガイ》☆6 DEF800

「カードを1枚セット、これで僕のターンは終了だ」

エド H1 L3200

《D—HERO ディアボリックガイ》(守)

セットカード

セットカード

「ドローしたはいいけど、結局壁を出しただけドン？」

「上級モンスタ―が残った姐御のが有利ツスね！」

「馬鹿が、貴様達はこの前の試合を観てただろ」

「わたくし達、生で観れませんでしたわ・・・」

「そうね、生で観たかった・・・っておいこら翔君、呼び方伝染してるんだけどやめてくれない？」

「どつちに転んでも僕には姉貴分なんで、今のうちに慣れようかなって・・・」

「ああ・・・」

「う、うん？・・・あたしのターン、ドローツ！墓地のゼピュロスの効果！場の旋風を手札に戻して特殊召喚！！その時あたしに400のダメージよ」

『シャツ！』

《BF―精鋭のゼピュロス》☆4 ATK1600

「この瞬間！玄翼竜ブラック・フェザーの効果発動！あたしにダメージが入った時、デッ

キの上からカードを5枚墓地へ送り、その中にモンスターがいたら攻撃力400アップ
 !当然、5枚も落とせば1枚はいるわよね」

《玄翼竜ブラック・フェザー》ATK2800↓3200

「ふむ?さっきの煉獄竜よりは随分地味だが、悪くないエフェクトだな」

セメタリーにカードが増える、すなわち可能性が増えるわけだしな。今のゼピュロス
 のようなカードが多いなら尚更だ。

「あら、流石にわかってんじゃない。バトル!ゼピュロスでディアボリックガイに攻撃
 !!」

「そうはいかないな!僕もセメタリーからモンスターエフェクト発動だ、カモン!《D—
 HEROドリームガイ》!!」

『イヒヒッ』

《D—HEROドリームガイ》☆1 DEF600

「ドリームガイは「D—HERO」がバトルするダメージ計算時に特殊召喚でき、そのバトルで「D—HERO」は破壊されない!!」

ドリームガイが、ディアボリックガイとゼピュロスの間に入り込み邪魔をする。名前の割に物理的に止めるんだよなこいつ…

「あんたの最初の手札、墓地効果多すぎんでしょうが！あたしが抹殺しなかったら事故だったわよね、完全に詰まっていたよね!？」

「さあ？なんのことだかさっぱりわからないな」

その場合、デッキトップが天使の施しだったな、少しきつかったかもしれない。

「にやつろう…ブラック・フェザーでドリームガイに攻撃よ！〈ブラック・レイジ・エントリー〉!!」

「要は「たいあたり」ですわ!」

「やめーや!!」

「罨カード《D―フュージョン》発動! 「D―HERO」1体を融合召喚する!! 暗黒の未
来へ君臨せよ! カモン! 《D―HERO デイストピアガイ》!!」

『トアアツ!!』

《D―HERO デイストピアガイ》☆8 DEF2400

「うっ、綺麗な流れでだすわね…」

「でた! カイザー戦でみせてた相手ターン融合だ! やつぱりかっけー!!」

「でもやつぱりペプ○…なんでもないっス」

空気読めよ。 って目線×5

「デイストピアガイ、エフェクト発動! 特殊召喚時、セメタリーのレベル4以下の「D―
HERO」、ダイヤモンドガイを選択、その攻撃力分のダメージを与える! ヘスクイズ・
パーム<!!」

「きゃあああっ!!」

ジュンコLP3600↓2200

「いったたた…バトルは中止よ。カードを1枚セット！ターンエンド!!」

ジュンコ H1 LP2200

《玄翼竜ブラック・フェザー》(攻)

《BF―精鋭のゼピュロス》(攻)

セットカード

「ならば…エンドフェイズにリバースオーブン！永続罫《リビンググデッドの呼び声》!!セメタリーからモンスターを特殊召喚！力を貸してくれ…《ネフティスの鳳凰神》!!」

『キュオオオオツ!!』

《ネフティスの鳳凰神》☆8 ATK2400

初手に固まっていた時々はどうしてくれようかと思っただが、相手が手札抹殺をしてく

れた以上最善クラスの手札だったとも言えるな。それにしても…

「ふつくしい…」

「じ、ジュンコさくらん…：そういえばエド様に訊きたい事があつたのでは？」

「あつ、そうだったわ。ねえ貴方、過去の試合のデータ見せて貰ったんだけど…：色んなデッキ使つても、ネフティスが絶対入っているのはどうして？：名前繋がり？」

何を急に…：他人に言つても仕方ないことだ。まあ彼女はやけにあの人にそっくりだしな…

「僕が「D—HERO」を入手し使い始めるより以前に、大切な人から貰つた思い出の品とゆうだけさ…」

「へ、へえ…：因みに、それあたしにそっくりだったりする？」

「…ああ、まるで瓜二つだよ」

「…」

「…」

「あーつつつつ!!!」

「「「えっ?」」」

「隙ありい!ちよつとおいとまするわよつ、こいつは貫^エつていくわ!!」

「「「ええええええっ!」」」

《クルツク》

「ぜえ、ぜえ…ここまで来れば、大丈夫でしょ…」

あ、ありのままに起こったことを話すぜ!急に彼女が大声を出して明後日の方向を指

したと思えば、回りの人間や僕が虚を着かれています間に僕を抱えて全力で走り去った！
な、何を言ってるんだかわからないと思うがこれは事実上だ…あと、ちよつといい匂いがした。

『(マスターOCHITUKE! そのネタは3回目ヨン!!)』

「い、いきなり何をするんだ君は!?!とゆうかよく男一人抱えてこんなに走れるなここどこだ!!」

「火山の麓…そんな事はどうでもいいのよ…」

「え…ちよつ、待っ…」

誘拐されたと思いきや、なんと突然のハ…ハグ。

なななななんだこれは! まるで意味がわからない!!

「こんなに…こんなに大きくなったあんたに逢えるなんて嘘みたい。久しぶりね…」

「すー君」

「隼子…姉さん?」

つづく。

Next 8羽 「似てる二人」はなんとやら

あの頃の事は、もう臆気にしか覚えていない。

…いや、思い出すのを拒んでいるだけだ。

それだけ僕は、自分の弱さが嫌いだった。

幼い頃から病弱だった僕は、ろくに学校にもいけず家に引きこもりがちで、外で友人と遊んだ…なんてこともなかった。

毎日毎日、自室のベッドから見える公園で、無邪気に遊ぶ…

「ククク…お前一人でこの俺に勝てると思ったか、シユンコオ!!」

「くう…このあたしが、負けるなんて…」

「俺は慈悲深いからな、もう一度チャンスをやろう…モモと二人がかりでかかってきな
！」

無邪気…

「そんなつ、バケモノ ○ なあなた方の戦場にこんなか弱い女子を放り投げる気ですか、トーヤ先輩!!」

「だれがバケモノじゃこらー! よーし、モモあんた前衛な。激しく動かないでいいから、ちよーつと危ういコースをボレー的な感じで返すだけでいいから」

「し、シュンちゃん…審判がいなくなりますよ!」

「あたしが負けてジューズ奢らされてもいいっての!?! モモの馬鹿っ!! 今月あと300円なのにつ」

「ええ…」

「俺達の闘バドミントンいに審判など不要! いくぞつ、シュン! モモオ!!」

「デュエルツツ!!」

「なんで掛け声それなんですか!?! これただのバドミントンですよねえ…」

無邪気…? に遊ぶ、ひとつ上の姉の姿を追いかけていた。

勝ち気で、活発で、風邪すら滅多にひかない。何もかも僕とは正反対の彼女を、怨めしくも感じていた。姉も薄々それを感じていたのか、僕とはなるべく関わらないように過ごしていた。

ある日、姉が変わったものを買ってきた。

「遊戯王デュエルモンスターズ、ストラクチャーデッキ―烈風の覇者―…なんだこれ」
「あつ、すー君起きてる。どうかしたの?」

因みに、すー君とは僕の事だ。

「…姉さんこそ、これってカードゲームだろ?こんなもの買ってきてどうしたんだ」
「トーヤの奴がね、昔やってたから皆でやってみないかって…うわ、なんかキモイの出した。《アルティメット・インセクトLV5》?よし、トーヤに押し付けよう…」

他にも適当にカードパックを買ったらしく、それを開封しながら楽しそうに語る。

トーヤ…トーヤトーヤと、いつもあんたはそいつの話ばかりだ。僕には構わないくせに…

「うーん、適当に買ったからなあ…あつ、目玉つぽいのが出た! 《ネフティスの鳳凰神》
だって、不死鳥よ不死鳥! カッコよくない?!」

「う、うん……」

不死鳥つて、僕に対する当て付けか何かか？ 昔少し学校に行けてた頃、名前をネタにいじめられていた事を知ってるくせに……

「これが欲しかったのよね……はいこれ、すー君にあげる」

「はあっ？これが欲しかったんじゃないの、「隼子姉さん」」

「だって、これならあんたも遊べるかなって……一緒にデュエル初めましょ？「朱雀」」

それから、僕の見る景色が少しずつ変わっていった。

姉の名前は松田隼子、僕の名前は……松田朱雀。通称「すー君」だ。

前回のあらすじ

えっ？

「えっ…本当に姉さん？本気で本物の隼子姉さん??」

「なによ、信じられない訳？」

「だ、だって姉さんは…」

から。エド君は信じられないでいた、当然だ。彼はジユンコ君より遙か前に死んでいたのだ。

自分が今生きる世界に、彼女がいるとは思いつかなかったはだろう。

「あら、だったらあたしでしかしりえない情報を…ここにあげましょうか？」

「えっ？」

「あんたが実は9歳までおね○よしてたとか!!」

「ぐはっ！」

「初恋の人は幼稚園の先生だったとか!!」

「うぐっ!？」

「しまいにや夜寝る時は、熊のぬいぐるみを抱いていた。とかよ!!」
「ぐわあああああつ!!」

エドLP3200↓0

「どうよ…なんならまだまだネタがあるわよお? 例えばある夏の夜…」

『も、モウヤメテ御姉様! とつくにマスターのライフは0ヨ! もう勝負はついたのでヨ!!』
「ああん? なにアンタこのコのお付き精霊? 筋肉ムキムキマッチョメンで翼が生えてるオ
ネエとか…うちのホーク・ジヨーとキヤラ被ってんのよ出直してきなさい!!」

『ガーン…』

「くっ…この容赦の無さ、間違いなく姉さんだ…だが、弱みを握っているのが自分だけだ
と思うなよ!」

「ツツ!」

「中学入るまでは短髪過ぎて男子と見分けがつかなかったとか!」

「むっ」

「の、わりにはぬいぐるみをたくさん持っていて、それ全てに名前をつけてたとか！」
「ぐううっ…」

「普段口喧嘩ばかりしてた割に…ケータイの待ち受けがト^あーヤ兄^{馬鹿}イだったとか!!」
「ぎゃあああつ！それ1番の黒歴史イイイ!!」

ジュンコLP2200↓0

『じ、ジュンコ殿オオオ?!?!おのれ、我が主に根も葉もない罵詈雑言(!?)を浴びせおつて…貴様あ、ただではすまさんぞ!!』

「五月蠅いぞ似非侍！お前さつきタクシーにされてた奴だろう…乗り物パシリがいちいち指図するな、唐○げにするぞ!!」

『ガーン…ノリモノパシリ…』

《クルツク》

「ぜえ、ぜえ……このままじゃ埒が明かないわね……」

「はあ、はあ……そうだな、互いに精神をけずるだけでデメリットしかない……」

「やはりここは、」

「あの頃のように」

「デュエルで語るしかない!!」

やあ皆久しぶり！ナレーターBだよ！今回は僕が地の文を担当するね！

こいつら、何を言ってるやがる……と、読者の皆さんは思うだろう。だがこの（元・松田）姉弟にはデュエルが一番丁度良い決着の付け方だった。

リアルファイトでは病弱虚弱弟と凶悪鬼畜姉では話にならないし……かといって頭脳戦では、脳ミソ鳥頭のジункコ君は手も足も出なかった。

つまり……運とプレイング、ついでに愛と根性その他もろもろが絡むデュエルこそ、彼らにとっては一番平等なきよーだいげんか。だったのだ！

……まあ、実は弟君の方が大分強かったのだが。

「だれが鳥頭だこらー！てめつ、ナレーターBって……正体バレバレじゃねーかどこにいのよさっさと出てこいぶっ飛ばす!!」

「病弱虚弱はいくらなんでも言い過ぎだろう！人の傷口に塩どころかタバスコ塗りなきてるぞこのナレーション!!」

はっはっはっ。僕はあくまでナレーション、ただの地の文であつて君たちは何事もなかつたかのように話を進めなくてはならない！さあ、周りには誰もいないのだから思う存分語り合うがいいさ!!

「めんどくせつ！このナレーション滅茶苦茶めんどくせつ!!」

「仕方ない、いちいち突っ込んでいたらそれだけで1羽使つてしまいそうだしな…そんなわけで、僕のターンから再開だ！」

あ、茶番フェイズ長かったので一応…フィールドの状況を改めて表記しておくよ！
「自由かつ！」

ジュンコ H1 LP2200

《玄翼竜ブラック・フェザー》(攻3200)

《BF―精鋭のゼピュロス》(攻1600)

セツトカード

エド H1 L3200

《D—HERO デイストピアガイ》(攻2800)

《ネフティスの鳳凰神》(攻2400)

+ 《リビングデッドの呼び声》(永続)

「僕のターン…ドロー！メインフェイズに前のターン、ダイヤモンドガイのエフェクトでセメタリーに送った《終わりの始まり》のエフェクトのみを発動！デツキから3枚ドローできる!!」

インチキドローも大概にしやがれ！って言いたくなるね…それより、エフェクトとかセメタリーとか言いにくくないのかな？むしろ恥ずかしくない？

「ずっとこうやってデュエルしてきたから仕方ないだろう！いちいち揚げ足をとるな本っ当に面倒くさいなっ!!」

「ああ、気にしないようにしてきたのに、あたしも気になってきた…」

「ほらーっ！本編に影響が出てるじゃないか普通に地の文に徹してくれ!!」

はいはい、エド君がダイヤモンドガイのエフェクトで3枚ドロしましたー…

「雑っ!?!」

「急に雑になりすぎだろーがもうやだこのナレーションBAKA!」

『ああ、マスター…すっごくイキイキしてる。わたし嬉しいワ…』

『あれが、楽しそうなのか!?!』

「あーもう…一気に行くぞ!ディアボリックガイのエフェクト発動!自身を除外し、最後のディアボリックガイを特殊召喚する!カモン、ディアボリックガイ!!」

《D—HEROディアボリックガイ》☆6 DEF800

「そして手札からっ!2枚目の《融合》発動!ディアボリックガイと手札のダッシュユガイを融合!カモン!死の闇を誘いしHERO…《D—HERO デットリーガイ》!!」

『ヌウウン…』

《D—HERO デットリーガイ》☆6 ATK2000

「うっわ、ナチュラルに融合2体揃えてきたし…」

デイストピアガイとデットリーガイ、この2体の融合「D—HERO」の効果を合わせて攻めるのが、今の彼の基本戦術のようだね。

下級の攻撃力が不足しているから、手っ取り早く融合してガンガン行こうぜスタイルになったのかな？なるほどなるほど…

「デットリーガイ、エフェクト発動！手札1枚を捨て、セメタリーの「D—HERO」達の数×200ポイント、フィールドの「D—HERO」達の攻撃力をアップさせる、《デットリー・チャージ》!!」

《D—HERO デットリーガイ》 ATK2000↓2600

《D—HERO デイストピアガイ》 ATK2800↓3400

「そしてデイストピアガイのエフェクト発動！変化した攻撃力を元々の数値に戻し、フィールド上のカード1枚を破壊する、対象は玄翼竜だ！ヘノーブルジャステイス〜!!」

… 万能吸引機、もといデイストピアガイの能力でブラック・フェザーを掃除にかかるが

「させないし！リバーズ罨カード《迷い風》発動！特殊召喚モンスターであるデイストピアガイの攻撃力を半分にして、効果を無効にするわ!!」

《D—HERO デイストピアガイ》 ATK3400↓1700

「《収縮》の上位版、しかも永続だど!?これはきついな…」

「ふふん、これじゃ玄翼竜は突破口できないでしょ。大人しくターンエンドしてもいいのよ?」

「それはお断りだ。フィールド魔法《ダーク・シテイ》発動!」

「嘘っ!？」

マイナーなカードだろうから端的に説明しよう、スカイスクレーパーの「D—HERO」版である。しかし原作版スクレーパーと違い、こちらは原作でも攻撃した時のみの上昇となっているぞ。

「バトルフェイズ！デットリーガイで玄翼竜ブラック・フェザーを攻撃！へデットリー・インパルス！！」

《D—HEROデットリーガイ》 ATK 2600 ↓ 3600

ジュンコLP 2200 ↓ 1800

「くっ、まさかの正面突破してくるなんて…けど玄翼竜の効果は自身が破壊される時も適用されるわ！デッキの上から5枚を墓地へ送る！」

「構わない！デリストピアガイで精鋭のゼピュロスを攻撃！へデリストピア・ブローツ！！」

「きやああっ!？」

ジュンコLP1800↓1700

「これでフィニッシュだ！ネフティスの鳳凰神でダイレクト…」

「フィニッシュだ！…じゃないわ!!墓地の《HC―サウザンド・ブレード》効果発動！戦闘ダメージを受けた時、墓地から攻撃表示で特殊召喚!!」

《HC―サウザンド・ブレード》☆4 ATK1300

「むっ…そんなモンスターを入れていたのか。他にも墓地から発動するカードは多そうだな…ネフティスでサウザンド・ブレードにアタック！〈フェニックス・プロミネンス〉!!」

「それたしか大徳寺先生がっ…てきやああっ!!」

ジュンコLP1700↓600

「メインフェイズ2に移行、

魔法カード《マジック・プランター》発動！リビングデッドを破棄し、2枚ドロウ！！
…リビングデッドの対象だったネフティスは破壊される…すまないな、ネフティス」
『キユオオウ…』

「なんか、想像以上に大切にしてくれちゃってるけど…あんた、そんなにあたしの事好きだったの？」

「なっ、違っ…これは前世からの縁の品として大切にしていただけであってだなっ!!」
「本当に…?」

『えっ、マスター毎日磨いたりするくらい大事にしてたわよネエ』

「余計な、事を、言うなっ!!」

『フベラツ!? 顔面ストレートツツ!』

余談だがエド君に吹っ飛ばされた駄天使を見てライキリは思った。『あ、こいつ自分と同じポジションだな』と…

「それを言うなら姉さんだっけさつき…僕にいきなり抱き付いてきたじゃないか!」

「そら…もう会えないと思ってたあんたに再開できたんだから…嬉しかったに決まっ

てんでしょお姉ちゃんなめんなっ!!」

『逆ギレ!?!』

『ジyunコ殿がおかしな方向につ!!』

「あーもう…魔法カード《大欲な壺》発動! 除外されてるカード3枚、ディアボリックガイ2枚とデイヴァインガイをデッキに戻し、1枚ドロウする! そして手札の《D—HERO ダーク・エンジェル》のエフェクト発動! この駄天使を捨て、なんだかんだで相手フィールドに特殊召喚する。逝ってこい駄天使!!」

『この扱いが、くせになるウ!』

《D—HERO ダーク・エンジェル》☆1 ATK0

「げっ! こっちきたし…」

「フフフ、僕からのプレゼントさ。ただしそいつがフィールドにいる限り、コントローラーが発動した魔法エフェクトは無効とされ破壊されるけどね」

「いつらねーっ!?! さっさと向こう帰りなさいよマゾ駄天使ツッ!!」

『ああんっ! きょうだい揃って責めがキツくてイイわあ…』

「本気で何かいつキモッツ!?」

またライキリは思った。うん、こいつと同じ扱いだけは嫌だ。

「ハッハッハ、激しく同意だよ…カードを一枚セットする、エンドフェイズにデットリーガイのエフェクトは終了、これで僕はターンエンドだ。さ、せいぜい足掻いてみてくれ、ねーさん」

エド H0 LP3200

《ダーク・シテイ》(F)

《D—HERO デイストピアガイ》(攻1700)

《D—HERO デットリーガイ》(攻2600↓2000)

セットカード

「ああ、そういえば…僕が勝ったら貴女にできる事でなんでもやってくれませんか？」「うっわ、変なタイミングで変な事思い出してきやがった…何かご希望でも？」

あ、一応読者の皆に言っとくけどうちR—15だからね。

ちよつとエツチな展開を期待した人はハリセンが飛んで来るから気をつける！：
まあ、色気皆無なジュンコ君に限ってそれはないか。

「誰が色気皆無じゃほつとけーっ！聞こえてんのがナレーターB！おまつ、帰ってきたら覚えてなさいよ!!」

「…よし、じゃあ姉さんには僕のマネージャーでもやつてもらおうかな、1ヶ月くらい」
「なんでよ！あんた確かマネージャーいたる有名な奴!!」

因みにこれは、皆大好き斎王琢磨君の事である。まあ読者の皆さんはだいたいわかるよね？

「いや、ねえ…彼、占いばかりで、マネージャーらしい業務ほとんどやらないし…ぶつちやけ姉さんも、プロの世界を間近で見れていい勉強になるんじゃないか？」

「ええ…これまた公欠取れそんな内容なのが辛い…あたし帰ってきたばかりなのに…」

クロノス臨時→イ校長なら喜んで送り出しそんな内容である…エド君へのご機嫌と

りも兼ねて。

『マスターぶつちやけ、せつかく会えた御姉様と別れたくないだけなんj…』

「ふんっ!!」

ぎゃあああつ!!?目がっ、目があああつ!!』

エド君は駄天使の本体を、カード奴の顔面に向かい放った!ものすごく痛そうだ!!

「ふん…いいわよ、乗ってあげる。けどねえ…ライフ600にして魔法封じた程度で、勝ったと思ったら大間違いよ!あたしのっターン!!」

しかし茶番フェイズが長すぎないかねジュンコ君!まだ4ターン目なんだが?

「誰のせい(だ)よ!!」

フウツツ、流石きようだい息びったりいゝ。

「うざっ。行くわよ！チューナーモンスター、《BF―東雲のコチ》を召喚！」

《BF―東雲のコチ》☆4 ATK700

「あんた邪魔！レベル1の駄天使に、レベル4のコチをチューニング!!黒き烈風よ、絆を紡ぐ追い風となれ！シンクロ召喚！飛び立て、《A BF―五月雨のソハヤ》!!」

『タアッ』

《A BF―五月雨のソハヤ》☆5 ATK1500

「チツ、詰めの一手にと思ったのだが…結局役に立たん奴だ」

『ああ…ワタシの味方が誰もいない…だがそれがイイツツ!!』

「バカはほつといて先進めるわよ。ソハヤの効果、「BF」を素材とした場合チューナーとして扱え、召喚時に墓地から「A BF」を復活させる！来なさい《A BF―霧隠のクナイ》!!」

《A BF―霧雨のクナイ》☆5 ATK2100

「レベル5のモンスターが2体…いや、」

「クナイの効果！フィールドのシンクロモンスターのレベルを1〜8の任意の数値に変更できる！ソハヤのレベルを2に変更し、レベル5のクナイにチューニング！」

《A BF―五月雨のソハヤ》☆5↓2

「汝、率いしは我が漆黒の同胞。シンクロ召喚！《BF―T 漆黒のホーク・ジョー》!!」
『あらん、まさかの出番が来たわ』

《BF―T 漆黒のホーク・ジョー》☆7 ATK2600

「どーよ、これがうちのオネエ担当！あんたの駄天使より攻撃力、オネエ力、ツツコミ力すべてにおいて上回っているわ!!」

「そこ張り合う必要あったのか!？」

『アタシそんな事の為に呼ばれた訳!？』

「そ、そんなわけないじゃない…ホーク・ジョーの効果発動！墓地のレベル5以上の鳥獣

族、ノートウングを復活させる！へブラック・リボーン！！」

《BF―星影のノートウング》☆6 ATK2400

「ノートウング効果発動！特殊召喚時、あんたとデイストピアガイに800ダメージを与えるわ！へホーミング・ソード！！」

エドLP3200↓2400

《D―HERO デイストピアガイ》ATK1700↓900

「クツ、シンクロ召喚時に限定されないのか…だがこの程度、僕の優勢に変わりは無いね！！」

「あら、そう…だったらまだまだ展開してあげるわよ！

墓地の《BF―大杯のヴァーユ》、効果発動！自身と他の「BF」を除外し、墓地シンクロを行うわ！墓地の《BF―漆黒のエルフェン》にヴァーユをチューニング！漆黒の翼濡らし、そぼ降る雨に響け、雷鳴の一撃！シンクロ召喚…突き抜ける！《A BF―涙雨のチドリ》！！」

『うおおおっ！兄者より先につ、参・上！』『解せぬ』

《A BF―涙雨のチドリ》☆7 ATK2600

「こいつは…乗り物にしてたもう1体!? 単なる色違いでは無かったのか!」

『失礼な! 双子ゆえに仕方ないがれっきとした別の個体だ!!』

「あ、あんたら双子だったん…まあそんな事はさておき、ヴァーユの効果で呼び出したチドリの効果は無効になるわ。けどまだよ! 墓地の《グローアップ・バルブ》効果! デュエル中1度だけ、デッキトップのカード1枚をコストに特殊召喚できる!」

《グローアップ・バルブ》☆1 DEF100

「レベル1の弱小モンスター…いや、チューナーか!」

「そうゆうこと…さあ、派手にぶっ飛ばすわよ! レベル6のノートウングにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング! 漆黒の翼翻し、雷鳴と共に疾走れ! 電光の斬撃! シンクロ召喚! 降り注げ、《A BF―驟雨のライキリ》!!」

『我、推参!!』

《A BF―驟雨のライキリ》☆7 ATK2600

「見さらせ！これがあたしのデッキの主戦力、「BF」シンクロ三銃士よ!!」
『『そんな呼ばれかた初めてされましたが!!?』』

ジュンコ君、弟君の前で無意識に張り切っちゃっているようで…これ翌日とかに恥ずかしくなってくる奴だよな。

「魔法が使えず、実質手札1枚の状況からここまでの展開を…」

「あたしのエース、ライキリの力をご覧あれ！1ターンに一度、他の「BF」の数だけフィールド上のカードを破壊する！現在、フィールドにはホーク・ジヨールとチドリの2体！破壊対象はデットリーガイとセットカード！ヘライトニング・エッジ!!」

『チエストオオオ!!』

二閃の雷刃がエド君のカードを襲う、これが決まれば彼のフィールドは壊滅的。けれど…

「ここまでは見事だったよ、姉さん…だが、勝つのは僕だ！リバーズカードオープン！罠カード《戦線復帰》!!」

「むっ、最近出たリビデの上位ね…けれどあたしの「BF」達に対抗できるモンスターが落ちていたかしら？」

「フツ、プロは常に先を見越して戦略を練るものだ。戦線復帰のエフェクトにより、セメタリーからモンスターを特殊召喚！蘇れ…《D—HERO ドレッドガイ》!!」

『うがあああああつ!!』

《D—HERO ドレッドガイ》☆8 ATK?

「うっげ!？」

「その反応、よく覚えてるようだね…ドレッドガイのエフェクト発動！へドレッド・ウバリア〜!!」

『ああつ！拙者の攻撃が弾かれた!?!』

「ドレッドガイの特殊召喚に成功したターン、僕の「D—HERO」達は戦闘・効果では破壊されず、バトルダメージも0となる。せっかく張り切って展開してくれたけど、無

駄に終わっちゃったねえ…」

「くっ…ターン…エンドよ」

ジュンコ H1 LP600

《BF—T 漆黒のホーク・ジョー》(攻2600)

《A BF—涙雨のチドリ》(攻2600)

《A BF—驟雨のライキリ》(攻2600)

「僕のターン、ドロロー！このスタンバイフェイズ、前のターンにリビングデッドのデメリットにより破壊されたネフティスの鳳凰神が復活する！」

『キュオオオオッ！』

《ネフティスの鳳凰神》☆8 ATK2400

「特殊召喚時、エフェクト発動！魔法・罫カードを全て破壊する！といっても僕の《ダーク・シテイ》だけなんだが…《D—HERO デイシジョンガイ》を召喚！」

《D—HERO デイシジョンガイ》☆4 ATK1600

「さて、ドレッドガイの攻撃力はフィールドの全ての「D—HERO」の攻撃値の合計となる。よって現在の攻撃力は…」

《D—HERO ドレッドガイ》ATK? ↓4600

「攻撃力、4600…」

「姉さんには聞きたいことがまだまだ沢山あるが…一先ずこれでフィニッシュだ！ドレッドガイで驟雨のライキリを攻撃!!」

さて諸君！突然だがここで

、原作のおさらいだ！

『よりによつて拙者あ!?!』

エド君のドレッドガイは、十代君を洗脳(?)したいがために某タクマクンに「占い」

と称してよくわからない力を埋め込まれていたよね！

「へブレデター・オブ・ドレッドノート！！」

ハネクリボーの加護のおかげだかなんだかで、十代君はカードが真っ白に見える、デュエルができなくなったで済んだけど…

『ぐあああああつ!!?』

「きゃああああつ!!」

そのよくわからない力を、十代君以外の人間が受けていたら…どうなってしまうんだろうね？

ジュンコLP600↓0

WIN エド

「僕の勝ちだ。まあそう気に病むことはないさ姉さん。プロである僕相手に、よく善戦した方だと…」

「……………」

「あ、あれ？姉さん…姉さん!!？」

ドレッドガイの攻撃により、意識を奪われたジュンコ君！まさかのシリアス展開か！？
…次回へ続く!!

Next 9羽 「ムカツクんだよ」

エド・フェニックス君飛来の翌日：なんだかんだで予定通り、十代君とエド君がデューエルをする事になった。

なつたのですが…

「すーく…じゃなかった。エド、気をつけてね…姉さん無茶しないか心配…」

「あ、ああ…問題ないよ姉さん。僕は負けない、病弱だった昔の僕と同じにしないでくれ」

「ふふふ、頼もしい事言ってくれちゃって…」

「どうゆう、事だ…」

ジュンコ姉さんがエド君を夜の闇に連れ去って（意味深）皆さんは二人を見失ったまま今日を迎えたのですが…

「ジュンコがエドのファンとは以前から知ってたんだけど…なんなのあれ」

「おい、浜口。あの二人に一体なにがあった」

「いや、その…わたくしも今初めて見たので…」

完全にあちら側。十代君を庇おう（？）と果敢にエド君にデュエルを申し込んだとは思えないくらい…もうなんか仲良しとゆうか、デレデレとゆうか…あんなジュンコ姉さん、見たくありませんでした。

「おまつ…ジュンコオ！なんでお前がそっちの応援!?ダチの俺より昨日あったばかりの奴を優先するのかよ!!つか、べたべたし過ぎ!!」

「十代ボーイがあんなに取り乱すのは珍しいノーネ…」

「今ならレッド寮を潰すのも簡単そうなのでアールな」

無観客試合、とかなってましたが十代様の愉快的仲間達と、クロノス校長代理、地味に本番初登場のナポレオン教頭も見物にいらしています。

「ごめんね十代。あたしはちゃあんと、貴方の事も思っているわ…本音を言うとな、貴方達が争うなんて本当は嫌なの。でも！あたしは今、エド・フェニックスのマネージャー…彼の相手になる貴方を応援することはできないわっ」

「あ、あつるえ〜…?」

あ、姉さん負けたからマネージャーにされちゃったんですね。つてそれにしちゃ性格まで変わりすぎでしょうが!!

「いつもなら、「うっさいわボケーツツ!!」的な返しをするはずなのに…あれは本当にジューンコさんツスか!?!」

「もう完全に、昨日見たお方とは別人ザウルス…」

このままでは皆様、意味☆不明。まあわたしも本気でわかっていないのですが…一応話しておくか。

「わたし、ああなったきっかけっぽい事なら知ってますよ」

「本当ですのセラ様!!」

「セラ様はやめて下さい。実は昨日…皆さん解散したあと、たまたまエドさんとジュンコ姉さん。二人の事をみつけましてね」

本当はエド君からわたしのPDAに「すまない、頼める義理じゃないのだが助けて欲しい」なんてメールが来て呼び出されたんですけどね。なんでもわたしくらいしか素で接した人はいらしく、他に頼れないと…呼び出されて行っちゃうわたしも冷静に考えるとお人好しですね。

「そしたらジュンコ姉さん、意識を失って倒れてたんです。とりあえず外傷はなかったみたいなんで寮の部屋に二人で運んでたんですが、ふと姉さんの目が覚めたとおもったら…」

「あんな感じになってたんスカ…」

「はい…」

いやもう、姉さんエド君の背中に乗ってたんですが…急に彼に甘え出すからなにかと思いましたよ。

デュエルで負けたらなんでも言う事聞く、なんて言ってたんでそうゆう趣向なのかと

勘違いしましたね。

「ふむふむ、ジュンコさんが負けた…その時、エド様のフィールドはどうなっていました？」

「え、そこ関係あります？…チラつとしか見えないんですが…た、たしかカイザーさん戦で出てた融合「D—HERO」2体と見覚えなのが1体に《ネフティスの鳳凰神》、あとはドレッドガイ…でしたっけ？時計塔からでてきた筋肉モリモリの。そんな感じだったかと」

実際にわたしが現地についたのはデュエルが終わってしばらくしてからでしたが…エド君の腕についてたディスクに、カードが収まったまま介抱してたので多分間違いです。

「ああ…うーん…なるほどなるほど…そうゆう事でしたか…わかりましたわ！」
「本当か浜口！」

ええ、今のだけでわかつちやうんだ凄いですね…流石モモさん、ジュンコさんの親

友つてのだけはあります。

「ずばり…今のジュンコさんは、「ツツコミが出来なくなった」状態にあるかと思われ
ます」

「「「「…はっ？」」」」

「いやいや、なんでそんな結論に至るんですか？全く意味がわからないんですが」

「恐らくジュンコさんのアイデンティティーであるツツコミが封じられた影響で、もう
1つの最たる特長である「ツ〇デレ」のツ〇が消失してしまった、とみて間違いないで
すわ」

「ええ…とゆうより、根本的な原因わかってないし…」

しかも、聞いてない。

「つまり今のジュンコは…ただ好意を持つ人間にデレるだけの、なんの面白みもないコ
に成り下がってしまったわけね！なんてことなの…」

「不味いツスね……」

「いや……そんなに悲観する事なのか？」

「何を言い出すんですか三井住○銀行様！」

「あ、てゆうか三菱東京UF○君いたんだ」

「絶対わざとやってるだろ！」

「なんで銀行しばりなんですか！絶対三澤さんのことつてわかりませんよこれ!!」

「君も文字は間違ってるからな!?!」

「そんな事はどうでもいいですわ！よろしくて？ツツコミのできないジュンコさんなんて豆腐の入ってない味噌汁！ルーの入ってないカレー！デュエルが出来なくなつて脱け殻のようになる十代様みたいなものですわよ!!?」

「なんで最後だけ妙に具体的なんですか!!」

「……あ、最後の下りで読者の皆さまも察して下さいまし」

「読者の皆さままつて？」

「ええ！」

「まるで意味がわからんザウルス……このやりとりなんかデジャビュが」

毎回馬鹿な掛け合いやってるからパターンかしてきてるんですねきつと、あれ？姉さ

んツツコミ出来ないってことは……

「藍神…引き続きがんばれ」

「セラさんしかないないツス。いよつ2代目ツツコミ担当っ!!」

「やっぱりわたしなんですか!?!ここ数羽だけでどれだけ疲労したと思っただけですかい加減にしゃがれください!!」

因みに、新学期に入ってから体重が5kgも落ちました…わたし、元々軽いのに…

「大丈夫よセラちゃん、貴女ならきつとできるわ…」

明日香さんすまし顔で言ってますけど…実はまた両手両足首に縄ついてますからねこの人、十代君が自然に縛っていききましたからね。

「フフ、十代つたらこんなにあ束縛スキルを高めて…興奮するじゃない!ジュンコと違って、私はどこにもいかないってゆうのに…」

「すいません海に投げ捨ててきていいですかこの人、頭冷やした方がいいですよねコレ」

絶対に「お前はしつこいから動くな」って案に言ってますよね。ポジティブにも程があるんですけど……

「もう天上院君はほつとけ、焦点をあてたら変人描写だけで一羽使ってしまう」

「初期の明日香様はどこへ行ってしまわれたんでしょうね……」

「あ、はい……」

余談ですが最近、レッド寮に遊びに行きますと、…至るところに吊るされたり、はりつけにされたり、手錠に繋がれたりされる明日香さんの姿が目撃されます、日替り定食みたいなモノです。猫のフアラオと同じくすっかりレッド寮の名物となりました……

《クルツク》

「客席でごちやごちややってるようだがそれはそれ、まずは僕に勝ってみせるんだな。」

まあ…方が一にもそれはないか」

「随分な自信じゃねーか…よしわかかった！まずはお前をぶったおす、覚悟しやがれ!!」

「十代酷いわ！そんな乱暴な言葉エドに向けないで!!」

「「「「ええええええ〜」」」」」

「エドもエドよっ！姉さんそんな口の悪いコに育てた覚えはないわ!!」

「「「「ええええええ〜」」」」」

「ね、ね、姉さん。調子が狂うからそろそろ客席に行ってくれないか…」

「はい…じゃ、頑張ってるね。エードツ」

「あ、はい…」

み、見える……ジュンコ姉さんの語尾に（ハート）とか（音符）がついてるように見える……

「ぶ、ぶ、ぶ…ぶつ潰す!!」

「アニキがヤバいドン……」

「デュエル!!」

十代 LP4000

エド LP4000

「先行はもらったあー！ドロー!!バブルマン召喚、場にカードがないので2枚ドロー!融合発動!手札のシャドーミストと場のバブルマンで融合!来い、無慈悲たる白銀の英雄!アブソルートZero!!」

『ハアアツ!!』

《E・HEROアブソルートZero》☆8 ATK2500

「更に融合素材のシャドーミストの効果で、エアーマンを手札に加える。カードを2枚セットしてターンエンド!さあ……かかって来やがれ!!」

十代 H4 LP4000

《E・HEROアブソルトZero》(攻)

セットカード

セットカード

「実質消費無しで最強HEROの一角を召喚、更に2枚のリバースカード…最高の滑り出しザウルス!!」

「ふーん、アブソルトZeroねえ…僕のターン、ドロォだ!!」

「あいつZeroを前に余裕綽々だな」

「彼もHERO使いですから…他の方々より対抗策がうかぶのでしょうか」

「魔法カード《炎王の急襲》発動!自分フィールドにモンスターが存在しない時、デッキから特殊召喚!カモン…ネフテイス!!」

『キュオオオオッ!!』

《ネフティスの鳳凰神》☆8 ATK2400

「いつ、いきなりネフティス!?!」

「バトル!ネフティスでアブソルートZeroに、アタック!」

「そのまま攻撃だと!?!」

いくらなんでも単調過ぎる、流石に十代君も対応してくるでしょう…

「へへっ、コンバットトリックの類いがあるのは丸分かりだぜ!罨カード《亜空間物質転送装置》発動!Zeroをターン終了までゲームから除外!そしてZeroの効果が…」

「確かにその類いだが…残念だったな!《禁じられた聖槍》発動!Zeroの攻撃力を800ダウンさせ、魔法・罨のエフェクトを受けなくさせる!!」

「うっげえ!?!」

《E・HEROアブソルートZero》ATK2500↓1700

これでZeroは逃げられない上に、攻撃力もダウン。ネフティスはどのみち破壊されるので被害は最小限ですね。

しっかし最近思った事があります…皆、聖槍、好き過ぎ。

「アブソルートZeroを撃破！」

十代LP4000↓3300

「くっ…Zeroの強制効果、相手モンスターを全て破壊する…」

ネフティスの鳳凰神は水つききましたが、彼は不敵に笑いながら

「狙い通りさ、やっと自由にモンスターの展開ができるな。メインフェイズ2へ以降し、《テストニードロー》を発動！手札の「D—HERO」を捨て、2枚ドロロー！そしてフィールド魔法発動、《幽獄の時計塔》!!」

でた、筋肉さんが幽閉されてる時計塔！

「そして《D—HEROドリルガイ》を召喚！」

《D—HEROドリルガイ》☆4 ATK1600

「ドリルガイ、エフェクト発動。手札の《D—HERO ドレッド・サーヴァント》を特殊召喚する。そしてドレッド・サーヴァント、エフェクト発動！時計塔の針をひとつ進める…回れ、運命の針よ！刻め、運命の時を!!」

……なんですかその口上、時計の針進めるだけで格好つけすぎなんですけど……ま、うちの兄さんも次元領域デュエルの時ノリノリだったし、似たようなものですねきつと。

「時計の針が、3時を示した…」

「フツ、お前は僕とヘルカイザー亮の闘いをどれ程覚えているかな？カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

エド HO LP4000

《幽獄の時計塔》(カウンター)

《D—HERO ドリルガイ》(攻1600)

《D—HERO ドレッドサーヴァント》(攻400)

セットカード

「エド・フェニックス。Zeroをあつさり退けたのは見事だったが、結局展開したのは下級モンスターが2体か……」

「しかも手札は0。対するアニキの手札はこのターンで5枚ザウルス」

「HERO」デツキの爆発力なら、雑魚2体を蹴散らしてライフ4000を削るなど容易…ではあるが」

「そんな都合よく行くなら、ジユンコさんがそもそも負けるはずありませんわ!」

モモさん、本当にジユンコ姉さんの事大好きだなあ……

「俺のターン、ドロー!」

「このスタンバイフェイズ、時計塔の針が更に進む!!」

「針が6時を示した、例の無敵能力を使われるまであと2ターンしかないわ。このターンでどこまで責められるかしら…」

「明日香さん、字が間違ってるんですがわざとですか?」

「……どこまで、せめ切れるかしら……」

「言い直した!しかもより遠のいた!?!」

「俺はさつき手札に加えたエアーマンを召喚するぜ!モンスター効果発動…デツキよりブレイズマンを手札に加える!魔法カード《融合回収》、Zeroの融合に使用したシャドームイストと《融合》を手札に戻させてもらおうぜ!!」

「フム、また属性融合か……ノヴァマスターかトルネード辺りが狙いかな?」

「そんなちやちなモンじゃねえぞ…魔法カード《HEROXS ボンド》発動!場に「HERO」がいる時、手札のレベル4以下の仲間達を呼び出す!来い、ブレイズマン!シャドームイスト!!」

《E・HERO エアーマン》☆4 A1800

《E・HERO ブレイズマン》☆4 ATK1200

《E・HERO シャドーミスト》☆4 ATK1100

「凄い！「HERO」を一瞬で3体も繰り出したツス!!」

「ブレイズマン、シャドーミスト、効果発動！デッキからそれぞれ《融合》と《フォーム・チェンジ》を手札に加える……行くぜ、融合2枚発動!!ブレイズマンと手札のネクロダークマン、シャドーミストとエアーマンで融合!!来いっ！ノヴァマスター!!Great TORNAD!!」

『はああっ!!』

《E・HERO ノヴァマスター》☆8 ATK2600

《E・HERO Great TORNAD》☆8 ATK2800

「トルネードの効果へタウンバースト」発動！お前の全モンスターのステータスは全て半分だ！」

《D—HERO ドリルガイ》ATK1600↓800

《D—HERO ドレッドサーヴァント》ATK400↓200

「これで十代のモンスターが攻撃が通れば、エド・フェニックスのライフは0!」

「しかも手札には《フォーム・チェンジ》が控えてる。多少の罠にかかってもリリース・エスケープが可能だ。…勝てるか、奴に」

「バトルだ!ノヴァマスター、トルネード、一斉攻撃!!」

確かに攻撃が通れば勝ち、ケアも十分。十代君が目に見えて優位なんですが……

「……つまらないな、藍神君や姉さんとの勝負の方がよっぽどスリルがあった。リバーズ罠《エターナル・ドレッド》発動!時計塔の針を更に2つ進める!!」

「しまった!これじゃあ……」

「そう、時計塔の針が1周し再び12時を示したこの状態。無敵のエフェクトが発動し、僕への戦闘ダメージはすべて0となる!!」

「くそっ、だが戦闘破壊はしたぜ……ノヴァマスターの効果で1枚ドロウ!!カードを1枚

セツトして…：ターンエンドだ」

十代 H2 LP3300

《E・HERO ノヴァマスター》(ATK2600)

《E・HERO Great TORNAD》(ATK2800)

セツトカード

「アニキ、何故《フォーム・チェンジ》を使わないザウルス？どちらかを《M・HERO アシッド》に変身させればあんなフィールド魔法…」

「馬鹿か。今あれを破壊したら、エドの切り札であるドレッドガイを召喚される。益々不利になるだろうが」

「あっ」

「け、けど前のエドのターンのネフティスの鳳凰神が効果で破壊されてる。どのみち時計塔は破壊され、ドレッドガイは召喚されるツスよ!？」

「だからフォーム・チェンジは伏せたのよ。フリー・チェーンの魔法・罨じやなきや、次のターンの生き残る手段になり得ないから…」

皆さん十代君のデッキ把握しすぎ…

「僕のターン…ドロー！スタンバイフェイズに、セメタリーからネフティスの鳳凰神、エフェクト発動！僕のフィールドに舞い戻り、全魔法・罠カードを破壊する！！」

『キュオオオオツ！！』

《ネフティスの鳳凰神》☆8 ATK2400

「わかってらー！リバースカード《フォーム・チェンジ》発動！レベル8のノヴァマスターを同レベルの「M・HERO」に変身させる！来い、《M・HERO カミカゼ》！！」

『トオウ！！』

《M・HERO カミカゼ》☆8 ATK2700

「こいつは戦闘では破壊されず、相手はモンスター1体でしか攻撃出来ない！そうそう

突破は出来ないぜ!!」

「へえ。噂の「M・HERO」か、手軽に出た割に随分とハイスペックだな…」

「なんだ？お前は持ってないのかよ。こいつはジュンコから譲り受けた1体だ、羨ましいだろ……」

あー、嫉妬心（無自覚？）から十代君らしからぬ煽りコメントが飛んで来ましたよ…

「ああ、やっぱりお前は……「ムカツクんだよ」

「ツツ!？」

「ネフティスよ、幽獄の時計塔を焼き付くせ!!そしてその業火の中より解放されよ…《D

—HERO ドレッドガイ》!!」

『うおおおおおっく!!』

《D—HERO ドレッドガイ》☆8 ATK ???

「ドレッドガイのエフェクト発動！セメタリーの「D—HERO」2体を特殊召喚！
 〈ドレッド・ウォール〉!!」

《D—HERO ドリルガイ》ATK1600

《D—HERO ドレッドサーヴァント》ATK400

「出たな、「D—HERO」の切り札がつ」

「けどドレッドガイの攻撃力は全「D—HERO」の攻撃力の合計、たった2000ポイントザウルス！」

「アニキの「HERO」の敵じゃないツス!!」

弟分ズ（自称）の台詞がフラグにしか聞こえないんですがそれは

「お前のような奴に…「HERO」を…姉さんを…任せられるかつ！魔法カード《融合》!!」

融合…！けど「D—HERO」融合体を出したところで戦況にあまり変化はないハズ。

…

「ドリルガイ、ドレッドサーヴァント、ドレッドガイの3体を融合し…《V・HERO
トリニティー》を召喚!!」

《V・HERO トリニティー》☆8 ATK5000

「び、「^{ウィジョン・ヒーロー}V・HERO」…攻撃力5000!!?」

「トリニティーは融合召喚したターン、攻撃力が倍となり…相手モンスターに3回の攻撃が可能!!カミカゼに攻撃だ。へトリニティー・クラッシュ!!」
「ぐつ、うわああああああっ!!」

十代 LP3300↓1000↓0

WIN エド

「消えろ、雑魚…」

え、今回才子無しでいいんですか!?!これで続くんですか!?!?

Next 10羽「意地はってませんし」

エド君にジュンコさんを誘拐され（大嘘）、十代様は傷心のうちに彼に破れなんやかんやでカード見えない鬱状態に突入。

あれから、わたくし達の周囲は変わった。

今回は、そんなある日の出来事ですわ。

？

「ハアツ…ハアツ…ハアツ…ハアツ…」

不味い、不味い、不味い不味い不味い不味い不味い!!

「待ちなさいーい！ふふふ…逃がさないわよお」

あれに捕まったら終わりだ。わたしの直感がそう告げている…レッド寮！あそここの万丈目君ルームなら、また皆さんが集まつてるはずだ…あそこへ逃げ込めば…

「ハアツ、ハアツ…み、皆さん！助けて下さい!!」

ノックもせず、勢いよくドアを開けると…そこにはいつもの仲良しメンバー、万丈目君とそれに連れ添うモモさん。退屈そうに何故かいる翔君と剣山君、あとミサ……が揃いぶみ。十代君はいないから若干違和感を感じますがね……おっと、それどころじゃない。

「どうした藍神、ノックもせずにそんなに慌てて」

「またセラ様ファンの方々からストーカー被害にでもあわれましたか？」

「あの人達、セラさんに吹っ飛ばされるのを快楽としてる節あるっすからね…」

「そんな小物達じゃありません！もっと、もっと厄介なモノです!!」

「「「厄介な、モノ…?」」」

そう、それは…

「この、わたしだ!」

「天上院君!?君だったのか…」

「またテンプレネタツスか!」

「テンプレって?」

「ええ!!」

「わからんザウルス!」

「「「(ドヤア…)」」」

「その不毛なやり取り何回目ですか!もー大概にしてください皆さん言い終わったあとにドヤ顔もウザイです!!てゆうかつけ回すのやめて下さい明日香さん!!」

そう…朝からわたしは、この生ける混沌(妹)に追い回されていたのである。十代君が鬱(?)化して構って貰えなくなつて、少しは大人しくなるかな…とか考えた結果が

これですよ!!

「朝から絶好調ですわねセラ様。で、明日香様はどういったご理由で彼女をストーキング対象に? ○ズにでも目覚められましたか?」

「天上院君×藍神君か… ヤバそうだな(真顔)」

「チエストオ!!」

「ガハツツツツ!!?」

ちよつと不快な単語が聞こえたので足でゴールデン☆ボンバーしておきました。光景は皆様のご想像にお任せします。

「いい加減にしないと「三ツ子」に改名せざるを得ない体にしますよ…」

「それは…もはや下の名前…ガクツ」

「ミツミヤシタクーンツ!!」

「三沢が逝ったか、口は災いいの元だな…そんな事はさておき。何故藍神を狙うんだ天上院君」

「フッフッフツ、それはね…」

「このワタクシゝが説明するノーネ!!」

その時、天井付近から聞き覚えがある声が聞こえました。

「あつ、貴方は…」

「「クロノス臨時イイイイイイイ→校長!!」」

「臨時イ」を強調し過ぎにも程があるノーネ!あとアナタターチは息が合いすぎパスタ!!」

そう、天井付近の梁に張りついていたのはクロノス臨時イ校長その人だったので。もうだめだこの学園、ついに教師まで神出鬼没に…しかも、なんで全身黒タイツ?

「で、なんで黒タイツノス校長がここで出てくるんだ?」

「いい質問デスーノ!実はこの度…我がデュエルアカデミアに、「アイドル養成コース」を設立したノーネ!!」

「「「「………あ?」」」」

「そしてわたしがプロデュース対象第1号として名乗りを上げたのよ!!」

「「「ええ〜……」」」

全員キョトン顔である、そりや無理もないですよ…鮫島校長いないからつて変なコー
ス勝手に設立して…

「兄貴が大変な時になにやってるザウルス……」

「フツ、解ってないわね剣山君。わたしも、十代を励まそうとあらゆる手段を用いたわ
……夜、布団に忍び込んだり。お風呂に忍び込んだり。H A O A K A エプロンでキツチ
ンに忍び込んで追ったり…」

「はいアウトー！ひとつと言わず全部アウトですツツ!!」

「けど…けど十代にはため息をつかれながらお縄にされる(意味深)始末よ！あんな状態
でも縄や手錠の扱いに一切の迷いがないんだからっ!!」

「タイツ校長！あの人警察につきだした方がいいと思われんですけど…」

「そう！そしてわたしは考えたの…そしてひとつの結論に至ったわ。「だったら、アイドルしかないじゃないか」

「話の前後が一切繋がってないですし?!今のでどーやったらアイドルって発想になるんですか意味☆不明です!!」

「否！わたしがアイドルになってシャイニングする事で、十代の心にもスパークを取り戻させるのよ!!」

もう駄目だあこの人。初対面の時はもつと真人間だと思ってきましたのに…きょうだいの一方がチャランポランでも、もう片方が更にチャランポランだった場合はいかにするんですかね。

「なるほど解らん。全然解らん」

「で、なんでセラさんがストーキングされるんツスか?」

「それが…わたしに明日香さんとグループを組んで、歌って踊ってデュエルしろって…」

「…「ああ…」」

「ああ……じゃないし！なんでわたしにそんな話が来るんですか!!」

「ニユツフツフツ…シニヨリータセラはシニヨラ明日香に匹敵する人気の持ち主

…（アカデミアHP調べ）ならば！最強の二人がユニットを組めば向かう所敵無しに決まってるノーネ!!」

「理由が雑!?!」

「嫌ですよ！わたしにそんな趣味ありません似合いませんし!!」

…兄にその手の服着せるのは大好きですけどねっ！

「確かに、二人共年齢的にはギリギリだ」

「チエイヤア!!」

「ぐああああああああっ?!?!」

SE 〈ザツ、バーン…

「ミツミツハシクーンツツ?!?!」

「今のは彼が悪いですわ」

「壁突き破ったあげく海に落ちた音までしたザウルス…先輩のご冥福をお祈りするド
ン」

今なんか聞こえたので思わず明日香さんと二人でボデイ☆ブロー的なものをかましてしまいました。わたしは悪くない。

「もしもし、俺だ。壁の修復と馬鹿一名の救出を頼む。ああ、一応大至急だ」
「なんか坦々と電話してるしっ!？」

「ふう。なるほど、セラさんの言い分はわかったわ……ならばデュエルよ！我がアイドルへの覇道を邪魔する者は叩き伏せるのみだわ!!」

「」「えっ?」「」

「上等ですよこの墮肉（胸部）があ！そろそろ一回頭を冷やして差し上げようかと思ってた頃合いですしちようどいいです!!」

「買っちゃうんだ!？」

「なんか発言までジュンコさんっぽくなってきましたわね…」

翌☆日！

「皆ー！次の曲行くわよーっ!!!」

「!!!」おおおおつ、アッスリーン!!!」!!!」

「なあにこれえ…」

デュエルは明日の放課後、学園内のデュエル場でね！って指定の時間に会場に来てみたら、なんか既に始まってた：明日香さんのソロライブが。

「Ah！貴方の鎖がく♪私の胸を締め付けるく♪目の前の私よりい、彼方の彼女しかあゝ見てくいなゝゝイイイ→!!」

赤い服なのは露骨に十代君意識なんでしょうがそこじゃない：

「歌詞イイイ！なんでアイドルの服装でそんなV系みたいなドロドロ恋愛の曲歌ってるんですかっっ!!」

「フツ、来たわねセラさん…仕方ないじゃない。作者がアイドル系の曲知らないんだから歌詞書けないのよ…」

「だからなんの話ですかあ!?!いいからさっさとデュエル☆スタンバイしてください!!」

ドン☆

「そんなわけで…私が勝ったらセラさんは私とユニットを組んで、世界へ乗り出す！これを着てもらってね!!」

「「「ツツツ!!?うおおおっ!!」」」

そうやって彼女が黒子（クロノス教諭）から受け取り見せつけてきたのは…なんとまあどつからもつてきたのか黒と紫をベースにしたゴスロリ衣装、しかもなんか背中の

部分に黒い羽までついてるし…結構可愛いけど自分で着たくはないですね。

はいその方々、わたしが着たとこ想像しな〜い。

「はい、断固拒否する。それぐらいの条件に釣り合うとなると…じゃあわたしが勝つたら1ヶ月くらい、十代君に近づくの禁止で。」

「そんなんっ!?それは私に「死ね」と言ってるようなもんじゃない!!このまな板ロリータ鬼畜魔王!!」

「誰がまな板ロリータですかこの駄肉（胸部）！なんでもかんでもデカければいいわけじゃないですからね！あとわたし着痩せするだけで少しはありますからね!!」

「「変に意地張るセラ様も好きだーっ!」」

「意地はつてませんし!」

「「ペツタンコのセラ様も好きだーっ!!」」

「そこお！はり倒しますよ!」

意地じゃないし…見た目年齢の適量(!?) くらいはありま…あるよね?

「藍神も大変だな…」

「そツスね…」

「ジユンコさんの最大ツツコミ数に近づいてきましたわね…」

「まあいいわ…私が勝つのは変わらないのだから。ちなみにユニット名は
ブラッティ☆エンジェルズ
「血まみれの堕天使」でどうかしら」

「だから！それアイドルってゆうか売れてなそうなV系グループか曲名!!」

「じゃあー「セラちやま&アスリン」!?!」

「ちやまつて…お子様扱いか!!」

「贅沢ね…「カオス・ゴツテス」くらいで妥協しときますか」

「どこのシンクロモンスター!?!もーいい加減にしてください!さっさと初め…終わらせ
ますよ!!」

「そうね、初めましょう…私達のファーストライブ・デュエルを!!」

「「デュエル!!」」

セラちやま LP4000

アスリン LP4000

だから…お子様扱いか！続きます！！

Next 11羽 「あ、帰っていいですか？」

・前回のあらすじ

アイドルとは（真顔）

「先行はもらいます！わたしのターン、ドロツツ!!」

頭のネジが2、30本外れるとはいえ…相手は学園最上位の実力者、油断はさせ
ん!

「チューナーモンスター、《レッド・リゾネーター》を召喚！このモンスターの効果で、更
に手札からレベル4のデューザを特殊召喚!!」

《レッド・リゾネーター》☆2 ATK600

《流星方界機デューザ》ドン☆4 ATK1600

「初ターンから飛ばして行く気ね…いいわ、私の手札に発動したいカードはないもの」
 「むっ…まあいいです。デューザの効果で《方界合神》を墓地へ送り、レベル2のレッド
 リゾネーターをレベル4のデューザにチューニング！シンクロ召喚！チューナーモン
 スター《瑚之龍》!!」

《瑚之龍》☆6 ATK2400

「デューザが場を離れたことで墓地の方界合神発動！これ除外し、新たなデューザを
 デッキ特殊召喚！効果で《方界業》を墓地へ！」

「あれっ？合神じゃないの？」

「まだ先行1ターン目ですよ？戦力は温存しておきたいので…方界業を除外し効果発動
 ！3体目のデューザを手札に加えます。行きます！レベル4のデューザにレベル6の
 瑚之龍をチューニング!!天よ、運命よ、事象の理よ！巡る天輪に乗せ此処に結実せよ!!
 シンクロ召喚！レベル10《天穹覇龍ドラゴアセンション》!!」

『ギャオオオオッ!!』

「…臨時校長、客席に攻撃しちゃだめですか？」

「駄目デスーノ、ファンは大切にするノーネ」

早く…帰りたい…しつかし、明日香さんと最初に戦った時に比べれば大分自重した感じになっちゃいましたね、ライブリアン出せる手札じゃなかったただけですが。

やっぱり、あちらも2度目だけあつて冷静ですね…

「…わたしはリバースカードを2枚セット、ターンエンドです。」

セラ H4 LP4000

《天穹覇龍ドラゴアセンション》 ATK4800

セットカード ×2

「よし、行くわよ皆々!!私のターン、ドッロー!!」

「」「アツスリーン!!」「」

何かアクションする度々にこれなんですかね面倒くさい…昨日レッド寮前でちゃっ

ちやと決着つけければ良かったなあ…

「まずはステージ・オン！フィールド魔法《トリックスター・ライトステージ》を発動!!」
「…はっ？」

デュエルフィールドが、本当にアイドルが歌って踊るようなステージに改変される。
ライトステージって名前安直すぎじやあ…

「ライトステージの発動時の効果！デツキから「トリックスター」モンスター、キャンディナを手札に加えるわ。更に！ライトステージは1ターンに1度、相手のリバースカード1枚を選択、エンドフェイズまで発動を禁じることが出来る！対象は右側のリバースカードよ!!」

「台詞長いし!?見かけによらず面倒な効果を…」

「私達のステージを邪魔はさせないわ！私はモンスターを通常召喚！来なさい、《トリックスター・キャンディナ》!!」

『ウフフフツ』

《トリックスター・キャンディナ》☆4 ATK1800

「えっ？えつと…どなた様!？」

明日香さんが繰り出してきたのは「機械天使」とはまた違ったモンスター…パツと見、アイドルとかに見える可愛らしい人形のモンスターでした。

「フフツ、これがアイドルにふさわしい新たな戦力「トリックスター」よ！キャンディナの効果！召喚時にデツキから「トリックスター」を手札へ加える…《トリックスター・リリーベル》を手札に加え、自身の効果で特殊召喚!!」

『ハアアア』

《トリックスター・リリーベル》☆2 ATK800

「ええ…もう、一人でアイドルグループっぽくなってるじゃないですか…わたし用済みっぽいので帰っていいですか？」

「駄目よ、逃がさない！リリーベルは相手にダイレクトアタック出来る！セラちゃんにダイレクトアタックウウ!!」

「痛っ!？」

セラ LP 4000 ↓ 3200

見た目の割に、攻撃は物理的ですね!？」

「更にライトステージは「トリックスター」モンスターが戦闘・効果ダメージを与える度に2000を与える!!」

「うわ眩しっ!!」

セラ LP 3200 ↓ 3000

「ライトアップだ!ライトアップアップで攻撃したぞ!？」

「ふふふ、貴女は目立つ事に抵抗があるようだから…このライトで照らしまくって、じわじわとそれを快感に変えてあげるわ!!」

「なんですかそれ!?まさかそんなアホみたいな理由でそのデッキ使ってるんですか!!」

「だって当然でしょう？ デュエリストだもの」

うわー、真顔で返されたうわー…理性が蒸発してるってこうゆう感じの方なんですかね…

「とりあえず、カードを2枚セットしてエンドフェイズ！ ライトステージの対象となったりバースカードはこのエンドフェイズに発動できるわよ？ 発動しないならそのまま墓地へ送ってもらわー！」

「(チツ…) 《神の通告》を墓地に送ります」

「ガチね」

「ガチですわ」

「ガチだな」

「ガチつすね」

「ガチガチドン！ (2000円)」

「通告1枚でなんですかその冷たい目は！」

明日香 H3 LP4000

《トリックスター・キャンディナ》 ATK1800

《トリックスター・リリーベル》 ATK800

《トリックスター・ライトステージ》(f)

セットカード

セットカード

セラ H4 LP4000

《天穹覇龍ドラゴアセンション》 ATK4800

セットカード ×2

「はあ…ターンもらいます、ドロー！先のターン、手札に加えていた最後のデューザを召喚！」

《流星方界機デューザ》☆4 ATK1600

「《方界業》を墓地へ送り、業を除外し効果発動！デツキから「方界」カード、《暗黒方界

神クリームゾン・ノヴァ》を手札に加えます！」

「出た！セラさんとデュエルした皆のトラウマ!!」

「魔王」セラ様に相応しい、最凶災厄のカードザウルス!!」

「失礼な！こんなに愛らしいのに!!」

「それはねーよ、ですわセラ様…」

ノヴァさん不評ですねー…今のところ同意を得られたのが、あの馬鹿しかいないのが不満で仕方ありません…：そういうえばあの方、最近全く見ないですね。その分妹さんがハジケ飛んでらっしゃいますが。

「確かにその化け物は出されたらきついわ。リバーズ罨発動《トリックスター・リンカーネイション》!! 貴女は手札を全て除外し、除外した枚数分ドロウする!!」

「何その嫌がらせ！ワンキルする気満々だったのに!!」

《大嵐》を引いたから《方界波動》と合わせて瞬殺してさしあげる予定だったのに……まあ、5枚も引けば何かしらのキルプランが……

「貴女のデュエルは殺意に満ちすぎなのよ。もっとオーディエンスを楽しませなくっちゃ……更にチェーンして手札からジユンコ直伝！《ドロール&ロックバード》の効果を発動するわ！」

「へ？」

「相手がドロー以外でカードを手札に加えた時に発動！互いにこのターン、カード効果でカードを手札に加えることができない！」

「つまり……どうゆう事ドン？」

「リンカーネイションとやらの効果でもドローができない……つまりは全ハンデスだ」「ド鬼畜コンボつすね!？」

まさかの手札0……え、本気でどうしましょう。場にあるカードだけでなんとかするしかないですよね……

「だったら……このままバトル！ドラゴアセンションでトリックスター・キャンディナを攻撃します！《アセンションウエーブ》!!」

「残念ね、リバーズ罨発動！《聖なるバリアーミラー・フォース》!!相手攻撃表示モンスター全てを、破壊する!!」

ドラゴアセンションの攻撃が跳ね返され、デューザもろとも破壊される……

「ぐっ……けど、忘れたんですか!?ドラゴアセンション効果発動！相手によって破壊された時、彼(?)のシンクロ素材となったモンスター一組を効果を無効にし、復活させます!」

「忘れてなんかいないわよ?セラさんと初めて対峙したデュエルは衝撃的だったもの……攻撃力4800の化け物より、素材のモンスターの方がマシよ」

「考えが甘いですよ……アセンションの効果にチェーンして、リバーズ罨オープンです!《シャドー・インパルス》!!」

「なっ!?!」

「破壊されたドラゴアセンションと同じレベルと種族のシンクロモンスターを、EXデッキから特殊召喚!世界に蔓延る、億万の症気……此処に集いて災いとなれ!《魔王超

龍ベエルゼウス!!」

『グオオオオオツ!!』

《魔王超龍ベエルゼウス》☆10 ATK4000

「出た!大魔王セラ様の配下たる、4つの魔神が1角!!」

「不死身の魔王、ベエルゼウス様だ!!」

「ダ○の大冒険の敵方みたいに言わないで下さい!残りの3体どのコですか!!?...つ、ついでに來なさいーデューザ!瑚之龍!!」

《瑚之龍》ATK2400

《流星方界機デューザ》ATK1600

「このまま2体で、リリーベルとキャンディナを攻撃!!」

「ううっ!...このくらい!!」

明日香 LP4000↓2600

「ベエルゼウスのダイレクトアタック！へべエルゼウス・ジエノサイダーツツ！！」
「墓地の《トリックスター・リンカーネイション》第2の効果！この罠を除外し、墓地からキャンディナを特殊召喚！！」

《トリックスター・キャンディナ》DEF400

「しぶとい…だったらその小娘にはもう一度○んでもらいます。消し飛べエエエ！！」

「セラさんのが見た目幼いッス!？」

「丸藤先輩！消し飛ばされるから自重するザウルス!!」

「手札から、《トリックスター・マンジュシカ》の効果発動よ！このコを特殊召喚しキャンディナを手札に戻すわ！」

《トリックスター・マンジュシカ》DEF1200

「むっ、構わず攻撃！」

モンスターの入替え効果？手札から相手ターンでも使えるなんて面倒な…ベエルゼウスの敵じゃないですけど、吹き飛ばされるキラキラっ娘に心は痛みますけどねー。

「メインフェイズ2へ以降します。レベル4のデューザにレベル6の瑚之龍をチューニング…大いなる守護者よ来たれ、《神樹の守護獣―牙王》!!」

『がおっ』

声、可愛いっ!?

《神樹の守護獣―牙王》☆10 ATK3100

「何気に出番大くないか、牙王…」

「癖のない汎用レベル10シンクロモンスターって、実は牙王くらいしかないもので…」

完全破壊耐性を持つベエルゼウスに、対象をとる効果に強い牙王。手札は全部もっていかれりバースカードも使い切ったけれど、フィールド上では完全にわたしがアドバン

テージを握っている…次のターンに瞬殺される可能性は少ないでしょう。他にやれる事もないですしね…

「わたしはこれでターンを終えます」

セラ H0 LP3000

《魔王超龍ベエルゼウス》 ATK4000

《神樹の守護獣―牙王》 ATK3100

明日香 H3↓4 LP2600

《トリックスター・ライトステージ》(f)

「私のつ、タアアアン！ 《ブラック・ホール》!! 全て壊すんだ！ よ!!」

「アイドルらしからぬガチガチカード!?!:け、けどベエルゼウスは戦闘・効果では破壊されません!」

「流石魔王様汚い!」

汚くないし! ああ、せっかくの牙王さんが活躍の場も無く黒い渦に呑み込まれて…

「じゃあ雑にキャンディナ召喚！☆4の《トリックスター：ナルキッス》手札に加えてからの《機械天使の儀式》発動!!キャンディナとサーチしたこのコを生け贄に以下省略！
《サイバーエンジェル—茶吉尼—》を儀式召喚!!」

『ハアアツ!!』

《サイバーエンジェル—茶吉尼—》☆8 ATK2700

あ、いつもの機械天使達も入ってるんですね…どんなデツキ構成!?

「おのれ茶吉尼イイ！エネコンです、エネコンを持って来やがれですわ!!」

「落ちて着け浜口、ここはリン〇ス次元ではない…俺は底なしエネコンを3積みさせてもらうぞ」

「流石ブルジョワですわ！」

「ついに万丈目先輩までおかしくなったドン!？」

「なんスカリ〇クス次元って!!」

「黙れ未出演ども!」

「デツキ被りと中の人被りはひっこんで下さいまし!」

あの人達なんの話してるんですかね!?!中の人被りってどうゆう事!

「フツ、最近茶吉尼が人気のようだなによりだわ…モンスター効果発動!相手は自分のモンスター一体を選び、墓地へ送らなければならないわ」

「…ベエルゼウスを墓地へ送ります」

このつ、わたしのとっておきをアツサリと…

「バトルよ!茶吉尼でダイレクトアタック!!」

「きゃああああつ?!」

セラLP3000↓300

「「「セラ様ーっ!!」」」

「私はこれでターンエンドよ」

明日香 H0 LP2600

《トリックスター・ライトステージ》(f)

《サイバー・エンジェル―茶吉尼―》(攻2700)

まさか本当に2体ともやられちゃうなんて、余計なことは考えるべきじゃないですね、はあ…

「残りライフ300、場にカードは無く手札は0、か…サルベージ能力は使わないのか？」

「《機械天使の儀式》の天使族破壊耐性を優先したんじゃないスか？」

「うーん、セラ様厳しいですわねえ」

「フフフフ、ここまでねセラさん！さあー観念して私と世界を取りに行くわよ!!」

絶対嫌ですし負けませんし！アホは独りでやってるかお兄さんでも召喚して一緒にやって欲しい…

「わたしのタアーン！…よし、魔法カード困った時の《食欲な壺》！墓地の瑚之龍、牙王、ドラゴアセンション、ベエルゼウスと最後にデューザをデツキに戻してシャツフル…2枚ドロー!!」

「ここにきて手札補充とは都合がいいわね…でもそれだけで足りるかしら」

「はい…十分ですよ！《捕食植物サンデウキンジー》プレデタープランツを召喚!!」

《捕食植物サンデウキンジー》☆2 ATK 600

「また趣味の悪い系モンスターを…ゲテモノ好きってアイドルとしてどうなのかしら」

アイドル名乗ってないし趣味悪くないしこのコは客観的に視ても比較的可愛いかと思うのですが…まーそんなことはどうでもいいとして、

「行きますよ似非アイドル…キンジীরのモンスター効果発動！手札か場のモンスターとこのコを融合素材に含む融合モンスターを融合召喚します!!」

「な、なんですって!？」

「手札のクリムゾンノヴァとサンデウキンジীরを融合！灰塵の魔神よ、美しき花にその力を貸し与えたまえ…融合召喚！全てを喰らえ、《グリーデー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》!!」

『ギシャアアアアツ!!』

《グリーデー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン》☆10 ATK 3300

「やっぱりゲテモノ系だーっっ!!」

「きやああああっ!?!出ましたわ!!」

「ええい！怖いからって俺に飛び付くな鬱陶しい!!」

「(しっかり抱きしめてるあたり、説得力が皆無ザウルス…)」

「失敬な！万人が大好きなドラゴンですよドラゴン！ちゃんと見て下さい、この美しい

翼、シャープなフォルム、そしてこの愛らしい瞳ツツ！最高じゃないですか!!？」

「うーむ、最後以外なら共感できんこともない…」

「万丈目様のドラゴン馬鹿!!」

「そのあたりの議論はおいといて、この土壇場で攻撃力3300は辛いわね…」

「辛い？終わりですけど？グリーデー・ヴェノムの効果発動！1ターンに一度、相手モンスター一体の攻撃力を0にし、効果を無効にする!!」

「そんなんっ!？」

《サイバーエンジェル―茶吉尼―》 ATK 2700 ↓ 0

「ではバトル！グリーデー・ヴェノムで茶吉尼を攻撃!! えーと…へ喰らい尽くして差し上げなさいっっ!!」

「そんな雑な終わり嫌アアアア!?」

明日香LP2600 ↓ 0

「し、勝者…セニヨリータ・セラなのーね!!」

「やったぜセラ様ーツツ!!」

「けどアイドルやつてるところもみたかったな…」

「馬鹿野郎!これで俺達のセラ様が遠い所に行かずに済むんだろーが!!」

「そうだそうだ!セラ様は僕達だけの墮天使でいてくれればいいんだよ!!」

「…グリーデー・ヴェノムでそのあたりの方々を攻撃イイ!!」

「…「ぎやあああああつ!!」」「…」

「セニヨリータ、場外攻撃は自重して欲しいノーネ」

「あ、はい。ごめんなさい」

「とゆうかなんでダメージ発生してるんすか…」

「やれやれ。これでも「褒美です」とか言い出す方々がいるから性質悪いんですがね

…

「負けたわセラさん…フィニッシュ後にファンサービスを忘れないとは流石ね…」

「明日香さん…じゃ、約束通り十代君に近づくの1ヶ月は禁止で」

「そんなつつ!?更新自体が3ヶ月ぶりなのに追加で1ヶ月とか鬼畜にも程があるわ!!」

「何言ってるのかさっぱり解りませんが…こんな茶番に最後まで付き合っただけですから、ちゃんと守って下さいね?」

「くううう…セラちやまの見た目詐欺〜!!」

「誰が見た目詐欺か!!」

「オチが弱いですが今回はここまで、またの更新をお待ち下さいですわ」

「誰に言ってるんだ…」

ドン☆

「俺は、俺はどうしちまったんだ…どうしたらいいんだ…どうしたら良かったんだ…」

『…代…十代…!』

「誰だ…俺を、呼んでいるのか…？」

『こっ…来て……十代…!』

「俺が、俺なんかが必要なのか…」

『そう…来てくれ…』

『僕の愛しい、遊城十代』

Next 12羽 「黙れイメチエンだ」

「せっかくデュエルの機会を得たことですし、あなた方には存分に楽しんで頂きたい…
これから始まる、悪夢のシヨールをね!!」

「フツ、悪夢のシヨールだと？ふざけた野郎だな…貴様こそ、俺様達の名を覚えて行け！」
「このデュエルアカデミア、最強夫婦の名を!!」

「誰と誰が夫婦かつつ!!」

「「デュエルツツ!!」」

《ベクタアアアアア!!》

うなつたかー…

《クルツク☆》

「大変ザウルス、セラ様先輩！」

「明日香さんが、明日香さんが…っ!!」

寮に到着するなり慌てふためく十代君の弟分が二人、まあこの展開は予想できてました。

実は例の日から

「探さないでくれ」

と置き手紙を残して十代君は行方不明。

これを知られたら洗脳(?!)中のジュンコ姐さんはともかく、明日香さんは狂気に侵されバーサーカーと生りかねない。

そんな理由で彼女を部屋に軟禁してた訳ですが…

「はいはい、どうせ十年代さん探しに海に飛び込んで行っただとか、島中を駆け回り出したとかそのあたりでしょう？ 想定通りの反応じゃないですか…」

「ち、違うんだ藍神君！ 途中まではそうだったんだが…」

「あ、ミシエル君いたんだ」

「もはや外人扱い!?!」

「ミザエル先輩の事はどうでもいいドン！」

「どこの七皇だ!」

明日香先輩が、明日香先輩が何者かに襲われて倒れてるザウルス!?!」

「な、なんですってーっ!?!」

劍山君が指を指す先には倒れるバーサーカー、もとい明日香さん。

デュスクを装備しカードが散らばってることからデュエルでやられたのでしょうか

…

「気を失っている… 一体誰がこんな事を…」

「その問い、我々が答えよう!!!」

「な、何者ドン!？」

「上だ!屋根の上に誰かいるツス!!」

わたし達の疑問に対し、レッド寮の上に人影が二つ!クツ…逆光でよく見えな…

「とうとう!!」

と、飛んだーっ!!?

「なんだかんだと訊かれたらあ?」

「答えてやるのは面倒だが…」

「まあ、特別に答えてやらんこともない!!」

え?

「世界の光を守るためえ」

「世界の正義を守るため…」

か、ねえダーリン」

「そうだなマイ・ハニー。揃いも揃って鳩が豆鉄砲が喰らったような面を並べて…」

「それらそうもなりますよ！貴方達どこの口〇ツト団ですか所々もじってるけどほぼほぼ丸パクリ！むしろ口上終わるまで黙ってたことを感謝してくださいってか、今の爆発、何!!」

「馬鹿め！変身シーンとかは大体邪魔が入らぬものだろう」

「むしろ「え？」も少し邪魔でしたわ！」

「うっさいです！大体その真っ白い制服はなんですかあと万丈目君の昨日までの〇ンデレどこ行ったんですか!!」

「フン、訳の分からぬことをべらべらと…」

「しよせんは二代目、初代のツツコミには遠く及びませんわ」

「訳がっ、分からないのはっつ、貴方達の方です!!」

駄目だ、全くついていけない…新幹線を自転車で追いかけているような感覚だ。別次元の勢いだ。

…姐さん助けてえ…最悪、エド君でもいいからあ…

「つ、つまりは天上院君を倒したのは君たちか！ホワイト・サンダース!!」

「ホワイト・サンダースて…」

「そのまんま過ぎザウルス…」

「その通りだ、愛知らぬ哀れな三沢よ」

「年齢〓恋人いない歴の、悲しき殿方ですわ」

「グハアツ!!」

三沢LP4000↓0

剣山LP4000↓2000

「ミルクィ君が戦わずして、負けたーっ!!」

「お、俺はライフ半分で済んだザウルス…」

なんのダメージ!?ねえ今のなんのダメージですか!!?

「では話を戻すが…十代がない事で狂化した天上院君を、みかねた我らが救済したのだ」

「わたくし達光の結社の力によつて…見るがいいですわ!!」

気づけば明日香さんが立ち上がり、深いため息をついたかと思うと…

「…皆、○ねば、いい」

べ、別方向に狂化してらっしやるーっ!?

「…うむ、成功だな」

「…まあ、成功ですわね」

「十代のいない世界なんて…○びればいい…」

「いやいやいやどう見ても失敗でしょう!?!ある意味落ち着いてますけどこれはこれで不味いんじゃないですか北極から南極いっただけですよコレ!!」

「まあ見た通りだ。我らが光の結社に入れば、救済が約束される…な、ハニー？」
「月謝もノルマも無し、穏やかな学園生活を約束しますわ…ね、ダーリン？」
「世界地図を真っ白に書き換えてあげるわ…」

どこの悪徳宗教ですかコレ。月謝とかノルマとか胡散臭い単語聞こえたし。
救済？救済ってなんですか？

「さあ、お前達も共に行こう！」

「輝く未来へ！」

「この万丈目ホワイト・サンダーズと共に!!」

「この万丈目、ホワイト・サンダー！ホワイト・サンダー!! ホワイト・サンダー!!!」

「かつ、囲まれたドン!？」

「いつの間に…」

どこから現れたのか、わたし達の回りには目前のバカカップルと同じように制服が白

く染まった生徒達がもり沢山、2〜30人はいるでしょうか…昨日までそんな制服の人居なかったハズなのにどれだけ浸食早いですか馬鹿ですか。これでは逃げようが無いですね…

「…断れば、どうすると?」

「無論、デュエルで語るまで」

「光の結社の素晴らしさを!!」

「…無に還してあげる…」

ほぼ強制じゃないですかヤダー。狂化明日香さんまでちゃっかりディスク構えてるし…こちらの戦力は精神ライフ0の奥さんがピケルさんと、見た目の割に精神DEFが低い剣山君に案外頑丈な翔君。

なんやかんやで学園最狂(馬鹿)クラスの三人に勝てるかどうか…

「…どけ、有象無象共。」

へっ?

「「「「ぎゃああああああああっ!!」「」」」」

「何っ、モブバリケード（仮）が一瞬にして!!」

「何者ですの!?!」

「何者…なんだ。たった一月で俺の事を忘れたのか?」

そ、その…少年っぽさを残しつつ意外とイケボな声は…

「十代さ…って誰エエエ?!」

十代君かと思ったその人は、まあくなんだか黒いごちやごちやした甲冑・兜を見に纏い、一言で表すとRPGに出てくるラスボス?言っちゃえば「魔王」のような風貌をしてました。空耳だろうけど「ハ・オ・ウ!ハ・オ・ウ!ハ・オ・ウ!ハ・オ・ウ!」って聞こえる気がする…

「あ、アニキイイ!?」

「どーしたんスかその格好! セラさんにコスプレでもさせられたんスか!」

翔君? それどうゆう意味かな? あとで体育館裏に連れ込もう

「…黙れイメチエンだ」

「どんなイメチエンですか!」

「冗談だ、理由はあとで話す。それより万丈目エ…なんだそのふざけた格好は、失恋でもしたのか?」

「黙れイメチエンだ!」

「恋は絶賛ヒートアップ中ですわ!!」

「…冗談だ。やれやれ、相変わらずのようだなお前達は、うらやましいぜ」

この人達相変わらずの要素皆無なんですが、男子3日見ずばって領域をはるかに越えてるう…

「じ、十だ…黒い…十代…ゴフウ!!?」

「また暴走するかと思っただらみぞおちー!!?」

「悪いな明日香、今のお前にはこれが一番早そうだった…」

なんと、十代君のワンパンで冷酷無比に明日香さんを物言わぬ状態に。

…あの駄肉（胸部）をすり抜けてよく一発で決まりましたね。

「よつと。どうだ万丈目、久しぶりに1対1でデュエルでも」

「何だと…」

「タッグデュエル。いや、2対1でも俺は構わないが。その場合、お前の可愛い彼女の身の保証は出来ないがな」

「いいだろう…マイ☆ハニーを傷つけるわけにはいかんからな。だがこのホワイト・サ
ンダーに喧嘩を売ったこと、必ず後悔させてやるぞ、コスプレ野郎!!」

「ダーリン…」

「ハハハ、仲が宜しいことで。さあ、全てをぶつけ合おうぜ…万丈目!!」

「さんだ!」

「「「「ホワイ…ト…サンダー…」」」」

モブバリケードさん達、倒れててもやるんですかそのかけ声…

「「デュエルツツ!!」」

白い万丈目 LP 4000

黒い? 十代 LP 4000

Next 13羽 「おい…なんで3枚あるんだ」

「デュエルツツツ!!」

SEへガシャンガシャンガシャンガシヤンジャキン!

「十代君のデュエルディスクどうなってるんですか!？」

前回のあらすじ

十代↓黒化

万丈目↓白化

明日香↓無言の腹パン

「デュエルは先日発表された、海馬エクストラ☆ルールで行う! 異論は無いな!!」
「問題ないさ…かかって来い!」

説明しよう！海馬エクストラ☆ルールとは…

シンクロ・エクシーズ一般普及によるのマツハインフレに苦情が殺到した結果、考案されたルールである！

EXデッキから召喚されるモンスターは1体しか場に存在出来ないとゆう、君たちの世界でいった新マスタールールみたいなものだ…融合使いはとんだとばっちりである!!さりげなくペンデュラムカードも魔法・罫ゾーンの両端に置く裁定だぞ!!

決して！作者がデュエルパート書くのしんどくなつて楽しもうってわけじゃないからその辺り誤解しないよーに!!

「誰に言い訳してんですかってゆうより長いし!!」

「セラさんどーしたんすか!?!」

「いえ、今馬鹿の気配が…」

「馬鹿の気配?」

「その辺で延びてる連中合めてこの空間は馬鹿だらけドン。気にすること無いザウルス」

そーだセラ君、馬鹿だつて馬鹿なりに生きてるんだから馬鹿にするのは辞めるんだ!

「いや、あなたが何言ってるんですか…てか今回の地文担当あなたですか…」

「俺のターン、ドロロー!!フ…我らが光の結社の力、とくと味わうがいい!まずは永続魔法《冥界の宝札》!更に《フォトン・サンクチュアリ》を発動!攻撃力2000の《フォトン・トークン》2体を特殊召喚!!」

《フォトン・トークン》 ATK2000×2

「あれは以前にも万丈目君が使っていたカード…」

「もしかしてデツキにさほど変化は無いザウルス?」

「変化は無い?…ならば焼き付けるがいい!フォトン・トークン2体を生け贄に…光の化身、ここに光臨!《ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン》!!」

『ギャオオオオウ!!』

《ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン》☆8 ATK3000

「なんかめちやくちや強そうなの来たあ!?!」

ふつくしい…じゃなくて、《光と闇の竜》はどこへ行ったんだい万丈目君つ。見損なつたぞ!!

小声「あの…ナレーションが普通に会話に参加するの辞めてもらえませんか?話ずれるんで」

「冥界の宝札の効果だ、2体の生け贄召喚を成功させたので2枚ドローツツ!!更に《トリードイン》!レベル8モンスターを捨て2枚ドロ―!まだまだ!カードを2枚セットし《手札抹殺》発動オ!俺は手札を2枚捨て、2枚ドロ―!!」

「俺5枚だ。5枚ドロ―…チツ。墓地の、シャドーミストとクロス・ポーターの効果を発動。デッキから「HERO」と「N」モンスター…マリシヤス・エッジとグラン・モールを手札へ」

「ぐらんもーる…マリシヤス・エッジ…?十代君のデッキにそんなの居ましたっけ」

「鬼畜モグラ…バウンス…うっ、頭が…」

「どうしたハニー!?…よくわからんが、エンドフェイズに速攻魔法《超再生能力》を発動！捨てられたドラゴンは3体、3枚ドロロー!!」

「流石はダーリン!どっかの馬鹿に負けず劣らずのドロラツシユですわ!!」

「当然だマイ・ハニー。俺は君を守る為…越えると誓ったんだ!俺はこれでターンエンド!!」

万丈目 H5 LP4000

《ギヤラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン》 ATK3000

《冥界の宝札》(永続)

セットカード×2

「狂っていても流石は万丈目君。やる事が違うや…」

「けど、対するアニキは手札8枚になるザウルス。どうなるドン…」

「…ドロロー」

「貴様のスタンバイフェイズ、墓地の《アークブレイブドラゴン》効果発動!墓地の☆7

か8のドラゴンを復活させる…現れる、2体目のギャラクシーアイズ!!」

《ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン》☆8 ATK3000

「2体目エ!?!」

「エグいドン!!」

「どうやらあれがホワイト☆サンダーの主力のようだね。同名モンスター複数積みなんて彼らしくない!おのれ光の結社め!!」

「怒るトコそこですか!?!」

「……《七星の宝刀》を発動。レベル7であるマリシヤス・エッジを除外し、2枚ドロー。《コンバート・コンタクト》を発動。手札の「N」カードであるグランモール、デッキのフレアスカラベを墓地へ送り2枚ドロー」

「淡々とドローしていく十代君。こうやってデッキグルグル回す人にロクな方いないんですよー…ソースは天上院」

いったい天上院何雪なんだ…

「俺も新たな力を使おうか、魔法カード《オーオーバー・ソウル》。墓地の通常「E・HERO」…ネオスを召喚!!」

ヨミガーエーレーツへ『ハアアア…トワアツ!!』

《E・HERO ネオス》☆7 ATK2500

「おお!アニキの新しい「E・HERO」ドン!!」

「カツコいいー!!」

「そんな事より今のSE何ですか!?!」

「…ネオス…:過労死…何かを思い出しそうな…」

「魔法カード、《ラス・オブ・ネオス》!ネオスをデッキに戻し、フィールドの全カードを破壊する!!」

「…か、間髪入れずにコストにしたーっ!?!」

「むっ…させん！リバース罠《戦線復帰》！墓地の《巨神竜―フェルグラント》を守備で復活させる!!」

《巨神竜―フェルグラント》☆8 DEF2800

「フェルグラントは墓地から蘇生された時、相手モンスター1体を除外する！消え去れ、ネオス!!」

『ぐうう…』

新エースを出オチさせるなんて鬼畜の所業だねえ…

「ラス・オブ・ネオスはネオスをデッキに戻せなければ効果を適用しない。流石、と言っておくべきか」

「それだけではない！フェルグラントは効果で除外したモンスターの☆×1000ポイント、攻・守が上昇するのだ!!」

《グオオオオ…》

《巨神竜―フェルグラント》☆8 DEF2800↓3500

「フハハハハ！…だがこれはオマケだ！更に罨発動《ワンダー・エクシーズ》!!フィールドのモンスターを使用しエクシーズ召喚する！レベル8のギャラクシー・アイズ一体と、フェルグラントでオーバー・レイ!!現れいでよ、《No. 38！ 希望魁竜タイタニック・ギャラクシー》!!」

『ギャオオオオ!!』

《No. 38！ 希望魁竜タイタニック・ギャラクシー》★8 ATK3000

「相手ターンに★8のエクシーズ召喚!？」

「凄い…頭のネジが飛んだ分デツキは確実に強化されてる…」

「なんでこの学園、変人ほどデュエルが強いドン…?」

「それわたし入ってませんよね剣山君。あの人種と一緒にされるとか絶対嫌ですよ…」

「イツイヤダナア、セラサマハイツテナイドン」

「…（イラッ）」

「こいつの効果を覚えているか?…貴様お得意の融合戦術の天敵!魔法カードの無効能力だ!!」

クッ、万丈目君のデッキがリアリストに…絶対に許さないぞ光のなんとか!!

「……」

「どうだ十代!この状況でいつものように、「ワクワクしてきた!」とでもほざけるか!!?」
「ワクワク?…忘れちゃったよ……ワクワクなんて言葉」

「あ、アニキ?」

「なんか表情暗いですね……」

「なーんてな。じゃあお望み通り魔法カード《融合》発動!……どうするんだ?万丈目!!」
「ホワイトサンダー!当然タイタニックの効果発動!ORUをひとつ使い、融合を無効
ーさらさら…いつのORUとしてくれるわっっ!!」
「……」

融合、十代君の代名詞。何が出てくるかわからない以上、それを止めるのは間違いではない…けど…

「これで憂いは払った。俺はスケール5《霸王眷竜ダーク・ヴルム》をペンデュラムゾーンへセッティング」

「なっ…ペンデュラムだと!？」

「ダークヴルムのP効果発動。デッキよりスケール13の《霸王門無限》をセッティング。これにより、レベル6から12のモンスターが同時に召喚可能」

「レベル6から12!？」

「インチキ効果も大概にするドン!!」

「ペンデュラム召喚!!現れろ、我が魂の半身!3体の《ユベル》!!」

『ふふふ…君がそれを望むなら』

『僕は君の剣となり』

『盾となろう』

※《ユベル》☆10 ATK0×3

「レベル10が3体!!…ってなあーんだ、攻撃力0か…」

「ビックリさせないで欲しいザウルス…」

え、あの…今喋ってませんでした？あの男女両性の半竜っぽい方喋ってませんでしたか???

「…ハツ!?ダーリン逃げて下さいまし!!なんかヤバイですわ!!」

「何故だハニー!マルデイミガワカラソぞ!!」

「逃がすな…タイタニック・ギャラクシーを攻撃!!」

攻撃の宣言をしたのは十代君のハズなのに、対象とされた竜がユベルと呼ばれた悪魔に攻撃を仕掛けて行った。

「急に真面目にナレした!？」

「馬鹿が!自殺行為だ!」

だがその輝く奔流は、魔物を滅することは無かった。それどころか、魔物は悦んだよ
うな声をあげ…

『フフツ…へナイトメア・ペイン。く』

「な…ぐあああつ!!？」

無数の蔓が、万丈目君を襲った。

万丈目LP4000↓1000

「…だから誰エ!?ちゃんと地文やれるならいつもそーやつてください!!」

馬ツ鹿、普段からこんなんばかりだったらシリアス擬き…シリアル系小説になるだ
ろうアイデンティティーの崩壊だよ!!

「モーヤダ、帰りたい…」

「セラちゃん先輩、さつきから誰と戦ってるドン…」

『僕を傷つけるコトは決してできない』

『僕の痛みは、全て君の痛みになる』

『さあ：ファイナーレだ！』

「止めを刺せ！へナイトメア・ペインン！！」

「ぐ、グアアアアアッ!!？」

万丈目 LP10000↓5000

WIN 十代

次回、「ダークヒーローvsダークヒーロー」
デュエルスタンバイ！だよ!!

「早っ！今回これで終わりなんですかあ!？」

Next14羽 「知らん、そんなことは俺の管轄外だ」

前回のあらすじ

ワンターンスリイユベエル…

「遊城十代！お前は、お前だけは…絶対に許さない!!」

「許さない？それはこつちのセリフだけ、俺とジュンコの時間を奪ったお前を俺は許さない…こいつは俺のモンだ！」

「はい!？」

「そうはいくか！シスコン検定1級の僕の目が黒いうちは姉さんに彼氏など認めん！絶対にだ!!」

「あんたも何言ってるの!？」

「フツ…いいだろう、ならば決闘で語るまで！」

「よろこんで！」

「デュエルツツ!!」

じゅーだい LP4000

えど LP4000

え？展開が急過ぎてついてこれない？

ですよー…てか姐さん復活したんだから地の文担当して下さいよ。

「出来るかこんな状態でーっ!!」

あつはい…じゃあわたし、セラが毎度のごとく状況説明をば。

謎のイメチェンして帰ってきた十代君、ロケツ〇団…じゃなくて光の結社〇の使徒と化したホワイトサンダーとももえもんの、バカツプルならぬバカカツプルをぶっ飛ばして「やな感じ」させた翌日、

「ジュンコを戻す方法が判った」

「むしろアニキを元に戻す方法が知りたいドン」

などと供述しており…じゃなくて、わたしにエド君に連絡を取らせてアカデミアに呼びつけました。

「なんでセラさんエド・フェニックスの連絡先知ってんすか…」

「こつちが聞きたいですよ!!」

エド君もデレデレな姐さんの扱いに困ってたらしく翌日には即☆参上。プロって暇なの？

「姉さんに勝る優先事項はない!!」

さよですか。ラジオの速報で「世界チャンピオンD・Dとエド・フェニックス、両者行方不明」って流れてきたけど大丈夫なんですかね。

で、再び「イヤッホオオオウ!」しながら島に舞い降りた二人。

「十代久しぶり!あのねあのね!エドったら…」

「少し黙れ」

再開の挨拶もつかの間、十代君ったら姐さんをお姫様だっこ!? 唾然とするギャラリ―を置いてどこぞへ誘拐。

3分後に帰って来たと思ったら、姐さん顔真っ赤にしてたけど元に戻っていました。

「で?結局何されたんですか姐さん」

「誰が姐さん…って、言えるかボケーッ!!十代あとで覚えてなさいよ!!!」

「なんだ?嫌だったのか?」

「そりゃいきなりあんなコトされたら誰だつてねーっ!?」

「ちえ…そんなに嫌ならもう二度としないぜ」

「えっ!? ちよ…あの…嫌とかじゃなくて、その…」

なんですかこの反応、赤面してモジモジして…ヤダ、姐さん可愛い。

「ぶっ〇す!!」

エド君本音エー! 本音が駄々漏れですよ!!?

「僕のタアアアアン! 《ステニー・ドロウ》発動ドレッドガイをセメタリーに送り二枚ドロウ《E・HERO ソリッドマン》召喚モンスターエフェクト発動し《V・HERO ヴァイオン》特殊召喚モンスターエフェクト発動シャドーミストを墓地へ送りディアボリックサーチからのミストをセメタリーより除外して《融合》を手札に加える!!!?」

「なんて!?!」

「わからんザウルス!」

《E・HERO ソリッドマン》☆4 ATK1300
《V・HERO ヴァイオン》☆4 ATK1000

「どうやら冷静なを欠いて説明をはしょっているようですね…まあ最近のカードテキ
スト長いから」おい駄作者アア！デュエル書くのしんどいからって手エ抜いてんじやな
いわよ!!」

「どこに向かってつつこんでいるんです!?!けどなんか安心しちゃうわたしがいます!!」
「セラ様が病んでるドン…あらぬ方向に」

「ツツコミ一人で大変そうだったもんね…」

「うん、君たちも大概なんだが」

「(あつ、三沢君。いたんだ…)(」

「せめて声に出してくれ!!」

「融合を発動!ヴァイオン、ディアボリックガイをカモンしてデットリーガイをエント
リー!セメタリーのディアボリックガイエフェクト特殊召喚《オーバー・デステニー》エ
フェクトダイヤモンドガイをカモンでエフェクト当然通常魔法《HEROの遺産》の発

動確定！ソリッドディアボリックダイヤモンドを生け贄にドグマガイを特殊召喚!!」

《D—HERO デットリーガイ》☆6 DEF2600

《D—HERO ディアボリックガイ》☆6 ATK800

《D—HERO ダイヤモンドガイ》☆4 ATK1400

《D—HERO ドグマガイ》☆8 ATK3400

「滅茶苦茶やってると思ったら切り札っぽいので出てませんか!？」

「冷静を欠いてもプロはプロか…」

「おお、カツケエな…それで？少しは落ち着いたかよ」

「…フン！少し無駄うちしたが、ある程度優位は固められただろう。リバースカードを1枚セツトし、ターンエンドだ」

エド H5↓1 LP4000

《D—HERO デットリーガイ》(守)

《D—HERO ドグマガイ》(攻)

セツトカード×1

「じゃあ俺のターンだな、ドロー。」

「…アニキ服装は戻ってるけど、ディスクが黒い奴のままザウルス」

「なんか回転するギミックが気に入ったら嬉しいツスよ…」

「あーっ！よく見たら霸王ディスク!? 霸王ディスクじゃんんで!!?」

?? 霸王 (!?) の事なんで知ってるんでしょ…まあいいか。

「…この瞬間、ドグマガイのエフェクト発動！ヘライフ・アブソリュート!!」
「ぐっ…!?!」

十代 LP4000↓2000

「召喚された次の相手スタンバイ・フェイズ時にライフを半分にする。」

「いきなりライフ半分!？」

「ヤケクソ展開じゃ無かったザウルス!？」

モンスター3体生け贄に使ってライフ半分ですか…うちのクリムゾン☆ノヴァちゃんのが優秀ですね! 3000バーンですし可愛いし!

「《カードガンナー》を召喚し効果発動。デッキの上から3枚カードを墓地に送り、攻撃力を1枚につき500アップさせる」

《カードガンナー》☆3 ATK400↓1900

「墓地へ送られたのは《暗黒の召喚神》と《スキル・サクセサー》、あと三沢からこっそり拝借しといた《磁石の戦士マグネット・バルキリオン》だ。」

「十代おまつ…いつの間にも!？」

「…冗談だよ冗談。相変わらずお堅いなあ三沢は…」

「くう…ものすごい久しぶりに…普通に名前呼ばれた…」

「あんたら、三沢君いじめも大概にしなさいよ…また闇落ち(笑)されたらどうすんのよ」

「姐さんがそれ言っちゃうんですか？」

「セラちゃんも言えないからね？」

クツ、痛いところを突く…あの頃のわたしはどうにかしてましたね。

「フフツ、続けるぜ？墓地の《暗黒の召喚神》の効果発動」

「『えっ？』」

「墓地のこのカードを除外する事で《幻魔皇ラビエル》を手札に加える」

「ハアアアアア!?なんであんたがそれ持ってんのよ!!（てかOCG版なってるし召喚神
ー!）」

幻魔って去年の騒動の原因のアレですよ。最終的に馬鹿がルパンして姐さん達が
取り戻して…あれっ？

「知らん、そんな事は俺の管轄外だ（ユベルが持ってただけだし）」

「ネタ挟めばごませると思うなーっ!あとで校長に返しなさい!!」

「うーん、この久々の感覚…たまんねえぜ」

「十代貴様ア！一人で姉さんに突っ込まれてるんじゃない！…僕も混ぜろ羨ましい!!」

「アンタまでボケンナー！収集つかないからさっさと進めるバカ共つつつつ!!」

「は〜い…」

素直っ?! 姐さんには従うんですねこの人達…

「ならば《ダーク・コーリング》を発動！」

「ブツツ!」

「姐さん汚いです」

「手札のラビエルと墓地のバルキリオンを融合！来い、《E—HEROダーク・ガイア》
!!」

《E—HEROダーク・ガイア》☆8 ATK7500

「イービル・ヒーロー…攻撃力7500ウ!!」

「キヤー！霸王様カツコイイー!!」

「姐さんが壊れたあ！突然どうしたんですか!?!よだれ！よだれ垂れてる!!」

「ハッ?! いけないいけない、実は霸王様派だなんてバレたら事よね…(じゆるり)」

……全部声に出ています。やっぱり姐さんもダークサイドじゃないですかヤダー。

「ダーク・ガイアの攻撃力は融合素材とした悪魔族と岩石族の攻撃力の合計! バトルだ! デットリーガイを消し去れ、へダーク・カタストロフィー!!」

「馬鹿め! いくら攻撃力が高くともデットリーガイは守備表示だ!」

「逃がすと思うのか? ダーク・ガイアの効果! 攻撃宣言時、相手モンスターを全て攻撃表示にする!」

「何イ!?!」

「超攻撃力に加えてそんな効果まで…」

「殺意高いドン!」

岩石族入れるだけで採用出来るじゃないですか、いいなーあれ…

「ならばその発動にチェーンし、デットリーガイのエフェクト発動! 手札を1枚捨て、ドリームガイをセメタリーに送る。そしてセメタリーの「D—HERO」の数×200ポ

イント、攻撃力をアップする！」

《D—HERO デットリーガイ》 ATK 2000 ↓ 2800

「むっ!？」

「そしてドリームガイのエフェクト発動! 「D—HERO」のダメージ計算前にセメタリーから特殊召喚出来る!」

《D—HERO ドリームガイ》 ☆1 DEF 600

「そしてこのバトルで発生するダメージを0とする!!」

ダーク・カタストロフィー! ↓ 禍々しい何かを纏った隕石つばいものを投げつける。

ドリームガイのエフェクト発動! ↓ 隕石の盾になる、エ○パー伊藤、無傷。

みたいに想像してくれたら幸いです。

「ならば速攻魔法《マスク・チェンジ》発動! ダーク・ガイアよ姿を変えよ! 変身召喚《M・

HERO ダイアン》!!」

《M・HERO ダイアン》 ☆8 ATK 2800

「せっかく出した7500の化け物を変身させちゃった!?」
「思い切りが良すぎだろ…」

「ダイアンでドリームガイを攻撃だ!!」

「させん!リバーズ罨発動、《Dーフュージョン》!ドリームガイとデットリーガイを融合!!」

出た!エド組大好き罨融合だ!あれ毎回初手に握ってませんかね、今まで見た限りです
すが。

「させないぜ。手札からカウンター罨、《レッド・リブート》を発動!ライフ半分を払い罨の発動を無効にし、セットする!」

十代LP2000↓1000

「何イイ!?!」

「手札から罨!?!」

「ててて手札から罨を発動するザウルス!?!」

「手札から罠なんて…すごい！」

「お約束のような反応してんじゃないわよアンタ達。え、打ち合わせしてんの？ 今日打ち合わせしてから来たの?」

「本当お前ら変わってねーな…そしてその後、お前はデツキから罠カードを選んでセツトする。エンドフェイズまで罠の発動を封じられるがな」

「チツ…ならば《リビングデットの呼び声》をセツトする！」

確かに珍しい罠ですが、ライフ半分払って相手の罠は増える。と…確実に展開するにはうってつけですが、ホイホイ使ったら自分の首を閉めそうですね。

「このターンはどうせ使えないと踏んで、妨害の罠より展開の為のカードをセツトしたのね…」

「しかしこれで、我が道を阻むものはない！ダイアンの攻撃を続行、ドリームガイを破壊する！」

「クツ…助かった、ドリームガイ」

壁モンスターにわざわざ一瞥？

へえ…思ってたよりモンスターへの情は強いんですね。

「ダイアンのモンスター効果発動。デツキからレベル4以下のHERO、シャドーミストを特殊召喚。その効果により《フォーム・チェンジ》を手札へ加え発動。ダイアンをEXデツキに戻し、光牙に変身させる！」

《E・HERO シャドーミスト》☆4 DEF1500

《M・HERO 光牙》☆8 ATK2500↓3500

「光牙の攻撃力は相手モンスターの数×500上昇する。光牙でドグマガイを攻撃！」
「ドグマガイを正面突破するとは……」

エド LP4000↓3900

「全滅させるつもりだったんだが…まあ良い、メインフェイズ2に以降。《一時休戦》を発動。互いに1枚ドロウする。そして次のお前のエンドフェイズまで、全ダメージは0となる。」

「散々攻撃してから一時休戦、これはひどいな…」

「それだけじゃ済まさない、《ツインツイスター》を発動。手札1枚を捨て、お前のセットカード2枚を破壊する！」

「D―フュージョンとリビングデットが…レッド・リブートは的を増やす目的もあつたか！」

「最後にカードを1枚伏せる。ターンエンドだ」

十代 LP1000 H6↓0

《カードガンナー》 ATK1900↓400

《M・HERO 光牙》 ATK3500↓3000

《E・HERO シャドーミスト》 D

セットカード

「僕のタアーン！まずはセメタリーのディアボリックガイ、エフェクト発動！デツキ最後のディアボリックガイを特殊召喚!!」

《D―HEROディアボリックガイ》 DEF800

「そしてダイヤモンドガイのエフェクトにより、セメタリーに送られていた《ヒーローの遺産》を発動する。3枚ドロー!!」

「手札が0だったのに4枚になってるドン！」

通常は発動コストあっても3枚ドローはおかしい。方界の遺産出ませんかね、手札消費マツハなんでわたしも。

「……イービルにマスク、よくもまあ色々取り入れて来たものだ。

「あれ？Nはどこいったの？」

だが！それだけで僕のD—HEROに勝てると思うな!! エアーマンを召喚！」

《E・HEROエアーマン》☆4 ATK1800

「エアーマンのエフェクト発動！デッキからHEROを手札に加える。究極のDをな
!!」

「究極のDだと!？」

「ちよつ、待ちなさいよアンタ！それは色々問題が…」

「僕はフィールドの3体のモンスターを生け贄に…来い！究極の《D—HERO B1
0—D》!!」

『ウオオオオッ!』

《D—HERO B100—D》☆8 ATK1900

「これが…」

「究極のD…」

「こいつがお前の切り札か…いい趣味してやがるじゃないか!」

同意。蝙蝠つばい翼とか、露骨に邪悪な感じとか…私好みのカードだ。やりませ
ねえ。

「だが3体もの生け贄を要した割には攻撃力1900、このままでは光牙には敵わない
が…」

「Bloooodのエフェクト発動！相手モンスター1体を吸収し装備品カードとする。そしてその攻撃力の半分の数値とエフェクトを得る！（※原作効果）」

「んなっ!?!」

わたしのサクリファイスの類似：いえ、効果まで盗む分もつとタチが悪い、欲しい！

「対象は勿論M・HERO光牙だ！ヘクラフティー・ブラッド♡!!」

《D—HERO Blooood》ATK1900↓3150

「光牙の永続効果により、更にお前のモンスターの数×500ポイント攻撃力が上昇する」

《D—HERO Blooood》ATK3150↓4150

「攻撃力4150!?!」

「しかも吸収されちゃった光牙には墓地の「HERO」を除外し、その攻撃力分相手モン

スターの攻撃力を下げる効果があるわ」

「エド・フェニックスの墓地には攻撃力3400のドグマガイ。つまりアレを倒すには攻撃力7550以上のモンスターが必要になる」

「それだけではない…魔法カード《D―フォース》を発動しデッキトップにセットする。Bloo―Dが場に存在し、このカードが僕のデッキトップにある限り相手フィールドで発動するモンスターエフェクトは無効となり、僕のカードを対象とする魔法・罠の発動とエフェクトを無効にし、破壊する！（※原作効果）」

「相手限定のスキルドレインに加えて対象効果の完全無効!?ゲスですか!!」

「そんな…そんなモンスター倒せるわけがない!」

「無茶苦茶ザウルス!!」

カイザーさん辺りなら上から殴り潰しそうですがね7550、それはともかく脅威には変わりませんが。

「《死者蘇生》を発動。セメタリーからデットトリীগイを特殊召喚する。」

《D—HEROデットリーガイ》☆6 ATK2000

「バトルだ！デットリーガイ、BlOODでそれぞれカードガンナーとシャドーミストを攻撃！〈デットリー・グレイブ〉！〈ブラッディ・フィアーズ〉!!」

「ク…だが一時休戦の効果によりダメージは受けない。シャドーミストの効果でネオスを手札に加え、カードガンナーの効果で1枚ドロウするぜ」

「ネオス？また知らないHEROだが…遠目で見た限り通常モンスターか。メインフェイズ2に移行しカードを2枚伏せる。ターンエンドだ」

「ならばエンドフェイズに罠カード発動、《裁きの天秤》！お前のフィールドのカードは5枚、俺のフィールドと手札の合計枚数は3枚、よって2枚ドロウする！」

エド LP3900 H0↓0

《D—HERO Blood》(ATK4150↓3150)

+ 《M・HERO光牙》

《D—HEROデットリーガイ》(ATK2000)

セットカード

セツトカード

「Dーフォースでドロロー出来ないのに手札使いきったか、次で決める気満々ね。十代は次のドロローで手札5枚、突破出来るかどうか…」

「姐さん、エド君のカード詳しいですね…究極のDも知ってたんです?」

「まあ…仮にもマネージャーの真似事してましたから?」

む、なんか曖昧な返事…そもそも二人がどんな関係か、わたし達知らないんですよ。実の姉弟ってことはあり得ませんし…

「俺のターン、ドロロー!魔法カード《ヒーロー・アライブ》を発動!場にモンスターが存在しない時、ライフ半分を糧にデッキから「HERO」を特殊召喚する。来い、バブルマン!」

十代LP1000↓500

《E・HEROバブルマン》 ATK800

「何でバブルマン？」

「今は全モンスター効果が無効にされて強欲できないドン!!」

「強欲出来ないってなんじゃい!なんとなく解るけれども!!」

2ドローの事ですな解ります、スキルドレイン状態じゃ形無しですが…心無しかぐつたりしてますね、強欲さん。

「エド、見せてやるぜ…手札から速攻魔法《超融合》を発動!!」

「まじで!!?」

「手札1枚を捨て発動。バブルマンと…お前のBlizzardを融合させる!!」

「馬鹿な!相手のモンスターをも融合するカードだと!しかもDフォースのエフェクト

適用外…!」

「そう。融合なら対象をとる必要もない。そして超融合の発動に対して、あらゆるカードを発動出来ない!!」

「まさに《超融合》の名に相応しい、恐ろしい効果だ…」

「三さw…三つ星レストラン君も知らないカードなんすか?」

「もう完全にネタ切れ起こしてるじゃないか！なんだ三つ星レストランって!!」

こいつら空気読まないですね…吸収するモンスターを融合素材にして吸収。なんか背徳感ありますね素敵！姐さんの反応が異常だったのが気になります。

「現れる！無慈悲なる白銀の英雄、アブソルートZero!!」

《E・HERO アブソルートZero》☆8 ATK2500

「来たあ！最凶のE・HERO!!」

「これはもらったザウルス!!」

「まさか究極のDを融合素材にしてくるとは…だがお前の突破手段がアブソルートZeroであることはお見通しだ！リバースカードオープン！罫カード《煉獄の落とし穴》！」

また強そうであまり使われない微妙な落とし穴を…

「これでお前のアブソルートZeroはモンスターエフェクトを無効にされ、破壊される！煉獄へと落ちるがいい!!」

「だがフィールド外で発動する効果は無効にならない、デットリーガイには死の国へと還ってもらうぜ！」

「承知の上だ、永続罠《テイメンション・ガーディアン》を発動する！このカードエフェクトにより、デットリーガイはバトル・カードエフェクトでは破壊されない!!」

あれで本来はB1000-Dを全体除去等から守る予定だったんでしょね…融合は予想出来ませんよ普通。

「それで終わりか…ならば俺の勝利だ！」

「馬鹿なっ!!その手札2枚で、僕のほぼ無傷のライフを削り切る気か!!」

「そうだ。《オーバーソウル》を発動！蘇れ…ネオス!!」

『ハアアア…トワア!!』

《E・HERO ネオス》☆7 ATK2500

「過労死きた！これで勝てる!!」

「過労死つてなんですか!?!酷使されるんですか!!」

「ネオス…これが新しいお前のHEROか。だが攻撃力2500ではあまりに足りないぞー!」

「慌てんなよ。来い! 《N—エア・ハミングバード》!!」

『待ちくたびれたぞ、十代!』

《N・エア・ハミングバード》☆3 ATK800

「ここで鳥!?!どんなデツキ構成よマジで!」↑シャベツタアアアアと言いたいのを必死に我慢している。

「鳥獣族の弱小モンスター…ハッ、そんな奴で僕を倒そうと言うのか!」↑シャベツタアアアと言いたいのを必死に我慢している。

「ネオススピーシアン達の真の力を見せてやる!ネオス!エア・ハミングバード!コン

「タクト融合!!」

「融合のカード無しで融合だと!？」

貴方初対面の時、似たような召喚する剣闘獣使ってきたじゃないですか…

「吹き荒べ! 《E・HERO エアーネオス》!!」

「おお…」

「エアーネオスのモンスター効果! 自分のライフが相手より少ない時、その差の数値を自らの攻撃力に加える!!」

《E・HERO エアーネオス》☆7 ATK2500↓5800

「これで終わりだ! エアー・ネオスでデットリーガイを攻撃! ヘスカイリップ・ウィング」
!!」

「足りない…足りないぞ十代! 僕のライフは3900、その攻撃を受けても1000残る」
!」

「ダメージステップ! 墓地から罨カード《スキル・サクセサー》の効果を発動! エアー・

ネオスの攻撃力を800アップさせる!!」

《E・HERO エアー・ネオス》ATK5800↓6600

「しまっ…」

エド LP3900↓0

WIN 十代

「まさか、僕が負けるなんて…」

切り札を出したと思えば次のターンにワンショット・キル。

これは流石にシヨックでしょう、わたしにも覚えがある…同情しますよ、エド君。

「俺の勝ちだな。そーいやエド。前から言ってみたい台詞があつただけだよ…」

「なんだいきなり…」

「…消えろ、雑魚が」

「はあっ!？」

うわっ、以前言われた台詞まんま返した…

「…なーんてな! やっぱり滅茶苦茶強かったぜ、エド!!」

「お前っ!…」

「前負けた時すげーシヨックだったんだからなー、少しは解つてくれたか?」

「む…そうだな、悪かった。」

「よっしや! これで仲直りだな!!」

「だ、誰と誰が仲直りだ! そもそもお前と友人になつた覚えはない!」

「なんだよ冷たいな。女子を取り合つて文字通り決闘した仲じゃないか。てかその反応、ジュンコにそっくりだな? お前もツン…ツン〇レつて奴か?」

「誰と誰がツ〇デレか(じゃー)!!」

うわあ、息びったりー。

「まったく…いいか十代! 今回は僕の負けだが、D—HEROが負けたわけではない。決

してない！僕はまだ50%しか実力を出していないからな！」

「まじか!?じゃあ俺は40%だ!!まだまだ隠しギミックが沢山あるぜ!!」

「嘘をつくな!だったら僕は30%だ!!」

「じゃあ俺は20%!!」

「こんの…」

「やるかあ?」

…小学生の喧嘩か。大人ぶってるけどエド君も歳相応なトコあるんですね…ちよつと可愛いかも。

あと十代君は序盤のクールどこいった。燃えるデュエルして柔らいだんですね…
…つてあれ、姐さんが泣いてるう!?

「あのコに友達が出来るなんて…お姉ちゃん感激…」

泣く程友達少ないんですか彼!それより結局どんな関係!?

「クククク…見たかいハニー。あの力を…」

「ウフフフフ…見ましたわ、ダーリン。十代…いえ、霸王十代様の力、超融合を!!」

こ、このアホらしい波動は…

「ダーツハツハツハツハツハ!!」

「だ、誰だ!？」

「僕だ!」

「翔!お前だったのか!？」

「ゴメンアニキ、悪ノリツス」

「トオウツ!!」

「上から来るぞ!気をつけろ!!」

「ネタをいちいち挟むなー!!」

いけない!あの二人です!!

SE へチュツドーン

「…って、どこの○ケツト団じゃああああい!!!」

姐さんのその日一番のツツコミは…エコーして島中に響き渡ったそうです。

次回「光の中にツツコミを入れる物語」

Next 15羽 「そうだ」

前回のあらすじ

ロケツ〇団、再襲来。

僕は、十代に負けた…クソツ。まあ少しばかり認めてやらんこともないかもな…

なんて思考をする間もなく、謎の真っ白な趣味の悪い制服を来た、どう考えてもヤバい二人組、三人組？

「「「万丈目、ホワイトサンダーツツ!!!」」」

増えた。なんだこの学園。

「なんであんたら制服真っ白だとか明日香が〇ヤースポジは無理しかないとか今の爆発
どうやって起こしたとか色々言いたい事しかないけどいきなり取り囲んでなんのつも

りよあんた達!!」

「姐さん、気持ちにはわかるけど落ち着いて下さい。句読点が無いので読みづらいです」
「なんか説明するのも馬鹿馬鹿しいけど、今学園の生徒達が白く染まっていつてるドン
…」

「「あの二人のせいだ!!」」

「フウン、我らが光の結社の…否！俺とハニーの進撃を止める事は不可能!!」

「その通りですわ、ダーリン。もはやわたくし達光の結社は、学園の50%を越える最大勢力となっております」

「ええ…つまりあんたら二人組が真つ先に白くされたってコト？精霊補正とかどこ行つたのよ…」

会話が微妙に噛み合っつてなさそうだが姉さんはなんだかんだで理解したらしい。

ネタバレ絶許を食らった僕とは違い、原作知識（笑）とは便利なモノだな…もはやかなり曖昧らしいが。

「とりあえずさ万丈目、また俺達を取り囲んで今度はなんの用だ？ 勧誘ならお断りだぜ」
「ホワイトサンダー！…フン、我々より先に光の洗礼を浴びたハズの枕田を迎えに来たのだから…」

「どうやら十代様の熱いアレのせいで解除されてしまったみたいですね。やはり愛の力は偉大ですわ」

「アレってなんすか？ ジュンコの姉貴」

「なにされたドン？ ジュンコの姉貴」

「……」想像にお任せするわ…」

アレは激しく気になるが、つまり姉さんの状態異常の原因は…

「つまりジュンコを、なんかただのデレコにしたのはお前達のボスの仕業か！」

「デレコってなんじゃい！ あたしどんな感じだったの!?!…いや、やっぱ言わないで怖いから」

あ、自覚は無かったのか？ 記憶はありそうだったが…

ただの世話焼きお姉ちゃん()で逆に怖かったのは黙っておこう。

「勘違いをするなよ？光の洗練とは、基本的にはただの「いてつくはどう」だ」
「どうゆうことだ、まるで意味がわからんぞ！」

「なんだ三沢…いたのか」

「影の薄さに磨きがかかってきましたわね、三沢様」

「ちゃんと呼んでくれてもこの仕打ちかチクシヨウ!!」

あいつ…なんかかわいそうな奴だな。

「つまりは人が普段被っている仮面を剥がし、本性を露にしそれを受け入れた上で光の結社に集うのだ!!」

「何っ!?!つまりお前達の本性は、ただ二人でイチャこらしたかっただけのバカカップルだ
というのか!!」

「そうだ(ですわ)!!」

「言い切りましたよこのバカ二人!!」

なんだそれ、ある意味恐ろしいな。ん?つまり姉さんは…

で抑えられてるぞ…

しっかしバトル後に現れて、消耗したピ○チュウをかつさらいにくるロケツ○団みた
いだな。懐かしいにもほどがある…なんて思ったが黙っておこう。

「へっ、この前俺に瞬殺されたのを忘れたか？また返り討ちにしてやるぜ」

「ククククク、強がるなよ？十代イイ…」

「この光の結社製デュエル力測定器、通称デユカウターによれば…貴方様の決闘力は
すー君…もといエド様とのデュエル前に比べて3割減。今なら二人がかりで潰せます
わ！（多分）」

「クツ、エドがあまりにカッチョイイHEROを出すから釣られて調子に乗りすぎたか
…」

ん？今なんか違和感あつたぞ？

それよりクツ、じゃなくてな十代…今浜口女氏が顔に装着したアレ。あれどうみても
ス○ウター…

「あんたっ、それカイバーマンがつけてたスカ○ターのパクリのじゃん！色々問題にな

るから返してらっしやい!!」

「以前も登場したんですかアレ!？」

「えー、ジュンコさんお堅いですわー。それに光の結社製って言ったじゃないですかー」
 「や・か・ま・し・い・わ! つーか消耗したところを狙ってかつさらうとか、発想がピカ
 ○ユウを狙うロケ○ト団かつつーの!!」

いかん! 脳内とはいえツツコミが被った、流石姉さん!!

「フ…流石は我が心友、【電光のツツコミ】のジュンコさん。復帰早々キレツキレですわ
 ね」

「その恥ずかしい二つ名まあだ有効だったんかい!」

「大丈夫ツス! 【ゲテモノ魔王】のセラ様よりは可愛い気があるツス!!」

「翔君…あとで体育館裏まで来てもらえますか? (ニツコリ)」

「ヒイヒイ! 僕が言い出したんじゃないのにいい!!」

あいつそんな通り名あるのか…まあ僕が戦った時もイロモノばかりだったから不思議じゃないな。

メールで多少やりとりしたが「え？ベエルゼ可愛くないです？」は返事に困ったぞ…

『(何気にあのひと仲いいわよね、マスター…)』

あ、D・Herro. ダーク・エンジェル(笑)さん 駄 天 使 いたのか。てつきりD・D戦で成仏したものと。

『(三沢クン以上の扱いの悪さ!)』

安心しろ、お前のことなど誰も知らないし覚えてしまい。

『(この辛辣がクセになるう!)』

「ともかく、タイマンを仕掛けようってならまだしも数人がかりで十代を倒そうだなんて黙ってられないわね…?」か情けなくないのかあんなら!」

「ぐぬぬ…なんとも言え!俺とて光の結社を救わねばならん!」

「どこのブツクスよ!!もう…十代と闘りたきやあたしが相手になるわ!勝ったら超融合でもなんでも持つてけえ!!」

「俺のカードなんだけど!?まあ…俺もさつきジュンコの大事なモン奪ったからいいか」

「ツツツ!ばーか!ばーか!!ばーか!!」

「姐さんが幼児退行を!」

十代：それ詳しく。場合によっては戦争だ。

しかしディスクを構える姉さんも素敵だ：じゃなくて絶対にうさ晴らししたいだけだあれは。

「いいだろう。ならば…」

「いいえダーリン。ジュンコさんが相手ならわたくしが参りますわ。光の結社の素晴らしさ、心友たるわたくしが教えて差し上げましょう」

「ハンツ、だくれが悪徳宗教もどきなんかに入りますか！完膚無きまでに派手ぶつ飛ばしてあんたを正気に戻してあげるわ、モモ!!」

「デュエルツツ!!」

ジュンコ LP4000

ももえ LP4000

「先行はわたくしですか、残念…ドローツ」

先行を残念がるなんて珍しい…いつたいたいどんなデッキなんだ？彼女のデータは駄天使リストにはほぼ無かったしな。

「まずはこの方ですわよね。おいでませ！《深海のディーヴァ》さんを召喚！」

『はぁ、いい、おっ久々』

《深海のディーヴァ》☆2 ATK200

「げ、出た！」

あれは…シンクロ召喚普及と同時に登場したはいきなり制限カードに指定された、強力なチューナーモンスターか。

ナチュラルに会話してる点は指摘しなくていいのか？

「モンスター効果発動！デッキからレベル3以下の海竜族モンスター…」

「だが断る。手札から《増殖^{姑息}するG^手》を捨てて効果発動！特殊召喚する度に手札1枚ド

ローするわよ!!」

「何っ! 枕田は極度のG嫌いではないのか!？」

「ばっか。つい最近までそのプロ様のトレーナーも兼任してたあたしが、多少の好き嫌いで妥協するわけじゃないでしょーが! あいつ何気に展開力高いし! (当然エフェクトはOFF)」

「エドお…その話詳しく聞きたいんだが…」

「ちよ、プロとしてシンクロやらエクシーズとやらに慣れたかっただけだ! せいぜい100戦くらいしかしてないぞ!!」

「ジュンコと100戦もしただあ!?! 羨まけしからんぜ!!」

「どこに嫉妬してんのあんたは! あとで相手したげるから大人しく見てろっつーの!!」
「ちえー、絶対だぜ?」

自然と二人になる状況を作るとは、やるな十代…絶対邪魔しよう。

『(どこに関心してるノン…)』

「むむ、ハンデスルートまで行きたかったのですが…とりあえず《海皇子ネプトアビス》をデツキから特殊召喚しますわ」

『はい、お久しぶりイ』

《海皇子ネプトアビス》☆1 ATK 800

「こっちは出来れば会いたくなかったわよ…とりあえず1枚ドロー!」

「ネプトさんの効果! デッキから龍騎隊を落として龍騎隊をサーチ、更に龍騎隊の効果でメガロさんをサーチですわ」

「モンスター召喚して何故手札増える」

「鬼ツス」

「えぐいドン」

なるほど、彼女は海皇と水精燐のデッキか。普及率の問題でまだあまり見かけないが、強力な展開が出来るのは把握している。

「そんなくらは承知の上よ。あんたがここから強力なモンスターを並べるためには、特殊召喚の連発が必須。このターンは大人しくしたら?」

「フフフ、光の結社の力をなめちゃ困りますわよジュンコさん…開け! わたくし達を導くサーキット!!」

「へっ?」

聞き覚えの無い口上と共に、浜口女氏の前に《ワーム・ホール》のような穴が…

「召喚条件は、水・魚・海竜族のモンスター2体!サーキット・コンバイン!!」

「はいっ?」

それに合わせるように2体のモンスターがホールに吸い込まれ、やがて光を放ち…

「リンク召喚!おいでませっ、リンク2!《水精燐—サラキアビス》!!」

『やあっ!』

《水精燐—サラキアビス》 L2 ATK1600 左下/右下

「な、」

「な、」

「なんじゃあそりやあああああ!?!」

次回「あんた正気でしょ？」

Next 16羽「それ欲しい、下さい」

前回のあらすじ

前回のあらすじとかだるいのでさっさと本編いきましようか←

「リンク召喚！おいでませつ、リンク2！《水精燐—サラキアビス》!!」

『やあつ！』

《水精燐—サラキアビス》L2 ATK1600 左下／右下

「なんじゃあそりやあああつ!!?」

「これこそがEXに制限がされた新ルールに対応せし、光の結社の崇高なる力！リンク召喚!!」

「リンク召喚だと?!」

「この召喚にはレベルを合わせたり合計したりなどの手間は無い、必要数のモンスター

を揃えるだけで召喚できる新境地！あの方は我ら光の結社全員に、新たな力をお授け下さったのだ！」

必要なモンスター数を場にそろえるだけ…あのモンスターでいえば、海産物を2体で良いとゆうコトか。

「うおい！会長に黙って新しい召喚とか出すんじゃないわよ、消されるっつ！！」

「ククク、我らが盟主は用意周到でなあ…既にペガサス会長の承認は降りているのだよ！まあ出事が特殊らしく、全員1〜2枚しか持っていないのだが」

「「「万丈目サンダー！！」」」

「「じゃあ仕方ありません」とのことですわ。流石会長、懐が大きい」

「1〜2枚ずつって！大して変化ないじゃんそれ！！そしてなんの合の手もモブ共！！」

「まあ他の召喚方も浸透しきってませんし、デュエルディスクのアップグレードの関係もありますし…しかししたかが1〜2枚と侮るなかれ、ですわよ！」

「だったらみせて貰おうじゃない…光の結社の崇高なる力○って奴を！あ、G^ゴの効果で1ドローね」

「お望みとあらば…Gの効果適用中ですし、カードを2枚伏せてエンドですわ」

「「「「だああっ?!」」」」

ずっこけた、この場大半の人間がずっこけた。

「さんざんドヤ顔しといて終わりですか!?!」

「流石ももえさん…白化してもマイペースすぎる…」

ももえ H5↓5 LP4000

《水精燐—サラキアビス》 ATK1600

セットカード

セットカード

融合でもシンクロでもエクシーズでもペンデュラムでもない召喚か…まあ少ししかないなら姉さんの言うとおり、対した脅威ではないだろうな。

「はあ…拍子抜けだわ。あたしのターン、ドロ—!」

「ジュンコのデュエルを見るのも久しぶりだな…あ、あれ?なんだかドキドキしてき

たぜ」

「ワクワクじゃなくて?!」

解る。…などと言えば流石に引かれるだろうから黙っているか。

「む…来ないわね。《闇の誘惑》発動、カードを2枚ドロ―! むむ…銀盾のミストラルを除外するわ。」

「……なあエド、ひとつ恥ずかしい話をしていいか?」

「なんだ馴れ馴れしい…簡潔になら聞いてやる」

「ジュンコがカードを除外する場所、腰のケースなんだが…最近やらしくみえてきた、エロ。」

「十代貴様ツツ……悔しいが同意するツツ!!」

「同意すんな! あんたら純粹そうな顔してどこ視とるんじやーっ?!?」

いかん! つい口が滑った!!

「あとであいつらもぶっ飛ばすとして……これだけ引けば来るわよね。永続魔法《黒い旋風》発動！んでもってシロツコ召喚!!」

『グエーツ！』

ブラックフェザー

《B F―暁のシロツコ》☆5 ATK2000

「黒い旋風の効果！デッキから攻撃力2000以下の…」

「チエーンして《サイクロン》！旋風を破壊ですわ!!」

「このゲスアマ！」

「ジュンコさんの旋風初手掌握率は、ドロースース込みで99%！警戒しないわけがありませんわ!!処理後になにもなければサラキアビスさん、モンスター効果を発動いたしますー！」

「このタイミングで!？」

「相手ターンに一度、手札を1枚墓地へ送り発動…デッキから「水精燐」モンスターを手札に加えることができます」

「…地味ツスね」

「…地味ザウルス」

「ふっ、馬鹿共はまだわからぬらしい…」

「わたくしは重装兵を墓地へ送り、ディニクアビスを手札へ加えます!!そして重装兵効果!ジュンコさんに説明は不要ですわ、シロッコを破壊致します!!」

「はああ!?ディニクのサーチ手段が出来たって…インチキ効果も大概にしなさいよ!!てかさらつと重装捨ててんなー!手札より速攻魔法《鳥合無象》発動!!シロッコを生け贄に、EXから鳥獣を効果無効でダイレクト召喚!」

「リリースエスケープか!やるう!!(襲つてきた明日香を^無気絶させながら)」

十代:女性にみぞおちを躊躇無くするとは酷いのではないか?回りの反応からして普段通りなのか…

「明日香の扱い雑過ぎイ!天空へかけ上がる翼となれ!!《BF—アーマード・ウイング》!!」

『シャアツ!!』

《BF—アーマードウイング》☆7 ATK2500

「はい?」

「そして場に「BF」いるからゲイル推参!!」

『クルルクツル』

《BF—疾風のゲイル》☆3 ATK1300

「いつもの効果でサラキアビスの攻撃力を半分に!!」

《水精燐—サラキアビス》1600↓800

「覚悟なさい、モモ!レベル7のアーマードウイングに、レベル3のゲイルをチューニン
グ!!」

「はあ…牙王ですかね…」

「ばっか、あんたの新しい力(笑)に対抗したげようとしてんじやない。黒き旋風よ!
えーと…真の姿を見せたげなさい!!」

「へっつ!!?」

「シンクロ召喚、完全武装!《BF—フルアーマード・ウイング》!!」

『トワアツツ!!』

《BF—フルアーマード・ウイング》☆10 ATK3000

「あ、アーマード・ウイングの進化体だって!!?」

「すごいドン（小並）!!」

「なにそれ知らないんですが!!」

「教えてないし…バトルよ！フルアーマードでサラキアビスを攻撃イイ!!」

「あ、《リバースカード発動和睦の使者》で。」

「ガツテム！カードをセットしてエンド!!」

ジュンコ H6↓2

《BF—フルアーマード・ウイング》ATK3000

セットカード

「テンポ早いですねこの二人!？」

「この二人に余計な言葉は不要なんだろ、俺もそんな仲になりたいぜ」

「兄貴も明日香先輩には無言（物理）で語ってるドン…」

「わたくしのタアーン！ダイニクアビスの効果！龍騎隊を切って特殊召喚!!」

《水精燐ーダイニクアビス》☆7 ATK1700

「ダイニクさんの更なる効果！それに加えて、切られた龍騎隊の効果！ムーラングレイスとアビスグンデを手札へ!!」

「むっ…フルアーマード・ウィングの効果発動！相手モンスターが効果を発動する度、そいつに楔カウンターを1個撃ち込むわ！」

「ダイニクアビスのみぞおち辺りに懇切丁寧に楔を刺したな、あの鳥人…」

「楔がなんですか？魔法の呪文、ボチミズゴタイ！《氷霊神ームーラングレイス》!!」

《氷霊神ムーラングレイス》☆8 ATK2800

「当然効果発動ですわ、手札2枚を捨てさせます!!」

「鬼かあんたは！ムーランにも楔乗つとけ!!」

ジュンコ 手札2→0

「まだまだあ！チューナーモンスター、《フィッシュボグ・ランチャー》を召喚!!」

《フィッシュボグ・ランチャー》☆1 ATK200

「うん？」

「レベル7のディニクさんに、レベル1のランチャーをチューニング！深淵に眠りし大いなる勇魚。生死を廻る大海にお目覚めなさい！シンクロ召喚！《ホワイト・オーラ・ホエール白闘気白鯨》!!」

『ブヲオオオオオオツ!!』

「でっ…」

「でかーっ??
!!!??」

《白闘気白鯨》☆8 ATK3300

まるで現地球上最大生物と言われるシ〇ナガスクジラを思わせる、巨大なモンスターが呼び出された。デカイ…とにかくデカイ。

「フフフ。これが名主様よりパクっ…頂きし白き力「白鬪気」！飲み込まれぬようご注意ですわ!!」

「つてちよつと待てーいつ！あんたのエクストラモンスターゾーン（仮）埋まってんでしょーが！何シンクロ召喚してんのよ!!」

余談だが、デュエルデイスクの改築が間に合っていないので、融合モンスターなどは立体演出でのみエクストラモンスターゾーンに配置されている。…深く考えるな、感じろ。

「クツクツク…説明しよう！例えば、サラキアビスにはリンクマークとよばれるマークが2個ついている」

「あ、この矢印っぽいのです。そのマークの先のモンスターゾーンには、エクストラデッキから新たにモンスターを召喚することができるのですわ!!」

「「ナ、ナンダッテー!!」「」」

「じゃあ光の結社の連中は、融合もろもろし膨大ってことかよ!」
「やることがキタナイザウルス!!」

∴融合以外使う気は無かったが、少し惹かれるなそれは∴

「因みにこの矢印の先にいる状態のことをリンク状態と言います。サラキさんの効果でリンク先におられる白鯨さんは、攻守が500アップ致しますわ」

《白闘気白鯨》 ATK 2800 ↓ 3300

「攻撃力がフルアーマード・ウィングを越えた!」

「不味いドン!!」

「そして白鯨さんの効果発動!シンクロ召喚時、相手モンスターを全て破壊ですわ!!」
「強っっ!!」

「すべてを飲み込め!へタイダルウエヴ!!」

「でた!ももえさん特有のテイ○ズ技名パクりだ!!」

「そんな特有アリですか!!?」

どっから出てきたかわからないが、多分白鯨とやらが出したのだが、大津波が姉さんのフィールドを覆い尽くしてしまう。まあ…

「つて、あら?」

「ふっふっふっふっふーん。残念だったわねももえもくん(ダミ声)」

「そんな!フルアーマード・ウイングは無事!?!塩水しよっぱかった程度の表情してやがりますわ!!」

「いや、フルフェイスで顔見えんし…完全☆武装!したフルアーマードは他のカード効果を受けない!破壊効果なんざ通用しないのよ!!」

「!!!ナ、ナンダツター!?!?!」

「アルティメットファルコンに続いて2体目の無鳥獣ですつて!?!インチキ効果も大概にしゃがれですわ!!!」

「壮大なブーメランだから、あんたのここまでの使用カード全部見直してから言おうか

!? あ、ついでに白鯨にも楔カウンターいれるわ。」

「ぐぬぬぬぬ…ならば打点と数で押しきるのみ！手札のメガロさんの効果！手札のアビスグンデさんと狙撃兵を切って特殊召喚!!」

《水精燐—メガロアビス》☆7 ATK2400

「残りの手札がそれってどんな引きしてんですか…」

「当然、グンデさん効果でディニクさん復活！メガロさん効果で《アビスケイル—…ミズチ》にしましょうか、手札に加えます。おまけに狙撃兵の捨てられた時効果で伏せカードを破壊ですわ!!」

「馬鹿めっ、伏せは和睦よ！チェーン発動!!ついでにメガロにも楔カウンターじゃーっ!!」

「ちよっつ…真似しないで下さいまし!!」

仲いいなああの二人…ん？姉さんと親友、アダ名が「モモ」……ああ、察した

「倒せないなら作戦変更ですわ。レベル7のメガロさんとディニクさんでオーバーレイ

「おいでませー！《水精燐ーガイオアビス》!!」

『ぬううん…』

《水精燐ーガイオアビス》★7 ATK2800↓3300

「《アビスケイルーミズチ》をガイオさんに装備、カードを1枚伏せてターンエンドに致
しましょう…」

ももえ H5↓0 LP4000

《水精燐サラキアビス》ATK800

《白鬮気白鯨》ATK3300

《水精燐ガイオアビス》+《アビスケイルーミズチ》ATK3300↓4100

《氷霊神ームーラングレイス》ATK2800

セットカード

「相変わらず凶悪な展開力だな浜口君は…」

「あ、三郷君どこいったんスか？」

「ちゃんと見てなきや駄目ザウルス」

「ずっといたわ！あとまだ名前が微妙に違う!!」

黄色トリオはさておき、あの強力モンスター3体に対し姉さんの手札は0でフィールドにはモンスターが1体。端から見れば絶望的な状況ではあるが…

「よっし…勝つか。」

「はい?」

彼女がこの程度で挫けるわけではない。

「あたしのタアーン…!おいで、《BF―極北のブリザード》!!」

「ポウ!（白身魚食べたい）」

《BF―極北のブリザード》ATK1200

「当然効果発動よ!デュエルディスクコンコン（可愛い）をすることにより、墓地から下級「BF」を復活!!」

「させるハズがありませんわ!ガイオさんの効果!オーバーレイシジミをひとつを取り

除き、ガイオさん以下の攻撃力を持つモンスターの効果は無効とします!!」

「それシジミだったんかい!? まあこれでガイオアビスにも楔カウンターが乗せられる…
そして、フルアーマード・ウィングの効果発動! iターンの1度、楔が乗っていたモン
スター1体のコントロールを得る! ガイオアビスはもらったあ!!」

「ちよつと! NTRは悪い文明ですわよ!」

「文明つてなんじゃい!!」

うーん、僕と行動を共にしてた頃、なんやかんやあつて手に入れた力らしいのだが…
あれだな、簡潔に言つてエグいな。

「バトルよ! フルアーマードでサラキアビスを攻撃! ヘネオ・ブラック・ハリケーン!!」
「くうつ、サラキさん…」

ももえ LP4000↓1800

「ハニー! 無事か!!?」

「この程度、なんともありませんわ。ダーリンの前で無様な敗北など出来ませんもの…」

サラキさんの最後の効果！相手の攻撃・効果により破壊された場合。デツキから水属性モンスター…《水晶機功―ローズニクス》を墓地へ送り、墓地から水属性モンスターを特殊召喚！お願いします、重装兵!!」

《海皇の重装兵》☆2 DEF1600

「平然とイチヤつきおつてからに…ガイオおじいちゃんてムーラングレイスを攻撃よ!!」

「こうなつたら…崇高なる、光の結社の力に沈みなさい！リバースカードオープン！《聖なるバリアーミラーフォース》!!」

「あんだつてえーっ！モモが汎用罠ーっ!!?」

「光の結社の恐ろしい力とは…ミラーフォースの事だったのか!!」
「いや、そんな事誰も噂してませんよ…」

「ここミラーフォースだと！確かに即死は回避出来るが彼女のモンスターは…」

「相手の攻撃宣言時に発動！攻撃表示モンスターを全滅させますわ!!」

「うおまぶしつ!!つて馬鹿ね、フルアーマードは効果を受けないのを忘れたかしら!」

「ええ、わたくしのガイオアビスは、悪の手に落ちて消滅…」

「誰が悪よ誰が!!つかミラフオぶつぱしたの自分でしょ!!つたく…エンドフェイズに、フルアーマードの最後の効果発動!」

「えっ?」

「楔カウンターが乗ったモンスターを全て破壊する!へブラック・デストラクション!!」

「それ全滅じゃないですかヤダー!……ですが魂は砕けませんわ!白鬮気白鯨のモンスター効果発動!墓地の水属性モンスター、ムーラングレイスを除外し墓地から自身をチューナーとして特殊召喚!」

『ぶうおおおおお…』

《白鬮気白鯨》☆8 ATK2800

「自己再生まで出来るなんて…あたしはこれでターンエンドよ!」

ジュンコ H0 LP4000

《BF—フルアーマード・ウィング》ATK3000

「わたくしのターン…ドローツ!!」

「あんたはこのターン、ムーラングレイスが場を離れた時の制約で攻撃出来ない。この状態で何をするのかしら」

「なんの…ここから場を制圧するくらい出来ますわ! わたくしはフルアーマードを生け贄に《海亀壊獣ガメシエル》をジユンコさんにプレゼント!!」

《海亀壊獣ガメシエル》☆8 ATK2200

「ア—ツツ!—うちのコ喰ってるううう!?! 鎧ごとバリバリやつとるううう!!」

ここで戦闘以外の有一の突破手段を引き当てるとは、あの人も大概なドロー力の持ち主だな…

「更に! 墓地のローズニクス効果!—このカードを除外し、水昌機功トークンを特殊召喚!—フィッシュボーグ・ランチャーの効果!—墓地に水属性モンスターしか存在しない時、

特殊召喚できますわ!!」

《水晶機功トークン》☆1 ATK0

《フィッシュボーン・ランチャー》☆1 ATK200

「合計レベル3…たつのご辺りでも出すのかしら、それかレベル5でギシルノドン？」
「どちらも素敵なコですが今回は…おいでませ！わたくし達を導くサーキット!!」
「げ!？」

「召喚条件は、「チューナーを含むモンスター2体」！サーキット・コンバイン!!」

2体目のリンクモンスターか！いったいどんな…

「リンク召喚！お願いします《水晶機功ハリファイバー》!!」

《水昌機功ハリファイバー》Link2 ATK1500

「フハハハハハ！きた！きた！ハニーのハリファイバーきた!!この勝負もらったぞ十代!!」

「気が早すぎるぜ万丈目！ジュンコがあんな機械にやられるもんか!!」

「なんでこの二人が張り合ってるんでしょ…」

「リア充(!?)は理解出来ないドン…」

「ハリファイバーの効果発動！リンク召喚成功時、デツキからレベル3以下のチューナー1体を特殊召喚致します。来なさい、(師匠の)《幽鬼うさぎ》!!」

『いっづりかわからない出番キターツ!!』

《幽鬼うさぎ》☆3 DEF1800

「なによそのインチキ効果…超欲しい!ください!!」

「ならば光の結社に入るので、ジュンコさん。主は貴女にも力を授けて下さるでしょう…」

「…えっ?入会するだけでくれんの?それ」

「ジュンコオ!?何誘惑されかかってんだお前らしくない!!」

「だ、だってデツキから任意のチューナー呼べるって…あんたらが思ってる以上にヤバ

いわよ!? ヴァーユとかスチーム出してもいいんですか…」

「いいんですよジュンコさん、レベル以外に制限はありませんから…」

「うわあああずるいいいいい! これが使われる側の気持ちか…」

いかん。姉さんがパニック状態だ。…さらつと幽鬼うさぎが出てくるだけでその有用さは伺える、シンクロ使いからしたら、喉から手が出るくらい欲しいだろう。

「まだまだいきますわよ! レベル2の重装兵にレベル8のチューナーモンスター、白鬮気白鯨をチューニング!!」

「あんですと!」

「シンクロ召喚!!」ホワイト・オーラ・バイファムト《白鬮気双頭神龍》!!」

《白鬮気双頭神龍》☆10 DEF3000

「デカブツが進化したー!」

…もう、魚族ではないな。ドラゴン族だドラゴン族。

「双頭神龍の効果！場にトークンが存在しない時、神龍トークンを特殊召喚致しますわ！！」

《神龍トークン》☆10 DEF3000

「自分の分身を作り出すモンスター…中々厄介ね」

「更にいえば、相手ターンにトークンのみが生き残っている場合、自身を墓地から特殊召喚できますわ。突破したければ同時に倒すことです」

「なにそれ超めんどい、兎までいるってのに…」

「フフフ…わたくしはこれにてターンエンド。さあ、このモンスターを攻略出来ますかね？ジュンコさん」

ももえ H0 LP1800

《水昌機功ハリファイバー》ATK1500

《幽鬼うさぎ》DEF1800

《白鬮気双頭神龍》DEF3000

《神龍トークン》DEF3000

「あたしのターン！ドロー！！」

「浜口先輩にはドでかいモンスターと厄介な幽鬼うさぎがいるドン」

「それに対し枕田君には手札1枚とガメシエルしか残ってない、ライフは無傷といえども敵しいだろうな…」

「はいはいフラグフラグ。墓地のヴァーユ効果発動よ！」

「いつの間に…ああ、ムーラングレイスのハンデス喰らった時に落ちてたのか」

「シロツコにヴァーユを墓地チューニング！突き抜ける！《BF—アームズ・ウィング》
！！」

《BF—アームズ・ウィング》☆6 ATK2300

「何かと思えば…ノートウングに居場所を奪われた可哀想な方じゃありませんか、しかも効果は無効」

「なんの、お楽しみはこつからよ！来なさい！チューナーモンスター《BF—南風のアウステル》！！」

『ピピッ』

《BF―南風のアウステル》☆4 ATK1300

「ツ！わたくしの知らない「BF」：」

「モンスター効果発動！除外された下級「BF」を守備で帰還させる！かえってらっしやい、ミストラル!!」

《BF―銀盾のミストラル》☆2 DEF1800

「幽鬼うさぎの効果！アウステルにぶつけて破壊致します！」

『ボクをボールかなにかと勘違いして：ギャーッ!!』

あのうさぎ五月蠅いな：十代も周りもつつこまないのか

「更に。クリスタル・ウィングが来る前に：ハリファイバーの効果発動ですわ！相手ターンに自身を除外することにより、シンクロチューナーをEXデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚致します。おいでませ、「リアル・ドラゴン」《瑚之龍》!!」

《瑚之龍》☆6 DEF500

「なにそれめっちゃ便利、超欲しい。マジ欲しい。けど……もう勝敗は決まってるのよね」

「えっ?」

「レベル6のアームズウイングにレベル2のミストラルをチューニング! 黒き疾風よ、秘めたる想いをその翼に現出せよ!」

「……えっ?」

「シンクロ召喚! 舞い上がれ《ブラックフェザー・ドラゴン》!!」

『クウオオオオツツ!!』

《ブラックフェザー・ドラゴン》☆8 ATK2800

「えええ……ブラックフェザー・ドラゴン……ところで、ジュンコさんの秘めたる想いはいつ現出されるんです?」

「うっさいわ! 余計なお世話じゃボケーツツ!!」

「もえもん、それあとで詳しく!」

「あんたは黙ってなさい!……バーカ。」

カハツ（吐血）……おのれ十代。まだ僕は認めたわけではないぞ…

「エド君が死んだ!?!」

「このひとでなし!」

「誰がよ!?!」

「ジュンコさんです。人の趣味をどうこう言うつもりはありませんが…そのモンスターでわたくしの双頭神龍に勝てるつもりも?」

「はん。確かにそのデカブツには勝てないけど…あんたには勝てんのよ!墓地から《B F―南風のアウステル》効果発動!あんたの場のモンスターは3体、その数だけブラックフェザー・ドラゴンに黒羽カウンターを置くわ」

《ブラックフェザー・ドラゴン》（黒羽カウンター0↓3）

ATK2800↓700

その龍の翼が朱に染まる、その数は3枚。誰もその意味に気づかない。

「フハハハハハ!自分から攻撃力を下げおったぞあの鳥龍!もうハニーには敵わないか

らと自決の路を歩むつもりか!!」

サンダーとやらの釣られて、周りの白服の奴らも嘲笑を初める。もう勝った気でいるのだろう。

だが彼女だけは気づいていた、対戦者の彼女だけは。

「もう…ズルいですわ」

「ブラックフェザー・ドラゴンの効果! 黒羽カウンターを全て取り除き、双頭神龍の攻撃力をその数×700ダウンさせる! そして…その数置分のダメージを相手に与える!!」

「……………何イイイ?!!」

「その嘲笑ごとぶっ飛ばせ! へブラック・バースト!!」

《白鬮気双頭神龍》 ATK3300↓1200

ももえ LP1800↓0

「(これは、親友の復活祝い…なんてことにはしておきましょう)」

WIN ジュンコ

「光の結社」を撃退した後、僕はそれを率いるのが友人であり、マネージャーでもある「齋王琢磨」だと知る。

突然転校してきた彼の真意を知るために、僕は当分の活動拠点をデュエルアカデミアにすることにした。決して姉さんと離れたくないわけではない、決して。

だがそんな僕のわりとシリアスな悩みも吹き飛ばすかのような、とんでもない奴が帰って来たらしいが…

次回「この世全ての悪」馬鹿

どうゆう意味だ、まるで意味がわからんぞ!!

NEXT幕間

前回のあらすじ……「つてコラァー! あらすじもクソもないでしょーが何か月ぶりの更新じやいこんのウス○トンカチ!!」

「ジュンコさん! 気持ちはわかりますが初見の人がとつさに「戻る」を押しちやうような発言はやめて下さい!」

「るっさいわ! 前回の内容どころか本編全部忘れられてんだろコレエ!!」

「そこは全編読み返して頂くチャンスと……」

「そんな暇人、いるかー!! はい! ←から本編!!」

《クルツクウ》

「あの時は、すまなかった」

「まあ・・・実害は無かったのでいいですけど」

あたしは、枕田ジュンコはとっさに身を潜めた。

ある理由から、夜にエドのクルーザーを訪ねようとしたら、ヘリポートの影で二人がコソコソ話ているのが聴こえてしまったのである。

二人とは、

「しばらく僕は、この学園を拠点にする」

などと宣言し、クルーザーを寮替わりに住み着き始めた、実は我が弟の転生体だったエドと

「姉さんがいない間、誰が皆さんの面倒（ツツコミ）を見てきたと思ってるんですか!!!」
すっかりポジションが定着したらしい、見た目は子供、頭脳その他は大人？のキモカワ好き合法ロリ魔王こと、属性多すぎなセラちやまパイセンである。

あたしがエドに負けて理性蒸発（よくわからん）してる間の記憶は曖昧だが、何故かあのこのコらはよくメールのやりとりをしていたらしい、仲良しかよ。だがこんな夜中に密会なんて・・・ハッ、まさか!!?

「それで、これまで交換した情報の要点をまとめると・・・」

「僕達は、パラドックスを名乗る男に利用されていた可能性が濃厚な訳か」

違ったわ。出歯亀展開とかじゃ無かったわ。姉さん（元）これにはガツカリしたような安心したようなフクザツな気分です。しかし、あの二人からパラドックスの名前がでるなんて……

「そうですね。わたしの兄さんが闇のゲームに負けてヒロインしてたのも、貴方がダークヒーロー（爆）を気取って夜な夜なデュエリスト狩りしてたのも、わたしが恥ずかしい格好で闇のデュエリスト（笑）してたのも全部、彼の仕業では」

「ああ。僕が最初に君に挑んだのも、この島に諸悪の根源がいるとリークが……」

どうやら、かのパラドックスさんは、あたし達を消すために方々裏で動いていたらしい。いやでも恥ずかしい格好で闇のデュエリストしてたのはセラちやまの意思じゃね？結構ノリノリだったんじゃないやね？とツツコミたいが、あたしの存在がばれてしまうので黙っておこう。

「とりあえず約束通り、」

「ああ・・・」

「デュエル!!」

エド LP4000

セラ LP4000

っていきなりデュエル始まったーっ!?

「リベンジしたいと言ったのは僕の都合だ、先行は・・・」

「貴方からどうぞ? わたしは壊す側のが好きですから」

「フン、後悔するなよ? 僕のターン、ドロ。まずはデステニー・ドロ発動。手札のドレッドガイをコストに2枚ドロ。そして魔法カード、フュージョン・デステニー発動。このカードは従来の融合とは違い、デッキの「D—HERO」を素材に融合出来る。ディアボリックガイ、ダッシュユガイ、デイスクガイの3体で融合! ドミネイトガイを融合召喚。ドミネイトガイ、エフェクト発動! 自分のデッキの上から5枚をめくり、好きな順番で入れ替える。ダイヤモンドガイ召喚。デッキの一番上のカードをめくり、魔法カー

ドならエフェクト発動が確定する。魔法カード、終わりの始まりの発動が確定した。カードを2枚セットしエンドフェイズ、フュージョン・デステニーのエフェクトでドミネイトガイが破壊。ドミネイトガイのエフェクト発動。セメタリーからディアボリックガイ、ダッシュユガイ、ディスクガイを特殊召喚。ディスクガイのエフェクト、セメタリーからの復活に成功したので2枚ドロ。手札から速攻魔法、マスクエンジを発動。ディスクガイを素材にダークロウを变身召喚！ターンエンドだ」

エド 手札3 LP4000

M—HEROダークロウ ☆6 ATK2400

D—HEROダイヤモンドガイ☆4 DEF1600

D—HEROディアボリックガイ☆6 DEF800

D—HEROダッシュユガイ ☆6 ATK2100

セットカード×2

いや、なげーだろおおお!!あのコは初ターンぶん回さないと気がすまないんかい!? ドミネイトガイとか初登場なのにステータスの紹介も無しに自壊したしダークロウとかちやつかり持つてるし!!!

「わたしのターン、ドロ。まずは手札から罠カード、無限崩影！ダーククロウの効果は無効にしますね？」

「フィールドにカードが無い時、手札から発動出来る罠カードか・・・いいだろう」

ガチ勢！このパイセンガチ勢!!

「では次に影衣融合発動。デッキのシャドール・ドラゴンと超電磁タートルを素材に、エルシャドール・ネフィリムを融合召喚！」

《エルシャドール・ネフィリム》☆8 ATK2800

出た。そいえばシャドール持ってたわねこのパイセン……

「ネフィリムの効果、ドラゴンの効果をそれぞれ発動。シャドール・ビーストを墓地へ送り、ドラゴンの効果でダーククロウを破壊。ビーストの効果で1枚ドロ。バトル、ネフィリムで攻撃」

「リバース罨カード戦線復帰、チェーンして永続罨Dータクティクス発動。逆順処理。ドレッドガイを復活させエフェクト発動。「DーHERO」への戦闘ダメージを0にする。Dータクティクスのエフェクト発動。レベル8の最上級DーHEROを特殊召喚した際、フィールドのカード1枚を除外できる、ネフィリムを除外！」

《DーHEROドレッドガイ》☆8 ATK?↓4300

「姑息な手を……メイン2、カードを3枚セット。」

セラ LP4000 手札2

セットカード3

すげー淡々とやってますね、まあ普段のデュエルがギャラリーとか？茶番フェイズとか含めて間延びしてるのを考えるとこれくらいのが……って、誰のツツコミが間延びの原因どころ。

「ドロー。スタンバイフェイズにDータクティクスのエフェクト、「DーHERO」達の

攻撃力が400アップ。ダイヤモンドガイのエフェクト発動。デッキトップの魔法カード魔法石の採掘、発動が確定。前のターン確定した、終わりの始まりのエフェクト発動、3枚ドロ―

「待った！罨カード精霊の鏡!!プレイヤーを対象とするカード効果はこちらがコントロールします！よってわたしが3枚ドロ―：へ？」

精霊の鏡で！センス遊戯さんですかピンポイント過ぎるわセラちゃんパイセン!!
……ドロ―カード悪かったのか表情が硬いわね。

「フン。ならばダイヤモンドガイ、ダッシュユガイ、ディアボリックガイの3体をリリースし、ドグマガイを召喚。D―タクティクスのエフェクトで伏せカードを除外。」

「ならば対象のカードをチェーンして発動。罨カード、方界合神！手札のクリムゾン・ノヴァ3体を融合!!：暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ・トリニティ!!」

《暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ・トリニティ》

☆12 ATK4500

ドローカードクリノヴァ3枚で、社長か！青眼3枚固まった社長か!! あーめっちゃ声出したい……

「ほう、攻撃力4500か。だが相手が悪かったな？セメタリーのディアボリックガイを除外し、エフェクト発動。ディアボリックガイをデッキから特殊召喚。V・HERO ヴァイオンを召喚し、エフェクト発動。シャドーミストを墓地へ送り、シャドーミストのエフェクトを発動させる。デイバインガイを手札へ加える。ヴァイオンの第2エフェクト、ダークロウを除外し、融合を手札へ加え、発動！ヴァイオン、デイバインガイ、ディアボリックガイの3体を融合！カモン！V・HERO トリニティ!! このモンスターは融合召喚したターン、攻撃力が倍になる！」

《V・HERO トリニティ》☆8 ATK2500 ↓5000

「あなたもトリニティ？変な所で張り合わないで下さい!!」

「別に張り合っていないだろ!! 手札から墓穴の指名者を発動し、君のセメタリーから超電磁タートルを除外。さあバトルだ！トリニティでアタック！」

やっぱ仲良いだろあんた達。しっかし我が弟(二元)ながら容赦ないわね……

「リバースオープン！罨カード、マジカルシルクハット！デッキから方界業、方界合神を選択し、暗黒方界神を含めてモンスターとしてセット！」

また遊戯さん罨……ってデカッ!? 邪神さんがデカイから、それを隠すシルクハットも無駄にデカッ!!

「残念だがトリニティはモンスターに3回攻撃が可能なエフェクトを持っている。全て粉碎しろ！トリニティ・クラッシュ!!」

「うう……トリニティがこんなにあっさり倒されるなんて……」

わかんない！両方トリニティだから字面だけじゃわかんない!!

「けど、トリニティが入っていたのが最後のシルクハットで助かりました。墓地の方界合神の効果！方界モンスターが場を離れた場合、このカードを除外して発動。デューザをデッキから特殊召喚！召喚時の効果で方界合神を墓地へ！」

《流星方界器デューザ》☆4 DEF1600

「フン、ならばドグマガイで追撃！デス・クロニクル!!」

「デューザが破壊されたので再び合神の効果！2体目のデューザを特殊召喚し、方界降世を墓地へ！」

「しぶといなきみは！ドレッドガイで追撃！プレデター・オブ・ドレッドノート!!これでデューザは全滅だ!!」

(デューザ、ありがとうございます……)

「メイン2でカードを1枚伏せる、僕はこれでターンエンドだ。」

エド 手札0 LP4000

《D—HERODグマガイ》☆8 ATK3400

《D—HERODレッドガイ》☆8 ATK3800

《V・HEROトリニティ》☆8 ATK5000↓2500

《D—タクティクス》(永続)

セットカード

「わたしのターン、ドロー！」

「スタンバイフェイズにドグマガイのエフェクト、ライフアブソリュート発動！君のラ

「イフを半分にする!!」

LP4000↓2000

「くう!!・・・フフフ、ありがとうございます」

まさかセラちゃま、Mに目覚めた!?

「違いますう!まずは今引いた速攻魔法、ツインツイスター発動!手札を1枚捨て、いい加減鬱陶しい永続罠と伏せカードを破壊します!」

「そうはいかないな。リバースカードオープン!罠融合Dーフュージョン!!」

で、でたーっ。総司令官殿(笑) お得意の罠融合戦術だーっ!?

「トリニティーとドレッドガイを融合!カモン!D—HEROデットリーガイ!!」

《D—HEROデットリーガイ》☆6 DEF2600

「ステータスはそこそこですが、確かその罠……」

「そう。D―フュージョンで呼んだモンスターはこのターン、あらゆる手段で破壊されない！そして破壊された永續罠、D―タクティクスの最後のエフェクト発動！破壊された場合、D―HEROを手札に加える。デッキからダイナマイトガイを手札に加えさせてもらう」

「むう……けどやるしかない！墓地の方界降世を除外して効果発動！相手よりライフが2000以上下回っている時、デッキから方界胤ヴィジャムを特殊召喚！」

《方界胤ヴィジャム》☆1 DEF0

「なんだ、下級モンスターを1体特殊召喚するだけか。それなら大した問題では……」

「この時！相手フィールドにのみモンスターがいる場合、ヴィジャムを3体特殊召喚出来ます！！さらに墓地の方界業の効果！デッキから方界モンスター、バスターガンダイルを手札へ！」

「何度も何度もセメタリーエフェクトばかり……インチキ効果も大概にしないか！」

誰に影響されたそのセリフ……あ、あたしか？

「貴方が言えることですか！3体のヴィジヤムを組み込み……いでよ！方界超獣バスターガンダイル!!その攻撃力は組み込んだヴィジヤムの数×1000ポイント!」

《方界超獣バスターガンダイル》 ATK0↓3000

「攻撃力3000?フン、悪あがきだな。」

「魔法カード、方界波動を発動!貴方のドグマガイの攻撃力を半分にし、バスターガンダイルの攻撃力を倍にする!!」

「なっ、攻撃力6000だと!？」

「バトル行きます!ガンダイルでドグマガイを攻撃!くうだええ散いれええ!!」

パイセン言い方ア!お兄さんリスペクトかな! (劇場版参照)

「確かに脅威的だが、甘いな!手札からダイナマイトガイのエフェクト発動!このカードをセメタリーに送り、戦闘で発生するダメージを0に!そして互いに1000ポイント

トのダメージを受ける!!」

「クツ……」 「きやあつ!!」

エドLP40000↓30000

セラLP20000↓10000

「フフ……ドグマガイはやられたが、僕を倒すのには失敗したな」

爆発オチなんてサイテー!にはならなかったわね。セラちゃんパイセンのライフはもう僅か、ガンダイルはなんか蘇生効果的なヤツがあつたけど耐えきれるかしら。

「こんのっ……墓地の方界波動の効果!このカードとヴィジヤムを1体除外し、デットリーガイをアンディメンション化させます!」

えーと、攻撃出来ず効果も発動出来なくなるんだつたつ。地味に強力よね。

「僕のターン、ドロー。」

「大丈夫。攻撃力40000以上で殴ってくるならまだしも……数でゴリ押しなら、

デューザやヴィジャムを蘇生すればさばき切れるハズ。次のターンに……」

「ディアボリックガイのエフェクト！セメタリーから除外し、同名モンスターをデッキから特殊召喚。そしてディアボリックガイとデットリーガイを生け贄に……ネフティスの鳳凰神を召喚!!」

「ちよつ……またそれですか！シナジー無きそうなのによく入ってますね!!」

「フン。十代だつてHEROとは無関係な、羽クリボーをデッキにいれたりしてるだろう……似たようなモノだ」

いや……似てなくね？一応汎用な羽クリボーと違って、シナジー0の上級モンスターぶつ混むのは勇者過ぎませんか弟（元）よ。

まあくお姉ちゃん（元）的には、大事にしてくれるのはけっこう嬉しいのだけど……てか、確かダツシユガイ墓地いたわよね……何故にアドバンス召喚??

「僕の手札が0の時、セメタリーのデイバインガイはエフェクトを発動出来る。このカードとダイヤモンドガイを除外し、デッキから2枚ドロ」

「ネフティスをデットリーガイで捨てた方が早くないですかそれ、効果無効でもコストは払えませんか？」

「いいや、必要なコトさ。魔法カード、戦士の生還発動。セメタリーのドグマガイを手札へ戻す。そして前のターンらダイヤモンドガイのエフェクトでセメタリーに送った、魔法石の採掘のエフェクト発動。セメタリーの融合を手札へ戻す……さあ、フィニッシュだ！」

「ッ!？」

「手札のドグマガイと、Blizzardを融合。本来はコレを出すまでもないのだが……君には特別にみせてやろう！カモン！最強にして最後の「D」！Dragon-D-END!!」

《Dragon-D-END》☆10 ATK3000

うっわー！レディに対して容赦の欠片も無いわー！そしてネフティスやつぱり関係無いわー！ただEXモンスターゾーン、無理矢理開けただけじゃない……

「なあんだ。随分自信満々に出すからどんな化け物かと思えば、攻撃力はガンダイルと同じ3000じゃないですか……融合前のが強くないですか？」

「ではネタばらしとしようか。D-ENDのモンスターエフェクト発動！相手モンス

ターを1体破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！インビンジブル・D」
「へっ？きやあああああつ!!」

セラ LP1000↓0

WIN エド

デイストピアガイでも勝つて……うん、きつと十代戦で出しそびれて負けたから、憂さ晴らしもあつたんでしょーね。

「いたたた……負けちゃいましたか」

「すまない、レディに対して少々やり過ぎたようだ……立てるか？」

「あつ、はい……」

倒れ女性に手を貸す様はナチュラルイケメン、まあ自分でぶっ飛ばしたんだけど。うーん、お姉ちゃん（二元）は複雑です。

「やれやれ。これでようやく、プロの面目が立ったな」

「むう。けっこう自信があつたので残念です……今回も勝てたら、ちよつと無茶なお願いを聞いてもらおうかと考えたのですが」

そんなこと言つて膨れっ面になるセラちやま。なにあれ可愛い……つて騙されちゃ駄目よあたし。見た目は子供でも中身は幾つなのか検討もつかないんだから……

「一応プロである僕に大層な自信だな。まあ、君には色々世話になつたし（メールで）よほどのオーダーでなければ手を貸すが？」

「本当ですか!? それじゃあ……貴方の部屋に、しばらく置いてもらつていいですか？」

「ああ。僕のクルーザーは、意外と見た目より広いから構わん……はっ？」

え、まじで出歯亀展開?!

つ、続く!

終章 鳥使い共の日々

last1羽 光と闇の決戦（棒読み）

「フフフフ……よく来たな、勇者ジュンコよ」

この世界の中心にある、霸王城の最深―その玉座に奴は待ち構えていた。

「霸王……十代!!」

長い長い旅路の果て、あたしはついにたどり着いた……この世界を支配する、霸王十代の元まで！

道中、旅の仲間達は全員消えてしまった。

魔法使いももえは隣国のサンダー王子と婚約して駆け落ちし、遊び人の吹雪は女を作って消えてしまった、あれ？誰一人……戦い関係ないじゃん……

「どうだ？世界の半分をお前にやろう。それとも我が伴侶となるか、選ぶがいい！」

「とーぜん！あんたをぶっ飛ばし……って妃イイ!!？」

「ああ。ここまでの旅路を、このハネクリボールの力で見物させてもらった。我が配下の悪魔達をことごとくハリセンで倒す様は、一周回って爽快だった……つまり！貴様に惚れたのだ!!」

「え、ちよ、ま……」

「ちよーつと待ったああああ!!」

人が状況についてこれない中、霸王城の最深部にもう一人の勇者が現れた！

「貴様は……勇者ジュンコの弟、フェニックス☆江戸!!」

「霸王十代！貴様のような悪の源のような奴に、我が愛しの姉さんはやれんなあ……何故なら！僕がもらうからだ!!」

「ええええええつ?!あんたまで何言ってるじゃー!!？」

「さあ姉さん。今こそ霸王を倒し、二人でハネムーンに行こう!!」

「そうはいくか！勇者は俺が頂く、そして二人で世界を闇へ染めるのだ!!」

「やめてえ……あたしのために争わないでえ……なんて、なるかああああああ!!」

《クルツク》

前回のあらすじ

出歯亀姉さん。

「ふうー……なんだ、夢か……」

「朝からどんな夢みてんですか……」

「あ、セラちゃんパイセンおはよー。あたし、なんか言ってた？」

「「妃イイイ!」とか言っていましたね……お蔭で目が覚めました」

「なんか、ごめん……」

エド対セラちゃんの翌日、あたしらはエドのクルーザーで優雅な朝を迎えていた。いや、朝チユン展開とかじゃなくてね？

「要点はしより過ぎなので最初からお願ひします」

あつ、はい。ついに地の文にまでダメ出ししてくるようになったわねこのパイセン……

えーつと。前回の幕間でセラちやまがエドにしたお願ひとは、あたしが彼を訪ねた利用と同じモノでした。

それは、オベリスクブルー全般……女子寮までもすつかりホワイトに染まってるまっていたことにある。

あの口〇ツト団二人の侵攻は恐るべき速さで進んでいたのだ。

久々に自室に戻ってまったりしよう……ってこんな状態で出きるかーボケー。廊下歩いてるだけで勧誘が飛んでくるのよ回り敵だらけじゃん。

つてなワケで、最初はレッド寮に避難させてもらおうと考えてたけど……こつちはこつちで十代がガンガン攻めて来て落ち着かない。つーかいきなり〇奪奪わられて冷静で

いられるわけないでしょ！バカなの!?十代しばらく合わないうちに何やってたのちやつかりユベル憑いてるし、もう4期じゃん！二十代じゃん！正直最高です……じゃなくて！

「ん……おはよう姉さん、セラ君も」

「あ、おはようございます。昨夜はよく寝れました？」

「甲板でまともに寝られるわけないだろ……ヘックション!!」

「アハハ……コーヒーでも淹れるわね」

そんなこんなで同じく女子寮にも居場所が無く、レッドに居たら居たで多大なストーリー行為にあつて落ち着かないセラちゃんパイセンと二人で、エドのクルーザーに居候させてもらう形になりましたとき。

「お願いしたした分際ですアレですが、同室は問題かなって……姉さんもいますし」

「ん？あたしならむしろそのコを抱き枕にして寝れるけど？枕田だけに」

「……はっ?」

「ゴメンナンデモナイワスレテ」

言えない、実はけっこうブラコンだった。だなんて言えない……いや、むしろ、もう会えないハズだった弟に再会（？）出来てうれしかないわけないじゃん？ 虚弱病弱最弱シヨタだったコがこんなイケメンイケボになるとは思いもよらないじゃん？ ハツハツハ、マジ世話焼きてえ……半分それが理由で押し掛けたんけどね？ 本人には内緒だぞ！

「ほお、う、女性を二人も部屋（？）に連れ込むとは……やるようになりましたねエ、エドオ〜」

「お前……齋王!？」

うわあっ!?!ビックリしたー……この人、いつの間にかあたしが淹れてる最中だった、コーヒーポットを掠めとった上に自分でティーカップに注いで優雅にソファに腰かけて飲んでいやがる……だと……!?!

「えっ、この人いつからいました?」

「ククククツ、ご挨拶が遅れました。枕田ジュンコさんに藍神セラさん……わたくし、エドのマナージメントを生業としている、転校生の齋王琢磨とゆうモノです。どうか、お

見知りおきを……」

「ああ、貴方が本来のマネージャーさんの！どうもご挨拶が遅れました。しばらく代理を勤めさせていたいただきました、枕田ジュンコと申しますう〜」

「これはこれはご丁寧にどうも」

「あつれー？ここはどうみても怪しむところですよ!？」

「(そーいえば親戚の集まりとかは猫被っていたな……)」

おつかしいわね……なんだかこの人は警戒しなきゃいけない気がするんだけど口が勝手に……そもそも光の結社って……いけない、頭に靄がかかったような感覚が……

「齋王、今のは……精霊能力か!」

「えっ?」

「クククク……流石にわかったか、先日強力な精霊力スロンドパワーを手にする機会があつてねえ……せつかくだから親友の君に、真つ先にお披露目に来たのだよ! THE・WORLD!!」

なんか聞き覚えがあるようで無い単語を口にした瞬間……彼の身体から、巨大な精霊スタ○ドが出現した!?

「クツ……ダイヤモンド・ガイ!!」

そしてこちらも対抗して精霊○タンを出現させた!

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄』
『ドラララララララララララララララララララララララララララララ』

そしてなんか殴り合い始まったー!!?

『無駄ア!!』

『グハアツ!?!』

エド LP4000↓2100

「急にエド君がふっ飛びましたけど!?!」

「馬鹿な……僕がラッシュで競り負けるだど……」

「フウン……やはり君のダイヤモンド・ガイとわたしのTHE・WORLDでは、同系統スタ○ドの精霊といえど圧倒的にパワーはこちらが上のようだ。少々がっかりだよ。…そしてこれがTHE・WORLDの真の能力！時よ止まスタ○ド○タンr

「精霊精霊うるさいわああああ!!」

「ぐああああああつ!!」

SE へチュドーン。

やべっ……いい加減五月蠅かったから思わず、隠しておいたハリセンでツツコンじゃったけど、力籠め過ぎてクルーザーぶちぬいて派手にぶっ飛ばしちやった。てへ。かくなる上は……

「よっ、よくも船を壊してくれたわねっ！ちよつとあいつに修理費請求してくるわ、お金持ってそうだし!!」

「風穴開けたのは姉さんのツツコミが原因ですよね!？」

《クルツク》

彼は、斎王琢磨は理解が追い付かなかった。

確かに警戒はしていた……正位置ザ・タワーの塔。あの女を占った時に出たカードだ。

意味は、悲嘆、逆境、困難、等々……つまり彼の障害になると、あらかじめ予知していた。

遊城十代を支配下に置くために、エドのデツキに仕込んでいた彼の力が……彼女に及ぶハメになるとは想定外だったが、結果オーライともとれた。どの道彼女にも光の洗礼を浴びせるつもりだったのだ。

「だが……この状況はなんだ？」

「だいたいねえ……いくら友達だからって、いきなり不法侵入した上に殴り合いの末に器物破損ってどうゆうつもりなんですか？ 親しき仲にも礼儀ありでしょコノヤロー」

説教だ。説教を受けている。己が支配下に置くつもりだった人物に、港の石畳みの上に正座をさせられて説教を受けているのだ……！

「いえ、確かに彼と久々に会い少々はしゃいでしまいましたが、そもそも風穴は貴女が私を……」

「言い訳無用オ!!」

「はいいつ!!」

「（馬ア鹿アな……我が精霊^{スタ○ド}、THE・WORLDは確実に発動し、わたし以外の人間の「時」はわずか数秒の間だが、確実にとまっていたはず……まさか！エドとのじゃれ合いで、万丈目準と浜口ももえから奪った大量の精霊力^{○タンドパワー}が切れたのか……!?）」

「フ。意味がわからないと言った顔だな、齋王……君の精霊^{○タンド}がどんな能力を持っているかが関係ないんだよ」

「エド!?意識が戻ったのか！それに関係が無いとはなんだ!!」

「フフン。相手が誰だろうと関係ない、「ボケているのなら、神様だってツッコんでみせる」それが姉さ……じゃなくてジュンコさんだ!」

「アンタは、おとなしく、寝てろオ!!」

「バリゼンツツ!!」

エド LP2100↓0

「エド君ーッ!? 姉さんがトドメ刺してどーするんですか、そしてそのハリセン威力高すぎませんか!!」

「バ、ゴメン……」

その威力は観るモノを驚愕させる。アカデミアの港には、コンクリートでできた船庫件ヘリポートがあるが……その外壁に今2つ、新たなクレーターが生まれたのだ。この少女のツツコミによって！

「出来てねーよ、そんなにコンクリはやわじやねーわよ。このナレーションさつきからうざいけどなんなの煽ってんの？ あたしを煽ってんの??」

「（なんとゆう破壊力だ。これがブルー四天王筆頭（物理）【電光の惨劇】^{ツツコミ}の枕田ジュンコ。アホみたいな会話でごまかされるが、私やエドのように1級の決闘筋肉^{デュエルマッスル}があるならまだしも、一般人が喰らえば下手をすれば死人が出るレベルだ……我が制止した時の世界に

も干渉するとは……やはり、ここで潰して置かなくては」

「どうです枕田ジユンコさん。ここはひとつ、私とデュエルしていただくとゆうのは……」

「え、なしてこの話でそうなんのよ。まずは弁償でしょベンショー」

「し、しかし貴女の過剰防衛にも、多少の非はあると思うのです。ここは私とデュエルして頂いて、貴女が勝てば全額こちらで負担する。ではいかがかな？」

「えー……」

ジユンコは一時光の洗礼（笑）を受けている影響で、斎王に関する都合の悪い記憶が抹消されている。しかし、彼女の本能が「やだ、こいつ胡散臭い」と警戒音を鳴らしているのだ。が、その時！

「そこまでだ！可憐な女子に迫る不審者め!!」

「むっ、何奴!!」

「ハ、ハこの声は……」

「とおう!!（ジャンプする時のかけ声）」

《クルツク》

「我が名は、謎のヴィラン ダークネス D ! 学園の平和（主に女性）を守る、闇よりの使者だ!!」
「謎のヴィラン ダークネス D だと!？」

高い所からジャンプして現れたのは、漆黒の衣となにやら厨二くさい仮面をつけた謎の男……謎の……

「つつつって、なあにが謎のヴィランDじゃあああああ！どつからどう見ても馬鹿（師匠）やないかーいつつっ!!」

師匠^{バカ}だった。いつものダークネスの格好した天上院^{最バカ筆頭}吹雪様^頭だった。

「ノンッ、俺は謎のヴィランD！君の知っている人物・団体とは一切関係ありませんっ!!」

「やかましいわ！正体隠す気ならせめて装備を変えてきなさいよ!!お気に入りか？ひよつとしてお気に入りなのかコノヤロー!!」

「謎のヴィランD……いったい何者なんだ……」

「私の前でダークネスと名乗るなど中々洒落ていますねえ……」

嘘でしょ!? わかんないのこの二人っ!!?

「し、初対面だからなんですかね……」

良かった、セラちゃんパイセンは正常だ。むしろ正常な人間が少なすぎて辛い。

「とにかく俺つちが来たからにはもう安心だ、レディ。ここは私に任せて下がっていなさい」

「せめてキャラ安定させろや！ プレツプレじゃんになよ「俺つち」って!!」

「ほおう？ 私はあくまで紳士的に、彼女をお誘いしただけだとゆうのに……不審者呼ばわりとは随分な言い方ですねえ!!」

「むしろこつちの方が不審者までありますよね……」

「フツ、君からはいけない匂いがプンプンする。そんな障害からレディを守るのが正義のヴィランの役目とゆうもの……」

いや、矛盾してませんか？ 正義のヴィラン^{悪役}っておかしくありません？

「どおおおしても邪魔をするとゆうのなら、貴方から先に片付けさせて頂きますよおお!!」

「いいだろう! いざ……」

「5メガネ!」

「……えっ?」

突然齋王様は、懐から5本のメガネをとりだして、床に並べた!

「なんの、菜箸!!」

「はっ?」

ばかは、しんびんのさいばしをくりだした!!

「馬ア鹿アなフェイントだど!? ならこのところてんは、もう使えない……」

「そしてこの午後の紅茶で俺のコンボは完成する……」

「しまった! 闇のコンボか!! 仕方ない、ここでハンカチを発動オオオ!!」

「馬鹿な2枚もだど!? こいつ正気か!?!」

「食らえクイツクルワイパアアアアア!!」

「チイイイイ!!」

ダークネス LP 4000 ↓ 0

斎王 LP 4000 ↓ 0

「フ。一回戦は引き分けだな」

「だが今の戦いで、俺はペプシを3本手に入れたぞ」

……なにこれエ。

「ダークネスの紅茶がミルクティーでなければ僕達は死んでいた……」

「そーなの!？」

「エド君はむしろわかつたんですか!!？」

「ん？だって当たり前だろう？デューエリストなら」

わかんねーよっ！何一つとしてわかんねーよっ!!

「ククク、この私にここまで渡り合うハ○ケリストがいるとは……別の形で出会いたかったものですね」

「ああ、残念だ」

「あんたらの頭がね！」

我らは光と闇、どこまでいっても平行線。混じり合うことは決してない……」

なに言ってるんだこいつら。もう本気で疲れてきたんですけど……

「負けないで姉さん！あなたが倒れたら本気で誰がこの状況まとめるんですか！」

「セラちゃん任せた……」

「無理ですうっ!!」

「それでは2回戦を始めます」

「ええ」

「いつでも来い」

「デュエル!!」

齋王 LP4000

謎D LP4000

「そして何事も無かったかのようにデュエルに入ったー!!?」

「先行は私ですね、ドロオオー!!」

齋王、齋王……駄目ね。どうしても思い出せない、なんか光関連のデツキを使ってた

ようなそうでも無いような。

「まずは魔法カード、カップ・オブ・エース！この効果により
「ストツプだ！」

「当然正位置イー！2枚ドロオオー！！更に永続魔法、神の居城ヴァルハラを発動オ！手札から、我が光の尖兵を特殊召喚する！！」

「ならばその効果にチェーン発動、幽鬼うさぎ！このボールを相手の表側魔法・罨にぶつけることで、それを破壊する！」

兎『ボール!?ボクボールって言われた!?』

「なああらば！手札から朱光の宣告者の効果を発動！このボールと手札の適当な天使族をあなたにぶつけることにより、それを無かったことにする！」

「あんたらさつきから説明が雑過ぎでしょ!!?」

謎Dの右手から放たれた渾身のうさぎは、斎王さんの流れ球により弾かれて何処かへ行ってしまった……

「だったら更にチェーン！増殖するG！忌み嫌われるこの効果により、君の特殊召喚の

度に1枚ドロローする!」

「いいでしょう……時すでに遅し! ヴアルハラの効果により、アルカナフォースのラストナンバー・アルカナフォースXXI・THE WORLDは降臨する!!」

アルカナフォースX^{トウエンティーン}XI・THE WORLD ☆8 ATK3100

「クツ、1枚ドロロー! ルーレットストップ!」

「勿論正位置イ!! 更に手札から永続魔法カード、ブリリアント・フュージョン! ジェムナイト・ラズリーとEmートリック・クラウンを素材にジェムナイト・セラフィを融合召喚し、墓地へ送ったトリック・クラウンを自身の効果で蘇生!」

《ジェムナイト・セラフィ》☆5 ATK2300↓0

《Emートリック・クラウン》☆4 ATK1600↓0

斎王 LP4000↓3000

「更に2枚ドロロー!」

「無駄無駄無駄無駄無駄ア！すでに私の勝利は決まっていますよ！！THE WORLDの正位置の効果！私のモンスター2体を生け贄に……相手ターンを1回スキップする！！」

「はあ!?!」

「なんですかそのふざけた効果は!!」

「2体のモンスターを生け贄に……時よ止まれえ！THE・WORLD!!」

周りが暗転したーっ!?エフェクトが完全に○ヨ○ヨなんですけど！

「クソツ……」

「再び私のターン！魔導戦士ブレイカーを召喚！魔法カウンターが乗り攻撃力がアツプ！」

魔導戦士ブレイカー ☆4 ATK1600↓1900

んっ、ブレイカー？確かに汎用っちゃ汎用だけど。

「バアトオルです！ブレイカーで貴方にダイレクトアタック！マナ・ブレイク!!」
「ぐおおツ!!」

謎D LP4000↓2100

「齋王の奴、いつの間にこんな恐ろしいコンボを……」

「ターンを回さずに勝つ、実質先行ワンターンキルじゃないですか!」

「これでフィニッシュです！THE WORLDの攻撃!」

「っと、待ったあ！ブレイカーとの戦闘終了時、モンスター効果発動!」

「何イ!?!」

「来い、冥府の使者ゴーズ！そしてその妻カイエン!!」

冥府の使者ゴーズ ☆7 DEF2500

カイエントークン ☆7 DEF1900

「ゴーズは場にカードが無いとき駆けつける、正義のヴィラン！そしてその妻カイエンのステータスはぼく、じゃなくて俺が受けたダメージ量に匹敵する！」

「いや、無理して一人称変えなくていいから……」

ともかく良かったあ。せつかく帰って来たのにいきなり退場！とかにならなくて……つて、別にあの馬鹿自体はどうでも良いんだけどね!?

「（誰に言い訳してるんでしよう……）」

「おのれえ！私の洗礼をそんな悪魔共で防ぐとはあ！……ま、貴方の運命は今のところ見通せませんからね、こんなこともあるでしょう。ひとまずゴーズを攻撃！オーバー・ザ・カタストロフ!!」

「流石に放置しないか、すまないねゴーズ……」

「カードを2枚伏せ、ターンエンド。さ、貴方のターンですよ」

齋王 手札0 LP4000

THE WORLD (ATK3100)

魔導戦士ブレイカー（ATK1900）

神の居城ヴァルハラ（永続）

セツトカード

セツトカード

「俺のターツツン！ドロー！」

「ひとまずしのいだが、齋王の場には最上級モンスターが残っている。あの仮面の男はどう突破するか……」

「まあ……心配いらないんじゃない？」

「ですよねえ……」

「ん??」

「まずは七星の宝刀、レベル7のカイエンを除外し、2枚ドロー。そしていつもの紅玉の宝札発動！手札の真紅眼レッドアイズ、ブラックドラゴンの黒竜をコストに2ドロー、デッキから黒炎竜を墓地へ！」

「なっ、真紅眼レッドアイズだ?!?とゆうことは……」

「これで正体もわかるわよね……面識無くて社長とTV出たりしたことあったから。」

……つてやば！あっち（前世）での関連性忘れてた!!

「……かなりの玄人向けデッキだな。いちいち高価なカードだから使用者が少なすぎて全容はつかみにくいのだが。僕のカードバンクにも確かほとんど無いぞ」

わがらんのがいつ！

あの仮面には正体がばれないような呪いでもかかってんの!?……そーいや明日香すら、最初気づいてなかったわね。

「ククク……知っていますよお。かのダークネスメタルドラゴンが禁止になり、大幅にデッキパワーが落ちたそうじゃないですか……そんなデッキで私に勝つつもりですか？」

そーだったわね、こつちの世界じゃほとんど出回ってないのに禁止とか……ほとんど海馬社長の嫌がらせじゃね、気のせい？

「魔法カード闇の量産工場。墓地の2体の真紅眼達を手札へ……フフツ、それは使ったこ

との無い人間の意見だ。来い、竜魔導の守護者!!」

竜魔導の守護者 ☆4 ATK1800

「モンスター効果発動! 手札1枚を捨て、融合を手札へ! ただしこのターン、融合モンスターしかEXデッキから出せなくなる。更に第2の効果発動。EXデッキのレッドアイズ・スラッシュドラゴン真紅眼の黒刃竜を公開し、その素材モンスターである今捨てた真紅眼の黒竜をフィールドにセット!」

「あいつも融合か! 意外に気が合いそうだな……」

「そ、そうですかね?」

言えねえ……「生前はあんたが大キライだった奴よ。」

なんてとても言えねえ……いや、そーいった意味ではある意味なついてたかな?

「永続魔法、補給部隊を発動。モンスターが破壊される度に1枚ドロウ出来る。魔法カード融合発動! 竜魔導の守護者と、手札の黒炎竜を融合! 現れる! ヴァレルロード・

吹雪
F・ドラゴン!!」

『グオオオオオツ!』

ヴァレルロード・フュリアスF・ドラゴン ☆8 ATK3000

「いやちげーだろオオオオ!?初めて観る奴だけど絶対そんな名前じゃないことだけは確かよ!!」

てか自分で正体名乗ってんじゃん、隠してる意味ゼロじゃん!!

「何ツ、僕のためにあるようなドラゴンではないのか!？」

『ガウガウ（いえ、気のせいです）』

「あいつ、モンスターと心を通わせている……出来るっ」

「エド君の評価やけに高いですね!？」

「融合召喚ですか、ではこうしましょう。リバーズカード発動!永続罫カード、大捕り物!!」

「何っ」

「貴方のドラゴンを対象に発動、そのコントロールを奪う!!」

THE WORLDの生け贄の確保と相手の妨害、その両方を兼ね備えた罠ってコトね。流石に強かかも。

「クソツ、奪われるくらいなら仕方ない！フュリアス・ドラゴンの効果！自分と相手フィールドのカード1枚ずつを選択して、それらを破壊する！自身とTHE WORLDを破壊!! ついでに補給部隊で1枚ドロップ！」

『ガウガーツ（出落ちーっ）!?!』

ちよつと可哀想……フリーチェーンのスクラップ・ドラゴンみたいな効果か、それがあるから補給部隊なんて採用した訳ね。

「ほほう……ですがこれであなたは攻め手を失いましたね」

「まだだっ！セツト状態の黒竜をリリースし……レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜を特殊召喚っ!!」

真紅眼の闇竜 ☆9 ATK2400↓3600

「闇竜の攻撃力は、墓地のドラゴン族の数×300アップする!」

「攻撃力、3600!」

「おお、懐かしい……」

「このモンスターは手札、またはフィールドの真紅眼モンスターをリリースして特殊召喚が出来る!!セツト状態でも無関係さ!!」

「見通してると言っただろう!罨カード発動オ!!」

「ツ、まだあるのか!」

「黒魔族復活の棺!!」

………フアツ!?

「あなたの真紅眼の闇竜と、私のブレイカーを生け贄に……ハハハハハハッ!いで

よっ、^{ブラック・マジシャン}最上級魔術師!!」

『フンッ』

ブラック・マジシャン ☆7 ATK2500

「ええええええっ！ブラック・マジシャン（ですかあ!!?）」

「クククククツ、せっかくデュエルのを頂いたので、存分に楽しんで頂きたい……
これから始まる悪夢のショーをねエ!!」

続け。

last 2 光と闇の決戦（決着）

祝！最終章第2羽記念！キャラクター投票結果発表く！！

1位 斎王琢磨 571票

「皆さん、ありがとうございます！」

2位 斎王琢磨 372票

「……フウン」

3位 斎王琢磨 182票

「神に感謝」

4位 デイ○・ブラン○ー 21票

「クツ、斎王に負けた……」

5位 斎王琢磨 14票

「妥当な順位ですねエエ……」

ドン☆

「なによこれは!!」

「なんです藪からうまい棒に!!」

「まさかあらすじを乗つとるとは……流石は光の盟主サマーといったところか」

「そうそう、投稿が遅れてもうサマーも終わりね……じゃなくて! 感心してんじゃないわよ馬鹿!! 機能してないあらすじはともかく、たった2回で人気投票もクソもあるわけないでしょがつつつ!! つーか! 全員!! 一緒!!」

「いや……ひとり変なの混じってませんでした?」

「しよーがない、ここはぼk……私がやろう」

前回のあらすじ

私は女子大学生探偵、プラナ。

ある日兄のディーバと海馬ランドに遊びに来たら、物陰で怪しい男の達の闇のデュエルを目撃した。

状況見聞に夢中になっていたわたしは背後から襲ってくる、もうひとりの仲間になんかできなかった。

そして意識を失い、目が覚めたら……体が縮んでしまっていた！

プラナが生きていると知れたら、また命を狙われる。

わたしは兄の偽名をもじり、「藍神セラ」と名乗りデュエルアカデミアに侵入することになっ……

「どこの名探偵コロンじゃー!!」

「グハアツ!? あらすじの途中にハリセンはきついだるジュンコ君ツツ!!」

「人の過去を勝手に捏造しないでくれますう!」

「ほら、見た目は子供、頭脳は大人って感じだから君……」

「なるほど! そんな経緯があつたのか……」

「エドくうん! あんたも納得すんな!! 何? 斎王さん絡むと馬鹿になるの? IQの大暴落なの!」

「では次はわたしがあらすじを……」

「もういいからー！さつさとデュエルを続けろー！！こんなだから誰も読んでくれないのよ毎回毎回イイイイ!!!」

○

暗闇しか見えない空間で、そいつはこう語り出した。

「そんなわけで、君らを遊戯王の世界に送り込むから」

「……………ハア？なんだコイツ」

俺は天乃冬弥、どこにでもいる普通の青年だ。だった。

まあ普通の定義はこの際なんでもいい、流してくれ。

幼馴染みの松田隼子が交通事故で亡くなり、その親友で俺の元カノである樋口桃華モモエモと、二人で悲しみに暮れていた日々だった。

「いつまでも悲しんでばかりいられない」と、桃華を誘って盗んだバイクで走りだし（別に盗んでないし自前）。

3人でよく通った、海岸沿いのコースをかつとぼしていた！最中に地震発生からの津波に飲み込まれる、なんて冗談みたいなシチュエーションにあつたまでは覚えている。

「ハン。あまりにアホみたいな光景だったんで夢かと思つてたんだが……これも夢の続きか」

「そうですね、辺りも黒一色ですし……」

「いや、君達死んじやつたけど。」

「……………」

この現実的では無い空間で話かけてきたこのねーちゃん。何処と無く浮き世離れし

た雰囲気を感じる。年は20前後だろうか？長身で中々ロックなスタイルだが、黒髪だし日本人……ではないか？眼が紅いぞコイツ。

「お前、まさか……」

「おつ、気づいた気づいた？そう！なにを隠そうあたしは……」

「カラコンですね！可愛いと思います!!」

うん。お洒落は嫌いじゃないが、カラコンはやろうと思ったことないな。

「ちっげーわ！あたしが真紅眼レッドアイズ・ブラックドラゴンの黒竜だコノヤロー!!」

「……………ももえもーん」

「なんだいトーヤくうん（ダミ声）」

「見た目は好みなのに、発言が可笑しな女性が目の前いるんですう」

「（イラッ）こんな時はこれ！テツテツテテーテーテン、携帯電話」

「流石ももか、これで119番を呼べばいいんだね……あつ、圏外じゃねーかココ」

「救急車を、呼ぶなあああ!!」

問。

「えーと？つまりあんたは俺がお守りに持ち歩いてた、レッドアイズの付喪神的な奴で？」

説明しよう、付喪神とは日本に伝わる大切にされた物に宿ったりするらしい妖怪的な奴だぞ。詳しいことは知らん。

「まさかまさかのくたばり方したわたし達を、不憫だと思ったので気合いでサルベージして？」

「まああんたはついでだけど」

「……（イラッ）」

「そのまま死者蘇生は人理的に問題あるから、亜空間物質転送装置しよって訳か……うん。夢だな！」

「夢ですね！」

つかしいな。厨二は10年近く前に卒業したつもりだったがこんな夢を視るとは、まあデュエリストは全員厨二って言われたら元も子もないが。

「まー冷静に考えりやいきなり信じろって言われても無茶な話さね。でも夢なら夢でせつかくだし、デュエルの世界を楽しまないかい？」

「えー……」

まあ……夢の中くらいなら、ありか？レッドアイズがイラストだけの不憫オブ不憫カードって馬鹿にされない世界ってのは気分が良さそうだ。いや待てよ……

「なあ、それなら俺以外も何人か連れて行って構わないか？」

「あんですと。いや死ぬほど頑張れば出来ないこともないけど……」

「じゃあ死ぬ程頑張ってくれ。隼子と、中坊で死んじやった隼子の弟、朱雀君も頼むわ。夢ならへーきだろ」

「まあ！それは名案ですね！！また4人で遊べます！！……でも目覚めた時、余計に悲しく

なりませんか」

「それは……そうだな。悪いな今の無し」

あいつは俺が引つ掻き回したせいで散々苦勞かけたし、もしも本当に来世つてのがあ
るなら幸せになつて欲しいんだがな……

「大丈夫大丈夫。夢つて思つてんならもう覚めることないからさー！」

「ひえっ」

「さざりと怖いこと言いましたね……」

そんなこんなあつて、俺達は遊戯王の世界中に生まれ変わつ……たつつか憑依した
のであつた。

《ここからデュエルの続き！》

「せっかくデュエルの機会を頂いたので、存分に楽しんで頂きたい……これから始まる悪夢のショーをねエ!!」

僕は彼女達を守る。

たとえどんな形になっても……えっ、正体バレバレだって？

問題ない。このダークネス☆マスクは海馬コーポレーションのマル秘技術で改良した優れモノでね！よほどのことがない限り僕が天上院……おっと危ない危ないとりあ

えずわからないようになってるんだ。皆には内緒だぞ！

「まさか、あのブラック・マジシャンを使ってくるなんて……」

「ああそうか、斎王は人前でほとんどデュエルをしないからな。彼は僕と出会った頃からマジシャン使いだぞ？」

「「えっ？」」

「むしろアルカナフォースなんてモンスターのほうが初耳だったんだが……」

うーん。やっぱりパン○ラじゃないかなーあのブラマジも色黒だし間違いがないね。

「もうこちらに展開の手段はない……カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

謎D LP2100 手札3

補給部隊（永続）

セットカード1

「私のタアーン！ カップオブエース発動オ!!」

「ストップ！」

「もはや解説もなにもない」

「当然正位置イ！2枚ドロオー！！更に強欲な壺、追加で2枚ドロオー！！そしてえ、マジシャンズ・ロッドを召喚！！」

《マジシャンズ・ロッド》☆3 ATK1600

「あれは、ブラック・マジシャンの杖？」

「杖が攻撃力1600とゆうことは……本体は攻撃力900しかないのか？」

「そこ真面目に考察する所じゃねーから！！」

彼女はこんな些細なネタにも全力で反応してくれる。本当にからかいが……ゲ
フンゲフン。

「モンスター効果発動。ブラック・マジシャンの名が記された黒の魔法陣を手札に加えます。黒の魔法陣を発動。デッキの上から3枚をめくりその中ブラック・マジシャンが記された……ここは、黒・魔・導ブラック・マジックを手札に加えますかねえ」

「黒・魔・導だど!?確かあのカードは……」

「黒・魔・導を発動!!場にブラック・マジシャンがいる時、貴方の全魔法・罨カードを破壊できるのですよオ!!」

「実質サーチ出来るハーピイの羽箒!?!やる事が汚いわよ!!」

「ハーピイ使つてる人が言います!?!」

焦ることは無い。あのカードはブラマジサポートの中でも有名だ。苦しいには無いが、予想通りの展開である。

「残念だが、これはフリーチェーンだ。罨カード戦線復帰!!墓地のヴァレルロード・吹雪・ドラゴンを復活させる!!」

《ヴァレルロード・フュリアスF・ドラゴン》DEF2500

「フウン、だが補給部隊は破壊される……更に追撃の魔法カード、サウザント千本ナイフ!!そのモンスターを破壊!!」

「ならばフュリアスの効果!自分自身とブラック・マジシャンを対象にとり、破壊する!!」

『ギャオオオオ!』

精霊翻訳するとまた出オチか！とされている。正直ゴメンとしかコメントが出来ない。

「あ、フュリアスってちゃんと言いましたね」

「おのれエエ……ならばロッドでダイレクトアタック!!」

「ポルターガイストツ!?……なんとか凌げたか」

謎D LP2100↓500

「メインフェイズ2でカードをセットオ！ターンエンド……」

齋王 LP3000 手札1

《マジシャンズ・ロッド》 ATK1600

《黒の魔導陣》（永続）

セットカード×1

……強い。こんなに一方的に追い詰められたのは海馬社長以来だ。やはり○ジケリ
 ストには神ドロウが宿る……なんて口にしたら、ジュンコ君のハリセンが飛んで来そう
 だから言わない。

「俺のターン！魔法カードレッドアイズ・インサイトを発動。真紅眼の飛竜ワイバーンを墓地へ送
 り、真紅眼融合フュージョンを手札に加える。そして真紅眼融合を発動！デツキから真紅眼の黒竜
 と、ADチェンジャーを素材とし……真紅眼の黒刃竜スラッシュドラゴンを融合召喚する！！」

《真紅眼の黒刃竜》ATK2800

「あ、何気に初登場よね。主に作者の筆が遅いせいだけど」

「なんの話です!?!」

「ほう、デツキ融合のカードか。僕のフュージョン・デステニーやセラ君のシャドール・
 フュージョンのようだな」

「バト……」

「ハッ！愚かな。永続罫発動オ！永遠の魂!!」

「似合わなっ?!?!」

「失礼な。私とブラック・マジシャン（肌黒）の絆が見てとれるようでしょう。このカードは1ターンに1度、手札か墓地からブラック・マジシャンを特殊召喚出来る!! ついでに手札のマジシャンオブ・ブラックイリュージョンの効果も発動! 相手ターンに魔法・罫を発動した場合に特殊召喚できるツツ」

《ブラック・マジシャン》☆7 ATK2500

《マジシャン・オブ・ブラックイリュージョン》☆7 DEF2500

「相手ターンに上級モンスターが2体!？」

「さ→あら←あに黒の魔法陣の効果発動! ブラック・マジシャンが特殊召喚された時、場のカード1枚を除外出来るのです!! 対象は勿論、真紅眼の黒刃竜!!」

「クツ、せめて攻撃宣言が終わっていたら……」

今現在、真紅眼は僕を謎空間から救い出すために力を使い果たしてお休み中なので「あたしも出オチかよ!」などとは言っては紅。間違えた、くれない。

謎空間とかわけがわからないって? 1年目の最終羽辺りから読みなおしてくれ!! (宣

伝)

「クククククツ。真紅眼融合は発動したターン、召喚・特殊召喚が出来ない重いデメリツトがある。このターンは大人しくするしかありませんねエ」

「……モンスターをセット。そして墓地からA Dチェンジャーの効果発動。コイツを除外し、このモンスターを攻撃表示にさせて貰おう」

「構いませんよ。下級モンスターでは私のブラック・マジシャンたちには到底及びませんからねえ」

「ではこいつを攻撃表示だ、メタモルポット!!」

「何イ!?メタモルポットだとお!!」

《メタモルポット》☆2 ATK700

「メタモルポットのリバーブス効果!互いに手札を全て捨て、5枚になるようドロウする!!」

「予想外でしたが手札は有り難くもらっておきますよ、5枚ドロウ!」

まあこれは必要経費だ、次のターン全力で耐えるしかない。

「今捨てたアブソルタードドラゴンの効果発動、デッキからヴァレット・シンクロンを手札に加える」

「ここでメタモルポットとはな。ライフがギリギリとはいえ、召喚・特殊召喚が出来ないこのターンに無理に発動する必要があつたか……」

「攻撃力700が棒立ちになりますしね、ですが今捨てた2枚の手札に起死回生の手が無いなら仕方ない事かと」

エド・フェニックス君とセラ君が思っていたこと全部口にしてくる。恥ずかしいからあまり言わないでくれ……よし、良い手札だ。次を耐えれば可能性はある！

「カードを2枚セットし、ターン終了だ。」

謎D LP500 手札4

《メタモルポット》 ATK700

セットカード×2

「私のターン、ドロー！手札を補充して下さってありがとうございます。お望み通り終わらせてあげましょう！」

「はいはいフラグフラグ」

これはあれかな、僕が負けないって信用してるからこそその発言かな。
ひねくれてばっかじゃ十代君に愛想尽かされるぞー。

「このスタンバイフェイズ！墓地のアークブレイブドラゴンの効果を発動！」

「何イ!?!」

「このモンスターが墓地へ送られた次のスタンバイフェイズ、墓地からレベル7か8のモンスターを復活させる！蘇れフュリアス!!」

『う、ウガー』

《ヴァレルロード・F・ドラゴン》☆8 ATK3000

このデュエルでは三度目の召喚である、流石に疲労の色が見えるな……すまないが、

もうしばらく辛抱してくれ。

「尽かさず効果発動だ！メタモルポットと永遠の魂を対象に、破壊する!!」
 「見通してると言っただろう！速攻魔法発動、黒魔導強化!!マジック・エクスパンド私の場にはブラック・マジシャンとブラック・マジシャン扱いのブラック・イリユージョンがいる。よつてこのターン、ブラック・マジシャンの攻撃力を1000アップし、私の魔法・罠カードの発動に対するチェーンを封じ、私の魔法・罠カードは破壊されない!!」

《ブラック・マジシャン》 ATK2500↓3500

「至れり尽くせりか！てかテキスト長いカードの説明をセリフに入れると色々グダるのよコノヤロー!!」
 「……姉さんはどこにツツコんでいるんだ」

要約すると永遠の魂も破壊されないわけだ。ブラマジサポートは種類が豊富過ぎて覚えきれないな。

「そして永遠の魂の第2の効果、デッキから2枚目の黒・魔・導を手札に加えさせて貰いましょうかねエ」

発動に対するチェーンも封じるならここしかない、勝負を仕掛ける！

「リバースオープン、威嚇する咆哮！叫べフュリアス!!」

『ギャオオオオツ!!』

「これでこのターン、君は攻撃宣言を行えない!!」

本当に叫んでくれるあたりソリッドビジョンすげーとゆるか精霊ゴメンって言うべきか

「無駄無駄無駄無駄あ！手札から紫光の宣告者バイオレット・デケエラーの効果発動オ!!手札の天使族、心眼の女神とこのカードを墓地へ送り、畏の発動を無効にする!!」

「ならば最後のリバース発動！速攻魔法、墓穴の指名者!!墓地の紫光の宣告者を除外し、

そのカードと同名の効果を決次のターンのエンドフェイズまで無効とする!!」

「クツ、まだ抗うか……ならばアルカナフォースV I I I—T H E C H A R I O Tを召喚
！」

《アルカナフォースV I I I—T H E C H A R I O T》☆4 A T K 1700

あ、申し訳程度のアルカナ要素だ。

「そして、チャリオットとマジシャンズ・ロッド、ブラック・マジシャン、この3体のモ
ンスターをリンクマークにセットオ!!」

は？

「召喚条件は、名称の異なるモンスター3体!!リンク召喚!!来なさい!混沌の戦士カオ
ス・ソルジャー!!」

《混沌の戦士 カオス・ソルジャー》L I N K 3 上/右下/左下 A T K 3000

「ハハハハハ！このモンスター召喚にレベル7以上のモンスターを使用している場合、カード効果の対象にならず破壊もされない！」

「大分予想外なの出てきましたね!？」

「つーか地属性じゃん！もう光関係ないじゃん!!」

「わかつてませんねえ……光がより輝くためには！より暗き闇が必要なのです!!そしてそれが合わさった混沌は最強に見える!!」

「なるほど、流石斎王!!」

「あんたはもう帰って寝なさい、馬鹿が移るわよ!!」

「おか……姉さん!」

「まだ朝ですよ!？」

で、リンク召喚って？結局誰も教えてくれないのかい？

「気を取り直して行きますよ。手札より魔法カード、マジカライズ・フュージョン円融魔術!!フィールドではブラック・マジシャン扱いのマジック・イリュージョンと、墓地の心眼の女神を融合し、超魔導剣士―ブラック・パラディンを融合召喚!!」

「ブラック・パラディン!?!しまった、墓地とフィールドには合計9体のドラゴンが……」

「よってこのカードの攻撃力は、4500ポイントアップします!!」

《超魔導剣士―ブラック・パラディン》☆8 ATK2900↓7400

「攻撃力7400!?威嚇する咆哮が無かったら即死でしたね」

「カードを1枚セツトし、ターンを終了します」

齋王 手札2 LP3000

《混沌の戦士 カオス・ソルジャー》ATK3000

《超魔導剣士―ブラック・パラディン》ATK7400

《黒の魔導陣》（永続）

《永遠の魂》（永続）

えーと……要するに新ルール下でも、エクストラから複数モンスターを召喚できるよ
うになる。的な解釈でいいのかな？流れぶった切るのも面倒だからあとで誰かに聞こ
う。

「確かブラック・パラディンには、手札を捨てて魔法の発動を無効にする効果があつた

な」

「つまり二回は魔法を止められる。永遠の魂でブラマジを蘇生すれば、魔導陣の効果でカード1枚を除外もできますね」

「結構……詰んでない？」

「フヒヒヒヒッ。なんならサレンダーして、そちらのお嬢様と代わって頂いてもよろしいですよ？」

「レディ達の前でそんなみつももない真似は出来ないさ。僕のターン、ドロー!! チューナーモンスター、ヴァレット・シンクロンを召喚!!」

《ヴァレット・シンクロン》☆1 ATK100

「ヴァレット・シンクロンの効果発動! 墓地のレベル7以上の闇・ドラゴンであるアプソルータードラゴンを、効果を無効にして特殊召喚!」

《アプソルータードラゴン》☆7 DEF2800

「ジャンク・シンクロンの闇ドラVerなんだ。しばらく見ないうちに随分いいカード見つけたじゃない」

「レベル7のアブソルターに、レベル1のヴァレット・シンクロンをチューニング！天地を焼き付くす、絶対王者の魂よ力を貸してくれ！闇魔竜レッド・デーモン!!」

『ギャオオオオッ』

《闇魔竜レッド・デーモン》 ATK 3000

「アブソルターが墓地へ送られたので再び効果発動だ。ヴァレット・トレーサーを手札に加えておくよ」

「シンクロ召喚。いけませんねえ……彼等の怒りを買ってしまおう。永遠の魂の効果発動！墓地からブラック・マジシャンを復活させます!!そして黒の魔導陣とのコンボ攻撃で、レッド・デーモンを除外!!」

『ハアッ』

《ブラック・マジシャン》 ATK 2500

「ならばそれにチェインしてフュリアスの効果を発動！レッド・デーモンと、永遠の魂を破壊する！」

『グガアツ!!?』

特別翻訳 「俺まで出オチツ!」だそうだ。

だからゴメン、まじゴメンって。

「当然対策していますとも。永続罨発動！宮廷のしきたり!!」

「うわ渋っ。」

「このカードがある限り、他の永続罨は破壊されません！残念でしたねエ……あなたの切り札は無駄死にです!!」

「どうだかね。これで君は、こちらのフィールドに干渉する手段を失った！手札からダイナレスラー・パンクラトプスを特殊召喚!!」

《ダイナレスラー・パンクラトプス》☆7 ATK2600

「彼は相手より自分のモンスターが少ない場合、手札から特殊召喚できるレスラーだ。」

更に手札の真紅眼の遡刻トレイサードラゴン竜を生け贄に、真紅眼の亜オルタナティブフラックドラゴン黒竜を生け贄に特殊召喚!!」

《真紅眼の亜黒竜》☆7 ATK2400

「レッドアイズのオルタですってえ!!?」

「なんで姉さんが一番驚いてるんですか!?!」

「いや、ゴメンつい……」

「チイ、魔法カードを封じられてまだ展開をしてくるとは」

「亜黒竜は手札・フィールドのレッドアイズモンスターを生け贄に特殊召喚できるのさ……チラ見せで呼べる亜白龍はズル過ぎないかな!おのれ社長!!」

「気持ちは解るけど落ち着けエ!聞かれたらまた面倒がおこるわよ!!」

おっと思わず本音が、社長に聞かれたらまたハイパーアルティメット☆バーストの的にされかねないからね。気をつけて行こう。

「そんなわけで亜黒竜の効果発動……とやりたいけど、今回はそれどころじゃないね。パンクラトプスと亜黒竜でオーパーレイ!神も悪魔もぶち壊せ!撃滅龍ダーク・

アームド!!」

『グルオオオオ!!』

《撃滅龍ダーク・アームド》★7 ATK2800

「なにそれ、万丈目君に謝れ！」

「君も使ってただろ本体を！じゃなくて撃滅龍の特殊能力！ユニットを1つ使う事に墓地のカード1枚を除外し、フィールドのカードを破壊する!! 2つのユニットと、墓地のインサイトと闇の量産工場を除外し、宮廷のしきたりと永遠の魂を破壊する!!」

「ターン1制限が無いだど!? 永遠の魂が破壊されたことで……」

「デメリット効果が適用される。碎け散れ、紛い物共!!」

『ぐあああああつ!?!』

パラディン師匠（黒）、叫び声がりアルすぎるんだが。

「おのれ……おのれおのれおのれおのれおのれエエ!!」

「そのカオス・ソルジャーは効果では破壊されないのだったね……バトルだ！フュリア

スでそのリンクモンスターとかゆうのを攻撃！行けエ！妖刀鬼山間！！」
「待てーい！今どっから出した!?」

こんなこともあろうかと、フュリアスの砲芯に一本仕込んでおいたのさっ！

「迎え撃てイ！冷凍秋秋刀魚!!」

「なんで!!」

「相殺!!」

「両方とも、折れたーっ!!?」

「まさか鬼山間程度に秋秋刀魚が相討ちになるなんて……」

「そうなんです?」

「いや普通は逆じゃろーがいつ!もうどっからツッコめばいいのかわかんないわよ!!」

「そしてダーク・アームドでダイレクトアタックだ!!」

「グツハアアアアツ!!」

齋王 LP3000↓200

「何事も無かったかのように進んめんじやないわよ、カオソルはどころ〇んのすけ!!」

「まあだだあ! 私の手札には時の魔術師がある……我が運命力をもって貴様のモンスターを破壊し、引導を渡してやろう!!」

あ、はい。

「手札から速攻魔法、銀龍の轟砲! 蘇れ真紅眼の黒竜!!」

『ギヤオオオオツ!!』

《真紅眼の黒竜》☆7 ATK2400

「えっ?」

「終わりだ! 黒炎弾!!」
ダーク・メカフレア

「馬鹿なああああああつ!!?」

斎王 LP200↓0

WIN どうみても吹雪

《クルック☆》

「チーン……」

「フツ、レディーに害為す悪党め。しばらくそこで頭を冷やすんだな」

何言っただコイツ。

あたしの脳裏に浮かんだのはただそれだけであった。

「ハジケ状態の齋王を倒すとは、あの仮面の男。いったい何者なんだ……」
「馬鹿です」

「えっ？」

「グウ……仕方ありません。今日の所は引き上げましょう。だが、いずれ貴女達から光の加護をうけたいと懇願することになるでしょう。その時を楽しみに待っていますよ。
フハハハハハハ!!」

この男、立ち上がるなり凄く典型的な捨て台詞を吐きながら去っていったー!?
てかクルーザーの修理代払えや!!

「逃げたか……仕方ない。修理代は来期の齋王のマネジ代から引いておくとしよう」
「……うん、それ最初に言おうか。てかあいつ仕事してないでしょ絶対。マネジメントとかするタイプじゃないでしょ」

あ、目を刺らされた。こりや当たりですわ。

「てか金払え! って脅迫したのは姉さんですよね……あ、目を刺らさないでください」

「ハツハツハツ、まるで姉弟みたいな反応だね。怪我は無かったかいレディ達」
（元） 姉弟だよ！知ってて言ってるコノヤロー……いや、エド側の事情は知らない
……可能性が……無いこともない……？

「あんたの頭の病気よりははるかに軽傷です。つーか仮面とれや」

「これは手厳しい。だが訳あって正体を言えない身でね……また何か困ったことがあれば、この謎のヴィラン・ダークネスを呼ぶといい。さらばだ！フハハハハハハ!!」

最後までキャラぶれぶれなまま帰った……本当に何しにきたんだろ、あの馬鹿。
まっ、無事だったみたいでなによりだけどね。

「謎のヴィラン・ダークネス……格好いいじゃないか。ダークヒーロー」
「エド君、それ本気で言ってます？」

《クルック》

翌日。全校集会で新任の教師の紹介が行われた……と、言っても海外の姉妹校に出張していただけらしいが。らしいが……

「えーと……アメリカカデュエルアカデミアから戻った……響みどり……です……」

「そしてそこで引き抜かれた、謎の教育実習生☆ダークネスだ！よろしく頼むよ諸君！！アツハツハツハツハ！！」

はい。せーのっ

「待たんかいいいいいいいい！！」

続け。

last3 鳥使いさんのソリティア教室

「何故だ！何故よりによってお前が、お前が俺の邪魔をするんだ……ジュンコ!!」

「ゴメンね、十代。あたしにはどうしても譲れない理由があるのよ……」

「クツ、だったら仕方ない。俺の邪魔をする奴は、誰であろうと容赦はしない！行くぞ、ユベル!!」

『ようやくその気になったんだね。待ち詫びたよ……』

強い決意で、彼はデュエルディスク 剣 を構える。あたしもそれに答えなければならぬ。

「デュエル!!」

十代 LP4000

ジュンコ LP4000

「先行は貰う……俺のターン、ドロー！まずはスケール4の霸王眷竜ダーク・ヴルムをペ

ンデュラムゾーンへセット」

「さあ、始まりました。修学旅行の行き先決定戦！童実野町へ行きたい代表、十代選手と！それを断固拒否したい代表！ジュンコ選手の世紀の一戦!!」

そうなんです。冒頭なんかシリアス染みたことを言っていたけれど、修学旅行でただ童実野町に行きたくないだけなんです……絶対海馬社長に捕まって良からぬことに利用されるんです……

「ダークヴルムのペンデュラム効果により、スケール13の霸王門インフイニティ無限をもう片方のスケールにデッキからセツティング!!」

「行けーっ！アーニキー!!」

「会場はここ、デュエルアカデミア第一デュエルホール。実況はわたくし、謎の教育実習生☆ダークネス。解説にアメリカ帰りのクールビス、響みどり先生をお招きしております」

「ペンデュラム召喚！現れよレベル10……ユベル!!」

『フフフ、ひどいよ十代。ボクをこんな観衆の眼に晒すなんて……』

《ユベル》☆10 ATK0

「おーっと、ここで十代選手開幕ペンデュラム召喚！レベルは10だが攻撃力は0！
いったいどんな戦術を秘めているのか！どう思いますか解説のみどり先生!!」
「ねえ……これ私もやらないと駄目？」

「ほら。我々は今の生徒にとつて新顔だから、早く馴染もうと思ひましてね」

「あのねえ……」

「つてさつきからうるさいわー!!響せんせーも呆れてんでしょーが少し黙ってなさいよ!!」

「シャドーミストを守備で召喚。カードをセットしてエンドフェイズ、ユベルの維持には生け贄が必要だ。シャドーミストを生け贄にする。そしてシャドーミストの効果！
デッキからエアーマンを手札に加えさせて貰う。ターンエンド」

十代 LP4000 手札4

《ユベル》ATK0

《霸王眷竜ダークヴルム》(P s 4)

《霸王門無限》(P s 1 3)

セットカード

「十代選手、動いたように見えてあまり手札が減っていませんね」

「そ、そうですね。無駄の少ない綺麗な流れでした」

「あたしのターン、ドロロー！魔法カード闇の誘惑つ、カードを2枚ドロローして……よし来たア！闇属性の大旆のヴァーユを除外！手札から毒風のシムーンの効果発動よ！手札ブラックフェザーの「B F」、白夜のグラディウスを除外してデッキから黒い旋風を発動してこのコを召喚！！」

《BF―毒風のシムーン》☆6 ATK1600

「このターン、デメリットでエクストラデッキから闇属性しか出せなくなるわ」

「で、出たーっ！ついに黒い旋風のサーチ手段を身につけたジュンコ選手の十八番、「B F」シリーズだ！では皆さんご一緒に」

「二三」インチキ効果も大概にしろー!!「二三」

会場全体からハモられた!?BF達がなにしたってんのよ!!!

「ワンキルだな」

「ワンキルですね」

「心読みなそこっ！とりあえず旋風効果で攻撃力1300、南風のアウステルを手札に加えてきつきのシムーンの効果とは別にそのまま通常召喚！」

《BF—南風のアウステル》☆4 ATK1300

「アウステルの効果！にチェーンして旋風効果！砂塵のハルマツタンを手札に加え、除外されてた大旆のヴァーユを効果無効で帰還させるわ!!」

《BF―大旆のヴァーユ》☆1 DEF800

「ここまで消費1枚、確かにインチキと謳われるだけあるわね」

「はい先生ーッ！生徒のデッキに対してあんまりだと思えますー！」

「なんか、今日の姉さんいきいきしてますね」

「久しぶりのデュエルだからな……主人公なのに」

「テンション上がっているとこ悪いが、畏発動！激流葬!!」

「……えっ？」

「フィールドの全モンスターを破壊する!!」

「あああああっ!?!せっかく展開したのにつ!!」

「リバースカード警戒しない方が悪いぞ姉さん……」

鳥なんだから飛行能力で33%回避！とか……ないわよねえ …。

「悪いが今の俺は、生温い手は使わない。ユベルが効果で破壊された時ユベル―Das
Abschleicherをデッキから特殊召喚する!!」

『ハハハハハッ！ボクごと水に流そうとするなんて……十代、キミは本当に困った奴
だ』

《ユベル―Das Abschleicher》☆11 ATK0

狂喜乱舞。その時誰かが悲鳴をあげた。マジもんの悪魔が顕現したんじや立体演出でもビビる人はビビるわな。

ところで、あのヤンデレ精霊五月蠅いし、あたしを見る圧が強い。めっちゃ強い。

「デカイ！ 最上級モンスターが更に進化しましたデカイ！ 全滅させられた枕田選手に打つ手はあるのかー!?!」

あるっつーの。知ってていちいち言うな面倒くさ…

「墓地のヴァーユの効果よ！ 毒風のシムーンを除外し、（疑似）シンクロ召喚！」

「…まあ、そうなるよな。」

「漆黒の翼翻し、雷鳴と供に走れっ！ 電光の斬撃!!」
アサルトブラックフェザー
 A B F — 驟雨のライキリ!!」

『うおおおおつ！ 拙者！ 推☆参!!』

《A B F — 驟雨のライキリ》 ☆7 A T K 2 6 0 0

「おー、ずいぶん久しぶりに視た気がするぜ……」

「出たー！ ジュンコ選手のエース（？）モンスター、驟雨のライキリだーっ!!」
 「でも確か、ヴァーユで出したシンクロモンスターは効果が無効だったわよね」
 「流石は先生、よく勉強してらっしゃる。つまり今は残念侍のライキリですね」

『誰が残念侍ですか失敬な!』

うん、あなたがち間違っていない。

「そんでもって場に「BF」いるから砂塵のハルマツタンを特殊召喚！効果は使わないわ」

《BF—砂塵のハルマツタン》☆2 ATK800

「そんでもってこの2体を……リンクマーカーにセット!」

「へ？」

『へ?』

「召喚条件は、闇属性鳥獣族2体! さあ御披露目よ! R レイド・ラフターズ Rーワイズストリクス!!」

《RRーワイズストリクス》LINK2 ATK1000 右下/左下

『拙者出オチー!? (墓地から)』

「な、なんとジュンコ選手リンク召喚! いつの間にホワイト寮入りしたのかーっ!!」

「入ってないわ! どうみても闇属性でしょこのコ!!」

「おいハニー…お前だな犯人……」

「その……だつてわたくしも童実野町には行きたくないんですもの……あと闇属性は誰も使つてないから、良いと思ひまして……」

「そんなわけで効果発動! テッキから、レベル4闇で鳥獣族のゼピュロスを守備で特殊召喚! 続けて手札からプラストを特殊召喚!」

《BF―精鋭のゼピュロス》☆4 DEF1200

《BF―黒槍のブラスト》☆4 ATK1700

「この2体でオーバーレイ！エクシーズ召喚！ランツク4

！RR―フォース・ストリクス!!」

《RR―フォース・ストリクス》★4 DEF2100

「フォース・ストリクスの効果発動。デツキからレベル4闇で鳥獣の残夜のクリスを加えまして、この瞬間ワイズの効果！「RR」エクシーズが効果を使った時、デツキからランクアップマジックをセットできる、RUM―ラプターズ・フォースをセット！」

「おいおい……BFデツキじゃなかったのかよそれ……」

「ちゃんと「BF」よ？メインはね。墓地のゼピュロスの効果で、場の黒い旋風を戻して特殊召喚！場に「BF」いるからクリス特殊召喚！」

《BF―残夜のクリス》☆4 ATK1900

「そんでもってゼピュロスとワイズ・ストリクスをリンクモンスターにセット!」
 「ゲ、まだもってんのかよ!」

「召喚条件は闇属性2体以上、リンク召喚! 幻影騎士団―ラスティバルデツシュ!!」

《幻影騎士団―ラスティバルデツシュ》L3 ATK2100 右/右下/左下

「おいハニー……あとで話があるんだが」

「あーあー、聞こえませんかー」

「ラスティバルデツシュ効果発動つと。デッキから「幻影騎士団」モンスターを落として「ファントム」魔法・罫をセット出来る。サイレントブーツを落として永続罫・ファントム・フォッグ・ブレード
 幻影霧剣 をセットするわ。そしてサイレントブーツの効果、墓地から除外してRUM―幻影騎士団ラウンチを手札に加える!」

「会場の皆の代弁をしよう！」「独りでやってるよ〜」

「それにもう「BF」関係無くなって来てないかしら……」

「もちよつと待つてね！手札に加えた幻影騎士団―ラウンチを捨てて、フォース・ストリクスをランクアップエクシーズチェンジ！RR―レヴオリューション・ファルコン―エアレイド！」

『キヤルルル』

《RR―レヴオリューションファルコン―エアレイド》★6 ATK2000

「エアレイドの効果！エクシーズ召喚に成功した時、相手モンスターをぶっ壊してその攻撃力分のダメージを与える！ついでにラストイバルデッシュの効果もおまけよ、リンク先にエクシーズが特殊召喚された場合フィールドのカード1枚を破壊！レヴオリューションファルコンと、ユベルが怖いから破壊！」

『おのれ小娘エエエ！ボクは認めないからなあああ!!』

何をだ。いや、敢えて聞くまい……。

「クツ、ユベルには最後の進化が残っているが……タイミングを逃すから特殊召喚出来ない」

「あの悪魔族を突破ー！これで十代君のフィールドはガラ明きだぞー!!」
 「結局なんだったのかしら、あのモンスターの効果……」

「これで遠慮無くせめれるわね！リバースカードオープン！RUMーラプターズ・フォース！ワイズストリクスの効果でセットしたRUMは、伏せたターンに発動出来る！破壊されたレヴオリューションファルコンを素材にランクアップ・エクシーズチェンジ！発進よ、RRーアーセナルファルコン!!」

『キュオーツ』

《RRーアーセナルファルコン》★7 ATK2500

「アーセナルの効果！ユニット1つを使い、デッキからレベル4鳥獣を特殊召喚！チューナーモンスター、BFー弔風のデス!!」

『デスけど!?!』

《BF—弔風のデス》☆4 DEF1000

お、おう。

「レベル4、残夜のクリスにレベル4、弔風のデスをチューニング！秘めたる思いをその翼に現出せよ！ブラックフェザー・ドラゴン!!」

『キュオオオオッ!』

《ブラックフェザー・ドラゴン》☆4 ATK2800

「ここに来てブラックフェザー・ドラゴン！他のレベル8のが強くな？」とか口にするとしばかれるから禁句だぞー!」

「おめーが言つとるんじやい！あとで覚えてなさいよ!!」

「貴方、正体隠してる自覚あるの……?」

ふう……大☆満☆足。これがやりたいがためにRUMとか無理やり採用したのよね。
前日、ももえもんにつつそりリンクモンスター渡された時はどうしたもんかと思つたけど、想像の数倍噛み合つてビックリだわ……

「ハニー……今夜はお仕置きだ」

「んんっ。優しくお願いします……」

なんか視界の角に揉め、イチヤついてるバカップルがいるけど気にしない！

「そんじゃーお待たせ！バトルフェ……」

「なあジュンコ、お前召喚、特殊召喚何回した？」

「なによ急に。えーと……10回から数えてないけど……」

「だよなあ……じゃあ俺はメインフェイズ終了時にコイツを手札から特殊召喚するぜ。
原始生命体ニビル！」

「……why？」

その時。宙から巨大な隕石にも似た恒星のようななにかがフィールドに落下。ジュンコ君のフィールドは焼き付けされ、その破片にも似たなにかが残されたのであった。

《原始生命体ニビル》☆11 ATK3000/DEF600

《原始生命体トークン》☆11 ATK6400/DEF3600

「なんじゃあー！こりやああああつ!？」

「初めて使ったけど演出派手だなー……原始生命体ニビルの効果、相手が5回以上の召喚、特殊召喚をしたターンのメインフェイズに発動。全フィールドのモンスターを生け贄に特殊召喚され、相手の場には生け贄にされたモンスターの合計のステータスを持つトークンが特殊召喚されるぜ。もちろん守備表示な」

「つまりあたしの召喚、全部無駄……鬼！悪魔!!二十代!!」

「アハハハ、生温い手は使わないって言ったろー。んでどーするんだ、メインフェイズ続けるか？」

「くうつ……カードを1枚セットして、ターンエンド……デスの効果でエンドフェイズに1000ダメージ受けるわ」

ジュンコ LP3600↓2600 手札3

《原始生命体トークン》DEF4000

セットカード

セットカード

1000は結構痛い。けど特殊召喚対応した☆4チューナー、デスしかないんデスよね……

「このデュエル。ジュンコ選手の後攻ワンキルかとおもわれましたが、話が変わってきましたねー」

「そ、そうねー……彼女、涙目だけど大丈夫かしら」

言わないでやめて恥ずかしい。

「俺のターン、ドロー!!アドバンス・ドローを発動。レベル11の原始生命体ニビルを生け贄に、2枚ドロー!」

「あ、あらあ……攻撃力3000のモンスターをみすみす手放して良いのかしら」

「場にモンスターがいると、霸王門の制約でペンデュラム召喚が出来ないからな……ペンデュラム召喚!レベル5、E-HERO^{イービル・ヒーロー} シニスター・ネクロム!」

《E-HERO シニスター・ネクロム》☆5 ATK1600

「そしてエアーマンを召喚!」

《E-HERO^{エレメンタルヒーロー} エアーマン》☆4 ATK1800

「くう。……永続罨カード、幻影霧剣を発動よ、エアーマンの効果と攻撃を封じる！」
 「ならば速攻魔法発動、マスク・チェンジ！風属性のエアーマンで変身召喚、
 マスクドヒーロー
 M・HEROブラスト!!」

《M・HERO ブラスト》☆6 ATK 2200

「わーっ、早まったーっ!!」

「らしくないな。ニビルが相当こたえたか……対象不在により霧剣をかわし、エアーマンの効果発動。デッキからEーHEROアダスター・ゴールドを手札に加える。そしてブラストの効果だ、残りのセットカードを手札に戻させてもらおう！」

「使わざるを得ないじゃない……もう一枚はダメージ・ダイエットよ、発動しておくわ。」

「あのカード採用してるコ実は多いわよね……」

「LP4000って、吹けば消し飛ぶ数値ですからね……ルール改定を要求したい！」

あんた対策じゃ、ボケーツ!

とりあえず。これでエクストラモンスターゾーンは埋まったから、5200ポイント削られることはそうそうないでしょ……

「ふーん……アダスター・ゴールドの効果発動、手札からこのカードを捨て「ダーク・フュージョン」が記されたカードを手札に加える。ダーク・コーリングを我が手中に!そしてプラストとシニスターネクロム、2体のモンスターをリンクマークにセット!」

「はい!?!」

「召喚条件は「HERO」モンスター2体、リンク召喚! X・HEROワンダードライバー!!」

《^{エクストラヒーロー}X・HERO》 ワンダードライバー》 ATK1900 L2 上/下

「新しいHEROだどっ?!」

「エド君、食い付き過ぎです」

「おっとお！融合しか使わないことに定評のあった十代選手、ついにリンク召喚だーっ!?」

「なにこれ流行ってるの？」

「斎王様ア！何故か遊城十代がリンクモンスターを！」

「何イ!?今プルコギで忙しい、あとにしてくれ!!」

「ダーリン……?」

「フ、フウン。倒すべきライバルがルールの制約に縛られるのはつまらんからな」

あ、犯人万丈目君だ。ももえもんと同じことやっとったんかいっっ!!

「墓地のシニスターネクロムの効果。このカードを除外し、「E—HERO」をデツキヨリ特殊召喚。出ろ、マリシヤス・エツジ！」

『グハハハハハ』

《E—HERO　マリシヤス・エッジ》☆7　ATK2600

「ダーク・コーリング発動。墓地のアダスター・ゴールドとユベルでダーク・フュージョ
ン！いでよ、E—HEROマリシヤス・ベイン!!」

『フフフ。さつきはよくもやってくれたね……』

《E—HERO　マリシヤス・ベイン》☆8　ATK3000

なにそれ知らない。

てか宿ってるーっ!?明らかに融合素材になった某ヤンデレさんの精神が主になつて
る怖っ！

「ワンダー・ドライバーの効果。このカードのリンク先に「HERO」が特殊召喚された
ので墓地のマスク・チェンジをセットし、マリシヤス・エッジとワンダー・ドライバー
をリンクマーカーにセット！」

「まだいんのかいっ！」

「召喚条件は「HERO」2体以上！来い、X・HEROドレッド・バスター！逆のEXモンスターゾーンに置かせてもらおう！」

《X・HEROドレッド・バスター》L3 ATK2500 右下／下／左下

「ダ〜リ〜ン？」

「いやあれは、どうせこうかがいまいちだったし、たいした、きょういには、ならないと、ふんでだな」

またバカップルがイチャついて…る？てかなんでわざわざ視界に入る場所にいるかな、イヤミか！

「終わらせる。魔法カード発動、ペンデュラム・フュージョン！ミラクル・フュージョン！そして…ネオス・フュージョン!!」

「ちよ待っ!?!せめて順番に…」

「ペンデュラムゾーンのダーク・ヴルムと霸王門無限を融合し、霸王眷竜スターヴ・ヴェ

ノム!墓地のエアーマンとシャドーミストを融合し、トルネード!デッキからネオスとグランモール1体を融合させ、グランネオス!!そしてドレッドバスター及び、そのリンク先に呼ばれたHEROは、墓地のHEROの数×100倍、攻撃力がアップする!!ついでにスターヴ・ヴェノムの効果、墓地のモンスターへの名称変更、名前をネオスに変更する」

《X・HEROドレッド・バスター》ATK2500↓2900

0 《霸王脊龍スターヴ・ヴェノム(E・HEROネオス)》☆8 ATK2800↓3200

《E・HERO Grat TORNADO》☆8 ATK2800↓3200

《E・HERO グランネオス》☆7 ATK2500↓2900

「そしてグランネオスの効果、ネビュラ・ホール!原始生命体トークンを手札に戻す……が、トークンはカードではないので消滅する!!」

「話を聞けー!!?」

「バトルだ!ドレッド・バスターでダイレクトアタック!!」

「きゃあああつ!!?」

ジュンコ LP2600→1150

(ダイエツト中、ダメージ半分)

〔無理なダイエツトは体によくないぞ！運動をしよう〕

〔急になに!?!〕

〔続けてグランネオスで攻撃!〕

〔いい加減にしなさいよっ！墓地の永続罫カード、幻影霧剣の効果発動！このカードを除外して、ラストイバルディッシュを特殊召喚!〕

《幻影騎士団―ラストイバルディッシュ》 ATK2100

〔構うな、やれ！ドリリングドリル!!〕

〔どこのドリラゴハあ!?!〕

ジュンコ LP1150→950

「終わりだ！TORNADOとユベ、じゃなくてマリシヤス・ベインでダイレクトアタック!!」

『ハハハハハ!!よくもボクをコケにしてくれたね小娘エ！お前なんて（ピーツ）を（ピーツ）して（ピーツ）のあとに（ピーツ）してくれるー!』

「ぎゃあああつ！痛い、痛いつて！」

『いい表情だあ……ボクの味わった痛み、悲しみ、それを越えた快樂を味会わせてやる……アーツハツハツハツハツ!!』

「ちよ、どこ触ってんのやめつ、ギブギブ!!そこ弱つ、やああああん!!」

「おーい、気持ちはわかったから……ほどほどにしとけよー
（ちよつとEr、いやなんでもない）」

ジュンコ LP1950↓0

WIN 十代

「そんな訳で、修学旅行先はドミノ町に決定ー!!」
「ええ……こんなオチでいいの……?」

いいわけ、あるかー!!

続く?

last 4 続・鳥使いさんのソリティア教室

「足りない、足りないんだ……」

「何が足りないのです?」

「ラブコメ要素がだよ!うちの本筋はツン○レヒロイン(笑)のジュンコ君が、鈍感系ヒーローの十代君と付かず離れずの甘酸っぱい青春を謳歌するお話だろう!」

「誰が○ンレヒロイン(笑)よ!？」

「もうただのツツコミヒロインですわよね」

「主にあんたらのせいだろがいつ!」

「だが!この現状を見たまえ!!せっかくの修学旅行編だとゆうのに我々は何処にいますと

思う!!?」

「K〜C〜。」

「そのCM、今のコ微妙にわからないから……」

そう、我々は童観野町へ修学旅行へ来た。来たのだが……

「フウン。戯れ言は言い終わったか凡夫ども……」

開幕5秒で拉致られた、海馬コーポレーションなうである。

港へ着くなり海馬社長直々にカイパーマンのコスプレ（本人のコスプレってわけわからないわね）をして待ち構えていたのだ。

仮にホワイト化していようが仮面で正体を隠そうが……この二人もお構い無しである。

「社長……」慈悲を！僕はなんか変な感じに洗脳されて凶化した妹を、自分の正体はや

んわりと隠しつつ救済するといった大切な使命が!!」

「いやもうバラしなさいよ面倒くさい!!」

「わたくしも……齋王様をほつといて、万丈目様改めダーリンとイチャイチャすると
いった使命が!」

「あんたは本当に洗脳されてんのかいつ、普段と微塵も変化がないんだけど!」

「五月蠅いよモモ!大体明日香がバーサークしたのは君のせいだと聞いたぞ、あとで覚えてろ!!」

「明日香様はほら……どつかの誰かさんの影響で頭のネジが飛んでるにもほどがあつた
ので……強いショックを与えたら元に戻るかなー、なんて」

「そんな理由だったのアンタ!優しさが1周回って狂気よ!!!」

明日香は白化した影響で、ほっとくと十代を求めて暴れ出す破壊の化身となったため。最近では薬物や催眠などあらゆる手段を用いて頑張って大人しく眠りにつかしてるそう。明日香ア……

「喧しいぞ！その斎王とやらがペガサスに謎の手段で売り込んだリンクモンスターのせいで、デュエルモンスターズのゲームバランスが崩壊しかけているのだ！過去、似たようなことをした貴様らが責任をもって調整に明け暮れるがいい！ふははははははははははは！！」

「そんな殺生な……」

まっ、これも因果応報ってことで諦めるしかないわね。

一緒に回ろうって言ってくれた十代には悪いけど……正直、某ヤンデレさんの圧が怖くて近寄りづらいのよ、最近。

《クルック》

「はあ、疲れた……」

「流石に300回もデュエルすると、くたくたですわね……」

「もはや後攻とったもん勝ちのワンキルゲーだから回数だけは稼げたわね……リンクス
かよ」

我々ワ、馬車馬ノヨウニ働カサレタ。深夜0時二、ヨウヤク解放サレタ。

ちなみに例のあの馬鹿はそのまま泊まり込みらしい。ざまーみろ。

「いけない……疲労で地の文にまで影響が出ていますわ。早くホテルへ行ってお風呂に
入りましょう」

「ソウダネ……って、さつきから河川敷ばかり通ってるけど大丈夫？オシリス召喚する

「？」

「ええ、もちろんですわよ。ホホホホ」

道案内はお任せ下さい！と言われるがままについて来てしまったが……

「フフ、もうよいぞ浜口ももえ。よくやってくれた、誉めてつかわす」

「あらみずち様ご機嫌よう。こんな所でよろしいので？」

「うわっ!?ビックリした……ダレよあんた」

暗闇の中から突然！夜の河川敷には場違いな巫女さん装束を着た、ちよつとケバい女が現れた！

「あんたとは失礼ですわよジュンコさん！この方は斎王みずち様。我が光の結社、盟主様の妹ぎみですわ!!」

「さ、齋王さんの妹オオオ!!?この美人っぽいのに、ケバさで台無しにしてるねーちゃんが!!?」

「こら、ジュンコさん！」

「ケバ過ぎて微塵も萌えない残念巫女様、略してケバコ」

「って皆が言ってるのがバレちゃうでしょう!!」

「一番失礼なのはお主だ、浜口ももえ!!影でそんなこと言っていたのか汝らは!!!」

「ヤバイ、妹さん^{ケバコ}涙目だ。弄られ耐性ないわねこりや。

今更感あるけどとりあえずシリアスっぽい空気に戻そう。

「ウオツホン!……ももえ、あたしを騙したのね!?!」

「けほんけほん。すいませんジュンコさん、わたくしも光の結社の一員。みずち様のご命令には逆らえせんわ」

「グスッ。そ、そ、そうだぞ……枕田ジュンコ！ 汝には遊城十代とエド・フェニックスを誘きだすための、人質になってもらう!!」

あゝなんかやんわり思いだしてきた、修学旅行編ってそんな感じだったっけ？ もう原作知識とかウロウロウロボロスだわ……確か……翔君と剣山君が人質にされる奴だったっけ、なんであたしまで？

「実は……剣山君と翔君を捉えに行った、みずち様の配下である雷丸と氷丸って方は……ジュンコさんと修学旅行回れなかったことで、不機嫌だった十代様に瞬殺されまして……」

「あゝ……」

「他にも炎丸と土丸ってモブ感溢れる方々もいたらしいのですが、荒ぶる十代様には手も足も出ず……」

ナチュラルに思考を読まれたことはさておき、その状況は容易に想像出来るわね……
御愁傷様デース。

「二人一組で行かせたのに、余裕のワンショット・キルであった……なんなのだあやつは
！最近流行りの最強系主人公か!!」

いいえ、最強系霸王様です。ライフ8000なんざHEROの前では飾りです……
てかどこの業界で流行ってるのそれ、他の世界線？

「ま、まあそんなわけで……遊城十代とエド・フェニックス、二人と親密な関係にある、
お主に白刃の矢がたつたのだ！さあ、我らに従って貰うぞ!!」

「い、いやあく親密な関係だなんて照れる……じゃなくて。あたしが大人しく従う小鳥
にみえまして?」

「もちろん従わせるさ……デュエルでお主を行動不能にしてやろう」

「奴をデュエルで拘束しろ!？」

「あ、ジュンコさん。ハリセンは無しですわよ」

「チイツ」

「ヒロインらしからぬ舌打ち!？」

背中に隠し持っていて、ぶち込む隙を伺っていたのに……正直へとへとで相手したくないのよね。

「しよ〜くがない、やってやるわよ!あたしが勝ったら、モモは光の結社から連れ出すからね!!」

「そんなつ、万丈目様から引き離すおつもりですかっ!」

「構わぬぞ。お主が勝てば、妾から兄に進言してやろう」

「みずち様まで……意地でも勝って下さいまし!!!」

「う、うむ……任せるがいい」

あのコ絶対、万丈目君目的で光の結社いるでしょ……

そんなわけで、互いにデュエルディスクをそれっぽくセットしてーの……

「デュエル!!」

ジュンコ LP4000

みずち LP4000

「あたしのターン、ドローツツ!!」

相手のデッキがまったく想像出来ないけど、とりあえず可能な限り回して様子を見ますか。

「まずはR^{レイド・ラフターズ} Rーラスト・ストリクス召喚！このコを生け贄にすることでEXデッキから「RR」エクシーズである、ランク6のRRーレヴォリユーション・ファルコンを呼び出し、手札の速攻魔法、RUMー幻影騎士団^{ファンタムナイツ}ーラウンチを発動！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！出撃よ！RRーアーセナル・ファルコン!!」

《RRーラスト・ストリクス》☆1 ATK100

←

《RRーブレイズ・ファルコン》★6 ATK1000

←

《RRーアーセナル・ファルコン》★7 ATK2500

「河川敷に空母は不恰好ですわジュンコさんっつ!!」

「だったらもうちよい別の場所で襲撃せんかいっ！」

「ほう、これが噂の「RR」……妾は「BF」がみられるのかと期待したのだがな」

だって前回「BF」使ったし……え、あたしがメタ発言したらツツコミ不在で詰む？
そんなー。

「アーセナル・ファルコンの効果発動よ！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキからレベル4の鳥獣モンスターを呼び出すわ!!」

「ならば妾は手札より、灰流うららを捨てよう。デッキからの特殊召喚効果を無効とするー!」

ムッ、これを止めんのね……

「カードを1枚伏せ、手札の未界域のサンダー・バードの効果発動！さあ、あたしの手札をランダムに選んで1枚捨てなさい!!」

「未界域とな……では、妾から視て一番左を捨てよ」

「よーし、大当たり！このカードはRRーミミクリー・レイニアスよ。よって未界域のサ

ンダー・バードはフィールドに出現！更に効果により1枚ドロップ!!」

『サンダー・バードって映画ありましたよね』

《未界域のサンダー・バード》☆8 ATK2800

「しゃべんな!?!更に捨てられたミミクリー・レイニアスを除外して、デツキからRRーネストを手札に加える。んでもってアーセナルとサンダー・バードをリンクマーカーにセツト!!」

「クツ、展開は止まらぬか……」

「召喚条件は闇・鳥獣2体！リンク召喚!!RRーワイズ・ストリクス!!」

『ピエエーツ!!』

《RRーワイズ・ストリクス》LINK2 右下/左下 ATK1400

「まだまだあ！ワイズ・ストリクスとアーセナル・ファルコンの効果を連続発動！デツキ

からシンキング・レイニアス！EXデッキからアーセナルを素材にアルティメット・ファルコオオオン!!」

『キュオオオオッ』

《RR—シンキング・レイニアス》ATK100

《RR—アルティメット・ファルコン》★10 ATK3500

説明しよう！アーセナルファルコンがフィールドを離れた時、自身を素材に別の「R」を呼び出すことが出来るのだっ！

あ、知ってる？ごめんね。

「出ましたわね！皆のトラウマ・ファルコン!!」

「負けフラグとか言うな！

「まだ言ってますんわ!?!」

永続魔法RR—ネストを発動、場に「RR」が2体いるのでペイン・レイニアスを手

札に加えるわ、そして特殊召喚。シンキングのステータス分のダメージを受ける。そしてこの2体でオーバーレイ！ランク4！フォース・ストリクス!!（かわいい）

『キュピイ』

《RRーフォース・ストリクス》★4 DEF2000↓3000

ジュンコ LP4000↓3900

「オーバーレイ・ユニットをひとつ使い、デッキからブースター・ストリクスをサーチして、ワイズの効果！」「RR」エクシーズの効果を使ったからデッキから「RUM」、ソウルシェイプフォースをセットするわ。からのフォースとワイズをリンクマーカーにセット！召喚条件は鳥獣族モンスター2体以上！リンク3。霊神鳥シムルグ!!」

『クエーツ!!』

《霊神鳥シムルグ》LINK3 下/右下/左下 ATK2300

「おい、報告にあつたりリンクモンスターと違うのだが……」

「さ、さあ〜？何のことだかさっぱりわかりませんわ……べ、別にせっかく鳥獣族新規の

情報があつたから、対戦カード変えて書き直してたら投稿が遅れたなんて事實はごさい
ませんし……」

「だからって半年以上更新無しはやりすぎじゃろがいつ！ぐだぐだしてるうちに新ル
ルまで来とるがな!!」

「なんの話をしとるのだ主たちは!?!」

「……ゴホン。気を取り直して、セットしてたソウルシェイプフォースを発動オ！あた
しのライフ半分を払い、墓地のフォース・ストリクス1体でオーバレイ！現れるラン
ク6！ある意味最強の機械族、サイバー・ドラゴン・インフィニティ!!!」

『ギャオオオオツ!!』

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》★6 ATK2100↓2300

ジュンコ LP3900↓1950

いやー、某バカイザー先輩に御守りで譲ってもらったんだけどあたし全然出せるのよ
ねー……

「なつ、サイバー・ドラゴンとな!？」

「汚い…流石にジュンコさん汚いですわ!!」

「ふふん。うららのタイミングミスった方が悪い。エンドフェイズにアルティメット・フアルコンの効果発動! あんたの場にモンスターがいない場合、1000ポイントのダメージを与える!」

「ぬううううっ!？」

みずち LP4000↓3000

「更に霊神鳥シムルグの効果発動よ! 魔法・罨ゾーンの空き数以下のレベルを持つ鳥獣族をデッキか手札から呼び出せるわ……いでよ烈風の結界像!!」

『ズウウーン……』

《烈風の結界像》☆4 DEF1000

「せ、先行結界像!? 姑息な手を……」

「ほっとけ! こうみえて鳥獣族なこの像がある限り、互いに風属性以外のモンスターは特殊召喚できないわ、ザマーみろ! あたしはこれでターンエンド!!」

ジュンコ 手札4 LP1950

モンスター

《RR―アルティメット・ファルコン》ATK3500

《霊神鳥シムルグ》ATK2300

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》ATK2100↓2300

《烈風の結界象》DEF1000

魔法・罫

《RRーネスト》(永続)

セットカード×1

「では妾のターン、ドロー…妾の場にカードがないので、罠カード無限崩影を発動。このカードのイラスト通り、サイバー・ドラゴン・インフィニティの能力を封じさせて貰う」

「おっと、シムルグのリンク先のモンスターは効果の対象にならないわよ!……鳥獣族だけ。」

「効いてるじゃないですか!?!」

《サイバー・ドラゴン・インフィニティ》ATK2300↓2100

うーん、丸藤先輩の加護は微妙だったか。

「魔法発動、カップ・オブ・エース。ルーレットスタートじゃ」

「あんたもそれ使うんかいっ……ストップよ」

カードの向きは……残念、正位置で止まってしまった。

「ホホホ、ではありがたく2枚ドロ………についておるのう。モンスターをセットし、魔法カードブラック・ホールを発動。目障りなサイバー・ドラゴン共は破壊させて貰う」

「ゲ、ブラホだ。結界象より巨神鳥だったかー」

「意図も容易く行われるえげつない先行制圧……辞めませんか？」

「それあんたが言う……？」

「皆が虚空に飲み込まれていく……でもファルコンは宇宙空間でも平気です、究極なもの。」

「そして破壊された……処刑人マキュラの効果発動！」

「えっ?」

「このターン中1度だけ、罨を手札から発動出来る。永続罨メタルリフレクト・スライムを発動!これを生け贄とし、EXデッキから神・スライムを特殊召喚!!」

「えっ?」

《メタルリフレクト・スライム》☆10 DEF3000

《神・スライム》☆10 DEF3000

「二重召喚を発動。神・スライムは3体分の生け贄とすることが出来る。神・スライムを生け贄に捧げ……現れよ、邪神ドレッド・ルート!!」

『ゴアアアアアツ!!』

《邪神ドレッド・ルート》☆10 ATK4000

「ええええええつ?!なんかとんでもないの出てきたあああああ!!!」

「あらまあ」

つーか仮にも光の盟主様(○)の妹ぎみが邪神て!しかも素材もどつちかとゆーとダークサイドだし!どっかのマリク様だし!!……あ、元々闇の神みたいなカード使ってたよ
うな?

「ドレッド・ルート||恐怖の根源。これがおる限り、ありとあらゆるモンスターは、能力が半減される……ハズなのじゃが」

「フ、ふふーん。う、う、うちの至高の隼ちゃんは?あああああらゆる効果ををを、うううけないし?じじじ邪神だなんだの?かかか関係ないし?」

「ジュンコさーん、声震えてる震えてる」

「生意気な……しかし純粋な力で劣っては意味があるまい。攻撃じや、ファイアーズ・ノツクダウン!!」

拳でかー!!? 町が降ってくるような感覚ー!……ってそうだった、このコいたわ。

「手札のブースター・ストリクスの効果発動よ! 「RR」が攻撃対象にされた時、このコを手札から除外し、攻撃モンスターを破壊する!!」

ブースター、射出! これを喰らえば邪神だろうがなんだろうが……

『。パクツ』

「って食われたー!!?」

「愚かな……神にそんな効果が通じるはずなからう」

「MAJIDE!?!」

ってことは俗にゆう原作効果……KONOAIではなくMONOHONの邪神ですと!?!なんでそんなもんこのケバ子さんが持つてるのよ……

「攻撃続行だ、神にひれふせ!!」

「わああああつ!?!」

ジュンコ LP1950↓1450

「ドレッド・ルートの猛烈な一撃ーッ!ジュンコ選手ダウン!!これは決まったかーっ!!?!」

「なんで格闘技の実況風なのよ!?!オチオチ寝てられんわ!!」
「500ダメージとはいえ、邪神の攻撃を受けてこれほど素早く立ち上がるとは……わらわはターンエンドじゃ」

みずち

LP3000 手札0

モンスター

《邪神ドレッド・ルート》ATK4000

「あたしのターン、ドロー……わあお」

「なんじゃ、良いカードでも引いたか？」

誰だこんな事故要因入れたの……まああたししかいねーけど。

いや、これワンチャンスあるかも……邪神だかなんだか知らないけど黙ってやられるくらいならやってやる！

「バニシングレイニアス召喚！効果で手札からトリビュートレイニアスを特殊召喚！効果でRRーレイネスを墓地へ送るわ。ついでにRRーネストの効果も使ってファジー・レイニアスを手札に加えて……この2体でオーバーレイ！2体目のフォース・ストリクスをエクシーズ召喚よ！」

《RR―バニシング・レイニアス》☆4 ATK1100

《RR―トリビュート・レイニアス》☆4 ATK1800

←

《RR―フォース・ストリクス》★4 DEF2000

「フォース・ストリクスの効果発動、オーバーレイ・ユニット1つを使い、デッキから2枚目のトリビュート・レイニアスでも加えておくわ」

「好きにするがいい」

「ふん、余裕かましてくれちゃってえ……更にRUM―レイド・フォース発動!!場の「RR」、フォース・ストリクス一体でオーバーレイ!ランクが1つ上の「RR」をエクシーズ召喚するわ!」

「あら、また随分懐かしいものを」

「寧猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し 寄せ来る敵を打ち破れ!ランク

アップ・エクシード・チェンジ！現れる！ランク5！《RRーブレイズ・ファルコン》！！

『キユオオオオツ』

《RRーブレイズ・ファルコン》★5 ATK1000↓500

「ホホホホ！攻撃力たった1000のモンスターではないか、そんな弱小モンスターでわらわのドレッド・ルートを倒せるとでも？」

「誰がそのデカブツを相手するって？……狙いはあんたよーブレイズ・ファルコンはオーバレイユニットがあるなら直接攻撃が可能！あのケバコにダイレクト・アタックよ、迅雷のラプターズ・ブレエエイク！！」

「なんじゃとー!?!」

みずち LP3000↓2500

「クツ……しかしたかだか500ダメージ程度、痛くもないわ！次のわらわのターンでしまいじや!!」

と、思うじやない？

「手札から速攻魔法！バーサーカー・ソウル狂戦士の魂!!」

「……えっ?」

「攻撃力1500以下のモンスターがダイレクトアタックに成功した時発動。手札を全て捨て、デッキの上から1枚めくってモンスターがでたらそれを墓地へ送り追加攻撃!!」

「ジュンコさんっ、何を想定してそんなすつときようなカード入れたんですかつ!!?」

「うっさい!!1発ネタ用に仕込んだの忘れてただけよ!まず1枚目エ!……モンスターカード、D・Dクロウ!!」

「馬鹿な!!」

「ラプターズ・ブレイク、第2打ア!!」

「ぐあーっ!!」

みずち LP2500↓2000

「更にこれを、モンスター以外が出るまで繰り返す! 2枚目エ! ……
ダーク・シムルグよ
! 第3打ア!!」

「ぬおーっ!!」

みずち LP2000↓1500

「3枚目エ! モンスターカード、クロククロクウ! ……
第4打ア!!」

「があああああっ?!」

みずち LP1500→1000

「4枚目エ!!モンスターカード、霞の谷の巨神鳥……グオレンダア!!」

「ば、馬鹿な……ガハッ!」

みずち LP1000→500

「さつきから「RR」全く見ないんですがデッキ合ってます!？」

「正直事故ってたわ5枚目エ!魔法カード、RUMースキップ・フォース……チツ、命拾
いしたわねっ。モンスター以外はデッキの上へ戻すわ……ターンエンド」

ジュンコ 手札0 LP1450

モンスター

《RRーブレイズ・ファルコン》 ATK1000↓500

魔法・罫

《RRーネスト》(永続)

セットカード×1

仕留めきれなかったか……けど、あたしのリバースカードはエクシース・リボーン。
レディネスで戦闘ダメージを0にし、戦闘破壊されたブレイズ・ファルコンを復活さ
せてダイレクトアタックであたしの勝ち！どうよ、邪神がなんぼのもんじゃー！！

「やはりとても主人公の台詞じゃありませんわ……大丈夫ですか、みずち様」

「お、おのれ、目にもみせてくれる……わらわのタアーン！強欲で金満な壺を発動、正
直使わぬEXデッキから6枚除外して2枚ドロウする！

！」

神☆スライムとか呼んでた気がしますが？他に使わないって意味でしょうけど

「ククク……魔法発動！死者蘇生！！神・スライムを復活させる！！」

《神・スライム》☆10 DEF3000

「……あつ」

「そしてこれを生け贄とし、新たな邪神、アバターを召喚する!!!」

「?」

「?!!!」

「いや解んないからそれ」

「アバターは最も数値の高いモンスターの攻撃力に、1を加えた能力を得る。すなわち……」

「?!とかふざけていた球が変態を始め、巨神の姿へ……」

「2体の邪神、ここに降臨じゃ!!」

《邪神アバター》☆10 ATK?↓4001

《邪神ドレット・ルート》ATK4000

「……なあにこれえ」

さながら怪獣映画である。こんなの河川敷にたむろしていいモンスターじゃない……あつ、せつかく遊戯さんvsマリク人形戦の場所近いんだし、せつかくならオシリスの親戚イレイザーさんが良かったなー、なんて……

「バトル!その小鳥に攻撃!ダブル・ファイアーズ・ノックダウン!!」

言つてル場合じゃねーっ!

「墓地のRRーレイネス、効果発動よ!墓地に「RR」モンスターがいるときこのカードを除外し、あたしが受けるダメージを全て0に……」

「アバターの効果！召喚後2ターンの間、そなたは魔法・罫を発動できぬ!!」

「えーっ！インチキ効果も大概にしなさいよ!!？」

「隙あらば言いますわねソレ」

使って……
それOCG版の効果じゃん、混ぜってんじゃん!!ジャツジー、あの人インチキカード

「きゃあああああつ!!？」

ジュンコ LP1450↓0

WIN みずち

「キユウ……」

「ふうく、人質ゲツトじゃな。浜口ももえよ、そやつを海馬ランドまで運ぶぞ」

「かしこまり！これでもわたくしの親友ですから、丁重にお願いしますわ。もし傷でもつけようものなら……」

「笑顔が怖い怖い……わかっておるわ」

モモ……

いや、もうあたし満身創痍じゃね?!心配すんならなんでこんな目に遭わせた!!?

なんて脳内でツツコミつつ、あたしの意識はこの辺りで途絶えたのであった……

続いたらいいな。

last5 鳥使い共vs黒幕（仮）

前回のあらすじ

主人公敗北（○）

お久しぶりです、藍神（偽名）セラです。気づいたらエド君と修学旅行回っていたわ
たしですが……夜にレッド寮の面々が宿泊している、河川敷のテント……修学旅行でテ
ントって軽いイジメでは。

まあ、色々エンジョイしていると謎のケバい人物から、ジュンコさんは預かったとの
脅迫状。当然我らがHEROコンビはバーサークして……なんやかんやあって、ケバ
い人に指定された海馬ランドのVR施設にプラグインして、トランスミッシンしたとこ
ろなんです……

「俺のタアアーン！魔法カード発動、ネオス！フュージョン！！デツキのネオスとユベル
で、ダイレクトコンタクト融合！現れる！E・HERO ネオス・クルーガー!!!」

『愛のままに、我がままに！』

僕は○だけを傷つけない!?

《E・HEROネオス・クルーガー》☆10 ATK3000↓1500

「バトルだ! 邪神ドレッド・ルートを攻撃!!」

「愚かな……邪神ドレッド・ルートの効果により貴様達のモンスターは攻撃力が半減、攻撃力4000の邪神に敵うハズもない!!」

《邪神ドレッド・ルート》☆10 ATK4000

『愚かなのは君だよ』

「ネオス・クルーガーの効果発動! このモンスターが戦闘を行うダメージ計算前、相手プレイヤーにその攻撃力分のダメージを与える!!」

「な、なんじゃとお!?!」

『『ナイトメア・ペイン!!』』

「ばかなあああああ!!」

齋王みずち LP4000↓0

わ、ワンタアーンキルウ。邪神とはなんだったのか……

「おい十代！僕の見せ場がゼロだったじゃないか、少しは手加減しないか!!」

「バカ野郎！ジュンコをさらった相手に手加減するわけがねーだろ!!」

「チイツ、正論過ぎてグウの音すら出ない」

この二人、姉さん絡みだと10倍バカになりますよね……あれ？姉さんの様子が……

「あたし、あたし……あんなに苦労したのに……頑張ったのに……邪神相手にワンキルつてなによ、ワンキルつて……」

す、拗ねてるーっ!?

「ね、姉さんどうした?!」

「助かったんだぜ!もつと喜んでくれよ……」

「ふふふ、そうね……あんたたちはすごいわ……いいいいいこ……」

「「おつ、おうふ……」」

はいそのHEROコンビ、頭撫でもらって喜ばないでくださいね。全く、男つてのは単じゅ……

「セラちゃんも、こいつらのお守りありがとうねー。いいいいいこ……」

わたしも!?……ま、まあっ!良いでしょうっ!!

「セラさんが堕ちた!」

「この人たらしザウルス!!」

あ、イエローコンビの存在忘れてました。居たんですね。

「酷いドン!?!」

「十代、とりあえず齋王の妹の死体はどうする。奴の元に送りつけるか?」

「おつ、そうだな。【○誅】とでも紙に書いて送りつけてやるか」

「死んでおらぬわ! 本当に兄の友人か貴様!!」

あ、生きてましたね。

「ゲホゲホ……まあ、良い。御主らの実力は良くわかった」

「僕は出番無かったんだが?」

「実をゆうと……御主ら二人には、我が兄、齋王を救って欲しいのじゃ」

「だから僕は、なにもしてなかったんだが?」

それからエド君と拗ねた姉さんをスルーして、ケバ子さんは語り出した。

二人がその特異な力のせいで追われて生きて来たこと、優しい兄と支え合って生きて来たこと……ヤバイですね、共感できる。

そしてある日を境に……よくわからないけど原動がおかしくなってきたこと。よくわからないけど原動がおかしくなってきたこと????

「何……齋王は昔からあんなテンションだったハズだが……」
とかいつてる人はスルーして。

「原因かどうかはわからないが、兄がハジケる前に最後に占った人物は……パラドックスと名乗っていたの」

「なん」

「です」

「とー。」

上から姉さんエド君わたしです。またパラドックスの名前が出てきましたね。やはりその人が黒幕？なんでしょうか。

「ククク……喋り過ぎだぞ齋王みずち」

「お前は……パラドックス!!」

「「「「?」」」」
「「「「?」」」」
「「「「?」」」」

VR空間の奥から誰かが歩いて来たと思えば……黒幕がいきなりお出まし!?どんな展開ですか!!

「あいつじゃ!あいつに間違いない!!」

「あいつ、夏休み前にジュンコとももえを追いに来た……」

「あー!あんた!夏休みにモモのトリシューラで氷漬けにして、南極送りにして封印したのに!!」

「姉さん!?!」

「それどこの北米版キン○ギドラ!?!」

いやつつこむところ違うでしょオオオオオ!!?!黒幕とつくに封印済みでしたって貴女!!

「ククク……お陰でわたしの本体は、南極で未だにペンギン一家のアンティークとなっているが……我が科学力の粋を集め、意識の一部をなんやかんやでデータ化し、南極の調査隊の端末から気合いで電子の世界へ逃げ込んだのだ」

「え？」

「なるほど、どーりでまだ活動してる気配があると思えば……つまりあたしを、齋王ルートでケバ子を遠回しに使ってこんな空間に連れ込んだのはあんたの策略ってことね」

「は？」

「その通り……齋王琢磨はこんなこともあろうかと、事前に準備していた協力者だ……」

「貴様ア……つまり齋王がなんかハジケてしまったのはそのせいか！」

「知らん、そんなことは私の管轄外だ……元からそういった素質があつたのではないか？」

「クツ、否定できない……」

「だから本当に友人か御主!？」

「とにかく。良くわからんが消滅したはずのダークネスと、光の結社に下った浜口ももえを除けば……貴様さえ消滅すれば！このいびつな世界は、未来は救われるのだ！」

「はい？」

「未来って？」

「ええーじゃない……皆、気にしちやダメよ。こいつはいい歳してちよつと妄想癖のある、あたしとモモのストーカーなの」

ストーカーにした！黒幕らしき人を、そもそも追われてる理由も強引にストーカーでごまかす気ですよこの人……てか今回ツツコミを放棄する気満々ですよね!?

「貴様……よほど死にたいらしいな！構えろ、デュエルで葬り去ってやる!!」

「「デュエルで葬る!!」」

「上等よ！電子のあんたをデリートして、氷像のまま未来とやらに送り返してやるわ!!」

「姉さん、僕も協力する……さつきはほぼ出番が無かったからな！」

「あ、ずりいエド。俺も俺も」

「あんた（お前）はさつき充分暴れただろうがいつ！」

「えー。」

「いいだろう。異分子達よ……まとめて消し去ってくれ!!」

「「デュエル!!」」

パラドックス LP8000

ツンデレ姉弟 LP8000

「おいこらライフ表記イ!？」

「誰がツンデレだ、誰が！訂正を求めろ！」

続
く
の
か
よ

last 6 新・鳥使いさんのソリティア教室

前回までのあらすじ！

邪神を操る齋王ケバ子に誘拐されたと思いきや、十代が邪神の上からワンパンしてケバ子をワンキル。あたしの苦労はなんだったのか……と凹んでいたら、夏休みにももえもんがトリシューラの鼓動！で南極に封印してきたハズのパラドックスマン・EXEが電子世界にトランスミッションして復活。あたしらをデュエルで抹殺するといいだしたのだ!!

……何を言ってるか全然わからないって？うるせー！こつちも全然わかんないわよ!!!

「ジュンコさん！あらすじがまるで仕事していません!!」

「それはいつものことでしょう……てかももえ、あんたいたの!?!」

「はい！裏でジュンコさんの様子を覗いてお腹を抱え……あ、間違えました。身を案じておりました」

本音隠せてねーから!!

「それよりこの調子では、読者の方々が全くついてこれないでしょう、あらすじはわたくしにお任せください!」

「ええ…!」

前回までのあらすじ!

なんやかんやで遊戯王GXの世界に枕田ジュンコ(憑依)は、前世の推しであった遊代十代のヒロインポジションを獲得しようと、奮闘をはじめた。そしたら同じく転生(憑依)をしてきた元友人達とエンジョイしているうちに、何故か学園のツツコミポジションとして収まりながら逆ハーレムを形成…

「いやまたんかーいっつっ!!何話分振り替えるつもりよあんたわ!!」

「いやあ。久々の更新ですので、初見の方々にもわかるようにと…!」

「余計な気を回さんでいいわ!っーか逆ハーとか形成してねーから、乙女ゲーかつっつ!!」

「なんかよくわかんないですが、結構姐さんモテモテですよね(変な人に)」

「そつスね（変な兄に）」

「モテモテドン（ジユラ期）」

よーしこいつらぶつ飛ばそー☆

「まずい、ジユンコがハリセンを構えたぞ。逃げろお前達!!」

じゅうだい たちは、にげだした!!

「ド○クエかつ！チツ：：はいエド、あんたのターンからつ」

「あつ、はい。僕のターン……ドロー！」

そしてケバ子（十代によりダウン中）戦で活躍し損ねた、あたしの（二元）弟のすーくんことエドも参戦。2 v s 1の変則マッチで立ち向かうわ！

え、某超融合みたく3 v s 1じゃないのか？……

「そんな大変そうな展開、うちの駄作者が出来るはずありませんわ!!」

「その通りなんだけどやめーや!!」

「まずは手札からV・HEROファリスヴィジョンヒーローのエフェクト発動!手札のディアボリックガイをコストに特殊召喚!更なるエフェクト発動!インクリースを永続罫扱いでフィールドに置く」

《V・HEROファリス》☆5 DEF1800

「永続罫となったインクリースのエフェクト発動!場のファリスを生け贄に、インクリースを特殊召喚!」

「ならばその効果に対し、手札から増殖するGを捨てよう」

「何っ!」

「うわっ。あえてファリスに投げないやらしっ」

「このターン、貴様が特殊召喚するたびに1枚ドローする…。貴様達が、特殊召喚をやたら多様するのは調査済みだ、残念だったな。」

あたしか?主にあたしのせいかな?

「チツ、今手札にあれを無力化できるカードはない…： 処理を続行。V・HEROヴァイオンをデッキから呼び出す。ヴァイオンの登場時エフェクト、ディバインガイをセメタリーに送る。」

《V・HEROインクリース》？3 defl000

《V・HEROヴァイオン》？4 Defl100

「特殊召喚二回、合わせて二枚ドロウする。」

まあ仕方ないわ、先行は死ななきやOKよ（ワンキル次元の女）

「ヴァイオン②のエフェクト、ファリスを除外し融合を手札に加える…： このままターンを渡すつもりはない！魔法カード、フュージョン・デステニーを発動！デッキのダツシユガイ、ドレッドガイを素材に融合召喚する!!」

「おお…：D—HEROにもデッキ融合があるのか」
デステニーヒーロー

「このターンは閥属性HEROしか特殊召喚できず、次のエンドフェイズに自壊するデ

メリットがあるがな。破滅をもたらす不死の英雄！カモン！D—HEROデストロイフェニックスガイ!!」

『この環境を、終わらせに来た!!』

《D—HERO デストロイフェニックスガイ》☆8 ATK2500

「すげえ！初めて見るHEROだ!!カッケー!!」

いや、台詞おかしいおかしい。

「実は諸悪の根源の登場、度重なる制限改定。何度も書き直してたのは秘密ですわ」
「何の話よ!!?」

「茶番の意味はわからんが1枚ドロするぞ」

あいつ淡々と進めるわね… 夏休み中にももえの相手してて諦めたのかしら。

「あまり飛ばすと手がつけられなくなるかもしれないぞ、エド！」
 「いちいち口を出すな十代！… フン。リバースカードを1枚セットして、ターンエ
 ドだ…」

エド LP8000 手札2

モンスター

《V・HEROインクリース》?3 DEF1000

《V・HEROヴァイオン》?4 DEF1100

《D—HEROデストロイフェニックスガイ》ATK2500

魔法・罫

セットカード×1

「Gのお陰か今回はおとなしいですね。毎回ソリティア長文が正直ウザイので… たま
 には良いと思いますよ」

「君は笑顔で毒を吐くな！僕に対してだけ辛辣が過ぎるぞ!!」

セラちゃんパイセン毒吐いてる時いきいきしてるなあ…けど、ツツコミポジションの

あんたも輝いてたわよ？

「では私のターン！フィールド魔法、ヌメロン・ネットワークを、発動!!」

「フアツツ!!」

辺りが赤紫のような、重苦しい色に塗り替えられていく。どっからもつてきたそれ。

「ちよつ、まつ、あれ割ってエエエエ!!」

「あ、ああ。デストロイフェニックスガイのエフェクト発動！自分と相手フィールドのカード1枚を選んで破壊する!!デストロイ自身とそのフィールド魔法を破壊だ!」

「フン・・・ まあよかろう。しよせんは電脳世界での拾いもの。あとテキスト数がかさんで大変になるからな」

背景黒に戻りました、あー怖かった。え、ZONEさんなんて？

あと破壊演出はメガ〇テのようであった、自身をコストだからね。仕方ないね。

「そしてデストロイフェニックスガイが破壊されたことで、更なるエフェクト発動！次

のスタンバイフェイズにセメタリーよりD—HEROを復活させる!」

「では速攻魔法、墓穴の指名者を発動。そのモンスターを除外し、次のターン終了まで同名モンスターの効果を無効にする。」

「クツ、不死のエフェクトに盲目になっていたか。つまらないミスをした。」

あーデストロイ自身も蘇生できるのね、そりや判断難しいわ。

「では改めて：：永続魔法Sin・Territory^{テリトリ}を、発動!このカードの効果処理としてデッキから、フィールド魔法、Sin・Wordを発動する!!」

電腦世界の黒背景が、今度はセピア的なあれに替わりました、よくわかんない人は映画超融合観ててください。(も)

いや説明を放棄すんなっ!?

「このフィールドの効果により、わたしはドローフェイズ、ドローの替わりにランダムに「Sin」カードを手札に加える。そしてこの世界でのデュエルの敗者は：：死ぬ!!」

「なっ、」

「死ぬ!？」

「あつ、それ聞き飽きたから進めて貰える?」

「」「軽ツツツ!!」「」

いやあ、しつこいようだけど夏休み中に何度も聞いたし…。毎回フィールドがち割つてたから適用された試しがないのよね。

しかしジュンコさん!夏休み番外編は、駄作者の筆無精により結局無くなつたので…。描写がほぼZeroで読者の方々は意味☆不明ですわ!

地の文乱入すんなや!1羽だけあるからそつから適当に想像してもらて…。ってあたしにメタ発言さすなっ!!

「顔に似合わずジョークが好きなんだ。ま、仮に本当だとしても姉さ…。ジュンコさんは僕が守るから何も問題がないがな」

「おつま…。あ…。うん。」

い、石○風イケボでそんなこと言うんじやありません!

「やっぱり乙女ゲー展開ですわ… 捗りますわね」

「何がよ!!？」

「続けるぞ。EXデッキからサイバーエンド・ドラゴンを、デッキからレインボー・ドラゴンを除外し、Sinサイバーエンド・ドラゴンとSinレインボー・ドラゴンを特殊召喚する!!」

《Sinサイバーエンド・ドラゴン》☆10 ATK4000

《Sinレインボー・ドラゴン》☆10 ATK4000

「いきなり攻撃力4000が2体!？」

「しかも、お兄さんのサイバーエンド!なんで?!」

いや最初は驚くか… けど説明したらややこしいしなー、勢いで誤魔化すしかないかなー。

「バトルだ!SinサイバーエンドでV・HERO インクリリースを、Sinレイン

ボー・ドラゴンでヴァイオンを攻撃！エターナル・エヴオリュション・バースト！オーバー・ザ・レインボー!!」

劇場版でみた攻撃演出だー！こえー!!

「クツ：： おや、貫通エフェクトはないのか」

「永続魔法・Sin Territoryの効果だ、バトル中にSinモンスターの効果は無効となる：： わたしはカードを2枚伏せ、ターンエンド」

パラドックス LP8000

手札3

モンスター

《Sinサイバー・エンド・ドラゴン》ATK4000

《Sinレインボー・ドラゴン》ATK4000

魔法・罫

《SinWord》(フィールド)

《SinTerritory》(永続)

セットカード?2

「まったく文字数かかるカードばかり使って……まちくたびれたわよ。あたしのターン!!」

「畏発動、次元障壁!!このターン中のシンクロ召喚及び、シンクロモンスターの効果を無効にする!!」

判断が早い?!?てかいきなりメタんな!!

「リバースカード、オープン!トラップスタン!!このターン中、トラップのエフェクトを全て無効とする!!」

ナイスアシスト!愛してる!!

「何イイ!!?ならば手札から増殖するGを捨てて発動だ!」

「GでG引きやがったわねあいつ!けど手札から速攻魔法、墓穴の指名☒発動よ!

「おのれえええ!!」

「さあて覚悟なさい……派手にぶっ飛ばすわよ!!まずはとりあえず闇の誘惑!あたしは

「闇が大しゆきでねエ…」

モモノスケー！闇マリクみたいな台詞を被せるのはやめなさい！！
えへっ？

「えへっ？じゃねーし！2枚ドローして手札の闇属性を1枚除外すんによ！邪魔すんなや！！とりあえず白夜のグラディウスを除外！」

「いやあ、ジユンコが楽しそうだなによりだぜ！」

たのしかあねーし！毎回ツツコミで文字数稼いでるみたいに言われる身にもなれや
！ん？文字数でなによ。

「ふー…魔法カード、スモール・ワールド発動。手札の増殖するGと、デッキのアサル
ト・シンクロンを裏側で除外し、デッキから毒風のシムーンを手札に加えるわ」

「なるほどわかんねえ」

「いくわよ！シムーンの効果起動！手札の蒼炎のシユラを除外し、デッキから黒い旋風
を置いてそのまま召喚！旋風の効果が攻撃力1400、幻耀のスズリを手札に！」

ブラックフェザー
《B F —毒風のシムーン》

? 6 ATK1600

「でた！ ジュンコ十八番の黒い旋風！」

「てかスズリ…誰？」

「絶対ここから首長竜のように長くなるドン！」

「だからってブラウザバックしないで下さいまし！ ジュンコさん、巻きでお願いします巻きで！」

無茶言わないですよ…

「フン！ あたしだって黙って捕まってたわけじゃあくはないのよ！ 新メンバー達の力、見せてあげるわ!!」

「新メンバーだって!?!」

※ここから長文ソリティアですわ、苦手な方は飛ばして下さいまし。

「幻耀のスズリを召喚！黒い旋風とチェーン組んで無頼のヴァータと嵐砂のシャマールを手札へ！そしてシャマール①のエフェクト発動！捨てて黒羽の旋風をデッキから置くわ。」

「ジュンコー、移ってる移ってる。」

「ヴァータの①！いつもの感じで特殊召喚！レベル6のシムーンにチューニング！レベル8！天威の龍鬼神!!」

《天威の龍鬼神》

? 8 ATK 3000

「黒羽の旋風の効果！闇シンクロ成功時、墓地からヴァータを復活させる。ヴァータ②の効果発動！デッキのレベル4精鋭のゼピュロスと、レベル2砂塵のハルマツタンに、レベル2のヴァータをチューニング！秘めたる思いを、その翼に現出せよ。舞い上がれ！ブラック・フェザー・ドラゴン!!」

『(久々の出番で喜んでいる)』

《ブラックフェザー・ドラゴン》? 8

ATK 2800

「つ、ついにデツキシンクロ…」

「インチキ効果も大概にするザウルス!!」

気持ちはわかるけど、いいじゃない。ブラックフェザー・ドラゴン限定だし…

「墓地のゼピュロス効果! 黒羽の旋風を回収して復活! 400ダメージはブラックフェザー・ドラゴンの効果で代わりに受けてくれるわ。再び黒羽の旋風おいといて、幻耀のスズリ②のエフェクト! ゼピュロスを生け贄に、レベル2幻耀トークンを精製! 本来700ダメージを受けるけど、またこのコが守ってくれるわ。それからスズリに幻耀トークンをチューニング! 神話の名刀をぶんまわせ! 星影のノートウングをシンクロ召喚!! その効果により、あんたとサイバー・エンドに800ダメージ!」

「ぬっ!」

《星影のノートウング》

? 6 ATK 2400

《サイバーエンド・ドラゴン》

ATK4000↓3200

「更にセメタリーからシャマール②の効果よ！このコを除外して墓地のBF、スズリを回収。またもや700ダメージだけどまたまたまたまた肩代わり！」

「コストって？」

「さあ……」

「そしてノートウングが場にいると、もっかい召喚できるわ！スズリを召喚して黒い旋風と合わせて連続サーチ！疾風のゲイルと罠カード、ブラック・ツインシャドウを加え…発動！」

「手札から罠!？」

「場にBFが二体以上いると手札から使えるいつものアレよ！除外ゾーンのシャマール、墓地のチヌークをデッキに戻してシンクロ召喚！シンクロチューナー・魔風のボレアース!!」

《BF—魔風のボレアース》

?6 ATK2400

「おおー！」

「ボレアースはデツキのBFを落として、レベルをコピーするわ。下弦のサルンガを墓地へ。さあ〜こっから派手になるわよ！レベル8のブラックフェザー・ドラゴンにレベル2となったボレアースをチューニング！」

「合計レベル10…くるぞインチキが！」

「フルアーマード…ピース「深淵の神獣デイス・パテル!!」

《深淵の神獣デイス・パテル》？10 ATK3500

「いや誰?!」

「姉さん陰の気纏ってる閻系のモンスター結構好きですね!？」

「言い方ア！BFは閻属性だから仕方ないじゃない!!」

「と、思うじゃん？このカードは、墓地から素材を除外して特殊召喚できる!!」

「えっ?」

「墓地のブラックフェザー・ドラゴンにシンクロチューナー、魔風のボレアースをチュー

ニンググ!!」

「ええ?」

「黒き旋風よ! 気高き誇りをその翼に顕現せよ!! ブラックフェザー・アサルト・ドラゴン!!」

『(ついに進化できて喜んでいる)』

《ブラックフェザー・アサルト・ドラゴン》? 10 ATK 3200

「「墓地から進化したーっつっつ!!」」

「そして今更デイス・パテル効果発動よ! 除外ゾーンのモンスターを一体帰還! : : ボレアースおかえり! からのノートウングにチューニング! 超久々レベル12! 神立のオニマル!!」

『我参上!!』

そして皆忘れてた、張り直した黒羽の旋風効果! ボレアースをまたまた復活させ、スズリにチューニング! レベル10、フルアーマード・ウイイイニング!!」

※《天威の龍鬼神》

? 8 A T K 3 0 0 0

《深淵の獣デイス・パテル》

? 1 0 A T K 3 5 0 0

《ブラックフェザー・アサルト・ドラゴン》

? 1 0 A T K 3 2 0 0

アサルトブラックフェザー
《A — B F 神立のオニマル》

? 1 2 A T K 3 0 0 0

《B F — フルアーマード・ウイング》

? 1 0 A T K 3 0 0 0

「「「や、や、やりたい放題だーっっっ!!?」」」

続けエ!